
魔法少女に会っちゃった場合

作戦参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女に会っちゃった場合

【Nコード】

N0702U

【作者名】

作戦参謀

【あらすじ】

地元のありふれた県立高校に通う藤島圭介。彼は身体が異常に丈夫だという事を除けば赤点ギリギリ、サブカルチャー系の知識は豊富というちょっとバカでオタクなどどこにでもいそうな高校生。新学期が始まってから一ヶ月、ゴールデンウィークに入る頃。圭介は新たなクラスに馴染み、これからもこの日常が続く……と思っていた。ただど彼女は現れてしまったのだ。「拙者、秀吉公の子孫ににして魔法の国からやってきた魔法使いなのです!」「どうやら俺はエロゲの世界に入ってしまったようだ……!」——秀吉の子孫を名乗る

アホな戦国系魔法少女・木下暮葉と、《多分》普通の高校生・圭介。
そして《多分》愉快的仲間達や敵共が繰り広げる、おバカでズレた
ラブコメディー！

第1話、まだ平穩だった朝の事

魔法少女なんてファンタジーなもの、信じる？

昨日見たアニメでは偶然主人公が魔法少女と出会っちゃったんだ。
まあこういうネタってアニメや漫画だとありがちだね。

そういうのが現れ、何かと主人公は巻き込まれ、最後は正義のヒーローになる。

うむ、すばらしい王道ストーリーである。

最終的には女の子とも結ばれ、ハッピーエンド……素晴らしい、リア充だね。

さあ、降ってこい魔法少女！

片翼の天使だろうが破壊するものだろうが、この俺が相手になってやろうじゃないか。

……まあ、無理だけどさ。普通に考えて俺がラスボスに勝てるわけないじゃん。

スライムさんにだって勝てるか微妙だと思うよ、どんなに外れた人間でもな。

所詮は人間だ。それに空から降ってくる女の子が普通なわけがない。現実そんな事があってみる。絶対面倒に決まっている。

だから、そういうのは二次元に限るんだ。

そう、二次元は俺らの樂園である。ハハハ……。

「こら圭介！ 早く起きる！」

「……はっ!？」

ドコなんだよ……ココは……。

知らない天井だ。いいや待て、よく知ってるよこの天井。

天井には中々壊れないので、そのまま使用している古臭い電気。部屋を見渡すと本棚には漫画やライトノベルで溢れ、パソコンの周りには好きなキャラクターの『いんどろいど』のフィギュアが数体。特に後輩キャラ多し、まあ俺の好みだからね。おそらくフィギュアがある時点で普通の人から見ればかなり痛い部屋である。そんな部屋にある俺のベッドのすぐ近くで、美少女が俺の事を機嫌の悪そうな顔で見つめていたのだった。

「つたく、妙にファンタジーな寝言言っちゃって……今日は隕石でも降ってくるのかしらね？」

「アンタ俺をなんだと思ってるの!？」

「変態、バカ、オタク」

「評価最悪ですか!？ 確かに俺はバカでオタだが」

……何故でしょう、何故寝起きの俺に女の子が食いかかってくるのでしょうか。

これなんてギャルゲーでしょうか……いいえ、ギャルゲーではありません。

答えはこの子、俺の幼馴染だから起こしに来ているのだ。ってやっぱりギャルゲー的な。

銀髪のショートヘアやツンとした紅い瞳が特徴的で八重歯が目立つ

極上の美少女。

なんとなく黒いリボンがお似合いな彼女の名前は国宗伊吹^{くにむねいぶき}。

「な、なにじろじろ見てんのよ……っ」

「ふふふっ、朝から照れる伊吹は可愛いねえ」

「て、照れてないわよ！」

そうは言っているが、やたら必死かつ頬が微かに赤い。

「うーん、中々デレないな伊吹は。攻略に時間がかかりそうだぜ……ッ！」

「っ……なにが攻略よ！」

「まあまあとりあえず笑おうぜ？ あと起きるのはもう少し後で。只今俺のハイパー兵器がお盛んなものでして……」

「っ……！ ……ツツ、バカ圭介！」

っとその時、俺の言葉の意味がわかった伊吹は恥ずかしそうに怒鳴り、同時に大きく足をあげた。

その瞬間白と水色の縞パンが見えました。

なるほどねえ、伊吹はああいうの穿くのか……いいよな縞パン。俺は好きだぜ縞パンが。

いやいや朝からいいもの見たよ……と思ったのは一瞬だけである。次の瞬間伊吹の踵が俺の鳩尾へと、勢いよくナチス・ドイツの急降下爆撃機のように落下してきたのだ。

「ぐぶうつ!？」

鳩尾をやられた俺は当然のように呼吸困難に陥った。

……まあ、この程度ならなんてことがないが。

俺、何故か異常に身体が丈夫なんです。ハイ。

伊吹もそれをわかってて攻撃したのだろう。伊吹はホントはいい子だし、俺が貧弱だったらこんな事しないハズだぜ。

「セクハラ魔人! あああ、朝からセクハラってどういう神経してんのよ!」

顔を真っ赤にしてセクハラ言ってくる伊吹も可愛いのだが、正直痛い。

あとセクハラ言われて嬉しいと思うか? 言っておくが俺は罵倒されるの大好きなマゾヒスト君ではない。

「セクハラ違ーう! 仕方ねえだろ事実なんだから」

「うう……昔はこんなセクハラ男じゃなかったのに……っ」

「それを言えばお前だって昔は素直で可愛い子だったのに」

「うつ……うるさい! とりあえず黙って起きる!」

その時、伊吹は大声を出しながら俺の布団を剥いでした。

ああマズイ、これはいかんぞ。

なんたって朝の男は超がつくほどお元気なのだよ。

……ってか見られるこっちも恥ずかしいんだが。まあいいや、伊吹には何度か見られたし。

なにより反応が可愛いのであえて何もしないでおくぜ!

「……ッ！」

伊吹は目を大きく開き、顔を耳まで真っ赤にして俺の股間を直視している。

「……だから言ったら、起きるのはもう少し後にしてくださいって」

俺はそう言ったものの、彼女はわなわなと震えている。
そして遂に彼女は大声で。

「……変態ッ！」

と、叫んだのである。

全く理不尽だ、こんなの全国の若い男の子なら当たり前じゃないか。

「エエッ!? これで変態扱いされるの!? 仕方ないじゃんコレ
男の生理現象ですよ!?!」

「う、うるさいうるさい! とにかく早く着替えて学校来なさい!」

「あれ? 待ってくれないのか?」

「あ、あんたなんかを待つ理由なんてないんだからっ!」

「アーハイハイソーデスカー」

「棒読みすんなバカ圭介!」

そう言い残し、伊吹は俺の部屋から出ていった。しかも扉を強く閉

め、階段をドスドスと音を立てながら。多分家からも出ていっただろうな、まあ慌てて追いかける必要もないが。

その理由？ んん……まあすぐわかるよ。とりあえず伊吹も行ったし、俺も起きて下に行くか。

……生理現象も丁度収まった事だしな。

「うゝ朝ごはん朝ごはん！」

今、朝ごはんを求めて全力疾走をしている俺は、初芝高校に通うごくごく一般的な男の子。

強いて違ふところをあげるとすれば身体が異常に丈夫ってところかな

名前は藤島圭介……。

ふじしまけいすけ

って自分でしておきながら言うのもなんだけど、なにさこのくそみそな自己紹介！

俺は嫌だよフットウーに女の子のほうが好きなんだからね！

……やがてリビングに到着すると、そこから見える台所にまた一人女の子がいました。

「あ、お兄ちゃんおはよう！」

元気に笑顔であいさつをしてくる少女。

ショートカットにちょこんと可愛らしいサイドテールという髪はなんと水色、決して染めているわけではなく天然らしい。

不思議なものだ、俺の髪色は黒だというのに。

そして少女の髪には二つの小さな鈴があり、そこからは黄色いリボンが靡いている。

名前は藤島葵、ふじしまあおい yes・我が妹である。

同時に伊吹にも並ぶ極上の美少女であります――

「おう、おはよう」

「さささっ！ 今日葵が腕によりを籠めて作った目玉焼きがあるよー」

「……オイ、これ目玉焼き？」

「えっ？ そだよ」

「おかしいだろ！ どうして目玉焼きなのにイトミミズのような色してんの！？ ていうかこれイトミミズだね！？」

「えっ？ んー、見た目だけだよきつと！ さあお口へLet's GO！」

嫌だ、こんなの食いたくない。

毎日の事とはいえ拷問すぎる。

だって見た目どう見ても下水道とかにいるイトミミズですよ。

そんなのを目玉焼きとして食えってどんな拷問ですか。

「ほらぁ、葵の特製目玉焼きい！」

「目玉焼きじゃない！ これイトミミズ焼きだって！」

ていうか赤いまんまだし、焼いてすらいなよね色的に。

嫌だ……俺は実の妹にイトミミズを食べさせられてしまうのか！

「はい、あゝん」

「きゃああああああああああっ！」

葵曰く目玉焼きであるらしい、イトミミズ焼きを葵は俺の口の中へ突っ込む。

その顔は無邪気で笑顔で悪気は全くなさそう。ああ、確かに葵は純粹な子さ。

純粹で優しくて、時々悪魔で――

「……アレ、うまい？ ていうか味は目玉焼きだ」

「でしょでしょ！」

「……はあ、一瞬マジでイトミミズ焼きかと思ってヒヤヒヤしたぜ」

「い、イトミミズなんてお兄ちゃんに食べさせるわけないよ！」

少し本気になって口答えしてくる葵は妹ながら実に可愛らしい。ちよっとドキってきそうで……ってダメダメ。コイツは妹だ。

流石に現実の妹に手は出しませんよ。妹に手を出す……即ちヨスガるという行為は二次元だけで十分だ。

さて、葵のこのイトミミズ焼き……じゃなくて目玉焼きの話に移ろ

うか。

実はコイツの作る料理は意外とおいしい。ただし見た目が異常に悪いのだ。

この味噌汁に入っているゲジゲジみたいなのは、おそらくわかめだろう。ったく……どうしてわかめがゲジゲジみたいになっちゃうんだ。いくらなんでも見た目が悪過ぎだろう。

でもそれがなかったら本当にパーフェクトなお味。

逆に言えば、見た目の悪さを治さなかったらお嫁に行けないぞ、コイツは。

「お前なあ……いくらなんでもひどすぎるぜコレは。マジで恋人できねーぞ？」

「いいもん、お兄ちゃんと結婚するもん」

そんな事を言いながら葵は拗ねている。

葵は超ブラコンなのだ。まあ俺的には嬉しいが、なんと現実なお兄ちゃんと呼んでくれるんだぜ。

こんな仲良し兄妹現実だと珍しいよね！……でも一応兄妹だし、一線を越える気はない。

「法的に無理だろ！」

「法の限界を超えてこそ真の愛なんだよ！」

「超えちゃダメでしょ法の限界は！」

「いいもん葵とお兄ちゃんの中だけでするもん！」

「妄想結婚かよ！」

「それにお兄ちゃんだって彼女さん出来ないジャン？」

「とりあえずおだまり！」

悲しい事に俺は彼女いない歴〓年齢……うう、頼む。誰でもいいから彼女になってください。

というわけで俺は絶賛彼女募集中だ。彼女をください……。

っと、その前に俺が恋しないとダメっすよね。まあ恋なんてそう簡単に来るわけ——

「それにお兄ちゃん今までの恋全部失敗してるじゃん」

「う、うるせえっ！」

「ちなみにお兄ちゃんの初恋の相手は斎賀春香って名前だよね！」

「もうヤメテー！俺のライフはとくに0よ！」

葵ちゃん最悪や、俺の古傷に触れるだなんて……ううつ、悲しくなってきた。

ちなみにもその斎賀さん、俺が告白しようと思った時にはイケメンに取られてました。

畜生、これだからイケメンは嫌いなんだ！

……俺だって、自分で言うのもなんだが、そこまで悪いツラじゃないハズなのに……うう！

「あつ、お兄ちゃん早く食べないと遅刻しちゃうよ！」

「お？確かにそろそろヤバいな。さっさと食って学校行くぞ！」

「うん！」

……今日は5月2日。月曜日である。

世間ではゴールデンウィークというものらしいが、学生にとっては明日からがゴールデンウィークなのだ。

やれやれ、一日だけ学校があるとか面倒くさすぎる……。

俺はな、勉強嫌いだし学校も面倒くさいんだ。まあ行かなきゃ友達とも会えないし、そもそも高校くらい卒業しないと皆心配するし……。

面倒だけと行きますか。どうせ今日一日行ったら3連休なんだしさ、ハハハッ。

……しかし、この一日が人生の大きな分岐点になろうとは、この時俺は全く思ってもいなかったのだ。

第1話、まだ平穏だった朝の事（後書き）

始めましての方もそうでない方も、こんにちは！作戦参謀です！

以前活動報告で予告した通り、本日より新作連載開始です！

相変わらずのド素人ですが、今後ともよろしく願います！

さて、知っている人は知っている。

次回より後書きを使って登場人物の紹介をしていきたいと思っています！

……と、言いたい所なのですが。実はアレ、ネタバレになるんじゃないかね？と最近ふと思いました。というわけで、もう少し物語が進んでからそれをやりたいと思います！

代わりに次回からは後書きを使って、どうでもいいような後書きトークコーナーをやるうと思います！

今後ともよろしく願います！

第2話、はいはいピンチピンチ

古宇坂市。とりあえず電車で東京に行ける距離にある、人口約13万の都市だ。

人口はやや増加傾向であり、俺や伊吹はこの古宇坂市の住宅街にあるとある一軒家に住んでいる。

我が藤島家は俺と妹の2人暮らし。というのも親父は仕事で滅多に家に帰ってこないし、母さんも滅多に帰ってこないし……。

というわけで事実上兄妹の二人暮らし。オマケに家事は葵に任せている。

ご飯の見た目が悪いことを除けばごくごく普通だし、文句はご飯の見た目がグロテスクだって事以外は特にない。あとたまに伊吹が葵を監視してくれてマトモなご飯が出てくる事がある。

それはもう、普段あんなものを食べているせいか、御馳走に感じるんですぜ。

……ていうか、今俺と葵は家を出たのだが、どういう事でしょう。

——先に学校へ行ったハズの伊吹さんが家の前の電柱によっかかり、俺から顔を逸らして待っておりました。まるで一昔前のアニメにいたツンデレヒロインのように。

「な、なによ……っ？」

「先に行ったんじゃないのか？」

「あ、あんたを待ってたんじゃない。葵ちゃんを待ってただけよ」

ぷいっと顔を逸らし、不機嫌そうにおキツイ言葉を口に出している。確かに俺なんて待つ価値もないのかもね。

本心じゃないとは思うけど。いや待て、本当に嫌われているかしれないぞ。

今朝だっと思いつきり鳩尾に踵落としされましたからな。

ちなみに葵と伊吹も幼馴染、葵は伊吹の事をお姉ちゃんと呼ぶほど伊吹を慕っているようだ。

「お姉ちゃん、そういうのツンデレって言うんだよ」

「つ、ツンデレじゃないわよ！」

ああ、それは正解だと思う。

確かに伊吹は素直じゃないさ。

でもツンの後ろにデレがない、そう……コイツにはデレがないんだ。というわけでコイツはツンデレじゃない……と思う。

ツンデレじゃなかったら何か。そう、俺はおバカな頭で必死に考えました。

——デレのないツンの事を何というか！

「そうだぞ。伊吹はな、ツツパリだ！」

「何か一昔前の不良みたいになってるけどわたしは不良じゃないわよ！」

「デレがないけどツンツン突っぱねてるだろ？ ほら、略してツツパリ！」

「略になってない！」

まあ、そんなわけでツッパリ少女国宗伊吹。

はたしていつデレるのだろうか？

……って、ギャルゲーじゃないんだし。そう簡単に幼馴染がデレるわけがない。

増してや伊吹はデレ無きツンツン突っぱね、略してツッパリだぜ？

俺の幼馴染がこんなにデレるわけがない。

「ていうかこんな所で立ち話してる場合じゃないよ！ 遅刻しちゃうよ！」

「えっ？ あ、やべえっ！」

確かに現在時刻は8時20分、学校は近いのだが流石にそろそろ行かないとまずい。

学校が始まるのは8時35分からなのである。

歩けば10分、今行けば到着するのは5分前だ。

「ほら圭介！ ぼけっとしてないで行くわよ！」

「ちょ、いででで！」

伊吹が俺の腕をぐいと引っ張ってくる。

手を引いてくれるって地味に嬉しいかもしれないが、これは正直力が入り過ぎていて痛い。

しかも思いつき走るんですぜ？ 痛いってコレ痛いって！

きゃあああああーっと叫びながら、俺はしばらく伊吹に引っ張られていた。

全く……やれやれだぜ。なあ空条シヨウ太郎。

○○県立初芝高等学校。

古宇坂市の文京地区、閑静な住宅地に存在する県立高校、通称『初高』。

中々伝統のある学校で偏差値も高め、ぶっちゃけ言うと俺はここに無理して入ったんだ。

理由？ああ、伊吹と離れるのが嫌だった……ってのは内緒だからな。でも無理した結果が校内でも最低クラスの成績だよ！

……まっ、公立高校だし、いくら馬鹿でも余程の事がない限り、退学させられたりはしないハズだ。

制服は男子は学ラン、女子は少しピンクっぽいブレザーにチェック柄のスカート。

最もかつては女子もセーラー服だったが、元々ここ初高は男子校だった為、女子率が必然的に低かった。

ところが最近女子の制服のみ可愛いデザインに変更され、周辺中学の女子に制服で選ばれ、その結果ついに今年男女比がフィフティーフティイーになったのだ。

俺もね、女子が増えて嬉しいんだ。藤島はうれしくなるとついやっちゃうんだ。らんらんるー！

……まあ、授業風景はどこにでもありふれた学校だし、ここでは割愛しよう。

「では、本日はこれで終わります。さようなら」

と、ありふれたセリフを言う頭がハゲかかった中年教師は乙坂隆一。おとさかたかいち我がクラスの担任さんなのである。正直地味すぎるし、現文教師だけれどテンポが悪くて人気もない……。

「ああああ終わったあつ！」

「やれやれ、6時間授業はやっぱ長いな」

「ったく。僕は小学生がうらやましいぜえ」

「どうせなら幼稚園時代に戻りたいね。遊んでばかりで気が楽だよ」

SHRが終わり、皆が帰り始める。中にはこの二人の馬鹿野郎共のように友達ともの所に集まる者もいる。

ちなみに伊吹も同じクラス、だが伊吹は女友達のほうに行ったようである。あと葵は一年生だ。

さて、俺の所に来た野郎二人。片方の一人称が僕なわりには口が悪い男は長宗我部大吾。ちようそがべだいご黒髪ツンツンに眼鏡というシュールな見た目と、無駄に名前が長い事。

「もう帰んべえ圭介え。ついでに漫画買って帰ろうぜ？」

そして完全二次元派として有名な男である。

俺以上のオタクだ、流石の俺も彼女が欲しいし完全二次元派ではない。

「じゃあ俺も混ぜてくれ。ちやうど神のみの12巻が欲しいからね」

「OK、んじゃあメンバーな広ちゃんと圭介な！」

そしてもう一人の爽やかな男のほうは重原広敏。しげはらひろとし

爽やかーと思って近づけばコイツ、かなりデカい。

しかも体育の時に見たがかなり筋肉質な身体を持っている。

何故かと思えばコイツ、『無差別格闘重原流』の跡取り息子で武道家なのだ。

要するにこのメンバーでは喧嘩最強ってわけである。最も喧嘩するような柄ではなく、どちらかというと爽やか系である。実に見た目のギャップが激しい。

「悪いな大吾、俺は帰る！」

「ええっ!? マジで圭介、ああわかったぞ! お前どうせ国宗か妹だろ!」

「残念、両方であります!」

……という保証もないのだが、まあ多分かなりの高確率でそうなるのだろう。

「……ふん! 僕は全然羨ましくない! だって二次元に嫁がいっぱいいるから!」

「流石の俺も、大吾ほどのオタクにはなりきれないね」

「重原に同意だぜ、完全二次元? 無理やろ!」

「無理じゃない! むしろ現実女でもイける二人のほうが、僕から

してみればわけがわからないよ！」

いや、絶対おかしいのはアンタだ。

俺の人生の中でアンタ以上の変人は見たことがない。

大吾とは、そういう人物なのだ……名字も長いしな。

「ところで実際どうなんだい、国宗さんとは？」

「ああ？　そうですねえ。ツツパリ伊吹さんと付き合ったら逆DVが怖くて怖くて」

「「ツツパリ？」」

おお、二人ともよくそこに突っ込んだ。

流石はmyフレンド。掴みは完璧でございます。

「ツンツン突っぱね、略してツツパリ！」

「その発想はなかった!？」

「略になってない気もするけど藤島にしてはうまい！」

「と言う訳で以後、彼女の事はツツパリ伊吹ちゃん——」

と、その時。伊吹の肘が艦上爆撃機による急降下爆撃の如く、俺のドタマへと降ってくる。

気分はまるで、爆撃される空母ハーマーズだぜ。

確かに伊吹の肘打ちは正確で、それはそれは熟練した搭乗員が操る艦上爆撃機のようなであった。

ドーンと鈍い音が響き渡ると同時に、俺は頭部に激しい痛みを感じ

ました。」

「んぎゃっ！」

「ツツパリ言うなバカ圭介っ！」

「さ、さあーせん……っ」

「はあ、圭くんも圭くんだけど伊吹も相変わらずだなあ」

……と、そこで部外者ですよーと言わんばかりのそぶり、ぶつきらばうな姉御口調で俺と伊吹のデスマッチを観戦しているのは小坂^{かあき}亜紀、伊吹の親友らしく俺の数少ない女友達の一人だ。

アンダーテールというこの学校では珍しい髪型の持ち主、またお胸につけた吉備団子はかなりのものである。そう、小坂の胸には夢と希望がいっぱい！……だと思えます。

それに比べて伊吹は……まあゼロじゃないんだけどね。

Bカップらしいよ。うん、なんで知ってるかって。もちろん、彼女が幼馴染だからさ。

その後の帰り道、俺は伊吹と並んで下校中である。予想に反して葵は俺の前に現れなかった。

おそらく、アイツも友達づきあいとかで忙しいんだろう。

そしてツツパリ少女伊吹さんは何故か背中に竹刀を背負っている。

「ところで伊吹、その竹刀はアレか。魔王バラモツに挑みにいくの

か？」

「ち、違うわよ！」

「気を付けろよ。バラモツ倒してもさらに大魔王ソーマがいるからな」

「黙れオタク！」

はいはいわかってますよ、コイツがちゃんと部活やってるって事くらい。

ていうか伊吹はとらゴンクエストやった事ないのか？
ダメだなあ、国民的RPGですぜ。今度伊吹にもプレイさせてあげなれば。

「そういえば今日は早かったけど剣道部、今日はなかったのか？」

「えっ、うん……」

そうそう、こういうふうに普通していれば伊吹は可愛い。

それなのにツンばっかでデレがなく、ツツパリ状態な伊吹さんともう……。

個人的にはいろいろと残念な幼馴染だぜ。

「でも竹刀は部室に置いておけばよくね？」

「なにいつてるのよ。室内で練習できるじゃない」

「ちょ！？ 器物損壊だぞ！？」

「はあ？ ……っ、別にあんたの家でやるわけじゃないのよ！」

「ならばよし！」

「爽やかにグッジョブするな！」

と、ムキになって俺の反応に嘸みつくツッパリ伊吹。

仕方ないだろ。俺の家が伊吹の竹刀に破壊しつくされずに済むんだ。それはもう超爽やかに朗らかにグッジョブをしたくなっちゃうSA！

と、俺が調子に乗っていたその時。

「楓っっ！」

「きゃあああああっ！」

なにやら車道のほうが騒がしいな。

何事かと思って俺は車道のほうを見た。だがそこは思いっきり地獄絵図であった。

クラクションを鳴らし、ブレーキを踏んでスキール音をあげている一台のトラック。

その前方にはクマのぬいぐるみを持った幼稚園児と思われる女の子。そして悲鳴をあげている女の子の母親と思われる女性。

まずいぞ、あのままだと女の子が轢かれてしまう。

よし、どうする。我が身を犠牲にしますか？

それとも女の子を見殺しにしますか？

後者はありえない。女の子の笑顔を守るのは男の務め、ならばこの選択肢……前者を選ぶのみ！

「ふっ！」

「ちょ、圭介！？」

伊吹が咄嗟に車道へと飛び出した俺を呼びとめる。

だが一度動き出した俺の足は止まる事なく、女の子のほうへと突き進んだ。

そして、トラックが少女を撥ねる前に俺は少女の所に到着。

「あぶねえっ！」

少々乱暴だが仕方ない、命を助ける為にはこうするほかなかった……。

俺は叫びながら少女を突き飛ばした。ふう……よかった、女の子は救われた。

トラックに撥ねられて、お見せできない姿になる事はなかった。

え、なんだって。俺は大丈夫かって？

そうだな、俺はだな……

「んぎゃあああああああああつ！」

「け、圭介っ！」

さっき少女がいた所について大丈夫なわけがないでしょうが！
予想通りの展開である。俺は女の子の代わりにトラックに轢かれたのだ。

あははは、地面に足がついている感覚がないや。見て見て、僕お空を飛んでるよお。

血が口からドバドバと出て、ロケット噴射のように出ているよ！

……って喜んでる場合じゃねえ！

「きやあああああああつ！」

俺は叫んだ、激痛に耐えつつ空中で思いつきり叫んだ。

や、やばいですね。一体俺は何m飛行するのだ？

どう考えてもこの調子じゃあそこのアスファルトに落下しますよ。

痛いってアレ、絶対痛いよな。何十キロも出ている状態で隕石の如

くアスファルトへ落下ですよ？

これで痛くない人なんていない、いや……むしろ死ぬる！

「たあゝしゆけてええええええゝ！」

お、落ちるうゝ！こりや流石に死ぬかもしれない！

そうだ、遺言言つとかないと。

えーっとなんて言おう？ そうだなあ遺言にふさわしい言葉……。

そうだ、俺の嫁の名前を思いっきり叫ぶというのはどうだ！

うむ、いかにその子を愛して死んだかよくわかるじゃないか。

ようし……そうと決まれば叫ぶぞ。落下する直前に！

3……2……1……!

「アズにやああああああああああん！」

ハアーハハ！最高に気持ち悪いぜ俺！

さあてあとはアスファルトに直撃するのみ。

さよなら皆さん！俺こと藤島圭介は第2話で死亡しまあ——

「いぶうるあっ!？」

おおゆうしゃよ、しんでしまうとはなさない！

……などと言う事もなく、俺はトラックに轢かれたのにも関わらず、何故か生きていた。

……あたた、クソッ……滅茶苦茶痛い。

でも腕や足は問題なく動くし、よかったあゝ骨折はしていないみたいだ。

ふう……死ぬかと思った。いや、この体質がなかったら絶対即死だろ……。

トラックに撥ねられて無事な人間なんてどこにいるんだ。いや、俺は無事だったけど。

今朝も言ったような気がするが、俺の体は異常に丈夫に出来ているのだ。

ご覧のように俺はトラックに轢かれても生きている。

しかも骨折すらしらない……まあ打撲したせいであちこち痛むんだね。

さらに傷の回復力も普通の人より早い。おかげで怪我してもすぐ治るんだけどな。

まあ考えようによっちゃ便利な身体だよね。今みたいに女の子の命を救う事だってできる。

でもいっそ死んだ方が幸せだったかも……ああ、全身痛いザマス。まさか死ねなくて苦しいという、通常味わう事のできない感覚を味わえるとは……俺の体どうなってんの？

まあ生きてるならいいじゃん……だって？ 答えはNO、痛くて動けません！

骨折れてないけど全身打ったら痛いじゃんフツー動けないじゃん！ああ、きつともう少し時間が立たないと動けないであろう。

でもどうしよう？ ここ道だし、車が走ってきたら……いくら身体が頑丈だからって、二度も撥ねられたら流石に持たないぞ？

「あのー、大丈夫なのですか？」

「あ、ああ……？」

その時突然聞こえた声、顔を上げるとそこには見知らぬ美少女がいた。

綺麗なベビーピンクのセミロングにピンと立ったアホ毛、琥珀色の目に色白で小柄な身体を持つ美少女だ。すげえ日本人離れしている……外国人かな。

でもその女の子は和服に怪しげな日本刀を提げているという、意味不明な戦国少女であった。

「……………」

俺は何の前触れもなく現れた少女の、あまりの可愛さに見惚れてしま
う。

そしてあまりの意味不明な装備に思わず絶句してしまった……………。

第2話、はいはいピンチピンチ（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「オッス！　オラ圭介！　ワクワクすっぞ！」

伊吹「はいはい黙っときなさいオタク」

圭介「なっ！？　と、とらゴンボールは国民的アニメだぞ！？」

伊吹「興味ない人は興味ないのよ。少しは考えなさい！」

圭介「……この小説読んでる時点で皆オタクじゃね？」

伊吹「こらっ！　勝手に読者の趣味を決めつけない！」

圭介「というわけで始まっちゃいましたこの小説。読者の皆様、感想とかありましたらよろしく願います！　感想を送ると……なんと伊吹が脱ぐかも——」

伊吹「脱ぐかこの変態っ！」

圭介「ごばあっ！？　ちょっ！　し、竹刀はマズいって！　ぎゃああああっ！」

※感想お待ちしております！

第3話、戦国系魔法少女

ここはさっき俺が倒れていた場所のすぐ隣にある小さな公園。

そう、俺は公園の前の道路に落下したのだ。

ここは比較的交通量も少ないし、そのおかげで二度も車に轢かれる事はなかったのだろう。

現在、俺はたまたま出会った女の子と公園のベンチに座っている。しかも二人で。

普通に考えてこれは超嬉し恥ずかしハッピーなイベントなはずだ。

でも素直に嬉しくなれないのはなんでだろう。

やっぱりその、お腰に提げた日本刀のせいだろうか。

というかコスプレだよねそれ、本物だったら銃刀法違反すよ。

「おっ？　ようやく首がマトモに動くようになった」

「大丈夫なのです？」

少女が首を傾げながら俺の事を心配してくれる。

小動物のように小柄でお人形さんのように華奢な身体、整った輪郭、本物の琥珀を見ているような瞳。

……なにこれかわいい、こんな可愛い生き物が地球上に生息していたのか。

だが、彼女は服の上から推測するに残念ながらぺちゃぱいだ。形すら無に等しいだろう。

ムフフ……お胸につけた二つの吉備団子はやっぱり美乳だよね！

と、勝手に美乳派の俺が脳内妄想してみる。

「ああ。まあ何度か撥ねられた事があるけど、今回は比較的軽傷だな」

俺はそんな可愛いらしい（ただし貧乳）彼女に見惚れていた。

しかし折角心配してくれているのに、ノーコメントは失礼極まりないだろう。

なので俺は現在の状態を正確に彼女に伝えた。

「撥ねられたって……な、なににですか？」

や、やべえ！

余計な事言っちゃった、普通撥ねられたなんて言わねえよな。

……仕方ない、今更隠したって無駄だろう。第一空から降ってきたのだし。

「その……ひ、引くなよ？」

「絶対に引かないのです。正直に言ってほしいのです」

「お、おう。……トラックだ」

「もきゅ？ と、トラック……もきゅううううっ!？」

もきゅっという可愛らしい叫び声を彼女は上げている。

しかし目を白黒させているし、これは驚いているのか？

……ハハッ、ですよー。

トラックに轢かれたら普通死ぬもんね。おかしいですよー。

「へ、平気なのですか!？」

「まあ信じられねえかもしれないっすけどね……」

「トラックに轢かれても無事……っ、間違いないのです。この人がそうなのです！」

「ん？」

「あ、あの！ 失礼ですがお名前は！」

「名前？ 藤島圭介」

あ、ついノリで本名言っちゃったけど大丈夫かな？

……ま、まあ悪そうな子じゃないし、大丈夫だよな。

一瞬ここはジョン・スミスと名乗っておくべきかと思ったけど、別に本名でもいいや。

一方、少女はというと。

「……っ、ついに発見したのです！」

と言って俺を指差している。

うーん、まず一言言わせてもらいましょうか。

なにがなんだかサッパリわかんねえっ！

俺とこの子は初対面なハズなのに、何故彼女は俺の事を知っているような反応をするんだ？

「もきゅっ！ でもでもホントにあの人の子孫なのでしょうか！？ あばばばっ！」

「ちよっ！ よくわからんけど暴れるな！ 落ち着くんだ、素数を数えるんだ！」

「もきゅーっ！　　っ！　　そ、素数でなんなのですか!？」

「頭悪過ぎだろ！」

まあ人の事言えるほど頭良くないんだけどな。

それでも57くらいまでの素数なら何も見なくても言えるよ。でも教えるのも面倒だし、とりあえず素数はやめ！

俺が自力で突如慌て始めた、この意味不明少女を落ちつかせよう。

「ようし！　数を数えようか、おっぱいが一つ！」

「おっぱいがふた……ってなにを言わせるんですか！」

顔を耳のあたりまで赤く染め、突っ込みを入れる彼女。

やべえな、つい最近大吾の家で見た子猫ちゃんよりも可愛いらしい……っ。

やっぱり女の子って……最高だ！

「まあまあ落ちつけて。ほら、落ち着いたら?」

「もきゅっ?　　……あっ」

うむ、羊の数を数えるっていうのは昔からよくある事だ。

それをただおっぱいに変えたただだが、意外と人を落ちつかせるのに有効かもな。

まあこの子がもし伊吹みたいな子だったら、俺は今間違はなく殴り

飛ばされていただろうが。

「とりあえず落ち着いたか？」

「も、申し訳なかったのです……っ」

よかったあ、もしあのままの状態が続けば、近所のママンに変人カ
ップルと誤解されそうだし。

そんな不名誉な渾名付けられたくないぜ。

そういえば俺、この子の名前聞いてないな。

俺は一応名乗ったんだし、それに俺の名前を知った時のあの反応……うん、謎だ。

でも案外どこかで会った事があるのかもしれないし、名前を聞けば
思い出せるかもしれない。

「そういえば君、名前は？」

「もきゅ？ も、申し遅れたたのです！ 拙者、姓は木下^{きのした}、名は暮^く
葉^{れは}という者なのです」

一瞬、自分は坂上田村麻呂であると名乗るかと思ったけど、案外普
通の名前だった。

というか可愛い名前だな。まあ見た目も小動物的で可愛いしな。

ただ……このコスプレは一体なんなのでしょう？

一人称も拙者だし、もしやバジーナさん並の相当上級なオタク様な
のではないのでしょうか？

それにこの日本刀（多分モドキだよね？）が非常に気になる。
うう……き、気になるっ！

「あ、あのさ。今更なんだけどその恰好ってコスプレ？」

「もきゅ？ コスプレじゃないのですよ」

「……ああそうか！ 仕事柄か！」

「そうなのです！」

「なるほどおー、こうみえて一流の役者さんか……って事は俺今撮影の邪魔なんじゃねえか？」

「そうそう、もう忙しいの何の——って違います！ 拙者は役者違うのです！」

ノリがいい子だな。正直楽しい、お前みたいなヤツ嫌いじゃないぜ。ていうかむしろお前みたいなヤツ好きだぜ俺は！

でもこの恰好でコスプレじゃない上に役者じゃないったら、マジで何だろうか。

ていうか年齢的に未成年だよなどう見ても。つーか高校生かすら微妙だ。

伊吹も背の順だったら前のほうに来るは、わりと小柄なほうではある。

だがその伊吹よりも、この子は小柄に見える気がするのだ。

「じゃあその恰好は何でございませうか？ ていうかどの中学？」

「せ、拙者は中学生じゃないのです！」

「え？ すまん！ 小学生だったか！」

「小学生でもないのです!」

「えっ? まさか高校生……?」

「この世界だと年齢的にそうなる……と思うのです」

なんだか不思議な子だなあ、でも高校生か。

もしかすると俺より先輩だったりして……ま、まさかね。

ここは現実だぜ。二次元ならアリだが、現実でロリ系な先輩がいてたまるかってんだよ。

「高校生かあ。もしかして初高?」

「拙者、高校には行った事ないのですよ?」

「えっ? もしかして中卒?」

「んん、それも微妙に違うのです」

「マジで? よし、単刀直入に聞くとお前のジョブは何?」

「拙者、秀吉公の子孫ににして魔法の国からやってきた魔法使いなのです」

「……………」

……えーっと、とりあえず質問をしようか。

この場合どう反応すればいいんだ。腹ア抱えて笑うのが正解でございまいしょうか?

まず魔法の国とかありえないだろ。そして魔法使い?

ハハハッ、日曜朝8時半のアニメじゃあるまいし。それと秀吉の子孫って戦国オタの小坂曰く、直系の子孫は完全に途絶えたらしいぜ。というか豊臣家自体が断絶したんだとか。よくわからないけど、戦国オタの小坂がそう言ってたんだ、多分間違いないじゃねえだろう。

とりあえずマジでどう反応すりゃいいんだ。そうだ、こういう時こそすばらしいセリフがあるじゃん！

「どうやら俺はエロゲの世界に入ってしまったようだ……！」

眉間に手を当て、妙にリアルな顔を作り、マジな感じで俺はそんなセリフを言ってみる。

「もきゅ？」

ハッ、しまった！

これでは俺が変人みたいでじゃなイカ！

……いや待て、自分で秀吉の子孫にして異世界から来た魔法使いという、木下のほうが変人だろ。

えーっとだな、とりあえず……真面目な話をしますか！

「君メルヘンで面白いね！ 今から特別にいい精神科を教えてあげるからゆっくり受診していつてね！」

「も、もきゅーー！ 拙者を精神障害者みたいに扱うなのです！」

「障害者手帳もちゃんと持つんだぞ」

「拙者は障害者じゃないのですよ!」

木下は俺に障害者扱いされたせいなのか、マジギレしていた。確かに普通は怒るさ。でも木下がかなり変人な事には変わらないだろ。

大体いきなり魔法少女ですぜ。電波女って最近そんな名前のアニメが放送されてるけど、それに通じるものがあると思いますぜ。

「いや……いきなり秀吉の子孫とか魔法使いとか言われてもねえ? こう反応するしかないじゃん」

「事実です! 全部事実なのです!」

「そっか、じゃあせめて電波女にしておこうか」

「拙者は電波でもなんでもないのです! 全部ホントの事なのですよ!」

「っで、証拠はあるのか?」

「しょ、証拠?」

「ああ。お前が秀吉の子孫であってかつ魔法使いだっていう証拠」

「しょ、証拠ですね。にゅふふ……目にもの見せてやるです」

目に物見せるってなんだろう。やっぱり胸部のダブルマウンテンかしら?

いや、でもねえ木下って……どちらかというとマウンテンと言うよりは平野だよな。

で、冗談はここまでにしておいて、実際目にもものって何だろう？と、その時。木下は日本刀モドキ（？）に手を掛け、それを鞘から引っこ抜いた。

最初は素晴らしい出来の模型だと思ったが、どうも刃が鋭利かつ光っているし、もしかやこれって……ッ！

「オイこれ本物じゃねえか！」

「もきゅ？ そうなのですよ、これは一期一振という豊臣家。今は木下家ですけど我が家に古くから伝わる名刀中の名刀なのですよ」

「はい質問！ 貴女は銃刀法って知ってますか！？」

「もきゅ？ よくわからないのです」

「そうか、とりあえず簡単に銃刀法と言う物を教えよう。それ持つてると逮捕されるよ？」

「もきゅっ！？ そ、そうなのですか！？」

このマジな驚きよう、常識のないヤツだなあ。

それとも銃刀法なんて法律知りませんでしたなんていうけど、本当は知っていましたという確信犯か？

いや、でも銃刀法なんて少なくとも日本国民なら誰でも知ってると思うんだけど。

とにかく、コイツが危なっかしいものを持っているのはわかった。

「でも一期一振ってそれ……本物？ レプリカじゃねえの？」

レプリカでも凶器である事には変わりねえけど。

「本物ですよ！ 本物の一期一振なのです！」

「ヘースゴイネー」

「全然信じてないのですね……っ」

「俺は歴史苦手だからよくわかんねえけどさ、そういうのってレプリカが溢れてるもんじゃねえのか？」

本当に俺にはよくわからないけどな。

ただこういうものって物好きが多くて、粗悪なレプリカとか多そう
なイメージがあるぜ。

……て言うか実際どうなのだろう。今度小坂に訊いてみようかな。
まあ、聞いたところですぐ忘れてしまうのがいつものオチだが。

「むう、とにかくこれは本物なのです！」

「じゃあもう秀吉の子孫とかどうでもいいから、魔法使いだって証
拠はあんのか？」

「それはもちろんあるのです！ 特別にご披露してやるのです！」

ほおほお、実際にやってくれるのか。

それなら確かに口で説明されるよりも説得力があるな。

もしコイツの魔法とやらのせいで不可解な現象が起こったら、それ
はもう信じざるを負ないだろう。

「っで、お前はこういう魔法が使えるんだよ？」

「四大元素の一つ、空気なのです」

「空気？」

「要するに拙者は風を操る魔法が使えるのです」

風かぁ、なんともまあありがちな能力……。

どうせアレだろ。トルネードを起こしますとかそんな感じなんだろう。わかってるんだよ、とらクエプレイしたから魔法とかは学習済みだ。

でもだからと言って実物を見ないと信用できない。
さて、どうするんだろう。

出来ると言ったからにはすごいものを見せてもらわなければ！

「……ッ！」

おっ、木下の顔がやたらと真剣になった。

どうやらいいよ魔法とやらをご披露してくれるようだ。

その時木下は強く一歩、地面を踏みつけた。

一見なんてことのない動作。学園都市の第1位ならアスファルトが粉々になるかもしれないが、普通の人がその動作をやったってただ音が響くだけである。

ところが木下の場合違った。なんと地面に靴底が触れた瞬間……。

「ぎゃあああああああああああつ！」

何故か俺が地面から吹き上げてくる風に押し上げられ、ぶっ飛ばされたのであった。

ちよつと待て、何故俺が飛ぶ。そこは普通木下が風を利用して飛行する所だろ！

「ああっ！ も、申し訳ないです！ ちよつと間違えてしまったのです！」

「間違いつてレベルじゃねええええええええええつ！」

気分はアポロ11号ことサターンV型ロケット！

空高く突きあげられた俺はとどまる所を知らない、あつという間に木下なんて点に見えるくらい高い所まで来てしまった。

オイオイ嘘でしょ、高々足踏みで地獄の飛行訓練開始ですか！

……あつ、上昇が止まった。まあ実際ロケットのように飛んでいく所まではいいさ。問題は着陸だよ、どうやって着陸すりゃいいんだ。人間様はなあ、飛行機のように上手に着陸できねえんだよチクシヨオオツ！

「つんでれええるが ああああ ああああ あああんっ！」

わけのわからない事を叫びながら重力に任せ、ひたすら落下する俺やがて俺の背中と母なる大地は激しく接吻を交わしたのだった……。し、信じます……とりあえず魔法信じるからもうやめてえーっ！

第3話、戦国系魔法少女（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「どうも、今回二回目ですねっ」

葵「お兄ちゃんお兄ちゃん！ 今回葵の出番がないよ!？」

圭介「いや、仕方ないだろ。一応出会いなんだし、重要部分だぞ」

葵「でもでも葵の出番がない！ お兄ちゃんとのラブストーリーなのに！」

圭介「この小説はそういう話じゃありません！」

葵「あわわっ！ お、お兄ちゃんが新キャラ寝取られちゃうよ……っ」

圭介「俺は誰のものでもねえわ！」

第4話、ここにいる理由、そしてツツパリ少女

「あ、ああ……ぐふっ……」

燃え尽きたぜ……何もかも真っ白にな。

子供達がきゃっきゃうふと遊びまくる、平和な公園。

その公園に通常、クレーターが出来る事はないハズだ。

まあ意図的に穴を掘ったとかならわかるが、俺が言っているのは、本当に何かが落下した事によって出来たクレーターの事である。

そう、普通公園にそんなクレーターが出来るハズがない。

でも出来ちゃったんですよねー。

「もきゅーっ！　だ、大丈夫なですか!？」

慌てふためきながら俺に寄ってくる木下。

ありがとう俺なんかを心配してくれて……でもね、一つだけ言いたい事がある。

それを今からハッキリ言わせてもらおう。それはだなあ……！

「てめえのせいだろアホ！」

「ううっ！　申し訳ないです……ッ、実は拙者魔法は苦手です……」

なるほど、要するに有り余るパワーをコントロールできないのか。そういうわけで自分が飛ぶつもりだったけど、俺がぶっ飛んじやったわけね。

……って、オイ待て待て待てえっ！

「全然笑える話じゃねえよ！　もし俺が丈夫じゃなかったら死んでたわ！」

今だけは自分のタフさに感謝するよ。

ありがとうお母様、貴女が俺をこんな丈夫な身体に生んでおかげで、俺は今も生きているよ！

というわけでお仕事頑張ってくれっ、お母様に敬礼。

「もきゅう、本当に申し訳ないのです……っ」

「ま、まあわざとじゃねえんだし。もういいよ気にしないで、あと魔法の存在も信じてやる」

「ほ、ホントなのですか！？」

「あのなあ、いきなり高度何kmもぶっ飛ばされりゃあ、信じるしかねえだろうが」

それで生きている俺も不思議だけど、足踏みしただけで高高度までぶっ飛ばすその力、絶対普通じゃない。というわけでコイツのいう魔法の存在を信じる事にした。

……というより、信じざるを得なかったのだろう。

だって今のをどうやって科学的に説明しろと？

足踏みしただけで普通高高度まで飛ばせるか？

まあ、頭のいい人なら疑問に思う事ができるかもしれない。だが残念な事に俺はおバカなのだ。

疑問に思ったとしても、それを科学的に説明できない……クッ、無念すぎる！

「ありがとうございます！」

「はぁ……でも魔法とかもう二度と人前では使っくんじゃねえぞ」

バレてまずいとかそれ以前に危険すぎる。

下手すりゃ木下の失敗魔法のせいで死人が出るぞ。

「はい！ 標的はちゃんと選んで魔法を使います！ というか拙者は基本的にこの刀で戦うのです！」

「標的と戦うって何ですか！ もしかして追っかけっこモドキでもやっちゃってんのか？」

「似たような事はしてるのですよ？ それ＋護衛任務なのです」

「護衛って……お前一人じゃん」

どう見ても守るべき対象がいらないと思うんだが。

それにもしその対象がいたとしたら、コイツ護衛対象から離れていいの？

ていうか何から何を守るんだよ。あと戦うって……もしかしてコイツ、可愛い顔して極道？

う、ウソだよね……もし木下が極道なら泣いて土下座しますよ。

「もきゅう、護衛対象ならいるのですよ。拙者の前に」

「お前の前にいるって俺かよ。言っとくけど、俺は人生一度も殺し屋に狙われた事はねえぞ」

まあ伊吹を狙っている野郎共に妬まれ、時々絡まれる事はあったが……。

それも過去の思い出、今となっては懐かしいぜ。

「今まではなのです。でもこれからは危険かもしれないですよ」

「なんで？　ていうか魔法は使えるわ銃刀法思いつきり違反しているわ、しかも追いかけてここに俺の護衛ってお前何者なんだよ」

「話せば長くなるです……っ」

「いきなりシリアスモードかい！　もっと肩の力抜こうぜ！？」

「むうゝ、でもホントに説明すれば長くなるのですよ？」

「ま、まあ出来るだけ手短にお願いします」

「……はいっ！」

そしてここから木下は、半ば夢物語というかブラックユーモアというか……。

とにかく危険な香りがプンプンしやがる話を始めたのだ。

世界とはどうも一つではないらしい。

俺達がいる世界が“この世界”だとしたら、木下は“レムリア”という世界から来たらしいのだ。

その世界には、魔法がごく当たり前のよう存在し、でも科学技術はこちらの世界と大差ないまでに進歩しているという、とてもシュールな世界なのだそうだ。

レムリアではかつて二つの大国が睨み合っていた。

一つは私有財産等を一切認めない総有主義を掲げていた“サヴィエト総有主義共和国連邦”。

そして総有主義の敵である資本主義を掲げた“ドメリカ合衆国”。

二国の冷たき争いは数十年にも及んだと言う……もうこの時点で色々危ないよね。

しかし20年ほど前、貧困により苦しんでいた国民がついに蜂起し、サヴィエトは崩壊。指導者だった“アリーナ・ウラジミールヴナ・レニナ”は失脚、それどころか封印されたのだ。

こうしてサヴィエトは国名を“ロジーナ連邦”とし、国民の生活も少しはマシになったらしい。

しかしつい最近、何者かがレニナの封印を解き、解き放たれたレニナはかつての部下と一緒に“この世界に”漂着し、“サヴィエト亡命政府”を樹立させた。

そして“この世界”の人間をうまくコントロールして魔法使い（サヴィエト側称号魔術師）化し、赤軍を編成した。

赤軍は異世界で戦力を蓄え、ロジーナの現政権を打倒しようとしている。

かつてロジーナは帝政だったらしい。その時みたいに倒されるわけにはいかないと、現政権はこの世界にて力を付けつつあるサヴィエト亡命政府を打倒、関係者の拘束を決定。

その結果特殊部隊である“アルファ隊”が結成された。

アルファ隊の任務は関係者拘束と戦闘である。

木下は魔法は苦手だが、剣技が素晴らしい事。元を辿れば御先祖様はこの世界の住人という事で、精鋭アルファ隊に所属する事になったのだ……。

「つて思いつきり東西冷戦じゃなイカ！」

「トーザイレセン？ 南北冷戦なのですよ？」

「そっちじゃ南北かもしれねえけど、こっちじゃ東西なの！」

いくら歴史苦手と言っても冷戦くらいなら分かるわ。というか冷戦とか世界の常識だろう。

しかもサヴィエトにドメリカ？

どっかで聞いた事ある国名ばっかじゃねえか！

新鮮なのは魔法があるって事、レムリアって世界の名前、サヴィエトの独裁者が女性って事だけだ。

「とにかく！ 拙者達アルファ隊は、レニナの暴走を止めるのがお仕事なのです！」

「マジかよ……ってか向こうの世界でもお前が秀吉の子孫だって事、公認なんだな」

「秀吉とは言われなくても、キノシタ・サムライとは言われてるのですよ」

……未だに秀吉の子孫だって事に関しては、胡散臭く聞こえる。いや、ぶっちゃけ言えば全部胡散臭いけど。

でも簡単に信じちゃう異世界人も異世界人だよね。

ていうか、コイツが秀吉の子孫だって設定本当にいるのか？

「あれ？ でもなんでレニナってのを捕えるのに、俺を護衛する必要あるんだ？」

「にゅふふ、正確には藤島家の人間全員の護衛なのですけどね」

「それ無理だわ、親父とお袋家にいないし」

「大丈夫っ！ そっちにもちゃんとアルファ隊の人が向かってるハズなのです！ 拙者が護衛するのは藤島圭介さんとその妹さんなのです」

「仕事早えなオイ！ つかマジで俺らを護衛する理由は何！？」

ただでさえ先程の意味不明かつ長い説明のせいで混乱してるってのに。

護衛とかますます意味不明だよ。

「それも話せば長くなるのですが――」

と、彼女が一番気になる事を説明しかけたその時であった。

「あー！ いたいたいやがったわね圭介！」

輝くように美しい銀髪のショート、風に靡く黒リボン。

紅く染まったツンとした瞳、とってもキュートな八重歯。

151cm（本人談）という、小柄なボディがその可愛さをさらに引き立てている。

——そんな極上の美少女である伊吹が、公園の入り口付近に立っていた。

俺を探し回っていたせいか彼女の息が切れている、よっぽど必死に探してたんだな。

「よお伊吹、なんだか久々に感じるぜ」

「それはこっちのセリフよ！ あんた今まで何やってたのよ？」

「いやあ、トラックに撥ねられるわ高高度まで上昇して落下するわ、とにかくいい事なかったね！」

「自業自得でしょ！ でもっ……あの親子感謝していたわよ」

伊吹の表情が一気に柔らかくなった。

そうかあ、あの助けた女の子とその母親は喜んでいたのか。

身体を張った甲斐があったぜ。やっぱりいい事した後は気分がいいな。

……まあそのせいで死にそうな目に遭いましたけどね。

「そっか、でもごめんな心配かけて」

「っ……あ、あんたどーせ身体丈夫だしっ、心配なんて別に……っ」

そうは言っているが、伊吹はやや俯きながら顔を赤く染めている。
これってアレかな、照れてるのかな？
ツッパリ伊吹ちゃんもたま〜に可愛いから困る。

「あれっ？　　そういえば圭介、その子誰？」

「コイツ？　　倒れていたらたまたま遭遇した電波だけど？」

「電波じゃないのです！　拙者は木下暮葉なのです」

「っで、圭介っ。どういう関係？」

何故それを拳を握りしめながら笑顔で聞いてくる！

なんだかそれ滅茶苦茶怖えよっ！

ヤンデレ程じゃないにしろ十分恐怖を感じるレベルだ！

「だからさっき出会った電波だって」

「もきゅー！　電波じゃないのです！」

「……っ。な、ならいいわ」

「あ？」

「……っ」

なに不機嫌になってるんだろう伊吹のヤツ。

まあ不機嫌なのはいつもの事だけどさ、コイツも女の子なんだから
出来れば笑顔でいて欲しい。

そうそう、この戦国系魔法少女の電波木下さんのようにな。

それにしても、なんだかあのトラックに轢かれてから、ありえねえ事ばかり起っている気がする。

ていうかそろそろ帰ってゲームしたいっす……………。

第4話、ここにいる理由、そしてツツパリ少女（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「ところで作者の前作の主人公の名前は藤沢巧」

圭介「誰だよそれ……っ」

大吾「まあ知ってる人は知ってるさ。で、お前は圭介だ」

圭介「その藤沢って人と俺がどうしたんだよ？」

大吾「巧と圭介。漢字を変えると拓海と啓介……つまり、二人はライバルだったのだああっ！」

圭介「な、なんだってー……っ！？」

大吾「というわけで、この関係性から考えるに次回作の主人公の名前は、漢字まではわからないけど、多分りょうすけという名前だ！」

圭介「……つか、この作者来年受験生だね？　まだ書くつもりなのかな？」

大吾「次回作は頭文字H！　HはヘンタイのHだ……ッ」

圭介「マジかよ！？　すっごくムフフな臭いがするぜ……っ！」

伊吹「あんたらデマ流すなあゝ！」

※頭文字Hなんてそんな……タイトル的に危なっかしいのでやりません！

第5話、こんな序盤にして究極の選択！

それから数十分後の事である。既に空は茜色に染まっていた。

あのトンデモ戦国系魔法電波少女。暮葉に、どうして俺を護衛するかを聞きだそうとしたんだ。

ところが途中で警察が現れ、一目散に逃走していった。

まあ普通刀持ってる人がいたら捕まえるよね。

その為、どういうわけなのかサッパリわからず現在に至る。

現在、我が藤島家の前。今から伊吹と別れる所である。

「じゃあ、また今度な」

「ふんっ！ か、帰るなら早く帰りなさいよ！」

「……………」

相変わらずツツパリな伊吹ちゃんだ。

デレたらツンデレに進化するが、やっぱり伊吹はツツパリのままか。はぁ、いっその事デレねえかな。

……と、言いつつも別に伊吹に恋愛感情があるわけでもなく、実際そうなたらどうなるかなんて俺にはわからない。まずそんな事はないとは思うけど。

「な、なにジロジロ見てるのよ……っ、寂しいの？」

「違うつすよ、じゃあな」

「あっ…………う、うんっ」

何故か急に気を落とす伊吹……ま、まさか伊吹にもとうとうデレ期が！

……ンなわけないか。大体さっきそれはないって思ったばかりだろ。さて、予想外の出来事でいつもより遅くなったし、帰ったらきつと葵がいるだろうな。

とりあえず今日の晩御飯はなんだろう。ウミケムシ焼きだったら泣きますよ俺。

そんな事を思いつつ俺は家の扉を開け、myホームへと足を踏み入れた……その時！

「お兄ちゃんっ！」

「ぐはあっ！？」

その時、葵がいきなり俺の懷へと飛び込んできたのだ。

クソッ、俺だからよかったけど、これ普通の人なら大変な事になってるぞ。

この時ばかりは自分のタフさに感謝するよ。

「お前！ 今の攻撃は俺じゃなかったら耐えられねえよ！」

「お兄ちゃん以外にはやらないもん！ 愛情表現なんだよ！」

「そんな特別扱いクソも嬉しくねえし、そんな愛情はいらねえ！」

「それよりどういう事なの！ お兄ちゃんを探し求めて、うちに女の子が上がり込んで来たんだよ！」

「マジで!?! 女の子の特徴は!?! できればスリーサイズをお願いします!」

はははっ、ついに俺にもモテ期が到来したか!

今までの恋愛は0勝3敗0分の惨敗、理由は大抵相手に彼氏がいたからだ。

だが今回は違う。あえて向こうからいたいけな美少女が来てくれたのだ。

美少女かどうかはまだ顔見ていないからわからないが……美少女だという方向に賭けます!

とにかく一緒に一度のチャンス、俺はこのチャンスを逃さない。絶対家にやってきた彼女を攻略してみせますわよ!

「どうして、お兄ちゃんはいつも話がえっちな方向に行くの!」

「許せ葵……男ほど可哀想な生物はいねえんだよ」

「た、大変だね……って違う! それより早く来てよ!」

「うおっ! いででっ! 手首引っ張るなって、軽くトラックに撥ねられてきたんだから!」

「ええっ!?! だ、大丈夫なの!?!」

俺がトラックに轢かれたというと、葵の顔が一気に青ざめた。

なるほど、今度から葵を黙らせる為にトラックネタを引っ張るとしよう。

最も今日リアルに引かれた俺としては、正直もう二度と経験したくない出来事だが……。

「おう！ 骨も折れてないし、全身元気だぜ！」

「骨は平気でも下半身は無事なの！？ 葵すごく心配だよ！」

「……お前も十分変態だよな」

「えへへ、褒められた」

「褒めてねえよバカ妹が！」

まったく、どいつもこいつも変態だから困る。

俺も地味にそうかもしれないねえ、少なくとも葵ほどじゃねえ。

とりあえず葵の暴走は俺が止め、俺の暴走を伊吹が止める……いつのまにかこういう図が完成しているのであった。

「それより早く！ お兄ちゃんの知り合いかもしれないんだよ！
これは藤島家の危機だよ！」

「危機に陥っているのはお前だけだろ……まったく、仕方ねえな」

どこのどいつか知らないが、とりあえず葵がしつこいし会いますか。
……ていうか会いたいです。だって相手は女の子らしいぜ？

男の俺としては夢がひろがりんだよ！

しかし俺のその幻想はリビングに入った瞬間、瞬く間にぶち殺されたのであった。

何故なら、リビングにいた俺を求めてやってきたという少女は……。

「あ、お帰りなさいなのです」

「なんですかその不気味な奥様キャラは！？　つかてめえ一体我が家でなにやってんだ！？」

何故か木下暮葉がリビングでお茶を飲み、寛いでいたのだ。

しかも床には日本刀を置いている。

警察から逃げ切れたんだな。でも将来指名手配とかされそうだな。

あと、こんな意味不明な秀吉の子孫気取りのヘンテコ魔法使いかつ、電波娘が押し掛けてきたって。

……あんまり嬉しくねえぞ。てか今はそんな事どうでもいい。まずなんでコイツが我が家にいる？

「なにつて、今日から拙者この家でお世話になるのですよ？」

「……えーっと葵さん？　意味不明っすね」

「さっきから何度言ってもこの調子なんだよ。お兄ちゃんなんとか言ってよ！」

「お、おう！」

とりあえずまずは事情を聞きだそうか。

いきなりこの家で寝泊まりするというくらいだ。それも、彼女と俺はさっき会っただけで、それほど親密な仲だというわけではない。むしろ俺としてはあまり関わりたくない……。

だって、日本刀持ってるし若干オカルトに走ってるっぽいんだぜ？でも本当に何故、その程度の仲でしかないのに俺の家に泊まるつもりなんだろうか。

何かしらの理由はあるはずだ。つか理由聞かなかったら何も始ま

らないよね。

「んで、お前はなんだって急にうちに泊まる事にしたんだ？」

「実は拙者、リーマンショックのせいで……っ」

「ウソつけ！ お前にリーマンショックなんて関係ねーだろ！」

つーかどうして異世界から来た魔法少女（？）が、リーマンショックだなんて言葉知ってるんだよ。
色々とおかしいだろうが。

「はい、ウソなのです」

「アッサリ認めやがった！ ……つか、本当の理由はなんだよ」

「はい、これ」

「ああ？ ……お、親父から？」

突然と木下から手渡された謎の手紙。

送ってきた人の名前は藤島浩介、ふじしまこうすけ俺の親父の名前だ。

親父から俺宛ての手紙。開封して中身を見ると、そこには我が目を疑う文章が記されていた。

“ 拝啓、新緑が目にしみて青葉若葉のさわやかな季節、風薫る五月となりました。圭介と葵の二人にはますますご清祥のことと存じます。さて、二人の下に一人の女の子がやってきたと思いますが、その子は知り合いに預かってほしいと頼まれたので、暫くお二人と共

に仲良く生活してほしいのであります。急な事で困惑されているとは思いますが、どうかご理解とご協力をお願いします。それでは圭介も葵も、そして暮葉ちゃんも自分は滅多に皆と顔を合わせる事ができないのでありますが、どうかお元気にお過ごしください。敬具”

「ふ……ふ、ふざけんじゃねえぞあのクソ親父いゝ！」

しかもなんですかこの気持ちの悪い敬語！？

今までうちの親父が俺らに対して、敬語を使ってきた事があるだろうか。

新鮮だけどなんだかこの場合気持ち悪いぜ。つか誰だよ知り合いて！

親父、テメエは浮気かなんかしてんのか。お袋にチクリますよコノヤロー！

「と、いうわけで拙者は家庭の事情で、こちらでお世話になる事になったわけなのです」

えへつと言った感じに笑顔を浮かべる木下さん。

お前なあ、笑顔なのはよろしいがどこか腹黒さを感じるぞ。

特にお前の事を、少しだけ知っている俺にはな。

「か、家庭の事情って……この手紙本物なんだよね？」

「はい！」

すげえよ木下さん、すっごい嘘ついてるのにその太陽のような笑顔……もういろいろすげえ。

「お、お父さんに頼まれちゃったし、家庭の事情じゃ仕方ないよね……?」

「ええっ、いいのですか!?!」

「ちよっ! 葵、それマジなセリフかよ!?!」

「仕方ないよ……葵だって悩んだけど、でもお父さん命令だし家庭の事情らしいし……」

「そ、そりゃあ確かに言葉は綺麗だが、命令だよこの手紙……」

でも事情をちよこつと知っている俺としては、こんな手紙があっても納得できねえ!

ていうか木下って確か、アルファ隊とかわけのわからん組織に所属していたよな。

一体コイツの仲間様は親父になにをしゃがったんだ!?!

……き、気になる。けど聞いたらやっぱり負けだよな?

いやでも、子供が父親を心配するのは当然だと思いますぜ。でも葵に聞かれると面倒だし、後でとことん聞いてやる。

「せ、拙者! 勿論家事とか手伝います! ですからその……お願いしますのです!」

「お兄ちゃん……っ」

えーっと、これはアレですか。俺が決定しゃがれて事ですか。困ったぞ、この場合どういう選択をすればいいんだ?

選択肢は二つ、ふざけんな帰りやがれという選択。もう一つは好き

にしろという選択。

前者は前者で面倒、後者は何か後々色々巻き込まれそう……ああもうなんなんだこのエロゲー展開は！

面倒事を回避したいなら前者、木下を攻略するつもりなら後者。

だが俺はコイツを攻略する気にはなれない。でも前者を選択したら親父に超説教されるパターン……。

「……………」

「……………」

「……………」

やべえ！俺のせいでいつもは明るいリビングに沈黙の空気が漂っている！

……お、おしっ。仕方ねえな。

親父に説教されるのは嫌だし、第一女の子を追いつ出すのも男としてどうかと。

大体木下の背後にはアルファ隊という、得体の知れない組織が……もし反抗してみろ。

そんな場合には、俺は確実にアルファ隊という組織に……。

消される！

そんなBADEND嫌だよ、俺まだ死にたくねえよ。

まだPCにインスコすらしていないゲームがあるっていうのに。

……だったら俺は、より安全そうなルートを選択するぜ！

「……す、好きにしろ」

俺は一言、顔を逸らしながら彼女にそう言い放った。

「ほ、ホントなのですか!？」

「いや、仕方ねえだろ！ 流石に親父には反抗できねえし！」

あの親父普段は優しいが、逆らうとちょっと怖いんだよね……。まあその話はいずれするでしょうか。

「にゅふふ……ありがとうございます！」

笑った、今コイツ絶対笑った。

太陽のような笑顔、しかし何故か裏を感じてしまう俺。

ああもう、選択ミスったか？

もし嫌なルートに入っていたらどうしようか。

「……………」

一方葵は木下居候を認めたハズなのにも何故か不機嫌そうであった。

……こうして我が家にトンデモナイ家族が一人、増えてしまったのであった……。

第5話、こんな序盤にして究極の選択！（後書き）

後書きトークコーナー！

小坂「圭くんなにやってるの？」

圭介「フツ、ギャルゲーだ！」

小坂「またあ？ 圭くんも好きだなあ」

圭介「当然、ちなみに戦国武将を攻略する腐女子向けゲーム売ってたぞ？」

小坂「ええ〜！ 戦国武将をそんなのに使わないで！」

一週間後

圭介「おはよう」

小坂「おはろー圭くん！」

圭介「あれ？ 小坂がゲームなんて珍しいな。なにやってんの？」

小坂「戦国BL！」

圭介「……オイッ！」

小坂「や、やばいなっ！ 伊達政宗イケメンだよっ！」

圭介「元の清潔だった小坂を返してくださいっ！」

※90%はゲームを紹介した圭介の責任である。

第6話、オオカミさんとやらないか？

わけのわからん不思議な女の子、木下暮葉が居候を開始してから数時間後の事である。

まあ木下は予想通りハイテンションな子であった。

その為最初は不機嫌そうだった葵とも、いつのまにか仲良し小好しになっていた。

葵は『暮葉さん』と呼び、木下も葵の事を『葵さん』と呼んでいる。ちなみに木下は俺と同じ年らしい。つまり葵より一個上ということになる。

それなのに木下は敬語。意外と礼儀正しい子なのかな……と一瞬思ったが、それはナシだ。

それは一時間半前の出来事である。

「こ、これがPNPのですかっ!？」

「そーだよ。ゲーム最高だよ」

「どうやって食べればおいしいのですか!？」

「PNPは食べ物じゃないんだよ!」

……スマン、木下はただのアホの子だった。

葵もアホだと思っていたが、木下はその上をゆく。

すげえよ……登場時からアホの子臭がしていたけどさ、まさかあそこまでとは……。

でもなんだかんだ言っ、アイツと葵は短期間に仲良しになった。それはまあよかったと思うぜ。

一方の俺。木下から色々な事情は後で聞くとして、現在PCで……。

『に、兄さん……っ』

き、キタキタっ！

遂に俺は……まふゆちゃんとのあーんなシーンの所まで辿りついた！
えっ、何をやっていやがるかですって？

俺は今“ねこ☆シス”という18禁ゲーム、いわゆるエロゲーをプレイして……。

コラそこ、変態とか言うな！高校生がエロゲー持っって何が悪い！

いやいや、エロゲーだからってナメちゃダメなんですよ。

確かにタイトルは結構ふざけている、絵も超萌え系だ。しかし話は普通におもしろい……というか後半滅茶苦茶感動する。バカゲーランキングでも上位ながら、泣きゲーランキングでも上位という異例の名作なのだ。だいたいソフトってマジ神ゲー作るぜ。絵もむりこぶで超可愛いしな。

さて、やっこの思いで辿りついてまふゆちゃんとのシーン……き、期待だ！

……と思った、その時であった。

「けーすけ様！ 葵さんが呼んでるのですよー」

「キエエエエエエエエエエエエエエッ！」

まさかの木下さん乱入、つーかどうして俺の部屋の場所を知っている。

ああそうか、葵だな。葵が教えやがったんだな。

つーか俺の事は様付けで呼ぶのね。なんでだろう……まあそれはいいとしてピンチだ。

とりあえず叫んだけどどうしよう……そ、そうだ。緊急回避！

確かこのボタン………よ、よし……緊急回避だ！

「もきゅ？ どうしたのです？」

「い、いやなんでもない！ 発声練習だ！」

こんないたいけな女の子に、エロゲーやっていただなんてバレたら俺は……破滅だ！

……まあ緊急回避画面だから大丈夫だと思いますけど。

でも今の奇声は明らかにオカシイ。とにかく純粋な木下さんにバレないように！

「そ、それより葵の用ってなんだ？」

「はい、お使いに行つて欲しいらしいのです！」

「what's that？」

「もきゅ？ ですからお使いなのです」

コイツ本当に異世界人か？

確かに世界共通語だけどさ、どうして英語がわかるんだよ。

中学時代から勉強している俺は、日常会話のレベル3にすら達していないのに。

「そ、そうか……わかった。今下に行くからもう出ていってもいいぞ」

つーか出てってください！じゃねえと安心して部屋から出れません！あんなもの同じ男である大吾や重原ならいいけど、木下暮葉という女の子には絶対見せられない！

「え、もしかしてけーすけ様、何かまずいことでもあったのです！？」

「ええっ！？　な、なにもねえでございますよ！」

つーかなに！随分と食い付いてきたな木下のヤツ！

「ほ、ホントなのですか！？」

「なにもなかったっすよ！」

「……な、ならいいのですけど……」

あぶねえ、危なく本当にあった事を追及される所だった。

木下は心配そうに俺を数秒ほど見つめた後、ゆっくりと下に降りていった。

えっと、助かったって事でいいんだよね？

とりあえず、今回は緊急回避を実装してくださっただいいソフト様……ありがとう！

アハハウフフなシーンは帰ってからだな。

それにしても葵の奴、こんな時間にお使いって一体なんなんだ？

……と、いうわけで俺は財布を持って家を出ると、“マックスバリユエ”という日本全域に展開するスーパーマーケットに向かった。今日の晩御飯はカレー。まあ葵の事だ、外見は期待したら後悔するだろう。

そのカレーに使うハズのニンジンと玉ねぎ、そしてジャガイモがなのだという。

オイオイ、重要なもの殆どないじゃねえか。というわけで俺が買い物に行くことになったのだ。

「こんな夜中に買い物って……めんどくせえ」

……実は最初、木下も一緒に行くとか仰いやがってたのだ。

だが普通に考えてみる。和服&日本刀姿の女の子を外に出せるか？一度はあの恰好のせいで警察に追われてたんだ、あんなの連れて行ったら俺まで不審者扱いだ。

とにかく、アイツには今後外出する時には日本刀を置いて行くよう、言うっておかなければ。

あと洋服買ってあげたほうがよさそうだな。和服もいいんだけど流石にあの恰好で街を歩くと……。

間違いなく世間は白い目で俺達を見てくるはずだ。

……つか、やっとマックスバリュエに到着した。

この紫色の建物も、何年も前からここにあるせいか見慣れたなあ。
と思ったその時である。丁度出入り口から見覚えのある人物が、m
yバックを提げて出てきたのだ。

その子は銀髪のショートヘアで、ツンとした紅い瞳とか八重歯が目
立つ。なんとなく付けている黒いリボンがとってもお似合いな、そ
んな超がつくほどの極上の美少女だ。

「……あつ」

「あつ……」

どうやら、ツッパリ伊吹ちゃんは買い物帰りのようであつた。

それから10分後、買い物が終わる俺は自宅に帰ろうとしていた。
だけど行きとは違い、帰りの道にはツッパリ伊吹ちゃんの姿が隣に
ある。

何故でしょうか、伊吹は俺について来ているのだ。

「わ、私は別に圭介がいたからついてきたわけじゃないんだからっ」

と、いうのが彼女の言訳らしい。

まあ、伊吹はツンデレじゃなくてツンツン突っぱね、略してツッパ
リなのでデレには期待しない。

ツッパリになってしまったのにも色々事情はあるのだが、あまり触
れたくもないし説明はしないでおく。

「ところで夕方のあの子、結局なんだったの？」

さて困った、木下が我が家に押し掛けてきた事言うべきなのかな？
伊吹は何故か学校がある日のみ、頼んでもいないのに俺を起こしに
来るのだ。

ということはだな、金曜日の朝にバレてしまうかもしれない……。

「ん？ どうしたの圭介？」

「えっ？ いや、なんでもねえけどさ」

「ならいいけど……」

やけに今日は複雑そうな表情をするなあ、何が原因だ？
コイツがこういう顔をちよつと心配になる……。

「お前こそどうしたんだよ。今日は機嫌が悪かったり元気がなかったりだけど」

「わ、私もなんでもないわよっ」

「だったら別にいいんだけどよ……」

だったらせめて少しでもいいから笑ってくれと俺も安心できる。
とにかく伊吹の複雑そうな顔を見るとすげえ心配になる。

怒ってるんならまだしも、マジでそういう表情は……。

「……藤島……藤島圭介だな」

「ああ？」

その時、俺は人通りの少ない夜道で突然誰かに呼びとめられた。
よくわからん、でも背を向けるのは危険だよな。

……というわけで俺は振り向くが、そこにいたのは帽子にコートという、この季節としては少々厚着すぎる恰好をしている……。

「ぎゅふ、ぎゅふふ、ぎゅふるるる」

そこにいたのは……。

「ええっ！？ なんじゃこりゃ！？ ちょ、怖えっ！」

「けけけけ、圭介！ なによアレ！」

「知るかあっ！」

「ぎゅふるるるっ！ がおおおっ！」

なんということでしょう。狼男、狼男が奇妙な笑い声をあげていたのです！

えーっと何だ。どういう風にコメントすればいいんだ、このいきなりすぎる状況。

とりあえずだな……なんだこのありえない光景は！

どうせアレだ、アレは着ぐるみの変質者だ！

でも変質者が何で俺の名前を……ハッ！？

もしやコイツ……変質者な上にホモなのでは！？

嫌だよ、こんなオオカミ野郎に掘られるだなんて……そんな結末絶

対嫌じゃ！

「お、おい変質者！ な、何の用だこらあゝ！」

「圭介全然迫力ないわよ！」

「だって、初対面のヤツに名前言われたら怖えだろ！」

あたりまえだ。これで恐怖を感じないヤツは、相当の天然さんだろう。

「大丈夫怖くないよ怖くないよ」

狼男はそう言う、だけどそれってどう考えても不審者のセリフだね。

そして、そんなんで恐怖心がなくなると思ったら大間違い。

「怖いわっ！」

「ぐんぬうううううううっ！」

「「ええええええええっ！？」」

その時、狼男が脱皮した。

もつとわかりやすい表現で言おう。いきなり筋肉ムキムキになって上半身が裸になったのだ。

なんということでしょう。毛で覆われていながら、胸板や腹筋が見事に目立っている。

すごいよオオカミさん。あなたすごい筋肉！でもね……冷静に考え

てこの状況おかしくない？

そういうわけで俺と伊吹は、ありえない光景を目の当たりにし、同じタイミングで叫んでいた。

「悪いが藤島圭介、狩らせてもらう！」

「お、俺の童貞はもしかして……オオカミさんに奪われちゃうんですか！？」

「違うわ！　そういう意味じゃねえ……とりあえず狩らせてもらうぞ！」

なんか怖え、爪立ててるし物凄い殺意を感じるんだが……。

よくわからないけど、こういう場合って警察に通報すべきなのかな？
それとも猟友会、いやいや保健所、待て自衛隊のほうがいいかな？
でも今更通報しても遅いか。やべえっすよこれ、まさかのチェック
メイト？

そもそも事情が分かるヤツ、今すぐ俺の目の前に来い。
そしてどうしてこうなったか説明してくれ！

「ガオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

き、来たあああああゝ！

オオカミさんが獲物Ⅱ俺を狙ってダッシュ。これはいかん、俺大ピンチや！

「はあっ！」

もうダメだと思った……その時。

オオカミさんの攻撃は以外にも、伊吹によって防がれた。

……俺の目の前には角材を持った伊吹が立っていたのだ。なんとも勇ましい、そして俺情けねえ。

おそらく角材はそのゴミ箱に入っていたものだろう。

伊吹は鏢迫り合いの構えだ。流石は剣道部、今や部長を抜いて一番の実力の持ち主。

伊吹は剣道の技を使えば滅茶苦茶強い、多分不良3人くらいならアツサリであろう。

「がおおっ!？」

「何びびってるのよ、圭介」

「ちょ、伊吹っ!？」

助けてくれたのはありがたい。だが何やってるんだコイツは。

明らかに相手は危ないヤツだろ。剣道の試合の相手じゃねえってのに……ッ!

「私、竹刀以外で剣道やった事ないのにつ。早く構えなさいよ!」

「う、うるせえ! ちょっと攻撃されたくらいだったら俺は平気なんだから、別にお前が出てこなくても!」

そうだよ、トラックに轢かれても無事な俺だぜ?

オオカミさんに攻撃されたって、一撃くらいなら多分耐えられるハズだ。

だから伊吹が身を危険に晒してまで、出てくる必要はなかったんだ。

「ぎゅふるるっ！ まさかこの俺の拳を……女子おなこが受け止めようとはな！」

「っ！ あ、あんた何者よ！」

「ぎゅふふっ！ 俺の名前はヴォルコラク、魔族なんだそお〜ぎゅふるる！」

「ありえねえだろ！ つーかテメエ、さっさとその拳引いて伊吹から離れろ！」

「いいだろう……ただし、藤島圭介。貴様を狩ればの話だ！」

「いや、意味がわかんねーよ！」

大体なんで俺達、こんなオオカミ野郎に狙われてんの？

つか狩るって……殺す的な意味で……なのか？

まさか性的な意味だったら……嫌だよ！

とにかく、俺はこんなヤツになんか狩られたくねえ。そんでもって伊吹を傷つけたくねえ。

「そうか、事情は後で話そう……だが従わないのであれば俺も手段を選ばん……がるるっ！」

「くっ……やッ！」

その時、オオカミ野郎は伊吹から角材を奪いやがった。

伊吹は女の子の中でも握力のあるほうらしく、さっきの角材だってしっかりと握っていた。

あれが竹刀ならもつとちゃんと握れていただろうが、それでも角材

はしっかりと握られていた。

それなのに、あのオオカミ野郎は軽々と角材を伊吹の両手から抜き取ったのだ。己の腕力のみで。

「がるるるっ！　言う事を聞かなきゃこいつでこの女を撲殺する！」

「くっ……っ！」

伊吹は迷わず、ゴミ箱に入っていたもう一本の角材を手にとろうとする。

「がるるっ！　遅いっ！」

「ううっ！」

だがしかし、ヴォルコラクはそれを阻止してしまう。

ヴォルコラクは角材を振りおろし、伊吹が手に取った角材を無理やり地面に叩き落とす。

しかもその時の衝撃のせいか、伊吹は右手首を痛めてしまったようだ。

見ているのが辛い、苦しそうな表情で手首を押さえている。

とても痛そうに……伊吹が……。

「ぎゅふふっ、魔族ナメてんじゃねえぞお？　ぎゅふるるっ」

……あの野郎オッ。

どうしてこうなったかよくわかんねえけど……伊吹を傷つけやがって。

「伊吹！ ……チツ、てんめえっ！」

俺はゆっくりと拳を構える。

拳を握った時にパキパキと、指の関節が鳴る音が響いた。
相手は奇抜だけど、殴り合いなんて久しぶりだな……。

「ぎゅふる？　なんだあやる気かあ？」

「け、けい……すけっ？」

「俺だったら好きにすればいいだろ……けどな、伊吹には手え出すんじゃねえよ！」

久々に心の底から怒りがこみ上げてくる。

「ぎゅふ、いい覚悟だ藤島圭介。いいだろう、一撃で沈める」

オオカミ野郎は角材を投げ捨て、俺と同じように拳を構えた。
すげえ……パキパキどころかバキバキって音がしやがった。

それにこの気迫、なんとなくけどアイツ素人じゃねえかもしれねえ。

……けどな、俺だって ……とある事情により、喧嘩の経験は少し他の奴より多いんだ。

テメエと同じでズブの素人ってわけじゃねえんだよ。

それに俺は身体が丈夫だ。ちょっと打ったぐらいで倒れると思うなよ。

俺はそんな簡単には……。

「……やられねえっ！」

互いに地面を蹴り、間合いを詰めた……その時！

「がるううだあああうあおうああっ！」

「……えっ？」

突然オオカミ野郎の後ろを駆けた謎の影、断末魔の声をあげるオオカミ野郎。

その一瞬の出来事の直後――

「がああああううああああ………」

オオカミ野郎の背中からは、血がまるで火山でも噴火したかのように噴射していた。

血飛沫がビチャビチャと路面に染み込み、血の匂いがあたりに漂う。そして、オオカミ野郎は力尽きたように地面に倒れ込んだ……な、なんだよコレ、何が！？

「ふう……遅くなったのです、けーすけ様」

「お、おまつ！？」

「あっ……あんたは……っ！」

そこには既に刀を鞘に入れ、先程とは違う真剣な表情をして立っている、木下暮葉の姿があった。

しかも斬られたオオカミ野郎。ありえねえ事にその遺体は次第に虹色に発行し、パキンと割れるような音がした後小さな粉末状の光となり、やがて消滅していったのだ。

……ありえねえだろ。とりあえず、誰か説明してくれえっ！

第6話、オオカミさんとやらないか？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「やあ、遅くなった!」

重原「いつも通り0時に更新しようと思ったら、作者がぶっ倒れちゃったらしいからね」

圭介「全く、たかがちょっと歩いたくらいでダウンとか、どんなひ弱な作者だよ!」

重原「まあまあ、作者だって人間なんだからそれくらいにしておこうよ。それに圭介だって大きなミスくらいあるでしょ?」

圭介「えっ? 俺まで作中で重大ミス犯しちゃうの?」

重原「それはネタバレだから言えないね。とにかく人生何があるかわからないものなんだよ」

第7話、藤島家の秘密!?

あれから数分後、俺達は近くの公園に移動した。そこで木下は色々説明してくれるらしい。

ちなみに伊吹も一緒だ。そりゃ当然、あんなものを見たら興味が沸くだろう。

あと伊吹の手首は大したことがない。

冷やして安静にして、帰ってから手当てすれば特に問題のないレベルだ。本当によかったですぜ。

現在俺と伊吹の前に木下が立ち、上から見るとトライアングル陣形という状態だ。

まず木下が伊吹に自分の事や、自分がやってきた世界の事、そして今ここで起っている事を説明する。

当然伊吹は困惑した。あたりまえだ、俺だって最初は信じられなかった。

……でも伊吹は案外信じるのが早い方であった。

と、言うのもさっきあんな事があったからであろう。

狼男に襲われ、その狼男は木下に斬られ、しかもその死体は不可解な消滅の仕方をしたのだから。

「圭介、あんたは……知ってたの?」

「えっ? まあ一応?」

正直信じたくなかったけどな。

でも、魔法とかいうわけのわからねえ能力でぶっ飛ばされりゃあね。誰だって信じますよ。嫌でも信じざるを得なくなってしまうよ。

「それで、木下さんは」

「暮葉でいいですよ！」

「じゃ、じゃあ暮葉はなんで圭介に付きまとってるの？」

突っ込み所そこかいツツパリ伊吹ちゃん。

まあ俺も気になっていた所だ。何故木下が俺の一族を護衛すると言
うのか。

何故俺の家によくわからん手を使って居候することになったのか。

「それは……むかーしむかしのことなのです」

「なんか昔話になっちゃってるわよ」

「木下、手短にお願いな」

「はいなのです！ それとけーすけ様も暮葉でいいのですよ？」

「ええっ？ で、でも」

いきなり女の子の名前を呼べってのも……正直恥ずかしい話だ。

「気にしないでいいのです。今日から一緒に暮らす仲なのですから
！」

ああコイツ、伊吹の前で禁句を言いやがった！

なんとか隠し通そうと陰ながら思っていた事を……。

まずい、俺の隣の伊吹がこっちを見て、笑顔で拳を握ってらっしゃ

る。

痛めていない左の拳を……こええ、こええぞ伊吹っ。

「圭介え？ 詳しく説明してもらおうかしらね？」

「ちょろっと待った！ 俺のせいじゃねえぞ、コイツが勝手にだか
らな！」

「どういう事かしらね、く・れ・は？」

伊吹が怒りの矛先を木下改め暮葉に変更した。

ふう……いや、まだ安心はできねえぞ。

そもそも伊吹さん、なんで俺の家に暮葉が居候しているからって、
そんなに不機嫌なんだ？

「これから説明するのです。えっと……ロジーナは革命によってサ
ヴィエトになる前は帝政国家だったのです。当然のように皇帝がい
たのですが、革命によって帝政は倒され、皇室一家はほとんどレニ
ナ率いる革命軍に殺されちゃったのです。しかしただ一人生き永ら
えた男がいたのです。その名はロジーナ皇太子アレクサンドル様。
なんとか生き永らえた彼はここへと渡り国籍を取得し名を変え、現
在もその子孫が生きているのです。もきゅもきゅ♪」

……えろっと、どこから突っ込めばいいのやら。

しかも、めでたしめでたしみたいに話を終わらせているが、結構エ
グい話してるよね。

つーか革命前は帝政って。マジで異世界レムリアは……もしかして
並行世界？

いや、ありえねえだろ。魔法とかあるし。つーかこれって色々な意
味で危ないネタじゃね？

しかもそれと俺を護衛する理由、全く関係ない気がするんだが……。

「そのどこが圭介に付きまとう理由になるのよ」

「伊吹さん鈍感なのですねっ」

「ちょ、鈍感って……私は圭介ほど鈍感じゃないわよ！」

「俺って鈍感なの！？」

「……っ、ふん」

伊吹はぷいっと俺から顔を逸らしてしまった……。

あのお。伊吹さんいい加減機嫌直してくれ。

とりあえず、色々わけのわからん事があって機嫌が悪いのもわかる。でも頼む、ここに居づらいから機嫌直してくれ。

で、暮葉は機嫌の悪い伊吹を放置し話を続ける。

「ほら、子孫って所に引っ掛からないのです？」

「はあ、子孫って……まさかアレクサンドルが俺の御先祖様とか、そんなありえねーラノベ的な設定じゃねえだろうな？」

「ぴんぽーん！ 大当たりなのですけーすけ様っ♪」

「「……はいっ？」」

あまりに予想外すぎる暮葉の反応に、俺も伊吹も目を白黒させてしまふ。

神は言っている……。

オカシイと！

「いくらなんでもありえねえだろ！」

「そうよ！ 圭介はどう見ても日本人じゃん！」

「俺黒髪っすよ！？ 肌はフットゥーに黄色人種的っすよ！？」

ロジーナ人って絶対白人だよね。

確かに葵の肌は若干白いけどさ、俺はどう見ても日本人だ。

でもロジーナの皇太子様という、由緒正しいロジーナ人の子孫なら……俺は白人のハズだ！

「それは多分このあたりの人の特徴なのです。でもけーすけ様は確かに。アレクサンドル様の子孫様なのですよ」

「う、嘘だあああああああつ！」

「ちょ、嘘つくならもうちよっとうまい嘘をつきなさいよ！」

「なのでしたら、何故さっきの妖怪さんはけーすけ様を襲ったと思います？」

「へ？」

……あ、そういえば。

アイツなんて言ってたっけ？

確か俺の事を狩るとかなんとか……うん、普通に考えておかしいね。俺にあんな意味不明かつメルヘンな、オオカミさんの知り合いなんていなかったハズだ。

「けーすけ様を捕まえようとしていたのですよね？」

「まあ……」

「そ、そうよね」

「それは何故だと思います？」

「知るかつ！」

考えてもどうせわからない、ならば早い話最初から知るかと言っておけばok。

どうせぶっ飛んだ回答だろうが、暮葉が何か答えっぽいものを喋ってくれるだろう。

「あれは多分、サヴィエト亡命政府所属の者だと思うのです。サヴィエト亡命政府は拙者らロジーナの現政権と同じ時期に、何故かアレクサンドル様の子孫の存命を確認したのです。そしてどういう思惑かわからないのですけど、その子孫の中でも一番若い男かつアレクサンドル様の血が濃い、けーすけ様の身柄を狙っているのです」

「……一番血い濃い俺がなんで日本人の見た目してるんだ？」

そうそう、そこからしてまず胡散臭い。

だってねえ、確かに襲われたけど俺どう見ても見た目は日本人だし。

何世か前まで外国人、それも異世界人でしてなんて思えない。
信じろって言うほうが難しいぜ。

「そこはまああよくわからないのです……もきゅう。でもとにかくこれは事実なのです。そして拙者達アルファ隊の目的は、現在藤島を名乗るアレクサンドル様の直系の子孫を守る。もっと厳密に言えば最も血が濃くて、連中のリストにも登録されてしまったけーすけ様を……お守りする事なのです！」

「ありえねえ……けど」

作り話にしては出来過ぎている。確かに俺達はあのわけのわからない狼男に襲撃された。

あの狼男は俺を狩ると言っていた。そして死体の消滅の仕方、アレは普通じゃねえ。

正直幻覚でも見ているかのようにだった。でもおかしいのはその幻覚っぽいものを今日一中見ている事。

もしかして暮葉の言っている事って……ホントなんですかい？

とにかく、この件に関しては……。

「とりあえず考えるのが面倒になってきた、もうそれ事実って事でいいや！」

キラッ！

俺はそんな事を我ながら素晴らしい笑顔で言い放ちました。

「ちよっ！ 圭介、考えるのをやめたらダメよ！」

「いいだろ別に？ 第一さ、二次元でもねえのにいきなりホントの事ですって、ワケわかんねえ事言われても納得できますか？」

「そ、それは……確かに出来ないけど……でもっ！」

「とにかくもう考えるのが面倒だから。暮葉、勝手に俺達信じましたって事にしてもいいよ」

なんて投げやりでしょう。

でも考えるのが面倒になったのは事実だ。

こんなシリアスっぽい話長々と聞いてられますか、俺はシリアス苦手なんだぞ。

こんな感じでとりあえず信じる事にした俺、その事に暮葉は喜んでいる様子だ。

「ほ、ほんとなのですか！？」

「ああ、だからもう長々とした説明はしないでいいぞ」

正直聞くのが疲れました、ハイ。

二次元ならまだしも現実^{リアル}じゃ理解不能っす、あんなメルヘンなお話……。

「それじゃあ！ 今日からけーすけ様をしっかりとお守りしますの
で、家でもよろしく願いしますなのです！」

「ちょーーーーーっと待ったあっ！」

「どわあっ！」

「もきゅっ!?!」

その時、伊吹が怪獣のように怒声をあげた。
な、なんだ。コイツ一体どうしたんだ?
なにをそんな……怒ってらっしゃるんですの!

「ど、どどど、同棲はいけないと思う!」

「もきゅ? なんですねです?」

「だ、だって圭介だよ? 圭介は変態なのよ、そんな変態と一緒にいたら暮葉がその……い、いつ圭介の餌にされるか……っ」

「しねえよ! 勝手に決めつけてんじゃねえっすよ!」

「そうなのですよ。それに葵さんもいるのですから、同棲じゃなくて同居なのです」

そうそう、うちのは葵がいるんだ。

確かに俺もいきなり女の子が一人増えて非常にドキドキしているんだが……ま、まあそういう事もあるし、伊吹とだって何度か一緒に寝た……もちろんフツーだぞ。やましい意味じゃねえし子供の頃の話だ。

だけどそういう事はあったんだ。だから女の子に対する耐性は少しあるというか……。

とにかくだ、ちよつとの事で自棄にはならねえ。

それに葵もいるから二人きりじゃねえし、少しは安全じゃないカ!

「それに一緒に住んでないと、もしけーすけ様が寝込みを襲われたら……」

「エエッ!?! ね、寝込み!?!」

「大丈夫なのです! けーすけ様はラッキーな事に見た目は普通のこの国の人の見た目なのです。連中もけーすけ様の外見を認識していないのですし、拙者だって最初はけーすけ様だとは思わなかったのですよ。それにやつらはけーすけ様の居場所。古宇坂って場所のどこかにいるとしか認識してないのですし、寝込みを襲われる可能性はほぼ0なのです。ただ念の為に出来るだけけーすけ様の傍にいるようにと上の命令があつたのです」

「そ、そういうわけか……」

それだったら今日襲われたのはたまたま……。

やれやれ、俺って今日は運勢悪かったんですねえ。

んじゃあコイツの話がホントなら、ほぼお前が俺を護衛しに来る意味ないじゃん。

でも上の命令かあ。そりゃ確かに裏切れんわ。

第一追いつ返す言葉が思いつかんし考えるのもメンドイ。あと寝込み襲われて拉致られるのも嫌だ……。

とりあえずコイツの居候、認めておきますか。

……でもただ一人、コイツの居候を認めぬ者がいた。

「と、とにかくダメなの! 圭介と一緒に住んだらダメなの!」

「もきゅ、何故なのです?」

「ダメなものはダメなの!」

「……あ、にゅふふふつ。さては伊吹さん、けーすけ様の事が――」

――
と、暮葉がそんなセリフを言いかけたその時。

「ち、違う！ 絶対違う！ ありえないから、絶対ありえないから！」

まるで完熟トマトのように顔を紅く染め、音響兵器のように街中に響く音量で伊吹は喋りまくったのだ。

えーっと。これはデレなのか？それとも本気でありえないのか？うーん、前者だったら正直かなり嬉しい。でもなあツツパリ伊吹ちゃんだし……。

過度な期待はダメか。多分本当にありえねえんだろう。

まあ俺も正直幼馴染に対しては全然恋愛感情が沸かない。

好きだけさ、でもどうしてもただの幼馴染なんだよなあ。そうしか思えない不思議。

まあ、何かエロゲー的イベントがあったら、気持ちが変わるかもしれない。

それより……。

「……」

この真っ赤に完熟した伊吹と。

「にゅふふっ」

何故か笑ってらっしゃる暮葉、この二人どうしよう？

……結局収集がついたのは15分後。
その後。暮葉と一緒に帰宅したはいいが、あまりにも遅すぎた為、
当然葵に説教されてしまった。

……こうして、人生で一番長く感じた俺の一日は、幕を閉じたのだ。

第7話、藤島家の秘密!?(後書き)

今回後書きトークコーナーはお休みします。

ね、ネタがなかったわけじゃないんだからね!

圭介「ツンデレきめえ……っ」

第8話、圭介と愉快な仲間達

朝起きたら……。

「おはろーお兄ちゃん！ 葵はこれから遊びに行ってくるんだよ、葵がいないからって悶え死んだらダメなんだよ！」

「……What for？」

「なんでって、だってお兄ちゃんは葵と赤い糸で……」

「はいその時点で間違ってます！ 血は繋がってるけど赤い糸では繋がってないから！」

妹がバタバタと慌てながら玄関に向かっていた……。

5月3日の朝、暮葉が我が家で居候を開始して一晩が経過した。突然だが、m y 妹の葵がパジャマから私服に着替え、どこかへ出かけようというのだ。

なんでもm y フレンドの家に行くとか行かないとか。つか、コイツも高校に入ってから一ヶ月経つけどさ。友達いたんだな。

てかそれを突っ込むのは流石に失礼か。葵の性格からしていないのはありえないと思う。

なんたって葵は小学生の頃、歌の文句にまである友達100人を見事達成してしまったすごい子なのだ。

一方の俺は……うう、聞かないでくれ！

「けどそれって暮葉と二人きりって事だよな？」

「ん、そだよ。大丈夫だよ、お兄ちゃんは葵一筋だもんね！」

「ちげーよ！」

「そうなの？ でもなんでお兄ちゃん彼女さんいないの？ 葵一筋だからだよな！」

「だくから違います！」

まあ確かに暮葉と一緒にだからって過ちは犯さんと思う。

だが突っ込み所はそこじゃない。なんでこいつの頭は彼女いない！！自分へのフラグが立っていると考えてしまうんだ？普通に考えてみる。妹ルートなんてありえないでしょ。

全国の妹を持つお兄ちゃんならわかるハズだ。妹って何故かそういう目で見れないんだよな。あら不思議である。だけど事実だから仕方がない。

それに暮葉と二人きりだからって心配なのは、俺が自棄になるんじゃないという事じゃない。

だって和服に日本刀持つてるわけわからない子だぞ。

オマケによくわからない世界から来たし、いきなり人の事アレクサンドルとかいう皇太子様の子孫だとか言ってくるし、オマケに魔法とかいうわけのわからない能力まで使いやがる。

そんなのと二人きりって……まあ確かに暮葉は可愛いほうだと思う。でも不思議すぎて不安要素しかねえよ！

「あつ、いけないそろそろ行かないと！ それじゃあ冷蔵庫にチャ
ーハン入れてあるからチンして食べてね！」

「ま、まあ気を付けて行って来いよ」

「うん、お兄ちゃんも下着ドロには気を付けてね」

「なんで俺が下着ドロの標的に！？ おかしいだろ！」

「あははっ、いつてきまーす！」

「逃げやがったぞあのバカ妹！」

ボタンと勢いよくドアを閉める。葵は友達の家に行ったようだ。

葵の友達、新しい友達かな。中学の頃の葵の友達は何人か知ってるけど、まあとある事情により俺だけ滅茶苦茶嫌われていたけどね。それにしても葵、どんな友達作ったんだろうなあ。

出来れば紹介してほしいぜ。そして人生初後輩をゲットしたいぜ。ああ〜いつか俺も「せーんぱいっ、お弁当作ってきましたよ」とか言われてみたいぜ！

そして上目遣いで「せんぱい……っ、ボクじゃダメなんですか……っ？」なんて言われた日には……うう、死ぬる。萌え死ぬるぜ。

「げふんげふん！ いかん……今の俺滅茶苦茶キモいぞ……」

あ、そういえば暮葉はまだ寝てんのか？

あとある意味重要な話、暮葉の服だがとりあえず葵のお下がりではらく代用する事にした。

アイツ小柄だし、葵がちよっと前に着ていた服とか丁度いいんだよな。

「ようするに身体の凹凸が少な……げふんげふんっ！」

それにしても暮葉って意外とねぼすけさんなんだな。

まあ普段の俺もそうだが、今日は特別起きるのが早かった。

とりあえず起こすのも可哀想だし、お昼まで寝かしといてあげよう。

アイツ……ホントかどうかからねえけど色々事情もあるみたいだし、疲れてるんだろう。

疲労とか肌に悪いらしいし、女の子の敵だからな。

だからゆっくり休ませてあげよう……。

でもお昼は食べないと身体に悪いし、お昼になったら起こして……ん、お昼？

そういえば葵の奴……なんて言ってましたっけ？

（それじゃあ冷蔵庫にチャーハン入れてあるからチンして食べてね
！）

……突然だが、昨日のカレーの話をしよう。

正直最悪でした。ニンジンがフナムシ化していたし、玉ねぎはガンゼキフサゴカイ、じゃがいもは何か最初はなかったハズの芽がありました……。

まあ食ったら普通においしいカレーだったし、特に腹痛とかそういう症状もない。

ただ葵の料理は見た目があまりにもひどすぎる。

毎日食わされている俺はもう我慢したけどさ、昨日の暮葉は完璧涙目だった。

で、今日のチャーハンが葬が作ったと……まさか！？

俺はダッシュで冷蔵庫に向かった。

きつとチャーハンは一番上のデカイ所に入っているハズ……これか、これなのか。

ラップで包装してある皿には、紫色のご飯に何故かダイオウグソクムシが乗っかっていた……。

「ぎゃあああああああああつ！」

ねえ質問があるの、これチャーハンか？

これはチャーハンなのですよね！？

……ひどい、予想を遥かに上回るひどさだ！

「食えるかこんなモン！」

食ったらきつとおいしいチャーハンの味なんだろうけど、これ食べるの嫌だよ！

ていうか俺なら我慢して食うけど、暮葉にとっては精神的にショックだよこれ。

……これ以上アイツにトラウマを植え付けるわけにはいかないな。仕方ない、買い物に行くか……。

それから数分後、俺はマックスバリユエに行くために外を歩いていた。

これも暮葉の為。純粹な暮葉にあんなもの食べさせられません。て言っても俺料理できねえしなあ。

唯一作れるのが焼きそば。理由は簡単、伊吹が焼きそば大好きだからだ。

おかげで伊吹に焼きそばだけはプロ級と称されるほどの腕前になって……。

よし、暮葉に焼きそばを作ってあげようか。

「あつ、あんた」

「あれ、圭くんじゃないか！」

「あ？」

どこからか声が、まあ確実に後ろだろう。

俺は身体はそのまま、首だけを後ろにくるっと半回転させた。

そこには右手首にシップを張ったツツパリ伊吹ちゃんと、その親友である小坂亜紀の姿があった。

二人ともこんな所で何やって……って、遊んでるんだろな。

「あんたこんな所で何してるの？」

「なについて買い物だけど」

「買い物……ふーん」

て、教えたのに感心ナシですか。まあ別にいいんだけど……深く追求されるのも困るし。

妹のご飯が嫌だからって理由で買い物に行く俺もひどいヤツだからな。まあこれは暮葉の為なんだ。

昨日のあの慌てっぷりを見た俺としてはとてもじゃないが、紫色のご飯にガンゼキフサゴカイがそのままの状態で乗ったような意味不明な飯は食わせられん。

ちなみに、暮葉の事はあの後伊吹と電話で相談して秘密にする事にした。

つーか普通魔法少女だとかそんな事言えねえよ。

「そういえばあんた昨日も買い物してなかったっけ？」

「昨日は妹に頼まれて、今日は個人的な事情っすよ」

「もしかして圭くんは意外と家庭的な人なのか？」

「小坂、俺の何処が家庭的な人に見える？ 家事全くできねえぞ」

掃除くらいは流石に出来るが、裁縫とかやったり悲惨だぞ。主に指が。

料理は全然作れないね、ただし焼きそばを除く。

「そうね、あんた焼きそば以外作れないもんね」

「うっせほっとけ！」

大体焼きそばだけ得意になったのは誰のせいだと思ってやがるんだ。まあおかげで家事スキルが完全0という、人としてはどうかという事態は避けられたが。

ていうか俺はそろそろマックスバリュエに行きたい。

「はあ、んじゃあ俺そろそろ行くぞ」

「随分急いでんのね」

「だってこんな所で立ち話つてのもなんだろう？」

というのは言い訳、本当は暮葉が心配だ。

とても心配だ。心配すぎて呼吸するのが辛いんだ。だって……。

間違って魔法を使って家の中が滅茶苦茶になったら大変でしょ！

「伊吹、行こう。圭くんだって忙しいんだから」

「……っ。勝手にすればっ。行こう亜紀」

「ああゝ。そ、そーだな」

少し口を尖らせた伊吹は冷たい一言を俺に吐き、親友と共に古宇坂の街へと消えていったのだ。

流石はツッパリ伊吹ちゃん。地味に心が痛くなる言葉を平然と吐きやがるぜ。

さて。さっさとマックスバリュエ行って買い物してこよう。

……それにしても伊吹ってデレたらどうなるのかな。まあ考えるだけ無駄か。

その後、マックスバリュエで買い物を買った俺はついでにラノベも買おうと、ちよいと市街地へ赴きその書店で立ち読みをした。

ラノベの立ち読みは大変だ。だってこんな公の場で笑ったらただの痛い子じゃなイカ。

「ぶわっはははははっ！ やべえこれマジやべえっ！」

……て、いたよ痛い子。全くだこのどいつだ？

なんとなくああいうのって一瞬だけでも見たくなくなってしまふよね。なんでだろう。やっぱ興味本位というものかな。

とにかく俺は店内で大爆笑をしている痛い子を確認する為、右を向くと……。

「大吾、自重したほうがいいと思うよ」

「仕方ねーじゃん！ これおかしーじゃん！ ……あ？」

「あ……っ」

「あれ、圭介じゃないか」

なんと店内で大爆笑していた痛い子は、俺のリア友の一人である長宗我部大吾であった。

そのつき添いだろうか、あまりに非常識すぎる大吾に呆れている重原広敏の姿もあった。

「圭介じゃん！ まさか僕らのストーカー？」

「あのなあ。男をストーカーとか誰得だよ」

「ハッテン場にいるツナギ男得じゃねえの？ まあ僕は二次元女子にストーカーされたいな」

「二次元は無理でも大吾なら前者のほうにストーカーされそうだね」

重原は爽やかな感じでそう言う。

しかし前者とはその……いわゆるBLというか。

まあそんな感じのもので。当然大吾は女子（ただし二次元に限る）が好きなので当然拒絶反応を起こす。

「アッー！」

「ちょ、声でけえよ！」

「さっきからずっとこの調子なんだよ……俺も流石に疲れたね」

「重原、お前も苦労してたんだな！」

「大丈夫。これでも大吾の扱いには慣れているからさ」

そう、またしても爽やかな感じで発言する重原。

だがその言葉を聞いていた周囲の女子達がヒソヒソ話を始め、終いにはキャーキャーと黄色い声をあげていたのだ。もしかしくなくてもアレだろう。

彼女達は重原の発言を薔薇色な方向に捉えてしまったのかもしれない。

全くこれだから重原は。

重原は大分マトモなヤツだが、たまに腐女子に誤解されるような事言うんだよな。

「お前らなんか僕の扱いひでえ……それはそうとこれからゲーセン行かね!？」

突然眼鏡を光らせ元気になった大吾、立ち直るの早いなオイ!

「ゲーセンかあ。俺は暇だからいいけど、圭介はどうするんだい？」

「え? 俺はそんなに暇じゃあ……」

「リア充の圭介には伊吹ちゃんがいるもんな! そうかそうか、暇じゃねえんだなあ」

なっ、誰がリア充だこの野郎!

確かに伊吹とはそこそこ仲がいいが、何も恋仲というわけではない。ていうかアイツはツンデレじゃなくてツッパリだし、デレるわけがない。

さっきだってその……っ、冷たい事言われたしな。

とにかく俺はリア充じゃないの。女子のアドレスなんて母ちゃんと葵と伊吹と小坂のしか持ってない。

人生で一度も恋人がいた事ないし。大吾にはしっかり言ってやらねえとな。

「伊吹じゃねえよ。っーか俺はリア充とはかけ離れた存在だ」

「というか、ここにいる俺達みんな女子とはあまり縁がないね……」

「広ちゃんは女子にモテモテじゃねーか！ フラグ折りやがって、そこまで武道好きか！」

「俺は今の所恋愛には興味ないからね。それに大吾は例え圭介が国宗さんといい感じになったとしても、興味なんてないって前に言っ
てなかったかい？」

「当然！ 僕はとことん現実^{リアル}に失望し、二次元の世界に生きると決
めた男ですから！」

自分で言っていて悲しくならないんだろうか、コイツは。
恋愛に興味がない、武術一筋の重原はまあ仕方ないとして大吾は悲
しすぎると思う。

ああ、俺ももう高2だし。友達の中にもリア充いやがるし、小学生
や中学生でさえ街中でイチャラブデートしてるくらいだし。いい加
減に彼女が欲しいけど、出会いがないのも事実なんだよなあ。
増してや俺は、ある事情により一部からはあまりいい目では見ら
れていないのだ。

俺、高校生のうちに恋愛するのは無理なのかな。

「まっ、俺はテキトーに大吾と二人で遊んでるから、圭介は国宗
さんと頑張ってるね」

「だから伊吹じゃねえ！」

「ヒューヒューリア充乙！」

「大吾、一回シバこうか？」

……疲れた、まさか友達相手にするのにここまで疲れとは思ってもしなかった。

というかどうしてそんなに伊吹の事で追ろうとしているんだ、コイツら。

今は伊吹どころじゃない事態が身の周りで起こってるつてのによ……。

ていうか、絶対暮葉の事は言わんほうがよさそうだ。

暮葉はもちろん俺や葵とかがフツーに生活する為にも。

……さてと、そろそろ帰りますか。

「ただいまー、焼きそば買ってきたぜ」

やっとの思いで野郎共を追っ払い、自宅へ到着。

しかし野郎共を追っ払う事に成功したのは11時55分。
現在時刻は12時15分……ああ、嫌な予感しかない。

そしてその嫌な予感は現実のものに……。

「もきゅー……っ！　　ば、バケモノおおおおおっ！」

丁度暮葉は台所におり、葵が残したのであろうメモ通りに冷蔵庫を開けていた。

そして彼女は見てしまったのだ。ダイオウグソクムシ入り紫チャーハンを……。

「スマン暮葉！　もっと早く帰っていれば！」

もっと早く帰っていればそのチャーハンの存在を知らずに済んだかもしれないのに！

ああ、ラノベ立ち読むために書店に寄らなきゃよかった。

……マジで後悔しました。

＊

「……やっと見つけたぞ。グフフ、金曜日に娘に殺させるとしようか……木下暮葉！」

第8話、圭介と愉快的仲間達（後書き）

あ、後書きトークコーナー？

今回と次回はお休み。

じ、時間がなかったただけなんだからね！

圭介「だからツンデレきめえ……言い訳乙」

第9話、はじめてのがっこう

5月6日金曜日、早朝。

朝っぱらから俺は非常に憂鬱な気分であった。

今日から学校。しかし今日行けば明日からまた休み。

それだけでもかっただるいというのに……今日からヤツが。

『にゅふふ、拙者もこーこーという所に行くのですよ。これもけーすけ様護衛の為です!』

……そう、ヤツが高校に通い始めるというのだ。

大丈夫なのかよ。というかいくらアルファ隊だかなんだか背後にいるからって、そんなに簡単に高校に入れるものなのか？

まあ、いつまでもこんな気分でいるわけにもいかないし、とりあえず起きるか。

「ふああ……眠っ」

しかし暮葉が住み着いせいなのか、伊吹の奴今日は起こしに来ないな。

少し寂しい気分もあるけどまあいいか。

流石にこの歳になったんだし、そろそろ幼馴染離れの時なのかな。とりあえず起きよう。着替えた後俺は下に降り、彼女達に挨拶をした。

「おはよう」

「おはようございますけーすけ様!」

「お兄ちゃんおはよう！」

朝からテンションの高い……ん？

この時俺は暮葉の服の違いに気付いた。

いつもなら最初に着ていた和服、もしくは葵のお下がりの洋服だ。しかし今日の暮葉はピンクっぽいブレザーやチェック柄のスカートが特徴的な、初芝高校女子の制服を着用していたのだ。

「……それ、コスプレ？ コスプレするならセーラー服のほうが俺はいいな！」

「失敬な！ これはコスプレじゃないです、予告通り拙者も学校に通うのです！」

「……32÷4＝？」

「324！」

「……………」

暮葉はちゃんと義務教育を受けてから高校に行ったほうがいいのでは？

俺は真剣にそう思いました。だって……いくらなんでもひどすぎるだろ。

確かに俺だって赤点ギリギリ程度の学力しかないよ。でも小学生の問題くらいならフツーに簡単だ。

「お兄ちゃん大丈夫だよ！ 教育費とかはクーにゃんの両親が出すらしいから！」

「そ、そうか……」

暮葉の両親なんて知らないし、多分その実態はアルファ隊なんだろう。

第一割り算もロクに出来ない程度の学力しかないのに、どうやって編入試験潜り抜けたんだ？

なんだか背後の組織とか使って、汚い手で潜り抜けたとしか思えないですぜ。

あと葵、いつからお前は暮葉の事をクーにゃん呼ぶようになった。

「それじゃあ二人とも朝ごはん食べようよ！」

「お、おう」

「いただきます」

……ちなみに、あの紫チャーハン事件以来家の料理は暮葉が作っている。

この魔法も苦手でオマケに馬鹿でアホな暮葉にも、料理上手という大変優秀な特技があった。

つーか料理作れるなら最初から作ってくれよ……味は葵と同程度だけれど見た目は最高にイイじゃん！

つまりどういう事かというとな。フツーにおいしいです暮葉の手料理！

「むう……なんか悔しいっ」

まあ暮葉が料理を作ると葵は機嫌を悪くしてしまうのだが。

そして朝食を食い終え支度を終えた俺達は、暮葉以外は歩き慣れた通学路を歩き初芝高校に行った。

「職員室は葵の教室のほうに近いから、クーにゃんは葵が案内するね」

「は、はい。よろしくお願いするのです！」

「んじゃあまた後でな二人とも」

「お兄ちゃん行ってらっしゃい！」

「気をつけてくださいけーすけ様！」

こうして玄関で別れた俺達。

多分次に会うのは家に帰ってからだろう。

葵はそもそも学年が違だし、アイツ友達が多いみたいだからきつとどこか寄り道していくハズだ。

暮葉は確かに同学年らしいが、そんな都合よく我がクラスに編入してくるというエロゲー的な展開は流石にないだろう。いくら背後にアルファ隊がいるからって、クラス決めるのは教師陣だろうし。

そういえば今朝は伊吹見なかったな。教室行ったらいるのかな？

「うーっす」

「おう圭介！」

「おはよう」

教室の扉を開け、いつも窓側で騒いでいる大吾達に挨拶をする。
アイツらもいつも通りだ。大吾は元気よく、重原は爽やかに挨拶を返してきた。

ついでに伊吹が教室にいないか確認するが……い、いた！

「おはよ、今日は先に来てたのか？」

とりあえず伊吹にも挨拶をするが……。

「あ、おはよ」

……すごく、素っ気ない返事が返ってきました。
しかも俺の方すら向かず、伊吹はずくっと教室前側扉を見つめている。

アレ、もしかして本日のツツパリ伊吹ちゃんは機嫌が悪い？

「なんかあったのか？」

「別に」

「しかも今日日直でもねえのに随分早いな」

「私の勝手でしょ」

「朝から冷たいっすね！」

「……ふん」

なんだ、俺なにかやちまったんですか？

いつもに増して伊吹の機嫌が悪い！

これほど機嫌の悪い伊吹というのも珍しいぞ！

「あ、圭くんおはろー」

「あ、小坂か。おはよう……あの、何か伊吹さん機嫌悪いのでござ
いますか？」

「ああ、圭くん何かやったんじゃないのか？」

「やっぱ俺ですか!？」

しかし考えれば考える程何も思い当たることがない。

ここ最近伊吹と喧嘩をした覚えもないし、伊吹が嫌がるような事を
やった覚えもない。

だったらなんで伊吹さん怒ってらっしゃるんですか！

「……ちなみに伊吹って何時に来た？」

「圭くんが来るちょっと前くらいだけど？」

特別早く来たと言う訳ではなさそうだな。

でもちょっと前くらいなんだろ？

だったら伊吹を一度くらい見かけたって何も不思議じゃないよな。
やっぱり伊吹が怒っている理由がわからない。

「……はあ、マジで俺何やらかしちゃったんだろ」

「はははっ！ 圭くんってばホント伊吹の事になると真剣になるな！」

「うっせ黙れ！ はあ……何やっちまったんだろ、俺？」

「テメエがやった事ならわかってんぜ、藤島圭介」

ん、なんだろうこの声は。突然俺の背後から男の声が聞こえた。後ろへ振り返るとそこには甲高いテノールの声の持ち主がいた。ツンツンとした金髪にピアス、制服は着崩されいかにも不良といった風貌。

このほか本人曰く天然の赤毛で、それをセミロングパーマにしている大柄な男。

さらにおそらく160cmもないであろう、小柄な坊主頭の男が金髪男の周りにいた。

コイツらは……確か。

「よお、三馬鹿じゃん！」

「「誰が三馬鹿じゃ！」」

三人そろって叫んでいる。息はピッタリ、やっぱり三馬鹿だ。

「それで結局何の用だよ、三馬鹿」

「三馬鹿じゃねえ！ 俺は黒木仁だ！ ボコるぞテメエ！」

「俺は赤佐直人^{あかさなおと}や。黒やんの名前はどうでもええんやけど、いい加減俺の名前は覚えような？」

「僕は^{おおばやしゆうた}大林勇太、いい加減俺の坊主くらい覚えろよ！」

ご覧の通り、この三人はロクなヤツではない。

頭は悪いし問題行動ばかりするし、とにかく柄が悪い。

でもアホすぎて憎めないというかなんとか……。

とにかくただの馬鹿だコイツらは。だからこそ恐れられる事もなく、三馬鹿という称号を得れたのだ。

「んで、結局なんだよ」

「ああそうだ。テメエが伊吹ちゃんにやった事……それはテメエの存在自体が悪って事よ！」

「意味不明だ！」

理由として成り立たないだろそれは！

実は赤佐と大林とはそこそこ仲がいいんだが……どうもこの黒木だけは好きになれん。

一応このハイテンションヤンキーモドキ野郎は、三馬鹿のリーダー的存在みたいだが。

「ああ、お前のようなウジ虫がいつから俺が伊吹ちゃんに近寄れねえんだよ。消えろ藤島！　そして伊吹ちゃんは俺の恋び——」

「あんたうつさいわ！」

「ぎゃあっ！」

その時伊吹が竹刀を取り出し、黒木にそれを手慣れた感じで振って

いった。

バシッといういい音とほぼ同時に、黒木の悲鳴が平和な教室に響いてしまった。

伊吹さん。馬鹿を退治してくれたのはありがたいが馬鹿の悲鳴は騒音だぞ？

「悪かったな藤島に国宗。コイツ絶賛片想い中なんや」

「チョクトてめえ！」

「だあゝれがチョクトや！」

「もういいから引っ込もうぜ、黒やんにチョクトさん」

「俺はチョクトやない！ ナオトや！」

と、揉めてはいるが三馬鹿は大林に引きずられる形で立ち去ったのであった。

……なんだったんだアイツら。

つーか黒木。前々から思っていたけどお前、伊吹の事好きだったんだな。

多分このデレのデの字もない伊吹を攻略するのは難しいと思うけど。ちなみに赤佐のチョクトという渾名は、何か過去にいじめられていた韓国人留学生を助けたら相手は敬意をこめ、赤佐の事を『チョクトさん』と呼んだらしい。

それを黒木らに聞かれて以降、みんなにああ呼ばれるようになったんだとか。

「はあ……っ」

つーかアイツら余計な事してくれたな。

伊吹の機嫌が余計に悪くなってしまったじゃないか！

「圭くん……がんば」

「アンタはいいよねえ他人事だし！」

小坂がうらやましいぜ。あと大吾に重原も羨ましい。

だってアイツら完全外野だもん。

そこの窓側の席から今の騒動を見て、大吾に至っては爆笑してるじやねえか。

はあ……ま、とにかく今は伊吹に機嫌を戻してもらえよう頑張るしかないか。

「おはよー。おーし、SHR始めるぞー」

と思ったその時、担任の乙坂が現れてしまった。

これは流石に仕方がないな。怒られるのも嫌なので俺は自分の席に座った。

まあ時間はいくらでもあるんだ。焦らずゆっくり機嫌を直していけばいい。

「えーっと、まず……そうだ、お前らに転校生を紹介するわ」

ええー！！と教室中がざわめいく。

完全二次元派の大吾は興味がなさそうだが、それ以外は大体驚いている。

特に三馬鹿のテンションは異常クラスであった。

先程まで不機嫌だった伊吹でさえ、転校生という言葉聞いてから

は前に釘付けだ。

しかし、中には転校生と言う言葉に不安を覚える人だっているんだ。たとえば俺とか俺とか俺とか……うん、嫌な予感しかない。

「よし、おーい入っていいぞ！」

ガララという勢いのよい音。

開けられた教室の扉から入ってくる、一人の少女。

彼女は教卓の横に立った瞬間、100点満点の笑顔で……。

「皆さん、本日転校しました木下暮葉です。いとこの藤島圭介共々、よろしくお願いします！」

「は、はあっ!?!」

いとこというあまりに飛んだ設定に、俺は思わず驚いて声をあげてしまった。

最初から嫌な予感はしてたけど、やっぱり転校生って暮葉かよ! つーか道端で出会った少女と同じクラスになっちゃっただろ? えーっとだな、これはその……なんだ。

……これなんてエロゲーだあああああああああああああ!

第10話、風紀委員

「木下さん、ホントに藤島のいところなの？」

「木下さん彼氏いる！？」

「バーカ、転校してきたばっかなのにいるわけねーだろ！」

「木下さんメアド教えて！」

担任の乙坂が出ていった後、転校生である暮葉の周りには定番のように野次馬共が殺到していた。

あまりにの質問攻めに暮葉も困り気味だが、まあアレはアレでいいだろう。

大変そうだけど、この調子だと暮葉はクラスに溶け込めそうだ。

よかったよかった……って待てよ、全然よくないぞ。

どうしてアイツと俺は一緒にクラスなんだ？

いくら暮葉の背後にはアルファ隊がいるからって、出来過ぎにも程があるだろ。

「それにしても、圭くんあんなのどこに隠してたの？」

「それは俺も気になるね」

「思いつきりギャルゲー展開じゃえか。いつから主人公になったんだよ圭介エツ！」

「……ふん」

小坂に重原に大吾はまさかの展開に驚いてはいるが、まあ平常運転だ。

だけどやっぱり伊吹だけ機嫌悪い。

ホントに俺、一体なにやっちゃったんだろう。

「お前らな、俺だって会ったのはこの前の月曜日が初めてなんだぞ。どこに隠してたなんて知るか」

「まあいいか。それにしても圭くんのいここにしては可愛い子だな！」

「小坂、そりゃどういう意味っすか？」

「確かに、圭介が隠していた子にしては美少女だね」

「俺は何も隠してねえぞ！ しかも地味に失礼な事言ってんじゃねえ！」

「ふん！ だが所詮は現実女だ！」

リアルおんな

「お前は黙ってろ！」

今日はなんだか質問攻めになりそうな気がする。

ていうか暮葉が質問攻めに遭うならまだわかるんだけど、どうして前からコイツらと一緒にいる俺まで質問攻めされなければいけないんだろう。

これもアイツがいとこなんて変な設定つけやがったのが悪いんだ！ まあ今はこんくだらない質問よりも伊吹だ。どうにかして伊吹に機嫌直してもらわないと。

「……っ……」

いつも不機嫌だけどあそこまで不機嫌なのは珍しい。
何が原因かわからないけど、アイツの不機嫌な姿を見るのは幼馴染
として嫌な気分だ。

「藤島アツ！ テメエなんでけーすけ様なんて呼ばれてんだよめっ
ちや慕われてんじゃん！」

「黒木……頼むから耳元で大声出すな」

「うるせえっ！ 伊吹ちゃんに手エ出しといて、いところ二股して
んじゃねえ！」

「お前が一番うっさいわ！ しかも二股どころか伊吹ともそんな関
係じゃねえよ！」

むしろ今、なんか嫌われている気がします。
得に今朝からやたら機嫌が悪いッス。

……やがて時は経ち、2時間目と3時間目の間の短い休み時間。
俺と暮葉は完全にへばっていた。

「もきゅう……っ、疲れたのです」

「ああ、俺転校生じゃないのに俺まで疲れたよ……」

朝っぱらから俺達は質問攻めであった。
抜けだす機会さえなかったよ。

1時間目と2時間目の間の休み時間なんて、トイレしてたらいきなり野郎共が殺到してきて暮葉についていろいろ質問してきやがったし。もうホント疲れた。

「拙者こちらの学校は初めてなのですが、大変ですね……」

「心配すんな。こんな疲れるのは初日だけだからさ」

多分ね。何事もなければ初日だけだよ、疲れるのは。でも疲れたゝってへバってる場合でもないんだよな。

俺は視線を教室の右前方へと向ける。

そこには一人教室から出て行こうとする伊吹の姿があった。

「もきゅ？ 伊吹さんどうしたのですか？」

「ああ、アイツ朝っぱらから機嫌悪いんだよ。悪いけど席外すな」

「はい、りょーかいですけーすけ様！」

「何かわからない事があったら誰でもいいからちゃんと聞くんだぞ」

「はいです！」

伊吹と比べると正直でよろしい子だ！

これで変な登場したり怪しげな能力使ったり、変な説明したり刀で化け物倒したりしないフツの女の子だったら、今頃俺の彼女に対する好感度はMAXだったろう。

実に登場したあたりが残念な子である。

まあそんな事は置いといて、席を外した俺は教室を出ていった伊吹を追った。

探すの大変かな〜なんて思ったが、意外にも伊吹はただトイレに行っていただけのようである。

丁度俺がトイレの前に来ると、ハンカチを持った伊吹がトイレから出てきたのだ。

「い、伊吹」

「っ……」

「ちょ、スルーはひどくね!？」

「……なに？」

やつと口を聞いてくれたよ!

冷たいお返事だったけど、さっきまでガン無視でしたからね。これはギャルゲーマーとしての直感、大きな一歩だと思う。

「あのさ、どうしてそんなに機嫌悪くしてるんだよ」

「……別に、あんたに教える必要ないでしょ」

「俺が原因なのか? そうだとしたらマジで土下座でもなんでもする、別な事でも相談に乗るから」

「……………」

伊吹の唇が微かに動いたが、俺には何を言っているのか聞きとれなかった。

でもあからさまにさっきまでの伊吹とは、反応が違った。やっぱり伊吹が不機嫌なのって俺のせいなのだろうか。

確かに覚えはないけど、無意識に伊吹が怒るようなことをしちゃったのかもしれない。
だとしたらそれはちゃんと謝らなければいけない。

「なあ伊ぶ――」

「いいじゃねえかよ？　後で返すからさ」

「だ、ダメだって」

俺が伊吹と呼ぼうとしたその時、邪魔をするように二人の声が聞こえた。

全くなんなんだよ。そう思って俺は右を向くと……。

そこにはクラスメイトの田中くんという真面目くんに集る、三馬鹿の姿があった。

「なあ頼むってえ。黒やんを怒らせん為にも」

「そうそう。僕らちゃんと金は返す主義だから」

「で、でもお」

「そういうわけだからちよいと俺に130円貸してくれよ」

うわあ、三馬鹿……いくら馬鹿でもアレはないわ。

露骨に校内でカツアゲしてるぞ。

しかも頭はいいけど気弱な田中くん相手に。

これには流石の伊吹も腹を立てたようで、なんだか先程とは違って厳しい視線を三馬鹿に向けている。

まずい……剣道部伊吹VSヘタレ元ヤン集団三馬鹿の対決かこりゃ？

「待て！」

田中くんがピンチで、伊吹が戦意を出し始めていたその時。
校内のヒーローは現れた！

「アア？」

「げ、黒やんまずいで？」

「ふ、風紀委員だ……っ」

そう、その校内のヒーローとは風紀委員。

我が校はそこそのレベルではあるが、特別校則がキツイわけではない。

髪染めもOKだし、髪型について特に規則があるわけでもない。

ただしああいふ行為に関してはかなりうるさいのだ。

「校内で露骨なカツアゲとは……2年4組の三馬鹿。これ以上の狼藉^{ぜき}は許さないぞ」

黒髪の長いポニーテールにツンとした蒼い瞳。背も高くてお胸の吉備団子もなかなかの大きさ。

しかもあのしっかりとした口調。なんかカッコいいお姉さんである。しかしあの赤を基調とし、黄金の文字で“風紀委員”と記された腕章。

それは彼女が風紀委員である証拠だ。

「ヘッ、狼藉だってよ。相変わらず俺達とは使う言葉が違うなあ。
明智さんよお？」

「黒やんあんま挑発せんほうがええで？」

「つーか狼藉ってどういう意味なんだろう？」

「さあ？」

「狼が結婚して籍入れるって意味なんやないかい？」

「お前らちゃんと日本語の勉強してるのか？　とにかくこれ以上、校内で暴れるな」

「なんだとコラッ？　金くらい誰だって貸し借りするじゃねえかよ？　世の中そういうモンだぜエ」

まずい、黒木が明智に喧嘩を売っている！

……あの風紀委員の名前は明智^{あけちなぎ}風紗。

今年春に転入し、風紀委員になった2年3組。つまり隣のクラスの女子である。

会話とかはした事がないが、噂じゃ風紀委員の中でも一際高い実力を持つ、最強の女の子らしい。

実際何度か彼女と三馬鹿は対戦した事があるが、当然三馬鹿の全戦全敗。さて今日はどうかな？

「お前達、今日も私とやるのか？」

「へへッ。チョクト、大林。いっちょこの風紀委員をギャフンと言わせてやろうぜ！」

「せやなあ。これ以上デカイ口叩かれんのも癪やしな！」

「よし、頑張れ黒やん！」

「よし、そんなあ今日は特別のストレートパンチからあああつ！」

まるで鍵の某泣きゲー原作なアニメを見ている気分だ。

勝てるわけもないのに戦いを挑む黒木。

アイツもまあ、ガタイはいいし元ヤンらしいから弱いってわけじゃないんだけど……。

明智は黒木の拳をパシッと平手で受け止める。それも表情一つ変えずに。

「なっ!?!」

「お前。いつも手、抜いてるだろ？」

「チッ……女だから今まで手加減してわざと負けてやってたんだ。調子乗ってんじゃねえぞ！」

今度はさっきよりも勢いのいい右拳だ。

アレは多分本気、というかかなりのスピードだぞ。

アレを本気で女の子に打ち込むつもりなのか、黒木のヤツ！

なんつーか、かなり慣れた感じでキレのいいパンチだ。

あんな攻撃マトモに喰らったら、下手したら鼻の骨が折れるかもしれない！

「あかん！ 黒やんついに本気出した！」

「流石にまずいって黒やん！」

他の2人が慌てている。にも関わらず黒木は本気の拳で明智を殴ろうとしている。

しかし明智は黒木の拳を……なんと寸前でひらりとかわし。気を取られた隙の出来た黒木に、なんと目にもとまらぬ速さで黒木の顎に、キックを浴びせたのだ。

「んぎゃあああああああああああああつ！」

「く、黒やあああああああああんっ！」

「うわぁ……黒やん、弱っ」

赤佐が叫び大林が呆れ、明智が後ろを向いてこの場を立ち去ろうとする。

なんだ……この地獄絵図のような光景は。

つか隣にいる伊吹も啞然としている。

……そりゃあ、喧嘩になるかも微妙なくらい一方的すぎる勝負がいきなり目の前で始まればな。

「ちょっとそこのお二人さん」

「え？」

「あ、はい」

突然明智が俺達に話をかけてきた。

考えてみれば、明智に話しかけられるのはこれが初めてな気がする。

「二人はあの3人のクラスメイト？」

「え？　ま、まあそうだよな？」

「そ、そうよ……っ」

「後の事は頼んだ。もうあいつらが何も問題起こさないように見張って欲しい」

「わ、わかりました」

「善処します……」

任されてしまったよ、三馬鹿の後の事を……。

まあそこは仕方ないか。明智はクラスが違うからな。

監視するんだったら同じクラスのヤツに任せたほうが、確かにいいだろう。

でも三馬鹿は正直監視した程度じゃどうにもならないと思うぞ。

「黒やん！　あかんで、完全に伸びてる！」

「顎蹴られれば脳も揺さぶられるよ……あゝあ、折角途中までカットよかったのに」

黒木、無残すぎるぜ……。

それにしても明智風紗かあ。

初めて話したけど、やっぱり雰囲気はカッコいいなあ。
でもよく見るとかわいい顔していたなあ。

……もしかして、アレがギャップ萌えというものなのでは？

「おーいお前ら、そろそろ授業始まるぞー！」

げ、乙坂が叫んでいるって事は、次は乙坂の現文じゃないか。

乙坂の授業は10分くらいで眠くなるほどテンポが悪いし、正直に言う嫌だ。

それにまだ俺、伊吹と何も話してないし……。

ああでもサボるわけにもいかない。とりあえず仕方がないので教室に戻ろう。

伊吹と話す機会はきつとまだあるはずだ。

第10話、風紀委員（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「やあ、久しぶりに後書きトークコーナーですぜ！」

暮葉「けーすけ様、読者に対して馴れ馴れし過ぎなのですよっ」

圭介「そっか？ お前が来る前はいつもこのノリだったけど？」

暮葉「とにかくけーすけ様も、ちゃんと敬語を覚えるべきなのです
！」

圭介「し、失敬なっ！？ 俺だってちゃんと喋れるわい！」

暮葉「ホントなのですか？ 証拠として喋って欲しいのです！」

圭介「……っ、なのですよ？ 暮葉っ」

暮葉「もきゅっ……気持ち悪いのです、けーすけ様」

第11話、光差す屋上で

4時間目が終わればお昼の休み時間である。

勉強がダルい学生にとっては唯一、楽しみな時間であろう。

お昼ご飯を食べながら友達との時間を楽しみ、色々おバカな話をする。

この俺藤島圭介も例外ではなく、いつもの奴らと飯を食っていた。

まあ今日は伊吹と小坂はいないが、代わりに暮葉という新入りさんが俺達の所にいた。

「なあ暮葉、いいのか？ 女子の友達出来たんだろ？」

そう、暮葉のヤツは早速友達を作ったのだ。

主に小坂と小坂の友達あたりだが……。

まあ転校初日にはすごい戦果だと思えますよフツーに。

「いえ、確かにそうなのですけど拙者まだ右も左もわからないので……」

「そ、そうか」

とりあえず表向きの理由はそれね。

きっとコイツの事だ。あくまで俺の護衛が任務だから、という理由が本当の理由に違いないだろう。

別にここまでベツタリでなくても大丈夫だと思うんだけどなあ。

オマケに伊吹は相変わらず機嫌悪いし。どうしたら機嫌よくしてくれるのかな……。

「それで圭介エ、転校イベント以外にエロゲーみたいな展開はあつ

たのか!？」

「ねーよ別に」

大吾にそうは答えるが、出会いイベントは確実にこれなんてエロゲ
ーだったような……。

まあそんなの詳しく答えたら、暮葉の正体がバレる可能性もある。
もしバレたら、暮葉はもちろんとして関わっている俺の日常まで脅
かされる。

ただでさえぶち壊されかけてんのにこれ以上ぶち壊されたら……。
と、とにかく俺の人生は俺が守るぞ!

「圭介に訊いてもシラを切るから無駄だね」

「重原てめっ! 別にシラ切ってねーよ!」

「ところで木下さん、圭介とはどこで出会ったんだい？」

「はい! トラックに轢か——」

そう言いかけた暮葉の口を、俺は両手で勢いよく塞いだ。

「んむっ! んんんんっ!」

「フツーに道端で会いましたよ! そんなラノベ的な展開一切なか
ったっすよ! なあ暮葉!？」

「んむんんんっんん!」

口をふさがれて暴れている暮葉さん。

スマン暮葉、仕方がなかったんだ……。

コイツらも俺の身体が丈夫な事は知っているが、流石にトラックに轢かれて無事でしたなんて言ったら多分思いきり引かれる！

俺の日常を守る為にも、トラックに轢かれたくなんてコイツらに教えちゃダメなんだ！

……まあ伊吹は例外だが。長年一緒にいるわけで、何度もああいうシーンを目撃されたからな。

「言ってほしくない出会いって……フツ、まあいいだろう。所詮は現実だ。これなんてエロゲーなんてイベントが起ったとしても、知れたものだ！」

「そうだぞ大吾！ 知れた程度のイベントだったんだ！」

「まあそこまで言っただけでほしくないなら、俺達もこれ以上追及するのはよそうか。あと圭介、いい加減木下さんから手を放してあげたらどうだい？」

「お、そうだないけねえ」

俺は彼女の口を塞いでいた両手を放してあげた。

しかし見た目以上に柔らかい顔だったな。

正直触り心地がよくて手を放す機会を失っちゃったぜ。

「もきゅうー！ いきなりなにをするのですか！」

「す、すみませんでしたあーっ！」

本当に申し訳なかったよ暮葉さん。

俺の日常を守る為には仕方のない行動だったんだ！

それから数分後。暮葉お手製弁当を食い終わった俺は、一旦一人で教室の外に出た。

暮葉はとりあえず大吾達に任せておくとして、俺はまず伊吹と話をしなければ。

もしかすると俺がわがままだけなのかもしれないけど、とにかくあんな伊吹を見るのは嫌だ。

やっぱり伊吹の機嫌が悪いのは俺のせいだと思う。小坂やその他の友達と話をしている時に見せる笑顔は、まさにいつもの伊吹そのもの。ただ俺に見せる顔はあの不機嫌な顔だ。

と言う事は、俺の事で機嫌を悪くしているのは100%間違いないだろう。

「あっ……」

生徒で溢れる廊下の中で、女子高生としての平均よりもやや小柄で銀髪の、黒リボンがお似合いな女の子の後ろ姿を発見した。間違いない、伊吹だ。

その姿を見た瞬間、俺は思わず小走りで彼女の後を追ってしまった。

「伊吹！」

名前を叫ぶと彼女は一旦止まるが、叫び声を無視するように再び歩き出す。

「やっぱスルーかい！？　ちょ、お願いします！　せめて話だけでもおっ！」

俺は伊吹の前に立ち、柏手を打ちながらお願いしていた。端から見ればかなり情けない俺。

だけど、そんな情けないことをしてでも伊吹に機嫌を直して欲しかった。

「……なに？」

「さっきの続きだよ。なんでそんな機嫌を――」

そう言いかけた瞬間、伊吹はいきなり全力疾走を始めたのだ。短距離走を全力で走る陸上部員にすら匹敵しそうな勢いである。

「ちょ、伊吹！」

なんでだよ……多分俺が悪い。

覚えはないが、今までの彼女の反応を見ていてわかった事だ。だからってこのままでもいいはずがない。

もうこうなったらジャンピング土下座だろうがローリング土下座だろうがやってやる。

とにかく伊吹の機嫌を直したい。彼女には笑顔でいてほしい。

その想いを胸に、俺は校内のどこかにいるであろう、伊吹を探し始めた。

こういう時ってギャルゲーとかだと、大体屋上にいたりするんだよね。

で、伊吹の思考パターンはまるっきりギャルゲーのヒロインそのものだった。

俺は人目の少ない屋上に行ったが、予想通り彼女は屋上で遠くを眺めていたのだ。

「伊吹」

「……っ!?!」

声をかけると、伊吹は驚いたのか一瞬ビクッと跳ね上がった。
風になびく白銀の髪、抱き締めたくなるような潤った瞳。

……ぐはっ、なにこれ。破壊力高え!

て、今はそんなしょうもない事を考える場面じゃねえだろ。

「はあ、どうして私の居場所を特定するかな? あんたってストーカーの素質あるんじゃないの?」

「ストーカーって……俺はストーカーよりもスカートのほうが好きだぞ。めくれるからな!」

「……変態っ!」

「ちょ! いつもの軽い冗談ですって! 引っ掻くな!」

人の顔を引っ掻くって、ネコさんかお前は!

でもある意味大きな一歩だ。

さっきは戯れ付く事はなく、むしろ避けられていたんだから。

「………っ」

「いや、その……ホントにごめん」

「……何に謝ってるの?」

「わからないけどわかるんだ。お前が不機嫌なのは俺のせいだって」

えーっと伊吹さん。どうしてそんな露骨に驚愕するのでしょうか？
もしかして、俺って物凄く無自覚な男だと思われていたんじゃない？……。

「……あ、あたりよっ。圭介にしては鋭いわね……っ」

俺にしては鋭いって……俺ってそこまで鈍感な男なの？

流石にここまでくると自分が悪いって自覚するよ。

ていうか最初からそんな気もしていた。

けどやっぱりか……ホントに俺は何をやっちゃったんだ。自覚はあっても覚えがないから正直困る。

「俺が悪いってのはわかっている。ただ俺が何をやっちゃったのか
わからない」

「……やっぱ圭介だわ」

「……………」

おい、今露骨に呆れられたぞ。

だから困ってるんだよ俺は。全く身に覚えがないから。

「でも、知ってる振りされるよりはマシだわ」

「いや、その……マジで申し訳ない」

「……ねえ、あんたってホントに暮葉と同棲してるのね」

暮葉と同棲？

もしかして、コイツはまだその事を引きずっているのか？

確かに伊吹は暮葉が我が家に居候すると言った時、一緒に暮らすわ

けどでもないのに一番反対していた。
だけどそれを未だに気にしていたのか。

「まあ、一応事実だよ……でも同棲ってのは間違ってる。同棲って要は二人暮らしてて事だろ？　うちには葵もいるし、正確には同居というか居候というか……そんな感じのものだよ」

「でも一緒には暮らしてるのね。それで朝は一緒に楽しそうに登校してるのねっ」

「それは事実だよ。でもなんで一緒に登校してたの知ってんの？」

「……っ、べ、別に知ってたっていいでしょ！」

待てよ、伊吹が到着したのって俺より少し前だったよな。

もしかしてコイツ、俺らにバレないようにずくっと近くにいたんじゃない。

あくまで俺の仮説だけど、もし本当だとしたら伊吹はすごい。

全く気付かなかったぜ……伊吹にもストーカーの素質があるかもしれない。

「と、とにかく……今朝それを見て同居してるのが事実だってわかって……っ、ムカついたっ」

伊吹は口を尖らせ、子供のように拗ねていた。
ていうか伊吹さん。アンタやっぱり。

「やっぱ見てたのかよ……」

「う、うるさい！　細かい事はどうでもいいの！」

また猫のように顔を引っ掻いてくる。正直に言うと顔を引っ掻かれるのは痛い。

たとえ相手が人間だとしてもだ。人間の爪だってネコには劣るが、一応切れるんだからな。

「わかったから怒るなって！」

「怒ってない！ ムカついてるだけ……っ」

「それ、世間一般では怒っていると同じ意味だと思うんですが？」

「だああもう！ 細かいこと気にするの禁止！」

いかんぞ。このままだとずっとこの調子の会話が無限ループするだけだ。

どうにかしてこのイベントを終わらせる、何かきっかけを作らないと。

とりあえず伊吹が不機嫌だった理由を簡潔にまとめよう。

どうしてかはわからんが、伊吹は俺と暮葉が同じ家に住むのが嫌らしい。

それで多分俺と暮葉は一緒に住んでいない。事実を認めたくないからそう思っていた。

だからだろう。GW中に会った時は普通に俺と接してくれていたのは、きっとそう思っていたからだ。

だけど現実はその反対。今朝俺は、暮葉と楽しそうに登校をしていた。

それで彼女はこういうわけかは知らんが、機嫌を悪くしてしまったと。

……けどそれって、多分ただの嫉妬じゃないのだろうか。
だったら解決策は一つしかない。

「つたく、そういう事なら早く言えよな」

俺は一步足を前に踏み、手を伸ばした。そのまま彼女の白銀の髪を、優しく撫でてやった。

ツンとした伊吹の目が一杯に大きく開き、触れればきつと柔らかな頬が赤く染まり始めていた。

「その嫌だっという気持ちは痛いほどわかったよ。でもお前だって事情は知ってるだろ」

「い、一応ね……信じたくないけど」

「俺だって超ぶっ飛んだ展開で、未だに色々整理したいと思ってるよ。でもアイツは転校までしてきたんだ。それにアイツ、追い出した所で居場所があると思うか？」

「そ、それは……」

俺の所に来るまで、暮葉は何をしていたのか、俺にはわからない。あの感じだと少しは日本に慣れているようだし、多分アルファ隊の仕事をしていたのだと思う。

だけど、だからってこの世界にアイツの居場所はあったのか？

俺が思うに今の藤島家こそ、アイツにとって最も安定した居場所だろう。

アイツは何も言っていないけど、それくらい俺にもわかるよ。

いきなり異世界から来た奴が、この世界のどこかに家を持っている

ハズがないんだ。

「これはさ、アイツの話が全部本当だとしてらっていう前提の話なんだけど。確かに同居までの経緯は滅茶苦茶な成り行きだったよ。でもいきなり異世界から来た奴が、自分の家を持っているハズがない。アイツにとっては俺の家が唯一寛げる場所かもしれないんだ。それに学校にまで来ちまったし、友達もでき始めているみたいだ。今更暮葉を追い出す事なんて俺は絶対に出来ない」

「そ、それは確かに……そうなんだけどっ。でも……っ」

「もちろん伊吹の気持ちだってわかったよ。それでも暮葉を追い出すことはできない」

「わかってるよそんな事は！ でも……っ」

こうして頭を撫でていると、痛いほどに伝わってくる。

きっと伊吹は不安だったのだろう。

何が不安なのか俺にはわからねえけど、きっとそうだと思う。

「……お前、もしかして暮葉に自分の居場所が奪われると思ったのか？」

「ち、違——っ！ ……いや、そうかも……っ。でも……や、やっぱなんでもない！」

なんだか今日の伊吹はいつもと違ってハッキリしない。

しかも理由を迫ろうとすると、彼女はかなり頬を赤らめ、慌てる。

何かを必死で隠しているようにも見えるが、なんとも言えない……。

「お前……何か隠してる？」

「な、なんも隠してない！」

伊吹の顔は既に、イチゴみたいに真っ赤であった。
なんだか驚くほどに必死そうだ。

「も、もういい。仕方ないもんね、暮葉にだって事情はあるし。あんたも流石に犯罪に手を染めるほど外道じゃないし。く、暮葉の身の安全の心配した私がバカだったわ！」

しかも暮葉の身の安全を心配って……。

どう考えてもアンタ、それ大ウソじゃないですか！
ていうか俺も滅茶苦茶変態扱いされとるし。

「俺、そこまで悪人に見えたんですか！？」

「こういう真面目な顔を見せなかったらあんた、ただの変態よ」

「ひでえっ！ 思春期男子がムフフな想像して何が悪い！」

「大っぴらにそういう事いうな！ この変態！」

やれやれ、でももうどうでもいいや。

正直、伊吹に変態と言われるのはもう慣れている。
むしろ俺にとって変態とは褒め言葉……げふんげふん！

とにかく、伊吹は若干自棄気味だったけど、いつもの元気な伊吹に戻ってくれた。

伊吹は怒っているように見えるけど、これは本当に怒っているとは

違う。

なんだか楽しそうである。根拠はと言われると難しいが、俺は長年こういう伊吹を見てきた。

長年見てきたからこそ、なんとなくわかるのかもしれない。

とにかく今の伊吹はいつもの伊吹だ。本当……戻ってよかった。

でも結局、伊吹は何を隠していたんだろうか。

その疑問だけが、俺の頭に残っていた……。

「圭介！」

「あ？」

「……まだ、お昼食べてない」

突然伊吹にそう言われた俺。

つまり、そういう事なんだろう。

「わかった。俺もう食い終わったけど、付き合うよ」

「そうと決まれば早く行く！」

「わかったから走るなって。食後に走ったせいで腹痛い……っ」

……太陽の光が、屋上にいる俺達を照らしている。

その光に見送られるように、俺達は校舎の中へと戻って行った。

第11話、光差す屋上で（後書き）

後書きトークコーナー

黒木「なんだこのリア充ども！？ 死ね、そして死ね！」

赤佐「とか言って、黒やん伊吹ちゃん取られるの嫌なだけやん」

大林「まあ、黒やんよか藤島のほうがいい男だしな」

黒木「うるせえチビにチヨクト！」

赤佐「誰がチヨクトや！」

大林「チビだと！？ テメエ骨へし折るぞコラァッ！」

黒木「ああ、俺と伊吹ちゃんのラブストーリー……いつになったら始まるんだろ？」

赤佐「ないわ」

大林「ねーよ……」

黒木「ひどくねお前ら！？ クソッ、絶対伊吹ちゃん攻略してやる！」

第12話、突然過ぎるぜこの展開……ッ！

そして一日が終わり、帰り道の事である。

伊吹は部活、葵は友達との用事だそうで、今この場にはいない。

今日は大変な一日だったな。伊吹の機嫌を直すだけでも一苦労だった。

意外な事に暮葉についてはそれほど手間がかからなかった。

ほとんどクラスのみんなが面倒を見てくれたからだ。

しかも本人曰く、日本には一ヶ月前からいるらしく、その上事前に調査をしてきたようだ。

通りで異世界人のわりには慣れていると思ったよ。

まあきつと、アルファ隊の仕事で日本に滞在していたのだろうけど。その暮葉は現在、俺の隣で今日一日の思い出話を語っていた。

「それですね、小坂さんってすごく拙者の家の事について詳しくかったです！」

「ああ、アイツ戦国オタだからな。ってかお前、まさか木下家について言っちゃったのか？」

「それはないですよ。それを言ったら拙者も困りますし、言うなという上からの通達もありますので！」

「そっか」

そりゃそうだよな。異世界から来た上に秀吉の子孫？

そんなふざけた設定のキャラ、ラノベでも見たことねえぞ。

異世界から来た魔法使いってのはまあ……魔法は苦手みたいだが一

応は使えた事だ。

しかも妖怪みたいなヤツも見ちまったし、それは信じてやろう。

でも秀吉の子孫ってのはやっぱり信じられない。

もし本当だとしたら、どういう経緯で秀吉或いは子供が異世界に渡ったのか、非常に気になる所だ。

いっその事、聞いて見ようか。

「暮葉」

「もきゅ？ どうしたのですか？」

「いや、お前が秀吉の子孫って話、ホントなのかなあゝって」

「んな！ 失敬な！？ けーすけ様信じてなかったのですか！？」

いや、最初から信じてねえよ。

だって胡散臭いじゃん。そもそも豊臣家って断絶したハズだから子孫はいないハズだ。

流石の俺でもそれくらいの知識はあるぞ。

「いやあ、だってそんなゲームみたいな設定どう信じろと？」

「けーすけ様はオタクだから簡単に信じると思ったのに！」

「……お前、オタクの意味わかってる？」

「はい！ 可愛い女の子の絵を見てハァハァする人の事ですよね！？」

まあ、強ち間違いではないと思うよ。

確かにオタクの中にも変態という人種がいてだな、二次元の女の子にハアハアする輩もいるよ。

でも全てのオタクがそうってわけじゃない！す、少なくとも俺は…

…。
そ、そうさ。エロゲープレイしているくらいならまだセーフだよな？
とにかくだ。暮葉のその情報は間違いなくアレだ。

「それただの偏見だろ！ 全員が全員そうってわけじゃねえよ！」

「もきゅ？ そうなのですか？」

「あたりまえだ！」

大吾は間違いなくハアハアするタイプだが、オタクの中にだって紳士的なヤツもいるんだからな。

例えば重原とか。アイツは確かにオタの部類だが、決して邪な感情は抱いていない……ハズだ。

「でも、けーすけ様がオタクなのは事実なのですよね？」

「まあ、それについては何の否定もできないんですけど……つか、なんで俺がオタだってわかったの？」

「はい！ 家では葵さんが言っていました。学校でも皆けーすけ様の事変態オタクって言ってましたよ」

「誰が変態だ失敬な！ つーか誰だ変態オタクって言った奴！」

つーか変態オタクって言われたせいなのか！？

暮葉がオタクⅡハアハアする変態だと思いこんだのは！

「えーっと、亜紀さんに森島さんに中村さんに渡辺さんに……あ！
あと伊吹さんも言っていました！」

「へー、ソーナンドスカー」

女子共めえ……つか小坂と伊吹までなに言っちゃってるんだよ。
アイツらは少なくとも俺の趣味容認してたハズだぞ。

ふざけやがって。俺は変態じゃない、仮に変態だとしても変態と言
う名の紳士だよ！

つか、小坂とはいつ名前で呼び合うくらい仲良くなったんだ？

「けーすけ様、変態なのですか？」

「変態じゃねえ！ 紳士だ！」

「し、紳士だったのですか！？」

「あ、ああ。まあな！」

YesロリータNoタッチ。女子は触るものではない、見て心で楽
しむ物等々……。

そう、俺は紳士だ。決してムフフなものを見て、デユフフとかフヒ
ヒとかキモい笑い方はしない。

そう……《恥》を感じても冷静でいられる。どんなムフフな場面で
も冷静でいられる。

それこそ！それこそが変態という名の紳士なのだ！

……ああ。俺、なんでこんなくだらん事で盛り上がってるんだろう。

「それじゃあ葵さんから聞いたのですが、けーすけ様。えっちいゲームしてるってホントですか!？」

「女の子が公の場でえっちいゲーム叫ぶんじゃありません!」

「大丈夫なのです! 拙者、別に少しくらいの下ネタなら平気です!」

「それ、女の子としてどうなんだよ!？」

やっぱりアレだ。伊吹はちょっとガード硬すぎる気もするが、小坂くらいが丁度いい。
とにかく、バンバン下ネタを言う女子ってどうかと思うんだ。

「それでどうなのですか!？ 護衛対象を知るというのも拙者の仕事なのです!」

「嫌な仕事だなオイ! やってねえから!」

まあ……実はPCの中には結構な数のエロゲーが入っているんだけどね。

オマケにエロ画像フォルダーだけで20GBあるし……。

でも、こんなのフツー女子には言えないだろ？

それを言ったら俺は破滅だ。だから紳士として、これだけは隠し通されなければならない。

……まあ、要するに思春期男子は可哀想な存在なんだよ。

「ていうか秀吉の子孫って話はどこいった!？」

「あ、そうでした! 拙者ホントに子孫なのですからね!」

「で、根拠は？」

「んん、豊臣国松って知ってます？」

「知るか！」

誰だよ豊臣国松って。豊臣おそ松の間違いじゃないのか？

いや、流石にそれはないか。とりあえず国松というのは豊臣家の人間だろう。

とにかく歴史ネタはあまりマニアックなものにはついていけん。こういう時小坂がいたら便利なんだけどなあ。

「豊臣秀頼の息子なのですよ」

「ひでより？ ひでよし？」

「もきゅ？ ……けーすけ様、もしかして歴史苦手なのですか？」

「俺はあらゆる教科が苦手だ」

「もきゅ？ にゅふふ……けーすけ様はバカなのですね！」

「そこは心が折れるから突っ込むな！」

いいですよ、どうせテストの点数赤点ギリギリのバカですよ。

別にそれでも留年しなかったし、今まで補習すら受けたことがない。ていうか俺、中学の頃はそこまで馬鹿じゃなかったんだぞ。

ただ無理して初芝という、そこそこ偏差値のある学校に入ったせいで……うん、一気に落ちぶれた。

そうやって考えてみればあの三馬鹿も、初芝に入れるだけの学力はあるのだ。

いわゆる高学歴ヤンキーというヤツだろう。まあアイツら赤点常習者だし、馬鹿には変わりないが。

「んで、結局その国松がどうしたんだよ？」

「豊臣国松は処刑された事になっているが、実際は何者かに救出され、処刑されたのは替え玉。その後国松と救出者はどこかへ消えた。それが真実の歴史だぞ」

「え？」

「もきゅ？」

ハハハ、わかりやすい説明だったよ。ありがとうございます。

でも問題はそこじゃないんだ。さっきの歴史を説明したのはもちろん暮葉ではない。

突然背後から現れた、明智風紗のような人物だった。

ところで何で明智風紗と決めつけていないか。それにはちゃんと理由がある。

確かに見た目は明智風紗その人だ。だけど……。

「明智……その服装はありえねーだろ！」

妙に短い着物だと？なんだ、このアニメに出てきそうな少し露出度の高い和装！

もしかして明智はコスプレの趣味でもあるのか！？

「もきゅ？ 誰なのです？」

「私？ 私は明智風紗って名前だから、お見知りおきを」

「それはわかってるけど、お前その恰好なに？ コスプレ？」

「お前は今日廊下で見たヤツ。もちろんこの恰好は戦闘服だぞ」

「おかしいだろ！」

ていうか風紀委員たる貴女がなんでその……ふ、風紀を乱すような恰好してるんだ。

その……なんというか。生足エロいですよ明智さん！

それにそのバスト。なんという事でしよう、男子納得のサイズだ。

正直コスプレをした明智は、普通の男なら思わず見てしまう魅力的なものであった。

「それで、何の用なのです？」

「木下暮葉だな？ 単刀直入に言う……私と、決闘しろ」

「っ！？」

「……what's？」

すまん、サッパリ意味がわからん。

まず何故風紀委員である明智が、ただの転校生である暮葉に決闘を申し込む？

もしかして、明智がキレるほどの無礼を暮葉はやっちゃったのだろうか？

「暮葉、お前何かやったの？」

「拙者は何もやった覚えがないのですよ！」

「確かにお前自身は何もしていない。でも、仕方ないんだ……」

そのセリフはなんだか意味あり気であった。

それでも意味がよくわからん。

まず明智と暮葉、戦う理由がないんじゃないのか？

「……っ！　もしかして、貴女は明智光秀の子孫なのですか！？」

「エエッ！？　暮葉さん、それは流石に妄想のレベルじゃね？」

「鋭いな、流石は豊臣秀吉の子孫……」

「マジなのかよ！？」

どういう事だ。待て、待つんだ。現実^{リアル}に吞まれるな。

冷静に今までの展開を整理するんだ。

暮葉が説明しようとしたら、代わりに突然現れた明智が暮葉の家の事を説明した。

んで、その後何故か明智が暮葉に決闘を申し込み、果てに暮葉は明智の事を明智光秀の子孫と指摘。

明智はそれは事実だと肯定し……待て待て、ありえねえだろ。

そもそも秀吉に討たれた明智光秀に子孫なんているのか？　秀吉の子孫並に存在が怪しいぜ。

「も、目的はなんなのですかっ！？」

「っ……仇討ちだ」

「天王山の……なのですか？」

「一応そういうことになるぞ」

あー、もうわけがわからん。

戦国武将の子孫だと思いこんだ方々が、何故かリアル殺し合いしようとしてるよ。

とにかくこれって止めるべきだよな。うん、そうしないと後々面倒そうだ。

「ちょっと待てお前ら！ 戦国武将の子孫とかいうガセネタで争うのやめい！」

「ガセネタじゃないのですよっ！」

「一応事実なんだけど……というか、なんでお前までいるんだ？」

なんか明智さん、今度は俺に話を振ってきたぞ。

しかも完全に俺がいちゃ迷惑なような言い方である。

そりゃあね、なんでここにいて言われても。

「仕方ねえだろ。暮葉と帰る方向一緒なんだから」

「暮葉？ お前っ、木下の何だよ？」

「何って……まあ家族みたいなもん？」

一応同じ家に住んでいるし、ご飯まで作ってもらっているんだ。

確かに暮葉曰くそれは仕事らしいが、それでも強ち間違いではない。俺も葵もなんだかんだで、家族のように彼女に接しているし。

「お、お前も……もしかして木下家の一員？」

「いや、俺は藤島って名字だけど」

「家族じゃないだろ。もしかして不純異性交遊か？」

「してねーよ！ ていうか風紀委員のお前がそれ言うとか洒落に聞こえなくて怖えよ！」

そもそも俺は告白された事すらない非モテ男だ！

そんなニヤニヤな展開があったんなら今頃ニヤニヤしてるぞ！

「とにかく邪魔だ。死にたくなかったら……今までの会話内容をすべて忘れて帰れ」

「いきなり脅しかよ！？」

「けーすけ様！ あの冗談じゃないのです、危険ですから下がってください！」

「あのなあ、展開的にお前が一番危険だろ？」

明智は間違いなく、暮葉の事をぶっ倒そうとしている。

二人とも戦国武将の子孫だなんて、今だに信じられない。

だけど明智は確かに彼女と決闘をしようとしている。

それもすっごく胡散臭い理由で。だけど、もしそれが本当の事だとしたら相当まずいんじゃないか？

だって明智ってバケモノみたいに強いじゃん？

あの喧嘩ばかりしていると噂の三馬鹿をアッサリ倒すくらいだしね。暮葉も多分刀を使えば強い。しかし暮葉は今、その刀を持っていない。

当然銃刀法に関わる問題だ。だから持ち歩くなって俺が言っという。でも暮葉は魔法少女ながら魔法が苦手だ。あんなの使われたら俺が被害を受けるかもしれないだろ！

魔法を使わないとしたら明智といい勝負、下手したら明智のほうが強いんじゃないか……ふ、不安だ！

「早く帰らないと頭を攻撃するぞ？ 打撃によって記憶をぶっ飛ばすぞ」

「絶対嫌だ！」

「なら帰れ、それから秘密を絶対バラすな」

「いや。お前が暮葉を狙うってんなら、どんな事情があろうと引き下がるわけにはいかないんだが」

一緒に暮らしている人の身が危ないかもしれないのに、引きさがれるわけがない。

それにコイツはサヴィエトの人間じゃないんだろ？

暮葉曰く明智光秀の子孫らしいし。俺は全然信じていないが、多分俺を狙っている組織とは関係ない。

だったら別に……俺が出しゃばったっていいよな。

「……っ、お前。ただの人間じゃないな？」

その時、明智の目付きが変わった。冗談のじよの字もないほど鋭い。俺はまるで、威嚇されているような気分をいつの間にか味わっていた。

ていうかさ、なんで俺がただの人間じゃないってわかったんだろう？自分では普通の人だと思ってるのに。みんな普通の人だと思ってるのに。

あ、でも常人に比べてやたら体は丈夫か。

「藤島……だったっけ？　どこか広い所に行こう」

ひ、広い所って……それって俺と戦うって意味だよな？

狭い場所ならエッチな事を期待するが、広い場所でそれはないし。そもそも明智が俺に向けているものは、好意ではなく戦意だ。

「ちよっ！　せ、拙者はどうしたのですか！？　というかけーすけ様には手を出さないで欲しいのです！」

「暮葉、下がってろ」

「もきゅ？　で、でもっ！」

「いいから」

俺は暮葉を無理やり退かし、一步前へと踏み出した。

この時、完全に俺と明智が睨み合う形となった。

どうしよう。成り行きで出しゃばっちゃったけど……正直戦う理由がない。

大義名分もないのになんで戦う展開になってるんだろう？

「あのさ、俺、出来れば女の子とは戦いたくないんだけど？」

「私はお前に興味が出たっ。正直、木下よりも」

「それで俺と戦うのかよ？」

「ここまで言っても引き下がらない上に、ただの人間にしては異様な雰囲気を放っているからな」

異様な雰囲気かぁ。そんな事今まで言われた事ないのに。

最初から変な奴とは思っていたが、やっぱり明智も真性の変人だったよ！

……でもまあ、正直明智みたいなバケモノと丸腰の暮葉を戦わせるのも気が引ける。

どうせボコボコにされるんなら、体が頑丈な俺のほうがいい。

それに、相手から敵意は感じて、それ以外のものは……。

「はぁ、わかったよ。それで気が済むってんなら……相手になってやる！」

俺がそう言うと、明智は一瞬驚いた表情になる。

本当に俺が喧嘩を買うとは思っていなかったのだろう。

しかし彼女は俺の真剣な顔を見ると、本人も真面目な顔になり、コクリと首を縦に振った。

第12話、突然過ぎるぜこの展開……ッ！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さてさて、今日から皆がどんなヤツか見て行くぜ！　と、いうわけで最初は俺な」

伊吹「バカ、変態、オタク、鈍感、脳の99%はエロで出来てる最低男」

圭介「……なにこれひどい」

小坂「あはは、ごめん……あたしも伊吹と同じ」

圭介「俺いいとこないじゃんっ！」

暮葉「そ、そんなことないですよ！　けーすけ様にだってきつと……っ」

圭介「思いつきり言葉詰まってんじゃねえか！」

伊吹「まあ、焼きそばだけはおいしいわね」

圭介「そこだけ褒められてもうれしくねえっ！」

小坂「そういえば圭くんって友達少ないよな。なんで？　カッコいいと思ってるのか？」

圭介「それクールとか思ったら大間違いだぞ！　悲しい所なんだか

らな！」

暮葉「けーすけ様っ、ふぁいとなのです！」

圭介「……もう嫌っ、こんな現実！」

第13話、魔法使いではない者

初芝高校からわりと近い場所に、古宇坂中央霊園という墓地がある。その墓地、規模はそれほどの大きさではないのだが、霊園の前は結構な広さの荒れ地が存在する。

霊園自体お参りに来る人も少ないし、近くに工事現場があるが近頃何か事情があるのか、全く工事をしていない。つまり人目を気にする必要もないし、戦闘するには十分なスペースが確保できるのだ。

俺ら3人は今まさに、古宇坂市内に存在するその荒地にいるのだ。

「け、けーすけ様。元々木下家と明智家の問題に、けーすけ様は関係ないのでから……っ」

「わかったわかった。とりあえず手出し無用だ」

大丈夫だ。何も明智は一般人を殺すつもりはないだろう。それに俺なら少しくらいボコられる程度なら平気だ。
あの三馬鹿があのだザマだし、勝てるとは思えないが……。

「一応警告しておく。私は戦う時……普段の私よりも強い」

「言ってることがサッパリ意味わかんねえけど……俺も少々殴ったくらいじゃ倒れないからな」

そう言っただけはゆっくりと、拳を構えた。

あんなに丈夫な俺でも、頭を強打したら時々気絶くらいはしてしまう。

だからそれを防げるよう、頭をガードできるようにしっかり両腕

を上げた構え。

ハッキリ言うとな俺は格闘技経験なんてないド素人。しかしちよつとした事情により喧嘩の経験は多い。

前にも言った気はするが、これでも俺はズブの素人じゃないのである。

「……ふうん、藤島。喧嘩には慣れてるのか？」

「なんでそんな事わかるんだよ」

「構えと雰囲気を見れば大体わかるだろ？」

「お前はプロの格闘家か！」

確かに絶対勝てなさそうな相手なら素人でもわかるよ。

でも微妙な実力を見抜くなんて、素人にはできねえよ！

やっぱり明智はバケモノだ。さて、どんな武術を使ってくるんだ？
きつとそこの武術とは違うだろう。まさか軍隊が使うようなもの
使ってくるんじゃない？

「格闘技？　確かに習った……でも私は違う」

「はあ？　まさか三馬鹿をアッサリ倒す実力持ってて、実は素人とか言う気なのか？」

「素人でもない。私は……」

多分この時だろう。明智が本当にオカシイ奴だって確定したのは。
そこまで言いかけた後、明智の掌がぼんやりと光る。

その時点でも十分におかしいと思ったのに、今度は突然掌が轟！と

爆発したのだ。

「な、なんだそりゃっ!？」

掌の上で燃えあがるオレンジ色の炎。

確かに大した大きさではない。例えるならサッカーボール程度の大ききの火の玉である。

ただ俺はそれでも信じられないんだ。だって、常識的に考えてあんなのオカシイじゃん!

どうして明智はライターも何も持っていないのに、いきなり火を起こせたんだよ!

もしかして、明智も暮葉と同じ魔法使いで、あの意味不明な炎は…!!

「お前っ、それは魔法か!？」

「けーすけ様! 明智殿からはほとんど魔力を感じないのです! あれ、多分魔法ではないのです!」

魔法ではないって……じゃあ他になにがあるんだよ! 魔法はとりあえず信じてやるよ。滅茶苦茶だったけど暮葉も使えたし。

でも今の所魔法以外のものは全く信じられない。

結局アレは魔法じゃなかったら、一体何の力なんだよ!

実は人の錯覚を利用して科学的に騙す、マジックとか言うんじゃないのか?」

「ねえ、超能力って知ってる?」

「ちょ、超能力? とあるラノベじゃ良くでてくるけど……」

「私もいつ自分に発現したかわからないんだけど、でも便利な力だぞ」

緊張が、このあたりを支配する……。

超能力とかいうワケのわからないもの。

ぶっちゃけ魔法と区別のつかない能力。チカラ

でも、何より……あんなのを明智が使えるって、チートじゃねえか！
俺は今まで戦いと言っても、そこらの不良しか相手にしたことがないんだぞ！

なんでいきなりこんなのと戦わなきゃいけないんだよ。俺はそげぶの人じゃねえんだぞ！

「なんたって、こうやって投げつけるだけで……攻撃できるんだから！」

明智は余裕そうな笑みを浮かべながら、オレンジ色に燃える火の玉を俺に投げつけてきた。

それはまるで、野球ボールを投げるようであった。

ただ投げつけるものが、野球ボールよりも大きく、そしてボールではなく火の玉であるというだけ。

そして一回投げられた火の玉は、時速100km/hは超えるスピードで俺に向かってきた。

「けーすけ様！」

「くっ！」

気分は第二次世界大戦時のレジスタンス。これほどのスリル、感じたことがない。

まさに新感覚スリル満点！……って喜んでる場合か！

とにかくあんなの喰らえばフツー死ぬ。いや、死なぬにしても病院送り確定だ！

こんな体質なせいか、俺は火傷にも強い。でも火傷はただ殴られるよりも痛いから嫌じゃ！

——そんな事を考えている間に、俺は何故か右へ跳躍していた。

きつとそれは本能だ。俺は反射的にあの火の玉を避けていたのだ。もちろん火の玉が地面に着弾する。刹那、火の玉は爆発を起こした。吹きつける熱風に衝撃波。俺はそれに押され、5 mほど吹っ飛ばされてしまった。

「くそっ！」

地面に体を打った時の痛みに耐え、俺は立ち上がる。

「遅いっ！」

だが俺が行動に移った時には、既に明智は俺の目の前。

そして明智が放つ廻し蹴り。綺麗な弧を描く右足。鋭く華麗な一撃。明智は俺のこめかみにソレを打ち込んできた。

「あ——ッ!？」

声にもならぬ一声を俺は放つ。

そのまま立ち直る事もできず、勢いをつけたまま荒地に倒れてしまった。

「っ、強い……っ！」

耳はしっかりと聞こえる。暮葉の叫び声がよく聞こえる。それよりも目まいがするな。いかん、今の一撃で軽く脳震盪起こしたかも。

三馬鹿を倒した時とは動きがまるで違う。これが明智の本気かよ……。

だけど、所詮は人の攻撃だ。トラックに轢かれて無事な俺だぜ？これぐらいの攻撃でダウンしちゃうほど……俺はヤワじゃない！ようやく目まいもなくなったことだし、痛みも殆ど消えた。俺はゆっくりと立ち上がり、明智を睨みつけた。

「驚いた。あの馬鹿くらきに放った蹴りよりも強くやったのに……」

「アホ！ そんなもん同級生に打ち込むな！ 殺す気か！」

「やっぱり、ただの人間じゃないんだな……お前」

「そんなの関係ねえよ！ 風紀委員の癖に危なっかしいヤツだな！」

そもそも、どうして超能力者が存在しているんだよ。

アレって大体嘘つきの詐欺師だと思っていたが……。

それを言っちゃ魔法使いも怪しいが。

「さて……そろそろ本格的に行くぞ。そしてお前の記憶を消す！」

「消されてたまるか！」

明智が両手首を合わせて手を開いて、体の前方に構える。

腰付近に両手を持っていきながら炎を作り出し、両手を完全に後ろにもっていくと、再びサッカーボール程の大きさの火の玉が、手の

中で激しく燃えていた。

「波！」

両手を一気に突き出し、柱のような炎が俺へと迫ってくる。

「かめはめ波かよ！？」

そうは突っ込んでみたが、アレは炎だ。似たようなものだけど、多分かめはめ波ではないだろう。

このままだとマズイ。あんなのに当たったら大火傷。いや、死ぬかもしれない。

とにかく俺は発火能力パイロキネシスによって放たれた、あの攻撃を避ける為に左へ跳躍する。

ギリギリ、まさにギリギリであった。

体に激しい熱を感じる。それはあの炎が本物であるという証だ。

「トドメ！」

明智はいつの間にか間合いを詰めていた。

さっきと同じように、避けて油断している俺を攻撃するつもりなのだろう。

だけどなあ、考えが甘いぜ。

「二度も同じ手に引っ掛かるかああ！」

突き刺さるような右ストレート。明智は正確に俺の頭部を狙っている。

だけど言ったら。二度も同じ手には引っ掛からないと！

反射的に両腕を出し、その攻撃から頭部を守ってみせた。

しかしなんちゅー威力じゃ！防いだ腕が痛えよ。でもマトモに喰らうよりはマシだろう。

「ふっ！ はっ！ ふんっ！」

その後、次々と振られてくる拳に脚。

そのどれもが修業を積んだ空手家のように素早く、鋭く、キレがいい。

クソッ、流石と言わざるを得ない。避けるだけでも精一杯だ。

「素晴らしい反射神経だけど、避けるだけでは状況が悪くなるぞ！」

「くっ！ くそっ！」

確かに、このままだと必ず一発は入るだろう。

そして明智は一発で崩れた俺をさらに追撃してくるハズ。

そうになると逆転の可能性はなくなってしまう。早くなんとかしないと！

でも、こんな強い奴相手にどうしろってんだよ！

「波あああっ！」

「ぐあっ！」

射抜くようなボディブロー。

腹部を貫くような痛みに、一瞬呼吸が止まる。しかも前に倒れ込んでしまうそうになった。

でも明智に負けるという事は、今までの記憶すべてを失うのと同じ意味なんだ。

そんな結末俺は望んじゃいねえ。何よりこんなくだらない戦い、早

く終わらせたい。

何より俺が負けたら暮葉に合わせる顔がない。アイツは俺を守る為にここにいて言うって言うていたんだ。

もし俺の身に何かあったら、アイツはアルファ隊で……だから俺は負けられない。

その気持ちがあったからこそ、俺は今の攻撃を踏みとどまって堪える事ができたんだ。

「んぬっ！」

「っ!？」

既に明智の右拳は俺の顔面前だった。

そんなの避けれるわけもなく、モロに喰らってしまったが……。

それでも俺は、左頬に当たっている拳を気合いで押し戻してゆく。

「っ！」

拳が完全に押し戻されるのを防ぐ為、明智はグリグリと右拳を俺の左頬に押し付けてくる。

痛エ……久しぶりに人の攻撃で痛いと感じた。

でも、これで負けるわけには……いかねえんだよ！

「う、ぐうおおおおおっ！」

「ぐっ！ ふ、藤島っ！」

「これがテメエの……ッ！」

そう言いながら、明智の拳を右手で振り払い。

「限界だあっ！」

叫び、歯を食いしぼる。俺は力の限りのヘッドバットを彼女にかました。

「うっ、ああっ！」

「ぐっ、いつてえ〜！」

滅茶苦茶頭痛い……明智の奴、女の子なのになんて石頭してるんだ！
だけど決死の頭突きにより、明智は後退りした。それはつまり、俺との距離が離れたという事。

しかも彼女は今の攻撃で痛がっている。そう、隙が出来たんだ。もちろん俺はこの隙を逃さなかった。

でもなあ、流石に女の子の顔面殴るなんてできないし……いや、頭突きの時点で最低だと思うけど。

それでもグーパンはしたくない。そういうのはそげぶの人がやってりゃいいんだ。

そうだな……こういう場合、俺は！

「うああああああああああっ！」

要するに動けなくすればいいんだ。

「んっ！」

だったら……押し倒すのもアリだよね！
だから俺は一気に駆けだし、勢いで彼女に掴みかかって押し倒した

のだ。

「うっ……」

下から苦しげな声。

俺は今、彼女を押し倒してマウントポジションを取っている。

この体勢だと彼女は行動不能。戦いの主導権は俺が握っている。

……勝った、黒木が何度やっても勝てなかった明智に……俺が勝った！

それにしてもこうして明智を見ていると、やっぱり明智も女の子だなあ。

綺麗な肌、整った顔、美しく蒼い瞳……やべえ、可愛い。

それにこの弾力ある女の子特有の感触が——あれ、ちょっと待て。この感触って？

「こ、これは……っ！」

なんということでしょう。なんと俺の右手が神聖なる女の子のお胸に……。

「……エエッ！ こ、これなんてエロゲー!？」

思わずそう叫んでしまうような、幸運なのか不幸なのか判断に迷うイベントが……。

そもそも、なんでわたくしの右手が、ふにゅふにゅとした乙女の左胸に？

ちよつと待て。考えようによっちゃあ嬉しいイベントだけど、まずくないかコレ!？

「け、けーすけ様……っ」

「待て暮葉！　こ、これは違う、違うんだ！」

いかん、暮葉が露骨にどん引きしている。まずいぞ、早く手を放さなければ！

いや、でも……なんだろうコレ。すごく……揉みごたえあります。明智のナイスなおっぱい。俺らの夢が詰まった二つの膨らみ。

多分赤ちゃんの頃お袋のを触ったのを除けば、これが初めて触る他人のおっぱいだ。

ああ……おっぱいってここまで素晴らしい感触を持つものだったのか！

「……おい」

「ひえっ！？　は、はい！」

……あ、明智の口から放たれた一言がなんか怖い。
低く掠れたハスキーボイス。

大噴火でも起こしそうなくらい不機嫌な顔。

「いつまで触ってるんだ、この変態っ！」

その時、ついに明智山が噴火してしまった。

「ぎゃああああああああっ！」

下から放たれる、アッパーカット。

ダイナミックなその攻撃を喰らった俺は、気付いた時にはお空を飛んでいた。

ハハハッ、ボク飛んでるよハハハ……って喜んでる場合じゃねえ！

気分は落下傘が開かなかった空挺兵。

こんな状態で受け身が取れるハズもなく、俺は頭から地面に突っ込む。

「んぐっ！ ふんぐぐぐっ！」

うあああああ！

か、顔が、首から上が土に埋まってもうたあああ！

「ふああふいゆふえふえ（たすけてえ）！」

ああ、いかん……窒息死してしまいそうだ。

幸せだったのは、ホントに一瞬だけでした……。

第13話、魔法使いではない者（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は暮葉だな」

暮葉「もきゅ？ 拙者ですか？」

葵「クーにゃんは明るくて面白い人だよね！」

圭介「ただのアホなべったんこだけとな」

暮葉「んな！？ 失敬！ 失敬です！ 拙者はちっちゃくないですよ！」

葵「お兄ちゃんは美乳派だもんね。ほら、葵の胸はお兄ちゃんのだストライクだと思うよ！」

圭介「ただの妹には興味ありません。二次元の妹を連れて来なさい」

葵「なっ！？ ぐぬう……こうなったら葵も二次元の妹に敵うくらい、立派な妹キャラになってやる！」

暮葉「もきゅ？ にじげんのいもうと？」

圭介「暮葉もいつかわかるさ……現実の精度の低さにな！」

※結論…暮葉は純粹、だが圭介はダメ人間である。

第14話、そういうわけだったのですね

「参った……藤島がこんなに強いなんて、一瞬たりとも思わなかった……っ」

「いやあ、戦いをやめてくれるんらいいよ。いいんだけどさ……」

明智との戦いに勝利したはいいが、ちょっとした事故で土に埋まってしまった俺。

あの後暮葉が俺を助けてくれたんだ。大根を引きぬくような感じだな。

そして現在、明智が俺に対し、降参宣言をしている。

そこまではいいんだ。ホント、そこまでは完璧だった……問題は。

「どうして俺を縄で縛ったんですか!？」

暮葉がそこらへんで拾ったと言う丸太。それに俺は縄で縛られているのだ。

今の俺はとても勝者とは言えない、超無様な姿であろう。

「変態は縛るべしって、私は教えられたぞ」

「誰が変態じゃ! 暮葉、助けてくれ! 護衛対象が拘束されてますよ!？」

「拙者も明智殿と同意見なのです。けーすけ様は少し反省するべきだと思おうのです!」

「アレは事故ですって！ 決して邪な感情があったわけではないですよ！」

でも明智のお胸の吉備団子。素晴らしい弾力だったなあ。

「けーすけ様！ 顔がニヤけてるのですよ！」

「ソ、ソシナコトナイスヨ！？」

「やっぱり、藤島はただの変態だっ！」

「だあゝから事故だって！ いい加減俺を解放してください！」

殴られるのと押し倒されるのだったら、誰だって押し倒されるほうがマシじゃ！

顔面が血だらけになるよりは遥かにマシなハズだ。

その際に起きた、いわゆる不幸な事故なんだよアレは！

「変態だと認める。じゃないと火刑にするぞ？」

「お前が言うとは冗談に聞こえねえ！」

正直縛りがキツすぎて痛いんだが。

しかも明智に超能力で火刑にされそうだななんて……。

窮屈極まりないぜ。気分は火刑に処されるジャンヌ・ダルクだ。

「けーすけ様、やっぱり変態だったのですね……っ」

「コラそこ！ 哀れな目で人を見るんじゃないやあ！」

「明智殿！ けーすけ様は一応皇族なのです。ですから処刑の際はギロチンでっ！」

「そんなもの用意できないなあ。よし、この変態は名誉ある銃殺に処そう！」

「二人揃って怖い事言うな！ 暮葉も護衛対象を殺そうとするな！」

その後、死にそうになったり、「変態」と明智に罵倒され続けた事は言うまでもない。

しかも時間にして30分。なにこれ、新手のSMプレイですか？

だけど俺はマゾヒスト君じゃないし、ちっとも嬉しくない！

それどころか……何度か生命の危機を感じましたよ！

危なく俺は、ジャンヌ・ダルクの如く、焼き殺される所であった。

だけど俺が解放される事はなかった。相変わらず縄で縛られた状態で会話は続けられた。

「んで、結局暮葉や俺を襲った理由ってなんなんだよ？」

「……藤島は興味。木下は父の命令だ」

「もきゅ？ お父様の命令なのですか？」

「俺は興味だけで攻撃されたのかよ……っ」

「そう。私自身木下には何の恨みも持っていない。あと藤島はホントに興味があったただだよ」

「……………」

このクールな風紀委員の女の子、ガチで言ってるやがる。

もうなんだか泣きたくなってきたよ。もう泣いてもいいかな？

だけどこの状態で泣いたら、流石に情けなさすぎるか。

というかいつ解放されるんだろう、俺？

「私は本当に明智光秀の子孫らしいんだ。父は二週間前に木下を発見し、秀吉の子孫だと直感的に思ったらしい」

「もきゅ！？　すごいですそのお父様！　確かに拙者は秀吉公の子孫なのです！」

俺には信じられないが、一応そういう事にしておこう。
もう考えるのが面倒になってきた。

でも本当におかしいぜ。豊臣秀吉の子孫が異世界人な上に魔法使い？
明智光秀の子孫が風紀委員で超能力者？
一体どこのレベルから出てるラノベなんだよ。常識的に考えてありえねーだろ。

「それで父は突然、私に木下暮葉抹殺を命じたんだ……っ」

「……やっぱり、天王山の仇なのですか？」

「おそらくそうだと思う……っ」

明智は相当悔しそうな表情をしている。

勝負に負けたからなのか、何かを思い出して悔しんでいるのか。

それはわからない。でも彼女は歯を食いしばり、目をつり上げ俯いていた。

おそらく彼女は本当に殺すのが嫌だったのだろう。
だとしたら、なんで俺達と戦う必要があったんだ。なんでそんな命

令引き受けちまったんだよ。

「本当は嫌だったのはわかった。だったらなんで命令のままに動いたんだ？」

俺がそう訊くと、明智がいきなり口を大きく開き。

「仕方なかったんだよ！ 父は普段はそんな人じゃなかったのに……私を暴力で脅した！ 私の力じゃまだ父に抵抗はできない。だから動かざるを得なかったんだっ！」

叫ぶように真実を明かしてくれた。

明智でも抵抗できないって……どんな親父さんだよ！

あれほどの強さを明智は誇っていたのに、それ以上って……信じられねえぞ。

……明智はさらに言葉を続ける。

「だから私は木下の所に行って、戦う事にした……っ。実力を試す為に！」

「もきゅ？ 拙者の……実力ですか？」

「もし木下が強かったら……共闘すれば……父に勝てたかもしれないかったからっ」

共闘すれば勝てる。うん、実に少年シャンプ的な話だ。

だけど確かに2対1なら、絶対人数の多いほうが有利だろう。

だから明智は態々悪役になりきって実力を試し、実力を知って共闘しようとしたのか。

明智は風紀委員。成績も優秀だって噂だ。だけど、それなのに……。

「お前って意外と馬鹿だったんだな」

「っ？　へ、変態に言われる筋合いは——！」

「そういう話なら、最初から戦わねえで相談すりゃよかったろ」

俺の言葉に、明智の動作は止まってしまった。

だけどすぐにジト目になり。

「……超能力なんてハナから信じてなかったのか？」

「うっ……で、でも暮葉は魔法を使える！　証拠さえ見せてくれれば……ほ、ほら今は信じてるぜ！？　あの炎のせいで焼死するかと思っただからな！」

「魔法？」

俺の怪しげな言葉を追及されると思ったが、どうやら彼女は魔法という言葉に興味を持ったらしい。

そりゃ超能力と魔法は違うらしいからな。とあるラノベによると。

……実際似たようなもんじゃね？　と思っているが、まああえて突っ込まない事にしよう。

「ああ、暮葉は超能力は使えないが、魔法ってものを使えるんだ。一度使用したら大惨事だけど」

「もきゅうっ！　けーすけ様、まだ魔法で人殺しはしてないのですよ！」

「俺が死にそうになっただろ！」

だって スーパーフォートレス 超空の要塞こと、B-29もビックリな高高度までぶっ飛ばされたんだぜ？

もしアレが俺以外の別な奴だったら、もうお見せできない姿になっていただろう。

とにかく俺でよかったよ……いや、全然よくないけど誰かが死体になるよりはマシだ。

と、そんな事を考えていた時。明智が口を動かし始める。

「……でも、相手の実力を知りたかったからっ」

「相手の実力か、別にそんなのどうでもいいじゃねえか」

「お前は父の実力を知らない！ だからそんな口が叩けるんだ！」

確かに、俺はコイツの親父の実力を知らない。

だからこそ言えたというのも、あるかもしれない。だけど……。

「そうじゃねえ！ 協力して欲しいんなら最初から言えればいいって話だよ」

「だけど……っ」

「実力なんて後からでも試せただろ？ 全く、敵だって誤解しちゃうたじゃねえか」

それがなかったら最初から明智の事、敵だなんて思わなかったのに。最初から協力する姿勢でいられたのに。

実力なんて、それから知って行けばよかったんだ。

「わ、私は……敵じゃないのか？」

「はいっ！ 事情はわかりましたので！」

「それにお前、風紀委員だろ？ だったらある意味風紀を乱しているその親父さんを、とっちめに行こうぜ！」

そんなセリフを言ってみた。

すると明智は、少しだけ表情を穏やかにし。

「……ありがとう」

その一言を言ってくれたのだ。なんだか初めて見た気がするなあ。

あのカッコいい雰囲気の明智が、素直にお礼をするシーンを。

何より、こんなに 女の子らしい表情の明智を……。

だけど、まだ何もかもが始まったばかりだ。

おそらくここからが大変なんだろう。だけど苦しんでいる明智を放ってはおけない。

だから必ず親父さんに会って説得してやるよ。もう暮葉を狙うなつて。

それから——実の娘を暴行するなつてな。

「……ところで、そろそろ縄解いてくれない？」

「それは嫌だ、変態藤島」

「そうですね。けーすけ様、もう少しだけ反省しましょう！」

「誰か助けてくださあいっ！」

結局この後30分くらいは縛られたままであった。
そして、危うく緊縛プレイに目覚める所でした……。

第14話、そういうわけだったのですね（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は伊吹！」

暮葉「伊吹さんって可愛いですよね！ 羨ましいのです！」

伊吹「そ、そんなっ！ 褒めたって何も出ないわよ……っ」

圭介「まあデレのないツツパリだけだな」

伊吹「ツツパリ言うのやめい！」

圭介「いいか伊吹。ツツパリじゃあ誰も見てくれねえぞ。せめてツンデレになれ！」

伊吹「誰がツンデレじゃばか圭介っ！」

圭介「べ、別にお兄ちゃんの為じゃないんだからねっ！ くらい言わないと、ツンデレには永遠になれないぜ？」

伊吹「言うかバカッ！」

圭介「ちょ！ し、竹刀らめえっ！ ごぶるあっ！？」

※安全な竹刀を使用しております！

第15話、決戦前日

あの後……明智を途中まで見送った俺達は、二人で我が家に向かっていた。

なんだか成り行きだが、明日明智家に突撃をかける事になったのだ。なんという急展開。しかし後悔はしていない。

アイツ、真剣に悩んでいるみたいだな。

「けーすけ様、ホントに明日行かれるのですか？」

「そりゃあ、行くしかないだろ？」

だって、そこには困ってる女子。いや、困っている人がいるんだ。

日本男児としてそれは当然放っておけない。

昔からそうだった。アイツも俺も小さかった頃から。

すべての始まりはアイツの為に、俺は……。

「……けーすけ様？」

「お、おう！」

「どうかされたのですか？」

「いや、なんでもない。それより明日はお前も来るのか？」

「あ、あたりまえなのです！ けーすけ様をしっかりと護衛するので。それに明智殿の問題には拙者の家の事も絡んでいるのですよ！」

「そうかっ」

そういえばそうだったな。明智の親父さんが、暮葉を抹殺しろって命令したのが原因。

暴力で脅された明智はそれに従うしかなかった。

だからあんな騒ぎになってしまったのだろう。

俺は未だに、二人が本物の戦国武将の子孫だなんて信じられない。ただしそう思いこんでいる家庭は小坂曰く、現代でもいくつかあるらしい。

きつと暮葉も明智家もその類の家庭だろうと、俺は思っている。

だったら騒ぎを解決する方法は一つしかない。その親父さんを説得し、木下家と和解させる事。

互いに因縁がなかったとしても、そう思いこんでいるせいで自然と因縁が生まれている。

だからその状態を無くす為には、そういう事にしておいて和解させるしかないんだ。

「そういえばけーすけ様、たくさん打たれましたけど大丈夫なのですか？」

「ん？ ああ、全然平気だよ」

「でもでも！ あれ、普通の人なら大怪我なのですよ！？」

「高高度まで吹っ飛ばされて落下した時のほうが痛かった。言ってなかったっけ？ 俺こうみえても頑丈なんだよ」

「頑丈……？ 確かにけーすけ様、普通の人より打たれづよいのですけどっ」

ああ、やっぱり暮葉のヤツおかしいと思っているな。

そりゃそうだ。俺でさえおかしいと思っているよ。自分の頑丈さにはな。

トラックに轢かれても死なない。高高度から落下しても死なない。伊吹に殴られようが明智にこめかみを蹴られようが、別に大した事がない不思議な体。

オマケに怪我の治りまで早い。俺の身体……一体どうなってるんだろう？

……まあいいか、考えた所で無駄だからね。それにこの体質はある意味で便利だし。

「それより暮葉、今日の晩御飯は？」

「はい！ 本日は拙者が日本に来て初めて学んだ料理、焼き魚をやってみたと思うのです！」

「思いつきり和食だなあ。一ヶ月の間に随分学んだな」

「はい！ 色々ありましたのです！」

「色々ってなんだよ！？」

なんか犯罪臭がするんだけど、そう思ってるのってもしかして俺だけ！？

……と、こんな感じで俺達は、楽しく会話をしながらmyホームへの帰路を歩いていた。

その後、ようやく到着した我が藤島家。

もう日暮れだ。きっと葵は帰ってきているだろう。

アイツはなにをしてるのかなあ。今朝から色々な事がありすぎて、

アイツと会うのが久々に感じるよ。

ま、葵の事だ。きつと一人でもうまくやっていたのだろう。

鍵は……開いている。という事はアイツいるな。

鍵を取りだすのも面倒な作業なのだが、わざわざ開ける必要がないのは俺としても少し助かる。

というわけで、俺は自宅の扉を開けた――

「ただい――」

「お兄ちゃんにお兄ちゃんお兄ちゃーんっ！」

瞬間、m y・シスター葵たんが飛びかかってきたのだ。

おおすごい、まるでV2ロケットがロンドンを狙うようだ！

って、呑気な事言ってる場合じゃねえええええっ！

「おおおわあああああああっ！」

全く準備が出来ないなかった何の対処も出来ず、妹の思うがままに押し倒されてしまった。

その上、マウントポジションまで取られてしまったぜ。

どうしよう。葵が乗っかっているせいで全く身動きが取れん！

しかも後頭部を打ってしまった。正直痛いぜコレは……っ！

「えへへっ、おかえりお兄ちゃんっ。あと暮葉さん」

「た、ただいまなのです……っ」

ほら、暮葉が困っているじゃないか。

あと葵さん。一つ問いたい事があるんだ……。

「顔を胸にスリスリさせんな！ 胸を圧迫するな！ つーか降りてくれ！」

「んんゝっ！ だって、葵の中のお兄ちゃん分が不足してるんだもん！」

「なんだよお兄ちゃん分って！？」

「とにかく今補給中なの！」

「ちょ、降りんかい！ ヨスガるのは二次元だけでええわ！」

ヨスガる。それはとあるアニメから生まれた言葉である。

まあ具体的な内容はアレだ。実の兄と実の妹とがあゝんな事をするって事ですよ。

だが、常識的に考えてそれは色々と問題だ。

いくら俺でも超えちゃいけない壁は超えないの事ですよ！

「もうヨスガっちゃおうよ、お兄ちゃん！」

「するかあっ！ そういうのは好きな人とするもんだっ」

「葵はお兄ちゃんLOVEだもん！」

「そういう歪んだ愛はいらねえっ！」

葵は妹だからそういう対象になってたまるか！

藤島家の近所での評判ガタ落ち。

いや、下手したら学校も停学或いは退学かもしれん。

……とにかく、世間とは兄×妹という組み合わせに冷たいものなん

だ。

そもそも実の兄だからこそわかる、妹には決して芽生えない感情というものもあるのだよ。

とにかく、ヨスガるのは二次元のみで十分だぜ。俺、二次元だったら兄×妹もアリだと思うんだ。

その後、色々あって晩飯を食い終わり、俺は自分の部屋に戻った。やっぱり落ちつくよねえ、myルームってさ。

この時々うるさいPCの音、本棚に並ぶ漫画やラノベ達。そしてこの棚に隠している、エロゲーや同人誌達……げふんげふん！とにかくmyルームは最高だ。俺が一番落ちつける俺だけの空間である。

……まあ、時々葵や伊吹。最近は暮葉も侵入してくることがあるんだけどな。

しかし明日が決戦だとはとても思えないぜ。明日、どうなるんだろうなあ。

もし親父さんと戦う事になったらどうしよう？

そりゃあそうになったら、もちろん俺は明智や暮葉を助けようとするけど。

……でもなあ、面倒くさいじゃん戦うの。とにかく会話だけですべてが解決するのを祈ろう。

そうなればこの拳で、誰かを殴る必要なんてなくなるんだからな。とにかく、決戦は明日である――

「……んっ？」

その時、俺の携帯が振動している。

携帯電話を開くと……電話か、しかも国宗伊吹という文字が表示さ

れている。

こんな時間に何の用だろう、伊吹のヤツも俺と電話だなんて暇だなあ。

とにかく伊吹からの電話だ。出なければまた機嫌を悪くしてしまうだろう。

「もしもし？」

『あ、圭介っ』

「どうした、暇なのか？ それとも俺が恋しいのか？」

『ち、違うわバカっ！』

いやいや伊吹をいじるのは面白いぜ。俺の趣味の一つでもある。もちろんいやらしい意味じゃないぞ？

最近俺Ⅱいやらしいという図が出来つつある。こういう事だ、俺は紳士なのに！

「じゃあ冗談抜きにどうしたんだよ」

『……来週からの事よっ』

「来週？ 何かあったっけ？」

来週は確か、生徒総会というかったるいものと、スポーツテスト・身体計測があったな。

クソッ、前者は寝れるからいいとして、後者は野郎の近くにしかいないから本当に嫌だぜ。

『来週って、あんた行事予定表とか見てないの?』

「全然見ねえなあ。でも大体は覚えてるよ」

『い、意外ねっ』

電話越しからでもわかる。コイツ、笑ってやがる。

そこまで馬鹿にされるほど、俺って記憶力悪い事になってんの!?!
まあここは、大人の対応としてスルーの方向でいこう。

「ごほんっ! で、結局何の話だっけ? 今なら生徒総会で先生に
バレずに寝る方法と、あと身長を1cmくらい高く誤魔化せる方法
も話すぞ」

『ぜ、前者は別にいいけど後者は教えて!』

「さりげなく背伸びしろ! 以上!」

『うわっ……期待した私が馬鹿だった……っ』

「なんだ? それやって怒られた事でもあんのか?」

『う、うっさい!』

背が低い事を気にして、地道な努力をしている女の子……。
な、なんて萌えるんだ! これが二次元なら俺の嫁確定だ!

きつと伊吹は今、顔を赤く染めていることであろう。
こういう時折見せる姿が人気なのか、伊吹は結構野郎にモテるのである。

まあ確かに伊吹は顔も可愛いし、野郎ウケするのは当然だと思うん

だが……。

それでも伊吹は未だに男がいない。というか告白されても断っているらしい。

なんでだろう？俺とは違って恵まれているのになぁ……。

「つで、結局本題なんだったつけ？」

『そ、そうよ！ あんたが変な事言うから忘れてたでしょ！』

「俺のせいだよ！？」 全く、圭介さんの知恵袋を聞けただけでもありがたいのに……っ」

『yohoo知恵袋のほうがまだいいわよ！』

……yohoo知恵袋って有名だけどさ、確か真面目に答える回答者いなかったよね？

アレと比べたら俺の知恵袋の方が、100倍足しになると思うんだけどなぁ。

まあいいか、下手に褒められても正直照れるだけだからな。

『圭介の家に暮葉が住む事になったでしょ』

「ああ。アイツなら今多分葵とゲームしてるぜ？」

どうやら葵がPNPを紹介した結果、暮葉はそれにハマッてしまったらしい。

まあゲームをするのはいい事だ。ジャンルによってはストレス解消にもいいらしい。

『そ、それはいいけど。それより圭介え……来週から私、起こしに

いけないほうがいいの?』

「あ?　なんでまたいきなり?」

『だって、暮葉もいるし……私お邪魔虫じゃん』

「あのなあ、誰も伊吹の事をお邪魔虫だなんて思っていないよ。来るか来ないかはお前の自由だよ。ただ一緒のほうが朝は楽しいぜ!」

俺も楽しけりゃ葵や暮葉だって楽しい。

出来れば4人で登校したいな。そのほうが絶対面白いと思うんだ。それを俺は、いつものノリで伊吹に伝えたのであった。

『じゃ、じゃあ来週も行くからね。言っとくけど葵ちゃんと暮葉に会いに行くんだからね!』

「葵と暮葉の為かよ!　そこは俺の為って言って欲しかったよ!」

『おお、俺のためっ!?　　ゝゝっ……き、キミよいわばかかけえしゅけえっ!』

「馬鹿×2かよ!?　しかも呂律回ってないぞ?　もしかしてときめいちゃいましたか?」

『うるさい!　なにキモい事言ってんの!　もう切るっ、またねっ!』

その時、本当に電話をブツツと切られてしまいました。

流石にいじりすぎたかな。滅茶苦茶キモいって言われてしもうた……。

しよ、正直伊吹にキモいって言われるとショックだ！

しかし、相変わらずガードの硬い娘だよなあ……。

最も俺は所詮幼馴染だし、アイツにとっては眼中にもないんだろう。だけどアイツの場合は、他の男に対するガードも鉄壁だしなあ……。まっ、確かに伊吹に男が出来たと聞いたら……。俺、ヘコむかなあ。でも幼馴染とはそういうものなんだ。いつかは絶対、俺の役目が終わる時が来るんだ。

はあ……。役目かあ。

そろそろ明日どう戦うか、どう説教するか……。

ゲームとラノベを読んでシミュレーションしないとな！

第15話、決戦前日（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は葵か……」

葵「なんでお兄ちゃんテンション下がってるの!?!」

圭介「いや、だってねえ? 毎回これが続くと思うと読者も飽きる
だろ?」

葵「ひどいよ! まだ紹介してもらってないキャラいるんだよ!?!」

風紗「そ、そうだぞ。折角私も登場したのに……っ!」

圭介「もう葵はブラコン、明智は超能力者、大吾はオタク、重原は
武道バカ、小坂は戦国オタ。これでいいだろ?」

葵「あってるけど省かれて悲しいよ!」

風紗「私だけなんか違う気が……っ」

圭介「まあまあ細かい事気にすんなって。さて、次回はゲスト連れ
て来るよ」

葵「ええっ!?!」

風紗「た、他作品からゲストって許可とったのか?」

圭介「いや、作者の作品からだけど？」

凧紗「大丈夫なんだろうか？」

葵「お兄ちゃんが寝取られないか不安だよっ！」

第16話、エェッ!?!ここにきてこれですか!?!

翌日早朝、俺の携帯には一通のメールが着ていた。

そこには明智風紗と表示されている。

明智からのメール……そうだ、今日は明智と一緒に、明智家へ殴り込みをかける日なんだ。

それにしてもどんなメールだろうか……。

「はっ? 親父が明智家を追放されたから殴り込み中止? 詳細は説明するから電話してほしい……だど?」

おいおいおい! どういう事だ、これはどういう展開なんだ!?!
今すぐ明智に電話だ。そして確認だぜ。

全く意味不明な超展開だ。とにかく、すぐに確認をとろう!
俺はすぐに明智風紗を選択し、音声電話という所を押した。

『んん……藤島? どうしたんだ、こんな朝早く?』

「どうしたはこっちのセリフじゃ! 親父が追放されたってどういう事?」

『ああ! 私の爺さんが父のやってる事に昨日気付いたんだ。私の爺さんはつい最近織田家と和解したばかりで、親父が秀吉の子孫を発見した時も和解する事を望んでいたんだ。それを親父に指示したハズなんだけど……』

「それが実は、子孫を抹殺する為に動いていたと?」

『そう、それを知って腹を立てた爺さんが父を追放したんだ。おか

げで戦う必要はなくなった』

おいおいおいおい！いくらなんでも急展開すぎるだろ！

こんなシナリオのゲーム、人生で一度もやった事がねえぞ！？

「ンな馬鹿な！？ 折角脳内シミュレーションまでしたのに！？」

折角とらゴンボールZのゲームでどう戦うか、シミュレーションしたのに。

折角説教のセリフ考えるのに、インなんとかさんの原作読んだってのに！

こんな展開アリですか！？お、俺の……俺の苦勞の意味は何処？

『すまん……こんな展開になって』

「い、いやあ。いいさ、戦わずして事態が解決するのは素晴らしい事だと思うよ」

『出来れば、風紀委員の仕事もそうありたいな……』

「そ、そうでございますか……っ」

……じゃあ黒木と戦わなきゃいいだろ！

確かに黒木から喧嘩を売ってはいるけどさ。

でも気絶するまでボコボコにするって……まあ一発KOだったけどさ。

ああ……でも昨日の努力が。地味に大変な作業だったのに……努力台無しや！

『ああ、でも木下と一緒にうちには来て欲しいんだ』

「えっ？　なんで？」

『木下と和解がしたいって爺さんが言っている。あと……私も二人に謝罪がしたい』

和解かぁ。まあ複雑な家庭なのだろう。

多分のほほんな暮葉はそんな事、微塵も気にしちゃいねえんだろうけど。

……それでも、ここはそういう事にしておいて、正式に和解させたほうが穏便に済むだろう。

でも何故だろう。どうして謝罪の対象に俺が入ってんのかな？

「まあ、暮葉は行かせるとして……どうして俺まで？」

『藤島には迷惑をかけた。散々殴って本当にごめん……っ』

「なんだそれかぁ。別にいいよ、殴られ慣れてるから」

『ふ、藤島。もしかして……いじめられてるのか！？』

「ぶっ！　ちょ、どうしてそうなる！？」

『だって、殴られ慣れてるという事は……よく殴られるんだろ！？』

電話越しでもわかる。明智、アイツガチでいじめだと思ってやがる。まあ、確かに一時期いじめまがいの事はされたよ。

理不尽な理由で殴りつけられた事もあるし、その度に喧嘩だってしていた。

今だって時々見知らぬ人に嫌味を言われる。でもほとんどが過去の

話だ……。

出来れば、アイツと俺のそういう話にはあまり触れたくない。

「あのなあ。お前もわかつてると思うけど、俺は丈夫なんだよ」

『そ、それでも殴られ慣れているというのは……っ！』

どうしよう。この突っ込みようがないマジ反応？

そうだ、また自分に得がない事だけど……。

あの手を使って誤魔化そうではないか！

「本当に気にするなって。大体殴られる相手は女子だから」

『女子？ ああ……藤島、真性の変態だもんな』

「……………」

ほらね、自分に全く得がない。

それに今の明智の声。あの冷たい感じは絶対に俺の事を引いたに違いない。

『よし、絶好の機会だ。藤島、うちに来て変態を治そうか！』

「なんでそうなるの！？」

『そのうち藤島が悪人にならないか心配なんだ。だから藤島の変態を治すという結論に達したんだよ』

「人を犯罪者予備軍みたいに扱うな！」

『え、違うのか？』

「なにそのマジ反応！？ 俺は常識ある健全な男子だ！」

『常識ある健全な男子が胸を揉むか？』

「じ、事故ですよアレは……っ」

『よし、藤島更生は決定だな！』

なんて楽しそうなんだ……クソッ、変態を治す？

無理だな。何故なら人間みんな変態だからSA！

その中でも異常者というのが犯罪者。

つまりなにが言いたいかと言うとだな。変態Ⅱ悪というのは間違っているんだ！

全く、明智はそれをわかっていないぜ。風紀委員もまだまだこれからだな……フッ。

『とにかく、謝罪をしたいのは本心だ。その……本当にすまないっ、続きはちゃんと会ってから謝罪するっ』

「い、いや……ホントにいいんだよ？」

『頼む！ とうか私の爺さんもお前に興味があるんだ！』

へー、俺って明智の爺さんに興味を持たれているんだ。

爺さんに興味ねえ……えっ、爺さんに興味？

ちょっと待て、それってもしかして……ッ！？

「アッ……」

『ど、どうしたんだ……っ?』

「待て待て待て! 爺さんなに言っちゃってんの!？」

興味があるって、やっぱりそういう意味ですよね?

お爺さんは俺に対してその……そういう感情を!?

嘘だ! 嘘だと信じたいよジョニー!

『ふ、藤島?』

「かわいい男の娘ならともかく、爺さんと薔薇色でくそみそな青春なんて過ごしたくねえっ!」

『……藤島、やっぱりその変態。治そうか』

「どうしてそうなる!？ 変態なのはお前の爺さんだろ!」

『そういう考えしかできない藤島のほうが、よっぽど変態だ!』

だって興味があるでしょ。常識的に考えてそういう意味じゃないのか?

少なくとも俺はそう学んだぞ。ギャルゲーでな!

ちなみに同じ男でも、男の娘なら十分守備範囲だ。

例えるならば準にゃんとかな。あれは素で可愛いと思います。

正直、男じゃなかったら俺の嫁確定だったぜ……。まあ世の中あの子を嫁にする強者もいるのだが。

「じゃあどういう意味なんだよ?」

『お前、私に勝ったろ?』

「えっ? ああ、あれ勝ったって事でいいの?」

『み、認めたくないけど負けは負けだ!』

明智さん、アナタは意外と潔い子だったのね。

まあ、確かにあの時ある意味では勝った気分になったよ。

『とにかく、私に勝ったお前に爺さんは興味を示した。どんな男かって』

「それで来なさいと?」

『そうだよ。全く……ただの変態だって伝えたのに』

「残念そうにそういう事言うな!」

『藤島……将来幼女誘拐とかやりそうだ』

「俺はロリコンじゃねえ!」

どうしてみんな揃って俺を変態扱いすんの!?

俺ってそこまで危険視される程変態なのか!?

世の中俺より危険な人って、いっぱいいるだろ。大吾とか大吾とか、大吾とかな。

とにかくひどいよ明智は。そこまで人を変態扱いするだなんて……。

『あ、あと。申し訳ないと思ってるのは本当だ。私は直接藤島に謝りたいんだ。と、当然木下にもな』

「明智……っ」

『だから木下と一緒に来てくれ……っ』

電話越しだから、表情とかは読み取れない。

それでも、何故だか明智の真剣な気持ちが一ミリと伝わってくる。
……コイツ、変態更生というのもマジらしいが、こっちの謝罪もマジみたいだな。

正直変態更生はゴメンだが、本人がここまで言っているんだ。
俺も明智家に行こうかな。それが明智の為になるってんなら……。

「……わかった、俺も行くよ」

『うん……待ってるぞ、藤島』

「お昼過ぎに行くけどそれでもいいか？」

『きよ、今日中ならいつでも構わないっ』

「そっか。それじゃあそろそろ切るな」

『必ず来いよ』

「わかってる。また後でな」

最後にそう言って、俺は長かった通話を終了した。

突然の展開だなあ。まさか明智家へ行くことになるうとは。

……思えば俺、伊吹以外の女の子の家に行くのは初めてかも。
爺さん付きとはいえ、やっぱり緊張するなあ……。

「けーすけ様！ 明智殿からメール来ましたか！？」

その時、暮葉がドタバタと俺の部屋に入ってきました。それも丁度明智の話のようである。

アイツの所にもメール、送ったんだな。

「ああ。昼飯食って少し休んだら行こうか」

「……了解なのです！」

満面の笑みを浮かべる暮葉。

なんというか……伊吹にもしてもらいたい素晴らしい表情だ。

こうして、俺と暮葉は午後に明智家へ行くことになったのである……。

あ、そういえば通話料……どうなるんだろう？

第16話、エェッ!?!ここにきてこれですか!?! (後書き)

後書きトークコーナー

圭介「どうもどうもー! 今回から数人ほどゲスト登場だぜ。最初は……」

????「だああああっ! ひ、悲劇じゃああああっ!」

????「たくみいゝ! 浮気……許さないぞっ!」

たくみ?「ちょ! 誤解です! 誤解ですってばクーさん!」

クー?「じゃあなんで歩美に抱きついていたのか説明して欲しいぞ!」

たくみ?「アイツが勝手にだな……ってうわ!? やめて、エクエスシュヴェルトはやめてエエエエエエエエッ!」

伊吹「……なにこれ?」

圭介「さあ?」

伊吹「男のほうは見た目以外ほとんど圭介ね……」

圭介「俺があんな不幸に見えるの!?!」

伊吹「違う、バカっぽそうって所が似てんのよ」

圭介「ひどい！ 泣いていい、ねえ泣いてもいい！？」

クーニグント・コスモバース「ウワキゼツタイユルサナイウワキゼツタイユルサナイウワキゼツタイユルサナイ！」

藤沢巧「ヤンデレ怖えよ！ だああもう不幸です不幸すぎますーっ！」

圭介「……このゲストコーナー、続くのか？」

第17話、明智家へ、だがしかあゝしっ！

昼食後、俺と暮葉は明智家へ向かう事になった。
準備を終え、まさに今出発する所である。

「それじゃあ葵、留守番頼むな」

「お兄ちゃんとクーにゃんがデートだなんて……葵も行きたい！

「もきゅー！ ででで、デートじゃないですよ！」

「そうだぞ、友達と遊んでくるだけだ。それじゃあ行ってくるな」

「わかったよう……お兄ちゃんにクーにゃん。早く帰ってきてね！」

「はいはい、それじゃあ行ってくるな」

留守番は葵に任せた。少し不安だがまあ大丈夫だろう。

こんな事もあるのかと、伊吹にも一応連絡はしてあるんだ。

伊吹は今日暇みたいだし、あと数十分かしたら葵の所に行ってくれ
るだろう。

いやいや、こういう時には非常に便利だぜ。幼馴染の存在って。

それから明智と幾度とメールをし、明智のメールによる道案内を参
考に歩いた……結果。

「けーすけ様……どこなのですか、ここは？」

「すまん、迷った……っ」

「もきゅうっ!？」　け、けーすけ様っ!　古宇坂市民なのですよね!？」

「うるせえ!　市民だからって市全体の道を把握してると思うな!」

誰だった道に迷う時は迷うんだよ。とにかくここはどこなんだ?　住宅街みたいだし、白陵高校があるみたいだけど……。

そもそも白陵高校が、古宇坂のどこらへんにあるか知らないし。学校自体は知ってるんだけどね。確か偏差値39のヤンキーばかりが通う学校だったハズ。

知り合い曰く、金髪や服装の乱れなんて甘い甘い。リーゼントとかパンチパーマがいるらしいんだ。

……古宇坂ってさ、一応電車で東京に行けるんだぜ。そこまで田舎だったっけか?

「ど、どうするのですか?」

「どうするもなにも……っ、そういえば明智からもメールが来なくなっただけ」

まあ、俺とメールばかりしているわけにもいかないんだろうけど。でも道案内してくれる人がいないと……うう、ホントにどこなんだよココは。

今日が休日でよかったぜ。もし平日だったらこの辺にきつと、白陵高校の怖いお兄さん達がうろうろしているに違いない。やだなあ、もし中学時代に絡んできたヤンキーさんがいたらどうしよう?

とにかく、早くこのあたりから立ち去りたい。絡まれる前に立ち去りたいぜ。

「どうしましょう。拙者達、このまま行き倒れに!？」

「流石にこの街でそれはないと思う」

「でもロジーナではあったのですよ!？」

「心配するな、日本で行き倒れはまずできないと思うから」

……まあ、倒れても誰も救急車呼んでくれないだろうけど。
冷たいよねえ。ところが別な街に行くと、通報くらいはしてくれるらしい。

なんて心優しいんだ。そういう人もいるんだね!

ってか、こんな冗談言ってる場合じゃない。真面目に早くなんとかしないと。

そして明智さん、メールによる道案内を再開してくれえ……。

「それにしても、本当に明智殿の家はどこなのでしょうね?」

「知ってりやもうついてるわ!」

とにかく記憶を頼りに進もう。

確か明智家は、白陵高校から500m離れたあたりにあるらしいのだ。

だけどなあ、その500mがどっちなのかサッパリわからん。

と、迷っていたその時だ。明智から一通のメールが届いた。

やっとかよ! もう待ちくたびれちゃったじゃないか。

というわけで俺は早速、携帯電話を開きメールを確認……したのだが。

「もきゅ? どうしたのです?」

「た、TASUKETE?」

「もきゅ? ホントだ、TASUKETEって書いてあるのです」

何故、助けてがTASUKETEとアルファベット表記なのか。それはよくわからんが、何故だか冗談じゃない臭いもするのだ。どういう事だ。助けてって……アイツ、何かあったのか?

「けーすけ様……っ」

「待て、焦るにしても行き先がわからねえぞ」

TASUKETEが本当か冗談か、そんなのわからねえ。

でも多分、このメールは俺達にさっさと来いと言っているようなものだろう。

そりゃあね、俺達だってさっさと白陵高校から離れたいさ。

だけど肝心の明智家の場所がわからん。だからこうして迷っているんだ。

いきなりはよ来いと言われても、少々時間がかかりそうで……。

「むむうゝ、こうなったら……」

「ん? どうしたんだ暮葉?」

暮葉が一言口にしてから、何故か彼女は瞑想を始めたのだ。こりゃ本気である。その為か滅茶苦茶話しかけづらい……。しかし暮葉のヤツ、一体なにをするつもりなのだろうか?

「わかったのです! 明智殿の居場所!」

「マジで!？」

「はい!　ここから北東へ大体500mの地点にいるのですよ!」

「ホントか!？　ていうかどうやってそんな事を……?」

「はい、魔力を感じたのです。拙者は魔法は苦手なのですが、魔法使いとしての必要最低限。つまり魔力を感じ取るという事は普通にできるのですよ。明智殿は魔法使いではない故、魔力が低めだったので探すのが大変だったのですが、一度会った人の魔力は大体覚えてるので!」

「……………」

……えーっと、これは何から突っ込むべきなのだろうか。

満面の笑顔で説明する暮葉は、自信という素晴らしいものに満ちていた。

それにしても魔力感知ですかぁ。確かに便利な能力だ。

とらゴンボールで言う、『気』を探るのと似たようなものだよな。

うん、確かに便利である。だけどなぁ暮葉さん……。

「そういう能力あるなら最初から使え!」

「もきゅうううっ!　だってだってっ、思いつかなかったのですから!」

「うるせえっ!　このバグ武将!」

そんな使える能力が間近にあったなんて、もう思いつきり脱力しましたよ!

なんだか今、初めて暮葉が役に立ったような気がしたぜ。
でも登場遅ェよっ！もう少し早く使ってほしかったと俺は思っ
てる。

だって、明智家探すのに無駄に歩いたじゃないっすか……。

「けーすけ様ひどいのです！折角拙者、頑張ったのにっ！」

「わかった！わかったからこんな時にいじけるな！」

ホントにコイツは俺と同じ年か！？

なんだか妹2号みたいに感じるぞ。

まあ、妹1号よりはある意味扱いが楽であるが。

……そんなわけで暮葉の言う通り、500mを北東へ移動する。

するとそこには、なんとも立派な日本屋敷が建っていた。

表札には、確かに『明智』という文字が墨で描かれている。

しかも何故だろう。中から戦っているような物騒な音が聞こえる。

しかも不吉な予感しかない……。

なんだよ、この異様な空気は。明智家の問題って終わったんじゃない
えのかよ。

「けーすけ様っ、危険なのでけーすけ様はここでっ」

危険を察知したのか、暮葉は俺を心配してそんな事を言ってきた。

気持ちはとてもありがたい。でも……危険かもしれないんだろ。

そんな所に、暮葉一人を行かすわけにはいかない。

それでも俺は一応日本男児だ。だから――

「嫌だ。俺も行くぞ」

「もきゅ？ ……ですけどっ」

「護衛対象は常に近くにいないと、ダメだったんじゃないっけ？」

「ひ、卑怯なですよけーすけ様！」

「ごめん。でもやばい事かもしれないのに、明智や暮葉を放っておくことはできないから」

それに俺は昔からそうなんだ。困ってるヤツがいるのに、見過ごす事なんてできない。

引けと言われても引く事ができない。だったら面倒事に介入するしかないよな。

明智はもう俺達の仲間なんだ。だから……放ってはおけない！

「でも、もしけーすけ様が大怪我をされたら……っ」

「大丈夫だって。俺の打たれづよさが普通じゃないの、お前知ってるじゃないか」

「でも怪我する時はするのですよ!?!」

「心配してくれるのはありがたいよ。でも俺は行きたいんだ、頼むっ」

改まって俺がお願いしてみると、暮葉の瞳に真剣味が浮かぶ。果たして護衛対象を戦場へ向かわせていいのか、それを真剣に考えるように。

だけど、結果は俺の予想通りだった――

「仕方ないですねっ。特別なですよ、危険になったらすぐ後方に下がってくださいね」

「……ああ、ありがとな！」

暮葉は渋々、俺がついて行くことを許可してくれたのだ。ありがとう暮葉。これで俺の気は多分済むよ。

——さて、あとは明智家で今、何が起こっているか知っとかねえとな。

そして明智や明智の爺さんが苦しんでるなら、それを俺と暮葉で解決してみせる。

そんな気持ちを胸に、俺と暮葉は明智家へと潜入した……。

第17話、明智家へ、だがしかあゝしっ！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さてさて、前は『うちゅうじんですよ！』の主人公とメインヒロインに登場してもらいました。んで、今回は……」

伊吹「ああ、そのコーナー中止よ」

圭介「へ？ な、なんでっすか伊吹さん！？」

伊吹「元ネタわからない人には本当につまらないネタでしょ！ 少しは考えなさいよこのオタク！」

圭介「いいだろ！？ 前作のキャラクターを使うって、何度も作品書いてる作者様だったらくある事じゃねえか！」

伊吹「とにかく！ この小説は初めて読む人にも優しい小説を目指してんのよ！」

暮葉「そうですよ！ 前回の巧さんもクーさんも、読者様からしてみればよくわからない人物なのですよ？」

巧「……ひどくね？」

クー「なんの為に妾達、他作品から呼ばれたんだろう？」

巧「……不幸だっ」

伊吹「とにかく次回から別な事しないと、このコーナーも打ち切りなんだからね！」

圭介「でも展開的にお前は今、本編で出番ないし。打ち切りになったらお前の出番なくなるぞ？」

伊吹「だあああうっさい！
そうならない為にも、次回なにをするかは次回までの宿題よ！」

圭介「へいへい……け

第18話、明智家の死闘

ピンクブリッジの死闘……なんてものが、FF5にありました。ファーストファンタジー

アレはね、素直に名曲だと思うんだ。ちなみにFFは7までしかやった事がない。

ところで、それと明智家の中の関係があるかって？

いやあ、関係なんてほとんどないんだ。

ただ、明智家では死闘が行われていたんだ。だからなんとなくピンクブリッジが思い浮かんだのだ。

きつとここに伊吹がいたら、ゲーム脳乙とか馬鹿にされた事だろう。しかし事実だから仕方がない。

それでピンクブリッジ……げふんげふん。明智家の死闘だが、それは――

「明智いっ！」

「明智殿っ！」

暮葉が扉を一期一振で斬って開け、俺達は戦場へと侵入した。

……ちなみに、暮葉は背中あたりに一期一振を隠していたらしい。すげえな。どこかでそういうの見た事あるぞ。でも思いっきり銃刀法違反じゃねえか。

まあ今はそんな事はどうでもいい。何故なら――明智がピンチだからだ。

「ッ！？」 木下っ、藤島！？」

「隙アリイッ！」

だが、明智がこっちを振り向いた瞬間。

明智の前に立ちはだかる、中年くらいの男が突如として刀を振りまわす。

刀、それは通常は白兵戦用の武器である。しかし男は明智に近づく事なく刀を振りまわす。

普通なら全く効果のない、無駄な動作——しかし。

「うっ！」

素早く映った鋭い衝撃波。それは一瞬のうちに明智に届き、彼女を傷つける。

咄嗟に反応した明智は直撃は避けたものの、少しだけ左腕を斬ってしまったようである。

裂けた衣服からはドロドロと、彼女の紅い血が流れ出していた。

「明智っ！」

「わ、私は……平気だっ。それより藤島は爺さんを……っ」

「え？」

後ろを振り向くと、床に倒れる年老いた男性が一人いる。

アレが……明智のお爺さん。かつて争った一族との和解を望む人か。……なんでだよ。なんであの爺さん、背中から血を流しているんだ？
ていうかその前に、なんで明智は変な男と戦ってるんだよ。これどういう状況なんだ？

とにかく、明智に頼まれたんだ。あの爺さんの面倒を見なければっ！

「明智殿！ 拙者は加勢するのです！」

「ほお、木下の小娘か。いいだろう……裏切り者の風紗と共に墓穴に埋めてやろうぞ」

戦闘はとりあえず明智と、たった今一期一振を鞘から抜いた暮葉に任せるとしよう。

暮葉も刀さえあれば滅茶苦茶強い。あの日オオカミ野郎を一撃で倒したのは、まさに暮葉だからな。

とにかく、俺はあの爺さんの無事を確認しねえと！
それから状況を確認しなければ。どうしてこんな事になってんのかとかな。

駆けだした俺は爺さんの所へ、姿勢を低くし声をかける。

「ちょっと！　しっかりしてくださいっ！」

「……ん、うう……だ、誰じゃっ？」

よかった、意識はあるみたいだ。それに思っていたよりも元気そうである。

この爺さんは傷の痛みで苦しんでいるだけのようである。
さて、まずは自己紹介をしないといけないな。

「藤島圭介ですよ」

「ふ、藤島……すると君が圭介くん……かの？」

「そうですよ、藤島圭介です！」

「話は娘から聞いておる……っ、変態じゃが中々腕の立つ男らしいのお」

「変態ってのは余計ですよ……」

明智めえ、ホントに俺の事を変態だって教えやがったな。

まあ否定はできないが。俺が変態なのは事実だ。

というか、それを言うとな人類のほぼ全員が変態になるぞ。

きつとこの爺さんだって若い頃は……うん、お盛んだったハズだ。

「すまんのお……本当は、歓迎パーティーの予定だったのじゃが……」

「一体、何があったんですか？ 明智と戦ってる野郎は誰なんですか？」

「……このワシ、明智光昭^{あけちみつあき}の息子、明智光雄^{あけちみつお}……風紗の父親じゃ」

明智の父親って……ちょっと待てよ、その話って終わったんじゃない。

「明智から聞いたんですけど、その話は確か貴方があの人を追放して、解決したんじゃないかなかったですか!？」

「そのハズじゃった……しかし、ヤツは我が家を襲撃してきおった」

その言葉を聞き、俺は一旦明智の父親である光雄のほうを見る。

彼は相変わらず一人で刀を振りまわす。だが、たったそれだけで鋭い衝撃波が、暮葉達に襲い掛かる。

なんだか明智は、さっきよりも傷が増えている気がする。

暮葉も刀だけで頑張っている……というかアイツ、衝撃波を斬り裂いてるぞ。

どうなってんだよ。もしかして暮葉は光雄の真似を!?

「ほう。何の能力も無しに衝撃波を生み出し、それで風を斬り裂くとは……中々の腕前だな、木下の小娘」

風って……もしかしてアレは衝撃波じゃなかったのか。

あの鋭いものは風だったのか。だけど風ってあんなに鋭いのか？
あんな鋭利な風、今まで見たことがねえぞ。

「そっちこそ何者なのです!？ 殆ど魔力を感じないのに……っ」

「木下！ 私の父も私と同じ、超能力者だ。それも単純な実力だと私の上だ、気を抜くな!」

「ちょ、ちょーのーりよく？ ……意味不明なのですが、強いのはわかったのです!」

再び刀を構え、今度は自ら突撃をかける暮葉。

速い、暮葉のあの運動性能……並の人間が出せるものではない。
アイツ、魔法少女か疑いたくなるくらい身体能力が高いな。

一方の明智は双方の掌に、バレーボール程度の火の玉を生み出している。

「もうお前なんかの命令は聞かない！ 私はな、こいつらに出会ってNOと言える勇気を貰ったんだよ！ お前のやってることなんて最初から反対だった、内心じゃお前を倒せる時を……ずっと待っているだ！ だから……こいつを喰らえっ!」

彼女は本気でそう叫ぶと、明智は作り出した火の玉を光雄へと投げつけた。

右、左と投球される火の玉。その速度は光雄の超能力を防ぎつつ、前進している暮葉の移動速度よりも遥かに速い。暮葉はジリジリと迫る程度であるが、火の玉は100km/hを超えるスピードで彼に迫っていた。当然、光雄はどちらを優先して迎撃するかと言うと、火の玉のほうであろう。

「フッフ、無駄な事だ！ 残念な我が娘よっ！」

一振りすると、何故か両方の火の玉が真つ二つになってしまう。

強い。あの光雄さんは信じられないくらいに強い。

俺でさえ避けるのが精一杯だった、あの攻撃をアッサリ迎撃しやがった。

——だが、火の玉を迎撃したその行動こそ、光雄最大の失敗であつた。

——カキィッ！

刀と刀がぶつかり合う、金属音。両者とも剣道で言う、鏢迫り合いの構えだ。

金属がぶつかり合い、バチバチと激しく火花が散ってゆく。

だがいくら中年とは言え、明智光雄は男である。女子である暮葉よりも腕力があって当然だ。

両者とも本気で押し合っているが、若干暮葉のほうが負けている感じである。

「くっ！ んんんっ！」

「ぐぬぬっ！ この細腕でどこからこの力がっ！？ ぐおおおっ！」

「んつきゅううう！」

まずい、力で負けている。このままだと暮葉が斬られてしまう！

———と思った、その瞬間であった。

「親父殿、覚悟おっ！」

勢いよく飛びあがった明智は、勢いをつけて回転。

これは、間違いないぞ———

あの蹴りの威力を高める為の加速。あの攻撃は俺が受けた、明智必殺の一撃だ。

俺でさえ軽く脳震盪を起こしたあの蹴り。その華麗なる一撃が、光雄のこめかみに突き刺さる！

「……！」

暮葉との鏖迫り合いにより、思うように身動きが取れない光雄。

彼は明智の蹴りをモロに喰らってしまった。その威力に、彼は無言で吹っ飛ばされる。

それから起き上がることはない。どうやら、たったの一撃で気絶してしまったようである。

「や、やったのですよ明智殿！」

「おおっ！ や、やりおったわい！」

暮葉や爺さんも歓喜。俺も素晴らしい連携プレイを見て、拍手をしたくなりそうであった。

やっぱり明智すげえ……いくら急所とは言え、あんなに強い人間を

一撃でダウンさせるとは。

俺、よくあの蹴りに耐えられたな。今更ながら自分の身体の頑丈さには感謝だよ。

それから暮葉もすごい実力だ。明智でさえ反応しきれなかった、あの風の斬撃を刀で斬り裂いていた。

あんな事、聖剣を持った勇者でもできないかもしれないぜ？

「おう、お疲れさん暮葉。それに明智」

「けーすけ様はご無事なのですか!？」

「心配しなくても、情けない事に俺はずっと後方だったし、それより明智は大丈夫なのか？」

明智の身体には、いたるところに切り傷があった。

間違いなく、あの斬撃によるものであろう。

明智と明智の爺さん、この二人が今回の主な怪我人だ。

特に明智は怪我した状態で戦っていた。それは大きな無理になっていたハズである。

「わ、私は平気だっ」

「それにしても、追放した者が襲撃してこようとはのお……完璧不意打ちであったから、対抗できなかったぞい」

「ごめんなさい……私が力不足だったから」

「いやいや、気にせんでええ。風紗はよくやったよ。それにワシも元気じゃぞ」

「う、うんっ」

こうして橋から見ていると、家族だよなあ。

なんだか羨ましいや。うちの良心は昔頃から仕事でよくいないし、だからいつも葵と二人きりだった。

とにかく葵の面倒を見るのは大変である。アイツは極度のブラコンだし、やたらと絡んでくるんだよ。

まっ、それはともかく。今回はこれで終わったってわけだな……。

「み、皆さん警戒するのです！」

しかしその時、突然暮葉が全員に向かってそう呼びかけたのだ。

何故かと言うと、振り向けば光雄の身体から、白い蒸気のようなものが吹きだしていた。

それは次第に人型を形成していき、やがて着色までそれ、完全なる人と変貌したのである。

おいおい……煙が人になるって、魔人プーかよっ!?

しかも顔、なんだか教科書で見たことあるような気が……。

「な、なんじゃっ!?!」

「もきゅっ!?!」

「な、なんだよこれ!?!」

「ちよっ!?! これなんてRPG!?!」

一斉に驚く俺達……何故なら、煙から人になったその人の正体は……。

「やはり……この身体のほうが、動きやすいぞ……フフフッ」

—— なんと、明智光秀その人だったのである。

……なんだ、この超トンデモ設定なありえない展開は？
そもそも、なんで明智光秀が生きてるんだよ！

本当の地獄はこれからだぜ……な展開であつた。

第18話、明智家の死闘（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「みんな聞いてくれ、なんとこの、『魔法少女に会っちゃった場合』が来年の春にアニメ化される事になったんだ！」

暮葉「もきゅ！？ ほ、ホントなのですか！？」

圭介「ああ、来年4月から独立UHF局放やA〇ーXにて放送予定。特にA〇ーX版は規制も緩いしパンチラ解禁だせ！ あ、製作はJCね」

大吾「だ、大丈夫なのか？ 変なオリジナル入れたりしないよな？」

圭介「大丈夫！ 監督が『原作通りにする』って言ってたから！」

伊吹「あんたら詐欺するなああ ないない、絶対ないから！ 読者のみなさん信じちゃダメだからね！」

※圭介の思いつきのネタです。

第19話、明智光秀の野望ッ！

明智光秀。

本能寺の変で織田信長を自害へ追いこんだ事で有名だ。

しかし山崎の戦いで敗れ、百姓・中村長兵衛に竹槍で刺され死亡したんだとか。

その戦いも何世紀も前の話である。仮にそこで死んでなくても、現在生きているはずがない。

それなのに、俺達の目の前には何故か、明智光秀その人の姿があったのだ。

「ど、どういふことなんだっ?」

明智が警戒しつつ一歩下がりを、光秀らしき人物に問いかける。

「完璧な成りすましだった……だが、他人の身体では、力に制限がかかってしまうな」

「てんめえ……っ」

明智が一歩下がる代わりに、今度は俺が前に出る。

今回俺、何もしてないしな。

だったら光秀から聞いてやるよ。なんでこんな事をしてのか。俺の目には明智光秀の姿が映っている。

甲冑を着た男……開いているのは顔面だけのようである。

「けーすけ様っ！ 危険なのです、下がって――」

「そ、そうだぞ！ 藤島、丸腰じゃ危険だ！」

「お前らはさっき戦ったろ？ だから今度は俺の番だ」

そう言っつて、俺はまた一步光秀に近づいてゆく。

光秀……以外と背が低いな。

やっぱり戦国時代の人と、現代人とは体格が違うのだろう。

だが、小柄だからって油断はしちゃいけないな。だってアイツはただの明智光秀じゃない。

煙から生まれたんだぜ？ そもそもとの昔に死んだ人物なんだ。だから、あそこにいる光秀がフツーなわけがないんだ。

「我の子孫でも木下家の人間でもないな、何者だ？」

「誰だっつていいだろ。ただ一つだけ教えてやる、俺はコイツらの仲間だ」

「……ほお、現代にも仲間の為に身体を張る、おバカがいようとは……私の時代に生まれれば、戦場の英雄になれたかもしれないな」

「うるせえっ。地味に現代人見下してんじゃねえぞ、エセ武将！」

そうだ、きつとエセ武将に違いない。

じゃなかったら明智光秀が、あんなふざけた超能力なんて使えるわけがない。

多分アレは明智光秀の姿をした、別の何かだ！

……と、俺は勝手に思っております。

「それで、貴様はどうするつもりだ？」

「まずテメエはどうしてこんな事をした？ 何が目的だよ」

「……フツ、復讐に決まっておろう。我は死んでも、我の魂が成仏する事はなかった。そこでちよつとあの男の身体を借り、霊力という、簡単に言えば具現化する力を蓄えていたのだ。しかも……あの男の身体にいた副産物として、我に超能力までついてしまった。これは素晴らしい副産物だ。これで我を討った豊臣秀吉の子孫連中にも、我を裏切った我の子孫たちも、そして……まだ生きていやがるという織田信長の子孫を叩き斬れる！」

要するに、コイツは豊臣秀吉に討たれた。

その事を何百年も根に持った末、こんな犯行に及んだというわけか。つまり恨みを晴らす為に、自分の子孫にまでこんな事を……。自分のプライドの為、負けた屈辱を晴らす為に……。

「ふざけんなよてめえ！ 結局てめえがやろうとしている事は、ただの自己満足じゃねえか！」

「あれは国家の運命が変わる出来事だったのだぞ！？ それを自己満足と言えるのか貴様は？」

「確かにそうだけど、でも違うんだよ。今やってるのはそんな大きな事じゃねえ、ただの人殺しの犯罪じゃねえか！」

「話のわからぬ男だ。いいだろう、我は我のやりたいようにやる。敵は明智家にあり」

「いいぜ、てめえがまだ暮葉や明智を狙うってんなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！」

決まった……とあるシリーズ読んでおいてよかったよ。

説教ウニ男もビックリな説教が、今決まっちゃったよ！

やっぱりアレですな。説教ウニ男さんはこういう場面じゃ最強つすよね。

でもどちらかというと、俺はアクセロリータさんの方が好きだぜ。

まあ、こんなオタな話は今は置いておこう。

今の俺は決め台詞が決まって、最高にハイな気分であった。

しかし、そう喜んでいる場合でもないのが現実である。

「……フツ」

ニヤツと不敵に笑った光秀は、突如として刀を振りまわす。

どうする、勢いで突っ込んでみるか？

……そうするかねえよな、とにかく何も考えずに突っ込め。

そしてあの野郎の顔面に一発、確実に入れてやるんだ！

「うおおおおおおおおおっ！」

玉砕覚悟で床を蹴り、一気に敵との間合いを詰めようとする俺。

距離にして約10m、大した距離ではない。

走ればすぐに間合いを詰めれる、そんな程度の距離でしかない。

しかし、光雄の能力を手にした光秀を相手とした場合。そんな常識などは通用しなかった。

「くたばれ、天誅だ」

「ぐあっ!？」

振られた刀、向かってくる幾多の風の斬撃。

それは床板を砕き、俺の肉を斬り裂いていく悪魔のような一撃。

とても風とは思えない切れ味だ。しかも何故だ、さっきより能力が凶悪化している気がする。

「けーすけ様っ！ 相手っ、さっきより強くなってるのです！」

マジかよ、暮葉にもそういう風に映っていたのか。

ということは俺の勘違いではなさそうだ。

明智光秀、アイツが使う光雄の能力は……本人の能力よりも凶悪化していた。

たったの一撃で負ったダメージは結構深いものだ。いつの間にか右腕が血だらけになっている。

右腕だけではない。服にも血が滲み始めていた。どうやら今の一撃であちこち斬り裂かれたらしい。

「確か旋風烈剣だっサイクロンブレードたかな。中々便利な力だ。刀と空気を特性を生かした、まさに武士向けの能力だ。我の子孫は素晴らしい力を持ったものだ……っ」

「くそ……ったれえっ」

「ほら、もっと来いよ。我の子孫と木下を守ろうとするヤツが、足軽程度のタマで終わってるんじゃないぞ」

「くっ！ ……ちつくしよおおおおおっ！」

残りたったの6m、飛び込めば一瞬で相手の懐に入れるんだ。

とにかく一発でもアイツを殴って、能力を無効化させないと……。

先に俺の肉体が切刻まれ、潰れてしまう！

拳を振り上げ絶叫しつつ、俺は相変わらぬの突撃を仕掛けている。

——だが。

「そんな速度では、我に届く事は一生ないぞ！」

「うああっ！」

轟！という音と共に再び叩きつける斬撃、紅い切り傷が増えてゆく俺の身体。

黙っているだけでも苦痛なほどの激痛がする……っ。

その後びちゃびちゃという男が室内に響く。

その音の正体、それは俺の血が床に落ちている音であった。

鮮血が辛うじて碎かれるのを免れた床板に、水たまりのように溜まっている。

クソッ……まずい。出血量が半端じゃねえぞコレ。

というか分が悪いぜ。俺の体は主に打撃系には強いのだが、斬撃にはちょっと弱いんだ。

そして甘く見た。光秀……滅茶苦茶強い。こうして歯を食いしばって立つだけでも精一杯だ。

「フフフッ！ フウッ！」

「……！」

しかも、いつの間にか明智が間合いを詰め、俺の顎にド派手な蹴りを打ち込んでいたのだ。

吹っ飛ばされた俺は壁に叩きつけられる。ダン！という音と共に、何かか碎ける音。

激痛に耐えあたりを確認すると、壁の破片が床にまで散乱している。どうやら俺は壁に激突した際、明智家の壁をぶち壊してしまったらしい。

「けーすけ様っ！ 大丈夫なのですか！？」

やられてしまった俺を心配し、暮葉が可愛らしく駆け寄ってきた。
ああ、俺も馬鹿だ……こんな時にまで可愛いつて思うなんて。

ここは滅茶苦茶痛い、女の子の前で弱音を吐くわけにはいかない。
日本にはやせ我慢って便利な言葉があるが、それを使わせてもらおう。

「大丈夫！ きっとこれよりSMプレイのほうが痛いって」

「け、けーすけ様……真性の変態なのですねっ」

「うるさいわっ！ とりあえず平気なのはわかったろ？」

「は、はい！ でも、もう戦わないでほしいのです！ これ以上けーすけ様が傷ついたら……っ」

そりゃあわかってるよ。暮葉の任務は俺の護衛である事。

そういうわけなので、俺が怪我するのは好ましくないという事くらい。

でも、この状況でそんな贅沢は言ってられない。

とにかく明智光秀の暴走を止めねば……もっと多くの人が血を流す事になってしまう。

痛いけど……あと一撃くらいなら耐えられそうだ。だったら我慢して突っ込めばいい。

そうすれば、他の人は傷つかずに済むかもしれないんだ。

ハッピーエンドを迎える為には光秀を止める。光秀を止める為には俺が頑張るしかねえ！

「うっ……！！」

「む、無理しないで欲しいのです！」

「だ、大丈夫だ……っ！」

「とにかくもう立たないでください！」

そんなわけにはいかない。

立って戦わないと。光秀の暴走を止めないと……ッ！

……けど、どうすれば。どうやってあの野郎と戦えばいいんだ？

「お前のせいで……父が、木下が、藤島が……っ、焼き殺すっ！」

俺がそう考えている間に明智が一人、光秀へと飛びかかっていた。明智の右手には超能力で発生させた炎が、刀のように伸びている。2 mにも及ぶ長い炎剣を持つ明智が、かなりの速さで光秀の懷に潜り込む。

「風紗自身、私の攻撃で十分打ち碎ける。懸念すべきはあの炎剣のみ……ならばっ」

刀を振るという、似たような動作を取り続ける光秀。

だが風の斬撃は意外にも、明智ではなく炎剣を切裂いた！

2 mもあった炎剣は50 cmに分けられ、ガラランガランと残骸のようになりに落ちて行く。

「……!?!」

「ふふふ、パイロキネシス発火能力ごとき！ より強化された私の能力には及ばん！ ふんっ！」

かなりの勢いを持った右拳が、明智の顔面に直撃する。

女の子とは言え、少なくとも40kgは超えているであろう。

それなのに、光秀は明智をたった一撃の拳で、宙に浮かせてぶっ飛ばしてしまったのだ。

なんというパワー。常人には無理だぜあんなの。明智でさえ常人離れしてるっつーのに……。

あんなのにどうやって勝ってんだよ。だけど暴走を止めないともっと深刻な事態になっちゃう。

そして暴走を止めるには、光秀をぶっ倒すしかないんだ。

アイツを倒したい……ぶっ倒して何もかも解決してやりたい。

だけど俺にはアイツを倒せる程の力がない。クソッ、倒したいのに！

「ふ、藤島っ！ どけっ！」

「へっ？」

光秀にぶっ飛ばされた明智が、俺の方へとぶっ飛んでくる。

ウソッ、まさか光秀さん。俺を明智の下敷きにするつもりですか！？

これは予想外の展開だぞ、一体どういう事なんじゃい！

「んぎゃあああああああつ！」

明智さんの素晴らしいダイブをする姿に、俺は思わず叫んでしまった。

ああ、叫ばざるを得なかったんだ。

だって上からのすごい勢いで、人が降ってくるんだぜ？

いくら明智ほどの美少女でもな、怖いもんは怖いですよ！

結局全身ボロボロの俺は、ダイブしてくる明智を避ける事も出来ず、

見事に爆撃されてしまったのだ。

しかもすげえ勢い……ああ、トルボーイ爆弾にやられた戦艦ティルピッツの気分だぜ……。

それにしてもやたら息苦しいな……。

もしかして、今ので致命傷負った？

いや、でもなんだか生温かいし……それに柔らかいような。なんだろう。この今まで感じた事もないような唇の感触？

「けけけ、けーすけ様っ!？」

しかも暮葉が驚きの声をあげている。

一体何がどうなって……ん？

「おおおおわあああああああっ!？」

あああ、明智顔近えええええええっ!

なんか唇がっ!乾いた彼女の唇……しかしそれがまた、なんとも言えないっ。

「んんっ? ——っ!？」

ようやく俺に気付いた明智は、顔面を真っ赤に染め上げている。

その上、石化魔法でもかけられたかのように、ピタリと動きが止まっていた。

っーかコレ、アレですよ。日本語にすると接吻ってヤツっすよね? マジかよ!なにこのロマンもクソもないファーストキス!?

いや、でもこれはご褒美じゃ?

事故とは言え、明智のような美少女とのファーストキス……すげえ、ご褒美だ!

——ドクン。

うおっ!?

しかも体中がむくむくと強張り、なんだかズキズキムズムズしてきた。

なんだこの感じ。キスすると男ってこんな変な感覚になるのか?

ああ、なんだか段々……身体が熱くなってきた。胸が高ぶってきた。そしてなにより——超モーレツにみなぎってきたぞ!

「おおおおっ! 俺のこの手が真っ赤に燃える!」

「けーすけ様……あ、あれってもしかして……っ」

「ふ、ふじ……しまっ?」

恥ずかしがる明智と何か考えている暮葉……。

まあとりあえず、この二人は置いといて俺は再び立ち上がった。

あの——明智光秀の幻想をぶち殺す為に!

なんだかよくわからないが、身体が軽いし素晴らしい気分だ。
多分、今ならやれるよっ!

「な、なんだ? あの男が復活した?」

「さあ、て、覚悟はいいですかな? 明智光秀エツ!」

「……おもしろい! ようやくいい目になったではないか。いいだろう、私の敵として認めようぞ!」

「さてと、んじゃあそろそろ行くぞっ！」

最高にテンションの高い俺は、いつものように駆けだした……のだが、今回は何か違った。

というか最初から色々の違い過ぎていた。

いつもならノロノロと走りだすだけだ。しかし今日は違う。

床を一蹴りしただけで、砲弾のように勢いよく飛び出していたのだ。しかも、俺と光秀の距離は何十メートルもあったハズなのに、あつと言う間に5mくらいまで近づいている。

その間、精々2〜3歩足をついたただけだというのに。

「速いっ！　だがまだ甘いぞ、サイクロンブレード旋風烈剣の敵ではない！」

おおっ。マジかよ、あの風の斬撃がこの目に見える。

俺は軽くステップを踏み、その斬撃を軽々と避けてゆく。

すごい——自分でも信じられないが、俺は光秀に善戦している。

「馬鹿なっ!?!　私の斬撃を避けて……貴様、ホントに人間か!?!」

「違う！　俺、ゾンビっす。あと魔装少女っす！」

「嘘つけ！　どこがゾンビで少女じゃ！　ええい面倒じゃ、次で決める！」

「無駄だ、もうてめえはチェックメイトだ！」

明智光秀——復讐という理由で子孫達を巻き込みやがって。

復讐したい、その気持ちはわからないでもないよ。でもなあ……。

ここは光秀の居場所じゃねえ。もう戦国時代は終わってんだよ。

死人は死人らしく、さっさと成仏しやがれェッ！

「喰らえ！ 黄金の左だあああああつ！」

そう叫び、俺は明智光秀の顎に左アッパーカットをかましてやった。華麗に決まった幻の一撃。光秀は空高く飛びあがり……。

「ほぎゃあああああつ！？ わ、私の壮大な復讐計画があ！
やな感じいいい〜！」

お決まりのセリフを吐き捨て、どこか遠くへと消えてしまった。
そう、青空がキラーンと光ったのである。

それはつまり、明智光秀がお星様になったという事であろう。
明智光秀……謎多き武将だったぜ。もう一度戦国時代に生まれれば
変わるかもな。

頑張れ、明智光秀。敗北という言葉に負けるなよ！

「おお！ す、すごい……っ。あやつ、あの幽霊男を倒しおったっ」

「ふ、藤島っ……」

「んんっ……あ、あれ？ 私なにしてたんだっけ？ とうか何故
か家がボロボロだぞ！？」

明智家のメンバーが全員驚いている。

それといつのまにか、光雄のおやっさんが目を覚ましていた。
どうやら光雄のおっさん、明智光秀にとりつかれている間の記憶が
全くないらしい。

その為何故明智家がボロボロなのか、サッパリわからない様子である。

——そして。

「けーすけ様っ！」

「く、暮葉っ」

全速力で暮葉は駆けよってくる。俺との距離1mくらいの所で彼女は停止した。

彼女はとても心配そうな顔をしている。

「どうやら俺が勝ったのでやったね！と、いいに來たわけではなさそうだ。」

「だ、大丈夫なのですか！？ お怪我は！？」

「まあ若干痛むけど、この程度ならどうって事ないよ」

「そ、そうなのですか……っ。それにしても、さっきのけーすけ様……っ」

「ん？ どうかしたか？」

なんだろう、この思わせぶりな表情は。一体彼女は何を考えているのだろうか？

俺もいつの間にか、暮葉の考えている事を予想しようと、色々とおバカな頭を働かせていた。

「だけど答えを導き出す前に、暮葉が答えを語る前に――」

「ふ、藤島と木下っ」

「お、おう」

「な、なんでしようかつ？」

今度は俺達の所に、明智が歩み寄って来る。

「……あ……ありがとう」

ありがとう……か。

まあ……俺にとってはその一言で十分だ。

やっぱり、人にありがとうって言われるのは気分がいい。

「明智、よく頑張ったな。なんだかよくわからないけど、多分明智のおかげで光秀に勝てた気がするんだ」

突然強くなったのも、明智とキスをしてしまった後だしな。

考えてみれば、アレがファーストキスだったんだよな……。

だ、ダメだ。アレは事故なんだ……っ、自惚れるなよ。

「だ、だけど藤島には一番迷惑をかけたというかつ……えと、その……っ」

頬を少し赤らめ、宝石のように美しい蒼い瞳をうるっと潤ませる明智。

どうやら明智は、俺に迷惑をかけてしまったと思いこんでいるらしい。

全くと、そんな事気にしていたなんてな。

俺はそんな明智の肩に手を伸ばし、自信をつけるようにポンと手を置いてみる。

すると彼女は、その目を俺の目に合わせてきた。所謂上目遣いだ。

「迷惑だなんて思うなよ。仲間を助けるのは当たり前じゃないか？」

「なか……ま？」

「ああ、一緒に血を流したんだ。もう仲間じゃん俺達？」

「……そうだなっ」

「そうそう。だから迷惑だなんて思わないで欲しいよ。俺も暮葉もあたりまえの事をしたんだよ、なっ？」

俺はそう暮葉に話を振りと、暮葉も笑顔で頷いてくれた。それを確認した上で、再び明智のほうへと視線を戻す。

まだ話があるんだ。それも大事な話、とにかく俺は明智に謝りたい。

「それと、キスしちゃってごめん……」

「ふえっ！？ い、いやっ！ もう……気にしてないっ」

「いや、でもあれって好きな人とするものだろ？ ホントにごめん……っ」

「き、気にするなっ。あれは事故だ……仕方ない事なんだっ」

いや、事故でも気にするだろ普通……。

まあ、あのキスのおかげで強くなったような気もしたけど。ホントになんだったんだろうか、さっきの？

まるで別人みたいに身体が軽かったし、視力も異常に高くなっていた気がするなあ。

今まであんなに動けたこと、なかったのに……。

「……藤島っ、お相子だっ」

「は？ お相子？」

「ああ、私は藤島が変態だという事はもう気にしていない。だから……そのっ、変な事は気にしないでほしいっ」

「ここで変態関係なくねっ!？」

「くすっ……関係あるんだぞ、世界で一番心強い変態さんっ」

……いかんっ、この明智の笑顔が想像以上に破壊力高いっす。

あのクールな明智だが、やっぱりこうして見ると可愛いぞコイツ。

そこは流石、女の子という生き物だぜっ。

でも、世界で一番心強い変態さんってなんでしょうか？

正直言うとなんて微妙に褒め言葉じゃないような気が……。

ま、細かい事は気にしちゃいけないってシーンなのかな、ここは。

——それにつ。

「いやいや皆様、大変迷惑をおかけしました。じゃが幸い食材は無事じゃから、これからパーティーをしようではないかっ!」

どうやらこれから、パーティーっぽいしな。

確かに色々とボロボロだけど、でも折角なんだ。

細かいことは気にせず、思いっきり楽しんだほうが人生楽しいだろう。

「けーすけ様っ！ なに、ご飯食べれるのですかっ!？」

「ああ。昼は食べたけど戦って腹減ったろ？ 食おうぜ!」

「はいなのですっ！」

——こうして、昨日から続いていた、俺達にとっても明智家問題が解決した。

掃除の後、立派な食事が並べられ、俺達は楽しいパーティーをここで行う。

記憶がなかった光雄さんにも事情を説明し、本人は謝るも皆、光秀の影響だとわかっていたので彼を許した。さらに俺や暮葉にも謝罪の言葉が並べられ、当然俺達はそれを軽く許す。明智家と木下家の和解も会話1分以内で完了した。こうして、このパーティーは楽しいものになったのである。

すべてが解決し、みんなニコニコできる状態へとなったんだ。

そして——

「藤島っ」

「ん、どうしたんだ明智？」

「これからも、よろしくなっ」

「……おう！」

爽やかな笑顔で言ってくる明智に、俺も笑顔でハッキリと返事をしてみせた。

第19話、明智光秀の野望ッ！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「突然ですが、作者が旅に出ます」

暮葉「もきゅ！？ ほ、ホントなのですか！？」

伊吹「ちょ！ この小説はどうなるのよ！？」

圭介「ちよっと日高のほうに……」

暮葉「日高って誰なのですか？ そういえば噂で聞いたのですが、日高一派ってすごい集団が日本のどこかにいるらしいですよ」

伊吹「日高一派って極道みたいね……ていうか、日高って北海道の日高の事でしょ？」

圭介「仕方ないだろ……学校行事なんだから。つか作者曰く、なんでこの学年で修学旅行じゃなくて宿泊なんだよ、だそうだぜ？」

伊吹「それ、さり気なく作者の年齢バラしちゃってるわよね！？」

暮葉「もきゅ？ どういうことなのですか？」

伊吹「普通修学旅行って高校生なら——」

圭介「なお、木曜日になるまで帰ってこないの、更新はいつも通り0時と13時に予約掲載昨日ですが、その間に貰った感想な

どの返信は作者自宅不在の為、木曜日まで不可能なのでございますが、学生にならよくある学校行事なんでご了承ください」

伊吹「こらっ！　まだ私喋って——」

圭介「あ！　感想とかしてくれると俺らも嬉しいぜ？　ついでに暮葉と伊吹がスク水を着てくれるかもしれないぜ？」

伊吹「着るかばかあ！　無視すんなばかあ！　2回死ねっ！」

圭介「ぎゃあああううふおあっ！？　うぎゃああぐごがあおうお！？」

大吾「国宗、縞パンだったな……」

重原「どこかで見たことある光景だね……」

暮葉「けーすけ様！　スク水ってなんですか！？」

第20話、定番イベント

翌日、日曜日。

実は昨日、とんでもない事実が発覚したんだ。

それは暮葉曰く、俺にはアレクサンドルの能力が、先祖返りして宿っているらしい。

はあ、頭オカシインじゃね？

誰もがそう思う事でしょう。しかし本当にそうらしいのだ。

事実俺は明智とキスをした後、滅茶苦茶強くなっただろ？

アレが俺の能力、そしてアレクサンドルにもあったとされる能力らしいのだ。

暮葉曰く、アレクサンドルは特定の条件を満たすと、滅茶苦茶強くなったらしいのだ。

例えば異能の力を右手で打ち消すとか、性的に興奮すると普段の30倍まで能力が増すとか。

……おいおい！全部どこかで聞いた事あるようなのばっかだぞ！特に後者なんて……釘〇病の大吾が悶絶しちゃうだろ？

まあとにかく、そういう話があったんだよ。

つまりアレクサンドルの能力とは、『解放』というものらしい。

潜在能力を最大に引き出す、トンデモな力らしい。

魔法でもなければ、当然ある程度の科学技術が必要になる超能力でもない。

全く異種有能力……暮葉曰く、ロジーナの皇族で時々発現するらしいのだ。

ただし『解放』するには条件が必要らしい。

それが俺の場合、キスするかつ敵を倒したいという感情を抱く。そうする事により、俺の潜在能力が『解放』されるようである。

「全く……だったら最初から解放してればいいのに……っ」

そう呟いてみるものの、そうはいかないらしい。

暮葉曰く、あまりに強大な力な為、どうも日常生活に支障を来すらしいんだ。

だから普段はリミッターがかかっている。

身体が丈夫で回復力が高いのは、リミッターがかかりきらなかった為らしい。

ホントがどうかわからん。つか胡散臭いけど……まあ確かにキスをした瞬間、強くなりましたよ。

というわけだから信じてやる事にしたんだ。考えるのも面倒だしね！

「さてと、風呂でも入ろうかな」

晩飯後、丁度我が家ではお風呂の時間である。

実は俺、わりと風呂好きなんだ。旅行とか行ったら絶対風呂は長い。だから修学旅行とか最悪だ。短い上に裸の野郎がいっぱいなんだぜ？風呂は静かな所にゆっくり浸かるのが一番なんだよ！

と、というわけで我が家の風呂は、それなのに落ちつくのである。

脱皮……もとい全ての服を脱いだ俺は、生まれたままの姿で風呂場へ突入する。

——だが、しかし！

「……も、もきゅっ？」

火照った身体、僅かに上気した頬、濡れた髪……。

そんな感じの暮葉が浴室にいました。しかも全裸です。

もちろんタオルなんてしていない。そもそも家の風呂で隠す必要性もない。

つまり、彼女は本当に産まれたままの姿なのだ。

「は……にゃ……わっ……あっ」

「……………」

嫌な沈黙である。わなわなと身体を震わせ、みるみる赤くなってゆく暮葉さん。

まずい、叫ばれると非常にまずい。女の子が叫ぶ＝無条件で男は犯罪者という図が社会には存在する。

つまりここで叫ばれれば、俺の人生はコンスタンティノープルの陥落。つまり終了というわけだぜ。

じゃあどうすりゃいいんだよ……ああ、一つだけ生還の方法がある。あまり使いたくはない手段だが、生きる為には仕方がない！

「きゃあああああああああっ！」

そう、腹の底から思いっきり叫んでやったのだ。

当然叫んだのは暮葉ではなく、俺である。

つまり言うとな、先に叫んだ方が勝ちなのだ！

「もきゅっ！？ どどど、どうしてけーすけ様が叫ぶのですか！」

「アホ！ 裸を見られたのは俺もだ！」

言いながら近くにあるタオル等を拾い、大事な所等を隠す俺達は正

に真っ裸。

二人とも母親のお腹の中から出て来たばかりの、ありのままの姿なのであった。

濡れた髪、成熟しきっていない身体。まだ幼さの残る彼女、そこに底知れぬ美しさが秘められている。

そんな暮葉に、素晴らしい魅力を感じてしまった俺である。

「誰も乙女なけーすけ様なんて期待してないのです！」

「誰が乙女だっ！ モノだってちゃんとしてたろうが！」

「とにかく変態です！ けーすけ様は明智殿の言う通り、世界で最もHENTAIさんなのです！」

「探せば俺以上の変態はいるよ……つか、結局俺が悪かいっ！」

「あたりまえなのです！ この変態皇太子様っ！」

いかん、緊急回避として俺が叫んだのに、なんだか俺が悪い方向に話が流れ始めている。

このままだと、本当に人生がビザンツ帝国のように終了しちまうぜ。なんとしてでも逆転勝利し、身の潔白さを証明せねば！

「落ちつけ暮葉。これは事故、不幸な事故なんだっ」

「い、今更謝ったって遅いのですよっ！」

「じゃあどう責任取れと！？」

「せ、責任取って一緒に入ってくださいっ！」

……ん、ちよいと待てよ？

そのセリフは色々な意味でおかしいと思いませんか？

女の子から一緒に入って……だどっ？

「はいいいひいひいっ！？」

あまりの衝撃に奇声を発してしまったよ。

えーっと、やっぱりなんだよコレ。ただの天国じゃねえか！

でも、考えて見れば俺の理性と暴れん坊將軍がまずい事になっちゃうじゃねえか！

やべェよ俺の理性が！どっかにぶっ飛ばないようにしねェとまずいぜ！

——というわけで、藤島家のそれほど広くもない浴室。

俺と暮葉は同じ浴槽に浸かっていた。

当然裸を見るのはまずいので、お互いに背を向ける形である。

それでも……時々暮葉の生々しい背が触れて……っ。

「……………っ」

「み、見ちゃダメなんですからねっ」

「だが断……げふんげふん！ 見ねえから心配すんな」

「……怪しいのです」

「怪しくねえよ、絶対見ないから」

待て、落ちつけえー^{リアル}現実^{リアル}に吞まれるな。

どうして責任を取る事が、二人で一緒にお風呂へ入る事なんだよ。女の子と嬉し恥ずかし一緒に入浴って……これなんてエロゲ？

確かに滅茶苦茶嬉しいよ。すっごく緊張して、心臓が先程からバクバクうるさい。

ドキドキするし、男として大切なエッフェル塔の制御だって大変だ。大変そうに見えるけど、本能的にそれくらい喜んでいるわけですよ。だけどおかしいと思うだろ。どうしていきなり一緒に入浴なんだ？ どうしようか、ここはストレートに訊いてみるべきなのかな？

「な、なあ。俺、一緒に入る必要あったのか……？」

「あ、ありますっ。罰ゲームなのですからっ」

へえ、罰ゲームなのかあ。それってむしろ暮葉のほうじゃ……。

だってその……すまん、俺には混浴とかご褒美です。

でもこれって暮葉には苦痛なんじゃ……。

いくら護衛対象とは言え、俺の事を変態というくらいだ。

きっと好印象ではないだろう。だから嫌いな人と一緒に入る風呂は……。

喜んでいた俺が馬鹿だった。なんだか暮葉が心配になってきたよ……。

「あのなあ、女の子と入浴って全然罰ゲームにならないぞ？」

「そ、そうなのですか！？　だって葵さんがけーすけ様は変態だけど意外と純情だって……っ」

「お前……俺が鼻血を吹いて倒れると思ったのか？」

「は、はい……っ」

……バカだろ。普通に考えて女嫌いか現実女嫌いを除き、誰でもご褒美と思っちゃうだろ？

全然罰ゲームにならないし、しかも辛いのはどう考えても暮葉のほうだ。

好きでもない人と一緒に風呂なんて……エロゲーでも今時そんなのねえよ。

嫌い嫌いと言いつつ、実は主人公が大好きってパターンがほとんどだからな。

とにかく、今辛いのは俺ではなく暮葉だ。なんとかしないと……っ。

「そんなわけないだろ、それより暮葉はどうなんだよ」

「も、もきゅ？ 拙者ですか？」

「好きでもないヤツと風呂入って、嫌じゃないのか？」

「っ……無神経な人なのですね、けーすけ様」

「む、無神経って……」

そりゃあ何度も伊吹に言われましたけど……。

まさか、こんなちっこい女の子に言われようとは。堕ちねえ俺さんも。

「と、とにかくこれからお風呂上がるまで会話禁止なのですっ！」

「なにその理不尽な要求！？ 気まずいだろ！」

「もきゅっ！ こここ、こっち見ないてください！」

「うおっ!？ す、すまん!」

あぶねえ、一瞬振り向いて見てしまった……。

クソッ、なんて綺麗な肌してやがるんだよ。

おまけに触れると温かくて……ああ、精神的に辛い。
息子の暴走を抑えるのが辛いぜ……っ。

「……………」

「……………」

しかもホントに無言になっちゃったし……なんだこれ、滅茶苦茶気
まずい。

やっぱり何か会話くらいしたほうが……。

でも話題がない、そして恥ずかしくて言葉が喉を通らない。

やっぱり暮葉もそうなのかな。だからあえて黙ってるのか……。

「……あのっ、けーすけ様っ」

「あ?」

は、話振られた……さっき黙ってろって命令されたのに。
一瞬ドキッとしちまったじゃねえか。

「……昨日は、申し訳ございませんでした……っ」

「昨日?」

なんだ、突然?

コイツいきなり昨日の事を謝りだした。だけどコイツ、昨日何かや
ったっけか？

「はいっ、本来けーすけ様は関係なかったのに……拙者の力不足で
っ」

「……あのなあ。俺から首突っ込んだんだぜ？ おまえは気にする
必要ないんだよ」

「な、なのですがっ」

「力ならお前のほうがあるだろ？ ほら、俺って身体が丈夫な事だ
けが取り柄。別に魔法も超能力も使えねえし、変な能力はあるっぽ
いけど、それも滅多な事じゃ発動できねえんだろ？ つー事は普段
はただの高校生、いつでも実力のあるお前に比べりゃ、俺なんてカ
スみたいな存在だから」

自虐ネタって正直痛いが、暮葉の為には仕方ない。

それにこれは事実だ。実際俺は暮葉よりも遥かに弱い人間だ。

俺は身も心も弱い。だからあの時……あんな事になっちまったんだよ。
思い出したくもねえ……そして出来れば暮葉にだって知られたくも
ない。

知られれば、きっと俺の評価は真性のクズ野郎になるだろうから……
…。

「けーすけ様っ、そんな……自虐しないでくださいよ。けーすけ様
は強いのですよ」

「……弱いよ。たった一人をロクに守れなかったくらい」

「た、たった一人？」

「いや、なんでもねえ……っ」

女の子と風呂に入れて、幸せな気分……なはずなのに、次第に俺は鬱な気分になっていく。

たく、やっぱり弱いぜ俺は。もう終わったってのに何時まで引きずってんだ。

ていうか、なんで暮葉に言っちゃったんだろうな？

暮葉はそういうのを絶対心配するタイプ。だからこそ余計な心配はかけたくないのに……。

「……にゅふ、けーすけ様」

「なんだよ？」

「……弱いのでしたら拙者、けーすけ様を全力でお守りします！」

お守りするって、元からそれが目的の仕事だろ？

……でも、かと言って彼女の仕事の邪魔はしたくない。

それに、こんなに活気ある声で言われるとなんだか気分がいい。

「……ありがとう」

だから俺は、素直に彼女にお礼を言ってあげた……。

……ところで、いつまで入ってるつもりだろう？

そろそろ息子がホントに限界です！

第20話、定番イベント（後書き）

後書きトークコーナーは木曜日まで中止させて頂きます。
申し訳ございません！

第21話、部活入ろうぜ！ 前編

5月9日月曜日、放課後。

「ぶ、部長おおおおおおおっ！」

血と汗で汚れた黄ばんだ胴着を着た、二人の女の子。

一人は小柄で、もう一人はお姉さん体型。

だが、お姉さんのほうは完全に口から泡を吹き、伸びている。

オマケに白目だ、これは完全に勝負が決まっちゃいましたぜ……そして。

「にゅふふっ！ 勝利完勝パーフェクト勝ちなのです！」

笑顔で喜ぶ、小柄で愛くるしい外見を持つ女の子。

……さて、どうしてこんな事になったのでしょうか。

それは遡る事数時間前、お昼休みの事である……。

——昼休み。

小学生の頃、机を動かし班で一塊になり、みんなで談笑をしながら給食を食べた事がある。

今はそれが弁当や購買のパンというだけで、俺達は机を動かし皆で昼飯を食べていた。

主に俺や伊吹、小坂に重原についでに大吾。

そして先週から初高に通う事になった暮葉と一緒に食うメンバーだ。あと今日になって発覚したけど、暮葉って携帯電話を持っていたらしいんだ。

どうやって手に入れたかは定かではない。おそらくアルファ隊の活動の為だろうが……。

だが、それがわかったので今日の昼はアドレス交換会であった。

俺も暮葉の電話番号とアドレスをゲット。やった……母ちゃんや葵を含めれば、女の子6人目だ！

んで、その後も色々と談笑をしたのだが……ある時、伊吹が。

「そういえばさ、暮葉って部活とか入るの？」

そう暮葉に言ったのである。

思えばこれがすべての始まりだった……。

「もきゅ？　ぶかつ……って？」

「ああ、どこの学校にもあるけど、基本的には同じ趣味や興味を持つ人の集まり……かな？　ちなみに伊吹は剣道部で一番強いよ」

「こ、こら亜紀！　余計な事言わないでよ！」

前にも言った気はするが、伊吹は剣道部所属。

そして、今や部長を抜いて一番の実力を持つ、天才剣道少女なのだ。なんたって、あのバケモノの攻撃を受け止めるくらいだからなあ。

相当強いよ、伊吹は。

「そ、そうだったのですか！？」

「ま、まあ……一応よ一応っ」

「伊吹さん！　すごかったのですね！　思わず尊敬しちゃいましたのです！」

「ええっ？　え、えっと……ほ、褒めても何も出ないわよ？」

困ってるように見えるけど、アレは多分嬉しいのだろう。
だって顔が微妙に笑ってるもん。

「重原さんや大吾さんは何か部活やってるのですか？」

「僕はやっていない。ゴールデンタイムのアニメが見れない！」

「だから引きこもりって言われるのよ……」

「大吾に限ってはキモオタ乙だよな……うん！」

「ぐはっ！？　ふ、ふん！　現実女に言われてもショックじゃねえやい！」

うわぁ、女子からの評価すこぶる悪い。

まあ、似たような理由で部活をやらなかった俺としては。なんだか俺の事を言われている気がして……正直ヘコみます、ハイ。

「俺は家が忙しいからね、部活はやってないよ」

「でも重原は確か武道家だったわよね？」

「重原は大吾と違って、部活やってない動機が不純じゃないからOKだね」

「なんか僕との扱いの差がひでえ！　くそっ、なんで広ちゃんばかり！」

そりゃあ堂々と現実女の前で、現実女がクソッて言ったりゃあね。自然とお前の評価は下がるよ。ていうか俺も大吾の歪んだ愛はどうかと思うんだ。

まあ、俺も二次元は好きだけどね。事実あそこは楽園だしさ！

「けーすけ様はやってないのですか？」

「ん、俺？　俺はやってねえけど？」

「けーすけ、オタクだから体力に自信ないのよね？」

「いやいや、圭くんは馬鹿だから文化系に入っても脳が追い付かないんだよね？」

「てめえら人の事見下しすぎだろ！　確かに頭は自信ないけど体力は自信あるわ！」

これでも、陸上部に100m走で勝った事あるんだからね！

……まあ、中学時代の話だけど。流石に高校生にもなると差が半端じゃないね。

ていうか伊吹さん、俺で遊んでやがるな。その嫌な笑顔、絶対遊んでいる時の表情だ。

一方、暮葉はその琥珀色の瞳を輝かせ……。

「拙者も部活に入ってみたのです!」

ああ、部活に憧れちゃったよこの子……。

ていうか、部活に入るは俺の護衛放置だよね?

いいのか、職業的にまずいんじゃないのか?

……まあいいか、自分の身くらい自分で守れるし、暮葉にだって楽しみを与えてあげたい。

折角学校に通うんだから、やっぱりこの生活を楽しんで欲しいよ。

「部活って今時期入れたかい?」

「僕は知らん!」

「大吾は黙ろう? あたしの記憶だと、うちの学校いつでも入れたよね?」

「うん。来るものはいつでも拒まないっていうのが、うちの学校の部活だったわね」

そう、伊吹の言う通り、基本的に我が校の部活は来るものを拒まないんだ。

学年も季節もソイツの事情も知ったこっちゃねえ。やりたい人は楽しくやろう。

それが初芝高校の部活動である。しかも、地味に部活は強いほうである。

大会じゃよく上位にいるし。特に陸上部は前の大会まで決勝まで行ったらしい。

「じゃあ、今日あたりにでも許可取って見学に行ってくれば?」

どうせ他人事だしと、俺はテキトーに暮葉にそう言ってあげた。
うん、これは俺なりの優しさなんだっ！

「はい！　じゃあ一緒に行きましょうけーすけ様！」

「ちょっ！？　なんで俺まで！？」

「そうね、暮葉だけじゃ不安だし、あんたも一緒に入ってあげれば？」

「い、伊吹さん！？　どうして暮葉をフォローした！？」

どういう事だ。畜生、何故俺まで部活に入る展開になっているんだ？
しかも小坂や大吾達まで「それいいね」とか言いだすし。
ちよっと待てよ、部活に入ったらアニメ見たりゲームする時間なくなるだろ！？

「圭くん、部活入って友達増やせば？」

「な、なんだたったら剣道部でもいいのよ？　一からシバくから！」

「シバかれるなんてお断りじゃ！」

なんで少し恥ずかしそうに言うんだよ、伊吹さん！
どうせシバくのが目的な癖に。
ていうか、そこまでして剣道部に入って欲しいのかよ！

「拙者……けーすけ様と一緒にのほうがいいのですっ」

「ほら、木下さんだってそう言ってるじゃないかい？」

「ふん、部活なんて僕的にはリア充がやるもんだ。でも圭介だし、特別に認めるぜ！」

「逃げられないわね圭介。いつそオタク人生さよならすれば？」

「圭くん、可愛いとこの頼みなんだから。ちゃんとお兄さんするんだよ」

「よろしくお願いします！　けーすけ様っ！」

「……なんでこうなったんだっ！」

……というわけで、俺まで部活に入らざるを得なくなってしまったのだ。

もちろん暮葉が入る部活にな。この日の放課後は、それはもう色々な部活を見回りましたよ。

まず最初に見学したのは、県内でも最弱を誇る――

「行ってくれ……頼むぞ。目指すは……甲子園だあああああああああああああああつ！」

熱い顔に熱い闘志、どこまでも熱い男が全力投球をする。

時速は110km/h超え、高校野球にしては高レベルであろう。汚れたユニフォームからは漢気おとこけを感じるぜ。

一方、バッターは黒いユニフォームを着用した、近所の古宇坂東高校の生徒。

「打たせるかよおおっ！」

バッターはバットを一振り。

カキンという音が響き渡ると、ボールは空高く舞い上がっていた。

「う、打たれたっ!？」

物凄くショック顔の少年……。

結局この古宇坂東高校との試合は、我が初芝の惨敗に終わった。

「うううっ!　こ、甲子園がああああっ!」

「畜生、せめて砂だけでも持って帰ろう……っ」

お前ら、その砂は母校の砂だぞ!？」

甲子園の砂じゃねーだろうが!

……ダメだこりゃ、初芝高校の野球部本格的に終わってる。

「けーすけ様、あれどうしたのですか？」

「ああ、うちの学校。野球部だけは滅茶苦茶弱いんだよ……今13
5連敗な」

他が強いのに何故野球部だけ、地元の弱小校にすら負けるほど弱い
んだろう？

ていうか高校の部活動じゃ、世間では野球が一番注目されるのに……。

北海道の高校すら野球のおかげで有名な所、あつたりするのになあ。
つまり言うとな、初芝高校は地元でしか有名じゃない高校なのだ。
でもさ、これだけ弱かったらむしろネタにならないんだろうか？

……ま、世間は雑魚には興味ないみたいだ。連敗記録がすぐくても

ネタになるわけないか。

「そもそも、野球部って女子はマネージャーにしかならねえぞ？

「もきゅ！？　　そ、そうなのですか！？」

「ソフトボール部があれば似たような事はできるけどなあ」

うちの学校、野球部が弱いせいでそういうのはないのだ。

その代わり水泳部とか相撲部とか、普通いらぬような部活はあるんだ。

理由は当然、強いのでそこその結果を残したからである。
ったく、いくら強いからって税金使ってまでプールと相撲部屋作るか普通？

「とりあえず次どこいく？」

「んん、伊吹さんは剣道部なすよね？」

「スマン、剣道だけは勘弁！」

「もきゅ？　　どうしてなすか？」

「いやあ、まあ……とにかく剣道部はダメ！」

俺がシバかれるし、剣が得意な暮葉が剣道部に入る＝最強フラグなのである。

つまり、伊吹の立場が危うくなってしまうんだ。

それでも伊吹が負けて自信を失ってしまったら……うん、流石にそれはいけないと思う。

部としての戦力は上がっても、伊吹がヘコンじゃったら元も子もない。

だから、暮葉は剣道部に入ってはいけないんだ！

「んん、けーすけ様がそういうのでしたらっ。それじゃあ……じゅーどー部ってなんですか？」

「お前……男っぼいのばっか選ぶな」

「知らないものには興味があるのですよ！」

ま、まあ暮葉は異世界人だし、日本にいたのは一ヶ月ちよいだからな。

まだ知らないことはいっぱいあるだろう。

そうだなあ。入るか入らないかは別にして、柔道がどんなものか見せるのはいい事だろう。

万が一入るとしても、柔道部だったら俺としてもやりやすいかもしれない。

「そっか、それじゃあ柔道部に行ってみるか！」

「もきゅ！ りょーかいなのです！」

こうして、俺達は柔道部に見学に行くことになったのだ。

……そして現在――

「ぶ、部長おおおおおおおおおつ！」

「にゅふふっ！ 勝利完勝パーフェクト勝ちなのです！」

「柔道部に行くなんて言った結果がこれだよ！」

その後柔道部に行って、俺達のごく普通に見学をしていたんだ。

そしたら暮葉が「やってみたいのです！」なんて言うので、部長が対戦相手になり、練習試合を始めたのであった。

そこまではよかったんだ……ところが、暮葉はアレでも戦闘のプロである。

流石はアルファ隊、そこらの高校生が敵う相手ではなかったのである。

部長は見るも無残な姿を晒し、無様にその場に伸びていたのであった……。

「けーすけ様！ 柔道って、意外と簡単なのですね！」

「お前なあ……」

「部長に勝っちゃいましたよ♪」

やべえ、部員の視線が冷たい。

というか、完全に暮葉を恐れている目だぞアレは……。
なんか、風当たりが冷たいですよ！？

「もきゅ？ けーすけ様、帰るのですか？」

「アホ！ 部長ボコボコにしといて長居できるか！ 行くぞっ」

「あわわわっ！ ま、待ってくださいけーすけ様ーっ！」

慌ただしく去ってゆく俺達に向けられた視線は、冷たいの一言であ

った……。

その後、テニス部にも行ってみたが、そこでも暮葉は大暴走。

なんと部長とのシングルスで勝利してしまったのだ。

その為その場に居づらい雰囲気となり、俺達は帰らざるを得なかった。

結局、この日の見学は無意味なものになってしまったのである……
……。

第22話、部活入ろうぜ！ 後編

5月11日水曜日……ん、部活はどうしたって？

まだ入ってないよ。何故なら……運動系の部活は全滅だからだ。

暮葉の神すぎる運動神経には、いくら経験者でもそこらの高校生が敵うレベルではなかったのだ。

中には新戦力として暮葉を招きたい所もあったが、今度は逆に暮葉が興味がなかったりで……。

一方暮葉が興味を示した所も、こんな恐ろしいのを入れれるかと暮葉入部を却下。

そんなわけで、結局俺達はどこの部活にも入っていないのである。

「もきゅう……ぶ、部活っ」

でも暮葉は入りたいみたいだしなあ、どうしよう？

でもなあ、もう暮葉を受け入れてくれる所なんて……。

いや待てよ。まだ文化系には足を踏み入れていないな。

「よし暮葉。今日は文化系の所いこうぜ？」

「もきゅ？ 文化系ですか？」

「ああ、うちの学校文化系のほうが種類豊富だぜ？」

それに俺としても、正直運動系より文化系のほうがいい。

別に体力に自信がないからとかじゃなくて、文化系のほうが楽しそうだし。

週に2回くらい、顔出しとけば問題はなさそうだからな。

正直に言おう。俺はホントは部活なんて入りたくないんだ。

……アニメ見たりゲームする時間がなくなっちまうからな！

「文化系……うん、行ってみましょう！」

「決まりだな」

……とは言うものの、実は文化系の部活なんてよくわからないんだ。伊吹は運動系だし、小坂に大吾に重原はそもそも部活をやっていない。

……そうだ、こういう時こそ我が妹！

アイツ、部活やってる友達とか多そうだからな。

それに暮葉が部活を探しているというのも知っているし、アイツに訊くのが一番だろう。

というわけで昼休み。俺達は1年3組、葵がいるクラスを訪れた。

「すみません、藤島葵さんって人呼んでくれますか？」

「ふじ……ひいっ!？」

あれ、なんか後輩に怖がられたぞ！

……もしかして、俺と 同じ中学出身なのかな？

中学時代は色々あったからな……仕方ない、ここは暮葉を使おう。

「けーすけ様……？ なんかあの人、けーすけ様の事……っ」

「あ、ああ。とりあえずお前が呼んでくれないか？」

「わかったのです。あの！ このお方は葵さんのお兄さんなのです。少し用事があるのですが、よろしいでしょうか？」

「お、お兄……さん？　わかりました……っ」

暮葉に頼まれると、後輩の女子生徒は渋々頼みを引き受けてくれた。やっぱり、俺と一緒に来るのは問題だったかな。

ていうか、まだ俺の噂って消えてないんだな。俺の評判がこのように、すこぶる悪いのには色々な事情がある。でも今は詳細は省いておこう。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！　あ、クーにゃんも一緒だ！」

「こんにちは、葵さん！」

「よお、呼び出して悪かったな」

「うんうんいいんだよ！　葵はお兄ちゃんの為なら脱いだっていいんだから！」

「そ、そうですかごさいましゅか……」

……ダメだこのブラコン妹、早くなんとかしないと。まあ、妹に好かれるのは悪い気分ではないけどね。

「ところで、お兄ちゃんこっちに来ても平気なの？」

「え？　ああまあ……軽く引かれたけどいつもの事だし、別に気にしてねえよ」

「そっか……大丈夫！　葵はちゃんと事情、わかってるんだからね！」

「お、おう。ありがとな」

たとえ周囲は悪い目で見ても、家族や友達は味方だ。下手に騒ぐと余計に状況が悪化するのは目に見えている事である。だから、俺は正直この現状でもいいんだ。

だけど困ったな。事情を知らない暮葉が心配そうな表情をしている。

「あ、あの。けーすけ様、どうかしたのですか？」

「あ？ いや、大したことじゃないし、別に気にすることないよ」

「なのでしたらいいですけど……っ」

やっぱり、暮葉には知られたくないな……。

もし知られれば、場合によっては俺はただの悪人だ。

さっきの後輩のように、俺を恐れてしまうかもしれない……。

「ところで二人とも、葵に用ってなに？」

「ああ、今暮葉が部活探しているのは知ってるだろ。それでさ、文化系の部活ってどんなのあったっけ？」

「クーにゃん、文化系に入るの！？」

「はい！ そのつもりなのです！」

「絶対運動系だと思ってたよ！？」

「お前、そりゃ偏見だぞ」

まあ、運動系に入ろうにも入れない状況になっちゃったのが事実な
んだけど。

それは葵に言っても信じてもらえないだろう。

なんにせよ、運動部に入れなくなってしまったのは事実だ。

しかし文化系なんて俺達は知らない。だから葵に話を訊くんだ。

「お願いします。葵さんだけが頼りなのです！」

「んんゝ……葵も帰宅部だし」

「もきゅ？ 葵さん部活やってないのですか？」

「うん！ お兄ちゃんの為にやってないんだよ！」

「け、けーすけ様の為になのですか！？ ……愛されてるのですね、
けーすけ様」

「正直ちつとも嬉しくねえ……」

それでも言う事聞かないのが葵だな。

まあ別に、帰宅部で悪いって事はないだろう。だから問題はないと
思うけど。

……ところで、帰宅部は内申点が下がるって本当の話なのかな？

社会に出ると、部活やってないテメエはクズって扱われるのはホン
トなのかな？

「すみません……葵さん」

「い、いやクーにゃんは謝らなくても！？ あ、そういえば葵の友
達に人数不足で困ってる部活があるよ？」

「え？ マジで？」

「何部なのですか!？」

「えーっと、写真部だよ」

写真部かあ、確かにあまり人は入らなそうだな。

それでも人数不足で困ってるって……そりゃ深刻な問題だな。

確か我が校の場合、部員数が半年足りない状況が続いた場合、廃部がサークルへ格下げされるんだよな。

廃部は当然部活自体が消えるし、サークルになると部費も出なくなる。つまり、全額自腹でなんとかしないといけなくなるのだ。葵の友達の部活……危機だな。

「写真部？」

「うんうん！ でも葵、写真部ってよくわからないんだよ」

「わかんねえのかよ！ まあ俺もわからんが……」

……とりあえず、写真を撮って何かをする部活だとはわかった。

多分そこまで苦勞する部活ではないだろう。

それに暮葉がいくらアホでも、流石にカメラの使い方くらいは覚えられるハズだ。

俺としても部活をするなら楽なほうがいいし、それを考えると写真部は案外いい所かもしれない。

「とりあえず行ってみるか？」

「はい！ とりあえず行ってみるのです！ 部活に入らないとニートになるって、大吾さんが言っていましたので！」

「そ、そうか……」

大吾……アイツ絶対某ガールズバンドアニメの話しやがったな。確かにあのアニメの放送以降、軽音楽部って人気になったよね。ウチの学校にも、突然軽音楽部なんてのが出来ちゃったくらいである。

例によって部員の大半は野郎で、しかもオタクなのだが……。

「それじゃあ友達に言っておくね！ きつと友達経由で部長さんに話が伝わると思うから！」

「おう、頼むぜ」

「お兄ちゃんとクーにゃんの頼みだもん。断れないよ！」

我が妹ながら非常に出来た妹である。

勉強もできる。スポーツも得意。交友関係も良好。その上明るくて人見知りとは絶対しない。

これでブラコンではなく、適度に仲のいい妹ならパーフェクトなものにな。

そんなmyシスター葵の案内もあり、放課後俺と暮葉は本当に写真部へ見学に行った――

第23話、写真部

……部室の前、確かに写真部と言う案内がある。

壁には写真部撮影の写真が数枚。どれも中々の傑作だ。

それなのに、人の気配はほとんどない。不思議な所である。

「ここが写真部の部室なのですか」

「てか、普通の教室だろ？」

文化系の部室なんて、吹奏楽とか美術とか以外は普通なハズだ。

でも写真部だしな。パソコンとかスクヤナくらいはありそうなものだ。

まあ、とりあえずは入ってみないとわからないな。

俺は扉を開け、「失礼します」と一言挨拶をし、暮葉と一緒に部室へ入る。

部室は普通の教室の半分程度の大きさだが、やはり写真部だけあって設備は整っているようである。

ノートパソコンにスクヤナ、プリンタ等はもちろん、奥には暗室なども存在していた。

あの暗室と思われる部屋にある機械……多分現像機であろう。

そして、部室中央にある机。その席に座っている2人の人物。

一人は男、細身で金髪のイケメン野郎だ。畜生イケメンかよ！

一方、もう一人は女子であった。もしかしてあの子が葵の友達かな？

「……っ?」

びくんっと俺達に反応する少女。

セミロングな緑髪。女子としては平均的な身長。ぱっちりとした瞳は茶色だ。

どこことなく大人しそうな雰囲気で、優しそうな女の子だ。しかも顔まであどけない。なんてことだ、これは美少女ではないか！

「やあようこそ、バーボンハウスへ」

「ぶ……部長。ここ……写真部ですっ」

「まあまあ青山くん、細かい事は気にしない」

……なんなんだ、コイツら？

部長はキザだし、青山さんという人はおどおどしている。青山さんは可愛いが部長はムカつくぞ。イケメンだしな。

「そんな事言うから……部員、いないんですよ……？」

「痛い所突くね青山くん……まあいい、そんな勧誘にホイホイついて来ちゃったのが君じゃないかい？」

「だって……写真好きですから……っ。部長が少し気持ち悪いのも我慢です……っ」

「ひどいや！ ボクそこまで気持ち悪いの！？」

正直……かなりキモいっす。

でもそれを言ったら殺されるし、今は我慢しておこう。

それよりもまず、俺達は自己紹介をしないと。

俺と暮葉は隣に並び、部長と青山さんのほうをしっかりと見る。

「あのー、俺達見学の者なんですが……」

「うん、話は青山くんから聞いているよ！　ようこそ写真部へ！」

葵のヤツ、ホントに青山さんって人に言っただな。

なるほど、だからさっきから俺達の事をチラチラと見ているのね。
キザな部長さんも、青山さんから話は聞いているみたいだ。

「は、始めまして！　木下暮葉と申すのです！」

「俺は藤島圭介っす」

「ボクは浅間英樹。あやまひじや射精部の部長さ☆」

「……写真部です。気持ち悪いですよ……部長」

「おっと失礼。ちなみにこちらはボク以外の唯一の部員、あおやまちはや青山千早くん
だ」

……部員数が足りない理由、なんとなくわかりました。きっとこの部長が原因であろう。

いや間違いない。こんなのが部長なら普通は引くぞ。

そうなると、青山さんの写真にかける情熱は本物みたいだな。

こんなキザで言動がキモい部長なのに、それでも写真部にいるんだもんな。

本人だってさっき言っていた。きっとその情熱は本物だ。

「よ、よろしく願いします……っ」

「は、はあ。よろしく願いします」

「よろしく願いますのですっ」

なんか、変な部活に来ちゃった？

いや、でも青山さんはマトモな人だし、変なのって部長だけだよな。

「まあまあ、そう改まらなくてもいいだろう。そこに座るといいさ」

爽やかなスマイルを浮かべ、空席に指を指す浅間部長。

なんだろう。イケメンだからか滅茶苦茶ムカつく……。

だけど冷静に考えれば、浅間部長って残念なイケメンだよな。

「ちなみに藤島くん、そこにエロ本あるけど読むかい？」

「別にいらないうすよ」

いや、ホントは欲しいんだけど暮葉や青山さんがいるし。

世間体を考えなければな。それを守ってこそ紳士になれるのだ。

「……部長っ、やっぱり……気持ち悪いですっ」

「けーすけ様といい勝負かもなのです……っ」

「俺はあそこまでオープン・エロじゃねえ！」

——それから数分後、浅間部長の暴走もようやくおさまり……。俺達は写真部の活動について、ようやく説明を受けたのであった。長かった……説明されるまでここまで時間がかかった事、今までなかったぜ？

これも全て、浅間部長が残念すぎるせいだろう。

青山さん曰く、浅間部長は真性の変態なんだとか。ちなみにあんな男でも3年、俺達よりも先輩である。

「具体的に写真部というのは、普段は各自で写真を撮影して、活動日にそれを皆で楽しく批評し合ったり談笑したりするんだ」

「……部長が嫌ですから、その……今は批評だけですけどね……っ」

わかるよ青山さん。その気持ち、痛いほどこの胸に伝わります。

「冷たいねえ青山くんは。まあ結論写真を撮って楽しくやろうというのが日常の活動さ。後は色々な技術が学べたりするね。そして文化祭や体育祭などの行事では、生徒が頑張っている姿を撮影するんだ。それを生徒会に送りつけて会誌に載せてもらったり、あと年に一度の校外展でテーマを決め、写真を撮影してそれを展示する。これが写真部の活動だよ」

浅間部長の説明を聞く限り、やっぱりごく普通の部活である。

その手の趣味の人にとっては楽しそうな内容だし、素人でも安心できる内容だ。

それなのに部員不足って……やっぱりこの部長が問題なんじゃね？俺や暮葉でさえ引いてしまう程の男だ。普通の人なんて目撃したくもないだろう。

あ、そんな事言ったら青山さんが普通の人じゃないみたいだな。青山さんはごく普通の人だと思うよ。

ちよっと控えめな感じだけど……正直そこがたまらないです！

「ちなみに今入部すると、安物だけどデジカメ1個。そしてこのエロ同人誌が当たるよ」

「もうダメだ……部長のせいで写真部廃部だよ……っ」

……な、なにいいいいいいいいいつ!?

えええ、エロ同人誌。しかもそれは北方projectの同人誌やん!

それも俺の大好きな……みよ、みよんじゃねえか!?

しかもそれって入手困難な限定版なハズ。何故浅間部長がそんなレア物の同人誌を持ってるんだ?

もしかして浅間部長、相当のオタクなのか。いや、それはともかく……滅茶苦茶欲しい!

あのレアな北方projectの同人誌が欲しすぎる!

「もきゅう……面白そうなのですけど……でもけーすけ様、どうしま——」

「よし! 入部しましょう!」

「……えっ!?!」

「ほ、ホントかね藤島くん!?!」

おお、浅間部長のイケメンフェイスがさらに輝いた。

これなら、彼の本性を知らない子なら一目惚れであろう。

さらに、あれだけ絶望していた青山さんまで驚いていた。

これはいい傾向だ。よし、このまま話を続けよう。

「ああ。妹から事情は聞いています。部員が足りないですよね?」

「ああ、ボクと青山くんを含めてたったの二人だね」

「部長が気持ち悪い事……するからですっ」

「ボクのせいかい!？」

「9割は部長のせいですよ……っ」

まあ、確かに青山さんの意見に同意だ。浅間部長はあまりにも残念すぎる。

折角宣伝に使えそうなイケメンフェイスが、そのド変態のせいで台無しである。

きっと浅間部長が真人間なら、写真部が廃部の危機に陥る事はなかったんだろう。

だけど、そんな浅間部長のせいで廃部になんてさせれないな。

青山さんは葵の友達。その友達は写真が大好きで写真部にいる……みたいだ。

だからそんな青山さんの為にも、写真部を廃部にさせてはいけない。我が校は4人入れば部として認められるんだ。だから俺は入るぞ、写真部に！

……それに、北方projectのエロ同人誌も欲しいしな。

「え、えーっと……まあとにかく、写真部は廃部の危機なんですよね。だったら俺達が入れば丁度穴が埋まります」

「けーすけ様……っ、そうですね。実は拙者もちよっと楽しそうだなーって思ったのです!」

俺の気持ちも暮葉の気持ちも整った。あとは、入るだけだ。それで暮葉が部活に入れる。青山さんの居場所を守る。

——そして、北方projectのエロ同人誌が手に入る。

「ですから俺、入部します」

「拙者も、よろしくお願いしたいのですっ!」

「藤島くん、木下くん……ありがとう。君達是我が写真部の救世主だ!」

「あ、ありがとうございます……先輩方っ」

浅間部長も青山さんも喜んでいる。

……よかった。これで暮葉が部活に入ることができた。

青山さんの居場所も守った。そして……北方projectのエロ同人誌も入手できる。

部活なんて初めてだけど、多分……。

——きっとこれから、それなりに楽しい日常が始まるのかもしれない。

「それじゃあこれ、入部届けは担任に提出するように」

「はい」

「ありがとうございます!」

……こうして、俺と暮葉の部活選びはこの日で終了したのである。

第23話、写真部（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「どうも、今回からこのコーナーまた復活です！」

伊吹「どうせ読む人いなさそうだけど」

圭介「こらそこ！ 夢をぶち壊す事言うな！」

伊吹「ああごめんね。むしろ後書きを楽しみにしていたり」

圭介「そういう事も言うな！ ていうか後書きだからってこんな話するなよ！ フリーダムすぎるだろ！」

伊吹「あんたもいつもこんな感じだったじゃない！」

暮葉「けーすけ様！ それより拙者はご飯が食べたいのです！」

第24話、ツインテールの女の子

——その後、乙坂に入部届けを提出した俺達は、正式に写真部の部員となった。

時間が時間だけに、提出して報告した後にすぐ学校を出たが……。うん、明日が少し楽しみだ。どうやら明日は活動日らしい。

今日は本来活動日ではないのだが、俺達が訪れるから特別に集まってくれたらしいのだ。

ちょっと悪いことしちゃったかな……。でも、結果的に暮葉は部活に入れたんだ。

写真部も救われたし、それに北方projectのエロ同人誌も手に入った。

……ちなみに、同人誌はちゃんと鞆に隠しております。こっそり浅間部長から受け取りました。

そんなわけで現在。あかね色の空の下、俺と暮葉は帰路を歩いていた。

「……なあ暮葉、今更だけどさ」

「けーすけ様？ どうされたのですかっ？」

「いや、ホントに写真部でよかったのかなあって。無理して合わせてたりしてないよな？」

「いえいえ！ 拙者はホントに本心から楽しそうだって思いましたよ」

「そうか。よかった……」

もし合わせていただければなら、申し訳ない事をしてしまったような気がするから。

よかった。強引な入部だけど本当によかった……。

「にゅふふ……っ」

暮葉は時々俺を顔を見ると、何故か嬉しそうに笑っていた。

「どうしたんだよ？」

「もきゅ？　けーすけ様って本当に優しいんですね」

「は？　なんで？」

「だってけーすけ様の入部理由って、二人の為なのですよね？」

「……ま、まあ」

確かにそれは合っている。浅間部長も青山さんも、居場所を失いたくはないハズだ。

それを守りたかったから俺は入部した。それはそうなんだけど……。言えねえ……北方projectのエロ同人誌が欲しかったなんて、絶対言えねえ。

それがもしバレてしまったら、俺は……破滅だ！

「にゅふっ……伊吹さんが必死になるわけです」

「は？　伊吹がどうしたんだよ」

「いえいえ、なんでもないのですよっ」

なんだろう。この嬉しそうな表情？

確かに、女の子に優しいと言われると嬉しいのは事実だ。

だけどどうしてここで伊吹が登場し、どうして暮葉が嬉しそうな顔を
をしているのだろう。

……わからん。恋愛フラグではないと思うが、やっぱりわからん。
暮葉が喜んでる理由って一体――

「いてっ!？」

――その時、俺は後頭部に痛みを感じ、思わず声に出してしま
った。

「もきゅ? どうしたのですか？」

「いや、今なんか後頭部に……?」

なんだろう。何かを投げつけられたような……。

それも小さくて硬いものだ。つかホントに痛いなあ、後頭部は人
体の急所なんだぞ。

ったく、一体何なんだ……ん?

なんだろう、このアスファルトに落ちている、白銀の輝く物体?
気になる物体を拾い上げ、よくこの目で観察してみる。

「けーすけ様、これって……」

「コイン……だな。しかもこれ、近所のゲーセンで手に入る――
いてっ!？」

「けけ、けーすけ様っ!？」

いってえー! 今度はこめかみにヒットしたぞ?

しかも落下したものを拾ってみると、やっぱりコイツ。

さっき俺の後頭部に直撃したのと、全く同じデザインだ。

「畜生お、どこのどいつの悪戯だよ？」

やられたこっちはいたんだからな。悪戯する側もちったあ考えろよ……。

そう思った、その時――

「どこのどいつの悪戯だ! と聞かれたら、答えてあげるが世の情け!」

どこかで聞いた覚えのあるフレーズが、どこから聞こえてくる。前後左右ではない。少なくとも俺と同じ高さにいるとは思えない。これは……上から声が聞こえてくる感じだ。

「けーすけ様! あそこ、人がいるのです!」

「あ?」

どうやら暮葉が人影を発見したらしい。

その暮葉が指差す方向へ視線を向けると、ブロック塀の上には確かに人間が立っていた。

輝くようなだ橙色のツインテール。若干ツンとした紅い瞳。小動物のように小柄な体躯。

そして獲物を狙う獅子の如く、俺を睨みつけている女の子。

友達になろう……って雰囲気じゃねえよなあ。敵意どころか殺意ま

で感じるぜ。なんだよアレ？

「世界の破壊を防ぐため、世界の平和を守るため。愛と真実の正義を貫く、ラブリーでチャーミーな仕置き人。そんなあたいの名前は浅間あかり！」

しかも構わずセリフを続けるし。

それ、大丈夫なのだろうか？著作権的に考えて。

だが、浅間あかりを名乗る彼女は、そんな俺の心配なんて完全無視。あの聞き覚えのあるセリフを続けたのだ。

「古宇坂をかけるあたいには、ホワイトホール、白い明日が待っている！」

「もきゅ！？ 正義の味方というより悪役に見えるのですっ！」

「お前……もしやミサイル団か！？」

「ちがう！ あたいは浅間あかりだ！」

ハイテンションだけど、怒ってばかりで血圧の高そうな娘だ。ていうか誰だよ、浅間あかりって。

一応初芝高校の制服は着ているが……俺はあの娘の事を知らないぞ。

「……もしかして、暮葉の知り合いか？」

「違うのです。拙者もあの人は初めて見るのですよ」

「じゃあ誰なんだよあの娘は……」

知らない人なのに何故、俺は敵視されているんだろうか。

サッパリ意味がわからんぞ。俺が一体何をした？

まさか……誰かによる、あの娘を使った新手の嫌がらせなのか？

「あたいの友達を蝕み、あたいの友達の部活まで荒らす気か！　この暴力害虫藤島圭介！」

「はぁ！？　誰が害虫だよ！　つーかてめえは誰ですか！？」

「だから浅間あかりって名乗ってるだろ！？　いい加減覚えろよな！」

あれ、おかしいぞ。こういうキャラどこかで見たことあるぞ。

もしかして浅間さんは、実は異世界から来た魔装少女さんなのかな？　魔装少女がいるなら、冥界のネクロマンサーさんとか居てもよさそうだな。

まあ俺の嫁はイカ……げふんげふん！　吸血忍者の健康系アウトドア少女だけだな。

「あの！　貴女はけーすけ様に何の恨みがあるのですか！？」

「お前！　お前は絶対、その下衆野郎に騙されているんだからな！」

「け、けーすけ様は変態ですけど詐欺師ではないのですよ！」

「フォローはありがたいけど変態は余計だ！」

余計に誤解される事を言うなよ全く。これだから暮葉は……まあ変態なのは事実だけどさ。

それにしてもホントに意味がわからん。なんで絡まれた？

一体、どこでこんなイベントが発生が発生するフラグを立てたんだ？

「暴力魔な上に変態だど！？ どうしようもないな……早く死ねよな！」

「いきなり死ねって何様っすか！？ あと暴力魔ってなんだよ！？」

「とぼけんな！ あたいは知ってんだからな。あんた、中学時代に見知らぬ先輩を半殺しにしただろ！」

「半殺しって何だよ！？」

いや、確かに中学の時にある意味では先輩である人物を、かなりボコボコにしたことはある。

だけど半殺しにしていけないハズ。ただ動けない程度に痛めつけただけである。

それにそれも、ちゃんとした理由があったんだ。

戦わざるを得なかった理由が……でないと俺、ただの不良じゃねえか。

とにかく浅間の言ってる事の8割は正解だが、ちよつと拡大解釈され過ぎだ。

「どこまでとぼけるつもりだよ、この悪魔！」

「悪魔とは失敬な。俺は紳士だぞ？」

「けーすけ様は変態なのです！」

「お前は黙っとれっ！」

ていうか浅間のヤツ、もしかして俺と同じ中学出身かな……。じゃなかったらあそこまで俺を敵視する人って……。うん、多分出身中学は同じだろう。

それと浅間って名字、どこかで聞いたことあるんだが……。

「こんなのがあたいの友達の兄貴なんてガツカリだ。友達の為にもあんたは粛清だからな！」

「女の子が粛清とか怖い事言わないの。つか、結局てめえは俺に何の用だよ？」

「粛清に決まってるだろ。それくらいわかれよ！」

どこまで魔装少女なんだよ。はぁ……。吸血忍者が俺の嫁として現れないかな。

出来れば一人称が俺の子が。あと冥界のネクロマンサーでもいいぜ？

「とにかく早く死ね！ 藤島圭介！」

「こんな所で死ぬるかよ……。行くぞ、暮葉」

「えっ？ あの人はいいのですか？」

「ああいうわけのわからない、人様に絡んでくる人は放置プレイが一番なんだよ」

「もきゅ？ そ、そうなのですか……」

相手が男の場合、そのまんま路地裏という選択肢もあったろう。だが、相手はまだ幼さの残る女の子である。

当然、路地裏なんていう選択肢を選べるわけがない。

まったく感謝しろよ。俺は基本的には女子に手を出さないの。

明智の時は特別だったんだからな……。

そういうわけで俺と暮葉は彼女に背を向け、この場から立ち去ろうとしました。

……ところが。

「男が逃げるなよ！ ああもう問答無用だ、喰らえっ！」

「いてっ！？ ちょ、あだだっ！？」

少女は俺を逃そうとしない。例のあのコインを何度も投げてつけてくる。

今度は後頭部のみならず、全身の至る所にコインの痛みを感じた。

なんということだろう。どこかの激戦地で突撃かけた時の気分だぜ。

ああそうだ、アレは間違いなく スチール・レイン 鋼鉄の雨だ。

「この！ この！ このおっ！」

「お、お前っ！ 超電磁砲 レールガン じゃねえんだから自重しろ！」

「うわっ！？ 変態で暴力魔な上にオタクかよ！？ やっぱり真性のダメ人間だ、友達の為に死ねよな！」

「元ネタ分かる時点でお前もオタクだろっ！」

まったくコインで攻撃とか、ホントにどこのビリビリ中学生だ！
ビリビリは可愛いが、あの子は正直ただの迷惑にしかならねえ！
というか誰だよ友達って。とりあえず中学の時の騒動で俺を嫌っているのは分かった。

だけど、それだけでこんだけやられるってわけわからん。

友達の為？じゃあ友達って誰なんだよ。全く……せめて納得できる説明してから攻撃しろよ！

畜生……こうなったら間合いを詰めて腕を押さえよう。

このままコインを喰らい続けていたら、俺の身体が変になっちまいそうだ。

……と、思ったけど。

「クソッ！　いてえっ！？」

「けーすけ様っ！　い、今助けるのです！」

おお、ここで救いの手が！

そうだよ、暮葉って俺の護衛が任務じゃん。

「た、頼む暮葉っ！　なんとかしてくれっ！」

「ふん！　女に助けを求めるなんて流石外道藤島。やっぱ肅清だな！」

テメエも女だろ——と、思ったその時。

「やめてよあかり！」

「んみゃ？　あ、葵……っ？」

はっ、葵だと……？

俺は目を開け、浅間の後方を確認する……。

するとそこには葵ともう一人、写真部にいた青山さんの姿があった

のだ。

も、もしかして……友達ってあの二人？

「お兄ちゃんを痛めつけないで……っ！」

「わたしも……せ、先輩はなにもしてないと思う……っ」

「んみゃっ？　で、でも……こ、こいつはいきなり人を殴る悪魔だよ？　あたいはそんな悪魔から二人を守ろうと……」

やっぱり友達ってあの二人か。まったく、どうして今日になって現れた？

……そういえば、今日昼休みに葵の教室に行ったな。

まさか、その時に俺の正体がバレちゃったとか言うんじゃない？

「そんなのあかりの勝手だよ！　お兄ちゃんは理由もなしに絶対そんなことしないもん！」

「わ、わたしも……事情知ってるからっ、先輩はそんな……悪人じゃないからっ」

えっ……ちょっと待て。なんで青山さんがそんな事を……？

「だ、だけど……っ、あの男は……っ」

「これ以上お兄ちゃんにひどい事したら……あかり、絶交だよ！」

うわっ、絶交宣言キター！これは浅間選手、人生最大のピンチなのでは？

……ていうか浅間か、あの浅間部長と混合しそうだな。

まあ、浅間って名字の人はどこにでもいそうだ。

それより、あの女の子のほうの浅間は、葵に絶交宣言をされた途端にうろたえ始めたのである。

やがて彼女は悔しそうな顔をして右拳を握りしめ、睨みつけるように一瞬で俺のほうへ振り向くと。

「藤島圭介っ！　い、いい妹を持ってるな……っ、きよ、今日の所は見逃すけど次の為に遺言書執筆と遺産分配やっつけよな！」

そんな事を彼女は俺にハッキリと告げた。

背は明らかに彼女のほうが小さいのに、まるで俺を見下すように人差し指を向けながら。

っーか遺言と遺産分配って、どこのビリビリ中学生だよ。

まあ、アレは一応初高の制服を着ているあたり、高校生なのだろうが。

「べーっ！」

うわぁ……ありや謝る気ナシだな。あっかんべーしながら去りやがったよ。

それをしている時の顔、可愛かったんだけどなあ。

ていうか、あの子も暮葉や明智に匹敵する残念な美少女だな……。黙ってれば可愛いと思うのに。全く勿体ないヤツであった。

「せ、先輩方……っ」

「お兄ちゃんとクーにゃん！　だ、大丈夫!？」

「もきゅっ！　拙者は実害ないのですよ」

「俺は散々コインをぶつけられたぞ。無傷だけど」

もし155mm榴弾砲にも匹敵する威力を誇る、そんな化け物コインだったら死んでたけどな。

増してや浅間がソレに加え、電化製品が全滅する程の電撃を出せる超能力者だったら……。

あるわけないだろうって油断はできないぞ。明智という超能力者がいるくらいだ。

暮葉だって不完全ながら、風の魔法を使いやがるんだ。

きつと電撃浴びせるような輩が、世の中に一人くらい居たって不思議ではないだろう。

「あの……あかりさんは決して悪い子じゃないんですっ」

俺が考え事をしていたその時、青山さんがいきなり浅間の話を振ってきた。

……まあ、根元から悪い子ってわけではないのは、俺にもなんとなくわかったよ。

本人はきつと、アレがいい事だと思ってやっちゃったんだろう。

「そうだよっ。あかりは本当は明るくて元気で面白くて友達思いな子なんだよ。きつと、あかりがお兄ちゃんの事を悪いと思っているのは……」

葵も青山さんと似たような事を言っている。アイツもこの二人に大切に思われてるんだな。

そしてこの二人の言う事も多分事実だ。アイツも普段はあんなヤツじゃないんだろう。

ただ葵の言う通り、俺が嫌われている理由は間違いなく、中学の時の………。

「わかってる。別にあの子に対して怒ってないから」

こんな状況を作った原因には間違いなく俺の存在もある。

あの子はきつと誤解している。だからこそ友達を守ろうと……。

根はいいが、もう少し大人しくしてほしかったぜ。

まあ、とにかくそういうわけで仕方ないんだ。だから俺はあの子に
対して怒っていない。

むしろ怒ってる相手は……その原因を作り出した……あの野郎だ。

……久々に隅々まで思い出した。怒りと悔しさが俺の脳や心を回り
まわっている。

でも、もうアレは終わった事なんだ。今更……何もする必要はない。

「……………っ」

暮葉や葵が心配そうな表情である。だけど、少し気になるのは……。

なんで青山さん、事情を知っているなんて言っていたんだろう？

俺と青山さんは初対面なハズ。仮に中学が同じだとしたら……俺を
嫌うハズだぞ。

そんな疑問を抱く中、あかね色の空は薄暗くなり始めていた……。

第24話、ツインテールの女の子（後書き）

後書きトークコーナー

風紗「過去作から読んで思ったんだが、この作者の書く主人公がほとんどダメ人間になってないか？」

圭介「は？　どういう事だよ？」

風紗「だって……」

・保坂充Ⅱわりと常識人

・橋立純Ⅱバカ

・日高恭介Ⅱ最強に馬鹿で元ヤン卑怯者、ただし歴代で最も端整な顔で男前。

・薮内遼一Ⅱ超が付くほど鈍感（連載時、あまりの鈍感さに非難轟々）

・上条春希Ⅱ自他ともに認めるヘタレ

・藤沢巧Ⅱ不幸でいつも喧嘩したり逃げたりしている上に、妄想癖でロリコン。

・藤島圭介Ⅱどうしようもない変態。犯罪者予備軍、女子にセクハラ発言余裕。

……マトモな主人公が最近、全くと言っていい程いないぞ？」

圭介「ちょっと待てい！　なんで俺だけ犯罪者予備軍なんだよ！？」

風紗「私、胸揉まれたし押し倒されたし唇奪われた……もちろん、合意なしに」

圭介「事故だろそれは！　もうそのネタ引っ張るのやめい！」

風紗「とにかく……藤島以上に最低な主人公はいない」

圭介「俺ってそこまでサイテー野郎だったの！？ どう考えても妄想癖でロリコンな藤沢巧が一番サイテー主人公だろ！」

伊吹「あんた達、元ネタわからない人の事考えなさいよ……」

風紗「すまなかった。でも藤島が最低の変態主人公だとはわかったろ？」

圭介「どうしてこうなっちまったんだよ！」

暮葉「けーすけ様！ 讃岐うどんというものを食べてみたいのです！」

第25話、波乱の一日 前編

5月12日、木曜日の早朝。

昨日のあの襲撃騒動の事を考えながら、目覚めると……。

「あ、起きた？」

なんだろう、物凄く久々な気がするんだ。

何故なら、俺のベッドのすぐ近くに伊吹がいたからだ。

中途半端に手が伸びている所、俺をこれから起こす所だったのだろう。

それにしても、GW前からずっと来ていないし、やはり久々に感じる。

「んん〜……ここは？ バサラタウンか？」

「なにパケットモンスターの事言ってるのよ。あんたの家でしょ？」

「ああ、そうだな……」

伊吹……コイツは今、俺らの昔の事なんて考えていないんだろうな。俺は今、物凄く考えているよ。昨日あんなことがあったせいか……。あの、浅間あかりって子が誤解をしている原因。

……ダメだ、伊吹の前でそれを考えちゃいけない。それを伊吹にバレてはいけない。

もう終わった事なんだから。俺らは皆忘れていたい事なんだから。特に……。

「……？ 圭介？ ねえ圭介ってば」

「……お、おう」

「ボツーとしてたけど、もしかしてどっか具合悪いの？」

「いや、なんでもない。朝飯食ってくか？」

「いや、私はもう食べたから。下で待ってるわ」

「おうっ」

アイツは変わらないな……まあいいけどね。

部屋から出て行った伊吹が、階段を降りていているようである。

あまり重々しくくない、むしろ軽々しい足音が室内にまで響いている。さてと……俺も起きようかな。いつまでも考えながら寝ているわけにはいかない。

学校をサボるわけにはいかないし、休みと皆に心配をかけてしまう。

——それから、俺らはいつものように3人で登校し、いつものように学校生活を送った。

授業風景は……まあ面倒なので省くでしょう。

どうせ、やっている授業なんてどこの学校と比べても、似たようなものである。

所詮は公立高校である。特殊な授業なんて、おそらく私立高校にでも行かないとないだろう。

……ん、グラウンドで体育をやっている。しかもアレは女子……なに、女子だと！？

「こ……これは……っ!？」

なんと女子が準備体操中だ。なんだこれ……すごく、エロスです。ああいうのをさり気なく鑑賞できるのは、まさに窓際席の特権。

フフフ……窓際席って幸せだ。クソッ、どうしてラノベの主人公はアレを喜ばないんだ。

普通の男の子なら授業より、あっちの体操中の女子に目がいくだろう？

ブルマーじゃないのが悔やまれるぜ。初芝は日本で最後までブルマーを使っていた学校だが、2004年を最後にとうとう廃止してしまったんだ。畜生、誰だよブルマー⇨変態衣装って決めつけたヤツは!

だが、うちの短パンはジャージ生地で紺色。横に白い線という定番のものまで存在する。

それはそれで中々いいものである。結局、露出度は制服着ているよりも高いのだから。

あの感じは一年生……ていうか、葵がいるじゃないか。

なんだよ……でも妹ながら葵だって女の子。見ているのは正直……たまらんぜっ!

そして、前列にいるのは同じ部活の青山さん。あの位置にいるのは出席番号の関係であろう。

青山さん、制服の時はわからなかったけど……中々美乳ですな。

大きすぎず小さすぎずのバストサイズ。俺好みすぎてグッジョブだ、よくそこまで育った!

あれ? 青山さんの隣にいるのは、もしかや昨日俺にコインを投げつけてきた……。

……浅間あかり。確かに美少女だが、全くだい印象がないな。

しかも浅間のスタイルは暮葉並に悲惨だぜ。吉備団子がぺったんこではないか!

はたして暮葉とどちらが大きいか、気になる所ではあるな。

いやいや、窓際サイコー！俺は今、超青春を謳歌しているぞおっ！

「センサー！ 藤島が女子の体育に夢中になってまーす！」

「なっ！？ く、黒木てめえ！？ はっ！？」

気がつくど、主に女子から敵意が込められた視線を向けられている。伊吹に小坂、そして暮葉までもがジト目であった。先生に至っては額に血管が浮いている。

そう、今は数学の授業。数学教師である野原数馬先生は鬼な事のほらかずまで有名である。

しかしやばいね。地雷踏んじまったよ！つーか、もしかして死亡フラグ立っちゃったかな？

「藤島圭介、テメエはまたそれか？」

「野オオオ原くウウウウンよオ！ そりゃ誤解だっつってンだろオ？」

「はあ……つか、本気でムカつくガキだよなあテメエは。やあシバきたいわ、滅茶苦茶シバきたいわー」

いかん！野原先生の野原くんモードが発動した。

あの人、たまりに某学園都市小説の木原くん化しちゃうんだよね。
その度に、俺が一方藤島フジシマを演じなきゃならないのだ。

「つーかよオ。オマエも男だろオが？ 女子の体操見たくらいで怒ってンじゃねエぞ三下ア？」

「そんなワケで廊下に立たせるわ。このクソガキイ！」

野吉良先生が俺の机に向かって走ってくる。

教師が教室を走るというのも、なんだかシュールな光景である。だが、俺と野原先生に限っては時々ある光景なんだ。

で、その野原先生は拳を思いっきり振り上げ、俺に突っ込んでくる。へッ、ナニ考えてんだこの馬鹿、さアどう料理して――

「ぐはあっ!？」

反射が、効いてねエ……あ、そうか。これって現実リアルなんだよね。

そもそも俺、ベクトル変換なんてできないじゃん。木原神拳とか意味ないじゃん。

結局モロに顔を殴られた俺は、そのまんま野原先生に引きずられ、廊下に放り投げられてしまったのである。なんとも情けない結果……俺vs野原先生の戦いは、野原先生の圧勝に終わった。

「根元から変態なのですね……っ」

「最っ低……」

最後に聞こえたのは、クラスメイトの笑い声。そして伊吹と暮葉の残念そうな声であった。

あはは。色々な意味で人生オワタ……。

――結局、数学の時間は殆ど廊下で過ごしてしまった。

畜生黒木め……いつか去年の宿泊の恥ずかしい話をバラしてやる。そんなわけで昼休み。野原くん事件のせい不機嫌だった伊吹に、「焼きそばパンを買ってくれたら許す」と言われたので、俺は購買で

焼きそばパンを購入していた。

畜生結構痛いぜ……150円消えた。校内だとペットボトル130円だが、外で買うと150円だぜ？

ジュース代が消えてしまった。5月とはいえ、関東地方はそれなりに気温が高いのだ。喉乾いた……。

「あっ……ふ、藤島っ」

「あ？」

おや、どこかで聞き覚えのある声だ。

背後から声をかけられた俺は後ろへ振り向く。

そこにはポニーテールが靡く、“風紀委員”の腕章が目立つ、背の高い女の子が立っていた。

ところで、風紀委員をジャッジメントだと思っちゃった俺は、もしかして病気なのかな？

「やっぱりっ、その変態オーラは藤島だ」

「変態オーラで判断するなよ！　つか変態オーラってなんですか！？」

「藤島が自然に発している、いかがわしいオーラの事だろう？」

「明智……あんた一体、俺をどこまで卑猥な人物にすりゃ気が済むの？」

「元から卑猥だろ？」

……ひでえ。明智は相変わらず、俺の扱いが変態の扱いであった。

まあ確かにそうだけどさ、実際に言われると悲しいよ。
よし、もう話題を変更しよう。とりあうずあの後明智家はどくなっ
たんだろう？

「そういえばさ、あの後お前の家どうなったんだ？」

「え？ ああ、光秀が父に乗り移る前に戻ったぞ」

「そっか。すべて元通りだな」

「うん。これも変態藤島のおかげだぞ」

「……はあ」

だから何度も言っているが、変態は余計だ！
俺をそこまで変態にしたいんですか！

「……なあ、藤島っ」

「ん？」

「そ、その……っ、藤島は私以外とキスした事、あるのか？」

頬をほんのり赤く染め、チラチラと視線を逸らしながら、明智はそ
んな事を聞いてくる。

こ、コイツ……いきなりキスの話題を振ってきやがった。
確かにしたよな。最近色々ありまくって忘れていたけど、俺は明智
とキスをしてしまった。

そのおかげで俺は『覚醒』し、光秀撃退には成功したが……。

「え、えーっと……あ、アレが初めてだ」

とりあえず俺は事実を伝える。

そうですよ、アレがファーストキスですよ。ロマンのカケラもないキスである。

「……ふふっ。そう、初めてだったんだ……」

「なんで喜ぶんだよ……はっ！？ お、お前！ 俺が今まで経験なかったからって笑ってやがるな！」

「ち、違うぞ！ そそそ、それに藤島にあるとなんて思ってなかったしな！」

「ひっでえ！ 事実だけどひどすぎる！」

いいですよどうせ……俺なんて、キスの経験すらないチェリーボーイですよ。

はあ……ファーストキスは好きな人にとっておきたかったのに。

……なんて贅沢言っていたら、永遠にできない気もしないでもないけど。

でも、色々な意味で残念すぎるファーストキスだったよ、アレは……。

「心配するなっ。私も……初めてだったから」

「……へ？」

あ、明智さん……それマジで言ってるのでしょ。

明智ほどの美少女が、アレがファーストキス？

マジですか。どうせリア充なんだろうって思っていたど、実は非リア充？

しかもキスが初めてって事は、今までそういうヤツがいなかったって事か。

「だからっ、心配するな……藤島の事、絶対笑わない。私も経験なかったら……っ」

マジかよ……ファーストキスを頂いてしまったのか。

それを聞いた瞬間、あの時以上の罪悪感を感じてしまったんだが。好きでもない人相手にファーストキスって……女の子的には辛いのか？

「明智……ホントにごめん」

「い、いいんだ！ あれは事故だってわかっている。こんな事聞いた私も私だっ、もう気にするなっ！ お、お相子だお相子！」

「大丈夫か、顔真っ赤だぞ？」

「ふにっ！？ ……だ、大丈夫。私は正常だ！」

いや、どう見ても正常には見えないんだが！

明智は普段はクールな子。なのに今は可愛い女の子だぞ？

そんなの、普段の明智なわけがないぜ。

「はわわ！ そ、そうだ。私はこれから風紀委員の仕事が……またな、藤島っ」

「お、おうっ」

妙に駆け足だった。今日の明智はいつもと違い、慌ただしい。冷静さのれの字すら欠けているように見えるのだ。

何か変わったよなあ……明智家騒動前はあるな事、なかったのに。やっぱりキスの事を気にしているんだろうか。って、あたりまえだよな。

大切なファーストキスを、変態と嫌う男に奪われてしまった。そんな女の子的に面白いハズがない。

やっぱり俺……明智にとんでもなく悪い事、しちまつたな。

アイツはお相手って言うてるけど、やっぱりちゃんと謝ったほうがいいかもしれないな。

……さて、そろそろ教室に戻るとしようかな。

「藤島あ！」

「げっ、野原くん……」

「さつき女子の下着が盗まれたという報告を受けたが、テメエが犯人かあ！」

「全然身に覚えがねええええええええええええええええつ！？」

……ダメだこりゃ、あと30分は帰れない予感。

で、教室に戻って最初に待ち受けていたものは……。

「遅い！」

「いや、すみません！ オバちゃん手際が悪いもんで……」

「購買で焼きそばパン買うのに、30分以上もかかるわけないでしょ！　もう昼休み終わりの時間よ！」

「ホントすみませんでしたあああっ！」

「そ、そこまで改まらないでよ！　わ、私が悪いみたいじゃん……っ」

……ツツパリ伊吹ちゃんの可愛い可愛い、ありがたいお説教タイムであった。

ああ、野原くんの尋問に比べりゃ、遥かに甘いね。

しかしなんだろう、今日はやたらと不幸だな。午前中だけで一日学校にいたくらい疲れたよ……。

第25話、波乱の一日 前編（後書き）

後書きトークコーナー

千早「は、初めて……後書きに出ましたっ」

圭介「そうか、青山さんは初めてだな」

千早「あの……なにをすればいいんでしょうか？」

圭介「そうだな、テキトーにふざければいいと思うんだ」

千早「ふ、ふざける……ですか？」

圭介「ああ、例えばな……次回も読まないと思ないと風穴あけるわよ!？」

千早「……………」

伊吹「はいはい、ただ痛いだけよ……ばか圭介」

暮葉「けーすけ様! 風穴よりも落とし穴を掘ってみたいのです!」

第26話、波乱の一日 後編

ふう……ようやく帰りのSHRが終わった。

さて、今日は写真部の活動日だったな。

正式な部員としての初の活動だ。と言っても、まだ写真は持っていないが。

一応我が家にカメラは二つあるんだけど、まだ何も撮っていないんだよね。

まあ今日は大した活動はしないだろうし、正直どうでもいいだろう。

「あれ？ 圭介と暮葉は部活？」

「はい！ 伊吹さんもなのですか？」

「うん、私もこれから剣道部があるから」

伊吹は剣道部最強。今日もきっと、伊吹のせいで部員達の悲鳴が空高く響く事だろう。

頑張れ、強くなるには伊吹を超えようとするしかないぜ。

まあ、出来れば伊吹には最強で居続けて欲しいけどな。

それが、彼女の自信にも繋がる事だから――

「そっか、まあ頑張れよ」

「け、圭介に言われなくても頑張るわよ。あんたこそ部活中に寝たりしたらダメなんだからね！」

「俺にはキツいっすね伊吹さん！？ 流石ツツパリや……」

「ツツパリ言うなばか圭介っ！」

あゝあ、ツツパリ伊吹ちゃん行ってしもうた。
さてと、そろそろ俺達も行こうかな。

「もきゅう、伊吹さん行っちゃいましたね」

「そうだな。俺達もそろそろ行くか」

「はいなのです！」

そんなわけで、向かった先は写真部の部室。部員は俺を含め、僅か4人の弱小部であろう。

まあ、そもそも写真部なので弱小とか関係なさそうなのだが。

部室に入ると、そこには浅間部長と青山さんの姿があった。どうやら先に来ていたらしい。

机には数枚の写真が並べられているが、写真を見ているのは青山さんだけで、浅間部長は写真ではなくエロ同人誌を鑑賞していた。なんというか……部長として論外だ！

「やあ、ようこそ夢の国ネズミーラ——」

「写真部です……」

「社会の窓部へ」

「部長……いっそ、死んだほうがいいかと思えます……っ」

ダメだこの部長。相変わらずこのノリだよ！

絶対この写真部が廃部の危機に陥っていたのって、1割がマイナー

なイメージだとしたら、残りの9割は浅間部長のド変態のせいだね？

でも浅間部長。そこまでオープン・エロだと……むしろ尊敬するッス！

「こんにちはなのです」

「どうもっす」

俺らも一言挨拶をし、自分の席へとつく。

俺の隣は丁度浅間部長……うわっ、随分ときわどいの読んでるな。青山さんだってここににいるのに、やっぱりエロ同人誌は自重したほうがいいんじゃない？

「ところで藤島くん！ これを見たまえ……素晴らしいと思わないかい！？」

「アア……マア、イインジャナイデスカー？」

浅間部長が見せつけてきたものは、それはもう口では言えないくらいエロい同人誌である。

これはアカンというか、アブノーマルすぎやろ！

なんというか……あまりにもひどすぎる！

もうエロを通り越して気持ち悪いとすら感じる！

流石の鍛えた変態である俺も、これにはドン引きしました……。

「欲しいかい？ 今なら3000円だね」

「そんな高額払ってまで気持ち悪い欲しくくないですよ！」

「部長……最低です」

「けーすけ様でもドン引きって……どんな本のですか」

「ん？ 見るかい木下くん!？」

「見ないですよ!」

「部長……女子にそういうの見せるのって、どうかと思います……」

これがまあ、あたりまえの反応であろう。

ていうか俺も付き合いきれなくなってきた。浅間部長、まさかここまで変態だったとは。

……とりあえず、俺も浅間部長に突っ込んでくべきかな？

うん、これ以上は女子が可哀想だ。

「部長、それ完璧セクハラっすよ」

「僕の辞書にセクハラなんて言葉はない!」

な、なんだってー！ー！ー！ー！ー！？

しかも何このカッコつけ。眼鏡もないのに眉間に指を当てているぞ？

「よいか。セクハラは性的嫌がらせという意味だ。だけどそれってなんだい？ どころへんからがセクハラなんだい？ 基準点……絶対の基準となる基準点が欲しい。だが現在それが無い、言わば定義が曖昧なんだよ！ 従って僕の辞書にセクハラなんて言葉はないのだ!」

なななな、なんて無茶苦茶な理論だ!?

そんなのあったら、セクハラが社会問題になったりしねーぞ!?

でもオカシイ。何かがオカシイ気がする!

なんだか、それは浅間部長のワガママによって生まれたトンデモ理論な気がするぞ!

「……やっぱり。部長は写真部の為に退部したほうがいいと思います」

「拙者もそう思うのです……っ」

とうとう女子から退部しろって言われてるし……。

まあ、言われても仕方のない事をしてたけどね。

「そ、そんな!?! 僕がいなくなったら写真部はどうなるんだい!?!」

「部長さんに代わる、新入部員を入れればいいと思うのですっ!」

「藤島先輩か木下先輩が部長になって……もう一人部員を募集しますっ」

「そこまで僕を追い出したいわけ!?!」

「「はい」」

「うわあああああっ! ふ、藤島くんっ! 木下さんと青山くんがセクハラしてくるう……!」

「浅間部長! 全然セクハラになってねえですから!」

この時、俺は素直にこう思ったのだ。

——よく今まで廃部にならなかったな。この変態写真部……。結局これから30分ほど、全く部活動らしい活動をしないうまま、時間だけが経っていき……。

俺はトイレへ行く為、一旦席を外して校内を歩いていた。

はぁ……俺と暮葉、もしかして入る部活を間違っちゃったのかな？でも北方projectのエロ同人誌は手に入っただし、それはすごく嬉しいんだ。

でも男の俺は耐えられるが、女の子の暮葉の精神が持つか……あんな部活にいて。

「とにかく……なんとかしないと、特に女子は精神的に苦痛だぞ、アレ？」

「あ、あの……藤島先輩っ」

「うおわっ！？ お、おう！」

し、心臓に悪い登場の仕方だったな！まあ、今のは青山さんだったから許すでしょう。

浅間部長だったら……えーっと、一発殴っていたかもしれないね。

ここは男子トイレ前。雑音は聞こえるが、近くにある女子トイレも含めて現在ここには誰もいない。

つまり俺と青山さんは今、二人っきりというわけである。

「あ、あのっ……お邪魔でしたか？」

「いや別に？ 今用も済ませた所だしな、手は開いているよ」

思えば青山さんとマンツーマンで話すのは、これが初めてな気がする。

そんな彼女は恥ずかしさから、少しだけ俯きもじもじとしていた。青山さんは浅間部長にはストレートだが、基本的には控えめな子みたいだ。

もじもじしている理由はそこであろう。

初めて二人きりで話す相手なんだ、恥ずかしくてあたりまえである。

「青山さんはどうしたんだ？」

「あ、わたしも用を……」

「そ、そうかつ」

頬を染めながら女の子が用。

すると確実にアレであろう。それを口にするのは恥ずかしいに決まっている。

「だ、大丈夫です！　もう……お、終わりましたからっ」

「そうか。じゃあ一緒だな」

「は、はい……一緒です……っ」

相当恥ずかしいんだな。なんだか時々会話が途切れ途切れである。それにしても、どうしてこんな純粹そうな子が、あの変態写真部にいるんだろう？

余程の写真好きじゃないと居れないと思うが……いっそ訊いてみるか。

「そういえば青山さん。青山さんは写真好きなのか？」

「え？ はい……撮影するの好きですよ。将来その……写真家になりたいんです」

「写真家かあ、いい目標じゃないか」

あの業界は厳しそうだけど、それでも撮る側は楽しいだろうなあ。
1000万とか稼ぐ人もいれば、50万しか年に稼げない人もいるらしい。
そんな厳しい業界でも、楽しんでやれるかもしれない、そんな仕事だろう。

「あ、ありがとうございます……っ」

「もしかして、それで写真部に入ってるの？」

「はい、技術を学びたかったです……っ」

「なるほど。通りで部長を我慢してまでやってるわけか」

「あはは……流石にもう一ヶ月は経ちますし、そろそろ慣れましたよ……？」

「そっか。まあ何事も慣れが大切だよな」

青山さんは春から写真部にいるんだもんな。流石にあの部長にも慣れたようだ
でも、俺らが慣れるにはもう少しだけ、時間がかかりそうである。

「藤島先輩は……どうして写真部に入ったのですか？」

「ん？ 暮葉が入るって行っただから、一緒に入ったんだよ」

「き、木下先輩……ですか？」

「ああ。暮葉はまだこっちに来てから日も浅いし、知り合いも少なくて不安なんだよ」

「そ、そうだったんですか……でもそれだと写真部、退屈じゃありませんか……？」

退屈か……考えたことないな。しかもそれなりに面白いし。

全く活動らしい活動はしていないが、所謂談笑というヤツが面白かった。

ロクな話をしていない気はするものの、それでも楽しかったと感じている。

つまり、部活を楽しんでいるのと全く同じ事であろう。

「全然？ 今日一日の感想、楽しかったよ」

「そうですかあ……っ」

青山さんはホッとしたように、安堵の表情を浮かべた。こうして安心してくれると、俺としてもホッとするな。

「……藤島先輩っ、やっぱり優しい人ですね」

「え？」

「わたし、知ってます……先輩がどうして悪く言われているのか。そうなってしまった原因をっ」

「あ、青山さん……？」

知っているって……やっぱりアレか、中学の時のアレなのか。

そういえば彼女、昨日も不思議な事を言っていたような気がするな。

“わ、わたしも……事情知ってるからっ、先輩はそんな……悪人じゃないからっ”

アレは俺の聞き間違いではないハズだ。

確かに青山さんはそう言っていたハズである。

という事は、青山さんはやっぱり事情を知っている。

「……………」

「っ……？ はわわっ！ ご、ごめんなさい……っ。先輩にとっては思い出したくもない話……ですよね」

「いや、別にいいんだけど。それより何で、俺が暴力魔だと害虫だのって言われる理由を知ってるんだ？」

「中学の時に友達から聞きました……」

友達って葵かな。まあ確実に葵だろう。

あの事件の真相を知っているのは、俺と犠牲者の他には葵と小坂しかないんだ。

他は誰も信じず、結果的に俺は中学時代の大半を、半ば孤独状態で

過ごしたのだ。

今でさえ俺の嘘の悪名が消える事もなく、浅間あかりのように俺から友達を守る為、俺との関係を引き裂こうとする人までいる。そんな事になってしまいうくらいの事を、この手でやってしまったんだ……。

しかも、結局犠牲者を満足に守る事はできなかった。ホントに……俺は弱い。

「そ、そうか……」

「はわわっ！　ご、ごめんなさい……先輩っ！」

「いや、青山さんが謝る必要はないよ」

こうなってしまったのも、すべて俺が弱かったから……。あの野郎の手から、犠牲者となったアイツを守る事ができなかったから……。

正義のヒーローになるって約束していたのに、最低だよ……俺は。

「せ、先輩……っ？」

と、いけないいけない。女子の前で弱い姿を見せるわけにはいかないな。

いい加減前を見ようか。もうアレは終わったんだし、今更後悔する必要もない。

多分、犠牲者もあの時の事はもう、あまり気にはしていないハズである。

「よし、そろそろ戻ろうか！」

「……は、はいっ」

だから、俺ももう気にしないでおう。

第26話、波乱の一日 後編（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「野オオオ原くウウウウウン！ オレは写真部にも入ったし、これで立派な学生だァ！ もう帰宅部なんて弱い生物じゃねェんだよオ！ あぎやはははっ！」

野原「テメエ……何言ってるかわかってんのかぁ、アァン？ 部活に入ったくらいで調子に乗ってると……潰すぞゴルァッ!？」

圭介「ぐわはあっ！ す、すみません先生！ 台本に書いてあ——」

野原「台本に書いてあるからってよお、何言ってもいいと思ってんのかぁ!？ ちなみになぁ……俺は校長職狙ってんだよ、どうだコノヤロオッ!」

圭介「ち、ちなみにですね。写真部には暮葉も入ってて——」

野原「暮葉ちゃんは可愛いからいいんだよおっ！」

千早「わ、わたしも……春に写真部に入りましたよ」

野原「良かったじゃん！」

大吾「……僕、こういうのどっかで見たことあるんだけど？」

暮葉「けーすけ様！ 台本より大根のほうがいいですよ！」

第27話、お客様vs店員大抗争？

写真部の活動……と言っても、殆ど談笑であつた。だがそれも終わり、俺と暮葉は丁度玄関で靴を履き替えていた。今日も暮葉と二人で帰り———と思いきや。

「あ、暮葉と圭くん」

「もきゅ？ 亜紀さん？」

「あれ、どうしたんだよ？」

突然、小坂がこちらに駆け付けてきたのだ。

確か小坂は頼りないながらもクラス委員、その関係で仕事があつたのだろうか？

小坂は帰宅部だし、そうでなければ説明がつかない。

なんにしても、もし仕事だとしたらそれは珍しい事だ。

だって、小坂は面倒くさがり屋の若干ニート予備軍だからだ。クラス委員をやっているのが奇跡と言っても、多分過言ではないだろう。

「フフフ。圭くんや、ちよろつと暮葉を借りるよ」

「もきゅーっ！？ せ、拙者をですか!？」

「このアホを一体何に使うんだ？」

「あたしの友達に是非暮葉を紹介したいんだよ。というわけだからヨロシク」

「もきゅーっ！　け、けーすけ様！　脱出不可能なですよー！」

あゝあ、暮葉が小坂につれてかれてしまった。

……まあいいか、サヴィエトの魔法使いさんが襲ってくる気配もないし。

俺としても暮葉には、もっとプライベートな時間を与えてあげたい。

「大丈夫だって、ちゃんと一人で帰れるから。友情育んでこいよ」

「な、なのですけどっ！」

「もっとプライベートを大切にするんだぞ！」

「け、けーすけ様あゝっ！」

こうして暮葉は完全に連れていかれたのである。

多分、その小坂の友達のと所に連れて行かれたのだろう。

いいじゃねえか、もしかすると友達が増えるんだしさ。

はあ……なんだか、暮葉のほうが後から入ったのに、友達の数では暮葉に追い抜かれそうだな。

さてと、そろそろ俺は帰ろうかな。

……思えば初めてな気がするな。暮葉が来てから一人で下校をするのは。

気がつけば暮葉はいつも隣にいた。隣で満面の笑みを浮かべてくれた。

それがここ数日で、あたりまえのものになりつつあった。

久々に暮葉がいないと、ある意味で新鮮に感じるな。そして、少し寂しくも感じる。

アイツってこんなに影響力のあるヤツだったのか……。

そんな想いを抱きながら、俺は学校を出て一人夕暮れの住宅街を歩いていた。

……腹減ったなあ。どっかでおやつでも買おうかな。
よし、そうと決まればどこかの店まで行ってみよう。

——そんなわけでやってきたのは、幹線道路沿いにあるマックである。

うわあ……丁度部活帰りの学生で溢れている。
これはちよつと、ハンバーガーを買うのに時間がかかるかもしれないな。

「いらっしやいませ〜!」

店員さんが営業スマイルを浮かべ、お決まりのセリフを言うってくる。
ちよつと待つかなどとは思ったのだが、実際そうでもなかったみたいだ。

席がないだけだな。まあハンバーガーは歩きながら食べるし、店で食べる必要性は皆無だ。

「ご注文はいかつ……」

「あ?」

……ちよつと待て、この小柄な店員さんはもしや?

「え、ご注文はいかがでしたしょう!?!」

間違いない。この小柄な体躯に橙色のツインテール。

やべえ……コイツは浅間あかりだ。なんでこのコイン女がこんな所に？

まさか、ここでバイトをしているんじゃない？

まずいぞ、ハンバーガーに何をし込まれるかわかったもんじゃない。

「ご、ご注文は……っ」

いかんいかん！いくら浅間つつつてもバイトはバイト。

邪魔をするわけにはいかないぜ。とりあえず注文しないと。

「じゃあ……ダブルチーズバーガーとポテトSを」

「ダブルチーズバーガーひとつと、ポテトSお一つでよろしいですね？」

「はい……」

なんか嫌な予感しかない……だって浅間の顔、妙に引き攣ってるもん。

それに敬語が棒読みだ。絶対これは何か企んでいるパターンだぞ。とにかく、浅間の行動に要注意である。

「スイートコーン一つ！」

「は、はあっ！？」

おいおいおいおいおいオイイイイツ！

今コイツなんて言った。絶対スイートコーンって言ったよな？

チーズバーガーとポテトSは何処に消えたんだ！？

「お客様」

「は、はい」

「他のお客様の迷惑、邪魔ですのでさっさとあちらに行きやがってください」

しかもまだ敬語ではあるものの、いきなり態度が悪くなった！
つーかなんですか、このザマアみると言わんばかりの笑顔！？
こんのチビ助え、完璧にお客様をナメてらっしゃるな。

いいだろう上等だ。大切なお客様をお粗末に扱うとどういう目に遭うか……。

社会の厳しさを徹底的に叩きこんでやらあつ！

「失礼、俺はダブルチーズバーガーとポテトSを頼んだハズですが？」

「え？ お客様は確かにスイートコーンと言っておられましたよ」

「いやいやいやっ！ 嘘つきは泥棒の始まりっすよ！？ 俺は確かにダブルチーズバーガーとポテトSを頼みましたって！」

「お客様。そろそろ移動してください。他のお客様の邪魔になります」

ぐうあああああ！

これは正直かなりムカつく。この客を客とも思っていないふざけた態度。

いくら個人的に嫌いな人のお客様だからって、この扱いは流石になりだろ！

ていうか、フツーに苦情言ってもいいレベルだぞ。

畜生……正義は必ず勝つ。意地でもダブルチーズバーガーとポテトSを手に入れてやる！

「ふざけんなっ！ 元と言えば貴女が注文と違うもの言っちゃうのがいけな——

「オイてめえ早くどけよ！ 迷惑なんだよコラッ！？」

「げっ……」

やべえ、俺の後ろに立っているリーゼントヤンキーさんの怒りが……。

ていうか、やっぱりこれって俺が悪人なの？

いやいや、俺は何も悪いことをしていない。むしろ悪いのはこのキュートな店員さんじゃ！

「てめえ話聞いてんのかよ、表出るか？ アアッ！？」

どうしよう。この小悪魔の成り損ないのせいで……。

ヤバイルートに突入した気がするぞ！？

畜生、ニコニコ笑いやがって。こっちは全然笑えないぞ？

食べ物全然出てこないし、ヤンキーさんには絡まれるし、もう色々最悪じゃ！

とにかく、ここは最善の選択肢を選択をするしかない。今の俺にとって最善とは……。

「スミマセンデシタネエ！」

爽やかな笑顔を浮かべつつ、怒りを込めたその一言。

浅間あかりとヤンキーさんに、その一言を打ち込むように言っていた。

そして俺は、明らかに不機嫌を装って店から出て行ったのである。……まあ、実際かなり不機嫌であったが。

——結局、俺はあの後コンビニでおやつを買い、テキトーにこちらの公園でおやつを食べていた。

畜生、あのマック二度といかないぞ。マックに行くにしても別なマックに行つてやる。

初めて会った時は怒ってなかったけど、今はホントに怒ってるぞ。いくら俺とは言え、あれが客に取る態度ですか。もう本気で嫌だぞアイツは。

「んみや？　そこにいるのは……変態暴力魔の藤島圭介！」

げっ……この聞きたくもない暴言のオンパレード。

間違いない、浅間あかり……バイト終えやがったのか。

「はぁ……散々人の事ナメといて、今度は何の用だよ？」

「せ、成敗の続きだ、察しろよな！」

「またそれかよ……もういいだろう？　さっきので参りましたよ」

「だ、ダメだ！　あたいはまだあんたを認めた覚えはないんだからな！」

なんて面倒くさい子なんだ……。

泣きまくる赤ちゃんよりも遥かに面倒かもしれない。

友達想いもここまで来ると重傷だぜ。

「認めるも認めないも、俺はお前の思っているようなヤツじゃない。アレには深い事情があつたんだよ」

「し、信じられるかそんなもんっ！ 本人の口ほど怪しいものはないんだからな！」

「じゃあもう信じなくていいから、頼むからもう俺に関わらないでくれよ」

「あ、あんたがあたいの友達に暴行しないって、しっかりきっちり約束したらな！」

「約束する。つか、あたりまえだろ……」

なんで葵や青山さんを暴行しなきゃいけないんだよ。

その時点でもう、ありえない事であろう。

いつから俺は、女子にまで問答無用で暴力を振るう、最低下衆野郎って事にされているんだろうか。

女の子大好きな俺だぜ。殺されそうとかそんなわけでもないのに、どうして暴力なんて。

つか、基本男にも振るいませんよ。問答無用なんて、それだと不良の中の最低男じゃねえか。

「ほ、ホントだな？ もし破ったらびりびりのばりばりのべっちゃんべっちゃんだからな！」

「へいへい……」

例えがよくわからない。まあ、とりあえず恐ろしい目に遭うって解釈すればいいのか？

……それにしても。そこで俺と遭遇してからずーっと、顔が赤い気がする。

それは果たして気のせいなのか？

どう見ても気のせいには見えないが……多分、突っ込んだら負けであろう。

「そ、それじゃあ帰るからな。後ろから不意打ちするなよ暴力魔！」

「するわけねえだろ……」

もう最初っから最後まで呆れっぱなしである。

ようやく彼女は後ろを向き、公園から去ろうとした。

浅間あかり。二度と会話をしたくない人物ベスト10に入るヤツだったぜ。

「……あっ」

あれ？

今、浅間のヤツがよろめいた気がする。

一応浅間もか弱い女の子の部類だ。心配くらいはしたほうがいいかな。

「おい、大丈夫か？」

「う、うっさい！ あたいは元気だ！」

元気かぁ。まあそれくらい元気があれば、確かに問題はなさそ――

……と思った、まさにその時であった。

「あっ……」

一瞬、彼女はバランスを崩したように前へと傾く。
一步二歩と、足を踏み、三步目くらいまでは頑張って歩き続ける。
だが、四歩目で彼女は完全にバランスを崩し、奇妙な音を立てた時には既に倒れていた。

「あ、浅間……？」

呼吸が荒いし、顔色もよくよく見ると悪い気がする。
倒れた彼女の額に手を触れてみると、熱い……。
平熱とは思えない熱を、掌に感じたのである。
まずいぞ、コイツ熱まである。ていうか、完全に力尽きたように伸びている。

「……………っ！」

ああもう、考えるのが面倒だ。確かに、コイツは散々な事をしてくれた。

でも、だからと言って弱っている人を放ってはおけない。
とりあえずなんとかしねえとな……！

第27話、お客様vs店員大抗争？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「ぶっちゃけ暮葉って魔法少女じゃないよね」

暮葉「もきゅ？　な、なんでのですか！？」

圭介「いや、魔法使わねえじゃん」

暮葉「し、失敬な！？　使う場面がないだけなのですよ！」

圭介「まあ、確かに使われたら近隣住民に迷惑だしな。お前の暴走突風魔法は」

暮葉「ししし、失敬な！？　拙者はちゃんと魔法を使えるのですよ！」

圭介「ほお、あの暴風以外にも？」

暮葉「もきゅ！　と、当然なのです！」

圭介「でも、展開的にしばらく魔法使う場面はねえと思うぞ」

暮葉「ひどい！　ひどいのですよーすけ様！」

圭介「書いてるの俺じゃねえし、苦情は作者まで」

伊吹「ついでに圭介に対する苦情も送っていいわよ」

風紗「そうだな。藤島は色々な意味で反省したほうがいい」

圭介「お前らひどすぎやろっ！」

第28話、アンタお兄ちゃんキャラだったの!?

俺のすぐ傍に、女の子がいるんだ。

先程までありあまる元気を全て俺にぶつけていた、そんな元気な女の子。

だけど……その子は息を荒くし、弱々しくその場に倒れ込んでいた。額を触るとすごい熱を感じる。38度……いや、39度あるかもしれない。

とにかくこのままではまずい。早くなんとかしないと浅間が危険だ。

……とはいうものの、高校生が保険証なんていつも持ち歩いているわけがない。

だから病院なんて連れていけない。じゃあ自宅？

ダメだ。コイツの自宅を俺が知っているわけがない。

クソッ、どうする。俺の家に連れ込む……わけにはいかないよな。

コイツは俺の事を一番嫌っているんだ。葵や暮葉が居た所で、俺がその後攻撃を受けるのは明白だろう。畜生、助けようがねえじゃないか！

「おや、そこにいるのは藤島くんではないか？」

俺が絶望していた、丁度その時。

金髪のイケメンフェイスだが、中身は真性の変態である残念なイケメン。

写真部の部長を務める浅間部長が声をかけてきたのだ。

制服姿にあの鞆。おそらく学校帰りであろう。

……そうだ、浅間部長に協力してもらおう！

「部長！ 丁度いい所に来てくれましたね！」

「おや、どうしたんだい？」

「手伝ってください。人が倒れたんです！」

「な、なんだって！？　って……あ、あかり！？」

「……え？」

その時浅間部長は馴れ馴れしく、自然な感じで彼女の下の名前を叫んだ。

……これは一体？

——それから数十分後、俺は浅間部長にどう見ても昭和中期に建てられた、超オンボロ一軒家へと連れてこられた。2階建ての狭い一軒家。

木造ではないにしろ至る所が変色していたり、所々にヒビが入っている。

相当の年代物であろう。風が吹きつける度に窓ガラスもガタガタと音を立てていた。

一応狭い駐車スペースもあり、そこには一台の乗用車もあった。

……アレ、古い型のブルーバードだな。まだ走ってたんだなあんなの……。

そして、中に入るとそれはそれは質素。地デジ化間近だというのにテレビはアナログ式のブラウン管。

テーブルではなくちゃぶ台で、座布団すらなく、誰かの仕事用机が居間には存在していた。

本当……なんというか、必要最低限のものしかない上に、どれもこ

れも年代物だ。

「ふう……お茶くらいしかないけど、礼儀だから出すよ」

「ありがとうございます。あの……あいつは？」

「あかりなら、部屋まで運んだよ。今日は元々風邪気味だったんだけど、その上過労だね……」

「そうですか……」

浅間部長はまるでお兄さんのようであった。

いつもはただの残念なイケメン。しかし、今だけはごく普通のお兄さんである。

……ていうか、もう名字から想像がつかしました。

「浅間部長。あの、もしかして……」

「ん？ ああ、ボクはあかりの兄だよ」

「やっぱりっすか……」

ンなこったろうと思いましたよ。最初から怪しかったもんなあ、浅間って名字が。

それにしても浅間のヤツ、どうしてぶっ倒れるまでバイトをしているんだ？

どう考えても、高校生があそこまでバイトをする必要って……。

「ところで、君はあかりとどういう関係なんだい？」

「どういう関係と言われると、まあ……一方的に恨まれている感じ？」

「恨まれている？」

「誤解があったんですよ……」

それも、解ける可能性が限りなく低い誤解がな。

「そうなんだ。それで君はこれからどうするんだい？」

「どうするって、どういう事ですか？」

「気になるだろう？ どうしてあかりが倒れるまで働いていたのか」

「まあ、そりゃ確かに……」

滅茶苦茶気になるな。こんな女の子がどうして倒れるまで労働をしていたのか。

どうして、風邪をひいているのに無理をしていたのか。

……なんでだろう。出来ればもう関わりたくないヤツだったのに、なんでそんなに気になるんだ？

「知りたいならば覚悟するんだな。それとも、このまま立ち去って一般人に戻るかい？」

「……部長、厨二展開になってませんか？」

「フツ。一度言ってみたただけさ……！」

なにカッコつけてるんですか、このおバカな真性変態部長は。

変態の上に高三の癖に厨二病とは……全く救いようのない男である。だけど……そんな部長の口からだとしても。

「それで、実際どうなんだい？」

「……教えてください、お願いします！」

事情は知っておきたいな。

一応浅間も葵の友達だ。俺は恨まれているし出来れば関わりたくもないが、だからと言って弱っている人を放っておけるほど、俺も残酷じゃないんだ。

——浅間家は親子5人のごく普通の家庭であった。

少し貧乏であり、ご覧のように家もボロボロではあったが、安定した収入もあって休日には一家で出かけるという、そんな仲良しな家族が存在していたらしい。

しかし、ある日父親が出張中事故に巻き込まれたらしい。首都高でルーレット族に追突されたようで大破炎上。父親がその笑顔を見せることは永遠になかった。こうして浅間家は安定した収入を失った。

まだ中学生だったあかりと下の弟の為、母と浅間部長が全力で働くが、それでなんとか暮らせる程度だったという。だが先日、母が病気で倒れてしまい入院。治療費はなんとかなるものの、子供3人で過ごすにはどうも収入が足りない。そこで部長の妹である、あの浅間あかりが週6でバイトを始め、兄である浅間部長よりも熱心に仕事を始めたのだという。

当然浅間部長はそれに反対だったが、何せ兄嫌いな妹は言う事を聞かないんだとか。つーか浅間部長、やっぱり嫌われていたんだな。

それでも所詮は高校生のバイトが2人。3人で暮らすには厳しい稼ぎであった。

増してやアイツは母が不在の中、浅間家の家事を全部一人でやっていたらしい。

その上、毎日母の所にお見舞いに行っていたんだとか。

そして今日は彼女も風邪気味であった。にも拘わらず彼女は無理をしていた。

限界ギリギリの貧乏生活。病気の母への心配。学校もあるのに週6というバイト。

風邪をひいていても無理をしている彼女……。

アイツ、意外と家族想いだったんだな。

いや、友達想いでもあるし、そこに俺が含まれていないだけで本当に他人想いなかもしれない。

その他人想いな彼女だからこそ、自分に鞭を強く打ち過ぎてしまったのか……………。

「全然……そんな風には見えないのに……」

「当然、人間には表の顔と裏の顔があるからね。ボクのように素で通っている人間は希少価値だろうさ」

……部長は生粋の変態だからな。

部室で女子が見ている中、フツーにエロ同人誌をニヤニヤしながら読む程の男である。

どんな人間も基本的に性欲には素直らしい。アレが素じゃなかったら少し疑うぜ？

「あかりは無理をし過ぎだ……確かに、ボクの稼ぎだけじゃ足りないかもしれない。それでもあかりはやり過ぎなんだ。それでも本人はボクの話なんて聞くハズもないし、だからボクは様子を見ている事しかできなかった。その結果がこれだね……」

「部長……」

アンタ、本当に真性の変態じゃなければいい兄貴だよ。

ちゃんと妹の事考えてるんじゃないか。

俺なんて特に何もしていない、むしろ妹に迷惑をかけているのに……部長、俺なんかよりもずっとお兄ちゃんやってるんじゃないか。

「さて、ボクは風邪薬を買ってくる。藤島くんはそろそろ帰らなくてもいいのかい？」

「薬って……金は？」

「ボクのへそくりを使うさ。流石に薬代をケチれはしないよ」

「でも部長がいない間はアイツ、一人じゃ？　　そういえば弟さんは？」

「ああ、弟は最近グレちゃってね。下手すると一日帰ってこない事があるから」

「……………」

兄貴は真性の変態で、妹は他人想い過ぎて暴走しがちで、弟は滅茶苦茶グレたヤンキーさんって……。

浅間家に真人間はいないんですか!?

でも弟が帰ってこないとすれば、本当にアイツは一人だな。
流石に病人を一人にするのはまずいんじゃないか?

……って、何考えてるんだよ俺は……。

アイツだろ。もう関わりたくないって思ったヤツだろ?

それなのに……なんだってこんなに放っておけないって思っちゃうんだよ。

………クソッ、仕方ねえなあ。救いの手を差し伸べるのは今回だけだからな。

「部長! 俺、部長が帰ってくるまでここにいます」

「藤島君? 君にも家族がいるだろう?」

「大丈夫です。少しズレた人達なので遅くなるって言えば、絶対納得してくれます!」

「君はあかりに一方的に恨まれているんだろう? それなのにそこまでするって……」

確かに、そんな状態なのにここまでするのは馬鹿げている。

そんなの自分でもわかっている。だけど、どうしても弱っているヤツを放ってはおけない。

たとえそれが、あんなヤツでもだ。

「お願いします部長。じゃないともしアイツに何かあったら、兄貴の部長はどうするんですか?」

「そ、それを言われると……うーん……」

浅間部長は相当思い悩んだ末、遂に。

「……わかった。藤島くんなら任せても大丈夫だろう」

「任せても大丈夫って……なんでそんなのわかるんですか？」

「当然だ！　ボクより変態じゃない君が危険なわけがない！」

判断基準がすげえアバウト……。

いや、確かに何もする気はないが……。

ていうか、犯罪行為にだけは手を染めたくないので何もしません。

「あ、ありがとうございます……」

「うむ、それじゃ出来るだけ早く帰ってくるけど、あかりの看病は頼んだ」

「はい！」

「では、ボクは行ってくる」

浅間部長は鍵を取り、そのまんま玄関へと向かった。

やがて扉が開け閉めされる音が響く。どうやら浅間部長は本当に外に出たようである。

……さて、俺も仕事をしないとな。

まったく、出来ればもう関わりたくなかったけど、今回はサービス残業だからな。

第28話、アンタお兄ちゃんキャラだったの！？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「今回は重大報告があるんだぜ？」

伊吹「何よ」

圭介「実は……キャラが増えたので、そろそろキャラ設定を載せようと思ったんだ」

伊吹「それって……私らのプロフィールよね？ プライバシーの侵害じゃないの？」

野原「テメエらはクズの集まりだ。クズにプライバシーなんざねえ。テメエらみたいなキャラの補充なんざいくらでもきく。大事な大事な企画を邪魔アすんならぶっ殺しちまっても構わねえんだよ。分かるかなあ。お前、今、一度死んだぞ？ 確認するぞ、分かってんのかあ？」

圭介「野オオオ原くウウウウウン！ そりゃ言い過ぎだろオがよオ！ オマエはキャラの重要性を全く理解していねえ。こういう系の話はキャラがいねえと話が成り立たねえだろオが。どんなモブだってちゃんとした意味を持ってんだよ！ それほど大切なキャラをいくらでも補充の効くクズ扱いしてンじゃねえぞ——」

野原「ハハッ！ 無駄だあ、テメエ一人くらい相手にすんのは簡単なんだよ」

圭介「チッ、ナメてンじゃねエぞ。三下がアッ！」

大吾「な、なんか今の圭介。僕らの為に戦っているように見えるぞ！？」

重原「相変わらず野原先生と会話する時だけ、口調が変だけどね」

暮葉「けーすけ様！ それより今日の晩御飯はなんですか！？」

第29話、漢（オトコ）の決意

浅間先輩が葉を買いに外出した後、俺は2階の浅間の部屋へと移動した。

ベッドなんて豪華なものがあるわけがない。当然彼女は布団で寝ている。

「人の寝顔って素直な表情になるもんどすなあ……」

寝ている浅間の表情は、苦しそうではあるがとても女の子的だ。ていうか息が荒いな。本当に大丈夫なんだろうか？

俺は浅間の額に掌を乗つける。やっぱり熱が高いように感じる。顔色もあまりよろしくはない。ったく……どんだけ無理していたんだよ。

生活が苦しいのはわかっている。ロクでもない兄弟ばかりでも、それでも家庭を支えたいという気持ちもわかる。だけど本人が潰れてしまったら何の意味もないのに……。

「あ、そうだ。暮葉か葵に電話しとかないと」

今日は浅間の看病で遅くなるかもしれない。

だから、あらかじめ暮葉か葵には連絡しておいたほうがいいだろう。得に暮葉は俺がいないと、仕事上まずい所があるかもしれない。

……そうだな、この場合は両方にメールでもしておこう。

俺は、『今日は私用により遅くなる。晩飯はあるとうれしいぜ』とメールを打ち、それを二人に送信した。……って早ッ！もう葵から返信が来たぞ。

何々、『りょうかい！ 早く帰ってきてね』か……ああ、なるべく

早く帰るよ。

葵に遅れる事1分、暮葉からも『了解なのです。念の為に、サヴィエトの魔法使いに気を付けるのですよ?』というメールが返ってきた。

「サヴィエトねえ……」

すっかり忘れていたよ。俺って一応身柄を狙われているんだよね。でもサヴィエトの連中は、俺の居場所を完全には突き止めていないらしいのだ。

だからだろう。こうして比較的平穏な日常を送ってられるのも。

……もし見つかったらどうなるんだろう?

まあ、見つからない事を祈って生活するしかねえよな。

「……あ、あんた……?」

ん……今、下から声がしたような……?

ていうか、この部屋にいるのは俺と浅間だけだ。という事は、今の声は間違いなく浅間であろう。

「よっ、目が覚めたのか?」

「んみゃ、ここあたいの部屋……えっ!? な、なんであんたがあたいの部屋に!? 襲う気なのかこの変態!？」

「誰が襲うか! 公園で倒れたのはどこの誰だよ……」

「た、倒れた? あたいが?」

「ああ。っーかお前、風邪ひいてるんだろ? 熱もあったし大丈夫

なのか？」

俺がそう問う相手、浅間の顔は若干赤い。

触ると熱かったし、やっぱりまだ熱が高いのだろう。

ていうか熱が下がるハズもないか。ただ一時的に寝ていただけなのだから。

「あ、あたいは平気だ。それよりなんであんたがここにいる？　なんであんたがあたいの家を知っている？　ストーカーか！？」

「ストーカーじゃねえよ。お前の兄貴、俺の部活の部長なんだけどさ、部長に案内してもらったんだよ」

「んみゃ……アイツが……？」

なんてひどい妹……兄貴の事をアイツ呼ばわりだぜ？

どうやら、浅間は現実世界リアルの妹タイプのようである。

これに比べたら……ブラコンな俺の妹は可愛いほうだな。

「お前なあ。ちったあ自分の兄貴に感謝しやがれ。お前の兄貴がいなかったら、今頃お前は公園で死んでたかもしれねえんだぞ？」

「……っで、なっ……なんであんたがいるんだよ？」

「覚えてねえのかよ。俺はお前と最初っから一緒にいたろ？　保険証がないから病院に連れていくわけにもいかねえし、俺の家なんて絶対に嫌だろ？」

「あ、あたりまえだ！　変態の家なんか——」

「でも、俺の家って事は葵の家。つまりお前の友達って事になるんだぞ？」

「っ……あ、あんたがいなかったら……行くっ」

よっぽど俺の事が嫌いなんですか、コイツは……。

まあ、それは仕方がないでしょう。どう足掻いたって誤解が解けるわけがない。

何も起こらないようにする為には、俺が大人しくするしかないんだ。だから出来ればコイツとは、あんまり関わりたくなかったのに……全く、本当に今回だけだぞ。

「とにかく、少しは兄貴に感謝しやがれ」

「……あんたは。あんたは……なにやったんだよ？」

「俺？ お前をここまで運んだただけだ」

「あ、兄貴は……？」

「お前の為に薬を買いに行った」

「っで、あんたは今何を……？」

「病人一人にできるかよ……弟はグレてるみたいで家にいねえし。だから看病してたんだよ」

俺は物凄く投げやりにそう説明した。

彼女は俯いている。それは嫌がっているのか、はたまた恥ずかしさなのか不明だ。

ただ彼女は俯き、決して俺にあどけない顔を見せようとはしなかった。

「……弟がグレてる？　なんで、あたいの家の事を……？」

「部長から聞いたんだよ、全部」

「ぜ、全部……っ？」

「ああ。かなり無理してたんだろ？」

「無理なんかしてないっ。それにあたいが働かなかったら生活費が……お母さんの治療費がっ」

「おいおい、話がおかしいぞ。浅間部長は確か治療費は大丈夫って言うっていた気が……。
どういう事だよ、こりゃ聞くしかねえぞ。」

「ちょっと待て。治療費はなんとかなるって……」

「……あんた、ほんとに全部聞いたんだなっ」

「ああ。部長が全部話してくれたから」

正直、申し訳ないとは思っている。

だけど、人の為に一人で無理をするヤツなんて……俺は放っておけなかった。

それに個人的には好きじゃなくても、コイツは葵や青山さんの友達だ。

だからこそ放ってはおけないんだ……余計に。

「……余計な事をっ」

「ごめん。でもそのおかげで見直したよ」

「み、見直したって？　どういう意味だよ？」

「ただの嫌な女だと思っていただけ、誰よりも他人想いで優しいヤツだったって所だよ」

「へ、変態暴力魔に言われても別に……嬉しくもななんともないっ」

「言われなくてもわかってるよ」

だけど、浅間がいい子だって思ったのは事実だ。

確かに俺の扱いはひどいが、無理して倒れてまでその行動をやめようとはしない。

そこまで人の為に強い意志を持っている。本当にコイツは優しいヤツだ。

だからこそ俺は言ってやりたい――

「倒れてまで無茶をするくらい優しいってのはわかった。だからもう無理はするな」

「なっ……いい、言ってる事が滅茶苦茶だろ！　兄貴は部活もあるし圭太はグレちゃってるし……あたいが無理しなかったら誰が生活費を稼ぐんだよ！　誰がお母さんの治療費を稼ぐんだよ!？」

やっぱり……コイツは今ハッキリと、お母さんの治療費って言ったぞ。

何かがおかしい。浅間部長は確かに母親の治療費はあると言っていた。

つまり、どっちかが嘘って事なんだよな。一体どっちが嘘だったんだよ。

「なあ……母さんの治療費って……？」

「兄貴は誤魔化してるけど、あたいは知ってんだよ！ 本当は全然足りない。あたいが働かなきゃ、手術をするお金がないんだから！」

「ほ、ホントなのか？ それ」

「嘘なんて言わないっ。お母さんは一回手術すれば治るのに……でも、お金が足りないんだよ！」

「……………」

俺は浅間の叫びに、思わず絶句してしまった。

浅間部長の言葉は嘘だったのかよ……じゃあ、全然お金なんて足りてねえじゃないか。

……って、浅間部長を悪く言っちゃいけないよな。

浅間部長は浅間に無理をして欲しくなかった。だからこんな嘘をついたのかもしれない。

それに浅間が気付いてしまったんだ。だから彼女はこんな無理をしたのだろう。

……けど、浅間は今がこの状態だ。これ以上無理をさせるわけにはいかねえ。

これ以上は浅間部長の為にも。葵や青山さんが心配しない為にも……。

絶対に、浅間に無理をさせるわけにはいかない……！

「……おい浅間」

「んみゃ？」

俺が静かに名前を呼ぶと、いかにも不安そうな表情をした彼女が顔を向ける。

「あと……何円だよ？」

「な、なにがだよ？」

「あと何円か聞いてるんだよ。手術に必要なお金は？」

「……10万。頑張って溜めたけど、10万円足りないんだよ……」

「10万か……」

学生からしてみればすごい金額だ。でも、世間からしてみればそんな金額できないのだろう。

それに学生二人のバイトじゃ、月収は10万に及ぶかすら微妙なレベル。

増してや3人生活しなけりゃいけないんだ。そんなのすぐに溜まるわけがない。

こうしている間にも、コイツの母さんの容体が悪化するかもしれない……。

とにかく残り10万円か……へっ、なんだよ。予想より難易度が低

くて助かった。

200万とか300万なら引いていただろう。でも、10万くらいなら……ッ！

「わかった。お前はしばらく休んでいろ、金は絶対なんとかする」

「なんとかするって……あ、あんた！ 何する気だよ！ やめろよな！？」

「不正な真似は絶対しねえ。だけど10万円は絶対用意するって約束するよ」

「あ、あんた！ 何をっ！？」

その時、微かに扉が開く音が耳に入る。

きっと、浅間部長が薬局から帰ってきたのだろう。

丁度いい、このまま家を出て今から資金を用意し始めよう。

「じゃ、俺はそろそろ帰るな。無理はしないで休んでろ、絶対に10万円はなんとかするから」

「あ、あんた……っ」

「じゃ、皆を大切にするのもいいけど、その前に自分を大事にしroyよ！」

俺は出来るだけ笑顔を作り、そう言い残して部屋を立ち去った。

……さて、これから先は少しかり本気にならねえとな。

ぶっちゃけ、10万円なんてどうやって手に入ればいいんだ？

バイトしたって最低2ヶ月はかかる。でも出来れば一週間以内に手

に入りたい。

……まあ、頑張るしかねえよな！

第29話、漢（オトコ）の決意（後書き）

どうも、作戦参謀です！

今回からキャラ設定的なものに乗せていききたいと思います！

伊吹「キャラ設定にまでパロディあるわよ……」

No1

ふじしまけいすけ

藤島圭介

イメージCV…間島淳司（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『とらドラ』高須竜児役

『これはゾンビですか』相川歩役

県立初芝高等学校2年4組在籍

ジョブ…馬鹿でオタクだけどたま〜に頼れる、自称『紳士』の変態

主人公

性別…男性

年齢…連載開始時点で16歳

誕生日…8月26日生まれ

身長…172cm

体重…59kg

趣味…エロゲープレイ、アニメ鑑賞、ラノベ読書、伊吹をからかう

好きな物…アニメ、エロゲー、女の子、ポテチ、平和

嫌いな物…勉強、野原先生、長ネギ、現実

その他…本作の主人公。ボケる事も多いがツツコミ役に回る事が多い。

実はロジーナ皇太子アレクサンドルの子孫。

先祖返りによりアレクサンドルの能力が宿っており、キスをする
能力解放モードになる。

普段はリミッターがかけられているが、身体が異常に丈夫で傷の回
復力も高い。

運動は得意だが学力は低く、無理して初芝に入った結果成績はい
つも赤点ギリギリ。

何だかんだ言って世話焼きであり、困っている人は見逃せないタイ
プ。

しかし変態な為、主に女子に『変態』と呼ばれ時には犯罪者予備軍
扱いされてしまう。

エロゲーで鍛えている為、キザなセリフは得意。

反応が可愛いという理由で、よく伊吹の事をからかっている。

実は過去に色々あったらしく、今でもその事を気にしているが……。

……まあ、ちょっと馬鹿でオタクで変態だけど本気を出すすごい
人です。

第30話、手っ取り早く10万円を稼ぐ方法

短期間で10万円を稼ぐ……普通なら無理な話だ。

とらゴンボールみたいに格闘大会でもあって、もし俺が格闘家に勝てたら10万稼げるかもしれない。

だが、それは非現実的な話だ。そもそも路上でそんな大会やってない。

仮にやっていたとしても、プロの格闘家に勝てるわけがない。

と、思いつつも。ぶっちゃけ金を稼ぐ方法なんて……。

「ただいま」

「おかえりお兄ちゃん！」

「けーすけ様！ 今日が遅かったのですね」

「ごめんな、ちょっとトラブルが発生したもんで」

「と、とらぶる！？ なんだんエッチな臭いがするね！」

……ああ、当然絶句したよ。葵が想像しているのは多分漫画のトラブルだろうね。

俺的に美柑は妹キャラだけど可愛いと思うんだ。

やっぱり妹と言えども、二次元になると精度が大幅アップだね。

まあ、話を戻してこの程度の勘違い、葵だけなら問題がないんだが……。

「けーすけ様がエッチなトラブル！？ へへへ、変態！ 今度は誰

を襲ったのですか!？」

「ねえ暮葉さん! どうして俺が加害者だって前提なんですか!？」

「だだだ、だってけーすけ様。明智殿の胸を……っ!」

「ホントなの!? お兄ちゃんダメだよ! そんなことするくらいなら葵の胸を——」

「もうお前らしい加減にしてくださいッ!」

どうしてだ、なんでいつも下ネタ展開に行くんだろう?

俺も変態だが、身の周りの女子のほうがよっぽど変態じゃねーか! ……そんなツッコミを入れてみたいのだが、賛同してくれる人がいなさそうなのでやめておこう。

——その後、俺は自室に戻り作戦を練っていた。

如何に短期間で合法的に10万円を稼ぐか。これは俺にとっては大きな課題である。

アイツと約束したからには、この約束は必ず果たさなければならない。そうは簡単に言ってみるが、現実とは二次元よりも厳しいものだった。そう、現実というクソな世界はそんな簡単に10万円を稼げるようには、できていないんだ……。

「困ったなあ……」

ああもう、格闘大会やるならどんな強いヤツ相手でも戦うよ! ゲーム大会やるんだったら、どんなクソ強いプレイヤー相手でもやってやる!

とにかく、手っ取り早く10万円を稼げる方法を見つけない。

アイツの為にも、浅間部長の想いの為にも、友達を心配させない為にも！

でもどうすりゃあいいんだ！

「……んっ？」

-google先生で賞金10万円を検索をしていると、丁度いい情報が掲載されている事に気付いた。

房総丘陵トレイルランニング30km、優勝者には賞金10万円……おお！

5月15日早朝受け付け、10時にスタートし制限時間は5時間。

「これだ！」

トレイルランニング。、ランニングスポーツの一種で、舗装路以外の山野を走るものである。

最もそれがどういう競技か、詳しい事はわからない。

それでも賞金10万円はおいしいぞ。しかも5月15日って今度の日曜日じゃないか。

俺はこれでも足腰には自信がある。万が一これで優勝すれば、15日には10万円が手に入る。

……上等だ、出場してやるよ。これで必ず賞金10万円を手に入れたやる。

というわけで明日から早速特訓だ！

——翌日、学校で俺は房総丘陵トレイルランニングへの参加を、皆に報告してみました。

すると、皆さんの反応はこんな感じでした。

「け、圭介っ！？ あんた本気なの！？」

「ああ、わりと本気だぞ」

そりゃあ、今回は背負ってるものがあるからな。
わりとというよりもかなり本気である。

「けーすけ様！ いきなりどうしたのですか！？」

「いや、俺。実は走るの大好きなんだ！」

「見え見えの嘘ね。圭介って走るの速くても走ること自体は面倒だ
って、前に言ってたじゃない」

「い、伊吹さん鋭いっすね……いや、でも本気なのは確かだ！」

そう言いながら、俺はガッツポーズを取ってみる。
だけどなんだろう。皆の反応がやけに薄いぞ？

「圭くん。それって足腰の強さにスタミナもいるし、足が速いだけ
じゃダメなんだよ？」

「そんな事わかってるって。スタミナのほうにも自信はあるよ」

「まあ、あんたは結構タフだからね。でもどうしていきなり出る気
になったのよ？」

「そうですよ！ 拙者達はその大会の存在すら知らなかったのです
よ！？」

存在すら知らなかったって……あんたらそれでも県民ですか!？
まあ、確かに房総丘陵なんて俺らには縁のない所だ。

「それにしても房総丘陵かあ、懐かしいな」

「あ？ 広ちゃん行った事あんのか？」

「中学の頃山籠りに行った事があるね」

「ぐはっ！ すげえ流石広ちゃん、山籠りってフツ一のヤツはしねーぞ!？」

大吾が驚くのも無理ないぜ。俺だってちよつと驚いちゃいましたよ。多分重原という武道バカは、道場破りくらいならやった事があると思っていたが……。

まっさか山籠りまでしていたとはね、そりゃフツ一に強いよ。

一度道場で試合を見せてもらったが、重原の廻し蹴りは明智の蹴りにも匹敵しそうである。

「じゃあ、重原は向こうの地理に詳しくかったりするんのか？」

「まあ程々にね。確かそこまでアップダウンは厳しくなかったハズだよ」

「なるほどねえ……」

とは言え、悪路な上にアップダウンはあるのだ。

フツ一のマラソンと同じと考えちゃ、きっと痛い目に遭うだろう。

「あ、そういえば私も行ったことあるわ」

「え？ それってマジな話なのか？」

「剣道部の合宿よ、夏休み時々いなくなるでしょ？」

「ああ、なるほど」

どうやら、房総丘陵は重原と伊吹が経験済みのようである。
お互い目的は違うけどね。伊吹の目的のほうがマトモな気がするぜ。
部活の合宿なら仕方ないよね。

「けーすけ様、葵さんも連れて絶対応援に行きますね！」

「あたしも伊吹と一緒に行くな！」

「ま、まあ……圭介が頑張るなら仕方ないわね。特別に応援してあげるから感謝しなさい！」

「じゃあ僕も行ってみますかい。ラノベのネタになりそうだからな
！」

「大吾……新人賞狙ってるんだよね。まあそれはともかく、俺も応援に行くからね」

みんな……なんていい友達なんだ。思わず涙が出てしまいそうになったぜ。

……そうだ、他のヤツにも一応この事を伝えておこう。
出来れば応援してくれそうな人にしよう。応援してくれるとこっちもテンションが上がる。

戦う原動力にもなってやる気が出てくる。決まりだな、他の奴にも

言おう。

——というわけで、次に参加を告げた相手は……。

「ほ、ホントなのか。藤島？」

「ああ、諸事情により出る事になっちゃいましたよ！」

そう、明智光秀の子孫であり、初芝高校では風紀委員を務める明智
風紗である。

彼女も俺にとっては大切な友達だ。だから彼女にも伝えることにしたのである。

「で、でもどうしていきなり？」

「だから諸事情だよ。その辺には深いワケがあるんだよ」

「藤島……もしかして、罪償い？」

「は、なんで？」

「あまりにも変態すぎて皆に嫌われたから、優勝して信頼を取り戻そうと——」

「そこまで皆の好感度下がってねーよ！ 頼むから変態と結びつけないでください！」

きっと明智の脳内では俺＝全てが変態という図が、完成しちゃっているであろう。

全く迷惑な話である。俺はそこまで腐った変態じゃねーですよ。

「うーん、では深いワケって？」

「そりゃあまあ……」

「はあ……やっぱり罪償いか。今度は何をやったんだ？ 覗きか痴漢か？」

「だから違うつつってんでしょ！」

コイツ、どうしても俺を犯罪者に仕立て上げたいんだな。

「で、でも藤島が出るなら私は応援するっ。その……頑張れっ」

「はあ……」

応援してくれるのはとてもありがたい。

だけど、なんだか勘違いされたままのような気がするんだ。

まあ、明智も応援してくれるようだし、次は青山さんや葵あたりだな。

——そう思って1年の教室に行ってみた方がいいが……。

「もう知ってるよ」

「え？ そうなのか？」

「はい、わたし達はその……木下先輩に訊きましたので」

なるほど、葵と青山さんは暮葉ルートで知ったんだな。

確かに葵も連れて行くとか、そんな事を張りきって言っていたよな。
……アイツ、変な事をこの二人に吹きこんでいないだろうか？

「お兄ちゃん！ やるからには優勝目指そうね。その為に特訓しよう、お兄ちゃんのベッドで！」

「何の特訓だよ！？」

「藤島先輩と葵がベッドで……っ！？ はわわっ！ そ、そういう関係だったのですか！？」

「違うわ！ 葵の言う事は信じるな！」

畜生、言わなきゃよかったかもしれない……。

まさにこんなに変態扱いされたり、露骨に下ネタトークされるとは思わなかった！

流石の俺でも引くレベルだわ。もうホントになんなんでしょうかこの人達は！？

「先輩……わ、わたしは先輩と葵がそんな仲でも……ずっと尊敬する先輩ですっ」

「納得しないでくださいよ！」

でも尊敬はされていたのね。あれ、尊敬されるようなことやったっけ？

……まあいいか。少なくとも嫌われているわけではないみたいだしな。

「あははっ、お兄ちゃん可愛い」

「元はと言えば、てめえが変な事言うのが悪いんだろ！」

コイツが変な話を始めたせいで、俺が青山さんにシスコンだって勘違いされただろ。

確かに、妹は好きだが兄×妹は二次元のみに許された、禁断かつ神聖なるセカイだぜ？

それをリアルに引っ張ろうとする葵はもう……邪道の一言に尽きるぜ！

葵は俺の知っている人物の中でも、最もトラブルメーカーな存在かもしれない。

「でも……どんな理由でも先輩が出場するのは事実ですよね？」

「まあな、もちろん葵の為ではないぞ」

「バツサリ否定された！？」

そこまで露骨に残念そうな顔すんなよ。欲しかった同人誌が完売していたわけじゃないんだぞ。

どこまでブラコンなんだ、我が残念な妹は。

「先輩……っ、頑張ってください！」

「お兄ちゃんファイト！ 優勝のご褒美は葵だからね？」

「頑張るけど葵はいらないからな！」

「さ、爽やかな笑顔で葵の存在を否定された！？」

うるせえブラコン！

もう少し妹らしく兄を応援しやがれ！ここは二次元ではなく現実な
んだぞ！？リアル

……さて、大抵のヤツにはこの事を報告したな。

浅間部長には……黙っておこうかな。

出来ればドッキリをやってみたいんだ。もしも勝ったとして、10
万円を手に入れたら……。

その時は浅間に直接諭吉さん10枚を手渡すんだ。

当然、房総丘陵トレイルランニングには数多くの人が参加するだろ
うし、そもそも30kmなんて長距離を走った事がない。

ぶっつけ本番で優勝なんて殆ど不可能に近いかもしれない。それで
も……俺はこの機会を逃したくない。アイツの為にも、アイツの母
親の為にも。そしてアイツを心配している友達や浅間部長の為にも。

……絶対負けられる戦いじゃねえ！

第30話、手っ取り早く10万円を稼ぐ方法（後書き）

NO2

きのしたくれは

木下暮葉

イメージCV…伊藤かな恵（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『神のみぞ知るセカイ』エルシイ役

『とある科学の超電磁砲』佐天涙子役

県立初芝高等学校2年4組在籍、アルファ隊所属。

ジョブ…ちよつと魔法が苦手な魔法少女

性別…女性

年齢…連載開始時点で16歳

誕生日…6月5日生まれ

身長…146cm

体重…37kg

胸ランク…極小（貧）

趣味…一期一振を磨く事、最近はゲームとかにもハマリ出した様子。
好きな物…甘い食べ物、牛乳、地球で出会ったPNPのゲーム
嫌いな物…野菜、辛い食べ物、戦闘

その他…異世界からやってきた魔法少女で、自称豊臣秀吉の子孫。
魔法少女と言いつつも魔法が苦手で、戦闘スタイルは魔法使いというより武士。

でも、魔法が役立つ事もあるので、全く無駄というわけではない。
アレクサンドルの子孫である圭介の護衛を指示され、藤島家に居候しつつ圭介を護衛。

しかし、遊んでいるようにしか見えないのが現状。
少なくとも圭介と出会う前に一ヶ月ほど日本に滞在しており、その

為日本の事についてはある程度知識があるみたいだ。

性格は明朗快活で人懐っこく、小動物のような愛嬌を持っている。

見た目通り子供っぽいところもあり、圭介曰くアホの子でしかも馬鹿ある。

愛嬌ある外見と活発な性格によってすぐにクラスに馴染めた。

圭介の事は「けーすけ様」と呼ぶあたり、一応慕ってはいるみたいである。

第31話、房総丘陵トレイルラン大会

5月15日早朝……房総丘陵トレイルランニング当日。

俺は現在、受け付けを待つ人の行列に並んでいた。

結構早くきたつもりだったんだけどなあ。皆さん中々朝が早いよう
で既に大行列だ。

選手は見た所老若男女勢ぞろい。子供から老人まで性別問わずに並
んでいる。

……まあ、子供や老人は敵じゃないとして。問題はやっぱりある程
度若い人だよな。

それに中年の中にもすごい人はいるだろう。例えば現役自衛官とか
な。

とにかく、こっちの武器は体力と身体が丈夫な事だけだ。

ただ問題は肺と脚の、どっちが先に潰れて使いものにならなくなる
かである。

「……………っ！」

……いや、そんな事を考えていちゃダメだ。

どんな事があるかと勝たねえと。この勝負だけは負けてはダメなん
だ。

「……………ん？」

あれ、あのTシャツに短パンって初芝じゃないか？

俺以外にも初芝の生徒が参加していたんだな……。

しかもよくみるとあの子、中々レベルの高い美少女ではないか。

セミロングな黒髪で身長は……伊吹よりは高そうである。

バストサイズ……うはっ、なんて丁度いい大きさなんだ。滅茶苦茶俺好みではないですか!?

あんな子もトレイルランに参加するのにかあ。こりゃ俺もいつも以上に本気を出さねえとな。

——やがて受け付けが終わり、開会式も終わって現在スタートライン。

大勢の人々が立ち並び、ただひたすらスタートの時を待っている。こっからじゃ応援席が見えないな。つか皆どこで応援しているんだろう。

はあ……伊吹とかがチアガールの恰好していたりしないかなあ?

「よおし、本気出しちゃうぞお!」

「な……なっ!」

考え事をしていたその時、さっきの初芝の女の子がなんと……かかか、髪を括った!?

すげえ、どこのギャルゲヒロインだよ全く。現実^{リアル}で髪を括る女の子がいるのだと?

なんということでしょう。我が初芝高校にはあんな希少価値な子が存在しているのか。

スバラシイ! 現実^{リアル}もまだまだ捨てたもんじゃねえぜ!

髪を括ったあの子、その為現在ヘアスタイルはサイドテールであった。

元気が出た。俺はギャルゲヒロインのような事をするあの子を見て、パーフェクトに元気が出ました。

フフフ……この元気。これで勝つる!

「……………」

「ん？」

「っ！？ ……」

なんだ？

今、さっきの髪を括った女の子が俺の事を凝視していた気が……。

……ハハハ、気のせいですか。ですよー！

さてと、そろそろスタートの時間だな……この勝負だけは負けられないぜ。

「スタート5秒前。4、3、2、1……0！」

放送が0という数字を告げると同時に、選手たちは一斉にスタート地点から足を動かし始めた。

俺もそのうちの一人である。こういうのはスタートが大事なのだ。

「10万円でエロゲー沢山手に入れるんだあああああああああ
あっ！」

「彼女とのホテル代ゲットだぜえええええええっ！」

「働いたら負けだし、ここで一ヶ月の金を稼ぐぞおお！」

「俺！ この大会が終わったら結婚するんだ！」

……しかし、ロクでもねえ目的で参加している人多いな。しかも誰

だよ死亡フラグ立てたヤツ!?

こっちは超真剣なんだぞ。こんなのに絶対に負けてられない。必ず勝って10万円を手に入れる。絶対に浅間家を救ってやる……。俺がやなきゃ誰がやる!……そんなとらゴンボールの事を考えながら、俺は30kmという長距離を走り始めたのであった。

——それからしばらく、10kmを走った地点である。

「……………!」

俺は結構先頭のほうを走っているようで、俺の前にはたったの6人しかいなかった。

何故こんなに走れるか。前にも行った気はするが、それでも足腰とかには多少の自信があるんだ。

リアルに陸上部にスカウトされた事もある……まあ、面倒なので断りはしたが。

なので俺は走るのは結構得意なのである。それでも追い付けない前方の6人……。

多分いつも鍛えているか、学校に通っていて陸上部にでも所属しているのだろう。

でもよかったあ。陸上選手とか現役自衛官がいたらどうしようかと思っただが、俺でもこうして追いつけるという事は……その手のプロの人は今回参加していないんだな。

よし、少しは勝利の兆しが見えたかもしれない。でも前は6人だけとは言え、それでも陸上において1人を抜かすのは大変な事だからなあ……この勝負、少し厳しいかもしれない。

……そんな考えはゴールまで残り半分である、15km地点まで走

ってから消えていった。

なんと、6人のうち3人を抜いてしまったのだ。3人は前半調子よく先頭走っていた連中である。

どうやら、最初のほうで体力を使い過ぎてしまったらしいのだ。

俺の方も大分疲れてはきたが……一応、これでも体力は温存しているほうである。

こうして俺の順位は4位に。一番先頭の選手の容姿も見え始めていた。

アレは……髪を括っている？もしかしてスタート地点にいたあの子だろうか？

——さらに走って20km地点。

「はあ！ はあ！ はあ！」

ああ、流石に疲れてきた……でも身体のほうはまだ大丈夫だ。

それに……この勝負には負けられない。多少疲れようが関係ないんだ。

ていうか……流石トレイルラン。ここモロ未舗装というか、荒れた山道じゃねえか。

こうして走るのは少し危険かもしれねえぞ。だけど……負けたくはねえ。

ていうか負けられねえんだ。どうしてもやり遂げなきゃいけない事があるんだ！

——そして……いよいよ残り3kmという地点。

ついに俺は2位まで上り詰めたんだ……何があったって。単純に体力のおかげである。

短距離走では陸上部員に劣るが、長距離では持久力があるほうが勝ちである。

俺の体質上、身体の強度の他にも心肺能力も高めなので、ぶっちゃけ短距離よりも長距離のほうが得意なのである。じゃなかったらこんな競技には出ないぞ。

……とは言うものの、流石にペースを保ったまま30km近くを走ると、滅茶苦茶疲れる……。

「はあ！ はあ！ はあ！」

「……っ!？」

よ、ようやく……い、一番先頭に並べたぞ……？

やっぱり髪を括っていた女の子。意外だな……女子が一番前か。

ちなみに俺のすぐ後ろには、さっき俺が抜いた連中がいる。彼らも再び抜き返す機会を覗っているのだろう。だがそんな彼らは全員が男である。つまりこの中に女子は先頭を走るあの子のみだ。

「……はあっ！ んっ……ぐうっ！」

クソッ……流石に厳しい……ッ！

やっぱり日頃鍛えてねえからな……いくら御先祖様の恩恵があるとは言え、鍛えてなけりゃ所詮は少しすごいだけの人間である。

「……っ！ っ！」

まずい、あの子との距離が離れて行く……後ろのヤツが近づいてくる……ッ！

クソッ、残り僅かだぜ。こんな所で離されたら……抜き返すチャンスなんてっ！

「あ、皆さん！ 選手が来たのですよ！」

「う、うそっ！？ 圭介が2番目だわ！」

「圭くん頑張るねえ、何か賭けてるのかな？」

「でも藤島のヤツ、相当バテてる……しかも相手は陸上部エースだぞ？」

「そうだね。このままじゃ圭介は最高によくても準優勝だね」

「お兄ちゃんガンバレー！」

「せ、先輩……頑張ってくださいっ！」

「あ、アレ？ 僕何も言う事なくね？」

アイツらゴール地点にいたのか。通りで途中で見かけなかったわけだ。

クソッ……息苦しいっ。足は痛くないがとにかく息苦しいぞ。

滅茶苦茶苦しい、下手すりゃ倒れる……ッ。でもっ！

“あたいが無理しなかったら誰が生活費を稼ぐんだよ！ 誰がお母さんの治療費を稼ぐんだよ！？”

“本当は全然足りない。あたいが働かなきゃ、手術をするお金がないんだから！”

“嘘なんて言わないっ。お母さんは一回手術すれば治るのに……でも、お金が足りないんだよ!”

アイツが……アイツが味わった苦しみにこんなに比べりや……。こんな全然、大した事は……。

「……ねえんだよっ」

アイツ以上の苦しみなんで、トレイルランでは絶対に味わう事ができない。

だけど、そんな苦しみを味わい続ける必要はない。

アイツ一人が無理をする必要なんて……全くないんだ。

努力するのはアイツ一人じゃねえ。その中にはあの時から俺も含まれた……。

“不正な真似は絶対しねえ。だけど10万円は絶対用意するって約束するよ”

アレは、あの言葉は俺の……覚悟の証だ……ッ!

「ぐッ……ううおおおおおおおおおおっ!」

その時だった。

ようやく、消えかけていた気合いが再び入ったんだ。

崩れかけた身体を踏ん張って持ち堪え、大きな声で雄叫び、拳を力強く握る。

相手の女の子も限界ギリギリで、ペースを保ってはいた。だが、悪く言えばそれ以上の事はできない。

多分彼女もここで俺が突然本気を出そうとは、思ってもいなかったろう。

それは、ひどく隙だらけであるのと同じ意味である。

俺は隙だらけの彼女を抜くべく、残る全ての力を籠める。そして大地を力強く蹴りあげる。

一足とびに飛びだした刹那、再び彼女と並ぶ事に成功した。

チラリと左を見ると、Tシャツの右胸のあたりに生駒の文字が見えた。おそらく彼女の名前であろう。

彼女も俺の方を見て、自然と視線が合ってしまう。彼女の目は驚いたように見開かれていた。

そんな隙だらけの彼女にはもう……俺に反撃する術は残されていない。

大地をもう一蹴りし、飛び出す勢いで右手を伸ばす。その結果……
……。

——最初にフィニッシュしたのは俺である。

まさに僅差、ギリギリの勝利であった……だが、もう体力が残っていない。

俺はフィニッシュした勢いで、そのまま地面へと倒れ込んでしまった……。

ああ……アスファルト熱い……。

「け、けーすけ様が勝ったのです……」

「やった！ お兄ちゃんが勝った！」

「ふふん。伊吹、圭くんに惚れなおした？」

「っ!？ わわわ、私は別に圭介なんて元々好きじゃないわよ!」

「国宗先輩。その……顔、赤いですよ?」

「それにしても圭介のヤツ、随分熱かったな。なあ広ちゃん?」

「そうだねえ。やっぱり、小坂さんの言う通り何か賭けてたんじゃないかな?」

「……すみにゃん」

ああ、みんなの声が聞こえる……。

ていうか明智さん。すみにゃんって一体なんなんだ……?

まあ……そんなことはどうでもいいけど。

——俺は勝った……。

合法的に10万円をゲットした……。

……ははっ。ようやく……浅間に合わせる顔が出来たような気がする……。

「あのっ!」

「……ん?」

その時、どこからか少女の声が聞こえてきた。

場所は右上。そこを確認すると、胸元に生駒と書かれた髪括りの少女が立っていたのだ。

「同じ初芝で2年の人だよね?」

「お、おう……君は？」

「初芝高校2年の生駒純奈（いしまたすみな）です。今日はありがとうございました！
完敗です！」

「お、おう……君も、すごく速かったよ」

「ありがとうございます！ ではっ！」

明るい笑顔を浮かべ、彼女は背中を向けて走り去ってゆく。
話しかけられた……なんというか、いかにも体育会系だな。
でも、近くで見ると極上にキュートな子だったな……。

「ナギちゃん！」

その時誰かをそう呼んだのは、まさに先程の生駒純奈であった。
ていうかナギちゃんって……まさか名字が三千院だったりして。
……流石にないか。そんな事を思いながら声のしたほうを見ると……。

「すみにゃん。お疲れさん」

「えへへ。ナギちゃん負けちゃったよ」

「気にするな。あの変態は本番に滅茶苦茶強い男だから」

「……なん……だと!？」

ナギちゃんが明智で、すみにゃんが生駒純奈……？

なんじゃこのエロゲーにありがちな、ヒロインと親友みたいな感じ
はあああ！？

第31話、房総丘陵トレイルラン大会（後書き）

NO3

国宗伊吹くにむねいぶき

イメージCV…斎藤千和（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『ストライクウィッチーズ』フランチエスカ・ルッキーニ役

『魔法少女まどか☆マギカ』暁美ほむら役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ…ツツパリ（？）幼馴染

性別…女性

年齢…連載開始時点で16歳

誕生日…9月4日生まれ

身長…151cm

体重…40kg

胸ランク…小（貧）

趣味…圭介に絡む（？）事、焼きそばを食べる事、音楽・テレビ鑑賞
好きな物…食べ物全般、特に焼きそば大好き、剣道、お昼寝、お笑い番組

嫌いな物…身体測定、ヤンキー、煙草の煙

その他…圭介の幼馴染の女の子。

全然素直じゃない性格だが、デレがないと思っている圭介にはツンツン突っぱね〓ツツパリ伊吹ちゃんと呼ばれている。

剣道部に所属しており、部長を超える高い実力を持つ。魔族のヴォルコラクにさえある程度実力を評価されている。

どういうわけか、暮葉の居候に最後まで反対していた。

それどころか、圭介が他の女の子といい雰囲気だといつも機嫌を悪

くしている。

焼きそば大好きっぷりは異常レベルらしく、家事スキルほぼ0の圭介さえ焼きそばだけは上手に作れるようになった程。

第32話、街灯の下で

房総丘陵トレイルランを制覇した俺。

元気な体育会系である生駒純奈と、実は超能力者である明智風紗が親友であるという、意外な事実も発覚した。無事に賞金10万円を手に入れる事ができた。

マスコミに勝手に撮影され、その後何故かゴールしてきた人達に伊吹が彼女だと勘違いされ、伊吹が噛みついて来て……うう、ちょっと傷が出来ました。

あの後、途中までは皆で一緒に帰った。

そして最後は賞金10万円を片手に、ボロボロな俺は暮葉と葵に支えられつつ帰路を移動していた。

……だけど、俺にはこのまま直行したい場所があるんだ。

「二人とも、ちょっと寄り道したい所があるんだけど」

「もきゅ？　けーすけ様、どちらになのですか？」

「いやぁ知り合いの家。ちょっと用事を思い出したんだ」

「お兄ちゃん！　知り合いって……女の子？」

うわぁ！　myシスター葵たんからダークなオーラが！？

……まずいぞ。突然『お兄ちゃん、二度と葵以外の女に近寄れないように……し☆て☆あ☆☆げ☆る』なんて言われて、イキナリ刃物で四肢切断なんてされたら……。

はわわ、怖ええええっ！　葵は多分ヤンデレではないと思うが、万が一の事も考えよう。

そんな事になるのは絶対嫌だ。それに浅間の家には浅間部長だって
いるんだ。

「男に決まってるでしょ！ 女の知り合いなんてしねえし……」

そう。こう言っただって強ち間違いではないんだ。
フフフ、これぞ噂の緊急回避というヤツである。

「けーすけ様、拙者もお供したほうがよろしいのでしょうか？」

「いや、一人で大丈夫だよ」

「でも万が一けーすけ様が暴漢に襲われたら!？」

「そうだよ！ お兄ちゃんが公園なんかに行ったらその……つ、ツ
ナギの男に……」

「アッー！ 薔薇色な話はやめい！ そもそも公園なんていかなえ
よ！」

「それではどちらにいかれるのですか？」

「……先輩の家？」

うん、この答えで合っているハズだ。

浅間の家は一応部長の家でもあるからな。嘘は言っていないハズで
ある。

「けーすけ様が男の先輩の家に……ですか？」

「お兄ちゃん！ その……汚されても葵はお兄ちゃんの妹だよ」

「お前らどうしても話を薔薇色にしたいのね！？」

葵は腐女子じゃないハズなのに、なんででしょうか？

まあそれはともかく、ようやく抜け出せた俺は浅間家へと向かったのだった。

暮葉、大変心配そうな顔をしていたなあ。アイツの任務は俺の護衛だしな。

……多分、サヴィエトの皆さんには見つからないと思うし、大丈夫だとは思っただけだな。

——浅間家。ここに来るのは二度目だが、相変わらず耐震強度が0に等しいオンボロ住宅であった。

浅間部長いるかな。いや、でも休日はいつもバイトしているって言うっていた。

もしかすると、まだ帰ってきていないかもしれないな。

……どうしよう。浅間は絶対俺と二人きりなんて嫌だよな。前は特別だったんだろうし。

流石に俺だけで家に入るのもなあ。やっぱり暮葉を連れてくればよかった気がするぜ。

「あ、あんたは！？」

その時、丁度いい所で浅間が現れた。

しかも私服、こいつ今までどこかに出かけていたんだな。

「よっ、体調はどう……っておわあっ！？」

「っ！ こ、来いっ！」

なななな、何故だ。何故俺は浅間に手を引かれているんだ？
しかも手を引く浅間の表情。やっぱり不機嫌そうである。

そりゃあそうだ。嫌っている相手が自宅の前に不自然に立っていたんだから。

というか、俺はコイツにどこに連れていかれるんだ！

——こうして連れて行かれた場所は、浅間家の近所にある“こ
うなん公園”という小さな公園。

正直に言おう。こんな公園古宇坂に存在してただなんて、俺は全然知らなかったぞ。

滑り台にブランコ、砂場しかないなんて……どんだけ小さいんだ、この公園は。

そんな公園まで連れてこられた俺。手を引いてきた浅間は両手を腰に当て、仁王立ちをしている。

その目はとても厳しく、肉食獣が獲物を狙うように俺を睨みつけていた。

「おい！ あんたは……家の前で何やってたんだっ」

「え？ ああそうだ。これを渡そうと思ってよ……」

俺はポケットの中から封筒を取り出す。その中には当然、優勝賞金10万円が入っている。

浅間にそれを渡すと、彼女は当然のように封筒の中身を調べた。

そして、予想通り彼女は驚きのあまり目を見開いていた。

「あ、あんた……これって……っ」

「約束のものだよ。これでお母さんの手術ができるんだろ？」

「なんで……どうやって手に入れたんだよ……？」

「房総丘陵トレイルランってあるだろ？ あれって賞金10万なんだぜ？」

「あ、あんたがボロボロなのって……」

「ああコレ？ ちょっとゴールでコケちゃって……でも大した怪我じゃないから」

「……ばかだろ、あんた……っ」

突如、彼女は小さな顔を俯かせてしまった。さらに歯を食いしばり、小刻みに震えている

まずい……もしかして、何かやばいフラグを立てちゃったんじゃないか。

そんなに怒ることを言っちゃったのか。それとも勝手に家に来た事を怒ってんのか？

……多分後者だろう。それ以外には何も思い当たらない。

「ま、待て怒るな。勝手に家の前に来た事は謝るからっ」

「あたいは怒ってない。むしろ呆れてるんだよ……っ」

「あ、呆れてる？」

「なんでこんな馬鹿な事をするんだよ！ あたいがあんたに何やっ

たかわかってるんだろ!？」

ようやく顔をあげたと思いきや、とても必死な表情である。
そんな表情で自分がやった事を知ってるんだろと、叫ぶように問う。
コイツ……少なからず悪いと思っっていたんだ。
……なんだ、やっぱ根はいい子じゃねえか。

「……確かに、コイツを投げ釣られてマックでひどい目に遇った。
全部浅間がやった事だよ」

「だって。あ、あんたの事……最低の暴力魔だと思ってたから……」

「合ってるよ……どんな理由があろうとも、俺が中1の時に先輩を
ぶん殴ったのは事実だ。そしてそれは浅間のように後の世代にまで、
俺が一番の悪として語り継がれている。だから俺は真正銘暴力魔
だよ。コインを投げつけられたりマックで悪戯されたのも、仕方の
ない事だと思っている」

「嘘だ! 完全にあたいの誤解だった……あんたは絶対そんなヤツ
じゃない。そんなヤツなら嫌いな人間の為にこんな事……」

「するよ。俺は最低だけど最低が嫌なんだ」

……言い終わってから思えば、なんちゅーキザなセリフなんだ。
ギャルゲーで鍛えたとは言え、現実だとかなり痛いような気がして
きた。

「ど、どういう意味だよ……っ?」

「言葉のままだよ。確かに俺は先輩を殴った最低暴力魔だ。けど誰

かが困っているのを見るのも嫌だ、それを見捨てるのも嫌だ。最低なハズなのに最低が嫌なだけだよ」

「……絶対あんたはおかしい……。っ。殴ったのだって理由があるんだろ？」

「あるけど殴ったのは事実だよ。ぶん殴った時点で善人とは言えないと思わないか？」

「確かに……。殴るのはあたかもダメだと思う……。でも！」

「だったらそれでいいじゃないか。今更善良に戻る気もないし、おそらく世間はそれを認めてくれない。だから、俺の評価はそのままでいいんだよ」

「……俺も馬鹿だな。折角浅間が俺の事を見直しているのに、こんなことを言っている。

もしかしたら、このまま上手く広まって悪印象が消えないにしても、限りなく少なくなっていただろうに。俺は自らそうなる選択肢を選ばなかったのだ。

殴らざるを得ない状況になっちゃったのは、あの時俺が弱かったからだ。俺の責任なんだから。

「……あたいには理解できない。そこまで悪を被る理由が……。っ」

「いいだろ？ 実際、生活するにはあまり影響なかったんだから」

「……あたいは？」

「確かに、痛かったし腹も減ったよ。でも……。たったそれだけだろ

？
」

「……ッ」

いずれ、こんなことになるかもしれないとは薄々感じていた。

それに、アレはコイツが本当にいいと思ってやっていた事なんだ。

確かに浅間は馬鹿だ。やんちゃで正義感は強いけど、後先とかその他の事は一切考えていない。

でも、だからって別に咎めるつもりはない。元々、やられる原因は俺の方にあっただから。

「とにかく、理由なんてどうだっていい」

「あ、あたいは納得できない……あんたが悪を被る必要なんかない。それにあたいはあんたにひどい事を……」

「浅間はホントに他人想いだな。こんなにいい子だから……俺も本気になれたんだと思う」

「……………」

またしても、浅間は俯いてしまった。

髪の毛で鼻から上が隠れて見えない。いや、わざと見えないように俯いているのか？

……とにかく、俺の話はまだ終わりじゃない。最後に言いたい事があるんだ。

「その10万円は本気になった結果だよ。だからそれを治療費に使ってくれ。お母さんを……大事にするんだぞ」

再び俯いたまま歯を食いしばる彼女。
だけど、さっきとは違う所があった。

……一筋の雫が、彼女の頬を伝っていたのである。

「……ご……めん」

「うん？」

「ごめんな……さい……ごめんなさいッ」

「最初から……怒ってないよ。だからもう謝るのはよそう？」

その言葉の後、彼女はごしごしと右腕で涙を拭いていく。

その後俺に見せた表情は、何故だか穏やか笑顔で大変清々しい。

浅間がとても可愛い女の子に見える。そんな浅間が俺に言い放った一言は……。

「……ありがとう。」

ありがとう……。

そっか、浅間にありがとうって言われたのか……。

「あと、あたいの事は別にあかりでいい。兄貴もいるし面倒だろ！」

「え、だ……だけどっ」

「気にするなよな。そう呼んでくれたほうが兄貴と一緒にの時とか、
反応しやすいだろ！」

「まあ……そりゃそうだけど」

「だったら、あたいもあんたの事を圭介って呼んでやる。光栄だろっ☆」

「……よ、よろしく願いします。あかり」

「うん！ よろしくな、圭介！」

……俺、一応あかりの先輩ですよな。

歳上に敬意を払わぬガサツな態度。やっぱコイツはどこぞのビリビリ中学生といい勝負だ。

……でも、元氣も戻ったみたいだし、これでいいんだよな。とにかく、悪い方向ではないと思うんだ。これでちょっとした騒動は解決した。

「さてと、そろそろ帰るか？」

「うん！ ついでに送れ☆」

「へいへい……」

わがままお嬢ちゃんを家まで送る、か。

端から見れば俺達、一体何に見えるんだろうなあ。

……暗くなりかけの空。点灯時刻になり光り始めた街灯が、俺達二人を照らしていた。

第32話、街灯の下で（後書き）

NO4

ふじしまあおい

藤島葵

イメージCV…阿澄佳奈（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『アマガミSS』橘美也役

『WORKING!!』種島ぽぷら役

県立初芝高等学校1年3組在籍。

ジョブ…超絶ブラコン妹

性別…女性

年齢…連載開始時点で15歳だが誕生日を迎えたので、現在16歳。

誕生日…5月5日生まれ

身長…155cm

体重…44kg

胸ランク…中（美）

趣味…お兄ちゃん観察、兄のお世話、料理（ただし下手、アニメ鑑賞、ゲームプレイ。

好きな物…お兄ちゃん、お兄ちゃんのベッド、兄×妹系の同人誌、楽しい事

嫌いな物…お兄ちゃんと自分の禁断の恋の邪魔をする人、つまらない事

その他…圭介の妹。

見た目通り人見知りなどは一切しない社交的な性格であり、友達が多い。

根はしっかりもので両親不在の中、家事などしっかりやっている。勉強も得意で高校3年の内容までならほとんど覚えていくくらい、

学年どころか学校全体でも三本指に入る学力を持つ。

身体能力は中の上くらい。ただし護身術を習っていた事があるので不良一人なら撃退できるらしい。

そんな出来た妹だがとんでもないくらいブラコンで、家事さえ兄がいないとやる気がでないらしい。本気でヨスガりたいと思っているらしい。

料理は味はすごいが、見た目が如何せんグロテスクで皆に不評。

暮葉にとってはトラウマにさえなっている。

兄の趣味や行動、性癖などかなりの部分を把握しているらしく、圭介の初恋の人の名前等、圭介の弱みも数多く握っている。

第33話、男にとって一番泣けるイベントだよ

……あれから一週間、5月23日の月曜日。

あの後あの賞金10万円も使い、あかりの母親は手術を行った。

その結果は——大成功。順調に回復すれば6月には退院できるようである。

……よかった。久々に心の底から満足な気分になったよ。

「もきゅ？　けーすけ様がニヤニヤしてるのですよ？」

「アイツの事よ。どーせ厨二病な妄想でもしてるんでしょ？」

「けーすけ様……やっぱり厨二病なのですね」

「圭介以上の変態なんて、この学校にはいないわよ」

……暮葉と伊吹がひどい事を言う。うう、ひどいやひどいや。

そこは普通いい事あったんじゃない、とかだよな？

つか、魔法とか言いやがる暮葉のほうだよっぼど厨二だろうが。

……さて、トイレにでも行こうかな。

そういえばこの一週間で少し、不思議に思う事があるんだけど……。なんで野郎共、あんまりトイレに行きたがらないんだろうか？

我慢は身体によくないのになあ。まあいいか、とりあえず俺は行くとうつと。

「ん、あんたどこいくの？」

「便所だよ」

「BL展開に気を付けてくださいね、けーすけ様！」

「あのなあ……またそれかよ」

いい加減トイレllBLも飽きてきたよ。

突っ込んで欲しかったらもっと斬新なネタ考えろよな。

「……それがね、どうも冗談じゃないらしいのよ？」

「What's」

「あら、圭くん知らなかったの？ 最近男子トイレで……お尻から血を流して倒れている男子生徒が続出してらしいんだっ」

「そしてですね。血を流している人は皆、男なのに男性恐怖症になっちゃったらしいですよ？」

……ハハハ、おもしろい冗談だね。

やだなあ……ハハハ、ハッ？

ちよっと待て。どうして最近野郎共があまりトイレに行きたがらないのだろう？

大吾や重原でさえ、学校で用を足すのは自重しているみたいだ。

それってもしかして……この三人の言う事が事実って事なんじゃ……。

「アッーーーーー！ーーーーー！」

戦場で被弾し、絶叫する兵士さえも真っ青な顔をするほどの雄叫び。俺は、学校という公共の場でソレをあげてしまった。

「けけけ、けーすけ様落ちついてくださいっ！」

「そうよ！ 一応教師だって犯人探しくらいやってるわよ！」

「で、でもまだ捕まってないんでしょイツ！？」

「「……………」」

やっぱり捕まってないのか、チクショオオオオオオオオ！
これじゃあ落ちついてトイレもできねえじゃないか！

「じゃあどこで用足せばいいんだよ！？ 我慢の限界ですよコンチクショー！？」

「そ、外とかどうなのでしょうか……？」

「外で用を足すのはフツーに犯罪です！」

「いっそ覚悟を決めてトイレでしてくればいいじゃない。男は度胸
なんでしょ？」

「それ一部の人だけだ！ 俺は絶対安全なほうを選ぶぞ！」

「圭くん圭くん。だったら女子トイレですれば？」

「快適そうだけど入った瞬間、犯罪者に成り下がりそうだから嫌だ
！」

ということは……今学校には安全にトイレができる場所がないと？

ふ、ふ……ふざけるなああああつ！

俺達男共はどこで用を足せばいいんだよ。トイレに入ったら掘られるだ？

そんな悲劇的で薔薇色な展開、おそらく腐女子と本物以外は喜ばねえだろ！

「ど、どうすんのよ……圭介？」

「うう……と、とりあえず今だけはトイレに行ってくる」

「もきゅ！？ 正気なのですか！？」

「じゃあどこでしろってんですか！？」

「と、とりあえず……あたしらは何があっても、圭くんの味方だからね」

「お、おう！」

なんて悲しい応援なんだ。こんな応援されても全く嬉しくないぞ。しかし、学校のトイレで血を流して倒れるだなんて……。

学校での怖いお話とかならありそうだけど、高校生にもなるとそれがBLネタになるのか。

こうして思うとやっぱり小学生って、純粋で可愛らしい生き物なんだなあ。

……っていかんいかん！これじゃあ俺がロリコンみたいじゃねえか！言っておくが俺はノーマルだ。強いて言うならば美乳派である。

——やがて辿りついた男子トイレ、俺は用を済まし手を洗っている所であった。

それにしても本当に誰もいないな。休み時間のトイレと言えば、必ず一人は騒いでいるハズなのに。

でも俺は襲われなかったし、やっぱガチホモがいるって言うのはただのデマなんじゃ……？

「ヤラナイカ」

「……あ？」

今、不吉な声が聞こえたような気がしたのですが……。

ハハハ、気のせいだね。別に「やらないか」と言っても、いろいろ種類はあるんだ。

何も、アツ―な事をしよう限定で使う言葉じゃないんだから。気にしないのが一番なのである。

「ウホッ！ イイ男」

「……………」

ひ、ひいいいっ！

なななななな、なんかいやがるぞ。今絶対「ウホッ！ いい男」って声が聞こえた。

「やらないか」だけならまだしも、もうこれガチだろ！？

そのわりには姿を現さないが……そうか。恐怖で怯えている所をイキナリ襲う気だな。

そうはいかないぞ。見せてやるぜ……俺が今までの野郎ととは違うって所を！

「来いよガチホモ！ 汚れたバベルの塔なんか捨ててかかって来い！」

……アレ、全然こないな。やっぱり今のは幻聴だったのだろうか？
うーん。よくわからないけど、とにかくさっさとトイレから出よう。
考えてみるよ。屈強な男さえ屈服させてしまうガチホモ相手に、一
般高校生が腕力で勝てると思うか？

増してや相手はガチ変態のガチホモ。会話が通じるとは限らないぜ。
やっぱりここは、早急にトイレから出たほうが安全であろう。そう
決めてトイレから出ようとした。

「ヤアアアアアアセエエロオオオっ！」

「……！」

瞬間、俺は何者かにフェイスロックをかけられてしまった。クソッ、
完全に油断していた！

さらにこの状況なのでよくはわからなかったが、何時の間に俺は地
べたに倒れていた。

足首に何かをかけられた感じはしたので、おそらくバランスを崩さ
れたのだろう。

倒された俺は、謎の男に袈裟固をかけられてしまう。

クソッ……強い。コイツ何者なんだよ……ていうかすごい筋肉質だ
な！？

「ぐっ……てんめえっ！」

「フフフ……イケツシテルナ少年」

うわっ、すごい筋肉質な上に金髪マリーンカット。

コイツはなんだよ米国人なのか。多分そうだろう、日本語がカタコ
トだぜ？

「オーオーオコラナイオコラナイ。ダイジョーブコワクナイヨー？」

「怖いわっ！ アンタ誰だ！？」

するとオッサンは袈裟固を止め、マウントポジションを取ったまま俺の首を掴んできた。

息苦しくはないが、全くと言っていい程身動きが取れない。
やっぱりコイツ素人じゃない！絶対コイツ軍隊上がりだ！

「ミーノ名前ハ神崎・H・アリック。元Sランク武偵デース！」

「どこのラノベじゃっ！？ アンタただのオタクだろ！？」

「日本ノアニメ大好きデース！ チナミニ海兵隊出身デース！」

「やっぱり軍隊上がりかよ！？ つか何の用ですか！？」

「ミー、超ボーイズラブデース！ 二次元じゃ我慢デキマセエーン！ ト、言ウ訳で若キ高校生ノオ尻ヲ掘ラセテイタダキマース！」

最低だコイツ。こんなのがいるからオタク⇨変態にされるんだ！

……ていうか俺、どうなっちゃうんだろう？

相手は軍隊上がり。正直今も抜けだそうと努力はしているが、ここから抜けだせる気配はまるでない。

あらら、まずいぞますね。俺の貞操がめっちゃ危機ではありませんか！？

「や、やめろっ！ やめてくれええええええっ！」

「ダイジョーブコワクナイヨ？」

「怖いっつってんだろ！　っておわあああああつ！？」

何故俺が叫んだと思う？

答えはいつの間にかズボンが脱げていて、下半身はパンツのみになっていたからだ。

コイツ、いつの間に……全然気付かなかった。どこまでプロなんだよ！

「ベアーパンツ……」

「うるせえっ！　熊さんパンツしかなかったんだよ！」

葵のヤツ、よりによってこんなもの用意しやがって。
オッサンの顔が更に赤くなってニヤけてきただろ！

「サーテ、オパンチュモ脱ギマシヨーネー」

「嫌アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

ホントお願いします！　お金ならいくらでも払うから、誰か哀れな俺に救いの手をください！

「そこまでだ犯罪者！」

「アアン？」

おお神よ！

まだ俺の事を見捨ててなかったのか、誰かが男子トイレまでやってきた！

……でも待てよ。なんか今の女の子の声だった気が……。

「幾人もの罪なき男子生徒を犯し、増してやその……ふ、藤島までっ！ これ以上の狼藉は絶対に許さないぞ！」

あの黒髪ポニーテールのクールな女の子は……あ、明智……明智じゃないか！

風紀委員の腕章が眩しいぜ。こういう時には風紀委員って結構頼りになる存在だ。

「フン！ 女ノ子ニ興味ハナイ。立ち去レ！」

「うちの生徒がピンチなのに、立ちさがれるわけがないだろう？」

「フッフ、モウ二度ト刑務所ニハ戻ランゾォッ！」

うわっ、アリックさん前科持ちかよ。それはともかくまずいな……。アリックさんが明智という女の子に襲いかかるが、アリックさんはド素人ではないんだ。

いくら明智が強いとは言え、流石にまずいんじゃないだろうか？

「ウオオオオオオオオオオオオオオッ！」

「……ふっ！」

「ウオッ！？ 熱イツ！」

今、オレンジ色の何かを帯びた物体が飛んでいった。

明智のヤツ……公共の場でさり気なく超能力使いやがった！

しかも炎でアリックが怯んだ瞬間、明智がアリックとの間合いを詰めて……なんと。

ビビッと目にも止まらぬ3発ほどの肘打ちを、鳩尾にクリーンヒットさせたのだ。

鳩尾を押さえ、苦しむアリック。アレでも倒れないとは流石は軍隊上がりである。

だが、そんな彼に休む時間など与えられるハズがない。

明智は飛びあがり、あの1〜2回は見た華麗なる廻し蹴りを、アリックのこめかみに正確に当てる。

トドメに床に倒れ込んだアリックを、明智がポケットに隠し持っていた縄で縛りつけた。

——これで、風紀委員VS元海兵隊の変態アリックの戦いは、完全に終わったのである。

「アフウ……」

「ようやく最近校内を荒らしているヤツを捕まえられたぞ……っ」

明智はとっても爽やかな笑顔を浮かべていた。

犯人は地面である。いかにも勝利したという感じだな。

「あ、コイツの言う通りホントに熊さんパンツだ……藤島、あんなの穿くのか……」

……はい？

熊さんパンツ……あ、そういえばと俺は自分の下半身を確認する。

確かに俺は下半身はパンツであった。それも、可愛い熊さんがプリントされたトランクス。

それを見た瞬間……俺の中の何かか崩壊したような気がした。

「きゃああああああっ！　ちょ、頼む見ないでくれえっ！」

「す、すまん藤島！」

明智に見られた……葵がテキトーに買ってきた、ふざけたパンツを見られてしまった……。

な、なんなんですかこの羞恥プレイは！？

「けーすけ様あああっ！　ぶ、無事なのですか！？　も……もきゅ？」

「ちょっと圭介！　叫び声聞こえたけどアンタ平気……えっ？」

「……はああっ！？」

ちょっと待てやコラアツ！

どうしてだ、どうして暮葉と伊吹が男子トイレに現れた？

しかも暮葉も伊吹も竹刀で武装。おいおい、それって剣道部の備品じゃないのか？

まあ、それはどうでもいいとして。二つある問題のうち一つは二人が男子トイレに入ってきた事。

そしてもう一つ——二人に俺の熊さんパンツを目撃された事だ。

「け、けーすけ様……以外とお子様な趣味してるのですね……っ」

「ぷっ！　あっははははは！　圭介！　ちょ、小学生みたい！」

暮葉は赤面しつつ俺のパンツを評価、一方の伊吹は大爆笑。

……これはひどい、あまりにもひどすぎる結末！

第33話、男にとって一番泣けるイベントだよ（後書き）

NO5

明智風紗
あけちなぎさ

イメージCV…小清水亜美（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『ストライクウィッチーズ』シャーロット・E・イエーガー役

『スクールランブル』塚本天満役

県立初芝高等学校2年3組在籍。

ジョブ…クールだけど時々可愛い顔を見せる風紀委員

性別…女性

年齢…16歳。

誕生日…12月8日生まれ

身長…165cm

体重…48kg

胸ランク…大（巨）

趣味…圭介を変態扱いすること、映画観賞、ひなたぼっこ

好きな物…正義、温泉、おじいちゃん、お菓子

嫌いな物…爬虫類全般、キノコ類全般、明智光秀

その他…明智光秀の子孫らしい女の子。

去年まで別な高校に通っていたが、古宇坂市へ引っ越しこの春より初芝高校に通っている。

光秀のせいで自分や自宅が散々な目に遭うも、圭介らの協力もあって解決。

高校では風紀委員を務め、いつも黒木ら三馬鹿を制裁している。

戦闘能力が高く、素手でも黒木を瞬殺し丈夫な圭介でさえ脳震盪を起こす程。

その上発火能力を持ち、火の玉やかめはめ波モドキ、炎剣などを生み出す事ができる。

普段はクールだが、明智家の一件以降圭介らに女の子らしい表情を見せる事が多くなる。

圭介の事を変態扱いしているが、どこか彼の事を意識しているようにも見える。

圭介らとはクラスが違うのにそこそこ出番が多いキャラである。

第34話、新入部員！

放課後、帰りのSHRも終わりみんな帰る頃。

「んじゃあ僕ら先に帰るなあ」

「圭介、部活頑張って」

「お、おう……」

大吾と重原は先に退場、まあそんな事はどうでもいいんだ。

……俺は今、限りなく鬱な気分なのである。理由？そんなのは出来れば聞かないで欲しい。

とにかく俺が負った傷は、ソ連のコラ半島超深度掘削坑よりも遥かに深いのである。

丁度その時、笑顔で教室から出て行く伊吹と小坂の姿が見えた。

いいよなアイツら……今が幸せで。それに比べて俺は今が苦痛だよ。

「けーすけ様！ そろそろ部活に行きましょう！」

「お、おう……」

「もきゅ？ ……もしかして、まだ気にされているのですか？」

「だ、黙っててくれ……」

ああ、まだ気にしてるんだよ。女子三人に熊さんパンツを見られた事を……。

暮葉も明智も伊吹も、一応はフォローしてくれたけど……。

でも暮葉も明智も汗かいてたし、伊吹に至っては笑っていたし。

……みんな、下着がアレな時はくれぐれも気を付けるんだよ。

それは女子のみならず、男子にも言えることである。その事は本自身をもって経験したよ。

あ、ちなみに明智がとつちめたあの元海兵隊のアリックさん。

当然警察沙汰になりました。俺も襲われたので色々事情聴取はされたものの、未遂だった上に精神的ショックはそれほどでもなかった
ので、案外アツサリ警察さんに解放してもらった。

まあ……掘られるのも嫌だけど、それ以上に熊さんパンツを見られた事のほうが恥ずかしくて……。

「け、けーすけ様……大丈夫なのです！ 拙者のやつは猫さんがプリントされているのですよ!？」

「お前のパンツの情報聞いても……慰めにならねえよっ」

「し、失敬な!？ 報告するの恥ずかしかったですよ!？」

「じゃあしなけりゃよかったろ！」

「~~~~つ。と、とにかく、今のでお相子なのです！」

……どこがお相子だよ。お相子なら猫さん柄のやつ穿いてる所見せろよ！

そうは思ったが、そんな事をレディーに言えるわけもない。

そもそもそれは犯罪なので、俺は決してそういう事は言わなかった。

「わかったわかった……じゃあ、そろそろ部活に行くか」

「はい！ 今日の為に拙者、写真撮ってきたのですから！」

「おお、撮ったのか？」

そういえば、俺達が属する部活は写真部。

日頃の活動は写真を適当に撮影し、それを批評し合う事である。

……あ、まずいな。俺は一枚も写真を撮っていないぞ。

どうか青山さんに怒られませんかのように……しかし、完全に暮葉のほうが部員としては俺より優秀だな。

俺は優秀どころか何もしていないけど。そんな事を考えながら俺達は写真部の部室へと向かった。

「失礼します」

「お邪魔します！」

「おお、藤島君に木下君！」

「先輩方……こんにちはっ」

「圭介っ！ それにえーっと……木下先輩ですよね！」

写真部の面々が入室する俺達に挨拶をしてくる。

浅間部長に青山さんにあかり、いつもと変わらぬ顔ぶれだ。

我が写真部は、この3人と俺らの5人で構成されているのである……ん？

「お？ どーしたんだよ？」

「ちょっと待て。お前って写真部だったか？」

「超ウルトラ究極不本意だけど、あたかも今日から部員だからな！」

「……なんだってーーーーーっ!？」

イキナリすぎるにも程があるだろ!

いや、あかりが入部Ⅱプライベートに余裕が出来た証なのはわかる。それはとても喜ばしい事ではある。でも、なんだって写真部なんですか!？」

「もきゅ!？」 けーすけ様、このお方は以前けーすけ様に攻撃してきました!？」

「ちょ、部長! 何故にあかりが写真部に!？」

「ボクの妹だからに決まってるじゃないか」

「誘ったのはその……わたしですけどねっ」

「圭介のおかげで余裕が出たんだ! 少しくらい遊んだっていいだろ!」

まあ……確かにあかりはまだ高1だ。本当なら遊んでいた年頃である。

いくら家計が厳しいからって、流石に週6のバイトはキツいだろう。それに最大の難関であった母親の治療費も、この前の大会の賞金でどうになかった事だし。

あかりがシフトを減らしても、少し収入は減るかもだが特に問題はないだろう。

「もきゅー!?! けけけ、けーすけ様があかりって……あのお方はけーすけ様をけーすけて……はわわわっ!」

「……暮葉? おーい、大丈夫か?」

どういふわけか、暮葉は暮葉で暴走しているし。
なんなんだ、今日の写真部はいつも以上にカオスだぞ。

「こ、こんなのおかしいのです! だって、浅間さんはけーすけ様の事嫌いだったのですよね!?!」

「前はそうだったけど、今は好きなんだからな!」

簡単に笑顔で好きと言われると照れますなあ!

……って、流石に自惚れ過ぎか。あかりの好きは友達としての好きなのだろう。

ちょっとだけドキッとしたけど、ここはドキッとしたら負けだ。

「けーすけ様の事が好きだなんて……い、一体けーすけ様と浅間さんの間に何が!?!」

「それが……そのっ、いろいろあったらしいんです。藤島先輩……あかりの事を助けたらしいですっ」

「うん、藤島君には本当に感謝だよ。うちの母も君に会いたって言うていたくらいだ」

相変わらず自信のありそうな顔で浅間部長はそう言った。

……マザーが会いたかったってさ。他人のマザーに会うのが恥ずかしいのは俺だけだろうか?

「拙者が知らない間に、けーすけ様が感謝されるような事をしている!? あわ、はわわっ!」

暮葉は目を白黒させ、フラフラと部室内を難破船のように漂っていた。

アイツ大丈夫なのか。ちょっと危ない人間に見えてきたぜ?

しかもその時。前を見ていなかったせいか、暮葉は額を壁の出っ張っている角にぶつけてしまった。

「いたっ!? も、もきゅ〜」

可愛らしい声をあげ、涙目になり痛そうに額を押さえる暮葉。

……くはっ、ナニコレ破壊力高ッ!

一般青少年の俺にとって今の暮葉は破壊力が高過ぎた。やれやれ、本当に萌え死にそうになったぜ。

現実で萌え死んだらそりやもう痛い子確定。それだけは避けなければならぬぞ。

「だ、大丈夫ですか!? ……そのっ、絆創膏ならありますよ?」

「平気なのです! 拙者は見た目に反して打たれづよいのですよ!」

いや、滅茶苦茶額から出血しているし!

全然大丈夫そうには見えないし、むしろ出血のせいでヤバそうに見えるですよ!

「暮葉、一応世話になっとけて。額から出血してるぞ?」

「そうですよっ! その……怪我は放置が一番ダメなんですよ……」

「？」

「ううつ、千早さんありがとうございますのですっ」

「いえいえ……っ！」

毎回そうだが、暮葉ってすぐ他人と仲良くなるよな。

青山さんの事をいつの間にか下の名前で呼んでいる。全く、葵にも匹敵するスピードである。

それに比べて俺は……最近友達が増えた気もするが、相変わらずの少人数である。

で、でも友達の数が多いからイイってワケじゃないんだ！

それほど悲観的になる必要もないよね………多分。

「で、でも本当に一体何が！？ それに先程けーすけ様の事が好きって……そそそ、それって！？」

「き、木下先輩……っ。落ちついてくださいよっ！ あかりの事です、きっと友情的な意味ですから」

「フッフ、藤島君も罪な男だ。まさか、あそこまで動揺するほどのフラグを立てていたとは……」

「なに言ってるんですか部長は……」

そんなフラグを立てた覚えは皆無だぞ。第一、暮葉は仕事の都合で俺の下にいるんだぜ。

普段散々変態言われているんだから、好感度は下手すりゃマイナスだろうぜ？

「ええい！ このままじゃ收拾がつかない。みんな一回落ちつけよな！」

いよいよ收拾がつかなくなってきた所で、あかりが大声で全員にそう呼びかける。

その一言によって騒がしかった部室も、一旦は静かになった。

まさに今はあかりサマサマ。あのカオスな状況を一瞬にして止めやがった。

考えが一直線なバカでも、意外とこういう所はカリスマ的だな。

「勘違いされないうちに言っておくけど、あたいと圭介はただの友達だからな！ あとクソ兄貴は黙れよな！」

「うはっ！？ く、クソって……うああああっ！」

ただの友達である事を証明してくれたおかげか、暮葉が安堵のため息をついた。

青山さんも暮葉と似たような反応をしている。しかし何故にため息なんだろう？

まあ、多分あかりが俺に敵対心を持っていない事に対し、二人は安心でもしたのだろう。

しかしそれと引き換えに部長の涙腺は崩壊してしまった。当然、あかりの毒舌が原因だ。

「それだけなんだからな！ とにかく、あたいは今日から写真部の部員だ！」

相変わらずハイテンションでお調子なあかり……それでも。

「うんっ、よろしくね……あかりっ！」

「もきゅう……よろしくなのですっ」

「よろしくな！」

笑顔の彼女を拒む者は、誰一人として存在しなかった。

「クソって言われた……妹にクソって言われた……クソクソクソ……うっ」

ただ一人、歓迎せずにヘコんでいる男がいたが……。

こうして、この日から浅間あかりが写真部の部員になったのである。これで部員は5人、浅間部長が卒業しても4人は残るぞ。つまり、ようやく写真部は安泰になったのであった。

第34話、新入部員！（後書き）

No6

浅間あかり（あさまあかり）

イメージCV…野水伊織（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『これはゾンビですか』ハルナ役

『そらのおとしもの』ニンフ役

県立初芝高等学校1年3組在籍。

ジョブ…他人想いのやんちゃな娘

性別…女性

年齢…16歳。

誕生日…4月30日生まれ

身長…145cm

体重…38kg

胸ランク…極小（貧）

趣味…人助け、カラオケ、野球観戦、

好きな物…正義、家族、寿司、愛木みどり（後述）

嫌いな物…邪悪、変態兄貴、野菜類全般

その他…葵や千早の友達で新たに写真部に入った新入部員。

やんちゃで他人想いで正義感が強く、少し思いこみの激しい所があるようで自分が正しいと思った道を突き進む傾向がある。それで自爆する事もしばしば。

強気だが、折れると弱いタイプ。

最初は圭介を暴力魔などと呼び、敵視していたが浅間家の一件で見なおした様子。

運動神経はいいらしいが、頭が致命的に悪く、初芝に入れたのも奇

跡としか言いようがないらしい。

アイドル『愛木みどり』の大ファンらしい。でもお金がないのでイベントに行けない。

実は意外と苦勞人で、一時期生活費と母親の治療費の為に一人で無理をしていた。

簡単にまとめると根はいい子だけど馬鹿で一直線である。

第35話、体育館倉庫で……ウフフ☆

夕刻、部活も終了して帰り道。俺はいつも通り、暮葉と帰路を共に歩いていた。

いや……今日は暮葉だけではない。偶々校門で遭遇した伊吹も一緒である。

伊吹はいつも通り竹刀を背負っている。また自分の家で練習でもするつもりなのだろう。

考えてみればここに居る三人は、みんな部活をやってるんだよなあ。俺もノリで写真部を初めてみた。部員らしい活動はしていないが、それでも皆との談笑は面白い。

今日はあかりも新たに混じったしな。まあ……相変わらず部長の扱いは散々だったけどな。

「暮葉っ、部活はどう？ 圭介に邪魔されたりしてない？」

「なんで邪魔しなきゃいけないんだよ……」

「そーですよ！ けーすけ様は何もしていないのですよ！」

「暮葉さん……それ、何か俺がプータローみたいに聞こえますぞ？」

「圭介って半分くらいプータローよね」

「俺はニート予備軍じゃねえぞ!？」

第一学校にも通っていて、なおかつ部活にも所属している。そんな俺のどこがプータローだ。とにかく、俺は絶対にニートにはならねえぞ。

確かに働くのは面倒だが、ニートになったらお金が手に入り辛い。つまりゲーム購入費とかがなくなってしまうではないか！

って、そんな話部活とかとは何の関係もないな……と思ったその時、事件は起こったのである。

「おわっ!?!」

突然、高速で飛び出してきた何者かに首の後ろを掴まれ、俺と二人の距離は次第に離れて行った。

「やった! ついに噂の男を捕まえたよ——————!」

「け、けーすけ様!」

「ちょ、ちよつと!?!」

次第に伊吹と暮葉が点になってゆく。

速いぞコイツ、人一人を引っ張っているというのになんというスピード!

コイツ只者じゃないぞと思ったけど、その前に一つ言いたい事があるんだ。

「意味わかんねえええええっ!」

なんで俺は引っ張られているんでしょうか。せめて納得のいく説明をしてからにしてくれえーっ!

……そんな叫びなどは虚しく、俺は何時の間にか初芝高校の体育館倉庫へと連れてこまれていた。

マットの上にか弱い乙女のように倒れ込む俺。

そもそも、こんな所に倒れている時点で問題なのだが、一番の問題

は……お、俺は男だぞ！
なんで男なのに、これから女子に強姦されるみたいな体勢になって
んでしょうか！？」

「あの……念の為に確認しておくけど、俺をどうするつもりなんで
しょうか？」

俺は目の前の髪を括っている女の子に質問をする。

ところで、あの子をどこかで見たことがあるんだけど……気のせい
だろうか？

……いや、気のせいではなかった。胸元には生駒の名前が記されて
いる。

アイツ、房総丘陵トレイルランで俺と競ったヤツではありませんか。

「ごめんね！ どうしても圭ちゃんに用事があったから……っ」

「けけけ、圭ちゃん！？」

「うん！ 藤島圭介って名前なんだよね？ だから圭ちゃんっ！」

「……………」

べ、ベタな幼馴染の呼び方をされたぞ！

最も、リアルの幼馴染にはアンタか呼び捨てでしか呼ばれた事がな
いが。

でも生駒のは違う。アレはよくゲームで見かける呼び方。

「確か生駒……だったよな？」

「うん！ 私は生駒純奈って言うんだよ！」

「……純奈だからすみにゃん？」

「あつ。それ知ってたんだ。やっぱりナギちゃんと知り合いなのは本当なんだね！」

ナギちゃんというのは多分、明智の事だろう……プツ、ナギちゃんって！

アイツ普段はクールキャラなのに、生駒には随分可愛らしく呼ばれてるな。

それにしてもなんて天真爛漫な子なんだろう。この笑顔が暮葉にも匹敵するくらい眩しいぞ。

「まあ確かに明智とは友達だけど……でも、結局何の用なんだ？」

「おっといけない、本題を忘れる所だったね。単刀直入に言う……陸上部に入ってください！」

「……えっ？ エエエエエエエエエエエエエエエエエエツ！？」

目を見開き、口を全開にして力いっぱい叫んでやった。

だって、あまりにも展開が唐突すぎるんだもん。いきなり勧誘されちゃったんですよ？

ていうか生駒さん、薄々感じてはいたけど陸上部だったんだな。

「いきなり無理を言うのは悪いって思っているよ。でも、今の圭ちゃんはどうしても陸上部に必要なんだよ」

なんて必死な顔！？

俺は写真部だし、ここはバツサリと断るべきだとはわかっている。なんだけど……突っ込み所のない真剣な表情をされると、断るにも断れねえじゃないか！

ていうか、うちの陸上部って強かったハズである。なんでロクに鍛えてもない俺を勧誘するんだろう？

この前の房総丘陵トレイルランの勝利なんて、ほとんど奇跡に近かったのに。

……もしかして、強かったハズの陸上部に何か問題でもあったのだろうか？

「ちょっと待て。陸上部に何かあったのか？」

「ううん、ないよ？」

そっかそっか……え、ないのかよっ！

「圭ちゃんは大会で私に勝ったもん。私よりエースとして相應しいもん」

「いや、あの時は背負ってるものがあってですね、殆ど奇跡というか……」

「だったら今日から陸上部の看板を背負おうよ！」

どうして話がそっちの方向に言っちゃうんだよ！

ていうか、俺はもう部活やってるから簡単に変更はできないんだよ。どうにかしてその事を証明し、この勧誘をやめてもらわなければ。

「待て、俺は写真部の部員だぞ？」

「それでも、圭ちゃんの才能を埋めるのはもったいない。だから私と契約して陸上部員になってよ!」

「いやいやいや! 流石に出来る事と無理な事があるって! てゆーかその幼馴染口調は勧誘の為なのか!?!」

「……チツ、バレちゃったよ」

アツサリ認めやがった、なんて悪女なんて生駒さん!

ここは普通、「違うよ? 圭ちゃんは圭ちゃんだもん」とか嘘でも言うよね?

……まあ、さっさと本性を現わしてくれたほうが後のショックも少なくて済む。

「んで、結局お前は何が目的なんだよ……才能とかそう言うのは嘘なんだろう?」

「ふん、バレちゃったら仕方ないね」

いや、自らバラしたんでしょ……。

お前がもう少しうまく隠さないから、殆どバラすような形で俺にバレたんでしょ。

……ていうかまずい。そろそろ時間的に危ない。そろそろ銅魂の放送時刻だ。

「出来れば早く帰りたいんだが……」

「私もだよ。だって銅魂始まるじゃん!」

「お前も見てるのかよ!?!」

「はあ？ アニメくらい、高校生が見るのは常識だよね？」

「いやいやいや、確かに見る人は見るけど見ない人は本当に見ないから！ それ完璧偏見だから！」

あれ、まずいぞ。なんだか銅魂の旧八みたいなツツコミしちゃってるぞ。

クツソォー、コイツのペースに乘せられてたまるか。

むしろ俺のペースに乘せる勢いじゃないと。銅魂の放送時刻に遅れてしまうじゃないか！

「でもクソ介は見てるじゃん」

「見てるけどその前にクソ介って何！？」

「圭ちゃんなんて媚び売るのホントは嫌なんだよ。お前なんかクシ島クソ介で十分だよ！」

……笑顔で中途半端に優しい口調、それなのに言っている事は滅茶苦茶厳しい。

これはこれで全てが厳しいのとは違うけど、でもなかなかショックを受けるぞ……。

ていうかクソ島クソ介って……コイツ、全くとっていいほどセンスがねえな。

その呼び方だと頭文字Cのイケメン兄貴である、高島涼介だってクソ島クソ介にできるだろ。

「……で、結局何の用？」

「もう誤魔化すのも面倒だから、単刀直入に言うよ。クソ介が陸上部に入る理由は監視☆」

「なんで監視なんだよ!？」

「そんなの……ナギちゃんを盗られない為に決まってるよ！」

「……はいっ!？」

わけのわからない事を、わざわざ頬を赤く染めて言っていやがる。一体どういうつもりだ。いや、もう予想はついてるし結果は見えてるが……。

「ナギちゃん是我的嫁！　しょーらいはオランダに行って結婚して、親友じゃなくなったナギちゃんとずっと一緒に幸せに暮らしたいの！」

「な、なんだってー！？」

やっぱりかよ！そういうオチですか、まあ予想通りだけど驚いたよ！いきなり生駒が百合宣言。どうやら生駒にとってのお嫁さんは明智のようである。

それは、同性結婚が認められているオランダに行って、ずいっと幸せに暮らしたい程であるらしい。

とうとう『とある科学の変態淑女』ポジションが、たった今ここに誕生してしまった……。

「お、思い知ったかクソ介っ！ クソ介なんかになギちゃんといちゃつく権利、これっぽちもないんだよ！」

「そもそも俺、明智とそういう仲じゃねえし……」

「ウソだ！ だったらなんで、ナギちゃんはクソ介が熊さんパンツ穿いてるって知ってるの!？」

「く、くま……ハッ!？」

どうして明智が、俺のパンツが熊さんパンツだって知ってんだろうと一瞬思った。

だけど、思い出して見れば今日、しっかりトイレで見られてしまった気がするんだ。

でも明智は知ってて不思議じゃないが、どうして生駒が……ハッ!？
明智のヤツ……俺の下着の話を生駒にしゃがったんだな！

「それって……ナギちゃんとエッチな事した証拠だよね？」

「してねえよっ!」

むしろ男に無理やりされそうになったわ！

そんな可哀想な俺を慰めて欲しいわ！

「とにかく、ナギちゃんを汚すクソ虫は絶対許さないんだよ!」

とうとう虫扱いされてしまった。明智を汚した覚えなんて一切ないのに。

というか、明智とそんなイベントなんてなかったのに。

胸揉みとキスは単なる事故、しかも生駒が知ってるハズもないのに。

「大体熊さんパンツなんてありえないよ！ ロリっ娘の特権を男が穿くな変態!」

「俺だって好きで穿いてんじゃないわっ！」

「とにかく、ぜえーったい監視の為に陸上部に入ってもらうんだから！」

「だから、俺はもう写真部だから無理だって」

「いいよね別に？　クソ介はクソ虫の癖に足速いから、何の影響もないよね？」

「同じ写真部の仲間に迷惑かかるだろ」

ああもう、このままじゃ埒が明かない。

なんとかして、この面倒くさい百合女とのイベントを終了させなければ。

エロゲー鍛えた俺の実力……見せてやろう！

「やだやだ入ってくれなきゃだっ！」

「駄々こねるなよ！？　……ははくん、もしかしてお前、明智も好きだけど俺も好きなのか？」

「はあ？　なにキモイ事言ってるんだよ、2万3千回くたばったほうがいいと思うよ」

……ひどい、照れのテの字すらなかった。

どうやら、生駒の俺に対する好感度はマイナスのようである。

しかし、面倒くさいポジションのキャラが増えてしまったな……。

これも全部、あそこで熊さんパンツを見られたせいだ。

でも、一番の原因は学校で男を狙いまくっていた、あの元海兵隊の変態野郎のせいだ！

「とにかく、陸上部には入ってもらおうよ！」

「嫌に決まってるんだろ……」

「じゃあ陸上部はもういいから、私の弟になる？」

「なんでそうなるんだよ！？」

「姉として、類人猿のクソ介を監視できるからに決まってるんだよ！」

「絶対にお断りします！　ていうか明智には何もしないからもう解放してくれ！　銅魂始まるだろ！？」

俺が言った瞬間、彼女がいきなりきょとんとした顔になった。やがてわなわなと身を震わせ。

「ああああああっ！　い、いけない。銅魂の時間だよ！？　クソ島クソ介！　ぜえーったいナギちゃんに手を出さないでね。手を出したら腸ぶちまけに行くんだよ。わかったなら明日までに写真退部して陸上部に来るんだよ！　きよ、今日の所は同じオタクとして見逃すから！」

そんな特撮にでも出てくる、雑魚敵のようなセリフを吐きながら生駒は遠くへ消えて行った……。

なんというか、アイツの言葉がもう支離滅裂すぎる。ていうか生駒ってやっぱオタクだったのか。陸上部女子でオタクとか、

どこの俺の妹ですか。

はあ。それにしても、あかりと仲良くなれたと思いきや今度は生駒か。

人間関係って本当、難しいよなあ……………。

——結局、俺が家に帰れたのは銅魂が始まって15分後の事であった。

しかも、保険に録画しといたヤツは失敗。

今日は色々な意味で悲劇な一日でした……………がく。

第35話、体育館倉庫で……ウフフ☆（後書き）

NO7

あおやまちはや

青山千早

イメージCV…花澤香菜（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『化物語』千石撫子役

『Angel Beats!』天使 / 立華かなで役

県立初芝高等学校1年3組在籍。

ジョブ…物静かな謎多き後輩

性別…女性

年齢…15歳。

誕生日…11月21日生まれ

身長…157cm

体重…45kg

胸ランク…中（美）

趣味…写真撮影、読書、音楽鑑賞

好きな物…写真、本、マヨネーズ、友達

嫌いな物…変態部長、自宅、仕来たり

その他…写真部に所属している1年生の女の子。葵やあかりとは友達。

控えめな性格だが、その容姿から男子にはモテモテ。ただし当の本人はその状況に困惑している。

圭介が嫌われている事情や本当は優しい人だと知っている様子。

将来は写真家になりたいと思っており、その為にあまり好きではない浅間部長のいる写真部に所属している。

上記の通り、控えめな性格ではあるが意外と発言はストレートであ

り、浅間部長に対する文句はいつも圭介達以上にキレがいい。
勉強も得意であるが運動は苦手らしい。写真撮影の他に小説執筆が
得意かも。

そんな彼女だが、まだ謎が多い子である。

第36話、生駒純奈の暴走

とうとう6月1日……今日から夏服期間である。ちなみに中間テストは6月7日から。

正直に言おう。今物凄く鬱な気分である。その理由は当然テストが近いからだ。

前にも言った気はするが、俺の成績は結構ギリギリなのである。増してやここ数日、生駒の勧誘地獄が……。

……最近の例としてはまず三日前。

「クソ介はスク水好きなんだよね？ ほ、ほら。着てあげたんだから陸上部来てよ！」と、何故かスクール水着を来て勧誘。ただしスク水を着ているからと言ってデレがあるわけではない。

そもそも、生駒が俺に向ける感情は敵意のみである。

正直、この日ほど天罰術式を使いたいと思った事はなかった。

……二日前。

今度は「クソ介！ 陸上部に入らないと、風穴あけるわよ！？」と、何故かチアガールの服を着用し、おもちゃの拳銃二丁を持って俺に迫って来たんだ。

いやいや、流石に無理があるだろ。第一生駒はツインテールじゃないじゃん。

……そして昨日。

昨日は「もう、私のへそくりカロリーあげるよ」とオムそばパンを貰った後、「ねー！ 陸上部に入ってよ！」と迫って来たんだ。多分今までで一番キャラが合っていたと思う。元ネタも陸上部だしな。ていうか一連の勧誘でわかった事。生駒は結構なオタである。

それも、どう考えても男性向けのアニメばかりであった。

これについて、暮葉や伊吹に意見を聞いてみたんだけど……。

「いいじゃない、楽しそうね！」

「拙者も、なんだか楽しそうに見えるのです！」

「つ、使えねえこの二人いいいいいいっ!？」

結局無駄でございました。

いや、大体予想はできていたんだけどさ、ここまで全くフォローを
してもらえないとは。

そんなことをしている間に昼休み。来ちゃったよ……絶対生駒とか
来るだろ。

「クソ介クソ介クソ介っ！」

やっぱり来たよ……しかも、今日の生駒の服装はこれまたオタクな
もの。

……ていうか、それはお偉いさんに訴えられるんじゃないか？
だって、どう考えても某ボカロ風じゃん……。

「おい、その頭の上の白いリボンってモロアレじゃねえか！」

「当然だよ！　だってこれコスプレだもん！」

「お前……人をオタだと思って。つーか必死すぎだろこのキモオタ
！」

「はあ！？ クソ介も同じだよ。同族嫌悪とかどうかと思うよ！」

「学校で平然とコスプレしているヤツが言うなっ！」

ていうか周りの反応もおかしい。どうしてこんなに浮いた恰好のヤツがいるのに誰も気にしないんだ？

まるで、日頃からコイツがコスプレをしていて、いい加減見るのも慣れたって感じじゃないか。

中にはごく普通の人もいて、生駒を軽蔑するような冷たい目で見ている人もいるが。

つか確かに俺もオタクの部類だろうが、学校で平然とコスプレする奴と同類には思われたくない！

「うるさいよクソ介！ ロードローラーで引き殺すよ！？」

「ロードローラーネタやめい！」

つーか今更ロードローラーっすか。

後のタコさんネタでさえ、古いし飽きたネタかもしれないという時期なのに。

「じゃあ猫村コスのほうがよかったかな？」

「そういう問題じゃねえ！ 学校でコスプレするな、あとついでに勧誘もやめてくれっ！」

「うるさいよクソ介！ いい加減にしないと……みっなみなにしてやんよ？」

「お前、もう狙ってるだけだろ……」

流石にそろそろ付き合ってられなくなってきた。

まあ、あかりの時とは違って実害があるわけじゃないし、そこらへんはあかりよりはマシだけど。

でも……正直相手にするのが面倒になってきました。

やっぱ、この状況が続くと学校生活も疲れるだろう。

こうなったら最後の手段だ。生駒の原動力に生駒の暴走を止めさせてもらうしかない。

——というわけで、俺は生駒を振りきった後に明智の所に向かった。

クラスメイトに訊いた所、今彼女は仕事中なので校内のどこかにいるんだという。

廊下を歩く俺はふと思う。ゲームだとヒロインの居場所に矢印がつくよな。

やっぱり……現実りあるというのは不便な世界だ。

「ぎゃあああああああああつ！」

「く、黒やん!？」

「黒やんがまた負けたあああつ！」

その時、どこかで聞き覚えのある馬鹿みたいに3人の声が耳に入ってくる。

この時俺は確信した。間違いなく明智はこの近くにいます。

断末魔が聞こえた場所へ行くと、三馬鹿のリーダー格である黒木がトイレ前で伸びている。

その周りには、勝ち誇った表情の明智と泣き顔の馬鹿2人の姿があった。

……てゆーか黒木、アンタまた負けたんですか。

「では、私はもう行くぞっ」

「は、はい！」

「お気を付けてっ！」

ダメだこりゃ。赤佐と大林は完全に明智の言いなりである。これはもう黒木の権力が消えうせたか？

「あっ、変態藤島……っ」

「変態は余計だろ」

明智が向かって来たのはまさに俺のほう。

たまたま居合わせた俺達、明智は俺を目撃すると変な挨拶をしてきたのだ。

変な挨拶とは言っても、俺らにとっては普通の挨拶になりつつあるが。

「さっきの……見てたのかっ？」

「あんだだけ悲鳴が聞こえれば嫌でも見たくなるよ」

「ごめん……っ、私は風紀委員なのに、風紀を乱すような悲鳴をあげさせて」

本当に彼女は表情を暗くしていた。いやいやいや、まずいだろコレは。どうせ黒木から喧嘩を売ってき

たんだろう。

だったら別に、明智が落ち込む必要なんてないだろうぜ。
というわけで俺は、出来るだけ優しい表情を作り彼女に。

「気にするな。どうせいつものアレだろ？ 黒木のほうから喧嘩を
売ってるに等しいんだし、皆もその辺はわかってると思うから」

そう言ってあげた。すると彼女は上目遣いで。

「……ホント？」

……ぐはっ、すみません今のは破壊力が強すぎた。
一般青少年な上に、チェリーボーイな俺さんにはちよっと危険でし
た。

何故だ。明智が時々見せるこの女の子的な表情。いつもの明智は全
然違う。

って、こんなくだらないこと考えてる場合じゃない！

「嘘だったら誰も明智の相手なんてしないだろ？」

「……うん、ありがとな……藤島っ」

そう言う彼女の顔はほんのり赤く、そしてなんだか嬉しそうな表情
をしていた。

「気にするなって。それよりもちよっと頼みがあるんだけど」

「ん、頼み？ 藤島が私に？」

「お、おう。明智にしかどうすることもできない頼みだよ」

「わわわ、私にしかどうすることもっ!?　くくくっ!」

明智の顔は、一瞬にしてイチゴのように真っ赤に染まった。

その上、驚愕したように口をかなり大きく開けている。

なんというオーバーリアクション。俺……明智に何か言ったわけ?

「あ、あのー。大丈夫か?」

「はっ!?　だ、大丈夫だ問題ないっ!　それで用事ってなんだ!」

そのなんてことのない一言が、某シャダイネタに聞こえてしまった俺は病気だろうか。

それにしても明智は本当にどうしたんだろう。そこまで慌てて答える程の事だったのか?

まあとにかく、話は聞いてくれるっぽいし、素直に頼みごとをしてみるか。

「お前の友達に生駒純奈っているだろ?」

「……え?　す、すみにゃ……げふんげふん!　純奈がどうした?」

せき込む明智に一言。お前絶対すみにゃんって言いかけただろ。

「いや、アイツの勧誘がしつこ過ぎて困ってるんだよ」

「……え?　もしかして用事って……」

「頼む!　アイツの原動力は明智みたいなんだ。だから明智の力を

生駒の暴走を止めてくれ!」

もう、クソ介クソ介言われている俺には止めるの無理です。
いくら俺でも限度というものがあるんだ。

生駒の暴走を止めるのは、賞金10万円獲得よりも遥かに難しい事だ。

「それが……頼みなのかっ?」

「あ、ああ。頼む! アイツは俺の話の間こうとしない。もう明智だけが頼りなんですよ!」

俺は土下座をしながら明智に頼みこんでいる。

端から見れば情けないだろう。でも、それほど俺は必死なのだ。

とにかく、生駒の毒牙から一刻も早く逃れたいのである。しかし、俺の話を聞いた明智はと言うと。

「……はあ」

何故だか、凄まじい脱力感を彼女から感じる。

あのため息からもソレが強く伝わってくる。

「……? どうしたんだお前?」

「いや……別になんでもないっ」

「そ、そっか」

明智はまるで期待していた話とは全然違ったかのように、肩を落として残念そうな顔でガツカリしていた。

「……とりあえず、純奈の事は任せてくれ」

「いいのか？」

「純奈は私の友達だ。それに藤島の疲れた顔はその……見たくない
っ」

「おお！ マジでやってくれるのか！？」

「あ、あたまりえだっ」

明智は微妙に視線を俺から逸らしながらも、生駒の暴走停止を約束
してくれた。

この時、俺は改めて明智の優しさを知ったのである。
やっぱり明智はいい人だったぜ。相変わらず俺を変態扱いしてくる
けどね。

これで、俺はもう生駒に付きまとわれることもなく、いつも通り伊
吹をからかう事ができるぜ。

この時の俺は久々にウハウハな気分であった……。

第36話、生駒純奈の暴走（後書き）

NO8

小坂亜紀
こさかあき

イメージCV…佐藤利奈（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『とある魔術の禁書目録』御坂美琴役

『みなみけ』南春香役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ…テキトーすぎるクラス委員

性別…女性

年齢…16歳。

誕生日…10月11日生まれ

身長…162cm

体重…48kg

胸ランク…大（巨）

趣味…グッズ集め、映画観賞、読書

好きな物…戦国武将、そのあたりの歴史、映画、ラーメン、圭介争奪戦観戦

嫌いな物…大吾、玉ねぎ、面倒な事

その他…圭介や暮葉のクラスメイト、伊吹の親友。

超アバウトで面倒くさがり屋な人。

一応クラス委員であるが、面倒くさがり屋な為あまり頼りにはされていない。でもやる時はやるタイプらしい。

伊吹の親友だけに、伊吹の気持ちには気付いている様子。

成績は意外と優秀で運動も人並みにはできるようである。

大吾とは喧嘩友達、重原との関係は至って普通。無類の戦国好き。

また大吾の長宗我部という名字に関して『長宗我部元親に失礼』と言っている。

圭介の事は『圭くん』と呼んでいる。

第37話、誤解ほど恐ろしいものってないよね！

「クソ介のせいでナギちゃんに怒られたんだよ!？」

残念賞。

明智に頼んだ結果がこのザマだ。

そう、生駒が一筋縄で引っ込む程度の小者なら苦勞はしない。

だけど生駒は人様の胸倉をしっかりと掴み、笑顔で俺にキレていた。確かに明智は仕事をしてくれたようである。だからこそ生駒はその事について怒っているのだ。

現在5時間目と6時間目の間の10分休み。水を飲もうと思ったら捕まっちゃったんだよ。

……女の子に胸倉を掴まれる俺って、男として結構情けない気がする。

「お前がしつこいのが悪いんだろ？」

だけど俺だって男だ。最後のプライドとして反論だけはさせてもらうぞ。

まったく、俺らはどこのヤンキー少女とフツーな野郎だよ。

まあ、生駒はヤンキーとは対極の体育会系オタクだけど。

「だからってナギちゃんに言う？ 私、ナギちゃん相手には反論できかないんだよ？」

「それってさ、自分が弱いって言ってるようなもんじゃね？」

「クソ介よりは弱くない！ 私みたいな女に胸倉つかまれてる癖に。カツアゲされる気弱な中学生じゃないんだよ!？」

「じゃあ、殴ったりしてもいいのかよ？」

「男として最低だと思うよ！」

「だから対処しようがねえんだろうが。そろそろ授業始まるから離してくれないか？」

「だが断る！」

生駒は人様の胸倉を掴みながらどや顔だ。

畜生、最初に出会ったときはいい子そうだったのに……。

イザ関わってみればただの百合な問題児だったよ！

なんで俺の周りにはこう、残念な人ばかりが集まってくるんだろう？

「お前、授業に遅れてもいいのか？」

「大丈夫だ、問題ない！」

「またそれっすか！？ シャダイ好きだな！？」

「ニヤ動ネタ全般好きなんだよ。クソ介もそうだよね？」

「いや、ニヤ動自体あんまり利用しないけど」

たまに友達がやってるニヤ生は視聴するし、時々MADは見るがそんなにしょっちゅうは利用しない。

意外かもしれないけど、これでもニヤ厨ではないのである。

ちなみにニヤ厨とは重度のニヤニヤ中毒者。あるいはそれらに誇りを持つ人の事だ。

「残念ボーイだねクソ介っ！ ニヤ動利用しないと人生の9割は損するよ？」

「それほとんどじゃねえか！ 一体何時間ニヤニヤしてんだよ」

「5時間近いかも……」

「もうすぐニヤニヤ廃人じゃねえか！ この廃人陸上部員！」

「つかそんなにニヤニヤしていて、オマケに陸上部でも頑張っている。」

「そんな生駒は一体いつ寝ているんだ。ちゃんと睡眠とってるんだろうか？」

「廃人なんてそんな……私、ニヤニヤニート狙ってるのに」

「親が泣くからやめなさい！」

「一日に16時間以上もニヤ動に常駐してられるか！」

「逆に達成できる人がいたとしたら、そいつは俺の前に来い。」

「名誉ある『全国ニヤニヤニート大賞』を授与しようじゃないか。」

「それにしても、体育会系女子って一番ニヤ動と縁がなさそうなのにねえ……。」

「人というのは、見た目とジョブで判断しちゃいけないんだなと改めて思ったぜ。」

「とにかく、クソ介のせいでナギちゃんに怒られちゃったよ？」

「いいだろ？ 好きな人に罵られるってのはMにはたまらない事だ」

ろ？」

「そ、それもそうだけどっ。確かにナギちゃんに罵倒されるとキモチイイけど……で、でもそれがクソ介の為だと思うとムカつくんだよ！」

これはひどい。

そんな理由の為に俺は胸倉を掴まれているの？

というか、生駒って明智に罵りたいドMの変態さんだったのか。やっぱり、生駒はある科学の変態淑女ポジションであった。

「そもそも、お前がしつこいからこんな事になったんだろ？」

「だって！ クソ介とナギちゃんがその……下着を見せ合う仲に――」

「ストーーーーップ！ 俺は明智の下着なんて知らねえ！」

「ほ、ホント？ 今日のナギちゃん何色？」

「知るか！ 白とかが無難だと思うけどな」

「合ってるじゃんこの変態クソ介！」

白で合ってたのかよ！

クソッ、勝手に予想しなければよかった。明智は白だろうと妄想した結果がこれだよ。

せめて、アダルトでセクシーな黒と言っておけばよかった。

畜生、女子の下着を妄想する事でここまで後悔した事なんて……今までなかったぜ。

でもやっぱり……伊吹の縞パンは最高だった気がするぜ。

でもなんでだ、なんでコイツは明智の下着の色を知ってるんだろう？

「ちょっと待て。お前が明智の下着の色を知ってるって変じゃね？」

「普通だよ。だってこっそり見たもん」

「……どうやって？」

「スカートめくりがメジャーだよ？」

「……めくったのか？」

「うん！」

「最低だコイツ！？」

どこまで変態なんだよ。学校でスカートめくりって二次元以外じゃ見たことねーぞ。

とにかくよくわかったぜ。生駒は百合で変態で思いこみの激しい、危険人物だってな！

「黙れクソ介！ クソ介はナギちゃんを脱がして自分も脱いだ癖に……」

「待て、俺は脱がされたんだ！ 決して脱がした覚えはない！」

しかも俺は男なのに男に脱がされたんだぜ？

これ以上、男として可哀想な事はないと思うんですよ。

「ナギちゃんは男を脱がすなんて不埒な真似しないもん！ 嘘つかないでよクソ介！」

「明智に脱がされんだじゃねえよ！」

「じゃ、じゃあ誰に脱がされたの？」

「……男、今日現行犯逮捕されたヤツいただろ？」

その時、生駒の表情が驚愕のものへとなっていた。

目を見開き口まで半開きである。本当に彼女は事実には驚いているようである。

というか、ノリで話していたけどこの展開だと誤解が解けそうだな。

よかった。これで俺と明智の件は白だって彼女に証明できる――
――！

「そっか……クソ介は仲間だったんだ」

「は？」

なにコイツ、いきなり納得したような顔をしてどうしたんだ？

「ごめん。私、完全にクソ介を誤解していたよ……」

「え？ ああいや、わかってくれたんならいいけど……」

「うん。そうだよね……だってクソ介は………同性愛者なんだよね！？」

「はっ……はあああああっ！？」

ががが、同性愛者ですとおおおおっ!?

ちよいと待ちやがれ。今の会話からどうしてその答えに至ったんだ。アレは俺は望んでいない。下品な言い方だがレイプというヤツだった。

まあ、未遂だったからよかったけど、された側としては精神的にシヨックだったんぞ。

それがどうして……どこから同性愛者という答えになりやがったんだ!

「わ、私も男は大嫌いだよ……でも女の子は好きなんだっ。そして……ナギちゃんが一番好きなんだよ?」

「そうか、それはよかった。でもその前に一つ言いたい事が――」

「クソ介も同性のほうが好きだったんだね!　それで、クソ介は誰が好きなの?」

「おいちよっと待――」

「同じ同性愛者として、私はクソ介の恋愛相談に乗るよ?」

「だからちよっと待ちや――」

「まちや……?　町屋君の事が好きなんだね?」

頼む生駒さん。お願いですから……すこしは俺にも喋らせてください。ていうか誰だよ町屋君って!

初耳だし知らねえよ。でもこの展開的に町屋ってのは男なんだろう。

そんな……俺は男だ。なのに男と恋愛するなんて死んでも嫌じゃあ
あああつ！

ここは断固否定。町屋君なんか好きじゃないって生駒に言ってやら
ねば！

「違うわ！」

「待ってて。今すぐ町屋君を呼んでくるから」

「町屋君って実在人物なのかよ！？」

「私の前のクラスメイトに町屋君がいたよ？　だから今からクソ介
と町屋君がトイレに行くイベントを――」

「やめてくださいお願いします！　そして町屋君逃げてえーっ
！」

俺は本当に町屋君を呼びに行こうする生駒の手首を、しっかりと握
っていた。

だって……呼びに行かれたら困ることしかないじゃねえか！

「けーすけ様っ！」

「あ？」

おお、あの綺麗なベビーピンクのセミロングにピンと立ったアホ毛。
そして小柄な体軀にあどけない顔、とても元気な敬語。まさしく暮
葉であった。

何故だろう。このタイミングで登場してくれた暮葉が女神さまに見
える。

「あ！　こんなところにいたのですね！」

「く、暮葉！　丁度いい所に来た。誤解を解いてくれ！」

「もきゅ？　なんの誤解ですか？」

「そ、それは……」

……それを正直に言いやがれと？

うーん、いくら相手が暮葉でも流石に恥ずかしいぞ。
ホモ疑惑をかけられてますなんて言ったら……ああ、嫌だよ言いたくないよ！

「って、疑惑は後で聞くのです！　それよりけーすけ様、野原先生がお怒りなのですよ！？」

「えっ？　あっ！」

俺は時計を確認し、初めて自体の深刻さに気付いた。
だって……もう授業が始まってんら10分近くが経過している。
しかも次の授業は野原先生の数学ではありませんか。

「早くなのです！　早めに行ったほうが身の為なのですよ！」

「お、おうそうだな！　とりあえずよく聞け生駒！　俺は同性愛者じゃねえ！」

「そ、そうなの……？　あ、わかった！　クソ介はバイなんだね！」

第37話、誤解ほど恐ろしいものってないよね！ （後書き）

NO9

ちようそがべだいじ

長宗我部大吾

イメージCV…吉野裕行（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『カオス；ヘッドーCHAOS；HEADー』西條拓巳役

『機動戦士ガンダムOO』アレルヤ・ハプティズム役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ…完全二次元派オタク男子

性別…男性

年齢…16歳。

誕生日…7月12日生まれ

身長…171cm

体重…60kg

趣味…アニメ鑑賞、漫画、ラノベ読書、ゲームプレイ、その他二次元全般

好きな物…二次元の女の子。ラノベ、漫画、アニメ、ゲーム等々……
嫌いな物…現実、現実女子、その他不条理なモノ、理不尽なモノ。

その他…圭介の悪友A。何故かいつも重原とつるんでいる。

我欲に素直であり、圭介ですら『変態』と引くほどの男。

おちゃらけた性格であり圭介にすらウザがられ、女子からの評判は心底悪い。

しかし現実女に何を言われても平気らしく、完全二次元派。

成績は意外と優秀だが、校則で禁止されているハズのPNPを学校に持ち込んだり、その他生活態度にかなり難があり教師陣は彼を問題児扱いしている。

自称『ギャルゲーの神』、しかしネット上で有名な某落とし神には到底敵わない存在である。

なんだかんだ言って圭介や重原とは仲がよく、この男三人で行動する事は多い。一人称は『僕』、しかし口は悪い。

第38話、疑惑の圭介

「圭介、あんたってホモだったの？」

「圭くんまさかのBL!？」

「けーすけ様って実は男性のほうが好きだったのですか!？」

「……………」

ヘルプ・ミー!

誰か助けてください!

——あれからしばらく経過し、テスト明けで憂鬱な気分の月曜日の事。

校内にはある噂が広まっていた。それは、俺こと藤島圭介ガチホモ説である……。

……多分、こんなのを広めたのは生駒だろう。ていうかアイツ以外には考えられない。

そうじゃないとすれば、あの時の会話を誰かが聞いていたとか……

まあ、考えても仕方がない。

おかげで男には近寄るな言われるわ、女子も大半がキモがり腐女子だけが歓喜。

それどころかリアルガチホモ青年が俺に近寄ってきて、それを迎撃すべく時々路地裏で喧嘩。

……もう嫌だ。色々突っ込みたい事があるけど、まずはどうしてこ
うなった!?

「なあ、どうすれば誤解って解けると思う?」

「誤解は変な事をするとか余計に真実と思われそうですよ? 拙者は我慢
する事をオススメするのです!」

「そうね。まあ少なくとも私らはちゃんとわかってるから。気にし
ないで生活すればいいわよ」

「僕はそもそも二次元以外に興味ないし、同じオタクなら別に圭介
がどうであろうが関係ねえぜ?」

「まあ、俺も圭介が美乳派なのはわかってるから」

……重原、それフォローになってなくね?

確かに俺は美乳派だけど、要するに変態って言ってるようなもんじ
ゃないか?

失敬な、俺は変態ではなく紳士だぞ。

「圭くん。いっそ女子と付き合うってのはどお?」

突然、小坂がニヤニヤしながらとんでもない事を言いだした。

「ぶっ! な、なんでだよ!?!」

「だって、要するに圭くんが女に興味がない人って誤解だよね?
だったら簡単、女子と付き合っちゃえば万事解決だ!」

た、確かにそうだ……！」

俺がリア充になっちまえば、もうそんな誤解とはオサラバできる。でも簡単に言うけどさ、高2にもなって彼女いない歴〃年齢だぜ？そんなモテない野郎が、これから先彼女が出来るとは限らないだろ。

「だだだ、ダメよ亜紀！ 圭介に彼女なんてその……か、彼女の身が危険よ！」

「俺がデートDVするような人に見えるんですか！？」

「で、デートDVはしなさそうだけど……む、無理やりエッチな事しそうよアンタは！」

「俺はそこまで強引な男じゃねえ！」

伊吹もとことん失礼なヤツだぜ。そんなに強引な男なら今頃彼女の一人や二人はいたっつの。

肉食系じゃないからいないんだろうが。でも草食系ってわけでもねえし……雑食系？

まあ、身体が丈夫な事と回復力が高い事。念じながらキスをすると強くなること以外、俺は多分ごく普通の健全な男子高校生である。とにかく、俺はそんなに強引エロじゃないんだよ。

「だったら俺と一緒に武道やらないかい？ 男にも女にも興味がないように見えるよ？」

「いやダメだろ！ 男と格闘する時点で余計に誤解されるから！」
重原みたいな爽やか系男子との武道も、当然腐女子ホイホイなネタなのでアウトだ。

「だったら一日中P N Pでギャルゲーをするってのは！？」 眼鏡なら僕が貸すぜ！？」

「どこのオタメガだ！」

「僕は尊敬してるけどな……っ」

「お前はリアルにオタメガだっ！」

ダメだ。大吾の案に乗ったら人生負けな気がする。そう言うのは家でこっさりプレイするに限る。
流石に学校でプレイする気にはならないな。

「けーすけ様っ。拙者はやっぱり我慢が一番かと思うのです」

「そ、そうよ！ 恋愛とか格闘とかギャルゲーなんかより、我慢が一番いい方法よ！」

「そ、それもそうだよな……っ」

恋愛なんて可能性がないし、格闘なんかモロ腐女子ホイホイだからアウト。

学校でギャルゲーなんて、そんなオタメガチックな真似は俺にはできないぜ。

でも……我慢するのも辛いよなあ。だって大半の人にはキモがられ、一部の人には集られて……そんな日常が続いてみる。絶対現実が嫌になってくるから。

「そんな圭くんによっぽり、あたしは恋愛をオススメしよう」

「小坂……お前は人の心でも読めんのかよ？」

「ふっふっふ！ あたしはこうみえても友達から鋭いと評判なんだっ」

小坂のヤツ、地味にドヤ顔で自慢してるし……。

まあ、確かに鋭いというのは世間では便利なスキルだ。

「確かに、亜紀ってホントに鋭いわ……」

「特に伊吹の気持ちはお見通しっ♪」

「お、お見通しってどういう意味よ……？」

「え、気になるひ——」

「だああああっ！ そ、そんなのいない！ いないわよ！」

やけに必死になって伊吹は叫んでいた。

言いかけで伊吹の叫び声が入った為、結局小坂が何を言いたかったのかかわからなかった。

だけど、伊吹にとってはあまり話して欲しくなかった事なんだろう。

「っで、圭くん。やっぱりあたしは誤解を解くために彼女を作るべきだと思うの」

「まあ、お前の意見は確かにいいかもしれないけど。でもねえ相手が……」

3度の恋は失敗。現在出会いのカケラもナシ。

仮に暮葉達とのアレが出会いだとしたら、出会った女の子は美少女
だけどどこか残念。

辛いぜ……非モテ男は。

「そうだ！ 身近な人から選らべば？ 例えば暮葉とか伊吹とか隣
の明智さんとか」

暮葉は何故目を輝かせている？

そんなに人の色恋沙汰が面白いのか。まあ暮葉だって女の子だしな。

「もきゅっ！？ せ、拙者もなのですか！？」

「わああ、私は別に対象にしないでいいわよっ！」

「あのなあ……簡単に言うけどそれも結構無理があるだろう？」

「そうだねえ。じゃあじゃあ、圭くんにあたしらの中で誰が一番
好み？」

「ええっ？ 好みかあ……」

まあ、好みの女の子を妄想するくらいなら。

でも、それを本人の前で答えろというのも中々の羞恥プレイである。
ていうか、俺は誰が好みなんだろうか……とりあえず選択肢を絞ろ
う。

1…暮葉

2…伊吹

3…小坂

- 4…明智
- 5…青山さん
- 6…あかり
- 7…生駒
- 8…葵

……うわ、絞ろうと思ったけど結構な人数になってしまった。

まずは……葵は実の妹だから論外。生駒も元はと言えばアイツの暴走がこの結果を生んだんだ、当然論外である。ていうか女子をこんな風に評価するのって……何か嫌だな。

でも実際の所を言うとな俺は美乳な青山さ——げふんげふん！

でもなあ、青山さんとはたまに1対1で話すけど、回数自体は少ないし。

明智とはそこそこ話せるが、近寄ると変態生駒さんからボロクソ言われそうだ。

あかりはシスコンの浅間部長の監視に遭いそうだ。

そうなると話しやすいのは暮葉か伊吹か小坂の三人。

そうだ。どうせ無駄だろうが、からかった時の伊吹の可愛い反応が見てみたいかも。

……よし、伊吹だ。いつもの調子で伊吹と答えてみよう。

「圭くん、決まった？」

「お、おう。俺の好みだっけ？」

「そうそう！　っで、誰？」

「伊吹、君に決めたっ！」

なんとかモンスター風に、俺は伊吹を指名してみる。
すると伊吹はわなわなと震え、目を白黒させ。

「え、エエエエエエエツ!？」

彼女は本気で驚いていた。

まさか、自分の名前が出てくるとは思っていなかったかのようなのである。

……うん、やっぱり伊吹の反応が可愛い。

「もきゅ!？」 け、けーすけ様……伊吹さんの事が好きだったので
すか!？」

「圭介……まさかの幼馴染ルート突入か？」

「やっぱり。まあ俺は絶対国宗さんだと思ってたよ」

「お前らなあ……タイプを聞かれただけなのに、なんでそこから好き
きって事になる？」

しかもいつも通りのジョークなのに。

ていうか、タイプ＝好きな子というのも色々とおかしいだろ。

あの子可愛いとか、そういう日常会話にもありそうなノリである。

いつも伊吹に可愛いって言ってるんだ、伊吹も流石に本気になった
りはしない……と思う。

「そーだそーだ。というわけで圭くん和伊吹は今日からカップルね」

「……え？」

……えーつと、この小坂さんは今なんと仰いやがったんだろうか？
伊吹と俺がカップル……？

ちょ、ちょっと待て。話が冗談のレベルじゃなくなってきたぞ！？
もしかして、俺は思わぬルートに突入するという地雷を踏んじまったのか？

「ちょ、ちょっと亜紀！？」

「いいじゃん。誤解が解けるまでの恋人ごっこなんだから。まあ……
あたしとしては、ホントに付き合ってくれと面白んだけどねえ？」

小坂のニヤニヤとした顔が何かムカつくうつ！

というか伊吹も、何かもの欲しそうな視線を向けてくる。

……と思った刹那、突然伊吹は不機嫌そうな表情になり。

「け、圭介！ どーせいいつもの冗談でしょ！？ あ、あんたも亜紀
に何か言ってやりなさいよっ！」

「お、おう！ 小坂、悪いけど今のはいつも通りの冗談だよ」

我ながら実に最低である。そんな事は自分でもわかっている。

でも毎朝こんな感じだし、伊吹もいい加減慣れた感がある。

だからこそ、こんな最低なやりとりでも俺達は気を許せている。

「ええー？ 絶対いい案だと思ったのに。それに伊吹はいいの？
このまま圭くんがガチホモ扱いされた辛い思いをしても」

小坂のヤツ。意地でも俺と伊吹をくっ付けたいらしい。

さて、どうしようか。伊吹の言う通り俺はいつもの冗談を言ったつ

もりだ。

だけど、ガチで幼馴染ルートに突入しそうな展開になってしまったぞ？

「……っ……っ……し、仕方ないわね。本物は嫌だけどフリくらいならしてあげるわよ！」

「ちょ！？　い、伊吹……マジで？」

「あんた、このままガチホモ扱いされたいの？」

「そりゃ確かに嫌だけど……」

「恋人じゃなくてあくまでフリよ！」

何故でしょう。何故だか伊吹さんまで乗り気であった。

腕を組んで見下し命令するように、彼女は俺に迫ってくる。

……でも、伊吹はそれでいいのか？

あの時から伊吹は俺に対して冷たかった。まさに今のツツパリ伊吹ちゃんになった。

きつと俺はあの時の事で、他の人程じゃないにしろ伊吹にも嫌われたのかもしれない。

ある程度の距離を置く為に、伊吹は俺にツンツンするようになったのかもしれない。

そんな伊吹が、フリとは言え俺と恋人になる……？

「伊吹、それで本当にいいのか？」

「……えっ？」

「お前……普段がああだし、俺の事そんなに好きでもないんだろ？」

「……っ、とっ……当然よ！ 嫌いだけどその……っ、困ってるし、どーしても助けて欲しいからっ！ 別に好きだからじゃなくて仕方なくよ？」

仕方なく……か、やっぱりそうなのか……。

だったら俺の答えは一つしかない。

俺は伊吹が嫌いなわけじゃない。むしろ好きかもしれない。でも、伊吹がそう言うなら――

「だったら、無理なんてしなくてもいいだろ？」

「む、無理……？ 無理って……なによ？」

「大した好きでもないヤツと恋人ごっこなんて、そんなの伊吹だって嫌だろ？」

「それはその……あたりまえよ！ でも圭介がどうしても――」

「さっきも言っただろ、いつも通りのやつだって。だからそんなに無理はしなくても……」

伊吹に無理はしてほしくない。

嫌いな人と恋人のフリをするなんて、女子としてはそんなに嫌な事はないだろう。

男でも同じだ。それなのに、伊吹は好きでもない人と恋人にフリをしようとする。

俺は……そんな無理をするような。そして真剣じゃない恋愛なんて嫌だ。

「……ごめんっ」

その時、口から零れたその一言。
それを吐いた刹那伊吹はゆっくりと歩み、教室から出て行ってしまった。

「……え？　ちょ、伊吹！」

さすがにこれはマズイと思った俺は、教室から出て行こうとする伊吹を追う。

しかし、俺が廊下に出た時には既に彼女の姿はなかった。
何故だろう。廊下に出た瞬間に走りだしてしまっただろうか？

「伊吹さん……っ」

「ああ……ちょっと、あたしも悪いことしちゃったかな……？」

伊吹を心配する皆。特に小坂なんて親友だけに本当に心配そうだ。
あんな提案さえしなければ……と思っていたのかもしれない。

でも、一番悪いのは俺だ……多分俺がアイツを傷つけるような事を
無意識に言ってしまった。

そうに違いない。でもなんで。アイツ無理してたんじゃないのか？

……おかしい。ツツパリなのにわからない。

とにかく、何よりも先に伊吹に土下座でもなんでもしねえと――

第38話、疑惑の圭介（後書き）

No10

しげはらひろとし

重原広敏

イメージCV…小野大輔（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『涼宮ハルヒの憂鬱』古泉一樹役

『デュラララ!!』平和島静雄役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ…武道家学生

性別…男性

年齢…17歳。

誕生日…4月18日生まれ

身長…180cm

体重…70kg

趣味…身体を鍛える事、アニメ鑑賞

好きな物…武術、ラノベ、漫画、アニメ

嫌いな物…身体に悪いもの、セロリ

その他…圭介の悪友B、長身で筋肉質だが爽やかなキャラ。

家が『無差別格闘重原流』の道場であり、重原流武術の使い手。

山籠りなんて常識離れな事もやってきたらしく、圭介曰く腕前はかなりのもの。

武道家で恋愛にも興味はないが、圭介や大吾に匹敵するほどのオタク趣味を持つ。

大吾とつるんで行動することが多い。

一人称は『俺』だが、圭介や大吾と違ってそこまで荒い言葉使いはしない。

実はある秘密があるらしい……。

第39話、side story 伊吹編

あゝあ、結局授業サボっちゃったな……。

あの後、学校を飛び出した私は古宇坂駅前の、古びた商店街をフラついていた。

お昼休みに何も言わず飛び出してきちゃった。きつとサボり扱いよね……。

でも、そんなことは仕方ないと思っている。それに飛び出てきた私が悪いんだから。

「……はあ」

……やっぱり、アイツは私の事心配してんのかな？

アイツは世話焼きだし、私が少し不機嫌でも真剣になってくれるヤツだから。

そんなヤツだから、いつも通りの冗談を言い合える。

でも今回は違う。いつもアイツに冷たく当たっているのは私なのに。アイツが嫌われているって思っちゃうのも、別に不思議な事なんかじゃないのに……。

って、別に私はアイツが好きだから。だから気にしてるとかじゃっ！

でも、このままの状態は嫌だ。世話焼きなアイツは私のために必死になるかもしれない。

それって、アイツにかなりの心配をかけちゃってるって事よね。

それに今回はアイツだけじゃなくて、亜紀や暮葉達にも心配をかけちゃってる。

ホント……私は身勝手だ。絶対心配するような事をやってしまった。別にわかってたのに。アイツの言葉はいつも冗談だって事も。亜紀

の提案もノリの思いつきだったって事も。アイツが『無理するな』って言ったのは優しさからだって、全部全部わかっていたハズなのに。

でも、今から戻るって雰囲気でもないわよね……。

「はぁ……」

やっぱりアイツ、今頃私の事心配してんのかな？

……バカみたい、何を考えるにしてもアイツの姿が脳裏に浮かぶ。胸が高鳴る。頭の中までわけがわからなくなるくらいに混乱している。

アイツの馬鹿っ。頭の中にまで出てこないでよ、胸をもやもやさせないでよ……っ。

「……はぁ」

またため息ついちゃった。今日で3回目……。

そう言えば誰だろう。ため息をつくとき幸せが逃げちゃうって言った人。

これだけため息ついたら、私の幸せも逃げちゃってるのかな？

……確かに、今は幸せじゃない。皆に迷惑掛けちゃっている。それにアイツに嫌われて当然のように冷たく当たってきたのに、それが嫌で勝手に飛び出してアイツに心配をかけている。

……嫌、か……やっぱり変わらないのかな……私の気持ちは。ずっとそうだった。ずっと昔からいつもも考えている事はアイツの事。

胸のもやもやだって、別に最近感じるようになったものじゃない。ずっと昔から——子供の頃から感じていた。

否定しているけど、やっぱり溢れ出そうで……。

……ダメだな私。今でも否定しようとしても、全然否定ができない。それに私は、私の中の莫大な感情の正体なんて、もうとっくの昔に自覚している。

何があろうとも変わらない。変わることがなかった……そんな莫大な感情。

苦しいけど、でも時々幸せになれる……そんな不思議な想い。

……って、そんな事思っちゃダメよ！

それじゃあ私……強くなんてなれない。そういうのは強い子はしないんだから。

決めたのに……もう二度と誰にも傷つけられたくない。アイツにを傷ついて欲しくない。

だから私は今までずっと、強くある為に人を変えてきた。

誰にも迷惑をかけたくなくて、アイツに傷ついて欲しくなくて、自分を守る為にもずっと強氣でいた。

でも――

「やっぱり、私ってばか……」

そんな事をしていたら、確かに自分を守ることはできた。

でも、誰にも迷惑をかけていない？

アイツを傷つけたりなんかしていない？

……それは、やっぱり嘘になる。結局私は自分を守ること以外は何もできていない。

だから今みたいに皆に迷惑をかけている。日頃の冷たい言葉がアイツを傷つけてしまっている。

でも……っ、今更私を変える事なんてできない。

あの時みたいにイキナリ変えられない。今更素直になんかなれない……っ。

「……っ！」

「おうっ？」

いたっ……しまった。考え事をしながら歩いていたら、誰かとぶつかってしまった。

古宇坂の商店街は空洞化も進み、人通りは少ないけどそれでも人は必ずいる。

ホントばかだわ……前すら見えない程に考え事をしていたなんて……。

とにかく、早く相手に謝らないと。

「ご、ごめんなさ……っ!？」

私が顔を見上げると、そこにはどこかの高校の制服を着た長身の男が立っていた。

でも制服は着崩され、赤い坊主の髪にはラインアートが入っていた。耳にもピアス、灰色のちよつとダボっているズボン。

上は蜘蛛の模様が入っている紫色の長袖シャツを着用。ズボンには金色のチェーンを付けている。

どこをどう見ても不良として思えない外見の人が、私を見下ろし狂気のような笑みを浮かべる。

そんな彼を見て私は……。

「っ……っ……っ?」

息が喉で詰まる、そして足がガクガクと震える。

いや、足だけじゃなくて……身体そのものが震えている気がする。とにかく……相手を見た瞬間、私は思わず恐怖を感じてしまった。そして、脳裏にいつかの光景が広がってくる……………。

「久しぶりだなあ伊吹ちゃん」

「あっ……………」

なんで…………どうしてコイツが昼間から商店街をフラついてるの？

「ハハッ、ンだよオそんなにビビっちまってよ。久々の再会だったのに冷たくねえか？」

……………なによ、ビビる必要なんてなのに。

こういう時の為に、コイツから身を守る為に強くあろうとしてきたんじゃない。

一応念の為に、制服の中には竹刀を隠している。

こんな、こんな不良なんて恐れる必要……………全くないのよ。

「……………ながぶちあきら永瀏晃、何の用？ 私に何か用でもあるの？」

「ほお？ しばらく見ねえ間に随分強気になったんじゃないかねえか」

「別に、私は元々こういう人よ」

「ヘッ、嘘ついちゃってよお……………強がりとか一番嫌いなんだよなあ」

そう言いながら、永瀏という男は徐々に私に近寄ってくる。

一歩近づくごとに、私は思わず後ずさりをしてしまう。

それでも、永瀏は私なんかを気にせずに迫ってくる。

……危ない。これ以上永渕に近寄られたら……危険すぎるっ！

私は警戒しつつ後ろへ右手を廻し、竹刀の握りの部分を握った。いつでも竹刀を取り出せるんだから……変な事したら、すぐにこれを振りまわすんだからっ。

「なんだあ、手なんか後ろに廻して……もしかしてそのポーズで誘ってんのかあ？」

「近寄らないでよ……っ」

「……フツ、いいだろ別に？ つーか伊吹ちゃんと会えたのは都合がいいぜ。丁度俺も伊吹ちゃん達に用事があったからさあ」

「よ、用事……？」

「ああ。悪いけど……伊吹ちゃんには俺に付き合ってもらおうぜ？」

……嫌だ、そんなの嫌に決まっている。

私はこういうのが一番嫌い。しかも嫌いになった理由は全部コイツ……っ。

永渕さえいなければアイツが悪く言われることも。私が今の私でいる必要も……っ！

「……っ！」

「さてと、んじゃあ来てもらおうか——」

不敵な笑みを浮かべるワルな男。

私はそんな永渕の伸びてくる手を、空いていた左手で叩き払った。

「はア……?」

いかにも、意外な事が起こったという表情をしている永渕。

……バカじゃないの。普通よ普通、こんなのに関わりたくない人なんていないわよ。

それに私だって忘れたわけじゃない。永渕に何をされたか……忘れるわけがない!

「嫌だって言ってるでしょ。帰ってよ!」

「……ぐっ、こんのクソアマアツ!」

私が嫌といった瞬間、永渕は突然キレ始めた。

どんだけ短気なのよ……と思ったその時、永渕がその拳をいきなり振るってくる。

私は咄嗟に後ろへ跳躍し、ギリギリの所で永渕の一撃を避けた。

私はわけがわからなかった。突然殴られそうになった意味って……。

……いや、そんな事は後で考えればいいのよ。とにかく今は自分の身を守らないと。

元々右手で握っていた竹刀。私はそれを取り出し身構えようと――

「させると思ってたのかよ。このクソアマがあつ!」

「きゃっ!」

気付けば左頬に激しい痛みを感じていた。口の中に血の味が充満してゆく。

そんな中でようやく状況を整理できた。完全に身構える前に殴られ

てしまった……。

「い……痛っ……」

当然だけど痛い……でも、それ以上に私は……っ。

何故だか次第に震えが止まらなくなる。マトモに身体が動かなくな
ってゆく。

そして……脳裏にいつかの光景が蘇っていく。

……こ、怖いっ。怖いよ……っ。

「オラァ！ さっきまでの勢いはどうしたんだよ？ テメエ、人の
手え叩いてくれて痛エだろコラァッ！？ どおしてくれんだよ……
マジでざけんじゃねえぞコラァッ！？」

「い、ぐ……！」

馬鹿みたいなセリフを吐き、永洌は私の鳩尾を握った拳に叩き込ん
でくる。

殴打を受け、横隔膜の動きが一瞬止まってしまったせいか、痛みだ
けではなく息苦しくなる。

マトモに呼吸が出来ない。痛みで思わず右目から一筋の雫が零れて
しまう。

そうして怯んでいる間にも、永洌は大きく振り上げた拳を放ってく
る。

「あ、あ！？」

拳は私のこめかみを直撃し、薙ぎ払われるように吹っ飛ばされてし
まった……。

朦朧とする意識の中、気付けば私はアスファルトの上に寝転がって

いた。

……竹刀が、近いのに遠く見える。動こうにも満足に動けない……
なによりもつ。

「ヘッ、そおーだよ最初っからそうやって寝てろよ。なあ？」

「う、く……いやっ……」

「ああ？　はは、聞こえねえなあオイ！　まあいいや。それより約束通り、伊吹ちゃん付き合ってもらうからなあ？」

いや……だ、やだよ……こんなのやだよ………っ。

……助けて、誰か……助けてっ！

「さてと……伊吹ちゃん。そろそろ終わりにすつかあ……恨むんならテメエの幼馴染にでも恨みな……フッフ、ハハハハハ！」

……最後に聞こえた言葉。そして蹴りでも撃ち込まれたのか、脇腹へ感じる激痛。

この時から、私の意識は次第になくなっていった………。

第39話, side story 伊吹編(後書き)

No11

いますみな

生駒純奈

イメージCV…竹達彩奈（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『けいおん!』中野梓役

『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』高坂桐乃役

県立初芝高等学校2年3組在籍。

ジョブ…オタク系変態陸上部員

性別…女性

年齢…16歳。

誕生日…7月29日生まれ

身長…154cm

体重…43kg

胸ランク…中(美)

趣味…ナギちゃんと一緒にいる事、漫画、アニメ鑑賞、ニヤ動
好きな物…ナギちゃん、アニメ、陸上、ナギちゃんが好きな物、ニヤ動

嫌いな物…クソ介、その他ナギちゃんにちょっかいを出すもの

その他…圭介が房総丘陵トレイルラン会場で出会った天真爛漫な少女。

陸上部に所属しながらオタク趣味を持っている。

風紗とは同じクラスであるものの、圭介と全く接点がなかった為、見た目と風紗の友人であるという事は知っていても名前までは知らなかった。

低身長ながら二年ながら陸上部エースを務めている。

その実力は同じ部の先輩や男子を遥かに上回っている。

本気を出す時に髪を括るというギャルゲー要素アリ。

凧紗の事は『ナギちゃん』と呼ば慕っている。凧紗にも『すみにゃん』と呼ばれている。百合属性でナギちゃんが大好きで、ある誤解から圭介の事をやたらと敵視している。

第40話、side story 部長編

学校が終わった後、ボクこと浅間英樹は帰路を歩いていた。ボクだけではなく妹の浅間あかりも一緒だ。ただし、あかりは不機嫌そうであった。

「はあ、どうして兄貴なんかと一緒に……っ」

「仕方ないだろう？ 家も同じなんだから」

「うう……少し離れろよな！」

「わかってるよ」

あかりはボクの事を嫌っている。

その理由はわからない。藤島君には『ボクが変態だから』だって言われている。

でも、男が変態なのは皆そうだろう。ボクだってナチュラルに変態なんだい。

それに、悲しい事実だけど現実の妹とは、自然と兄を嫌っていくもの。

ブラコンの妹だなんて、そんな夢のような妹は存在しないはずだろう。

仮にいたとしたら、その子はこの世界でもかなりの希少価値なはずだ。

「……あ、兄貴っ」

「ん、なんだい？」

「圭介って本当にガチホモだったりすんのかな……？」

……そういえば、藤島君ガチホモ説という根拠のない噂が最近校内で流れている。

あかりはその事が気になっているようだ。

確かに、あかりは藤島君と友達になれた。折角出来た友達の噂だ、気にならないハズがない。

「大丈夫だ。藤島君は決してガチではない」

「ほ、ホントか!？」

「嘘はつかない。彼は浅間家を救った人だから」

もちろんボクはわかっている。藤島君はボクの同人誌を喜んで受け取った。

だから、藤島君がガチホモなわけがない。仮にそうだとしても写真部の部員である事には変わらないんだ。個人的には嫌でも拒むつもりは全くない。

個人的な理由で部員を退部にする部長がいるとすれば、その人はただの馬鹿だろう。

「……うん、もうあたいは噂だけでは動かないんだからな!」

「いい心がけだね」

きつと藤島君も大喜びだろう。今のあかりなら彼でも好印象を持てるだろう。

問題は一つ……ブラコンになってくれないかな!

ボクだって……ボクだって実の妹に好かれたいんだよ！
ヨスガるとまでは言わなくても、『にひひ、お兄ちゃん！』って懐
かれないよ！

……まあ、ボクは今まで全然あかりに甘えられたことが――

「お、アレ写真にあったヤツじゃねえか？」

「おーおー、確かにそうだな」

「ん？」

ボクらの目の前に、何かを喋りながら突然現れたのはどこぞの不良。
あの灰色のズボン……確か古宇坂のどこかにある、白陵高校の連中
じゃないだろうか？

でも、先頭に立っている金髪リーゼントだけ服装が違う。
なんというか……短ランというヤツにドカンという太いズボン。い
つの不良だよ……。

「アヒヤッ！ おいテメェら。初芝高校だろ？」

「そうだけど、何か用かい？」

「……！」

金髪リーゼントの問いにボクが訊き返すと、ボクの横であかりが身
構える。

ボクも左右両方の拳を握っているが、不良達はケラケラと笑いな
がボクらを目視している。

……そもそも、市内一の不良校の生徒が、一体ボクらのような一般
人に何の用だろう？

まあ、おそらくはカツアゲだろう。しかしカツアゲをするのにこんな大人数を使うのか？

見た所、相手の人数は6人……普通に考えてこの人数はまずい。

「じゃあさ、テメエら写真部だったりするか？」

「……っ？ 確かに……ボクらは写真部だね」

「それがなんだよ。早く帰れよな！」

あ、あかり……元気なのはいいけど、そんな風に不良を挑発するのはマズイと思う。

ボクは穏便に事を済ませたい。絡まれた以上会話で事態を収束させたい。

——だけど、どう考えでも相手はそんな雰囲気ではない。

「帰れ？ ケツ、無理な話だ」

「なんでだい？」

「俺らが初芝の坊ちゃんを相手すんのも、クソ大人げねえ事のような気がすつけどよお。永渕さんの命令だからなあ……ちゅーわけだから、テメエら拉致るからな！」

金髪リーゼントの男が、パキポキと指の関節を鳴らしながらボクへと接近してくる。

どう考えても……会話をしましうって雰囲気ではない。

それに拉致だと。一体どういうつもりなのだ……コイツら？

とにかく、このままだと危ないぞ。隙を見て逃げるしかなさそうだ

「うあ!？」

その時、あかりの叫び声がボクの耳にしっかりと入る。

その声を聞き振り向くと、あかりは茶髪の不良にフェイスロックをかけられていた。

「あかり!？」

「な、なにするんだよ! 離せよな!？」

「アヒヤ! うるせえよおテメエ! 女は黙ってろ!」

金髪リーゼントは怒鳴りつけた瞬間、握った拳をあかりの腹部へ打ち込んだ。

ゴキゴキと嫌な音が聞こえ、あかりは口から紅い血液を吐きだす。
そんな……吐血するほどの威力でぶん殴ったのか……?

「あっ! が……っ」

今の一撃のせいか、ガクツと首の力が抜けたようにあかりは俯く。
その後……あかりが動くことはなかった。腕もぶらんとぶら下がるのみである。

何より一番腹立たいのは、あかりを殴りつけた金髪リーゼントは笑顔である。

「アヒヤ……完全にねんねよ。さあて、次はテメエだぞお兄さん
よお!」

「……あ、あかり……っ」

「あかりちゃんって名前なのかぁ。へへ……次はテメエがあかりちゃんみたいになる番だぜ？」

あかりを取り押さえている人を除く、不良達がボクを取り囲んでいく。

あかりを傷つけられたせいか、ボクは今非常に機嫌が悪い。

今にも冷静さを失ってしまいそうだ……いいやダメだ。冷静になるんだ……ッ！

理性を失って暴れたって、こっちには何の得もない。でもあかりは助けたい……ッ！

逃げ道は……ない。あかりを助けた上で逃走するなんて、この状況では不可能に近い。

どうする……ボクは一体、こういう時にどう行動すれば？

「アッヒヤヒヤッ！ さあて、どうされてえかな。金髪のお坊ちゃん？」

「君も金髪だろう？」

「そおだな。俺ら似たモン同士じゃねえの？」

「ふざけるな！ ボクを……女の子さえ簡単に殴る不良と一緒にするな！」

「アヒヤヒヤッ！ テメエ何様だア？ 不良が全員女殴ると思ってんのかぁ？」

そんな事はわかっている……。

すべての不良がそういうわけではない。とりあえずは知っている話

だ……でも。

「そうだね……失言だったね。でも少なくとも君は見境無しに女子も殴る、男として……いや、人間として最低の奴だ！」

「アッヒヤヒヤ！ カッコイイ！ よくそんなクセエセリフ吐けるなあキザな金髪さんよお？ んじゃあ、その最低野郎の俺っちを止めてみるよお？」

そう言いながら相手は拳を構える。

リーゼントのみならず、周りにいる仲間の不良まで皆拳を構え始めていた。

……どうしてもなのか。どうしても戦わなきゃ……いけないのか？

「あ……にきっ」

「っ！？ あ、あかり……？」

ボクはあかりの微かな声を聞き逃さなかった。

歯を食いしばる口からは血を流し、苦しそうに片目だけを開けたあかり。

失っていた意識を取り戻したのだろう。でも……意識があるほうが苦しそうに見える。

「あたいに……構うな……っ、早く倒せ……よな！」

あかりがボクに告げたこと——それは、さっさと周りの不良達を倒せという事だ。

そんな事言われても……ボクは喧嘩なんて生まれてこの方やった事がないんだぞ？

そんな弱々しいボクが、6人もの不良全てを倒せる……のか？

「だってよ？　妹さんからやっちゃまえて言われてるけど、テメエ
どうするよ？」

余裕そうな笑みを浮かべ、ボクを小馬鹿にするように嫌味な感じで
告げるリーゼント。

……仕方ない。やれるだけやってみよう……。
期待はしないで欲しい。ボクにとって殴り合いはこれが初めてだ。
そう決意しボクも拳を構えた……。

「ペッ！」

「うっ！　め、目があっ!？」

刹那、突然何か生温かいのか冷たいのか微妙な、気持ちの悪い液体
が目に入って来た。

物凄く染みる……目を潰されたボクは自分の目に両手を当てる。
しかも——その動作が大きな隙となってしまった。

「オラァッ！」

「ぐはっ！」

襟首を掴まれると、続いて感じたのは腹部の痛み。

ようやく視力が回復し確認をすると、リーゼントは膝蹴りをボクの
腹に打ち込んでいたのだ。

なんて痛いんだ……っ、男にマトモに殴られたのもこれが初めてだ。
ボクはあまりの痛みに、思わず叫んでしまいそうになった。しかも
リーゼントの暴力はこれで終わりではなかった。

「オラオラまだ倒れるんじゃないやねえよ！」

「ツツツ！」

勢いよく顔面に打ち込まれた右ストレート。

ミシツという激しく嫌な音が響き、その上殴られた影響か脳まで揺さぶられる。

倒れそうになるも、なんとか踏ん張る事によって持ちこたえた。

しかし鼻が潰れるように痛む。思わず顔面を触ってみると、掌には真っ赤な血がべっとりと。

それだけではなく、ピチャピチャという音まで聞こえる。赤い雫がアスファルトへ落ちる音だ。

「アヒヤ！ ああゴメン！ 鼻の骨折れちゃったかも？ でもまあ……イケメンなんだから、少しくらい顔の形変わっても問題ねえよな！」

「き、貴様あ……あああああああつ！」

もうこうなれば自棄である。ボクはリーゼントの懷に入り込み、低い位置からのアッパーカットを仕掛けようとする。何度も漫画で見た戦法だ。

——でも、現実^{リアル}は二次元のように甘くできていない。

岩をも砕きそうな勢いのエルボーが、スイカを割るかのようにボクの後頭部を打ちつけた。

「がつ！ あ、くあ……………っ？」

め、目まいが……意識が……………ッ！

……ど、どうしてだ。漫画だと……カッコよく敵を倒せるのにつ！
このまま……あかりを助けることだって出来るのに！

「やりましたね船木さん！」

「ヘッ……コイツはもうダメだな。よし、コイツらアジトに運ぶぞ」

「うっす！」

「アヒヤヒヤ……後は、残りの連中を倒して、永渕さんが藤島をぶちのめすだけだな……」

藤島……だと。藤島君の名前がどうしてここで？

朦朧とする意識の中、その会話だけ上手く聞き取ることができた。
そして、この時を最後にボクの記憶は一旦途切れていた……………。

第40話、side story 部長編（後書き）

No12

くろきじん
黒木仁

イメージCV…日野聡（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な
脳内音声です）

『ゼロの使い魔』平賀才人役

『とある魔術の禁書目録』浜面仕上役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ…三馬鹿A

性別…男性

年齢…17歳。

誕生日…4月27日生まれ

身長…175cm

体重…59kg

趣味…伊吹にアプローチ、ゲーセンのゲームプレイ、音楽鑑賞

好きな物…伊吹、味噌ラーメン、ゲーム、音楽

嫌いな物…圭介、勉強、その他ダルいと思った事

その他…三馬鹿の一人、通称『黒やん』でいつも赤佐と大林とつる
んでいる。

元ヤンキーで素行が悪く、風紗ら風紀委員にも目をつけられている。
伊吹に惚れており何かとアプローチを仕掛けているが、いつも失敗
している。

ちなみに当の伊吹本人は彼の好意を快く思っておらずかなり鬱陶し
がっている。

圭介の事を敵視する発言が多い。というかなり敵視している。
性格は超ハイテンションで自由気まま。とにかく楽しい事大好き。

基本的に遊び人。

日常的に風紗と戦っているが、連敗中だ。

第41話、悪魔襲来

「それじゃあ今日はこれで終了な。気を付けて帰れよ!」

帰りのSHRも終わり、乙坂が書類か何かを持って教室を出ていく。それ以外にも三馬鹿や、大吾に重原も早々に教室を飛び出してゆく。
——結局、伊吹は昼休みに飛び出し以来帰ってくることはなかった。

完全に俺のせいだ。じゃなかったら他に何かあるってんだよ。とにかく俺が悪いんだ。早く伊吹に謝りたい……でも、メールを送っても無視。

電話をかけても出る気配がない。困った……アイツ、ちゃんと家にいるのかな?

「け、圭くん……」

「けーすけ様……っ」

「ん? 暮葉に小坂か……」

複雑な表情を浮かべる二人が、まるで俺を心配するかのように俺の所にやってきた。

……やめてくれよ。俺のせいなのに俺を心配すんなよ……。

「圭くん……ごめんっ。あたしが変な提案しなかったら……」

「いや、小坂は悪くないだろ?」

「けーすけ様こそ思い詰めで欲しいのです。わかってるのです……けーすけ様は伊吹さんを心配していたからっ」

確かに伊吹の事は心配した。嫌いなヤツと恋人ごっこなんて辛いだろうって。

でも、逃げ出しちゃったって事は違うのだろうか？

好かれてるとまでは行かなくても、別にそこまで嫌われているわけじゃないのか？

……流石に自惚れすぎだろうか。でも、間違いなく伊吹が飛び出したのは俺のせいだ。

とりあえずこの二人は俺を心配してくれている。それに対してはお礼を言わないと。

「ありがとな、二人とも」

「ううん。圭くんは友達だから」

「拙者も、落ち込んでいるけーすけ様なんて見たくないのです！」

「悪い、ホントにありがとう」

暮葉も小坂も、神レベルなくらいいい人すぎて目から汗が出そうである。

いや、でも男は泣くもんじゃないっばいし。学校で泣く事ほど恥な事はないぞ。

ここは我慢だ藤島圭介！とりあえず耐えとくんだ！

——その後、小坂に別れを告げた俺達は帰路を歩いていた。

葵からメールがあり、今日は友達と用事があるから遅くなるらしい。アイツも友達多いからなあ、今日は誰だろうな。もしかしてあかり

達かな。

「けーすけ様！ この後どうされるのですかっ？」

「そうだな、とりあえず伊吹の家に行こうと思うんだ」

「もきゅ？ 伊吹さんの家にですか？」

「ああ。今日の事をちゃんと謝っておきたい」

謝ってどうにかなるとは限らない。今までなんとか生きていたとしても、今回それが成功するとは限らない。それでも俺は伊吹に謝りたい。悪いことをしたんだから謝るのは当然だ。

伊吹には土下座でもなんでもする。それくらいの気持ちで謝りたい。

「小坂さんも言っていたのですけど、けーすけ様って伊吹さんの事になると本当に本気出しますよね」

「そうか？ ……でも、ふざける時以外は基本的には真面目だぞ」

特に伊吹はな。アイツはああ見えて結構弱いんだ。

それに昔の事もある。俺はもう二度と伊吹を傷つけない。

だから俺はアイツに対しては基本的には本気だ。

それでも……今回また伊吹を傷つけてしまった。しかも殆ど俺のせい……。

だから、せめて真面目に謝っておきたい。

その為にはまず伊吹を探さないとな。多分伊吹は自宅にいるハズだ。いや、仮に居なくてもいつかは伊吹が戻ってくるハズである。

順調に行けばそこで伊吹に謝れるハズ。そう、順調に行けば……。

…。

けど……この日は全く順調にはいかなかった。

「……よお、藤島」

道の向こう。ポケットに手を突っ込む、いかにも不良といった風貌の男が立っていた。

ダボタボのズボン。紫色の長袖シャツ。黄金のチェーン。坊主にラインアート。

そのどれもが奇抜で、そしてワルそうな雰囲気放つ男……。

しかも、相手は久々に俺に会ったかのように挨拶をしてきたんだ。

……そういえばあの顔と髪型。俺もあの男をどこかで見たような気がする。

「もきゅ？　けーすけ様っ。お知り合いなのですか？」

ようやく立ち止まる男の顔を、俺はもう一度よく見てみる。

結構整った顔立ちだ。でも、見た目が怖いせいで女の子は近寄りそうにない……。

ていうかコイツ……やっぱり……ッ。

「な、永浏……っ!？」

思い出した。永浏……永浏晃だ。

俺が中学の時にぶっ飛ばした先輩……アイツの心を踏みにじり、俺が世間で悪党になってしまった原因の……ッ!

全てを思い出した瞬間、俺は本能で全身に少し力を入れ、それでもしっかりと身構える。

歯を食いしばり、強い眼差しを向けてみせる。俺は完全に永渕を警戒している。

「久しぶりに会ったと思いきや、伊吹ちゃんじゃなくて別な女の子が隣にいやがる……ンだあ、ソイツはもしかしてテメエの彼女かあ？」

「もきゅっ!？ か、かのっ、！ 彼女っ!？」

永渕のヤツ。どこをどう見れば俺と暮葉が恋人同士に見えるんだ。暮葉とはただの友達。しかも暮葉は仕事上俺の近くにいるだけなのに……。

でも、実際俺は暮葉にどう思われているんだろうか。

伊吹にどう思われているかと同じくらい、暮葉にどう思われているのが気になって仕方がない……。

……とりあえず、彼女である事だけは否定しておこう。

「違うよ。コイツは俺の友達だ」

「もきゅ……友達っ」

ん、さっきまで驚いていたのに急に大人しくなった。どうしたんだ？ まあ、それはともかく。事情を聞かねえとな。

「で、お前は一体こんな所で何やってんだよ。その制服白陵だろ？ ここは白陵のテリトリーじゃねえだろ？」

県立白陵高校……明智の家の近所にある、筋金入りの不良が数多く通う不良校だ。

かつては太田高校という名前で、今の白陵同様荒れた学校だったら

しい。

その為かネット上で『バカ田高校』と馬鹿にされ、学校が存在する太田地区も『バカ田地区』と呼ばれようになってしまった。

そのせいか、地元住民から校名変更しろという署名が数多く寄せられ、結果現在の校名になる。

そういえば、たまに10年前の太田高校時代の制服、つまり学ランを着ているヤツも見かけるな。

俺は白陵の詳しい場所までは知らないけど、それでもこのあたりに白陵の生徒が現れるのは珍しい。

アイツらは黒木達曰く、普段はテリトリーからは出てこないらしい。という事は……今は通常モードってわけじゃない。テリトリーの外に出た奴らは何かを企んでいる。

「フッ……その言い方だと。俺らが普段テリトリーから出ねえ事を知ってんな？」

「あたりまえだろ」

「そうかぁ……」

永渕はポケットから煙草とライターを取り出し、煙草に火を付けてそれを吸い始めた。

オイオイ、アンタ一応高校生でしょ。煙草吸うなよ……ん？

そういえば永渕って、俺が中1の時には3年だったよな。なんでもだ高校生なんだ？

……もしかして永渕、何度も留年^{ダブ}った？

「あの、けーすけ様！ あのお方けーすけ様も伊吹さんも知ってるんですけど、やっぱり知り合いなのですか？」

「まあ……会いたくもない知り合いだよ」

「もきゅ？ 会いたくもないって……？」

そっか、暮葉がここに来たのは先月だもんな。

永渕の事なんて知らなくて当然だ。ていうか、永渕なんてただの不良を知ってるヤツも数少ないだろう。

もちろん俺は不良じゃないぞ。でも、なんでアイツの事を知っているかと言うと……。

「そりゃあそうだろうなあ。テメエ、俺をぶん殴ったせいで悪モン扱いだもんなあ？」

「……っ！」

とても嫌味な顔で事実を言ってくる。クソ……滅茶苦茶ムカつく！……でもダメだ。あんな馬鹿野郎の挑発に乗ったら負けだ。

「ぶん殴ったって……もしかして、あかりさんが言っていた事って……！」

「……っ」

暮葉はあかりが襲ってきた時の事でも思い出したのだろう。

あかりは確かに、俺の事を『暴力魔』だの『いきなり人を殴る悪魔』だと言っていた。

その事が事実だって——暮葉にバレちゃった……。

でも、殴ったのには理由がある。そうせざるを得なかった……でも、殴ったのは事実だ。

やっぱりどんな理由があろうとも、ぶん殴るってのはいい事じゃない。

「いやぁ最高に愉快だったぜ？　だってよお、俺はほぼ無実になっちゃまったんだからなあ！　テメエだけが悪モンになってくれて本当にありがてえよ」

「ぐっ……！」

いちいち癪に障る事を……ってダメだ。
落ちつけ、挑発に乗ったら本当に永渕の思う壺だぞ。

「さて、そろそろ本題に行くとするか」

「……っ、何の用なんだよ？」

俺がそう問うと、相変わらず不敵な笑みを浮かべる永渕はフィンガースナップを行った。

学ランとブレザーが入り混じった、筋金入りの不良達が何処からともなくゾロゾロと現れる。

白陵の歴史を知らない人から見れば、まるで白陵が他校と組んでいるかのような光景だ。

「もきゅ！？　に、人数が増えたのですよ！？」

「やばいぞ……？」

木刀や棍棒、金属バット等と言った武器で武装している不良達。
その人数は、少なく見積もっても10人を超えていた。

「拙者達をどうするつもりなのですか!？」

「俺の目的? フッフ、そんなの藤島への復讐に決まってんだろ？」

「復讐？」

「やられっぱなしじゃ気分悪いしよ……」

復讐って……やっぱり中学の時にぶっ飛ばした事か。

まだ根に持っていたのかよ……。

どう考えても、アレは永渕のせいだっていうのに。

「あと藤島よお。テメエがあの時最も大切にしていたヤツは、こっちの手にあるんだからな」

一瞬、永渕の言っている事の意味がわからなかった。

だが、その意味はすぐに分かる事になった。

突然十数名の不良達の中に割って入って来た、茶髪のボサボサ頭の男。

ソイツが汚い手で掴んでいるのは――

「あ……な、なん……でだよ……っ」

「け、けーすけ様っ! あ、あれ……っ!」

俺も暮気も驚きを隠せなかった。

同時に、久々に心の底から押さえる事が出来ない程の怒りを感じた。シヨックを受ける以前に全身に力が入って行く。次第に他の事を考えられなくなっていく。

何故なら……そこには――

「おお怖えなあっ！ いいツラしてきたじゃんかよ……やっぱ、テメエを怒らせるにはコレが一番だ」

「てめえ、どういう事だよ……？」

茶髪の男が手で掴んでいる白銀の髪。

綺麗な髪を持ち主は美少女であった。

ただし瞳は閉ざされ、口元や鼻から紅き血が流血している。その上頬にも殴られたような跡がある。

……クソツタレ。この中の誰だよ……伊吹をボコボコにしたヤツは！

「どういう事って？ テメエには少し暴れてもらわねえと割に合わねえんだよ。伊吹ちゃんはよお……テメエを怒らせるには丁度いい道具なんだよ」

道具……？

道具だと。伊吹というたった一人の女の子を……道具扱いだあ？

あの野郎オ。こういう事なんだよ……だってアイツは元々伊吹の事を――！

いや、そんな事はどうだっていい。それより伊吹を道具扱いしやがったな……。

しかも伊吹を……あんなに傷つけやがって……ッ！

「てめえ……ッ！ 永ア瀏イイイイイイイイイイ！」

「け、けーすけ様っ！」

もう、俺は何も考えていなかった。

きつとまた悪い噂が流れる。下手をすれば停学や退学だってありえるのに……。

それでも俺は——この足を止める事はできなかった。

第41話、悪魔襲来（後書き）

No13

あかさなおと
赤佐直人

イメージCV…細谷佳正（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『電波的な彼女』桑沢ジュウ役

『会長はメイド様！』黒崎龍之介役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ…三馬鹿B

性別…男性

年齢…17歳。

誕生日…4月6日生まれ

身長…185cm

体重…68kg

趣味…人助け、無駄に身体を鍛える事、ツーリング、バイクいじり
好きな物…焼き鳥、女の子、エロい事、バイク
嫌いな物…勉強、ダルい事、先生

その他…三馬鹿の一人、通称『チョクト』でいつも黒木と大林とつるんでいる。

三馬鹿の中でもわりと常識人で、基本的に黒木の暴走を止める掛かり。

ただしとにかくエロいのが好きな変態でやはり嫌われ者。

人助けが好きみたいで、かつていじめられたいた韓国人留学生を助けたらしい。

ただ、その時韓国人に敬意をこめて『チョクトさん』と呼ば、しかもそこを黒木に聞かれ、いつのまにかあだ名が変なあだ名がついて

しまったらしい。

自称関西出身らしいが、喋っている言葉はエセ関西弁。

黒木とは中学時代からの付き合い、同じく元ヤンキーである。ただし、ガタイはいいけど腕っ節が強いかどうかは不明。

第42話、涙色の夕日

「うおおおおおおおおおっ！」

感情任せに何の考えも持たず、ただ只管駆けるのみの俺。

永洌との距離は5m。ここから一気に跳躍して間合いを詰める。

……とにかく倒す。伊吹を傷つけたクソ野郎を潰す！

その怒りの感情のみが俺の頭と心を支配していた。

「永洌イイイイイイイイイッ！」

力を入れ過ぎで拳が痛いほど、俺はしっかりと右の拳を握った。

右足でアスファルトを蹴りあげ、右拳をミサイル発射前の様に構える。

永洌の懐に入り込み、その勢いでボディブローを仕掛けようとした。

だが、永洌は殴られそうなのにも関らず、唇の端を歪め一言。

「ダメだなあ……」

あざ笑うかのように放たれた一言。

それを言った時、俺は既に拳を突き出し攻撃を仕掛けていた。だが、当たったハズの拳には何の手応えもない。それどころか――

「がッは……っ!？」

何かか鳩尾へ突き上げて来た。

その瞬間俺の呼吸が止まり、中途半端な体勢であった為かバランスを崩してしまう。

幸い、そのまま地面へ転ぶという事はなかった。

「ゲホッ！　ゲホッ！」

クソッ……なんだ？

痛い。まるで鳩尾をぶん殴られたみたいだ。

永渕も周囲の不良達もケラケラ笑っている。茶髪の手に掴まれた伊吹は今だ眠っている。

そして、無様に攻撃を受けた俺を見ていた暮葉は。

「けーすけ様！」

いつもの事だけど、俺の名前を腹の底から出すような大声で叫んでいた。

暮葉のけーすけ様も、最初は違和感全開だったけど聞きなれたな……。

って、今はそんな事を思っている場合じゃねえ。

全く……身体が丈夫でよかった。もう鳩尾を殴られた痛みは完全に消えている。

即ち……俺はもういつでも次の攻撃に移れる。

「ああ遅いつ。テメエそんなに弱かったっけ？」

「ぐっ……!!」

「スマン、俺が強くなり過ぎただけなのかもなあ？　フハハッ！」

「うう……！」

確かにオカシイぜ。中学の時はこんなハズじゃなかった。

確かに永洵は強かったよ。でもここまで差がある程ではなかったハズだ。

でも今はどうだろう。永洵は単なるヤンキーとは言い難い程の強さだ。

痛みが完全に消えるの時間が、ただの不良に殴られた時よりも長かった……。

それはつまり、アイツが滅茶苦茶強いって証拠だ！

「さあてどうする藤島あ？ あ、そうそう。伊吹ちゃんの身柄は俺らの手にある事を忘れんなよ。やろうと思えばいつでもテメエよりも先に、この伊吹ちゃんをぶん殴る事ができるんだからなあ？」

「てんめえ……っ！」

「熱くなんなよ？ テメエが今動くとお……伊吹ちゃんにこんな事やっちまうぞコラアッ！」

永洵は信じられない事をしやがった。

だって、アイツは気絶している上に取り押さえられている、ボロボロの伊吹をさらに何発も殴りつけたのだ。顔面ではなく身体を殴っていた。だから顔面が血だらけになる事はなかった。

でも……永洵が無抵抗な伊吹を殴りまくったのは事実だ。

「や、やめてください！ それ以上は——」

「ハッ！ オイオイ藤島ア！ テメエの友達が言ってるぜ？ なあどうする？ 伊吹ちゃんの顔が変わっちまう覚悟で俺と戦うか？」

「アア!？」

クソツタレ……!」

なんなんだよ永渕のヤツ。強い癖に小者くさい真似をしやがって! さらに永渕は再びフィンガースナップを行う。

すると、今度は永渕ではなく、先程まで待機していた不良達が一步步つ俺らに近付いてきた。

「な、なんだ……ッ!？」

「ゲームだぜ藤島ア? テメエ何発耐えられっかな？」

「卑怯な手えばっかり使いやがって……ッ!

「フハハ! 喧嘩に卑怯もクソもあるかよ。オラアテメエら! 藤島も藤島の友達も好きにやっていい。ブツ殺しても構わねえぞッ!」

永渕が怒鳴りつけるように命令をする。

「いくぞコラアアアッ!」

「うっしやあ最高のタイムじゃあっ!」

「あの子可愛いぜえ……イタダキマアアアアス!」

「藤島アアア死ねやあああああっ!」

刹那、一斉に10人を超える不良達が襲いかかってきたのである。

いくら身体が丈夫でも、所詮元々の身体能力は人間なんだ。

念じながら誰かとキスでもしない限り、俺は元の弱い人間のままな

んだ。

リミッターがかかっている、こんな状態じゃあこの人数相手に出来るかわからねえ！

伊吹は捕らわれ、俺達は大勢の敵に囲まれ……まさに絶体絶命のピンチ。

いよいよ、目前に迫った不良達が一斉に攻撃を加えてくる。その直前で。

「けーすけ様っ！」

「うおっ!？」

何故だろう。いつこんなフラグを立てたんだろう？

ピンチの中、俺は思わずそんな事を考えてしまった。

何故なら、俺は暮葉にぎゅっと可愛らしく抱きつかれたからである。

「しばらく間、我慢していて欲しいのです！」

「え？　ちょ、暮葉？」

「~~~~っ……つきゅう！」

踏ん張るような声をあげたその瞬間。

叩きつけられるような暴風が下から吹き上げ。

轟!という音が響いたとわかった時。俺達は既に上空高くに舞い上がっていたのだ。

……え〜つと、これは……………。

「エエエエエエエツ!？」

どどど、どういう事なんじゃコレは!?

永渕達が点に見えるぞオイ。大体どうして暮葉に抱きつかれた瞬間、俺達空を飛んでいるんだよ!

「けーけーすけ様暴れないでくださいっ!」

「仕方ねえだろ! つーかお前、何やったんだよ!?!」

「飛行術式なのです。簡単に言えば舞空術みたいなものなのです」

「とらゴンボールか! つーか永渕達の前で魔法使ってもいいのによ!?!」

「大丈夫! 上昇は一瞬の間なので多分あの人たちに目視されてないのです!」

だ、だからってなあ……こんな魔法で。

ていうか暮葉って魔法が苦手だったんじゃ……? 飛行術式なんてカッコいい事を言っているが、果たして大丈夫なのだろうか?

「なあ暮葉。お前魔法苦手じゃなかったっけ?」

「もきゅ? に、苦手とは失敬な!?! ちょっと難しいだけなのです!」

……もう、言い訳乙としか言いようがないわ。

「で、この後どうするんだよ?」

「……そ、そのっ。着地がちょっと乱暴になるのですけど……か、覚悟してくださいね！」

「はぁ？　ら、乱暴？」

それってどういう意味なんだろう？

……だが、この直後俺は身をもって経験するのである。

暮葉の言う乱暴な着地という、恐ろしきモノを。

「……！」

その時、暮葉を俺を抱く手の左手のみした。

片手だけになったせい、腕の力をさらに強くし俺は一層締め付けられる。

うおっ！く、暮葉の胸が当たる。暮葉の貧乳は貧乳だがそれでも柔らかい。

なんて事を考えていると、暮葉は右手を背中に廻し服の中から何かを取り出す。

暮葉さん、その……それってもしかして。

「ちょ！？　一期一振！」

「一期一振これの力を借りて着地するのです！」

調子よく暮葉が言う。

刹那、暮葉はどこぞの悟空が如意棒をぶん回すように、一期一振を右手で大胆にぶん回し始める。

気分は輸送ヘリであるCH-47チヌークに吊るされるが、何かのミスで降りれなくなった兵隊さん。

確かに乱暴だ！次第に地面が迫るものの……オイオイ速度早過ぎだ

ろ！

絶対一期一振あんまり役に立ってない。ただ落下しているだけな気がするぞ！

「衝撃に備えてなのです！」

「ンな無茶なっ！？」

アホかよ暮葉さん！

いくらなんでも無理がある。この高さからこの勢いで落下したら……。

へ、下手すりゃ死亡だ。衝撃に備えてなんて言われたって限度があるだろ！

「ぎゃあああああああああああつ！」

お、オワタ。人生オワタ！

このまま落下してこの世とオサラバじゃああああああつ！

……と思ったが、ギリギリの所で一期一振が効果を発揮したのか、地面と激しい接吻を交わす前に俺達は、僅かに1mほど空中に浮いた状態で停止したのである。た、助かった……のか？

その後、1mをジャンプするように着地し、俺は久々に陸地を踏んだような錯覚に陥ったのだ。

第42話、涙色の夕日（後書き）

NO14

おおばやしゆうた

大林勇太

イメージCV…代永翼（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『おおきく振りかぶって』三橋廉役

『いちばんうしろの大魔王』三輪ヒロシ役

県立初芝高等学校2年4組在籍。

ジョブ…三馬鹿C

性別…男性

年齢…16歳。

誕生日…2月26日生まれ

身長…155cm

体重…48kg

趣味…サッカー、ゲーム、彼女とイチヤイチヤ、あと秘密の趣味が

……

好きな物…サッカー、彼女、カミソリ

嫌いな物…背が高くて生意気な人、勉強、先生

その他…三馬鹿の一人、身長155cmと男子としては小柄な体躯の持ち主。

サッカー一筋のスポーツ少年だったらしく、高校に入ってからだらけ初めて現在はやめているが、その時の名残で今も坊主頭。リア充らしい。

元サッカー部員でしかも天才と呼ばれていただけに、脅威的な体力と脚力を誇り現在でもサッカーの技術は現役部員にも勝るほど。また足も陸上部員より少し速い。

ただし所詮スポーツバカなので頭は悪く、テストはいつも赤点を取っている。

三馬鹿の中で唯一元ヤンではない存在だ。あと意外な趣味もあるらしい。

第43話、圭介の過去

「アホかお前はあああああつ！」

誰もいないハズの明智には人影が二人。それは俺と暮葉であった。そんな人気がない空き地で、俺は暮葉に思いっきりのツツコミを入れていた。

「ごごご、ごめんなさいけーすけ様っ！　せ、拙者飛行はできても着地は苦手なのです！」

「やっぱり魔法苦手なんじゃねえかつ！」

「もきゅ！？　し、失敬な！　難しいだけだと何度も言ってるのですよ！」

「なあ……いい加減自分の弱点認めないか？　その方が楽だぞ」

「と、とにかく助かったのですから！　もういいじゃないですかっ！」

まあ確かに俺達は助かったけど……。

その代わり、一番大切な存在はまだ永渕達の手に残ったままなのである。

そんなんでは全く意味がない。俺達だけが助かったって何の意味もない。

ただ、俺達が地獄を見るまでの時間が少し伸びただけである。

「……クソッ！」

「もきゅう、けーすけ様……」

次第に腹が立ってきた。

当然永渕に対してもあるが、一番腹が立つ相手はあの時伊吹を助けられなかった俺自身だ……。

俺がもっと強ければ伊吹を助けられた。いや、こんな事未然に防げたはずだ。

俺はまた……またしても伊吹を守る事ができなかった。

伊吹は二度も永渕に襲われちまった。それもこれも……全部俺が弱かったせいだ。

……でも、いつまでも落ち込んでいる場合じゃねえのはわかっている。

だから俺は、今からでも伊吹を——！

「暮葉！ お前確か魔法か何かで、相手の魔力を感じ取れるんだっ
たよな？」

「は、はい！ 初歩的な魔法なので拙者でもそれは使いこなせるの
ですっ」

「だったら、それを使って永渕の居場所を調べてくれ」

「な、永渕さんってさっきの……？ ど、どうするつもりなのか！
か！」

「決まってるんだろ！ 今から行って永渕をぶっ飛ばす。そんでもっ
て伊吹を助けるんだよ！」

未然に防ぐことはできず、既に事件は起こってしまった。

だったらやる事は一つしかない。さっさとソレを解決しちまう事だ。とにかく、永渕さえ倒せば俺はどうなるかは知らないけど、伊吹は助かるんだ。

中学の時だってそうだったじゃねえか……。

「……あの、けーすけ様っ！」

「ん？」

「永渕さんは、どうしてけーすけ様と伊吹さんを……？」

不安げな顔で真相に迫ろうとする暮葉。どうしよう、ちゃんと説明すべきなんだろうか？

出来ればアレは1mmたりとも思い出したくない。

……永渕が現れた時点で全てを鮮明に思い出しちゃったけど。

まあ、もう暮葉の目の前であんな事があったんだ。上手く誤魔化す方法さえ思いつかない。

どのみち永渕の所へは行かなきゃならない。だったら先に説明しておこう。

「……暮葉、教えてやる」

「もきゅ、何をですか？」

「こうなっちまった原因。過去の話だよ……」

人間っていうのは本当に色々な奴がいる。正義感あるヤツもいれば可愛いヤツもいる。

俺みたいに馬鹿なヤツもいれば、テストはいつも95点以上の天才だって存在している。

みんなそれぞれがこの現実で努力をして、それぞれの生活を営んでいる……。

でも……中には努力もしないで、ただ他人の生活をぶち壊す連中がいる。

俺がその事を学んだのは中学1年の時だった。

——圭介、今日どっか行こうぜ！

——おう！ つーか500円しか持ってねえから安上がりで済む所な。

——俺も300円しかねえし。金使わねえ所でヨロ！

……当時の俺はそこそこ友達も多かった。

あたりまえのように友達がいて、クラスメイトの女子の殆どとも会話する事ができて。

そうだな……あの時に頑張っていれば、初彼女が出来たのかもしれない。

当時は家に親父は仕事でいなくても母親はいたし、普通の中学生としての生活をそこそ楽しんでいた気がする。伊吹もその頃までは今とは違って、結構素直な子だったハズだ。

そう、今でさえモテモテなのに、当時は素直だったから余計にモテ

モテだったんだ。伊吹は……。

別のクラスの野郎共とかが、伊吹目当てで俺らのクラスにやってくる程であった。

その中の一人にアイツがいたんだよ。永渕晃つてのが……。

——ねえねえ、国宗伊吹さんってアンタだよな？ 今日さ、俺と一緒に遊びにいかねえ？

そんな軽いノリで教室にやってきた、当時3年の先輩だった永渕晃。見た目は今よりも若々しいが、それほど変わっているわけではない。その頃から永渕には悪い噂がいつぱいであった。

例えば、ちよっとメンチを切ってきたチンピラ5人を即日整形外科送りにしたり、自分の前を横切ったサラリーマンをボコボコにして川に投げ捨てる等。とにかくやる事は極悪人そのものである。

ただ、容姿が端正である事と強い事とみんな中二病だった事が理由なのだろう。

一部の女子にはそこそこの人気があったらしい。

どうやら永渕は伊吹が好きだったらしいが、当然そんなヤツを伊吹が好きになるわけなかった。

ある日、いきなり永渕は仲間の不良を率いて、俺らの教室にやってきたんだ。

——伊吹ちゃん！ 好きだ、俺と付き合ってくれ！

堂々と、俺らの前で告白……。

正直、永渕は結構根性のあるヤツなんだなと思ったよ。だけど、伊吹の答えは。

——私、好きな人いるから。ごめんなさい。

当然N Oであった。俺としては、そんな事よりもあの時の好きな人が誰なのか気になるけど……。

誰なんだろう。でも伊吹に彼氏が出来た気配なんてないし、片想いで終わったんだろうか。

それはともかく、ここまではごく普通だった。永渕晃の短い恋が終わっただけ……だったハズである。

でも、それから一週間後の事であった。

放課後、水飲み場の近くで俺は男友達3人とゲームの話で盛り上がっていた。

そんな時、小学校の頃からの付き合いで伊吹の親友だった、小坂が俺の所にやってきたのだ。

それも、いつもとは違う血相を変えて……。

——ん、どうした小坂？

——け、圭くん助けて！　い、伊吹が……伊吹がつ！

——ちょ、落ちつけよ！　一体どうしたんだよ？

——伊吹が……永渕に拉致られた！

——はあっ！？

嘘だと信じたい事態が起こってしまった。

小坂と伊吹は下校中であつたが、その途中に永渕ら不良グループに襲われたらしい。

小坂は隙を見てなんとか逃げたようであるが、伊吹が永渕らに捕まってしまった。

告白を断られた腹いせか、永渕は伊吹をいきなり拉致ったそうなのである。

場所を聞く、数分前に体育館倉庫前で嫌がる伊吹を見たのが最後らしい。

俺も中1だったし、その話を聞いた時点でマズいと思った。

それと同時に、たかが振られただけでそんな事をする永渕に対し、俺は怒りを覚えた。

——あんのクソ野郎っ！

——け、圭くんっ！

——おい圭介っ！？

——やべっ！　だ、誰か先生呼べっ！

俺を止める声が聞こえるも、カッとなった俺にそんな声など届くはずがない。

今思えばあの時の俺は子供だった。子供だけに短気であつた……。まず俺が向かった先はグラウンド、野球部だった友達に俺は。

——谷口！　バット貸してくれっ！

——え、な……なんで？

——いいから！　後で必ず返すから！

——ちょ！　圭介っ！？

友達から野球部のバットを強引に借りた。

そのバットを片手に俺は体育館倉庫で突撃をかける――

――アア？　なんだテメェ！？

――何見てんだコラアッ！？

倉庫に入ると、いきなり不良達が俺を怒鳴りつけてきたのだ。たかが倉庫に入っただけ。あそこは不良のたまり場ではないのに。そして不良の他には、マットに倒れ込み涙を流す伊吹の姿があった……。

伊吹の服装は乱れ、幼さの残るブラジャーも外されかけていた。

――チッ、これからお楽しみだったのによ……。

これからお楽しみ……当時の俺でも、その言葉の意味くらいは理解出来た。

あと少し到着が遅かったら、本当に取り返しのない事になっていた。

伊吹の初めては、本人の望まない悲しい形で奪われる所だった。ギリギリだったけど間に合ってたよ……。

そう思ったが、それと同時に永渕に対する怒りがさらにこみ上げてくる。

――伊吹にひどい事しやがって……ムカつくんだよテメェら！

そう言った瞬間から、伊吹のみならず俺まで崩壊し始めたのである。不良グループの一人が、いきなり俺に攻撃を仕掛けて仕掛けてきたのだ。

一発殴られると2人3人……次々と不良が俺をぶん殴ってくる。

……俺も黙ってはいなかった。数発ぶん殴られた後、俺はついに反

撃を初めてしまったのである。

本格的な不良との喧嘩は初めてだったが、意外となんとかなるものだ。

散々ぶん殴られはしたものの、元々身体が頑丈なのであまりダメージを受けなかったんだ。

数分の戦闘の後、永渕以外の3人を倒してしまった俺。

続いている相手は当然永渕。永渕は怒り狂ったように殴りかかってきたのである。

永渕は滅茶苦茶強かった。始終圧倒されまくったけど……それでも感情任せに戦ってなんとか勝てた。

気付いた時にはもう、永渕も俺も血だらけであった。

特に俺の血は自分の血だけではなかっただろう。きっと、永渕の血も身体についていたはずだ。

体育館倉庫には血だらけの不良達4人。恐怖のあまり声すら出せない少女が一人。

そして……金属バットを持つ血だらけの俺の姿があった……。

当然、この事は暴力事件として問題にされた。

しかも伊吹をレイプしようとした永渕ではなく、助けようとした俺が悪い方向で話が流れて行く。

親呼び出しを喰らい、担任に校長など……いろんな人に全部俺が悪いと怒鳴られた。

——君のようなダメ人間が将来、事件を起こすんだ。

——お前には失望したよ。そんな底辺なヤツだったとはな……。

誰も俺の話を聞いてくれなかった……。

伊吹はショックで何も語ろうとしない。家族は話を聞いてくれたが学校側が信じてくれない。

そんなわけで俺は……二週間の家庭謹慎を食らってしまったのである。

小坂からは『伊吹を助けてくれてありがとう』って、そう言われた。小坂曰く、伊吹も感謝はしていたらしい。何も言われなかったけど……。

そして二週間後、俺は久しぶりに学校へ行った。

いつものように友達へ挨拶をしたが、帰って来たのはぎこちない返事。

女子からは露骨に避けられるし、何かがオカシイと思った。すると、小坂がこんな事を言って来たんだ。

——圭くん……沢山悪い噂が流れてるけど……大丈夫？

——わ、悪い噂……？

それは、俺が『理由もなく先輩を半殺しにした』だとか、『男をボコッて女子をレイプした』だとか、そんなような噂である。

前者は確かに永洌をボコボコにした。伊吹だってあと少しで危険だった。

……でも、俺は伊吹に何もしていない。レイプをしようとしていたのは永洌だ。

しかも、それはギリギリの所でなんとか防いだ事である。

だけど……いつのまにか全てが俺のせいになっていた。その上伊吹の態度も……。

——べ、別に感謝なんかしてないわよ！

こんな感じで今まではあったかもしれない、デレという要素が消えてしまった。

この頃から、伊吹は“ツツパリ伊吹ちゃん”になってしまったのである。

もちろん思ったよ。あの件で嫌われたなって……それでも伊吹は友達でいてくれたけど。

今まで友達だったヤツとも、あの一件以来殆ど話をしていない。

皆避けるから……いや、俺も皆を避けていた。

証人だっているんだし、頑張れば俺の汚名だって消えるハズである。それでも俺は皆を避けた。正直このままでもいいって思ったのである。

俺さえ悪なら、それで全てが解決する。だったらそれでもいいって思うようになってきた……。

……とにかくこの日以降、俺は自分の事がどうでもよくなった。

それこそ。俺が見つけた誰かを救う方法である。

……そして結局、俺は高校に入るまで、友達なんていう存在はたったの2人しかいなかった。

伊吹と小坂。その二人だけが俺の友達だった。

他の奴らは皆俺を避ける。いや、一部は近寄ってくる連中がいたな……。

喧嘩無敗と言われていた永渕を倒したせいだろう。どこぞの不良が俺に喧嘩を売ってくるのだ。

俺もストレスが溜まっていたのだろう。馬鹿な事に鬱憤を晴らすべく、喧嘩を買っていた……。

不良達を相手にしているうちにも、どんどん俺の悪い噂が広まり……

…。

学校での俺の扱いはまさしく、“孤独がクールでカッコいいと思っ
ている痛いヤンキー”だった。

不良じゃねえのに……好きでこんなことになってるわけじゃねえの
に。

今いる友達は全員、高校に入ってからであつた奴ら。つまりあの事
件を知らない奴らばかりである。

それでも、不良に絡まれる事はなくなったが、同じ中学出身のヤツ
に時々冷たい視線で見られる。

それは多分、今後変わる事はないだろう。もういいんだ……どう
でも。

とにかく俺はその事を忘れようとした。伊吹にも思い出させないよ
うに努力をしていた。

それから、どんな事があっても伊吹の笑顔を守ろうとしたんだ……。

でも、結局守る事ができなかった。

俺が弱かったせいで……また伊吹が永渕の手に……っ！

第43話、圭介の過去（後書き）

№15

浅間英樹 あさまひでき

イメージCV…杉田智和（これは心の弱い作者、作戦参謀の身勝手な脳内音声です）

『銀魂』坂田銀時役

『涼宮ハルヒの憂鬱』キョン役

県立初芝高等学校3年1組在籍。

ジョブ…写真部の変態部長

性別…男性

年齢…18歳。

誕生日…4月10日生まれ

身長…181cm

体重…64kg

趣味…同人誌、アニメ鑑賞、エロゲープレイ、写真撮影

好きな物…写真部、カメラ、エロいもの、家族（特にあかり）、部長という地位

嫌いな物…妹に無理をさせる事、荒事、ゴキブリ、熟女（母は除く）

その他…写真部の現部長で高校3年、圭介や暮葉の先輩にあたる人物。

金髪で背も高くてイケメンだがデリカシーがなく、その上大吾もビツクリなオタクである。

その為千早をはじめとした写真部の部員、周囲の女子からの評判はすこぶる悪い。

勧誘の際、何故か北方projectのエロ同人誌を活用。ちなみに圭介はまんまと釣られた。

基本的にふざけた男だが、部の事を誰よりも考えている。

妹であるあかりには殆ど無視され、仮に会話したとしても暴言を吐かれる程嫌われている。

だが、妹を含む家族想いの人であり、圭介に言わせれば変態である事を除けばいいお兄ちゃんである。

18歳なので合法的にエロゲーを購入できる。

第44話、雨の中の……

「そんな……みんなひどいのです！　普通は永洌さんも悪く言われるハズなのです！」

「普通……ならな」

でも、普通じゃなかったんだよ。ウチの学校は……。

永洌は問題児だったけど、アイツが問題児なのは元々の話だ。

それに、噂じゃあ永洌は基本放置の方針だったらしい。

学校側としても、あの暴れ者を相手にはしたくなかったんだろうな。けれど、普通に過ごしていた俺となれば別だ。普通の人が永洌がやるような問題行動を起こせば、問題児とは違って激しく怒られるに決まっているだろう。

増してや、やられたのは永洌だ。重傷だったらしいのでしばらく永洌は暴れられない。

学校一の問題児である永洌が暴れられないのは、学校側としても非常に好都合なのだ。

つまり……俺は学校の都合の為に、全ての責任を押しつけられたわけである。

……確かに、伊吹を助ける為とは言え、あんな事をやったのはマズいと思う。

それは俺も悪いと思っている。でも……俺の持つ責任とはそれ以上のものであった。

「……拙者は、納得いかないのです！　どうしていつの間にか……すけ様が悪い事になってるのですか！？」　どうして学校側はけーすけ様だけに制裁を加えたのですか！」

「仕方ねえよ……世の中そういうモンなんだから」

だから永洌とは関わりたくない。永洌が動けないのは学校にとって都合がよい。

そういう理由なんだよ……でも、暮葉に説明したって無駄だよな。別にこんな事実を今更言ったって、ウソ乙と笑われるのが関の山だ。それに……俺一人で全てが丸く収まるんなら、安い犠牲だろ？

「拙者は……わからないのです。けーすけ様ばかりが悪人にされる理由が、全然わからないのです！」

「俺は悪人だぞ？ 永洌をぶん殴ったし、売られた喧嘩は買ってた」

「で、でも！ それも伊吹さんの為なのですよね。だったらいいじゃないですか！」

暮葉って本当にいい子だよな。

こんな馬鹿みたいな俺の味方までするって……優すぎるだろう。ひよっとすると、仕事柄で味方せざるを得ないだけなのかもしれないけど。

それでも俺は、この時暮葉は本当にいい子だと思ったのである。

「ありがとな、暮葉……」

「もきゅ、あたりまえなのですよ。けーすけ様が極悪人なわけないのですよっ」

そう言ってくれる人がいるだけで、俺はもう幸せな気分だ。

……でも、例え暮葉がそう言っているとしても、世間での俺の評価が変わる事なんてないだろう。

俺はいつまで経っても“暴力魔”なんだから……。

もう、今更光の道に帰るつもりなんて全くねえ。

とつくに昔に決めたんだよ。元々評価はこれ以上下がらないくらい最悪なんだし、誰かを救うためなら俺が泥を被ったっていいってよ。だから今回も――

「よし、行くぞ暮葉。永洌の魔力を感じ取ってくれ」

「もきゅ……わかりました！ 拙者もけーすけ様をしっかりサポート護衛するのです！」

サポート護衛って、随分無理やりくつつけたな。

まあいい。これで永洌のクソ野郎がどこにいるかがわかる。

――待ってろ伊吹……絶対に助け出して見せるから！

「おっ、いやがったぞ！」

「間違いないで、藤島や！」

「藤島あゝ！」

オイオイ嘘だろ……？

まさか、永洌達のほうから攻めてきたってのかよ。アイツらどんだけ俺を潰すのに必死なんだ！

自業自得でああなったのに、ここまで必死に復讐しようとするものなのか？

……でも、向こうから来てくれたのは正直ありがたい。

足代が浮いたからな。ここで永洌達を倒して伊吹を救ってみせる！

「永渕いつ！」

「アア？ 永渕見たいな馬鹿と一緒にすんじゃねえよ。俺は黒木だ」

「え？」

「もきゅ？ けーすけ様……この人達って！」

この空き地に現れたのは永渕達ではなかった。

いかにも馬鹿っぽい金髪のピアス男、関西弁な長身のセミロングパーマ男、低身長坊主男。

3人とも、ちょっとだけ怪我しているような気がするけど……コイツらは確か。

「「さ、三馬鹿！？」」

間違いない。この超おバカっぽい見た目の人達……ああ三馬鹿だよ。素晴らしき三馬鹿じゃないか！

思わず俺と暮葉の声がハモッてしまったよ。

まあ、アイツらがそれほど三馬鹿という名で有名になっている証拠だな。

「コラアーツ！ 折角の出番なのに三馬鹿言うなっ！」

「そーやそーや！」

「絶対名前覚えてないから三馬鹿って一纏めにしたんだろ！？」

「ソ、ソシナコトナイノデスヨ！？」

「そうそう！ 黒木に赤佐に小林だろ？」

「僕は大林だ！ いい加減名前とこの坊主頭覚えやがれっ！」

俺がそう言うのと、小林……じゃなかった。大林がキレ気味で自分の名前を叫んだ。

小林じゃなかったのか。スマン、流石に名前を間違えるのは失礼だった。

それにしても脱力するなあ。なんでこれから永渕をぶちのめしに行こうとした所で三馬鹿なんだよ。

一気にテンションが下がってしまった……いや待て。三馬鹿って結構使えるかもしれないぞ？

しかも、黒木に至っては永渕の事も知っているみたいだ。

「つで、お前ら一体何の用なんだ？」

「チッ、伊吹ちゃんを守れなかったヤツが偉そうな口聞くんじゃねえっ」

「……っ！」

な、なんで黒木がそれを知ってんだよ……？

「お、おい黒やん！ そんな事言ったら藤島に悪いだろっ！」

「そうや！ 少し黒やんは黙れ！」

「うっせえぞハゲにチョクト！ 事実だろおーが！」

「誰がハゲだコラアッ！」

「チョコトやと？ ええ加減にせいや！」

……あのー、なんでコイツらが喧嘩してるんだろう。

ていうか、真面目にコイツらは何の用でここに来たんだよ？

俺も暮葉も、3人の醜い争いを呆然と見ていた。そんな中暮葉が勇気を出し。

「いい加減にするのです！ 全然話が進まないのですよ！」

「おっ」

「アカンなあ、黒やんのせいやな」

「そうだな、殆ど黒木のせいだよな」

「ざけんなよテメエら！」

「まあまあ落ちつこうぜ？ そないな事よりも本題を藤島達に話さないとな」

「本題？ やっぱ何か用なのか？」

俺がそう問うと、赤佐が黒木や大林を置いて一歩前に出てきた。

どうやら用事というものは、黒木ではなく赤佐が説明するらしい。

まあ確かに、赤佐は三馬鹿の中でもわりと常識人なほうではあるけど。

「さっき、俺ら白陵のヤツらに絡まれたんや。その中には永渕や国

宗の姿もあったで？」

「ほ、ホントなのですか!？」

「ああ、大人数だけに疲れたわ」

そっか……コイツらの傷は喧嘩の傷だったのか。

俺がここで暮葉に過去話をしている間に、アイツら三馬鹿まで襲っていたんだな。

……でもおかしいだろ。俺らの件に三馬鹿は一切関係がなかったハズ。

だったらなんで、三馬鹿は白陵の連中に絡まれちゃったんだよ？

「赤佐、アイツら何か言っていたか？」

白陵が三馬鹿に絡んだ理由が知りたい。俺は赤佐にそんな質問を試みた。

「それが本題や。藤島に伝えて欲しいって永渕が言っていたんや」

「何をだよ?」

「明日午後3時までに、白陵のテリトリーに來いちうわけや。來な
いとその他の人質は殺害、伊吹ちゃんも滅茶苦茶に犯してやるって
……」

他の人質……オイオイおかしいだろ。伊吹以外にも人質がいるって
のかよ!

永渕の野郎何がしたいんだよ。ていうか人質って誰なんだよ。

「そ、それで！ 永渕さん達は他にも何か言っていたりしましたか！？」

「1分でもオーバーしたらアウトらしいちうわけや。ほんで、殴りこむのに人数制限はないみたいや」

暮葉の質問に答える赤佐。回答から察するに、相手も多分かなりの大人数でお出迎えするんだろう。

人数制限がないって所が怪しいぜ。それは絶対、人数が多い時にしか言えないセリフだぞ。

とにかく赤佐の話は為になったよ。明日の3時までには助ければ、全然大丈夫なんだよな……？

「わかった。暮葉！ 白陵のテリトリーに行くぞ！」

「もきゅ！？ で、でも白陵高校のテリトリーなんて拙者、全然わからないのですよ！」

「お前の魔法チカラを使うんだよ」

「わ、わかりまし——」

「待てや藤島っ！」

その時、先程まで大人しかった黒木がいきなり怒鳴りつけてきたのである。

しかも黒木の表情は鬼の形相だ。あんな顔の黒木は初めてである。まるで、裏切り者をこれから殺そうという感じで、俺を睨んでくる……。

「テメエみてえな雑魚が、勝手に動いてんじゃねえよ」

「っ！？ ……誰が雑魚だよ……っ」

「テメエ以外に誰がいると思ってんだよ。このヘタレ野郎が」

「……誰がヘタレだよ。ヘタレヤンキーにだけは言われたくねえよ」

—— 待て、落ちつけよ俺。

黒木の言ってる事のほうが正しいハズだろ？

それなのに、なんで俺が黒木の言ってる事に反発してんだよ……。俺がヘタレなのも雑魚なのも全部事実だろうが……。

「うるせえ。伊吹ちゃんを守れなかったクソ野郎が……調子のいい事ほざいてんじゃねえよ」

「お、おいおい黒やん！ や、やめとけて！」

「そうや！ 藤島だって故意じゃなかったんやで？」

「お前らは黙ってろ。俺は藤島と話をしてんだよ」

黒木の言ってる事は事実。俺は伊吹を守れなかった……。それなのに、なんで俺はこんなにイライラしてるんだよ。

「……確かに、俺は弱いよ。だけどてめえはどうなんだよ。あの場にもしてめえがいたら、伊吹は助かったのかよ？」

「あたりまえだろ！ ……俺は昼休みのテメエらの会話を聞いてたんだよ。なんでこうなっちまったかわかってんのか？ テメエがあ

まりにも鈍感すぎるからだよ！ テメエ自身はわかってねえかもしれないけど、テメエは伊吹ちゃんを傷つけたんだ。逃げ出したくなるくらいに傷つけたんだよ。伊吹ちゃんは多分、ショックで逃げている所を永渕にやられたんだよ……どういふ事かわかるよな？ 全部テメエが悪い。テメエがもう少ししっかりしてれば、伊吹ちゃんが永渕に襲われる事なんてなかったんだよ！」

気がつけば空が暗くなり始めていた。別に日が暮れているからではない。

6月のこの季節にもなれば、もう少しだけ明るい時間が続くからな。この暗さは厚い雲によって日光が遮られた時の暗さだ。オマケにピチャピチャと、空高くから雫が降り始めてきた。

……雨だ、こんなタイミングでいきなり雨が降り出したのだ。

そんな中、俺の中で更に怒りが爆発しようとしていた。

畜生……なんでだよ。黒木の言葉は正論過ぎて反論ができないハズ。それなのに……俺は――

「……喧嘩、売ってんのか……？」

「やっと気付いたか鈍感野郎。その鈍感さが伊吹ちゃんを傷つけた事……わかってんだろ？」

俺は、そのセリフを聞いた後に黒木と向き合ってしまった。

お互いに厳しい視線を向ける。メンチビーム、火花がバチバチと出ているような感じだぜ。

「や、やめろよ黒やん！ 僕ら喧嘩しに来たわけじゃねえだろ！？」

「藤島もや！ それくらいでやめとけ！」

「二人ともやめてください！」

そんな三人の声も……今の俺達には全く聞こえなかった。
雨が俺達の身体に強く打ち付ける。凍えるように冷たいその雫。
そんな雨の中、まず黒木が――

「このクソ野郎オツ！」

「ぶおっ!？」

一瞬にして間合いを詰めてきた黒木は、目にも留まらぬ速さで拳を振るってきた。

口内に広がる苦い味。脳にまで激しく響いた振動。

そして、ストレートを完璧に決められた俺は背中から地面に落ちてしまう。

びちゃん！と泥が飛び跳ねる音が響く。

当然俺は起き上がろうとするが、その前に黒木がマウントポジションをとってきた。

「テメエが鈍感であまりにもダセエから！ 伊吹ちゃんが永渕に拉致られただろ！ どう責任取ってくれんだよテメエ！」

殴りながら説教をしてきやがる黒木。顔面が痛え、なんだよ黒木……滅茶苦茶強いじゃねえか。

だけど、一方的に殴りつけられるのも嫌だ。それに黒木が強いと言っても高校生レベルでの話だ。

俺の頑丈な身体には大した威力には感じねえ……！

攻撃を見切った俺は、黒木の拳を左の平手で受け止めた。

その後は平手と拳の押し合い、そして相変わらず黒木の説教が続く。

「てめえ……ッ！」

「だから俺はテメエが嫌いなんだよ！ お前が存在しねえほうが伊吹ちゃんの為だ！ お前みたいなのに伊吹ちゃんが騙されてるから、こんなことになっちまったんだろが！」

「……ふざけんじゃねえよ、てめえっ！」

叫んだ勢いで、俺は黒木の右頬を握った拳で殴りつける。

その衝撃でマウントポジションを取っていた黒木がぶっ飛ばされ、俺の体は自由の身となる。

だけど、それだけでは何の意味もない。

立ちあがった俺は追撃の為に駆けだし、逆にマウントポジションを取ってやった。

襟元を左拳でガッチリ握り、右拳で黒木の顔面を殴りまくる。

顔面を殴る度にバゴッ！という嫌な音が響いた。

「てめえだったら……てめえだったら未然に防げてたのかよ！？
仮に伊吹が襲われたとしても、その時てめえは伊吹を救えたのかよ
！？」

「……うるせえよ三下野郎！ 逃げたヤツがほざいてんじゃねえ！」

その言葉を聞いて俺の胸が痛くなる。

逃げた——黒木が言ったその一言。そう、確かに俺はあの場から逃げた——

暮葉が飛行術式を使ってしまったからだけど、それでも逃げた事には何の変わりもねえ。

俺は……伊吹という大切な幼馴染を敵に残したまま、逃げてのんびりとしていた。

最低だよ……正論を言う黒木さえ、こんな風に殴りつけて……全く俺は最低な野郎だ。

「オラァッ！」

「ぐあっ!?!」

すべての怒りを込めたような一撃。

顔面に突き刺さった瞬間、一体何mくらいぶっ飛ばされたのだろうか。

気付いた時には濡れ濡れの地面に倒れ、黒木が俺を見下していた。

「逃げるとかよお……男として一番最低じゃねえか！」

「が……は……っ!?!」

まるで隕石のように降ってきた黒木の足が、俺の鳩尾を突き刺す。いてえ……っ!?!しかも、呼吸があ………!!

その上、見下す黒木の冷たい視線……その視線が俺にとっては一番痛かった。

どんな攻撃なんかよりも、ただの冷たい視線が痛かった……。

「最低野郎の癖に……調子に乗るなよ!」

「ぐっ!?! ああ……っ!?! あ、があっ!?!」

何回も、何十回も。俺は全身を踏まれ蹴られる。

その度に思うんだ。どうして俺は……こんなに弱くて最低なんだと。ハハッ……もうダメだな俺は。そうだよな……黒木は伊吹が好きなんだもん。

俺は自分の幼馴染、そして黒木の好きな子を泣かす最低野郎なんだ。殴られたり蹴られたり踏まれたりしたって……何の文句も言えねえよな。

ホントそう思うよ……俺はただ、自棄になって黒木に当たっていただけなんだ。たったそれだけで黒木を殴りつけてしまった。俺はマジで最悪な男だ……。

下手すりゃよ、俺なんて生きてる価値すらないかもしれねえ……。

「オラアッ！ この！ 死ねヘタレ！」

「く、黒やんもうよせ！」

「そうや！ それ以上やったら藤島が死んじまうで！」

「……チッ。行くぞテメエら……オイ藤島。伊吹ちゃんは俺が助けっからよ、テメエはママの膝で寝てやがれ。テメエは出てくんない、それから俺と伊吹ちゃんの前にその間抜けなツラ出すんじゃないぞ」

そう言い残し、黒木は俺と暮葉を置いて去っていく。

赤佐と大林も、暮葉と俺に「ごめん」と一言を言い残して、黒木の後を追って行った。

雨の空き地に残るのは……。

「けーすけ様っ！ だ、大丈夫なですか！ しっかりしてくださいけーすけ様っ！」

俺の名前を叫びながら駆けよって来た暮葉と、そして——
無様に伸びている俺だけであつた……。

第44話、雨の中の……（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「このコーナーも久しぶりだな」

伊吹「そうね……ていうか私本編で出番ないわよ!？」

暮葉「伊吹さん、捕まっちゃってますしね!　そういえばどうしてキャラ紹介コーナーが終わったのでしょうか？」

圭介「そりゃお前、主要キャラっぽいのが尽き——ふがあっ!？」

伊吹「メタな発言は控えなさいこのばか圭介っ!

小坂「このコーナー事態メタの塊だと思うけどね」

圭介「ふあぐうふえふえ（たすけて）ゝ!」

暮葉「も、もきゅ!　それ以上はけーすけ様が窒息死しちゃうのですよ!」

※キャラが増えたらまた設定コーナーは再開します!

第45話、決意

あれから40分後くらい経ったのだろうか。

俺は自宅で暮葉や葵に手当てを受けていた。

黒木に散々ぶん殴られ踏まれ蹴られまくったが、流血があまりにもひどかったらしい。

……俺の身体は丈夫だし、回復も早いから心配する必要もないのに……。

なにより、俺に手当てされる権利なんざねえ。家でくつろぐ事さえ許されない。

……なにしてんだよ全く。明日までに助けなきゃ伊吹も他の人質も皆……。

「はい、手当て終わったのです」

「ああ……」

「お兄ちゃん……大丈夫？」

「ああ、大丈夫……」

「……………」

藤島家が沈黙に包まれる。これも全て俺のせいだ……。

俺が自分のせいでヘコんでるから、余計に重たい空気を作っちゃまったんだ。

……でもいいのかよ。確かに俺は最低だしヘタレだし、しかも伊吹を残して逃げてしまった。だからってよ……黒木に何でもかんでも

任せていい理由^{ワケ}になんのかよ？

たとえばこういう形でも、どんなに俺が人間のクズだとしても。

——俺が伊吹の幼馴染である事には変わりねえだろ！

そうだ、だからこそ俺は……こんな所で閉じ困っているワケにはい
かないんだ。

黒木になんと言われようが、伊吹に拒まれようが関係ねえ。

俺はただ伊吹を助けたい。俺らのせいで犠牲になった人質も助け出
したい。

こうなってしまったのも俺の責任だ。だから、その責任は俺が取ら
なければならぬ。

それだけだろう。俺に出来る事と言えば……唯一俺が出来る事がソ
レだ。

「……っ！」

そう決意した俺は、拳を握りしめた状態でふと立ち上がった。

「お兄ちゃん？」

「ど、どうされたのですか！？」

「二人とも……ちょっと出かけてくる」

「……！ ダメなのです！ もう少し安静にしてから——」

「それでも俺は行く。揉めてる余裕なんてないんだよ！」

立ち上がった俺はスタスタと玄関へ向かおうとする。

だけどその時、俺の右腕に何かが掴まったような感じがした。右を向くと、そこには必死そうな表情で俺を止める暮葉の姿があった。

「けーすけ様……落ちついてくださいっ」

「離してくれ……っ、責任は俺が取るんだよ」

「何もけーすけ様だけの責任じゃないのですよ！　自分をそんなに責めないでください！」

「でも、黒木の言っていた事は全部本当の話だ。やっぱり責任は俺にあるんだよ」

こんなことをするだけで、全てがチャラになるなんて思っていない。だからって、責任を取らないで消えるなんて真似もできない。それが俺の最後の役目だ。

決意を固めた俺は優しく暮葉の手を離していき、完全に離れると前を向き一歩ずつ、確実に玄関へと歩んでいく。背中に2人の視線を感じるが……俺が二人に振り向く事はなかった。だが、靴を履いてドアノブに手をかけた。

「待ってください！」

瞬間、玄関に俺を呼びとめる暮葉の声が響いた。

その時、初めて俺は後ろを振り向く。すると暮葉はいつも以上に真剣な表情で。

「拙者も……拙者も一緒に行くのです！」

「くれ、は……？」

突然、暮葉が一緒に行くと言いだしたのである。

「永渕さんの魔力を感じれば、白陵のテリトリーがわかるのです。それに拙者の役目はけーすけ様を護衛する事なのです。ですから、拙者も一緒に行ってけーすけ様をお守りするのです！　けーすけ様の周りの世界も守りたいのです！」

「暮葉……わかった、一緒に行こう」

俺はすんなり暮葉の要求を受け入れ、暮葉も一緒に白陵のテリトリーへ行くことになった。

本当なら巻き込みたくはない。だが生憎、俺は白陵のテリトリーの場所を知らない。

その上、リミッターがかかっている通常の状態では、俺の実力なんて暮葉の足元にも及ばない。

情けない話だが暮葉が居たほうが、あらゆる確率が上がるのである。さっきだって……暮葉に助けられたようなもんだしな。

「お兄ちゃん！　暮葉さん！　晩御飯までには帰ってくるんだよ！」

葵はまるで母親のセリフみたいな事を俺らに向かって叫んだ。

晩御飯までに帰ればいいな。相手はマジ殺人とかやりそうな相手だし、下手すりゃ死ぬぜ？

――扉を開けて外に出た俺と暮葉。しかし、どういいうわけか玄関の前に一人の男が立っている。

男は長身で筋肉質だが、どこか爽やかな雰囲気放つ優しそうなヤ

ツである。

しかも男の服装は白い道着に黒い帯、左胸元には“重原流”という刺繍が入っていた。

俺も暮葉も——この男には見覚えがある。

「し、重原さん!？」

「お前……!　なんで俺ん家ちの前に!」

「……行くよ、白陵のテリトリーに」

重原の口から放たれた意外な言葉。

……コイツ、どうして今回の件を知っているんだ?

「なんでだよ……っ、お前が何でこの事を?」

「俺も守れなかったからね」

「もきゅ?　だ、誰か襲われたのですか!？」

「不意打ちを食らってね。不良はほとんど退けたけど大吾はボコボコ、小坂さんは拉致されてしまった……」

「こ、小坂!？」

「亜紀さんが拉致されたのですか!？」

「すまないっ、俺が居ながら不覚だったよ……!」

重原の口調はいつもの優しい感じでも、その表情と握られた拳が悔

しさを表している。

永渕の野郎……一体どういうつもりなんだよ。

他の人質もいるとか言っていたらしいけど、なんだって態々知り合
いを襲うんだよ。

もしかして他の人質ってのも……知り合いとかなんじゃ！

ふとそう思った俺はポケットから携帯を取り出し、一人ずつ確認を
取って行く。

そのうち、出てくれたのは青山さんと凧紗と大吾のみ。部長とあか
りは全然繋がらない。

「けーすけ様、どうしたのですか？」

「いや……確認してただけだよ。クソッ！ 長淵の野郎……ッ！」

「圭介、もしかしてその永渕というヤツ、知り合いなのか？」

「一応知り合いだ。中学の時に色々あったんだよ」

「圭介、俺は状況がよくわからない。知っているのは圭介が関わっ
ているらしいって事だけだよ。だから詳しく説明してもらえるかい
？」

どうする、下手すりゃ友達を失う過去だぞ。

重原はいいヤツだけど、俺がそんな最低な暴力魔だと知った瞬間……。

って、なに友達を失う事で怖がってんだよ。俺なんてもうとつくの
昔に堕ちた存在になってるだろ。

それに、うまく行けば協力を得られるかもしれない。だったら事実
を話すしかねえだろ。

——俺は、俺の過去やどうして白陵が初芝の生徒を襲うのか、その理由の全てを重原に説明した。

「そんなことが……？」

「悪い。今回の件は殆ど俺のせいなんだ」

「待て、今の話でどうして圭介が全て悪い事になるんだい？」

「なるだろ。俺がもつとちゃんとしてれば、こんな事にはならなかったハズなんだよ。だから今回はその責任を取る、全てがチャラになるってわけじゃねえと思うけど、それでも俺はテリトリーに殴りこんで永渕をぶっ飛ばして、伊吹と他のみんなを助け出してやる！」

……しかし、重原も暮葉も相変わらず表情は暗いままであった。そんなに俺の自虐が嫌かよ。でも自虐しているわけじゃねえ。

全て事実なんだからしょうがねえだろ。俺は事実を言ったただけだ。

それなのにコイツらは——

「……けーすけ様っ、そこまで自分だけの責任だって思い詰めると、身が持たないのですよ……？」

「そうだよ。それに、事実これは圭介だけの責任じゃないよ」

——コイツら、優しすぎだろ。

ここまで最低な事をおいた男に、どうしてここまで優しくするってんだよ？

黒木の反応が普通なくらいだぜ。それなのにどうしてコイツらは……。

いい友達すぎるだろ。目から汗が出たらどうするんだよ……！

「……ありがとう」

とりあえずはそう言った。ここで否定したってしょうがないから……。

でも優しい人が何人か居ようが、所詮俺は最低のクズ野郎だ。

—— たった一人の幼馴染さえ満足に守れなかった、ただの雑魚でヘタレ野郎だ！

「わかってくれればそれでいいよ」

「重原さんの言う通りなのです。あまり自分を責めないでくださいね！」

「わかった、ありがとな」

……この二人は本心なんて知らないんだろうな。

出来れば知られたくないけど。こんな事を考えていると知れば、二人とも優しいから絶対に救いの手を差し伸べようとする。俺にはその手に触れる権利なんてないのに。

「よし、それじゃあ白陵のテリトリーに行こう」

「おう」

「了解なのです！」

……時刻は18時丁度、俺達は白陵せんじょうのテリトリーへと赴く。

第45話、決意（後書き）

後書きトークコーナー

伊吹「し、信じられない……圭介が主人公してる!？」

暮葉「ホントなのです!　けーすけ様が主人公なのですよ!？」

圭介「お前ら、俺は一応――」

伊吹「今まで圭介なんて村民Aレベルだったのに」

暮葉「全くなのです!　けーすけ様……いつ主人公になったのですか!？」

圭介「悪かったな個性の薄い主人公で!　俺は元々主人公だ!」

☆以下、本編で出番のない人達をつぶやき☆

風紗「私、出番がないのはなんで?　三馬鹿よりも出番がないなんてひどくないか？」

千早「多分……ちゅ、中途半端に強いからだと思いますっ」

大吾「今まで広ちゃんとセットでの出番だったのに。とうとう僕の出番が広ちゃんより少なくなった!」

純奈「私はナギちゃんとの愛さえあればどうでもいいんだよ!」

第46話、夕日の下の戦場

夕焼けが素晴らしい時間帯……。

本当なら家でエロゲーをプレイしている時間。

それなのに、今日の俺はエロゲーなんてものとは無縁な生活を送っていた。

下手をすれば、今日が人生最後の日となるかもしれない……。

ここは白陵高校や明智家からわりと近い、自動車工場の跡……。

敷地内は荒れ果て、ゴミや廃車が山積み状態である。

その上、大勢の不良達が俺達を待ち構えていたのである。

「へへへ……」

「たった3人で良く来たな、褒めてやんぜえ!？」

不良達はバットや木刀など、あらゆる武器で武装している。

ブレザーと学ランが入り混じっているのだが、俺はコイツらに対して素直に思った事がある。

……コイツら、一体いつの時代の不良だよ! あまりにも古風すぎるぞコイツらは!

「クソッ、なんちゅー数だよ!」

「流石にこれはまずいですね……っ!」

「この人数で男二人に女子一人じゃ、10分持つか微妙だね」

喧嘩と言うのはどんなに鍛えられた人間でも、やはり数が多いほう

が有利だ。

そんなことはよくわかっている。3人相手にするのだって結構キツいもんだ。

相手はどう考えたって、一クラスの人数よりも多いんだぜ？

いくら武道家と戦国系魔法少女がいるからって、なんとかなるんだろうか？

でも重原も暮葉も苦しそうな表情だし、やっぱりマズいんじゃないだろうか……と思った。

「ちょっと待てやコラアッ！」

「アア？」

「なんだアイツら、どこの学校だ？」

刹那、何者かの声が響きそれに白陵の不良達が反応した。

その声は俺達のすぐ後ろから聞こえた。というか、どこかで聞き覚えのある声である。

確認の為、急に後ろを振り向くがその視線の先には。

「チッ、藤島までいやがる……あんだけボコツたのに、よくこんな所に来る根性あるなアイツ」

「まあまあ。ええやないか別に」

「うう……なんで僕までこんな喧嘩に……っ！」

三馬鹿だ。なんと三馬鹿がいやがったのだ。

当然黒木の姿も……黒木は完全に俺の事を敵視しているようで、鋭い目つきで俺を睨みつけている。

赤佐や大林がいなかったら、また黒木が飛びかかってきそうな勢いだ。

……ところで疑問に思う事があるんだ。三馬鹿の後ろにいる如何にも不良な人達は何？

「チッ、まあ藤島は我慢するか。オイテメェら！好きなだけ暴れていいぞ！」

「マジっすか黒木さん！？」

「上等だコラァ！この機会に白陵ブツ潰してやんぜ！」

「やったるぞオラァッ！」

ま、マジかよ！黒木に仲間というか手下のような存在がいやがるだ
と？

確かに黒木は元ヤンだって話だけど、手下がいるほど偉い地位にいたのかよ！

とにかく、黒木が連れてきた不良達は結構な人数だ。これはもしかするとイケるんじゃないか？

……いや、仮に可能性が殆どないとしても、俺は突き進まなければならぬ。

伊吹やほかのみんなを助ける為に……責任を取る為に！
そして叩き直してやるわ……あの永渕の腐った根性を！

「……………」

「……………」

睨み合いが数十秒ほど続く。

とにかく相手の数が多い、三馬鹿のおかげで俺達の数も多くはなつたが……。
正直、これはどうなるかわかせないぜ。でも……そんな事、俺達には全く関係がない。
やらなきゃならない事が山積してんだよ……こっちは！

「行くぞみんな！」

「はい！」

「藤島テメェ！ 全ての原因が指図してんじゃねえぞ！」

「うおおおおおおおおおっ！」

俺を先頭に一斉に皆が駆けだした。

暮葉は鞆に入れたままの一期一振を両手に持ち、重原もとにかく走る。

黒木らは何らかの武器を持ち、それを手に持って敵中へと突撃をかける。

「ナメやがってえ……！ 俺達も行くぞ！」

「おおおおおおおおおっ！」

俺らに対して白陵の不良達も向かって来た。

しばらくして遂に両陣が衝突、俺らと白陵ヤンキー集団の殴り合いが始まる。

こうして——最悪の乱闘が始まってしまったのである。

「……ッ！ ツ！ ツ！」

暮葉が全長106cm、刃渡りにすると73cm程度の一期一振を振りまわす。

ただし鞘付きなので、攻撃は斬るというよりは突いたり打ち込んだりする形であった。

暮葉の素早い動きに不良達はついていくことが出来ず、ただその鞘に打たれるのみだ。

当たった場所によってはミシツという嫌な音が響く。

しかも暮葉の狙いは正確であり、たったの一撃で不良達を沈めて行く。

「オラアッ！」

「ぐ、は！」

——そんな実況をしている間に、俺の所にも一人の不良が襲いかかって来た。

一発顔をぶん殴られ、その時の衝撃に任せてくるりと一回転をしてしまう。

……だかなんだよ、たかが不良が放つ拳だろ。身体が丈夫な俺には

「……ッ！ 生ぬるいんだよっ！」

咄嗟に突き出したアッパーカット。なんとその攻撃で不良は宙に浮いた。

地に落ちた不良はボロ雑巾のように倒れている。意識はあるっぽいと思うように動けないらしい。

俺は経験上知っている。顎を思いっきりぶん殴ると脳震盪を起こす。特に資料なんて読んだわけでもないし、元々そんな事を知っていた

わけではない。

ただ過去の経験上、腰の入ったアップercutを決めた相手は大抵、脳震盪を起こした。

そして、後でそこは急所であると知ったんだ。うまくやれば一撃で倒せるかもしれない急所。

急所はそこまでの力を入れなくても普通に痛いと感じ、力を入れると下手すれば危険な場所である。

「あ……ぐう……っ」

「テメェ！」

俺に倒され、伸びた不良を見て仲間が次々と襲いかかってくる。

今度は二人……人数が多い時にはスピードだ大事だ。

「ふんっ！」

「んがあっ!？」

向かって来た一人に対し、俺はヘッドバットを放つ。

バゴ!という植木鉢を高い所から落としたような音がする。

それによって一人は怯むが、もう一人はいつの間に俺の後ろに回り込んでいた。

背後に回り込んだ不良に俺は、左腕をぶん回し裏拳を不良の眉間へと打ち込む。

人体の急所でもある眉間に拳を打ち込まれた相手は、声にもならぬような声をあげてバランスを崩し、ゆっくりと後ろへ崩れ落ちる。

「ぐっ……テメェー……ッ！」

さっき怯ませた不良が立ち直り、決死の突撃を仕掛けてくる。

「ぐおおおおおおおっ！」

俺も不良に立ち向かうかのように駆け出す。

直前で相手から放たれた拳を避け、俺も右拳を放つ……が、あえてそれを当てなかった。

相当不良は驚いている。不良は何の回避もしなかったので、普通は外れるはずがないのである。

にも関わらず、俺の拳は僅か1cmの差で外れたのだ。

相手は何かの奇跡だろうと思ったかもしれない。しかしこれは俺の作戦であった。

外れたと安心をさせた所で――

「がっ――ばっ、ア!？」

後頭部、俺が狙ったのは後頭部だ。

後遺症の残る危険性がある箇所なので、格闘技では反則技にされている急所である。

そこに俺は、しっかりと握って右の裏拳を打ち込んだのである。

まあ、多分大丈夫であろう。一応程度というものは身体でわかっている。

眉間に後頭部、急所ばかりを打たれた相手はたまらず大地と接吻を交わす。

「ぐっ！　オラァ！　だあっ！」

「フッ！　ありゃ！」

「だああもう！　チクシヨオオオオオオッ！」

3人を倒した所で俺は前方を見ると、三馬鹿が白陵の不良相手に頑張っていた。

黒木のヤツも明智が相手じゃなかったら、結構強いもんでほぼ一方的な勝負だ。

赤佐も黒木に負けていおらず、その大柄なボディーにタックルされればひとたまりもない。

大林も小柄で非力ながら、サッカーで鍛えた脚力と素早さだけで頑張っていた。

黒木が連れてきた不良達も、白陵の不良とほぼ互角の戦いを展開。
重原も――

「フッ！」

「――！」

顔面に打ち込んだ素早くキレのよい裏拳。アッサリと崩れ落ちる白陵のヤンキー。

その直後の達人のように隙のない構え。

山籠りをした事があるだけに、重原の武術の腕前は達人級であった。

戦況は確実に、暮葉や重原といった達人。

そして黒木に赤佐といった喧嘩慣れた奴らのおかげか、若干俺らのほうが有利である。

だけど――それでも白陵の不良の勢いがなくなったわけではない。相変わらずの大人数で俺達を襲ってくるんだ。全くキリがねえぞこれじゃ！

「圭介！ 大丈夫か！？」

「ああ、まあなんとか」

重原が俺を心配してか、大ジャンプで俺の所にやってきた。

……しかも、飛んでいる間に蹴りで2人を撃退していた。もう重原ってチート級に強い！

無差別格闘重原流って一体どんな修業をしてんだよ。

しかも、アレでも重原は父親や爺さんには敵わない存在らしい。重原家……恐るべし！

「けーすけ様！ ご無事ですか！？」

「え、おう！ 暮葉こそ大丈夫か？」

「はい！ この程度の相手ならなんともないですよ！」

「木下さん見かけに寄らず強いんだね。なにかやってたのかい？」

ま、まずいぞ。実は異世界人で特殊部隊の人なんですーなんて、絶対に言えない事だ。

暮葉も困惑しているようだし。仕方がない、テキトーに誤魔化すしかない！

「く、暮葉は銃剣道やってたんだよね！？」

「もきゅ！？ は、はい！ 拙者の家はかつて軍人家庭だったので！」

「そうなんだあ。通りで！」

……よかった。テキトーに銃剣道の達人って事にしておいたら重原

も納得してくれたよ。

まあ、オリジナルの銃剣道とは全然違う戦い方だったけどね。でも、重原だって戦っていたんだ。そこまで細かくは見えていないハズである。

「それにしても、すごい数なのですね……っ」

「っーか、さっきよりも増えてねえか？」

「確かに、このままだとまずいね……」

どういう事なんだよ。全然白陵の不良の数が減らねえぞ。まさか永渕の野郎。白陵に通う不良生徒全員を動員しやがったのか。だとしたらマズいぞ。このまま戦ってたら疲れるだけだ。さっさと戦いに終止符を打たねえと、その為には――

「二人とも。先に永渕を叩くぞ！」

「……そうですね！ 大将さえ叩けば戦いは終わるのです！」

「でも、三馬鹿とその仲間だけでは厳しいよ。俺はここに残って戦うよ」

「ではけーすけ様！ 永渕さんの居場所まで拙者が護衛するのです！」

「お、おう！ 重原、頑張れよ！」

「任せて。そっちの戦いが終わるまで……全力で食いとめるから！」

それを言い残した後、重原は再び敵中へと飛び込んでいった。

重原がここに残り、暮葉が俺の護衛をする。

確かに敵の数が多い場所よりも、敵の数が少ない場所のほうが暮葉の身は安全だ。

いくら強いって暮葉は女の子。無理だけはさせたくない。

この展開だと重原にはとても悪いけど、でも重原がいないと三馬鹿もおそらく厳しいだろう。

「けーすけ様！ 先を急ぎましょう！」

「おう！」

みんなが頑張る中、俺と暮葉は大将を叩くべく先へと進んだ――

第46話、夕日の下の戦場（後書き）

後書きトークコーナー

千早「藤島先輩……その、す……好きですっ！」

圭介「ええっ!?　ちょ、青山さんそれマジっすか!?!」

千早「は、はい……っ。ずっと昔から先輩の事、見てました」

圭介「……いいのか、青山さん?」

千早「はい!　私……藤島先輩じゃなきゃ嫌です。だって……ミィ、君ノオ尻ノ形ダイスキダカラ☆」

圭介「エッ?」

アリック「ヤア、久シブリダネ!　神崎・H・アリック参上ダボーン!」

圭介「嫌アアアアアアアアアアアアアッ!」

………

圭介「……という夢を見たんだ」

伊吹「の、ノーコメントよ……」

暮葉「拙者はお菓子に囲まれる夢を見ました！」

第47話、白陵No2

「誰も……いないですねっ」

「不気味なくらい静かだな」

荒れ果てた工場内部へと進んだ俺と暮葉は、敵の襲撃を警戒しつつ慎重に足を前に進める。外はあんなに騒がしかったのに、工場内部は静けさに包まれている。なんだか不気味である。

畜生……永洌は一体どこにいるんだよ。人質がいる事以外、こっちは何の情報もねえぞ。

何か情報さえ手に入れば、永洌の居場所を掴める情報があれば……！

「アヒヤヒヤヒヤッ！」

「……！ 誰か来るのです！」

「っ！？」

静かな空間に、不気味な足音と狂気じみた笑い声が響き渡った。

タッタとゆっくり、気味の悪い笑い声をあげながら何者かが近寄ってくる。

それは短ランにドカン、金髪のリーゼントで凶悪なツラをしている、明らかに時代を間違っている古風なヤンキーであった……。

「アヒヤヒヤ！ よく来たじゃねえかテメェら……外の広場でくたばると思ってたのによ」

言いながらヤンキーは、口に銜えた煙草を吐き捨てて火を踏み消す。

露骨なポイ捨てだ。煙草のポイ捨てって古宇坂の条例じゃ違法じゃなかったっけ？
まあそれはともかく。アイツ、なんだか危なっかしい雰囲気のある男である。

「何者なのですか！」

「アヒヤヒヤ！ 俺は船木健太ふなきけんたっーモンだけだよ。通称“右方の船木”ってんだ、まあ白陵のNO2よ」

この男が……古宇坂最強を誇る不良校。白陵高校のNO2。
つまり、永渕の次に喧嘩が強い男ってわけか。
でもちよつと待てよ。右方の船木だって？

「てめえは神の右席気取りかよ！ しかも右方って最強キャラじゃん！」

「いいじゃねえか！ 右方の船木って強そうじゃね？ アヒヤヒヤ！」

「もきゅ！ わ、笑い方が気味悪いのですっ！」

なんだよ船木さん、あんたとあるラノベに影響された厨二病かよ！
しかもあまりの不気味さに、暮葉が思いっきり引いちまってるじゃないか。

同じく気味悪いキャラ繋がりで、舌に十字架でも付けて“前方の船木”って名乗っとけよ！

全く……最初にそげするぞコノヤロー！

「アヒヤヒヤッ！ さあゝて、二人まとめてボコボコにしてやろう

か？」

「……されてたまるかよ！ それより永渕の居場所を教えろ！」

「そうなのです！ 大きな趣味の悪いパンを頭に乘せてるくせに、出しゃばるなのです！」

「テメエこれはリーゼントだ！ 食べ物と一緒にすんじゃねえ！」

暮葉も地味にひどい事いうな！

金髪リーゼントだって船木してみれば立派なチャームポイント。ていうか、アレがなかったら船木じゃなくなるだろ。

よくあるヤンキー顔なので、あの髪形じゃなかったら誰だか見分けがつかなくなる。

「り、リーゼンとってああいう髪型だったのですね」

「知らなかったのか？」

「は、はい！ すごく新鮮なのです！」

確かに暮葉は異世界人だしな。

世界情勢が一昔前の地球みたいでも、細かい文化とかは地球とは全くの別物なのだろう。

魔法が存在するくらいなのでそれくらいの違いがあったって、別に変な事ではないハズだ。

たまたま、暮葉の世界にはリーゼントという髪型がなかったんだろうぜ。

「でも今時アレは流行らねえぞ？」

「もきゅ、そうなのですか？」

「今時のヤンキーもあんな髪型のヤツ、そんなにはいねーぞ？」

「なるほど、つまり時代遅れってわけなのですね！」

「誰が時代遅れだコラアツ！ テメエらリーゼントの素晴らしさを全く理解していいえ！ 短髪剃り込み？ 丸刈り剃り込み？ 角刈り？ パンチパーマ？ そんなの全然気合いが入ってねえ。俺から言わせて貰えば永渕さんの髪型だって気合いが足りねえ。ツツパリならリーゼントがあたりまえだ！ どうだ参ったかコラアツ！」

……すげえ。リーゼントについてあそこまで熱く語る人、初めて見た気がするよ。

不良漫画とかあんまり読んだ事はないけど、でも俺の知ってる不良キャラでさえ、あそこまで熱く語るキャラクターはいなかった。

そもそも、今時リーゼントなんてツインテールの貧乳ロリっ娘よりも希少価値だぜ？

リーゼントの硬派なツツパリ……これはもう絶滅危惧種の国宝レベルだ！

「随分とまあ……リーゼントにこだわりがあるようで」

「あたりまえだ！ そのピンクのアホ毛とは違うんだよバーカッ！」

「も、もきゅ！？ よくも拙者のアホ毛をバカにしたのですね！ アホ毛は拙者のチャームポイントなのですよ！」

く、暮葉さんそのアホ毛。チャームポイントだったんだ……。どちらかという俺は、その琥珀色の瞳がチャームポイントだと思っていただけ……。

つーか、暮葉も船木並に自分の髪にこだわりがあるんだな。正直、特にイジりもしていない黒髪ナチュラルな俺にはわかりません。

「うるせえ！ 大体ピンクとかありえねえだろアニメかよ！ 金髪のほうがフツーだし！」

「もきゅ！？ き、金髪なんて素行が悪いだけに見えるだけなのです！ それに拙者の髪は天然だから仕方ないのです！」

暮葉のピンクはおかしいだろと思ったの、俺もです。

でも、金髪も十分奇抜な色ですよー。それを言ったら伊吹の髪色も不思議だけど。

……まあ、結論を言えば世の中いろいろあるというわけだ。

「素行も何も不良にンなもン関係ねェ！ とにかく俺の金髪リーゼントを馬鹿しやがって、テメェら処刑確定だ！」

ダッ！という突然の足音。

狭苦しい工場内を駆け始めた船木は、僅か数秒で5mという距離を詰める。

——アイツ、ふざけたキャラだけど実力は確かも。動きは滅茶苦茶速ェ！

「アヒヤヒヤ！ まずは……女からミンチ確定だああああっ！」

間合いを一気に詰めた船木は右足で跳躍し、拳を振り上げながら暮

葉へ飛び込む。

暮葉も透かさず鞘に収めた一期一振を突き出し、飛び込んでくる船木を自滅へと追い込もうと試みる。

あのまま突っ込めば、確実に一期一振の先端は船木の腹に突き刺さるだろう。しかし——ガシッ！

まるで、刀を突き出されるのが予想済みだったかのようなのだ。

鞘を力強く握った船木。勢いで突っ込む事も刀の先端が刺さる事もなかった。

そして猿のように身を動かし、空いていた右拳で思いっきり暮葉を

「ぐっ！ させるかよてめえ！」

ぶん殴る前に、俺は衝動的に飛び出してしまった。

そして、眼を睨り衝撃に備える暮葉を助けるように——俺は船木の横顔をぶん殴る！

「だ——ハアッ！」

ゴギンッ！と、如何にもぶつかり合うような嫌な音が響き渡る。

その衝撃でぶっ飛ばされた船木は、どうにか自らの脚力で倒れずに済むものの、頬を痕を赤く腫らして口元からも血を流していた。

「けーすけ様っ！」

「大丈夫か、暮葉！？」

「は、はい！ 助かったのです！」

よかった——暮葉が無事で本当によかった。

何故俺があのだいミソで飛び出したか。それは当然、この可愛い顔を守りたかったである。

一方の船木は左頬を左手で押さえ、鋭い目つきで俺達を睨んでくる。しかも、船木の右拳は血が出る程に握られていた。

「アヒヤ！ この野郎オ……1対2とは聞いてなかったぜえ？」

「それはお互い様だ。今はてめえ一人でも、もう一人いたら仲間も使って攻撃するんだろ？」

「そりゃあ当然だ。サシで勝負するって誰も言ってるねえからな。あそこうも言ってるねえな……」

思わせぶりの台詞を吐いた——刹那。

船木は短ランの中から鋭く光る、バタフライナイフを出してきやがった。

オイオイ。刃物って冗談で済まされるレベルじゃねえぞ！

「もきゅ！ は、刃物！？」

「誰も武器を使っちゃいけないとかな、そんなふざけた事言ってるねえよなあ！」

「くっ……てんめえ！ いくら喧嘩でも刃物なんて普通使うかよ！」

「そういうテメェらこそ武器持ってるだろうが。刃物だって武器なんだよ、同じだろうが！」

確かに、刃物も武器と言えば武器だ。

ていうか道具なんてものは、使い方によってはどんなものでも武器

になり得る。

でも——喧嘩に刃物は邪道だろ！

「だったら……拙者も！」

え……ちょ、暮葉さんもしかしてアンタ！

その時、暮葉は握りに手を移し、鞘から一期一振を抜きだしたのである。

ギリリと輝く鋭利な刃。明らかにバタフライナイフとは格が違う迫力。

まさに本物の日本刀。そんな本物を見た船木は——

「ほほほほ、ホンモノ！？ て、テメエ！ 日本刀は卑怯だろっ！」

「もきゅ、知らないとは言わせないので。日本刀だって……刃物なのですよ？」

こ、怖え……。

笑顔で言う所が余計に怖い。暮葉の事は絶対に怒らせないほうがよさそうだな。

下手をすればあの刀の錆になってしまふ。そんな刀の錆にされそうな船木は明らかにビビっていた。

冷や汗をダラダラと流し、顔面蒼白となり、その上足までガクガクと小刻みに震えている。

「あ、はわ、ああ……っ」

「もきゅ！ では……覚悟はいいですね？」

「は、はああ……あああああ母ちゃー……んっ！」

に、逃げた……あの強かった船木さんが一期一振にビビって逃げた！
いくら強いと言っても、やっぱりただの不良である。

……ていうか、刀なんて誰でも怖いモノだと思うけどね。

恐怖心を煽ると言う意味では今の作戦、間違いない成功だったろう。
暮葉は安心したように一期一振を鞘へと収め、満足そうな顔をして
俺の傍に駆けよって来た。

「やりました！ サシゴロになる前に相手が逃亡してくれたのです
！」

「さ、サシゴロって……」

意味わかる人いるんだろうか。ていうか俺も少しわからなかったぞ。
多分サシゴロとは刃物を持って喧嘩をするって意味だろう。

……おそらく、本職の方でも一部の人しか使わないと思う。

暮葉もよくそんな日本語知ってたな。何か漫画でも読んだのだろうか？

「さっ！ けーすけ様、先に進みましょう！」

「お、おう……」

まあ……いいのか。邪魔をするヤツを退けたんだから。

でもどうしよう。相変わらず永渕の居場所はわからないぞ？

——まあ、根気強く探すしかないか。待ってろみんな……絶対
助けてやるからな！

第47話、白陵No2（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「弱くたっていいだろ。誰がそんな事で文句を言うんだよ……」

伊吹「う、うっさい！ そんなの……っ！」

圭介「そんなのでいいんだよ。弱いからって、それでなんかの罪になるハズがないだろ？ 人間誰だってどこかは必ず弱いんだから。確かに努力で己を強くする事はできるけどさ、それでも弱さというのは誰にでも残るものだよ」

伊吹「け、けい……すけっ」

圭介「……それでも、どうしても強くなりたいってんならいい事を教えるよ。思いっきり泣くと……強くなれるらしいぜ？」

伊吹「圭介……圭介っ！」

圭介「……伊吹」

………

圭介「……という小説を書いてみたっ！」

千早「先輩のセリフが臭すぎて……そのっ、キザすぎます……っ」

あかり「流石千早、バツサリだな！」

葵「確かにお兄ちゃんの臭いセリフで恋に落ちる女の子なんて、葵以外にはいないよね！」

伊吹「ていうか……なんでヒロインが私なのよ！」

風紗「いくら伊吹編だからって……わ、私の出番がっ」

圭介「思いのほか酷評かよ！ 自信作だったのに！」

暮葉「けーすけ様！ それよりも本日の晩御飯何にしますか！？」

第48話、恐怖の男

結局——その後も俺達は永渕や人質の居場所を求めて、狭苦しく黴臭い工場内をさ迷っていた。

延々と続く古びた通路は、次第に俺達をイライラさせていった。

この工場は以外と広いのである。中々永渕達の居場所を突き止める事ができない……。

畜生。まだ明日の午後3時までには時間あるけど、このままだと今夜のアニメに間に合わない。

……いや、葵との約束。晩飯の時間に間に合わねえぞ。

皆を助けて葵との約束も守る。このままだとそれが出来ない……クソッ！

「全然……辿りつかないですねっ」

「ああ。ホントに永渕はここにいんのか？」

「それは間違いないです！ 魔力自体は物凄く近くに感じるのです、必ずここにいます！」

「とにかく、今は暮葉と感だけを信じるしかねえな」

こんな事になるんだったら、白陵のヤンキーを一人捕まえておけばよかった。

そうすれば、もしかすると永渕の居場所とそこまでの道を教えてくれたかもしれない。

でも、今更後戻りはできない。外では重原や三馬鹿が頑張っている。この中でも……伊吹や捕まった人達が傷ついている。

こんな所で後戻りなんてできねえ。もう二度と逃げたりなんかはしねえ。

「ぎゃあああああっ！ ああ！ や、やめてくれっ！ がはっ！
あああああっ！」

「もきゅ！ す、すごい悲鳴なのです……っ」

「しかもこの声、さっきの船木って野郎のじゃないか？」

なんだよ、一体どういう事なんだよ。

今の叫び声は間違いなく、さっき俺達と戦っていた船木の声である。だけどさ、そんな敵だった船木が叫ぶって色々とおかしくないか？ 人質が叫び声をあげるのなら許せないが、決してわからないわけではない。

だけど、永渕にとっては味方のヤツがどうして叫ぶんだ。俺達以外に戦えるヤツはいないハズだぞ？

「けーすけ様！ こっちです！ こっちから声がしたのです！」

「お、おい待てよ！」

俺は一足先に駆けていた暮葉を追いかける。

暮葉に追いつき並ぶと、やがて俺達二人は大きな扉の前に佇んだ。錆びた大きな扉……その向こうから響く船木の雄叫び……。

「ど、どうしますっ？」

「……開けるぞ」

俺達に残されている選択肢は前進あるのみ。この先に永渕も人質のみんなもいるんだ。

「あ、あの……けーすけ様っ！」

「ん？」

「い、いえ……なんでもないのですっ」

暮葉は少し恥ずかしそうに俯き、その上左を向いて俺から視線を逸らしていた。

その後はただ口ごもるのみ。何かを言いたそうではあったけど……。でもその直後、強い意志を感じる表情の暮葉が顔を上げ、俺の事を見てきたのである。

「暮葉？」

「行きましょう！　けーすけ様！」

「……おう！」

俺は暮葉の言葉に大きな声で返事をし、そしてガシッと勢いよく取っ手に手を掛ける。

ここを開ければ敵陣の中央。そして捕まってしまった人質も沢山だ。……俺はその人質を助けなきゃならない。俺のせいで捕まってしまった人質を。

そして助けて、全ての責任を取らなきゃいけないんだ。その想いを胸に……。

——遂に重たい扉を開け、俺達は本当の戦場へと足を踏み入れ

た。

「伊吹！」

「皆さんっ！」

俺は伊吹の名前を、暮葉はみんなの事を叫ぶ。
だが、そこには思わず息をのんでしまうような、衝撃的な光景が目の前に広がっていた。

「あ、あれ……藤島君に木下君ではないかっ？」

「……け、圭介……っ？」

「うそっ、圭くん！ やった助かった！」

「圭介が来たって……ほんとなんだよな！？」

浅間部長、伊吹、小坂、あかり……。

そしてその前には船木をボコる永渕の姿がある。

オカシイ事に人質達はチェーンで縛られていたのだ。オイオイ普通は縄とかだろ！

こんなくだらねえ作戦で、どんだけお金かけてんだよ白陵の不良どもは！

……しかも、人質達はみんな明らかに怪我をしていた。

浅間部長なんてぶん殴られたような跡が変色してるぞ。ホントに大丈夫なんだろうか？

そんな事を思っていたその時――

「アア？　へへ……やっとお出ましのようだなあ」

「永渕……！」

永渕がようやく俺達に気付く。今まで気付かなかったあたり、よっぽど船木をボコるのに夢中になっていたのだろうか。先程までボコられていた船木は見事なまでに血だらけだ。

「うう……な、永渕さ……がはっ！」

永渕の名前を呟く船木の首筋に、永渕は踵落としを打ち込んだ。色々ありえねえだろ……永渕、アイツ外道すぎるだろ。

大体、船木はてめえの仲間だったのに、なんててめえは船木をボコボコにしてんだ。

船木は、さっきの永渕の一撃で完全に伸びてしまった。白目を向き口からも流血。

明らかに船木は人質達よりも重傷を負っていた……。

「てめえ！　なにやってんだよ！」

「あぁん？　敵前逃亡をしたボケに制裁加えてたんだよ」

「てめえ……なんだって友達にそんな事ができるんだよ！」

「友達？　フツ、俺に友達はいねえ。ただし手下なら山ほどいる。この船木も俺の手下の一人だあ」

友達はいないけど手下はいる……なんだよそれ、ただの寂しいヤツじゃねえか。

しかも、友達以外に唯一自分について来てくれる存在にさえ、そんなふざけた真似をすんのかよ。

……この大馬鹿野郎は！

「ふざけんじゃねえよてめえ！ たとえ手下だとしても、ちょっとした失敗でそこまですんのかよ！」

「そうですよ！ 今時軍隊でもそこまではシバかれないのですよ！」

少なくとも、暮葉が所属するアルファ隊ではそうなのだろう。

世の中先輩軍人にシバかれる軍隊なんて、山ほどありそうなものが……。

でも、それでもあの永洌は許せねえ。船木のヤツ気まで失ってんじやねえか！

今までアイツがやってきた事に加えて、余計に腹が立ったぞ！

「なに必死になってんだかなあテメェら……さ、んな事より地獄のショーでも初めっか？」

そんな事を言いながら、永洌は拳を構えて臨戦態勢に入った。

そのポーズが示す意味はただ一つ。

俺も永洌同様拳を構え、永洌の事を強く睨みつけた。

……つまり、ポーズが示す意味とはこういう事なのである。

「……！」

「おお怖え、滅茶苦茶怖えっ！ その顔最高じゃねえかよ、やっぱ暴力魔のてめえにはその凶悪な顔がお似合いだな！」

「……誰が」

「あ？」

「誰が暴力魔だって？」

俺は永渕の暴力魔という一言について訊き返していた。

——暴力魔、いつの間に広がっていた俺の異名の一つ。

あかりも最初は俺の事を散々暴力魔って言っていた。

決して名誉があるわけではない。むしろ不名誉な俺の異名……。

俺はそんな異名を言いやがる永渕に対し、いつのまにか文句をぶちまけていた。

「ふざけんなよ！ 確かに俺はてめえをぶん殴ったし、てめえの仲間さえも血だらけにした……そんな暴力魔だよ。だけどてめえ自身はどうなんだよ？ 過去に伊吹を襲つたというだけで俺にやられて……その復讐の為だけにこれだけの大人数に暴力を振るって、挙句の果てには失敗した仲間にまで暴力だと？ ……俺は確かに俺のせいでみんなを傷つけた。たった一人の幼馴染さえ守れなかったクズ野郎だ。でもな、みんなが傷つく主な原因はてめえが暴力を振るうからだろ。てめえが手下に暴力を振るえって命令するからだろ。結局俺は何が言いたいかって言うとな……てめえが一番暴力魔なんじゃないかって事だよ！」

今まで溜まっていた事を全て解き放つような——そんな俺の叫び声。本当にスッキリした——胸中に秘めていたものを解き放つ。

確かにこれほどスッキリするものはない。

きっとそれは永渕も一緒なはずだ。ただ永渕の場合は解き放つ方向を間違っていた……。

そんな間違っている永渕は俺の叫び声に対し。

「ハッ、くだらねえ……そんなんでハイやめますなんて言うほど、テメエの敵は甘い存在じゃねえんだよ。必ずテメエは殺してその

女も滅茶苦茶に犯してして、人質も男はブツ殺して女は俺の肉奴隷になってもらう。復讐もできるし最高の樂園パラダイスも出来上がる……テメエの説教ごときで俺がコレをやめると思ってたのかあ！　アア！？」

「やっぱり……てめえはそうやって今まで人を傷つけてきたんだな。最低だ……っ」

俺は俯くも、両方の拳には力を入れながら言い放つ。

拳……いや、次第に全身に力が入ってゆく。

永渕に対する怒りがもう、押さえられないくらいに表面化してゆく……。

「最低で結構！　俺はテメエとテメエの周りの世界をぶち壊す為に動いてんだ！　その目的が達成されるとは俺にとっちゃあ……最高に嬉しい事なんだよォ！」

「……だったら、そんな最低野郎を止めてやるよ！」

「止められるモンなら止めてみろや！　藤島ア……止めたきゃ俺とタイマン張って勝ってみやがれエエツ！」

タイマン——簡単に言うとな不良用語で1対1の喧嘩の事である。

なんでも学校やグループの番長、大将同士が抗争の最後にタイマンでケリをつける事が、不良の間では美徳なんだとか。まあ確かにタイマンは楽だ。だって……人数を気にしなくて済むからな！

「わかった……勝ってやるよ。そしててめえを止めて、ここにいる全員を必ず助け出したやる！」

「やれるモンならやってみろよ……」

不敵な笑みを浮かべ、指の関節をパキポキと鳴らしつつ永洵は俺へと迫る。

——こっから先は、俺と永洵の1対1の勝負。だとしたら……
暮葉は！

「暮葉！ お前は人質を助けてくれ」

「もきゅ！ で、ですがけーすけ様は！？」

「俺と永洵の勝負には手を出すな。それよりお前は人質を助けてみんなを誘導してくれ。みんなと一緒に逃げてくれ」

それもすごく重要な役目である。ていうか、ここまで来れた暮葉にしかできない大切な役目なんだ。

とにかく人質を戦いには巻き込みたくはない。

俺達の戦いに巻き込まれて怪我をされるなんて、そんなの一番嫌な事なんだ。

「……わかりました！ けーすけ様、やられちゃ嫌なんですからね！」

しばらく思い詰めた顔で黙りこんだ暮葉は、ようやく口を開いて了解してくれた。

しかもやられちゃ嫌……か。こんな時に何考えてるんだかだけど、今の可愛くてよかったな。

……さて、暮葉が人質を安全に救出する為にも。人質を安全に逃がす為にも……。

そして、この事件のすべてを終わらす為にも……。

俺は目の前のクソ野郎をぶっ倒す！

第48話、恐怖の男（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「突然だが、やっぱりギャルゲーは素晴らしいな」

圭介「あ、どうしてだよ？　確かにすばらしいけどさ……」

大吾「だって現実の人気アイドルは歳は取るし、後になって当時のファンが絶望するような姿で出てくる事が多い……それに対し！　ギャルゲーのヒロイン達はいつまで経っても輝かしい姿を保っている！　そのギャルゲーが存在する限り、ヒロイン達が消える事はない！　いや、ギャルゲーが消えてもヒロイン達が存在したという事実は決して消える事などない！」

圭介「つまりお前は何が言いたいんだ？」

大吾「フッ……つまり、現実なんてクソゲーだ！」

圭介「現実には確かにクソだよな。はぁ……彼女欲しいっ」

小坂「大吾……キモッ」

伊吹「亜紀、もういいじゃん……大吾なんていつもあんなもんよ」

暮葉「そーですよ！　けーすけ様が変態なのと同じで、大吾さんのアレももう二度と変わらない事だと思うのです！」

圭介「変態は余計じゃっ！」

第49話、男なら拳で語れ！

永洌は滅茶苦茶強い。何時間か前の一戦で思い知った。

一撃しか喰らっていなかったが、あの動きと狙いの正確さは素人が打てるものじゃない。

永洌の奴、何か格闘技でもやって鍛えたのだろうか……まあ、そんな事は関係ねえ。

とにかく大事なのは永洌を止める事。

たとえ勝てないとしても、人質が逃げるまでは俺が永洌を足止めしなければならぬ！

そうすれば、逃げた人質も次の襲撃に備えてくれるだろう……。

……とにかく今重要なのは永洌を止める事。1分でも長く永洌を止めてやる。

いや、出来る事なら永洌をここでぶっ倒してやる——！

「うおおおおおおおおおおおおおおっ！」

比較的広いこの空間^{スペース}で、俺は拳を振り上げ永洌への突撃を仕掛ける。俺には暮葉のように風を操ったり、明智のように炎を操る事はできない。

キスをすれば強くなれるが、そんな相手など存在するわけがない。

即ち、俺は丸腰の状態で戦う事しかできない。それでも……どんなに弱くても俺は戦う！

十分に間合いを詰め、俺は右拳を放った——

「てえっ！」

「ハハッ！」

刹那、笑い声をあげた永洌。
そこで俺の目は見開かれる。

何故永洌はこんなにも余裕なんだろう。俺には全く理解ができなかった。

しかし次の瞬間、永洌はひらりを身体を右へ揺らし、俺の精一杯の右ストレートを回避したのだ。

そして次の瞬間、ストレートを空振った俺に向かってクロスカウンターが飛んできた。

「ア……！」

永洌の拳は何の躊躇もなく、俺の鼻柱に容赦なく打ち込まれる。
痛みに怯んだ俺に、永洌が追撃を仕掛けてくる。

ドゴ！バゴ！全身の至る所を何発もぶん殴られた俺……とりあえずこのままヤツに近くににいるのは危険と判断し、後方へと勢いよく跳躍してみせた。

「はははっ！ 甘えんだよ、テメエの攻撃はよお！」

「くッ、てめえ……っ！」

再び俺は接近し、今度は廻し蹴りを仕掛けたみた。

だが、永洌はぴょいっとジャンプをしただけで廻し蹴りを避け、着地と同時に拳を放ってくる。

それが、俺の顔面に野球ボールのように飛んできた。

「が、あっ！」

打ち込まれた時の衝撃と痛みにより、思わず俺は後退りをしてしま

う。

……畜生、いくら身体か丈夫だとしても、それは長期的に見てのものだ。

打たれた時の一瞬は普通の人と変わらない。それ相応の痛みを感じるんだ。

ただ俺が普通の人と違うのは、その痛みに身体が耐えられる事。そしてすぐに痛みが消える事だ。

でも、結局ぶん殴られたりした瞬間は、普通の人が感じるのと同じくらい痛いのである。

「オラァ……もったかかって来いよ。テメェにはもう少し付き合ってもらわなくちゃあ……割に合わねえんだよォ！」

「く、そオオオオオオオオオオッ！」

とにかくダメージを与えろ。そうすれば永渕のバランスと自信は崩れるハズだ。

とにかく——ヤツに一発でも与えて、なおかつダメージを与える事ができれば！

そう考えた俺はタックルを試みた。だがひらりを永渕は俺を避け。

「あゝっ！」

——刹那、衝撃が俺の尻を襲った。

顎から床へと落ちてしまい、その時の衝撃のせいか脳が揺さぶられる。

畜生……俺は何をされた。多分ケツを蹴られたんだろうが……クソ、頭が。

「フハハァーッ！」

「……！」

その時、永洩が踵を突き出しつつ降下してきた。
おそらくはジャンプをし、その勢いで俺を踏みつけようとしたのだろう。

咄嗟に危険を感じた俺はゴロゴロと床を転がり、永洩の踵を回避はしてみせるも、永洩はすぐに次の動作へと移り右足をぶんっ！と振ってくる。

俺はその足を左腕でガード、ミシリという嫌な音は響いたが……こめかみに当てられるよりはマシだ。

「オラオラ！ ジタバタしてんじゃねえぞ！」

「ぐっ！」

ジタバタと地面をゴキブリのように這い、なんとか距離を取った俺は立ち上がる事に成功する。

だが、目の前には既に拳を構えた永洩の姿がある。
この距離からじゃ避けられねえ——クソ、どうすれば！

「——永洩晃！」

——！？

……い、今……確かに女の子の声が聞こえた。

そして何より、永洩の拳は俺の眉間目前で止められたのだ。

永洩は声がしたほうに釘付けである。

そんな状態で永洩が攻撃をしてこないと判断すると、俺も永洩と同

じ方向を見てみる。

そこには、工場内のどこかで拾ったのであろう鉄パイプで武装して、伊吹の姿があった――

「い、伊吹……っ」

「……アア？」

俺は驚き永渕も機嫌の悪そうな顔をする。

「……動かないで。あんたを……これで叩くわよ！」

おそらくは脅しのつもりなのであろう。

ボロボロの伊吹は震えながらも、これ以上俺を攻撃すると鉄パイプで叩くと脅しをかけていた。

歯を食いしばり、頑張って恐怖を我慢している伊吹。

……だが、苦勞して永渕の前に立つ伊吹に対する永渕の反応は。

「……フツ、相変わらず強がりな女だ。そういえば他の人質がいねえな？」

「暮葉が……助けてくれたのよ。私はただ戻ってきただけ」

そっか、暮葉のヤツ……今の間に全員を逃がす事に成功したのか。手際がいいというか、きつと一期一振を使ったんだろうな。

アレなら確かにチェーンを簡単に斬る事ができる。

人質達も捕まってからそれほどの時間が経っていないのか、少しは体力や思考力に余裕があったのだろう。でもなんでだよ……なんで折角逃げれたのに、伊吹はここに戻って来ちゃったんだよ！

「逃げる伊吹、すぐにこっから逃げる……！」

「へッ……戻ってきた上玉を、逃がすわけねえだろうがよ」

永渕はパキポキと拳を鳴らしながら、伊吹へと徐々に接近してゆく。伊吹は明らかに顔色が悪いものの、それでも齒を食いしぼり鉄パイプを構える。

アイツ——あんなに怖がってんのに、それでも戦うつもりなのかよ！

「やめろ……伊吹も永渕もやめろ……っ！」

「……ごめん。私は……あんた一人を放っておけなかったから」

「そういうこったあ。俺にも前進って選択肢しかねえしなあ」

畜生……このまま突っ込んだところで、永渕に強烈な一撃を貰っちゃうのは安易に予想ができる。

でも、だからってこのまま伊吹を放っておいていいワケはない。

助けなきゃ……無理してあの場に頑張っ立っている、伊吹を永渕の魔の手から！

とにかく他の事は何も考えるな。永渕を止めて伊吹が逃げる時間を稼ぐんだ。

そう心に決め、両方の拳を握った……。

「……！　ぶ、はあっ！？」

——刹那、どういうわけか永渕が崩れ落ち、地面へと落ちた永渕は顎を叩きつけていた。

その時に唇でも噛んだのだろうか、痛そうに起きあがった永渕の口

元からは血が出ている。

でも、永渕は口元よりも後頭部を押さえている。何故なら永渕は後頭部を攻撃されたからだ。

当然位置から言って伊吹のハズがない。だったら他に誰が居るだろうか……正解は。

「船木……テメェッ！」

「アヒヤヒヤッ！ 後ろくらいしつかり見とけよ……永渕さんよお！」

そこには、血だらけながらも角材を持ち構えている船木の姿があった。

痛がる永渕を見て船木は、どういうわけか口元が笑っている。

……どうなってんだ。確かに散々制裁を食らっていたけど……アイツら仲間じゃなかったのかよ？

しかも、船木は永渕が完全に体勢を立て直す前に、その角材を勢いよくぶん回した。

永渕は右腕でそれをガードはしてみせたが、永渕のミシミシという痛々しい音が俺にも聞こえた。

「ぐっ！」

「オラァ！ テメェらはこっから逃げな……永渕倒すのは俺だからよお！」

永渕を倒すのは俺――

ちよっと前の船木からでは、考えられないようなセリフである。

それでも船木はそのセリフを、なんともまあ嬉しそうな笑顔で言い放ったのである。

「テメエ……どういふつもりだ船木いっ！」

「アヒヤ！ 決まってるだろオがよ。よくもこの俺の端整な顔を傷つけてくれたな……第一テメエがN o 1なんて俺は認めてねえ。だからテメエを潰して俺が白陵のN o 1になってやんよ！」

「謀反ってわけか……上等だ。まずは裏切り者からブツ殺すぜ！」

その言葉を最後に、いよいよ戦いの火蓋は切って落とされる。

船木も永洵もほぼ同じタイミングで、床を蹴りあげ一気に間合いを詰めたのである。

そこから先は言うまでもなく——船木と永洵の死闘^{デスマッチ}であつた。

「チッ！ よくそんなボロボロの状態でここまでやれるな……」

「アッヒヤヒヤヒヤ！ 伊達にN o 2名乗ってねえんだよ！」

「チッ、ほざいてんじゃねえぞ！ N o 1とN o 2じゃ圧倒的な差があるって事……たった今思い知らせてやるぜえっ！」

「上等だあ！ だったらテメエにもN o 1に勝てる可能性を秘めてるのは、N o 2だけだつて事を教えてやんぜエエッ！」

すげえ……本気のカチバトルだ。永洵もすごいが船木もすごいぞ。さっきあれだけボコボコにされたつてのに、永洵とほぼ互角の勝負を展開している。

体力全開だった俺でさえ、さっきまで散々ボコボコにされたつてのに……。

確かに、あれだけの差しかないんなら……船木のヤツ、永洵に勝て

るかもしれねえな。

「圭介っ！」

その時、突然伊吹が俺の右手をガシッと握ってくる。

その目は何かを訴えているようで、俺は思わずドキッとしてしまった。

……なんなんだよ。今真剣な時だったのに余計な事を考えるなよ、俺。

「な、なんだ？」

「逃げるわよ、あの船木って人に任せよう」

「で、でも！」

「いいから！ とにかく走るっ！」

「おわあっ!？」

永渕と船木が激闘を繰り広げる中、俺は伊吹に引っ張られる形で戦線を離脱した。

第49話、男なら拳で語れ！ （後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さて、本日は作者の友人からの苦情を紹介！ もう特に目的のない学園コメディーモノ飽きたんだけど、別なモン書けやコラッ」

大吾「確かに、処女作からず〜っと学園モノ執筆してりゃマンネリ化するよなあ〜。魔法とか超能力とかファンタジー的要素入れて誤魔化してるけど」

圭介「じゃあ結局何すりゃいいんだよ……」

大吾「そうだな……特に目的がないってのが問題なんじゃねえか？ というわけで僕は、最初から主人公達にはある目標があるストーリーを提案する！」

圭介「おおソレいいな！ 例えばどういうのだよ!？」

大吾「プラスバンド部の存続を賭けたコンクール対決ってのどうだいエビ？」

圭介「むがあ〜！ エビって呼ぶな！ それってただのパクリじゃねーか！」

大吾「んん〜。じゃあ不幸体質の主人公の家にダンボールで神様が送られ——」

圭介「兄さん、それもパクリですよ！ どーせ神様の一人称が妾な

んだろ!？」

大吾「じゃ、じゃあ貧乏な主人公が自分そっくりの人と会って、その後色々あって影武者のバイトを――」

圭介「うにゃ! 失敬、失敬ですよ! これだけパクリ連発ってゆるソフトに失礼だろーがっ!」

大吾「うるせえ! 佐○みたいな妹が欲しいよぉー!」

圭介「馬鹿野郎! 佐○もいいけどやっぱりひ○ただろ!」

大吾「大体圭介は最近の話ばかりして。僕はちゃんとぶ○ぼんからプレイしてるんだぞ! 僕はエビから攻略したんだからな!」

圭介「俺もぶ○ぼんから初めてぶ○くすもプレイしたわ! ちなみに俺は須○たんを初めに攻略したぞ!」

浅間部長「……これ、ネタ全部わかる人いるんだろうか?」

第50話、戦いの結末は…… 前編

——伊吹に引っ張られるまま、工場内を移動する。

しかし、散々永渕にボコボコにされ、体力も失っているのだろうか。伊吹は途中で息を切らして立ち止まってしまった。

狭い通路に黴臭い空間、ゴミや工具が廊下の端に散乱する……廃工場の狭苦しい通路。

さつき、俺と暮葉が通って来た場所である。

「はぁ！ はぁ！ はぁ！」

伊吹は苦しそうに荒々しい呼吸を繰り返す。

よっぽど無理して走っていたのだろう。おそらく、もう伊吹の体力は限界に近い。

「大丈夫か、伊吹？」

「わ、私は平気よ。それよりあんたも随分殴られてたけど大丈夫なの？」

「俺トラックに轢かれても平気なんだぜ？ 永渕の拳とか全然効かねえから」

「そう？ 結構痛がってたような気がするけど……」

「き、気のせいだ！ あんな痛みどうって事ねえから！」

「結局痛かったのね……っ」

うわぁ、伊吹さんがジト目で俺を見ている。そりゃあまあ、普通はぶん殴られたら痛いよ。

いくら俺だって鋼の身体をもってるワケじゃないんだから。

でも、こんなの伊吹が味わった痛みなんかと比べれば、まだまだ甘いもんだろう。

永渕から味わった痛み。俺から味わった痛み……俺から？

……そうだ、今丁度俺と伊吹は二人きりだ。だったら昼の事を謝るいい機会なんじゃないか。

善は急げだ。早く伊吹に昼休みの事を謝ろう。

「……なあ、伊吹」

「なによ……圭介」

俺が伊吹に声をかけ伊吹もそれに答えると、この場に沈黙が続いてしまう。

なにしてんだよ俺、とにかく謝れよ。

許してもらえとは思っていない。だけど……土下座くらいはしないと。

だから俺は——地べたに手をつき頭を下げ——

「ごめん！」

「え……ちょ、あんた……なにを？」

「あの時、俺は伊吹を好みのタイプって言った。伊吹が折角誤解を解くために恋人のフリをしてくれるっていうのに、それを勘違いして無理だとか勝手な事を言ってしまった。本当にごめん！俺を……ぶん殴ってくれ！」

やべえ……これはマジでぶん殴られるかもな。
しかも、いつもの冗談では済まされなくらい強烈な一発を。
でも、悪い事をしたのは俺である。それでぶん殴られるんなら何の
文句も言えない。

「ちょ、ちょっと……頭上げなさいよっ、なにも土下座なんかしな
くても……っ」

しかし、帰ってきた伊吹の反応は予想外のものであった。
何故だか彼女は土下座をしている俺に対し、心配をする言葉をかけ
てきてくれたのである。
……どうしてだよ、心配される権利なんざ俺にはないのにっ。

「……………」

「……わ、わかったわよ。あんたがそのままでもいいならそのまま
いい……………」

そう言った伊吹は次の瞬間——自らもしゃがみ込んで、俺の肩に優
しい手を置いてくれた。

俺は伊吹の予想外に行動に思わず反応し、顔をあげてしまった。
視線の先には、今にも泣きだしそうな伊吹の姿があった——

「い、伊吹……?」

「これなら、嫌でも顔をあげちゃうでしょ?」

「な、なんでだよ……」

「わ、私もその……圭介はいつもの冗談を言っただけで、無理とかそういうのもあんたの優しさからだってわかってる。それなのにわけもわかにないで逃げちゃって、勝手に永渕に捕まって……私のほうこそごめんなさい！」

なんだよ、珍しく素直だと思ったら謝罪かよ……。

謝るなよ……ほとんど俺が悪いのに、伊吹なんて悪い事はしていないのに。

伊吹は犠牲者だ。俺や永渕にいいように振りまわされた……ただの犠牲者なんだ。

その犠牲者が加害者に謝るなんて。俺はただの加害者だってのに。

「いや、伊吹が謝る事なんてないよ。俺が過去に永渕をぶっ飛ばしたからこんなことになっちゃった。なにより、今回は俺が無意識に伊吹を傷つけるような事を言っちゃった」

「……っ、やっぱあんたって鈍感ね！」

うう……怒鳴られてしもうた。

伊吹には何度も言われ、黒木にはそれが理由でぶん殴られたんだが。俺ってばそこまで鈍感だったのか。俺、色々な意味でダメ人間だな……。

「ごめんなさいっ」

「……っ、だあぁもう！ 謝るの禁止！ 折角助かったんだからもう喧嘩はここまでよ」

あらら、伊吹に謝るのを禁止されてしまった。しかも、この時の伊吹はいつもの伊吹に近い表情をしていた。

……いや、微妙に違う。いつもと違って何だか爽やかな印象を受ける。

どういう事だ。珍しく伊吹が本当に可愛い女の子に見える……。

「ゆ、許してくれるのか？」

「ま、まあ。ばか圭介にしては謝るのが早かったから。と、特別よ特別！」

「……………」

頬をほんのり赤く染まっていたが、言っている事はいつも通りで、しかも俺から視線を逸らしていた。

はたして、俺は本当に許されたんだろうか？

確かに伊吹はいつものツツパリ伊吹ちゃんには戻ってくれたが……。

「ハア、ハア……へへッ、なにハッピーエンドっぽい事しちゃってんのよテメェら」

「……………!？」

その時、俺らの目の前に信じがたい事が起こってしまった。

汚れた制服に殴られた跡が沢山の顔面、口や鼻からは流血しており息も切れている。

ボロボロではあるものの、相変わらず凶悪で不敵な笑みを浮かべる永渕の姿……。

ここに永渕がいるって事は……ふ、船木は？

「な、なが……ぶちっ？」

「てめえ……船木はどうしたんだよ！」

「ああ？ ククッ、死にかけたゴミを潰すのにそこまで苦勞はしねえよ」

まさか、船木の野郎がやられたってのか……。

さっき見た時はほぼ互角、どっちが勝ってもおかしくはなかったのに。

永渕……やっぱりアイツ、ただのヤンキーにしてはバケモノみたいに強い。

俺らが中1の頃の話だから5年くらいかな。一体5年間で何があったんだよ……！

「け、圭介……っ」

伊吹は震えている。もう伊吹はさっきまでのように強気にはなれない。

彼女は永渕に怯え、小刻みに震えながら後退りをする。

ただし、口では俺の名前を言っていた。

どうしてそこで俺の名前なのかはイマイチわからんが……とにかくこうなったら手段は一つ。

「大丈夫だ伊吹ちゃん。藤島を殺した後にたっぷり相手すっからよ」

「……ッ」

「怖がんじゃないやねえよ……俺、経験は豊富だからよお？」

永渕が下心が丸見えなセリフを吐いた直後、俺は伊吹を庇う様に前

に立つ。

そうやって永洩の前に立ちふさがるのである。

「させねえよ……指一本触れさせねえ！」

「ハッ……テメエは伊吹ちゃんの王子様のつもりかよ？」

「王子様？　ハッ、確かにそれはいい響きだな。でも、俺は伊吹の王子様なんて大層なモンじゃねえよ」

「だったらなんだよ！　言ってみろやコラアッ！」

俺は王子様でもなければ勇者でもない。武士なんてもんでもなければ騎士でもない。

そう——俺にカッコいいジョブなんてものはない。

ただ、それでも一つだけ確実に言える事がある。

それは昔からそうであって、これからもその事実は永久に変わる事がないもの——

「俺は伊吹の幼馴染だ！　伊吹は俺にとって大切な存在なんだよ！」

「け、けいすけ……っ」

「そんな大切な存在を傷つけるてめえの腐った根性を、今ここで叩き直してやる！」

永洩は船木との戦いで傷ついている。しかも少しばかりか疲れているようにも見える。

という事は……今なら通常モードでも永洩に勝てるかもしれねえ。口づけなんて言う相手とっても悪いし、何より恥ずかしすぎる事を

しなくてもいいかもしれない！

「おもしれえ雑魚だな。いいぜ、やれるもんならやってみろよ？」

「永洵……」

俺は、音もなく両方の拳を握りしめた。

永洵もボクシングのように構え、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべる。

「さあ来い暴力魔！ もう一回俺を倒してみろよ……今の高校でも皆に嫌われるがいい！」

「永洵 イイイイイイイイイイッ！」

叫んだ俺は、永洵に向かって全力で走る。

永洵は後ろを下がる事はなかったが、右手をズボンの中に手を突っ込んでいる。

ガサゴソとズボンの中をいじくる永洵。なんだ、アイツは何を企んでいる？

そう思った——刹那、永洵はズボンの中から伸縮式の警棒を取り出した。

あんなのをズボンの中に隠していたのか……って、無駄な事を考えている場合じゃねえ！

「ハッハッ！ オオオオラアアッ！」

永洵は一気に駆けてきた。念の為に拳を顔の前に構えておくが、その判断は正解であった。

十分な距離まで近づいた瞬間——俺の耳にビュン！という風を切る

音が聞こえる。

音の正体は当然、あの警棒が振られた音であろう。

「ッ！」

こめかみを狙った一撃を左腕で防ぐと、なにやら鈍い音が立つ。

……まあ、普通なら骨にヒビでも入りそうな一撃である。

でも俺は違う。俺の体質ならこんな一撃——どうってことねえんだよ！

「油断してんじゃねえぞ！」

「ご、アッ！」

思い切りのいい膝蹴り。鋭利な膝が痛々しく俺の腹部を突く。

いきなり襲ってきた腹部への痛みに、思わず顔を歪めてしまう。だがたったそれだけだ。

永渕の攻撃自体は確かに高いし、不良とは思えない腕っ節の持ち主である事は確かだ。

だけど……所詮永渕はただの人間である。

増してや背負ってるものなんてなにもない。自分の為だけに戦うしようなないヤツだ。

——俺にはそんなヤツの攻撃なんぞ、全然効かねえッ！

「うおおおおおおおおおっ！」

「ご、ばあっ——！」

腹を抱え込んでいた為に低くなっていた俺の頭。

それを一気に上へ突き出し、永渕の顎へ頭突きを仕掛ける。

ゴン！という衝撃的な轟音が鳴り、さらに永渕の口からは白くて小さなモノが飛び出ていた。

コイツ、今の一撃で前歯でも折ったのだろうか？

「うう……あつ！ て、テメエツ！」

目を見開き驚いた表情で俺を見る永渕。

ヤツは俺を見てはいるが、どんな素人でも攻撃を当てられ程に隙であつた。

永渕晃……コイツは多くの人の心を踏みにじり、なにより大切な幼馴染を傷つけた。

俺はコイツが絶対に許せねえ。

たかが復讐という目的だけで、全く関係ないヤツまで巻き込みやがって……

皆が感じた恐怖や悲しみ、そして痛み……。

「全てを思い知れ……」

一瞬で間合いを詰め、懷奥深くへと突っ込む。

そして、俺の最大の武器である右拳に全力を注ぎ込み。

「このクソ野郎がアアアアアアアアアアアアアッ！」

——
咆哮ほうこうと共に、俺は全てを賭けた全力の一撃を放った。

ドン！と、顔面に打ち込んだ拳の勢いで永渕を薙ぎ倒す。

埃まみれの床に倒れた永渕はピクリとも動かない。

汚い床に転がる永渕を見捉え、荒々しく乱れた呼吸を呼吸を整えながら——

「もし、また伊吹や皆にちよつかいを出すってんなら……またこの手でぶん殴ってやる！」

拳を突き出した俺は、倒れた永渕に確かにそう伝えた。

永渕にこの言葉が聞こえているかは微妙だけどな。

とにかく、永渕を倒した事によって全てが終わった。

今回のふざけた騒動。そして、おそらく俺の高校生活もここで……。

第50話、戦いの結末は…… 前編 （後書き）

後書きトークコーナー

純奈 「ぶっちゃけクソ介ってテンプレ主人公すぎるよね！」

圭介 「は、なんで？」

純奈 「バカだし時々ネガティブだし、でもヒロインの為に奔走しまくる上に喧嘩はそこそ慣れていて、臭い台詞が得意で……ほーらテンプレ主人公だよ!？」

圭介 「悪かったな特徴なくて……」

純奈 「そうだよ! というわけで今日からキャラ変えようよ!」

圭介 「どういう風に？」

純奈 「とりあえず……青いツナギでも——」

圭介 「待て待て待てエッ! 俺はどこの自動車修理工だよ!？」

純奈 「だったらイケメンになって余計キザなセリフを言って。そして可愛い後輩の男の子と——」

圭介 「それなんてBLアニメ!? しかもイケメンになれとか無理だろ!」

純奈 「だったら気弱になってみれば? すると肉食系のイケメン男

子がクソ介をバックから――」

圭介「生駒……お前、腐女子にでもなっちまったのか？」

第51話、戦いの結末は…… 後編

「おお、圭介と国宗さんが帰ってきたよ！」

「ふう……今回もまた、藤島君に助けられたな」

ようやく工場の外に出ると、そこには割とピンピンしている重原やボロボロの三馬鹿。

そして、救出された人質達や暮葉の姿もあった。

……俺はあの後、永渕をその場に放置しておいて、疲労でマトモに動けない伊吹をここまでおぶってきた。

背負うまでにちよつと揉めたが、結局はこうなってしまったのである。

しかも、伊吹は一度背負うと眠たそうな子供のように静かであった。

「けーすけ様ああ！ ご、ご無事なのですか！？」

「圭くん！ 伊吹！ 大丈夫！？」

「圭介！ あの坊主アタマに散々殴られてたけど、平気なんだよな！？」

暮葉に小坂にあかりが駆け寄ってくる。

ハハッ……伊吹だけかと思いきや、俺も心配されていたんだな……。

「け、圭介……っ。そ、そろそろ降りるっ」

「え？ お、おう！」

流石にみんなの前だと恥ずかしいしな。俺は姿勢を低くし、伊吹を背中から降ろした。

それでも、若干小坂の顔がニヤニヤしているのが気になるが。あと、なんであかりは不機嫌そうなんだ。

やっぱり永渕と殴り合いなんかしたからであろうか？

「ねえ伊吹、ホントに大丈夫？」

「わ、私は別に平気よっ！ それより亜紀は平気なの？」

「うん。あたしも怪我自体は大したことないから」

笑顔なあたり、小坂は本当に大丈夫なのだろう。

よかった……確かに小坂は人質の中でも一番軽傷っぽいしな。

問題はあかりだな。さっきから苦しそうにお腹を押さえているし。

「あかりは大丈夫なのか？ 腹押さえてるけど痛いのか？」

「気にするな。ちょっと殴られただけなんだからな。あたいは別に平気なんだからなっ」

「平気ならいいけど無理だけはするなよ」

「あっ……ありがとうっ」

恥ずかしそうに顔を伏せつつも、彼女は俺にお礼を言ってくれた。別にお礼はいらなかった。ただ、わかってくれるならそれでよかった。

とにかく、あかりはいい子だ。だからこそ無理はして欲しくないんだ。

無理のし過ぎで倒れたのがちょっと前の話だな。

「それよりけーすけ様は大丈夫なのですか！？ お怪我はないですか！？ 無理とかされてないですか！？」

最後に暮葉、場合によってはあかりよりも手間のかかる子である。その理由はご覧の通り、暮葉はやたらと心配性だからだ。

「暮葉も心配性だなあ……俺は何発殴られたって平気だって何度も言ってるだろ？」

「で、ですけど……ッ！」

「だから心配し過ぎだよ。永渕結構弱かったし！」

「……………」

あ……あれ、なんで皆さんジト目で俺を見ているんですか！ そりゃあ確かに、永渕がすごく弱かったというのは嘘だけど。

「スミマセン、調子乗り過ぎましたアッ！」

「……ぷっ！ あっははははははは！」

エエッ！ ちよ、今度は伊吹さんが大笑いし始めた！

それに釣られてあかりや暮葉、小坂とか後ろの男共まで笑い始めたぞ！？

ちよっと待て、俺そんなにおかしい事した！？

「圭介っ！」

「ん、どした？」

機嫌よく、俺の僅か50cm手前に飛び出してきた伊吹に訊き返すと、伊吹は嬉しそうな笑顔を浮かべる。そして、そのまま唇を動かして――

「……
ありがとう」

一生懸命な、たったの一言なのに心がこもっているお礼を言った。それも、中学のあの一件以来中々見せてくれなかった、満面の笑みで――

「そうだな……圭介、ありがとうな！」

「ありがとう、圭くん！」

そして、伊吹に釣られてなのか、みんなが俺にThank youを言ってくる。

あかりも伊吹のように満面の笑み、小坂までもが機嫌の良さそうな笑顔を浮かべていた。

「僕もお礼がまだだったね。ありがとう藤島君、おかげで助かったよ」

「圭介が頑張ってくれたから戦いは思った。俺からも礼を言うよ、ありがとう」

「お、お前ら……」

みんなが俺にありがとうを言ってくる。

その言葉をただ受け取る俺。なんだろう……胸のあたりがふわふわして落ちつかないな。

こう、なんというか……言葉の一つ一つが妙にくすぐったい。

「けーすけ様！ よかったですね！」

「あ、あぁっ」

でも、こういうのもいいな。

こんなのがずっと続けばいいと思う。多分続かないとは思うけど。

……俺は永渕を倒してしまった。いや、俺のせいでここまで大きな暴力沙汰が起こってしまった。

多分、俺はただじゃ済まされないだろう。停学……いや、下手したら退学だな。

だけど、そんな覚悟ならとっくの昔にできている。覚悟の上で俺は行動したんだ。

だからまずは——そんなネガティブな事を考える前に、皆で家に帰ろう——

——それから数時間が経った、ここは自宅ではなく国宗家。

伊吹はかなりお疲れの様子だ。正直俺も疲れているが、俺とは違って伊吹はただの人間である。

それなのに永渕の攻撃を受けたのだ。食らったダメージが俺とは決定的に違うのである。

そんなお疲れの伊吹を俺は放っておけなかった。だから俺は——

「やきそばしか作れねえけど、それでいいか？」

「うん……焼きそば大好きだから。それに、助けてもらったのに贅沢なんて言えないわ」

「そっか」

俺は伊吹に微笑みかけた。

そうだったな。確かに伊吹は焼きそばが異常なまでに大好きだった。だから、家事スキルがほぼ0の俺でも焼きそばだけは作れるんだ。

——結局、俺は自宅には帰らなかった。

いや、この後帰るつもりではあるが直接は帰らなかった。

だって……今の伊吹を一人にはしたくなかったから。

国宗家は父親が中々帰ってこない上に、母親は父と既に離婚しているのである。

その離婚の理由がいわゆる薬だ。母親は伊吹がまだ幼稚園児の頃、覚醒剤の所持で逮捕されたらしい。

当然旦那である父親も疑われ、結局身の潔白さは証明されたものの、そんな事があったせいで国宗家は近所から散々言われていたようである。

——国宗さんには決して関わるな。

その話は子供達にも広まり、あの頃の伊吹は野郎共に結構ひどいじめを受けていた。

たまたま近所だった俺の親だけは親父さんと仲良くし、俺や葵も伊吹とはずっと仲良しだった。

でも……伊吹は小学校に上がるまでは孤独だった。

今でも母親の消息は不明であり、父親は俺の親父みたいに仕事が忙しくて帰ってこれない。

学校では友達に恵まれていても、家庭内では伊吹はいつも孤独だ。

「……よし、結構上手く出来たかもな」

俺が回想をしている間に、丁度焼きそばが出来上がった。焼きそばはやっぱソース焼きそばだよな。うん、青海苔と紅生姜がまたいい雰囲気を出している。

「伊吹、焼きそばできたぞ」

俺はそんな自信作の焼きそばをテーブルに置き、テレビを見ていた伊吹を呼んだ。

「お、おいしそう……っ」

「おう。今日は腕によりをかけて作ったからな」

「あれ、あんたの分は？」

「多分暮葉が晩御飯作って待ってると思うから。俺はこの後戻って家で食べるよ」

「なによ。も、もしかして私が食べ終わるまで居るの？」

「食器洗いに風呂沸かしに、あと入浴の面倒も見ないとな」

「な、なにさり気なく一緒に入ろうとしてんのよ！　ばかけいすけ！　へんたいっ！」

俺の作戦は大失敗！

顔を赤らめ、少し機嫌を悪くした伊吹は俺へと飛びかかり、いつも

のよう引っ掻き始めたのである。

全く、何度も思ったけどコイツはツン猫かよっ！

「ちょ！ ふ、風呂は冗談だから引っ掻くな！ とにかく伊吹は怪我人でお疲れなんだから。食器洗いと風呂沸かしまではやっておくよ。他にも困ってる事があったら言ってくれよ」

ああ……エロゲーならここで入浴イベント発動、エロいCGも回収できるというのに。

……やっぱり伊吹はガードが硬いな。

まあ、簡単にホイホイついて来ちゃうのもどうかと思うけど。

「……ねえ、圭介」

「ん、どうした？」

恥ずかしそうに俯きながら、俺の名前を呼ぶ伊吹にそう訊き返す。すると伊吹は何かを言いたそうに唇を動かし、そして――

「……ありがとうっ」

一生懸命に、不器用ながらも伊吹をお礼を言ってくれた。

本日二度目である。なんというか……不思議な気分だ。

だって、伊吹にお礼を言われたのなんてすごく久々な気がするからだ。

「べ、別に構わん……っ」

少し言葉が詰まり、その上素っ気のない俺の返事。

俺は照れいてるのだろう。自分の顔だから見えないが多分俺の顔は

赤いハズだ。

「……ねえ、圭介」

「ん、今度はなんだ？」

また、伊吹が恥ずかしそうにしながら俺の名前を呼ぶ。
今日は随分と伊吹に名前を呼ばれる日だな。
というか、ここまでベツタリ伊吹と一緒にいた日も久々な気がする。
そんな伊吹の次の質問は。

「も、もしかた……圭介だけが悪者にされたら……っ」

「……………」

「そ、その時はその……っ。し、仕方ないから面倒くらいは見てあげるわ！」

がく……っ。何か大切な事を告げられるのと思いきや、伊吹はいつも通りであった。

でもやっぱりいいな。こうして、わかってくれる人がいるのは。

それに、今の伊吹の言葉は洒落にならねーかもしれないし。

バレたらホントに下手すりゃ退学だもんなあ。退学になった瞬間、俺は無職になってしまう。

退学させられたヤツに仕事をさせてくれる会社とか、もう一度勉強をさせてくれる学校なんて存在しないだろう。

退学になると本当に人生が終わる——そう考えても強ち間違いではない。

そんな俺を、伊吹は面倒見てくれると言っているのだ――

「……ありがとうな」

自分が情けないけど、事實は受け止めなければならない。

何より、俺なんかの為に微妙な優しさを伊吹は見せてくれた。
だから、俺は伊吹に対してお礼を言ったのである。

……はあ、それにしても。俺は本当にこれからどうなるんだろうな

第51話、戦いの結末は…… 後編 （後書き）

後書きトークコーナー

圭介「野オオオ原くウウウウン！ オマエは先生キャラとしてどうなんだよ。わかってンのかア、アア！？」

野原「テメエなに言ってやがんだア……アア！？ 学生の方でいい気になってるとお、潰すぞコラア！？」

圭介「ぐはっ！ すみません！ 台本に書いてあるモンで……ッ！」

野原「台本に書いてあるからってよお！ 何喋ってもいいと思ってんのか！？」

圭介「ち、ちなみに伊吹も内心アナタの事が嫌いでした——」

野原「伊吹ちゃんは可愛いからいいんだよ！」

暮葉「拙者もけーすけ様を暴行する人は嫌いなのです！」

野原「いい事言うじゃんっ！」

伊吹「……なにこれ？」

第52話、はがない圭介、弱い圭介

「期末に出るからしっぴかり覚えとけよ。わかったかなマゾヒスト君ども？」

……あれから一週間後。何もかもが元の日常に戻った。

いや、まだ戻っていないモノがあるけど。

あかりが思いのほか重傷だった為に入院。なんでも吐血するほどお腹を強く殴られたらしい。

部長もすっかり落ち込んでおり、写真部はあかり入院中は活動を自粛するんだとか。

お見舞いに行きたかった所だけど、校内で部長すら見かけないし。

行きたくても場所がわからなくて行けないという……あかり、大丈夫なのかな？

浅間家の家計がヤバのは俺もわかっている。あかりの入院費とか……うーん、心配だ。

そして、現在野原先生の授業をかつたるそうに受けている俺。

結局俺の日常は崩壊する事がなかった。

そりゃあ、ちょっとは説教を食らったけど……でもそれだけで済んだんだ。

……アイツのおかげでな。

——2時間目と3時間目の間の休み時間。俺と暮葉と伊吹は特に要は無いが廊下を歩いていた。

「よかったですね、けーすけ様！」

「ああ、何かあったっけ？」

そんなある時、暮葉が笑顔でそんな事を言って来たのだ。
一体何の話だろう。よくわからん俺はそう思いましたよ。

「あんた知らないの？ あの一件の噂が広まって皆あんたの事見直したらしいわよ」

「え、それって……」

「はい！ けーすけ様を悪者だと思っていた人が、今はけーすけ様は別に悪者じゃないって思ってるのですよ！」

「そうそう。あんた、校内じゃ正義のヒーロって思われてんのよ」

「ま、マジでございますか!？」

知らなかった……いつのまにそんな噂が流れていたとは。

噂って恐ろしいね。本人が知らない所でいつの間に広まっているんだもん。

でも、今回の噂は悪い方向ではないっぽいし、正直どうでもいいや。それにしても、暴力魔から正義のヒーローねえ……俺の異名もコロコロ変わるもんだなあ。

「もきゅ！ 拙者達は歪曲報道はしないのですよ！」

「そーそー！ よかったじゃない。それに……あんたの評判がいいと私も気分いいしっ」

「ん、なんでお前の気分が良くなるんだ？」

「——っ！？ し、き、気分がよくなるとか言っていないわよ！ 調子に乗るな変態圭介っ！」

「ぐはっ！」

で、デレ期に突入したと思いきやいきなりこれですか……。

やっぱり伊吹はツッパリだ。ツッパリからツンデレに変わる事なんて……ううっ！

「にゅふふっ♪ 伊吹さん。素直なほうがけーすけ様の気を惹けるのですよ？」

「ば、ばっ！？ き、気を引くとかそんな……っ！ 私はこんなヤツを攻略する気ないわよ！」

「攻略って……お前オタクだったっけ？」

顔を赤らめながら攻略言う伊吹さん。

しかし、他人を攻略なんてエロゲーでよく使う用語だぜ。

多分、というか確実に一般人は他人を恋に落とすのに攻略なんて言葉は使わないだろう。

そーかそーか。ついに伊吹もオタクに……フフフツ、いいぜテンション上がってきた！

「むがあーっ！ あ、あんたのせいでしょ！ あんたのせいで言葉が伝染しちゃったのよ！」

「けーすけ様の趣味が他人に伝染する事、あるのですねえ」

「お前だって葵の趣味伝染してね？ 最近家でPNPばっかやって

るだろ？」

「もきゅ！　だってだって面白いんですもん！　レムリアにはあんなものなかったのです！」

「学校でレムリア言うな！　バレたら日本での生活オワタになるだろ！」

よかったあゝ、たまたま一緒にいた人が伊吹で。

伊吹は一応事情を知ってるからな。というか事情を知っている唯一のただの人間だろう。

ん、何故そこに明智をカンウトしないかだって。だって明智は超能力者じゃないか。

異能の力なんか持っていない、ただの人間という枠の中では伊吹が唯一の存在。そういう意味である。

「そうよ。あんたの事が私ら以外にバレたら大変よ」

「もきゅう……申し訳ないのです。ついテンションが上がっちゃったのです……っ」

暮葉ってテンションが高い時と低い時の差が激しいよな。

まるで、昼間は熱いけど夜は寒い砂漠のような女の子だぜ。

……暮葉って小さいし。大事な所も砂漠みたいに何も生えてなさそ……げふんげふん！

「まあいいや。それよりそろそろ戻ろうぜ？」

「そうですねっ！」

「次は物理かあ……まあ早く行こう」

こうして、俺達はぼちぼち教室に戻ったのである。

一時は終わるかと思ったけど、結局終わらなかった素晴らしいこの日常。

この日常が続いたのも、まさにアイツのおかげである。

—— 昼休み、俺は例のアイツに会いに行った。

いや、正確にはたまたま遭遇したという感じである。

「お？ よお明智」

「お、ふ……藤島っ。おはよう」

「おいクソ介！ 私はスルー？」

「悪いっ、ちゃんというのはわかってるから心配すんな」

「そっか、でさクソ介、最近町屋くんとはどんな感じ？」

「……………」

案の定苦手な人も一緒にいたけどね。

まあ、生駒については我慢しよう。別に生駒自身は悪い人でもないし。

ただ……いい加減俺ガチホモ説から離れてください！

折角その噂も校内から消えたというのに。つーかまだ町屋くんネタ引っ張ってるのかよ。

「藤島、藤島がガチホモの変態さんだったの……ホントの話なのか？」

「違うわっ！」

「……そうだな！ 藤島はただの変態だもんな」

「なんかちつとも嬉しくねえっ！」

もういい加減慣れましたけどね……はあ、いつになったら俺〓変態
ってイメージがなくなるんだ。

変態だって事はもう認めるけどさ、それを面白がって言いふらして
いるわけじゃないのに。

出来るだけ真人間だってアピールしてるハズなのに。

「素直に喜ばいいのに。クソ介はナギちゃんに人生助けられたの
に」

「まあ……確かに助けられたけどさ」

そう、俺は明智に人生を助けられたのだ。

何の処分も受けずにこうして平穏な日常を送ってられるのも、す
べて明智が頑張ってくれたからだ。

明智は先生にも随分信頼されている風紀委員である。

その風紀委員の発言力はかなりのものなのだ。多分明智の発言力は
生徒会もビックリであろう。

そんな発言力があったからこそ、悪い言い方をすれば先生を脅せた
のである。

だから、俺は明智にはかなり感謝をしている。ラーメン三杯くらい
奢ってもいいくらい感謝している。

……でもね、それと俺Ⅱ変態とか俺Ⅱガチホモは関係ないと思うんだ。

「そ、そんな低姿勢になるなよ。私はその……友達を救うという当然の事をしただけでっ」

「いや、もう何度頭を下げればいいのかってくれい感謝してるよ。ありがとう明智」

「どっ！ ど、どういたしまして……っ」

明智は恥ずかしく思ったのかはわからないが、後頭部に手をやって軽く搔いていた。

まあ、照れ隠しって事にしておこう。

「おいクソ介！ 男のお尻を追うのは勝手だけど、ナギちゃんに手を出したら去勢だよ？」

「なんでお前は話題をそっちに持っていくのかな！？」

もう嫌だ！ 明智には感謝だけど生駒は何か嫌だ！

……結局、昼休みは明智や生駒と一緒に過ごした。

それはもう当然のように、俺の扱いは変態だのガチホモだのとひどいものであった……。

——放課後、今日の俺は一人帰りである。その理由は伊吹は部活で暮葉は小坂に拉致られたからだ。

野郎共は重原は今日は道場、大吾は新作発売だかでさっさと帰っちゃった。

明智は明智で忙しいし、浅間兄妹は学校で見てすらいない。

部活もないもんだから青山さんも見かけないし、葵は多分友達と一緒になのだろう。

そして三馬鹿だが……うん、赤佐と大林は元々仲良しだったからいいけど黒木がねえ……。

アイツ、あの一件以来俺を見る度にガンを飛ばしてくるんだよ。

まあ黒木は伊吹の事が好きだし、その伊吹を満足に守れなかった俺が悪いのは分かっている。

でも、それで黒木と殴り合いの喧嘩になるのは嫌だ。だから黒木とは距離を置く事にしたのである。

……こうして見ると、誰も一緒に帰る友達がいらない。

というか他に友達と呼べる人がいない。他の野郎共は別なクラスだし部活だし……。

はあ……まさに俺は友達が少ない。はがない状態である……。

まあでも、明智のおかげで悪い噂は消えたようだ。

これから1人でもいいから新しく出来ればいいなあ……それと、もう一つ一番重要な事がある。

——伊吹を守る。それは幼馴染としての俺の役目だ。

でも今までの俺……いや、今の俺でも満足に伊吹を守る事はできない。

いや、伊吹だけじゃねえな。他のみんなも守らなきゃいけない。

……でも、今のままでは絶対不可能だ。今の俺はすげえ弱いんだ。

俺がこんなに弱かったから……今回のように多くの人々が傷ついてしまった。

「……………っ！」

だから——もっと強くなろう。

どんな危険が来ようと伊吹や皆を守れるように……もっと強くなるう。

永渕……いや、この前の光秀みたいに異能の力を使う連中だって、これから先相手にしなきゃいけないかもしれない。なんたって俺の守る対象には暮葉や明智も含まれているんだから。

だから今のままじゃダメなんだ。キスしないと強くなれないようじゃ……まだまだなんだ。

「……上等だ。もっと強くなって皆や皆の周囲の世界を護ってやる！」

——俺は拳を力強く握り、沈みかけの太陽に向かってそう叫んでいた。

第52話、はがない圭介、弱い圭介（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「まずい事が発生した……」

伊吹「ど、どうしたのよ？」

圭介「……この小説、ストックが0になった」

伊吹「ちょ！　だ、大丈夫なの！？　折角順調に更新できてたのに！？」

圭介「大丈夫だ！　幸い学校の都合で作者は三連休……根性で持ち直すぜ！」

伊吹「し、信じていいのかしら？」

圭介「今までリアル忙しかったけど、夏になって少し余裕が出てきたらしいしな……とりあえず更新ペース保つ為に頑張りますのでよろしく願います！」

暮葉「もきゅ！　以上、珍しく真面目なお話でした！」

第53話、神は言っている……オカシイと!

それは、俺がある決意をした翌日の事である。

いつも通り帰りのSHRも終わり、皆がぼちぼち帰り始めている頃。

「そんじゃあ僕は先帰るな」

「圭介、部活頑張ってね」

「おう、じゃーなお前ら」

さっさと帰りやがる野郎共……まあ仕方ない、アイツら基本的に暇人だしな。

それはそうと、今日から部活があるのである。

先日的一件であかりが重傷を負った為に入院し、その間自粛していた部活が今日から再開なのだ。

その理由はもちろん、あかりが退院して浅間部長の元気が戻ったからである。

「あかりさん、元気にしてるのでしょうか」

「そうだなあ。まあきつとアイツのことだ、部室の扉を開けた瞬間やたらテンションの高い声で挨拶してくるよ」

「そうですね! そーだけーすけ様! 拙者は今日の為にいっぱい写真を撮ったのですよ!」

まるで、楽しい事でもあったかのように言う暮葉。

というかいつの間に撮影したんだ。家にいる時はいつもゲームして

いるイメージしかないのに。

ああ、あと最近は葵に変わって料理してくれているな。

正直助かる……暗黒物質ダークマターを食べる必要がなくなるからな。

でもそれだけだ。暮葉がどこかへ外出していただなんて全然知らなかったな。

「ホントかよ。お前いつの間に撮ったんだ？」

「にゅふふ。拙者がいつも家でぐーだらしていると思ったら大間違いなのですよ」

「そっかあ、それで何を撮ったんだ？」

「はい！ 便所コオロギにゴキブリさん、あとけーすけ様のベッドの下のえっちな本です！」

「ちょっと待ったア！ ロクなもん撮ってねえな！ しかもいつベツドの下なんて見たんだよ！」

「けーすけ様が寝ている間なのですよ」

しかも居候に勝手に部屋を荒らされ、ベッドの下のエロ本まで発見されてしまった。

畜生。葵にはどこに隠しても見つかるからもう諦めたけど、暮葉に見つけられるのは正直恥ずかしい。

うう……プライバシーの侵害だ。恥ずかしさで死んでしまいたくなっちまうよ。

「お前……寝ている人の部屋に勝手に入るってどうかと思うぞ？」

「で、でも！　もしサヴィエトの魔法使いさんに寝込み襲われたら……」

「その心配は殆どないってアンタ言ってたじゃん！」

「ソ、ソシナコトナイデスヨ？」

なんという笑顔でしょう。そして新人声優もビックリなほどの棒読みである。

「……で、結局お前はどこまで漁ったんだよ？」

「けーすけ様の机の二段目の引き出しにしまっており、参考書のカバーを被せた“快感のマテリア”って本を見つけたあたりまでです！　けーすけ様……そのっ、えっちな本も二次元派なのですねっ」

「やめてえ！　こんな往来で俺の趣味をバラさないでください！」

しかもコイツ、なんでそのエロ本の場所を特定できたんだよ！

滅茶苦茶苦悩した上でようやく見つけた、かなり見つかる確率の低いエロ本の隠し方を実践したのに。

葵には見つかっても、親父やお袋には見つかった事がなかったのに……！

暮葉恐るべし。というか完全プライバシーの侵害だ。ああ、なんだか自害したくなってきた……！

「けーすけ様……拙者はその、けーすけ様の事ロリコンだと思ってましたのにっ」

「俺にそんな性癖はねーよ！」

「あ、でも本棚に数学の参考書のカバーを被せた“みよんなとれーにんぐ”って、どう見てもロリコン向けなえっちな本はありました！」

「ちょ、それは部長に貰った北方projectの……っ」

葵にはバレたけど、それ以外の人に対しては完璧な偽装だったハズ。それなのに……なんで暮葉にバレちゃったんだよ！

折角のレア物同人誌だったのに。俺の嫁の一人であるみよんの同人誌だったのに！

「けーすけ様！ 拙者、けーすけ様の守備範囲が気になります！ 何歳から何歳までOKなのですか！？」

「もうこんな猥談やめようよ！ そんなの暮葉のキャラじゃねーよ！」

それにその、それ以上エロ同人誌について突っ込まれると……。正直、精神的にキツイです。恥ずかしすぎて死にたくなるっす……。母親は息子のエロ本の隠し場所を全て把握しているとは言いが、俺の場合は妹と居候に把握されているようだ。一体なんなんだ……。この色々な意味でおかしい状況は？

——結局、俺はその後もエロ本について暮葉にからかわれ続けた。

普通なら変態と引く所であろう。なのに暮葉はどういうわけか楽しんでるようだった。その上必死にも見えた。まるで……。俺の趣味を理解しようとしてい

るような……。

結局、その理由は全然わからねーけど。

そんな事はさておき、ようやく俺達は写真部の部室に到着した。

——だが、ここでも俺は衝撃の光景を目の当たりに驚いてしまうのである。

「お、お帰り……兄貴っ」

「お帰りなさい……え、えっと……兄さん」

「お兄ちゃんお帰りーっ！」

いつもの質素なものとは違い、悪趣味なくらい金ぴかになってしまった部室。

どこから仕入れたのだろうか、高級そうなグラスにはりんごのジュース。

執事のような恰好をしている浅間部長……うん、この時点で既に変である。

だがもっと変な事が目の前で起こっている……そう、それは——

「なんで葵がここにいるんだよ！　つか二人もその作ったような妹キャラは何！？」

「そそそ、そうですよ！　不自然ですよ皆さん！」

俺も暮葉も衝撃的な光景を目の当たりに、思わず大声で驚いてしまった。

どういうわけでしょうか、青山さんとあかりが妹キャラになってい

ただ。

しかも実の妹までいやがるし。ていうか立派な装飾と執事の恰好をしている浅間部長は何？

「だってえ……葵が圭介はシスコンだって言うからっ」

「わ、わたしもその……葵からそう聞いたので……っ」

「俺はシスコンじゃねえ！ あとなんで葵がここにいる！？」

「ああ、彼女も今日から写真部の部員だよ。君の妹みたいだし、お世話はよろしく頼むよ」

浅間部長は平然とした顔で衝撃的な事実を告げる。

ホント、嘘だと信じたいような事実をね。

「嘘だあーっ！ つーか部長もその恰好はなんですか！？」

「これ？ ハハッ！ コスプレに決まってるじゃないか！」

イケメンだけど中身は残念な超絶変態野郎の浅間部長。

一体、彼のコスプレを誰が望むのであろうか。誰得という言葉がピッタリ合うぜ……浅間部長！

……あと、なんだか頭がクラクラしてきたぞ。

「ああ、頭痛が……っ！」

「けーすけ様あー！ し、しっかりしてください！」

「だ、大丈夫だ……それより葵、なんだっていきなり写真部に？」

もう色々と面倒だけど知りたい事もいっぱいだし、とりあえず一つずつ聞いていこう。

まず、葵が写真部に入部した理由である。

葵は小中高と今まで部活をした事がない。その分友情を大切に家事なんかも必死でやっていた。

そんな子だったハズなのに、どういう風の吹きまわしで部活を始めたんだろうか。

葵は人差し指を自分の顎へと当て。

「んーっとね。千早やあかり、そしてお兄ちゃんを追って入部したんだよ！」

両手を開くと、元氣よく満面の笑顔でそう答えた。

ああそうか。そういうわけでしたのね。

要するに、このブラコン妹は俺目当てで写真部に入ったというわけね。

……んじゃあ、次は浅間部長に質問だ。

「次、部長！ この変な装飾は一体なんなんですか？」

「もちろん気分転換——」

「ウソつけ！ そんな目的の為に貴重な部費を使うわけないでしょ！」

「ええ。藤島君は気に入らなかったかい？」

「派手だし目が眩しいわ！」

金ぴかすぎる今の部室。お城で偉い人しか入れないようなレベルである。

もうコレ、どこの昭君しょうくんのま之間だよ。こんな装飾の為に部費いくら使ったんだよ！

……まあいい。浅間部長は馬鹿だからこれ以上聞いたって時間の無駄だ。次は青山さんとあかりだ。

「次は青山さんとあかり。なんで妹キャラなんて演じてるんだ？」

「それは圭介が喜ぶと思ったから……っ」

「え？」

「あかりの言葉のままです。その……それで葵に聞いて……っ」

恥ずかしそうにしながら、それでも正直に答えてくれたあかりと青山さん。

その葵のアドバイスで二人は妹キャラを演じていたというわけか。……葵のヤツ、この二人に俺がシスコンだと言いやがったのか。しかも別にシスコンでもねえし、全く……二人にシスコンだと思われてるじゃねえかよ。

「もきゅ。それならどうしてけーすけ様が喜ぶような事を？」

「ああ、ちゃんとしたお礼がしなかったんだよ」

暮葉の質問に真っ先に答えたのは、残念なイケメンこと浅間部長である。

あかりと青山さんの間に割って入った彼は、穏やかな表情で俺と暮葉を見ていた。

「部長……どうしてですか？」

「ボクらがまたこうしてここに集まったのも、藤島君と木下君のおかげだからね。だから女子陣はシスコンの藤島君の為に妹キャラを演じ、木下君は女の子だからこのボクが執事さんの恰好をしてご奉仕を——」

「拙者は別に部長さんのお世話はいららないのです」

「ぐはっ！　そ、そんなあっ！」

暮葉に振られて撃沈してしまった浅間部長。なんだ、すごく落ち込んで見えるぞ。

もしかして浅間部長は暮葉を……流石にないか。この人はいつも冗談で生きているし。

「で、では藤島君はどうだった！？　3人の妹達に迫られる気分は！？」

しかも落ち込んだと思いきやもう復活している。

なんという立ち直りの早さ、やっぱり暮葉を狙っているのとは違う見たい。

っ！か今度は俺ですか。その話題を俺にも振るんですか。

「俺も別にシスコンじゃないですし、というか妹は二次元以外に興味ないんで」

「あ、葵の嘘つき！　圭介のどこがシスコンなんだよ！」

「そ、そうですよ……っ、その……藤島先輩の反応、どう見ても妹に興味ない感じですよ？」

「そ、そんなあ！ お兄ちゃんは絶対シスコンだと思ってたのにな！」

どう考えても葵の勝手な妄想じゃねーか！

そりゃまあ好きではあるよ。家族だたった一人の掛け替えのない妹なんだから。

でもねえ……そんな危ないほど妹が好きってわけでもないし、やっぱり妹は妹なのである。

これでも世間一般のお兄さんと比べると、十分妹に対して好意を示しているほうだと思うぞ。

「はあ……それで結局、皆はこの前のお礼を俺達にしようとしたんですね……」

「そ、そうだぞっ。あたいもありがとう以上のお礼がしたかったんだからな……っ」

「わたしも、あかりを助けてくれたから……先輩にお礼がしたくてっ」

「葵は入部ついでに面白そうだったから企画したんだよ」

「ボクはお礼がしたかったのと、あと木下君とちゅっちゅしたかったからね」

間部長はもう人として最低だな。葵の企画もロクでもないものだった。

……でも、あかりや青山さんはそれを信じてやっていた。本当に俺にお礼がしたかったかのように。
おそらく、彼女達の想いは本気だったんだろう。

「ありがとう、気持ちはすごい嬉しいよ。でも、俺達は別にこんなことされなくてもよかったんだぜ」

「そうですよっ。拙者達は言葉だけでも十分なのですよ」

「……え。そ、それじゃああたい達……は、恥かいただけ!？」

「~~~~ツ」

今更自分達がやっていた事に気付いたのだろうか、二人は顔を赤く染めて恥ずかしがっていた。

……でも、この二人の妹キャラ。案外よかったかもしれない。

元々が美少女な二人だからだろうか。それとも俺達の為に本気だったからなのだろうか。

とにかく、二人も葵も俺達の為に努力をしてくれた。だったらその努力を水の泡にはしたくないな。

「……でも折角のお礼だしな。どっちかって言うと続けてくれると嬉しいかな」

「拙者も……お姉さんにしてけると嬉しいですよ!」

俺と暮葉は笑顔になり、優しい口調でそう言ってみると。

「藤島先輩……木下先輩……っ」

「……わかった！ 今日だけあたいが圭介と木下先輩の妹になってやる！」

「葵はお兄ちゃんの実の妹だし、クーにゃんもお姉ちゃんみたいな存在だもん！」

二人＋葵は嬉しそうな表情を浮かべてくれた。

ハハッ、なんだかこういうのもいいかもな。

端から見れば奇抜だけどさ、お礼をされている俺はとっても嬉しい気分だ。

こうして写真部も復活し、俺達の日常は完全に元に戻った。

……いや、元に戻ったんじゃないくて、パワーアップと言ったほうが正しいかな。

だって今日から——myシスターである葵も写真部の部員なのだから。

俺と暮葉へのお礼と葵の入部祝いを合わせたような、そんなパーティーは何時間も続いた——

「……あの、ボクが存在なかったことにされてないかい……？」

第53話、神は言っている……オカシイと！（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「ふう！ 0時の更新には間にあったぜ……」

伊吹「で、でも13時の更新はどうなんのよ？」

圭介「大丈夫、それは実現できる。というかなんとかストックでき
そうな段階らしい」

伊吹「作者は学生らしいけど、よっぽど暇人なのね。だから彼女と
か出来な——」

圭介「コラッ！ そういう事言わない！」

暮葉「そういえばけーすけ様も彼女いないですけど、けーすけ様も
暇人だから出来ないのですか!？」

圭介「お前は俺をショックで殺す気か！ うあああああゝ！」

浅間部長「恋愛資本主義社会って残酷だよね……」

第54話、凶悪な男と特異点？

世の中には、決して触れてはいけない真実がある。

真実は常に真っ暗で血みどろで……それを知った瞬間“普通”には戻れなくなる。

そんな闇の秘密が世の中には数多く存在している。

——これは永渕との戦いが終わり、平穏な日常を取り戻した圭介達が知らない間に起こった真実だ。

＊

6月15日の深夜。

今日は風が強い……その上曇り空だ。

オレは東京都民だったのに、この日は東京から少し離れた古宇坂って所を歩いていた。

ただ、目的を果たす為だけに。

「はぁ！ はぁ！ はぁ！」

オレから逃げようとする一人の女の子。

歳は大体オレと同じくらい、多分高校生くらいの女の子だろう。

女の子の恰好はそれは奇抜だ。クソみたいに重そうなロッドに馬鹿げた帽子。

外見は見るからに魔法少女である。その魔法少女がなんて事のねえオレから逃げているのだ。

「……っ!？」

「へッ……行き止まりでしたってなあ」

「……ッ!」

「さあて、どうすっかなあ。行き止まりって事は、オマエはもうチエックメイトじゃねえの？」

どこまでも楽しいそうに、そして狂った笑みを作って少女にそう語り掛ける。
一方の少女はオレを恐れ振るえるが、それに耐えて戦おうとしている。

ロッドを構え、厳しい視線をオレへと向けてくる。

「ンだアその構えは？　もしかしてこのオレ、はやかわゆう早川悠と一戦交えるつもりかあ？」

「……ッ!　サヴィエトの魔法使いめ……っ!」

「魔法？　ぎやはっ、イイネそういうメルヘンなの。オレは嫌いじゃねえよ。でも違うんだよ……オレは魔法とかそういうのは一切使えねえ。でも、魔法以外のそういう力なら使えるんだよなあ。あと、オレにはサヴィエトってのか何だかよくわからねえな。流石……謎の多い特異点だぜ」

それを告げた――

「……!」

刹那、魔法少女はロッドを振りまわしてきやがった。
ぶん回されたロッドからは火の玉……いいねいいね、アレが魔法つてモンかア？

でも、所詮は火の玉だよなあ。だったら……そんな程度じゃあこのオレは倒せねえ。

「……フツ」

火の玉が俺の目前まで迫った——瞬間、その火の玉は俺の前で消滅した。

まるで、燃える為に必要な何かが消えてしまったかのように。

炎は完全に消え去ったのだ。オレは全く熱すらも感じなかった、火傷すらもしていねエ。

魔法少女は驚きを隠せていない。いや、オレが何をしたのかサツパリ理解できていねえみたいだ。

……仕方ねえ。バカみてえな女の為に、少しだけこのオレが講義をしてやるとするか。

「なあオマエ、炎ってどうして燃えるか……それくらいは知ってるよなあ？」

「……っ、気体が燃焼するのよね……？」

「まあそうだなあ。んでだ、炎が燃えるには酸素って重要だよなあ？
さて問題です、酸素がなくなっちゃったら炎はどうなっちゃうかなあ？」

「……っ！？」

「ハッ！ まア大体は消えるよなあ。炎を消すには水なんかいらねえ……空気中の酸素濃度を0にしちまえばいいんだよ。無酸素状態じゃ燃烧なんてしねえしなあ？」

「なんで……どうして酸素濃度が0になるのよ……っ？」

オレはちゃんと炎が消えた理由を説明したが、それでも魔法少女は納得いかないようである。

……まあ、確かに消える理由だけしか説明してねえからなあ。

仕方ねえ、このオレが……何をやったか特別に教えてやろうか……。

「酸素濃度が0になる理由ねエ……じゃあそれがオレのせいだとしてたら？」

「……？」

「魔法じゃねえ……けどなあ。能力で酸素濃度を上げ下げが出来るんだよなあ」

「魔法じゃない？ ま、魔法じゃなかったら何なのよ！？」

「答えは超能力……もしかして初耳かア？」

超能力——通常の人間にはできないことを実現できる特殊な能力を指すための名称。

科学的にも合理的に説明できず、超自然的な力……とされている。実際は脳とかいじくれば誰でも使えるんだけどなあ。

まあ、確かにオレは元々超能力を使えた。

一応……バレたらマズいって事で超能力者が集まる施設に在籍はしているけどなあ。

けどそんな事は今はどうでもいい。オレは目標を果たすだけだ……
そうすれば。

「ちょ、超能力……っ」

「まあ確かに魔法と超能力、違いを説明しろっつわれても難しい話
だけどなあ。ンで、オレはその超能力で風・空気・気圧といったも
の全般を操作できるんだよ。例えばさっきみたいに酸素濃度をいじ
くっちまうとかなあ」

オレの言葉を聞いた魔法少女は次の瞬間、ロッドを構えつつオレへ
と接近してくる。

全力疾走。どうやら魔法が通用しないと思ったからか、少女はオレ
に接近戦を挑むらしい。

まあ確かに正しい判断だよなあ。魔力つつたっつけか……それを無
駄に消費せずに済むからなあ。

……でも、魔法少女はまだオレの能力をわかつちやいない。

オレに接近戦を挑んだって意味はねえんだよ。例えば……こんなふ
うに。

「が……っ！」

少女はオレに触れる寸前、まるで何かに吹き飛ばされたように弾き
返される。

言っておくが、オレは少女に触れてすらいねえ。

少女の柔らかい身体、体温、ロッドに打たれる痛みさえ感じていな
い。

それでも少女はオレにふっ飛ばされた……ぎやはっ、さてさて……
オレは何をやったでしょう？

「な、なん……で？」

「言ったら、オレは大気を操作できんだよ……なあ、暴風ってあらゆるものをぶっ飛ばせるよな？」

「……そ、それがどうしたのよ……っ」

「台風で暴風が吹いてみる。看板は吹っ飛ばし下手すりゃ車だって横転しちまう。それくらい風ってのは強いモンなんだよ……んで、さっきオレは何をやったかっていうとなあ。暴風で膜みてえなモンを作り出したんだよ」

「ま、膜……？」

「ああ、それに触れただけで暴風で対象はぶっ飛ばされる……その気になれば9mm弾はおろか、155mmの榴弾だって防げちまうんだよ」

それがオレの超能力。最もこれが全てってわけじゃねえけどな。ほんの一部……本気の1%にも満たねえ程度の力を少女に見せたただけだ。

オレが本気を出せば、このあたりは多分吹っ飛ぶだろう……ぎゃは。

「う、く……っ」

「隙見て奇襲でもできればオレを倒せるかもしれないけど……オマエじゃ無理だな。このオレに触れる事すらできねえ……死ぬしか道は残ってねえんだよ」

オレはそう言いながら、少しずつ少女へと近づいていく。

チッ、可愛い顔してんじゃねえか。殺すのがもったいねえ……。でも、殺さねえと目標は達成されねえ。殺す事の先にある目標がな……。

あんな……クソみてえな所に関わらねえ為にも。オレはコイツらを殺さなきゃいけねえ。

「うう……うあああああああああああああつ！」

「……ぎゃはっ、最後の悪あがきかあ？」

少女は再びロッドを握り、敵うハズのないオレに向かってくる。十分に間合いを詰め、ロッドを振りおろす……オレはそれを避ける事はない。

ただ先程と同じ、暴風の膜を生成して待機するのみ。

態々こんなガキを殺すのにオレが動く必要なんてねーんだよ……相手が勝手に自滅するからなあ。

「うぐあ……っ！」

ロッドが膜に触れた瞬間、少女は暴風によってぶっ飛ばされた。その時の衝撃でロッドが手から離れ、いよいよ少女は丸腰となったのである。

オレの眼下には振るえる丸腰の少女……頭から足まで完全にガタガタと震えてやがる。

やれやれ……既に戦意は喪失してるってかあ。

「最高に怖いみてえだなあ。さて、そろそろ殺すけど……オマエだつて楽に死にてェよな？」

「……う、く………っ」

「そこで、だ。いい方法があるんだけど……気圧を操作してオマエの身体を押し潰す、それか思いつき膨張させる……どっちがいいかなア？」

「……っ……っっ！」

狂気じみた笑顔を作って迫ると、少女はさっきよりも震える。

目は見開かれ、冷や汗もダラダラと出ている。

ダメージはそれほど受けていないようだが、恐怖で全く足が動かない。

……もう、少女は全てにおいて終わっている状態だ。

「そうであ……今日は膨張させつかあ。最高に愉快的バラバラ死体が出来上がるからなあ……」

「……っ！」

「大丈夫……バラバラになるんだぜ？　痛みは感じねえよ」

「……嫌っ！」

「さて……覚悟はできたかな……ふふ、あはは……あひやはっ！」

オレは気圧を操作する事で、目視可能範囲にあるあらゆる物質を押し潰したり膨張させる事ができる。

今回はそれが人体[・]ってだけだ。

さて問題です、人体が思いつき膨張するとどうなるでしょう？

正解は、たった今気圧操作を行い膨張させ破裂させたあの少女のよ

うに……。

……もう女の子だったかすらわからねえ程、ぐちゃぐちゃのバラバラ死体に……。

「クソツタレ……最高に哀れな死体だ……」

まあいい……これで目標には一歩近づいた。

とにかく、このままこの少女のような特異点を潰していけば……。オレはいつか、あんなクソツタレた場所から――

オレは少女の死体を放置し、そのまま夜の古宇坂へと姿を消した……。……。

第54話、凶悪な男と特異点？（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「……ねえ伊吹」

伊吹「なによ？」

圭介「今回俺、物語を語ってないんですが」

伊吹「確かに、名字も名前も一回も出なかったわね」

圭介「もしかして……主役交代なのかな？」

伊吹「さ、さあ……逆に言うと、あんな凶悪そうな人が今度から主役なの？」

圭介「っーか……あれって一方〇行さんだよな？ 絶対一方〇行さん真似てるよね？」

伊吹「そ、そうなの……？」

圭介「前作のフィリーネといい、作者はどんだけ一方〇行さん好きなんだよ……」

大吾「そのうち木原くんっぽいのも出るんじゃない？」

野原「ハハッ！ 誰だァこの俺を呼んだ奴はァ!？」

圭介&大吾「もういたわ！」

暮葉「一難去ってまた一難……この話どうなっちゃうのでしょうか！
次回に続くのです！」

第55話、いつもの朝

6月16日早朝、今日は木曜日である。

週末に迫ると段々テンションが上がってくるよね。

だって……週末は見るアニメも多いし、何より土日という休日が迫っているから！

フフフ……今日と明日学校へ行けばもうお休み。

もうそろそろ春アニメも終わるけど、それはそれでいい。7月からは夏アニメの放送開始だ。

もう夏に何を見るかは決めている。

もう今月はアニメ以外には何もないし、あとは夏アニメ放送開始と文化祭がある7月を待つのみだ。

「圭介っ！ ああもう、やっぱり寝てる……」

「んん……………っ」

「ほら朝よ、そろそろ起きなさいよ。下で暮葉も葵ちゃんも待ってるわよ？」

ああ……見慣れた天井だ。そして妙に安心できる聞きなれた声だ。

……今日も起こしに来てくれたんだな。

さてと、そろそろ起きようかな。折角伊吹が起こしに来てくれた事だしな。

「……………んんっ、おお……おはよう伊吹」

「ったく、あんたは私が来ないと起きないのかしら」

「一時期来なかった時はちゃんと起きてたろ」

「うっ……そ、それじゃああんたは私がないほうがいいの？」

怒ってるんだか寂しいんだか……伊吹の表情は複雑だった。

落ちつけ俺。ギャルゲーで鍛えた洞察力をフルに活用するんだ。
こういう場合の選択肢は一つしかねえだろ。

「俺は嬉しいけどな。毎朝伊吹が起こしに来てくれるのは」

「っ……し、仕方ないわね！　ねぼすけ圭介の為に明日以降も起こしに来てやるわよ」

「へいへい、よろしくお願いします」

なんというツツパリ伊吹ちゃん、相変わらず素直じゃないぜ。

これじゃあ起こしたいのか起こしたくないのか、サツパリわからないじゃねえかよ。

うーん。エロゲーで鍛えた洞察力って現実でも使えるものなのかな？

「それじゃあ、私は先に学校行くから」

「ん、何かあるのか？」

「部活の朝練があんのよ。運動系はあんたがやってる文化系と違うんだから」

「文化系だって吹奏楽部とかは朝練あると思うぞ？」

「だああもう！　細かい事はいいの！　それより遅れると迷惑かけ

るから本当に先に行くね！」

「わかったよ。白陵のヤンキーに気を付けるんだぞっ」

「そう何度も襲われないわよっ！」

そう言って伊吹はボタンと扉を閉め、ドカドカと階段を降りる音を立てながら下へ行く。

やがて、玄関の扉が開閉される音が響いた所、どうやら伊吹は本当に先に行っちゃったようである。

アイツ剣道部でも一番強いしなあ。そういえば、今度大会があるらしいな。

俺もいつものメンバー誘って応援に行こうかな。

……さて、伊吹と会話したおかげで完全に目が覚めたし、そろそろ下に降りようっと。

——下に降りると、居間にはいつも通り暮葉と葵が俺よりも早く起きていた。

暮葉は朝ごはんを作っており、葵はテーブルで待機している。

……以前は葵が飯を作ってたんだけどな。まあ、葵の料理は暮葉にとってトラウマだし。

俺としても好き好んでは食べたくない……おいしいんだけどね。その、見た目がグロテスクすぎて……。

「おはようございます、けーすけ様っ♪」

「あ、お兄ちゃんおはろー！」

「おはよう、二人とも」

しかし、こうして見てみると暮葉の制服エプロン姿も中々似合うもんだなあ。

小柄だけど、何故か時々見せる表情が大人っぽくて……。
ってオイオイ、なにロリな暮葉に見惚れてるんだよ。これじゃ俺が
ロリコンみたいじゃねえか。

「お兄ちゃんお兄ちゃん。葵も久々にお兄ちゃんに料——」

「それより葵、寿司の出前でもとってみないか？」

「ひどい！ 葵はまだ全部発言してなかったんだよ！」

だってねえ……。葵が何を言いたかったかわかっちゃったし。
それが現実のものになるとその……。暮葉のトラウマが。

「せ、拙者もお寿司の出前のほうが嬉しいのです……。っ」

「クーにゃんまでひどいよ！ 葵だっておいしいご飯作ってあげたいのにつ！」

すまん葵。たとえお前は本気だとしても、暮葉にとってアレはトラウマなんだ。

ていうか、俺も我慢して食べるのが辛いんだ。

特にダイオウグソクムシの紫チャーハンを見てからは……。やべっ、
頭痛くなってきた。

「にゅふふふ……。も、もうしわけないのですっ」

「悪い葵。手料理はそのうち彼氏に作ってあげればいいじゃないか」

「彼氏なんか作らないもん！ 葵はお兄ちゃんさえいけば問題ないもん！」

「……………」

うん、その時点で色々な意味でどうかと思うんだ。

現実世界で妹属性のない俺としては、正直ただのいい迷惑である。世の中にはごく少数だけど、妹が彼女だと思われて中々彼女が出来ない。

そんな人がいるらしいからな。

『あちらの路上でバラバラになった身元不明の遺体が見つかりました』

その時、そんな男の声が俺の耳に入った。

今藤島家には俺以外に男はいない。しかし俺はそんな事を喋った覚えがない。

だったら声の主は決まっている。それはテレビに写っている人の声であろう。

台詞的に考えて何か事件でもあった感じである。

映像もどこかの住宅街……ってアレ、ちよつと待てよ。ここどこかで見た事ある気が……？

『今日午前4時前、〇〇県古宇坂の民家の前で、バラバラになった人が倒れていると警察に通報がありました。遺体は完全にバラバラな形で身元の特定が困難との事です。警視庁は身元の確認を急ぐとともに、近頃古宇坂市で頻発している連続殺人事件との関連性も視野に入れ、捜査を続けています』

今度は見慣れた光景と女子アナの声……というか、やっぱり古宇坂かよ！

俺と永渕が戦い終わった頃からの話であるが、近頃随分とまあ古宇坂で事件が発生するな。

しかもその遺体というのが、殆ど触れられた形跡がないらしいのである。

全く……同じ犯人が殺しているとしたら、そいつは一体どうやって殺しをしているんだ？

第一、なんでこんなに頻発して殺人事件が発生するんだよ。古宇坂だけでもこれで3件目だ。

「うわぁー、また殺人事件……怖いねお兄ちゃん」

「そうだなあ。最初の二件は確か女の子だったらしいから、葵も暮葉も気を付けるんだぞ？」

「うん！ だいじょーぶ、葵はそれでも護身術習った事あるもん！」

「はいなのです……」

葵はまあ大丈夫だろう。なんだかんだ言って葵はサバイバルアスベクツの高い子だし。

暮葉も達人級の強さだから多分問題ない。

俺だって身体は丈夫だ。一度刺されたくらいならそのまま逃げるくらいは出来るハズである。

……ただ、気になったのは今の暮葉の表情である。

いつもの暮葉なら「拙者なら全然平気なのですよ！」とか言いそうなのに、どういうわけか今の暮葉は暗い。まるで……強^{……}大な敵が迫っている時のアニメキャラのような……。

「どうしたんだ暮葉？」

「もきゅ！ な、なんでもないのですよ！ さて、そんな事より朝ごはんが出来たのです！」

あれ、急に元気になった。

さっきのあの暗い顔は気のせいだったのか。いや……そんな風には見えなかったけどな。

でもまあ、連日の深夜アニメで俺は結構朝は寝ぼけてるし、そんな風に見えたのかもしれない。

それよりも暮葉の作った朝ごはん。またまたこれがおおいそうだなあ。

白いご飯に焼いた鮭、何かの和風なサラダにお味噌汁。これどこの旅館の朝ごはんだよ。

もうなんというか……暮葉の作った朝ごはんは豪華であつた。

「おお！ 今日もおいしいそうだね！」

「つーか俺はもう食ってるけど、うまい！ 相変わらず最高のお味だぞ！」

「あ、ありがとうございますです二人ともっ」

暮葉は恥ずかしそうに少し赤くなりながらも、そんなお礼を言ってくれた。

最近、特に暮葉が来てからの藤島家の朝は、いつもこんな感じである。

伊吹が起こしにきて、俺と葵が暮葉の朝食をべた褒めして。それから、伊吹の部活がない日は伊吹も混ぜて4人で登校。

最近の朝はとても楽しくて、毎朝が楽しみな感じである。

ああ、暮葉という怪しい世界から来た子もいるけどさ、こういう平穏な日常って素晴らしいよね。

今までが平穏じゃなかったからか、最近は本当にそう思うようになってしまったよ。

……よし、そんじゃあ今日もいい気分だから。

——今日も一日頑張って過ごしますか。

第55話、いつもの朝（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「皆さん、重大報告です……なんとこの旅、この『魔法少女に会っちゃった場合』がゲーム化される事になりました！」

大吾「な、なんだってーーーーー！？」

圭介「ゲームはシナリオを読み進めて選択肢を選ぶことで各ヒロインのルートに分岐するオードソックスな形式。ちなみにヒロインはメイン5人＋サブ2人だ！」

大吾「なにその大ボリューム！？　つかどこのエロゲーだよ！？」

圭介「エロゲ？　フッフ、文章読むだけならそうかもな。だが！　このゲームには戦闘イベントもちやんとあるんだぜ？」

大吾「は、戦闘イベント？」

圭介「プレイヤーが俺や暮葉とか、とにかく戦闘要員を操作して光秀や永渕とかをぶっ倒していく。格ゲーモードも搭載！　もちろんキャラの特性を完全再現！」

大吾「すげえええっ！　ど、どんだけ機能搭載してんだよ！？」

圭介「ちなみに全年齢版と18歳未満は買っちゃダメってのがあるけど、後者はヒロインとのエッチなシーンも収録！」

大吾「もろエロゲーじゃん！　で、でもそれって高いんじゃない？」

圭介「全年齢版はPNPソフトとして発売。新作6090円！　18禁版はPCにて発売、格ゲーモードもあるからちよっとお高いけど、それでも12000円以内になんとか収めたぜ！」

大吾「ぐはっ！　ぼ、ボリュームのわりに安い！　頑張ったな製作会社！」

圭介「発売日は今年の11月30日、みんな予約はもう済んだか！？　『魔法少女に会っちゃった場合』……是非買ってプレイしてみてください！」

伊吹「嘘つくなあーっ！」

圭介「ごばあっ！？」

大吾「あべしっ！」

伊吹「み、皆さん！　こんなのデマ、ばか圭介が撒いたデマなんだから！　第一ゲーム化なんてありえないわよ！　しかもその……えっ、エロゲーなんて！　わ、私と圭介がエッチな事するなんて……
~~~~っ！」

暮葉「それより拙者は、葵さんから借りるのではなくて自分のPNPとモ〇ハン3rdが欲しいのです！」

## 第56話、ちょーのーりよくしゃ

「……不幸だ」

放課後、俺こと藤島圭介は掃除当番を任されていた。

もちろんたった一人で……はぁ、最初は3人いたハズなんだけどな。

「大吾に重原……畜生、アイツら雲隠れしやがったなっ！」

大吾は不真面目だし、重原も大吾の付き合いでたま〜にだがサボるし。

伊吹は部活、暮葉も先に部活に行き用のない小坂はとっくの昔に下校。

そんなわけで俺は、一人寂しく教室掃除をしていたのである――

「はぁ……畜生、いじめられっ子の気持ちは今よく理解したぜ」

外からは野球部や陸上部の気合いの入った声。

校内からも、まだがやがやと生徒たちが行動している音が聞こえる。どれもこれも楽しそうな音であり、そんな音が孤独の俺の心を痛めつけていく。

ああ、俺も部室に行って早く皆と遊びたいぜ……。

「……あ、変態藤島」

その時、聞きなれたハスキーボイスが耳に入る。

ハスキーボイスな上に俺の事を変態と呼ぶ者、そんな人はこの学校に一人しかいないであろう。

「よお明智。ってか、そろそろ変態ネタから離れないか？」

「胸揉んだ癖に……熊のパンツ穿いてる癖に」

「おいやめろ。深すぎる心の傷を掘り返すな！」

思えばあの時、明智に葵がテキトーに用意をした熊さんパンツを見られたせいで、色々と狂ったんじゃないかと思うんだ。

あの後生駒には狙われ、何故かガチホモ疑惑が流れてしまい、その結果伊吹を傷つけ……。

畜生。トイレでズボンを脱がしやがった神崎・H・アリック。俺はてめえを永遠に許さないぞ！

「すまない。で、でも事実じゃないか？」

「事実だけと思い出したくない事ってあるじゃん？」

「まあ、確かにな……」

「頼むからもう思い出せないでください！　お願いします！」

俺は柏手を打ち、やや頭を下げて明智に頼みこんでみた。

うん、実に情けない光景である。

でも思い出したいくないのも事実だ。その為にはやむを得ない行動である。

「私の御先祖を一撃で倒すくらい強いのに、案外中身はチキンなんだな」

「うっせ黙れ！　お前だってパンツを異性に見られるのは嫌だろ！」

「うん。好きな人だったらわからないけど、確かに嫌だな」

「だろ？ 俺だってめちゃくちゃ恥ずかしかったんだよ。もう頼むから傷に触れないでください」

「悪かった……藤島だって男の子だもんな」

なにその○○だって女の子だもんね、的なセリフは？  
きっと明智は俺を慰めているつもりだろう。しかし何故だ、全然嬉しく思えないのは俺だけか？

「はぁ……それで結局何の用なんだ？」

「用はない、ただ藤島が一人で掃除していたから……」

「ん、ああ。友達が雲隠れしやがったんだよ」

「それ……友達って言えるのか？ 実は藤島って友達がいない——  
」

「コラッ、そういう傷つく事言うのやめい！」

リアルに友達が2人しかいなかった時期があった俺にとって、その言葉は妙にズキッとくるよ！

今でさえ、本当にお願ひ事友達の数なんてそんなにいないのに……。  
はぁ……心から友達って呼べるヤツいるのかな、俺。

「大丈夫だぞ……私は藤島の友達だからっ」



「なに悲しい雰囲気作っちゃってんだよ！ いるから、ちゃんと友達いるからな！」

「ホントか？ 木下と伊吹以外の人と一緒にいる所、あまり見たことないぞ？」

「……意外な事実が発覚しました。明智、伊吹のことを名前で呼ぶんだね。」

「ということは二人は意外と仲良しなんじゃ……そんな疑惑が脳内に浮上しました。」

「俺の知らない所で色々な交友関係ってあるんだな。」

「……まあ、俺が友達少ないだけなのかもしれないけど。」

「あのなあ。今日逃げやがった馬鹿野郎どもとはよく遊ぶし、部活の皆とだって結構話せるんだぞ」

「だからって友達とは限らないぞ。藤島、利用されているだけかも」

「」

「妙に現実味ある事言うのやめましようよ、明智さん！」

「すまなかった。リアルパシリの藤島には荷が重すぎたか」

「まだパシられた事ないよ俺！ 一応対等な扱いは受けているぞ！」

「そ、そうだったのか……！？」

「なにその突っ込み所のないマジ反応！」

「もしかして明智さん、マジで俺が友達のいないただのパシリだと思ってたの？」

……もう、そんな人生だったらとつくの昔に自害コマンド選択して  
るよ。

今頃、富士の樹海で身元不明の遺体が見つかったのかもな。

「……お前、どうしても俺をぼっちにしたいんだな」

「もちろん冗談だぞ。友達に冗談も言い合えるくらいじゃないと！」

「そりゃそうかも知れど……悲しくなる冗談はよそうぜ？」

「もしかして藤島……いじめられてたのか？」

「いじめられてはいなかったけど？」

まあ、それに近いくらい周囲から冷たくされた時期がありました。  
それも、結構最近まで。特に同じ中学出身のヤツからはね。

思えばそんな誤解が解けたのも、明智が風紀委員の発言力を利用し  
て頑張ってくれたからなんだよな。

ホント、この明智風紗って一人の女の子には頭が下がるよ。

「そうか……じゃあ変態だから女子に嫌われてたんだな」

「もう俺〓変態ネタは飽きたわ！」

「大丈夫……っ、藤島がぼっちになっても私はずっと一緒だっ」

「俺をぼっちみたいに扱うな！」

やたらと変態扱いしてきたら、どうしてもぼっち扱いしようとしな  
ければ、本当にパーフェクトなのに。

容姿端麗、頭はいいかは分からないけど正義感ある風紀委員。

でも、俺をいじめて楽しむ所があるし……やっぱり明智は残念な美少女である。

というか絶対明智ってSだよな……。

「そうか、それじゃあ……あ、そうだ」

「今度はなんだよ」

「私とした事が、わりと重要な話を忘れていたぞ」

「ああ、重要な話？」

明智が重要な話って一体何だろう。

明智家の問題はもう解決したハズだし、するともしかして明智本人の話……。

ハッ、まさか明智が俺に告白でもするのか！

オイオイもしそうだとしたらどうする。

そんなフラグを立てた覚えは皆無なのだが、でももし本当に告白だとしたら――

いや、俺が明智に恋とかしてないから、告白されてじゃあ付き合いかじゃ流石に失礼かな。

でも明智はハッキリ言って上玉である。それを逃すのも勿体ない気が……。

「うゝん」

「な、なに真剣に悩んでるんだ？」

「え？ ああいや！ なんでもないッスよ！」

「怪しいぞ、藤島。どうせ卑猥な妄想でもしていたんだろう？」

今ジト目で変態扱いされた……。

ところで、明智に告白される妄想は卑猥な妄想に入るのだろうか？  
でもエロ要素はハッキリ言って皆無だ。

卑猥ではないと思うけど……クールだが意外と純粋ビュアな明智には卑猥  
に思える事なのかな？

……ってそんなことはどうでもいい。それよりこのまま変態扱いさ  
れるのは嫌だな。

「お前なあ……俺が悩む＝卑猥な妄想って、流石にそれはないと思  
うぞ？」

「ほ、ホントか？ 変態なのにか？」

「もう変態は認めるけどさ、年がら年中エロい事考えてるわけでも  
ないんだぞ？」

というか、そういう事を考えるのは一日のうち30%未満だ。

これだけは断言できる。俺は至って健全でお年頃な男子高校生なん  
だ！

「そうなのか……って、大事な話を忘れる所だったぞ！ これも藤  
島が変態なせいだ」

「だああもう！ 変態変態うるさいわ！ それで、結構重要な話っ  
て一体なんなんだよ？」

「ああ、実は……藤島。最近殺人事件が頻発しているだろう？」

「え、ああ。そういえば今朝もニュースでやってたな。古宇坂だけでもこれで3件目だぜ？」

殺人事件が頻発するようになったのは、まさに俺達が永渕ら白陵高校を倒してからのものである。

東京で5人、隣町3つくらいで3人、そして古宇坂でも3人である。これほどの大人数が不可解な死に方をしているのである。

触れられた跡もないのに、何故か窒息死していたり……そして、今朝のようにバラバラだったり。

とにかく、殺人犯は人間技とは思えないような殺し方をするヤツらしい。

……全く、どこの殺し屋がやったんだよ。しかも身元がわかる人は女の子ばかり。

しかも、不思議な事に殺害された人々は皆、どういうわけかこの国の国籍も持っていないらしい。

「うん。その事に関してなんだけど、古宇坂で起きた一件目の事件の現場は私も見たんだ」

「え？　だ、大丈夫なのか？」

「安心しろ。これでも普通の人よりはグロテスクなのに慣れてるぞ」

いや、そういう問題じゃねえだろ……。

ていうか明智は女の子なんだから、少しは怖がるとかしたらどうなんだろうか。

「そうか……でも誰なんだろうな。おかげで周りの誰かが巻き込ま

れないか、不安で仕方ねえぞ？」

「大丈夫だ。殺されているのは何故か無国籍の人達だけ……多分、日本人は大丈夫だと思う」

「無国籍ってのも不思議だけど、やっぱり一番不思議なのは犯人だよな。どんなプロの殺し屋だよ？」

「そこに思い当たる事があるんだ」

明智が犯人に心当たりだと？

ンな馬鹿な。もしかして某名探偵的な展開で、実は犯人は明智でしたとか？

……ンなわけないか。明智が殺人をやったら必ず触れた跡があるはずだ。

仮になかったとしたら、その遺体は間違いなく焼死体であろう。  
パイロキネシス  
発火能力じゃ跡ナシで殺すことは多分、不可能である。

「……え。マジで仰ってるんですか、明智さん？」

「うん。誰が犯人かまではわからないけど、犯人はおそらく……」

「……………っ」

「超能力者だ」

「……………っ!？」

超能力者って……それって明智みたいなヤツの事だよな。  
パイロキネシス  
例えば明智の発火能力とか。

あと能力名は忘れたけど、あの明智光秀が使っていた風の斬撃。でも、ああいうのを使う人って明智家の人だけなんじゃ……？

「ちょっと待て、明智家の人間以外に超能力者なんているのかよ？」

「いる、そんなの当たり前だろ？ 公にはなっていないけど、日本には超能力開発を行う私立佐井学園。通称“PSI研”が存在しているからな」

「佐井学園？ それって東京に最近できた私立の進学校だろ？」

「表向きはそうだよ。でも実際には表向きは技術開発分野を専攻する“開発科”では、私のような超能力者の育成が行われているんだ」

「なんですか、その某学園都市ラノベみたいな学校！？」

「というか、超能力者を育成する機関って日本にあったのかよ！

そこって卒業生とかもいるし、増してや今は情報社会である。

よく今まで騒がれずに済んだな……超能力なんて、いいニュースのネタになるのにな。

「ん、そういえば明智って随分そこについて詳しいな」

「あたりまえだ。だって私、1年の最後までそこに通っていたんだから」

「それってもしかして、初芝に転校する前に通っていたって事か？」

「そ、そうなるな……っ。だって、私は元々能力が発現していて、ある日佐井学園の学園長にスカウトされて……っ」

「それで一度は入学したのか」

「うん……親父殿がうるさかったから家に戻って初芝に転校したけどな」

そのうるさかった親父、きっと光秀がとりついていた頃の話なんだろうな。

それにしても初めて知ったぜ。日本にそんな学園が存在していたってのか。

確かに、それなら他にも超能力者がいたっておかしくはないよな。

「けど、なんで超能力者が犯人だって思ったんだ？」

「そ、それはその……ちょ、超能力者としての感だ！」

「それ信用していいのかよ!？」

「あたりまえだ! バラ・ゲラーのスプーン曲げよりは信用できるだろっ!」

まあ……明智は実際超能力とかいうのを使えるしね。

バラ・ゲラーのように超能力かもわからないうじよ、ちょっと疑っちゃうけど。

「それで、私は犯人に心当たりがあるのともう一つ、警告に来たんだよ」

「警告? もしかして超能力者は俺を狙ってます〜とかか？」

「違う。藤島は多分平気だと思うけど……あ、危ないのは多分木下



だ」

「暮葉が？　なんで……あっ！」

そういえば、殺害されているのは国籍のない人達ばかり。

確かに暮葉は学校には入っている。だがそれはアルファ隊が仕組んだからこそ出来た事なのだ。

暮葉はこの街で普通に日常生活を営んでいるが、日本国籍を持っているわけではない。

それどころか、全世界のどこの国の国籍も持っていないのである。

「わかった……だろ？　だからその、出来るだけ木下から離れるなよ？」

「あ、ああ……わかった」

またまた明智に助けられたよ。おかげで手遅れになる前に気付けた。そうだ……この状況で一番危ないのは暮葉じゃねえか！

畜生、どうして今まで気付かなかったんだよ。

でも、おかしいよな。どうして犯人は無国籍者ばかりを狙って惨殺しまくっているんだろう？

無国籍者連続殺人に何か意味でもあるんだろうか？

「……あ、そうだった。それはそうと藤島、その……そ、掃除手伝おうか？」

「え？」

「だから掃除だ掃除っ。一人で困ってるんだろう？」

なんだいきなり。明智が暗い話から嬉しい方向に話題を変えたぞ。掃除を手伝ってくれるって、俺としては滅茶苦茶助かる！

「いいのか？」

「い、いいんだっ。その、藤島は友達だからな……っ！」

「……ありがとな、明智」

本当、最近俺は明智に世話になりっぱなしだな。ここまで頭が下がる相手は先生と親以外にはいないぜ。

——その後、俺は明智と二人で掃除をし、終わった後はいつも通り写真部の部室へと向かった。

## 第56話、ちょーのーりよくしゃ（後書き）

後書きトークコーナー

風紗「やった！ 久々にまとまった出番だ！」

圭介「よかったな明智！」

風紗「セリフも今回は多かった！」

圭介「そ、そうだな……」

風紗「しかも、なんだか藤島の役に立っているっぽいぞ！」

圭介「あ、ああ……」

風紗「これからも私の出番があるかな？ いや、主人公になれるかな！？」

圭介「……………」

風紗「いっその事タイトルも『変態藤島に会っちゃった場合』でいい気がするぞ！」

圭介「いい加減落ちつかんかい空気委員！」

風紗「なっ！？ く、空気委員……うわあああっ！」

※風紗はショックで3時間ほど倒れました。

## 第57話、自己防衛本能【モザイク】

「圭介、あたいの兄貴のシバき方を教えてくれよな！」

「……はい？」

部室に入ると、突然あかりが上目遣いで言ってきた一言。

ハッキリ言って意味不明だ。ただ一つだけわかる事がある。

どうやら、あかりは自分の兄である浅間部長をシバきたいようである。

全く……今度はあのバカ部長、なにをやらかしやがったんだ？

「……なんじゃこりゃああ！」

で、俺が部室の奥まで行くと——なんと浅間部長が全裸で立っていたのだ。

ああ……自己防衛本能で視界にモザイクが。ていうか……。

一緒に入って来た暮葉と元々いたあかりの他に、葵や青山さんまでいるのになんで全裸なのこの人！

しかも全く恥じらいとか感じていないっぽい。あれじゃあまるで露出狂じゃねえか。

とにかく……ここは公立高校という立派な公共の施設だぞ。

そうじゃなくても自分の家ではない外。更衣室とかトイレとか、そういうものではないただの外。

そんな所で全裸になるって……浅間部長は公然わいせつ罪の現行犯だな。

「けーすけ様っ！ な、なんか……下にぶら〜んって――」

「待て暮葉！ それ以上は放送禁止用語になるからやめろ！」

「ぶ、部長……最低です」

青山さんの反応は普通だと思うよ。俺もそう思うし、多分青山さんが一番普通の反応をしている。あとあかりも引いているし、あかりも正常である。

暮葉もアブナイ事を言いかけはしたが、少し引き気味なあたり彼女も正常だ。

ただ、女子の中にも一人問題児がいて――

「う〜ん……お兄ちゃんのほうが大きいかな」

「てめえは何ガン見してんだよ！ 少しは恥じらいやがれ！」

「ええ？ でも葵が小さい頃よくお兄ちゃんの見ていたし……」

コイツ何過去話暴露してるんだよ。

いや、確かに見られたというか……絶対見られるような状況だったけどさ。

でも、このタイミングで言う事じゃねえだろ！

「なっ！？ け、圭介も露出狂かよ！ このエロスペシャル！」

「藤島先輩……もしかして、最低な人？」

「けーすけ様、露出狂になるほど変態だったのですね！」

「違うわ！　小さい頃に兄と妹が風呂に入るのってよくある事だろ！？」

——そう、お風呂である。

時間短縮の為に親が兄と妹と一緒にいれるというのは、多分よくあることかもしれない。

ただしそれは小さい頃の話だ。もちろん今はちゃんと一人で入ってるぞ。

ていうか、この歳になって妹と風呂に入ったら色々大問題だ。

「せ、先輩。その……何歳まで葵と入っていたんですか……？」

「そ、そうだ！　それによっては許してやるからな！」

「そんなの小学せ——」

「葵が小6の時までだから、お兄ちゃんは中1だったよ！」

おまつ！　バカだろ、確かに事実だけどそれを言っちゃうわけですか！？

しかも、あの時は葵に迫られた仕方なく入っただけなのに。

おかげで青山さんは青ざめ、あかりもジト目になり、冷たい視線を向けてきちゃってるじゃねえか！

「先輩……そんな歳になるまで葵とお風呂に……？」

「うわっ、流石 yes・エロキュア5……ただのシスコンの変態だろ！」

「シスコンじゃねえ！　しかもどちらかと言うと俺は被害者だ！」

「嘘です！　けーすけ様……最近拙者とお風呂に入りましたよね？」

「「エエエエエエエエエエエエエエツ！？」」

驚く三人の女の子たち。当然だ、だって暮葉が爆弾発言をしやがったからだ。

事実だから否定はできないが、わざわざこのタイミングで言うかこのアホは！

しかも、そんなうるうると涙目で語られたら……まるで俺が悪いみたいじゃん！

「無理やり脅して入れたのか！　このエロロ軍曹が！」

「違うぞあかり！　事故だよ、事故なんだってば！」

「は、入ったのは……事実なんですね」

「ちょ、青山さん？　事故ですよ事故、不幸な事故があったんですって。邪な感情は皆無でしたよ！」

「お兄ちゃんズルイ！　どーしてそこに葵をまざてくれなかったの！？」

「お前は少し黙れ！」

もうダメだ、本格的に青山さんとあかりが引いているよ。

そして葵は若干怒っている気がする……いや、一緒に入れなかった事に気分を悪くしている。

そして暮葉は耳まで真っ赤だ。恥ずかしいなら言うなよ……俺の立

場まで悪くなったじゃねーかよ。

でも、そんな暮葉も流石に責任を感じたのか。

「み、皆さん。その……けーすけ様の言う通り、本当に事故なのですよ」

「え、木下先輩。それはホントの話なのか？」

「はい！　けーすけ様はチキンですから、そんな大胆な事はできないですよ？」

なんだかひどい事を言われた気がする……。でも、暮葉のおかげで大きな誤解は解けたようである。

「んみゃ……ごめん、圭介」

「別にいいよ。ひどい扱いを受けるのは慣れてるしね」

あかりは思ったよりも素直に、瞳を閉じて申し訳なさそうに謝ってくれた。

前々から思っていたけど、あかりは馬鹿だがやっぱりいい子である。元々容姿は可愛らしいし、もう少し女の子らしくしていれば絶対モテるのに……勿体ない。

「よかった……そうですね、先輩がそんな……無理やりな人なわけ、ないですもんね」

「あ、ああ……無理やりなんてするわけないだろ？　ハハハ……ッ」

青山さんアンタ、思いつきり引いてたじゃん。そしてあかりと同じ



くらい俺の事疑ってたじゃん。

「申し訳ないのですけーすけ様……拙者が余計な事を言っただけに……っ」

「全くだぞ。つーかお前、あんな事暴露して恥ずかしくないのか？」

「~~~~っ」

瞳を詰めて耳元まで顔を赤く染めているあたり、相当恥ずかしかったのだろう。

まあ、暮葉にだって悪気はなかった。

それにあの時は事故とは言え、暮葉の裸を見てしまった上に一緒に入浴までしちゃった俺も悪いしな。

「大丈夫、怒ってなから元気出そうよ。でも、もう恥ずかしい事は言うんじゃないぞ？」

「はい。ありがとうなのです、けーすけ様……っ！」

「お兄ちゃん。今度ぜえーったい葵と一緒にお風呂——」

「却下！ 一人で入れ！」

「ええー！ 大切なお兄ちゃんの息子さんを洗ってあげようと思ったのに！」

「汚すの間違いでしょ！ とにかく葵は少し黙りましょうよ！」

ダメだこの変態妹、早くなんとかしないとホントに一生彼氏が出来

ないぞ。

まあ、何はともあれ誤解も解けたし別にこれでいいや。

問題は危うく忘れる所であったが、部室で全裸で立ちつくしている浅間部長である。

このおバカ部長はどうして全裸なんだよ、しかも部室で。

「ふんふふん♪ ふんふふん♪ ……ん、どうしたんだい皆の衆？」

「どうしたじゃねーよ！ 部長はなんで全裸なんですか!？」

「いや、なんとなく脱ぎたくなる時ってあるじゃないかい？」

すげえ。全裸で、しかも真顔でこんなことを言っているよこの部長。カッコいいようなカッコわるいような。でも常識的に考えてこれは……。

「ねーよそんなもん！」

「このエロスティックバイオレンス！ 早く死ねよな！」

「部長……最低ですっ」

「何故だ。どうしてボクの意見は反対される？ 一体ボクはどこで服を脱げばッ！」

……いや。

それ以前にこんな所で服なんて脱ぐなよ。

しかもここには男の毒牙を知らない、いたいけな女の子が4人もいるのに。

「部長さん。早く服を着た方がいいのですよ？」

「そーですよ！ お兄ちゃんより小さい癖に生意気なのですよ！」

……葵、コイツはどうして俺のサイズを知っているんだ。

俺、知らない間に実の妹に寝込みを襲われているのかな。

不安になってきたし、今度から部屋に監視カメラでも設置しておこうかな？

「全く……裸になって何が悪い！」

……いや、悪いだろ。

ガラパゴス諸島で全裸になっても、もしかすると怒られないかもしれないけど……日本じゃ犯罪です。

しかも、そのセリフどこかで聞いた事があるんですが。

「……とりあえず部長。今なら通報しませんから服着ましょうよ」

「やれやれ……裸になれないんじゃヌーディストが犯罪者みたいじゃないか」

脱ぐならヌーディストビーチにでも行ってください。

合法的……なのかはわからないが、低いリスクで女子の裸が見放題だぞ。

まあ、ああいう所にいる人達はきっと経験豊富で、しかも鍛え抜かれてる人達ばかりだろうけど。

とにかく俺達はその後、部長に服を着てもらうためにあの手この手の交渉術を用いた。

結局この日の部活は部長を説得するだけで終わってしまった。実に残念な一日である。

とりあえず、今日一日で俺の中で部長の評価がガクンと下がりました。

……しかし、こんなに馬鹿な事をしていても、俺の頭の中からたった一つの単語が中々抜けない。

“超能力者”。畜生、一体どういう事なんだよ——明智！

## 第57話、自己防衛本能【モザイク】（後書き）

後書きトークコーナー

伊吹「結局超能力ってなによ？」

圭介「シラネ。レベル0からレベル5まであるんじゃないの？」

伊吹「圭介、それどうせアンタが見てるアニメの話でしょ？」

圭介「だってねえ？ バラ・ゲラーは胡散臭いしねえ？」

伊吹「だからって二次元に走る、普通？」

圭介「あたりまえだ！ 超能力なんて二次元以外にありえない！  
どうせなら俺はヒロインを簡単に攻略できる超能力が欲しいな」

伊吹「な、なによそれ……？」

圭介「フフフ……そんな能力さえあれば。俺は某落とし神にも匹敵  
するギャルゲーの神になれる！ フフフ、フハハハッ！」

伊吹「ダメだ。圭介の厨二病モードが発動しちゃったわ……」

暮葉「けーすけ様！ ゲームのキャラがエターナルフォースブリザードなんて技を覚えたのです！」

## 第58話、超能力者

放課後。私、明智凧紗は自宅とは正反対の方向に向かっていた。

ここは古宇坂市でも南端に近い所。

別にここら辺に私が通っている塾とかがあるわけではない。

そもそも私は塾なんて、佐井学園に入る前以外には行った事がない。だったらなんで私がここにいるのか。それは——普通とは違う人物を探しているからだ。

「超能力者……」

私と同じ存在。でも、結局その超能力者は誰なんだろうか。

私には全然わからない。予想のしようがない。

でも間違いないんだ。木下のような魔法使いがそう何人もいるとは思えない。

だからといってどんなに優れた殺し屋でも、あんな完璧な殺しができるとは思えない。

だったらあの死に方は間違いなく超能力者。それもかなり高レベルな超能力を使う奴の仕業だろう。

……けど、一体誰が？

佐井学園には5人ほど、軍隊を相手にしても負けないような超能力者が在籍していたはずだ。

そのうちの一人は私も会った事がある。

確か……この世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る。

チートのような能力を使うようなヤツだった。それでも学園では2番目だったけど。

……やっぱりその波を操る奴が犯人なのかな？

アイツ以外の5本指なんて、精々写真で見た容姿と使える能力くらいしかわからないぞ。

でも、私の中で一番怪しいのはやっぱり、波を操るチートな超能力者だ。

アイツ以外に考えられない。あんな奇妙な死に方をさせれるヤツなんて早々いないぞ。

それに……アイツの性格なら、普通に汚れ仕事もやってしまいそうだよ。

あれ……なんでだろう。私はいつのまにか探偵のように推理をしていた。

「……ん」

推理をしながらなんとなく周囲を見回していると、家と家の間の狭い道路が視界にはいる。

どうしてだか、その道路に何かが引っ掛かる。何かはわからないけど何か引っ掛かるんだ。

どういうわけだかわからないけど、まるで喧嘩でもしているような音が聞こえるからだ。

……だからなに。超能力者が無国籍者を殺しているとは限らない。ただの不良の喧嘩かもしれないけど……私は風紀委員、些細な喧嘩でも見逃す事ができない。

そういう仕事を日常的にしているから。たとえ他所の学校の生徒でも放っておけない。

——そんな正義感から動いてしまった私。そんな行動が——真実を知るキツカケになってしまった。

「……………っ」

——私は只管狭い道路を歩き続ける。

滅多に人が通らない上に、やっぱり不良のたまり場になっているせいか、ブロック塀は落書きだらけ。

煙草の吸殻やビールの空き缶、袋や吐き捨てたガム。そして武器のような何かの残骸。

……本当に汚いな——ん、ちょっと待って。どうして武器の残骸みたいなのが転がってるんだろう？

緊張で喉がつまる。それでも私はこの足を止める事はなかった。再び歩み始めた私。延々と続く汚い道路……ま、待て。

「こ、これ……血痕？」

どうして血痕が塀に……？

不良が喧嘩して、怪我による出血が染みついたのならわかる。

でも……この血の量は明らかにおかしい。しかもその血はこの道の先まで続いている。

……一体、どういうことなんだろう？

恐る恐る足を進めてみると、そこには——

「…………ッ！」

道の真ん中で一人寂しく立つ人の下に、何か生々しいものが散乱している。

どこまでも紅くて、ぐちゃっとしていて……所々紅以外のピンクっぽい何かが散乱している。

本当に生々しい。まるで何か生き物を隅々まで解剖したかのようなだ。



……でも、これは解剖じゃない。これって……ほ、本物の……っ？

「お、うげ、え……っ！」

散乱しているもの——それは人のパーツ。つまりそれはバラバラ死体だった。

ぐわっと、喉に何か……吐き気がこみ上げてくる。

だ、ダメだ……吐いちゃダメだ。死体なら数日前に見たじゃないか。……でも、あの死体はまだ完全体。ちゃんと人の形はしていた……というよりもほぼ無傷だった。

でも今回は違う。あまりの損傷にその人が誰だったか、サッパリわからない……っ。

「アア……？」

その時、死体の前に立っていた人が振り向いてきた。

どう見ても少年だ。身長は大体私と同じくらい。肩に後ろ髪が当たるまで伸びている白髪。

肌も白く、瞳の色まで紅く……お世辞にも強そうには見えない。

何より不思議なのはその少年。上こそベージュ色のTシャツだったものの、穿いているスポンはやや緑っぽい佐井学園の制服そのものであった。

……こ、コイツが……連続殺人事件の犯人の超能力者……？

「そ、そこでなにしてるんだよ……お前っ？」

「なんだアアイツ？ オレが潰すリストにあんなヤツは登録されてねえハズだ」

その言葉を聞いた瞬間、私はいつでも戦えるように身構える。

……でも、少年はただ、歪んだ笑みを見せつけるのみであった。

「お、お前か。最近無国籍者ばかり連続で殺している……超能力者は！」

「アア？ ……ヘッ、よくオレが超能力者だってわかったな。オマエ何者？」

「あたりまえだぞ。私だって超能力者だし……元佐井学園の生徒だぞ」

「へえ、オマエも超能力者だったのか。そりゃ失礼したねえ」

案外アツサリ自分が超能力者である事を認めた。

……でもなんで。なんだか馬鹿にされているような気がするのは……なんで？

「お……お前っ、何者？ 波を操るヤツとは全然違うな」

あの男は小柄な少年じゃなかった。

もっとこう……藤島よりも身長が高くて金髪の男だった気がする。

「アア？ ……チッ、あのクソ野郎とオレを一緒にするなよ。オマエも佐井学園の生徒ならオレの事知ってるだろオ？ さて問題です。佐井学園で最も成績が優秀な人物と言えば一体誰でしょうか？」

「……っ！ も、もしかして……っ！」

「わかつちまった見てえだなあ。答えは早川悠に決まってるよなア？」

早川悠……うん、名前だけなら聞いた事がある。  
佐井学園で最も成績がよくて、その上一番完成された超能力者だ  
という……あの。

「なんで……成績優秀な優等生のハズなのに、どうしてこんな事を  
……？」

「簡単に学校を辞められる、オマエのような低レベルの超能力者は  
羨ましいなア。ンで、オレがこうして特異点を潰してんのも、すべ  
てはオレの為ってわけだ」

「それって……すごく個人的な理由じゃないか！ そんな事の為に  
人殺しを働いているのかっ!？」

私は、早川のくだらない理由を聞いてしまった。

そのせいだろう。怒りが腹の底から込み上げてくる。

その怒りを言葉にし、いつの間にか私はそれを早川にぶつけていた。

「オマエのように簡単に辞めれたヤツには、理解できねェよ」

早川悠……くだらない事の為に人殺しを続ける極悪人。

コイツを止めなかったらそのうち、無国籍者の木下の命が危ない。

木下は……私の友達だ！それから木下がいないと……藤島やその友  
達も絶対に悲しむ。

それと、これ以上早川に無駄な殺生はさせない！

「早川……！ 火傷したくなかったら帰れっ！」

私はそう叫びながら、パイロキネシス発火能力で両手に炎剣を作りだした。

燃えあがる双方の剣は2mの長さを誇る。コイツで早川を斬れば無事では済まされない。

私は勢いよくアスファルトを蹴り上げ、素早く早川の懐へ入り込む。……早川って馬鹿なのか。何も動こうとしない……隙だらけすぎる。どんな素人でも殴れるくらいに。

とにかく幸運だ。この間合いじゃもう早川に避ける術なんて――

「……あ、はっ！」

「ん——っ！」

刹那、早川が気味の悪い狂った笑い声をあげると――信じられない事に双方の炎剣が消えたのである。

……強制的になんらかの力で炎が消された？

私は自分で能力使用をやめたわけではない。それなのに炎は消えてしまった。

しかもなんだったんだろう、今の一瞬感じた息苦しさは。

まるでそこに酸素がなかったかのようだった――

「ど、どうなってる……んだ？」

「驚く事はねえだろ？ ただオマエの周りの酸素濃度を0にしただけだあ……迷惑のかからねえ消化方法だろ？」

「くっ……！」

酸素濃度を0に……コイツ、酸素濃度の調整が出来るのか。

だとしたら、私の発火能力は非常に相性が悪い。バイロキネシス

つまりコイツに超能力は通用しない――なら！

「ふっ！」

さっきのお返しだ。こっから鳩尾でも突いて呼吸困難にしてやる。  
生きる苦しかったんだぞ。その苦しさをお前も味わってみろ――  
！

――しかし！

「あ、ぐあ！」

な――んで？

私は早川に触れる事さえできなかった。拳は早川の鳩尾ギリギリに  
まで迫っていた。

でも触れてはいない。だけどなんで……どうして私は吹っ飛ばされ  
たんだろう？

一瞬すごい風みたいなのを感じたけど……一体早川は何の力で？

「残念。やっぱり同じ超能力者でも、オマエ程度じゃこのオレの相手  
にはならねえなあ」

「……こ、このっ！」

「……行けよ、オマエみたいな小者なんざ眼中にねえんだよ」

こ、こいつ……完全に私をナメている……っ！  
でもなに……この止まらない震えは。

なんなんだ一体……私と早川の何が違うんだよ……っ！

「……っ……っ」

「ハッ、もう戦意はねえな。じゃあ、オマエから行かねえ見たいだからオレはもう行くわ」

「……っっ……っ」

「ちなみにイイ事教えてやろうかア？ この事言ったら殺しに来るから……そんな時はヨロシク」

早川悠はそれだけ言い残し、誰かのバラバラ死体乗り越え、この細い道の奥へと消えて行った。

……怖い、震えが止まらない。どうなってるんだよ。

とにかく一つだけ確実に言える事がある。間違いなく早川は私の御先祖様よりも——強い……っ！

……私はそんな事を考えながら、しばらく死体の前で立ち尽くして  
した——

## 第58話、超能力者（後書き）

後書きトークコーナー

千早「あ、あれ？　今日は藤島先輩……いないんですか？」

暮葉「もきゅう……けーすけ様、ゲームにハマっちゃいまして」

千早「ゲーム好きなのですか？」

暮葉「たまくにやっています。でもけーすけ様は熱中するとやり込むタイプなのです！」

千早「あはは、いますよね。私もその……趣味は熱中すると止まらないですっ」

暮葉「わかります！　拙者もやめようと思っても中々やめられないのです！」

千早「葵も言っていました。その……せーぶぼいんと……でしたっけ？　それがあっても何故かやめられないって」

暮葉「わかります！　セーブポイントがあってももう少しだけ続けたくなる事あるのです！　そうしているうちに時間が経っちゃうなんてよくあるのです！」

千早「木下先輩も……ゲーム好きなんですか？」

暮葉「葵さんに教えてもらっていいこう、ハマっちゃったのです！」

千早「あはは……っ、藤島兄妹ってホントにゲーム、好きなんですね……っ！」

伊吹「……あれ、なんでだろう。圭介がいないとこの後書きトークコーナーの会話内容、かなりマトモな気がするわっ！」

※圭介は話がおかしくなる原因であった。



## 第59話、夜……そして

“違う。藤島は多分平気だと思うけど……あ、危ないのは多分木下だ”

暮葉が危ない……かあ。確かに暮葉は無国籍者だよなあ。

思えばアルファ隊ってすごいよな。よくそんな状態の暮葉を初芝に入れたものだ。

大した試験もやらなかったらしいし。全く、あの特殊部隊は色々な意味で謎の組織だぜ。

でもいいんだろうか。異世界でロジーナの国籍は持っているのだろうが、この世界では暮葉は無国籍扱い。今まで考えた事がなかったけど、これからの生活とか大変なんじゃないだろうか。

異世界の記録なんて当然無効だし、やっぱり日本の国籍を取得させたほうがいいのかな……。

でも難しいかなあ。帰化するという方法はあるけど、アレって結構条件が厳しいらしい。

「……はあ、なんだか………」

考え事をしていたら外の空気が吸いたくなってきた。

たまにあるよね。家の中にいて無性に外の空気が吸いたくなる事って。

今がまさにそれだよ。こういう時は素直に気分転換するのが一番だな。

——と、いうわけで俺は誰にも何も言わず、ただ気分転換の為に外に出た。

外に出たからと言って何かをするわけではない。どこかに行くわけでもない。

ただ、こうして外の空気を吸うだけである。

晩御飯の時間もあるからな。外に出ていられる時間はよくて30分くらいだろう。

でもどうせ10分もしたら飽きるし、このまま玄関の前でボーッとしよう。

「……あ、もしかして圭介？」

「ん？」

どこからか、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

誰だろう、多分この近所の人だろうから伊吹だとは思うが……でも伊吹にしては声が。

「やっぱり圭介。じゃあここが藤島家であってるんだな！」

「あれ、あかり？」

意外や意外。伊吹かと思いきや、俺の家の前を通っていたのはあかりであった。

輝くようなだ橙色のツインテール、ツンとした紅い瞳、小柄な体躯で小動物のような美少女。

そして何を入れているのだろう、とても大きな鞆を肩からさげている。

た。

「おっす、めっちゃ久しぶりだな！」

「めっちゃって、さっき部活で会ったじゃないか」

「にやははは！ まーまー、細かい事を気にしたら負けなんだからな！」

「まあ、今日は気にしないでおくよ。それよりどうしてウチの前にいるんだ？」

確か、浅間家って我が家から遠かった気がする。  
ていうか、初芝高校から見て思いっきり逆方向だった気がするぞ。

「ん、そんなの下見に決まってんだろ」

「下見？」

「あたい！ そのうちこの家に遊びに来るからな！ その下見だよ、それくらいわかれよな！」

だからお前はどこの魔装少女だよ。

まあそはともかく、あかりが我が家に遊びに来るだど？

以前は死んでも嫌だゝとか、そんな事を言っていた気がするのになあ。

思えばあかりとはアレだけ仲が悪かったのに、短期間で随分と仲良しになったよな。

男みtainなノリの子だし、正直言うとなり友達みたいで話安くて面白いヤツだ。

それなのに時々女の子っぽくて、可愛くて……何より中身は馬鹿だけれどもいい子。

俺もあかりは結構好きだ……も、もちろん友達としての意味だぞ！それはともかく、俺の家に遊びに来るなんて言うものだから、ついそんな事を考えてしまったよ。

「そうか。俺も暮葉も葵も、みんな待ってるからいつでも来ていいぜ」

「んみゃ！　ありがとな！」

あかりは満面の笑みを浮かべ、元気よくお礼を言ってきた。それにしても、時間の進みというのは早いんだな。

こうして話しているだけでも、既に1分近くが経過していたのである……。

「葵さん！　拙者ちょっと出かけるのです！」

「えっ？　く、クーにゃん！？　もうすぐ晩御飯だよ！？」

「多分すぐ帰ってくるのです！　ご飯は作りましたのでけーすけ様と食べていてください！」

その時、家の中から暮葉と葵の声が聞こえてきた。

大声でなに話してんだろうアイツら。屋外だからよく会話を聞き取れなかったぞ。

……と、そんな事を考えていた――

「あ、けーすけ様！　拙者ちょっと出かけるのです！」

「え？　ちょ、暮葉！？」

「木下先輩、なんか急いでるなっ」

何が起こったのやら、どこかへ駆けてゆく暮葉は必死そうな表情をしていた。

アイツ、もうすぐ晩御飯なのに。折角自分の分まで作っていただろうに。

なのに、どうしてあんなに血相変えて夜闇に包まれた古宇坂の街へと消えたんだろう。

「どうしたんだアイツ？」

「さあ、でも急用を思い出したかのように必死だったような……」

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！」

今度は葵が血相を変えて家から飛び出してきた。

しかも葵さん、それパジャマじゃないですか。

ネコさんがプリントされている葵のパジャマ……まるで子供そのものである。

ちなみに我が家は晩御飯を食べてから風呂に入る日と、風呂に入ってから晩御飯を食べる日の両方がある。要するに、統一性の全くないバラバラというわけだ。

「葵、どうしたんだ？」

「あ、アレ？　どうしてあかりもいるの？」

葵は驚きのあまりに目を白黒させていた。だって、そこには普段は

いないあかりの姿があったから。

「たまたま通りかかったんだ、あとさっき木下先輩が全力疾走でどつかに走って行った!」

「そ、そうだよソレだよ! お兄ちゃんお願い、クーにゃんを追って!」

「え、俺が?」

「お願いお兄ちゃん! ニュースを見た瞬間飛び出しちゃったクーにゃんを追って! 葵、クーにゃんがいない晩御飯なんて嫌だよ!」

確かに。日常的に一緒に食べているヤツが一人でも欠けていると、それはそれで寂しい気分である。

それにしても不思議だなあ。ニュースを見た瞬間飛び出したって…。

……なんだか、嫌な予感しかしねえな。

「葵、そのニュースって何のニュースだ?」

「えーっと、確か連続殺人事件のニュースだったような……」

「れ、連続殺人事件!?!」

「それって最近こちら辺で起こってるヤツだろ? あたい犯人を捕まえないな!」

正義感溢れるあかりはともかく、暮葉が連続殺人事件のニュースを見て飛びだして行った?

暮葉とは全く関係のなさそうな事件なのに、なんだって暮葉がその  
ニュースで……。

しかも暮葉は無国籍者。殺人犯殺害しているのも主に無国籍者。  
暮葉が一番危ない存在だろ……それなのにアイツは……っ！

……ええい、飛び出した理由なんてどうだっていい。追って暮葉の  
所に行かないと！

「わかった。俺は今すぐ暮葉を追う！」

「ごめんねお兄ちゃん！ あ、後でキスするからっ！」

「圭介！ あたしも協力するからな！」

「気持ちはいがたいけど、相手は下手すると連続殺人犯だし危険  
だぞ？ 大丈夫、悲劇になる前にアイツを連れ戻すから。あと葵、  
キスとかはいらないからな」

「そ、そんなっ！ 妹の愛を否定されてしまったよ!？」

妹の愛って……お前の愛は色々な意味で歪んでるわ！

まあバカ妹は放っておいて、そんなことよりも今は暮葉である。

俺は、殺人犯に殺される可能性のあるアイツを一人にしてはいけな  
い。

むしろ今まで助けてくれたお礼に——アイツを守るつもりで行か  
ねえと！

「それじゃ、ちょっくら行ってくる」

「圭介！ ホントにあたしも一緒じゃなくていいのかよ!？」

「大丈夫だ、問題ない！」

「気をつけてねお兄ちゃんっ！」

「おう！」

わかってるよ……気を付けねえとな。下手すりゃ連続殺人犯と遭遇するかもしれねえ。

相手は不可解な方法で人を殺しやがる超能力者だ。

そんな危険な相手と暮葉を……絶対に戦わせたくない！

相手がどんなヤツかは知らないし、もしかしたら現れないかもしれない。

出来れば後者のほうを望みたいが、それがもし敵わなかった場合は

———  
今までの恩返しに、俺が連続殺人犯と戦ってやる！



## 第59話、夜……そして（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「あー、暇だなあ……」

伊吹「あら、今回は圭介がいるわよ？」

風紗「これは荒れるパターンだな」

圭介「どうして俺をトラブルメーカーみたいに扱うんですか二人とも!？」

伊吹「だって前回でわかったのよ。あんたがいないと如何にこのコーナーがマトモなものなかって」

圭介「ひどくね!？ それって遠回しに俺に消えろって言ってるんじゃないね!？」

純奈「大丈夫！ クソ介が消えたら町屋君呼ぶから!」

圭介「だから町屋君って誰だよ！ いい加減正体見せろよ町屋君!」

※謎の人物、町屋とは一体何者なのであろうか……!？」

圭介「カッコいい予告風にすんじゃないやねえよ！ BL展開は俺がお断りだ!」

## 第60話、衝突

拙者は今、古宇坂港の工業地帯にいます。

古宇坂港は重要港湾に指定され工業港として発展し、事業所の数でも100を超える……らしいのです。

全部拙者が調べた事なのですが、正直合っているのか不安なのです。それより、どうして拙者がこんな所に来たのか。それは――

「ここにいますよ！ わかってるのです、出て来てください！」

拙者は連続殺人事件のニュースを見た後、けーすけ様の家を飛び出してしまったのです。

……でも、それにはちゃんと理由があるのです。

今は仲間の危機。だから……拙者が殺人犯を成敗するのです。

実は今回の事件について、アルファ隊の上から通達があるのです。

“各個で自衛戦闘を行いつつ、特隊員は敵能力者を抹殺せよ”

特隊員とはアルファ隊の中でも、特に戦闘能力の高い隊員の事を示す隠語なのです。

一応拙者も魔法はあまり得意ではないのですが、この剣術のおかげでそれに分類されているのです。

古宇坂に特隊員なんて……アルファ隊の人数的に拙者しかいないのです。

それどころか、通常の隊員さえこれまでの戦闘で皆亡くなってしまいまいた。

……許せません。大切な仲間を……という理由なのでしょう。第一、相手はサヴィエトの魔法使いじゃないらしいのですが……一

体誰が。

……今、拙者がここに立っている理由。

それは殺人犯のものとされる魔力を追ってきたのであります。

「ハッ……次のオレの標的はオマエってかア？」

……その時、使われなくなった引き込み線の上を怪しげな人が歩いている。

闇から現れた人は全体的に白いイメージで、でも着ている服はベージュに緑色のズボン。

すごいのです……その、髪も伊吹さん以上に真っ白です。

瞳も植えた狼の血の色のような紅く染まっているのです。

なにより、あの不気味で歪んだ笑みが……。

「ついに……現れたのですねっ！」

拙者は鞘に手をかけ、一期一振を抜く準備をする。

にもかかわらず、相手のあの人はただどこでも狂気に満ちた、そんな笑みを見せるだけ……。

「ヘエ……オマエ、今までの特異点とは違うな。刀使いなんて初めて見た気がするなア」

「戦う前に一つ教えて欲しいのです。どうしなのですか……どうして拙者達、アルファ隊の人間ばかりを襲って殺害しているのですか！」

拙者は最初から知っていたのです。だって……アルファ隊から連絡があったのですから。

けーすけ様達は絶対に知らないでしょうけど、そのほうがいいのです。

こんな事にけーすけ様達を巻き込みたくない。これは拙者達だけで解決しなきゃいけない事なのです。

だから……この件に関してだけは、けーすけ様達に触れさせてはいけないのです！

「まあオマエもどうせ死ぬんだからな。オマエには特別に説明してやってもいいかなあ？」

拙者が理由を尋ねると、相変わらず狂気じみた笑みを浮かべるその口から、相手はそう口にしたのです。

更にあの人は一度舌打ちをした後、さっきの話の続きをし始め。

「一応オレが在籍している、佐井学園って所の命令なんだよなあ。最近地球で暗躍している魔法という怪しげな能力を使う無国籍者の集団。オレ達はソイツらを特異点って呼んでるんだけどなあ。ソイツらを潰すようにオレに命令があつたんだよ。条件付きでなア……」

「条件……？ 一体、何の条件なのですか？」

しかも、拙者達が異世界人って事には気付いていないのです。

まあ、そのほうが拙者達アルファ隊にとっても都合がいいのです。

そのほうが……拙者達もこの世界で活動しやすいですからね。

「なあオマエ。学校ってのはさア……成績優秀者を手放したくはねえんだよな。オレは今すぐにでも佐井学園ってのを辞めたいんだけど、学校がソレを決して許さねえんだよ。でも、学校はオレが辞める為の条件を出してきた。それがオマエら特異点を全員残らずブツ殺すって事だア」

「まさか……そんな理由で拙者達を!？」

ただ学校がやめたい。

そんな事の為に佐井学園という、普通の学校じゃありえない殺人命令を受け入れた……。

そんなの、絶対オカシイのです! 大体そんな命令を出す学校自体がオカシイのです!

やっぱり……戦友達<sup>なかま</sup>を殺したヤツは狂っているのです!

「オマエにはエリートってのがどんなかわからねえんだな。まあいいわ、オレが佐井学園を辞める為には……どうしてもオマエらに付き合ってもらわなくちゃいけねえしなあ。悪いけど早く死んじまえよ」

「……そうは、いかないのです!」

その時、ついに拙者は鞘から一期一振を抜きだしました。

もう我慢の限界。あんなに単純な理由で、しかもあれだけ楽しそうに戦友が殺されていたとわかると……。

腹の底から怒りが沸いてきて、どうしようもなくなっちゃったのです!

「やっぱオマエも戦うの?」

「あたりまえなのです! 拙者は……皆の仇をとり。そしてまだ殺されていない皆を守る為にここに立っているのです!」

「ヘエ……いいヤツじゃねえか。そういうヒーローもガキの頃は憧れたなア」

「悪いですけど、貴方はヒーローとは逆なのです！」

「わかってんだよそれくれエ……さてと、ンじゃあオマエが戦意を表明した所で、そろそろ地獄の殺し合いデスマッチを始めてえんだけど、覚悟はできてんだよなあ？」

「ええ……絶対に貴方を倒すのです。仲間の仇、皆を守る為……絶対に負けられない、貴方を許せないのです！」

ついに拙者は足から腰のあたりにまで力を入れ、いつでも飛び出す準備を終えた。

後は……火蓋が切って落とされるのを待つだけ。  
でも、それももうすぐのような気がするのです。

何故なら……もう必ず拙者達は衝突するという雰囲気、この場が包まれているからなのです。

「そっか……んじゃあ、そろそろおっぱじめるとするかア」

なんで……拙者にはわからないのです。

殺人がそんなに楽しい理由が。どうして人を殺しているのに……あんな狂気じみた笑みを浮かべれるのか。

心から楽しんでいるのでしょうか。それとも、ああしないと自分が崩壊してしまいそう。

だから凶悪そうな顔を作っているのでしょうか。

どっちにしても、やっている事は絶対許せない事なのです。

拙者は必ず、あのやたら強いと噂のヘンテコ能力者を……倒さなくちゃいけないのです！

「……さて、んじゃあ……行くぞオラァっ！」

相手の人が拙者に向かってくる。イキナリ間合いを詰めてくる相手。拙者は相手の攻撃を避ける為だけにジャンプし、そのまま積み上げられたコンテナの上に乗る。

うわっ……錆びている。このコンテナも、しばらく使用されていないですね。

「ヘエ……それは魔法か？ それともオマエの身体能力か？」

「避けようと思えば、いつでも貴方の攻撃なんか避けれるのですよ？」

「そっかぁ……大した自信じゃねえか！ ぎゃは、じゃあその自信をもう少し俺に見せてくれよ……っ」

そうですね……避けているだけではどうにもなりません。なら、今度は拙者から攻勢を……仕掛けてみるのです！

「いいですよ……」

拙者は先ほどよりも力強く、ぎゅっと握りを握りしめた。

そして、出来るだけ力強く相手の歪んだ笑みのその顔を見て――

「見せてあげます。今までの皆様の苦しみを……拙者の怒りを貴方に全てぶつけてやるのです！」

「最高にいい気分になってきたぜ……来いよ、オマエら今まで弱過ぎたから……オマエはこのオレを少しでも楽しませるように努力でもしてみろっての！ ふふふ……あはは、あっぎやはははっ！」

拙者は飛び降り、相手は駆け出し……。

——こうして拙者と殺人犯は“衝突”したのです。



## 第60話、衝突（後書き）

後書きトークコーナー

葵「はわわっ！　く、クーにゃんが戦っているよ！？」

凧紗「珍しく真面目な展開だな。それにしても木下……大丈夫かな？」

葵「まずいよ、クーにゃんってそもそも強いの！？」

凧紗「うん、まあ……私よりは遥かに戦闘力高いと思う」

葵「と、とにかく葵はクーにゃんを応援します！　頑張ってくださいクーにゃん！」

伊吹「……やっぱり圭介がいないとこのコーナー、マトモだわ」

## 第61話、早川悠

連続殺人事件のニュースを見た後、すぐに飛び出したと言う暮葉。彼女を追うために、俺は古宇坂港南岸から隣の街に掛けて存在する工業地帯の近くまで移動していた。

ここはまだ、工業地帯の近くに存在する住宅街なので、全然工業地帯という感じもしないのだが。

というか、俺はここに来ててもよかつたんだろうか。

暮葉が工業地帯にいるって保障すらねえのに……。

万が一違う所にいて、もう連続殺人犯と出会ってしまったとしたら……。

……ってダメだ。そういうネガティブな事は考えないようにしよう。

「それにしても……」

古宇坂の南部にも初めて来たもんだ。

古宇坂市民だからといって、すべての地域を制覇したわけでもないし、古宇坂博士というわけでもない。

多分、俺のこの街に関する知識なんてオタクの小学生以下のものだろう。

そんな程度の知識しかないからこそ俺は今、とても驚いているんだ。工業地帯が近いのに、存在しているのはただの住宅街……こんなの予想と全然違うよ！

「はぁ……」

思わずため息をついてしまった。

畜生、俺も暮葉みたいに魔力を感じ取ることができれば……。

こうして考えてみると、アイツってやっぱり役に立つヤツだったん

だな。

今までアホの子扱いしてごめんね暮葉さん。

「ふじ……しま？」

「ん？」

どこからか、俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。  
聞きとるのがやっとなくらいに小さく、震えるように掠れたその声の主は。

「……明智？」

長く凛々しい黒髪のパニーテールに、ツンとした蒼眼の肌白で綺麗な女の子。  
――明智風紗と偶然出会ってしまったのであった。

しかしどうしたんだろう。今の明智はなんだか元気には見えないぞ？

「藤島。どうしてこんなところに……？」

「いや、なんつーか……誤魔化しても仕方ないか。飛び出してしまった暮葉を追い掛けてたんだよ」

「木下をか……？ しかも木下が飛び出したって……」

「アイツ、どういうわけか連続殺人事件のニュースを見た直後に飛び出しちゃったんだよ」

「……ッ！」

“連続殺人事件”という言葉を使った瞬間、明智が突然ビクンと身体を震わせた。

それと同時に顔色も悪くなり、目は見開かれ口も半開き状態になる。瞳さえひどく覚えているような感じである。

ちよ、これは絶対オカシイ……どう見ても何かあった感じだ。

「ちよ、どうしたんだよ明智。何かあったのか？」

「れ、連続殺人事件……藤島っ、ヤツには関わるな！　すぐに家に帰るんだ！」

「すぐに帰れって、それじゃあ暮葉を連れ戻せねえじゃないか」

しかも明智が言う、ヤツって一体誰の事を言ってるんだよ。

連続殺人事件と関係しているヤツだという事は、流石の俺にもわかった事だけど。

「そ、そうだった……それじゃあ早く、木下を見つけてうちに帰れ。木下の命が危ないっ」

「ちよっと待て。一体どういう事なんだよ」

「……っ……っ」

相変わらずおびえ続ける明智。その姿はいつものクールなものとは違い、やけに弱々しい。

こんな時にこういう言い方もどうかと思うが、その姿は正に女の子であった。

あの明智が怯えている……待てよ、それってただ事じゃねえに決まってる。

知りたい。明智がどうしてこんなに怯えているのか。連続殺人事件と何か関係があるのか。

それがもし、事件解決のカギになるってんなら――

「なあ、辛いのはわかるよ。でも……俺はこの事態を何とかしたいんだ」

「む、無理だ……光秀なんかとは格が違う。あ、アイツはホントにやばいぞ……っ」

「そのアイツとか言うヤツは一体誰なんだ。一連の騒動と関係のあるヤツなのか？」

「は……犯人。この事件の犯人だぞ……っ」

重く閉ざされた口から久々に放たれた言葉。

その中には確実に、犯人という言葉が含まれていた

――犯人……え、それじゃあ……。

明智がこの一連の騒動を巻き起こした犯人の顔を知っている？

「……教えてくれ。その犯人ってヤツは一体どんなヤツなんだ」

「……っ……っっ」

「頼む。辛いのはわかる……でも知りたいんだ。無意味な殺生をしやがるクソ野郎の事を」

「……わかった……全部、話すから」

「わかった……っ！」

……いよいよ、か。

いよいよ一連の事件を起こしやがった犯人の、目撃情報が手に入るのか。

緊張してきたな……でも、しっかり聞かねえと。

なんたって今回は暮葉の命もかかっているかもしれないから――

「佐井学園……って、藤島も聞いたっけ？」

「ああ。進学校と名乗りつつ、超能力者を育成してるって学校だろ？」

「うん。そこには“五本指”っていう、学校内で強い超能力者5人の事を指すんだけど……反応はその中の一人で、しかも五本指の中でも一番すごい存在なんだ」

「一番すごい存在？」

それってつまり、最強って事だよな……。

えーっと。こんなシリアスな時にオタクな話をするのもなんであります。

……これなんて一方〇行さん？

そのうちソイツは幼女とのフラグでも立っちゃったりって、ミサカはミサカは……げふんげふん！

「……藤島、今しようもない事考えてただろ？」

「す、すいませんっ！ 真面目に聞くから許して！」

「たく、ホントに藤島はしょうがないヤツだ……とにかく、そうい

うヤツがいるんだよ」

最強の超能力者ねえ……。

やっぱりオタクな俺には一方〇行ってイメージしかないけど、実際はどんなヤツなのかな。

って、連続殺人事件を犯している時点でマトモとは言えなさそうだよな。

困ったなあ。一方〇行は正直説教ウニ男よりも好きだけど、現実でああいうのがいると流石に困る。

というか、一方〇行は二次元だからカッコいいんだ。現実だったらただのムカつくヤツだぞ？

「それで、その超能力者の頂点ってのはどんなヤツなんだ？」

「名前は早川悠。見た目は弱そうだけど……実力は化け物だった」

見た目は弱そうなのに実力はバケモノの超能力者の頂点？

オイオイ……それってもうモロじゃねーか！

リアル一方〇行って……とりあえず一方〇行に謝れこのヤロー！

「あ、あのー……もしかしてその早川さん。ベクトル操作とかやってちゃったり……？」

「ん、早川<sup>エアオペレーション</sup>の能力は大気操作だぞ？」

「能力名までモロ似たようなモンだな！　ていうか佐井学園の校長、ぜったいオタクだろ！」

まあ、ベクトル変換じゃなかったただけマシか。

あんなの俺にどうやって倒せと。もしかして木原神拳でもやりやが

れと？

……無理でしょ、あんな神業現実の人間には真似できません。

「でも、ナメてかかると死ぬぞ藤島……アイツには、炎もこの拳も通じないっ」

「な、なんでだよ？」

「アイツは酸素濃度を操作できるし、暴風で膜を作って攻撃してきたヤツを弾き返すんだ……っ」

「結局反射っぽい事はできるのね！」

やっぱりチートだ。ベクトル操作じゃないだけマシかと思った俺が馬鹿でした。

結局ソイツは攻撃を反射できるのか……うわっ、最悪だ。

ていうか、それじゃあどんな異能の力を打ち消す右手がない俺じゃ勝てなくね？

……いや、でも大気操作系の超能力らしいし。きっと何処かに隙があるハズだ。

「それで、無国籍者を襲っている理由は学校を辞めたいから……らしいんだ」

「そ、それだけ……なのか？」

「それだけ……だと思う」

——学校を辞めたい。

なんだよ。確かに人生の中でそういう選択肢もありだとは思う。



だけど、その為に殺人って一体どういう事なんだよ……。

くそっ、ふざけんじゃねえよ……そんな事の為に罪なき人々が殺されてるってのかよ。

そして……下手をすれば今度は暮葉が……。

「……明智、早川の居場所ってわかるか？」

「え？　は、早川に何か……って藤島。ま、まさか……っ」

「そんな事の為に誰かが殺されるのって許されるのかよ。だったらそれは止めるしかねえだろ」

「む、無理だ！　間違っているのは私だってわかる。でも……早川はバケモノなんだ！」

「いいから任せろ……これ以上は何もさせねえ。俺がソイツを止めてやる」

標的の無国籍者の中には多分、暮葉も含まれているハズだ。

多分殺された無国籍者も暮葉の仲間。と言う事はアルファ隊の隊員なのかもしれない。

そうだとしたら、連続殺人事件のニュースを見て飛び出す暮葉の気持ちもわからないでもない。

仲間がどこぞの馬の骨ともわからないヤツに、次々と殺されているんだ。

アイツは仲間想いだから……きっと居ても立っても居られなくなっただろう。

それで、きつとこれ以上仲間を傷つけない為に。アイツは自ら戦場へと向かったんだ……。

……でも、俺は暮葉に傷ついて欲しくねえ。

ついさっき決めた事だ。連続殺人犯——早川悠から暮葉を守るって。今までの恩返しを今してやるんだって——

「ふじ……しま……っ」

「頼む、どこか教えてくれ」

「……わからない。でも、もし木下と早川が戦うなら……戦うなら人が少なくて影も多い港の近くの工業地帯が望ましいぞ」

「わかった……とりあえずそこに行ってみるよ」

「ふ、藤島。待てっ！ やめろ、早川に勝てるわけがない……アイツはバケモノなのにつ！」

それでも俺は、アイツの為に戦わなきゃいけないんだよ！  
酸素濃度をイジくる？ 攻撃を暴風の膜で逆にぶっ飛ばす？

……そんなの、俺の丈夫な体で耐えてみせるよ。

この身体さえあれば……俺は一方〇行だろうが未元〇質だろうが全然怖くねえっ！

俺は、明智の言う事などを無視して……ただ一人、工場の敷地へと走り続けていた。

——そして、走る事数分だった。ついにそこに到着したんだ。  
やけに静かだな……と、フェンスを乗り越えようとしていた。

——刹那、何だろう……戦いの音が聞こえたのだ。

……いる。間違いない……暮葉と早川はここにいる！

## 第61話、早川悠（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「圭介が上○さん化してる!？」

浅間部長「藤島君がやたらとモテるのは、もしかしてそのせいなのか!？」

重原「主人公補正だね。正直主人公補正がひどすぎるのはどうかと思うよ」

大吾「それはそうと、作者は今月赤字らしい」

重原「なんでだい？」

大吾「ゲーセンで高○歩美のフィギュアを手に入れようと悪戦苦闘した結果……玉砕っ!」

浅間部長「バカだ! まあボクは霧○希の枕をゲーセンで手に入れたようとして失敗したけどね」

重原「浅間先輩、家貧乏なんですよね? そういう事していいんですか?」

浅間部長「ハハハッ、あかりに30発くらい殴られたね!」

重原「家計を圧迫してるんですから……文句言えないですね」

大吾「殴られるだけありがたく思え。ホントに嫌なら姿さえ見せなくなると思うぞ？」

浅間部長「……泣きたいっ」

## 第62話、魔法使い v s 超能力者

古宇坂市内にある工業地帯。今は使用されていないであろう操車場は戦場と化してしました。

魔法使いと超能力者……本来ぶつかる事のない両者によって――  
拙者と相手の距離は10mありません。

「えいっ！」

拙者はそれくらいの高さまで飛び上がり、右手に一期一振を握り左手の手のひらを相手へ向ける。

脳内で理想を描き、その理想を具現化させた風を掌の前に起こす。魔法とはそうやって扱うものなのです。

魔力とかいう要素よりも、いかに理想を具現化させられるかが大事なのです。

拙者は理想を具現化させた、ドッジボールの二倍の大きさの風の弾を相手へ放ちました。

それなのに相手は一步も動きません。一体あの相手の人はどういうつもりなりでしょうか――

「ぎゃ、は！」

「う、嘘っ!？」

どこまでも不気味に歪んだ笑みを浮かべる。

それでもなお、あの場所から動かなかった相手に風の弾が直撃した――ハズだったのです。

ところが相手の人に風の弾が当たる寸前、どういわけか風の弾が消滅したのです。

まるで——あの風が何らかの形で崩されたかのように……。

……ですが、その程度で諦められません。拙者は二回三回……何回も風の弾を放ち続けたのです。

でも、さっきと同じように風の弾はアツサリと消されていきます……っ！

「ハッ、なんだよそりゃあ。ワンパターン戦法だなア、そんなんでオレを楽しませられるのかぁ！」

「こ、このっ！」

もう一度、今度の拙者の理想はすごいのですよ。

あらゆる物を吹き飛ばす四大元素のひとつ、風……その風の力を最大限に利用した……。

今の拙者に放てる最大の魔法——！

「んっきゅううう！」

あらゆる物を吹き飛ばせる威力を誇る、風速150mを軽く超える暴風が、渦を巻きながら相手へ突き進む。

どこまでも一直線に、アルファ隊の皆さんの仇を打ち込むかのように——しかし！

——そんな必死の一撃も、というわけだか相手の寸前でかき消されてしまったのです。

そんな……意味がわからないのです！確かに拙者は魔法が苦手です……。

たったのこれしか戦っていないのに、もう魔力なんてものは残っていないのです。

でも……さっきの一撃は普通は避けられない。喰らえば確実に死ぬような威力の暴風だったのです。

それなのに相手の寸前で暴風は完全に消滅した。

どうしてですか……拙者が魔法の扱い方を間違えちゃったのでしょうか……っ。

「ヘエ……オマエ、今の風は中々だなあ。ひよつとしてアメリカで記録された巨大トルネード並だったんじゃないかねえの？　でもダメだなあ……そんなんじゃないこのオレに触れるなんて、百年経っても無理だっつーの！」

「……」

そんなに強い威力の魔法が……どうしてあんなにアツサリ消えちゃったのですか……？

わからないです。拙者には何が何だかさッパリなのです……。

「なんだあ、その困ったちゃん見てエな顔？　オマエ、もしかしてこのオレ早川悠の能力を知らねえで戦ってたんかあ？」

「の、能力……？」

それ以前に貴方の名前すら知らなかったのです……。

早川悠、すごくいい名前……なのに、どうしてこの人はここまで気がふれているのでしょうか？

あと早川的能力って一体なんなのでしょうか……！

「オレは風・空気・気圧といったものの全般を操作できるんだよ。だからオマエの風の魔法とかいうヤツなんざア、オレが風をちよつと操作すりゃあ動かねえでも攻撃を防げるんだよ……」

ポケットに手をつ込み、口元をニヤニヤとさせ、早川は自分の力

を説明していました。

風・空気・気圧……早川は、もしかして大気そのものの操作を自由自在に行えるのでしょうか？

アルファ隊の皆さんがみんなアツサリ負けていたから、ある程度は覚悟していたのですが……。

あの人、バケモノ級に強いのです！

拙者は魔法の扱いは苦手とは言え、それでも一応特隊員のハズなのです。

でも、早川は一度たりとも動いていないのに、苦戦しているのは何故か拙者のほうです。

「要するにお前じゃオレには及ばねえんだよ。さっさと諦めちまえよ？」

「……そうは、いけないのです……っ！」

「アア？」

「貴方なんかに負けるわけには……絶対に行かないのです！」

拙者はそう言い放った瞬間に、一期一振を両手で握りしめた。

もう覚悟は決めたのです……魔力なんてもう残ってないですし、仮に使えたとしても早川は拙者が起こした風を操作してしまう。操作されると風はいとも簡単に消されてしまうのです。

だったらもう手段は一つ——接近戦を挑んでみるのです！

「……ッン！」

拙者は大地を蹴るように飛び出し、ミサイルのように一瞬で早川との間合いを詰めました。



早川は反応に遅れたのでしょうか……全く動こうとしないのです。こういう事でしよう。でも——ハッキリ言ってこれはチャンスなのです。

拙者はこのチャンスを絶対逃しません。隙だらけの敵のこの一期一振で切り裂いてやるのです！

そして拙者は果たすので……生き残ったアルファ隊の皆さんを、けしすけ様を守る事。

そして——殺された戦友なかまの仇討ちを——しかし、刃が触れようとした——！

「もきゅっ!？」

刹那、気付けば拙者は背中を地面へぶつけていたのです。

痛い……背中も痛ければ刀を持っている手首も痛い……。

どうして、なんでですか……今の間合いから避けれるハズがない。というか、早川は避ける素振りなんて全く見せなかったのです。

それなのにどうして拙者が吹き飛ばされてしまったのでしょうか……っ！

「残念、風もダメなら斬撃もダメでしたってなあ」

「……くっ!」

「さて問題です……オレはどうやってオマエの攻撃を防いだでしょうか？」

「……ふ、吹き飛ばされた……風っ？」

「ぎゃは! 中々いい線イクじゃねェかよ! 正解です、オレは一瞬の間に暴風で身体の周りに膜を張り巡らしたんだよ。多分、大和

の46cm砲を受けたってオレはビクともしねえよ」

46cmって……すごい大きさの砲ですね。

拙者の世界では魔力を込めて大幅に強化した小口径砲が主流なので  
す。

ですから、46cmなんてバケモノにしか聞こえないのです。

でも——あの早川悠という男はそれさえも防いでしまうらしいので  
す……っ！」

「オレにとっちあ、日本刀の斬撃を防ぐ事なんぞ造作もねエ事なん  
だよ」

「……………」

どうでしょう、相手はチート級に強いのです……っ！

こんなのには勝てるワケが——いや、待つのです。

一瞬で暴風の膜を張り巡らせる。確か早川はそう言っていたはずな  
のです。

という事はあの暴風の膜は……試してみる価値はありそうなのです！

「……………えいっ！」

咄嗟に、拙者は一期一振を投げつけて突き刺す槍のように投げつけ  
ました。

当たれば普通は最後——人体を真っ二つに斬り裂ける鋭い刃が突き  
刺さるのです。

でも、どうせ早川にはその攻撃は効かないのです。

そんな事は既に計算済み、だから拙者は一期一振を投げつけてみた  
のです。

本当の狙いは一期一振で早川を串刺しにする事ではありません。本

当は――

「ハッ、学習能力がねえなあ！ たった今オレにはどんな攻撃も通じねえって言ったばっかだろォ！」

やっぱり一期一振は暴風の膜に触れた瞬間、弾かれるように吹っ飛ばされてしまいました。

今の間、早川の注意は完全に疾風の如く向かってくる一期一振か、その後方にいた拙者でした。

だから後ろは隙だらけ。攻撃をするなら正に今がチャンスなのです！  
一期一振を反射された――刹那、早川の背後へと回り込んだ拙者は、大きくジャンプをして両足を突きだしました。

――ドロップキック、葵さんと一緒に見たプロレス技の一つなのです。

拙者はそれを――完璧とも思えたのに、僅かに油断をしていた早川に打ち込まうとしました……でも。

「……ッ!？」

残念、ギリギリの所で避けられてしまいました。

……でも避けたのです。暴風の膜を張り巡らす事により、どんなに強力な攻撃を受けても無事でいられるハズの早川が――なんと拙者の攻撃を回避したのです。

初めて早川が見せた動き。一見大した事のないように見えて、その行動には重要な意味が含まれています。それは――早川が常時、攻撃を風で逆に吹っ飛ばす事が出来ないという事を証明したのです。

「……チッ、あの野郎。まさか気付きやがったのか？」

露骨に驚く早川……やっぱり、拙者の読みは当たったのですね！

「見つけましたのです……貴方の、僅かな隙を！」

「……ふふ、ぎゃははっ！ 最高じゃねえかオマエ！ このオレをここまで楽しませたヤツは久しぶりだなア」

何故でしょうか……拙者は弱点を見破ったのです。

つまり、ほんの僅かでも拙者に勝利の光が見えたハズなのです。

でも、早川は相変わらず不敵な笑みを浮かべているのです。

あの狂ったように余裕そうな顔……この状況でどうして出来るのでしょうか？

「退屈しねえなオイ。今までの雑魚が嘘みたいに思えてきた。イイぜ最高に愉快だぜ？ オラア！ もっとこのオレを楽しませてみろよ！」

「……上等なのです。でしたら——！」

拙者は早川に向かうのではなく、そこに落ちている一期一振。

そしてもう一つ、線路の上に落ちている鉄パイプを回収しようと思いました。

その為に拙者は今、早川に背を向けて全力疾走中なのです。

一見危険なこの行為。でも……あれだけヒョロヒョロな身体では多分、拙者の足についてはこれないハズなのです！

「またオレが油断している時を狙うってか。オマエ中々いいアタマしてんなあ……でも一つだけミスがあったな。この作戦はオレがオマエに接近したら何の意味もねえよなア！」

その時——信じがたい事が起こったのです。

早川は一步だけ足踏みしました……それはいいのです。でも、何故か足踏みをした——  
瞬間、早川が砂埃をあげながら信じられない速度で拙者の横に並んだのです——！

「い、一瞬で間合いを詰めた!？」

「なに、ただ風の力で高速移動をしているだけだ。オマエだって魔力が残ってればそれくらい出来るんだろうがア！」

叫びながら放たれた一撃——咄嗟に両腕でガードをしようと試みるも、アツサリそのガードは崩され、拙者の顔面に早川の拳が突き刺さってきました……っ！

それもただの拳ではありません。まるで——殴る時さえ風を利用しているような——

……気付いた時には、拙者は既に仰向け状態で倒れていました。夜だからか地面が冷たいのです。

そして、拙者に向けてくる早川の視線も狂気に満ちつつ、どこか冷たい気がするのです。

「い、ふ！」

突然脇腹に打ち込まれた蹴り、早川は楽しそうに拙者を何回も蹴ってきます。

「サービスだサービス！ オマエはオレを楽しませた……だからオマエにはもつと痛い目に遭う権利があるんだよオ！」

「い、はあ——っ！」

ぼやける視界に、お腹の底から吐き出される紅い液体が映った。  
もうダメ……動こうと思っても……どうしてだか、ダメージのせいか動けないのです……っ。

……ごめんなさい。皆様……ほんとにごめんなさい。

拙者は弱いです……超能力者に勝てませんでした……っ。

ごめんなさい……ごめんなさい、けーすけ様……っ！

「……………」

……あ、れ……？

どうしてなのでしょう……殺そうと思えば早川はいつでも拙者を殺せた。

拙者にだってもう戦意はない。でも、どうして早川は攻撃を――

「なんだアアイツ……もしかしてオマエの仲間だったりすんのか？」

……うそっ、早川の後ろに立っている人……。

黒髪で、少し痩せ形でもどこか頼りのある感じで、握りしめられた拳が熱く感じる……。

「け……けーすけ……さま……？」

――どうしてか、そこにはけーすけ様が立っていました。

## 第62話、魔法使いVS超能力者（後書き）

後書きトークコーナー

あかり「な、なんだ一方（ry ……あ、アイツ……強っ！」

圭介「殆ど動かないでアレだもんなあ」

あかり「……というか、話題がない！ なんとかしろよな！」

圭介「確かに話題がねえけど、俺に振られても困るよ。俺だって話題がないしな」

伊吹「だったら、私が圭介の恥ずかしい過去話してあげよっか？」

圭介「はい？」

あかり「ほ、ホント！？ 楽しみだな！」

伊吹「そうねえ、例えばオネショの話とか——」

圭介「ちょ！ 黒歴史やメテエーツ！」

### 第63話、一般人vs超能力者 前編

疲れた……工場内を探しまわっていたけど、ようやく暮葉達を見つけた。

暮葉はボロボロであった。多分、あの白いヤツが早川悠ってヤツなんだろう。

女の子の腹部を楽しそうに蹴る所に俺が登場。俺の扱いに困る早川悠……。

……どこまで早川は一方〇行なんだよ。髪型は銃でやられた後っぽい感じなのだが。

そんな事よりアイツ……暮葉をあんなに散々ボコボコにしがって生きてるだけマシかもしれないけど、かと言ってそれで言いわけがない。

そういう問題じゃねえんだよ……ッ！

「け、けー……すけ……さま？」

「おいてめえ……邪魔だからどけよ」

「……チツ、やっぱり仲間か。こりゃ予想外の展開だったなあ」

胸を貫くような一言を放った瞬間であった。

——早川悠が初めて、笑み以外の表情を見せたのは。でも、これでは全然足りない。もっとキツい、激しい言葉を浴びせてやらねえと。

「どけって言ってんだよ、聞こえてねえのかよてめえ！」

早川を激しく睨みつけつつ、俺は早川を怒鳴りつけた。



すると早川は驚きとも何とも言えない、複雑な表情を俺に見せてきた。

……でも、それはたったの一瞬だ。すぐに早川は瞳を閉じ口元を笑わせる。

そして遂に——俺に対して初めて一言を言ってきやがった。

「まあオレの存在は公にはなってねえから、知らねえから仕方ねえかもなあ。でも一応教えといてやるよ……オレはオマエと違ってただの人間じゃねえんだよ」

すげえ……アイツの言葉からピリピリと伝わってくるよ。

その言葉には優しさのカケラもない。伝わってくる感情は殺意のみだ。

……わかってんだよこっちは。てめえが普通の人間じゃねえって事くらい。

明智があんなに恐怖するほどの、あの暮葉をこんなにボロボロにできる程に強くて残忍なヤツだって事くらい。そんな事は承知の上だからこそ、俺は今ここに立っているんだ——

「……ッ」

俺はさらに強く、早川を睨みつけた。

流石にメンチビームは出なかったけど、本当にそれが出そうな程に彼を睨みつける。

拳も力強く握られ、足も何だか今すぐ飛び出してしまいそうな程、ウズウズしている。

「へえ……オレと会ったヤツは大抵、自信過剰になり過ぎるか恐怖するかのどっちかなんだけどなあ。オマエは違うみたいだな」

「……っ」

「なるほど、少しは覚悟できてるってのかア？ ……おもしれえ」

早川が初めて、ポケットの中から手を出した。

たったそれだけの動作が余計に俺を緊張させる。

明智を恐怖させ、暮葉をあんなどころまで追い詰める……おそらく、  
というか確実に早川は強い。

しかも、実際どれくらい強いのかは戦ってみなければわからない。

もしかすると、本気を出される前に殺されちまうかもしれない……。

……でも、要するにたったそれだけじゃねえか。

それだけ強いヤツだからこそ存在している、僅かな隙ってのは絶対  
にあるハズだ。

「けーすけ様……だ、だめです……逃げてくださいっ」

「ん？」

暮葉が喋っている。俺に逃げろと言っている、喋るのがやっとなく  
らい弱っているのに……。

あれだけ無理して、自分がヤバいのに俺の事を心配して……。

「殺される……のですっ。けーすけ様が殺されたら……何の意味も  
……っ」

「——死なねえよ」

「もきゅ……？」

「お前の前で死ぬるわけねえだろ。お前の任務は俺の護衛、俺に死

なれるのが一番困るんだろ？」

「だ、だったら……逃げて——」

きつと暮葉は俺を守りたいから。だから連続殺人犯である早川から俺を遠ざけたいと思っている。

だからこそ、アイツはしつこく俺に逃げろって言うてくるんだろう。確かに、俺がこのまま早川から猛ダッシュで逃げれば……俺は助かるかもしれない。

でも、その方法で助かるのは俺しかいねえじゃないか。そんなの俺は絶対に嫌だ……だから——！

「でも、俺だってお前に死なれるのは嫌なんだよ」

「……ッ！」

仰向けで寝ている暮葉は、俺の言葉を聞いた瞬間——目を見開き小さな声を上げた。

おそらく、俺の言葉は暮葉にとって予想外だったのだろう。

俺の中では予想外と言うか……あたりまえの事を言っただけだったのだけど。

「それに俺達は友達だろ？ 友達ってのはお互いを助け合うものだよ？ 俺は日頃からお前に助けてもらっているけど、俺からお前にした事って殆ど何もねえじゃないか」

「え……え……？」

「俺は今までみたいな一方通行なのは嫌なんだよ。だから、今日は今までの借りを返す。今からお前を助け出してやる……絶対に！」

叫ぶような言葉を暮葉に放つと、俺は咄嗟に早川のほうを見た。距離にして数十センチ。攻撃する素振りを見せてはいないものの、俺と早川はかなり近い所にいた。

相変わらず早川はどこまでも狂っている、そんな歪んだ表情を見せつけていた。

脅しのつもりなのだろうか……生憎、俺はそういう表情を何度も見てきた。

だからてめえなんて怖くねえ——てめえ、どう考えても一方〇行みたいなきゃらだからな！

そんなキヤラは今まで漫画とかアニメとかラノベとかゲームで……散々見て来たんだよ！

「なんだオマエ、カッコいい事言ってんじゃねえよ……それで負けたら恥かくだけだろ？」

「うるせえ……てめえなんか、負けてたまるかあっ！」

ドン！左足で大地を蹴り、跳躍するように前へ大きく飛び出した。この距離からなら一瞬で飛びこめる。素早く拳を振り上げ、狙いを早川の顔面に定める。

よし、今だ……喰らいやがれ、俺の怒りの鉄拳を——！

「チッ……魔法も超能力も使えねえクソか」

「——！？」

刹那、早川が右足で足踏みをする、信じられない程に強い風が下から吹き上げてきたのだ。

俺がそれに気付いた時には既に時遅し、俺はあまりの暴風に耐えき

れず、いつの間にか身体が浮いていた。しかも、小石だかなんだか知らないけど、それが機関銃の弾のように俺の身体に突き刺さる。クソッ——なにこれ、暴風も苦しいけど小石のほうが滅茶苦茶痛えぞ！

「ぐ、あつ！」

畜生……背中から落ちる時、受け身はとったもののここはレールの上。

肘をぶつけてしまった。体質的にすぐに消えるとは思うが、結構痛いもんだな……。

「なに驚いたような顔してんだよ。ヘッ、マリリン・モンローのめくれるドレスのように、下から風を吹かしたただけなのになあ？ なあ、オレに喧嘩を売るって事は……下調べくらいはしたんだろ？ だったらそれくれえ理解していて欲しいもんなんだけどなあ」

そうだ……早川は明智曰く、大気そのものを操る事ができる。

酸素濃度を操る事も風を自由に吹かす事も、早川にとっては造作もない事なんだろう。

忘れていたけどさ、確か暴風の膜を一瞬で張り巡らせ、風の力で攻撃を吹き飛ばすらしい。

畜生……どこまで某学園都市ラノベの最強さんだよ。

でも、今はそんな事は関係ねえ。さっさとアイツをぶっ飛ばさねえと——！

「ぎゃは！ そうだ、おもしれエ事してやろうかア？」

「……！？」

その時、早川が一度足踏みをする……。

なんと、廃線同然に錆ついたレールや、そこらに散乱しているゴミ。さらに暮葉の一期一振や落ちていた鉄パイプまで、何もかもが風の力で空に浮かび上がったのだ。

なんだ……早川のヤツ。一体何をやらかすつもりなんだ？

「あはぎやははっ！ あひやははっ！」

楽しそうに、狂気に満ちた笑い声を発する早川は次の瞬間——  
なんと、自分の能力で吹かせたものなのだろうか。

竜巻もビックリな程の暴風を吹かせ、風の力で浮かせた様々なモノを俺に飛ばしてきた——！

「やべえっ！」

思わず叫んだ俺は咄嗟に、2、3回地面を転がり、ようやく立ちあがった所で必死に走り回った。

ただ、飛んでくる様々なモノを避ける為に。だが——その時！  
銀色に輝く一期一振の鋭い刃が、猛スピードで俺に飛んでくる。  
その刃が僅かに俺をかすり——俺の左腕を僅かに鋭く傷つけた。

「ぐあっ！」

痛みに耐えられず、思わず声を上げて右手で左腕を押さえてしまう。  
本当に軽いかすただけなのに……畜生痛え。

左腕からの出血も半端じゃねえな。少しだけ深く切ったのかしれない。

……まあ、体質的にすぐに治ると思うけど。

「オラァ！ もう一度やってやっから、愉快にケツ振りながら逃げ

てみろっての！」

そう言いながら早川は、散らばっていたレールや一期一振等を再び宙に浮かせ、それを暴風の力で俺へと再び放ってきやがる。俺はそれからだだ必死に逃げるのみ。

逃げる事しか俺にはできねえ——ただ、反撃のチャンスを覗いながら。

……でもどうしよう、完全に俺は遊ばれている。早川のヤツ……滅茶苦茶強いっ！

「はぁ……はぁ……はぁ……」

なんとか全ての攻撃を回避したものの、走りまわったせいで息が切れてしまった。

畜生……アイツ、こうやって遊びながら俺の体力を削いでいくつもりか。

ナメやがって。他のアルファ隊の隊員は一瞬で殺しただろうに……！

「クソツタレ、結構楽しいじゃねえか。あんなの良く避けれたなア？」

「クソツ……てめえっ」

「でもいい加減面倒になって来たなあ……じゃあそろそろ、終わりにするとすつかあ？」

早川は下に落ちていた小石を軽く蹴る……。

瞬間、地べたで竜巻並の風が発生し、その小石は狙撃銃から放たれる弾のように俺へ向かってきた。

いくら身体が丈夫とは言え、あんなのを食らって貫通したらどうし

よう？

とにかくマズい。避けなきゃマズいけど避けられねえ……どうすれ  
ば！

——そうだ、いい事考えたぞ。俺は咄嗟に早川にふっ飛ばされ  
た残骸を手に取り。

「ぐっ！」

カァン！と、小石を弾く音が響き渡る……。

鉄板。そう、俺は鉄板で小石を弾いたのだ。

敵戦車の砲撃によって被弾したものの、それを装甲で弾き返す。  
そんな光景を思い出せた事と、早川が暴風で残骸を作りまくってく  
れたからこそ、今の作戦は成功したのである。

「ハア？」

早川は信じられないものを見たような目で、俺の事を見ている。

おそらく、今までいなかったのだろう。自分の攻撃を防いでしまう  
ようなヤツは……。

プライドが傷つけられ、その事に対して腹でも立てたのか……早川  
は。

「ギッ！ うああああああああああああああっ！」

物凄い雄叫びを、この戦場で上げたのである………！



### 第63話、一般人vs超能力者 前編（後書き）

後書きトークコーナー

大吾「クソッ、胸が苦しい」

圭介「恋でもしたんじゃないかねえの？」

大吾「そんなハズはない！ 僕は二次元世界に生きる聖職者だ！  
現実女などに惚れるハズがない！

圭介「じゃあ他に思い当たる事でもあんのか？」

大吾「ある！ 昨日な〇は同人誌が完売していてショックだった！」

圭介「……それかよっ！ ああもう悲しくなってきた……彼女欲しい」

——一方、伊吹と小坂は。

小坂「あゝあ、最近あたし。本編で出番ないなあ……学校が出てこないもん」

伊吹「はあ……」

小坂「ん、どしたの伊吹？」

伊吹「なんか……胸が苦しいっ」

小坂「ふふふ、もしかして圭くんの事かな？」

伊吹「っ！？　ち、違う！　あんなのありえないって！　ただの幼馴染だから！」

小坂「ほほう……わかりやすい反応ありがとうございます」

伊吹「亜紀っ！　あんた絶対楽しんでるでしょ！」

## 第64話、一般人vs超能力者 中編

「うあああああああああああ！」

突然雄叫びをあげた早川。

瞬間、右足をリズムを刻むように、小さくアスファルトを足踏みした早川。

その動作に何か意味でもあったのだろうか、強烈な暴風が下から俺を襲う。

最後に見えたのは両手を真横に開き、叫び続ける早川の姿。その姿も次第に小さくなっていき……俺は気付いた時には空中に浮いていた。

おそらく、さっきの暴風で上に吹き飛ばされ、未だに身体を浮かすくらいの風が吹いているのだろう。

「く、くそお……っ！」

畜生、こんな状態じゃ身動きが全く取れねえじゃないか！

しかも早川はもう叫ぶのを止め、拳を握りしめながら俺へと接近していた。

さっきも言ったけど、俺は今早川の能力のせいで空を飛んでいる。

そんな俺に早川がどうやって接近するか——答えは簡単、早川は信じられない事に空を飛んでいるのだ。

「あぎやはははっ！ あひゃぎやはっ！」

危なかった笑い声をあげながら俺へと迫る早川の背中からは、四つの噴射する竜巻が出ていた。

それがどういう効果かはわからねえ。でも、早川は確実に空を飛んでいやる。

「ぐあっ！」

ガコン！と顔面に突き刺さる、早川の拳。

コイツ……滅茶苦茶ヒョロヒョロな体型の割に力が……ッ！

いや待て、どう考えても早川に筋肉なんてものがああるハズねえ。という事は、今の正拳突きは能力の手を借りた……ッ！

「ぐうっ！」

ちくしょ……よくわからねえけど、背中を壁か何かに打ちつけてしまった。

鼻っ柱も背骨も痛え……まあ、動けない事はないけどさ……って、安心して居る場合じゃねえ！

悪夢なのかこれは。無数のレールが早川が起こした暴風により、空中に浮いている。

——そしてそれは、間違いなく俺の所に高速で飛んできていた。

「！！」

身体に痛みは残っているものの、あんなのを食らっては骨の一本はヤバいかもしれない。

咄嗟に立ちあがり、焦って転びそうになるものの、それでも俺は必死に走り続けた。

ヒュン、ヒュンと、レールが俺の真横を飛行する音が耳に入る。

これ……なんというか、超怖ええええええっ！

「うわあ……………っ」

レールが来なくなったので、試しに後ろを確認してみると……。  
地獄絵図。建物に無数のレールが突き刺さっている。

もし避けなかったら、レールが俺の身体に突き刺さっていたのかな？  
……俺、一応身体は丈夫だ。でも、モノが刺さったらどうなっちゃうんだろうか？

うーん……流石にヤバい気がするな。というか、想像しただけでも  
冷や汗が出てくる。

「へへ……オマエおもしれえな。オレのパンチ喰らって立っていら  
れたヤツは初めてだし、あれだけのレールを全部避けるなんて、オ  
マエもしかして身体も鍛えている未来予知系の超能力者かア？」

「お生憎様、俺は魔法も超能力も使えない普通の人間だよ」

「だったら……余計におもしれえよ！ そんなおもしれえヤツにも  
う一つ……おもしろい事してやろうかあ？」

「お、面白い事……？」

一体なんだ。今度はどんなバケモノじみた事をしやがるつもりなん  
だ。

「ここは工場だし、さっき破壊した建物はヤバい工場だったみてえ  
だ。可燃性のガスが充満しているんだろうぜ？ なあ……ガスを集  
めて、そいつを静電気が火花か何かで爆発させるとさあ……このあ  
たりはどうなっちゃうと思う？」

「……ッ!？」

ようやく、バカな俺にもその言葉の意味が理解できた。

コイツ……もしかして、ガスを集めて爆発させる事とかも出来るのか――？

走れ、とにかく走って距離を取れ。爆発に巻き込まれたら流石の俺でもまずいかもしれない！

「ウフフ、フフフ、ハハッ、アハハ、アヒヤハハ、アハ！ ギヤハ！ アギヤハハ！ アッギヤハッハッハッハッハッ！」

どこまでも楽しそうに、早川は笑いながら両手を伸ばす。

どんな処理をしているんだろうな……サッパリ理解できねえ。でも、さっさと逃げないとマズい。

そんな事を思っていた――次の瞬間。

半径数十メートルの範囲が一瞬にして、光と炎と熱風に包まれた。炎に焼かれる事はなかったものの、激しい衝撃波や熱風が俺の背中を叩くように吹きつける。

第一撃の衝撃波で吹き飛ばされ、熱風で焼かれるような熱さを感じた。

「が……ハア……っ！」

くそ……っ、声を上げる事さえ辛い……っ！

なんなんだよ早川は……やっぱりアイツはバケモノなのか？

ハナから勝ち目なんてない。隙も全くの0だったりすんのか……ッ！  
しかしチャンスだぞ。周囲は煙に包まれており、誰がどこにいるかさえ把握が難しい状況だ。

この状況なら早川も俺を探しだせない。今のうちの冷静さを取り戻し、作戦を練る事ができる……。

「よく無事で居れたなオマエ、ひよつとしてオマエ不死身なんじゃねえの!？」

……と、思ったけど……やっぱりムリです。

燃え盛る炎と煙の中から、細くて折れてしまいそうな早川の影が見える。

影は次第に近づき、やがて煙の中から白いヤツの姿が現れた。

「それに比べて俺は死にそうだァ。軽く酸欠になっちまったぜ……まァ、このオレに完全なる酸欠なんてありえねえんだけどな。要するに水中や宇宙空間じゃねえ限りは好きなだけ酸素濃度を操作できる。エベレストの山頂だってオレなら余裕だぜ？」

「そんな能力があるんなら……どうしてそういう、フツの事をやってすごいって褒められようとしなかったんだよ……てめえは!」

俺は拳を握りしめ、齒を食いしばりつつ早川を厳しく睨みつけ、足に入れられるだけの力を入れて立ちあがる事に成功した。畜生……フラフラだ。

身体が丈夫と言ってもこういう経験は初めてだからな……身体が覚えていないのも結構辛いものだ。

というか、俺自身自分の身体の限界を知らない。

限界を試せるイベントが、今までの日常で発生する事などありえなかったからである。

ところが……今はなんとなくだが限界を感じている。

これ異常激しいのを喰らえば、ホントに骨折くらいしてしまうかもしれないねえ……ッ!

「それを許さねえのが佐井学園ってモンだァ」

「さ、佐井学園……そういえば、てめえもその生徒だったよな。そして、そこをやめてえからこんな事をしてやがんだよな」

「へえ……中々オレの事情に詳しいんじゃないか。最も、同情するつもりはねえ感じだけだな」

「あたりまえだろ！ たとえ指示だとしても、それで暮葉の仲間が殺されていい理由にはならねえ！ てめえが佐井学園でどんなに辛い目に遭ったとしても、そこから意地でも逃げ出したかったとしても、殺人なんてもの、認められるハズがねえだろ！」

「はーん。オマエ、わかってねえ……学園つつてもあの学園は一つの組織だ。組織を裏切るってのは相当な覚悟なんだぜエ？ なあオマエ……オマエがもし軍隊に入っていたとしたら、そう簡単に自分の軍隊を裏切れたりすんのか？」

「……っ」

「答えはN Oだよなあ。例え組織からは除名されても、裏切り者を意地でも潰そうとする連中は現れるハズだア。そいつらと永遠に戦う覚悟がオマエに出来たりすんのかア？ オレには出来ねえ、そんな事より学園から出された条件をクリアして、余生を平和に過ごしたほうが人生得だろオがよ」

笑顔でそんな事を言っている。恐ろしい事を笑顔で言っているやがる。でも……アイツはそんなヤツだけど、それでも少しは伝わってきたぜ。

アイツ、佐井学園でそんなにひどい現実を見てきたのか。

だから、ここまで必死になって学校を辞めようとしてんのかよ。

……気持ちはわからねえでもねえ——でも、結局早川は根本から間



違っているんだ。

「それでも罪のねえヤツを殺していい理由にはならねえ！ てめえが嫌がっている学園が出した殺人命令を、なんで聞く必要があるんだよ！ 大体、てめえくらい強かったらどんなヤツにだって負けたりするハズがねえじゃないか！ てめえがそういう覚悟を決める勇氣さえあれば、こんなふざけた自体にはならなかったんじゃないのかよ！」

「勇氣ねえ……ずっと永遠に血みどな日常を送るのと、今の一瞬だけ血みどろな現実を見る。どっちがいいかって話だけどなア……オレには前者を選ぶ事はできねえ。それだったら前者を選ぶ方が遥かにマシだ。それともなんだア？ オマエはオレに単独で佐井学園と戦う勇氣でもくれるってのかア？」

「いいぜ……だったら俺がてめえを勇氣づけてやるよ。この拳でな！」

「おもしれえなオマエ……上等じゃねえか。愉快に素敵にやってみやがれよ！」

そのセリフを早川が言い終えた後、ゆっくりと拳を構えた。

いつも通り咄嗟に頭をガードできるようにする為、両腕をしっかりと上まで上げた構えである。

一方の早川も口元を歪ませ、血に飢えたような目で俺を見ながら、両腕を大きく開き始めた。

……まだ戦いは始まったばかり。本当の意味での戦いは——たった今、これからだ！

## 第64話、一般人vs超能力者 中編（後書き）

後書きトークーコーナー

大吾「圭介が完全に上○さんになりきってるな……」

重原「それを言ったら敵さんも完全に某最強になりきってるけどね」

伊吹「ていうか、今回随分と戦闘シーン長いわね。いい加減読者も飽きてる頃じゃないの？」

小坂「まあ、これだけ長引くくらい早川が強いつて事だと思う！」

伊吹「で、でもそんなヤツに圭介が勝てるの！？ も、もし圭介が死んじゃったら……っ！」

小坂「あれえ？ もしかして圭くんの事心配だったりするの？」

伊吹「ち、違う！？ 圭介なんてどーせ身体が丈夫だから大丈夫よ！  
べ、別に私は圭介なんか心配じゃないから！」

大吾「これは……ツンデレなんだろうか。それともいつものツツパリなんだろうか？」

重原「さあね……ふふふっ」

## 第65話、一般人vs超能力者 後編

身構える俺、両手を広げて気味悪く笑っている早川。

俺達の睨み合いは続いていた——でも、先に口を開いたのは。

「まア……オマエも幸運だよなア」

「……？」

「オマエひょっとして稀に見る幸運体質の持ち主なのか？ このオレを前に未だに息してるなんてよ」

いや、俺はどちらかと言うと不幸だと思うぞ。

未遂で終わったからいいけど、ガチホモに掘られそうになったし。

あと、もう終わったからいいけど校内でガチホモ疑惑が浮上したし。とにかく、最近ロクな事がない気がするんだ！

「あのピンクのアホ毛とどっちがすげえかな？ アイツはオレの弱点まで見破ったしなあ」

……弱点。暮葉のヤツ、早川の弱点を突いたのか？

いや、その前に早川の弱点って一体何なんだよ。

すべてが完璧に思えるほど強力な力を誇る早川悠——そんなヤツに弱点があんのかよ。

「でも、オマエはピンクのアホ毛よりも長い間、オレの前で邪魔をしやがっている。オレからしたら迷惑な話だけだなア、それって結構すげえ事じゃねえの？ オマエ、ホントに頑張るなあ……」

「……あたり前だろ。友達の為に頑張る事の何が悪いってんだよ」

友達がいらないヤツにだけは言われたくねえぜ、そのセリフは。

……と、そんな事を思った。

「ヘエ……頑張るねエ。希望に満ちたいいセリフじゃねえかよ……チツ、でも無神経だな。まあいい……オマエは頑張ったから頑張る必要はもうねえよ。そんな事より——そろそろあの世にでも行きやがれ！」

刹那、セリフを全て言い終わった早川はダン！と、地面をとて強く蹴りあげた。

アスファルトの残骸と砂埃が舞う、早川だけは俺へと近づいてくる。その速度があまりにも速い所、アイツはまた超能力を使いやがったに違いない。

クソッ……いざ来るとなると、やっぱり怖いかもしれねえ……。

2、3歩歩んだだけなのに、何十メートルかの距離があったハズなのに……。

それでも早川は——一瞬で俺との距離を詰め、右手を突き出し始めた。

畜生……どうすりゃいい。多分引いてもすぐに間合いわ詰められる。かと言って殴りつけても、明智曰く早川は攻撃を暴風で防ぐらしいからな。避けても殴っても無駄……ああもう対策がねえ！

こうなったら手段は一つ……どうせ身体は丈夫だ。玉砕覚悟でコイツをぶん殴る！

「ちくしょおおおおおおおおおおおっ！」

俺は目を瞑り、ただ只管前を走り始め、どこを狙っているかもわか

らない右ストレートを放ってみた。

……でも、ガツンと言う鈍い感触を拳に感じる。

なんだ、これ……慣れた感触だな。過去に何度も経験した……まさか？

「ぐあ、が、あ……ッ！」

……あれ、殴れた。おかしいぞ、明智の話って実はウソなんじゃ？  
だって今、俺は確かに早川をぶん殴った。早川のぶっ飛ばされて倒れているぞ。

「あ、はは……面白エ畜生。殴られたのは随分久しぶりな記憶だぜ。  
オマエ……ついにピンクのアホ毛を越しやがったな。アレを超える  
くれえ面白いヤツが、まさか魔法使いでも超能力者でもねえヤツと  
はなあ……」

ぶん殴られた顔面を押さえながら、狂気じみた声で早川は語る。

早川もよく喋るよなあ。戦闘中なのにここまで喋る人、俺は初めて  
みた気がするな。

「さて、と……じゃあそろそろ、本格的に始末だクソ野郎オ！」

さっきと同じく、再び衝撃的に突撃をかけてくる早川。

確かに早川の動きは早い。おそらく、また風を利用して加速でもしているのだろう。

ホントに便利だよなあ風って。他にも酸素濃度操作や気圧操作、ガスまで集めて爆発させられる。

ホントにすごい能力の持ち主だ……だけど。

「てえっ！」

「ぐ、ぼおあっ！」

身体を少しだけ振り、早川の右手を優雅に回避する。

そして空いていた右拳をぎゅっと握りしめ、カウンターを決めるように俺は早川をぶん殴った。

一度吹っ飛ばされた早川は痛みに耐えつつ、近距離から俺を攻撃しようとして手を伸ばしてくる。

だが、俺は何度も避けては早川を殴り続けた。3発、4発……5発6発と。

ここで俺の疑いは確信へと変わった。そう、早川は——殴り合いの喧嘩だけは滅茶苦茶弱い！

「ク、ソオ……ッ！ この三下野郎オ！」

早川は振るわれる俺の拳を掴もうとする。

多分、拳を取って零距离で超能力を使うつもりだったのだろう。

だが、その手は確かに速かったが、どこか抜けている感がある。

拳を寸止めた俺は、ひらりと身体を一回転させ、低い位置からボディーブローを鳩尾へ打ち込んだ。

「ぐぼあっ！」

「フッ！」

「が、はあ——ッ！」

ボディーブローの次は顔面へのストレート。

今の一撃で早川は、数mは吹っ飛ばされた事だろう。

しかし何か超能力でも使いやがったのか、早川はなんとか立って持

ち堪えやがったのだ。

「ちつくしょう……オマエ、どうして……っ」

「は、てめえは確か暴風の膜で攻撃を防げるんだったよな？」

「チッ……そんな技、オマエには使ってねえのに」

「確かに、でも俺は知っているんだ。だから俺はてめえを恐れていた……でも、てめえには致命的な弱点があるだろ。攻撃中は暴風の膜を張り巡らせられないっていう弱点が！」

絶対的な風の壁を作り、それが作りだせない攻撃時は誰も抵抗する事が出来ない程の、破壊力が凄まじすぎる攻撃を放つ早川悠の戦闘スタイル。それは一見完璧とも見えた。

……だけど、そんな僅かな所に弱点は存在していた。

だって、攻撃時は俺の普通の右ストレートさえ、満足に防ぐ事ができないんだから――

「あと、お前は素手で喧嘩なんてした事、ねえんだろ？」

「なっ……」

「遅いんだよ。どう考えても喧嘩のやり方しってるとは思えねえ。能力に頼り過ぎだ……てめえは！」

超能力に頼り切った戦い方。確かにそれは強い……。

彼の能力は態々手を使わなくとも相手を殺せる凶悪さを秘めている。その凶悪さは本当に最強を誇るレベルである……ただ、接近戦での弱点を知らない時点では。

でも、ちょっとでも弱点が表に出てしまった瞬間、その弱点は大きな弱点となってしまう。

俺と早川の僅かな差とは正にその話なのだ。

弱いけど近接戦闘に慣れた俺。強いけどそこだけは苦手な早川……俺と早川の差は歴然だ。

「……チッ！ ふざけんじゃねえぞ、この三下ア！」

早川が再び地面をたん、と軽く足踏みする。

それだけど、アメリカの巨大トルネードもビックリするほどの、巨大な竜巻が生成された。

それは次第に俺へと迫り、どうする事もできなかった俺を上空へと一瞬で突き上げてしまった。

……だが、俺はこのピンチを逆にチャンスに捉えた。

「ぐおおおおおおおおおおおっ！」

空中で体勢を立て直した俺。

早川のほうへと落下するが、その勢いで早川の顔面を思いっきり殴りつけた。

突き刺さった俺の拳は落下する時の勢いもあったのか、通常よりも重い一撃であつたらしい。

真っ白な早川とは真逆である、真っ赤な鼻血がドロドロと流れていた。

「ぐ、はあ……ちつくしう……この野郎オ」

「……暮葉も暮葉の仲間も、みんな必死に生きてんだよ。てめえの勝手な都合で必死に生きる皆を傷つけてんじゃねえよ！」



「さっきも行ったじゃねえか……オレに残された選択肢のうち、一番楽なのを選んだんだ。その途中にいる特異点なんざオレにとってはどうって事のねえ、ただの学校を辞める為に必要な道具に過ぎねえんだよォ！」

早川はムカつく事を吐き捨てた……。

「……大気中の分子運動を抑制・活性化。湿度……操作」

瞬間、早川は笑う。そして両手を上に広げて何かを呟き始めた。

なんだ……あの野郎、一体何をするつもりなんだろうか。

ハッキリ言って早川がやろうとしている事がサッパリわからん。でも、ホントに嫌な予感しかない。

危険を感じた俺は再び拳を握りしめ、いつでも戦えるよう再び身構えた。

「くく……か、ぎゃは……うふふ、あはは、はっぎゃあはははっ！」

な……マジかよアイツ。頭上へ伸ばした手の上には巨大な火の玉が。なんだよコレ、とらゴンボールの元気玉じゃねえんだぞ。

すっげえでかい……軽く直系10mは超えているかもしれないぞ。

アイツ、あんな巨大な火の玉をどうするつもりなんだ？

「さて、と……焼け死ぬかアオマエ？」

「!？」

狂った笑顔の早川の口元が、さらに大きく歪んでいく。

その瞬間——まるで太陽を小さくしたかのような火の玉を投げつけてきた。

アレを喰らえば身体は黒こげ決定。完全に黒こげになったら治るかわからねえぞ……。

そんな事を恐れた俺は背を向け、全力疾走をするのだが。

「ぐああああっ！」

——瞬間、俺の背後からイキナリ火の海が襲ってきた。

というか、このあたり一帯が一瞬にして火の海に包まれたのだ。

凄まじい熱、奪われていく酸素……………。

く、そ……まずいっ。これ、もう少し近い所にいたらホントに死ぬっ！

「ぎゃあっははははは！ 最高に綺麗な火の海じゃねえか！」

「て、てめえ……っ」

「おらあ！ 今度こそオマエを徹底的に焼き殺してやるから、悔しかったら火の海渡ってオレをぶん殴ってみろっの！」

早川は笑いながら、さっきのように大きな火の玉を作りあげて行く。でけえ……段々と出来上がっていく火の玉。その大きさはさっきの倍はあるかもしれない。

……というか、まだまだ大きくなっていく。

畜生、あんなの打ち込まれたらいくら逃げても……今でさえ輻射熱がすげえってのに！

「結局、オマエじゃオレを止める事はできねえってなあ！ よく頑張ったけどこれが最後だ、さてさて……最高に愉快な火刑の始まりだぜェ！」

暴風、飛行、酸素濃度、気圧、爆発、防御……ああもう、なんでもアリだなあの野郎。

とにかく、このままだと本当に火刑にされちまう……。

でも、火の海がすぐくてマトモに動けない。畜生、こりゃまさかのチェックメイトか？

俺はこの後どう行動すりゃあいんだよ、畜生！

「さて、そろそろ焼死の時間だぜ！ 愉快で素敵な焼死体にでもなりやがれ！」

「ちつくしよお………っ！」

動けねえ。完全に火の海に囲まれて動けねえ！

でも、早川は容赦なく攻撃をしてこようとする。

避ければいい話なのだろうが、さっきも言った通り火の海が邪魔で満足に動く事すらできない。

……終わった、完全に終わりがかもしれない。

早川相手に俺じゃあ話にすらならねえ……そう思い、苦しき焼死を体験する覚悟を決めた――

「……チツ、今日は随分とクソみてえな風が吹くな……」

刹那、早川は俺を殺すのではなく、機嫌の悪そうな顔で独り言を言っていた。

……こういう事だろう。しばらく意味がわからなかったが、火の玉を見てようやく納得ができた。

なんと、早川が作りだした火の玉はウネウネと、まるで風でも吹きつけているかのように動いていた。

「どういう事だこれ……この風、自然のモンじゃねえ。クソツ、蟬

燭やライターの火じゃねえからまだいいけど、こんな状況じゃ満足な火の玉を作り出せねえ」

奇跡と言ってもいいのだろうか。突然吹きつけてきた風は早川の調子を狂わせていた。

この奇跡としか思えない風はもしかして、神が吹かせる風こと神風なんじゃないだろうか。

でも、早川のヤツが自然の風ではないと言っていた。じゃあどういう事なんだ？

近くに巨大扇風機でも……あるわけないよな。どうやってこの風は起こっているんだろうか。

「けーすけ様っ！」

「く、暮葉!？」

——その時、暮葉が一期一振を振りまわしながら、乱暴に俺の隣へ着地してきた。

コイツ……そういえば最初っからいた。早川にボコボコにされていたのは暮葉であった。

そうか、今までずっと俺と早川の戦いを見ていたんだよな。

でもどうしてだ。なんでこのタイミングで戦場に割って入ってきたんだ。

逃げていれば……そうすれば、こんな地獄なんて見ずに済んだかもしれないねえのに！

「けーすけ様。ご無事なのですか!？」

「俺は無事だけど、火の海が邪魔で動けねえな……」

「だったら今、この炎を消火するのです！」

暮葉がそう叫んだ瞬間、どういう事だか空中から大量の水が巻かれ始めた。

別に天ぷらの油とかで発火したわけではない、俺の周りで燃えている炎は次第に鎮火してゆく。

水の力すげえ……というか、どうやってこんなに大量の水を放水しているんだ？

「な、なんだこれ！？」

「けーすけ様。急遽他所からアルファ隊の皆さんが駆け付けてくれたのですよ」

「じゃ、じゃあこの水って……」

「はい！ 水系統の魔法使いによるものなのです！」

なるほど。

炎や風の魔法を使えるヤツがいるんだから、水の魔法が使えるヤツがいたっておかしくはないよな。

ハハッ、なんだかよくわからないけど、コイツはいい気がしてきたぞ。

なんだか、次第に俺達が有利になってきた気がするんだ。

……一方、大量の水を浴びている早川。

何故か早川だけ水が激しい。まるでバケツで水をかけられているかのようにあった。

「クソッ！ この……野郎ォ……殺すっ！」

しかし早川は気付いていた。これはすべて、暮葉達アルファ隊の仕業である事に。

だからこそ、早川はあのように殺意をむき出しにしているのである。

おそらく早川は本当に暮葉達を殺すつもりであろう。あの目はマジだ……。

……でも、そんな事をさせるとおもうか。俺はなんの為にここに立っているってんだよ？

……あの子への恩返し、そしてあの子とあの子の周囲の世界を守る為に……俺は立ってんだろ！

「……させねえよ」

「アア？」

「させる、わけ……ねえだろ！」

魔法使いの魔法による雨と、未だに小さく燃える複数の炎の中……俺はゆっくりと歩んでいく。

一步、また一步……ゆっくりではあるが少しずつ、確実に早川へと接近していく。

視界の先には早川ただ一人。アイツさえ……アイツさえ倒す事が出来れば。

アイツに佐井学園と戦う勇気さえ——与えてやる事ができれば——  
——！

「……おもしろえクソツタレ。いいぜ、そこまで言うなら……オマエから殺すッ！」

轟！という音と共に、全速力で走る新幹線の如く早川が迫ってくる。

だが、それは俺にとっては大変都合がいい。正直に言うところでも結構疲れている。

走ったら多分、戦う体力なんてなくなっちまうだろう。

……早川のヤツ、どうして接近戦なんて挑んでくるのだろうか。

実はかなり焦っているのか、だからよく考える事も出来ずにただ近寄るだけなのだろうか。

確かに、総合的な戦闘能力は俺が一番低いだろうし、俺さえ潰せば暮葉とその他のアルファ隊の皆さんを、存分に相手にする事ができるハズだ。

だから、まずは一番弱いが一番邪魔くさい俺を潰そうと……早川は駆け出したんだ。

……でも、接近戦を挑むのは馬鹿すぎる。なんたってアイツは攻撃中は——他のヤツと同じで防御なんて出来ねえんだから！

「く、ぎゃは、アッ！」

一瞬で俺の懐に入ってきた早川。右手を勢いよく突き出してきたが俺は右手をひらりと回避。

続いて第二撃、振るわれた早川の左手を右腕でガードしてみせる。

……大した威力じゃない。コイツ、熱くなり過ぎているあまりに能力を満足に使う事を忘れている。

力も全く入っていない。俺は……そんな早川の左手を払い除けてやった。

「……ア……ア……ッ！」

隙だらけの早川悠——ハッキリ言って、今の早川なら子供でも一発入れれるであろう。

それくらい早川は隙だらけであった。

オマケに早川は目を見開き口も明け、激しく驚いた表情を見せている

「……このリアル一方〇行……ッ！」

攻撃手段も失い、冷静に対処する能力さえ奪われた早川に対し、俺は冷たくそう言い放つ。

そして……ダッ！と勢いをつけて、僅かな距離を前方に跳躍し。

「——もう一度やり直してきやがれ、このクソ野郎オ！」

言い放った、瞬間。

俺の全力の右ストレートを、超能力者である早川悠の顔面深くに突き刺してやった。

早川の弱そうで軽々しい身体、はゴロゴロと乱暴に地面を転がっていった……。

がくつと仰向けで伸びている早川。完全に力が入っておらず、瞳は閉じられ口は無様に開いている。

呼吸は苦しそうだが、一応しているあたり多分死んではないだろう。

とりあえず……な、なんとか……勝てた……ッ！



## 第65話、一般人vs超能力者 後編（後書き）

どうも、作者です！

18時に更新すると言っておきながら出来なくてごめんなさい！  
しかも0時の更新もいつもより30分も遅れて申し訳ございません！  
もっと小説を書く時間が欲しいです……（涙）  
とにかく色々とし訳ございませんでした！

以下、後書きトークコーナー！

圭介「お、終わった……やっと戦闘シーンが終わった！」

伊吹「今回長かったわね」

大吾「しかもほとんどパク（ry」

圭介「おいやめろ！ 全部早川がアレに似ているのが悪い！」

伊吹「それにしてもよくあんなのに勝てたわね。圭介に勝てるんだ  
ったら重原は余裕じゃないかしら？」

圭介「俺……どんだけ弱く見られてるんだよ！」

## 第66話、トモダチ

ここはベッドの上、つまりは病院……などというわけがなく、実際ここは俺の部屋である。

一応病院へ行くことをオススメされたのだが、実際大した怪我をしているわけではないし、正直早く家に帰ってこの疲れを癒したかった。だから俺は病院などに行かず、自宅へ直行したのである。

……それに、もう痛みなんて大分消えてきたしな。やっぱり自分の体質には感謝だよ。

「けーすけ様っ！」

特攻隊の如く俺の部屋に突入してきた暮葉。

もう葵のお下がりのパジャマに着替えたのだろう。

随分と可愛いピンク色の花柄パジャマを着用していた……子供か、でも可愛いからOKだ！

「暮葉か……」

俺がそう言うと、暮葉はゆっくりとベッドに上がってきた。

……ちょ、待て。男女二人がベッドだと……！？

これは色々な意味でまずい……いや待て、一瞬でも変な事考えた俺が一番危険だ！

「けーすけ様、もう大丈夫なのですか？」

「まあ、元々大した怪我とかしてねえしな。あと何時間かすればもうどこも痛くねえだろ」

「にゅふふっ、圭介様の体質ってやっぱり凄いんですね!」

「あ、ありがとな」

畜生、ストレートに褒められるのも何だか恥ずかしいな。

アレクサンドル

それに、この体質って元々は御先祖<sup>アレクサンドル</sup>ってヤツの体質だったんだろ？  
確かに俺もこんな体質を持っているが、何も俺だけの体質じゃねえのに……。

まあ、アレクサンドルはとっくの昔に死んだ人だし、今はどうでもいい話なのかもしれない。

「……あの、けーすけ様？」

「今度はどうしたんだよ」

「すみませんっ、拙者の力不足で……けーすけ様を戦わせて」

暮葉が本当に申し訳なさそうな表情で謝罪をしてくる。

確か暮葉の任務は俺の護衛。だからこそ自分が負ける事は許されない。

ところが、暮葉は早川との戦いには負けていた。だからこそ、責任を感じているのかもしれない。

「……いいじゃねえか。それを言ったら俺だって謝りたいよ」

「もきゅ?」

「俺も大した事ないヤツで、最後は暮葉とその仲間に助けられた。本当にごめんな」

「け、けーすけ様は謝る必要はないのですよ……だって、元々は早川とアルファ隊の問題なのです。けーすけ様は元々何の関係もなかったのですよ？　むしろ謝るべきなのはけーすけ様を巻き込んだ拙者達なのですっ」

完全に俯いてしまった暮葉。本当に……暮葉は落ち込んでいる。

関係のない戦いに俺を巻き込んでしまった事に、これでもかというくらい責任を感じている。

でも……よくよく思い出してみようか。関係のない戦いに口を出したのは――

「暮葉こそ、何も謝る必要はないよ」

「へ、変な優しさはいらないのですよ……」

「変な優しさじゃねえよ。大体、あの戦いに口を出したのは俺自身じゃねえか」

「もきゅ……けーすけ様が？」

俯かせていた顔をようやく上げてくれた暮葉は、上目遣いで俺の事をジロジロと見てくる。

……いかん、なにこの可愛い生物。少し目を逸らそう……っ。

「だ、だってそうだろ？　俺は自ら暮葉達の所に行ったんじゃないか。それって要するに戦闘に巻き込まれたんじゃないかって、態々自分から戦場に足を踏み入れたって事だろ？」

俺はただ……助けたかった。ただ暮葉を守りたかった。

今までの恩返しもしたかった。その為だけにあの場に行ったんだ、別に巻き込まれたわけじゃない。

……まあ、完全を守る事も恩返しもできなかったけど。

むしろ暮葉がいなかったら、多分今頃俺は早川の言う愉快的焼死体になっていたんだろう。

恩返し所かもっと多くの借りが出来てしまった気がするよ。

「そんな……でも、けーすけ様が傷ついたら……っ」

「わかってる。俺が死んだりすると暮葉の立場が悪くなる事くらいでも……俺を守る為には生きてなきゃいけないだろ。暮葉が死んだら元も子もないじゃないか」

俺は出来るだけ優しい顔を作って、暮葉に一言一言を確実に伝えていく。

「そ、それはそうですけど……っ」

「だったらいいじゃないか」

「いいって……けーすけ様は拙者を……許すのですか？」

「許すも許さないも、暮葉は悪い事なんてしてないじゃないか。それに俺達は友達だろ」

「と、友達……？」

「うん、友達だ」

なんだかんだ言って、俺達はお互いの価値を認め合っている。

相手の為に出来る事をなんでもしようとする。時には相手の為に自己を犠牲にしている。

そして、なんだかんだ言って信頼もしているし、暮葉の事も好きだ。も、もちろん友達としての意味だぞ！

「友達は友達を助ける。それは多分普通の事なんじゃないか？」

「ともだち……けーすけ様も友達」

「ああ、俺はそう思っている。だから助けられるのは俺だけじゃない、暮葉が危ない目に遭ったら俺も暮葉を助けるよ」

「……………」

無言で口を開いたまま固まっている暮葉。

頬がほんのりと赤く染まっていた。その状態で彼女は俺をじっと見つめている。

「く、暮葉……？」

「はにゃっ！？ す、すみませんっ！」

ほんのりどころかトマトのように真っ赤になってしまった。コイツ、素で意識がどっかにぶっ飛んでいたようだな。

突然意識がこの世に呼び戻されたかのような反応だったぞ。

「大丈夫か、顔赤いぞ？」

「その、えと……拙者は平気なのですよ」

「そっか、よかった」

安心したぜ、もしかして熱でもあるのかな〜とか思っちゃったよ。  
だって……暮葉の顔がどう見ても赤いんだもん。

「あの……けーすけ様？」

「お、おう。なんだ？」

暮葉が四つん這いになりながら、覗きこむように俺を見ながら名前を呼んでくる。

同じベッドの上に暮葉と二人きり、しかも俺と暮葉の距離は僅か数十センチ程度だ。

そんな近い距離から女の子に迫られると、なんというか……恥ずかしいな。

多分、自分では見えないけれど俺の顔も赤くなっているかもしれない。

「拙者達……友達、なのですよね？」

なんてことのないようで、とっても重要な確認。

何度も彼女の事を友達だとは言っているが、それでも確認を取ろうとするあたり、彼女はとても不安に思っているのかもしれない。自分が本当に俺の友達なのか……そんな不安を抱いているんだろう。だから——俺はそんな彼女に対して——

「うん、友達に決まってるじゃないか」

「……けーすけ様っ」

彼女から離れようとしなかった不安を取り除いてあげると、彼女は少し笑顔になってくれた。

よかった。ようやく暮葉がまた笑ってくれたよ。

俺はやっぱり……暮葉の笑顔が一番好きだな。

「えへへ……友達。うん、友達っ」

なんだか暮葉は、友達という言葉が大変気に入った様子である。

別に俺が初めての友達ってわけでもないのに、彼女の喜び方はそれに近いようなものであった。

眩しい程の笑顔で、ぎゅっと枕を抱きよせて。

好きな人の事で妄想でもしちゃって、思わず嬉しくなっちゃった女の子のようである。

……って、暮葉は本物の可愛い女の子だったな。

……しかも、こんな事を考えている俺も正直、初めて友達が出来たくらい嬉しいような気がするな。

元々、本当の友達と呼べる友達が少ないせいもあるかもしれないけど……。

「けーすけ様！」

「ん、どうした？」

満面の笑みを浮かべた暮葉。その素晴らしい笑顔を俺に向け。

「ありがとうございます！」

ありがとう……嬉しいな、友達にありがとうって言われると、なんだかとても嬉しい気分だ。



それと同時に、ちょっと恥ずかしい気もするんだけどね。

「お、おう……暮葉。俺達は友達だからな、お前を頼る時もあると思うけど……暮葉だって俺を少しは頼ったっていいんだぞ?」

ああもう俺の馬鹿!

なに言ってんだよ、今のセリフはあまりにも臭すぎるだろ!

いくら友達である事をアピールする為とはいえ、流石に今のセリフは失敗だ!

……と、思ったが――

「……はい! 拙者も……けーすけ様の事、頼ってみるのです!」

何故か暮葉は喜んでくれた。今のくさいセリフで……。

な、なんでだろう?

ま、まあいいか。喜んでくれたんならそれで。

――この日から俺と暮葉の関係は、ただの上下関係から友情へと変わったのであった……。

## 第66話、トモダチ（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「そろそろ、この後書きトークコーナーもネタが尽きてきたな」

伊吹「ちょ！ いつもこのコーナーを盛り上げているあんたがそんな事言わないでよ！ このコーナーが終わったら出番のないキャラ達の出番がホントになくなっちゃうわよ！」

圭介「いつからこのコーナーは救済コーナーになったんだよ！」

千早「……お、お願いします。このコーナー終わらせないでください……私が出番がっ」

風紗「わ、私もだ。出番が減る」

大吾「僕なんて重原より出番ないんだぞ！ ここで少しは出演させてくれ！」

小坂「あたしも正直、出番がないからなあ……」

圭介「お、お前ら……まあ、全てはキャラを増やし過ぎた作者のせいだな」

暮葉「過去作見るといつもこんな感じですけどね、進歩がないのですね！」

伊吹「あんた達自虐ネタやめなさい！」

## 第67話、戻ってきた平穩(?)な日常

あれから数日が経過した、俺も暮葉もいつも通りの日常を適当に満喫していた。

明智も、最初は早川に勝ったなんて信じていなかったけど、どうやら少しは安心したようである。

そして事件の後の休日、暮葉はアルファ隊の戦死者の葬儀の為に一時レムリアに帰還。

ただし、翌日にはいつもの元気な顔を見せ帰って来てくれた。

そして……現在、7月1日の金曜日。

いよいよ7月。7月と言えばテストも終わってお気楽な気分である時期だ。

それと同時に文化祭も近づき、その準備で少しずつ忙しくなる時期でもある。

「文化祭なんて、ぶっちゃけ5人の女の子がステージで演奏すればいいよな!」

「うっせ黙れ! てめえはけ○おんのアニメでも見てろ!」

「まあまあ二人とも。だったらいつその事天下一武道会でも開いたらどうだい?」

「この武道オタクがっ! ンな危なっかしいの出来るかっ!」

大体、もう文化祭でウチのクラスが何をやるか、とっくの昔に決まった事じゃねえかよ。

文化祭でやる事は大体、どこの学校も6月か遅くても7月のアタマ

には決まっているハズである。

うちの学校の場合、6月のうちにさっさと決めちゃうようであり、既にクラス委員を中心に話しあいが行われ、その結果ありがちすぎる喫茶店をやる事になったのだ。

「い、伊吹……そんなに清水○太好きなの？」

「な、なによ変！？ 歌の歌詞もいいし、なにより声が最高じゃないっ！」

「もきゅう……拙者は音楽聴かないからよくわからないのです……っ」

「まあまあ、音楽の趣味なんて人それぞれだから」

「あ、亜紀さんはどんなの聞くのですか！？」

「あたし？ あたしは結構ロックとか聞くけど」

……まあ、ウチのクラス委員ってのがあの小坂で、小坂はクラスでも発言力のある女子だ。

その取り巻きにも伊吹や暮葉などの人気者がいるし、そもそも我がクラスは女子の人数が多い。

男子にも黒木ら三馬鹿や大吾と言った、いわゆるうるさいヤツはいるのだが……。

それでも、人数的に必然的に女子のほうが発言力があって……。

「はあ、どうせならコスプレ喫茶とかがよかったね」

「重原……無理だろ。うちのクラスの場合女には勝てねえよ」

「大体それでいいじゃねえか。僕的には、三次元の女の子がコスプレしても何の意味もないと思う！」

「お前は色々な意味で特殊なんだよ！」

この完全二次元派め！

なんでも三次元はクソと言いやがって、二次元は確かに素晴らしい。だが、二次元では決して出来ない事がある……三次元の女の子は抱けるじゃねえか！

とにかく……お、俺は完全に三次元を捨てる事ができないっ！

「も、もしかして清水○太聴いてるの私だけっ!？」

「すみません……その、CD貸してくれたら聞いてみるのですっ」

「暮葉、無理に伊吹に合わせようとしなくてもいいと思うよ。あと伊吹も音楽の趣味は本当に人それぞれだから」

……で、その三次元女子達でよく話す暮葉達だが、どうやら音楽トークで盛り上がっているようだ。

まさに健全。さっきからオタク談義ばかりしている俺らと違って本当に普通だ。

「そういえばさ、圭くんとか色々いるけど、男子って音楽なに聞いているんだろう？」

「どうせ圭介なんてアニソンばっかだと思うわよ」

「そうですよ！　けーすけ様がアニソン以外聞くとは思えないので

すよっ！」

クソッ、伊吹と暮葉め……まあ、確かに大体合ってるけどさ。これじゃ俺が重度のオタクみたいじゃないか。また、確かに重度のオタクなだけどさ……。

これでも一応身だしなみには気を使ってるんだからね。毎日お風呂には入るし無駄毛処理は完璧。制服以外に私服だって結構いっぱい持ってるんだぞ。

「うーん、こりゃ本人から聞いたほうが早いかな」

「さ、三馬鹿は嫌だからね！」

伊吹さん、ホントに三馬鹿が嫌なんですネ。

というか三馬鹿は何処に行ったんだろう。アイツら元ヤンだけによく学校サボるしなあ。

多分、今日も街中のゲーセンで遊んでいるんだろう。

「大丈夫大丈夫！ 圭くん達に聞くから」

「けーけーすけ様達にですか！？」

「ま、まあ……悪くはないわねっ」

「よし決まり！ ちよいとそこの野郎どもー！」

野郎共って……俺達かよ！

俺達に音楽の話を聞いてどうするつもりなんだろうか。

俺は基本、ゲーム音楽とかアニソンくらいしか聞かないし、大吾も俺と全く同じであろう。

そもそも俺の妹もどちらかと言うとオタクだから、ごく普通の音楽ってのがよくわからない。

重原はアニソンは聞くだろうが、他の曲は古いのしか聞かなさそう  
なイメージだしなあ……。

「ん、皆さんどうしたんだい？」

「突然だけどあんた達ってどんな曲聞くの？」

本当に突然だな、小坂のその質問……

まあ俺は横で聞いていたから、どうせそんな質問だろうとは思っていたけど。

「そんなの放○後ティータイムに決まってるじゃないか！」

「だ、大吾……っ」

若干引き気味の伊吹と小坂。まあ一般人として普通の反応であろう。

「そもそも普通の歌はクソなんだ！　ほとんどが何かのパクリじゃないか！　それに比べて……ああ、なんて完成度が高いんだ放○後ティータイム！　僕はもう一瞬で唯ちゃんのファンになったね！

そして同時に唯ちゃんは僕の嫁だ！　唯ちゃんこそ全ての救世主なんだ！　唯ちゃんがいればどんな困難だって乗り越えられるさ！

唯ちゃんLOVE！　唯ちゃんマジ天使！」

途中から唯に対する愛を叫んでるだけになってんじゃねーか！

どこが音楽の話だよ。音楽の話なんて前半のちよつとだけじゃねえか。

どんだけ大吾は唯が好きなんだよ。そこまで愛を叫ぶほどですかっ！

確かに唯は可愛いよ。可愛いけどさ……俺の中ではアズにゃんが一番——げふんげふん！

「大吾、相変わらずキモいわ……っ」

「大吾さんはホントにアニメ好きなのですね」

「いや、もうこれ病気のレベルだと思うよ？」

引き気味の伊吹に関心する暮葉、そして病気の大吾を心配する小坂。まあ、正直に言おう……これはひどいと言いたいようがない。

「もういいわ、重原はどんなの聞くの？」

後ろで唯への愛を熱く叫ぶ大吾を無視し、気を取り直すかのように伊吹が重原に質問した。

「俺はどっちゃって言うと、海外のロックとかよく聞くよ」

「へえ。あたしもロック好きだけどどんなの聞くの？」

「そうだねえ、俺は——」

小坂と重原。ロックが好きという事で意気投合した様子である。しかし意外だなあ。絶対重原は古い曲が好きだと思っていたけど。まあ、ロックと言っても別に今の曲とは限らないしな。

それにしても意外だ。重原はロックと言うより爽やか系だと思っていたのに。

「けーすけ様はどんなの聞くのですか！」



「え、俺？」

「どうせ圭介だからアニソンよアニソン。圭介の部屋にアニソン以外のCDってそんなに数はなかったハズよ」

「なんで知ってるんだよ！ 泥棒みたいに家の中漁ったのかよ！」

「ほらやっぱり。それを言うって事はアニソンしか聞いていない事は、肯定してるようなものよ」

ぐっ……クソッ、ゲーム音楽とかアニソンしか聞かないのは事実だ。事実なんだけど……なんだかムカつく！

結構小馬鹿にされている気がしてならないぞ。こうなったら……知ったかぶってやる！

でも音楽とかよくわからないし……一日勉強する必要があるな。だけど明日は休日だし……あ、そうだ。いい事を考えたぞ。

「じよ、上等だゴルアッ！ 明日カラオケ行ってみるか！？」

「え？ どうしたのよ。そんないきなり……？」

「カラオケ行って歌えたら知ってるって事だよな？ 知ってるって事は聞いているって事だよな？」

「た、確かにそうだわ……で、でも無理はしなくてもいいのよ？」

「無理なんかしてないっ！ これでも一応聞いているんだからな！ それを明日証明してやる！」

まあ……実際は伊吹が聞くような音楽に関する知識は、一切なかったりで……。

伊吹の言う通り、結構無理をしていたりするのである。それに気付いたのか、暮葉が俺の袖をくいくいつて引っ張ってきて。

「ん？」

「だ、大丈夫なのですか？　けーすけ様……ホントにアニソン以外にもOKなのですか？」

ヒソヒソと語り掛け、俺を心配をしてきたのである。

「あたりまえだろ。俺は大吾とは違うんですよっ」

俺は小声でそう返し、暮葉を安心させてあげようとした。

まあ確かに知らないよ。でも今日一日で覚えればいいじゃないか。そして見せてやろうじゃないか。俺がアニソン以外も聞くなって事にな！

……まあ、伊吹に馬鹿にされたくないから、うまく知ったかぶろうとしているだけけどね。

「わ、わかったわ……っ。あんたとカラオケ行くのも初めてな気がするし……そ、その代わりっ、アニソン歌ったら罰ゲームで翌日言う事なんでも聞いてもらおうからねっ！」

「OK上等だ。じゃあ俺がアニソンを全く歌わなかったら……伊吹も翌日俺の言う事聞くんだぞ？」

「わ、私もっ!？」

突然驚いた伊吹。彼女の頬が同時ぽんっと赤く染まった。

「あたりまえだろ？　じゃないと不公平だろ？　心配しなくてもよ、俺が伊吹に負けたらちゃんと伊吹の罰ゲームを受けてあげるから」

「っ……わ、わかったわ。じゃ、じゃあ明日カラオケ行くわよ……っ！」

「お、おうっ」

明日カラオケへ行くことを決めた伊吹に、俺は調子のいい事を言ってみせた。

やばいぞ……言っちゃまった以上は伊吹の奴隷にならない為にも、頑張って今時の音楽を覚えねえと。

でも、そもそも俺はそういうのがよくわからない。

他人に訊くと言う手段もあるが、このやりとりを見ているクラスのヤツには聞けないな……。

そうだ……音楽の話なら部活のみんなに訊いてみよう。

みんな、どんな音楽を聴いているのか――

## 第67話、戻ってきた平穩(?)な日常(後書き)

後書きトークコーナー

大吾「唯ちゃんの為なら死ねる！ この世は唯ちゃんが存在があるからこそ存在しているようなものだ！」

圭介「てめえはまだ唯に対する愛を叫んでるのかよ！」

大吾「圭介は嫁に対する愛を叫ばないのか!？」

圭介「叫ぶのはネットと脳内だけにしておくっす……」

大吾「愛が足りない！ 足りないぞ！」

圭介「そういう問題じゃねえだろ！ 好きなのはわかるけど、実際に教室で叫んだらただの痛い子じゃねえか！」

大吾「まったく……これだから三次元を捨て切れないアマは……っ」

圭介「三次元を完全に捨てるのもどうかと思うわ！」

大吾「大体こんな世の中に期待して何の得がある！ 不条理かつ不合理なこの現実……僕は、もうとっくの昔にこの世界を捨てた。僕は二次元世界の神だ！」

圭介「確かに二次元はいいよ、俺も好きだよ。でも、だからって現実世界を捨てるのはマズいだろっ！」

大吾「いいや！ 僕は捨てた、後悔は全くしていない！」

圭介「せめて1秒でも後悔しろっ！」

二次元 v s 三次元……この二つの世界の戦いは、未だに続いている。

## 第68話、♪おんがく♪

放課後、困ったぞ……考えてみれば今日は部活の活動日じゃない。あかりも浅間部長も早々にバイト。二人の家計は苦しいし、邪魔だけは絶対に出来ないな。

暮葉はあのやりとりを見ていたし、葵はオタク系女子だから多分アテにならない。

生駒のせいで学校内で明智に近寄るのは難しいし……というか、個人的に生駒が嫌だ。

こうなったら……そうだ、青山さんを探そう。

青山さんなら話題に乗ってくれるかもしれないな。

というわけで、俺は青山さんを探すために一年の階へと移動した。

「あ、あの……先輩っ?」

「おわっ!?!」

さて、青山さんを探そうかと思ったその時だ。

誰かが甘く幼く澄んだ可愛らしい声で俺を呼びとめる。

先輩……そう俺の事を呼ぶのは青山さんだけなハズ。

という事は青山さんだな。青山さんだと予想しながら振り返ると――

「す、すみませんっ。その……驚かせちゃいましたか?」

「やっぱり青山さんだったのかぁ。全然大丈夫だよ」

「いえいえ、その……すみませんっ、いきなり話し掛けちゃって」  
そういえば、青山さんから話しかけられるのはなんだか珍しい気がするかも。

「だから全然大丈夫だよ。それに俺、丁度青山さんに用があったから」

「ふえ？　わ、わたしに御用……ですか？」

「おう、実は頼みごとが……」

「た、頼みごと……ですか？」

首を傾げる彼女に思わず、胸がドキッとしてしまった……。

一般青少年の俺にソレは破壊力高すぎるっす……っ！

って、青山さんにデレデレしている場合じゃないぞ。それよりも青山さんに事情を説明しないと。

まずはそっからだ。いきなり『好きな音楽は何？』と聞いても、青山さんは多分困惑するだろうし。

——そんなわけで、青山さんに事情を細かい所まで説明してあげた。

「そ、それって……先輩の自業自得ですよね？」

「小馬鹿にされなくなかったんだよ。ちょっと見栄を張っちゃったんだよ」

「……ぷっ、ふふっ」

ええ！

わ、笑われた……100点満点の笑顔で笑われたぞ！

「ちょ、青山さん？」

「っ！？ す、すみません……っ！ でも……意外と子供な所もあるんですね、先輩っ」

「子供言うな！ 泣けてくるでしょ！」

「すみませんっ。でも……お気持ちはわかりますよ。オ・キ・モチは」

「なんでお気持ちって所を強調するの！？ それ以外はわからないのかよっ！」

「ソ、ソシナコトナイデスヨ？」

素晴らしい笑顔だ。でも言葉がカタコトであった。  
フツ……笑うがいいさ。どうせ俺は見栄っ張りのお子様な性格しますよ。

だって……伊吹に馬鹿にされるのって傷つくんだもん。

「それで、青山さんはどんなのを聞くのかなって」

「うーん……BOMPとかでしょうか？」

「な、なんすかソレ？」



「えーっと……ロックバンドですっ」

物静かな青山さんがロックとは……い、意外や！

大人しそうなイメージとは違って、意外とそういう系のものを聴くのか。

小坂が聞くなならなんとなくわかるが、青山さんがロック……なんつか、ギャップ萌えだ！

「青山さんってロック聴くんだね」

「え、え！？ お、おかしいですか……っ！？」

「そんなことはないと思うよ。音楽の趣味なんて人それぞれだし」

「……せ、先輩はホントにアニソン以外聴かないのですかっ？」

「元々音楽に興味がなかったというか、アニソンはなんとなく聴いていたら気に入ったというか……まあそんな流れで結果的に、アニソンしか聴かない状態になっちゃったんだよ」

「そ、それでアニソンばかりに……っ」

「お、おう……そうなっちゃったんだよ」

その結果、アニソンとかゲーム音楽に関しては大吾もビックリなくらい詳しくなったよ。

ただし、普通の音楽に関しては全然話についていけなくなってしまったのである。

正直今何が流行っているのかも、どの曲が全国的に有名なのかも俺にはわからない。

たとえば歌手やバンドの名前を知っていたとしても、どんな曲を歌ったりしているのかわからない。

なんつーか……高校生としてどうかと思う感じである。

まあ、アニソンだってよくオリコン上位にランクインしているらしいし、神曲もいっぱいだけどな！

「それで……そのつ、先輩は今度カラオケに行くのに、それだといけないと……？」

「いけないというか、アニソン歌ったら罰ゲームというルールが出来ちゃったんだよ！」

「……それ、皆さん知っているような定番のものでもダメなんですよか……？」

「多分ダメなんじゃね？ 伊吹のヤツ、アニソン歌ったら罰ゲームって言ってたし」

「それは……オタクの先輩には厳しいですねっ」

よかった……青山さんが理解ある人で本当によかった。

まあ、あれだけ毒のある部長を間近に見ていれば、少しは耐性がつくかもしれない。

「どうしよ……調子のいい事言っちゃって、結局は恥かくだけなのかな」

「だ、大丈夫です先輩……っ！ その……先輩さえよければCD……貸しますよ？」

「ほ、ホントか!？」

「はいっ。親に内緒で買ったCDが丁度あるんです……っ」

「親に内緒? ロックって親に内緒にするものだっけ?」

「い、いえっ! 普通は違うと思います。その……わたしの家、お父様が厳しいのでっ」

「そ、そうなのか……っ」

ロックを聴いただけでお説教って、本当に厳しい親父さんだな。確かにロックを聴く人は不良と思っている人もいるらしいけど……。それでもロックは老若男女、幅広い層に支持されているハズである。ロック聴いたくらいで説教する親父、しかも青山さんのお父様って……。

青山家、一体どんな家庭なんだろう。まあ、家庭の事情とか色々あるわけだから聞かないでおこう。

「そ、それでどうしますか……っ? その、借りてくれるとわたしも助かりますっ」

そっか……自分の手元からCDが離れるもんな。

親父さんに見つかる心配もなくなる。聞けないのは残念でも、リスクは確かに減るよな。

それに、明日うまく知ったかぶる為のいい勉強道具になるかもしれない。

「わかった、それじゃあちよっただけ借りようかな?」

「……っ！ あ、ありがとうございますっ！」

「おう、次の部活の時にでも返すね」

「は、はい……っ！ あの、これ……どうぞっ」

青山さんが鞆から取り出したのは、確かにBOMPのCDであった。本当に聞くんだな……そしてケースが綺麗な事。

家でも親父さんに見つからないよう、厳重に保管されているんだろうなあ。

「おう、ありがとな」

「いえいえ……っ、先輩のお役に立てたならその……わ、わたしも嬉しいです……っ」

頬をぽつと赤く染め、少しもじもじとしながら青山さんは言ってきた。

「そ、それじゃあその……今日はそろそろ帰らないと、お父様がうるさいので……っ」

「ああ、わかった。また来週な」

俺がそう言うと、青山さんはニコニコと笑いながら手を振る。

よっぽど時間がないんだろうか、『また来週』という言葉はなかった。

ただ、俺にはあの手を振るといのが『また来週』という意味に感じた。

多分、タイミング的にそれで合っているハズである。

やがて青山さんは手を振り終え、背を向けてゆつくりと立ち去っていく。

靴音が空しく響き渡る中、俺はただ彼女の後姿を見送っていた。

「やっぱり不思議な子だよなあ……」

出会いの時から既に謎が多いとは思っていた。

でも、今日はそんな数多き青山さんの謎に、新たな謎が追加された気がするよ。

その中でわかった事は二つだけ。青山さんもロックを聞くこと、そして家の事で苦勞している事だ。

「けーすけ様っ!」

元気な声が聞こえる。この声は間違いなく暮葉だ。

ただし、二人分の靴音が聞こえるあたり、暮葉一人で来たわけではないようである。

「あ、いたいた。お兄ちゃん探したよ?」

「あれ、暮葉に……あれ、誰だっけ?」

「ひどいっ! 実の妹が存在しなかった事になってるよ!?!」

もう一人は葵であった。

一年の教室が並ぶ階まで来たっていうのに、青山さんも葵も背後から現れた。

なんだか、ちょっとだけ不思議な気分だな。

「泣くなよ、軽いジョークだって」

「でも拙者達、けーすけ様を探していたのは事実なのですよ」

「そうなのか？」

「だってだって！ 今日には部活がないからお兄ちゃんの教室まで行って見たら……お兄ちゃん、どこにもいないんだもん！」

帰りのSHRが終わった後、すぐに青山さんを探しに行ったからなあ。

多分、葵とはどこかですれ違ってしまったのだろう。

「そうか、悪かったな。ちょっと青山さんに用があったから――」

「ち、千早に？ ハッ！？ お兄ちゃん……まさか千早にえっちな要求を！？」

「してねえよ！ 兄貴を犯罪者みたいに扱うなよ！」

「あはははっ！ そんな事より帰ろーよお兄ちゃんっ☆」

あの純粹そうな笑顔……葵の事だ、きっと裏があるに違いない。  
それでも何故か憎めねえ……妹効果シスター・エフェクトってここまで強烈なのね。  
まあいいか。こういう扱いを受けるのもいつもの事だ、もう慣れっこですよ。

「けーすけ様っ！ 帰りましようっ！」

「……そうだな！」

とりあえず、今日の所は家に帰るとしようかな。  
この後、俺達は何かと盛り上がりながら帰宅したのであった――

## 第68話、♪おんがく♪（後書き）

後書きトークコーナー

圭介「さて、今回は重大発表があります」

伊吹「どーせいいつものアニメ化詐欺とかゲーム化詐欺でしょ？」

圭介「ち、違うぞ！ 今回はマジだ！ ほら、活動報告で第二回『夏の感謝祭』やるっていったじゃないか」

伊吹「知らない人は知らないわよね……それ」

圭介「……い、いつ始まるんだと思っていた人もいるハズだよ……多分！ もう7月も半ばを過ぎちゃいましたが、いよいよ『夏の感謝祭』、本格開催です！」

伊吹「まずなにをするのよ？」

圭介「短編あげたり夏のホラー2011に参加したり、ネタバレにならない範囲で読者様の要望を番外編でやろうと……」

伊吹「そ、それで最初はなにを……っ？」

圭介「まず最初に、キャラクター人気投票をやろうと思うんだ！ 期間は今から8月31日までの予定です」

伊吹「な、長いわねっ！」



圭介「一応夏の間が投票期間の予定だからな。ちなみに投票場所は  
←です」

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

圭介「読者の皆様はどのキャラクターが好きでしょうか、もしよかつたら投票してみてください！」

伊吹「どーせ票なしで終わるんでしょ……」

圭介「コラ伊吹っ！ ネガティブな事言うなっ！」

※読者の皆様のたくさんのご投票、お待ちしております！

そして、見事一位に輝いたキャラは——そのキャラの短編を執筆しようと思います！

どうかよろしくお願いします！

## 第69話、やんちゃっ娘参☆上!

7月2日土曜日早朝。

……ああ、緊張してきた。一晩かけて勉強はしてきた。

青山さんから借りたCDだって何度も聞いた。

見たいアニメだって録画で我慢する勢いで、俺は今日のカラオケで歌うために勉強をしたんだ。

でも……イザ本番で上手く歌えるか心配である。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんっ!」

「ぐ、ハアッ!」

その時、元気のいい声と共に、体中の骨が折れるんじゃないかという勢いで女の子が抱きついてきた。

明るい髪色のショートカットにちょこんとサイドテール。Tシャツにハーフパンツ。大きな瞳と弾けるような笑顔。

藤島葵。俺のブラコン妹様のご登場であった。

「お兄ちゃんおはようっ!」

「あふおっ! もう少しで骨折する所だったぞ!」

「そうですよっ! けーすけ様が壊れちゃうのですよっ!?!」

暮葉も葵の背後から現れ、休日なのに何故か一家三人が玄関に集結してしまった。

しかも、三人とも私服姿である。どうやらみんな何処かへ出かける

ようである。

「はぁ……で、葵は何処に行くんだ？」

「ゲーセンだよ！ 今日M〇〇の公式大会の日だから、葵も参加してみる！」

葵はよくゲームの大会に出場しては、いつも好成績を残して帰還してくる腕のいいプレイヤーである。

俺もゲームは得意なほうなんだけど、それでも対戦で葵に勝った事は一度もない。

一部では“神”と呼ばれ崇められている葵。

その努力を現実で役に立つ事に回せば、多分葵は今頃天才と呼ばれていた事だろう。

ちなみに、葵が参加しようとしているM〇〇の大会とは、その名の通りM〇〇というゲームの大会だ。

「そ、そうか。頑張れよっ」

「うん！ 優勝は7泊8日イタリア旅行2人分だから。お兄ちゃん……もし優勝したら葵と二人で行こうね！」

「……………」

前言撤回、是非とも全国の強豪に負けてください。

というか、どうしてゲームの大会に優勝したくらいでイタリアに行くんだ？

しかも7泊8日って……ただの旅行にしては滅茶苦茶長い気がするぞ。

……そのイタリア旅行ってさ、もしかしてシチリアのマフィアのボ

ツタクリなんじゃねえのか？

「けーすけ様！ 拙者は亜紀さんの家へ行くのですけど……その、大丈夫なのですか？」

「うーん、多分大丈夫じゃないか？」

暮葉の俺を心配する言葉に、俺はそう答えた。

暮葉は多分、今日のこのカラオケの事を心配しているのだろう。でも、多分大丈夫なハズである。この日の為に青山さんからCDを借りたり、ニヤニヤ動画でテキストな曲を検索して聴いたりしたからな。

多分、今の俺ならNOアニソンでもイけるハズである。

そして伊吹、俺に勝負を挑んだ事……たつぷりと後悔させてやろうじゃねえか！

「もきゅ、でもけーすけ様。アニソン以外というのが条件なのですよ？」

「お、お兄ちゃんカラオケ行くの！？」

「伊吹とな。あと昨日勉強したからアニソン禁止でも多分OKだよ」

「む、無理だよ！ アニソン禁止なんて辛すぎるよ！」

そりゃあ葵はどちらかと言うとオタクだからな。

というか、俺だってアニソン禁止は辛いよ。

だから昨日寝る間も惜しんで音楽聴きまくったんじゃねえか！

おかげでブラックアウトしそうなくらい眠たいぜ……っ。

「もきゅ、心配なのです！　けーすけ様がアニソン歌っちゃって、伊吹さんの尻に敷かれちゃいそうで恐ろしいのです！」

い、伊吹が暮葉に鬼嫁扱いされている！  
まあ確かに、お仕置きという理由で引っ掻かれそうな気がするけどね。

伊吹の引っ掻き……猫ちゃんみたいで可愛いんだけど、正直されているこっちは痛いんだよな。  
やられた後はヒリヒリするし、出来れば避けたいものだ。

「そうならない為にも頑張るから」

「応援してます、負けないでくださいね！」

「が、頑張ってお兄ちゃん！」

「おう、んじゃあ俺はそろそろ行くからな」

「気を付けてくださいね、けーすけ様っ！」

——こうして藤島家を後にした俺は、伊吹との待ち合わせ場所である……。

「……………」

自宅玄関から僅か数メートル。

家を出るとすぐに見える、我が藤島家の目の前にある電柱へと向かった。

向かうと言うか、家を出たらすぐそこなんだけどね。

そんな近すぎる待ち合わせ場所には、既に彼女が電柱によっかかり

ながら待っていたのであった。

「な、なによ……っ？」

少し頬を赤く染めながらも、むっとした表情で振り向いてきた伊吹。風に靡く白銀の髪と、最近の中々お目にかかれぬ私服姿がとても美しい。

でも、現代の女子高生としては小柄な体躯を持つ伊吹。

八重歯があったりと、美しい女性というよりは可愛い女の子だ。

俺はそんな伊吹にゆっくりと近寄り――

「よお、待ったか？」

「ま、待ったもなにも家の目の前よ？」

「どうせここで待ってるんなら家にいればよかったのに」

「う、うっさい！　どこで待ってようが勝手でしょ！」

顔を赤くしながら、今にも噛みつきそうな勢いで怒鳴りつけてくる伊吹さん。

うーん。やっぱり中々デレないものですなあ。

一瞬ようやくツンデレになったかと思いきや、やっぱり伊吹はツツパリのままであった。

「で、まだ開店時間までしばらくあるけど、その間どこで暇潰す？」

「そうね。とりあえず市街地まで行ってみる？」

「そうだな、街中に行けば何かあるだろうな」

というわけで、俺達はカラオケの開店時間まで古宇坂の街中で時間を潰す事にした。

古宇坂市自体人口は13万人程度に過ぎないので、大した遊び場があるわけではない。

それでも、街中に行けばここら辺よりは暇を潰せる場所があるだろう。

「……………」

俺の隣をてくてくと歩く伊吹。

……そういえば何年ぶりだろうな。

登校する時や下校する時は何度か並んで歩く事はあったけど、こうして遊ぶために伊吹と歩くのは中1以来な気がするぞ。永渕の一件以来、俺達は話はしても一緒に遊んだりはしなかったからなあ……。

——やがて歩いていると、気付けばそこは古宇坂駅前であった。意外と大きな駅舎の前にあるロータリーには、今日も数代のタクシーが停車している。

一応古宇坂市の中心駅なので、規模はそこそこ大きいのである。

「さて、ここまで来ちゃったけど」

「ど、どうする？ まだ1時間くらい時間があるわよ？」

……えーつと、これはアレだな。

どうして1時間も早く来てしまったかというと、俺達があまりにも張りきり過ぎたからである。

はあ……張りきり過ぎるのもよくないよね。こういう失敗だった

まにはあるから。

「とりあえず、そのデパートにでも行ってみる？」

一応デパートは数分前に営業を開始した所である。

今行けばきっと品ぞろえは豊富、食品を見てもしょうがないと思うが、ブランド物の服とかなら結構揃っているハズである。

服とかなら俺も伊吹も十分に楽しめるハズである。

「そうね……時間を潰すには丁度よさそうね」

「それじゃあ、ちょっとあそこに行ってみ——」

と、言いかけた。

「オイお前っ！」

瞬間、なんだか軽そうな男に俺達は声を掛けられてしまった。

男は半そで半ズボンで、盛った金髪にネックレスという……いかにもチャラい感じの人であった。

ああ、この時点で俺はわかったよ。きっとコイツは伊吹をナンパしに来たに違いない。

「なんですか、貴方？」

「随分可愛い彼女連れてんじゃねえかよ？」

「な。なによあんた。別に私は圭介の彼女じゃないわよっ！」

「へえ、彼女じゃない？　じゃあお前さあ、その子俺にくんねえ？」



「なんでですか？」

「だって付き合ってるワケじゃねえんだろ？　だったらさあ、俺と遊んだって問題ねえよなあ？」

うわあ……なにこのラノベでありがちな展開は。

しかも小者臭が半端ねえ。不良が怖いハズの伊吹でさえ強気な態度である。

そしてなにより男の腕……細っ！

見た目は派手でチャラいけど滅茶苦茶弱そうだっ！

「いや、問題大アリだろ！」

「アア？　なんだよテメェ……もしかしてこの俺に喧嘩売っちゃうわけ？」

「今の会話の流れでどうしてそうなる！？」

あとアンタ、弱そう何だから無理するなよ！

伊吹でさえジト目で呆れて見ているぞ。

……全く、こういうのって弱い癖にしつこいから面倒である。

どうしようかな、一番手っ取り早いのは倒す事だけど……流石にそれをやると色々問題だしなあ。

第一、無駄な体力を消耗したくない。あと、警察沙汰になるような事はしたくないぜ。

「け、圭介っ、行こう？」

「え？　あ、おうっ」

俺がそう答えると、伊吹は俺の左手をぎゅっと握ってきた。  
そして、俺は伊吹に手を引かれるまま、この場を去ろうとしていた。  
……まあ、そうだよな。こういう馬鹿は相手にしないに限るぜ。

「おいおいテメエら無視しちゃってんじゃねえよ？ やっぱ喧嘩売ってんのか!？」

ああうぜえ……でも相手にしないほうがいい。

仮に殴られたとしても、俺の身体は普通の人より丈夫である。  
だから、あんな普通の人に何発殴られようが平気なハズである。  
一方的に暴行され続けていればそのうち警察も来て、自然にアイツが悪い事になるだろう。

「待てって言ってんだろがこの野——ぐああああっ!」

……え？

今、なんか後ろからさっきのチャラ男の悲鳴が聞こえたぞ？  
俺と伊吹は流石に気になったので、後ろを振り向いてみた。  
するとそこには——

「こらあゝ圭太あっ! あたいの友達に喧嘩売るなよなっ!」

「いででっ! ちょ、このチビ姉貴っ!」

「誰がチビだこの厨二のチャラ男! 早く家に帰れよなっ!」

「あ、ぐああぎやあああっ! ちょ、悪い! 悪かった姉貴! もうヤメテエエエエツ!」

あ、姉貴……？

なんだかよくわからないけど、そこにはチャラ男にキャメルクラッチを掛けるあかりの姿があった。

……えーっと、色々言いたい事はあるが一言だけ言わせてもらおう。

「……なにこれ、どういう事だ？」

## 第69話、やんちゃっ娘参☆上！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

後書きトークコーナー！

作者「今日は0時の予定がいつもより更新が遅れて申し訳ございません！ いきなりの腹痛と腰がいきなりつつたように痛くなったりともうボロボロで……っ」

圭介「言い訳はもうどうでもいいよ！ それより今日は重大発表があるんだろ？」

作者「そうでした！ 実は……コラボのお知らせです！」

圭介「え？ コラボしてくれる優しい人いんの？」

作者「コラッ！ 失礼な事言わない！ 実は只今開催中の夏の感謝祭ですが、それでkuxuさん執筆の『Freedom／Story』とこの『魔法少女に会っちゃった場合』のコラボをやる事になりましたので、ここで報告させて頂きます！」

圭介「ネタかと思ったけどマジなのかよ！？」

作者「マジです。許可もとってあります！ 出来れば7月中にコラボ番外話をあげたいな～と思いますので、皆様よろしくお願いします！ そしてコラボを提案してくださったkuxuさん、本当にありがとうございます！」

## 第70話、カラオケ♪

カラオケ開店15分前、ここはデパート内にある休憩所である。休憩所と言っても、ベンチが複数あるだけの簡単なものだけど。あの後、あかりも入れた俺達はデパートに入り、ここで途中から入ってきたあかりと話をしていた。

「え、ええっ!? 今の弟さんだったの?」

「そうだ、残念すぎるだろ!」

確かに残念すぎる………というか、あれがあかりの弟だったのか。

「確かにお前の弟、グレているとは言っていたけど……」

「そうなんだよ、あたいと変態兄貴はアイツの食費を稼ぐ為にも必死なんだからな」

……そりゃまあ、御苦労さまとしか言いようがない。

本当ならお世話もしたくないんだろうが、一応浅間圭太あさまけいたという人物は、アレでも元気の中学生なのである。

少なくとも、義務教育を受けている間は世話をしないとイケないのだ。

ただでさえ浅間家は家計が苦しいのに……ホントにお疲れっす!

「ところで圭介、な〜んであんたはあかりの家の事情を知ってんのかしら?」

伊吹が拳を握りしめ、笑顔で俺へと迫ってくる。

その笑顔が軽くホラーだ、紫色のオーラさえ立ちこめている気がするぞ。

今の気分は大国に圧力をかけられる小国の首相だ。

「ちょ、伊吹少し落ちつこう!」

「そーだぞ伊吹! 圭介はあたいを助けてくれたんだ。べ、別に深い出来事はなかったんだからな!」

ていうか、お前らも地味に仲良しになってるな。

いつの間に名前で呼び合っているし、先輩後輩とかそんな上下関係を微塵も感じねえ!

今の2人はまるで、昔から近所に住んでいて、姉妹のような関係になった二人のようであった。

「ほ、ほんとなの?」

「ホントだよ、別に大した事情はねえよ」

「……わかったっ」

どうしましよう、伊吹が少し落ち込んでしまった。俺、何かコイツに悪い事言っちゃったのかな。

これから遊びに行く所なのに正直この空気は重すぎるぞ? 仕方ない……俺が適当に話を振ってこの空気を――

「あ! そーいえば二人はどこに行く予定だったんだ?」

この重たい空気をぶち壊す為に話を振ろうとした瞬間、あかりが先に話を振ってきた。

俺がやろうとした事を、あかりが真っ先にやってくれたのである。  
ナイスだ、あかり！

「俺達はこれからカラオケに行く予定だけど？」

「そ、そうよ！ お互いの明日を賭けた戦いよ！」

「明日をかけるって……面白そうだな！ あたかも混ぜてくれると嬉しいな！」

あかりは瞳を輝かせ、おねだり光線を俺へと放ってきた。  
その眼差しに俺は……ぐふっ、これは勝てませんっ！

「あかりも来るか、別にいいけど？」

「えっ！？ ちょ、圭介！ 話が違うわよっ！」

怒ったり落ち込んだりまた怒ったり……伊吹は忙しいヤツだなあ。  
まあ、確かに最初は二人きりの予定だったし、当初の予定とは違  
うよな。

とりあえず、あかりをパーティーに加える為にも伊吹を説得してや  
らないと。

「別にいいだろ。本人も行きたがっているし、折角なんだからさ」

「で、でも……っ」

「ん、多分人数は多いほうが楽しいんじゃないか？」

それに正直、あかりが来てくれるのは俺としても助かる。

こっそりあかりに何を聴いているのか、あかりの好きな音楽を聞き出せそうだからだ。

そして、その聴きだした音楽をテキストに知っていると誤魔化し、上手く合わせて一緒に歌う……。

この完璧な作戦！これからNOアニソンでも数時間歌えるハズだぜ！

「……わかったわよ……っ」

伊吹は渋々と、あかりのパーティー加入を認めてくれた。

よかったあ……でも何故か機嫌を悪くしちまったなあ……。

仕方がない、後でお昼に焼きそばでも奢ってあげよう。

「圭介！ 今から行ったら数分待つだけで開店時間になるハズだ！」

「ホントかあかり？ ……そういえば、もうそろそろ開店時間だな」

「うん、行こうか二人とも！」

「そうだな。伊吹、行くぞ？」

「うん、うん……っ」

こうして俺達は休憩所のベンチを立ち、これから俺にとっては戦場になるであろう、恐怖のカラオケへと歩み始めたのであった。それにしても伊吹のヤツどうしたんだろうか？

さっきから全然元気がないんだけど……まあ、カラオケに行ったら少しは元気になるかな？

「二人きりがよかった……圭介と二人きりがよかった……っ、3人なんかやだ……っ」



や、ヤバい。よく聞こえなかったけど独り言を呟いている！  
伊吹さん……まさかのツツパリからヤンデレへのジョブ変更！？  
とにかく恐怖しか感じねえ。こりゃ何としても機嫌を直してもらわないと……っ！  
……それと、後で聞いた事だけどあかりはカラオケが好きらしい。  
だからカラオケという言葉聞いた瞬間、張り切って行きたくなっ  
たんだとか。

——カラエケ店【ドックアイ】

どこにでもあるごくごく普通のカラオケ店だ。  
特徴と言えば、看板に二匹の可愛い犬がいる事くらいであろう。  
店内にはカラオケルームはもちろんのこと、ゲーセンまで存在して  
いてゲーセン目当てお客さんまで店内にいたり、意外と混んでい  
る店なのである。

到着すると普通の部屋を2時間取って、一応マラカスやらタンバ  
リンやらをせっせと運び込んだ。

……まあ、ただ歌うだけだからな。使い道があるかどうかは微妙な  
所だけ。

2時間って結構短いものだけど、人数はたったの3人である。

多分、思っているよりは長く歌えるハズであろう。

さてと……部屋にも入った事だし、そろそろ俺も曲を入れようかな。  
つい何時ものノリでアニソンを入れちゃわないよう、気をつけて操  
作しないと——ピッ。

【only my ○ailgun】

しまったあああああああああああつ！

初っ端から大失敗だ。いつものノリでアニソンを入れてしまった！もうダメだ。俺は明日……伊吹の奴隷確定だ！

……でも、入れてしまったものは仕方がない。泣きながらこの熱い神曲を歌ってやろうじゃねえか！

もうヤケクソじゃヤケクソ。さあ伊吹よ、早速アニソンを歌ったとして失格扱いするがいい。

そして——明日は俺を奴隷にするがいいっ！

「け、圭介！ よくわからないけどソレカッコいい曲だな！」

「ほ、ホントだ……圭介がアニソンじゃないの歌ってるっ」

——え？

あれ、案外女子からのウケがいい……というか伊吹さん、これ普通にアニソンなんですが？

某学園都市アニメのOPなんです。俺の大好きな佐○涙子さん大活躍なアニメなんだけど。

……そうか。アニソンかアニソンじゃないか、その判断をする為には元ネタを知っている必要がある。

オタクじゃないので伊吹は——この曲の元ネタを知らない！

それに、伊吹のアニソンのイメージというのは、とにかく妙に声が高くて早口でオマケに歌っているのは声優さんというヤツなんだろう。

要するに……それ以外のヤツならアニソンでも誤魔化せるというワケか！

「~~~~~っ！」

俺が見事に某学園都市アニメのOP曲を歌い上げると……。

——信じられない事に拍手が沸き起こった。

「盛りあがる曲だったしうまかったな！」

「圭介っ！ これなんて曲なの？ か、歌手は誰なのよっ？」

「……南○愛乃さん？」

あ、しまった。そういえばこの人声優もやってるじゃん。

……まあ伊吹の事だ。後でじっくり調べるなんて事はないだろう。

「……っ、まあ圭介にしては頑張ったじゃないっ」

「は、ハハッ！ 見たか！ 俺だってアニソン以外歌えるんだからな！」

……実に悲しい演技である。神様、どうか後でアニソンだって事がバレませんように。

さて、どうでもいい話かもしれないが、伊吹とあかりは俺を挟むように両側に座っている。

伊吹は俺の左側、あかりは俺の右側だ。

俺から歌い始め、左に行ってから右に戻るという順番なので、次に歌うのは伊吹である。

伊吹の歌声なんてそんなに訊いた事がないな。伊吹って歌上手いのかな？

そんな歌唱力が謎の伊吹が入れた曲は、清水○太の【アイシテル】。とりあえず、清水○太の名前なら俺でも知っている。

伊吹が愛してやまない歌手らしい。多分、俺が好きな曲とは違って至って健全な曲を歌う人だろう。

……一度写真見たっけ、結構イケメンなヤツだったしな。  
まあ、どうせ俺みたいな凡人が勝てる相手ではないだろう。

「♪~~~~~」

それにして……う、うまいぞコイツ。

伊吹のヤツ、実はド下手かと思ったけど……滅茶苦茶歌上手いじゃねえか。

俺は原曲聴いた事はないけど、伊吹の歌唱力はもうプロでも通用しそうなレベルである。

……歌い終わった伊吹は、自分の好きな歌手の歌を上手く歌えたからだろう。

なんというか、いつもは中々見せない爽やかな笑顔を浮かべていた。

「うまかった！ 原曲並に上手かった！」

「えっ？ ええ！？ そんな……っ、私なんか原曲には全然……っ」

「謙遜する事ないだろ、フツーに上手かった！」

「あ、ありがとうっ」

なんかあの二人通じあってるし！

しかもあかりさん、一応原曲知ってるのね！

……どうやら、アニソンやゲーム音楽以外に関心がないのは俺だけのようなのである。

さてと、次はあかりだな。あかりはカラオケが大好きらしいし、という事は歌うのも大好きなハズだ。

きつと素晴らしい歌を披露してくれることであろう。

あかりが入れた曲は、BOMPの【天体観測】。

コイツもBOMP聴くのかよ！ どんだけウチの学校で人気なんだっ！

まあそれはともかく……期待のあかりの歌唱力は——！

## 第70話、カラオケ♪（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

後書きトークコーナー

圭介「どうしよう……」

暮葉「どうしたのですかけーすけ様っ!？」

圭介「PCの容量がそろそろギリギリなんだ」

暮葉「もきゅ？ で、でしたらいいデータを削除すれば……?」

圭介「それが出来ないんだよ！ ToHeOrrt2とかOanonとか！ 古いゲームでも消すのはもったいないんだよ！」

伊吹「またエロゲーか！ この変態ばか圭介っ！」

## 第71話、はたして勝者は――？

.....

.....

.....は？

こ、ここはどこだ。俺は今までどうしてたってんだよ？

そういえば知らない天井だ。いや、知っていると言えば知っている。何故なら大吾達とはよく【ドッグアイ】に来るからだ。

そうか……ここは【ドッグアイ】なのか。そういえば俺達はカラオケに来ていた気がするな。

確かアニソン禁止と言う縛りプレイで……それで、俺と伊吹が歌い終わってあかりが歌い始めて……。

「はっ！？　そ、そうだった……っ」

そういう事だったのか……。

とりあえず、俺の横でぐったりしている伊吹を起こしてやらないと。

「おいっ！　起きろ伊吹！　しっかりしろ！　まだあの世に行くには早いぞ！」

とりあえず伊吹の肩を揺さぶり、彼女を起こそうと頑張る俺。

その努力が向かわれたのか、伊吹はようやく目を覚ましキョロキョロと周りを見渡し始めた。

そこで彼女もここがカラオケである事に気づく。何があったのかを考えている様子で……。

「っ!？ け、圭介っ! あの……あの悪魔のボイスは!？」

どうやら、彼女は全てを思い出したようである。

「心配するな。もう終わった……終わったんだ」

「ホントなの？ ホントに悪魔の雄叫びは終わったの？」

「ああ、大丈夫だ。もうあの雄叫びは——」

「あああんだあああああああああつ！」

俺の声を斬り裂いたのは、ただ一人ピンピンしているツインテールの女の子である。

ガオオと言わんばかりに口を大きく開けている。どうやらお怒りの様子だ。

「なんであたいが歌い始めたと同時に気絶するんだよ! しかもあたいを悪魔みたいに扱うなよな!」

「ちよっ! おまつ、くるぢいっ! 胸倉掴むなっ!」

まだあどけなさが残る女の子に、胸倉を掴まれる男子高校生……。多分、これほどシュールな光景は中々お目に掛かれないだろう。

気分は不良にカツアゲされる気弱な少年だ。

「だってみんなしてあたいを悪魔扱いするんだもん! 圭介だけは……圭介だけは信じてたのに!」

「信じてたのかよ!？ ついでに伊吹も信じてやれよ!」



「私はついでかいっ！」

しまった、伊吹がついでという何気ない言葉に腹を立ててる。

「いや、その……すみません伊吹さん。つーかあかり、そろそろ手を離そうぜ？」

「その前に質問！　なんであたいが歌ったら気絶するんだ！　あたいはマイクカー○イか！」

「似たようなもんだったぞ？　お前……歌ヒドすぎ」

声デカイ音遭ってない妙に響くの三拍子。

歌というよりは騒音であった。近くで155mm榴弾砲を撃つよりうるさいかも。

下手すりゃあかりの歌声は……大和の46cm砲の砲声に匹敵するかもしれない。

とにかく……これならまだジャ○アンのほうがマシだ！

「あ、あたいが……10年も掛けて生み出した芸術なのに！」

「芸術というより必殺技だろ！」

しかも10年もカラオケ通ってるのかよ！

もしかしてあかりは10年間、こんな間違いまくっている歌い方をしてきたのだろうか？

「必殺技……あ、なんかそれカッコいいな！」

「それで納得するなよ!？」

「必殺技……昏睡ボイス・ザ・ボイスの狂声なんてどーだ!

「お前、絶対厨二病だろ……」

ちなみに、俺も中学生の頃はバリバリの厨二病だったな。

その頃にやっていたネトゲのハンドネネームは、もちろん厨二チックなものであった。

確か……?古宇坂の夜天光?だったような……ああ、思い出しただけで痛い。

「そ、そんな事より次は圭介の番よ!」

「え? ああ……そういえばそうだったっけ?」

確かに、あかりの次は順番的に俺だったな。

あかりのジャ○アン・リサマイル騒動のせいですっかり忘れていたぜ。

そうだそうだ、じゃあさっさと歌を入れねえとな……今度は間違っ  
てアニソンを入れませんかように。

【未○への咆哮】

ぎゃあああああああああああっ!

ま、また間違えた。ついノリでアニソンを選んでしまった!

さっきは上手く誤魔化せたけど……今度は上手くいくかわからねえぞ。

ま、まあこの曲は元々エロゲーのOPだし、多分伊吹達も元ネタ知らないだろう。

……でも、あかりは兄貴が浅間部長で、浅間部長はオタクでしかも18歳で合法的にエロゲーを。

まずい……あかりが兄貴の影響で知っている可能性がある。

でも学園都市OPを知らなかったからなあ。神様、どうかあかりがこの曲を存在を知りませんように。

「~~~~っ！~~~~♪」

とにかく、選んじまった以上は仕方がない。

演奏停止を選択すると伊吹に疑われてしまう。

……ならば、最後までノリで歌いきる事だけを考えろ——！

「~~~~♪」

俺はノリで歌い続ける。この曲エロゲーの曲じゃないか……という疑いは出てこない。

よし、あかりも伊吹も元ネタを知らないらしい。

……だ、だよなあ。だって二人ともエロゲーをプレイするような柄じゃないし。

ちなみに俺はこのゲーム、18禁版と全年齢版の両方を持っているぞ。

とまあ……そんなどうでもいい情報はともかく。

「~~~~っ！」

——サビを歌え終わると、伊吹とあかりが拍手をくれた。

どうやら元ネタがバレる事もなく、二人は妙に熱くてカッコいいこの曲を気に入ったらしい。

……まあ、この調子だと俺の不正がバレるのも時間の問題か。

でも、この局面さえ乗り越える事が出来ればそれでいい。

それにこれは元々エロゲーの音楽だ。アニソンと似たようなものか  
もだが、正確には全然違うもの。

ゲームとアニメを一緒にしちゃいけないぜ！

「圭介！ 今のも熱くてよかった！ もう歌手になるオーディション受けちゃえよな！」

「ま、まさか圭介が二曲続けてアニソン以外を歌うなんて……しかもちよつとカッコいい曲っ」

「は、ハハハッ！ ま、まあ俺が本気を出せばこんなもんだよ！  
ハハハッ！」

言えねえ……エロゲーの曲だなんて今更言えねえ……っ！

まあ、バレたら伊吹の奴隷確定だし、もうこのままでもいいや。

——それから、1時間と数十分が経過した。

「圭介も伊吹もすっごいうまかった！ あたいには敵わないけどな  
！」

「そ、そうね……っ」

「ああ、あかりには敵わないな……」

あかりの必殺奥義、ボイス・ザ・ボイス昏睡の狂声に勝てる日は永遠にないだろう。  
あの全てを破壊し尽くすような歌唱力、とてもじゃないが俺には真  
似できないぜ。

……カラオケで2時間、無事に歌い終えた俺達。

現在、俺達3人は【ドッグアイ】の出入り口の前で屯っていた。

「あかりはこの後どうするんだ？」

「んんゝ、もう少し遊びたいけどあたいはこれからバイトだからなあ」

「バイトなの？ それじゃあ……仕方ないわねっ」

「バイト頑張れよ。またな、あかり」

「んみゃ！ 明日の為にちょっと働いてくるからなっ！」

まるで戦争に行く兵隊さんのように元気よく叫ぶと、くるっと向きを変えて次第に遠ざかって行った。

あかりにとって、バイトとは大変重要な意味を含むものだ。

浅間家は母親が退院したとは言え、家計が苦しいのは相変わらずの話である。

だから、浅間家の明日の生活の為に——彼女は今日もバイトで汗を流している。

可愛い外見とは裏腹に、あかりは皆が思っている以上に苦勞をしているんだ。

「……さて」

「……………」

あかりが去ると、急に伊吹がしょんぼりとした様子で俯いてしまった。

何故なら——今日のカラオケ対決の結果は——

「ん、どうしたんだ？」

「なんでもないわよ……そ、それより罰なら早く言ってちょうだいよ！」

「罰？ ああっ」

全てを思い出したぞ。

俺がアニソン以外を歌い続ける事が出来た場合、伊吹が明日俺の言う事を聞くんだったっけ？

確か、そんな条件だったような気がするな。

「は、早く言いなさいよ……そのっ、なんでも受けて立ってやるんだから……っ」

……伊吹のヤツ、本気で罰を受けるつもりだったんだ。

俺へ向けられる強い眼差しのせいかな、痛いほどに伊吹の本気の気持ち伝わってくる。

伊吹の言葉は間違いなく冗談じゃない。今、俺が冗談を言えば確実に落ち込んでしまうだろう。

だから俺は――

「わかった。罰を言うよ……」

「……………っ！」

瞳を閉じ、ビクッと一瞬震えた。

怖いんだろうか、伊吹は俺に何をされるのか……不安で仕方がない

のだろう。

俺に恐怖している伊吹に、俺は――

「あ、明日は……好きにしていーいぞ？　それが罰だっ」

真っ直ぐ。

どこまでも素直に。

俺はちよつと不器用ながらも、本当に思っている事を伊吹へ言っ  
てやった。

「……え？　ど、どういう事……なのよ？」

「どういう事って、言葉のままだよ。明日は好きにしていーい、伊吹  
の自由だって言ってるんだよ」

「そ、それっ！　罰にはならないでしょ……？」

「あのなあ……俺がビクビク震えている女の子に、罰だと言ってひ  
どい事をするヤツに見えるか？」

「び、ビクビクしてないわよ！」

よかった。

こんな風に怒って突っかかってくるあたり、伊吹はいつも通り元氣  
な様子だ。

「とにかく、明日は伊吹の自由。俺に縛られる必要なんて全くない  
んだぞ？」

「……け、けいすけ……っ。あ、ありが……と……う」

「ん、今なんて？」

“あり”までは聞きとれたが、そこから先は声が小さすぎて聞きとれない。

だからもう一度聞こうと、言葉を返してみたのだが。

「……な、なんでもないわよ！　そろそろ帰るわよばか圭介っ」

「へいへい……っ」

ダメでした。伊吹はやっぱ何も言ってくれなかった。  
相変わらずだな……伊吹はいつものツツパリ伊吹ちゃんである。

——でも、なんでだろう？

俺の前を歩く伊吹は時々、俺のほうをチラチラと見てくるのだ。  
その時に見える伊吹の横顔。なんだか頬がほんのりと赤かったよう  
な……。

……結局、伊吹が何を想っているのかよくわからないまま、俺は自  
分の家へと戻ったのであった。



第71話、はたして勝者は——？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

後書きトークコーナー

あかり「アツカリ〜ン！」

千早「あ、あかり……どう、したの……？」

あかり「よくわからないんだ。ただ、あたいのエロ兄貴が最近あたいの事をこう呼ぶんだよな」

千早「……あかり、悪い事は言わないよ。今のうちに部長を……施設に送ったほうがいいよ？」

あかり「んみゃ？ あたいは昔から兄貴を収容所送りにしたいと思ってるけどな！」

——その頃、浅間部長は。

浅間部長「ボクの妹の影が薄くなりませんように、アツカリ〜ン！」

圭介「俺、ゆ〇ゆり見た事ないんだけど……」

## 第72話、恋バナ 暮葉side

小坂家、10階建てマンションの8階に亜紀さんは住んでいます。拙者は本日、亜紀さんに誘われてこの家まで来ました。拙者と亜紀さん他には、何故か明智殿や生駒さんの姿もありました。今、この四人で色々と駄弁りながら過ごしています。

亜紀さんの部屋はけーすけ様の部屋よりも狭い気がしますけど、けーすけ様の部屋よりも片付いていてとっても綺麗です。けーすけ様も見習ってほしいくらい綺麗なのです。

綺麗なのにちゃんとポスターもありますし、本棚にもいっぱい本があります。

本当に、亜紀さんの部屋は理想の部屋と呼べるものです。

「こ、こらすみにゃん……っ。く、くっ付くな……っ」

「えへへっ！ いいじゃんナギちゃん……んんっ」

「はいはい、あたしの部屋でいちゃつき禁止ねー」

「明智殿も生駒さんも相変わらずなのですっ」

本当に仲よしなのです。あのお二人はいつも抱き合っています！……若干明智殿が嫌がっている気もしますが、でも仲良しである事には変わりありません！

本当に仲のいいお友達って、ああやって抱き合ったりするのです。せ、拙者も……けーすけ様と抱き合った方が、お友達としてよろしいのでしょうか？

「おかしいなあ。フラグを立てて行けば抱きつくと思われちゃるってギヤルゲーしたんだよ？」

「わ、私とギヤルゲーのヒロインを一緒にするなよ。それに私はノーマルだぞ？」

「そんな！ 私はガチ百合なのにつ！」

「すみにゃん……そんなの、ちっとも誇れないと思うぞ？ あ、あとかくっ付くな！」

けーすけ様は……どうなのでしょう。

拙者が抱きついたら喜ぶのでしょうか？

お友達として、抱きついてあげたほうがよろしいのでしょうか？

「えへへ、でもさナギちゃん。ナギちゃんって男の人と付き合ってた事ないよね？ ホントにノーマルなの？ 実はガチ百合だったりするの！？」

「つ、付き合ったことはないけど……でも本当だ！ 私は本当にノーマルだぞ！」

……って、これじゃあ拙者がけーすけ様に抱きつきたいじゃないじゃないですかっ！

にゃ、なんででしょう。変態さんみたいな事を考えているのに……嫌な感じじゃないのです。

……拙者とけーすけ様がお友達になってからでしょうか。

最近です、拙者はずっと……変なのです。

なんかこう、胸がもやもやして落ちつかないのです……っ。

「私は男なんかと付き合いたくないもん！ ナギちゃん一筋なんだよ！」

「あはは、愛されてるねえ、風紗は」

「あ、亜紀……別に嬉しくないぞ」

「またまたーっ！ ナギちゃんはツンデレだね♪」

拙者だったら。もしけーすけ様に愛されていたら……。

って、なんでここでもけーすけ様なのですかっ！

け、けーすけ様は護衛対象。そして大切なお友達なのです！

……はあ。拙者は一体、けーすけ様に何を求めているのでしょうか……？」

「……な、なあ。亜紀と木下はそのっ。男と付き合った事……あるのか？」

「付き合ったこと？」

「もきゅ？　だ、男女交際……ですか？」

明智殿、いきなりどうしたのでしょうか？

「お顔が少し赤いのです。それで、いきなり男女交際のお話なのですか……？」

「あたしは……一回だけあるかな？」

「もきゅ！？　ほ、ホントなのですか！？」

「い、意外だ……っ」

「す、すごい！ 亜紀って付き合った事あるんだね！」

亜紀さんの回答に一同驚き。

だって亜紀さん……全然男女交際とかに興味がなさそうでしたし……っ。

「そ、それで。どうだったんだ？」

「ん？ 別に何もなく終わったけど？ 中学の時だったかなあ。野球部の人に告白されて、先輩な上に相手が本気すぎて断りづらかったからOKしてみたんだけど。でも……やっぱりあたしはその人が好きになれなくて……結局キスすらしないで3日で別れちゃったっ」

「は、早っ……！ それって付き合ってたうちに入るのか？」

「ど、どんまいなのですっ」

「亜紀に3日で振られるって……やっぱ男ってクソだね。で、3日の間にエッチはしたの？」

「するわけないじゃん！ 手すら繋いだ記憶がないし……っ」

明智殿の言う通りなのです。亜紀さん……それってホントに付き合ってたうちに入るのでしょうか？

でも、亜紀さんファーストキスもまだみたいなのです。

その上の階段も登っていないみたいなのです。

よかったあ……って、何が良かったのかサッパリわからないりです

けど。

というか、人の失恋をよかったなんて言う拙者。最低なのです……  
っ！

「き、木下はどうなんだ？」

「もきゅ？ 拙者も明智殿と一緒になのです」

そもそも、元々の世界で通っていた学校が女子校だったのです。  
男の人と付き合う機会なんてなかったのです。

拙者は……恋がよくわかりません。  
経験も機会もなくて、というのが恋なのかサッパリなのです。

「そっか……皆意外と経験少ないんだなっ」

「ナギちゃん、それ経験豊富な人が言うセリフだよ？」

「すみにゃんだって男嫌いな癖にっ」

とにかく、今日わかった事は……皆さん意外と付き合った事とかな  
いのですね！

明智殿も生駒さんも亜紀さんも、みんな綺麗で可愛いのに。

……あれ、伊吹さんはどうなのでしょう？

ちよ、ちよっとだけ亜紀さんに訊いてみましょう！

「あ、あの！ 伊吹さんは付き合った事とかあるのですかっ？」

「え？ 伊吹はないと思うよ。あの子、キツイ事言うように圭くん  
一筋だしねえ」

「もきゅ!？　け、けーすけ様の事を……っ?」

「伊吹がその……ふ、藤島に?」

「え?　そうなんじゃないの?　だって伊吹って圭くんがあたしらと二人きりで話してると、いつも機嫌悪そうに拗ねてるじゃん?」

それは確かに……伊吹さん、けーすけ様の事好きみたいな行動してますけど。

で、でもでもホントなのですか。伊吹さんがけーすけ様を狙っているって……?

……な、なんでしょう。この妙なもやもやは……っ。  
もきゅう……わからない、わからないのです。

「あんなクソ介のどこがいいんだか。ナギちゃんの好きな人は当然私だよね!？」

「え、わ、私は……別に好きな人なんて……っ」

「ははーん。もしかして風紗の好きな人って圭くんだったり?」

「ち、違う!　藤島は友達だっ。あ、あんな変態恋愛対象なんか……っ!」

そうは言ってますけど、明智殿……顔が真っ赤なのです。

……明智殿も伊吹さんみたいに、けーすけ様の事が……?　もきゅうっ、わからない。どうして拙者が変な気分になってるのでしょうか?

なんか、気に入らないって思っているのはなんでなのでしょうか……っ?

「あんのクソ介えー！ ナギちゃんを虜にするなんて……やっぱ陸上部で監視すべきだったかも！」

「だ、だから私は別に藤島なんて……っ！」

「あはは、真っ赤だね！」

「うう……亜紀はどうなんだ？ す、好きな人とかいるのか……？」

「あたし？ ん……好きな人の検索結果は0かな？」

もきゅ……よかった、亜紀さんはけーすけ様の事、男の人として好きってわけじゃないみたいなのです。

……あれ、そういえば拙者。どうしてそれがわかった瞬間安心して  
いるのでしょうか？

「そ、そうか……木下は？」

「もきゅ!？」

「木下は好きな人、いたりするのか？」

「せ、拙者も好きな人はいないのです！」

多分……というか絶対なのです！

そもそも、アルファ隊でけーすけ様護衛という任務中に、誰かを好きになるなんてありません！

恋なんてしたら……し、仕事が捗らないのです！



もきゆう……そういえば、恋をするとどんな感じになっちゃうの  
しょうか？

それから……さっきからやたらと脳内に出てくるけーすけ様。  
どうでもいい場面ですら、脳裏に浮かぶけーすけ様の姿。

けーすけ様の事を考えると感じる、変な胸のもやもや。

さっきから……一体なんなんでしょうか？

わからない、全然わからないのです……。

## 第72話、恋バナ 暮葉side（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

大吾「さて、今回のオマケは野郎共の恋愛話だ。ちなみに僕は三次元に興味ナシ！ 二次元なら最近はもう平○唯ちゃんにハマリまくりで（ry）」

圭介「もう唯への愛はいいわ！ 皆はどうなんだ？」

重原「俺は付き合った事とかないね。あんまり興味もないし」

大林「僕はまあ……色々だ色々！」

赤佐「モテないんやなあ俺」

黒木「伊吹ちゃん一筋だし。つかテメエはどうなんだよ？」

圭介「失恋3回、クソもモテません……リア充とイケメン死ねえっ！」

大吾「所詮、現実リアルなどそんなもんだ！ それに比べて僕の唯ちゃん  
は永遠に僕を愛してくれて——」

圭介「画面の中の女子は誰でも愛せるけど、別に愛されるわけじゃ  
ねーだろ！」

重原「まあ、二次元と三次元は完璧好みだよね」

### 第73話、マトモに活動？

翌週月曜日。

いつものように乙坂が帰りのSHRを勝手に進め、いつものように気付けば終わっていた。

さてと……放課後だな。今日は確か部活の活動日だった気がするな。

「圭介、今日あんた部活？」

「え？ ああ、そうだよ」

「なんだ、部活か……っ」

どうしたんでしょうか伊吹さん。

何故か、俺が部活だと言うと落ち込んでしまった。

……ていうか、伊吹も剣道部の試合が近いとかで、最近は部活が忙しかったりするんじゃないのか？

「今日、お前も部活なんだろう？」

「え？ そ、それはそうだけど……っ」

「だったら一緒に帰ろう。俺もお前も部活やってんだから、多分一緒に帰れると思うぞ」

「……っ、わかったわよ。暮葉もいるし……そこまで言うなら仕方なく一緒に帰ってあげる」

伊吹は不機嫌そうに腕を組み、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

やれやれ……相変わらずと言えば相変わらずだ。

ホントに伊吹は素直じゃねえな。いつも嫌々言いつつ絶対一緒に行動するもんなあ。

まあ、それは暮葉の存在があるからこそなのかもしれないが。

「けーすけ様っ！ そろそろ部活に行きましょう！」

「お、そうだな」

そろそろ行ってやろう。1年生三人組も変態浅間部長も待っている事だろう。

それに今日はどうやら、写真部始まって以来のマトモな活動らしいしね。

というわけで俺達は今日も皆が待っているであろう、写真部の部室へと向かったのである。

——なんてことのない教室棟に存在する写真部の部室。

普通の教室の半分程度の大きさの部屋。

室内にあるテーブルの上にはPC、隅っこに並べられている机にもスキャナとプリンタ。

中央のPCが乗っているテーブルの周りには、いつもの部活のメンバーが勢ぞろいであった。

「ちーっす」

「こんにちは！」

テキトーに挨拶をしながら入る俺と、その挨拶を返すいつものメンバー。

中でも、しつこく俺と話をしようとしてきたのは妹の葵だった。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！ 遅いよ待ちくたびれたよ！」

「悪い、ちよつと今日はSHRが長引いたんだよ」

俺は謝りながら、不貞腐れる葵の髪をくしゃくしゃと撫でてあげた。葵は目を細めて、気持ちの良さそうな顔で俺に凭れかかってきた。

「にひひっ、なでなでしてくれたから許してあげる！」

「そっか、ありがとうな」

よかったよかった。葵が機嫌を直してくれて……。

で、葵は俺達が遅れた事に対して不貞腐れていたようだが、その原因はというと――

そう――こんな日に限って乙坂のヤツ、帰りに渡す予定のプリントを忘れやがったのだ。

オマケにその場所すら忘れ、結局クラス委員長の小坂も動員して探すという始末。

結局、プリント自体は見つかり皆の手には渡ったのだが……。

正直、クラスみんなのイライラは頂点に達していた。

黒木とかはもうキレて暴れてたし……まあ、例によって明智に制裁されていたけどね。

「にゅふふっ。葵さんはホントに」

「ホントだな、兄妹愛ってなんか見えていて微笑ましいよな！」

葵を撫で撫でする俺を見て、暮葉とあかりは羨ましそうな眼差しを向けてくる。

しょ、正直痛いぜ……いい意味で。

「あかりにもその……一歳年上のお兄さん、いるよね？」

「ち、千早。冗談はやめろよな！ あたいはあんな変態兄貴に甘えたくないんだからな！」

「うう……どうして藤島君は妹に好かれ、ボクは妹に嫌われるの！？」

あかりのストレートすぎる言葉がよっぽど効いたのだろう。半ば空気と化していた部長が初めて口を開いた。

それも、泣いているかのように掠れた声であった。

そんな泣いている浅間部長への部員の反応は、それはまあ実に冷たいもので……。

「部長……自業自得だと思います……っ」

「拙者も原因の100%は部長さんのせいだと思うのです」

「俺もそう思います。部長……今まで何してきたか思い出してください。部室でエロ本読んだりエロゲーやったり、挙句の果てに全裸になる人が慕われると思いますか？」

俺も彼女達が言い終わった後、最期に率直な感想を浅間部長にぶつけてみせた。

それも、浅間部長が犯した罪（一部）を挙げてやったぞ。

俺の挙げた事にあかりや葵もうんうんと頷き、それを見てた浅間部

長は余計に落ち込んでしまった。

いつもならそこで再起不能になる部長。しかし、今日の部長はどこか違った――

「はあ……って、落ち込んでいる場合じゃないんだ」

「ぶ、部長にしては……復活早いですね」

「いつもこんなもんだろ？ あたいの兄貴、何気に生命力はゴキブリ並だからなっ」

「浅間部長よりもお兄ちゃんの方が丈夫で打たれづよいもん！」

いきなりキリッと復活した部長に対する皆の反応。

それはもう、ひどいの一言に尽きる。

……どんだけ嫌われているんだ、我が写真部の部長さんは？

「みなさん！ それ以上は部長さんが可哀想なのですよっ」

「そうだぞ。<sup>リアルじよし</sup>現実女子と二次元の女の子に罵倒されるとじゃ、圧倒的に前者の方がショックなんだからな？」

「おお！ 二人とも、ボクの味方をしてくれるんだね！」

「いえ、全然、これっぽちも」

「まあ、俺も正直暮葉と同じっす」

「ぬぐわあああああっ！ く、クソゲーだっ！ やっぱり<sup>リアル</sup>現実なんてクソゲーだああ！」



完璧に現実<sup>リアル</sup>に失望してしまった浅間部長。

まあ、こうなったのも殆ど貴方のせいっすよね。

浅間部長……黙っていればイケメンなのに、この男は本当に残念なイケメンである。

ていうか、さっきから浅間部長が叫んでいるだけで、何も話が進んでいない気がするぞ。

仕方ない……ここは俺が、話を進ませるようなセリフを言ってやろうか。

「それで部長。結局写真部始まって以来のマトモな活動ってなんですか？」

「おつといけない。ボクとした事が取りみだしてしまった……ありがとう藤島君！」

「全くだ変態兄貴っ、圭介に感謝しろよな！」

「ごほん、さてと……それじゃあそろそろ説明しよう。もうすぐ初高祭なのは皆理解しているよね？」

初高祭——どうやら、【初芝高校の文化祭】の略らしい。

なんてありがちな……なんて思っちゃったら多分負けだろう。

「もきゅ！ 拙者は楽しみなのです！」

「私も……こういう行事は楽しみかな？」

「そうだな、あたかも好きだな！」

「葵もすっごい楽しみなんだよ」

みんな文化祭が楽しみなようである。

葵達1年生はこれが初めてだし、暮葉だって2年生だけど文化祭的な事をやるのは初めてだろう。

俺は正直面倒くさい……だって、別に関係ないでしょって仕事までさせられるじゃん？

去年は俺と大吾と三馬鹿の5人でサボって、野原先生にぶん殴られたもんだ……。

「うん、その楽しみな文化祭でボクらの写真部はなんと、生徒の勇姿を撮影しなきゃならないんだ」

部長がそう言った瞬間、楽しみムードだった彼女達は――

「じゃ、写真撮影……なのですか？」

「うげえ面倒くさいっ。兄貴一人でやれよなっ」

「葵も文化祭の準備とかもあるから、当日くらいは遊びたかったのに……っ」

テンションが一気に下がってしまった。

特にあかりと葵の下がりよう。この二人は心底面倒くさいみたいである。

まあそりゃあそうだ。俺だって文化祭は遊んで過ごしたい。

正直、生徒の勇姿を撮れと言われてもねえ……。

「ま、まあ心配するな。全員でやるわけじゃないから」

「ホントか!?! あたいは絶対やらないからな!」

「葬も……やらない方向でお願いします」

早速かよコイツら!?!

面倒くさい気持ちはわかるけど、やらないって決めるのが早すぎる  
だろ!

「拙者もその……亜紀さんや伊吹さんとの約束で、クラスの準備に  
回らないといけないので」

ああ、そういえば暮葉は今日、クラスでそんな話をしていた気がす  
るな。

こういう忙しいヤツは仕方ないよな……。

しかしどうするんだよ。あかりと葬はやる気ナシで暮葉は仕事で忙  
しい。

かといって俺も面倒くさい。でも、この展開だとカメラマンになる  
人は必然的に――

「あ、あの……部長。わたし……写真撮影やりたいですっ」

写真を撮るのが大好きで、将来プロの写真家を目指している青山さ  
んになる。

そんな事はわかっていた。だが問題は……青山さん、このままだと  
一人ぼっちだな。

たかが写真撮影だ。大人数で行動したって無意味なのはわかってい  
る。

だけど、流石にぼっちはキツイよなあ……。

「そうか、ありがたい! 編集はボクがやるけど……でも青山君一

人で大丈夫なのかい？」

「……ああもう我慢できん！」

青山さんを一人には出来ない。こうなったら俺もカメラマンになつてやりますよ！

「部長、俺も青山さんを手伝います」

「え、ふ……藤島先輩っ？」

「おお、ホントかね藤島君！ いやあく助かるよ、青山君一人では心細いだろうからね」

どうやら部長も、少しは青山さんの事を心配していたようだ。

俺が撮影隊に志願をした瞬間、浅間部長はどこか安心したような表情を見せたのだ。

「あの……藤島先輩」

「ん？」

「その……ホントにわたしと一緒によかったのですか……っ？」

青山さんが両手を胸に当て、少しだけおどおどしながら尋ねてきた。

「嫌がる理由なんてないだろ？ 俺は青山さんを手伝いたいんだよ」

「……っ。その……あ、ありがとうございます……っ」

頬を少しだけ赤く染め、上目遣いをしながらお礼を言ってきた。

だけどお礼を言った後、恥ずかしかったんだろうか、青山さんはすぐに顔を背けてしまった。

……ちよつと待てよ青山さん。その破壊力は卑怯でしょ。

俺、今軽く萌え死にかけましたよ。今の表情は全国の男の子がドキッとするくらい可愛すぎた。

「お兄ちゃんが千早にデレデレしてる……っ」

「な、なんかその……気に入らないのです」

「で、デレデレすんな圭介！」

……なんか、その他の女子の視線が痛いです。

なんでだろう、突き刺さるように痛い……痛すぎる！

### 第73話、マトモに活動？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

大吾「二次元妹と現実妹……そう言われてもピンと来ない人がきつと読者にもいるだろう。そこで今日は！ 僕がこの二つの違いを教えようではないか！」

重原「まさに誰得コーナーだね……」

大吾「コラそこ！ 妹ファンに謝れ！ さて……口で説明するより実物を見たほうがいいね。そこでまず最初に、二次元の妹に限りなく近い行動をする圭介の妹から見て見ようか」

——藤島家。

葵「お兄ちゃん！」

圭介「なんだよ？」

葵「勉強わからないから教えて欲しいなっ」

圭介「お前……勉強得意っつーか学年でも三本指に入るだろ？」

葵「えへへ、バレちゃった？」

圭介「バレバレだっつーの。まあいいや、たまには一緒に勉強しようか？」

葵「お兄ちゃん！ その……お兄ちゃんのお膝に座りたいなっ」

圭介「あのなあ！ ……ったく、今日だけだからな」

葵「ありがとう、お兄ちゃん♪」

——一方、大吾達。

大吾「こんな甘えてくる妹が現実にいるかああああああっ！」

重原「お、落ちつかないかい大吾！」

大吾「クソッ！ まあ……わかっただろう？ 要するにありえない程ブラコンなのがよくいる二次元妹だ。続いてどう見ても現実妹の浅間あかりを見て見よう」

——浅間家。

浅間部長「あ、あのーあかり？ き、気まずいし……母さんもそこで見てるからね？ 少しはお話でも」

あかり「やだ」

浅間部長「……そんなにお兄さんの事、嫌い？」

あかり「黙れ変態兄貴」

浅間部長「あ、あかりさん……?」

あかり「……………」

——一方、大吾達。

大吾「どうして現実の妹ってこうなの！ 全っ然可愛くねえ！」

重原「だから落ちつこうよ大吾！」

大吾「やっぱ現実リアルはクソゲーだ！ 二次元サイコーだ！」

※あくまで大吾の主観です。



## 第74話、不思議な青山さん

まだ活動時間中の事だ。

俺はトイレへ行くために一度部室を出ていた。

今はその帰り。用を済ませた俺は部室へ戻る為に一人で歩いていた。

写真撮影かぁ。確かに、写真部に入ってからというものの毎日が談笑。

写真部らしい活動なんてした事がなかったな。

正直、部活として成り立っているのか疑いたくなる。写真部とはそんな部活であった。

……でも、今回は違う。生徒会に頼まれているので学校祭の様子を撮影しなければならない。

初めての活動らしい活動だ。青山さんを手助けする目的で志願してみたけど……責任重大だよなぁ。

「あの……」

その時、俺の背後から澄んだ可愛らしい声が聞こえた。  
まるで俺を呼びとめるように――

「……ん、青山さん？」

声の主は青山さんだった。

しかし、いつも聴いてもいい声だよなぁ青山さんって。  
まるでどこぞの声優さんのようである。

「あの……少しお話、してもいいでしょうか……？」

「話？ うん、別に構わないよ」

「あ、ありがとうございます……っ」

どうやら青山さんは俺に話があるようだ。彼女は俺について来いと言わんばかりに歩き始めた。

青山さんの話ってなんだろうなあ。態々二人きりで話すような事なんだから……ハッ、まさか！

ああああ、愛の告白とかじゃあ！？

……はは……流石にそれは違うよね。でも少しだけ期待しちゃったぞ……っ！

でもそんなわけがないだろう。

何故なら……青山さんに告白イベントを発生させるフラグを立てた覚えは皆無だからだ！

「……あの、先輩……？ 顔赤いですけど……？」

「えー！？ ああ気にするな。土日に関邪ひいてただけだから」

「だ、大丈夫ですか……熱はっ？」

「もう治ったよ。仮にあったとしても動く分には何の問題もないから」

「は、はい……その、無理だけはしないでくださいね……？」

「おう……」

畜生……いい子過ぎて今度は涙が出そうだ。

しかしなんとか誤魔化したが、この調子だといずれ俺の内心がバレるかもしれないな。

余計な事は考えないように気をつける事にしよう。

でも、青山さんのお話って本当になんだろうな？

……そういえば、俺も青山さんからCDを借りっぱなしだ。

丁度いい機会だ、話のついでにCDを返そうかな。

——こうして、青山さんに案内された場所は学校の屋上であった。

初めて来るなあ屋上って。

そういえば、6月に入ってから一般生徒にも開放してるんだったな。

赤佐がそんな事を言っていた。三馬鹿はよく屋上で屯っているらしいのだ。

「……すみません先輩っ、急にこんな所に呼び出しちゃいまして……」

「別にいいけど……それより俺に話って？」

放課後、屋上、男女二人つきり……普通なら告白イベントが待っているハズだ。

そんな事も見抜けなくらい鈍感ってわけじゃない。

このシチュエーションは間違いなく、エロゲーでもよくある告白イベントだろう。

……と、言う事は……もしかして青山さん、本気で俺に告白を——！？

ままま、待て待て。いつ青山さんにそんなフラグを立てたんだ！ありえんっ。ロクなフラグも立てていない相手が告白してくるなん

て……。

そんなの現実<sup>リアル</sup>では絶対にありえない！

「あの……先輩っ」

「お、おう」

「……先輩は苦労人ですよね」

「えっ……？」

突然苦労人って言われた。まあ確かに色々な意味で苦労はしているが。

「いつも一人で罪を被って……いつも誰かの為に奔走して……っ、先輩は無理し過ぎだと思います」

まあ……確かによく言われるけど。

けど、どうして青山さんがそれを俺に……？

「今回だってそうです。わたしを……手伝うって……っ」

「もしかして無理して言ったって思ってるのか？ 心配しなくてもあれは本心から言った事だよ」

「わ、わかってますっ！ その……わたしも嬉しかったです……っ、でも、無理はしないでください」

久しぶりかも、ここまで他人に心配された事って。つい最近までは心配されるどころか、一方的に恨まれる存在だった

からなあ。

なんだか、心配されるっていう普通の事が不思議な感じだ。

「……無理って、他人から見たら無理しているように見えるかもしれないけど、やってる本人は全然無理していないって事、あるんじゃないかな？」

「えっ……？」

「少なくとも、俺は無理なんか全然してないよ。苦痛とかは感じてないぞ？」

まあ、永渕と戦ったりした時は滅茶苦茶痛かったけど……。

それでも、みんなを助ける事が出来たんだ。

殴られた時は苦痛でも、それをやった事自体は苦痛じゃなかったな。

「せ、先輩……っ」

「ん？」

「先輩は……不思議です。そこまでその……現実と向き合えるなんて、なんだか……不思議です」

その時、青山さんは不思議な表情を浮かべていた。

一応穏やかに笑ってるようには見えるものの、その表情はどこか寂しげで悲しげで……。

まるで、誰かに助けを求めている。今の彼女はそんな感じであった。

「青山さん」

「ふえ？」

「青山さんのほうこそ、無理とかしてないか……？」

「……っ、わ、わたしは別に無理なんて。毎日楽しく過ごしてますよ……？」

「そ、そうか……」

その割にはさっきの表情。そして思わせぶりなあのセリフ……。

……ダメだ、心配になってきてしまった。

だって今の青山さん。どう考えても嘘をついているとしか思えないから――

「……あのさ、青山さん」

「は、はい……？」

「もし何か悩みがあるなら相談してくれても構わないよ」

「え、で……でもっ」

そりゃあいきなりこんな事を言われれば、躊躇するのは当たり前である。

……でも、さっきのあの青山さんを見たせいなんだろうか。

俺はすごく――青山さんが心配で仕方がない。

「大丈夫、俺も悩みがあるなら相談するから。これで俺達是对等だろ？」

「た、対等なんて……わ、わたしは後輩で先輩は先輩ですよ……?」

「先輩後輩とか、そんな上下関係は関係ないよ。妹の大切な友達で、そして同じ部活の大切な仲間の事を放っておけないんだよ」

「……せ、先輩……ありがとうございます……っ」

不器用で、恥ずかしそうに、彼女はリンゴのように  
しかも俯いているせいか、前髪で目が隠れて青山さんの目が全然見えない。

「……お、おうっ。あ、あんまり気にしなくてもいいぞ……?」

そうして、しばらくの間の沈黙……。

いかん……こっちまで恥ずかしくなってきた。

俺も右手で前髪を引っ張り、手と髪で自分の顔を隠すようにしていた。

頬が熱い……多分、今は俺も顔が赤いかもしれない。

……そ、そろそろ戻ろう。流石に屋上で二人きりでコレは恥ずかしすぎる。

どうやら告白イベントじゃなかったみたいだし。暮葉達も多分部室で待っているハズだ。

「そ、そろそろ戻ろうぜ?」

「……っ! せ、先輩!」

「ん?」

青山さんにしては珍しい、とても大きな声で俺を呼びとめてきた。今みたいに大きな声は初めて聞いた。青山さんが珍しく叫んだのだ。振り向くと、恥ずかしそうにもじもじとしている青山さんがいた。

「……っ！」

その瞬間、何かを決心したように右手を胸に当て、真っ直ぐに俺を捉えてきた。

そ、そんな直視するなよ……恥ずかしいだろ。でも一体……今度は何なんだろうか？

「先輩は大きな障害があつたとしても、突き進む覚悟がある人ですよね……っ？」

「大きな障害？ んん、まあ程度によるけど」

それが一体どうしたんだろう。

そもそも、大きな障害ってどんな障害なんだ？

物理的な何かか、それとも精神的・身体的な何かなのか……いまいちよくわからん。

「わたし……先輩に迷惑掛けるかもしれませんが。でも……もう我慢ができませんっ」

「え……青山さん」

なんだ、何が起こってる？

一体なんのイベントが発生したってんだ？

「——好きです、中学生の頃からずっと好きです！」



青山さんの口から放たれた言葉……それは——  
冗談とは思えない——お互いの人生を左右する大事な言葉であった

## 第74話、不思議な青山さん（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「暮葉、世界を構築する三大元素って何だか知ってるか？」

暮葉「もきゅ？ 四大元素なら知ってるんですけど……なんなのですかそれ！」

圭介「教えてやろう……神が発見した……三大元素を！」

暮葉「もきゅ！ 楽しみなのです！」

圭介「答えは……エロゲーとエロゲーとエロゲーだ！」

暮葉「……エエエエエエエエエエエエエエエエッ!？」

## 第75話、告白の返事――

言われてしまった。

生まれてから約16年と10ヶ月……いや、来月誕生日だから11ヶ月か。

俺は人生で初めて――女の子に告白をされてしまった。

「……………」

恥ずかしそうに片手を胸に当て、イチゴのように真っ赤な顔にいつも以上に潤っている瞳。

そんないつもとは違う青山さんは、恥ずかしそうに視線だけを横に逸らしていた。

それでも逃げる事もなくいつまでも、ずっと告白の返事を待っているようであった。

「……あ、青山さん。今、俺の事……」

「す、好きです……って、言いました……っ」

「えっ、でも中学の時からって……?」

「は、はい……わたしはその……葵達と同じ中学で、先輩の事も中学の事から知っていました……っ」

ああ、そういう事だったのか。

時々青山さんは永渕の件を知っているような発言をしていた理由……。

なるほど、同じ中学だったら確実にあの話は知っているだろうな。

なんせ、俺は全校生徒から暴力魔だと思われていたくらいだ。  
……でもあれだけ散々言われていたのに、青山さんだって俺の悪い噂を聞いていたハズなのに……？

「な、なんで？ あれだけ悪い噂が広まっていたら普通……」

「確かに……わたしも最初は怖い人がいるって思っていました」

「で、ですよー」

「でも……葵から事情を聞いて、僅かな時間を見つけてこっそり……っ」

「それってもしかして……俺を追跡していたの？」

「すみません……っ！ ストーカーだってわかってました……でも  
気になって……っ」

「別に気にしてないからいいけど……」

というか葵のヤツ、青山さんには事情を説明したんだな。

……いや、一応あかりにも言ったのかもしれない。

でも、あかりは性格的に事実を信じようとしなかったのかもしれない。

だけど青山さんはあかりと違って、ホントかどうか事実を確かめようとして……。

「すみません……でも見たんです。先輩がその……階段でお客様の荷物を持っていて……っ」

「そんな事やってたっけ？」

「し、してました……っ！ この目でちゃんと見ました……っ！」

まあ確かに、時々困っている老人がいたら手を差し伸べたりはするが……。

中学の時にもやってたんだ。んで、それを青山さんに見られていたのか。

しかもお婆様って、すごい改まった言い方っすな。

「あんまり覚えてないなあ……でもそんな事してたんだ」

「は、はい。それで……そのお婆様はわたしのお婆様で……っ」

「え、青山さんの！？」

「はい……っ」

身内だったんかい！

でも、おかしいな……身内なのに様付けって。まるで青山さんが圧倒的格下みたいじゃねえか。

それを言ったら暮葉も俺を様付けで読んでいるけど……。

アレ、俺が暮葉の支配者みたいで嫌なんだよなあ。

でも行っても治らないから、半分くらい諦めているけど……。

「その光景と……その後のお婆様とのお話で、その……確信しました」

「確信？」

「は、はい……その、先輩は親切で優しい人だって……っ」

「……………」

あの中学でそんな風に思ってくれている人が、まさかこんな身近にいたなんて。

普通は誰だって俺を嫌がる。そんな空気が校内どころか学校周辺にまで漂っていたのに。

そんな中で彼女はただ一人、俺との関わりもないのに事情を知っていた。

暴力魔ではない俺の姿を知っていた……。

「だから気になっちゃったんです……どうして、あんなに親切な人が悪く言われるのか……先輩は国宗先輩を助ける為に、自らの身を挺したでしたのに……っ」

「……いいよ。人を助けたって、その過程で永洵を殴った事には変わりない。俺は本物の暴力魔だから」

「そ、そんなっ、ごめんなさい！　その……先輩を落ち込ませるつもりで言ったわけじゃ——」

「大丈夫、わかってるから……」

そんな事はわかっている。それにもう、永洵の件は過去の事なんだから。

今はそんな事よりも、青山さんの告白に対する返事を——

「……せ、先輩はわたしの憧れでしたっ。自由で、でも優しくて、あれだけ先輩に散々な事をやっていたあかりさえ受け入れて……っ」

「そりゃあね、怒ってもしようがない事じゃん？」

あかりは友達が大切だったからこそ、友達に危害を加える可能性があった俺を遠ざけとした。

友達の為を想ってやっていた事で、別に悪気があるわけではないってわかっていた。

それに……永渕をボコボコにしちまったのは本当の話だ。

あかりに言い返す言葉なんて、全く思いつかなかったよな……。

「……心、とっても広いんですねっ」

「そんな事はないと思うけど」

多分、重原とかでもキレたりはしないだろう。

大吾は多分、これだから現実にはクソゲーだって叫びそうだけど。

「……やっぱり、わたしはそんな先輩が……大好きですっ」

「……っ！」

だだだだ、大好きです……だと!？

……初めてだ。葵以外の女の子に好きだって、ストレートにそんな風な事を言われたのは。

すげえ……これからバンジージャンプをするわけでもねえのに、滅茶苦茶心臓がバクバクするぞ。

そして、今まで感じた事のねえようなこの……へ、変な感覚。

「先輩……教えてください……っ! ……先輩の正直な気持ち、お願いします……っ!」

——青山さんは本気だ。罰告とかそんな遊びではない、ただ……彼女は本気だ。

青山さんとの会話を思い出す限り、青山さんはずっと俺に片想いをしていたらしい。

何年も俺なんかの事を想っていてくれたなんて……。

正直嬉しい。思わずハッスルダンスを踊っちゃいそうだ。

嬉しいって思うって事は——俺、青山さんの事好きなんだろうか？

……いや、よっぽど嫌いな相手でもない限り、男なら告白されて嬉しくないハズがないだろ。

でもこうして見ていると……あ、青山さんって可愛いよな。

見た目ヨシ中身ヨシ。どんな男でも思わず惚れちゃいそうな青山さん……。

やっぱり彼女を見ていると……俺は——

「あ？　おいおいテメェらそろそろ下校時刻だぜ？　そんな所でよ、恋人ごっこしてんじゃねえぞ！」

荒々しく扉を開け、俺らに説教をしてきた白衣の男。

ったく、空気読めよ野オオオ原くウウウウウン！

野原先生には婚約者どころか彼女すらいない……つまり、独身のオッサンというわけである。

その為、校内恋愛に比較的寛大な教師が多いこの学校の中で、唯一校内恋愛禁止を掲げる男だったりするのである。要するに野原先生は、自分がモテないから生徒が恋愛するのがムカつくだけ。

……校内恋愛反対の理由があまりにも個人的すぎる！

「す、すいません。すぐ帰りますんで……ハハハッ！」



ま、まあ……一応野原だって教師である事には変わらない。  
逆らったらまた殴られるだろう。  
仕方ねえな……ここは一応従っておくか。

「……せ、先輩っ」

「ん、ん？」

「その……返事はまた今度で構いませんから……っ。気持ち、整理  
してくださいね……？」

「お、おう……っ」

そう言い残し、青山さんは一足先に屋上を後にした。もしかして、  
青山さんにはバレていたのかな？

告白の返事、どう答えればいいのかを滅茶苦茶悩んでいた事……。  
なんだか、折角告白されたのに悪い事をしたような……というか、  
悪い事をしてしまったんだろう。

告白されたら即返すのが普通だ。しかも相手は青山さんだぞ？  
断る理由なんてないハズなのに……それなのに俺はチンタラと……  
ああ、俺ってやっぱり最低だ。

——そもそも、俺は青山さんの事が好きなんだろうか。  
そうじゃないのに告白をOKしたら、やっぱり青山さんに失礼だよ  
なあ……。

……って、そんな事をチンタラ考えていたからこうなったんだ。  
やっぱり、俺は最低のクソ野郎だよな……。

「……………」

青山さんの野原先生もとつくの昔に立ち去った屋上。  
そこでただ一人、俺は脳内真っ白状態で立ち尽くしていた……。

## 第75話、告白の返事——（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「何故だ……」

伊吹「どしたのよ、圭介？」

圭介「どうして俺にはボクっ娘で元気な後輩がないんだ！」

伊吹「そ、そんな事で悩んでたの！？」

圭介「だってボクっ娘後輩で可愛い子がゲームに——」

伊吹「またエロゲーか！ この変態ばか圭介！」

圭介「のー〇るわああつくす！ ぐは……ちくしょ……ボクっ娘後輩……っ、現実にいるんだろうか？」

——その頃、関東地方某所。

「……」  
「ふえつくしょん！」

「……」  
「どうしたんだ、奈々？」

奈々「ふにゃあ……先輩、なんかボクの噂をされたような気がしま

すっ」

先輩（？）「気のせいじゃねえの？ それより週末皆でカラオケ行かない？」

奈々「いいですよ！ また先輩の微妙な歌が聞けるんですね♪」

先輩（確定）「悪かったな歌唱力微妙で！ これでもクーや吉野よりはマシじゃ！」

## 第76話、悩む圭介

あの後、部活が終わって暮葉とか葵とか伊吹とか、その辺の面子で下校した。

……でも、三人の女子が会話で盛り上がる中、俺はただ一人黙りこんでいた。

別に話すのが嫌だからとかじゃない。ただ、単純に悩んでいるだけである。

告白——されたのに、結局返事を言う前に……はあ、どうしていつもこうなんだよ。

俺がこんなヤツだからだよな。今まで全部相手がリア充で、結局片想いで思っちまったのも……。

というか、そもそも俺は青山さんの事が好きなんだろうか——

「けーすけ様？」

「……………」

「あ、あの！　けーすけ様！」

「…………え？　お、おう」

気付かなかった。暮葉がいつの間に話を掛けきてくれたようだ。

「完璧上の空でした。体調でも悪いのですか？」

「し、心配するな。ちょっと考え事をしてただけだ」

「もきゅ？ 考え事……そ、それってなんですか!？」

「未来の事……？」

……まあ強ち間違いではない。

青山さんの告白にどう答えるかで——俺のちよつと先の未来が変わってしまう。

これは、エロゲー的に言うとな重要な選択肢なんだ。

「けーすけ様、未来の事とか考えるのですね！」

「ふうん。あんたの脳内っていつもエロ一色かと思ってたけど……違うのね」

「……………」

伊吹さんひでえ……俺、そこまでピンク色な人間じゃないよ？

少なくとも女の子は脚こそ最高とくらいしか……あ、ゴメン、やっぱり脳内ピンク一色かもしれない。

……って、今はピンクい事を考えている場合じゃない。

「お兄ちゃんの未来は葵と結婚してずーっと幸せに暮らす事だよね！」

「アホかお前は！ 近親婚は禁止っすよ!？」

というか、今は葵のどうでもいい話に付き合っている余裕がない。

……はあ、結局俺はどうすりゃいいんだよ。

「ちなみにあんたって何か将来の夢でもあるの？」

「全然ないっすね。しかも思いつかないし……」

正直に答えると、三人とも呆れたような表情で俺を見てきた。

まあ、そりゃあ呆れるだろう。だって、将来の夢が全くないんだぜ？  
現実主義ってのもいいかもしれないが、やっぱり人間夢は持つべき  
かもしれないし。

ああ、青山さんの事もそうだけど、将来マジでなににして暮らそう……？

「……や、焼きそば屋でもやってみたら？ 味は私が保証するわよ？」

「あ！ 拙者もけーすけ様の焼きそば、すごくおいしかったような  
気がします！」

「葵もお兄ちゃんの作る焼きそばは大好きだよ！」

「……俺、真面目に焼きそば屋でもやってみようかな？」

でも焼きそば以外は作れないしなあ。

しかもソース焼きそば限定だ。他の味の焼きそばは正直作った事がないな。

焼きそば屋と言っても、ソース焼きそばの他にも色々出さないと売れねえだろうし。

はあ……今度の休日から料理の練習でもしようかな？

「ほ、ホントにやんなら……仕方なく圭介の店で働いてもいいわよ？」

「拙者も！　けーすけ様の手助けをしたいのです！」

「葵だって手伝うよ？」

「まだやるとは言ってねえし……つか、お前ら無理しなくてもいいんだぞ？」

特に伊吹に至っては仕方なくだ。

まあ、伊吹らしいっちゃ伊吹らしいけどね。

でも無理してまで働いて欲しくないし、そもそも焼きそば屋をやるなんてまだ決めていない。

それどころか、就職するか進学するかすら……今が楽しけりゃそれでいいやと思っているのが現状で。

……っと、そんな未来の話はまあ重要だが、今は置いておこう。それより重要なのは青山さんの告白への返事だ。

「……………」

「け、圭介が真剣だわ……」

「もきゅ、あのけーすけ様が真剣だなんて珍しいのです」

「ホントだね。こんなお兄ちゃんはレアだね」

………。ただ普段不真面目な男だと思われてんだ、俺。

まあ否定しようがないけどね。俺は普段トコトン不真面目に生きているし。

授業中寝たり野原くんとバトルしたり、そんなヤツのどこが真面目なんだよってね。



——その後、結局女子三人とロクな会話をする事もなく、俺は悩みつつも自宅へ足を踏み入れた。

しかし、自分の部屋ほど落ちつく場所ってないよなあ。

俺はそんな事を想いつつ、朝から直していい荒れたベッドの上に転がった。

寝る時にでも直しとかないとな……寝相が悪いらしく、毎日の事だけどよく荒れるんだよなあ。

「はあ……っ」

いかん、誰かがため息は幸せが逃げるって言ってたな。

誰だろう、最初にあんな事を言ったヤツは？

……まあ、正直誰でもいいんだけどね。そんな事より真剣に青山さんの事、考えねえとな。

♪～♪

あ？

携帯様が鳴っておりますぞ？

……電話か、誰だよ人が真剣に悩んでいる時に……えっ、明智？

明智から電話だと、これまた珍しい。光秀を倒す前以来な気がするなあ。

そういえば明智とはしばらく会話をしていない気が……って、んな事考えている場合じゃねえな。

さっさと電話に出ないと相手に失礼だろう。

「もしもし？」

『よ、よかった……出てくれたっ』

「そりゃ出るだろ？ あ、でも寝てる時は出れないかもな」

『うん、寝てるんだった仕方ないな』

それでも、電話をスルーされるのは女の子的にはムカつくんじゃない？  
まあ、明智は心が広いって事で納得しておこう。実際明智はいいやつだしな。

「それで、なんか用か？」

『う、ううん別に。特に要は無いが……最近、藤島と話していない気がして……』

「ああ、丁度俺もそんな事を思っていたよ」

『お、思ってたのか！ だ、だったら学校で話しかけてくれても……』

「スマン！ その、生駒が……」

『藤島はすみにゃんが苦手なのか？』

「まあ……正直」

ちょっと、というかかなり苦手だ。

正直ガチホモネタでイジられるのは嫌だ。

増してや明智に絡もうものなら、きっとガチレズの生駒は噛みついてくるに違いない。

そういうわけで、学校で明智に話を掛けるのはアルティメット級に難しいのだ。

『すみにゃんを悪く思わないでくれ。私の友達だし、すみにゃんだって悪気があるわけじゃないから……』

「わかってるよ、心配すんなって。別に顔を見たくないくらい嫌ってるわけじゃないから」

『だ、だったら一度、すみにゃんと会って話してくれないか?』

「えっ、なんで?」

『すみにゃんからお前の悪口を訊くと……なんか気分が悪いんだ』

わ、悪口って……アイツ陰口叩いてたんですか!

まあ別にいいけどさ、そういうのは慣れっこだ。しかも、生駒の悪口ってのも大体想像できるぜ。

どうせ俺が明智に近寄る害虫だとか、ガチホモの癖に〜とか、そういうくだらん悪口なんだろう?

だったらスルーが一番だと俺は思うんだ。でも……。

「なんで明智が気分悪くなるんだ?」

『えっ!? あ、ふあ……べ、別に深い理由<sup>ワケ</sup>はないんだぞ……?』

「そ、そうか?」

『そ、そうだ! そうに決まってるんだ!』

なんかゴリ押しされた気がするなあ。

しかし本当に不思議だ。悪口を言われて傷つくのは普通言われた俺じゃないか？

でも、どうしてそれを聞いただけの明智が？

……やっぱり明智って、ちょっとS気味だけど優しいんじゃない？

「仕方ないな、そこまで言うなら生駒と話しとくよ」

『そ、そうか。ありがとうなっ』

「まあ、仲が悪いつても嫌なもんだしな」

『……あ、そうだ、藤島っ』

「ん？」

いきなり話題を変えようとする明智。

一体今度はどういう話をしようとしてるんだ？

まあ明智の事だし、いつも通り俺を変態扱いするつもりなんだろう。

『お前、青山に告白されたのか？』

「……ブッ！」

オイオイオイオイ待てえっ！

おかしい、この話は絶対にオカシイぞ。明智って今日の放課後校内に居たっけか？

それ以前に明智は屋上にいたのか？

いなかったとしたらオカシイぜ。なんで明智がその話を……っ！？

『あれ、まさか……凶星なのか？』

「ちょーーーーーっと待て！　なんでお前がそれを知っている？」

『の、野原先生が廊下でボソボソと……』

「……………」

明智に聞かれたって事は当然、他の生徒にも聞かれた可能性があるな。

あの野郎……全校に俺と青山さんの言いふらすとは中々いい度胸だ。……いつか絶対ギャフンと言わせてやるっ！

『藤島……その話、ホントみたいだな』

「……確かに今日、青山さんに告白されたよ」

『……そ、それで、藤島は青山と付き合うのか……っ？』

なんだか、とても不安げで震えているような声だったな。

明智にしては珍しく弱々しかったような気がするぞ。

とにかく、ここは事実をありのまま伝えるべきだろう――

「いや、野原の乱入で結局保留のままだよ」

『ほ、ホントか！？』

……なんか、超嬉しそうな感じがするのは俺だけか？  
ま、まあ気のせいだ。気のせいだと信じておこう。

「お、おう」

『で、でも……藤島、お前は青山になんて返す気なんだ……？』

またしても不安げに……喜んだり落ち込んだり、明智も中々忙しい人だなぁ。

まあ、忙しいからこそわかりやすい。

少なくとも、明智は俺と青山さんがくっつく事に何らかの不安を抱いている。

その理由はわからないけど、その事だけは多分間違いないと思うんだ。

「俺はまだ自分の気持ちの整理ができてなくて。確かに告白されたのは嬉しいけど、でも……」

『……要するに藤島は、青山に対する恋愛感情がないんだな？』

「え？ な、なんでそれが？」

『言葉を聞いていればわかるぞ』

「流石というか……中々鋭いんじゃないか？」

『こ、これでも推理は得意なほうなんだぞ？』

い、意外や……推理なんて全然関係のない人だと思っていたのに。まあいいや、俺の気持ちは完全に明智にバレているようだし。ここから誤魔化したって何の意味もないだろう。

「わかった、負けを認める。確かに告白自体は嬉しかったけど……」

恋愛感情はないよ」

あんなに可愛い子に告白されたのに、どうして恋愛感情が沸いてこないんだろう？

生駒の言う通りのガチホモでもないのに。というかそれはありえない。

今までに3度くらい女の子を好きになった事があるし、ホモなわけがねえよ。

でも……なんなんだホントに。

好意を受け入れようとした時、意味不明な気持ち……がそれを追いだそうとする。

なんでなんだろう……まさか、無意識に好きな人でもいるんだろうか？

……っ。一瞬、誰かの姿が浮かんだような気がしたけど……気のせいだ、というかありえないだろ！

ないない、俺は別に誰も好きじゃない。でも何か青山さんからの好意を遮るんだ……。

『……藤島？ 藤島』

「……え？ ああ！ わ、悪い！」

『全く、相変わらず何も考えずに空を見ていそうな男だ』

「……………」

すいません。

よく授業中に暇だから何も考えずに青空見えます。

……ちくしょう、なんて鋭いんだ……明智風紗！

『そ、それで……青山に恋愛感情は抱いていないんだな?』

「あ、ああ。青山さんは好きだけど……それは後輩とか友達とか、そういう意味だよ」

『だ、だったら断れ……私もその……藤島と誰かが付き合うのは嫌だ………』

「えっ?」

『……ッ! な、私はなにも言っていないぞ!』

最後のほうを聞き逃しちゃった。

断れてあたりで話が終わったと思っちゃったよ。

畜生、一体明智さんは何を言ったんだろうか?

「すまん、最後の方は聞いてなかった。なんて言ってたんだ?」

『な、何も言っていない!』

「そ、そうか」

まあ、どうでもいい事だったんだろうな。

でも気になるなあ。やっぱり俺も最後の明智の呟きを聞きたかったな。

『と、とにかく。恋愛感情もないのに付き合うのは相手にとっても失礼だぞ……だからっ、お互いの為にも断れ……っ』



「……わかった。なんか、相談にまで乗ってくれてありがたいな」

『ふふ、気にするな。私らは友達だぞ?』

「……そうだな!」

俺達は友達だ。

友達なんだから困った時はお互い様で、相談し合うのはあたりまえだろう。

——明智と話をしたおかげで、なんだか色々気持ちが落ち着いた気がするなあ。

というか、明智のおかげで決心がついたような気がするよ。  
とにかく告白の返事は明日しよう。こういうのは出来るだけ早い方がいいに決まっているしな。

その後、俺と明智はしばらく談笑をした後、数時間くらい経った頃  
にようやく通話が終了した。

長電話だったな……通話代、大丈夫かな?

## 第76話、悩む圭介（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「眠い……」

暮葉「け、けーすけ様！ 目の下のくまさんがすごい事になってるのですよ!？」

圭介「お、おう……っ」

小坂「圭くん、寝不足？」

圭介「まあそんな所だよ」

伊吹「ど、どうしたのよ？」

圭介「……ア○ガミやってた」

三人「真性の馬鹿だ（ね）（なのです）！」

## 第77話、なんだ、このギャルゲー的展開は!?

翌日、告白の返事は早めにしておいたほうがいいよな。

というわけで、俺は朝っぱらから青山さんを探して校内を歩きまわっていた。

前に葵から聞いたのだが、青山さんはいつも登校してくるのが早いらしい。

だからもういるハズなんだけど……おかしいな、どこにもいないよ  
うな気がするぞ。

まあここは学校だし、学校と言っても結構広いものだ。

所詮は現実<sup>リアル</sup>、そう簡単に女の子の居場所を突き止められるなんてありえない話だ。

「もきゅ！　けーすけ様！」

「え、暮葉？」

あれ、暮葉は教室に置いてきたハズなのに。

どうしてここがわかったんだろうか？

……あ、そういえば暮葉は魔力を感じる事が出来るんだったな。

「けーすけ様！　こんなところで何やってるのですか？」

「青山さんに用があるんだよ」

「もきゅ？　青山さん……んゝ確かに今日は見てないのです」

「そうかぁ……」

今日は暮葉も青山さんの姿を見ていないのか。

風邪でも引いて休んじゃったのかな？

もしそうだとしたら……あの告白の返事はいつすればいいんだろうか？

出来る事なら早く返事をしてあげたい。そのほうがお互いの為でもあるしな。

「それより、青山さんにどんな要件なのですか！？　ならなら拙者がひとつ飛び——」

「ま、待て！　魔法とかは使うなよ？」

「もきゅ？　だいじょーぶなのです！　ああいうのはバレなきや何やってもオーケーなの——」

「いいわけあるかつ！　ファンタジー世界でやれ！」

「もきゅう……魔法が実在している時点でじゅーぶんファンタジーだと思ふのですよ？」

何故だ、全く否定ができねえ……。

確かに魔法が存在する時点で十分ファンタジーかも知だが、それでもここは現実世界だ。

魔法の存在が世間で認められているハズがない。やっぱり、この世界で堂々と魔法を使うのはまずいだろう。

「……とにかく、自重しとけて」

「もきゅう、わかったのです……でも青山さんに用事って本当にな

んなのでしょうか？」

「た、大した用事じゃねえよ！　そうそう、CD返すんだよ！」

「もきゅ？　CD……い、いつの間に借りてたのですか!？」

「まあ、青山さんって結構音楽聞らしいし」

そして、俺が持っているほうが都合がいいんだとか。

ロックを聞いたら説教され、お婆さんの事をお婆様と呼ぶ。

……青山家、一体どんなご家庭なんでしょうか？

まあそれはともかく、昨日の告白騒動でCDを返しそびれたのは確かだ。

このCDも返事をするついでに返してあげないとね。

「やっぱり拙者が青山さんの魔力を追跡して——」

「だくから魔法は使うなって！」

しかも俺達が魔法とか魔力とか、そんな事を大声で言っているせいか周囲の視線が痛いぞ？

まあ、どうせ一般高校生が考える事だ。

オカルトマニアがいるというよりも、厨二病の頭の痛い人がいると考える人のほうが多いだろう。

正直、オカルトマニアより厨二病のほうがマシかもしれない。

「でも学校に来てないなら仕方ないのです……あ、そーだ！　葵さんやあかりさんに頼んでみるのはどうでしょうか!？」

「それも一つの手だろうけど、出来れば俺は直接返したいな」

というか、CDを返すのはオマケでメインは告白の返事だ。  
返事だけは葵やあかりじゃ絶対に出来ない。

いや……それだけは俺がしなくちゃいけないんだ。

青山さんは俺に対して好きって言うてくれた。だからその返事は俺がしなければならぬ。

「け、けーすけ様にしては律義なのですね！」

「俺にしてはってなんですか!？」

「ジョ、冗談ナノデスヨ！」

「嘘つけ! 思いつきり某読みじゃねーか！」

いっそのこと、こんな事を言われない為にも真面目に生きてみようかな?

でも今更ねえ。第一クソ真面目に生きてても人生って面白くないじゃん。

折角の青春なんだぜ、テキトーに馬鹿な事をやっていたほうがいいに決まってるぜ!

……っと、というのが藤島圭介青春謳歌理論の一説である――

「もきゅ!？」

初芝高校の廊下にて、事件は一瞬して不意に発生した――

何者かに体当たりされた暮葉。

小柄な彼女はアッサリと吹っ飛ばされてしまい、何故か俺のほうへと倒れ込んできた。

あまりにいきなり過ぎる事態――というか、このまま避けたら暮葉

が転んで怪我をしてしまう。

「——っ！」

「……っ！」

なんとか暮葉を抱きしめ、暮葉が転んで怪我をするという最悪の事態だけは回避した。

回避はしたんだが……しまった、抱きしめたのは失敗だったかもしれない。

「わ、悪い——って、エエッ!？」

「す、すごい……っ！」

「え、なににに! こんな所で？」

「うわっ、リア充マジで爆発しろよ……っ！」

なんてこったい。

暮葉に当たって来たヤツも、そこらへんで立ち話をしていた1年の連中も。

とにかく、俺達の周りにいた殆どの人達が野次馬と化してしまった。その中で暮葉を抱く俺……なにこれ、すっごく気まずい……。

「す、すみませんけーすけ様！」

「え、いや……」

ていうか、俺も早く暮葉を離せよ。

なんだよ俺は、なんでまんざらでもないとか思ってるんだよ……！  
でも、正直に言う……なんだろうこの安心感？  
ドキドキするのと同時に安心できる、なんだか意味不明だぞ？

「あ、あの……けーすけ様っ？」

「えっ？ ご、ゴメン！」

暮葉に名前を呼ばれ、俺は咄嗟に暮葉から離れてしまった。

……というか、最初から離ればよかったんじゃないか。  
そしたら何かの事故だと思われたかもしれないのに。

「なんだか初々しいわね、もしかして付き合ってから日浅いのかな  
？」

「こ、こら明美！ そういう事言わないの！」

……周りもみんな、俺達の事をバカップルだって誤解してしまった  
じゃないか。

まあ、俺の事を知っている人はこの中でも少数だ。

1年内では噂になるかもしれないが、2年3年に伝わる事は多分な  
いだろう。

それにしても、さっきの暮葉……小柄なのに柔らかくて、とても甘  
い匂いがして……。

なんつーか、女の子って感じだった……。

やっぱり、あの暮葉も一人の女の子——

「……けーすけ様？ 完全に上の空でしたけど、どこか具合でも…  
……？」



「…………えっ？　お、俺はいつも通り健康でございますよ！」

「そ、そうなのですか…………っ」

これでも、今まで風邪で休んだ事がないんだ。

身体だって丈夫だしな。俺の身体は外からの攻撃にも中からの攻撃にも強いのだ。

だから、風邪のウイルスごときに負けるわけが——コラそこ、馬鹿とか言うな！

「……………」

「……………」

暮葉は頬を赤くし、少し俯きながら視線だけを俺から逸らしていた。俺達を包み込む沈黙。ちくしょう…………話しかけづらい。

それに心拍数がヤバイ、ドキがムネムネでござるよ。

「……………っ」

相変わらず同じように黙りこむ暮葉…………。

なあ、暮葉って…………こんな可愛い子だったっけか。

俺の知っている暮葉と何かが違う。

俺の知っている暮葉はもっと元気で、敬語なのに無邪気で子供っぽくて…………。

とにかく、実年齢を言われてもピンと来ないようなヤツだったハズ。それなのに、今の暮葉は少し大人っぽく見える——

「あ、あの！」

「お、おう！」

さっきまで視線を逸らしていた暮葉が、今度は俺を見上げてきた。おそらく140cm代の暮葉。普通に立っていても俺より顔は下である。

そんな暮葉が——可愛らしく赤面し、さらに上目遣いで俺の事を真っ直ぐ見ている。

「け、けーすけ様……っ、その……あの……っ」

えっ、えっ、なに、どうしたんだよ暮葉のやつ？

も、もしかして……暮葉からも告白されるパターン！？

もしそれがホントだとしたら……青山さんに返事すらしていないのに、なんちゅータイミングだ！

で、でも……まだ告白だって決まったわけじゃ——

「あー！ いたいたいたーっ！」

……えっ？

この超お元気そうな声は……まさか。

「お兄ちゃん！ クーにゃん！」

そして、聞きなれた心を癒すやわらかなボイス。

振り向くと、そこには二人の女の子が仲良く並んでいた。だが、必死そうに息を切らしている。どうしたんだろう？

「も、もきゅ？ 葵さんにあかりさん！？」

「二人で血相変えて、一体どうしたんだよ？」

「呑気な事言ってる場合じゃないんだよ！」

やたらと必死な葵が俺に近付き、ぐいぐいとワイシャツを引っ張りながら叫びかけてくる。

この時、ようやく俺は確信できた。

二人が血相を変えているのは冗談ではなく、本当に何かがあったせいだと――

「お、落ちつけて！　まずは事情を説明しろよ？」

「千早が……千早が急に転校するらしい！　とにかく早くこっちに来てくれよな！」

……………えっ？

あかりが放った信じられないその言葉。

俺も暮葉も叫ぶ事さえできず、絶句してただ立ち尽くすだけだった。というか、一瞬脳内まで真っ白になってしまった。

俺にとってそれほど衝撃的な言葉だったからだ……。

――青山さんが……転校だと？

## 第77話、なんだ、このギャルゲー的展開は！？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

黒木「おい藤島、テメエぜってえーリア充だよな？」

圭介「はあ、なんでだよ？」

黒木「テメエいつも女の子と一緒にいるじゃん！」

圭介「あのなあ……暮葉とか伊吹とか、友達であって恋人ではないんだぞ？」

黒木「うるせえ！ 女の子と会話できるヤツはみんなリア充なんだ！」

圭介「なんじゃそりゃ理不尽すぎだろ！？」

黒木「テメエ彼女欲しいとか言ってたな？ ぜってえーすぐ作れると思うんだけど？」

圭介「そりゃねえだろ。イケメンでもないし金も持っていないし、モテないし……」

黒木「ざけんなよテメエ！ 何がモテねえだよこのクソ野郎！ ロクに女子と会話したことねえ俺に謝れ！」

※圭介がリア充かどうか、多分それは見る人それぞれ！

どうもです！

今回は以前も後書きトークコーナーで予告しました……。

kuxu様執筆『Freedom／Story』とのコラボストーリーです！

キャラ崩壊（特にFreedom／Storyのほう）があるかもしれないません。

kuxu様ごめんなさい！そしてコラボ提案&許可ありがとうございます！

なお、今回のコラボは両作品の本編とは殆ど関係ありません。

それではいつもと違う、『魔法少女に会っちゃった場合』をどうぞ！

「圭介！ 今度科学都市って所に行こうぜ！」

ある日の昼休み、俺は野郎どもと飯を食っていたのだが……。

二次元マスター長宗我部大吾くんが、突然科学都市なんていうわけのわからない名前を出し、そこに行こうと誘ってきやがったのである。

第一科学都市ってなんだよ、能力者が沢山いる学園都市って街なら電○文庫のラノベであっただけ。

「科学都市って……いったい何処にあるんだよ？」

「多分東京都？」

「知らねえのかよっ！ つーか、なんだってそんな所に行きたくなっただ？」

「いやあ。そこにある私立星道高校に団殺者<sup>ディスター</sup>ってのがあらしいけど、なんと警察の学生バージョン。そう、武偵だ。武偵がいるらしいんだ」

厨二臭い設定やなあ……というか大吾さんよ。

「どこの緋弾のア○アだよ！ ちなみに俺は白雪押しな」

「なっ！？ ば、馬鹿か圭介。やっぱア○アだろ！？ ツンデレにくぎゅだぜ？」

「惹かれる所がそこかよ！ お前はアレか、釘○病患者か！」

「yes！」

……大吾、そりゃ悪かったな。

釘○病患者なら確かにア○アは素晴らしいキャラだろうさ。

ちなみに、俺は竹○病だ……アズにゃん。

……てか、俺達真昼間からなんちゅー会話してるんだろう。

こんな事だからいつまで経ってもリア充になれないんだよなあ……  
はあ、彼女が欲しい。

そんな調子で、俺は今日も一日をテキトーにぐーだらと過ごしていた。

——そして放課後。

今日は部活もないので暮葉と二人での下校だ。

「け、けーすけ様。歩きながらPNPは危険なですよ？」

「大丈夫だ、問題ない！」

とりあえず、誘導とかは暮葉に任せて俺はPNP。

折角PNP版ToHea○t2買ったんだ。存分に楽しまないと損  
じやないカ。

つと、いうわけで今日は小○愛佳ちゃんを攻略する事に全力を注ぐ  
ぜ。

いやあ、しかし俺はPCのエロゲ版はやったけど、エロのないP  
NP版も案外いいものだな。



「もきゅ！　け、けーすけ様！　前っ！　前っ！」

「よっと」

俺は暮葉の慌てっぷりを頼りに、なんとか前方から迫ってきたママチャリを回避してみせた。

フフフ……案外歩きながらギャルゲーと言うのも悪くないな。

暮葉のサポートさえあれば、ごく普通に歩けるじゃないか。

「けーすけ様あ！　このままじゃいつかオタメガさんになっちゃうのですよ！？」

「お前、俺の部屋にあった漫画勝手に読んだろ？」

「ち、違うのです！　拙者は葵さんから借りて読んだのです！」

「そ、そうか……」

葵のヤツも神〇み読んでたのかよ！

知らなかったぜ……というか、最近葵の部屋に一步も足を踏み入れてないな。

まあ、この歳になって妹の部屋に入る兄もどうかと思うが。

その割には葵は部屋に入ってくるし、今度仕返しのつもりで部屋に入ってやろうかな？

……と、考え事をしていたその時――

「けけけけっ、けーすけ様、後ろ！」

どうしたんだ暮葉のヤツ。志村後ろみたいなのりで俺の事を呼んで……。

っと思った、次の瞬間――

「ぎゃあああああああああああああああああああ  
あっ！」

激しい痛みを感じた。

さらにドン！という轟音が響き、口や鼻からも大量に流血していた。  
……そういえば俺、どうして眩しき青空をフライしているのだろうか。

とりあえず頑張って眼下に広がる地上を見て見ると、さっき俺がいた所には大型トラックが不自然に停車しており、何か慌てた様子で運転手さんが駆け下りていた。

地上と今の俺の状況から考えるに……ああそうか、俺はトラックに轢かれちゃったんだ……轢かれた？

「呑気な事考えてる場合じゃねーじゃん！」

ど、どうしよう。今回はいつも以上にド派手にぶっ飛んでいる。

明らかに最後にトラックに撥ねられた、暮葉と出会った日とは飛距離が比べ物にならないぞ？

というかどうかしよう。トラックに撥ねられたという事は……。

「お、俺のPNPとToHea○t2がああああああああっ！」

相変わらず、激痛を感じながら空を飛ぶ中、俺は自分の身の心配よりもゲームの心配をしていた。

些細な事で壊れてしまうPNP3000……多分、というか確実に壊れただろう。

しかもToHea○t2と一緒に散ったぜ……うう、両方とも高かったのに！

その二つが無事である可能性はほぼ皆無。仕方ない、自分の身の心配でもしよう。

ところで、俺はこの後どうなっちまうんだろうか？

相変わらず落下するどころか、さらに空高くへ上昇している気がする。

その証拠に地上が段々離れて行く。気温も低下していく。そして……さ、酸素が薄くなってきた！

——数分後。

あれ、なんだか落下している気がするぞ。

そうか……いよいよ隕石の如く、大地と激しく接吻を交わす時が来たようだな。

いやあ、何分も飛んでいたら地面が久々に感じるよ。

久々の地面ってどんな感じなのかなあ。まあ言うまでもないだろうが……。

きつと、久しぶりの地面は——！

「じぶうるあつ!？」

おおゆうしゃよ、しんでしまうとはなさけない！

……という事はなかったが、ちくしょう……動けないくらい痛い。そりゃあまあ、確かに日航123便もビックリな速度で大地に衝突したけどさ。

おかげでアスファルトにクレーターが出来てしまったぞ。

「あ、あきにい……空から人が……っ！」

「僕にもそう見えました……」

なんか今、男女の声が上から聞こえたような気がするぞ。

ああそうか、クレーターになっちゃったけど一応ここ、道路のど真ん中なんだよな。

もしかして、こんな所で倒れている俺って邪魔なんじゃないか？

……邪魔以外の何者でもないよな。とりあえず、さっさと立ち上がるとしようか。

「ちつくしょう痛え〜っ」

身体も痛けりゃ損失も痛い。

……PNPが、ToHeaOt2が、俺の小○愛佳ちゃんが……っ！

「あきにい、どうする？」

「一応倒れてましたし、声をかけてみますか」

俺は後頭部を押さえながら、さっきから二人でコソコソ話をしている男女を見る。

女の子のほうは小柄だ。金髪で小柄で……おお、峰・理子・リュ○ン4世じゃん！

多分別人だろうし、よくよく見ると似ていないがパツと見りこ○んじゃないか！

り○りんと違う所は瞳の色と、胸のサイズだろうか。

服の上からの推測にすぎないが、彼女の胸はもしかすると暮葉並に

小さいかもしれない……！

男の方は白髪で、髪のは長さは大体肩に後ろ髪が当たるくらい。  
瞳は紅く染まっており、オマケに細身で……ん、こんな男をどっかで見たような……？

“ おもしれえなオマエ……上等じゃねえか。愉快に素敵にやってみやがれよ！”

……っ！

こ、こいつ……まさかあの時のっ！  
男の姿を見た瞬間、思わず立ち上がり拳もしっかりと握った。  
そして、力強く目の前のアイツを睨みつけ――

「てめえ……早川悠っ！」

「……？ あきにいいこの人怖い！ しかもなに言ってるかわからないよ！」

「とりあえず……あの、僕は早川悠じゃなくて優輝晃ゆうきあきらですよ？」

「……えっ？ べ、別人！？」

ウソや！

だって……肌白で細身で白髪で一方〇行みたいで、そんなヤツ早川以外にいるのかよ！

……でも確かに、目の前の男は早川と違い、なんだか優しそうな雰囲気である。

目付きだって早川みたいに悪くないし、狂気じみた笑みも浮かべて

いない。

やっぱり別人……じゃあ俺、この人に滅茶苦茶失礼な事をしたんじゃない？

「誰かと誤解されたようですけど、僕は君の探している人とは違うと思います」

「そうだよ！ あきにいはあきにいだよ、早川悠なんて知らないから！」

や、やべえ。ホントに別人みたいじゃないか！

それじゃあ、やっぱり俺は滅茶苦茶失礼な事を……。

とにかくここを乗り越える為にやることはただ一つ！

「すみませんでしたあーっ！」

俺の勘違いだとわかった瞬間、俺はジャンピング土下座を実践してみせた。

謝罪、こういう場合何よりも重要な事であろう。

とにかく謝れ、ここは頭を下げておくんだ。

「……どうする、あきにい？」

「ここじゃなんですし、場所でも変えましょうか？」

……え？

優輝さん、もしや俺とお話するおつもりで……？

……まあ丁度いい、この二人にここがどこかを聞いてみようか。

正直言うと、俺……ここが何処だかさっぱりわからないっす——

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

早川「なんだア？ このオレを写したような三下はア？」

晃「いきなりなんですか……というか、いよいよコラボが始まりましたね」

暮葉「序盤は殆どそちらのキャラクターさん登場しませんでしたけどね！」

真「次回は私もあきにいも、他のみんなも登場するよ！」

晃「また地味言われないように頑張らないと……っ」

圭介「俺のPNPが……ToHea○t2がっ！」

※kuxuさん。ありがとうございました！

「はい、と……東京だと!?!」

「はい、ここは東京の下町です」

う、ウソだ……トラックに轢かれただけで東京まで来ちゃうとか。そんなの二次元にしかないと思っていたのに、あんまりだあ!

……俺こと、藤島圭介はあの後二人に連れられ、“自由荘”とか言う場所へ来てしまった。

他人の家に上がるなんて久しぶりだけど、よく掃除でもしてんのかこの部屋は綺麗だなあ。

まあ、そんな事はどうでもいいんだ。それより俺を襲う現実があまりにも厳しすぎるぞ?

「こ、古宇坂って街は知らないっすよねえ?」

「こうさか? あきにいい、それって隣の県だよな?」

「確かにそうですね。ですが、一応東京圏内だったと思いますよ」

古宇坂の人口はたったの13万だ。

古宇坂港とか工業地帯がなかったら東京圏内だって実感沸かないよなあ。

でも、晃ってヤツ曰く曰く一応東京圏内であるらしい。

は、初耳や。地元なのに知らなかった……っ!

……どうでもいいけど、なんだか晃って名前に抵抗があるぜ……間違いなく永渕のせいだな。



「はあ……まあ、古宇坂まで帰るくらいの交通費なら――」

とりあえず俺は財布を取ろうと、鞆を探してみたのだが……。あ、あれ。どうしてでしょうか……鞆がないぞ!?

「あの、どうしましたか?」

「……鞆、古宇坂だわ」

なんてこったい。

トラックに轢かれた時、きつとわが身から離れてしまったのだろう。でも、財布も勉強道具も何もかもが鞆の中だし……それを古宇坂に置いてきてしまった。

運が良ければ暮葉が回収しているかもしれないが、運が悪けりや今頃貧乏人の手に渡って現金に……。

「ふ……不幸だっ」

「お、落ち込んだじゃったよ?」

「元氣出してくださいよ……必ず古宇坂に帰れますから」

「一銭も持っていないのにどうやって帰れと!?!」

無理でしょ!

いくら古宇坂が東京圏内だとしても、一応他県だし……。歩いて帰ったら何時間……いや、何日かかると思ってたんじゃない! どうやって帰れば……あ、そうだ。

俺ってトラックに撥ねられてここまで来たんだよな。

だったら……痛いのを我慢してもう一度轢かれれば——もしかしたら古宇坂に帰れるかも！

「すごい、奇妙な笑いだね」

「……あ、あの。藤島さん？　どうしたのですか？」

「思いついたんだ。古宇坂に帰る方法をな！」

「えっ？」

「悪いなお二人さん！　お世話になった、じゃあ機会があったらまたいつかなーっ！」

俺はそう叫びながら、飛び出すように“自由荘”を後にした。  
目指すは——トラックが飛ばして走っている首都高か幹線道路！  
ふふふ、これで俺は古宇坂に帰れる——！

「あきにいい、あの人やっぱり変だよ？」

「ぼ、僕も……あのノリにはついていけないです」

——やがて数十分後、どういうわけか俺はとある学校の前に来てしまったが……。

「ま、迷った……」

“東の丘学園”という高校の前で俺は絶望していた。

ついノリで優輝家を飛び出しちゃったけど、完璧に道に迷っちゃったね。

はははっ、すっかり忘れていたよ。ここは東京で俺の地元じゃないって事にな。

困った、首都高の【し】の字も幹線道路の【か】の字もねえ……。

「ねえ、あの制服他校じゃない？」

「ホントだ、どこ校だろ？」

「もしかして……東の丘に殴り込みかけるつもりか!？」

「いや、流石にないでしょ……」

なんだ、ここらへんの連中は他校の生徒が珍しいのだろうか。

なんだか俺を囲むように、東の丘学園がぞろぞろと現れ始めた。

ちよ、やばいんじゃないか。このままだと抜け道を塞がれてしまう。というか……どうしてそこまで他校の生徒が珍しいんだよ！

「静音さん！」

「会長！ 例の怪しいヤツはあの人です！」

「あら、確かに他校の制服ですね」

げっ……誰だよ生徒会長呼びやがった奴。

面倒くさい事になるフラグが立っちゃったような気がするぞ。

ま、まあ……ここはアレだ。さっさとこの学校の前から消えたほうがいいだろう。

というわけで俺は学校に背を向け、さっさと立ち去ろうとした――

「その貴方、ちょっと待ってください」

「……っ!？」

ヤバスヤバス!

呼び止められてしもうたぞ、しかも銀髪の美人じゃなっすか。  
いいなあこの生徒会長は可愛くて。

初芝の生徒会長は戸愚呂みたいな感じで、とにかくゴツい野郎だぜ?  
美少女が生徒会長なんてこれなんてエロゲー?

……て、そんなどうでもいい事を考えている場合じゃないだろ。  
考えろ藤島圭介! このピンチをどう乗り越えればいいんだ……っ!

「あの、先程から校門でなにをされているのでしょうか?」

「……えっ? あ、いや……もしかして俺、滅茶苦茶怪しい?」

「はい、凄く怪しいですよ?」

「すみません……なんつか、道に迷っちゃったもんで……」

「そういえば見かけない制服ですね。ひょっとしてこの近隣の学校の生徒ではないのですか?」

「まあ、そんな感じっす……」

言えない。トラックにぶっ飛ばされて古宇坂から遥々飛んできましたなんて……。

そんな超ありえない事を、こんな清楚なお嬢様には絶対に言えない!

とりあえず万が一聞かれた場合、東京都内のどっかから来たって事で誤魔化しておこう。

「……ふふっ、わかります。貴方は今物凄くお困りのようですね？」

「ま、まあ有り金も0で正直……」

せめて古宇坂まで帰るくらいの交通費が欲しい。  
でも、そんなものが簡単に手に入る程、この現実<sup>リアル</sup>は甘くないのである。

全く、これだから現実<sup>リアル</sup>は大変だ。

……と、こんな調子で現実<sup>リアル</sup>の厳しさを感じていた――

「か、かいちょーっ！ 大変だよ！」

「あ、あら福本さん？ どうかしたのですか？」

「あ、あっちのほうでアッキーを探して暴れている人達がっ！」

「……もしかして、また反逆者<sup>レジスタンス</sup>でしょうか……？」

な、なんだ。なんだかちょっとヤバイ空気になってきた気がするぞ。

「早く早く！」

「わかりました。それでは私、これにて失礼します」

「えっ？ あ、ちょっと！」

あの可愛らしい生徒会長の女の子は、元気な女の子に手を引っ張ら

れる形で去って行った。

どうしよう、全く状況がわからない。

とりあえず何か問題が発生したのはわかったけど……。

「うわっ！ な、なんだデメエ!?」

「お前ら大人しく科学都市に引き返せ！」

「デメエ柊翔太——ぐあああっ！」

……なにこの声、すげえ気になるんだが……？

い、行ってみるか……とりあえず事件ってんなら俺も行こう。  
明智だったら絶対に介入しているだろうしな。

——そう決心した俺は大地を蹴り上げた。

ここの生徒の注目を浴びている事さえ気にせず、何も考えずにとにかく学校内へと侵入する。

えっと、次はどっちに進もう。とりあえず右に曲がろう。

「きゃっ！」

「うおっ!？」

しかし、丁度曲がり角で俺は一人の少女と遭遇してしまった。

黒髪のショートカットでオマケに小柄で……うむ、この子も中々の美少女。

やっぱり東京の女の子って可愛い子が多いですねあ！

……ってそんな事考えている場合じゃないだろ、俺。

ぶつかりそうになってしまったんだ。相手はおどおどしているし、  
謝っておかないと……っ！

「ごめんっ！」

「え……？ い、いえっ！ 私のほうこそ不注意で……それより、ここは危険らしいので――」

危険？

そういえば、さっきの生徒会長や元気な子も何か慌ただしく動いていた。

あと、男達の悲鳴も聞こえたし……畜生、この学校で何が起こってるってんだ。

この子が言う危険……まあ危険なのかもしれない。さっきの悲鳴もあるし。

やっぱり行かないほうがいいんだろうか？

「ぐあああああっ！」

「チッ、なんちゅー数だ！」

「翔ちゃん！ アキ君はもう少しです！」

「くっ……早く来てくれよ、親友！」

……そ、そうだな。なんだか危なげなアロマが漂っている。

今回は仲間が関わっているわけではないんだ。

わ、態々こんな危険な事に首を突っ込む必要はない……よね？

それに偶然出会ったこの大人しそうな女の子……危険地帯にこの子を一人にするのもアレだな。

……仕方ねえ、戦闘はまあ誰が戦っているかは分からないが、今戦っている人に任せて。

——俺はこの子と一緒に学校の外まで行くことにしよう。

「あのさ、君の名前は？」

「え？ ……ふ、ふじもりなぎさ藤森渚です」

「よし藤森さん、ここは危険なんだよね？」

「は、はい。怖そうな人達が暴れてて……」

やっぱりいまいち状況がわからない。あまりにも超展開すぎて話についていけない。

けど……小刻みに震えるこの子を見て確信した。

詳しい事はよくわかんねえけど、それでも事件は確かに起こっている——

「わかった、とりあえず一緒に校外まで逃げようぜ？」

「えっ？ で、でも……っ」

「緊急事態なんだろう？ だったら一人より二人のほうが安全なハズだよ」

「は、はいっ、わかりました……ありがとうございますっ」

藤森さんは少しだけだが、表情を穏やかにしてくれた。

よかったあ。やっぱり女の子に暗い顔は似合わないよな。

「あの……お名前は？」



「ん、そういえば自己紹介がまだだったな。俺は藤島圭介だよ」

「藤島……よ、よろしくお願いします……藤島さん！」

「おう、そんなじゃあさっさと逃げようぜ？」

いよいよ逃走開始だ。

さて、さっさとこんな所から逃げて、首都高か幹線道路を探してトラックに轢いてもらおう。

そして——俺は古宇坂に帰るんだ！  
だ・が・。

「……動くな」

振り向くと、俺達の進路を遮るように——茶髪の男が立っていた。

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「ぶっちゃけこれ、『Freedom／Story』読んでない人にはわかりにくいんじゃないか？」

晃「確かにそうですね、ちょっとは考えて書くべきだったと思います」

圭介「全く、作者はホントに馬鹿だなあ」

晃「まあまあ、折角なのですから文句はなしにしましょう」

圭介「それにしても、最後に出てきた敵キャラ……早くも浜面臭がするんだが」

大吾「はー〇づらあ」

※Freedom／Story本編・<http://ncode.syosetu.com/n1960s/>

背筋が凍る。

俺達の行く手を阻むように立っている人影が一つ。

茶髪で黒木と似たような体格で、誰かと戦ったような跡があり鼻血を流していた。

「動くなよテメエら……テメエらは今から俺の人質だ。団殺者をぶっ倒すまでは……テメエらは俺の支配下だ」

団殺者という言葉に、俺は眉をひそめる。

確か、今日の昼休みに大吾がそんな事を言っていた気がする。

大吾がテキトーに考えた厨二設定だと思っていただけ、どうやら本当に存在するヤツらしいな。

目の前の男の表情もやたらと真剣である。

ああもう……事情がサッパリわからねえよ。

「<sup>ディスター</sup>団殺者だど？」

「ああ、テメエらは事情を知らねえんだな。まあ一般人に説明したって何の意味もねえけどよ」

「何の事かサッパリだ。理由もわからねえで人質にされるなんて納得できねえ。俺達にもわかるようにちゃんと事情を説明しろ」

せめて事情が知りたい。

<sup>ディスター</sup>コイツが団殺者と何の関係があるのか。

なんだってこの学校に殴りこんできたのか。

「俺は科学都市の反逆者<sup>レジスタンス</sup>って組織のモンだけどよ、ここに団殺者<sup>ディスター</sup>がいると聞いてなあ、ちっと襲わせてもらったんだよ」

科学都市……これも大吾が今日言っていたな。

どういう街か詳しい事は知らねえ。某学園都市ラノベに出てくるような街かもわからねえ。

科学都市、団殺者<sup>ディスター</sup>、反逆者<sup>レジスタンス</sup>……ああもう意味がわからん！

「とりあえずてめえ……よくわかんねえけど、くだらねえ事で人様に迷惑かけてんじゃねえよ！」

「迷惑？ ハハッ！ 迷惑してんのはこっちなんだよ！ 団殺者<sup>ディスター</sup>の存在が俺達にとっては超迷惑なんだよおっ！」

相手の男は、今にも襲いかかってきそうな勢いで叫んだ。

本能的にまずいと思った俺は拳を構え、獲物を狙うベヒのように力強く男を直視する。

「待ってください」

声が聞こえた、俺の背後からである。

妙に落ちついた声で優しそうではあるが、そこに激しい怒りが籠められているような気もした。

前方の男に警戒しつつ、まだ襲ってこないと判断した所で俺も後ろを確認すると……。

「団殺者<sup>ディスター</sup>です！ おとなしく降伏しなさい！」

「あ、晃……さん!？」

「て、てめえが……団殺者！？」  
ディスター

白く、細くて壊れそうで、でも正義感に満ちていて……。そんな男、優輝晃という人物が真剣な表情で立っていた。その後ろに女の子が数人いるのが気になるけどね……。

「あきにい！」

「アッキー頑張って！」

「アキ君の前にいるあの人……他校の生徒っぽいけど誰なの？」

さっきの妹キャラに赤髪ツインテール、水色のロングの美少女。き、奇抜や……まあ俺の周りにも奇抜な色の人はいるけどさ。それより昇って随分信頼されてんだな。

ハハッ、初芝での俺とはまるで違うもんだな……。

「さて、どうしますか？ 君達の得意のロボットは翔太達が撃破したのもう一台もないですよ」

「ふ、ふざけんな！ そんなちっせえ事で降伏なんざしねえよ！」

「出来れば実力行使はしたくないのですが……」

「う、うるせえっ！ こうなったら……テメェらみんな殴り殺してやる！」

言いながら、相手の男は服の中から何かを取り出す。おそらくアレは伸縮式の警棒、要するに特殊警棒というヤツである

う。

それを右手に持った男は一気にこちらへ駆けてくる。

どうする、晃はさっきまでカッコよかったけどさ……細身だし、なんだか喧嘩とかは弱そうだぞ？

かといって女の子に戦わせるわけにはいかない。

じゃあ逃げる……無理だ。俺のすぐ後ろで藤森さんが怯えている。この状況じゃあアイツから逃げる事もできねえ。

戦うしか選択肢は残されていねえけど、戦うにしたって体格的に晃じゃ勝てるかわからねえ。

——だったら仕方ねえ……俺が戦ってやる！

「みんな下がってろ！」

「え？ あ、貴方は藤島さん！？」

晃がそう叫んだ。さっきちょっと会っただけだったけど、俺の名前を覚えてくれたんだな。

さて、この危機から脱する為にも頑張って戦わねえとな。

「ハアッ！」

誰よりも先頭に立って男を迎え撃とうとする俺。

男のほうも、最初のターゲットを俺に変更したようである。

俺へと一直線に駆け寄ってくる……クソッ、アイツ意外に動きが早い！

俺が身構えた頃には既に、男は俺の目前に迫っていた。

それどころかビュン！という警棒が風を切る音が響き渡っていた。

既に警棒はテニスラケットのように振られていたのである。

「ッ！」

恐らくこめかみを狙う予定だった一撃。

そこを打たれると流石にマズいし、俺は咄嗟に左腕に左腕を上げた。久々に感じた激痛……まあ俺の身体の事だ、骨にヒビが入るとかそんな事はないだろう。

「ごっ、はぁ！」

しかし、少しだけ安心していた隙に——男は膝で鳩尾を蹴りあげた。

鈍い痛みと、呼吸を難しいものにするその一撃。

体質上、身体は壊れなくてもその痛みだけは感じる俺は、攻撃の痛みに思わず顔を歪ませた。

さらに追撃するように、警棒を左拳を合わせた一撃が俺の頭部を狙ってきた。

「くそっ！」

左へ跳躍するように攻撃は避けた。

だが、跳躍した勢いでアスファルトに全身を強く打ちつけてしまった。

硬いアスファルトは、ごろごろと車輪のように転がるだけでも痛みを感じるものだ。

……でも、俺の場合その痛みはすぐに消える。

さっきまでは滅茶苦茶痛かったけど——もう痛くもなんともねえ！

「オラァッ！」

「が、はぁっ！」

だが、立ち上がった瞬間。

特殊警棒が俺の横顔に直撃してしまった。

顔面どころか脳さえ揺さぶられる一撃に、俺は思わずよろめいてしまった。

さらにゴン！という嫌な音、どうやら男は俺の顎を思いっきり蹴りあげたらしい。

「ぶ、ごあっ！」

脳を揺さぶる一撃……つか、この野郎随分高い所まで足が上がるな。アップercutを足でやりやがった。

だが、相手はどうせ素人である。達人格闘家とは違い足と手じゃあ俊敏さが違うハズである。

その僅かな差こそ隙であった。足を元の位置に戻す隙に、俺は素早く体勢を立て直し――

「……オオッ！」

「……ッ！」

全力疾走をして相手の腹を目がけ、思いっきりタックルを仕掛けてみせる。

このまま押し倒し、マウントポジションを取って殴りまくる作戦だ。だが――俺のタックルは通用せず、ずっと後ろへ下がっただけで男は倒れなかった。

その時――俺が抱いていた疑惑は事実だと判明し、確信した……。

「俺を相手にここまでやれるたあ、テメエも……随分慣れてんだな？」



「く、そお……っ」

コイツ——相当喧嘩慣れしてやがる！

そこらの不良が1人なら、ここまで慣れたような行動はできねえ。  
俺だって昔の事情で残念ながら、少しはこういう荒事に慣れている  
ハズである。

だから、ちょっとした不良1人くらいなら余裕なハズだ。

なのに——コイツには結構手間取っている。この野郎……鍛えてる  
し戦い慣れている！

「俺らの敵は団殺者……アイツらは道具使って超能力じみた能力を  
使うし、銃火器などの武器も豊富だ。こっちはロボットと銃は持っ  
ているけど、それ以外には何もねえ……」

「だから……その為に身体を鍛えてるってのか？」

「察しがいいなテメェ！ その通りだ……俺達は団殺者<sup>ディスター</sup>と戦うため  
に、ある程度身体を鍛えてんだよ！」

言葉と共に、男は特殊警棒を投げつけてきた。  
なんとかギリギリで特殊警棒を避けてみせたが——

「てえあっ！」

「い、ばっ！」

刹那。

射抜くようなボディーブロー、脇腹を貫くような激痛に呼吸が止ま  
る。

それからずっと、男は

「あきにいい！ あの人負けそうだよ！」

「アッキー！ あの人を助けてあげて！」

「アキ君、お願いっ！」

「真、美紀、結衣……わかってますよ、そんな事——」

晃が女の子たちの願いを聞き受け、いよいよ飛び出そうとしたが。

「動くな！ テメエらはコイツを倒してからゆっくりとだ……動いたらコイツをブツ殺すからな！」

「ッ！」

動けば俺を殺す、その言葉で晃の動きは止まってしまった。

女の子たちは震え、俺もその言葉が冗談ではない事を確信した。

「ホアッ！」

「が、はっ！」

またしても膝蹴りが、俺の腹部へ激しく突き刺さる。

一瞬だけ感じるあまりの痛みに、俺は思わず腹を抱えて身体を丸めてしまう。

次の攻撃が来る事も覚悟していたが——攻撃は来ない、男は俺の目上で笑みを浮かべていた。

「テメエがいくら頑張っても無駄なんだよ。一般人が俺達<sup>レジスタンス</sup>の反逆者に

刃向かってんじゃねえぞ。さっきも言ったけど俺は団殺者<sup>ディスター</sup>と戦う為に身体鍛えてんだよ……この船山健太

（ふなやまけんた）をそこらのチンピラと一緒にしてんじゃねえぞ！」

ハハッ……そうかよ。そりゃあ悪かったな……確かに俺はアンタをただのヤンキーだと思っていた。

科学都市とか団殺者<sup>ディスター</sup>とか反逆者<sup>レジスタンス</sup>とか。

そんな言葉を使いまくる、邪気眼系とDQN系を足した厨二病ヤンキーだと思ってたよ。

けど違うんだな……そりゃあ素人じゃ太刀打ちできないわけだ。でも、お前は一つ大事な事を知らないな……！」

「ナメてんじゃねえぞ……この野郎オ！」

ゆっくりと船山って男の胸倉を掴み、起きあがると……。

俺は少しずつ頭を下げ、一気に力強く自分の額を船山の眉間に叩きつけた。

激しい音が響き渡り、船山は俺のヘッドバットの衝撃で後ろへ下がろうとしたが、胸倉を掴む左手に力を入れて向こうへ吹っ飛ばうとする船山を、無理やり俺の近くまで引き寄せる。

そこへ、俺は船山の鼻っ柱に強く握った拳を叩き込んだ。

「あ！　が、ぐああああっ！」

地面へ叩きつけられた船山は、転がりながら己の顔面を両手で押さえていた。

押さええているにも関わらず、船山の手や下のアスファルトが血で染まってゆく。

どうやら、今の一撃で鼻血が出てしまったようである。

「ち、くしょお……やってくれたなクソ野郎おっ」

手で鼻を押さえながらもぞもぞと起きあがる。

出血が結構ひどいけど……まあ、多分命に別状はないだろう。

鬼のような形相で俺を睨み付けれる元気があるしな。

「クソ野郎？ クソ野郎はてめえだろうが。なんでここまでして団<sup>デ</sup>イスター殺者<sup>イスター</sup>つてのを狙ってんだよ！ なんだって、その為に関係ないヤツまで巻き込まれなきゃならねえんだよ！」

「俺達はなあ！ ガキンちよの癖にどこの犯罪者だろうが裁ける、団<sup>デ</sup>イスター殺者の存在が気に入らねえんだよ！ なんでアイツらだけ特別なんだよ！ なんて団<sup>デ</sup>イスター殺者<sup>イスター</sup>つて学生集団だけが、科学都市にいる警察よりも上にいやがるんだよ！」

ようやくわかったきたぜ……団<sup>デ</sup>イスター殺者<sup>イスター</sup>つて組織が。

ようわからんけど、要するに学生がやってる警察なんだろう？

……でも、それだけじゃないか。警察の存在の何が悪いんだよ。

むしろそういうのが存在する理由って――

「団<sup>デ</sup>イスター殺者<sup>イスター</sup>つてのが存在する理由は、てめえらみたいな犯罪者が暴れまくってるからじゃねえのかよ？」

「なん……だと？」

「それくらいわかってろよ！ 犯罪<sup>デ</sup>イスター<sup>イスター</sup>がなけりゃあ警察も何もいらねえだろ！ 俺は科学都市とか団<sup>デ</sup>イスター殺者<sup>イスター</sup>とか、そっちの事情はサッパリわかんねえけど……でもこれだけは言える。てめえらが暴れまくってるから、ロクに平和に暮らせねえような事をやってやがるから、

だからそういう組織が結成されたんじゃないのか!？」

馬鹿馬鹿しい。そんな常識的な事すらわからねえのか、コイツら反逆者<sup>スタンス</sup>ってのは。

結局船山達反逆者<sup>レジスタンス</sup>ってのは、ただの自己中心的奴らの集まりじゃねえか。

コイツらが何もしないけりや別に不便な事はねえ。

要するに、不信に思っているのは犯罪者だけなんだろ。

「うるさい！ 科学都市は……科学都市は何をするかわからねえ場所じゃねえか！」

「でも、科学都市の中だろうが外だろうが、てめえらがやってる事は犯罪以外の何者でもねえだろ！」

「この野郎……団殺者<sup>ディスター</sup>でもねえのに、科学都市の事情なんてこれっぽちも知らねえ癖に……俺達に説教くれてんじゃないやねえよ！ クソガキがあああああつ！」

船山は右拳を振り上げ、大きく叫びながらこちらへ突っ込んできた。そんなアイツを迎撃すべく、俺も拳を握りしめた。

ちくしょう、最初から最後までホントにわけがわからねえ……。

多分、事情なら団殺者<sup>ディスター</sup>を名乗る晃のほうが詳しいんだろう。でも、知識のねえ俺でもわかる事——やっぱり相手は犯罪者。

科学都市だろうがその外だろうが関係ねえ。取り締まられるような事をやっているんだ。

「てめえらの科学都市や団殺者<sup>ディスター</sup>に対する不安はくだらねえ……」

言いながら歯を食いしばり、右拳をさらに強く握りしめる。

一方の船山は雄叫びをあげながら、俺に向かって突っ走ってくる。

「一度刑務所かどっかで頭でも冷やしやがれ！ この大馬鹿野郎が  
あ！」

全力を振り絞った放った俺の右ストレート。

船山の右ストレートと俺の右ストレートが、お互いの顔面に同時に  
激突した。

脳さえも揺さぶる衝撃に、お互いバランスを崩した。

だが、倒れたのは船山だけであった。

俺は力強く踏ん張り、絶対に地面に倒れ込む事はなかった――

――それから数十分後。

複数の警察車両や救急車両、そして警察官や野次馬等が学校のグラ  
ウンドを埋め尽くしていた。

怪我人の大半……というか、ほぼ全員が反逆者のメンバーである。  
レジスタンス

その他奇跡的に無傷だった反逆者のメンバーも、当然現行犯で逮捕  
であった。

そして、そんな中で俺は――

「本当に病院へ行かなくても平気なのですか？」

「晃も心配性だなあ。これでも身体の頑丈さには自信があるんだぜ  
？」

俺も随分殴られたが、今では全く痛みを感じない。

それどころか、どこを怪我したのかさえわからない。

だって痛くないんだもん。ふう……俺の体質って本当に便利である。あれだけ暴れて殴られたってのに、既に怪我もないし意味も感じないのだ。

「すみません……他校の生徒をこんな事に巻き込んでしまつて。東の丘学園の生徒会長としても、そして一人の人間として深くお詫び  
――」

「えーっと、柊さんでしたっけ？ 別に気にしないでいいですよ」

「……え、ですが……っ」

「あんなの大した事ないですから。それに学園側の皆が怪我しなくてよかったですよ」

一応先輩らしいので、俺は敬語を使ってそう説明した。

まあ確かに、船山なんて光秀や早川に比べりゃあ……全然大したことなかったし。

事情を知らないからちよつと混乱したけどね。

「藤島さん。藤島さんがいなければ、僕が到着する前に渚ちゃんが拉致されていました。本当にありがとうございます」

「あ……ありがとうございます、藤島さんっ」

「おう、二人もそんなに気にする事ないよ。困っている人を助けるのは当然だろう？」

「ハハッ！ 藤島さんは団殺者向きの人かもしれませぬね」

ディスター

晃が笑顔を浮かべながらそんな事を言ってきた。  
デイスター  
団殺者ねえ……団殺者かあ……。

「誘ってくれたのはありがたいけど、面倒くさそうだから止めとくわ」

「そうですね。僕もこれ以上藤島さんを巻き込みたくありません」

「さてと、俺はそろそろ帰ろうかな？」

流石にそろそろ帰らないと、暮葉達だって心配しているハズだ。  
それに、これ以上何か事件に巻き込まれるわけにもいかないしね。

「藤島さん、また自由荘にでも遊びに来てくださいね」

「あきにいがそういうなら……私も歓迎するよ」

「わたしは一之瀬美紀、まあ……よろしくね」  
いちのせみき

「羽衣結衣です。その、よろしく」  
はごろもゆい

「おう」

なんだか知らんけど、トラックに轢かれると言う些細な事故がキツカケで、東京に知り合いが出来てしまったな。しかもこの人達自由荘の面々だけではない。

「私は柊静音、東の丘学園生徒会の会長です。是非学校にも遊びに来てくださいね」  
ひこうしずね



「藤島さん……私も図書館にいますので……来た時には足を運んでみて下さいね……っ」

東の丘学園の人とまで、俺は事故がキツカケで知り合いになってしまった。

まあいいか、知り合いは多いほうが人生楽しいし。  
何より、みんなとってもいい人そうだしな。

……今度、東京に来た時にでも遊びに来ようかな。

「……わかった、皆も古宇坂に遊びに来たら、俺も俺の仲間も皆で歓迎するよ」

「それでは、お氣をつけてください。藤島さん」

そんな晃の言葉に対し、俺は。

「おう、またな」

さよならは決して言わない。

多分、これが最後ってわけじゃないから。

というか最後にはしないだろう。

そのうち、今度は事故で偶々じゃなくて正式に遊びに来よう。

その時は——暮葉達も連れてこようかな。きっとここにいる人達も喜ぶはずである。

さて、古宇坂で暮葉達が心配しているハズだし、俺もそろそろ帰ろう——

……あ、交通費ねえし結局道もわからない。どうやって古宇坂に帰ろう……？

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「どうもー！ 今回でコラボは最後、次回からまた本編です！」

晃「藤島さん、その前に言う事がありますよね？」

圭介「あ、更新時刻から1時間近く遅くなって申し訳ございません……ネタを考えるのに時間が（ry」

晃「藤島さん、余計な事は言わなくてもいいと思いますよ？」

圭介「ぐっ……晃のツツコミが的確すぎる……っ！」

晃「そうそう、Freedom／Storyのほうでもいつか『魔法少女に会っちゃった場合』とのコラボをやる予定ですので、よろしく願います」

※kuxuさん、本当にありがとうございました！

そしてFreedom／Story本編・<http://ncode.syosetu.com/n1960s/>



## 第78話、突然すぎるぞ？

俺と暮葉は二人に手を引っ張られ、写真部の部室へと連れてこられた。

扉を開けると、そこにはいつもと違って真剣な表情の浅間部長がいた。

なんか……いつもよりも部室の空気が重たい。

「失礼します……」

「変態兄貴、圭介達を連れてきた」

「うむ、ありがとう二人とも」

空気どころかみんなも暗い。

やっぱり……青山さんが転校するって言うのはネタじゃねえのか？

「あの、部長……」

「藤島君、話は聞いていると思う」

「はい……その、青山さんは……？」

「今朝、青山君の母親が青山君の代わりに退部届を提出してきてね、転校の話はどうやら本当らしい」

た、退部届って普通本人が提出するんじゃない……。  
なんだって青山さんの母親が？

しかも、今日は青山さん本人を見かけていない。  
……なんだこれ、もう色々と滅茶苦茶すぎてワケがわからない。  
青山さん。一体どうしてこんなに急に……？

「もきゅ、部長さん……青山さんはどうして？」

「それが僕にもわからないし、顧問の先生に訊いても何も事情を知らされていないらしいんだ」

「なんでだよ……全然意味がわからねえ」

今日、青山さんに告白の返事をするハズだった。

正直な気持ちを伝えるハズだった……でも、青山さんがいないんじや何の意味もねえ。

それどころか、この先青山さんに会えなくなるかもしれない。  
転校なんて止める事ができないだろう。だけど……せめて事情くらいは知りたい。

青山さんがいきなり転校してしまう理由を――

「今日みんなを招集したのはこの事の報告だ。青山君は今度の文化祭の写真撮影係だった、もう一人藤島君がいるが……藤島君、一人でも大丈夫かい？」

「……はい、仕方ないっすよね……任せてください」

青山さんがいないんじや仕方ない。

元々、俺は青山さんを手伝う為に立候補したんだ。

だったら――青山さんが不在の今、俺がしっかり仕事をしなければならぬ。

「けーすけ様……っ」

「あ、あたいたい、手伝うから忙しかったら言ってくれよな！」

「葵も、全力でお兄ちゃんの事サポートするから！」

「……けーすけ様、拙者も暇を見つけて頑張るのです」

「おう、ありがとうみんな……」

手伝ってくれるのは本当にありがたい。嬉しいハズだ……でも、ちつとも喜べない。

青山さん、どうして転校なんかしちゃうんだよ………。

——その日の昼休み。

俺は野郎共に伊吹や小坂、そして暮葉を加えて弁当を食べていた。今日はハンバーグとか卵焼きか。はあ……好きなメニューのハズなのに、ちつとも美味しく感じない。

俺の頭の中は未だに、あの子の事でいっぱいだ。

確かに、青山さんに対して恋愛感情があるわけじゃないさ。

でも……だからって転校して悲しくないわけがない。

青山さんも大切な仲間なんだ。だから……出来る事ならいなくなつて欲しくない。

けど、転校するにはそれなりの理由がある。転校を止めるなんて事は難しいだろう。

……でも、せめてその理由くらいは知りたい。

それから、最後に会ってCD返却と告白の返事をしたい。

青山さんに会いたい……このままだと未練たらたらだ。

「圭くん……なんか今日は大人しいね？」

「……………」

「あ、亜紀の話をスルー。圭介……重傷だわ」

「……え？ あ、わ……悪いっ！」

しまった。小坂をスルーしてしまった。

いくら思い悩んでいるからって、今のは人として最悪すぎる。

「いやいや、いいんだよ！ 圭くんだってお年頃だしねえ？」

「あ、亜紀さんっ！ 今のけーすけ様は……っ」

「……あ、ご……ごめん」

暮葉の言葉で感づいたのか、小坂はいきなり謝ってきた。

確かに、冗談に乗るような気分じゃないけど……何も全く言うなというわけでは。

……やっぱり、落ち込んでいる俺の存在が場の空気を悪くしてるのかな？

「ねえ圭介、なんか悩みでもあるの？」

「いや、大した事じゃねえよ」

「あ、あんたが落ち込むって……大した事だと思うわよ？」



「そ、そうか……心配してくれてありがとうな」

「べ、別に心配してるわけじゃないわよ……っ」

言いながら、伊吹はぷいっとそっぽを向いてしまった。

その時の伊吹は何故か、頬がほんのり赤く染まっていた。

まあ……どう見てもいつものツツパリ伊吹ちゃんだな。

「空気が重すぎて僕ら話しかけ辛え……」

「大吾、シリアス苦手だねえ」

「うっせ！ 俺はブヒる事が専門だからな！」

「それ、全然威張れる事じゃないような気がしないかい？」

「し、重原にはわかんねーよーだっ！」

野郎共は相変わらずだなあ……はあ、俺も出来ればあれくらいのテンションでいたい。

でも、今の俺には無理だ。青山さんの事で頭がいっぱいで……。

——その後。

昼飯を食い終えた俺は一人、廊下をふらついていた。

最初は暮葉も一緒だったのだが、暮葉は別なクラスの友達に呼ばれて途中でログアウト。

暮葉、他のクラスにも友達いたんだなあ。

アイツの交友関係も中々広いものだ。まあ確かに、葵と似たような

もので社交性あるヤツだしな。

きつと今じゃあ、俺なんかよりもずっと友達の数が多いのだろう。それに比べて悩みながら一人でふらついている俺……何やってんだろうなあ。

仕方ねえ事なのに。もうほぼ確実に会えないのだろうに……。

「あ、藤島」

「……え？」

背後から女の子の声がする。

振り向くと、そこには背が高く、胸まで大きいクールなポニーテールの女の子が立っていた。

「明智……？」

「うん、学校で話すのは久しぶりだな……？」

「そう言えばそうかもしれないな」

昨日電話で沢山話をしたけどな。

まさか、その翌日に明智に声を掛けられるとは思ってもしなかった。赤を基調とし、黄金の文字で“風紀委員”と記された腕章をつけているあたり、今は風紀委員の仕事で見周りか何かをしている所なのだろう。

だったら、邪魔をするわけにはいかないよなあ。俺も今は気分がよろしくないし……。

「なあ藤島……元気がないように見えるが、ど……どうした？」

「え？　そ、そう見えるか？」

「あたりまえだ。いつもの藤島ならエッチな発言をしているハズだぞ」

「……俺、普段そんなにオープンエロだったわけ？」

「す、すまない……冗談を言っていたいい時じゃなかったな」

「いや、別にいいけどさ……」

ダメだ。明智と会話をしてるってのに……こんな態度じゃ明智に悪いじゃないか。

青山さんの事が心配だとしても、今はそれを考えている場合じゃない。

俺は今、明智と話をしてるんだろうが……っ！

「藤島、もしかして……青山の転校の話か？」

「えっ？　どうして明智がそれを？」

「一応私の家は青山の家と並ぶ家、故に青山家の情報は普通に入ってくるからな……っ」

「エエッ！？　マジで!？」

初耳や、明智家と青山家が同等……でも、どうしてだ？

明智家って前にも行った事があるが、確かとんでもなくデカイ家だったような気がするぞ。

その明智家と同等らしい青山家……一体、どんな家庭なんだよ？

……待てよ、明智は青山さんが転校するって話を知っている。そして明智家には青山家の情報が入っている。

という事は、青山さんが転校する事情を知っているんじゃないのか？

「……なあ明智」

「……ど、どうした藤島？ そんな急に真剣に？」

「教えてくれないか」

明智家には青山家の情報が入る。

その明智家の一人娘である明智は、青山さんについての事実を知っているかもしれない。

だったら、明智に聞いてみる価値はあるだろう――

「な、なにをだよ……？」

「青山さんが転校する理由……いや、出来れば青山家について知っている事を、全部……っ！」

俺は力強く言い放つ。しかも、その勢いで明智の両肩に手を置いていた。

「は、にゃ、あ……わ、わかった……わかったから……は、離れて欲しいぞっ」

明智は口元をわなわな小刻みに震わせ、何故か顔を耳まで真っ赤にしていた。

目もしっかりと見開いており、恐怖していると言うよりはあがっている感じだ。

「だ、大丈夫か明智？ 顔赤いぞ？」

「っ！？ ななな、なんでもないぞ！ 心配するなっ」

「そ、そうか？」

「~~~~っ」

いや、どう見ても大丈夫じゃないでしょ。

相変わらず、明智の顔は耳まで真っ赤に染まっていた。

……まあ、時間が経つにつれて次第に収まってきたけど。  
もしかして、俺が勢いで肩に触れたのが原因なのかな？

まさか明智って……実は男性恐怖症だったりするのか！？

アレって確か、触れられたり話したりするだけで震えたり顔が赤く  
なったりするらしいし。

こ、今度から明智と話す時は気をつけよう。なるべく触れないよう  
に、怖がらせないように……っ！

「……そうだっ！ あ、青山の話だったな？」

「お、おう。頼むぜ明智、教えてくれ……っ！」

「わかった。一度しか言わないからよく聞くんぞぞ」

明智にそう言われ、俺はもちろん首を縦に振った。

……いよいよだな。青山さんの……いっぱいある不思議の一つが明  
らかに――

## 第78話、突然すぎるぞ？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「さて、今回から本編だな！」

伊吹「圭介……鈍感っ」

圭介「え？ ど、どうした伊吹？」

暮葉「確かに、あそこで男性恐怖症なんておかしいのです」

圭介「く、暮葉までどうしたんだ？」

小坂「圭くんに彼女が出来ない理由、なんとなくわかったかも」

圭介「ちょ！ こ、小坂さん！？ 俺が何をしたって言うの！？」

黒木「こんな鈍感野郎がモテモテなんて……クソムカつく！」

圭介「さっきから皆さん揃って鈍感鈍感って一体なんなんですかあ  
ああ！？」

## 第79話、青山家

青山家……。

この古宇坂市で一番の歴史を持つ名家。

かつてはこのあたり一帯の名主をつとめていたらしく、その上明治以降は華族で最後の当主が子爵であり、現代でも莫大な財産と広い土地を持っているらしい。

なんでも厳格な家庭らしく、明智曰く青山さんが初芝に通っているのも部活をやっているのも、全て青山家の現当主である青山流あおやまながれの特  
別許可があったかららしい。

つまり、この由緒正しい名家に生まれた青山さんは、所謂箱入り娘というわけである。

確かに大人しくて上品な雰囲気はあったけど、お嬢様って感じではなかったよなあ……。

人は見かけによらずとはよく言うけど、まさにその通りかもしれない……。

「そ、そんな家が古宇坂にあったんかい！」

「うん、私も明智家も理由ワケあってこっちに移ってから知った事だぞ」

「青山さんがお嬢様ねえ……ん、でもなんで？」

「なにがだ？」

「いや、どうして青山さんが転校する事になったのかなって」

青山家の事はわかった。青山さんがお嬢様だって事もたった今知った。

でも、まだ肝心な事を知れていないぞ。

青山さんが転校してしまう理由……俺は何よりもそれが知りたい。  
そして、青山さんが行ってしまう前に——どうしても返事がしたい！

「そんな事……本人に訊かないとわからないと思うぞ？」

「じゃ、じゃあ理由を知るのって無理じゃねえか……？」

「会わなかったらな……っ」

そう簡単に言うけどさ、旧家のお嬢様となんて早々街中で出会える  
とは思えないぞ？

困った……というか絶望的だ。

まだ告白の返事どころか、借りたCDだって返していないっていう  
のに……。

「……………」

「ふ、藤島……っ、青山に会いたいのか？」

「えっ？」

「そういう顔、していたぞ？」

気付かれちゃったか。まあ隠しようがないくらい落ち込んでいたか  
らな。

ここはもう、無理だとわかっていても正直な事を言おう。

「……そりゃあ、会いたいとは思っているよ」



「そうか……」

……でも、無理だ。

そんな事情があるってんなら、青山さんに会おうと思っても会えないだろう。

でも会いたい、せめて残されたやるべき事だけはやっておきたい。

「なあ、藤島……」

黙りこんでいたその時、俺はいきなり明智に声をかけられた。

「なんだよ？」

「……青山に会えるかもしれないぞ？」

「ま、マジで!？」

「う、うん……絶対ではないけどっ」

その時の明智の言葉で、俺のテンションは思わず上がってしまった。青山さんに会える……そんなありえないと思っていた事を明智は言ったのだ。

まあ、【かもしれない】と言っていたという事は、確実に会えるわけじゃないんだろうけど。

……それでも、僅かでも可能性があるってんなら――

「明智、どうやって会えばいいか……教えてくれっ」

「わかった、私が青山家に連絡をつけておく」

「……えっ？」

「この地域で青山家にタダでお願いできるのは、多分私の家だけだ。青山家だって私と会うって条件なら青山の外出を認めるハズだろう」

おお、こんな所で明智が役に立とうとは予想もしていなかった。

やっぱり、明智ってすげえな……。

俺も暮葉曰く、一応アレクサンドル皇太子って皇族の子孫らしいけど、生憎異世界の皇族だからこの世界じゃ何の意味にもならないんだよなあ。

しかも胡散臭いしさ、多分誰も信じたりはしないだろう。

そういう意味で明智家ってすごいよ。明智光秀の子孫だって言うのも事実だしな。

だからこそ——青山家と対等に話をする事ができるんだ。でも……。

「い、いいのかよ？ お前にそこまで迷惑を掛けるわけには……」

「藤島には私を光秀から救ってくれた恩がある。だ、だから……恩返しだと思ってくれればいいぞっ」

明智……いつも思っているけど改めて思ったよ。

ホントにいいヤツすぎる——！

「ありがとな、明智！」

俺がお礼を言うと、明智は少しだけ頬笑みながら頷いてくれた。

その後、青山さんと会うまでの作戦を話し合い、作戦が決まったのは昼休み終了ギリギリであった。

明智が青山家へ電話し、放課後明智家の近所の青山さん呼び出す。もちろん、青山家には明智と話をすると伝えて……でないと多分青

山家は話を聞こうともしない。

もし全てが上手くいって明智家の近くにある公園まで青山さんがきたら、次は俺の出番である。

青山さんが転校する理由。やり残したこと……すべてをそこでやるんだ。

「それじゃあ今日はこれにて終了、気をつけて帰れよ」

ずっと考え事をしていたら、いつの間にか乙坂が勝手に進めていた帰りのSHRが終わっていた。

しまった……午後の授業なんて殆ど聞いていなかった。

後で暮葉か伊吹にノートでも借りよう。でも、今はそんな事よりも……。

「……んっ？」

ポケットのあたりに振動を感じる。

多分、ケータイにメールが何かが届いたのだろう。

まさかと思ってケータイを開けて見ると、確かにメールが1通来ていた。

そこからさらに受信ボックスを開いてみると……やっぱり明智からのメールだ。

“ 成功したぞ、私の家の近くにある公園で待っていてくれ ”

……やった！

でかしたぞ明智、よく青山さんと呼んでくれた！

後は俺が遅れないように、急いでその公園まで行かねえと。

今日は一応部活の活動日であるが、そんな事は今の俺にとっちゃあ

どうでもいい話だ。

それより、青山さんとお話がしたい――

「けーすけ様！ そろそろ部活に――」

「悪い暮葉！ 一身上の都合により俺は先に帰りますぜっ！」

「もきゅ！？ ちょ、けーすけさまぁ！」

悪いな暮葉、そのうち何か奢るから今は勘弁してください！  
……俺はただ只管、明智家の近くにある公園へと駆けていた。

――走る事数十分、明智家って結構学校から遠いよな……よう  
やく公園に到着した。

既に7月、春頃なら夕日が辺りを包んでいるだろう。

でもこの季節は日が長く、未だに青空が眩しい。

そんな太陽の光に照らされた公園にある、一本の大きな樹の下に――  
彼女は立っていた。

「青山さんッ！！」

「っ！？」

俺が大声で彼女の名前を呼ぶと、彼女はビックリした様子で俺のほうを見てきた。

最初から最後まで、ずっつと彼女は驚いていた。

大声で呼ばれた事と、そして……自分をここに呼んだ人物とは違う

人物が現れた事に……。

「よかった、本当に来てくれたんだ……っ！」

「えっ……う、うそっ……藤島先輩、どうして……っ？」

青山さんは俺が現れた理由<sup>ワケ</sup>を知らない。

きっと明智が現れると思っていたに違いない、それなのに俺が現れたんだ。

一応、これでも詐欺ではあるから謝っておかないと。

あと、勝手に青山家の事情を知ってしまった事についても……謝らねえと！

「明智から来てほしいって言われたんだろ？」

「えっ？ ど、どうして……っ？」

「全部聞いたよ、明智から」

「ぜ、全部って……わたしの家の事も？」

「……ごめん、どうしても青山さんに会いたかったから」

「先輩……そのっ、わたしも……会いたかったですっ」

まだ全てが終わったわけじゃないからな。

それにしても青山さん、やっぱりいつもよりもテンションが低い。

本人も望んでいなかった転校なのだろう。

でも、どうして青山さんがいきなり転校する事になったんだろうか？

告白の返事は一番重要だから最後だ。CD返却もこの後すぐにすれ

ばい。

まず最初に転校する理由から聞いてみようか。

「あのさ青山さん、色々話があるんだけど……まず最初に一つ聞いていいかな？」

「な、なんでしょうか……？」

「青山さんってどうして転校する事になったんだ？」

「……………」

俺が問うと、青山さんはどこか悲しげな表情で黙りこんでしまった。まずい、流石に今のはストレートすぎたか。

「いや、ちょっと気になったただけだから。話しづらかったらスルーしてくれても……」

「……わたし、心配かけてますよね……？」

「えっ？」

さっきまで黙りこんでいた青山さんが、俺を直視しながら問いかけてきた。

その視線は、とても強いようでとても弱々しい。

見ているこっちが辛くなってしまいう程に、とても……。

「……話します、わたしも……みんなに何も知らせないまま消えたくはありません……っ」

「青山さん……」

こうして俺は、青山さんが転校する理由を聞ける事になった。  
名家青山家のお嬢様。彼女はどんな理由で転校してしまうのだろうか……。

## 第79話、青山家（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「そういえば皆の家って昔何やってたんだ？」

伊吹「私の家はよくわからないわ。刀鍛冶って説があるけど」

小坂「あたしは多分農民かな？」

大吾「僕は名前的に武家じゃねえの？」

小坂「長宗我部ねえ……？ あんたが子孫じゃ長宗我部元親に失礼だと思う、しかもどーせ名ばかりで実は農民でしたオチなんだろう？」

大吾「ひでえ！ これだから現実女は嫌いだ！」

重原「俺の家はずっと武道一筋だね」

伊吹「そういえば、圭介の家ってどんな感じなのよ？」

圭介「お、俺の家か……シラネ」

小坂「……ダメじゃん」

伊吹「言いだしっぺの癖に」



圭介「うっせ黙れ！」

（アレクサンドルとかいう異世界人が御先祖様なんて言えるかよ！  
しかも伊吹は事情知ってるだろ！ 嫌がらせかよ！）

## 第80話、理由

「わたしの家……多分先輩も知ってると思います……とても厳しくて」

青山家、古宇坂で市で一番の歴史を持つ名家。

そんなお家柄だからこそ、厳しいのは当たり前的事だろう。

でも、それと転校の理由が何の関係があるんだろうか？

特別許可さえ出したらしいのに、なんだって今更転校する必要があるんだよ……。

「だから、最初はわたしが初芝高校に通う事さえ……両親は反対でした。部活動をする事さえ反対でした……」

確かに、初芝はレベルこそ高いものの一番ではない。

増してや男女共学。隣町にはもっとレベルの高い女子校が存在している。

大事な自慢の娘を男がいる共学より女子校に通わせたい。

両親はきつとそんな事を考えていたんだろう。

それなのに俺と中学が一緒だったのは、多分この近隣に女子中がなかったからだろう。

「でも……わたし、どうしても友達と一緒にいたくて、先輩もいて……だから、どうしても初芝に進学したくて……っ」

「お、俺も？」

「は、はい……っ！」

そうか、青山さんは俺に好きと言ってくれた人。

その好きって気持ちは中学の時からあった。

だからなんだろう、初芝にどうしても入りたかったのは。

友達も入る予定だし、そこには青山さんにとっての憧れもいた。

「それで……お兄様と一緒に強く望んだ末、ようやくお父様とお母様の特別許可が下りました……」

「お兄様って……青山さんって兄貴がいるのか？」

「はいっ、今はその……社会人なので中々会えませんが……っ」

「そうなんだ。じゃあ青山さんが今まで初芝に通っていたのも……」

「はい、お兄様のおかげなんです……っ」

青山さんは瞳を閉じ、何か思わせぶりな表情でそう答えた。

青山さんの兄貴ってどんな人なんだろうな。

とにかく、妹想いのいい兄貴だって事はなんとなくわかったよ。

兄貴と一緒に頑張ったからこそ、青山さんは今まで初芝に通っていた。

友達と一緒に笑っていたら、それなのに……。

「じゃ、じゃあ。折角兄貴と二人で頑張って、ようやく許可を貰って入学できたのに、なんで今更転校する事になっちゃったんだよ？」

「それが……一週間前、わたしの家の前で喧嘩があったのです……っ」

「えっ、喧嘩？」

「はい……それがっ、喧嘩をしていたのが初芝高校の生徒とうちの執事で、初芝のほうはどう見ても不良で……」

「初芝の不良って……も、もしかしてっ」

そういえば一週間前、黒木と赤佐が顔面にガーゼを貼って登校してきたような。

まあ、アイツらが怪我して登校してくるのはよくある事だし、そもそもアイツら短気だから、むしろ一ヶ月に一回も喧嘩をしないほうがおかしいくらいだった。

どうせいつもの事だって軽くスルーしていたけど……。

アイツら、よりによって青山家の前で喧嘩するなんて……。

「せ、先輩……どうしたのですかっ？」

「え？ ああいや、犯人に超心当たりが……」

「……え？ も、もしかして……先輩？」

「違うよ。クラスメイトに丁度一週間前、怪我して登校してきた二人がいたんだよ。その二人ってよく喧嘩してるって話だからさ」

「あっ、そういえばお母様も……初芝の生徒は二人だったって……っ」

黒木と赤佐あゝ！

別に皆諦めてるし、白陵の不良と殴り合う分にはもう文句は言わな

いよ。

相手だって黒木や赤佐と似たようなもんだからさ。でも、なんでよりによって青山家の前で、しかも青山家の執事と殴り合ったんだよ！

もう大体読めたぞ。青山さんが転校してしまう理由が……！

「要するに、その二人を見て青山さんの母親は初芝は危険と思ったんだな」

「……えっ？」

「そんな危険な所に娘を居させるわけにはいかない。だから安全な学校へ転校させよう」

「……っ！ ど、どうして……っ？ せ、先輩……なんで何も言っていないのに……っ」

「ん、もしかして正解だった？」

「は、はい……っ、殆どそれで合っています……っ！」

「……………」

やっぱりな、そんなこったろうと思ったよ……。

ったく、黒木と赤佐め……あんな所で殴り合いなんかしやがって。

「……わたし、嫌です……転校なんか嫌ですっ」

「転校の話はやっぱり、親が強引に進めている事なのか？」

「はい……っ、折角……折角お兄様と頑張ったのに、努力が水の泡です……っ。それに、先輩達とお別れするなんて絶対に嫌です……っ！」

「……………」

大人しく、物静かでお上品な雰囲気で、それでも元気だった青山さん。

それが……今は両目に涙を浮かべていた。真珠のような雫が頬を伝って流れていた。

本心を強く言い放った後はただ只管、齒を食いしばり、きつく閉じた目から涙を溢れさせ続ける。

そこから感じる彼女の想いの強さ……。

転校したくない、仲間と別れたくない。

……でも、現実には逆らえない。

こうして俺のような他人に愚痴を言うのが精一杯、自分にはどうする事も出来ない。

そんな……とても弱々しい青山さんを、俺はただ黙って見ている事しかできなかった。

「……………」

「……………」

ちくしょう、俺って本当に男かよ……。

こう言う時、何か言ってやったり彼女の為に何かをするのが、本当の意味での男じゃないのか。

少なくともエロゲーの主人公なら、今頃ヒロインを慰めているハズだ。

でも……俺にはそれができない。ただ、無言でそばに立っている事

しかできない。

男失格、先輩としても失格だよな……俺。

「……っ！　せ、先輩、後ろっ！」

「えっ？」

泣いていたのにいきなり慌てだした青山さん言われ、俺は後ろを振り向いてみた。

すると——俺の後ろに誰かが立っていた。

黒髪的眼鏡でその上イケメン、しかも黒服を着用している若い野郎。すげえな……黒執事のコスプレかよ。ていうか何者？

なんで俺の後ろに立って——

「お嬢様から、離れろ」

「はっ？　——ごはっ！」

な……なん……で？

突然黒服のイケメンは、突き上げるようなボディーブローを俺に放ってきた。

貫くような激痛に俺はたまらず、地べたに膝を付いてしまった。

さらに執事は膝を付き、腹を抱える俺のこめかみに廻し蹴りを打ち込んできた。

頭蓋骨さえ打ち砕くような蹴りを受け、俺の体は数メートル程吹き飛んでしまった。

「ぐあっ！」

……ちつくしように、受け身は取ったが体中痛え。  
まあ、ボディーブローはこめかみへの一撃の痛みはもう消えたが。  
でもこれ、普通の人なら気絶してるぞ？

「せ、先輩……っ！」

「ちつくしように……てめえ！　いきなり何するんだよ！」

「ごめんあそばせ、千早さんにちよっかいを掛ける初芝の輩がいた  
ものだから、つつい追っ払うよう命令しちゃったザマス」

もう一人、新しいヤツが俺達の前に現れた。  
和服の中年の女性だ。

その人は先程俺を攻撃してきた執事の横に立ち、俺をあざ笑うかの  
ような見下してきている。  
……なんか、扇子に銜え煙草にあのゴミでも見るような表情、ムカ  
つくババアだ……っ！

「お、お母様……っ」

「え？　お、お母様って……あの人がお母さん!？」

「あらまあ！　貴方にお母さんなんて呼ばれたくないザマス。やつ  
ぱり初芝は教育程度が低いザマスね」

うるせえ……っ！

ザマス口調のてめえよかずとマシだろ。

ていうか、いきなり人様ぶっ飛ばしといて、嫌そうな表情しながら  
テキトーに謝るただでお終いか。

どう見てもあんたの方がずっと無礼だろ……。



「お母様……どうして？」

「オカシイと思ったザマス。明智の者なら千早さんに会いたければ、向こうから来るハズなのに……心配して千早さんの後を追ってみれば、千早さんを泣かす下衆な平民が……っ！」

「ち、違いますっ！ 泣いたのはわたしが勝手に――」

「わかってるザマス！ この平民のゴキブリの仕業なのは存じてザマス！」

ザマスザマスうるせえ！

しかも、勝手に俺が青山さんを泣かせた事になっているし。

まあ……青山さんに何もできなかった俺にも、責任があると言えばあるけど……。

でも、この人明らかに理不尽すぎるだろう。

「さあ千早さん。明日には転校の手続きが終了し、隣町の有名女子高へ通う事になるザマス。そろそろ家に帰り、英気を養うザマスよ」

「……っ！」

青山さんの手を握る母親。

しかし、青山さんは明らかに嫌そうにしていた。

止めなきゃ、青山さんは道具じゃねえんだよ！

「ちょっと待ってください！ 娘の話くらい聞いて――」

「岡本」

「はい……君、シャラップだ！」

その時、背中まで突き抜ける衝撃が鳩尾にめり込んだ。  
やべえ……一発が強力だ。

すぐに痛みが消えたとしても、激痛で瞬間的に行動が出来なくなっ  
ちまう……っ！

「お嬢様に手を出すな、さもなくばこうだ」

瞬間、右アッパー。

ゴンッ！という嫌な音が響いた。

突き上げる強烈な一撃に、さっきの鳩尾パンチで倒れかけていた身  
体が起き上がる。

……気付けば、俺は公園の砂場に倒れ込んでいた。

痛みは消えた。でも……未だに母親と執事の冷たい視線。

そして、俺を心配する青山さんの悲しげな視線が、容赦なく俺に突  
き刺さってくる。

「フッ、ところで千明様。殴ってもよろしかったのでしょうか？」

「大丈夫ザマス。岡本も御存知でしょう、初芝の生徒は暴力沙汰が  
好きザマスよ」

「……そうですね」

ふ……ざけんなあ……っ。

初芝の生徒がみんな不良みたいな事言いやがって……。  
だからって、俺を黙らせる為に暴力振るうかよ……？

これが……青山家ってもんなのかよ……っ！  
同じ金持ちでも明智とは全然違い……なんだよ、この外道な家は……？

「いいことその平民。今後、千早さんにまわりつくようなら……古宇坂港に沈めるザマスよ」

「先輩……っ」

「行きましょう、千早さん」

「……はいっ」

「あ、青山さん……っ！」

ちくしょう、流石に暴れるわけにはいかないよな……。

でも、青山さんが……このままだと青山さんが！

まだ告白の返事とか、大事な用事が残っているっていうのに。

それだけじゃねえ……このままで青山さんが幸せだって言えるのか？

俺はその後10分程、別に痛いわけじゃないのに砂場で寝そべっていた……。

## 第80話、理由（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

一方藤島「野オオオ原くウウウウウウン！ 宿題出し過ぎなんだよオ！ もっと減らさねエと皆が遊べねエじゃねエか！」

野原「だあくから言ってるじゃねえかよ。テメエら学生は学校の僕なんだよ。学校はさあ、生徒が優秀なら優秀なほどその学校が好事になるんだと」

一方藤島「だからってエ、この宿題の量はオカシイじゃねエかよオ！」

野原「はあ……うるせえな。このクソガキイ！」

一方藤島「ごぶるあっ」

※夏休みシーズン、宿題が多くて困っている学生はきつと多いでしょう。

……作者も困ってます。

## 第81話、決意

「……………」

公園のブランコにただ一人、寂しく座っている俺はずっと考え事をしていた。

まず第一に、ブランコなんて久々に乗ったなあという事。

小学生の頃は伊吹と一緒に乗ったりしたけど、流石にこの歳になると全く乗らなくなったよなあ。

まあ、この歳になって喜んで乗っているのもどうかと思うけどさ。

……そういえば、ア○ガミで後輩とブランコンに乗るシーンあったなあの子、俺の中では結構好きなキャラだったなあ……。

……まあ、そんな事はどうでもいいや。

それよりも第二の考え事だ。第二に青山さんの事である。

無理やり母親に引っ張られ、嫌がる青山さんの姿が脳裏に焼き付いてしまった。

「……………なんで、だよ……………」

俺は怒りに任せて拳をぎゅっと握りしめた。

……クソムカつく、なんなんだよ青山家は……。

確かに俺は馬鹿だし青山家の人間に及ぶとは思えない。

でも、あのオバハン……勝手に人様の程度を決めつけやがって。

初芝を馬鹿の吹きだまりみたいに言いやがって。

なにより娘を、青山さんをあんなに乱暴に扱いやがって……っ！

結局、青山さんを転校させたいのってただの我がままじゃねえか……。

「……あ、藤島っ」

声だ、声が聞こえる。

その声に反応して振り向くと、そこには制服姿の明智が立っていた。おそらくは学校帰り、たまたま俺の姿を見かけて駆け付けてきたのだろうか。

「明智か、今から帰る所か？」

「藤島と青山がここにいた予定だったろ。だからちよつと寄り道したんだけど……あれ、青山は？」

「……………」

「……その様子だと、青山の両親あたりの妨害を受けたみたいだな」

ははっ、明智さんは全部お見通しってか。

流石というか鋭いヤツだよなあ。

正確には母親と青山家に使える執事だったけど、それでも明智の言葉に間違いはない。

話の途中で俺達は――

「……すげえ、大当たりだよ」

「やっぱり……すまない、怪我とかはないか？」

「怪我はないけどどうして殴られたって事まで？」

「最近あの三馬鹿が青山家の執事と喧嘩をしてな。それ以降、青山

家は初芝の生徒に対して万が一の場合、実力を行使しても問題ないって……」

「な、なんだよそれ。意味わかんねえよ！」

そういえばあの母親も、初芝の生徒は暴力沙汰が好きだとか言っていたけど。

まさか、そんな事まで思っていただなんて。

ホントに青山家って歴史も長い由緒正しき名家なのかよ？

「私にもわからないぞ。でも……喧嘩の後、青山家はそう言うようになっちゃった……っ」

「喧嘩って、そもそもなんで喧嘩になったんだ？」

初芝が散々言われる原因や、青山さんが転校する理由になった三馬鹿と執事の喧嘩。

そもそも、その喧嘩はなんで起こったんだろうか。

普通に考えて学生とどこぞの執事が喧嘩するだなんて、ありえないに決まってんじゃないか。

「それが誰も口を開いてくれなくて、私も全然わからないんだ……っ」

「んじゃあ、事情を知ってんのは三馬鹿と執事だけなのか」

「そういう事になるぞ」

「そうか……」

だったら、いつそのこと三馬鹿に訊いてみよう。

でも大林は関わってないっぽいし、黒木は個人的に嫌だし……。

よし、ここは赤佐に訊こう。赤佐とはそこそ仲もいいしな。

とにかく、このままじゃなんか嫌だ……このまま終わりになるなんて絶対に嫌だ。

俺は決めたぞ——絶対に真実を知ってやる、意地でも青山さんに会って用事を済ませてやる。

いや……出来る事なら青山さんの転校を阻止してみせる——！

「明智、ありがとうな」

「えっ？ そんな、私は全然大した事してないぞ？」

「いや、明智のおかげで僅かな時間でも青山さんと会えた。そのおかげで色々知れたんだ。本当にありがとう」

「藤島……っ。ど、どういたしまして……っ」

明智が恥ずかしそうにそう言った。

そして、明智は俺に背を向けて公園から去って行った。

「それじゃ」などのお別れの挨拶がなかったのは、多分恥ずかしさからなんだろうと思った。

恥ずかしいから思わず逃げてしまった。まあ……エロゲーだとよくある事だな。

明智はDSだけど割と純粋だ。ストレートにお礼を言われると恥ずかしくなるのだろう……。

さて、明智との話が終わった所で……そろそろアイツを呼び出してみるか。



——数十分後。

俺は相変わらず、明智家の近くにある公園のブランコに座っていた。ただ、アイツを待ったために。

そのアイツはジーンパンにタンクトップという、なんだか涼しそうな恰好で公園に現れた。

「よお藤島、用事って一体なんや？」

「赤佐、ちょっとお前に訊きたい事があるんだけどよ」

「なんや？ メールじゃアカンような事なんかい？」

「メールより直接のほうがいいかなって思ったんだよ、話が話だけに」

言うのと、赤佐は俺が冗談を言うつもりじゃないって気付いたのか、急に表情を真剣なものに変えた。

ここまで真剣な赤佐、そう言えば今まで見た事がないような……。それくらい今の赤佐は、普段の赤佐とは全然違うというわけである。

「それで、一体何の話なんや？」

「なあ赤佐。お前……一週間前に黒木と一緒に執事みたいなヤツと喧嘩しなかったか？」

「……なんの話や？」

「とぼけないで答えて欲しい。頼む……イエスかノーで答えてくれ」

赤佐は目を閉じて歯まで食いしばっている。

怒っているだけではないんだろうが、相当悩んでいるのだろう。  
きつと、あんまり話したくない話なのかもしれない。

「……その質問、イエスやな」

「……やったんだな」

「ああ、黒やんと二人でやったね」

まあ、その事は最初からわかっていた。

だから別に聞いても意味のない事だった。

確認の意味で本人に訊いてみたんだけど……まあ、やっぱり事実であつた。

でも俺が知りたいのはその事実ではなく、どうして喧嘩に至ったかである。

ここからが勝負だよな……明智には話さなかったという喧嘩の理由。

「それじゃあもう一つ、どうしてその執事みたいなヤツと喧嘩したんだ？」

「そ、そりゃあ言えへんな」

「なんで？　　まずい事でもあるのか？」

「……まあ、そんなところやな」

言えないような事したのかよ……。

ったく、黙られたら余計に気になっちまうじゃねえか。

「大丈夫だ。俺は乙坂だろうが野原だろうが絶対に先生には言わない。いや、先生だけじゃなくて誰にも言わないって約束する。もし破ったらぶん殴っても構わねえ。頼む、この通りだ！」

俺はセリフを言い終わった後、土の上に直に坐り平伏してぎ座礼を行う——土下座を敢行した。

ここまでする予定はなかった、でも事情を聞きだす為には仕方ねえ。俺は真実を知る為なら——多少の恥だってかいてやるさ。

「藤島……え、ええから頭あげい」

「……？」

「わあった、説明するから土下座はやめろ」

「赤佐……無理言ってすまねえな」

「もうええ、それより立ってくれや」

俺は赤佐に言われ、土下座をやめて立ちあがった。

土下座とは非常に屈辱的だが、同時に他人の心を動かす可能性を秘めている。

頻繁にやり過ぎると効果はないが、普段全くしない俺がやると効果は抜群だ。

「そんやあ、一回しか言いまへんからよく聞いとけ」

赤佐と黒木は二人で青山家の前を歩いていたらしい。  
その目的は、近所に知り合いの家に遊びに行くためだったらしい。  
その途中で二人は偶然、青山家を見かけたんだとか。

——すっげえ！　でけえ家だなあ！

——ホンマや！　こんなお家古宇坂にもあつたんやなあ。

二人は青山家の大きさにビビっていたらしい。

……どんだけ大きいんだ。

実物を見た事がないからイメージが沸かないが、あの二人が驚くつて事は相当デカいのだろう。

とりあえず明智家には行った事があるので、明智家みたいなのを想像しておこうか。

——何坪くらいあるんだろうなあ。

——そうやなあ。ああ、俺らもいつそ金持ちに生まれたかったなあ。

赤佐と黒木はそんな話をしていたらしい。

別になんて事のないごく普通の話……ところが、二人の前に黒服の執事が現れた。

その執事は赤佐達を睨み付け、最後に「平民のゴキブリが何の用だね？」と言われたらしい。

その他、ゴミだとか失せろハエだとか……とにかく見下すような暴言のオンパレード。

途中まで我慢していた二人だが、とうとう我慢の限界に達し——

「って、先に喧嘩を売って来たのって青山家の執事じゃねえか！」

「それで俺ら頭にきて……けど藤島、なんでいきなりこないな事を聞いてきたんや？」

「お、おう。実は――」

赤佐が聞いてきたので、俺は事情を全て赤佐に話した。

青山さんが転校するという話。青山さんの転校理由、そして青山家の状況もすべて……。

事情の説明を終えると、赤佐はなんだか申し訳なさそうな表情になり。

「す、すまん藤島。俺らが執事と揉めたせい……」

「気にするなよ。赤佐が俺だったとしてもキレてるレベルだよ」

「せやけど、藤島の大事な後輩さんがっ」

「……青山さん」

青山さんと小声で呟いてみる。

ダメだ、虚しくなるだけだな。

でも、俺はまだ諦めたわけじゃねえ……いや、むしろ始まったばかりだぜ。

喧嘩の理由。その喧嘩が原因の青山さん転校話。青山家の実態。青山さんの気持ち……。

……ふ、フッフ。見えたぞ……青山さんルートのエンディングが！

「な、なんや藤島……？ きゅ、急にニヤニヤして……？」

「赤佐！ 俺、今からちよつくら青山家に突撃してくるぜ☆」

「……な、なんやってーーーーー!?!」

俺のトンデモ宣言に赤佐は当然のように驚いた。

まあ、それが普通の反応であろう。

「さて、青山さんを青山家から救ってやるぜ!」

「な、なんや。藤島がぶっ壊れた……?」

一見自棄になったような調子のよすぎる俺のセリフ。

だが、これは別に自棄になっているわけではない。

ちゃんと見えたんだ……青山さんの転校を阻止する話が。

つまり、青山さんルートのエンディングが見えたんだ――!

……ああ、眼鏡があればよりリアルに落とし神ごっこができたのに。  
まあいいや、それより早速青山家に突撃だ!

## 第81話、決意（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

暮葉「けーすけ様がついに壊れたのです……」

圭介「暮葉までそんな事言うの！？」

暮葉「だっておかしいですよ！ シリアスシーンでいきなりあの  
テンションなのですよ？ シリアスブレイカーにも程があるのです  
！」

圭介「うるせえ！ 確かに空気は読んでねえかもしれないけど、で  
もエンディングが見えたんだから仕方ねえだろ！」

暮葉「もきゅ？ えんでいんぐって……どんなエンディングなので  
すか！？」

圭介「そ、そりゃあ……ネタバレだから次回以降を読め！」

暮葉「そ、そんなぁ！ 少しくらい教えてくれないじゃないで  
すか！」

圭介「一つだけヒントを言おう。全く同じ展開のゲームをプレイし  
た事がある！」

暮葉「もきゅ!? ま、またゲームなのですか!?!」

※圭介は重度のゲーム脳です。



## 第82話、突撃ッ！青山家！

夕方、俺は青山家の前にいた。

赤佐から大体の道を聞いてここまで来たんだけど、やっぱり街一番の名家だけあって大きいなあ。

中々立派な日本屋敷じゃないっすか。

……というか、明智家をイメージしてきたけど想像通りだ。

確か明智家も日本屋敷だったような気がするぞ。

でも、青山家は正直明智家よりも大きいかもしれない……。

さて、どうやって乗り込もうかな。

まあ正面から突撃するのが早いんだろうが、相手はあの名家青山家だぜ？

さっき俺を殴りつけてきた執事のような連中がいっぱいいたら……。うん、とてもじゃないが俺一人では手に負えないぞ。

……でも、そんな小さい理由がどうした。その程度の事で突撃を躊躇するのか。

俺の覚悟は——その程度のものではかねえのか？

「……違うよな、藤島圭介っ！」

こんな所で立ち止まって立ったしょうがないぜ。

行くぞ……。

「突撃イイイイイイイイイイイイイイッ！」

突撃ラッパ鳴り渡る。

出て来る敵は皆々倒せ出て来る敵は皆々倒せ〜！

……まあ、ラッパないから脳内再生だけだね。

青山家の立派すぎる城壁（ただの塀だけだね）をよじ登り、なんとか城壁を乗り越えた俺は——ついに青山家の敷地に侵入。警備の者はおらずどうやら侵入成功のようだ。

さてさて、問題は青山さんとその両親がどこにいるかだけど……それにしてもいい匂いだな。

まるで焼き魚でも焼いているかのような……。

「そういえば腹減ったなあ……つーかいいい匂いだなあ」

「あたりまえだチェリーボーイ。今は夕食の時間なのだぞ？」

「……エッ!？」

ちよ、やべえ……早速青山家の執事に見つかってしまった。

しかもコイツ、さっき俺を殴り飛ばした野郎じゃねえか。

相変わらずイケメンなヤツだなあ。

確か名前は……あの母親が岡本って呼んでいたから多分岡本なんだろう。

「いい度胸だなチェリーボーイ。青山家に堂々と侵入してこようとは……そこまでしてお嬢様を泣かせたいか!」

「うるせえっ! 青山さん泣かしてんのはどっちだよ!」

「無論君だろうチェリーボーイ?」

「つーかてめえ! さっきからチェリーボーイうるせえわ!」

「ん？ チェリーボーイがダメなら童貞君がいいかな？」

「同じじゃねえか！ ったく、いきなり童貞だのチェリーボーイだの、失礼極まりねえだろ！」

まあ、俺はコイツの言う通り本当にチェリーボーイなのだが。

だって女の子と付き合った事はないし、かと言って犯罪じみた事に手を染めたわけでもない。

セフレ？ いわるわけねーじゃん……つか、いたらいたで高校生だし色々問題だろ。

「じゃあ君はアレかい。ヤツた事あるのかい？」

「ねーよ！」

「ふっ、やっぱりチェリーボーイか」

「うるせえっ！ 見境なしに女の子と遊ぶやりまくりよりはマシだろっ！」

「失礼な。僕も童貞だ！」

「……………」

人の事言えないけど突っ込みたい……い、威張れる事じゃねえっ！ まあ、やりすぎってのもどうかと思うけどさ。

実際チェリーボーイって全然誇れないよね……。

あれ、でもそうじゃない人は今度は馬鹿みたいに見られるし……世の中って難しいなオイ！

「さて、男同士の悲しい話は置いて……そろそろ終わりにしようか」

「……っ！」

「運がいい事に今は夕食時間。警備の者も僕を含めて8人のみだ。つまり……残り7人を見つからず、なおかつ僕に勝つ事が出来れば家の中に侵入できるぞ？」

「……殴り合えってのか？」

なるほど、数学とか英語とか物理なんかよりもずっとわかりやすい。この岡本ってヤツも結構な腕っ節だったからな。

絶対頭脳ゲームよりも、こういう身体を張った事のほうが得意だろうと思ってたよ。

でもなあ……正直言うとかイツと戦うのに時間はかけたくない。

出来れば短期決戦でアツサリと勝負を決めたい。

だが、コイツは動きを見る限り相当の達人である。一筋縄では倒せないだろう……。

「まあね、僕もこうみえてかつては体育会系でね。ぶっちゃけ言う勉強よりこっちのほうが得意なんだ……君もこっちのほうが頭が楽でいいだろう？ 身体は忙しいかもしれないがなあ……」

「……ああ、上等だ！」

……仕方ねえ、出来れば滅茶苦茶疲れるからやりたくなかったけど。久々にアレ、やってみるか。

さっさと戦いを終わらせる為に——！

「それじゃあそろそろ行くけど、死なないでね」

岡本が駆け出し、俺との間合いを詰めようと走って来た。流石に早いな……距離も近いしこのままだと殴られる。

……だが、俺だって何もしないわけじゃないぜ。

左手で右腕を押さえつつ、俺は右腕全体にこれでもかという程に力を入れる。

筋肉のおかげで普通の状態よりも明らかに腕が太くなり、さらには血管まで浮かび上がる。

「死ねええええええええええつ！」

岡本が素早く右ストレートを放ってくる。

マトモに喰らえば普通は失神、防いでも衝撃で後退りしてしまうレベルであろう。

そんな高威力な右拳を受ければ、防御をしたとしてもただでは済まされないハズ。

……だが、俺は岡本の全力全開パンチをパシンツ！と、なんて事のない右手だけで受け止めたのだ。

かなりの威力かつ衝撃だったハズだが、俺はその場から微動だにしない。

右腕の力だけでどうにか拳を受け止めたのだ。

これには、流石の岡本の驚きを隠せない様子だ。

「あ、ば……馬鹿な……っ」

「俺を……普通の人間と一緒にだと思ふなよ！」

言いながら右拳を握り締め、瞬間。  
ゴガン！という壮絶な激突音。

大理石をも砕くかもしれない勢いの右ストレートが、岡本の眉間にクリーンヒットしたのである。

あまりの衝撃に岡本の身体が吹き飛び、何メートルも芝生の上を転がった。

転がり、何度も跳ね上がってようやく動きを止めた岡本。

その時既に岡本は気を失っていた。

「……ふうっ」

終わった……予定通り、アッサリ戦いが終わったぜ。

その代わり右腕が痛いけどな。まあ、1分もしないうちにこの痛みは消えるであろう。

その1分が泣きそうなほど痛いもんだから……普段は100%の力を使わないんだよなあ。

つまりどういう事かと言うと、さっきの一撃は普通の人間には中々出せない一撃なのだ。

俺は身体が頑丈であり傷の回復も早い。

生まれつきこういう体質なもんだから、脳もそれを記憶しちゃっているらしい。

んで、続いて別な話に移るけど、人間は通常100%の力を使えないらしいんだ。

なんでも肉体が耐えられないので、脳が勝手に力をセーブしているらしい。

で、俺がさっきも言ったように、脳が身体が大丈夫だって記憶しているんだ。

だから——自分の意志で瞬間的に100%の力を出す事が出来るのである。

「な〜んか、ゾンビにでもなった気分だよなあ」

俺、一応生きているのにゾンビで魔装少女な気分っす。

まあ、俺は生きているから痛みも感じるし、ぶっちゃけ100%の力を使うと身体は壊れる。

その損傷した身体が1分程度で回復するだけだ。

100%の力を使うと身体は痛いし、オマケに滅茶苦茶疲れるし…。

だから、普段の喧嘩では極力使わないようにしているんだ。

もし力を使っても倒せなかったとしたら、しばらく行動不能でフルボッコにされちゃうしな。

…さてと、無駄な事を考えていないでそろそろ先に進もう。

この立派な日本屋敷に——青山さんはいるんだ。

確か今は夕食の時間だって岡本が言っていたよな……。

だったらとりあえず中に侵入し、お食事処でも探してみよう。

そこには——青山さんも青山さんの両親も……一家全員揃っているハズだから。

「よし！ 痛みも消えたし、そろそろ突撃再開だな！」

青山さん、必ず青山さんを不自由な世界から解き放ってやる。

だから待っていてくれ、今行くから——！

## 第82話、突撃ッ！青山家！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「今回は報告だぜ。なんと……つい最近コラボをした『Freedom／Story』のほうで、この『魔法少女に会っちゃった場合』とのコラボをしてくれました！」

暮葉「もきゅ！ 拙者も出演してるのですよ！」

圭介「kuxuさんありがとうございます！」

伊吹「地味に圭介が他作品進出してるわね……」

圭介「伊吹、お前も出演していたぞ？」

伊吹「う、うそっ！？ ……い、一応感謝はしておくわ……っ」

大吾「……ツンデレ乙」

重原「ツツパリじゃなくてツンデレだったねえ」

圭介「そうだな、珍しくツツパリじゃなか——」

伊吹「ツツパリ言うなばか圭介っ！」



!?

system configuration 1960s

### 第83話、全てを賭けた対決

ちよつと悪い事しちゃったなあ。

青山家に入るには当然鍵を開ける必要があるのだが、その鍵を俺が持っているハズがない。

だったらどうやって屋内に侵入したか……。

倒れている岡本が鍵を持っていたんだ。

だから俺は岡本から鍵を奪い、正面玄関から堂々と屋内へ侵入したのである。

普通コソ泥ってもっとマイナーな所から出入りするじゃん。

だから、俺はその裏をかいて真正面から侵入したのである。

それにしても広い屋敷だ……どこがお食事処だかさッパリわかんねえな。

と、思っていたその時。

俺の視界に思わぬものが飛び込んできた。

なんと【お食事処】と書いてある部屋が……わかりやすいな、しっかり書いてあるじゃないか。

「……よしっ！」

折角青山家の庭で腕痛めてまで執事ぶっ倒したんだ。

もう後戻りはできねえ……このまま突撃して青山さんに会ってやる。

そして——青山さんの転校を阻止してみせる！

俺は扉に手をかけ、勢いよくサーッと襖を開けてやった。

「えっ？　ちよ、なんなのアイツ!？」

「んっ？　な、なんだね君は？」

「まあ！ あ、あの男は先程の……！？」

「……せ、せん……ぱい？」

襖を開けた瞬間に視界に入ったものはテーブルに並ぶ、多分俺なんかじゃ一生食べる事がではないであろう、それほど豪華な食べ物の数々。

高級そうなスーツに身を包んだ眼鏡の中年男性と、青山さんの母親である和服の中年女性。

青山さんの姉なのだろうか、でも青山さんよりは元気そうな二十歳くらいのお姉さん。

そして、いつもと違って和服姿の青山さん。

この四人がテーブルを囲い、立派なご飯を食べていたのである。

「まあ何ザマスの！？ 不法侵入だなんて……やっぱり初芝の生徒は猿並ザマスね！」

「まあ母さんや。彼もそれなりの覚悟で来たんだろう？ ここは私に任せなさい」

「あ、あなた。でも……」

「私に任せなさい」

す、すげえ迫力だ親父さん……。

映画に出てくる極道の組長以上に恐ろしいかもしれぬ。

そんな恐ろしき親父さんがゆつとりと俺へ歩み寄って来た。

……怖え、青山さんも心配そうな表情で俺達を見つめている。

「君は誰だね？　千早が先輩と呟いていたから……学校の先輩か何かかね？」

「それで合ってます。俺は青山さんの先輩です」

「ふん、それで君は一体何をしに不法侵入などと犯罪じみた事をしたのだね？」

「青山さんの転校をなしにしてもらう為に……話をしにきました」

両足に力を入れ、ついでに両方の拳もぎゅっと握りしめる。

そうでもしないと恐怖でバランスを崩してしまいそうだからだ。

圧倒的な威圧感……そこのおばさんやさつき戦った岡本とは比べ物にならない。

多分本物だぞ……このオッサンは……っ！

「普通、人間はこういう局面で遠回しな事を長々と言うもんだ。だが君は違うみたいだ、中々素直でいいではないか……だが、千早の転校をなしにする事は絶対に出来ないね」

「どうしてですか？」

言いながら、威圧的に親父さんを睨んで見せる。

相手の方がより威圧的な雰囲気なので、俺はそれを返すように睨みつけた。

「先日、うちの執事が君や千早が通っていた学校の生徒さんに殴られたって話、君は聞いたかな？」

「はい。そちらの執事さんと喧嘩をしたのは俺のクラスメイトなん

で」

「なら話は早いだろう。そんな……危なっかしい不良がいる学校に、大事な大事な娘を居させておけるかい？」

予想通りの展開と予想通りの理由だ。

というか、青山さんから聞いた通りである。

この馬鹿親はそんな程度の事で青山さんの自由を奪ったってか。

「……喧嘩の理由、貴方は知ってるんですか」

「知ってるも何も、うちの岡本は一方的に殴られたと話しているが」

「その岡本さんって人の言葉が、本当に事実だと思ったんですか？」

「少なくとも、不良少年の言葉よりは信用できるんじゃないかな」

まあ確かに、執事と不良じゃ執事の言葉のほうが信用はできる。

……でも、これだけはハッキリと言える。

「岡本さんと殴り合ったヤツは多分、黒木と赤佐っていうヤツですけど……ハッキリ言って二人は正直者です。黒木は嘘を付くのが苦手で赤佐も馬鹿正直なヤツです。俺は直接話を聞いたのですが、なんでも岡本さんが二人を挑発して怒らせたって話らしいですよ」

「ふーん。君はよっぽどクラスメイトを信用しているようだね」

「個人的にあんまり好きってわけじゃないですけど、それでもアイツらは嘘をつくような奴らじゃありません」

「そうか……中々信頼を置いているな。だが、私らも岡本に信頼を置いている。岡本が嘘をつくとは思えない……残念ながら君と同じで私は相手の話が信用できない」

ちくしょう、やっぱりその事を言ってきやがったか。

まあ予想通りだったよ。絶対こういう事を言うとは思っていたよ。

そりゃあ自分の家の執事だし、疑いたくない気持ちや言葉を信じた  
い気持はわかるよ。

俺だって友達の事は信じている。いや、黒木は友達じゃないけどそれでも信じている。

「……じゃあその信じている人がもし、本当に最初に挑発をしていたとしたら？」

「君の方こそ、二人がうちの岡本を一方的に暴行していたとしたら？」

「……………」

「……………」

俺達はしばらく睨み合う、きっとゲームなら俺達の間で火花が散っているだろう。

「まあとにかく、岡本が殴られた事は事実だ。そんな危ない生徒がいる所に千早を通わせられない。安全かつ高レベルな女子校への転校は決まった事だ。今更やめますだなんて言えるわけがないだろう？」

俺はその言葉に思わず口籠る。

何も言い返す言葉がなくなったからではない。

ただ……この馬鹿げたオッサンに対する怒りが、心の底から段々込み上げてきた。

「……それだけか？」

「何？」

「たったそれだけで、青山さんから自由を奪おうとしてんのかよ」

「っ！？ ……ほう、いきなり強気になったではないか？」

オッサンは表情を崩さない。

俺だけが感情的になっていた。

今回の相手は古宇坂一の名家、青山家の現当主である青山流という男。

そんな相手にさえ、俺は荒々しい言葉を放っているのだ。

端からみれば俺はどこまでも子供っぽく、みっともなく恥ずかしいヤツに見えるだろう。

それでも——俺はあのオッサンに言ってやりたい事があるんだ。

「確かに殴るっていい事だとは思えねえよ。黒木や赤佐だって元々ヤンキーでよく喧嘩もしていた。でも、たったそれだけの事じゃねえか！」

「それだけ？ どういう事だね？」

「結局青山さんを転校させたい理由って、てめえが安心したいからなんじゃねえのか？」

「私も安心すれば千早も安心する」

「ふざけんじゃねえよ！ 親と子供は一心同体みたいな事いいやがって、子供は親の操り人形じゃねえんだよ！ 親だからって勝手な理由つけて子供の人生変えようとしてんじゃねえよ！」

そうだよ。青山さんが転校する理由なんて簡単な事だったんじゃないか。

この親たちは青山さんが心配だ。子供が心配なのはどんな親だって同じハズだ。

でも、この親の場合は心配が行き過ぎた。

だから子供を守って……自分が安心する為だけに大切な子供の自由を奪おうとしている。

娘を大切に思い過ぎた為に奪われる自由。ちくしょう……やっぱり馬鹿じゃねえか。

「娘を心配して当然だろう。娘の為を思って行動するのが親の務めだ」

「だったら、娘を信頼して見守ってやるのも親の務めじゃねえのかよ」

「何を言っている？ もちろん信頼して——」

「じゃあこのまま青山さんが初芝にいたら、青山さんが暴力の被害にでも遭うと思ってるのか？ 大体てめえら初芝には黒木や赤佐みたいなのしかいねえと思ってるのかもしれねえけど、それは間違いだぞ！ アンタ知ってんだろ！ 初芝が市内でも高レベルの学校だって事を！ そんな所に何の理由もなく、見境なしに人を殴りつけるようなヤツばかりが通えると思ってるのか！？」



「君の事ではないのか？」

……そうかもしれない。

伊吹を助ける為とは言え、永渕を殴りつけた事がある。

暮葉を助ける為とは言え、早川だって思いっきりぶん殴った事がある。

端から見れば俺はただの暴力魔だ。こんな人間のクズが正しいわけがねえ。

……だけど！

「確かに俺も人様の事は言えねえかもしれない。でも、何の理由もなく暴力沙汰を起こすほど、自分の都合で誰かの自由を奪うほど落ちぶれたつもりはねえよ！」

「けど、そういうヤツがいるのも確かではないのか？」

「確かにそういうヤツだって全くいないとは限らない。でも、初芝<sup>あそこ</sup>は青山さんの居場所なんだよ！ 大切な友達がいて、一生懸命打ち込める部活があって……そんな、アンタが想像しているような地獄のような場所なんかじゃねえ！ 青山さんが転校を嫌がるくらい素晴らしい居場所なんだよ！」

その叫びを聞いた瞬間、オッサンは目を見開き。

「千早が嫌がる？ どういう事だ？ 千早は確かに転校には賛成――

――」

そんな事を言いだしたのだ。

きつと、青山さんは親の前では転校に賛成していたのだろう。

というか、嫌でも賛成しないと説教されていたのかもしれない。  
青山家の自慢の娘として失格だと思ったのかもしれない。  
だから——親の前では本当の気持ちを言う事ができなかった。  
……でも今は、本当の気持ちを言う絶好のチャンス。

「青山さん。本音を言ってもいいよ」

だから俺は、ここで青山さんに話を振った。

青山さんに本音を言ってもらう為に——

「せ、先輩……でもっ」

「大丈夫だよ。正直に言う事は何も悪くないよ」

そうは言ってみるものの、彼女にはまだ勇気がないのだろう。  
俯いて黙りこんでしまった。しかも、そんな彼女に追い打ちをかけるように。

「千早さん！ あんな男に耳を貸しちゃダメザマスよ！」

「……………」

「千早さん！ 千早さんは嘘つきじゃないザマスよね！？ 千早さんは心から転校をしたいって——」

「……………」

その時、青山さんが何かをつぶやいた。  
小声過ぎて誰も聞きとれなかったが、確かに何かを呟いたのである。

「千早さん、今なんて……?」

「わたし……転校なんかしたくない……」

「えっ?」

「転校なんか……したくないですっ。お友達や先輩と別れるのなんて嫌です……っ! それに……先輩の言う通り、わたしは初芝あそこが大好きです……っ!」

青山さん……よかった、ついに青山さんが本音を叫んでくれた。

両親にとっては意外すぎる言葉に、オッサンもオバサンも驚愕の様子だ。

特にオバサンは半ばヒステリック状態となり、「千早さん! 嘘よ、嘘と言って!」と叫んでいた。

一方の親父さんは冷静に千早を見つめ、そして。

「ほ、本当かね、千早?」

「……はいっ。今まで嘘をついていて申し訳ございません……っ」

「だ、だけど千早。あそこにいたら千早が何らかの事件の被害に――」

「……大丈夫ですっ、初芝あそこにそんな人はいません……っ!」

そう、少し涙目になりながら必死に訴える青山さん。

大切にしている実の娘に、そう訴えられたオッサンの心は動くに違いない。

いや、もう心は動いていた――

「千早……っ、そんなに、そんなに初芝あそこがいいのか？」

「はい……お兄様と努力して、ようやくお父様とお母様から登校許可を頂いた初芝高校……わたしは、初芝あそこが気に入りました。通いたいから入ったのです……ですから、今更転校なんてしたくありません……っ！」

その言葉に、しばらく黙りこむオッサンとオバサン。  
広いお食事処を沈黙が包んだ。

……そんな沈黙を最初に突き破ったのは――

「流、千明さん。お二人の負けです」

「お、お袋？」

「お義母様っ！」

「お婆様……っ！」

なんと、突然現れた老婆が沈黙を突き破ったのだ。

しかも……あ、青山さんのお婆さんだって？

それじゃあ青山さんが以前言っていた、俺が偶然助けたお婆さんって……。

あの優しそうな雰囲気のお婆さんだったのか！？

「二人には残念かもしれませんが、その少年の言う事は全て正しいですよ。かわいい子には旅をさせろとはよく言うじゃありませんか？ 心配だからと言ってそこまで子供の事をやっては駄目ですよ」

しかもその言い草だと、俺の言葉を最初から聞いていたのだろうか？  
まあそれはともかく、ナイスタイミングだぞお婆さん。

老婆とは言え、それでもオッサンやオバサンと比べれば目上の人間である。

そんな簡単に逆らえはしないだろう。青山さんが自分の親にそうだったように……。

「お義母様！　そうは仰いザマスが――」

「千明さん。千明さんはどういう風に生きてきましたか？」

「それはもちろん、己の信じる道を――」

「でしたら千早にも同じように、自分の信じる道を歩ませてはどうです？　それを暖かく見守るのが親の務めではないですか？」

おお、老人が言うとは馬鹿な若者である俺が言うより説得力があるぜ。  
あのヒステリックババアな青山さんの母親が、なんと後退りしているぞ？

しかも、青山さんの親父さんだって黙りこんでいる。

「……次、初芝で何か問題がありましたら、問答無用で転校させるザマス」

「千早。好きにきなさい。そこの君ももし千早を泣かせるようなら……八つ裂きだからね」

あの二人がお婆さんに負けた……ッ！？  
強え、誰よりも長く生きているだけあって最強だな。

ていうかオッサン、八つ裂きって……アンタそれ脅迫じゃねえかよ。  
まあいいや。結果的に勝ったんだから——多分。

「まったく……頑固なお二人です」

「お、お婆様……っ」

「千早、私はこの後もあの二人と話をします。絶対に千早の夢を壊したりはしませんよ」

「……はいっ、ありがとうございます……っ!」

「ふふっ。お礼なら私よりもその少年に、ね?」

言いながら、お婆さんは俺のほうへと視線を向けてきた。

お礼って……果たして俺はお礼を言われるほどの事をしたんだろうか。

結局事態を収束させたのだって、青山さんのお婆さんだし……。ぶっちゃけ俺って喧嘩を売りにきて、ただこの場を滅茶苦茶にしただけなような……。

「先輩……っ」

「お、おう」

「その……ありがとうございます……っ」

和服姿の青山さんはお上品に、でもどこか恥ずかしそうにお辞儀をしてきたのだ。

……そうだ、折角両親撃退に成功したんだ。

青山さんとお話をしよう。そしてやるべき事をやってしまおう。  
このまま終わらすわけにはいけない、ちゃんと返事をしないと失礼だ――

「いや、俺は大したことはしてないよ。それより青山さん、ちょっとお話があるんだけど……いいかな？」

「せ、先輩……っ？ ……はい、わたしも……先輩とお話したいです」

「うん。じゃあ、ちょっと庭にでも出てみる？」

「ふふ、先輩。まるで自分の家のように言ってますね」

久々に笑ってくれた青山さん。

ああ、やっぱり可愛いなあ。

どんな女の子にも言える事だけど、青山さんはやっぱり笑顔が一番だ。

「はははっ。それじゃあ行くか」

「……はいっ！」

こうして、俺と青山さんは青山家の広い庭へと行くことになった。

「そういえば、あの少年どこかで会ったような……何にしても、いい人ですね……ふふっ」

お食事処から立ち去ろうとする中、背後からお婆さんの声が聞こえたような気がした。

……まあ、多分気のせいだろう。

さて、いよいよだな……返事をするぞ。

青山さんが俺にしてくれた告白に対して――



### 第83話、全てを賭けた対決（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

伊吹「ぶっちゃけ圭介、ゴリ押しよね」

圭介「い、伊吹さん？　どういう意味っすか？」

伊吹「だって今回、テキトーにそれっぽい言葉を並べて叫んでるだけじゃない？　だから圭介は読者に上○さんって呼ばれるのよ？」

圭介「なんで俺が上○さん！？　確かに禁○目録全巻揃えたけどさ……」

伊吹「あと、ゴリ押しばかりしていると読者に嫌われるわよ？」

圭介「か、上○さんは割と人気なほうじゃないか！？」

伊吹「でも圭介、あんたに対する苦情が……」

・作者の友人N氏より、藤島圭介について一言。

「ぶっちゃけ圭介ってウザくね？　説教臭いしいつも都合のいい展開ばっかじゃん？」

圭介「ウソダンドコドーン！」

大吾「それ、ネタわかる人いるのか？」

## 第84話、その日の夜

日も暮れてきた頃である。

俺は青山さんを青山家の庭へと呼び出した。

綺麗な芝生に鯉でも泳いでいそうな池、そして程良く手入れされた樹林。

なんだか心が現れる庭だなあ。

日も暮れ始めているが、それがまた妙に合う感じである。

「……………」

青山さんは頬を赤くし、視線だけを俺から逸らしていた。

多分、青山さんもこれからどんな話をするのかわかっているのだろう。

「青山さん。まずは……これ、返すな」

「えっ？　こ、これは……？」

告白の返事かと思いきや、最初に俺がやったのはCD返却である。

完全なる不意打ちに青山さんは驚愕の様子だ。

驚いた様子でCDと俺を交互に確認する。

その反応がまた可愛い事この上なしたが、あんまりやらせると可哀想なのでそろそろ説明しよう。

「この前借りていたCDだよ。折角両親との騒動も終わったことだし、ずっと借りっぱなしっていうのも悪いからな」

「あ、ありがとうございます……っ」

「借りていたのは俺だし、お礼言うのは俺のほうだよ」

そう言うとき青山さんは俺からCDを受け取り、なんと胸元へとしま  
い込んだのだ。

ちょ、地味に胸が見えたような。

まあ、残念ながらブラはしていたのだが……しかしええ乳やないか！  
……げふんげふん！いけない、そんなしょうもない事を考えている  
場合じゃなかった。

それよりCDを返したんだ。次は一番の目的でありとても重要な事  
を――

「それで青山さん。青山さんは昨日俺に……なんつか、告白して  
くれたよな？」

「……えっ？ は、はい……っ！ そういえばまだお返事を聞いて  
ませんでした……っ」

「うん。だから今返事をしようと思ったんだ」

「……っ！？ は、はいっ！」

青山さん普段とイメージが全然違うな。

今の青山さんは輝いている。

なんだか目がキラキラしてる気もしないでもないぞ。

なんか、こんな表情をされるとすごく返事し辛いなあ。

俺は青山さんに対して恋愛感情を持っていないし、中途半端な気持ちで付き合うのは相手にとっても失礼な事だと思う。だからごめん  
と言おうと思ったんだけど……。

すみません。青山さんの必死すぎる表情のせいか、とても言いづらいです……。

「……………」

「……………」

俺が迷っている間も、青山さんは真剣な表情で俺の事をじっと見ていた。

待っているんだろうなあ……それなのに俺は、答えは決まっているのに言えずにいる。

全く最低な野郎だ。ここで言わないとダメだっていうのに……。

「……………」

ん、どうしたんだろうか。

青山さんの表情が次第に暗くなってゆく。

まるで究極に落ち込むように……ちょ、待て、もしかして俺のせい？

「先輩……わたしのこと、好きじゃないんですね……」

「えっ？」

「顔……見ていたらわかつちやいました。だって先輩……困ってましたから」

「……ごめん」

見抜かれてしまったか、青山さんかなり落ち込んでいるなあ。なんだか本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

俺はただ青山さんに謝る事しかできなかった……。

「そ、そんなっ！ 謝らないでくださいよ……っ、わたしも振られると思ってましたから……っ」

「えっ？」

「……ダメ元で告白してみたんです。そしたらやっぱりダメで……  
……っ」

あわわわわわ！ど、どないしよう！

青山さんが泣きそうになってしまった。

そりゃあ俺の気持ちに気付いて悲しくなるのはわかるけど、さっきあんな騒動があったばかりだ。

それに青山さんは女の子だし、というか誰であっても同じだけど流石に泣かれると……。

どうしよう。こういう時ってこういう風に慰めればいいんだ。

下手に慰めたら相手にまだ気があるんじゃないかって、そう思われる可能性があるからやめとけっていう話も聞いた事はあるが、だからと言って泣かれるのは嫌だしなあ……。

こ、こういう時って経験ある人はどうするんだろう？

「……でも、わたしは先輩を諦めたくありません……っ！」

「えっ？」

「先輩の事を嫌いになるなんて無理です……っ、ですから……わたしは絶対に先輩を諦めません」

……あ、あれ？

なんだろうか、このラノベによくありがちな展開は。

好きでもないのに恋人になっちゃったという事態回避できたが、もっとややこしい方向に話が進んでいるような気がするの、果たして俺だけであろうか？

「青山さん……？」

「……先輩、覚悟しててくださいね。絶対に……先輩を恋に落として見せますから……っ！」

突然の宣言。

どうやら青山さんは意地でも俺を攻略したいらしく、楽しそうに微笑みながらそう宣言した。

普通笑顔でこんな宣言をする人がいるであろうか？

いや……俺の目の前にたった一人だけ存在していた。

青山さんは宣言の後にくると背を向け、その状態で後ろを向いて俺を微笑みながら見ていた。

セミロングの緑髪が風に靡き、月光が静かに彼女を照らしていた。彼女の全てがなんとも神秘的かつ清麗な雰囲気醸し出している。

……ちくしょう可愛い。こんなに可愛いのにどうして好きにならないんだよ俺？

やっぱり好きな人がいるんじゃない——いや、それを考えるのはやめよう。

「……先輩っ」

「お、おう」

「また会いましょうね……それではこれで失礼します……っ」

「ああ……それじゃあ俺もそろそろ帰るな」

「はいっ、お気をつけて」

完全に向こうを向き、青山さんは青山家の屋内へと戻った。

結局、青山さん告白の件はナアナアで終わったような気がした。

いや、まだ正確には終わりでないかもしれない。

何故なら彼女はまだ俺を諦めていないからである――

「……………っ」

ちくしょう……俺ってば、ホントに何やってるんだろうな。

……そろそろ帰ろう、きつと暮葉や葵が心配しているハズだ。

「ただいまー」

数十分後、青山家を出た俺はようやく自宅に帰ってこれた。

扉を開けてただいまを言うと、そこからは予想通りの展開だ。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん……んっ  
！」

爆竹のような声を出して突撃を仕掛けてくる女の子。

コイツにはきつと悩みなんてないんだなあ、彼女の表情を見て思わずそう思ってしまった。

そう思ってしまうほど、彼女は明るく天真爛漫としているのである。  
藤島葵。



……改めて紹介する必要のない、俺のmyシスターである。

今日も葵は全速力で俺へと突っ込んでくる……だが、その手に二度も引っ掛かる馬鹿はいないぜ。

俺は直前で葵の全力タックルを避けてみせた。

「うにやぎやああああっ！」

避けても止まる事を知らない葵は、そのまま玄関のドアへと激突してしまった。

……ふう。よかったあ……うちの暴走特急葵が衝突してもドアは壊れなかったぞ。

あ、もちろん葵の心配もしているぞ。葵にも怪我がなくてよかったぜ。

「ひどいよお兄ちゃん！ 避けるなんてひどいよ！」

「アホかお前っ！ 普通の人なら避けねえと死ぬわ！」

「大丈夫、葵はちゃんとシャワーは浴びてきたから☆」

「何の準備だよ!？」

「えっ？ お兄ちゃんとエッチする準備だよ？」

「アホかっ！ ンな事よりゲームか勉強でもしていなさい！」

「そ、そんなっ!？ 兄は童貞を妹で捨てなければいけないって、

刑法265条に――」

「話聞けェッ！ つーかそんな法律はねーよっ！」

葵め、勝手に刑法265条なんぞ作りやがって。

刑法は確か264条までだったような気がするぞ。

刑法265条なんて思いっきり架空の法律じゃねえか。

しかも近親相姦を容認する法律って、一体どんなふざけた法律だよっ！

二次元の妹ならまあいいかもしれないが、現実妹リアルいもうとがいる俺としてはいい迷惑だ！

「あ、けーすけ様っ！」

「えっ？ おう暮葉かつ」

「もきゅ、部活サボってどこに行っていたのですか？」

どうしよう。青山家に突撃をかけましただなんて流石に言えないよな。

……ようし仕方ない。ここはおバカな暮葉が簡単に信じるような嘘をつこう。

「ば、バイトの面接だ」

「もきゅ、バイトですか？」

「お兄ちゃんバイトするの！？」

「まあ面接に受かったらの話な。相当厳しい所だし人数も多かったから受かるかわからねえぞ？」

「面接なのですかあ。なら仕方ないですね！」

「うん！ バイトをしようとする必死な姿に、葵のお兄ちゃんに対する好感度はさらに上がったよ！」

「そうか、ハハハッ」

誤魔化せた……暮葉が馬鹿なのはわかっていた。

でも葵は成績はいいハズなのに……案外馬鹿だったな。

まあいいや、誤魔化せたんだから結果オーライである。

数日後にバイトの面接は落ちましたって報告すれば完璧であろう。

やれやれ、今日は戦ったり走りまわったり説教したり嘘ついたり、色々大変で疲れたな……。

今日は早めに寝よう。見たいアニメは録画でもういいや。

……こうして、俺の一番長い一日が終わったのである。

## 第84話、その日の夜（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

大吾「ちよつとだけネタバレしよう。次回の主人公は圭介じゃない！」

圭介「な、なんだってーーーーー！？」

大吾「しかも！ そいつはとんでもないヤツだ！」

圭介「だ、誰だよ。つーかなんで俺視点じゃないんだよ」

大吾「さあ？」

圭介「……もしかして、主役交代？」

大吾「さあ？」

圭介「ちくしょう……誰だよ、次回の主人公って。あと俺の立場はどうなっちゃうんだろう？」

※あくまで圭介は主人公です。

## 第85話、新たなる出会い？

昼間の古宇坂は人々で溢れ、それなりに明るい街で治安も非常にいい。

ンじゃあ、夜の古宇坂はどうかってなア。

深夜の古宇坂の路地裏をオレは一人、だるいと思いながら歩き続けた。

歩き続けていたんだ……ただそれだけだったが、やがてオレの周りには。

「ヘッヘッヘッ……」

「この前の借り、たつぷりと返させてもらうぜえ？」

今日もお出ましのクソ野郎共……。

コンクリートに阻まれた狭い直線。おそらくここは廃れた商店街の裏だろう。

そんなクソ狭い所でオレを取り囲むクソ野郎共。

連中はバットや木刀、それどころかギラリと輝くナイフを持っていた。やがった。

ナイフとか、コイツらには銃刀法ってモンが通じねえのかア？

……まア、どうだっていい話だけだなア。

さてと、今日はどう料理してやろうかア……。

「早川ア！ 死ねエエエツ！」

「オオアッ！」

一斉に襲い掛かってきやがったクソ野郎共。

やれやれ……どう料理するつつてもなア、こんなヤツらを相手に本気を出すのも面倒癖え。

いつも通り、暴風の膜でも張り巡らして攻撃を防いでおくか。

「ぐ、あっ！」

「ぎゃはあっ！」

「ぐ、ああっ！」

「……チツ、クソツタレ」

戦闘……って感じすらしなかったな。

オレはただ暴風で薄い膜を作りだし、それを向かってくる相手の逆へ吹きつけさせていただけだ。

だが、暴風に触れただけで連中は吹き飛ばされ、蹲ってそのまま動かなくなってしまった。

まア……痛がっているだけだし、死んじゃあいねえだろうけどなア。はあ、全く面白くねえ……クソも張り合いのねえヤツらだ。

まあ倒した事は倒したし、コイツらから財産を奪っていくとするか。

「チツ、ロクな金も持ってなかった……」

——このオレ早川悠はあの一戦以来、こうして不良から金や食  
い物を奪いながら生きていた。

堕ちたモンだ。まあ元々汚エ仕事ばかりやっていたんだ。

不良から物を奪う以上に凶悪で、悪質で、汚らわしく不名誉な仕事

をなア。

結局、特異点を全て潰せなかったオレは佐井学園を辞めれなかった。というか、未だに特異点を潰している最中という事になっている。けど、その特異点潰しはあの野郎に阻止され、今じゃあオレもやる気を失っちゃった。

オレにはもう戻る場所もねえ。佐井学園を辞めるには佐井学園と真正面から戦うしかなかった。

「つたく、どーやれってんだあ？」

面倒癖エ事してくれやがったぜ、あの野郎。

だから、オレは佐井学園から逃れる正面对決以外の方法を考えた。このまま……特異点潰しをやっているうちゅー事にしておき、テキトーに物でも奪いながら連中に気付かれねえように過ごす。

要するにクソしょぼい盗賊をやるって事だ、オレのような人間のクズには丁度いい生き方だろ。

……けど、何やってんだかなア。

あの野郎はオレのほうが圧倒的に強いのに関わらず、何の躊躇も無しに向かってきた。

そこまでは普通だった。でも、あの野郎にどんな攻撃を仕掛けても倒れなかった。

むしろオレのほうが追い詰められ、いつの間にかオレは工業地帯のアスファルトに転がっていた。

普通ならオレの強さに途中で絶望するハズなのに、最後まであの野郎は向かってきやがって。

あんな馬鹿げた勇氣のあるヤツは今までに見た事ねえ。

あんな野郎だってこの世の中にはいるんだ。オレはあの夜にそんな事を学んだ気がする。

だと言うのにオレは——佐井学園から逃げているだけか。

やれやれ、どこまで堕ちれば気が済むってんだ？  
まあいいけどな。オレはそんな事を考えながら夜の古宇坂を歩いていた。

さてさて、さっさと今日の寢床でも探さねえとな。最近が目立たねエゴミ捨て場の近くで寝ていたから、今日はせめて公園で寝てえな。クソ、身体も臭エし水道水でも浴びたいモンだ。

「……ヘッ、丁度いい公園みつけ」

久々にマトモな所を見た気がするぜ。

確かここは古宇坂でも高級住宅が立ち並ぶ地区。

でっかい日本屋敷見たいなモンも2軒くらいあったかな。

そんな所にある公園は中々の広さであった。

水道もあるしトイレもある、一通りの遊具だって揃っていた。

多分昼間になれば子供やその子供の母親で溢れている事だろう。

ハッ、あんまり長居は出来そうにねエが……一晩過ごすには最適の環境だな。

「さてと、んじゃあそこのベンチで寝るとするか」

公園ってだけに愉快にベンチまでありやがる。

まあ、路上で寝るよか遥かにマシだろう、今まで寝ていた所に比べれば遥かに綺麗な場所である。

って、くだらねえ感想考えてねえでさっさと寝よう。

最近馬鹿共の相手とロクな寢床がねえから寝不足だ、ちよくちよく寝とかねえと身体が持たねえ。

オレは割と綺麗に手入れされているベンチに転がろうとした――

「んにゃあっ！」



刹那、背後から女のものと思われる悲鳴が聞こえた。

ったく……夜遊びしようと思ったけどコケちゃったオチか？

オイオイ勘弁してくれよ。こっちは眠くて今すぐにでも寝たい気分なんだっつーの。

とにかく、夜遊びするつもりだってんならさっさとこの公園から追い出すとするか。

というわけで、オレは後ろを向いて女の姿を確認した。

歳は小柄だけど大体中学生くらいか。女の瞳は綺麗な緑色で、澄んだ水のように明るく淡い青色のツインテールはどこかの外国人の風貌を感じさせる。

まあ、そこまではいいんだが……問題は女の服装である。

頭の赤いリボンにハート、胸元の赤いリボンにもハート、持っているステッキの先端にもハート。そして桃色のフリフリドレスはどこぞの魔法少女を思わせる。

なんなんだコイツ……オレが潰していた特異点にもこんなコスプレをしているヤツはいたが。

「はん、くっだらね……っ」

倒れているクソガキを見てオレはそう吐き捨てた。

まあ、こんなガキなら何かをしなくてもすぐにどっかに消えてくれるだろう。

でもまあ、ちったあ心配してやんのが大人の礼儀ってモンかあ？

「オマエこんな所で何やってんですかあ？ ガキは家に帰ってママの膝の上で寝ている時間だろおが」

「いたた……あれ……っ？ 早川悠？」

「アア？」

なんだコイツ、今紛れもなくオレの名前を呟きやがったぞ。

コイツはオレの事を知ってんのか？

……チッ、くだらねえな。

「早川悠！ やっぱ早川悠だよね！」

「オマエはオレの事を御存知見てえだな。だがお生憎様、オレはオマエなんか知らねえな」

「うん、知らなくて当然だよ。だってミネットは貴方と初対面だから」

「チッ、気味悪いな。初対面が名前を知っているってオカシイじゃねえかよ」

「そんなことないよ？ だって貴方は部隊じゃ有名人だから」

待て、部隊だ？

コイツ一体何者なんだ。まるで今までブツ殺してきた特異点みたいな事を言いやがる。

もしかして、このコスプレはギャグじゃねえってのか。

本物の特異点だって言うのか……にしては、随分とまあオレに対する態度が甘いモンだ。

もし特異点だとしたらオレを恐れるか、或いは大いに恨んでいるハズだろうに。

まあ、部隊って発言しただけでまだ特異点とは限らねえけどな。

それにオレには何の関係もねえ……どうでもいい話じゃねえかよ。

それにしても夜の公園がここまで騒がしいとは思わなかった。

やっぱ他をあたるとしようか。身体とかはクソ臭エが一日くらいは

我慢してやろうじゃねえか。

「そおかい。ンじゃあその有名人とももうお別れだ」

そう少女に告げ、速やかにこの場から立ち去ろうとした……。

「シャアアアアアアアアアアッ！」

刹那、突然濃霧があたりを包み込み、ようやく晴れたかと思いきや……。

オレの目の前には何かデカイバケモノ見てエなのがイヤがった。

「あ——ん——？」

なんだこりゃ？

見た目はタランチュラか何かだな。

だが、どう考えてもタランチュラがこんな大きさまで成長できるとは思えねえ。

4メートルよりデカく見えるって、一体どういう生き物なんだこりゃ？

超能力者や特異点のような魔法使いは散々見てきたが、こんなバケモノは初めてみた気がする。

「しまった、追いつかれちゃったよ……っ！」

追いつかれた？

なに言ってるんだこのクソガキは。

……チッ、仕方ねえなオイ。

「オマエ、このバケモノとどういう関係なんだ？」

「強いて言うならばミネットの敵だよ？」

「ミネットつつーのはオマエの名前か？」

「そうだよ、ミネットの名前はミネット・ローランって言うんだよ」

「そうかい……」

ミネット・ローランねえ……どう考えても日本人の名前じゃねえな。  
何というかフランス人癖エ名前だな。

けど、フランス人がこんなワケの分からねえバケモノと戦うのか？  
部隊とかオレの名前を知っているとバケモノと戦っているとか、  
色々気になる事が多いヤツだな。

面白エ……最近退屈していてつまんねえんだよ。  
暇潰しにコイツと会話でもしてみるか、その為には……。

「ンじゃあオマエの自己紹介が終わった所で、目の前のバケモノを  
殺すとすつかあ」

「えっ？」

ミネットはオレのセリフに驚いたようだ。

おそらくミネットにとって予想外の事をオレは言っただろう。

さてさて……相手は蜘蛛のバケモノときた。どう料理してやろうか  
なあ……？

虫は虫らしく焼くのがいいってかあ？

だったらやる事は簡単だ。大気中の分子運動を抑制・活性化させて  
やればいいんだ。

オレには急激な温度変化で炎とか氷を発生させる事ができる。

今回の場合は発火点まで上昇させてやって……ぎゃは、腹ア抱えて笑いたくなる発火パラダイスだ！

「ぎゃ、は——！」

面白いくらいにアツサリと、タランチュラの化け物が燃え始めた。

「オラァ！ 臭エからさっさと燃え尽きちまえよ！ こっちはテムエを燃やすのにアタマ使ってたからちったあ感謝して天国にでも行きやがれ！」

そう叫びながらタランチュラのバケモノを燃やし続ける。

しかし、不思議な事にバケモノは命が尽きた瞬間、バケモノの死体は虹色に発光し、パキンと割れるような音と共に小さな粉末状の光となり、完全に砕け散って消滅したのである。

オイオイ、バケモノの黒焦げ死体をどう後始末するかまで考えていたってのに、この結果はあまりにも予想外すぎるぞ。つーか現実的に考えてありえねえだろうが。

「なんだこりゃ……どうなってんだ？」

「すごい……っ、やっぱり本物の早川悠だよ」

「さてと、おいオマエ。オレが本物とかどうとか言ってるねえで、どいういう事か説明してもらおうか？」

「ふえっ！？ う、うん！ わかった。もうバレちゃったもんね……今から貴方にわかりやすい説明をするよ！」

どうやら、ミネットのヤツも今の状況を説明する気になったらしい。

一体どんなぶっ飛んだ説明が来るんだか。  
やれやれ、眠いけど我慢して聞いてみつかあ……。。



## 第86話、男の子？女の子？

オレはミネットっていう変な女から、今がどういう状況を説明してもらった事になった。

なっただけいいんだが……このクソガキ、オレをどこへ案内しようってんだ。

遠足に行く小学生みたいなルンルン気分で歩きやがって、そんな楽しい所に行こうってのかあ？

くっだらね……と思いつつオレはミネットの後を歩いていた。

やかて辿りついたのは一件のマンション。

つか表札にミネット・ローランって……オマエの家じゃねえか！しかもここって高級マンションじゃねえか。

もしかしてミネットってのはいいとこ育ちのお嬢様か？

「ただいまーって！　　そういえばミネットは一人暮らしだったっ」

「チッ、オマエは小学生かっての」

「ひどい！　　ミネットはこうみえても14歳なんだよ！」

「14だあ？」

十分ロリじゃねえかよ、大事な所もぺったんこだし。

まあ、どうでもいい話だしあえて突っ込まない事にしよう。

噛みつかれるのを阻止すんのに、暴風の膜を張り巡らせんのも面倒だからな。

「その顔、信じてないね？」



「オマエがあまりにもガキくさすぎんだよ」

「ひどい！ ミネットはちゃんとこの世界で言う中学生だよ！？」

「証拠あんのか？」

「学生証が家の中にあるもん」

「はン——そおかい……」

「自分から聞いた癖に興味がなさそうだね？」

「黙ってるクソガキ。つーかオレを家まで連れて来てどうするつもりなんだ？」

もしかして、いくらオレでも他人の家では戦いづらいから、そこでオレを不意打ちしてブツ殺そうとしてたりするんじゃないやねえだろうな。……ぎやはっ、そういうのは無駄だと思うけどな。

オレは他人の家だろうが何処であろ<sup>チカラ</sup>うが、この超能力を使う事に何の躊躇もねえ。

もしミネットがオレを殺すつもりなら、その時はマンションそのものを破壊してでも身を守る。

「どうするって、ミネットは貴方にお風呂に入ってもらいたいんだよ」

「あン、風呂だア？」

「こんなことを言うのは失礼ってわかってるけど、正直に言うと倒れそうなくらい臭いかも」

「チッ、今までゴミステーションの近くで寝てたんだから仕方ねえだろ！」

「貴方も臭いのは嫌だよね？　だからミネットの家のお風呂を貸すよ！」

なんだよコイツ、親切のつもりで言ってるんだろうか。

その風呂ってのがトラップだとしたら……。

まあいい、このオレが臭エのは自分自身でもわかっている事だ。

水で洗い流したいから公園で寝ようとしていたくらいだし、風呂を貸してくれるってんならとりあえずは借りておこうか。そう言えば風呂なんて夏に入ってから入ってねえな……。

「……チッ、案内しろ」

「んにゃ！　ご注文承ります！」

「オマエはどこぞの怪しい店員かつーの……」

まあ正直どうでもいい。

それより風呂だ風呂、温かい湯ってのが本当に久々だからゆっくり浸かるとしようか。

……あとこのクソカギ。覗いてきやがったらぶち殺すからな。

——んで、オレはミネットから風呂を借りて現在身体を洗っている所だ。

オレの東京にある家にも一応風呂があるが、そことは比べ物にならない広さだ。

全く、オレの家は一軒家でここはマンションだってのに、普通風呂

の大きさは逆じゃねえのかよ。

いくらオレの家が築50年近いボロ屋だからと言って、あまりにも差があり過ぎじゃねえか。

それにしても……あのタランチュラの化け物、ミネットが吠いていた部隊がなんとか……結局アレはどういう事だったんだろうか。それを風呂上りに説明してくれるらしいが……。

チッ、さっさと洗って浸かるだけ浸かってあがるとしよう――

「おっじゃまっしまーす！ ……ってミネットいきなり乱入してみたよ！」

「あー——う、オアっ!？」

このクソガキどういうつもりだ？

突然やかましい声をあげやがったと思いきや、バスタオル一枚で風呂場に侵入してきやがった。

オイオイ、なんだよその可愛らしいピンク色のバスタオル。

つかミネットのヤツ、バスタオル一枚って誘ってやがんのかあ？

……って、突っ込み所ソコじゃねえだろ。

「オマエ、どお言う神経してやがるんだ？」

「貴方は結構焦っていたから、だからお背中でも流しながら説明しようかなって思ったんだよ」

「ほおそうかよ……ンじゃあなんでオマエは全裸なんだ！」

「服が濡れるのが嫌だったし、ミネットもお風呂に入りたいんだよ。大丈夫、ミネットはこれでもバスタオルは完備だしこの下には水着も来ているよ！」

「そういう問題じゃネエだろうっ！　よく知りもしねえヤツに裸晒してんじゃねえぞ」

「……っ！　ミネットだってすごく恥ずかしいんだよ……？」

「急に乙女になってんじゃネエ！　能力使ってオマエの所だけ氷点下にするぞコラァ！」

「まあまあ肩に力を入れないで。ミネットだってその……っ、他人にここまで見せるのは初めてなんだからね？」

「あっそ……チッ」

俺は舌を打ちながら前を向いた。前を向けばミネットから視線を逸らす事ができるからである。

ったく、予想外のイベントが発生しやがったぜ。

誰だア混浴なんてふざけたイベント考えやがったヤツは。

って風呂場に突撃してきやがったのはミネットか。

まあ、ホントにそこまで見せるのはオレがは初めてみたいだし、特別に大目に見てやるとしよう。

「それじゃあ……洗うね？」

「チッ、勝手にしやがれ……」

自分から入って来た癖に躊躇ってんじゃねえぞクソガキ。

結局コイツが何をしたいんだか、オレにはサッパリわからねえ。

ミネットはオレの背中をゴシゴシと、濡れ濡れ泡泡なタオルで洗い始めた。

コイツは手先が器用なんだろうか、中々気持ちいいじゃねえか。

「すごい……細くて綺麗な身体だね」

「褒めてるつもりかナメてんのか、どっちなんだア？」

「ミネツト的には褒めてる方向だと思うよ？ 色白で肌も綺麗で細くて……貴方ってまるで女の子みたいだね」

「先天性色素欠乏症<sup>アルビノ</sup>って知ってるか？ オレはともそれらしくてなア、メラニンだかってヤツの生合成に係わる遺伝情報の欠損のせいで、先天的にメラニンが欠乏する一種の病気みてえなモンだ。肌が極端に白いのはそのせいじゃねえのか？」

「身体が細い理由は？」

「オレは生まれつき超能力つてのがあったからな。その気になれば風の力を利用して高速移動とか、空さえも飛べるから運動の必要がねえんだよ。飯だってそんなに食わねえからな、必要最低限の筋肉してついてねえんだよ」

そのおかげで身体能力は正直最悪で、超能力ナシでの戦闘が危険なレベルになっちゃったがな。

ただでさえアルビノは弱い種だつてのに、そのせいか素じゃ握力も20ちょっとしかねえよ……。

まあ別に後悔はしていない。超能力<sup>チカラ</sup>さえあれば運動の必要もねえ。肉弾戦をする時だって、能力を使えば普通の人間よりは素早く動ける。

それが何故か、あの時に戦ったあの野郎には通用しなかったけどなア。

「もしかして髪の色もアルビノのせい？」

「まあな、天然の白髪ってヤツだ。幸いアルビノは弱視なハズなのに、そこだけは普通の人間と同じで視力は1・2以上はあるけどなあ」

「そうなんだ……でも貴方とっても綺麗だよ！ 貴方の性別がよくわからないくらい綺麗だよ！」

「ああそうかい……」

「つで、貴方の性別って結局何？ 男の子？ それともやっぱり女の子？」

「やっぱりって、コイツオレの事を女だと思ってんのか？」

「確かに中性的だとはよく言われたが、最初から女だって言いやがるヤツはコイツが初めてだ。」

「オマエ、オレをなんだと思ってるんだ？」

「うーん。男の子かなーって思ったけど、やっぱり女の子かな？」

「どういう基準で判断してやがんだテメエは？」

「だって貴方、男らしい感じがしないくらい綺麗なんだもん！ それで、貴方の性別はどっちなのかな？」

「チッ、愉快に楽しそうに一方的に喋りやがって。このアマ遊んでやがるな。」

「つかミネットのヤツ、事情を説明するって話はどうなったんだ？  
いつまでオレの身体的特徴の話をしてるつもりなんだクソが。」

「おいミネット、くだらねえ話してねえでさっさと説明しろ」

「く、くだらなくなんかないよ！ 一応性別を確認しておかないと  
これからの扱いが――」

「オマエは男女平等って言葉を知らねえのか？ どーでもいいから、  
さっさと今がどういう状況か説明しろってんだ。オマエの事もあの  
蜘蛛もバケモノの事も全部話せ」

「ぶーっ……わかったよ、今からちゃんとわかりやすい説明をする  
よっ」

「まったく、遊び好きで気分次第な感じで。」

「どこまでガキ臭いヤツなんだミネットは。」

「まあ、ようやく質問攻めから解放された事だ。」

「さあて……ゆっくりと事情を聞かせてもらおうとするか。」

## 第86話、男の子？女の子？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「そういえばさ、早川って作中で男とか女とか言われた事ないよね」

暮葉「もきゅ！ 確かにそうなのです！」

圭介「おう、それで思ったんだ……結局アイツの性別って何なんだ？」

暮葉「さあ？ 拙者は男性だと思うのですが……」

圭介「そうか？ 案外女子の制服とかスク水とか似合いそうな感じだぞ？」

暮葉「エエッ！？ で、でも髪も地味に肩にかかるくらい長いですし、そういえば体格も中性的ですし……まさか！？」

圭介「うん、わからん。ここは第3の性別が秀吉だから……第4の性別悠ちゃんだな！」

暮葉「もきゅ！ まさかのそっち方面ですか！？」

早川「オマエら死にてェか！？ アア！！」



※正直早川の性別は決めてないので、読者様のご想像にお任せしますorz

そして人気投票、キャラを増やしましたのでよろしくお願いします！

## 第87話、ミネットの事情、辛かった悠？

「アルファ隊って知ってる？」

「あー——なんだそりゃ？」

背中を洗ってもらいながらの説明だが、クソツタレが。

何がわかれやすい説明だよこのクソガキ。

さっきから知らねえ単語のオンパレードじゃねえか。

オレは複雑な超能力を扱うだけに頭脳には自信があるのだが、いくらオレの頭脳でも意味不明な単語ばかり並べられると理解に苦しむっつーの。

「こことは違う世界、レムリアってところのロジーナって国にある特殊部隊だよ」

「はいはい、素晴らしい設定の小説でも書こうってか？」

「小説じゃないよ！ 事実だよ一応！ それに貴方だってある程度は知ってるハズなんだよ？」

「はー——ある程度ねえ……ンで、そのアルファ隊がどうしたってんだ？」

とりあえず、知らねえ単語ばかりで意味不明でも、オレは頑張って理解しようとしていた。

新たな計算式を覚えるよりは簡単なハズだからな。

「アルファ隊は反政府組織、“サヴィエト亡命政府”の打倒と関係

者拘束の為に結成された、基本的には腕のいい魔法使いの部隊なんだよ」

「魔法使いねえ……」

そういえば、オレがブツ殺しまくっていた特異点のヤツらも、魔法だとかふざけた事を言っただけだったな。おまけにミネットは部隊だとか異世界人だとか言いやがる。

つー事はやっぱりミネットは、オレが潰しまくっていた特異点だったのか？

まあそれを訊くのは後でいい。それよりあの蜘蛛のバケモノについて知ってエ。

「ンじゃあ、あの蜘蛛のバケモノはなんだ？」

「多分魔族かも。サヴィエト亡命政府はどういうわけか、魔族とも何らかの関わりがあるらしいよ」

「オイ……色々言う前にその魔族がなんだか説明しろ」

「すっごく恐ろしいんだよ！ 腕力も魔力も人の上をいくし、今は封印されちゃったとか死んじゃった説があるけど、魔族の頂点には魔王と大魔王が存在していて、かつては勇者や魔法使いが頑張ってたその二人と戦っていたんだよ」

「チッ、ふざけてんのか？ なんだよそのクソみてえな王道ファンタジーな話は？」

「ミネットはこの事を疑問に思っている貴方に疑問だよ。貴方はすごい超能力が使えるのに、ファンタジーなお話は信じられないのか

な？　かな？」

「わかあった、信じときゃあいいんだろ……」

突っ込みまくるのも面倒癖え。

だったらもういっその事、魔族も魔王も大魔王も存在しているという事にしておけ。

ンで、昔は勇者がいたって話も事実だと言う事にしておこう。

こんなクソツタレな話、考えるだけでも面倒癖えっつーんだよ。

あとは、ミネットに聞きたい事は一つだけだな。

この野郎……どうしてオレの存在やオレが超能力を使える事を知っていたんだ？

いくら異世界人の魔法使いだからって、初対面のヤツにそこまで知られてちゃ気味悪いっつーの。

「はい、お背中流し終わったよ♪」

「ああそうかい」

「むう、もっとミネットに感謝して欲しいかも！」

「そうかい、ンじゃあ恩返しにオマエの背中でも洗ってやろうか？」

「え、遠慮しておきます……っ」

急に敬語になりやがって。

ンじゃあどういう風に感謝すりゃあいってんだ？

ったく、女ってのはいつも思うが面倒な生物だ。

そんな事を考えながらオレは浴槽に入り、身体を伸ばしてくつろぎ始めた。

久々に風呂ってのも悪くねえな。しばらく入ってねえだけに妙な有難味を感じる。

「一応忠告しておくけど、ミネットが身体を洗う所を見るのはNGだからね！」

「誰もオマエみてえなガキの入浴シーン、無理やり見せられても見たくねえっつーの」

「貴方ってストレートにひどい事言うよね。でも下手に隠し事をする人よりは信用できるかも」

「ンじゃあどうでもいいじゃねえかよ……」

結局、ストレートに物事言われるのが好きなんだか嫌いなんだか、どっちなんだよこのクソガキは。

まあどっちにしたって、別にオレはミネットの裸なんざ興味はねえし。

オレにはロリコンなんて特殊性癖はねえんだよ。

それよりも、コイツからしか知れねえような知りたい情報が山ほど事があるんだ。

「ふんふんふんふん♪」

ミネットのヤツ、呑気に鼻歌歌いやがら愉快に身体洗いやがって。ふとミネットのほうを見ると、ミネットは既に泡だらけで大事な所が隠れていた。

泡で隠したつもりってか。ったく……ガキの考える事はよくわからねえ。

それよりも……………。

「オマエ、愉快に鼻歌歌ってねえでオレの質問に答えろ」

「——っ!？　ちょ、見ないでってミネットは言ったのにひどいよっ!」

「うるせえ、泡で隠れてるから問題ねえだろ」

「……貴方ってロリコン？」

「オマエ……死にてエのか？」

そこまで脅すと、ミネットは頬を赤くして俯いてしまった。

そりゃあ、降参のサインって捉えていいのか？

まあとにかく、これで話は聞ける事になったっぽいな。

「さて、と。じゃあ聞くけど……オマエはどうしてオレの名前を知っている？」

「それ、さっきも言ったよ？　貴方はアルファ隊では有名人なんだよ?。」

「ふーん。ンで、どういう風に有名人なんだ？」

「……強いて言えば、かなり恨まれているよ?。」

恨まれている、ねえ……。

そこでオレはようやく確信した。

アルファ隊ってのがオレが潰していた特異点の所属する組織だって事に。

オレはとにかく特異点をブツ殺しまくっていた。  
恨まれるのは当然の事だろう。つーか、恨まねえほうがオカシイっ  
つーの。

「ふーん、つまりオマエらがオレが殺しまくっていた、無国籍者ど  
もの特異点だって言うんだな？」

「貴方の言い方だと、それで合っているよ」

「そおかい、そんじゃあ第二の質問だ。オマエはオレをどう思っ  
てんだ？」

「んにゃ？」

「オマエもアルファ隊の一員だろ。にも関わらず、オマエらを殺し  
ていたオレを風呂に入れるってどういう神経してやがんだ？」

それがオレの中の一歩の疑問だ。

コイツは最初から、あまりオレに敵意を向けたりはしていねえ。  
にも関わらずコイツは特異点で、アルファ隊の連中は仲間なハズで  
ある。

だからこそオカシいんだよ。

オレはコイツらを楽しんで殺していたのに、なんでミネットは  
オレに好意的なんだよ。

「……ミネットも、正直貴方を恨んでいるよ？」

「だったら何でだ！ 恨んでるんだったら不意打ちでもしてオレを  
殺せばいいだろ！」

最も、こんなヤツの攻撃なんざ風で跳ね返してオシマイだがなあ。

「そうだよね……でも、ミネットは知っちゃったから」

「あン？ 何を知ったってんだオマエは？」

「貴方が……殺したくなくても殺さなきゃいけない。そんな状況に置かれていた事だよ」

「……っ？」

コイツとは初対面なハズだ。

第一、オレが特異点との戦闘でそんな事を漏らした覚えはねえ。だったらコイツは……なんでそんな事を知ってやがるんだ？ しかも、まるでオレは被害者だって言い方じゃねえかよ。

「オマエ……どういことだ？」

「ミネットは……貴方と木下先輩、そしてアルファ隊の護衛対象との戦いを見ていたんだよ。その時に貴方は学園を辞めたくて、ずっと永遠に血みどろな日常を送るのと、今の一瞬だけ血みどろな現実を見る。どっちがマシかって話をしていたよね？」

「……………ッ」

このヤロウ……まさか、あの一般人のクソ野郎との戦いを見物してたってのか。

そういえば、最後のほうで特異点が多数駆け付けたって、あのピンクのチビが言ってやがったな。

まさかミネットもそのうちの一人。水系の魔法を使えたりすんのか？



「貴方はしつこい学園を辞める条件として、嫌々ミネットたちと戦っていたんだよね？」

「ふざけんじゃねえぞ。あの言葉のどこにそういう意味が含まれてるってんだ」

「含まれているよ。確かに言葉はものすごく汚かった。でも、貴方の辛い気持はミネットにも……そして貴方を倒したあのお方にも伝わっているハズだよ。だからミネットは仲間を殺されて当然貴方を恨んでいるけど、貴方だって辛かったんだから……恨み切れないんだよ？」

……クソツタレ、さっきから知ったようなセリフをペラペラペラペラ。

“ 勇気ねェ……ずっと永遠に血みどな日常を送るのと、今の一瞬だけ血みどろな現実を見る。どっちがいいかって話だけどなァ……オレには前者を選ぶ事はできねえ。それだったら後者を選ぶ方が遥かにマシだ。それともなんだァ？ オマエはオレに単独で佐井学園と戦う勇気でもくれるってのかァ？”

一体あの言葉のどこに、そんな辛い意味が込められてるってんだよ。確かに、あの学園は二度と見たくねえくらい嫌だが………ッ。

「……チッ」

「あ、あれ？ どこに行くの？」

オレは荒々しく浴槽があがり、この浴室からオサラバしようと思き始めた。

そんな時にミネットに呼び止められたのだ。

クソツタレ、呼びとめてんじゃねえぞガキンちよが。

「オマエとはここでお別れだ。精々、オレのことでも忘れて幸せに暮らしやがれ……」

「ちょ、ちよつと！」

そんな背後から聞こえるうるせえ声は無視して、オレは浴室から出ようと……あ、アレ？

急に頭がクラクラしてきやがった。く、そ……寝不足が今更響いてきやがったってか？

……まずい、マトモに思考できなくなってきやがった。

それどころか、こうして足で身体を支える事そのものが……っ！

「……っ！」

いてえ……倒れたのか……オレは？

そして、意識が……。

「えっ……ね、ねえ貴方！ 大丈夫なの！？ しっかりしてよ！」

最後に聞こえたのは、ミネットのうるせえ叫び声……だったような気がする。

## 第87話、ミニネットの事情、辛かった悠？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「なにこの一方〇行？」

伊吹「圭介、もうそのネタいいわよ……読者だって多分わかって読んでるから」

圭介「それにしても女体に興味ナシとは……ますます早川女性疑惑が――」

伊吹「あんたは興味ありすぎなのよ！」

風紗「そうだぞ……っ？　　そういえば藤島はまだ変態なのか？」

圭介「うるせえ！　　男が変態で何が悪い！　　っーか変態ってのは不治の病だ！」

伊吹「迷惑な病よね……？」

風紗「TPOをわきまえない変態はただの迷惑だぞ」

圭介「うっせ黙れ！　　俺は紳士だからちゃんとわきまえてるわ！」

## 第88話、まだ残っていた心

「……………?」

気付けばカーテンの隙間から光が差し込んでいる。

……………という事だこれは。

オレは昨日夜の古宇坂を歩いていて、それで変なガキと出会って風呂に入って……………。

その後の記憶がまるでねえぞ。しかもなんでオレは布団で寝ているんだ?

……………ここは一体どこだってんだ?

「ふん!」

「あ——?」

覗き込むように俺を見下ろす外国人のような少女。

間違いねえ、昨日オレをここに案内しやがったのはコイツだ。

そしてここはおそらくコイツの家だろう。

「すごく優しそうな顔だったよ。寝顔って誰でも素直なものなんだね!」

「…………オマエ、このオレのどこをどう見たら優しいヤツに見えるんだ?」

「またまた! 謙遜しなくてもいいんだよ? 昨日帰ろうとしたのだってミネットに配慮したからなんだよね?」

なに言ってやがるんだコイツ？

付き合いきれねえから帰ろうとしたに決まってんじゃないか……多分な。

っーかオレはあの後、どうしたんだっけな？

そういえば、なんでオレは布団で寝ている上に服着てんだ？  
ちよっと待て……オレは風呂に入っていたハズだ。

「オイ、なんでオレはここにいるんだ？」

「んにゃっ？　そ、それは……うん、ミネットが頑張ったからだよ？」

「頑張った……ッ！？」

そこでオレは理解しちまった。

このクソガキが寝ている間に、とんでもねえ事をされたってなあ。  
確かこのガキはオレと一緒に風呂に入っていたハズだ。

そんでオレは風呂場で倒れて、何故かオレは似合わねえ明るい柄の服を着て布団で寝ていて。

つまりどういう事か。ンな事あ言わねえでもわかるだろ……ッ！

「このガキ……ッ、人様の裸をタダで見やがるとはいいい度胸してんじゃないか！」

「仕方なかったんだよ！　だって……お風呂場で放置するわけにも  
いけないから……っ。しかもそのセリフはミネットのセリフでもあるよ！？」

「チッ、貴重な情報の代償がコレかよ……っ」

「ま、まあまあっ！ 裸を見られたのはお互い様なんだよ？ お相子お相子！」

「フツ―そう言うのは男のセリフじゃねえのか？」

「昨日男女平等って言ったの、誰だったかな？」

ニヤニヤしながらそんな事を言うミネツト。

このオレをいじろうとは……いい覚悟だ、上等じゃねエか。

ここまで精神的にオレを追いつめた特異点、初めてじゃねエかよ……畜生、腹立つくらい愉快だなあ。

まあ、もうこのガキには用はねえけどな。

それよりさっさとこの家を出て、今日の朝飯でも調達しに行くか。

いつまでもこんな所にいたらそのうち……佐井学園の刺客が来る可能性があるからな。

「……チツ」

「およ？ どこか行くの？」

「こっから消えるんだよ。オマエとはもう二度と会う事はねエと思う」

「えっ？ で、でも貴方の服はまだ乾いて――」

「関係ねえ。服はどこにあるんだ？」

「……っ、ベランダ？」

「そオかい……一つだけ言っというてやる。災難に遭いたくなかったらオレとは関わらねえほうがいい」

オレと関わればそのうち、連中に襲撃される可能性があるからな。連中つつつても佐井学園の連中だけじゃねえ。

普段、食糧とか金を奪ってるこのあたりの不良も含む。

ソイツらとオレの戦いに巻き込まれねえ為には……オレとは関わらねえほうがいいだろう。

「貴方って……どうしてそんなに他人を避けてるの？」

「……深い理由はねエ、面倒癖エんだよ。それより着替えるから見るんじゃないぞ」

「んにゃっ!？ う、うん……っ!」

ミネットはあっちを向きやがったが、果たして本当に見ねえんだろうな？

まあいい。今更ミネットに下着くらい見られようが、オレはもうどうとも思わねえ。

それにしてもオレの服……ありえねえくらい濡れ濡れパラダイスじゃねえかよ。

まあ今日は幸い快晴だ。着てりゃあそのうち乾くだろう。

滅茶苦茶深不快だけどそこは我慢だ。

——こうして。

着替え終わったオレはミネットの家を出て、食い物か金でも持っていそうな不良を探し求めている。

それにしてもいい天気だ……まあ、オレにとっちゃあこういう天気は苦手なモンだけだな。

アルビノってのは非常に弱いモンで、オレは幸い弱視にはならなかったがこういう日光には弱いんだ。

日光、特に紫外線で皮膚が損傷したり、普通のヤツよりも皮膚がんのリスクが高エ。

その上、目が明るい所を苦手としてんだよ。眩しくてしょうがねえ……。

「つたく……不便なモンだ」

だが、オレには生まれつき超能力が発現していた。

最初は精々小せえ風を吹かすとか、そんな程度の事しか出来なかったが、成長と共に能力も強力になっていき、今じゃあ佐井学園……というより全世界で最強の超能力者になっちゃった。

そのおかげでガキの喧嘩にも負けなかった。筋力がなくても何の不便にも感じずに生きてこれた。

オレをここまで強くしゃがった佐井学園。まア、その事に関しては感謝しといてやろう。

……だが、あの学園のやり方はもうゴメンだ。

それにしても金持ってそうな不良なんて全然歩いてねえモンだな。

まあ所詮古宇坂も田舎ってかア？

仕方ねえ、そろそろ古宇坂からオサラバして東京にでも行くか？

……いやダメだ。東京には佐井学園がありやがる。

んところに行けばすぐにオレの居場所が特定されちまう。

クソツタレ……これから先、オレはどうやって生きていけばいいんだア？

「こちら陳、これよりアルファ隊殲滅作戦を開始する。OK？」

「あ——？」



なんだア、あのチャイナ服を着た怪しげな野郎。

変なことを呟きながら古宇坂の住宅街に消えたが、畜生怪しいあの野郎。

アルファ隊殲滅って要するに、さっき別れを告げたミネットをブツ殺すって事だよなア。

……だからなんだってんだ。オレはもうあのガキとは関係ねえ。

「チッ……！」

ポケットに手をつ込み歩き始めたが、クソツタレ……なんだかムカつくな。

「……………」

……あの怪しい野郎、一体これから何をするつもりなんだア？

まア、知った所でオレにどうしろって話なんだが。

それでも気になる、そしてクソムカつく……。

オレはどうしてこんなにムカついているんだ？

もう関係ねェだろ……たとえあの中国人見たいなのがアイツを殺すとしてもだ。

たかが一泊半ば強制的に止めさせられただけだ。

貴重な情報を教えてもらっただけだ。それで……ふざけた事を言われただけだ。

たったそれだけだし、オレとは関わらねえほうが安全に決まってるだよ。

“貴方も臭いのは嫌だよな？　だからミネットの家のお風呂を貸すよ！”

あんなガキはもう関係ねえ……。

“……ミネットも、正直貴方を恨んでいるよ?”

それにアイツはオレが殺しまくっていた特異点。

“貴方が……殺したくなくても殺さなきゃいけない。そんな状況に置かれていた事だよ”

もし、さっきのヤツに殺されようが知ったこっちゃねえ……。

ヤツらがどれだけ死のうが、目的を果たす為なら関係なかった。

いや、その目的が果たせなくなった今でも……もう他人だ、何の関係もねえ。

“貴方って……どうしてそんなに他人を避けてるの?”

チツ、あのクソ野郎。

こんなタイミングでアルファ隊の名前を出しやがって。

アルファ隊ってヤツを殲滅するだとか言いやがって。

おかげで、あのクソガキが脳裏から離れなくなっちゃったじゃねえか。

なんなんだろうーなア……オレもまだ甘いつてエのか……?

「……クソツタレ」

ムカつく……こうなったら暴れるしかねえ。

さっき走って行った、あのチャイナ服の怪しげな野郎を相手になア。つたく、あの野郎が誰を襲う気かは知らねえが……。

あの野郎に襲われた死ぬんじゃないやねえぞ。

アルファ隊の連中を殺していたオレが、間接的にオマエらを救ってやるんだからなア……! !

## 第88話、まだ残っていた心（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「あー暇だあ。そういえばそろそろ花火の季節だよなあ」

浅間部長「何言ってるんだ藤島君！ 僕に言わせれば海水浴の季節だね！」

圭介「海水浴……水着……お姉さん……おおっ！」

浅間部長&圭介「夏ってスバラシイ！」

あかり「……誰か、アイツらシバいてもいいよ！」

## 第89話、最悪

あの中華野郎、確かこっちの方に行きやがったよな。

ここは確か……元々旧日本軍が使ってたって言う、自衛隊の滑走路があるあたりだったな。

滑走路の周囲は住宅と畑だ。あの野郎……こんなだっ広い場所でするつもりだ。

って、アルファ隊の連中を潰すんだからやる事は決まってるよなア。

「あア？」

不自然に立ち入り禁止という看板が立てられた、自衛隊基地付近にある運動場。

はン、バレバレだっつーの。

何の声も聞こえねえし、この中で何かの大会なんかやってるわけがねエ。

そもそも、大会なら一般公開していたっておかしうはねえハズだ。にも関わらず、わざわざ立ち入り禁止にするたアね……やれやれ、人間ってのはホントに馬鹿だ。

まア、オレも一応その人間だがなア……。

「さて、と……オレにしちゃあ珍しい事をしてやろうか。10分で終わらせてやる」

オレは立ち入り禁止の看板を無視し、笑いながら運動場へと足を踏み入れた。

……つで、堂々と立ち入り禁止の場所に来てみた方がいいが。

「アイヤー可哀想だネエ！ でも、そろそろ終わりだネエ」

「まだ……だよ……っ！」

「減らず口だネエお嬢ちゃん？ じゃあそろそろレニナ様の計画の  
為だ、死んでもらおうかネエ」

オイオイなんだこりゃ……あの中華モドキにミネットのヤツが負けてやがる。

ったく、どこまで予想通りのシナリオなんだ。

しかもなんなんだ、このナイスすぎって言われそうなタイミングは。まあいい……ちっとだけ運動してやるか。

見せてやる……オマエらサヴィエト亡命政府の連中だって、このオレと戦えばひ弱なオタクと90式戦車くらい差があるって事をなア。ゆつくりと、オレは二人の下へ歩んでいった。

「アア？」

中華野郎がオレの気配に気づいたのか、まるで嫌なヤツに向けるような目でオレを見てきた。

それでも俺は気にせず、何処までも狂った笑みを浮かべ、ただ只管中華野郎へと近づいていく。

中華野郎はミネットを殺す為か、さっきまでしゃがんでミネットに手刀しゅどうを向けていたが、オレが近づくとそれをやめ、細い目でオレを睨みつけつつ拳を握り締めて立ち上がる。

「アイヤー！ 立ち入り禁止って看板建てといたのに、どうして侵

入しちゃったのかネエ？」

「……あ、あな……た……っ？」

弱々しくオレを呼ぶミネットに、嫌味な感じで語り掛けてくる中華野郎。

やれやれ……クソムカつく口調だなあの野郎。

「君は一般人だネエ……悪いけど、君には死んでもらうかな？ 秘密を守る為にも……個人的にも日本人は嫌いだからネエ！」 秘

そうかい……別にオレはオマエがどう思っようが、知ったこつちやねえんだよ。

けどな、このオレがオマエのようなヤツに殺されるってえ？

はン——くっだらね……。

オレがオマエごときに殺されるわけがねえだろ。

寝言は——寝ながら言えってんだよ！

「死ネエ————ッ！」

カッコいいつもりで、でも実際は情けなく叫びながら中華野郎は掌を突き出す。

別に飛びかかってくるわけでもない。銃を向けて撃ってくるわけでもない。

ただ、掌を一步も動かずに俺へ突き出す。あの野郎はたったのそれだけしか動かなかった。

当然距離的に右手がオレに届くハズがねえし、そんな事をされたって痛くも痒くもねえ。

むしろ、目の前の中華野郎の存在が痛く感じるくらいだ。

だがそう思っていた瞬間、あの中華野郎の掌がぼんやりと光り始め

やがったのだ。

おもしれえなオイ……あれって確か特異点どもも使っていた、魔法とかいう変な能力なんだろう？

サヴィエトの連中は魔族ってのとつるんでるらしいし、オマケに魔法まで使うってなア。

「……っ！ 波アアアアアアアアッ！」

ぼんやりと光っていた掌から出たのは、別に驚く事もねえ……ただの光線だった。

おもしれえ畜生。ありや一体どういう魔法なんだ？

ただ一つだけわかるのは、オレに向けて放ったんだから攻撃魔法だよなア。

だったらオレがやる事は一つしかねえな……。

「……い……ひいっ！」

突然驚き、情けねえ声を出しやがる中華野郎。

無理もねえ。人間理解が出来ねえ事が起これば、誰だってあんな風に恐怖を感じるものさ。

きつとあの野郎は攻撃を弾かれた事がねえのだろう。

まあ正確には、弾くというより風でヤツの魔法を吹き飛ばしただけだな。

弾き返されるように飛んでいく光線は、中華野郎目がけて一直線に突き進む。

そのまま自滅してくりゃあ楽なモンだが、残念な事にあの野郎は寸前で右に跳躍しやがったのだ。

はン——中々反射神経はいいみてえだ。

流石は中国人。魔法使いであると同時にクンフーの達人ってかア？

「怖がる事はねえだろ？ オレはただ、一瞬で暴風を身体の周りに吹かして攻撃を防いだだけだ」

「な、なんだネお前！？ アルファ隊の新入りか、それともロジーナの軍人か！？」

「お生憎様、オレはこの世界の人間で……今のも魔法ってモンじゃねえんだ」

「ウソだネ！ この世界に……魔術以外のチカラがあるだなんて——！？」

「へエ？ ミネットは魔法つつてたけど、オマエらは魔術って言葉を使うんだな？」

「……は、ハハ！ 敵性語だからネ……こっちで勝手に言い変えてるってわけネ」

「そオかい……じゃあ、オレはオマエの敵だから魔法って言っとくわ」

あの中華野郎は露骨にオレを恐れていた。

魔法以外の力は信じられねえらしい。

だけど、オレはそれ以外の力を使つたとヤツに言った。

事実オレは魔法は使えねえが、それ以外の力なら自由自在に使える。事実を伝えたただけだったのに、随分とあの野郎オレを怖がってやがるな。

やっぱり、オレが光線を弾き返しちまったせいなのか。

まあ確かに、ビビっててくれたほうがいじめがいて面白エ……ぎゃはっ。



「お、お前誰なんだ！　どうしてアルファ隊の味方をしているネ！？」

「味方？　ぎやは、笑わせんじゃねえよ……このオレがアルファ隊の連中にどう思われてるか、オマエわかってんのかア？　答えは恨まれている……最も、オレがこのミネツト達に恨まれるような事をしたから、まあ当然のことなただけだなあ」

「だ、だったらアルファ隊の味方をする意味もないだろ？　どうだネ！　お前は私の魔法を弾き返したんだ。いっそレニナ様の下で財産とかそういうあらゆる不平等を平等に、すべての人が皆平等に生きたる社会を使ってみないかネ！？　その為に、それを阻止しようとするアルファ隊という蛮族の組織と戦わないかネ！？」

平等ね……言い言葉じゃねえの？

あくまで理想としてはなあ。

まあ、現実そんな甘いもんじゃねえからそれは不可能だろう。

どう考えても無理な理想を追い掛ける上に、もうゴメンな事までしろってか。

そんなの、オレの答えは当然――

「――お断りだア。オマエらに協力する理由だってねえし、それに特異点潰しなんてモンを再びすんのも、もうゴメンだからなあ？」

「ゆ、悠……貴方……っ」

なに物珍しそうな顔してんだ、ミネツトのヤツは。

しかも、コイツがオレを名前で呼ぶなんて珍しいモンだな。

まあどうでもいいけど……それより、今は目の前のクソ野郎を葬ら

ねえとな。

「は、ハハハ……ッ！ 我らに協力しないと言うのネ？」

「当然だ。オマエらに協力するくらいなら、クソツタレな学園に戻るほうがマシかもしれねえ」

まあどっちにしても、あの学園には今後一切関わりたくねえがな。けど、それと同じくらいコイツらとは手を組みたくねえ。オレはもう——何かの為に汚れ仕事をすんのはゴメンだ。

「いいだろう……ならばこうするまでだネ！」

「あア？」

すると突然、中華野郎が大きくジャンプをしゃがった。

おーおーよく飛ぶねエ。

ひよっとして、マンションの3か4階くらいの高さはあるんじゃないかねえか。

大胆なハイジャンプしゃがって、あのクソ野郎一体何をするつもりだ？

「ん、にゃっ!？」

「ヒヤハハッ！ 大人しくしろアルファ隊！」

あの……ヤロウ……ッ！

ミニットの近くに着地しゃがったと思ったら、左腕でミニットを抱きしめやがった。

恋人同士でするような、そんな生易しい抱き方じゃねえ。

プロレスの試合で相手レスラーを締め付けるような、そんな荒々しい抱き締め方である。

一方の右手ではチャイナ服のポケットに手を突っ込み、そこから黒々とした何かを取り出しやがった。

「チッ……ンだあそりゃ、トカレフTT-33ってヤツか？」

「我が祖国でライセンス生産したものネ。それより動くなよ？ 動けばこのガキの脳味噌が花火みたいに飛び散る事になるからネ！ この子の死体を見たくなかったら……君は我らに協力することだネ！」

ライセンス生産だろうがコピー生産だろうが、そんなくだらねえ情報はどうでもいい。

それより、あの中華野郎は中々の小者みてえだな。

ミネットのこめかみに銃口をしっかりと当て、それで動けないオレを見ながらニヤニヤしてやがる。

まったく……やる事が小悪党すぎるぜ。

だが、いくら小悪党のやることだとしても——コイツあちつとどうするか、考えなきゃいけねえな。

オレに銃を撃つんなら何の問題もねえ。

ただ暴風で膜を張り巡らせ、向かってくる銃弾をクソ野郎にお返しすればいいだけだ。

……だが、標的がミネットとなれば話は別だ。

アイツはただでさえ怪我して弱ってるのに、元から銃に対しては弱い存在だろう。

うかつに動くのはマズいが、だからと言ってあの野郎の条件を飲みこむつもりはねえ。

「……っ！」

「恐怖で何も言えないみたいだネ。さて君はどうする!? この子の死体を見るか、それとも我らに郷協力するか!? そしてら、この子を死体にする事だけは特別にやめてやるネ」

「……………」

ミネットが捕まってるとなると、あまりド派手な技は使えねえ。もし使ったらミネットまで巻き込まれちまう。

思いきって飛びこむか……いや、どんなに風の力を使って高速移動したって、引き金を引くには十分すぎる時間があるだろう。オレがヤツの目の前に行った時には、既にヤツは引き金を引いているハズだ。

仮に間に合ったとしても、ヤツは間違いなくオレかミネットに発砲する。

ミネットに当たればアウト……だが、このまま何もしないわけにはいかねえ。

一か八かの賭けだ。一気に間合いを詰めてあの野郎を殴り飛ばし、ミネットを助け出す——!

「アアアアアアアアアアアッ!」

「な、何イ!?!」

ドン! と力強く足踏みをし、風の力を利用して弾丸のように中華野郎の懐へ突っ込む。

右拳を握り締め、中華野郎の目の前まで来ると、握った拳を能力使って加速させつつソイツを放った。

「——あ、があ——っ!」

当たれば大怪我、確實の拳は確實に中華野郎の顔面に突き刺さる。殴られたと同時に中華野郎は、左腕からミネットを荒々しく離してしまった。

ここまでは読み通りだ。それに案外今の攻撃が効いたのか、中華野郎が反撃してくる気配もない。

だったら今のうちにミネットを助け、とにかく中華野郎から距離を取ろう。

倒れそうになっていたミネットをしつかりと抱き、吹き上げるような暴風を吹かしてオレは空を飛んでみせた。その結果、着地すると中華野郎とは10m程の距離を取る事に成功した。

「……ひゃ、はは……っ、ヒヤハハハハ！」

「……ッ!？」

オレはどうやって体勢を立て直したのか、歪んだ表情を見せる中華野郎……ではなく、中華野郎がオレに向けている黒々とした拳銃の銃口を見つめた。

冗談じゃねえぞオイ……!

あの中華野郎、今オレが暴風の膜を張り巡らしたら、このガキも一緒に吹き飛んでしまうじゃねえか。

ミネットは衰弱している。ちよつと吹き飛ばされたって、荒々しく地面に叩きつけられりゃあ大きなダメージとなりやがる。これ以上ミネットがダメージを受けるのは危険すぎる。

畜生、こんなガキ早く地面に置いて、中華野郎が撃つ拳銃くらい……簡単に弾き返して……ッ!

「ひゃ、はっ! 仕返しだ……受け取るがいいネ小日本人ッ!」

中華野郎が銃弾を放ったのは、まさにオレがミネットを優しく地面へ置いた瞬間だった。

早く手を離せば、乱暴にミネットを放り投げていればオレは確実に助かっていた。

……ったく、オレも甘いぜ……。

ミネットがこれ以上怪我すんのが危険だからって、それが嫌だと思っちまったからって、この手を離さず優しく置く所までやっちゃうだなんて……。

「……ア……ガ——ッ!？」

何かが突き刺さった。

突き刺さると同時に吹き飛ばされた。

痛みは……感しない。

感じる前に視界が揺らぎ、次第に真っ暗になっていったからだ。

一応、この後オレが勢いよく背中を地面に叩きつけた事はわかった。そこから次第に意識がなくなっていくことも。

ったく、オレの人生ここで終わりか？

まあいい、それより……あの中華野郎からさっさと逃げろ、そして生きろよ……クソガキ……ッ!

## 第89話、最悪（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「最近暇だなあ」

大吾「圭介、最近お前はなにやってるんだ？」

圭介「ん、そうだなあ……なあ大吾、ネット住人って馬鹿じゃね？」

大吾「なんで？」

圭介「いや、女子中学生のフリしてチャットに入り込んだら……変態親父と馬鹿なヤンキーっぽい兄ちゃんっぽい釣れたし」

大吾「おまっ！？　それで遊んでるの！？」

圭介「まあな。しっかしなんで見抜けないんだろう？　アニメキャラ参考にテキストに作った女子中学生キャラだったのに」

大吾「圭介ひでえけどクソワロタ！　まあ、見抜けないくらい二次元キャラが完璧ってことだよな！」

伊吹「こいつら……ロクな遊びしてないわね……っ」

## 第90話、死闘

「……やった？ ひやはは……冗談じゃないかね？」

いきなりあの人が駆けつけて、ミネットを助けてくれて……。

でもあの人は吹き飛ばされてしまった。

陳炎彬という名の、サヴィエト亡命政府では気功と拳法の達人の男の攻撃で。

陳が放った一発の銃弾によって……。

「私の気功を弾き返したコイツが、一発の銃弾に負けた……？ ふ、ひやははははっ！ こりゃあ確実に死んだネ！ 7・62mm弾を額に受けて生きてるハズがないネ！」

死んだ……えっ？

あのアルファ隊の魔法使い何人掛かりでも倒せなかった、あの早川悠を殺した……？

なんで……どうしてなの。ミネットを助ける為？

だからって、仲間を楽しんで殺していた人が自らの命を投げる？

助けに来てくれた時点で何かがおかしいとは思っていたけど、ここまですてくれるなんて……。

どうして……ミネットが死んでも、アルファ隊全体では何の影響もないんだよ。

ミネットを助けても……あなたには何の利益もないのに……っ。

「さて……次は君ネ」

「……っ！」



その言葉が耳に入り、ミネットはボロボロの身体でなんとか身構える。

先端にハートを飾ったステッキ。

ハートは飾りだけど、ステッキ自体は魔法を使うためには必要なもの。

でも……陳には四大元素の一つ、万物の根源こと水の魔法アルケイが全く効かない。

増してやもう……ミネットには戦うための体力が……っ。

「貴様の王子様は弱かったネ。さて……そろそろ死ねエッ！」

「……!!」

叫びながら陳は銃をミネットに向ける。

あの人を殺した銃……ミネットだってあんなのには耐えられない。しかも、ミネットは普段のあの人とは違って、銃弾を防ぐ術もなければ避ける術もない。

もうダメだ……ミネットはもう死を覚悟した。

「ひゃ、は、はあっ！」

炸裂する銃声。

1秒以内にミネットは死ぬ……覚悟を決めた——刹那。

ミネットは死ななかった。銃弾がミネットに直撃どころか掠りさえもしなかった。

陳が下手糞というわけではないと思う。さっきだって、あの人額に正確に弾を当てていた。

きっと陳は射撃の達人でもあるのだろう。そんな陳が目標に弾を当てられなかった。

射撃の達人であるハズの陳が、ミネットに弾を当てられなかったそ

の理由は――

「あ、うぐああああああああっ！」

「――、死なせてたまるかよ……このクソ野郎オ」

なんで……どうして……？

理解が追いつかなかったけど、奇跡が起きているのはミネットにもわかった。

あの人が……生きている。生きていてミネットを助けてくれた……

「うあ、はあ……はあ……ぎいっ」

陳は右手を怪我していた。ボタボタと血が地面に垂れている。  
左手で押さえ隠しているけど、きっと右手はグロテスクに裂けているのかもしれない。

そんな右手では何も持てず、陳は持っていた拳銃を地面に落としていた。

そのまま怯えながら後退りしていく陳。あの人は額を押さえながら、ゆっくりと陳に歩み寄る。

「な、なんで貴様が生きてるネ！ 一体なにをやったんだネ！？」

「……………ッ」

「もしかして魔術、いや貴様は超能力か……それを、直撃の寸前に使ったのかネ！？」

「ぎゃは……推理……ご苦労様だなア……っ」

あんなにボロボロなのに。今にも倒れそうなのに。

あの人は齒を食いしぼり、目をギラギラ光らせながら陳へ近づく。陳はあの人が近づくたびに恐怖し、右手を左手で押さえながら後退りしていった。

「なんでだネ！ ひやは、今更貴様に何ができると言うのだネ！」

「知るかクソ野郎オ……こんなどこまでも堕ちたクソ野郎が、こんな事をしてるって時点で奇跡みたいなモンだったのによ。これ以上ヒーローじみた事をしろってかア？」

「だったらやめればいいネ！ 貴様動けるなら……今から病院に行けば助かるネ！」

「ハッ、オレが逃げたらこのガキを殺すって魂胆か？ 丸見えだっつーの……」

自虐しながらも相手を威嚇するあの人は、本当に勇者のようだった……。

カッコいい……ミネットにとって恨むべき人なのに。

どこまでも傷ついた人なのに……なんだかとてもカッコよく見える……。

「なんで……貴様、本気でアルファ隊の味方をしているわけじゃないのにネ。その上、貴様はどう見てもヒーローじゃない、悪人が足掻いているだけにしか見えないのにネ。悪人がなんでこんな事をしてるネ！ 悪人は悪人らしく、さっさと我に協力してソイツを殺す手伝いをするネ！」

「わけわかんねエ事言ってんじゃねえぞクソ野郎オ……確かに、オレはコイツの仲間をブツ殺しまくった極悪人だ。それ以外にも通った学園の汚れ仕事を沢山引き受けた。だからってなァ……オマエの味方をする理由にはならねえだろ」

ミネット達を殺す以外にも……汚れ仕事を……？  
やっぱり、あの人はそれが嫌で……。

だからそんな仕事ばかりを押しつける、佐井学園という所を辞める為に……？

「ふ、ふざけるでないネ！ 綺麗事言ってんじゃないネ！ 貴様がどう足掻こうが……なにをしようが！ 所詮悪人は悪人だネ！」

「それくれえ分かって動いてんだよ。確かにオレみたいなクズが何やったって、それで全てがチャラになるとは思ってもいねエ……けどよお、だからってコイツを見殺しにしている理由になんのかァ！ だからコイツをここで死なせるわけには、絶対にいかねエんだよッ！」

そう言いながら、あの人は弾丸のように陳へと右手を伸ばして突っ込んだ。

目で追うのがやっとな速度。あの人もう瀕死の重傷なのに、ミネットの為なんかに……っ。

あのまま行けばあの人が勝ちそう……だけど、ミネットだってアルファ隊。

それなりには戦いを経験しているから、不利なのは陳ではなくむしろあの人だとわかってしまった。

確かに陳も右手を大怪我しているけど、あの人の怪我は陳の怪我とは比べ物にならない。

あの人はギリギリで貫通を防いだと言っても、銃弾が頭に命中した

んだよ？

大怪我している人が長時間、今までのように動けるハズがないよ……ッ！

「ひい！ ああっ！」

怖がりながらも、あの人が振るう悪魔の右手を回避してゆく陳。

避けられても避けられても、あの人はしつこく陳を狙って右手を振るう。

気圧や酸素濃度を操ったり、暴風を吹かせたり爆発を起こせたりするあの人が、どうして苦手な接近戦を挑んでいるのだろう。きつと、怪我がひどくて大胆な攻撃ができないのかもしれない。

だから、息の根を止める為には接近する必要があるのかも。

でも、瀕死の重傷の人の動きなんて知れたものだった。

頼りない攻撃を次々と避けていく陳。その頼りない攻撃を延々と続けるあの人……。

「ア、う……が、ア………ッ」

やがて……あの人はバランスを崩した。

立て直す事もできず、力尽きるようにボタンと地面に転んでしまった。

それからもう……あの人はピクリとも動かない。

「そんな……っ」

「う、は……ハハハハハッ！ そうだよな……コイツは撃たれたんだ、無事なわけがないよネ！」

もうダメだ……陳はボロボロ。

でも、ミネットに戦う力は残されていない。

最後の希望だったあの人も動けない。

終わった……ミネットは、上から課せられた任務さえ達成出来ずに……ここで死ぬんだよね？

しかも、関係がなかったあの人まで巻き込んで……っ。

最悪だ。ミネットは本当に最低だよ……。

「さて……そろそろ——」

ニヤニヤしながらミネットのほうを見てきた。

「警察だ！ 手をあげて地面に伏せろ！」

刹那、いきなりパトカーや機動隊の人員輸送車がここに入ってきて、中からゾロゾロと警官や機動隊の人達が降りてきた。盾を構え、威嚇の為に銃を構えている。

もしかして、誰かがこの光景を見て通報したのかな？

「……くそっ！」

とにかく、助かったのかな……？

流石に気功や拳法、射撃の達人だった陳も数の暴力には勝てないらしく、警察相手に大人しく降伏しそのままひれ伏した。よかった……

「君！ 大丈夫かね！」

一人の警官がミネットの所に駆け付けてきた。

ミネットが男に捕まっていて、その男が銃を乱射しているって通報だったのかな。

「み、ミネットは大丈夫です！ それよりあの人を……っ！」

「あの人……？」

あの人の方を見ると、頭部からの夥しい量の出血に警官は絶句していた。

でも大丈夫……あの人、まだ生きている。

ミネットにはわかるもん。

あの方はまだ……辛うじて生きているよ。

「これはひどい……」

「あの人——悠はまだ生きてます！ ミネットはどうでもいいからあの人を助けてください！」

ミネットはまだ軽傷だもん。

戦えないけど自力で動けるし、こうして元気に喋ってられる。

でもあの方は重傷……いや、意識不明の重体だった。

意識はないしピクリとも動かない。何より出血がそろそろ危険なレベルのような気がするよ。

「……っ！」

ミネットの叫びに答えたのか、警官は無言のまま行動に移った。それから数分後、近くに飛行場があったからかヘリが到着。

早川悠という一人の超能力者は東京の病院へ搬送された……。

——あれから3日、7月も半ばの頃。

ミネットは大した怪我じゃなかったし、何より無国籍者だってバレたら行動が出来なくなるから、だからミネットは入院をオススメされても拒否し、一旦本部へ戻って回復魔法をかけてもらった。そのおかげで今はとっても元気です。

ミネットは今、東京都にあるとある大きな病院に来ています。

この病院のとある病室にはあの人が寝ている――

「早川悠♪」

調子よくミネットは病室へ足を踏み入れる。

っていけないここ病院だったよ。病室では静かにしていないと怒られちゃうよね。

「……………」

「やっぱり、人の寝顔って素直だねっ」

ベッドの横に來ると早川悠が眠り姫のように眠っていた。単に意識がないだけだね……。

でもお医者様曰く、意識を取り戻す予兆はあったらしい。

早ければ明日くらいには起きるかもしれないらしい。

でも、お医者様曰く心配される事がいっぱいあるらしい。

例えば後遺症……………。

『よく撃たれてこの程度で済んだね。僕の腕にかかれば死にはしないと思うけど、ただ……脳の一部が破片によって欠損している。欠損部分はおくわずかだが……まあ何らかの後遺症は避けられないだろうね』

後遺症。



病気や怪我が治癒した後も、機能障害などの症状が残ること。

まだ目覚めてもいないし、重度か軽度かはわからないけど……。

心配だよ……悠。目覚めたら超能力は使えるかな？

いや、その前に日常生活を送れるのかも心配だよ。

だから……もし元氣でもそうじゃなかった場合でも、ミネットはこの人を全力で介護します。

早川悠はミネットの命の恩人だもん。

なにより……この人はいっぱい傷ついて、どこにの行き場がなくて……。

ミネットは弱いから守れないかもしれない。むしろ迷惑を掛けてしまいかもしれない。

それでも、せめてこの人の心の支えにはなりたい……だから。

「悠、たとえばみんながあなたを恨んでも……ミネットはあなたの味方だよ？」

優しく言いながら微笑んで、さらに一言。

「だから、早く元氣になってね……悠！」

ミネットはまだ目覚めぬ命の恩人に、ゆっくりと、約束を刻むように唇を触れ合わせた。

## 第90話、死闘（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「ども！ お久しぶり、本来の主人公藤島圭介だぜ」

伊吹「あんた主人公だったっけ？」

圭介「ちょ！ 本来の主人公は俺だぞ！ 決して6話連続で俺の出番を奪った一方○行野郎じゃないぞ！ 主人公は俺なんだからな！」

あかり「うそだろ！？ あたはずっと早川悠が主人公だと思ってた！」

暮葉「拙者もミネットさんがメインヒロインで、早川悠が主人公だと思ってました！」

明智「藤島、確かお前は春に原って書いて春原<sup>ふじしま</sup>じゃ……」

圭介「ちょっと待てコラアツ！ 俺はポジション的に春に原よりも岡に崎<sup>ふじしま</sup>って書いて岡崎だぞ。それでも主人公だからな」

千早「先輩……先輩の名字って確か井ノ原<sup>ふじしま</sup>で、いつも筋肉って言うていたような——」

圭介「それも違うから！ むしろ筋肉は重原だから！」

純奈「ふん！ クソ介の名字なんて吉野<sup>ふじしま</sup>で狂犬で——」

圭介「それも違うわ！ 俺は鍵ゲーのサブ違うからな！」

葵「お兄ちゃんっ。とうとうお兄ちゃんが脇役に……でも皆の見ていない所でいちゃつき放題——」

圭介「やめい！ 次回から俺視点に戻るからな！」

## 第91話、プールって嬉しいイベント!……のハズ

——時は遡る事3日前、金曜日早朝の藤島家。

……眠い、なんという眠さだ。

朝ごはんを食べているというのに、眠気のせいかロクな味がしねえよ。

今日は特別寝起きが悪かったもんだから、伊吹にいい加減にしろとビンタされたし。

にも関わらずまだ眠たい……ちくしょう、絶対昨日まよ○キを見たせいだな。

しかも今日は帰ったらバカ○ス。さらに今夜は夜深ししてい○天を見なければいけない。

ハードすぎるぜ……俺のアニメ三昧な日常。

「けーすけ様、味噌汁落としそうなのですよ」

「悪い、ああ……眠っ」

「お兄ちゃんまた深夜アニメ見てたの?」

「うっせ黙れ。葵、てめえも水曜日はいつも眠たそうだろ」

水曜日に眠たいって事はどーせ葵の事だ、神様○オルズでも見ていたのだろう。

葵は俺の突っ込みに何も言い返せないのか、ただ苦笑いをしているだけであつた。

「あっ!　　そういえば今日はお兄ちゃんとクーにゃん、体育の授業

でプールあるんだよね？」

「はい！ 夏だけにプールなのです！」

「プールねえ……」

我が初芝高校は古宇坂で最も伝統ある高校である。

部活動も活発であり、中には水泳部というものも存在している。

その水泳部がまた強豪であり、何故かと言うと学校にプールがあるのだ。

つまり、夏期は態々高い金払ってプールを借りなくても、自分の学校でプールの練習ができる。

水泳部にとってはありがたい施設なんだよな。

でも、巻き添え食らうように一般生徒にもプールの授業があるのだ。はあ……プールとか憂鬱すぎるぜ……。

「もきゅ？ けーすけ様、なんだか顔色がよろしくないのですよ？」

「ね、寝不足だよ……」

「あれれえ？ もしかしてお兄ちゃん……まだ——うにゃっ！」

そう言いかけた瞬間、俺は瞬時に葵の口を左手で塞ぎ、右腕で首をガシッと固定してみせる。

「ああおいこウウウウウン！ 少し黙ってようかア？ あア！」

「け、けーすけ様が一方藤島フジシマっ！」

「はわわわっ！ ご、ごめんなさいお兄ちゃん！」

THE・顔芸。

葵を捉えた俺は鋭い目つきで彼女を睨み、殺意すら感じる勢いで彼女を脅してやった。

これぞ俺流うるさい妹の黙らせ方である。

ぐふふふ、言わせねえぞ……俺とプールの事については絶対になア。さて、葵も反省したようだからそろそろ解放してやろう。

「はふう……あ、ああ……はにゃ……っ」

「葵さんしっかりしてください！　けーすけ様の眼力に負けちゃダメなのですよ、葵さん！」

暮葉が葵の必死に肩を揺さぶる。

どうやら、今ので葵の魂はあの世へ行きかけてしまったらしい。よかったな葵。死ねば死んだポチと再会できるぜ。

「葵を勝手に殺さないでよ！　しかもポチはお兄ちゃんの友達のペットだよね!？」

「お前人の心が読めんのかよ！」

「ま、まあまあ二人とも！　それより早く食べないと遅刻しちゃうのですよ？」

「ええっ！？　お、お兄ちゃんが葵を脅すのがいけないんだからね！」

「お前いつからツンデレになったんだよ。まあいいや、さっさと飯食って学校行くぞ」

危うく葵との口喧嘩から変な求愛イベントが発生する所だった。  
葵がデレモードになると長いからな。本当に遅刻しちまう可能性が  
高い。

褒めすぎずいじめ過ぎず、これが正しい妹の扱い方である。

全国の妹の事で悩むお兄ちゃん諸君。これ家族関係良好の一番の秘  
訣だからな。

さてと、飯も食い終わったしそろそろ学校にでも行こう。

靴を吐きドアを開けると、やっぱり家の前の電柱に伊吹がによっか  
かっていた。

俺ら三人に気付くと伊吹はわざとなのか、俺に視線を合わせないよ  
うに近づいてきた。

うう……ツッパリ伊吹ちゃん。それって新手のいじめ方でございま  
しょうか？

「おはようございます伊吹さん！」

「お姉ちゃんおはよう！」

「二人ともおはよう」

ニツコリ笑う伊吹ちゃん。

ちよっと待て、なんか一人足りなくありませんか？

「あ、あのさ伊吹……俺は？」

「あ、圭介。あんた部屋でおはろーしたじゃん？」

「……寂しいからもっかい」

「っ……おはようは一回で十分！」

「ぐはあっ！」

まるで飼い犬に説教するような言い方で、伊吹はビシッと正論を俺にぶつけてきやがった。

ちくしょう……俺は伊吹のペットちゃんじゃないんだぞ。

朝っぱらからショックだぜ。しかも今日は一日鬱になる予感。

だって……今日授業でプールあるんだもん。

えっ、普通男なら女の子の水着が見れるから、大いに喜ぶべきイベントじゃないかって？

ハハハッ、確かに女の子のスク水姿は最高だよ。俺だって超みたいしそれだけは楽しみだよ。

でもプールだぞ、プールって事はもちろん泳がされるんだぞ？

「そーいえば葵さん！ 青山さんの事って何か聞きました？」

暮葉のヤツ、いきなり誰かの名前を出したと思ったら青山さんだって？

そういえば転校騒動あったよな。しかも昨日か一昨日の話のような気がするぜ。

頑張ったよなあ俺。古宇坂一の名家の当主相手にお説教だぜ？

あの時は勢いでやっちゃまったけどさ、今思い出すとおしっこ漏らしちまいそうだよ。

「うん！ 千早の転校なくなったんだって！」

「もきゅ！？ ホントなのですか！？」



「あの子の転校取り消しになったんだ。よかったわね！」

「よかったあゝ」

青山さんが転校しないことがわかり、大喜びの暮葉と伊吹。

とりあえず、俺もよかったって相槌を打っておこう。

衝撃の事実を告げられたような気もするが、別に俺は知っていたのであまり驚けない。

だって昨日、青山さんからメールでそんなお知らせがあったから。ちなみに、最後のありがとうにハートで萌え死にそうになったのは秘密だ。

「一時はどうなるかと思いましたよ！」

「そうね。とりあえずこれで安心だわ」

「うん！ お兄ちゃんもよかったね！」

「お、おう」

本当に良かった……青山さん、この学校で自由に出来る事になって本当……転校が取り消しになってよかった。

その後も、俺達はくだらない雑談をしながら学校へ歩き続けた。

やがて時が経ち、初芝高校2年4組教室。

2時間目が終わって次は体育。そう、プールのお時間だ……。

そんなイベントがあるせいか、2時間目が終わった瞬間教室が騒がしくなった。

「おっしやああプールじゃあああっ！」

「女子の水着やでえーっ！」

「僕もテンションが上がってきたぜ！」

特に三馬鹿なんて今朝からこのノリ。

そりゃあ女子の水着は嬉しいけどさ、よくプールでそこまでハイテンションになれるぜ。

こっちはもう今朝から憂鬱だったのによ。

「どーしたんだよ圭介？」

「冴えない顔してどうしたんだい？ 何か悩みごとでもあるのかい」

「大吾に重原か……別になんでもねえよ」

「そっかあ。僕ら先行ってるからなく！」

「そうそう、圭介も早くパラダイスにおいでよ」

「わかったわかった。授業には出るから心配すんな」

大吾と重原はルンルン気分でプールへと向かった。

大吾は多分単純に泳ぎたいだけだろうが、重原はきつと女の子目当てであろう。

アイツ、普段は興味ない素振りを見せているが、意外にムツツリスケベだからなあ。

女の子に興味がないと言いつつも、部屋にはちゃんとお宝本もあっ

たしな。

まあ、俺らは健全な男子高校生。お宝本の一冊や二冊は持っていて当然であろう。

しかしプールの授業……ああ、ホントはサボッていたいぜ……でもよ。

「あれ？　けーすけ様行かないのですよ？」

「圭くんプールなのに張りきってないねえ」

「意外だわ。いつものメンバーで一番変態の癖にっ」

「誰が変態じゃ！　わかったよ行けばいいんでしょ行けば！」

全くみんなせつかちだなあ、つーか俺は男だぜ？

皆さんと違って水着は海パン一丁なんだから、着替えにそんな時間はかからないんだぞ。

暮葉はプール好きっぽいし、小坂や伊吹も何気に好きそうだ。

大吾も泳ぐの結構好きらしくて、重原や三馬鹿は女の子目当てで。

まあ……女の子目当てって所なら俺も同意できるぞ。

だけどなあ、プールの授業自体は心の底から嫌だぜ。

だって俺、水恐怖症な上に泳げないから……ッ！

## 第91話、プールって嬉しいイベント!……のハズ(後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

小坂「ねえ、誰が一番女装似合うと思う?」

暮葉「もきゅ? 大林さんは小柄ですからいいと思いますよ?」

伊吹「ダメダメ、大林は顔がいかにもスポーツ少年よ」

生駒「クソ介とか案外似合うかもしれないよ?」

明智「ふ、藤島は男前だからダメだ……っ!」

あかり「変態兄貴は女装させたくない……キモイから!」

ミネツト「はいはいはい! 悠は絶対女装似合うと思うよ!」

暮葉「悠って早川悠ですか……? 確かに中性的ですよねあの人!」

明智「案外本当に女の子に見えるかもしれないぞっ」

葵「なるほど、鈴〇百合子ってわけだね!」

圭介「お前ら人様で気持ち悪い想像してんじゃないやねえ!」

悠「チツ……誰が女装似合うって？  
アア！？」

## 第92話、プールなんて嫌だ……と思っていたら！

突然だけど、俺は水恐怖症なんです……ハイ。

いや、なんでって言われても怖いもんは仕方ないじゃん。

別に洗顔とかは平気なんだが、何故かプールや海に入るのに抵抗があるんだよなあ。

こうなっちまったのにも理由があるが、話すと長くなるので手短にまとめよう。

あれは俺はまだ8歳だった頃――

――けいすけっ！　けいすけっ！

――あ、ぷあ！　た、たす――けてっ！

あの時俺は伊吹とプールで遊んでいたのだが、俺は溺れていた5歳くらいの女の子を目撃。

そのまま助けようとしたんだが、しがみつかれたまま泳げず、結局俺まで溺れてしまった。

しかも、助けた女の子に足蹴りされてしまい、俺はどうする事も出ずに水中へ落ちる。

5歳の女の子に悪気なんてない。怖くて暴れたという幼稚園児ならよくある行動だ。

だか、8歳だった俺はそれにやられてしまい、水中で次第に意識を失っていった。

結局5歳の女の子は親に助けられ、俺も伊吹に助けられたのだが……。

何故だかその一件以降、俺はプールとか海とか……とにかく、泳げるくらい溜まった水が怖くて仕方なくなってしまうた。

見る分には何の問題もないんだが、入るのは絶対に嫌だ。

「つか、この歳になっても怖いって……水恐怖症だってバレたら笑いモンだぞ？」

みんなより後に登場した俺は、ぶつくさ呟きながらプールサイドを歩く。

既にみんな着替えて集まっている。プールサイドで談笑をしている者が多い。

んで、俺は一人憂鬱な気分で……………。

「あつ、クソ介じゃん」

「——はい？」

「藤島、こんなところで何やってるんだ？」

なんだあ、この声は明智と生駒かあ。

明智はいいけど生駒は苦手なんだよなあ。

まあスルーすると明智にも悪いし、とりあえずここは振り向いて――

「ぶ、はあ——！？」

「うげっ！ クソ介が鼻血噴いた……っ」

「ど、どうした大丈夫なのか！？」

心配して迫ってくる明智……アカン、近づかれるとまずいぞっ。

しかも女の子の前で鼻血って、これじゃまるっきり変態じゃねえか。とにかく……今からでもコイツらから離れて誤魔化さないと。

「ス、スマン……さっきチョコ食い過ぎたんだ」

「どうだか？ どーせクソ介はナギちゃんの水着姿に興奮したただけだよ。下心丸見えだっつーの」

「すみにゃん藤島を信じてあげよろよ。藤島、チョコは程々にするんだぞ？」

「お、おう。心がけとくよ……っ」

言えねえ……今更生駒のツツコミが事実だって絶対に言えねえ。そうですよ。どーせ俺は明智のスク水姿に興奮したんですよ。

だって巨乳にスク水だぞ。貧乳スク水ならなんとも思わんが……正直、破壊力強すぎるっす。

反則だろ……その二つの吉備団子は……ッ！

ちくしょう誰だよ水泳の授業を男女混合にしゃがったヤツは。

しかもいくら伝統ある高校だからって、なんで今時旧型スク水なんだよ。

このままじゃ……俺が出血多量で死んでしまうじゃねえかよ！

「そろそろ整列の時間だ。藤島は鼻血出てるから無理はするなよ」

「えっ？ アッハハハ、鼻血くらいどうってことねえ！」

「プールを鼻血で汚すなよ。クソエロ介」

「俺はクソエロじゃなくて紳士だ！」

ふう……やっとなの二人が立ち去ってくれた。



明智は破壊力強すぎる。巨乳だけにやっぱり谷間がすげえもんだ。しかも生駒のスタイルも何気によかったし、胸は明智ほどじゃないが美しい気がしたよ。

やっぱスク水はラインがモロに出るからな。

つるべったんなロリよりも、ある程度成長した娘が着るのが一番やばいぜ……。

クソッ、水恐怖症だってバレる前に貧血で倒れそうだ。

……もちろん、4組に整列しても地獄は続いた。

当然俺ら男子の視線は女子なんだか、その女子のスク水姿がまたなんとも。

特に我が4組のミス・おっぱい、小坂亜紀ちゃんなんて……。

「ぶ、がはあ——！」

「む、ムツツリーニ圭介！ 大丈夫か、しっかりしろおおおおっ！」

「忘れていたよ。圭介って画像なら二次でも三次でも平気だけど、実際に見ると一番初心だった」

や、やべえ……明智とどっちが大きいんだろう。

小坂のスク水姿もヤバすぎる……ああ、貧血で死にそう。

しかも小坂だけじゃない。伊吹の起伏の少ない身体も中々抱き心地が良さそうだ。

暮葉のぺったんこボディーも捨てがたい……スク水って誰でも似合うから困る。

特にぺったんこな暮葉ややロリ体型な伊吹はお似合い。

生駒だってスタイルいいし……でも、スタイル抜群の小坂と明智は

46cm砲以上の威力だ！

「もきゅ？　けーすけ様……鼻血噴いてません？」

「暮葉は知らないかもだけど、圭くんって意外と初心なんだよねえ」

「普段一番変態な癖に、なんでなのかしらね？」

仕方ねえだろ、水着って全裸よりもエロく感じるんだから！

俺はな、別に全裸なら辛うじて耐えられるんだ。

暮葉と一緒に入った時だって耐えられたし、葵のだって事故で何度か見た事あるからな。

あとパンチラを見たって、そりゃ嬉しいし興奮はするが鼻血は噴かない。

けど……水着や裸ワイシャツ、裸でもニーソとか穿いていたらもうダメだ。

全裸はエロいけどエロくない、興奮するけど鼻血を吹くほどではない。

やっぱ女の子は着エロでしょ。そして俺は——実際に見る着エロに滅茶苦茶弱いんだ！

「う、ぐ……油断した。着エロフェチの俺には厳しいぜ……プールって場所は！」

「おお！　僕らの性戦士圭介が復活したぞ……っ！」

「立派だよ、よく復活したね！」

「僕には理解できないが、よくぞ死の淵から蘇った！」

「ふ、はははっ！ 俺のド根性をナメてんじゃねえぞ！」

あの世に行きかけたがなんとか復活を遂げた俺。

そんな俺を褒め称える大吾と重原は笑顔で泣いていた。

だけどいつ倒れる事か……こうして鼻血を押さえるので精いっぱいだぜ。

水は怖いし女子の水着姿で貧血になりそうだし。

女子の水着だけは嬉しいが、ああ……早くプールの授業終わらないかな。

……案の定、プールの授業というのは名ばかりだった。

体育教師の紅瀬<sup>くぜ</sup>先生は基本遊び人で、教師の癖に髪が金髪で……。

俺ら生徒の間では彼を“ヤンキー紅瀬”と呼んでいたりする。

人柄はもちろん見た目通り軽く、今日の授業だって――

『そんじゃまあ！ 今日自由でいいや、つか面倒だしモ前ら高校生だから毎回自由でよくね？』

と、いうわけで授業は完全に自由時間、つまり俺らの遊び時間になっ  
てしまった。

まあ……自由だからこそ泳ぐ必要もないし、俺にとっては都合がい  
いけどさ。

「きゃー！ 重原くんすっごい筋肉！」

「はははっ、一応毎日鍛えているからっ」

「ねえねえちよっただけ触らせて！」

「いいよ」

「あーたーしーもおーっ！」

「はいはい順番だからねー」

ちつくしう重原の野郎筋肉でモテやがって。

普段の爽やかキャラ＋健康的で強そうな筋肉。

ツラだってむしろいい方だ。まったく……モテ男ってクソムカつくぜ。

「ダアーツハハハ！ 喰らえ、ウォーターパラダイスウウツ！」

「黒やん過激やああっ！」

「うおおお、右手が……右手が真っ赤に燃えるっ！」

「喰らえ三馬鹿！ 僕の唯ちゃんへの愛を込めた……ハイドロ唯ちゃんカノオオオオン！」

大吾は三馬鹿に混じって馬鹿な水遊びをやっているし。

「うひひひっ。ナゝギちゃんここがええんかあ？」

「ん、ひゃ、あ……だめっ、すみ、にゃん……っ」

生駒のヤツなに明智のおっぱいマミマミ……いや、モミモミしてるんだよ。

これもう下手すりゃ18禁のアウトだろ。

あの二人が不純異性交遊で停学になりませんように……。

「伊吹ーパスッ！」

「——ッ！ 亜紀っ！」

「あいよっと！」

伊吹と小坂は友達とプールでバレーをやっていた。

なんともまあ微笑ましい光景。伊吹のあの姿は本当に癒されるぜ。  
……しかし、さっきも思ったけど本当に自由な授業だな。

これ野原にバレたらヤンキー紅瀬シバかれるんじゃないか？

「けーすっけ様っ♪」

「うおわあっ!？」

いきなり後ろから締め技……かと思いきや、ただ暮葉が抱きついてきただけであった。

その……背中に微妙に膨らんでいるものが。

暮葉でも一応あるんだ。つーか小さい割に柔らかい——ってツツコミ所ソコじゃねえ！

「けーすけ様はプール入らないのですかっ？」

「俺は別にいいよ。つーか早く離れて欲しい、じゃねえとみんなが……」

俺は冷や汗を掻きながら辺りを見回す。

野郎共が横目で俺を睨みながら、ヒソヒソと何かを話していやがる。

「藤島の野郎オ……やつぱ木下と付き合ってるんじゃないのか？」

「マジかよ。アイツ確か国宗と付き合ってるんじゃないか？」

「いや、3組の明智と付き合ってるって話もあるぞ」

「ちょっと待て。俺は一年のツインテールの後輩と付き合ってるって聞いたぞ」

「はあ！？ 俺は物静かな1年の子と付き合ってるって聞いたんだけど」

「待てよお前ら。藤島って妹に手え出したんじゃないか？」

犬もキューンと鳴きながら逃げるくらいの殺意が、俺に向けられている気がしてならない。

いや、絶対に向けられている。

今俺が暮葉と下手な事をすれば、確実にモテない野郎共に殺されてしまう。

ってか、俺もモテない男子の一人のハズなのに、なんで俺が野郎共に妬まれているんだよ。

そして、なんで暮葉相手にこんなハッピーなイベントが起こってるんだ？

こんなに嬉しいフラグを建てた覚えは皆無なんだが……。

「も、申し訳ありませんけーすけ様っ！」

咄嗟に離れた暮葉は本気で頭を下げてきた。

角度は斜め45度……コイツ、一番丁寧なお辞儀をしてきやがった。

「何もそこまで謝らなくても……」

「でもでも、拙者のせいでけーすけ様が恨まれている気が――」

「大丈夫。重原は俺以上に妬まれているし、誤解は多分すぐに解けると思うから」

そう……最近まで女子のメアドが数えるほどしかなかった俺。

いや、今も数えるほどしかないが、今年の春頃と比べれば大分マシだ。

だが女友達が増えたからと言って、別に彼女が出来る気配はない。結局俺は非モテ野郎だし、彼女なんて生まれてから一度もないから妬まれる要素ナシ。

今回は単なる誤解である……。

まあ、青山さんには告白されたけど、何故だか恋愛感情が沸かなかったし……。

俺、ホントに彼女が欲しいと思っているんだろうか？

それは思っているはずだけど、じゃあなんで青山さんを好きになれなかったんだろうか。

やっぱ、俺って気付いていないだけで好きな人がいるんじゃないか……いや、流石にねえよな。

「……あの、けーすけ様………っ」

「……え？」

「だ、大丈夫ですか？ 今朝からぼけーつとしてますし、鼻血も沢山噴いてました。あと……今だって表情が冴えないのですよ？」

まずい。

あまりにもボケつとしていたせいで暮葉に心配をかけている。

「ゴメン、俺は大丈夫だから暮葉は遊んでおいで」

「もきゅ、やっぱり変なのです！ 遊び好きなけーすけ様が遊ばないだなんて！」

仕方ないだろ水恐怖症なんだから。

……なんて、こんな小さな女の子に言えるハズがねえよな。

やっぱり体調不良って事で誤魔化そうかな。

でも暮葉は心配性だから……困った、このピンチをどう切り抜けられ  
ばいいんだ。

「別にいいだろ。泳ぎたい気分じゃねえんだよ」

とりあえず不機嫌そうにそうは言ってみた、だが。

「ウソはやめてください」

「う、ウソ？」

「けーすけ様は隠しごとが下手糞です。今の言葉なんて嘘丸出しでしたよ？」

「……………」

いつもと違って真剣みを帯びた暮葉のマジな言葉。

弱ったなあ……完全に俺の嘘がバレている。

ここでまだ嘘をつくようなら完全に暮葉の信頼を裏切っちゃおうし、  
事実を言うべきなんだろうか？



……でも嫌だなあ、絶対馬鹿にされるじゃん……暮葉にだってあんなヘタレな事言いたくねえよ。

「あの……本当のことを言ってください……っ」

「……………っ」

「けーすけ様。どんな理由でも拙者は絶対に笑いません。けーすけ様のことを小馬鹿にしたりなんかしません。ですから拙者に打ち明けて欲しいのです。トモダチの拙者に……っ」

暮葉は俺の前に座り込んで顔のみを近づけ、至近距離から俺を潤った瞳で見つめてくる。

ちよっと動けば額や鼻、そして唇が触れ合ってしまったいそうな……それほど近い距離。

彼女の生温かい息が顔にかかる。やべえぞ……これ、マジでカップルだって誤解されちまう。

だが、ヤバい状況なのに何故か嫌な気がしなかった。

太鼓を叩くような心臓の鼓動が早く、激しくなってゆく。

頬までかぁっと熱くなる……きっと俺の頬は紅く染まっているに違いない。

困った。嫌じゃないけど不思議な気分で……その上暮葉に迫られていて……っ。

でも、暮葉に引く気はなさそうだし。それに暮葉は無意識に顔を近づけているっぽいし……。

……ああもうわかったよ。馬鹿にされる覚悟で言ってみますよ。

「……俺、水恐怖症なんだよ……………っ」

「もきゅ？　水恐怖症……………ですか？」

それを言うとうとうやく暮葉が離れてくれた。  
よかった……でも暮葉との距離が近いのは相変わらず。

向かい合う俺達との距離は1mもなかった。というか暮葉の綺麗な太股が俺の足に当たっている。

ちくしょう、何故だか鼓動が全く落ちつかねえ……っ。

……ってくだらねえ事考えてねえで、暮葉に事情を説明しろよ——  
俺！

「その……アレだ。水道水とか洗顔とか、そういうのは平気なんだけど……海とかプールとかとにかく泳げる深さと量がある水がダメで……」

「けーすけ様……それでさっきから……っ」

「おかしいだろ？　トラックに轢かれるのは平気なのにさ、たかが過去に溺れただけで水が怖くなっちゃうなんて。笑えよ暮葉……」

俺はやケクソ気味に、自分を嘲笑うように言い放った。

こんなヘタレのクソ野郎は笑われて当然だ。

むしろ笑われない方がおかしいんだ。

——だが。

「笑えないですよ！」

暮葉は俺みたいなヤツの為に怒鳴ってきた——

「くれ、は？」

「ふざけるのもいい加減にしてください！　誰にだって欠点はある

のですよ……?」

「そりゃあそうかもしれないけど……」

「それで苦しんでいる人だっているのです、今のけーすけ様のよう  
に」

暮葉が俺の肩を掴んで熱血教師のように訴えてくる。

なんてこったい……俺が暮葉に負けてるぜ。

でも——もしかするとこれでいいのかもしれない。

「だから拙者はけーすけ様の欠点を笑えません。ネタにして馬鹿に  
することもできません」

「暮葉……」

早川悠と戦って後には俺が暮葉を慰めた。

そこで俺と暮葉は友達になった——でも今は逆である。

俺が暮葉に怒られ慰められている。

友達とは対等なモノ——そう、つまりこういうことなのだ。

「あ……っ、も、申し訳ございません……」

俺を怒鳴った事に対する謝罪であろうか。

何かに気付いた暮葉は急に頭を下げてきた。

「気にするな、悪いのはどう考えても俺なんだから」

「けーすけ様……あっ、そうだ!」

暮葉は何かいい事でも思いついたのか、表情を明るくしてポンっと手を叩いた。

「どうしたんだよ」

「今は恥ずかしいでしょうから……放課後、一緒にここで泳ぎましょう！」

「えっ……な、なんで!？」

アメリカ軍に特攻するゼロ戦の如く、暮葉はぶっ飛んだことを提案し、それを俺にぶつけてきた。

放課後二人きりで泳ぐって……ちょ、待て。これなんてエロゲー？

「水恐怖症、嫌で嫌で悩んでいるのですよね？」

「ま、まあそりゃあ……治るものなら治したいけど」

水恐怖症のままだったらイザ海に行った時、俺だけ泳げず女子に引かれる悲しい自体に。

もし間違っって海上自衛隊にでも入って、万が一戦争になって護衛艦が撃沈されたら一人だけ泳げず、というか海が怖くて飛びだせず、艦と運命を共にするという昔の提督みたいな事に。

そして何より……将来もし子供が出来たらヤバイ、子供にナメられてしまう。

絶対に嫌だ……そんな絶望しかない未来なんて嫌だ。

「でしたら今日から拙者と特訓なのです。けーすけ様、夏という絶好の機会に水に慣れましょうっ」

暮葉も乗り気だし、この笑顔をぶち壊したくはない。

何より男としてこんな恐怖症……さっさと治してしまいたい。

「よろしく頼むな、暮葉」

「お任せなのです！」

——こうして、俺と暮葉は放課後に特訓する事を約束した。

「——ばか圭介……っ！」

第92話、プールなんて嫌だ……と思っていたら！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

大吾「プールで生駒で思い出した。神〇みに生駒みなみって子いたよね？」

圭介「あ？　　そういえばいたような……それがどうしたんだ？」

大吾「あの子可愛くないか!？」

圭介「いきなりどうしたんだよ、また二次元キャラに惚れたのか？」

大吾「フフフ……あれこそ水泳部って感じでイイよね！　　僕はもう一瞬で惚れたよ!」

圭介「唯に惚れて撫子に惚れて……お前って結構浮気性だよな」

大吾「じゃあ圭介の好きな子は？」

圭介「アズにゃん歩美希メイ子ハルナ打ち止めマサムネ秀吉黒猫（ry」

大吾「好きな子のうち4人が同じ声優って……竹〇病乙、つか圭介ロリコン気味だろ……」

重原「あれ、一人だけ男の娘じゃない？」

※圭介の好きな子は20人はいます（※ただし二次元に限る）。

## 番外話、超能力が使いちゃう場合

超能力——今日の科学では合理的に説明できない、超自然な能力を指すための名称。

でも、それは一般レベルの話でしかない。

どういう事かと言うと、実は超能力者は実在するという事。

世間で認められないからその存在は影のものになっているだけ。

超能力者の中には自然に発現した人もいれば、私のように東京の人工浮島にある私立佐井学園に通う事によって、能力を発現させた超能力者だっているわ……。

——これは、ようやく春本番と言う3月ごろのお話よ……。

「へえ、君可愛いね？」

「綺麗な黒髪じゃん、俺こういう長い髪の女の子好みだわぁ」

「マジかよ、でも胸小さくね？ お前ロリコンかよ！」

「うっせ黙れ！ 幼さがちっと残ってるけどよお、見た目と逆に大人しそうなのがいいんだろ？」

私の名前は西園寺雪乃<sup>さいおんじゆきの</sup>、私立佐井学園2年……これでも超能力者。

佐井学園は全寮制なので、許可を得ないと外出が出来ないという面倒くさい規則がある。

増してや私達、超能力者は外での能力使用は基本禁止だから。



外出許可を得るのは結構難しい事なのよ。

でも、私はなんとか学園から外出許可をもらい、私は東京の街を一人ふらつき遊んでいた。

そしたら……変な奴らに絡まれてしまった。

「へえ、赤い瞳、すっげえ珍しいかも」

「緑っぽい制服ってのも珍しいなあ、もしかして最近出来た佐井学園って進学校のお嬢様？」

「ねえねえ！ 俺ら暇なだけどさあ、これから遊びに行かねえ？」

馬鹿馬鹿しい誘いをしてくる男3人。

正直、嬉しい気持ちよりも不快感しかないわ。

別に顔がいいと悪いとかそういう問題ではない。

ただ……私は単純にこういうのが嫌いなだけ。

「丁重にお断りさせていただきます……貴方達と遊んでいるほど暇じゃないわ」

「ああ？」

「なんだよコイツ……お高く留まりやがって」

はあ……こんな奴ら、恐怖も何も感じないわね。

ただ、あまりに頭が悪過ぎる上に、相手の実力も見抜けないだなんて……。

正直、ただのおバカさんにしか見えないわ。

「おい、こいつヤツちまおうぜ？」

「そうだなあ……まあたまにはガキ臭い女も悪くねえな！」

「……ふふ、おバカさん」

私は不良達を嘲笑った。

だって彼らはホントにおバカさんだから……私の実力を全く見抜けなかったんだから。

襲ってくるなら仕方がないよね。少しくらい能力を使っただけで文句を言われる筋合いはない……。

——数十分後。

私は佐井学園開発科の寮、自分の部屋へと戻り自分のベッドに転がっていた。

佐井学園開発科とは、表向きは技術開発分野を専攻するするものだけ……。

実際は私達のような超能力者を育成する、そんな怪しげなものだわ。私も最初は知らないで入って……いつのまに超能力者になってしまった感じだわ。

ところで、さっきの不良達はどうしたのって？

そんなの、能力で氷漬けにしたに決まっているわ。

私の吹雪念力は僅かでも水分さえあれば、瞬間的に冷やす事によって氷などを発生させられる。吹雪だろうが氷の塊だろうが、私にかかれればそれくらい作るのは余裕。

そして作った氷は雪は念力によって勢いよく飛ばす。もちろん氷以外のものも念力で動かせる。

そういうわけで私は、そこらの不良には絶対に負けない力を持っているわ。

「あ、雪乃お〜おかえりっ」

「ふふ、ただいま」

寮の私の部屋に戻ると、早速ルームメイトの木山朱実きやまあけみが歓迎してくれた。

朱実は私のクラスメイトであり、同時にルームメイトで幼馴染のとっても元気な子。

簡単に言えば、私は朱実と一緒に学園に騙されたってわけ。

「もお〜こんな時間までどこほつつき歩いてたの？　もしかしてまた秋葉原？」

「御名答。今日は沢山同人誌を仕入れてきたわ」

「うわあ〜すごい量……あんたのオタク趣味も相変わらずね」

「ふふふ、私にとってその言葉は褒め言葉よ」

「まああたしは別にいいんだけどね、一応雪乃は学園で五本指に入る超能力者だぞ？　雪乃の趣味を知ったらみんなどう思うかな〜」

「さあ？　でも私はこの趣味を捨てるつもりはないわよ」

理由は分からないけど、私は二次元がとっても好きだわ。  
むしろ現実リアルがクソに思えるくらいにね。

だから、誰が何と言おうと私はこの趣味を捨てるつもりはないわよ。

「あっはははっ。あ、そうそう雪乃、学園長がなんか雪乃に用事あ

るらしいよ?」

「学園長が私に? 珍しいわね、普段は早川と久我って人以外とは接触しない頑固親父が」

「早川と久我ってアレ? 学園で一位二位を争う超能力者で、確かライバル同士だっけ?」

早川は風系の超能力者で……一度だけ会ったけど冷めた人だったわ。まるで全てを捨ててしまったかのように……。対する久我はクールだけど不良みたいな感じ。

……まあ、二人とも普通の人ではなかった気がするわ。

「あの親父の事だからロクな用事じゃないとは思うけど、とりあえず行ってくるわね」

「おっけー気を付けてね雪乃っ」

「ふふっ、生きては帰ってくるわよ」

そんなセリフを残して私は部屋を出る。

ふふっ、一見戦場に行くようなセリフだけど、別にそういうわけでもない。

そもそも学園長は生徒が大事で仕方がないハズ。

だから、死ぬような事は普通はありえないハズよ。

……ただ、一部の生徒に汚れ仕事をさせているって噂はあるけど。

「失礼します」

薄暗い西洋風の広間、その中央に佇む背の低いバーコード頭の男。ワインのように紅いスーツに、金ぴかの腕時計。

成金のようなその男は不敵な笑みを浮かべ、ゆっくりと振り向いてきた。

「君が五本指の一人、西園寺雪乃君だね？」

「はい……あの、学園長。私に何か用でございますか？」

「うむ。彼だけでは厳しいだろうからな。実力の高い君にも是非手伝って欲しい事がある」

「私に……ですか？」

学園長はゆっくりとその足を動かし、少しずつ私に近寄ってくる。

煙草臭いわね……出来ればその銜え煙草はやめて欲しいわ。

でも、生徒が教師にモノ申すなど反逆に近い。

増してや相手は学園長。そんな小さなことで注意など私には出来なかった。

弱気な私に近付いてきた強気な学園長は、私に一言。

「……お前に人殺しをしてほしい」

「……ッ、どういう意味でしょうか……？」

「言葉のままだ。これは極秘情報なのだが、最近どうも無国籍者が国内で暴れているらしい」

「無国籍者……ですか？」

「そうだよ君。存在が許されない無国籍者だよ。その無国籍者は無国籍者同士で争っており、至る所で何らかの能力を使った痕跡を我が学園は発見したんだ。無国籍者の2グループが争う事自体には問題はないが、そいつらは超能力か何かは知らんが何らかの能力を使う連中だ。このまま野放しにしていたらいずれ我々も危険かもしれない。将来の事を考えての、身の安全の為の極秘作戦だ……どうだね西園寺君？」

ちょっと待って、これってどういう事なのよ。

普通学園長が生徒にこんな話をする？

ここは現実<sup>リアル</sup>よ。やっぱりこの学園は何かが狂ってるわ……っ。

「……申し訳ございません。そんなトチ狂った作戦には参加したくありません」

相手が善か悪かもわからないのに……増してや人殺し？

そんなの、自分が死んだってやりたくないわよ。

やっぱりこの学園は——狂っているわね。

「……そうか、下がってよいぞ。ただし……この事は秘密でありもし暴露した場合は……君に特別指導が待ち受けているからな」

「……わかりました、失礼しました」

背を向けて早歩きで逃げるように部屋から出る。

一応、学園長相手にお辞儀はしたけど、正直そんなことなんてしたくなかった。

私は今あの学園長に対し、猛烈に不信感を抱いている。

あの人の考えている事がわからない。あの人のやりたい事がわから

ない。

どうして善悪も決まっていけないのに、増してや無国籍者だって証拠も怪しいのに。

どうして学園長は人殺しを……よりによって立派な犯罪を生徒に犯させようと……？

「はぁ……っ」

思い返せば学園に入ってから以来、ロクな事がなかったわ。

学園に騙されて超能力を発現させられて……まあ、そのおかげで不良にはアッサリ勝てるけど。

それでも常人とは違う人になるよう、脳を散々いじくられてしまい、挙句の果てには学園長からの殺人命令……狂っている。この学園は何もかもが狂っている。

……いいんだろうか。立派な教育機関がこんなんで、ホントに正しいことなのかしら？

「……正しいわけないわよね………っ」

このままじゃいけない……絶対にいけない。

生徒がいつ学園長の無理な頼みごとに巻き込まれるか。

いつ生徒が何かの騒動に巻き込まれてしまうか。

そのような状況に置かれている学園なんて、絶対におかしわよ。

みんなが騒がないのは知らないから。でも私は違う……知ってしまった。

知りたくもなかった事実を知ってしまった。

そして、知ったからにはもう黙ってはいられない……っ。

私の中の何かが真実を闇に埋めてはいけないって、私自身に強く訴えかけている。

「……そうよ。特別指導なんかで震えている場合じゃないわ……っ、私は五本指の一人よ？」

その気になれば軍隊だって相手にできるのよ。

そんなすごい能力の持ち主が、内容が不明な特別指導が怖いからって真実を見過ぎす？

できるわけがないわ。そうやって……今まで情報が隠蔽されてきたんじゃないの。

だから――変えてみせるわ。この学園そのものを……この超能力チカラを使って……っ！

「ふふ、やってやるですっ」

っと、私は気合いを入れる為にアズにゃん風にそう言ってみる。そして衝動的にくるっと振り向き、私はある場所へと向かった。

……場所は変わって学園の東側、実を言うと学園の東側には出入口がない。

実際にはある事にはあるのだが、警備員らしき人達によるお堅い警備のおかげで侵入不能。

だから私は裏ルートからの侵入を試み、それは見事に成功した。

その裏ルートとは天井裏のダクト。ふふっ、ここから潜入する人はラノベの武偵くらいだろうね。

「よっと」

通気口から抜けだし無事に着地を果たす。

今度から通気口付近も警備することね。



超能力を使うに当たって最も重要なのは頭脳だから、レベルの高い超能力者は基本頭がいいのよ。

私でさえ、校舎東側への侵入方法をパツと思い浮かべれたのだから。まあそもそも、頭の固い大人達には無理な発想なのかしらね。

「さ、てと……お仕事開始よ」

こうみえても東側に侵入したのには理由がある。

だって生徒はおろか教師さえ一部を除き、侵入が認められない未知のエリアよ。

普通に考えれば秘密はここにあるわ。きっと、何かの機密文書きみつぶんしょくらいはあるハズよ。

それさえ盗めば学園長が何をしようとしているか、その為には何が行われるのか、闇に包まれ隠された真実を暴く事ができる――

「止まりなクソアマ」

「……ッ」

しまった、あまりにもものんびりしすぎたのかな。

私は見張りの者に見つかってしまったらしい。

仕方がない、一瞬で倒して情報が伝わる前に先に進もう。

私は後ろを向き、超能力を使うために身構える――が。

「久しぶりだな。テメエは確か……西園寺雪乃ってヤツだったか？」

「久我劉生……ッ」  
くがりゅうせい

背が高く、整った顔立ちでくすんだ金髪の男。

まさしく早川悠のライバル――久我劉生その人であった。

「ここは立ち入り禁止だ。テメエは一体ここで何をしたいやがる」

「それはこっちのセリフよ……貴方こそ立ち入り禁止区域で何をしているのかしら？」

「逆に質問して自分は答えない魂胆か。まあいい、俺は学園に頼まれてここの警備をしているだけだ。クソが……特異点潰しを俺にやらしてくれたらよかったのによ。こっちはアイツの影に隠れて地味な警備だぞ」

久我は不満そうにブツブツと文句を言うが、その中に気になる言葉がいくつか含まれていた。

学園に頼まれたって、今日の私みたいな感じかしら？

それと……特異点潰しって一体……？

聞いた事のない単語に深まる謎……直接聞いた方が早いかしら。

「久我、特異点って一体なんなのかしら？」

「テメエ関係はないだろ。知った瞬間テメエはカタギじゃなくなるしな……」

「カタギ……？     もしかして、特異点潰しは人殺しかしら？」

「ハア……？     あゝあゝカタギは見逃そうと思ったけど、どうやらテメエ……それを知っていてここに侵入したみてえだな？」

知っていて——？

それって、まさか本当に特異点潰しは人殺しなの？

しかもまぐれで特異点潰しの中身を当てた瞬間、久我の目付きが9

0度ほど変わってしまった。

獲物を狙う肉食獣の目、徹底的に殺すと言わんばかりの殺意。まずいわね……このままじゃ私は食われる豚だわ。

「カタギには手を出さない……相変わらず硬派なのね」

「関係ねえ奴は関係ねえ……区別はしっかりしているつもりだ」

「貴方のその硬派なキャラ、漫画のキャラなら好きになってたわよ？」

「お生憎様ここは現実だ……<sup>リアル</sup>」

「残念ね……五本指同士、出来れば戦いたくはなかったのに……っ」

本当に出来る事なら戦いたくはない。

何故なら久我は最強と言われる早川と張り合う男。

つまり——学園で一位二位を争う強さとチートな能力を振るう男よ。私も同じ五本指とは言え、彼との直接対決で勝てる自身はないわ。本当……出来る事なら戦いたくなかったわ、でも……。

「さてと、お片付けの仕事開始だ……」

久我は不気味なくらいゆっくりと、細いが若干筋肉質な腕を横に大きく広げた。

そして——目が前髪で隠れ、口元が不気味に笑うと。

「<sup>……………</sup>デメエは殺し確定だな」

そう告げた。

「——ッ！」

刹那、突然身体が重く、全くと言っていいほどに身動きが取れなくなる。

全身に満遍なく重りを乗つけられたような感覚。

いや、自分自身が重くなったような感覚かもしれない。

私は潰されるような重みに耐えられず、思わず膝を綺麗に布かれた絨毯についてしまった。

私は久我が使う超能力を知っている。だから、久我が何をやらかしたのかもすぐにわかった。

「じゅ、じゅう……りよく……っ？」

「知ってたか。確かにテメエの所だけ重力を10倍に設定してやった」

ウェーブハウンド  
「……波動操作っ」

ウェーブハウンド  
波動操作。久我が持つ超能力。

この世に存在するあらゆる“波”の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る。

他の能力の代用的な技も使えて応用力は極めて高く、使い方次第では破壊力も抜群。

「動けねえだろ……？　なら、次はコイツだな……」

あまりにもチートすぎる能力の持ち主、久我の次なる攻撃とは何かしら。

答えは今すぐ私に放たれようとしている。

突然、久我の掌から光り輝く光線が放たれる。

今の私は10倍の重力に耐えるので限界。あの光線を避ける事なんて不可能だわ。

でも、氷の装甲を作りだす事なら辛うじて。

精神を集中させて複雑怪奇な計算を瞬時に行う。同時に己の幻想を思い浮かべる。

——すると、ごく僅かな水分をかき集める事に成功し、私の前に強固な氷の装甲が完成した。

「……ッ……ッ……ッッ！」

装甲と言っても所詮は氷。瞬時に粉々に破壊されてしまったが、光線から身を守る事には成功した。

久我め……相手を見下して本気を出していないわね。

本気でやればあんな装甲、砕かず貫通して私の胸さえも貫いたハズよ。

「手を抜いたわね……っ？」

「小手調べだ。テメェがどの程度の使い手だかな」

「それで、私の力はどうなのよ……？」

「……同じ五本指にしては大した事ねえな」

「ふざけた事言ってくれるわね……私は動けなくても貴方を攻撃できのよ？」

あまりの重力に身動きを取る事ができない、全身に激痛を感じる。それでも単純な演算なら余裕のよっちゃんだわ。

ニヤニヤと笑いを浮かべながら私は、水分を集めて4本の大きな氷柱を生成する。

先端が刀のように鋭利な氷柱を、今度は念力で砲弾のように動かして見せる。

氷柱も粉々になるが、恐らく戦車の装甲さえも貫く威力のハズ——しかし。

「全く——面白い技を使ってくれるな——」

一言呟く時間。

そんな時間なんてなかったハズ。氷柱は喋り出す寸前に久我に突き刺さっていたハズ。

でも、あの氷柱が身体に突き刺さる事はなかった。

氷柱はなんと久我的手前で水となり、細かい飛沫だけが久我到に噴きつけていた。

ただそれだけ……全くの無傷で北叟笑む久我的姿が私の目に映った。

「そん、な——」

「驚くなよ。俺は物質を別モンに変えたただけだ」

「……超弦理論ね……ッ」

「よく御存知だな。素粒子レベルの波として変換し、不思議じゃねえけど別の物質に変化させる」

説明しながら久我はゆっくりと近づき、いや……いつの間にか私の目の前に立っていた。

しゃがんだまま動けない私を見下ろし、相変わらず北叟笑む久我。なによ……その人を嘲笑う目は？

「重力、解除」

「……ッ！」

何故か久我は重力を元に戻す。おかげで身体が身軽になった。

身体に痛みが残る一方で、解放感が私の身体を支配する。

久我が重力を1Gに戻し、元気に動ける今のうちに攻撃をしようとした。

「——いぎゃ、あッ！」

刹那、革靴の先端が私の顎に突き刺さる。

久私の足蹴りを受けてしまった私は、成す術もなく後方へ吹き飛ばされる。

その後方にはT字路があり、私は背中をその先の壁へ強く叩きつけてしまった。

「ぐ、ぎゃ、あ——ッ！」

「重力を元に戻したのは動く為だ。俺も10倍の重力じゃ満足に動けねえ……」

説明しながら嫌らしく歩み寄ってくる。

敵が近付くにつれて心拍数が上がってゆく。

あまりにも強すぎて……久我が怖い……。

「しかし学園も難しい注文をしてきやがる。校舎を破壊せずに能力を使いやがれとは……あの暴風野郎には無理な話だな。だからこの俺を警備員に選んだわけか」

しかも久我は本気を出していない。屋内だから本気を出せな——待て、考えなさいよ私。

屋内だから本気を出せない。という事は……久我は真の力を発揮できない。

……理解出来たわ。この状況だからこそできる、久我への必勝方法

「さてと。さっさとクソアマを愉快的死体に仕上げてやるか」

能力を使えば校舎が傷つく。

そんな判断からか、久我は慣れた手つきで拳銃を構え——

「——させると思うかしら!？」

私は久我が拳銃を構える僅かな隙を突き、一瞬のうちに銃を持つ右手を握る。

しかしそれだけだと撃たれてしまう。ならどうするか——答えは決まっている。

私は大気中の僅かな水分を瞬間的に冷却。その範囲は私の右手が握っているもののみ。

ただし私は影響を受けないよう、能力を使用した瞬間この手を久我から離れた——

「う、ぐあ——つ、めっ——ッッ！」

「……凍傷になっちゃえば、銃は使えないわよね？」

そして、痛み故に人間は冷静さを失う。

久我也例外ではなかった。



焦って左手を突き出し——光を変換して光線<sup>ビーム</sup>でも放つつもりだったのでしよう。

「遅いわよ——ッ！」

右手に作りだしたバレーボール程の塊。

それをボーリングのボールのように投げつけるが、距離が近いために久我の腹部に命中する。

「——が、はっ！」

減り込む氷の塊の弾を受け、久我は大きく開けた口から鮮血を吐きだす。

密度の高い白色の塊が、久我の血で紅く血みどろに染まってゆく。でも、この程度じゃ久我はまた動きだす。だから——

「吹き飛びなさい——久我劉生ッ！」

「う、ああ——ッ！」

私は念力で塊を動かし、塊に押される久我也一緒に吹き飛ばしてみた。

吹き飛ばされた久我は50m程先にあった壁に激突。

丁度、そこは廊下がL字型に曲がっている場所だった。

壁への衝突による背中への大打撃、腹部に力強く減り込む氷の塊。久我は血を吐き、直後に力強く歯を食いしばる。

あの攻撃に耐えた久我は、激痛にムカついてしまったのか。

「痛ってえ……だろオッ！」

「18インチの電……二段射撃——ッ！」

左右両手に作り出した約46cmの巨大な電。  
ネブラスカ州に降ったものより若干小さいけど、それでも十分巨大な電を二個念力で飛ばした。

前後に並び、一直線に突き進む電。先頭を砲弾のように飛ぶ電は久  
我の光線で粉々に破壊される。

校舎の破壊を防ぐべく、最低限の威力でしかなかった光線は電と共に  
砕け散った。

しかし——私が放った電は二つ。そのうちの一つは未だ久我へと突  
き進んでいた。

「な……ッ！ 防御と攻撃を同時に——！？」

「これが私の全力全開——突き進めええええええッ！」

「格下が……ッ、この屈辱はいつから晴らす——ッ！」

ドゴン！という衝突音が炸裂する。

衝撃は一瞬、でもその一瞬はあまりにも残酷。

この一撃で、五本指同士の勝負は決した。

夜空は輝いていないけど、その代わり東京の街灯りが綺麗だわ。

私はお台場海浜公園から夜景を眺め、勝利の余韻に浸っていた。

あの後——顎への一撃と激突による背中の痛みが思いの外大きく、

結局私は東側校舎から脱出した。

機密文書を盗み出す事に失敗し、結局何の秘密もわからなかったけ  
ど……。

でも、私という一人の人間にとっては、とても大きな事をしたような気がする。

だって……勝ったのよ。最強と呼ばれる早川悠と張り合っていた、あの久我劉生に――

「勝利、ねえ……………っ」

いまいち実感がないわ……………だって、相手があの久我劉生だもの。きっと戦場が校舎内で、校舎破壊禁止令があったからこそ、私は久我に勝てたんだと思うわ。

久我の能力は強すぎて、強大な能力を満足に使う事ができなかった。戦場が狭いから行動範囲が狭かった。

学園による制限と狭い戦場、そして久我の僅かな油断が勝負を決した。

「……………」

「……………たく、一人で勝利の余韻に浸ってんじゃねエよ」

声がした。聞いただけで背筋が凍る、冷たく残酷で血に飢えた、狂気に満ちた声が……………。

「――ッ！」

衝動的に振り返る。

月明りと街灯りとが照らす砂浜に一人、白く狂った悪魔のような一人の少年。

狂気に満ちた超能力者――早川悠が不気味に佇んでいる。

「奇跡的に久我のクソ野郎を倒したって聞いてなア……………」

「……だ、だから何。貴方には全く関係のないことでしょう?」

「佐井学園からオレへの御命令。潰して身柄を確保しろってよオ?」

つまり最強の超能力者、早川悠は佐井学園の命令で動いているのね。だから久我の名前が出てきたのね。

そして、敵意……いや、殺意を私に向けている理由も……っ。

「な、なによ……やるの? 私は貴方のライバルを倒したのよ?」

「なに言ってるんだ三下。オマエ……もしかして調子に乗っちゃってるワケエ?」

「乗ってないわ。ただ事実を素直に伝えただけよ……っ」

「オマエ程度が久我に勝てるってのは、1%程度の奇跡が起きたって事だろ? それによオ……オマエ、まさかオレが久我と互角だっと思ってんのか?」

「なによ……違うの?」

「確かにあのクソ野郎とは一度も戦ってねえ。けど、なんでオレが一番なのか知ってるか?」

早川悠が一番でいる理由……そんなの、私が知ってるわけないじゃない。

しかも何様よ。直接戦った事がない癖に、自分のほうが強いって思いこんで。

こういう勝ってる気分だけの人……私、あまり好きじゃない。

早川悠との比較ならまだ久我のほうが好きだわ。

「知らないわ。第一、貴方と久我がどっちが強いのかもね」

「なら、たっぷり愉快に素敵に教えてやんよ……」

つまり……私と一戦交えたってわけね。

いいわ、やってやるわよ。

久我を倒した勢いで早川も倒してやる。

そうすれば、私は一番最高の超能力者に勝った超能力者として、学園から恐れられる存在になる。

そうなれば警備員は逃げ出すし、強力な人間も戦うのを躊躇するハズよ。

本当にいい機会じゃない……。

「……倒してあげるわ、早川悠……ッ！」

「遊んでやるよ……三下ア」

早川は確か大気そのものを操る能力者だったはず。

でも、所詮それだけよ。氷の塊を暴風で吹き飛ばす事はできない。

私の念力は暴風程度じゃ無効化できない——！

「……ぎゃ、は——！」

「——ッ！」

信じられない事が発生した。

ざっと直径25cmはあった塊が、砲弾のように突き刺さる——はずだった。

だけど塊は早川を目前に、瞬間的に蒸発してしまった。

なにが……一体、何がどうなったのよ……。

どうして……なんであんな一瞬で大きな塊が蒸発しちゃったのよ。

「例え念力を使っても、オレの暴風の膜を突破できねえと思うが……  
…今のはサービスだ」

「さ、さーびす……っっ？」

「ホントは気圧操作で押し潰してもよかったんだけどな。愉快的なシ  
ョーを見せつけんのも面倒だし、だから分子運動の操作で我慢っつ  
ーわけだァ」

「うそ……っ」

「オマエの氷くらいいくらでも碎ける、蒸発もさせれる。仮にオレ  
に近づけたとしても、オレの周囲に張り巡らした暴風の膜がソイツ  
を弾き返す。吹雪<sup>ブリザード</sup>つてのも無駄だァ……逆に風を吹かしてオマエに  
吹雪を向けれるんだからよォ？」

「そんな——」

全身の震えが止まらない。足が震えて動かない。冷や汗が流れ続け  
る。

背筋が凍って死後硬直のように硬い。そして……恐怖によって感じ  
る圧迫感。

……違う、何かが違うわ……早川悠と私。根本的な何かが……ッ。

「さってとォ……そろそろおやすみするかァ？」

「いや……っ、た……助けて……っ」

殺される——瞬間的にそう悟った。

「ふふ、あはは……ふぎやは、ふはぎやは、あはっ、いひやはっ、ぎやははははっ！」

私が最後に聞いたのは——早川悠の正気の沙汰とは思えない笑い声だった。

笑い声が響くと同時に、私は次第に意識を失っていった……。

……

……

……

「……ん、あれ……っ？」

夢……だったのね。

気付けば空き地に放置してある土管の中。そういえば、昨日も一昨日も野宿だったわね。

その度に私、西園寺雪乃は……つい4ヶ月前の出来事を思い出していた。

——あれから私は特別指導を受け、その真っ最中だったけど……耐えられなくて逃げ出してしまった。

ついに一昨日学園を飛び出し、気付けば古宇坂という知らない街に来ていた。

……そういえば、夢で思い出したけど……朱実、元気かな？

今朱実はなにをやっているのかしら。

それと、早川に久我……アイツらも今はなにをしているのかしら？  
多分……懲りずに汚れ仕事を続けていると思うけれど。

結局、私があの時決起した意味ってあったのかしら……？

決起の結果は早川に惨敗して、学園にあった私の居場所がなくなっ  
てしまっただけ……。

「……はあ、高校……行こうかな？」

ふとそんな事を思った、佐井学園……上に勝てないなら辞めちゃお  
う。

反乱を起こした私ならきつと学園も不要と判断し、バツサリと勢い  
よく捨てるはずよ。

じゃあ、捨てられたら……せめて、普通の女子高生として生きよう  
かしら。

「……決めたわ。もう転校しちゃう……っ」



## 番外話、超能力が使える場合（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

あかり「なんだよ!? この無駄に長い番外話っ!」

圭介「さあ? でも後々本編に響くんじゃね?」

あかり「んみゃ、なんで?」

圭介「いや……なんとなく?」

あかり「なんとなくかよ! そんなはつきりしない圭介はあたい信用しないからなっ!」

圭介「だってわんらないだろ? 某学園都市ラノベが好きな作者がインスパイアしてそれっぽい書いただけかもしれんし」

あかり「それインスパイアじゃなくてパクリだろ!」

圭介「とにかく……よくわからんっ!」

あかり「だ、だめじゃんっ!」

※特異点潰しの裏側を書きたかったのが本音です。

### 第93話、特訓と乱入と夢と

そして約束通り、全ての授業が終わった放課後。

俺と暮葉はマジでプールに来てしまった。

なんてこったい……3〜4時間目のプールのせいで水着がびしょびしょだ。

正直着心地は最悪であるが、暮葉曰くプールに入っちゃえば気にならないとのこと。

それにしても、なんだって今日に限って水泳部の練習がないんだか。おかげで今日の放課後は……超怖い目に遭いそうな気がするぜ。

「さあけーすけ様っ、早速ですけどプールに入ってみるのですっ」

「あの……ちなみに拒否権は？」

「ありません！」

「……ですよねー」

ちくしょう水怖ええええっ！

でも暮葉に逆らうとなんか怖いし、晩御飯とか抜かれそうだ。

抜かれたら葵に作ってもらうか、俺が自分で焼きそばを作ればいい話だが……。

今はお金がないし、葵のグロテスクな料理は出来れば食べたくない。

「けーすけ様っ！ 水恐怖症克服にはとにかく水に慣れることが大事なのです」

「水になれるねえ……って、お前まさかいきなり突き落したりし

ないだろうな？」

「大丈夫なのです！ 無理強いたり急に慣れさせようとするのは逆効果だって、同じアルファ隊の水系統魔法が得意な後輩に言われた事があります！」

でもアルファ隊ってただの魔法使い集団だし、信じていいのかそんなこと。

あと、暮葉に後輩なんていたんだ……。

しかも水系統の魔法使って、俺にとっては恐怖以外の何者でもねえぞ。

「でも、無理強いしない癖に拒否権はないんだな」

「だって慣れなきゃ治らないのですよ？」

「……………」

「大丈夫ですよっ、拙者がちゃんと支えてあげますから！」

「お、おう……っ」

このちっこい暮葉が何故だかお姉ちゃんに見えるよ。

それにしても、スク水は身体のラインがよく出る水着だが。

こうして見ているやっぱり暮葉ってぺったんこ——

「……今、失礼なこと考えましたよね？」

「ソナナコトナイゾ！？」

「なんでカタコトなのですか!？」

「キノセイダ、ツツケタマエ」

「もきゅ! やっぱりけーすけ様失敬な事考えてるのです!」

だって仕方ないじゃん男の子なんだから。

そりゃ目の前に水着の女の子がいたら、自然に女の子の事を考えちゃいますよ。

男と言う生物ほど可哀想なものはいないだろう。

目の前に乙女がいればすぐに反応しちゃうんだから……フツ、だが逆に考えよう。

女子にだって変態はいる。つまりだ……変態じゃない人間っているのだろうか?

「……あの、今度はなに小難しい事考えてるのですか?」

「気にするな。ちよつと夏休みどうしようかなうって考えてたんだ」

「今夏休みのこと考えるような場面じゃないですよね?」

……ちくしょう、なんて鋭い子なんだ。

暮葉の前じゃ下手な事は考えられないな。

しかも暮葉との距離が……その、今にもくっついてしまいそうなくらいに近い。

でも、そんなことを考える前にまずこの場をどう切り抜けよ――

「ぐ、ぼあ――!？」

その時、突然尻を何者かに蹴られた俺は、成す術もなくプールへ地

獄のダイブを果たしてしまった。

——ていうか俺は恐ろしき水ではありませんか！  
し、しかも俺泳げねえ……ッ！

「あ、ぶお——ちょ、助けてえ〜っ！」

「け、けーすけ様っ!？」

沈みそうになって慌ただしく暴れる中、俺は暮葉の横に立っていやがる犯人を見た。

俺を蹴り飛ばし、恐ろしきウォーターパラダイスへダイブさせた犯人は……。

「公の場でいちゃいちゃすんな！　ばか圭介っ！」

スク水姿の伊吹がプールサイドで、俺を蹴った右足をあげて必死に叫んでいた。

伊吹のヤツめ……よくも俺をプールに突き落としてくれたな。

しかもアイツ——俺が泳げないのを知っててやりやがったろ！

ちくしょうあのツッパリめ……悪魔のような事をしやがって……ッ！

暮葉が妙に近くにいるのは俺のせいじゃない。暮葉が勝手に近づいているだけなのに。

「い、伊吹さん！　けーすけ様は水恐怖症で泳げないのですよ!？」

「あはは〜ごめん暮葉。伊吹が止めても言う事聞かなかったんだよな〜」

「い、はあ——ッ！」

あ、アカン——小坂までスク水姿でプールサイドに立っていやがる。その豊満な胸に抜群過ぎるスタイル。

何より微妙に濡れたその身体。裸よりもエロく見える旧型スクール水着（巨乳ver）。

あまりのエロに俺の鼻が悲鳴をあげた。

鼻血、そう——鼻血だ。我慢の限界に達した俺は遂にそれを噴射してしまったのだ。

それもプールの中で……プールの水は俺を中心に真っ赤に染まってゆく。

「もきゅっ!？」 け、けーすけ様がまたムツツリーニ状態に!？」

「ごめん、圭くんの鼻血はあたしのせいかも……っ」

「へ、へんたい……非常識……ばか圭介っ!」

うるせえ変態は仕方ねえだろ。こちら元気が有り余る思春期の男子だ!

思春期男子が変態ってのは健康的でいい事じゃねえかよ。

まあ、浅間部長のようにアブノーマルすぎるのは流石に危険だが。

しかし……ぺったんこの暮葉。体つきは女の子でもロリ体型な伊吹、そしておっぱい小坂……っ。

うぐ……なんだここは。天国ってヤツなのか……ッ?

「が、は——ア——ッ!」

「もきゅっ!？」 け、けーすけ様の出血量が危険なレベルに!？」

「圭くん泳げないしみたいだし、しかもあの様子だと貧血だから……そろそろやばいんじゃない?」

「あいつ……まさかまだ泳げなかったの……っ？」

オイッ、ツツパリ伊吹ちゃんめえゝ忘れてたのかよッ！

ちくしょう………忘れたとは言わせねえぜ。俺はまだ………泳げない、  
そして水が怖い。

でも今は水よりも……お前らの水着姿のほうが……ッ。

「……我が生涯に一片の悔い無し……ッ！」

「はわわわわっ！ 死んじゃいますっ！ このままだとけーすけ  
様が死んじゃいますよっ！」

「圭くん死んじゃうって。いいのかなゝ伊吹？」

「……えっ……いや……圭介っ！」

伊吹がプールに飛び込み俺の所まで泳いできた。  
自分で突き落とした癖に必死になって泳ぐ伊吹。  
それを見た時安心した俺は——やがて目の前が真っ暗になる。

………

………

………

「ねえ、けいすけっ」

空が茜色に染まる時間、古宇坂市内にあるとある公園。

その公園にあるブランコに、まだ幼かった俺と伊吹はちよこんと座っていた。

赤いランドセルにシヨパンに水色のTシャツ。

伊吹はどこにでもいそうな小学生の恰好をしていた。

この伊吹はおそらく、小学校1年生の頃……それも伊吹の様子から入学してすぐの頃かな。

暗黒時代を抜けだし、ようやく友達が出来てこの頃の伊吹は上機嫌だった。

そういえば、俺の視線も低い……俺も子供になっているのか？

「なんだよ？」

「あしたの作文になんて書く？」

「そーだなあ……俺、サシレッドになるって書く！」

「けいすけ昔からずっとそれだね！」

サシレッドとはサシレンジャーの登場人物で、サシレジャーとは当時流行っていた戦隊モノだ。

戦隊モノと言いつつ最後はレッドと敵キャラのタイマンという……。まあ、ぶっちゃけ戦隊の意味があるのかわからない物語であった。

戦隊モノにありがちな特殊兵器はあっても、肝心のレッドに必殺技がなかったりで。

結局、レッドの攻撃手段は殴る蹴る程度であった。

「うん！俺、レッドになってこれからも伊吹を守るんだっ！」

「えっ……でも私、もういじめられてないよ……？」



「でも悪い奴はぜったいいるもん！　だから俺、強くなって伊吹を守るんだ！」

ぐはぁ……ガキの頃の俺、どんだけ痛くて恥ずかしい事言っただ。

「……決めたっ！」

「え、なにを？」

「私はね、作文にけいすけのお嫁さんになるって書く！」

おい、ガキの頃の伊吹がなんかすっげえ爆弾発現しやがったぞ！  
俺のお嫁さんになるって……しかもこんな満面の笑みを浮かべて。  
いやいや、でも誰もが子供の頃「結婚」って、超軽い気持ちで言う  
だろ。

俺だって葵に結婚しようって言った事がある。もちろん幼稚園の頃  
に。

「じゃあ、俺はレッドになって伊吹の旦那さんになるっ！」

「うん、約束だからね……！」

「うん！」

ホントに子供って軽いよねえ……微笑ましい。  
今だったら冗談でもこんな事言えねえぞ。

……ってアレ、なんだか視界がぼやけてきて……。

……。

### 第93話、特訓と乱入と夢と（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「さて今回は過去暴露大会だ。みんな子供の頃に軽い気持ちで結婚しよって言った事ある！？」

重原「圭介は葵ちゃんかあ……圭介も昔はシスコンだったんだねえ」

大吾「今でも十分シスコンだと思うけどな」

圭介「てめえら勝手に言うな！ 昔は知らなかったんだよ、兄妹じゃ結婚できねえって！」

重原「じゃあ今なら駆け落ちEND目指すのかい？」

圭介「しねえよ！ 二次元じゃねえんだよ、妹なんて恋愛対象になるか！」

大吾「広ちゃんは？ 冗談で言った事ある？」

重原「俺は近所に住んでた子かな。でもその子とは卒園以降会ってないよ」

大吾「ギャルゲー的にはこの後、その幼馴染は帰ってくるな」

重原「ないない。所詮現実だからね」

圭介「大吾はどうなんだよ。お前って案外言っそうだな」

大吾「もちろん言ってたよ！ おんぷちゃん将来は結婚しようねって！」

重原「……………」

圭介「今の子、おジャ○女知ってるのかな…………？」

※大吾は昔から完全二次元派だった。

## 第94話、侵入者（前書き）

あれ、おかしいな？

ちゃんと1時に投稿設定しておいたはずなのに……。

いつもより遅れて申し訳ございません！

## 第94話、侵入者

不意に目が覚めた。

随分と昔の夢を見ていたような気がする。

ぼやける目を細めると、視界には延々と続く青空と点々と存在する白い雲。

どうやら俺はプールサイドで横になっているらしい。

「あっ……圭介……っ！」

何かの声優のように綺麗かつ可愛らしい声が聞こえる。

伊吹……ああそっか。出血多量で気絶したんだっけか。

目がぼやけていてよくわからんけど、伊吹……泣いてるのか？

「おおゝ圭くんが復活したっ」

「けーすけ様っ！ よかったのです……」

「んん……な、何分くらい俺寝てた？」

「えーっと、10分くらいピクリとも動きませんでしたよ？」

10分……その間ずっと俺は夢を見ていたのか。

随分と昔、俺と伊吹の軽い約束……。

きっと伊吹はあの約束とか覚えてないんだろうなあ。

まあ覚えていたらいたで大変だよ。もし本気だった時の事を考えたらさ。

とりあえず思い出されても困るし、夢の事は言わないようにしよう。

「け、圭介……大丈夫……?」

「……あれ、伊吹……泣いてんのか?」

「ば——ッ! な、私が泣くわけないでしょ!」

伊吹は顔を真っ赤にしながらも涙目で必死に訴える。  
なんだよ。これって相当我慢してるって事じゃねえか。

「心配かけてごめん……」

「えっ……け、圭介が謝る必要は………っ」

いつものように否定はするものの、いつもみたいな勢いを感じられない。

今の伊吹はツツパリではなく、一人の弱々しい女の子であった。

その後ろで小坂が何故かニヤニヤしており、暮葉は伊吹のように今にも泣きだしそうであった。

なんか、俺のせいでプールが修羅場になってる気がする。

小坂は修羅場を楽しんでいるみたいだ。でもこっちは全然楽しめねえ……っ。

「……ごめん」

「……ッ」

あまり事態を大きくしたくは無かった。

そんなヘタレた理由のせいか、俺はただ謝る事しかできなかった。  
水恐怖症……ちくしょう、てめえのせいだぞ。

って、水なんかが怖い俺が一番悪いんだよね……。結局この後特訓という空気でもなかったので、全員プールから上がって現地解散となった。

夜、俺は自分の部屋のベッドで考え事をしていた。

プールから出た後の事。つまり解散してから今までの事を思い出す。俺は暮葉と伊吹との3人で帰ったんだが、家に帰るまで殆ど会話ナシ。

伊吹も暮葉も妙に暗くって、話をしようにも声をかけ辛いという……。ちくしょうどうすりゃいいんだよ。俺はどっちにも悲しんで欲しくないんだぞ。

それがなんか……。殆ど俺のせいみたいな感じで。

……。ってか、事実俺のせいだよな……。水恐怖症の俺ホントに死ねばいいのに。

「……………ッ」

色々この後の事を考えるよりも……。まず二人に謝った方がいいよな。あーだこーだ言う前に謝った方がいい。絶対にそのほうがいいと思う。

よし、まず同じ家に住んでいる暮葉に謝ろう。

決心した俺は起きあがって扉を開けようとした――

「けーすけ様っ！」

「えっ？　く、暮葉っ!？」

刹那、勢いよく開けられた扉。

特攻隊のように突撃してきたのは血相を変えた暮葉だった。

「あの……もうお身体は大丈夫なのですか!？」

「え、俺はなんでもないけど……それよりどうした？」

「おバカのけーすけ様にも分かりやすいよう単刀直入に言います」

心配して来たのかと思いきや用事があって、しかも地味に馬鹿にされたような気がする。

ちくしょう暮葉のヤツ、一体何の用事で来やがったんだよ。

まあいいけど、俺も暮葉に謝りたかったから。でも謝るって空気じゃないよな……一体。

「ホントに何があったんだ？」

「サヴィエト亡命政府の魔法使いが古宇坂に侵入してきました」

「サヴィエト？ それってアレか、俺の身柄を狙ってるっていう？」

「はい、人数は2人です。1人は今朝拙者の後輩を襲いまして、途中で乱入してきた何者かとの戦闘で重傷を負った上に逮捕されらしいのです」

「何者かって……サヴィエトのヤツって魔法使いだろ？ そんなのを倒すってどこのバケモノだよ」

「拙者的にはけーすけ様も十分バケモノなのですよ？ 素手しか武器がないのに魔法使いにも匹敵する人達を倒したのですからね」



それって……明智光秀とか早川って野郎とか、あの辺の連中の事言  
ってんだよな？

確かにアイツらバケモノだった。光秀でさえ暮葉と互角で早川に至  
ってはチートじゃん。

でも、確かに俺ってその二人に勝ったよな。

「それを言われると反論できねえ……ッ！」

それにしてもアルファ隊でもねえのに、一体誰が魔法使いってのを  
倒したんだ？

まあそれだけ敵が減るわけだし、別に誰が倒したっていいけどさ。  
でも気になるよなあ。そんなに強い奴が古宇坂にいるってのか。

フフフ……案外明智だったりして。超能力者のアイツなら十分互角  
に戦えそうさ。

でも今朝って事は俺ら学校だしなあ。筋肉馬鹿の重原って可能性も  
あるけどアイツずっと居たし。

まあ、さっきも思ったけど誰が倒そうが別にどうでもいいや。

「——すけ様っ、けーすけ様ってば！」

「えっ？」

「もきゅ、ちゃんと聞いてるのですか？」

しまった、くだらない事を考えていたら話を聞き逃してしまった。

「す、スマン！　なんだって？」

「ですから、拙者はこれからサヴィエトの魔法使いを倒すのです。  
けーすけ様、撃退に成功するまではぜえーったいに外に出ちゃダメ

なのですよ？」

「あのなあ……明日は土曜日だからともかく、このまま倒せなかったらどうするんだ？」

暮葉からの外出禁止令。

それは、暮葉がサヴィエトの魔法使いを倒すまで有効らしいのだけれど、暮葉が魔法使いを倒せなかったでしょう。

外出禁止令は当然解除されないし、その間俺は学校に行けないのだから、来週は文化祭本番がある週だ。

特に火水木は準備期間と言う、本番に向けて本格的な準備が行われる期間なのだ。

文化祭は全3日。1日目のド派手なオープニングに仮装行列。2日目3日は一般公開があったりでもう大変で……特に3日目は展示とステージ発表が同時に行われたりする日だ。

当然その準備には多大な労力が必要だが、なんせ準備時間はたったの三日。

もし貴重な労力である生徒一人が休んでみる。学校行った時間違だいひんしゆくなく大顰蹙だうしんしゆくだぞ？

「なっ、拙者を信じて欲しいのです！ 拙者だって魔法使いなんですからね！」

「お前……魔法苦手じゃなかったっけ？」

「もきゅ！ 失敬、失敬ですよ！ 別に拙者は魔法が苦手じゃないですよ、難しいだけなのです！」

「そうでございますか……っ」

結局苦手なんじゃねえかよ、やっぱり不安だ。

思い出してみれば暮葉が単独勝利したシーンなんて1度しか見た事ない。

しかも相手は分けがわからんオオカミ野郎。

光秀には善戦はしても勝てはしなかったし、早川に至ってはボロ負けだったじゃん。

要するに強敵に勝った所を見た事がないわけで、やっぱり暮葉一人じゃ危険なんじゃないか？

「あのさあ、よかったら俺も手伝ってやろうか？」

「けーすけ様こそ引っ込んでいてください！　けーすけ様が藤島圭介様だってバレちゃいましたら、一日に一回は魔法使いが襲ってきますよ、多分っ！」

魔法使いいんどだけ数多いんだよ！

まあ、思想的に一致するこの世界の人間を、魔法使いに育てていくって話だからな。

きっとかなりの数の魔法使いがいるんだろう。だけどよ……。

「俺が藤島圭介だってバレなきゃいいんだろ？　変装でもなんでするから」

「けーすけ様っ、どうして態々危険な事に足を踏み入れようとするのですか？　もしかしてけーすけ様は結構なやんちゃさんなのですか？」

「ああそうだよ。喧嘩は男の仕事だっつーの」

今までだって伊吹や、最近は暮葉を助ける為にやってきたんだ。

魔法使いが今更なんだってんだ。俺はこの拳で超能力者を二人もぶん殴ったんだぞ。

そりゃあ……俺は魔法も超能力も使えない。その他の特殊技能だって全くねえよ。

でも身体は丈夫だ。少なくとも暮葉の盾にはなれるハズだ。隙を見て相手をぶん殴る事くらいはできるハズだ。

「もきゅ……けーすけ様のその一直線な所、拙者のお姉様にそっくりなので……っ」

「あ？　暮葉……姉貴いたのか？」

「はいっ！　最もお姉様は戦闘員ではなく科学者で魔法学者なのです」

「要するに学者さんってわけか。明らかに俺より頭良さそうだし、どこが俺とそっくりなんだ？」

「確かに頭はけーすけ様の1万倍いいと思いますっ！」

「ひでえっ！」

暮葉マジでひどいや、そこまで差があるなんて……ううっ！

これでも俺、進学校である初芝に入る頭はあったんだぞ。

中学の頃の成績はそこそよかったんだからな。

……まあ、無理して入った結果がこのザマでございますが。

「……でも根本は似ているのです」

「根本？」

「はい、お姉様が学者様になられたのは、それで誰かを救うためなのです」

「誰かを……救う？」

「はいっ、お姉様は科学と魔法を融合させた、最先端医療技術の開発を行っているのです」

科学と魔法を融合させた医療技術の開発……。確かに、誰とは言えないが誰かを救うための研究だな。

「けど、やっぱり俺と似てるってわけじゃ——」

「似てるのですよ？　だってその為に研究してますもの、馬鹿正直に一直線に」

馬鹿正直に一直線に……。ねえ。

なんか自分の事を馬鹿にされたような気もするが、不思議と悪い気もしないな。

「いい姉貴じゃねえか？　今時そんな良心持つてる学者さんなんていねえよ」

「もきゅ……それって自分の事褒めてるのですか？」

「違う違う。純粹にお前の姉貴の事を褒めてんだよ」

「もきゅう……ありがとうなのですっ」

大体自画自賛ってどこのナルシストだよ。

でも、コイツの姉貴ってホントにいい奴そうだな。

暮葉の姉貴って事は俺よりも年上かぁ。

やっぱり暮葉と同じ体型で、しかも年上だけに合法ロリってヤツなのかな？

……って、そんなことはどうだっていいよな。

「さて、んじゃあさっさと魔法使い倒して、今週の土日も伸び伸び過ごそうや」

「結局……けーすけ様は止めても無駄なのですねっ」

「おうっ！ 俺達友達なんだから、一人だけで危険な目には遭わせたくねえしな」

「……もう、仕方のないおバカさんなのですっ。バレないように気を付けてくださいね」

バレるわけねえだろ。

向こうの魔法使いは俺が藤島圭介であることも、俺がこの街に住んでいる事も知らねえって話だ。

……さて、倒しに行つてやるか。サヴィエトの魔法使いってヤツを！

## 第94話、侵入者（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

☆変態レベル☆

浅間部長<<超えられない壁<<<圭介<<<大吾（二次元限定）  
<<<その他野郎共、純奈<<<その他女子

圭介「ちよつと待てコラアッ！」

あかり「どーしたんだ圭介？」

圭介「なんで俺がてめえの兄貴の次に変態になってんだよ！」

明智「藤島……変態だろ？」

小坂「鼻血も噴くしねえ」

圭介「俺より黒木とかのほうに変態じゃねえか！　なんだって黒木達はその他野郎共で一纏めなんだよ！」

純奈「ひどいよ！　私も男みたいなのと同じくらい変態に扱われるなんて……きつとこれはクソ介のせいだよね！」

圭介「俺なにもしてないって！　てめえは何でもかんでも責任を押しつけるな！」

千早「あの……でもっ、強ち間違っていないと思います……っ」

暮葉「確かにけーすけ様、PCも部屋の中もエッチなものばかりなのです！」

葵「もっと言えばお兄ちゃんは歴代で最も変態な主人公なのです！」

圭介「嘘だアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」



## 第95話、泥人形使い

——その頃、古宇坂市南部。

「と、止まれっ！」

アタシの前に立ちふさがる日本の警察官達。

前列に盾を構えた奴らが数十名。後方には拳銃を構えた奴らが数十名。

全く……折角遙々遠い所から来てやったのに、なんて野蛮な歓迎方法なのかしらねえ。

「ふふふ……随分と手荒な歓迎ね。人様に拳銃向けてんじゃねえぞオ！」

アタシは警察官たちを指差す。

すると、アタシの背後の巨大な泥人形ゴーレムが大きな足音を立てて前進する。

警察官は恐怖し発砲してきたが、泥人形ゴーレムは何発受けようが倒れる事はない。

小さな破片だけを撒き散らしつつ、ドシンと足音を立てて少しずつ警察官へ接近していった。

もはや恐怖のあまりに狙いが滅茶苦茶で、ただ拳銃を撃ちまくる警察官は無力そのもの。

アタシが生み出した泥人形ゴーレムは、十分に間合いを詰めた時にその拳を振るった。

「まずい……ッ！ このままだと死人が……ッ！」

「今朝は中国人の発砲事件。今度は何人か知らないが白人とバケモノ……今日はなんだって凶悪事件ばっか起こるんだよ！」

仕方ねえでしょ。アタシには仕事があるんだよ。

アタシがこうして暴れていれば、そのうちアルファ隊のヤツが来るだろ。

ソイツを倒し、アレクサンドルって野郎の子孫がどこに居んのか聞きだしてやる。

その為なら人が何人死のうが……関係ねえんだよッ！

「腕はいいわねアンタ達。けど経験不足だわ……こんな素人さっさと蹴散らしちまいな泥人形<sup>ゴーレム</sup>！」

「グ、ゴゴォ……ッ」

アンタら武装した治安維持部隊なんてな、アタシら魔術師からしたらただの雑魚なんだよ。

アタシの本命はアルファ隊とあの野郎の子孫。

アンタらは所詮ソイツらを誘き寄せる磁石でしかねえのよ！

「ちっくしょうこの金髪女……ッ！」

「上は何やってるんだ！　こんな武器じゃ勝ち目がないぞっ！」

「ヘッケラー&コッホは欲しいぞ……クソツタレ！」

無駄無駄、どんな武器を持ってこようがよ……。

アンタら雑魚じゃこのアナスタシア・アベルツェフ様には勝てねえ！  
さっさと地面にひれ伏しちまいな！

——その頃、藤島家周辺。

あの後、晩御飯を食べた俺と暮葉は自宅を飛び出し全力疾走していた。

家を出る時に隣の国宗家が見えたが、そこで俺は大事な事を思い出した。

暮葉はもう気にしていない様子だが、伊吹は後々まで引っ張るし、何よりアイツは泣いていた。

今は忙しいから無理だけど、後で必ず伊吹に謝っておかないと。それともう一つ重要な事。古宇坂に侵入したっていう魔法使いはどこに？

「暮葉！ 魔法使ってどこにいるんだよ？」

「斥候部隊によるとこの街の南側で暴れているらしいのです」

「せ、斥候って……」

斥候ってアレだよな。偵察と攻撃と追跡の三つの事だよな。さすがアルファ隊……ナメてたけどやっぱり軍隊なのね。

「けーすけ様っ、敵は泥人形ゴーレムの使い手なのです」

「ゴーレム？ ゼ○の使い魔とか禁書○録に出てきたアレ？」

「詳細不明なのですが、多分けーすけ様のイメージ通りだと思うのです」

要するに土系統の魔法を使うヤツってわけね。

ゴーレムってどれくらいの大きさかな。

よくわかんねえけど、俺が現場に向かって役に立つんだろうか。

ゴーレムって絶対デカそうだし、殴ってもダメージ与えられないような気が……。

そうだった。ゴーレムを操るのは術者。なら術者を叩けばゴーレムと戦う必要はないんじゃない？

フフフ……日頃から厨二臭いアニメって見とくものだな！

……あ、そういうばアニメで思い出したぞ。

「なあ暮葉！　い○天放送時間に間に合うかな？」

「もきゅ！？　ろ、録画してないのですか！？」

「思いつきり急いでて忘れたんだよ！」

「もきゅ……仕方ないのですっ。さっさと相手を倒しちゃいましょう！」

「倒すって言うってもねえ……」

多分デカイであろうゴーレムと、それを自由自在に操る魔法使い。

さっき術者を叩くって思いきった事を考えたが、考えてみれば術者も馬鹿じゃねえだろうし、きっと近づいたらゴーレムをこっちに向けてくるよな。

……そんなチートじみたバケモノ使い、俺や暮葉だけで勝てるのかねえ？

……数十分後、俺達は魔法使いが暴れているという古宇坂南部へ来たが。

「な、なんだこりゃ……!?!」

「全滅みたいです、ひどい有様なのです……っ」

なんということでしょう。

場所は古宇坂南部の幹線道路、数多くの車両が並んでいる。

警察車両が多めだが中には一般の車両も……だが、どれも事故車であつた。

しかも衝突事故によるものではなく、まるで何かにぶつ飛ばされたかのように転がっている。

転がっているのは車両のみではない。一般人や銃を持った警官達が倒れ込んでいた。

まだ生きている者もいれば、もはやそれが人間であつたかもわからな者まで……。

まずい……リアル死体は初めて見たが、なんだか吐き気がしてきた……っ。

「だ、大丈夫ですかーすけ様？」

「う、ぐ……心配すんな、それでも男ですぜ？」

「あの、無理はしないで欲しいのです……っ」

とは言うものの結構辛い……ちくしょう、アニメとかで結構慣れるハズなのに。

暮葉は平気……みたいだな。

まあ一応特殊部隊の人間だし、もしかしたら見慣れているのかもしれない。

れない。

こんな見た目ロリな女の子が慣れてるって……何だか複雑な気分である。

吐き気や複雑な気持ちが巡り巡る。

だが、時が経つにつれてその気持ちよりもっと荒く、野蛮で破壊的な感情が……。

「クソ……っ、暮葉……相手の魔法使いの目的は俺たちだよな？」

「はい、間違いなく拙者達なのです」

「だったらこの人達は関係なかったんだよね？」

「元々拙者の世界の問題なのです。この世界の人々には基本的に関係のない事なのです……けど」

警察と魔法使い。どっちが先制攻撃をしたかなんて、別に考えなくてもわかる事だ。

日本の警察は他国の警察よりも甘い。

たとえば凶悪犯相手に発砲したって、後々世論がふざけんなど騒いでしまう。

その上、撃った警官が殺人罪で有罪にもなるらしい。

元々甘い上に世論がうるさい。マトモに戦闘さえ行えない……それが警察だ。

そんな警察が先制攻撃なんて、おそらく出来ねえだろう。

と言う事はこの事態、かなりの高確率で魔法使いから起こされたものなんだろう……ちくしょう。

「……上等だ魔法使い。標的ならここにいてのに、俺達を誘き寄せる為か何の為かは知らねえけど……無関係な人間を巻き込むっ

てんなら——」

そこまで言いかけて、俺は近くの電柱に一発の拳を打ち込んだ。電柱はビクともしないし、ただ拳が痛むだけだが……それでよかった。

今の一撃は俺の怒りを籠めた一撃。そして——

「てめえのツラは俺がぶん殴ってやる！」

「……っ」

怒りにまかせて叫ぶ俺を暮葉は黙って見ている。

ごめんな暮葉……でも、俺らを倒す為にこんな事をしやがる敵が——  
—すっげえムカつくんだよ！

——その頃、同じく古宇坂南部……工業地帯付近。

あゝあ、あのエロ兄貴め……バイト帰りのあたいにお使い頼むだな  
んて。

全く、兄貴は今日暇なんだから自分で行けよな！

——あたい、浅間あかりは兄貴に頼まれ、このあたりに住んでいる  
お母さんの知り合いの所に、なんていえばいいのかな……お菓子を  
届けて欲しいと頼まれたのだ。

お母さんは退院したけど、それでも体力が低下しているので兄貴に  
頼んだんだけど……。

あたいの馬鹿兄貴、よくもその仕事をあたいに押し付けたな。

……そういえば、まだ今週は圭介を見てないよな。

千早の転校を阻止してくれたあの人……あたい、すっごく圭介にお

礼がしたいのに……。

「……圭介っ」

……ああもうあたいがくよくよしてどうするんだ！  
今度会ったらお礼すればいいだけの話だろっ！  
元気出せよな――

「へえ……圭介。んじゃあアンタ藤島圭介ってのと知り合い？」

「んみゃ？」

あたいは誰かに声を掛けられた。  
だから振り向いたが、見知らぬ色白で金髪の妙齡の女性が佇んでいた。

「……だ、誰……っ？」

あたいはあんな人知らないぞっ。

しかも圭介の知り合いらしい……圭介、お前は何人の女の子と知り合ってるんだよ？

いい加減にしろよな――いい加減に……。

なんだか、その事を考えると胸が痛む。圭介なんかの事なのに……  
なんで。

「その圭介が藤島圭介かどうかは知らないけど、とりあえずアンタには付き合ってもらおうわ」

「な、なんだよ……っ、あたいになんか用か？」



「ふふふ……肉の塊になってもらおうじゃねえかおチビちゃんッ！」

「——ッ！？——」

その時、あたいは信じられないものを見てしまった。

アスファルトが盛り上がった——瞬間、兄貴が見てるアニメに出てくるようなバケモノが現れたんだ。

## 第95話、泥人形使い（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「1話に三回も視点が変わるとか……読み辛っ！」

大吾「最大のタブーだよなあ。まあ新人賞狙ってる作品じゃねえからいいけど」

圭介「大吾、お前新人賞狙ってんの？」

大吾「yes！」

圭介「マジすか！？　どんな作品だよっ！」

大吾「僕と唯ちゃんのLOVEストーリー……ッ！」

圭介「……第一次選考にすら残らねえな、それ」

## 第96話、アナスタシア・アベルツェフ

幹線道路には死人と負傷者と物の残骸のみ。

そこには絶望という一言しか残されていなかった。

——そう、犯人である魔法使いはそこにはいなかったのだ。

「暮葉、魔法使いの居場所がわかるか？」

「はい。かなり大きな魔力を近くに感じるのです」

「じゃあ案内してくれ」

「気を付けてくださいね。くれぐれも無理はしないで欲しいのです」

「無理はしねえよ。暮葉こそ無理とかするなよ？」

「大丈夫なのですつ、それじゃあ先に進むのです！」

俺達は再び走りだす。無関係な人々の命を奪いやがった魔法使いの居場所へ向かって。

それにしても暮葉の魔力感知、やっぱり便利な能力だよなあ。

暮葉と一緒に居れば索敵が簡単で助かるぜ。

さて、くだらねえ事の為に人殺しをしやがった、クソ野郎の顔面をぶん殴ってくるか。

歩く事数分。何だか見覚えのある場所にやってきた。

ここは……間違いない。古宇坂南部にある工業地帯の近く。

あのあたりにある住宅街である。実を言うと俺は一度だけここに来

た事がある。

このあたりに友達に住んでいるわけでもないし、家族ぐるみの付き合いの家庭があるわけでもない。

6月ごろ。早川と戦う前に通り、確かこのあたりで明智と会って話をしたような記憶がある。

まさか……また戦場はあの施設の中なのだろうか？

いや、それはないハズだ。

確かあの戦いの後、工場は警備が硬くなって侵入が難しくなったハズだ。

「はあ、はあ、はあ、た……助けてっ！」

「もきゅ、けーすけ様……あ、あの人っ！」

「あ？」

暮葉が反応した先。確かに誰かが叫びながら走ってくる……と言うかアイツは——！

輝くような橙色のツインテール。若干ツンとした紅い瞳。小動物のように小柄な体躯。

そして狩人から逃げる野生動物のように、必死に自分の命の為に走る女の子。

女の子の名前は浅間あかり。俺の後輩であり友達であり同じ写真部の仲間でもある。

「やっぱアレってあかりだよな？」

「あかりさんっ！」

「——ッ！？ 圭介っ！？ それに木下先輩まで！？」

俺らとの遭遇に驚愕の様子にあかり。

なんだか随分服が汚れてるな。

必死に走っていたし……もしかしてあかりのヤツ、例の魔法使いつてのに追われてたんじゃ？

「どうしたんだよそんな血相変えて？」

「……ッ！ け、けーすけ様……敵が来るのですっ！」

「——ッ！？」

暮葉の呼びかけで前を見ると、なんだかどんでもなくデカイヤツがいる。

土色でごつつくて、その上目がギラリと赤く光っていて……。

間違いねえ。こういうヤツをアニメで見た事がある。

100人中99人はゴーレムって答えるだろう。

つまり——俺らを追っている魔法使いはすぐ近くだ——！

「はにゃわあわわっ！ で、出た化け物っ！」

「化け物って……あかり、アイツに追われてたのか？」

「襲われたんだよ！ ああもう、こっちに来るなよな！」

いつものやんちゃな強気口調ながら、小刻みに震えながら俺の背後に回り込むあたり、態度だけは正直のご様子である。まあ、あんなの怖くないヤツは普通いないと思うんだ。

俺だって正直怖いわ。あんなバケモノどうやって倒せと？

「へえっ、アンタ圭介って名前なのねえ？」

しかもバケモノを操る術者さん——サヴィエトの魔法使いもお出ましのようである。

しかもまずいぞ。暮葉が俺の名前を叫んだせいか、相手に俺が藤島圭介だったバレかけている。

その事に気付いたのか、暮葉は慌てて両手で口を塞いでいた。

もうしっかりと聞かれちゃったし、そんな事をしても無駄だとは思うが。

「なんだよ……てめえっ」

「もう一度問うわ、アンタ名前が圭介って事は藤島圭介だよねえ？」

ここで藤島圭介を名乗ったら負けだよな。

仕方ねえ、こうなったら——偽名を名乗ってやんぜ。

「俺は確かに圭介って名前だけどな、残念だけど藤島じゃねえんだよな」

「へえ？　じゃあアンタの本名はなにさ？」

「俺は——上条圭介だ！」  
かみじょうけいすけ

「か、カミジョウ！？　圭介の名字は——ふぐおふあごっ！」

「あかりさん、話を合わせて欲しいのです……………」

俺の本当の名字を言おうとしたあかりの口を、暮葉は必死に押さえつけた。

なんか……すつごく悪い事をしている気分だ。すまないあかり……  
これも生きる為なんだッ！

ちなみに俺の偽名、某学園都市ラノベの主役から取った名前だった  
のは内緒な。

これはあくまで正体を誤魔化す為の偽名。

幸い相手は俺が藤島圭介だって気付いていないっぽいし、暮葉とあ  
かりのやりとりにも無反応だ。

っという事は……上条圭介ってありがちな偽名で誤魔化せたんだ――

「へえ、じゃあアタシの標的とは別人ってワケね」

「標的だと……？」

「折角だから聞いとくわ！ アンタ達、藤島圭介ってヤツ知らない  
かしらあ？」

「知らねえよっ」

「拙者もその人の行方がわからないのですっ」

「……？」

俺と暮葉は上手い事嘘をついてみせるが、あかりは何かなんだかよ  
くわからない様子。

あかりのヤツ、うっかり俺の本名を言っちゃわないか不安だ。  
でも今は信じるしかないか。大丈夫、あかりならきっと話を合わせ  
てくれるハズだ。

「なんだあゝ関係者じゃないのねえ？ そんなまあ仕方ないわ

ねえ……秘密を知った一般人の口を封じるってのかアタシらのやり方。三人とも汚え肉塊になってもらうわあっ！」

サヴィエトの魔法使いが叫ぶと、彼女の背後で構えていたゴーレムが動きだす。

ドシン！という凄まじい足音をあげ、じわじわと俺達へ接近してくる。

「はにゃ、あわわ……っ！ ふ、二人とも逃げよ——」

「さて、と……こんなのどうやって倒せばいいんだ？」

「泥人形ゴーレムを倒す方法は三つ。完全に消滅させるか頭の部分の核を破壊するか、あとは召喚者じゅつしやを気絶させるかのどれかなのです」

完全に消滅させることと核を破壊する事、召喚した本人——つまり目の前の魔法使いを倒す事？

うーん……こんなバケモノ消し飛ばす事なんてできないだろう。

核を吹き飛ばすにしてもねえ。せめてM72 LAWがあればできそうだが……素手じゃ無理だ。

戦いで態々不利な選択をする必要はない。ここは常識的に考えて――

「術者を倒すしかなさそうだな……ッ！」

「けーすけ様っ、拙者がゴーレムを食いとめます。その隙に相手を気絶させてくださいっ！」

「け、けどそれじゃあお前が危険だろ！」



「危険なのはどっちもなのです！　大丈夫……拙者だって一応魔法使いなのですよ？」

……まあ、魔法のほうはあんまり信用できないが、確かに暮葉は刀使いとしては相当の腕前。

オオカミ野郎を一刀両断し、光秀の素早い攻撃にも対抗でき、その上空まで飛ぶ事ができる。

個人的には暮葉を囚にするなんて、死んでも嫌なんだけどな……でもこの状況じゃ仕方ねえか。

「わかった。3分以内に片付けるから、絶対死ぬなよ……ッ！」

「けーすけ様こそ相手は魔法使いなのです。くれぐれも魔法攻撃には気を付けてください……！」

ゴーレムと魔法使い……倒すなら魔法使いのほうが簡単そうだ。

しかし、俺には何の特殊技能もない。精々身体が丈夫な事とキスをすれば強くなる事くらいだ。

つまり俺が魔法使いと戦うのは、暮葉がゴーレムと戦うのと同じくらい危険な事なのかもしれない。

なるほど、考えてみれば対等かもしれない……。

けど、警察が勝てねえようなバケモノだ。そんなヤツと暮葉を戦わせるのは流石に気が引ける。

でも戦わざるを得ない……それだったら戦闘時間が短いほうがいい。その為にしなけりゃいけない事はただ一つ——あの魔法使いをさっさとぶっ倒す！

「けーすけ様……拙者が先に飛びかかります。泥人形ゴーレムが拙者を狙っている間に……けーすけ様はあの魔法使いをやってくださいいっ」

「わかった。必ず早めに倒す」

自分の身を守る為。あかりの身を守る為。  
暮葉を傷つけない為。そして……古宇坂の平和の為にな。

「ちょ、ちよつと待って！ 馬鹿だろっ！ 二人とも人間とバケモノの実力差考えろよなっ！」

「あかり、いいから下がっていてくれ。勝てるかもしれないからさ」

「む、無理だろっ！ 圭介も木下先輩も戦っちゃダメだっ！ あたいの命令だからな！」

相変わらずのやんちゃな口調……でもビリビリ伝わってくるよ。

あかりのヤツは本気で俺達を心配している。

ありがたい……けど、目の前にいるヤツを倒さなきゃ後で大変な事になっちまう！

だから――

「――ごめん……くっ、オオオオオオオオオ！」

あかりにその一言を告げ、直後に俺は大地を蹴りあげ、ゴーレム目掛けて突撃を仕掛ける。

ほぼ同時に暮葉も駆け出し、凄まじい速さであっという間に俺を追い抜く。

暮葉がゴーレムに飛びかかる。俺はひたすら走って突撃を掛ける。そして、遂に――

「おもしろいわね！ しょうがないねえ……このアナスタシア・アベルツェフ様がテメエらを血祭りにあげてやんよオッ！」

——魔法使い、アナスタシア・アベルツェフとの戦いの火蓋が  
切って落とされた。

## 第96話、アナスタシア・アベルツェフ（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

作者「またしても大幅に更新が遅れて申し訳ございません！」

圭介「ったく、ホントにしょうもねえ作者だな」

作者「仕方ないじゃん、疲労が溜まって小説書けない……っ」

圭介「そういう愚痴はしないほうがいいと思うぞ？」

作者「オープンキャンパス行ったり夏期講習行ったりその他諸々、先週と今週忙しい上に小説書いたりで寝る時間がなかったんだよ！」

圭介「ダメだこりゃ……っ」

※本当に申し訳ございませんでした！

## 第97話、アスリート並の魔法使い

「おおおおおおおおおっ！」

喉に響いて痛いほどに叫びながらの全力疾走。

標的は前方のゴーレム……ではなく、その後方にいるアナスタシアだ。

アナスタシアを攻撃するにはまず、ゴーレムを避けてアイツの所にいかなければ。

その為には……右や左から回り込むのはかえって危険だろう。

巨大なゴーレムに拳でも振るわれたら、まあ耐えられない事はないだろうが大怪我は確実だ。

なら、暮葉がゴーレムに攻撃をして怯んでいる隙に――

「天神無双木下流“天下統一”！」

「グ、ガガ……ッ！」

なにあの新必殺技みたいなの！？

しかも地味にすげえ威力……暮葉は一期一振でゴーレムの腕を斬り落とした。

ゴーレムの腕だったって岩石とかそんなものだぞ。しかも太いから普通は斬れないと思うが……。

神○火織もビックリかもしれねえ……うん、暮葉は身体能力的に聖人に果てしなく近いだろう。

「ガ、グゴ、ガガ……ッ！」

しかしゴーレムもやはりバケモノ。

アスファルトから土を吸い出し、それを身体に吸収する事によって身体を再生させている。

だが、再生中のゴーレムは隙だらけであった。

ただでさえ鈍重な上に、再生に全力を注いでいる為かゴーレムは微動だにしない。

最も、ゴーレムの再生もかなりの速さではあるが――

「く、おあぁっ！」

この難関を潜り抜けるには十分すぎる時間があった。

ゴーレムは体長4m程の巨大な土の塊。

腕力も高くて防御力も高く、その上斬撃を受けても身体は物体を吸収して再生してしまう。

だが、そんなゴーレムにも死角という弱点があった。

このゴーレムは首の構造上、下を向く事ができないようだ。

増してやゴーレムの腹部はデブのお腹のようで、従って自身の下半身は絶対に見えない死角だ。

スライディングをし、俺はゴーレムの足の間を一気に突き抜ける！

「なっ……アタシのゴーレムを避けやがっただと？」

「てめえのゴーレムは足元がお留守なんだよ！」

そう叫ぶ俺の後方では、暮葉がまだゴーレムと激戦を繰り広げていた。

暮葉はゴーレムにダメージを与え、一見押しているかのように見えるが、ゴーレムは傷ついた部分に次々と物体を吸収していき、新たに土の塊にくたいを作りだす。

暮葉とゴーレムの戦いは簡単に言うと、際限のない消耗戦であった

……。

「ふ、はは……っ！ 面白い事してくれるわねアンタ達。警官よりは有能じゃねえか！」

「ふざけんなよてめえ……その警官ってのは関係者じゃねえんだろ？ だったらなんで襲いやがった！」

「そんなの、アタシがゴーレムを使っていたら来ちまいやがったから。その姿がムカついたから攻撃したら銃撃されたんだよ。銃を撃ってくるヤツを攻撃して何が悪いんだぁお坊ちゃん！？」

「悪いに……決まってるだろ！ 先に攻撃したのはてめえだろ！ 自分や周りの人々の生命の危機を感じたから警官は発砲したんじゃないのか！？」

俺は何が言いたいかと言うと……撃たれるほど街中で暴れていたアナスタシアが悪い。

本来も標的である俺や暮葉相手ではなく、街中で無差別に暴れていたコイツが悪い。

予想通りだったけど、結局警察が戦った理由はアナスタシアに襲われたからだった。

「うっふふふ……全く、ここまでうるさいガキンちよは久々だわ」

「……………ッ」

不意にアナスタシアが不敵な笑みを浮かべる。

「困ったわねえ。ゴーレムは一度に二体も作れないし、アタシは召

喚魔術以外は専門外でね、あんまりうまくは扱えないのよ」

「だったら降参するか？　今なら警察送りで勘弁してやるよ」

「でも……こっちにはこっちの目的ってモンがあんのよ！　こんな所でチェリー君にに負けるわけには——いかねえんだオツ！」

叫んだ——刹那。

ロシアの民族衣装のようなものを着ているアナスタシアが、長いスカートの裏から何かを取り出す。

黒光りする神秘的な塊。それは先端を鋭く研いだ黒曜石であった。

「アッハハハっ！　串刺しにしてあげるわっ！」

「——ッ！」

黒曜石を構えたアナスタシアが決死隊の如く突撃してくる。

アナスタシアが目前まで接近した刹那、先端が大変鋭利な黒曜石を振られる。

俺は反射的に身体を斜めに逸らし、アナスタシアの攻撃をギリギリで避ける。

その反撃として俺は右拳を振るったが、不安定な姿勢だったせい力が入らん。

結局俺の右ストレートは空振りである。

だが、反動で前へ転びそうになると、アナスタシアが背中を刺そうと黒曜石を突き出してきた。

咄嗟に身を屈めてこれを避ける。お返しに右の肘打ちを放つが、アナスタシアは後ろへ2、3歩ほど後退し、俺の肘打ちを避けやがった。そこで俺はある事によりやく気付いた。



「……こ、こいつ……ッ！」

「召喚魔術以外は使えない。アタシは魔術師としては欠点だらけだわ……だけど、そのおかげでアタシは魔術に頼り切る事ができない。だからこれでもアスリート並に鍛えてんのよ？」

「ちつくしょう……やっぱりそうかよ……ッ！」

通りで動きがやけに鋭いと思った。

あまり力強そうなイメージはないのだが、アナスタシアの实力は素人のものではなかった。

まずいぞ……一応俺も喧嘩で鍛えたが、流石にアスリート並のトレーニングはしてねえし。

けど、魔法使いに殴り合いで負けたらそれこそ勝ち目はゼロ。意地でも勝たねえと——！

「さあゝて、一般人のアンタがどこまで持つかな!？」

「うるせえよ……てめえに負けてたまるかつ！」

負けたら今後ろで戦っている暮葉が危ない。

コイツに勝たなきゃゴーレムは止められない。

だから、どれほどの差があったとしても——負けてはいけないんだ！

「くあぁっ！」

俺は走る勢いに乗せて拳を放つ。程良く体重の乗った拳はきつと当たればかなりの威力。

しかし、アナスタシアは俺の拳を華麗に避け、黒曜石を脇腹へ突き刺そうとしてくる。

——でも、さっきの経験からこうなる事くらい……予想は出来てたんだよ！

「ぎゃあぁ——ッ！」

——悲鳴を上げたのはアナスタシアだった。

くると身体の向きを変え、勢いよく放った左拳が彼女の右頬を捉えたのだ。

アナスタシアは鍛えているだけあり、一発殴られた程度じゃ倒れず持ち直すが、右手に握っていた黒曜石はアスファルトに落ちていた。よって今の彼女は丸腰——素手の殴り合いなら五分五分だ。

「ぐおおッ！」

「チッ、素人が調子に乗ってんじゃねえ！」

黒曜石を拾わずに向かってくるあたり、やっぱりアナスタシアはプロであった。

普通は殺傷力がある黒曜石を真っ先に拾おうとするが、それだと対応が遅れて攻撃を受けてしまう。

アナスタシアはその事を理解していた様子である。

拳を構えながら迫る俺達二人。先に拳を放ったのは俺のほうだ。

だが、アナスタシアはひらりと身体を廻す。避けられたと思った——

「ぐ、は——っ！」

刹那、鈍い痛みと息詰まる感覚が俺を襲う。

民族服越しながら、その膝蹴りは確かに俺にダメージを与える。

——でも、この程度でくたばるような……そんなありがたい身体を

俺は持つてねえんだよ！

「てえっ！」

「きゃあ——っ！」

痛みを堪えて左拳で殴り返す。

ゴリゴリと右頬に減り込んだ拳を引いて、痛みも消えた所で次なる攻撃を移ろうとする。

顔面を押さえて怯んでいるうちに、俺は廻し蹴りをアナスタシアのこめかみを狙って放つ。

だが、アナスタシアは反射的に身を屈める事により、俺の蹴りを避けやがった。

「だ、はあっ！」

背中を拳で打たれ、それで一瞬俺は怯む。

当然痛かったが、その痛みは俺の体質のおかげですぐに消えた。だからアナスタシアに肘打ちを放つ事ができた。

怯んだ俺を抑え込もうとし、アナスタシアは接近してきた。俺は腹部にあった僅かな隙を突き、見事に肘打ちを成功させたのだ。

「さっきから面倒くさいわね……っ、素人のくせに……さっさと倒れちまえよっ！」

「倒れねえ……やられもしねえ」

数秒の睨み合いの後、俺との距離をゼロに縮めるべく、アナスタシアはただ前へと駆け抜ける。

アナスタシアの攻撃を避けるつもりはない。

避けても意味がない、際限のない戦いが続くだけだ。

だったら……右腕の筋力100%で一撃で仕留める——！

「素人が！　少しは避けようとしないうケエ！？」

「避ける必要なんかねえよ……」

全速力で迫るアナスタシアに近づくべく、俺もゆっくりと歩み始める。

歩きながら——俺はアナスタシアに告げる。

「刑務所にでも行って反省してきやがれ、このクソ野郎が！」

極限まで固く握りしめた拳。それがゴン！とアナスタシアの鼻っ柱に突き刺さった。

俺もアナスタシアの拳を受けたが、そんなのをモノともせず拳をめり込ます。

アナスタシアの身体は数メートルも飛び、夜の冷たいアスファルトにぐったりと倒れ込んだ。

## 第97話、アスリート並の魔法使い（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

浅間部長「\アツカリ\ン／」

あかり「からかうのもいい加減にしろよな！」

浅間部長「何故だ……何故ボクの妹には元ネタが通用しない！」

圭介「あかりは健全な子だからじゃねえの？」

浅間部長「ちなみにボクはあかりが好き——」

あかり「キモいんだよシスコン兄貴っ！」

浅間部長「ちょ！確かに名前はあかりだけど君のことじゃないって！あぎゃあああああああっ！」

圭介「妹と同じ名前のキャラを好きになるって、お兄さんのどうなんだよ？」

第98話、あれ……こんな展開予想してませんでしたよ？

アナスタシアは俺の拳を食らって気絶した。

瞬間、暮葉と一進一退の戦闘を繰り返していたゴーレムは崩壊を始め、気付けばゴーレムはただの土くれと化していた。つまり——俺達は戦いに勝ったんだ。

「けーすけ様っ！　ありがとうございます！」

「おう、どっか怪我とかしてないか？」

「拙者をご覧の通りとっても元気なですよっ？」

確かに暮葉はどこも怪我をしていないし、精々土か何かで服が汚れている程度であった。

ホントにゴーレムと互角の勝負をしていたんだな。

斬っても斬っても再生する厄介な相手に、暮葉は一步も引かなかった。

俺がアナスタシアと殴り合っている間にも、コイツはゴーレム相手に背を向けたりしなかった。

よし、褒めてあげよつと。そう思った俺は膝を伸ばし、暮葉のピンクの髪を優しく撫でてやった。

「あ……っ」

「天下統一だっけ？　あの技すごかったぞ」

「もきゅ……あ、ありがとうございます……っ」

撫でられて照るているのか、それとも褒められて照れてるのかな。  
暮葉は珍しく頬を赤らめていた。

「おいっ、あたいもいるんだけど」

「えっ？」

「もきゅ!？」

しまった。そういえば確かにあかりも居たわ。

その事を忘れて暮葉を褒めていたが、端から見ればムカつく光景だったんだろうか。

何故かあかりはむすっと頬を膨らませていた。アカン……ご立腹の様子だ。

「あ、あかりもすごかったぞ!？ 逃げないでちゃんと見てたしな  
!」

「だ、だって2人が急に戦い始めたから……仕方ないだろ!」

「も、申し訳ないのですっ」

「でも倒さないと危険だしさ?」

「戦う方が危険だろうっ! しかも木下先輩……なんか人間離れた動きしてたようっ、刀持っていたようっ……っ、あとのバケモノは一体なんだよ……っ」

いかん——誤魔化さないと今後の生活に関わるぞ。

暮葉も慌てているし。仕方ない……ここは俺がテキトーに!

「知ってるかあかり。人間って窮地に陥ると幻覚を見るらしいぞ？」

「げ、幻覚……？」

「そうそう。つまり今まであかりが見ていたのは全て幻覚。ゴーレムだって凶悪犯がそういう風に見えただけなんだよ」

「じゃ、じゃああたいを追っていたのは人間？」

「あたりまえだろ。この世にゴーレムなんて存在ハズないし、あかりは恐怖のあまり幻覚を見てたんだよ」

まあ、恐怖を感じて幻覚を見るってのは、今俺が咄嗟に思いついたデタラメである。

恐怖で幻覚見るなら俺なんていつも見てるよ。  
だけど、あかりは何を隠そう“アホの子”である。

「さすが圭介っ！ 一歳年上だけあって頭いいなっ！」

「フツ……もっとお兄さんを頼ったっていいんだぜ？」

「うん！ あたい圭介のことこれからも信じるっ！」

満面の笑みを浮かべてあかりはそう言い放つ。愛想笑いをしながら俺はこう思った。

あかりが馬鹿で本当によかった……。

これが明智だったら誤魔化せなかっただろう。

ってか明智は俺の事を名字で呼ぶし、俺が藤島だって確実にバレていた事であろう。



とにかく……たまたま遭遇した人があかりでよかった。

「けーすけ様っ、うまく誤魔化せましたね」

「お、おう。俺の読書<sup>ラノベ</sup>で鍛えた話術が役に立ったぜ……っ」

俺と暮葉はあかりにバレないように、小声でこっそり会話をした。

一方のあかりはまだ笑っている。ハハハ……あかり、やっぱりアホの子ですね。

「さてと。暮葉、コイツどうする？」

あかりを誤魔化した所で、次にアナスタシアをどう扱うかを暮葉に訊いた。

警察に引き渡すってのが一番現実的だが。

一応サヴィエト亡命政府の人間だし、アルファ隊の行動目的の中にも関係者拘束ってのがあったし。

だから通報するかしないべきか、念の為に確認を取ろうと俺は思ったのだ。

「えっと……身柄は拙者達が拘束するのです。なのでけーすけ様……できればあかりさんをつ」

なるほど。言葉では言わなかったが暮葉の言いたい事はわかった

「わかった。それじゃあ後はよろしくな」

「はいっ！」

「よし、あかり！ 気晴らしに2人でどっか行かないか？」

暮葉の元気な返事を聞いた後、俺はくるりと向きを変えてあかりに声を掛けた。

「えっ？　で、でも木下先輩は？」

「暮葉は用事があるからゴメンだって」

「はいっ！　その、すっごく大事な用事ですのでっ！」

「そーなのか？」

「ああ。とりあえず幻覚を見て気分も悪いだろうし、だから気晴らしに散歩でもしようぜ？」

暮葉が俺に頼んだ事。それは、アナスタシア拘束の為にあかりを遠ざける事だ。

あかりは俺達の事情には全く無関係であり、関わらせたくないし秘密を知られたくもない。

知られればたとえあかりは認めても、その秘密が何処からか漏れてしまう可能性がある。

そうなると、暮葉達アルファ隊の作戦行動に支障を来す可能性がある。

俺だってそうだぜ。折角学校の皆に受け入れられ始めたのに、また変な事に関わってるからって引かれるかもしれねえぞ。きつと暮葉はその二つの事を心配したのだろう。

だから——俺にあかりを遠ざけるように言ったんだ。

「んむううういいぞっ！　あたかも圭介と少し話がしたい！」

「よしっ、んじゅあ早速行くとしようか」

「うん！」

暮葉にも匹敵するくらい元気のいい返事だな。

ふと思ったんだが、暮葉とあかりってキャラ被ってないか？

“元気なアホの子” っていう点で。まあ……どうでもいいか！

それより散歩だ散歩。暮葉の仕事を助ける為にあかりとお散歩だ。

「暮葉も気を付けろよっ！」

「それじゃああたいらはこれで、お仕事頑張ってください木下先輩！」

なんだか普段の口調のせいか、あかりの敬語に違和感を覚えるのは俺だけだろうか？

「はい！ お二人ともお元気でっ！」

暮葉は無難に言葉を返してきた。

さて、極力あかりに気付かれないように暮葉から離れないとな。とりあえずあかりとどの辺を散歩しよっかな。

そんなことを考えながら10分後、いつの間にか古宇坂港にある海浜緑地公園まで歩いてきていた。

「んんっ！ 潮の香りっていいよなっ！」

「おう、ここ初めて来たけど中々いい所じゃねえか」

夜の海は暗いが、月明りと遠くの船のあかりがとても綺麗だ。

こういう所って昼間や夕方に来るもんだと思ってたが、夜の海浜公園ってのも案外いいものだ。

なにより、このクソ暑い季節に涼しい風はとてありがたい。

「……なあ圭介」

「ん？」

「千早の転校を阻止したの……圭介だってほんと？」

「えっ？ それ誰が言ってたんだ？」

「千早が言ってたんだ。圭介のおかげで転校せずに済むってすっごく嬉しそうに！」

一瞬なんであかりがその事を知ってんのかって思ったが、なんだ青山さんから聞いたのか。

転校を阻止……かあ。確かに俺は転校阻止の為に必死だったな。けど——

「そっか。でも別に誰がやったとかって気にする必要はないと思うぞ？」

「んみゃ、なんでだ？」

「結果的に青山さんは初芝に残る事になったんだ。その結果だけで十分だと思うよ」

だから俺は——余計で無駄な高望みなんてしない。別に褒められたってそりゃあ嬉しいけど、でも殆ど意味がないだろ。

とにかく、青山さんが転校しないって結果だけで十分なんだ。

「そ、そんな……圭介はそれでいいのか？」

「なんで？」

「だ、だって……っ」

少し俯いたあかりは遂に口ごもってしまった。  
……もしかして、心配してくれているのか？

「大丈夫だよ。だからあかりは気にしないで、お礼とかそんなのは  
いらないからさ」

「そ、そうか……っ」

それに、俺は褒められることがあまり好きじゃない。

今まであまり褒められた事がないし、何より返す言葉が思い浮かばない。

それでテキトーに返した言葉が、相手に不快な思いをさせるかもしれない。

ただの嫌味になっちゃうかもしれない。逆に否定すると謙遜が嫌いな相手を怒らせるかもしれない。

だから俺は——褒められるのが苦手だ……。

「それじゃもう一つ。千早を振ったって本当……？」

「えっ……？」

「千早から聞いたんだ」

「そ、そうか……っ」

青山さん、とにかくあかりに何でも報告したんだな。

まあ、それで俺に害があるわけでもないから別にいいけど。

「なあ圭介っ、なんで千早を振ったんだ？」

すると、あかりがやたらと真剣な表情で振った理由を訊いてきた。こういう時なんて答えればいいんだよ。素直に答えればいいのかもだが……。

恋愛感情が沸かなかったからとか、そんな理由じゃあかりは怒るだろうな。

でも嘘をつくのはもっと悪い気がする。やっぱり、ここは事実をありのまま告げよう。

「恋愛感情が沸かなかったから？」

「ッ……そ、そんな。それだけの理由で振ったのか!？」

「悪い事じゃねえだろ？ 中途半端な気持ちで付き合って、それで青山さんを傷つけちまうよりはずっとマシだと思う」

「け、けど……振られるってすっごく悲しいことだとあたいは思うぞ！」

「でも好きじゃないのに付き合うって、すごい失礼じゃないか？」

そんな失礼なことを青山さんにしたくなかった。

中途半端ほど失礼なことは無い。そして後で絶対相手を傷つけてし

まう。

俺はそれが嫌だ。嫌だからあの場で青山さんを振ったんだと思う。それでも……青山さんは諦めてくれなかったが。

「……圭介、絶対チャラ男だと思ってたけど……案外誠実なんだな！」

「俺の何処がチャラ男!？」

「だって圭介の周りって女の子ばっかだろ!？」

あかりさん、貴女も女の子っすよね。あと皆が思ってる程女友達は多くないと思うぞ。

それにしても、俺って周りからどんな目で見られているんだろうか。俺……そんなに女癖悪く見えるの？

「あのなあ……っーか、あかりはどうなんだ？ 誰かと付き合った事とかあるのか？」

「んみや、そんなもないぞ」

この人ガチで誰とも付き合ったことがないらしい。

即答な上に真顔だ。まあ確かにあかりって恋愛とか興味なさそうだけれど……。

でも、それで納得するのも面白くないしなあ……よし、少しからかってやろう！

「ホントか？ 好きな人くらいいるんじゃないか？」

「好きな人………あ……ッ！ そ、そんなのいないっ！」

突然、風邪でも引いたかのように顔を赤らめ、そうだと言っているかのように否定をする。

あかりのこの反応は……絶対好きなヤツがいる。

それでも俺は三度の恋愛を経験したんだ。まあ三回とも告白すらしてないけど……。

それでも恋と違ってのは理解しているハズだ。だからこの僅かな反応でわかったぜ。

あかりに——好きなヤツがいるっ！

「嘘つけえ〜！ その反応は絶対にいるだろ？」

「だ、だからあたいにそんなのはいないっ！」

「まあまあ折角だから言っちゃおうぜ？ 安心なさい、それでも俺は口堅いからさ！」

「な、だ、誰が言うかつ！」

真っ赤になったあかりが、全然力が籠っていないハンマーパンチを、俺の胸板へと打ち込んでくる。

しかしいい事を聞いたぞ。誰が言うかーっと言うって事は……好き  
な人いるんだな！

フフフ……これは面白くなってきた。他人の恋愛話ほど面白いものは無いぜ。

「女は度胸！ なんでも言ってみるものさ！」

「それ、男は度胸だろ……？」



「細かい事気にすんなって」

「き、気にするに決まってるだろ！　くくくッ」

叫んだ直後に再び顔が真っ赤に染まる。あかりってやんちゃな癖に結構初心な子だなあ。

おそらく今が初恋って感じなのだろう。

恥ずかしくて仕方ない……ちくしょう、今のあかりは何か女の子な感じで可愛いな。

俺よ、あかりのせいでロリコンに目覚めちゃダメだぞ……ッ！

「大丈夫だって言っちゃおうよ。恋愛相談ならいくらでも乗ってやるからさ！」

もうずっと顔が赤いあかりは、急に借りてきた猫のように静かになってしまった。

ハハハ、流石にちょっとからかい過ぎたかな。

ちよっと謝った方がいいかなーと思った――刹那。

「……………け、圭……………」

「えっ？」

俯いているあかりが何かを呟く。

誰かは聞きとれなかったがそれは人の名前、間違いなく誰かの名前だった。

やがてあかりは拳を握り、力強く俺を見つめて――

「だ、だから……………圭介だって言ってるだろ！　…………ッ、くくくッ！」

「……………へっ？」

思わず呆氣に取られた声を漏らす。

好きな人の名前をハッキリと告げた後、彼女は顔を完熟トマトのよう  
に赤くして、そのまま逃げるように背を向けて走っていった。  
った……。

「い、今の……って……？」

あかりの今のあれって、ひょっとして……………。

——コクハク？

**第98話、あれ……こんな展開予想してませんでしたよ？（後書き）**

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

葵「ま、またライバルが増えた……しかも友達がライバルだよ!？」

千早「あはは……あかりまで先輩に取り付かれちゃったね」

あかり「そ、そんなことないんだからな！ あたいと圭介は友達だっ！」

葵「でもお兄ちゃんの事大好きなんだよね？」

あかり「……っ、だ、黙れよな葵っ！」

千早「あかりに先輩を盗られたら……わ、わたしもって頑張ろうっ！」

あかり「ち、千早ダメだっ！ 必要以上圭介と仲良くなるなよな！」

葵「こらあく！ お兄ちゃんは葵のものだよ!？」

——一方、2年の教室。

圭介「ああ、出会いが欲しい……ふおぐおっ!? にやにすんれすかーっ!？」

赤佐「いやあゝ、藤島が言うど嫌味にしか聞こえないんやゝ」

黒木「ったく！ てめえそんな事言いやがって……殴られて当然だクソ野郎っ！」

圭介「だ、だからって殴る事ないだろ……ちくしょう不幸だ……っ」

※作者も圭介は殴られて当然だと思えます！

## 第99話、学園モノにありがちな出会いのシーン

……よし、整理しよう。

頭の中が混乱していて真っ白だし、とにかくこう言う時は整理するのが一番だ。

まず、俺はあかりに好きな人がいるのかと聞いた。

あかりは最初は躊躇ったが、遂に好きな人の名前を言ってくれた。つで、そのあかりの好きなヤツの名前ってのが――ケイスケ。

……ケイスケ？

はて、どこかで聞き覚えのある名前だ。

そういえば俺の名前ってなんだったかな。記憶が正しければ俺は藤島圭介って名前だ。

圭介……圭介。ひょっとしてあかりは俺の事が好きなのか……？

いやいやいやいや待てよコラッ。あかりにそんなハッピーなフラグを立てた覚えは皆無ですぞ？

それを言ったら青山さんにだって、フラグを立てた覚えはなかったけど……。

「だああああちつくしろう！」

ラッキーなイベントなハズなのになんなんだこの苦悩はっ！

しかも結構嬉しかったし……なんたってあかり、見た目は超弩級に可愛い美少女だからな。

ヤベエどうしよう。俺はこの後どうすればいいんだ？

と、とりあえず落ちつこう。うん、告白された直後って気持ちが高ぶるからな。

落ちついた時にあかりの事をどう想っているか……返事はその時の

気持ちだろう。

とにかく、中途半端ってのが一番ダメだ。

一番重要なのは俺があかりを好きなのかって事だよな。

……まあ、それを考えるのは後だ。とりあえず葬も心配しているだろうし、そろそろ家に帰ろう。

特に何も考えず、ただボケーっと歩いていると、いつの間にか古宇坂市の中心まで来ていた。

あと何キロくらいかな。中心街つつつても南部からは結構遠い。

でも、気分のせいかすごく短く感じたなあ……。

はあ……なにやってんだろうなあ、俺……。

とにかくアレは告白……だよな。だったら次に会った時までには返事をしないと。

伊吹には謝らないといけないし、あかりには告白の返事をしないといけない。

オマケに超能力者や魔法使いと戦う羽目になるし、高校2年の夏……予想以上に忙しい……ッ！

「キミ可愛いねえ。おおくしかも最近東京で有名な佐井学園じゃん？」

あ、佐井学園？

それって明智が前に通っていたって言う、名ばかり進学校の超能力者養成所……。

その声を聞いて振り向くと、如何にも不良な人達が一人の少女を取り囲んでいた。

「……はあ」

長い黒髪、紅い瞳、冷たいが可愛らしい顔立ちで、この辺では見かけない緑っぽい制服。

俺はある事を思い出した。そういえば早川ってヤツも緑っぽい服を着ていた。

なるほど。緑は佐井学園の制服の色ってわけか。

でも、佐井学園で能力開発を行っているのは開発科のみ。

それ以外の学科では進学校らしく、レベルの高いあくまで普通の授業を行っているらしい。

だから彼女が超能力者とは限らない。そもそも、外で超能力をバンバン使うのはまずい事だろう。

っと、言う事はあの子……不良に囲まれてヤバイ状況なのかもしれない。

「今から俺達と遊びに行かない？」

「帰りは送ってやるからよォ。まあ、いつ帰れるかわからねえけどな！」

「だっははははは！」

馬鹿だろアイツら。ナンパはもっと上品にやらないと。

あんな下品な言葉じゃ女の子に引かれるぞ。

まあ、ナンパ自体女の子に引かれる行為な気がするが。

しかしまずいぞ。あの兄ちゃん達はあどけない彼女を取って食うつもりだ。

あの子はさつきから黙ったままだし。ヤバイ……この状況は非常にマズい。

「だいじょーぶだいじょーぶ！　ちゃんと送って帰るって！」

「だからさあ、俺達と遊ぼうよ。きっと楽しくて気持ちいいからよ！」

気持ちいいって言うてる時点でもうオカシイだろ。

下心丸見えだっつーの。しかも気持ちいいのは回数を重ねた子のみ。

女の子は初めてって痛いらしいぞ。まあ……エロゲーで得た知識だが。

第一こんな奴らにやられるって相当な屈辱だろう。彼女だってそれを望んではいないハズ。

よ、よおし……ここはひとつ、俺が一肌脱いで助けてやろう。

しかし……相手は8人。流石にこの人数をぶっ倒せってのは無理があるよな。

よ、よおし……こうなったら上○さん戦法を試してみるか。

そうと決めた俺は勇気ある一步を踏み出し、不良達の間に割って入り――

「ああ、いたいたっ！」

「あ？」

女の子と不良達が一斉に俺を見る。

女の子は少し驚いた様子だ。一方の不良達は俺を睨みつけている。

「ダメだろ勝手に逸れちゃ！ いやいや、どうも、皆さん連れがお世話になりました！」

よし、出だしは完璧だ。

不良達は威嚇モードから驚きモードへと変わった。

この隙に彼女をこの場から連れ出し、安全な所まで移動して彼女と



別れる。

相手がビリビリ中学生じゃないだけに、この作戦の成功率は100%。

俺は「ほら行くぞ」と言いかけてつつ、彼女の手を引いた――

「誰かしら……貴方？」

「あははは……ははは………へっ？」

彼女の一言により、場の空気が凍りついた。

や、ヤベエこれじゃ上○さんとまるっきり同じやん！

「ちょ！ うまく合わせろって！ 知り合いのフリして自然に助け出す作戦が台無しだろ！」

「知らない人についていたらダメって、私は親にそう言われたわよ？」

ちくしょーまさか同じ運命を辿るとは！

ああもうやっぱり手え出さなきゃよかった。

おかげで不良達が再び威嚇モードに移り、メンチを切りながら柄悪く歩み寄ってきやがったぞ。

「なんだテメェ何か用でもあんのかあ？」

「ふざけた真似しやがって。殺すぞ、アア？」

「あははゝえ、えゝつと……」

どないしようこれ。気付けば8人の不良に俺は囲まれてしまった。

不良は確かに一人じゃ弱い。酒やたばこで身体を壊し、しかも服装は動くには適していない。

不良の喧嘩の腕はアスリート並に鍛えていた、あのアナスタシアに比べれば遥かに劣るだろう。

だが不良達は弱いから仲間と群れている。それはつまりどういうことか。

いくら個人レベルで弱くても……群れば大きな力となる。

実際、俺の喧嘩の腕じゅあ一度に3人くらいまでが限度。

つまり言うところ……この人数相手じゃ体質上、大怪我はしないだろうがフルボッコは確定だ。

ちくしょーフルボッコ嫌だ。身体は丈夫でも殴られると痛いんだぞ！でもなあ。無抵抗のままフルボッコにされるのもカッコ悪いし……ったく、仕方ねえなあ。

「ったく、てめえら恥ずかしくねえのかよ！　こんな大人数で女の子一人に寄ってたかって、それが大の男のすることかよ！」

「アア？　なんだてめえいきなり？」

「俺達に説教くれるってのかよ？」

「ああそうだよ！　てめえらムカつくんだよ！　俺はな、お前らみたいな胸もなきや学もねえ奴ら大っ嫌いなんだよっ！」

「なんだとコラッ？」

「てめえやっぱ殺されてえんだな？」

よしよしい感じだぞ。実を言うと、これは女の子救出の為の作戦だったりするのだ。

俺の作戦とは——まず、不良達を見下すような言葉で挑発し。

「いいぜ、殺せるもんなら殺してみろよ。言っとくけど俺は強えから怪我しても泣くじゃねえぞ！」

あえて喧嘩を買うような素振りをみせて。

ついでに自分は強いと思わせておいて、それで潰し甲斐あるヤツだと想いこませる。

すると、不良達は額に血管を浮かべ遂に激昂する。

「上等だ！ てめえらコイツブツ殺すぞ！」

「おう！」

さてさて……誰かが一人駆け出す瞬間。俺の作戦はそのタイミングが重要なんだ。

そして——遂に不良の一人が大地を蹴りあげ前進を開始。その瞬間、俺は——！

「藤島流秘奥義……馬鹿の相手はしない！　さらばあああああああ  
あっ！」

不良達が進む逆の方向に、俺は瞬く間に駆け出した。

すれ違いの瞬間、不良達は驚きや呆氣に取られた顔をしていたが……まあそんなのは気にしない。

とにかくあんな人数相手に勝てるわけがないし——今はただひたすら奴らから逃げるのみ！

「なっ！？　ま、待てやコラァッ！」

「てめえの秘奥義って逃げる事かよ!？」

「うるせえ! 殴られなかっただけ感謝しやがれ!」

1、2、3、4、5、6、7、8……。

よし、8人全員が俺を追い掛けている。

ヤンキーさんってホントに馬鹿だなあ、まあ俺の犠牲によって女の子は解放された。

よかったよかった。後は俺がコイツらを振りきるだけだ。

房総丘陵トレイルランを制したからこそ言えるが、俺はこれでも長距離には自信があるんだ。

不良なんて酒と煙草で身体を壊しているし、靴だって走るのには適していないし、しかもアイツらはペース無視の全力疾走をしている。このままで行けば間違いなくアイツらはスタミナ切れで倒れる。

俺が狙っているのはそこだ。不良を倒すことではない……逃げて振りきるんだ!

「この野郎お……てめえこそ逃げて恥ずかしくねえのかよ!」

「うるっせえ! てめえらにいい言葉を教えてやるよ……逃げるが勝ちだっ!」

「てめっ!? それでも男かよ! そして日本人かよ!」

「男でも日本人でも逃げる時は逃げるんだよ、このサル並野郎!」

敵は幾万って歌を御存知だろうか。

既に著作権の切れた日本の軍歌だが、その歌詞に【敗れて逃ぐるは國の恥 進みて死ぬるは身のほまれ】というものがある。確かに逃げるってのは恥ずかしい事かもしれない。

それより突き進んで玉砕したほうが、よっぽど華々しい事なのかもしれない。

——だが！俺はこう考える。

死んだら後で何もできないじゃん、なら一度引いて態勢を立て直すのもアリだと。

だから俺は逃げるぜ。この後の人生をエンジョイする為にも——逃げる事は恥じゃねえ！

「待てコラァ！」

「おるあ止まれっつ！ 玉となりつつ砕けやがれっ！」

ああもう！

プール学習があって貧血になったり、溺れ時にそうになってしまったり。

その後暮葉と伊吹を傷つけてしまい、魔法使いと戦った挙句のこれですか。

あかりに告白された以外はホントにツイてねえ！

「ちつくしよおっくっ！ これじゃい○天放送時間に間に合わねえええええええっ！」

……こうして、俺の人生で一番不幸な一日は終わった。

結局家に帰った時には既に暮葉もいて、しかも疲労で寝てしまい、結局い○天を見逃してしまった。

伊吹に謝る事もできなかったし。ちくしょう、明日必ず謝らないと。ああ……色々な意味で俺って最悪だ。

ところで、あの女の子との出会い……意味あったんだろうか？

## 第99話、学園モノにありがちな出会いのシーン（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「おおっ！ 次回で100話じゃん！」

伊吹「長っ、半分くらいでよかったんじゃないの？」

暮葉「そうですねえ。作者も友人に「お前の小説長過ぎ」って、文句言われた事何度もあるらしいのですよ？」

葵「その他、読者様にも言われた事あるらしいよ！」

重原「長いと読む気失せるよねえ。俺も禁○目録原作が20巻以上出てると知った時、読もうかどうか渋ったものだよ」

圭介「お前ら折角次回で100話達成なんだから、もう少し喜びやがれ！」

## 第100話、デレ期？いいえ、ツッパリです

その翌日、俺は我が家の隣——国宗家の前に立っていた。ちくしょう緊張する。俺はこれから伊吹に謝ろうと思うんだ。

けどなあ、昨日は魔法使いと戦ったりに不良に追われたり、結局一日が経ってしまった。

どうなんだろう。謝るのが遅いつていうのは。よくそれで非難される政治家はニュースで見るが。

けど、だからって何もしないのは気が引ける。

伊吹が落ち込んでしまったのは、俺が水恐怖症のチキンだったからだし……。

「……………あつ、」

「あつ」

——なんて考え事をしていたら、伊吹が制服姿で家から出てきた。

俺と目があった瞬間、俺と伊吹の間に気まずい空気が流れる。

やっぱり……向こうも昨日の事を気にしているのだろう。

「あのよ」

「あのさっ！」

俺が声をかけようとする、伊吹も同時に同じ事を言ってくる。

なんというタイミング。アニメではよく見るシチュエーションだが、まさか現実で経験するとは。

えーっと……こういう時は常識的に考えて。

「さ、先に言っていいいぞ？」

「えっ……？　け、圭介が先に言いなさいよ」

風に靡く銀色の髪と微かに染まった頬、視線を逸らして小さく呟くその姿。

長年の付き合いのせいかな、普段は全く意識しねえけど……やっぱ伊吹って女の子だな。

黒木が惚れちまうのも無理がない。ていうか俺、これから謝るってのになに考えてんだよ。

とにかく伊吹から予想通りの返しがきた。だから俺が先に言わなければ――

「――ごめん伊吹！」

どこまでもストレートに、俺は45度のお辞儀をする。

少しでも視線を上に向けると、伊吹は呆氣に取られた顔で俺を見ていた。

だがそれも一瞬。次第に伊吹は悲しげな顔になっていく。

「ちょ、ちよつと圭介……なんで謝るの……っ？」

「昨日の事で今更かもしれないけど、心配かけてホントにごめん！」

「し、心配ってそんな……私のほうが悪いのよ？　圭介が泳げないってことを忘れていて……そのっ、私のほうこそごめんなさいっ！」

……あれ、なんだか予想外の展開だぞ。逆に伊吹に謝られてしまった。

しかも、さっきの俺と同じく斜め45度のお辞儀を伊吹はしていた。



「俺は別に気にしてないよ。アレは俺が泳げなかったから……だからあんなことになったんだ。伊吹は別に悪くないよ」

「……あんたさ。ずっと前から思っていたけど、なんでもかんでも自分のせいにし過ぎよ」

「えっ？」

「マイナス思考なのよあんた。いつもはふざけていて、時々ちよつとだけカッコいいのに……」

ちよつとって所を随分強調しますね、伊吹さん……。でも少なからずカッコいいは思われていたのか。

まあそれよりも、俺って伊吹が言うほどマイナス思考なのか？ そりゃあたまに自分を責めたりするけど、でもそれは事実を脳内で考えているだけだ。

それに普段はゲームの為に徹夜をするくらい、超能天気かつ不規則に生きているんだぞ？

「別にマイナス思考ってわけじゃねえだろ……？」

「誰が見たってあんたはマイナス思考よ。いつも自分のせいだ自分のせいだって言って……いい加減あんたが鬱にならないか心配になるわよ……」

「鬱って……そんなのなるわけないだろ？」

「でも、あんたの自虐っぷりはホントになるそうなくらいよ！」

紅い瞳を一直線に向け、本当に俺を心配するかのような表情を伊吹は見せている。

その表情を見て懐かしいと感じる俺。これは――間違いない。8歳の頃にプールで溺れた後、伊吹はこんな顔でプールサイドに倒れる俺に迫っていた。

ただ、あの時は今とは違い、必死なあまりに目に涙を浮かべていたが……。

それでも涙がないだけで全く同じだ。伊吹は本当に俺を心配している。

「……ごめん」

「……あんたのそのすぐ謝る癖、やめたほうがいいわよ？」

「えっ？」

「その、お互いあまりいい気分にはならないでしょ……？」

まあ確かに。時と場合によっては謝られても嬉しくない、むしろ謝られて自分が罪悪感を覚える。

そんな事が俺にも何度かあった。もしかして、今の伊吹も同じように感じているのだろうか。

ったく。俺ってホントになにやってんだろうな……。

結局、俺は幼馴染を困らせる事しかできねえのかよ……っ。

「ほら、元気出なさいよっ！ 圭介は男の子でしょ？」

「ははっ。なんか今の伊吹、お姉ちゃんみたいだな」

「お、お姉ちゃん？ あたしは一人っ子よ？ それにあんたのほう

が誕生日早いでしょ？」

「そういえばそうだったなあ。ってことは俺は伊吹のお兄ちゃんかっ！」

「っ！？」 あ、あんたには葵ちゃんがいるでしょ！？」

伊吹は妹というポジションが気に入らなかったのか、むがあゝっと両手をあげて、まるで怒った猫が襲いかかるかのように突っかかってきた。

本気で怒っているわけじゃないのはわかっている。

伊吹が猫のように突っ掛かってくるのはいつもの事だ。  
要するに伊吹は猫みたいな女の子だ――

「俺は伊吹が妹でも別にいいけどなあ」

「わ、私が嫌よ！ 別なやつなら妥協してあげてもいいわよ？」

「別なヤツねえ？ 幼馴染はデフォルト設定だし……フッフ、恋人とかどうだっ！」

「ここここ、恋人っ！？ こ、恋人なんてそんな……っ、別なのでいいわよっ！ 例えば夫婦とかでもっ！」

「もしもし。恋人より重たくなってますよ伊吹さん」

「ひっ！？」

伊吹はボンッと、完熟トマトのように赤くなってしまった。  
その上、借りてきた猫のように静かになってしまった。

ありやりや、少しからかい過ぎたか？

「は、にゃ……わ、訳のわからない事言わないでよばか圭介っ！」

「夫婦って言ったのは伊吹だろ」

「そんな事言っちゃったのはあんたが恋人って言ったからでしょ！」

「ちょ！ 悪かった！ 悪かったから引っ搔かないでゴメンナサイッ！」

俺は顔面をカチャカチャと引っ搔かれてしまった。  
いつもの事とは言え、伊吹は爪が鋭いから痛いぜ……。  
ていうか……やっぱり伊吹はネコさんだった！

「……………」

「ん？ どうしたんだ、借りてきた猫みたいに」

「……………」

「伊吹？」

「——ッ！ 仕方ないわね……あんたがどうしてもっていうんならその……………」

またしても俯いて小さく呟いている。

途中までは聞こえても、声の小ささで言葉の後半が全く聞こえないぞ？

「~~~~っ！ どうしてもって言うんならその……あんたと付き合  
ってあげてもいいわよっ！」

ちよ、伊吹のヤツ。ヤケクソ気味にとんでもない事を叫んでいるぞ？  
仕方ねえな。伊吹の爆弾発言にフォロー入れておくか。

「あの〜伊吹さん？ すっごく発言ぶっ飛んでませんか？」

「は、はぁ！？ 最初に告白してきたのはあんたでしょ！？ 私の  
こと恋人って言ったじゃない！」

「えっ……ちよ！ おま、本気にしてたのかよ!？」

「別に本気になんかしてないわよ！ でも……あんたモテないでし  
よ？」

「うう……」

そこを突かれると胸が痛いんだが。でも、最近は何故か本当にモテ  
ないのか疑わしいんだ。

青山さんに告白されて、あかりにまで似たような事を言われ……。  
はぁ。こんなの赤佐とかが聞いたら絶対キレルぞ？

しかも中途半端ってのが嫌だからって、青山さんとは付き合わなか  
ったし……。

「私だって嫌で嫌で仕方ないのよ？ で、でも圭介が彼女欲しいっ  
て言ってるし、ガチホモ疑惑だって消えちゃうでしょうから……っ」

「まだガチホモ疑惑気にしてたのかよ！」

それって春頃か初夏の頃の話じゃねえか。  
もう最近は大抵ガチホモだって噂も聞かなくなったのに。

「と、とにかく！ 私が付き合ってあげるって言うてんのよ！？  
返事は！？」

……あれ、おかしいぞ。

確かにパツと見は嫌々って感じだし、告白のセリフとは思えないくらい恐ろしく命令形だ。

でも……なんだろう。この本気で言っている感は？

「付き合あって男女交際だろ？ そんな無理してするものじゃない  
と思うぞ？」

「……っ、じゃあ確認。あんた、私のこと……すすすす、好きなの？」

「好きか嫌いかで言えば好きだけど……」

「だ、だったら付き合いなさい！ 仕方なくモテないあんたと付き  
合ってあげるわよ！」

おいおいおいおい。なんだよこのデレ期に入ったツンデレ娘は？  
あのツッパリ伊吹ちゃんだぞ。こんな事を言う子じゃなかったハズ  
なのに。

もしかして……ああ、もしかするとの話だよ。

俺が自惚れているだけかもしれないが、伊吹は俺の事が好きなのか？

「あのなあ。それはラブじゃなくてライクって意味だぞ？」

「ら、らいく？」

「普通に友達としてって意味だよ。俺達、何だかんだで付き合いも長いし、よく喧嘩もするけど何だかんだで上手く行ってるだろ？」

「そりゃそうだけど……あんたは……っ」

「ん？」

「……ごめん、やっぱなんでもないわ」

途中で打ち切るように、何かを言い直すように伊吹はそう告げた。伊吹は俺に微笑みかけてはいたが、なんだろう……何処か寂しげな瞳をしている気がするぞ。

「伊吹？」

「……わ、わかってるわよ。圭介は普段冗談ばっか言う人だって」

「なんかそれ、俺が軽い男みたいじゃねえかっ！」

「軽いでしょ？ 冗談でも恋人言うんだから……っ」

「あのなあ」

そりゃああんなこと、伊吹だからって冗談で言ったのは悪いと思うよ。

でもそのせいか、俺は伊吹の中ではチャラ男になってしまった

「とにかくわかってるから。その……私だって全然気にしてないん

だからねっ！」

「お、おう」

ホントに気にしていないのか？

そのわりには、伊吹の瞳がやけに真剣な気がするが。

「そ、それじゃあ私……そろそろ部活行くからっ！」

「えっ？　ちょ、伊吹っ!？」

行っちゃったよ……剣道部で使う竹刀を持って行って。

うーん……伊吹のヤツ。本当になにも気にしていないんだろうか？

やっぱり伊吹はツッパリ伊吹ちゃんだろうか？

さっきのあの伊吹の反応、あんまりそんな風には映らなかったけどなあ。

……まあいいか。部活の邪魔になったらいけないし、今日はこれ以上はやめておこう。



## 第100話、デレ期? いいえ、ツツパリです(後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「ついに100回目キターツ!」

伊吹「テンション高いわね……」

圭介「そりゃ100回だぞ? 天下分け目だぜ?」

暮葉「けーすけ様、意味不明なのです」

圭介「……だって、100回だぞ?」

凧紗「長すぎるぞ?」

圭介「……みんなもっと喜べよ!」

## 第101話、好きな人と力仕事とラッキー……????

それから数日後、遂に文化祭準備期間へと突入してしまった。

文化祭準備期間とは、前にも説明したような気もするが、とにかく文化祭の準備をする期間だ。

授業などではなく生徒が文化祭に向けて、ひたすら準備に取り組む。毎年恒例、俺達遊ぶのが大好きな高2男子にとっては面倒くさい期間である。

「6やでっ！」

「7……っ！」

「はい黒やんだウト！」

「だああああちつくしょうっ！」

「黒やん相変わらずダウト弱いんやなあ」

「こらあ男子っ！ 遊んでないで働きなさいよっ！」

カードゲームで遊ぶ三馬鹿に対して一喝が入る。

怖え。今の伊吹の顔は間違いなく鬼だったぞ？

——あの日から俺と伊吹の間には、なんだか気まずい空気が流れ続けていた。

伊吹の視線を感じて振り向き、そこで目が合うと必ず伊吹は視線を逸らしてしまうのだ。

なんてこったい。謝って関係を修復するつもりが余計ぎくしゃくしちゃったよ……。

「圭介、国宗さんと何かあったのかい？」

「うわっ！？　ビックリしたあゝなんだ重原か。まあ、何もなかったと言えは嘘になるけど……」

「国宗さん。圭介の事を意識してないかい？」

「あ？　あの伊吹が？」

「そうだよ。恥ずかしそうに目を逸らすじゃないかい」

やっぱりそうなのか。伊吹がとうとうデレ期に突入したってのか？　いやいやいや。その割にはツンな言葉しか聞いていないし、というか視線を逸らされるんだぞ？　これってつまり、目を合わせたくないくらい嫌ってるってことじゃねえの？

「わっかんねえなあ……」

「ちなみにこれ大吾情報、国宗さんは昔から想い人がいるらしいよ？」

「へえ……まあアイツだって一応女の子だし、好きな奴の一人くらいはいるだろ」

その伊吹が好きなヤツって誰なんだろう？

なんだかムカついて嫌な気もするけど、それで伊吹が幸せになるなら応援しようかな。

まあ……相手が誰だかは気になるし、伊吹が誰かと付き合うって嫌

な気しかしねえけどよ。

「それが自分だとは思わないのかい？」

「あのなあ！ 万年非モテ男の俺が女子に好かれるわけねえだろ。増してや伊吹だぞ？ あれだけ冷たく当たられるって嫌われてる証拠じゃねえのか？」

まあ、完全には嫌われていない様子だが……それでも、少しは嫌われているかもしれないな。

特に今日は顔さえ合わせてくれないし。

ああ……どうしよう。伊吹と普通に話が出来ないって精神的に結構くるよ。

「俺でも気付く事に気付かないって……流石は圭介だよ」

「なんだよそれ？」

「いやいや気にしないでいいよ。それで圭介、圭介は国宗さんの事どう想っているんだい？」

「伊吹のことか？ そんなの幼馴染で大切な仲間だと思ってるよ」

「恋愛対象じゃないんだね？」

「幼馴染が恋愛対象ってのは、多分ギャルゲーとか二次元限定の話だと思うぞ」

現実の幼馴染が付き合うだなんて話、今まで俺は聞いたことがねえぞ。

事実、俺だって伊吹に対してそんな感情を持ってないし……多分。とにかくだ。それは二次元だけの話だ。

現実<sup>リアル</sup>じゃそんな事ありえねえよ……多分。

伊吹は俺に言わせれば家族みたいな存在で、どうしてもそういう目では見れないんだ。

それに、恋人なんてすぐに壊れるかもしれない関係。俺はそれが嫌だな……。

伊吹とは今まで仲良しだったんだし、これからもずっと仲良しでいたい。

……やっぱり、俺ってある意味じゃ伊吹が好きなのかもしれないな。

「現実って退屈だねえ……それじゃあ木下さんはどうだい？」

「えっ……く、暮葉っ!？」

ななななな、にやんで暮葉しゃんなんでしゅかつ!

……っつか、なんなんだこの変な感じ?

一瞬胸に感じた違和感……どこか懐かしい感じの不思議な感覚。

「二人は校内スキシップも余裕らしいし、大吾情報だと1年の廊下で抱き合って、1年の間では2人は付き合っていると思われているらしいよ」

「なんでやねんっ! 別に俺と暮葉は付き合ってねえよ。その……いとこだいいこ!」

確か俺と暮葉はいとこって設定だったハズ。

いとこなんだからスキシップがあってもいいだろ。

そうだ、だから別に特別な意味なんて……第一、1年の廊下でのアレは事故だったんだ。

馬鹿な1年が暮葉に体当たりしたから、その勢いで暮葉が抱きついて来ちゃっただけなんだ。

暮葉は何とも思っていないだろうし、抱きついてくるのはいつもの事だ。

だから……別に特別な意味は。俺だって別に暮葉には……っ！

「もしかして圭介、木下さんの事が好きなのかい？」

「はい!？」

「まんざらでもない感じだねえ」

「ふっざけんな！俺はロリコンじゃねえよっ！」

俺はロリコンなんかじゃない。だから暮葉を好きになるわけがない。  
俺は……女子高生が好きなんだ。暮葉は……アレだ、妹みたいなもんだ……ッ！

妹……でもなんでだろう。葵とは全然違うような……っ、ああもう！  
余計なこと考えてんじゃねえよ俺！

「圭介も国宗さんに負けないくらいツンデレだね」

「うっせ黙れ！　そういうてめえはどうなん——」

「ちよろっとそこの野郎共おゝ！　力仕事手伝ってゝ！」

「けーすけ様っ！　荷物の量が多いので手伝ってくれと助かるのですっ」

重原に叫ぼうとした瞬間、気だるそうな小坂と元気が暮葉が、俺達

に輜重兵<sup>しちゆうへい</sup>として出兵しやがれと優しく迫ってきた。

力仕事かぁ。確かに女の子には厳しいよな。

暮葉は力があるほうだけど、小坂はあんまり力がなさそうだし……  
何より二人とも女の子だ。

「暮葉も小坂も随分働いただろ？ 俺ら今まで遊んでたんだし、だから力仕事は任せてくれ」

「もきゅ？ で、でもけーすけ様っ。結構な量なのですよ？」

「そーだよ？ 圭くんの細腕二本じゃキツいかもだよ？」

「あのなあ、こう見えても腕力には自信があるんだ」

悪かったなあんまり強そうな見た目じゃなくて。

そりゃ鏡で見たら自分でも思うよ。平均的すぎて全然強そうに見えないって。

けど、この拳で魔法使いや超能力者を倒した。永渕だってこの拳で倒したんだ。

それに——俺には強力な助っ人がいる！

「俺と圭介で全部やっつくから、2人は休んでも構わないよ」

とても爽やかな笑顔を浮かべ、レディーに対して優しく振舞う重原  
広敏くん。

彼は武道家でもって筋肉質なのだ。

多分、いつも一緒にいる俺と大吾と重原の三人組の中じゃ、重原が  
最も腕力のある奴であろう。

「けーすけ様に重原さん……ありがとうなのです！」

「へえ。日頃からそうしてれば圭くんもモテるのにねえ」

「うっせ黙れっ」

なんでそんなニヤニヤしながら言うんですか。

あと暮葉。モテるって言葉を聞いた時、なんで不機嫌そうな顔になるんだ。

まあ、そんな事を気にしていても仕方がない。それよりさっさと仕事に行こう。

えーっと……小坂から手渡されたメモ帳を見ると、行き先は第一準備室か。

取ってくる物は……2－4と書かれたシールが貼ってある段ボールね。

さっさとブツを取って教室に戻ろう。廊下で生駒や野原には絡まれたくないからな。

——と、いうわけで俺と重原は準備室前まで辿りついたのだが。

「う、ぐあ……っ」

「どうしたんだ重原？」

「圭介……俺、トイレに行ってくる」

「えっ？　なんだよ、お前もしかして今日はあの日か？」

「馬鹿！　俺は男だ……まあお腹が痛いのは確かだね。10分以内に戻ってくるからヨロシク！」



「あ、ちょ……オイ重原っ!？」

ダッシュすんの速え……。

まるでドイツのロケット戦闘機、me163コメットが急上昇するかのようだ。

まあ、腹が痛いなら仕方ねえか。

とりあえず重原の負担軽減の為、一人で仕事をちゃっちゃとやっちゃいますか。

でもなあ。あの筋肉男が使えないとなると、結構キイい仕事のような……まあいいか。

とりあえず、俺は任務を遂行する為にドアを開けて――

「……えっ？」

「――ッ！」

「ふ……藤島――ッ!？」

驚きの後に流れる沈黙。瞬間、2人の少女の顔が真っ赤に染まった。そう、視線の先に――マンガみたいに着替え中の女の子がいたんだ。一人は豊満な胸の持ち主で、なおかつクールなイメージのある明智。明智は何故か片手に青系の男モノの衣装を持っており、近くには剣のようなものが置いてあった。

ちなみに下着の色は黒。ぶ、ぐ……やべえ、エロスな身体にエロスな下着で鼻血がでそう。

その隣で着替えていたのは生駒だ。美乳でスタイルのいい生駒は黄色い帽子を被っていた。

何の衣装であろう。ちなみに下着の色は白。なんとも生駒らしい……ってかヤバくねコレ？

とにかく言い訳をしなければ――!

「こ、これはそのっ！ 荷物を取る為にやったことで、決して邪な感情があつたわけでは——」

「ふ、藤島……やっぱり藤島はヘンタイさんだ……っ！」

「ちょ、違っ！ 俺は紳士——」

「クソ介え……くたばれエロ野郎おっっ！」

瞬間、生駒のしっかり握られた拳が顔面に激しく突き刺さった。鼻っ柱が折れる勢いの拳をモロに受け、俺は後方へ数メートルも吹き飛ばされた。

そして——俺は殴られると同時に壮絶なる悲鳴をあげてしまった……。

**第101話、好きな人と力仕事とラッキー……??? (後書き)**

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeIlg4h>

・後書きトークコーナー

黒木「ちくしょー羨ましい！　なんでテメェにラッキースケベがあるんだよ！」

圭介「うっせ黙れ！　どこがラッキーだよ、顔面殴られたんだぞ？」

黒木「それでもラッキーだろ！　女の子の下着姿を見れたんだぞ！？」

圭介「確かにそれは嬉しかった……だが、殴られるのはゴメンだ！」

黒木「馬鹿野郎！　殴られて感じるのが真の男だろ！？」

圭介「お前ドMかよ！？　俺にそんな趣味はねえっ！」

## 第102話、主人公は修羅場を経験する運命

「うへえ〜……」

ちつくしう生駒のヤツ。ホントに思いっきり殴りやがったな。

どうやらアイツは俺が心底嫌いらしい。くそっ、これが普通の人なら病院送りだぞ？

まあ着替えを見ちまったのは悪いと思うよ。でも、流石にこの仕打ちはねえよ。

やっぱ俺、生駒は苦手だ……ッ！

まあその生駒は明智にこっ酷く説教され、現在は――

「うにゃあああつ！ ご、ごめにゃさいナギちゃ〜んっ！」

「全く。すみにゃんは陸上部で鍛えているんだ。藤島は素人なんだぞ？ ホントに気を付けろよ」

そっか。生駒があまりにも変態すぎるせいで忘れていたが、アイツ陸上部だったんだよな。

それはいいんだけど……。

陸上は俺が間違っていないけりゃ、ただ単に走ったり跳ねたりする競技だ。

そんな陸上部に所属する女の子が、なんでボクサーもビックリなパンチを出せるんだよ。

しかも生駒はニヤ厨のオタクなんだぞ？

「藤島っ！ すみにゃんがすまなかった……っ、その、怪我とかしてないか？」

「別に怪我なんてしてないよ。俺の方こそ着替え見ちゃってごめん……」

「き、気にするなっ。準備室で着替えていた私らが悪いんだ」

「ああ、ノックくらいすればよかった……」

でも、そのおかげで明智の破壊力抜群なボディーが。

生駒の美しいスタイルが……あかん、思い出しただけで鼻血が出そうだ。

やっぱ下着姿は全裸よりエロですな！

「うう……すまなかった、藤島……っ」

「明智、そこまで落ち込むなよ」

俺は一步ほど明智に歩み寄った。なんかその……落ち込んでいる女の子は放っておけない。

何より明智は俺の友達だからな。うん、放っておくわけにはいかないぜ。

——というわけで接近し、慰めてあげようかなーと思ったのだが………。

「ちえすとおっっ！」

「——ふおがあッ！？」

刹那、ゴン！とこめかみに激しい衝撃。

グラッと脳が揺さぶられ、視界がぼやけてフラフラとしつつも何とか体勢を整える。

ふう、俺の体質ってホント便利だ。脳震盪すら起こさず痛みさえも既に感じない。

そんな通常の状態になったからこそ、俺は誰に何をされたのか整理する事が出来た。

犯人は生駒である。生駒が飛び蹴りで俺のこめかみをやりやがったのだ。

おそらくは靴の踵の部分。あのあたりでこめかみを蹴りやがったのだろう。

「ちっ、角度が甘かったみたいだよ……っ」

「おおまえっ！ 今の下手すりゃ死ぬぞ!？」

しかもなんだよ角度が甘かったって。

コイツ……俺を殺す気満々じゃねえか——ッ！

「クソ介がゴキブリ並に丈夫だって、ナギちゃんから聞いたからだいじょーぶだよっ」

「明智っ！ お前余計なこと生駒に吹き込むなよっ！」

「うっ……すまん、つい言っちゃったんだ……っ」

「ああもう！ とにかく効こうが効くまいが、あんな攻撃を躊躇なく仕掛けるって……てめえは一体どういう神経してんですかっ!？」

「私の任務はすみにゃんを守ること！ 害虫クソ介駆除は私の仕事だよ!」

あははは、ねえねえ俺さ……キレちまってもいいかな？

流石にそろそろ我慢の限界っすよ。

もうね、怒りを押さえるのが……そろそろ限界っす。

でもなあ。女の子にキレる男って情けなく映るだろうし。

やっぱ世の中理不尽。絶対現代は女尊男卑だ。ちくしょう誰だよ男  
女平等って言ったヤツは！

「いでっ！」

「すみにゃん！ 藤島に乱暴するな、謝れ」

「うにゅーだってナギちゃん……っ」

「謝れ」

拳骨までして俺に謝れと言う明智のあの姿……怖え。

流石は明智光秀の娘。そして我が初芝高校の風紀委員。

正直ヤクザの組長よりも迫力があるかもしれん。

まあ、ヤクザの組長なんて映画でしか見たことないけど……。

「ごめんなさい藤島君……」

「えっ？ ああ、まあ……気にするな」

生駒の態度が180度も変わってしまうだなんて……明智、恐ろしい子！

「すみにゃんが本当に悪かった。私からもこの通りだ」

「いやいやいや、もういいから頭上げようぜ？」

「許して……くれるのか？」

「許すも何も怒ってねえからさ」

まあ、生駒に対してちよっぴり怒りを覚えてはいたが……。  
ここまで謝られると、なんだか怒る気も失せてくる。

それに、生駒の扱い方がなんとなくわかった気がするよ。

生駒が暴走した時は——とにかく明智を利用すればいいんだ！

「おい圭介え……ってあれ？ 4組の明智さんじゃないかい？」

「ん？ おお、確か藤島の友達の……」

その時、トイレに立て籠もっていた重原が戻ってきた。

なんだよアイツ。明智の事知ってたのか。

そういえば……何度か顔を合わせている所を見た事あるかもしれん。

「俺は重原広敏、よろしくね」

「うむ、明智風紗だ。こっちは生駒純奈、よろしくな」

「よろしくね重原くんっ♪」

う……ッ、生駒のヤツ、吐き気がするほどに猫かぶりをしているぞ。  
本性を知ってる身としては、まあなんとも見ていて不快な……ッ！  
後で重原に教えてやらねえとな。生駒純奈という人物の本性を、純奈だけに隅から隅まで。

「それじゃあ、そろそろ仕事を再開しようか」



「おう！ んじゃあ明智も生駒もまたな」

「仕事頑張るんだぞ二人とも」

「圭ちゃんに重原くん！ まったねー！」

うおあああああっ！ やめろ、やめるんだ生駒。

猫かぶりするのもいい加減にしてくれえ〜！

それにして生駒のヤツ。圭ちゃんなんて呼び方よく覚えてたな。

まあいいや。それよりさっさと仕事を片付けよう。

……うげえ、とんでもねえ量だなダンボール……やっぱ筋肉重原が  
いてよかった。

ちなみに、明智達のクラスではステージをやるらしい。

その内容はロミオとジュリエット。明智がロミオで生駒がジュリエ  
ットらしい。

……ダメだな。ロミジュリは俺的にやっぱ律滞だっ！

——放課後、つと言っても帰れるわけではない。

放課後はクラス展示やステージ発表などの準備に加え、部活や有志  
の準備や練習が行えるのだ。

我が写真部も例外ではない。今日は当日活動に向けた打ち合わせが  
あるのだ。

ただし、部員全員参加というわけでもなく、それに部員全員が参加  
できるわけでもない。

「申し訳ないのですけーすけ様……拙者はその、クラスのほうが忙  
しくてっ」

現に暮葉はクラスのほうが忙しいらしく、今回は写真部に顔を出せ

ないらしい。

「大丈夫だよ。俺の方こそクラスは手伝えねえけど、まあお互い頑張ろうな！」

「はい！」

「暮葉〜！　ちよろっとちよろっと！」

「はいはい今行くのですっ！　それじゃけーすけ様、また後で会いましょうっ！」

「わかった、お前も頑張れよ」

こうして小坂に呼ばれ、暮葉は教室のほうへと向かったのだ。  
暮葉が部室にこない……か。なんだか残念な気分だなあ。  
まあ、仕方ねえか……文化祭は皆それぞれ忙しいもんな。

「栄<sup>ロン</sup>！」

「く、黒やんがあがった!？」

「黒やん、麻雀は強いんやで〜。黒やんが金旭中の番長の頃は、賭け事は黒やんの得意な麻雀以外は認められなかったんや」

「ちょ！　赤佐テメエ変な事言うんじゃねえっ！」

「ちょっとあんたら！　いい加減にしないと竹刀でシバくわよ!？」

まあ、中には遊んでいるヤツらもいるが。

そして伊吹にお説教されているのだが……伊吹、一体いつになったら顔を合わせてくれるのかな？

というか、やっぱり俺が謝らないと。でもこれ以上謝るなって言われてるし。

いやいや、でも昨日のアレと今のコレは話が違うだろうし。

……やっぱりいやだな。伊吹に嫌われるって……。

まあ悩んでいても仕方ないし、とりあえず部室に行こう……。

——写真部の部室。一見ただの狭い教室だが、意外にも機材などは揃っているのである。

そういえばこの部室に入るのも、青山さんの一件が終わってから初めてだな。

つまり、その間一切青山さんとは会っていないわけで……元気にしてるかなあ青山さん。

いや待て。そう言えばあかりも写真部で、俺はそのあかりに告白されたような気が……。

どうしよう！もしあかりが部室で堂々と言ってみろ？

【藤島君も所詮はリア充……失望だよ、退部確定だ！】

【先輩……わたしがいながらひどいです……っ】

【お兄ちゃんサイテー！ 何人落とせば気が済むの！？】

やがては暮葉達にもバレて……。

【けーすけ様……拙者が必死で働いている間にそんな事を……？】

【し、死ねばか圭介っ！】

【へえっ？ あたし的にはおもしろい展開になってきたかな？】

【流石ヘンタイ。藤島、お前には失望したぞ】

【さすがクソ介、マセてんな】

嫌アアアアアアアアアアアアアッ！

人生が終わる——あかりが下手な事を言えば人生が終わっちゃう！  
野郎共も強敵だが女子陣も強敵だ。

何故か俺の友達は……他の女子と仲良くしていると機嫌を悪くする  
どころか、突然蹴ったりひどい事を言ったり……とにかく、最近み  
んなが何故か厳しいんだ！

「落ちつけエー考えろ。なんとか生存ルートに突入する方法を考え  
るんだ……ッ！」

ここはギャルゲーマーとしての意地の見せどころ。

無難に死亡フラグを回避しつつ、なんとか生存フラグを回収してい  
くんた。

その為にはまず何をすれば。いや、どうやってあかりを口止めすれ  
ば——

「あ、圭介っ！ やっぱりここにいたんだ！」

「——ッ!？」

出たアアアアアアアアアアアアアッ！

火種を撒き散らす可能性のある存在——浅間あかりが！  
さらに、部室のドアが不意に開かれ。

「あつ、先輩とあかり……よかった、約束通り来てくれたんですね  
……！」

瞬間、俺攻略を掲げる青山さんまで入場してきました。  
どうする……俺。この修羅場をどう切り抜ける——!？

## 第102話、主人公は修羅場を経験する運命（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDeligh>

・後書きトークコーナー

圭介「今回はお悩み相談コーナー！ 俺と暮葉が皆の悩みを解決するぜ！」

暮葉「まず最初の一通は……〇〇県I市在住R・Iさんのお悩みなのです！」

『レナには好きな先輩がいます。でも先輩はバイト先に住んでいる人と付き合っています。でもレナは先輩を諦められません。そこで先輩を寝取る方法をレナに教えてください』

圭介「なるほどNTRってわけか。確かに好きな人に恋人がいちゃ辛いよな……けど寝取るのはダメだと思うぞ？ その人の彼女さんがどれだけ悲しむか、自分が先輩を寝取られたらどんな気持ちになるか。それを考えるとやらねえほうがいいと思う。それよりR・Iさんは多分若いんだから、もっといっぱい恋愛を経験してその先輩よりいい男を探しなさい！」

暮葉「けーすけ様……くさいけどいい事言うのですね！ さてお次は〇〇県K市在住T・Fさん！」

『不幸です、よく不良に絡まれます。教師に変な因縁つけられます。あと最近彼女がヤンデレで怖いです。悲劇じゃ……助けてください』

！  
』

圭介「なにこのリアル上○さん？　こんなヤツホントにいるんだな……不良に絡まれたらとりあえず逃げろ！　教師に因縁つけられたら一方○行になれ！　ヤンデレ彼女は……まあ、浮気しなけりゃいいんじゃないか？」

暮葉「もきゅ、けーすけ様の言葉がT・Fさんの力になる事を望むのです、さて最後次は○○道S市在住Sさん！」

『小説の時間が進まなくて悩んでいます。まだ4月から始まって102話の時点でまだ夏休みに入っていないだなんて……あと、睡眠不足が響いて指が進まず執筆速度が低下して……あと、身体が鈍ったもんで正拳突き練習やったら腕がだるいです……たったの100発（空手じゃ基本）ごときで……ッ！』

圭介「いい加減にしろ作者ア！　あ、言っちゃった……」

暮葉「もきゅ、Sさん運動不足なのですね……」

## 第103話、準備(?)——in部室

写真部の部室。今のここに部長である浅間英樹の姿は無い。

俺と青山さんとあかりだけだ。

2人によると、浅間部長はクラス委員なのでクラスのほうが忙しいらしい。

おいおい浅間部長。アンタあれでもクラス委員だったのか。

そして葵も似たような理由で忙しいらしく、時間通りに集合できたのはこの3人だけらしい。

「つか、招集かけたの部長だよな?」

「は、はい……部長です……っ」

「まったくうちのエロ兄貴は。ちゃんと時間を守れよな!」

あかりは兄貴のルーズさにお怒りのようである。

まあ、人様を呼んでおいて呼んだヤツがいないってのは、俺もあかり同様ムカついてますけどさ。

どうせ浅間部長だし……もう、あの人の場合は怒っても仕方がない気がするよ。

「部長がいない事には何も始められないし、雑談でもゲームでもして時間でも潰さないか?」

「おっ! 圭介ナイスアイデアだなあ!」

「わ、わたしも……先輩の案に賛成です……!!」

案の定、2人が俺の提案に乗ってくれた。

フフフ……いいぞ。これはいい展開である。

ここで説明しよう。俺の死亡フラグ回避作戦要領を！

まずは俺から適当に話を振って二人に乗ってもらうんだ。

続いて恋愛のお話……つまり、恋バナというヤツに発展しないように気を付けて話を進める。

そして雑談している間に浅間部長が来るハズだ。浅間部長が来れば部活の話になるだろう。

そして——部活が終われば真っ先に部室を出て、俺は暮葉達がいる教室へ向かう。

ぐっふふふふ……見よ！この完璧の作戦。これで俺は死なずに済むぞ！

「よ、よおし………そんなじゃあ何の話する？」

「あの……っ！ その前にその……し、失礼します……っ！」

「いいっ!？」

「なっ!？　ち、千早——ッ！」

これは予想外の展開。なんと青山さんが椅子を持ち、立ち上がったと思いきや俺の隣に椅子を置き、なんと肩に凭れかかってきたのだ。おいおいやべえぞ………こんな自体は予想もしていなかった！

「あのー青山さん？　こいつあ一体どういう事で？」

「えへへ……先輩はわたしの彼氏なんですよ……？」



「待て！　ちょーっと待て！　何かぶっ飛んでやいないか！？」

「気のせいですよ先輩っ」

こんなにも早く修羅場が訪れるとは思ってもいなかった。

あかりが対抗心をむき出しにしているぜ。歯を食いしばり力強くこちらを睨みつけている。

「ち、千早あっ！　今すぐ圭介から離れろよな！」

「え……？　なんであかりが怒るの……？」

「……ッ！　と、とにかくどけよな！」

「いいじゃん。わたしのこと……応援するって言ったよね……？」

「言ったけどダメなんだ！　……ああもう仕方ない、こうなったらあたいも——」

その時、あかりまでもが俺の肩に凭れかかってきたのである。

あまりの驚きに思わず情けなく声をあげてしまう。

右方のあかり。左方の青山さん……。

そりゃあ当然嬉しい事は嬉しいよ。女の子の感触、匂い、そして温もり……。

すべてが男である俺の心を満たし、同時に純粹かつ邪な欲望を生み出しつつある……ってダメだろ！

もしこんな所でエッチなイベントが発生し、誰か見られたら……俺の学園生活は破滅だ——！

「二人とも、肩が重いんだが……」

「……ごめんなさい先輩、キスのほうがよかったですか……？」

「いや、そういう問題じゃねえから！」

「そうですよね……先輩は男の人、エッチなことがしたいんですよ……」

「ちいいいがああううううう！ いや、違わないけど違うんです  
！」

「わたし……先輩が相手なら、いつでも来いですから……っ」

「青山さん！？ もっと自分を大切にしようね！」

これまた予想外だったぜ……青山さん、まさかここまで積極的な子  
だったとは。

これもアレか。俺が青山さんを家から解放して自由にしたせいなの  
か？

いやいやそんなハズがない。俺に告白して心を広いただけなんだろう。

でも——心と一緒に股は開かんでもいいわ！

「圭介！ 千早が好きじゃないんなら誰が好きなんだ。いい加減ハ  
ツキリ教えろよな！」

「あのなあ……特に好きな人はいないぞ？」

「……そうなんですよ、先輩……困ったちゃんなんです。だから……  
わたしは先輩に好きになったもらう為なら……先輩の望む事をな

んでも――」

「ってなんで制服に手をかけるの!? どうして服を脱ごうとするんですか!?!」

しかも着替える女子ってなんかアレだよね。ぶっちゃけ全裸よりヤバイよね……ッ!

「千早、ただのビッチだな!」

「違うよあかり! 先輩も誤解しないでくださいね……わたし、こんなこと先輩にしかした事ありません……っ!」

「いや、そりゃわかってます……」

青山さんは中学生の頃から俺を想っていたらしいし、なんだかそれが初恋っぽいし。

とっても純粋な子……だったハズ。うん、今は白○黒子もビックリな変態淑女だけど。

でもきつと……今がオカシイだけなんだ。

恋というウイルスに毒され、マトモに思考ができないだけなんだ――!

「圭介! 千早が好きじゃないんならもっと手厳しくしろよな!」

「そう言われてもなあ……」

このベタ惚れ状態の女の子を突き離せと?

そりゃあそうしないと面倒なのはわかっている。でも、流石にそこまで心を鬼には出来ねえし……。

「あかり……わたしの事、応援……してくれる約束だったのに……  
っ」

「そ、そうだけど……でも千早は進み過ぎだ！ 恋愛はもっと順序  
を踏めよな！」

「経験ないくせに……」

「っ！ ち、千早だって圭介が初めてだろっ！」

な、なんか俺の目の前で女子同士の喧嘩が始まっちゃったんですが。  
こりゃあ男として止めるべきか。それともしばらくさせておくべき  
か。

うーん……なんせ恋愛絡みの喧嘩だからな、判断に苦しむぜ……。

「……あかり、すごく必死だね……っ」

「あたりまえだろ！ あたいは千早が大事なんだ、だから千早には  
間違った道を歩んでほしくないんだ！ 圭介との交際なんて絶対間  
違ってるんだからな！」

あかりは応援するのかわしないのかどっちなんだ？

って、応援したいわけがないか。応援する＝ライバルがさらに強  
くなるって事だしな。

多分、あかりも俺が――

「あかり……その、先輩の事……好きなの？」

「――ッ！ そ、そんなわけないだろ！ 吐き気がする事言う

なよな！」

「ぐはっ！ は、吐き気……」

そんな。まさかあの時俺の名前を呼んだのって……幻聴？

ハハハ……ですよねー。そういえば忘れていたよ。

あかりは最初俺を嫌っていたんだ。

好感度はマイナスだったのが最近0になって、ようやくプラスになり始めて……。

フッフ、あかりも伊吹みたいなものか。デレ期なんて来るハズがない——！

「あ……け、圭介違う！ 今のは違うんだからな！」

「せ、先輩……っ！ その、元気出してください……わたしは先輩のこと大好きですから……っ！」

「……どうしてこんなことになったんだろ？」

こんなカオスな状況……ハハハ、もう笑うしかねえや。

アハハハ………なんだろう、この妙な虚しさは……。

そして——完全下校時刻となり、俺はただいま一人で下校中であつた。

暮葉と伊吹は小坂に拉致られ、部活のメンバーとも部室でお別れ……と言うか逃げてきた。

結局、あの後気を落としたあかりを慰め、青山さんの暴走もなんとか止め、部室が落ち付きを取り戻した所で浅間部長と葵がやってき

て、それでようやく打ち合わせが行われたのだ。

「しかし……………」

この状況がずっと続くのは流石にダメだな。

早く終止符を打たなければ。

その為には2人のうちどちらかと付き合うか、2人以外の誰かを彼女にする。

あるいは——もう高校での恋愛は諦めて、とりあえず純粋を保っておくか。

三番目は無理っす。青春に燃える高2男子にはキツすぎる。

じゃあ二番目……困ったことにあの二人を友達以上として見れないんだよ。

好きだって迫ってくれるのは嬉しいが、俺がこんなに半端な気持ちじゃ付き合うのはダメだろ。

失礼極まりないし、そしていつかは本気じゃない為に傷つけてしまうかもしれない……。

とにかく、片方でも中途半端な気持ちを持ってんなら、お互いの為にも付き合いたくはない。

「……………なんて言ってもなあ」

そういえば、高1の頃のクラスメイトに同じ事を言った時かな。

お前は考えが堅すぎる。そんな事じゃいつまで経っても彼女が出来ない……………って言われたな。

俺……………そんなにお堅い考えの持ち主なんだろうか。

「……………とにかく、このままじゃダメだな」

現状が一番ダメなんだ。だから——早く現状に終止符を打たなければ

ば。

……こうして準備一日目が終わり、二日目三日目も順調に準備が進み。

——木曜日、文化祭一日目が訪れた。

## 第103話、準備(?)——in部室(後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

風紗「ふう、やっと文化祭か。ようやく私の出番がありそうだな」

暮葉「明智殿は文化祭で何をされるのですか!？」

風紗「私はステージでロミジュリをやる。ちなみに私はロミオ役だ」

暮葉「すごいですね! 拙者、必ずけーすけ様と一緒に見に行きますね!」

風紗「う、うん……藤島が来る……うん、頑張る……っ!」

生駒「暮葉のクラスは何するの? クソ介が馬のアニマルマスクを付けてハイポーションでも作るの?」

暮葉「もきゅ! 作りませんよそんなもの! 拙者達は喫茶店なのです! そしてけーすけ様が女装しちゅうんです!」

圭介「誰が女装なんかするかあゝゝゝっ!」

※圭介が女装するかは、それは当日のお楽しみ☆



**番外話、作者による馬鹿なキャラ紹介   メインキャラ編！（前書き）**

どうも、今回は夏の感謝祭企画！

キャラも増えたので、ここらでキャラクターを一挙紹介したいなー  
と思います！

途中作者のおバカ主観や、完璧作者の妄想であるイメージ声優まで  
あったりなので、そういうのが苦手な方はご注意ください。

それではどうぞ！

## 番外話、作者による馬鹿なキャラ紹介　メインキャラ編！

ふじしまけいすけ  
・藤島圭介

イメージC V…間島淳司（高須竜児、相川歩など）

……いや、阿部敦（上条当麻、相馬空海など）？

初芝高校2年4組在籍。

身長172cm、体重59kg、8月生まれ。

この物語の主人公。

一人称は【俺】で外見上の特徴と呼べるものはあまりないが、どうしても治らない寝癖がピンと立っててアホ毛みたいになっている。それが多分唯一の特徴っぽい。

親が共働きで滅多に帰ってこない為、現在は妹の葵に加えて居候の暮葉と三人生活。

全く家事が出来ず、家ではいつもゲーム（主にエロゲー）をプレイしているが、焼きそばだけは作るのが得意である。

馬鹿の部類だが、進学校である初芝に入れるだけの学力はある。初芝に入った理由は単に伊吹と離れるのが嫌だったかららしい。

異常に身体が丈夫でトラックに引かれても死なず、B-29の飛行高度から落下しても死なない。

過去に伊吹を守る為に奔走していた為か、そこそこ喧嘩慣れしていてそこの不良よりは強い。

本人曰く「一度に倒せるのは三人くらいまで」らしい。

それでも彼の相手は基本的に身体能力が低く、仮に高い相手と戦っても持ち前の防御力のおかげか、最終的には勝利に持ち込む事が多い。

実は革命で失脚したロジーナ皇太子だったアレクサンドルの子孫で、暮葉曰くその能力や体質が先祖返りしたらしい。だから異常に身体

が丈夫で、怪我をした時の回復力も異常に高いんだとか。

しかも、敵を倒すと念じながら女の子とキスをする、爆発的なパワーを手にする事が可能。

多分、リミッター解除モードの彼なら亀○人くらいは倒せると思う。一方で弱点は攻撃手段が素手しかない事。リミッターを解除するにはパートナーが必要な事。そして何より水が怖い事である。

性格的には優しくて面倒見がいいが、多少感情的で口も時々不良並に汚い。

だが精神的に弱い部分もあり、何か事件、特に伊吹絡みだと自虐的になる事が多い。

一応常識人なのでポジシヨン的にはツツコミだが、エロの方面ではボケに回る事が多い。

いわゆる性欲豊富な変態さん。女の子にセクハラ的な発言をする事もあるが、本人は『変態という名の紳士』であるとアピールしている。

重度のオタク趣味を持っており、もう深夜アニメどころかエロゲーにまで手を染めている。

彼女いない歴〓年齢で当然彼女が欲しいとは思っているが、当の本人が恋愛に関しては鈍く、数多くの女性に好意を寄せられてもあまり気付かない。

本人曰く友達も少なく嫌われ者。実際途中までは永渕との一件でかなり嫌われていたが、最近は見直されている様子。あとモテないらしいけど、どう見てもハーレムです本当にありがたいがとうございました。ちなみに部活は2年の途中から写真部に入部。

また水恐怖症であり、海やプールは苦手で当然泳げない。

まあ……良くも悪くもありがちな主人公キャラ。

イメージCV…伊藤かな恵（佐天涙子、エルシィなど）

初芝高校2年4組在籍。アルファ隊所属。

身長146cm、体重37kg。6月生まれ。

某エロゲーに影響されて誕生した本作のヒロインの一人。

豊臣秀吉の子孫、綺麗なベビーピンクのセミロングにピンと立ったアホ毛、琥珀色の目に色白で小柄な身体を持つ戦国系魔法少女。

異世界【レムリア】の【ロジーナ】出身。ちなみに御先祖様は豊臣秀吉（自称）。

アレクサンドル皇太子の子孫である圭介を、【サヴィエト亡命政府】から守るべく藤島家に居候することになり、その上日本人に成りすまして高校にまで通っている。部活は圭介同様写真部。

なんか、アルファ隊が怪しげ（秘密☆）な手続きをして誤魔化しているらしい。

性格的には明朗快活で人懐っこく、小動物のような愛嬌を持っている。見た目通り子供っぽいところもあり、要するにアホの子である。学校では人気者らしく、男からも女からも愛でられている。

圭介の護衛任務と言いつつも、藤島家では結構ぐーだらしているようで、圭介曰く『ニート予備軍』との事。背が小さい事と貧乳である事を気にしており、その事を指摘されると激怒するらしい。

戦闘能力が非常に高く、小柄ながらも鍛え上げられた大の男や化け物とも互角に戦う事が可能。

最近考えた必殺技は『天神無双木下流“天下統一”』、使用武器は一期一振という有名な日本刀。

一応魔法少女だが、魔法が苦手で一度使えば周囲に甚大な被害をもたらす。

だが全く使えないわけではないようだ。一応風系統の魔法を使える。あと、魔力を感じ取れる為、何かと圭介に頼られている。

圭介に好意を抱いていおり、最近ようやく自覚した様子。

読者様には結構人気キャラらしく、作者も扱いやすい上に可愛いから大好きなキャラの一人です。

・くにむねいぶき国宗伊吹

イメージCV…斎藤千和（フランチエスカ・ルッキーニ役、暁美ほむら役）

……いや待て！青葉りんごのほうが（ry

初芝高校2年4組在籍。

身長151cm、体重40kg。16歳、9月生まれ、A型。

（多分）圭介がだ〜い好きだが、何故かいつもツンツンしている幼馴染。

銀髪のショートヘアやツンとした紅い瞳が特徴的で八重歯が目立つ極上の美少女。また黒リボンを好んでつけている。

あまりのツンばかりな態度なせいか、圭介に【ツッパリ伊吹ちゃん】と呼ばれているが、本人にそれを言うと言と殴られるので気をつけましょう。

幼い頃母親が薬で捕まり、その後父と母は離婚。そのせいか周囲から無視、あるいはいじめられ続けてきたが、そんな中圭介や葵だけが彼女と仲良くしていたらしい。

圭介曰く、中学1年の頃までは素直だったらしいが、中1の頃に永渕にレイプ未遂に遭う。以降もう暴漢に襲われない為か、あるいは弱い自分を隠すためか、急にツンデレになっちゃったんだとか。

とっても強気だが、少しでも折れると誰よりも繊細で弱々しい女の子。

いつも助けてくれていつも一緒にいてくれる圭介に対し、恋愛感情

を抱いている様子だが、素直になれない上に圭介にも「伊吹がデレるわけがない」と思われている……なんだか可哀想な子。

そんな彼女も圭介の事以外になれば普通の女の子で、剣道部では部長を通り越して実力No1。

交友関係も良好で友達も多い。普通にモテるが告白は全て断っている（多分圭介が好きだから）。

焼きそばが大好きで、そのせいで圭介が焼きそばだけ得意になったらしい。

背が伸びない上に胸が全然大きくならず、その事で悩んでいる。

作者的に一番好きなキャラ……というか俺の嫁（オイ！）。

読者からの人気も高いようで、ぶっちゃけ伊吹ルートが書きたいのですが……どうしょ、皆さんはどうでしょうか！？

あけちなぎさ  
明智風紗

イメージCV…小清水亜美（シャーロット・E・イエーガー、麦野沈利など）

初芝高校2年3組在籍。

12月生まれ。17歳、身長165cm、体重46kg。

黒髪の長いポニーテールにツンとした蒼い瞳。姉御口調で喋り一人称は『私』。

容姿端麗、頭脳明晰、御先祖様は明智光秀。クールな雰囲気だが時々女の子な初芝の風紀委員。

昨年まで佐井学園開発科に通っていたが、古宇坂市へ引っ越しこの春より初芝高校に通っている。

その際豹変した父、光雄に頭を悩ませ仕方なく暮葉に勝負を挑み、何故か圭介と対決するが敗北。

その後三人がかりで光雄（光秀）と戦い、彼女が圭介にキスをしたおかげで何とか勝利する。

実は超能力者で発火能力者。パイロキネシスト

その能力自体はバレーボールくらいの火の玉を投げたり、2 mの炎剣を作りだしたり、本気を出してもかめはめ波のように放つ事くらいしかできない。

それでも身体能力が高いため、肉弾戦と併用して能力を使用している。戦闘力は作中でも高いほう。

だが発火能力は弱点が多く、悠との一戦では酸素濃度を操作され、炎を消されてしまった。

スタイル抜群の巨乳で、それはスミ水を着た時に圭介が鼻血を噴くほどらしい。

交友関係も良好。特に純奈とは親友と呼べるほどだが、純奈のレズっぷりに本人は困惑している。

真面目で教師達からも一目置かれており、発言力も高くそのおかげで圭介の学校生活を救った事も。

圭介の事は友達……と思っている様子だが、どうも好意を抱いている様子があるっぽい。

あまりクール系キャラを書かない作者だけど、読者には好評でもっと活躍して欲しいとの意見も。

超能力者であることと、過去のことから一番短編が書きやすいかも。

・浅間あさいまあかり

イメージC V…野水伊織（ハルナ、ニンフなど）

初芝高校1年3組在籍。

身長145 cm、体重38 kg、4月生まれ。

輝くようなだ橙色のツインテール、ツンとした紅い瞳を持つ美少女。一人称は『あたい』、やんちゃな性格で正義感が強い。

そんな性格からか、圭介の悪い噂を聞くと友達を守る為に圭介に喧嘩を売る。その後も陰悪な関係だったが資金不足の一件以降、彼の事を見直して徐々に仲良くなっていく。

今では恋愛感情を抱いており、遠回しに告白もしているが、本人は口では否定しようとしている。

頭が致命的に悪く、初芝に入れたのも奇跡としか言いようがないらしい。

先述の通り正義感が強いが、後先考えずに行動に移る事が多い為、思わぬ所で失敗することがある。

とても強気だが、一度折れるとツンデレ娘のように脆い。

家庭の事情でかなり厳しい生活を送っているが、普段はそれを感じさせない雰囲気。しかし一度過労によって倒れてしまい圭介の世話になってしまう。

交友関係は良好。葵や千早とは親友と呼べるほど仲が良く、暮葉ともそこそこ仲がいい。

反面兄貴や弟には手厳しく、特に兄貴の事を【馬鹿兄貴】【エロ兄貴】と軽蔑している。

馬鹿だが部活とバイトを両立している、結構すごい子なのかもしれない。

最近人気が出てきた様子。このキャラ紹介を機にもっと人気が上がればな〜と思います！

あおやまちはや  
・青山千早

イメージCV…花澤香菜（千石撫子、天使／立華かなでなど）  
初芝高校1年3組在籍。

身長157cm、体重45kg、11月生まれ。



控えめな性格だが、その容姿から男子にはモテモテ。ただし当の本人はその状況に困惑している。

圭介が嫌われている事情や本当は優しい人だと知っており、密かに想いを寄せていた。

圭介が暮葉と一緒に写真部を訪れた時、初めて彼との会話を交わす。将来は写真家になりたいと思っており、その為にあまり好きではない浅間部長のいる写真部に所属している。

前述の通り、控えめな性格ではあるが意外と発言はストレートであり、浅間部長に対する文句はいつも圭介達以上にキレがいい。最近デレ期に突入し、圭介に告白したが積極的にアプローチ中。

実は由緒正しき旧家の出身で、所謂箱入り娘である。部活動に励む事すら特例とされており、一時は転校させられそうになるが、圭介によって阻止され初芝に留まる。

交友関係は良好。あかりや葵とは親友と呼べるほど仲が良く、暮葉ともそこそこ仲がいい。

だが、最近は圭介を巡ってあかりと抗争状態に突入(?)。

作者的にはもっと人気が出て欲しいなというキャラだったり。

この紹介&これからのデレ青山さんが人気出ればな〜と思います！

・ふじしまあおい  
藤島葵

イメージCV…阿澄佳奈（種島ぽぷら、橘美也など）

初芝高校1年3組在籍。

身長155cm、44kg、誕生日5月5日。

ショートカットの水色の髪にちょこんと可愛らしいサイドテール。

またその髪には二つ鈴がありそこからは黄色いリボンが靡いている。

そしてその無邪気そうな顔が特徴。

圭介の妹で、見た目通り人見知りなどは一切しない社交的な性格であり、友達が多いようだ。

ブラコンで圭介が大好き……というか病気レベルの感情を抱いており、圭介と肉体関係を持ちたいとすら思っている様子。もちろん、他の女子と圭介が仲良さそうにしていると不機嫌になってしまう。根はしっかりもので両親不在の中、家事などしっかりやっている。勉強も得意で高校3年の内容までならほとんど覚えていくくらい、学年どころか学校全体でも三本指に入る学力を持つ。

身体能力は中の上くらい。ただし護身術を習っていた事があるので不良一人なら撃退できるらしい。

趣味は兄の影響を受けてかなりの二次元ラブ、特に兄妹（義理もあり）で恋愛する話が好ましい。

それと同じくらい兄の観察が好きで、兄の趣味や行動、性癖などかなりの部分を把握しているらしく、圭介の初恋の人の名前等、圭介の弱みも数多く握っている。

また楽しい事も大好きで、人（主に圭介）をからかうのが大好き。ニヤニヤする話も大好き。

料理が壊滅的に下手で、味はいいものの見た目がグロテスクになってしまう。

作者的には「これサブ？ ヒロイン？」と悩みましたが、一応彼女もヒロインにいました！

はやかわゆう  
・早川悠

イメージCV：岡本信彦（アクセラレータ 烏丸与一など）

一応佐井学園の生徒（退学志望）

身長168cm、体重不明（軽い）、誕生日不明、年齢も不明（一応高校生）。

本作のもう一人の主人公。

肩のあたりまで伸びる白髪に紅く染まった瞳、白い肌でホストのよう  
に整った顔を持つ。

その正体は超能力者の中でも頂点に立つ存在。大変弱々しい外見を  
しているが戦闘能力は高い。

学園の依頼で特異点潰し（異世界人殺し）をやっていた。その理由  
は佐井学園を辞める為に、佐井学園から出された条件をクリアする  
為。本人は今すぐにでも汚れ仕事から離れたかったようである。

しかし汚れ仕事を続けてきたためか、人格は破綻寸前であり気が  
ふれている。

人を殺す事に何の躊躇いもなくなっており、普段はクールだが戦闘  
時には必ず虐殺的な笑みを浮かべている。

特異点潰しを続けていたが圭介に敗北した為、それを中止してしば  
らくは街の不良から物を奪って生活。その後ミネットと出会い、良  
心が完全に消えていなかった為に彼女の救出に向かう。

しかし銃撃され重傷を負う。医者曰く脳にダメージを負ったのでほ  
ぼ確実に後遺症が残るらしい。

能力『大気操作』を持ち、暴風を吹かせたり風の力で自ら飛行した  
り、さらには大気中から成分の濃度を操作したりもでき、その気にな  
れば可燃性のガスを集め、爆発させる事もできる。

【暴風の膜】という風を利用した防御も可能。

気圧操作や大気中の分子運動の操作まで可能。空気中の酸素濃度を  
下げる事もできるので、某最強のロリコンレベル5でも危ないかも  
しれない。

最強に恥じない能力の持ち主だが、反面身体能力が低いので単純な  
殴り合いは大変弱い。

その事が圭介との戦いでの敗因となった。

その上、陳との戦闘で脳にダメージを負って以降は、魔力エネルギー  
変換機による恩恵を受けなければ超能力を使うどころか、満足に

歩く事さえ出来ない身体になってしまった。

機械に頼れば今まで通り能力を使う事が出来るが、制限時間は現時点で15分程度。

登場はかなり遅かったのに、本来の主人公である圭介より人気っぽい。

やっぱり一方通行効果であろうか。

ミネットには甘いので、そのうちロリコン扱いされる日も近いかもしれない。

ちなみに性別不詳なのでミネットによる女の子説アリ。

#### ・ミネット・ローラン

イメージC V 日高里菜（ラストオーダー）、香椎愛莉など）

アルファ隊所属、暮葉の後輩らしい。

身長142cm、体重38kg。ちなみに14歳。

悠曰く「小柄だけど大体中学生くらいか。女の瞳は綺麗な緑色で、澄んだ水のように明るく淡い青色のツインテールはどこかの外国人の風貌を感じさせる」外見らしい。

アルファ隊の一員。いかにも魔法少女といった外見をしている。

ある意味この子が一番タイトルに合う子かもしれない。

魔族と戦闘中に悠と出会い、彼と一夜（いやらしい意味ではない）を過ごした。

翌日陳との戦闘で苦戦し、あと少しで負けそうな所を悠に助けられる。

命を賭けてまで自分を救ってくれた悠に感謝の気持ちと同時に、意識のない彼の唇を奪った事から好意のようなものを抱いている様子。以前は一応悠の事を仲間の仇として恨んでいたが、同時に彼の気持ち

ちも理解しており、完全には恨み切れなかったらしい。だからこ  
悠に対して優しく接していたんだとか。

悠の事を男……だとは思っているが、時々性別不詳な悠が女ではな  
いかと思う事も。

性格は明るく元気で、純粹すぎて悪を知らない雰囲気。悠曰く「ガ  
キっぽくて単純」との事。

登場直後から人気者なキャラクターで、作者も大好きなキャラの一  
人です！

イメージC V？早川が岡本ときたらやっぱり彼女は……ねえ？

日高里菜こと、ヒダカリちゃんと作者は同い年——いやなんでもな  
いっ！

・リーネ・デイトリツヒ

イメージC V・・田村ゆかり（高町なのは、古手梨花など）

身長146cm、体重40kg、15歳。

木下木葉の助手。

見た目は黄色いリボンで結んだ茶色のツインテールで、活発そうな  
瞳を持つ元気っ娘だが助手と言うだけに意外と頭脳派。しかし文化  
祭ではミネットと一緒に迷子になる等、子供な所も多い。

その為悠には「クソガキ2号」と呼ばれているが、胸だけはミネット  
とは対照的らしい。

他人を「〜ちゃん」と呼び、語尾に「〜なの」あるいは「〜の」を  
付ける口調で話す。

意外だが、それでも車の運転が出来るらしい。

悠が変換機入手の為にロジーナに行った際、セルゲイに襲撃される  
も悠に助けられる。

それ以降命の恩人である悠に懐いているようで、好意のようなもの

を抱いているようだ。

悠の事を大変心配している様子。

悠を励ましたり悠の為に変換機の制限時間を伸ばそうと努力している。

悠サイドのもう一人のヒロインのような存在である。

・白藤早苗しらふじななえ

イメージC V…後藤沙緒里（稲森弓弦、加賀愛など）

身長154cm、体重43kg、16歳。

圭介のクラスメイト。

明るい青緑色の股まで伸びたふわふわロングヘアを、頭の横から水色っぽい白リボンで束ねた髪が二房伸ばしている、無口で携帯電話に文字を打って会話をすると言う不思議な女の子。

その正体はサヴィエトの魔法使いであり、圭介の身柄を拘束しようと媚を売っていたが、本人もサヴィエトを不審に思っていたものの、上が怖くて命令に従っていたらしい。

そこから救ってくれた上に、「友達」になってくれた圭介の事を気に入っている。

同時に圭介に恩返しをしたいと思っており、8・17事件では圭介への恩返しと圭介の日常を守る為、単身シルフと共に侵入してきた魔法使いの迎撃に向かった。

瞬間移動テレポートという魔法を扱う事が出来る。「記憶」した物体を自分の手元へ呼びだす魔法だが、記憶した場所に物がなければ転送不可能という欠点を持っている。

その為、戦う際は必ず武器を一定の場所にまとめて隠している。

また自分自身の転送も80メートル以内での範囲なら可能である。

殆ど言葉を発しないが、強い衝撃を受けた場合や感情的になると叫

び声を上げるらしい。

——以下追加……するかも——

**番外話、作者による馬鹿なキャラ紹介　メインキャラ編！（後書き）**

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「メインだけでこの長さかよ……」

悠「クソツタレ。オイ、もっと短縮できなかったのかよ？」

作者「今から短縮作業をしろと？　徹夜で書いたのに……！」

圭介「うるせえ！　いいからもう黙れ！」

悠「ンで、次回は脇役のクソ野郎共だって話らしいなア」

大吾「こらあゝ誰が脇役だっ！」

純奈「私はメインヒロインだよ！？　ナギちゃんに攻略されたいのに！」

圭介「……相変わらずカオスな後書きだ」

作者「ああ……絵が上手になりたい……っ」



## 番外話、作者による馬鹿なキャラ紹介 敵キャラ編！

・久我劉生<sup>くがりゆうせい</sup>

イメージC V…中村悠一（岡崎朋也、グラハム・エーカー）

佐井学園の生徒。

身長は不明だが多分180は超えている。

悠とはライバル同士であり、直接会った回数は少ないがそれでもいつも競い合っていたらしい。

現状では悠に次いで2番目の超能力者。

長身で金髪に端正なという整った容姿を持つ。口癖は「テメエは殺し決定だな」。

悠同様口が悪いが、カタギには絶対に手を出さない主義。しかし関わった者は徹底的に叩き潰す。

雪乃は「こういう硬派な人は好き」らしい。悠と同じく汚い仕事を行っているらしい。

【超能力が使える場合】で登場。校舎東側警備の為に雪乃と戦闘を行い始終圧倒していたが、全力を出せない状況だった事と、その余裕から生まれた僅かな隙を突かれ雪乃に敗北する。

能力的にはこの世に存在するあらゆる“波”<sup>ウェーブハウンド</sup>の振動数、周期、振幅、波長、波数を自在に操る【波動操作】を持つ。

他の能力の代用的な技も使え、使い方次第によっては最高の破壊力を誇る最強と成り得た能力。

作者的には大変お気に入りキャラで、出来れば今後本編にも登場させたいな〜と思います！

・明智光雄（明智光秀）

イメージC V（光雄）…大塚明夫（フォンヴォルテール卿グウエン

ダル、西村宗一（鉄人）など）

イメージC V（光秀）…緑川光（明智光秀（戦国無双など）、人造人間16号など）

風紗の父、本来は優しい人らしいが光秀に取りつかれてしまって以降は鬼のようになってしまう。

しかし光秀が抜けて以降は元の温厚な性格に戻る。

光秀は山崎の戦いで秀吉軍にやられた事を根に持っており、彼が秀吉の子孫の存在を知らされると同じ女子高生であり、比較的近寄りやすいであろう風紗に暮葉殺害を計画。

その為に光雄に取りつき、彼からエネルギーを吸い取る事によって具現化に成功する。

具現化後は光雄に取りついていてる頃よりもパワーアップ。圭介、暮葉、風紗を追い詰めるがリミッター解除モードの圭介によってぶっ飛ばされ、その後は多分成仏したと思われる。

戦闘には刀と超能力、旋風烈剣サイクロンブレイドを用いる。

大気中の分子運動を活性化させ、空気による斬撃を可能とする能力。簡単に言えば、見えない空気のできた刃を作り出すことができるらしい。

……まあ、劣化版ねーちんみたいな戦い方をするキャラである。

・永渕晃 ながぶちあきら

イメージC V…高橋広樹（播磨拳児、菊丸英二など）

白陵高校の番長。本来は卒業している年齢だが何度か留年している。圭介達が中学時代にその中学で番長を務め、伊吹に好意を抱いていた。

しかし告白を断られて腹を立てたのか、彼女をレイプしようとする

が圭介に阻止される。

しかしこの一件以降彼のせいなのか、圭介が一方的に彼を暴行したという噂が流れ、圭介だけが悪人として扱われるようになってしまった。

最近再び圭介達の前に現れ、圭介達を全員潰して伊吹を自分のものにしようと企む。

喧嘩の腕は圧倒的で始終圭介を圧倒していたが、船木の妨害や本気を出した圭介に撃退された。

・船木健太

イメージC V・・高木渉（鬼塚英吉、青木勝など）

白陵高校N O 2の不良。元々どこかの学校の番長だったらしく、喧嘩の腕も立つ。

あかり達を襲い重傷を負わせ、圭介達と戦うも暮葉の日本刀にビビって敗走。

その後永渕から制裁を食らうも、彼を裏切り立ち上がり永渕を襲う。結果的には敗北するも、圭介が永渕に勝利するキッカケを作った人物である。

何故かリーゼントに異常なこだわりを持っており、本人の髪型も当然リーゼントである。

・陳炎彬  
チンヤンビン

イメージC V・・関俊彦（アレキスター・クロウリー、ムースなど）

サヴィエトの魔法使い、サヴィエト亡命政府では気功と拳法の達人の男。

ミネットと戦い彼女を追い詰めるが、悠に襲われ恐怖心を感じる。それでもミネットを人質に取って戦ったり、悠を銃撃したりと果敢に戦うが最後は警察に逮捕される。

・アナスタシア・アベルツェフ

イメージC V 渡辺明乃（シェリー・クロムウェル、結城リトなど）

サヴィエトの魔法使い。古式魔術である召喚魔術の天才でゴーレムを自由自在に操る。

だが一度に一体しか作れない上、ゴーレムを操っている間は他に魔法を使うことができない。

その分アスリート並に身体を鍛えており、喧嘩慣れした高校生程度の圭介を苦戦させる。

それでも最終的には圭介に敗北し、その後はアルファ隊に身柄を拘束された。

古宇坂では警察や機動隊を全滅させ、あかりまで襲っていた。

だがその行為が圭介を怒らせる結果となる。

・セルゲイ・ベレゾフスキー

イメージC V …中田譲治（ディートハルト・リート、破壊大帝マスターマガترونなど）

ロジーナ人の魔法使い。サヴィエトとは一切関係ないらしい。

扱う魔法の詳しい詳細は不明だが、スリングショットで普通ではありえない速度で鉛玉を撃つ事から加速系の魔法を使うらしい。

娘を救うために仲間たちと共に魔力エネルギー変換機を奪うべく、木葉の研究所に襲撃を仕掛けるが早川悠との戦闘に負け、木葉に銃

撃され計画は失敗する。

人生で何度も挫折したらしい。また、木葉とも面識がある様子。  
騒動の後、地元の警察に引き渡されたらしい。

・鷺尾有資  
わしおありすけ

イメージC V…三宅健太（瀬戸豪三郎、駒場利徳など）

アキバ・ミッドナイト・アーミー  
A M Aという不良集団のアタマの男。

大柄で筋肉質で顔に傷がある。依頼を受けて動く男であり、「依頼は善行でも悪事でも必ず引き受け達成する」という信条で行動している。

サヴィエトからの依頼で圭介拘束を試み、彼を引き寄せる為に秋葉原で部下の不良達を暴れさせていた。最も、本人は依頼主がサヴィエトだとは気付いていなかった。

サヴィエトから貰った魔法衣服マジッククローズを着用し、普通の人間では不可能な運動性能を発揮し圭介達を追い詰めた。しかし、圭介達のチームワークの前に結局は破れてしまう。

その後、警察に逮捕されたようだ。

・近藤政信  
こんどうまこと

イメージC V…鳥海浩輔（斎藤一、黒田坊など）

新撰組に似たデザインの服を着た、20代後半くらいの男。サヴィエトに所属する自称武士のお雇い兵士である。圭介を捕える為に圭介達に襲い掛かるが、圭介達の連携プレイの前に敗北する。

その後、圭介達に犯行動機と警告を行い、解放を求めたが結局身柄はアルファ隊に拘束された。

病弱な息子を救うために魔法を覚えたが、その事が当時勤めていた会社にバレてしまう。

口止めの代わりに職を失い、稼ぎと行き場を失った彼はなんとかしてでも息子を助けるべく、魔法使いを募集していたサヴィエトに身を売った。

やった事はともかく、何だかんだ言って息子想いのいい父親ではあった。

・アマデオ・ベルサーニ

イメージC V…若本規夫（セル、アナゴなど）

サヴィエト所属の魔法使い。

魔術系の秘密結社にいた過去があり、基本的に宗教を信じていた。しかし、何らかの理由で弾圧され居場所を失い、サヴィエトに身を投げる。

ただし、とにかく迫害されずに魔術師として生きればよかった為、総有主義などという思想はどうでもいいみたいである。むしろ、神を否定するその組織に不満を感じている節もある。

老人ながら2 m近い長身で、その上重々しく引きづりそうな衣装を着用しているのにも関わらず、杖など使わないで自らの足で歩ける等健康ではあるらしい。

ただし所詮は老人である事と、魔術に頼り切った戦い方をする為身体能力は大したことはない。

近代西洋儀式魔術を極めており、『魔法日記』に記録されたこれまで行った訓練や儀式の内容、状況など様々な経験を魔法の杖を介して再現をする事ができる。ロータスワンド

葵達を拘束し、ガブリエルを召喚したり、その他にも反則級の魔法を次々と扱い、戦闘能力は作中でもかなり高い部類に入る。

それでもリミッターが解除された、覚醒した圭介には敗れた。

アリーナからは「神様なんてくだらないものを信じる魔術結社崩れの魔術師。藤島圭介に敗れる程度の小者」と称される等、サヴィエトという組織内でも厄介者だったらしい。

・アリーナ・ウラジミールヴナ・レニナ

イメージC V…水橋かおり（巴マミ、呂蒙（恋姫）など）

元サヴィエト連邦国家主席、元サヴィエト連邦共産党中央委員会書記長、サヴィエト亡命政府代表。

さらっと長い銀髪にサファイアのような瞳を持つ小柄な美少女。別名『氷の女王』。

不老不死の薬を飲み、全世界征服の野望達成の第一歩としてロジャーナという国を手に入れるべく、表面

上は人類の平等を掲げた『総有主義』を考案した。

革命により帝国を滅ぼし、国の頂点となったが自分と上層部にのみ贅沢な暮らしをさせ、国民には貧乏生活を強いる。圧政を布く、自分にとって都合の悪いと思った人物を次

々と粛清するなど可愛らしい見た目に反してやる事はダーク。その為国民の反感を買い20年前のクーデターで失脚、国民に封印された。

しかし何者かによって封印が解かれ、再び自らの野望の為に動きだす。

現在レムリアから抜けだし、この世界で魔術師を育てているらしい。現時点ではまだ謎の多い人物である。

・リリア

イメージC V…中原麻衣（古河渚、竜宮レナ）

レニナの友達、彼女の事を唯一アリーナと呼ぶ。

ふわっとした金髪ツインテールでピンク色のコートをいつも着用している。

アリーナの事を心配しており、さらに昔のアリーナの姿を知っている様子。

それほど悪人ではないような描写があるが、詳細は現時点では不明である。

・ニキータ・ヴァシレフスキー

イメージC V…玄田哲章（海坊主、黒獅子ラルゴなど）

サヴィエト亡命政府の元帥、元軍人。

アリーナに忠誠を誓っている。兵隊など捨て駒と考えており、何百何千何万と死のうが関係ないと本気で思っているらしい。

みはらとらひこ  
・三原寅彦

イメージC V…藤原啓治（野原ひろし、木原数多など）

佐井学園の科学者、三原中隊カンパニーの隊長。

学者としては大変優秀な人材だが、人格に問題があり極めて冷酷非道な性格である。

行き場のなかった早川を受け入れた、特科会時代から早川の能力開発に携わってきた人物。

早川的能力や思考パターン、性格など早川の全てを熟知している。

8月17日、学園長の命令を受け、特異点を回収すべく三原中隊を



率いて出撃。

風が循環し膜の裏に戻る僅かな一点を突き、暴風の膜を突き破って早川にダメージを与えると云う凄まじい理論の実践で、早川を圧倒し勝利する。

その後、科学と魔法を融合させた最強の魔道能力者を生み出し、魔道能力者を量産して学園長をブツ殺し、さらにその力で世界を征服するという野望を持っている事が発覚。

そこで、再度早川と戦うが……果たして勝敗は？

#### ・風剣ふうけんのシルフ

イメージC V…沢城みゆき（ペリーヌ・クロステルマン、九条和音など）

サヴィエト所属の魔法使い、赤の軍神の一人。

ブリガンダイン風の鎧を身に纏った金髪縦ロールの少女。背はそれほど高くは無く、見た目はヒロイン級に可愛らしい容姿を持っている。

しかし、女の子には不似合いな大剣を軽々と振り回している。

アリーナの指示で圭介拘束の為に出勤し、ついでに古宇坂市の占領を試みる。大剣を利用した風の魔法を得意とし、その威力は小さな風の塊でさえ自動車を簡単に破壊し、突発的に吹かす暴風は弱っている状態で放つても、建物を瞬時に破壊するほど強力なもの。

ものの数十分で、しかも単身で警察や自衛隊を壊滅に追い込み、初めて圭介と遭遇した際の戦闘では圭介を圧倒。続く二戦目でもリリーヤによる【魔女殺し】の魔法を受け、魔法の出力が低下してもなお彼を圧倒するなど、その高い実力を遺憾なく発揮している。

現在、本編にて圭介と戦闘中、果たして勝敗は……？

**番外話、作者による馬鹿なキャラ紹介 敵キャラ編！（後書き）**

キャラが増えたらまた追加します！

## 番外話、作者による馬鹿なキャラ紹介 愉快な仲間編！

### ・小坂亜紀こしかあき

イメージCV…佐藤利奈（御坂美琴、南春香など）  
初芝高校2年4組在籍。

身長162cm、体重49kg、10月生まれ。

ぶっきらぼうな姉御口調で話すアンダーテールの女の子。

伊吹の親友である、何かとアバウトだけど何故かクラス委員長。

圭介や伊吹とは中1の時に知り合い、永渕との一件でほぼ全員が圭介を敵視するようになった時も、彼の友達で居続けたという。なので圭介には意外と感謝されている存在。

戦国オタ……らしいがあまり活躍シーンがない。よく聞くのはロツクラしく重原とは趣味が合う。

恋愛関係のニヤニヤ話が好きらしく、伊吹が圭介に惚れているのを見抜いているのでよく彼女をイジっている様子。本人は一度付き合ったことがあるらしいが、キスすらせず3日で別れたらしい。

今は好きな人はいないらしい。成績は意外と優秀で運動も人並みにはできるようである。

圭介が鼻血を噴くほどの破壊的なボディの持ち主。もうスク水を着たらただのエロ（ry

### ・長宗我部大吾ちようそがべだいご

イメージCV…吉野裕行（西條拓巳、アレルヤ・ハプティズム）  
初芝高校2年4組在籍

身長171cm、体重60kg、7月生まれ。

黒髪のツンツン頭に眼鏡というシュールな外見をしている少年。

圭介の悪友。我欲に素直であり、圭介ですら引くほどの男。

おちゃらけた性格であり圭介にすらウザがられ、女子からの評判は心底悪い。

その実態は現実の女子になにを言われても平気で、現実女子に何の興味もない完全二次元派。

成績は意外と優秀だが、校則で禁止されているハズのPSPを学校に持ち込んだり、その他生活態度にかなり難があり教師陣は彼を問題児扱いしている。

好きなものはアニメなどとにかく二次元。嫌いな物は現実。ちなみに彼の嫁は平沢唯らしい。

最近は唯に対する愛ばかりを叫んでおり、圭介達に完全に引かれている。

本編での出番はあまり多いとは言えないものの、扱いやすさから後書きでの出番はかなりのもの。

自称『ギャルゲーの神』、しかしネット上で有名な落とし神には到底敵わない存在である。

なんだかんだ言って圭介や重原とは仲がよく、この男三人で行動する事が多い。一人称は『僕』、しかし口は悪い。

あと何かと情報収集能力が高いが、なんでもかは詳細が不明である。

・重原広敏  
しげはらひろとし

イメージCV…小野大輔（古泉一樹、平和島静雄）

初芝高校2年4組在籍。

身長180cm、体重70kg、4月生まれ。

身長が高く筋肉質、多分初芝高校では最も強い男。

家が『無差別格闘重原流』の道場であり、重原流武術の使い手。

攻撃手段は素手しかないものの、白陵の不良を一人で何人も圧倒する事ができる程の腕前。

また、山籠りをしていたせいかやたら山の事については詳しい。

基本的にはしっかりもので爽やかなイメージもあり、その健康的すぎる筋肉や元々の顔面偏差値がそこまで悪くないせいか、女子には結構モテるが本人は恋愛にそれほど興味はない様子。

いつも圭介や大吾と一緒にいるが、多分この三人の中では一番マトモな人だと思う。

しかしマトモと言っても三人の中での話であり、山籠りをした事がある等やっぱり普通ではない。

圭介達と一緒にいる時はいつもオタク談義に花を咲かせ、最近是小坂と音楽の話をしているらしい。

もしかして2人は意外といい感じかも……作者的には扱いやすくしてお気に入りなキャラ。

#### ・生駒純奈いこますみな

イメージCV…竹達彩奈（中野梓、高坂桐乃など）

初芝高校2年3組在籍

身長154cm、体重43kg、7月生まれ。

普段は黒髪セミロングだが、本気を出すときは髪を括るのでサイドテールになる。バストサイズは圭介好み。圭介が房総丘陵トレイルラン会場で出会った天真爛漫な少女。陸上部に所属しながらオタク趣味を持っている。

風紗とは同じクラスで親友……というか彼女は一線を越えようとしている。

その為に邪魔となりうる存在（圭介）を排除しようと、いや……監視しようとして圭介を無理やり陸上部に入れようとしたが、なんだかんだで失敗に終わる。

圭介をクソ介と呼んだり、最近は風紗と圭介の会話を妨害しようとするなど、とにかく圭介に対する扱いがひどい。その為圭介からはあまり好かれていない様子。

本人も圭介が嫌いらしい……が、本当に嫌いというわけではないような描写がたまにある。

そんな百合百合で滅茶苦茶な彼女だが、それ以外を除くとごく普通の女の子で陸上部所属。

その実力は同じ部の先輩や男子を遥かに上回っている。

低身長ながら二年ながら陸上部エースを務めている。

・黒木仁  
くろぎじん

イメージCV：日野聡（平賀才人、浜面仕上など）

初芝高校2年4組在籍。

身長175cm、体重59kg、4月生まれ。

亜麻色の短髪で耳にピアスをつけている。

愛称【黒やん】、クラスの三馬鹿のリーダー的存在。

元ヤンキーで素行が悪く、いつも風紗に目をつけられては彼女と対決して敗北している。

伊吹にベタ惚れ状態であり、故に圭介の存在が許せないが完全に仲が悪いわけではない様子。

学校のサボりはあたりまえで、時々喧嘩もしているらしい。

そんな彼だが中学時代は金旭中の伝説の不良と呼ばれ、そのカリスマ性と腕っ節で大勢のヤンキー集団を纏め上げていたらしい。今で

も権力があって白陵への殴り込みの際、大勢の仲間を招集できた。  
赤佐曰く『バカみたいに強い』『そこらの不良が敵う相手じゃない』  
らしい。

でも今はただのおバカ。

性格は超ハイテンションで自由気まま。とにかく楽しい事大好き。  
基本的に遊び人。

・赤佐直人

あかさなとおと

イメージCV…細谷佳正（桑沢ジュウ、黒崎龍之介）

初芝高校2年4組在籍

身長185cm、体重68kg、4月生まれ。

三馬鹿の一人。

身長は180cmを超えており赤髪のセミロングパーマというところの戦場伝説に出てきそうな騎士のような面構え。しかし中身はただの馬鹿。

とにかく面白い事とエロい事が好きで、女子からの評判はすこぶる悪いが圭介達とは仲良し。

人助けが好きみたいで、かつていじめられたいた韓国人留学生を助けたらしい。

ただ、その時韓国人に敬意をこめて『チョクトさん』と呼ば、しかもそこを黒木に聞かれ、いつのまにかあだ名が変なあだ名がついてしまったらしい。

自称関西出身らしいが、喋っている言葉はエセ関西弁。

黒木と同じ中学出身で黒木同様元ヤン。その実力は不明だがガタイと黒木と対等な所から察するに、かなりの腕っ節の持ち主だと思われる。しかしいつも風紗との勝負に負けている。

おおばやしゆうた  
・大林勇太

イメージCV…代永翼（三橋廉、三輪ヒロシなど）  
初芝高校2年4組在籍。

身長155cm、体重48kg、2月生まれ。

三馬鹿の一人。かなり小柄な上に一番キャラが薄い気がする……が、かつてはサッカー部に所属しており、坊主頭はその時の名残なんだとか。

小柄故に動きは素早く、それがサッカーの試合などではかなり役立っていたらしい。

ただし所詮スポーツバカなので頭は悪く、テストはいつも赤点を取っている。

基本的にいつも黒木や赤佐と一緒にだが、意外にも大吾や圭介と仲がいい。

一人だけ違う中学出身な為。黒木や赤佐が元ヤンキーだとは知っていたが、黒木が伝説の不良だとは信じておらずかなり疑っている。実は影でリア充説が浮上しているが、真相は不明。

あさまひでき  
・浅間英樹

イメージCV…杉田智和（坂田銀時、キョンなど）  
初芝高校3年1組在籍。

身長181cm、体重64kg、4月生まれ。

圭介達が所属する写真部の部長、あかりの兄貴。



金髪でしかもイケメンであり、一見モテそうな男だが中身は部屋で全裸になったりなど真性の変態。

デリカシーもなく、その上大吾もビックリなオタクである。

その為千早をはじめとした写真部の部員、周囲の女子からの評判はすこぶる悪い。

ただし圭介は同人誌をプレゼントしてもらったので、内心いいヤツだと思っている。

基本的にふざけた男だが、部の事を誰よりも考えている。

また千早曰く、「本当に彼が嫌いな人はいない」らしい。

だが部の為ならなんでもやるらしく、勧誘の際、何故か北方 projectのエロ同人誌を活用。ちなみに圭介はまんまと釣られた。

ただし妹であるあかりにはかなり嫌われているが、本人はあかりに罵倒されるのが嫌な様子。

18歳なので合法的にエロゲーを購入できる。しかも自動車の運転免許まで持っている。

インドア派なので体力などはあまりない様子で、喧嘩なども白陵に襲われるまではやったことがなかったらしい。その為船木にアッサリ敗北し、あかりを守れなかったことを未だに悔んでいる。

また彼女に無理な心配をさせない為にも、自分の家庭の事で彼女に嘘をついているなど意外と他人想いのいいヤツである。

## ・乙坂隆一

イメージC V・・津田健次郎（海馬瀬人、風間千景など）

初芝高校2年4組担任

身長体重生年月日不明。

圭介のクラスの担任。

頭がハゲかかった教師であり、圭介曰く「正直地味すぎるし、授業

のテンポが悪くて人気もない」。  
ちなみに担当教科は現文。担任という都合上超脇役であるにも関わらず、意外と出番は多い。

・野原数馬

イメージC V…藤原啓治（野原ひろし、木原数多など）  
初芝高校教職員。  
身長体重生年月日不明。

数学教師であり体罰上等でオマケに口が悪い。  
なんというか……狙ったように木原くんな感じでいつも一方藤島と死闘を展開。

ちなみに大抵は教師である彼の勝利である。  
完全にネタキャラとして登場させたキャラだが、意外にも人気がある。

彼に対して一言あるとすれば、もちろん……野オオオ原くウウウウウン！！

・西園寺雪乃 さいおんじゆきの

イメージC V…喜多村英梨（美樹さやか、涼月奏など）  
佐井学園2年（元）

身長152cm、体重42kg、12月生まれ。

長く綺麗な黒髪に紅い瞳を持つ少女。小柄な体格で胸も控えめだが、本人はあまり気にしていない様子。

元々は佐井学園開発科に通い、悠などと共に五本の指に入る超能力者であった。

【超能力が使える場合】で先に登場し、当時1年だった彼女はしょっちゅう外出許可を貰っては秋葉原をふらついていたらしい。ある日、学園長から特異点潰しの誘いを受けるが拒否。

その為口止めをされはしたが、特異点潰しに疑問を抱き計画を中止に追い込もうと試みる。

しかしその行動が学園側にバレ、学園2番目の久我劉生と衝突する事になり、始終圧倒されるものの久我が本気を出せない状況であった事や、彼の僅かな隙を突くことによって辛勝。

しかしその後、早川悠に襲撃され戦闘をするがあまりの実力差に指一本触れる事なく敗北。その後、逃げるように学園を飛び出したらしい。

その後古宇坂にいるらしく、第99話「学園モノにありがちな出会いのシーン」では、彼女らしき人物が不良に絡まれ圭介とも出会っている。

その後初芝高校に転校し、暮葉達とは良好な関係を築いている様子。使える能力は吹雪ブリザードサイコ念力。水蒸気など水分から氷や雪を発生させ、念

力によってそれらを自在に操る能力。大気中に僅かでも水分が存在していれば、それらを瞬間的に冷やす事によって氷などを発生させられる。

作者的には今後の活躍に期待なキャラクターである。

あけちみつあき  
・明智光昭

イメージC.V.: 前野智昭（堂上篤、橘純一など）

明智家現当主、風紗の祖父。

68歳、温厚な性格で織田家と和解したという功績を持ち、秀吉の子孫を発見した時にも木下暮葉との和解を望んだ。

しかし本人腰痛の為光雄に和解を任せ、しかも光雄は和解どころか

娘を使って暮葉を殺害しようとしていた。その事を知ると激怒し、光雄を勘当して明智家から追い出したが

今度は光雄に恨まれ、命を狙われてしまう。

光雄の攻撃によって負傷するが、風紗や圭介達に助けられ一命を取り留める。

そして遂に本人が望んでいた和解が成立し、明智vs木下の戦いは終了したのである。

・木下木葉

きのしたこのは

イメージCV…悠木碧（鹿目まどか、ヴィクトリカ・ド・ブロワなど）

ロジーナに住む科学者（魔法学者）。

暮葉の姉らしく妹同様小柄で妹と同じ髪色を持つ少女。自分の研究で誰かを幸せにしたいという信条を持ち、科学と魔法と融合させた最先端医療技術の開発を行っている。

「〜かな？」という語尾を多用する口調で喋る。

妹の暮葉に「お姉様」と呼ばれ尊敬されている。同時に暮葉の目標でもある。

暮葉曰く、何かに真っ直ぐな所は圭介そっくりらしい。

魔力を脳波に変換するという魔力エネルギー変換機を開発した張本人でもあり、超能力者としての早川悠を救った人物でもある。ミネットとは暮葉繋がりで知り合いらしい。

・藤島浩介

ふじしまこうすけ

イメージCV…乃村健次（ラルゴ・ポッテル、範馬勇次郎など）

圭介の父親、普段は仕事で家を開けている。  
圭介曰く変態のロリコン親父らしい。

・ふじしまあおば藤島青葉

イメージC V…井上喜久子（グレイス・オコナー、ベルダンディーなど）

圭介の母親、普段は仕事で家を開けている。  
歳のわりには若く見える美人で、息子の恋愛事情に興味深々な様子。  
昼ドラ的な展開が好きらしい。

・ジャンボつるや鶴屋

イメージC V…石塚運昇（ヴァン・ホーエンハイム、藤原文太など）  
身長196cm、体重127kg、18歳。

第109話「ジャンボと付きまとう理由」に登場した一発キャラ。  
初芝レスリング部の主将。その鬼のような強さから【怪物】と呼ばれており、まさにヘビー級王者並の強さを誇る男。何故か「オー！」と叫ぶ時に右腕を大きく上げる。

ジャンボ・ラリアットやジャンピング・ニー・バットなどを得意とする。

作中では明智と対戦し、脅威的なタフネスさを見せつけるもアッサリ敗北してしまった。

元ネタは作者や神〇みの長〇純先生も好きなプロレスラー、ジャンボ鶴田。

— 以下、追加予定 —

**番外話、作者による馬鹿なキャラ紹介 愉快的仲間編！（後書き）**

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「やつとこの無駄っぽい企画終わったなあ」

暮葉「けーすけ様！ 無駄言わないでくださいよっ！」

圭介「ていうか思った事があるんだ。イメージＣＶ、とあるの声優多くね？」

大吾「あのアニメも有名どころ使ってるからね。ちなみに僕の好きな声優は豊崎愛（ry）」

圭介「わかった！ わかったからもう黙れ！」

暮葉「それではそろそろ、次回の本編予告に移るのです！」

圭介「次回は当然文化さ——」

悠「先にオレの話だ三下ア……」

圭介「うそ……だろ？」

## 第104話、復活の可能性 前編

——文化祭準備二日目が行われた火曜日、その頃……東京都のとある病院では。

「……………」

このオレ、早川悠は目が覚めれば知らねえ所にいた。

白い天井に白い壁。独特すぎる匂いに時々廊下から聞こえる慌ただしい音。

どうやらオレは入院しているらしい。らしいっつーのはよくわかんねえからだ・

目エ覚めたのは今朝だしな。

クソツタレ……オレはあの魔法使いに撃たれた後、一体どうなったってんだ？

一応一般の病院らしいけどなァ……けどオレは結局、どこのどいつに搬送されたんだ？

オマケに頭には包帯を巻かれ、未だに頭痛が激しい……チツ、これも銃撃された傷のせいか。

「……………ッ」

それだけじゃねェ……。

頭がぼんやりとしていて、全くと言っていいほど超能力が使えねえ。その上歩行も困難だ。

どうやらオレは脳に穴が開いたせいで、歩行障害になった上に脳の演算能力も低下したらしい。

常人レベルにまでだ。つまりどういう事かと言うと——オレはもう超能力を使えない。



「……クソツタレ」

「なにがクソツタレなの？」

「——あん？ ……オマエいつから居たんだ？」

「ひどい！ ミネットはさっきから窓の外を眺める貴方を見ていたんだよ？」

「あアそーかいそりゃ御苦労なこったあ」

「むう、いくらなんでもミネットの扱いがぞんざいすぎるよ！」

「あアそーかいそりゃ大変なこったあ」

「むかあ！ 相変わらず貴方はサディストなんだね！」

オレがいつマゾヒストになったってんだこのガキ？

このオレは昔からサディスト一直線だろオが。

ったく。打たれるのが好きな豚になるワケねえだろオがよ。

つーか目覚めたらいきなりこれだ。耳元できゃーきゃーうっせえんだよクソガキが。

「それで貴方っ、身体のちょーしはどんな感じ？」

「ンなモン最悪に決まってるだろ。撃たれてから一週間経ってねえんだぞ。傷口だってまだ完全に塞がったわけじゃねえってのによ」

「そのわりには手術で一回髪の毛全部剃ったハズなのに、すぐに元

の長さまで伸びちゃったね？」

「髪だけは伸びんの早エんだよ。1日もあれば元に戻るっつーの」

昔からずっとこの髪型で、どんだけ切ろうがハゲになろうが、1日以内に元の長さまで伸びちまう。

どオやらオレは不思議な体質の持ち主のようだ。まあ、だからって困る事もねえがな。

むしろハゲで悩む必要もねえし、これ以上の贅沢ってねエんじゃねえの？

「そうなんだ……不思議な髪」

「勝手に言ってやがれ。オレからしてみればオマエの髪の色のほうが不思議だわ」

「それはミネットのセリフだよ。貴方の髪の色は何、若白髪なの？」

「オマエ……前にも説明しなかったか？ オレはある意味先天的な病気なんだっつーの」

「あ、そっか！ そのせいだったね！」

この野郎……ぜってえーわかってて聞きやがっただろ。

オレがコイツの髪の色を不思議がった仕返しってかあ？

……チッ、ガキの考える事は単純極まりねえな。

「ンで、オマエまだオレに付きまとうつもりか？」

「じゃあ逆に質問するよ。貴方はこれから先どうやって暮らしてい

くの？」

「……そういえば、オレはこの先どオ暮らしていけばいいんだ？  
超能力が使えるえ以上、佐井学園は退学確実だ。」

「まア最初から辞めるつもりだったから、そいつあオレにとってはむしろ都合だ。」

「けどなア、能力使えるえんじゃ馬鹿共から財産さえ奪えねえ。」

「つーか能力どころか歩けねえし。クソツタレ……この先オレはどうしろってんだア？」

「一応汚れ仕事で稼いだ金はあるが、だからって家を建てんのも馬鹿馬鹿しい。」

「建てた所で、こんな身体じゃマトモに生活できねえっつーの。」

「……………」

「歩行が難しいし超能力も使えないし、時々神経痛とか痙攣とかひどいんだよね？」

「……………」

「遂行機能障害にならなかったのが奇跡って、お客様が言ってたくらいなんだよ？」

「……………」

「あとサヴィエト亡命政府はね、貴方をブラックリスト登録したらしいんだよ？」

「……………」

「戦闘は不可能な上に日常生活も困難な今の貴方……自力で生活できるの？」

「……………」

「だからミネットはね、これから先の貴方のお世話をするよ！ 助けてくれたお礼にね！」

「……チツ、勝手にしろ……………」

うるせえなあ……どんだけ世話焼き女房だってんだ。

ミネットは結婚したらうつせえ嫁になりそうだ。

まあ、こんなクソガキを結婚相手に選ぶヤツは、相当の覚悟があるヤツかただのバカだろう。

つーかブラックリスト登録ねえ。勘弁しろつーの……こっちは能力使えねえんだよ。

こんな無害なヤツをリストに登録して、一体ヤツらはどうするつもりだってんだ？

今更攻撃したって、今のオレなんて殺す価値もねえだろうに。

「でも困ったね。貴方の介護と戦闘、両方を同時にしなきゃいけないんだよ……………」

「ンだあ？ やっぱり連中はオレを殺す気か？」

「たぶん……だから、戦えない貴方の命をミネットは守るよっ」

戦えねえ……か。

クソツタレ……一般人に戻れてハッピーなのかもしれねえが、全く嬉しくねえのはなんでだ？

オマケにこのオレを守るって、このクソガキ弱えじゃねえかよ。  
雑魚に守られても安心できねえ。むしろこのガキが守られる側じゃ  
ねえのかァ？

……ったく、やっぱこのガキに守られるんなら、全くとっていい  
ほど安心できねえ。

「おいミネット」

「んにゃ？ なになに？」

「顔近づけてんじゃねエぞクソガキ……ンで、オマエは異世界人な  
んだって？」

「う、うん！ ミネットはレムリアからやってきたんだよ」

その異世界ってのがどの程度の技術か。どんな魔法が他にあるんだ  
か。

よくわかんねえけど……まあ、一応訊いてみる価値はありそうだ。

「そのレムリアってのに足りねえ演算能力を補う魔法とかねえのか  
？」

「えんざん？ なにそれ？」

「そこからかよバカガキが。計算する能力って事だ」

「そーなんだっ！」

佐井学園じゃ常識だっつーの。能力使うには自分の想像を思い描く  
必要があんだよ。

その想像を思い描く為には、複雑な計算式を瞬時に組まなきゃいけない。

ミネット達が使う魔法で例えると、呪文を唱えた術式を組み上げるって感じだろう。

似たような事を超能力者は一瞬で行い、それぞれの想像通りの超能力を使うんだ。

最も……結局重要なのは脳だ。魔法は多分脳なんてあんまモノは使わねえだろ。

脳が良けりゃあすごい能力を使え、逆に悪けりゃショボい能力しか使えねえ。

だから今のオレには能力が使えねえんだ。脳の重要部分が欠けちまったんだからな……。

「ンで、オマエら魔法使いにはンな事は出来ねえのか？」

「うーん……ごめんね。流石に脳的能力を上げる魔法なんてないよ」

「……チッ」

流石にそういうぶっ飛んだ魔法はねえってか。

魔法ってのはすごいんだかすごくねえんだか、よくわからねエ能力だ。

「……あ！ でもね！」

「うっせえぞガキ……耳元で叫んでんじゃねエぞ」

「ごめん……でもね、魔法じゃないけど脳的能力を補助する機械ならあったと思うよ？」

「――あア、ンだアそりゃ？」

「えーっと……高次脳機能障害を持つ人の為に作られたらしいけど、貴方にも多分有効かもだよ？」

高次脳機能障害ってアレか。脳の損傷のせいで起こるっていう……なんだったかな。

オレの記憶が正しけりゃ神経心理学的症状だったハズだ。

まあ、要するに脳が傷ついた事によって引き起こされるわけだ。

けど、その障害を補助する機械ってのが……果たしてこのオレに意味あるモンなのか？

いや待て。それが演算補助に繋がるかは知らねェが……試してみる価値はあるかもしれねえ。

異世界の技術ってンだ。この世界の常識が通用するとは限らねえだろ。

「オイ、今すぐそれがある所にオレを案内しろ」

「えっ？　で、でも貴方は入院中だし、それにあの機械は特注品で本人に頼まないと……」

「医者なら脅す。本人に頼む必要があるならオレをソイツの所に案内しろ」

「貴方って時々すごく横暴だよね？」

「いいから案内しろ。それで演算能力が戻ればまた超能力が使えるンだ」

「そ、そうなの!？」

確証はねえけどな……異世界の技術で期待ができる半面、信用も全く出来ねえからなア。

下手すりゃ副作用があるとか、演算能力を補助する機械ではなかったりとか、とにかく様々なマイナスの可能性があるってモンだ。未知の機械だから仕方のねえ事だ。

だが……それでも試す価値はある。

ぎゃ、は……いいぜ、中々面白エ展開になってきてンじゃん。

「とにかく、オレとソイツを会わせろ……交渉だけでもしてえモンだ」

「でも、その人と貴方を合わせるってことは……貴方をレムリアに送る必要があるんだよ？ レムリアはこの世界と違って魔物がいるし……貴方は歩くことさえままならないんだよ？」

「あ、は——なんとかやってみるっての」

とにかく——オレは今無性に異世界に行きたい。

行ってソイツを会って……上手くいけば超能力が復活する。

そうすりゃあこのオレを狙うクソ野郎共から、自分の身イくらいは守れるだろう。

ついでに……このクソガキの身の安全もなア。

「……わかったよ。ミネット、今から転移魔法の使い手と貴方の為に杖か何かを持ってくるね！」

「頼むぜ……これがオマエの最初の介護だ」

さてさて……どうなる事やらな。



上手く行くなんて全く思っちゃいねエが、それでもオレに超能力が  
戻ったら――

## 第104話、復活の可能性 前編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

大吾「こんな話ばかりやるから時間の進み遅いんじゃないかね？」

重原「夏休みどころか文化祭もまだだからねえ」

圭介「一体何話まで続く事やら……でもプロットは書いたっぽいからネタ切れは多分ないぞ？」

重原「もう長いのは仕様だね」

大吾「さて次回はアクセラ（ry ……げふんげふん！ 早川悠、復活なるか！？」

圭介「そういえばコミケで【な〇は完売】の代わりに【ま〇か完売】が現実になったよな」

大吾「そりゃ当然だ！ 僕もコミケでま〇マジの同人誌買ったからね！」

重原「まだこの作品内では8月入ってないけどね、大吾」

## 第105話、復活の可能性 中編

夜、オレは密かに病院を抜け出す為の準備をしていた。

ミネットに服のサイズを教えてやり、それで買ってきてくれたジーパンと赤と黒の縞々カットソー。

そして右手に持つものは、どオやら病院にあったらしいロフストランドクラッチ。

杖の一種で大変現代的な形をしていやがる。

しかも、なんなんだこりゃ……オレの腕のサイズに合ってやがるな。ハッ、まさか病院もこっそり用意していたってオチかア？

「服と杖はこれで大丈夫かな……？」

「あア……完璧すぎるくらいになア。後は如何に病院を抜け出すかだ」

「それならミネットに提案があるよ！」

「——あン？ 言ってみろオ……」

「ミネットは今日ずっと院内、いや市内を走り回っていたんだけどね、この病院に入院している元軍人さん達が深夜に揃って外出するらしいんだよ？」

「軍人？ 元日本兵か？」

「ミネットはこの国の事情はよくわからないけど、みんな元氣そうで暇してるらしいんだよ。だから迷惑かからないように夜中に集団

でお出かけするらしいんだよ」

なら、その爺さん達と一緒に出て行けば……まあ病院側の目も誤魔化せるかもしれねえな。

要するに朝までに戻ればいいんだ。

だったら、オレが元気になる為にも……爺さん達に間接的に協力してもらおうとすつかア。

「その爺さん達は何時に病院<sup>こい</sup>を出るんだ？」

「えっと……15分五くらい後だよ？」

「……フツ、いいね最高に面白エ……ッ！」

さて、と……旅に出るとすつかア。オレの超能力復活の為の旅になア……………。

この後、爺さん達に合わせて行動した結果、無事にオレ達は病院を抜け出す事に成功。

やがてミネットは本人は専門外と言いつつも、空間転移の魔法を發動させる為のルーン文字を、そこから買ったような大量のコピー容姿に書いていく。

やがて、変な魔法陣がアスファルトに描かれ——気付けば視界は真っ暗であった——

——目が覚めると、目前に怪しげなコンクリート建築の建物が聳え立っていた。

オマケにさっきと比べると肌寒い。この長袖で丁度いい感じである。もしかして、ここがレムリアにあるロジーナって所なのか？

「んん、自信なかったけど座標は合っていたみたいだね。丁度目的地の前だよ」

「——あア？ ひょっとしてここが例の機械作ってるヤツの研究所か？」

「そうだよ。ロジーナが誇る木下木葉きのしたこのはの研究所だよ」

「ふん……」

その木下くんが例の機械を作ってるってワケか。

おもしれエ……早速会ってみて交渉するとすつかア。

ミネットが静かにインターホンを押す。すると、数秒ほど経ってか  
ら何かが繋がる音がし、そこから女の声が響いてきやがった。

『はいはいどちら様でしょうか？』

「み、ミネット・ローランですっ！」

『ああ～うちの妹の後輩ちゃんね！ ミネットちゃんお久しぶり！』

なんだよミネットの野郎。木下木葉ってヤツと知り合いだったのか。  
なら話は早エ……こりゃあ交渉は上手く行くかもしれないねえな。

最もそれはオレの理想だ。現実、どうなるかわかったモンじゃねエ  
けどなア……。

『待っててねえ、今鍵開けるから』

ぎゃは、さてさて……木下木葉ってのはどんなヤツかなア。

まあ木下木葉に興味があるワケじゃねえ。ソイツの発明品、オレは

そっちのほうに興味がある。

……やがて鍵が開くと、オレはミネットに案内されつつ屋内へと足を踏み入れたのだ。

——屋内。如何にも研究所と言った感じだ。

あまり掃除はされておらず、その上部屋によっては試験管などが放置されている。

全く汚エ……これじゃあ、佐井学園の研究部と似たようなモンだな。佐井学園にも立派な研究所ってのがあった。そこでは様々な研究が行われていた。

だがオレが知る限り、ロクな研究ではなかった気がすんな……。

「こっちこっち。あ、この部屋だよっ！」

「ンだアこの不自然に綺麗な扉はア？」

汚エコンクリート造りの建造物の中に、一際綺麗な西洋風のドアが存在していた。

ミネットはコンコンとノックし、取っ手を握ってドアをゆっくりと開ける。

ギィィッと古い洋館のようにドアが開く。まあ、このドア自体中世ヨーロッパ風だがな。

部屋は結構広かった。広くて立派でここだけが掃除もされ、手入れがされていたのだ。

その中に一人、白衣を着た女が佇んでいた。

女は形が違うから絶対にそうとは言えねえが、パソコンらしきもののキーボードを打っていた。

だが、オレ達が部屋に入ったと気付くと、すぐさま作業をやめてこっちを向いてきやがった。

「き、木下さんお久しぶりですっ!」

「久しぶりねミネットちゃん。でもウチの事は普通に木葉と呼び捨てでいいかな」

「で、ですが……っ」

「ウチはね、下手に距離を置かれるほうが嫌いな」

「……わかりました、木葉さん!」

「うーん……ま、さん付けだけど妥協してあげよっかな」

コイツが木下木葉か……見た所ミネットと大して変わらねエクソガキだ。

桃色ブロンドの髪の木下木葉は、背も胸も小さく顔つきだ誰かに似ていた。

誰だったけなア……一度だけ会った記憶がある。

全く思い出せねエ。けど、コイツと似たようなヤツに何処かで会ったような……。

オレはそれを思い出したいが為に、じゅっとな木下木葉の事を見ていたのだ。

「あれ? ミネットちゃんその人は知り合い? もしかして彼氏かな?」

「じゅっ!? ち、違います! 悠はミネットの彼氏じゃありません!」

——あア、なに赤くなってるんだコイツ？

「そっかあ。それで実際その人は誰？」

「木葉さんっ、お願いがあるんです。この人の為に【魔力エネルギー変換機】をください！ お金は後でミネットが必ず払います！」

魔力エネルギー変換機ってどういうセンスだア？

だが、ソイツが演算能力復活に繋がるかもしれねエ、オレが求めていた機械ってワケか。

その名を訊いた瞬間、あの女の顔もふざけた感じから真剣なものへと変わりやがったし。

「それが欲しいってことはその人……どこか悪いのかな？」

「え、えーっと……そのっ」

「オマエは下がってろ。詳しい事はオレが説明するわア……」

ミネットは超能力などに関してはド素人だからな。

オレが魔法に関して素人なのと一緒になア……だから、この場はオレが説明したほうが早いだろう。

オレは真っ直ぐ前方の木下木葉を見つめる。そして、オレは木下木葉に事情を説明し始める。

「まず最初に質問がある。【魔力エネルギー変換機】ってのは演算能力を補えるのか？」

「そりゃあそうに決まってるかな。魔力エネルギー変換機は高次脳機能障害を持つ人の為に作ったものだからね。失語症とかは計算能



力の低下も原因だったりするんだよ？ でも君は怪我をしている以外はとっても元気そうだけど……一体どこが悪いのかな？」

「オレは数日前に脳にダメージを負った。そのせいで超能力が一切使えなくなりやがった」

「超能力者？ ふーん、妹から存在は聞いていたけど……ホントにいたんだあ」

コイツの妹がどんなヤツかも気になるが、今はそれどころじゃねえ。とりあえず流石は科学者って所かア。ちゃんとオレの話についてきているじゃねエか。

「ンで、今のオレは超能力を使うには演算能力が足りねえ。だからオマエの機械で補助とかは出来ねえのか？」

「んん〜どうかな——？」

言いながら木下木葉は何かを手取る。チョーカーと補聴器だ。チョーカーには黒い機械があり、そこから細い線が伸びて補聴器に繋がっている。

なるほど……それが魔力エネルギー変換機ってヤツか。

予想とは全然違う形をしている上に、結構小さくて使いやすそうだな。

なるほど……こりゃ医療器具として使うには丁度いいなア。

「最大出力にしても補えるのは一人分程度。それでどこまで君の計算能力が復活するかはわからないかな」

「そんな事は構わねエ。とりあえずどうなるか試してくれ」

最悪、暴風の膜を張り巡らせる程度の超能力チカラが使えればいい。  
それだけ使えれば攻撃を弾き返せる。後は武器か何かを使ってどうにかすればいい。

とりあえず——第一の目標は防衛手段、の復活だ。

「わかったわ。その為には……君の波長を知る必要があるかな」

「波長まで合わせる必要があるってか」

「当然よ。じゃないと確実に君の脳に影響がでるかな？」

「そりゃ大変なこった……」

「それじゃあ早速調べるから、君にはちょっとした検査を受けてもらおうかな？」

「ぎゃは、上等じゃねエか……」

予想以上にいい展開に進んでるじゃねえか。これでオレに超能力が復活するかもしれねえ。

超能力が復活すりゃあ、そのチカラでなんだって出来るだろう。  
前より弱くたって構わねエ……ただ、オレは色々な物の為に超能力を復活させた。

ただそれだけであつた。それ以外にはあまり望む物はなかった。

……一時間後、検査は終了しオレの首にはチョーカー、耳には補聴器が取り付けられた。

ついに——オレはお目当ての物を手に入れたんだ。

さて、超能力は使えるようになったか……そこが問題だよなア。

## 第105話、復活の可能性 中編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「つ、疲れた……」

伊吹「どしたの圭介？」

圭介「一日田舎に行っていた分ずっと作品を書き続け……ああ、締め切り一日前だから今日も徹夜だ！」

伊吹「それアンタの話じゃないよね！？ 絶対違うわよね！？」

圭介「大賞の為にユ○ケルが欲しいぜ！」

伊吹「だからそれアンタの話じゃないでしょ！？」

小坂「次回予告、早川悠に超能力は戻ったのかな？」

圭介「あと作業用BGM！今のうちにアニソンを（ry」

伊吹「いいからアンタは寝なさいっ！」

## 第106話、復活の可能性 後編

多分、一日くらいが経過したと思う。

全ての検査を終えて木下木葉が機械を調節し、遂にオレ用【魔力エネルギー変換機】が完成した。

この機械はなんでも蓄えた魔力を脳波に変換し、装着者の演算能力を補助する。

あらゆる場合にも対応し、演算能力を回復させて日常生活を補助する。

そんな便利アイテムである。特に今回は念には念をという事で最大出力にしてもらった。

まア……そのおかげで木下木葉に「超能力を使用すると魔力は15分で切れる」と言われたが。

「悠っ！ 遂に完成したんだね！」

「オイ木下木葉、このスイッチを押せば電源がONになるのか？」

「ええ、それで変換機が作動するかな。たださっきも言ったけど、君の場合は計算能力があまりに凄すぎるせいかな。消費魔力が異常に多くて超能力を使えば15分で魔力が切れるかな」

「ハッ、使えるだけマシだ……」

さて、早速試したい所だが……暴れようにも場所がねえな。

流石にここで暴れたら木下木葉を怒らせそうだ。

この機械の発明者を敵に回すのは利口な判断とは言えねえな。

「ねえねえ使わないの？ 超能力使わないの？」

「うっせえぞクソガキ。能力使ったらこの辺が吹っ飛ぶだろオが」

「へえゝ。君の能力ってそこまで凄いのかな？」

オレの超能力の話に木下木葉が口を挟んできやがった。

……まあ、一応説明しておくか。この世界でオレの話をしたって何の問題もねえだろ。

「オレがその気になれば、この辺の天候や大気中の分子運動を操作できるってなア」

「へえー……なんだかよくわからないけど、とりあえず研究所を壊す能力なら勘弁かな」

「チッ、だから自重してんだろオが……」

全く、これじゃあ超能力を試しに使いねえ。

オレの能力は破壊することに特化していやがる。それ以外は全くの専門外だ。

だから試に使ってみると、下手すりゃ周囲を破壊し尽くかもしれないえ。

ったく。どっかのクソ野郎がオレに喧嘩を売ってくれれば、遠慮なく超能力を使えるんだがなア。

まあ……そうタイミングよくイベントが起こるハズもねえ――

ドウツツツツ！！！！

「あ——？」

「爆発音……だよな？」

「あれ、ウチの研究所のほうからかな？」

その時、狙ってんじゃねえかと言ってエくれエ、ナイスなタイミングで何かが起こりやがった。

突然響いたのは爆発音。250kg爆弾くらいかそこらだろうか。研究所のほうを確認すると、確かに反対側から黒煙が立ち上った。

同時に聞こえてきやがった女の叫び声。ハッ、面白エ……いいタイミングで何かが起こりやがった。

「今の声……リーネかな!？」

「リーネさんって……木葉さんの助手ですよな？」

「そうだよ。ウチの助手が向こうで危険な目に遭っている……ッ！」

「あっ！　ダメですよ木葉さん危険です！」

衝動的に飛び出しそうになった木下木葉を、ミネットは強く押さえつける。

そうだア……インテリちゃんはテンテリちゃんらしく、そこで大人しくしてやがれ。

さてさて、リハビリでも始めるとすつかア。

「おいミネット。オマエはそこで木下木葉の面倒見ていやがれ」

「え……？ 貴方もだめだよ！ まだ超能力が使えるって決まったわけじゃ——」

「リハビリだア。いいからオマエらはそこで大人しくしてろ」

「ちょ、ちよつと！」

オレはミネットのうるせえ言葉をガン無視し、ひたすら杖をつきつつ戦場<sup>げんば</sup>へと向かった。

おそらくミネットは木下木葉の事で手一杯。オレを妨害する事はねエだろう。

なら、静かな今のうちに向こうに移動しちまおう。

——そして数分後。

足が不自由なものも不便なモンだ。ようやくオレは戦場<sup>げんば</sup>へと辿り着いた。

研究所の一部が崩れ落ち、地面には鉄筋むき出しの残骸が散らばる。さらに奥を見渡せばそこには、傷だらけで倒れる女の姿があった。

肌は純白。黄色いリボンで結んだ茶色のツインテールは、程良く綺麗に手入れされている。

さらに瞳は活発そうで口元もとっても元気そうであった。

ただし、背はともかく胸はクソガキとは正反対だ。

そのさらに奥には敵と思われる姿。ンだア……あの背広の中年くらいの親父は？

「——はアイクソ野郎オ」

「……っ？」

「うむ……？ あやつ……何者だ？」

声をかけた瞬間、女も背広のクソ野郎もオレのほうを見た。  
背広のクソ野郎の周りには、さらに大勢のクソ野郎がうじゃうじゃ  
していやがる。

ソイツらは銃か何かで武装し、その銃口をオレへと向けていやがる。

「それはこっちのセリフだ。折角ブツが手に入ってハイな気分だったのに、オマエらは何が目的でこんなクソみてエな所に来やがったんだ？」

「ふ……貴様には関係なからう。さて……この者を射殺せよ」

ハッ、どオやらあのクソ野郎はこのオレを殺すつもりらしい。

確かに、さっきまでのオレなら瞬殺されていただろう。

だがなア、オレだって何時までもあのままってワケじゃねえ。

オレは杖を持つ手の反対。即ち左手で首筋にある変換機をスイッチを押す。

小さな電子音が響くと同時に、不思議と懐かしい感覚に陥る。

コイツあ……間違いねえ。ちゃんと演算が働いていやがる。

「殺<sup>や</sup>れ、標的はあの男だ」

刹那、一斉にクソ野郎共の銃が放たれた。

迫りくる無数の銃弾。オレの視力じゃ全てを捉える事き出来ねえ。

だが——弾丸が進む座標値が脳に入ってきたやがる。完璧だ。完璧に能力が復活している。

「ぐ、は——！」

「だア！」



「う、ぎゃア——！」

暴風の膜を何の問題もナシに張り巡らされた。

ぎゃ、は——木下木葉もいい仕事やしやがる。チカラ超能力が不完全だが復活しやがったぞ。

膜に触れた弾丸は反射でもされたかのように吹き飛ばされ、次々とクソ野郎共を襲っていった。

クソ野郎共の身体に風穴が開き、血飛沫が愉快に素敵に飛び散っている。

それを見ていた女は呆気にとられた様子で、オレとクソ野郎共を交互に見ていた。

「何故、だ……何故貴様は銃弾を反射できた？」

「やはり回復した演算能力は前の半分程度だな。まア上出来だ、半分もありゃあ十分だ」

オレが以前の半分程度まで弱くなった所で、別に他の連中が強くなったわけじゃねえ。

これだけ回復すりゃあ十分、他の連中にも勝てる力を持っている。

普通に風を起こせ、普通に酸素濃度や気圧の操作が出来て、普通に分子運動の操作もできる。

ただ、それが出来る範囲が狭くなったただけだろう。

「何を言っているのだ？ 貴様……一体何者だ。そんな魔法はこの世に存在せぬ……貴様、異世界人か？」

「御名答。オレはオマエの知らねえ世界から来たモンだ。ンで、オマエは何者だ？」

「先程も言ったハズだ。貴様に関係のある話ではない」

「じゃあ、サヴィエトのクソ野郎って事でいいかア？」

「……っ！ 違う……私はそんな連中の仲間ではない」

刹那、背広のクソ野郎がスリングショットを構え、黒光りする鉛玉を放ってきやがった。

スリングショットで撃った割には、初速も速過ぎる上にそこからさらに加速している。

普通じゃありえねえ動きだ。あの野郎、何らかの力で弾を加速させていやがるな。

けどダメだなア——オマエさつきオレを見ていたのに、全く学習能力がねエ馬鹿野郎だなア。

膜に触れた刹那。暴風によって弾かれた鉛玉はスリングショットに直撃。

破片が飛び散り、その破片がクソ野郎の右腕をズタズタに引き裂いていく。

「う、ぐ……アああああああ！」

無様に血飛沫を噴く右腕を、クソ野郎は必死に抑える。

左手の面積的に不可能だってわかってるハズなのに。

まあ、人が窮地に陥ると冷静さを失うのは当たり前のことだろう。

「……何故。何故貴様に攻撃が効かん。貴様の存在が邪魔だ……貴様さえいなければ全ては成功していた。私は娘を救うことが出来たのに——っ」

「娘を救うだア？ 教えろオ……殺されたくないやあオマエの目的を正確になア」

オレの問いの後、しばらく沈黙が流れた。  
だが、遂に観念したのか背広のクソ野郎が口を広く。

「……ここに来れば高次脳機能障害者を救う機械がある聞いた。だが、私の家は貧乏だ……それでも私は娘を救いたかった。その為に仲間を招集した……だがそれがどうだ？ 貴様が邪魔をしたせいで、私は仲間を大量に傷つけてしまった。娘を守るところか仲間の身体を……」

「バツカじゃねエの？」

「……？」

「娘を救いたい？ だが仲間を殺したア？ 全ての原因はオマエにあるんだろオが」

「……っ、だが……それでも私は娘を救わなければならない。私の未来などどうだっていい……ただ私はあの子の未来を救いたいのだ。その為なら私はなんだって——ぐ、オ！？」

不意に銃声が響いた。それは男がやったものではない。  
そもそも、今のあの野郎に銃を撃つ余裕などなかった。

発砲したのはコイツでもなければ、そこで呆気に取りられている木下木葉の助手でもねえ。

振り向くと、そこにはミネットと銃を構えた木下木葉が佇んでいた。  
——そう、発砲したのは木下木葉であった。

「き、貴様……木下、木葉……っ」

「久しぶり、3年ぶりくらいかな……セルゲイ・ベレゾフスキー」

なんだア——木下木葉とクソ野郎が知り合いだって？

オイオイ聞いてねエぞこんな展開。

「う、ぐ……何故。私は何故こう何度も挫折を……っ」

「君のその人格、相変わらず変わっていないかな」

「私の人格を理解しているのなら貴様にもわかるハズだ」

「……さあ？　ウチと君は親しいわけじゃないし、詳しい事は全然わからないかな？」

オイオイ一体コイツらはどういう関係なんだ？

しかも、いつの間にかオレの左右にはミネットと、あとは木下木葉の助手がいやがる。

確か助手の名前はリーネだったか。コイツは大した怪我じゃなさそうだな。

あの叫び声から骨くらいは折ったかと思っただが……まア、これでハッピーなんじゃねえの？

「悪いのか？　我が身を犠牲にして娘を助ける事が……う、ぐっ」

「悪いかな？　例えば娘が助かったとしても、父親が死んでいたら娘が可哀想でしょう？」

「だが私は……既に仲間を大量に傷つけ、娘の為だけに貴様らを襲

った。私など生きる価値が――」

「ないとは言えないかな？ 君がどれほどの極悪人だとしても、君の存在なしに娘は生まれなかったでしょ？ それに娘を育てるのは誰かな？」

「……っ」

「それを考えれば、君は今すぐ刑務所で反省すべきかな？ 反省してやり直して……また娘の為に働けばいいんじゃないかな？ 今度はこの真似なんてしないで真っ当な方法でね」

木下木葉が喋り終わると、背びれのクソ野郎から嗚咽する声がもれる。

どオやらオッサン、何かに感動して泣いているらしい。

やれやれ……面倒なオッサンだった。だがこれで一つだけ分かった事がある。

オレの能力は不完全ながら復活していた――

――それから1時間くらいが経った。

あのオッサンは地元の警察っぽいものに引き渡された。そして――

「あの、ありがとうなの！」

「……………ッ」

丁寧にお례にお辞儀をしやがる木下木葉の助手――リーネ・ディートリッヒ。

どうやらオレに命を助けられたと思いこんでいるらしい。  
チッ、おめでたいヤツだ……オレはただ、リハビリの為にちつと暴  
れただけなんだがなア。

「ねえ悠。貴方ってもしかしてツンデレ？」

「うっせエぞクソガキ……絞って果汁みたいにしてやろオカ？」

「まあまあ、そんなに怖い顔しないで欲しいんだよ！」

「……チッ」

「まったく、このクソガキはいつもいつも……。」

「君もアレかな。もう少し素直になったほうが人生は得だと思うよ  
？」

「——あア？」

「ボクもそう思う。少しツンツンしすぎなの」

「オマエらどオいう目エしてんだ？」

「オレのどこがツンデレだってんだ。思いっきり感情には素直じゃね  
えかよ……。」

「まったく、まあいいや……こんな事もあったが、無事にオレの超能力  
は復活した。」

「後はさっさと元の世界に戻るだけだな。」

「あ、そうそう。説明し忘れていたんだけど……その変換機に魔力

を注入する方法ね」

「あっ。そういえば聞いてなかったね！」

「ンで、どうやって魔力を注入するんだ？」

「それがその……魔力を持つ人とキスする事……かな？」

「え、ええええっ！？ き、キス！？」

「オイ……なんだそのふざけた方法は？」

キスすりゃ全てが解決って、一昔前のアニメか何かですかア？  
今時そんな設定流行ったりしねえっつの。

けど、なんだって魔力を持つヤツとキスしなきゃいけねんだ？

「ぼ、ボクが考えたんだけど……仕方なかったの！ それ以外効率よく魔力を注入する方法がなかったから……だから仕方なくその方法を採用しただけなの」

「そ、そうそうっ。だからリーネやウチに悪気はないから」

ふざけやがって……このオレが一体誰とキスしろってんだ。

そんな彼女彼女がイマス——なヤツじゃねえと使えねえ医療器具って、医療器具としてどうなんだ？

まったく、能力復活以外は期待外れの品だった。

しかもその能力もあと数分だけ。キス相手がいなければすぐに魔力は切れてしまう。

つまり——オレはまた超能力が使えなくなるって事だ。

あーあ。束の間の喜びってヤツだったなア……………。

「……っ、ゆ……悠っ！」

「——あン？ 人が本気で悩んでいる時になン——ッ！？」

「おお？」

「大胆なの……っ」

いきなり胸倉を掴んできたと思いきや——ミネットがオレの唇を塞ぎやがった。

オレは思わず目を見開くが、ミネットはその反対で瞳を閉じていやる。

初めての感触——チッ、誰だ。キスの味はストロベリーだって言っ  
た野郎は？

キスの味はキスの味しかしねェじゃねえか。っーかそれ以前に——

「ぶ、は——っ、このクソガキいきなり何を——っ！」

「魔力……注入されたんだよね？」

「……ッ……？」

このガキ。まさかオレに魔力を注入する為だけに？

チッ、ありがたいんだか迷惑なんだか。

だが、嫌な気分ではねえ……って何考えてんだアオレ。

「言ったよね？ ミネットは貴方の介護をするって……その、これも介護の一つだよ！？」



と、言っているミネットは耳元まで顔を赤らめていた。瞳も妙に潤っており……って、クソガキの癖に女見てエなツラしやがって。

まあ実際、コイツにキスでもしてもらわねえと……オレは能力を全く使えない。

このクソガキには世話になりっぱなしだな……まったくコイツは仕方がねえな。

オレはその恩返しに——コイツのおかげで使える能力で、コイツの身の安全を確保してやるか。

今のオレに出来る事はたったのそれだけだ。だが、それは結構重要な事のような気がする。

このガキの為でもあれば——オレの為でもあるからな。

「わかったア……介護はオマエに頼んだわ」

「……うん。これからもその……よろしくね」

「……チッ」

全く、本当に仕方がねえなア。

まあ悪い展開じゃねえ、これで正しいんだろう……。

## 第106話、復活の可能性 後編（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「まずい……大賞作品が半分も終わってない」

伊吹「またその話!？」

圭介「ちくしょう、徹夜したのに……っ!」

伊吹「寝なさいよっ!」

圭介「だが断る……寝たら作業時間がなくなる。締め切り近いようわああ!」

大吾「ついでに夏休みも終わりが近いよああああっ!」

伊吹「ダメだわコイツら……」

## 第107話、文化祭一日目

木曜日、ついに文化祭一日目が始まってしまった。

始まってしまったという、それほど嬉しそうに聞こえない表現にはワケがある。

第一に伊吹は目を合わせれば逸らしてしまうという、相変わらずのツンツン反応。

第二にあかりや青山さんに告白され、でも今の俺が2人を友達以上に見れず、そんなこんなで生まれてしまった中途半端な状況。

そして第三の理由は――

「あのさ小坂……なんで俺が女装しなきゃいけないんでせうか？」

「そんなの決まってんじゃん。あたし女子にアンケート取ったんだよねえ、女装させたら一番似合いそううちのクラスの男子は誰って」

「それで俺が選ばれたと？」

「うん、今日は仮装行列があるし。だから圭くん！　しっかり女の子やっというてね！」

「ふっざけんな！　藤島さんに女装趣味はないのことよ！？」

そう――俺は今、小坂やその他女子の言いつけで女装させられているのだ。

白と黒のオードソックスなフリフリメイド姿＋黒髪のロングヘアー。ああ、鏡で見たよ。完璧に女の子だったね……ちくしょう情けねえ。俺は男のハズなのに……なんで意外にも女装が似合ってるんだよ。

ちなみに、小坂はジャンヌ・ダルクもビックリな西洋女剣士の恰好であった。

小坂って確か戦国オタだったよな。なんか戦国武将とは真逆じゃないっすか？

「けーすけ様っ！ とってもお似合いなのですよ？」

「うっせ黙れ！ 暮葉、てめえそれは嫌味か何かっすか！？」

「そんなことないよねえ？ 流石、女子全員が圭くんって答えただけあって、圭くんミスコンでも上位狙えそうくらい可愛いじゃん」

「……………ッ」

相変わらず伊吹とは気まずいし、女装は嫌だし嫌味は言われるし。ちくしょう。散々悪口言われるだけだった去年のほうが、まだ100倍マシだったかもしれない。

とにかく今日は不幸だ。これが不幸以外の何者なんだろうか。うう……早く男に戻りたいです。男に戻って堂々と青春を謳歌したいっす……。

——だが、こんなのは悲劇の序章に過ぎなかった。

——文化祭OPが終了後、俺達は校門前の道路に整列していた。当然、仮装行列の為である……畜生、こんな恰好で知り合いに遭遇したら……。

「あれー？ 圭介どこ行ったんだ？」

「おかしいね。今朝はいたはずなんだけどねー」

おいアイツら！

どうして俺がわからない、どうして俺を探しているんだ！

大吾と重原は俺が真横にいるというのに、何故か俺の事を探していたのだ。

そんなに俺の女装がわかり辛いかコラァー！

「おいお前らしい加減気付けっ！」

「あ？ ……ッ！ やべ……現実女なのに……っ」

は、何をおっしゃっているんでせうか大吾のヤツ？

いきなり眼鏡を光らせ、頬を赤らめるなんて……正直気持ち悪いことこの上なし。

「ねえ、君は2年かい？」

「あのなあ重原いい加減に——」

「すみません！ いきなりですが……俺、君に思わず惚れてしまいましたっ！」

「……ハァッ!？」

待て待て待て待て待て待て待てエ！

どういうことだよ。なんで俺が重原に惚れられているんだよ!？

「僕も現実に対する初恋だよ……その、僕と付き合ってください！」

「ブッ！」

ひどすぎる現実には思わず俺は吹いてしまった。  
ちくしょう、なんで完全二次元派の大吾まで俺に惚れちゃってんだ  
よ！

どうみたって俺は女装男子だろうが。ていうか中身はホントにただ  
の男の子ですよ？

コイツらにBLな性癖があるとは思えんし……ああちくしょう、勘  
違いって怖い！

「お前ら落ちつけ！ お、俺は圭介だ。藤島圭介だぞっ？」

「藤島圭子ね。あれ？ なあ重原、圭介と同じ名字じゃね？」

よし、大吾が早速疑問に思い始めたぜ。

俺の名前を藤島圭子と間違えた所はなんかムカつくが、まあそこは  
仕方がない。

このまま俺だと2人がわかってくれて、それで解放されるってんな  
ら――

「確か圭介って妹がいなかったかい？」

「ああ！ いたな……なるほど圭介の妹か」

「違うわっ！」

どうして二人とも物事をそういう風に考えちゃうんだよ。

確かに妹はいるよ。いるけどその妹は葵って名前だし、それに葵は  
真正銘本物のメスだ！

「圭子ちゃん。兄貴にはちゃんとよろしく言うておくぜ？」

「だから俺と付き合ってください！」

「なっ!? 重原テメエ、圭子ちゃんと付き合うのはこの僕だ！」

「なに戯言を言ってるんだい! 大吾は完全二次元派じゃないかい!」

「圭子ちゃんだけは除外する。圭子ちゃんは僕の恋愛対象だ!」

大変恐ろしい事態が俺の目の前で起っていやがる。

まずい……このままだと俺は2人に食われてしまう。

何度言い訳してもコイツらは聞く耳持たないし……こうなったら仕方ねえな。

いっそのカツラを取ってコイツらに正体を――

「ぐ、はあ！」

「ぎゃ、お!?」

その時、重原と大吾が何者かによってぶっ飛ばされてしまった。

「つたく……コイツらは！」

その何者というのは――ホスト風の恰好をして黒木であった。

よかったあ……黒木、この気持ち悪い光景に耐えられずに飛び出してきたんだな。

ありがとう黒木。俺、お前の事を少しは見直したぜ。

俺の事をトコトン嫌っているお前だけは、俺の女装姿を見たって間違える事はないよな。

というわけで俺は笑顔を作り、思い切って黒木に声をかけてみた。

「いやあゝ、危ないところ悪かったな」

「ホントだぜ……危うくアイツらに奪われる所だった」

「……はい？」

その時、俺の背筋が凍った……ような気がした。

なんか、黒木がいつもより色気づいているような気もしないでもないし……。

——ま、まさかっ!？

「圭子ちゃんだっけ!？ その、俺と付き合ってください!」

やっぱりか——!——!——!——!——!——!

「て、てめえ! 伊吹の事が好きなんじゃ——」

「伊吹ちゃんも好きだけどお前も好きだ! だから俺はハーレムを

——」

サイテーだコイツ!

そりゃあ二次元ならハーレムルートもありだと思うさ。

だけど、黒木の馬鹿野郎は現実でハーレムを形成しようとしていやる。

ていうかハーレムってダメだろ。いつかは伊○誠みたいな運命を辿るぜ?

——ていうかそもそも、こんな野郎の恋人にだけはなりたくねえ!

「ちえすとーっ!」



「ぶ、はあ——！？」

だから俺は最終自衛手段として、黒木の下顎に握った拳を打ち込んでやった。

いくら黒木が喧嘩慣れしているからと言って、流石にこの不意打ちから体勢を立て直す事はできなかったようである。背中からアスファルトに落ちた黒木は、そのまま動かなくなってしまった。

だが——俺にとっての脅威は黒木だけではなかった。

「け、圭子ちゃんは僕の……っ」

「いや俺のだよ。俺、強い女の子好きだよ……っ」

「俺も惚れちゃったで！」

復活した大吾に重原、そして赤佐までが俺に惚れてしまったようである。

なんたる地獄！しかも今度は筋肉野郎が2人もいやがる。

ハッキリ言って俺に勝ち目はない。だったらここは——逃げたほうが得策じゃあ！

「あ！ 待って僕の圭子ちゃん！」

「俺のマイ・ハニーよ待ってくれ！」

「俺これでもエッチだけは自信あるんやでー！」

「俺は男だ！ バカヤロオオオオ！」

俺はただひたすら野獣と化した野郎共から逃げていた。  
もちろん、泣きながら女の小走りで――

――こうして文化祭1日目、仮装行列はただ逃げるだけで終了した。

それから数時間後。現在俺達は3人揃って晩御飯を食べていた。

葵も暮葉も美味しそうに食べているなあ……俺、俺はその……まあアレだよアレ。

「それでね！ お兄ちゃんやクーにゃんの学年にね、すっごく可愛いというか……うーん、カッコいい系かな？ そんな感じの女子がいたらしくてね、葵のクラスの男子もみんなその人に告白しようとしていたんだよ！」

「もきゅ！？ す、すごいですねその人……学園のアイドルみたいなのです！」

「そ、そうだね……あはは」

その女子は俺です――なんて言える空気じゃねえ……。  
どんだけ全校の男子にモテてんだよ、藤島圭子ちゃん。

今までで一番最悪の文化祭1日目だった。こんなに野郎共に迫られた事は今まで一度もないぜ。

いや、迫られる事が地獄以外の何者でもないが……。

とにかく色々言いたい事があるけど一言、これだけは確実にハツキリと言える事がある。

そう、それは――

「うう、二度と女装なんかするもんか……っ」

楽しい食卓でただ一人、俺は密かに涙を流していた。

## 第107話、文化祭一日目（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

大吾「結局あれから圭子ちゃん見てないけど、何組の子なんだろう？」

重原「圭介の妹らしいからね。きっと1年だと思うよ？」

大吾「じゃあ圭介に訊くのが手っ取り早いな」

重原「圭介。圭子ちゃんって何組か知らないかい？」

圭介「……知らん」

伊吹「圭介、テンション低いわね……」

小坂「あはは、悪い事しちゃったかな……？」

第108話、文化祭二日目——両親と再会と無口と……？

金曜日、今日もまた3日間の文化祭のうちの1日であり、今日は昨日と違って生徒間による展示などがメインとなる……まあ、本格的なお祭りとなる一日だ。

最も、このお祭り騒ぎは明日も続き、特に今日からは一般公開があったりで色々と大忙し。

まあ今日はまだいいほうだ。金曜日は他校は殆どが授業な為、一般人と言っても保護者くらいしか来ないもんだからな。

本当に大変なのは明日だ……明日は学生が主な客だからな。

「……んで、なんで暮葉がメイド服を着てんだよ？」

「もきゅ？ えーっと大吾さんの提案でして……男の人はこの恰好でご奉仕すると喜ぶと——」

「確かに嬉しいけど何か間違ってる！ ちくしょう大吾のヤツめえー！」

「もきゅ？」

アイツ、絶対暮葉をコスプレさせて楽しんでるんだろ。

普段は完全二次元派の癖して……アイツ唯好きと言いつつまさかのロリコンだったのか！

「どったの圭くん？」

「あ？ 小坂——でえっ!？」

小坂は赤と白の巫女さんの恰好を、その隣の伊吹は女中さんのような和服を着ていたのだ。

いくら喫茶店とは言え、このコスチュームは色々とオカシイやろ。そういえばと思い周囲を見渡す。

野郎共は普通の制服だが、女子の大半は何かコスプレっぽい恰好をしていた。

これはアレか……全てはアイツのせいだったりすんのか？

「くそーっ！ これも全部大吾か、いや大吾しかいねーだろっ！」

「まあまあ圭介そう怒らないで。その大吾は今日いないんだしさ」

「もきゅ？ 大吾さんいないのですか！？」

「は？ 重原……なんでまた今日に限って大吾がいないの？」

「豊○愛生のソロライブと文化祭が重なったって言っていたし、大吾的にはライブのほうが大切だったんじゃないかい？」

……ひでえ、呆れて言葉も出ねえよ。

ひよっとしてアイツ、声優のライブが楽しみで文化祭サボったのか？ やっぱり大吾は完全二次元派だった。

ちくしょう、アイツ……現実なんてジャガイモ程度にしか思っ  
てねえぞ。<sup>リアル</sup>

「相変わらず大吾はキモいね。やっぱり大吾の名字は長宗我部元親に失礼だなあ」

「いいじゃないの別に。だって大吾よ大吾？」

「まあ確かに……大吾さんは居てもいなくても変わらないですね！」

小坂もひどいが伊吹と暮葉もひどいモンだ。

どうやら女子達は大吾の事を、なんてことのないパセリ程度にしか思っていないようである。

「それにしてもあたしら前半はお仕事かぁ。それじゃあ伊吹、今のうちに作戦考えようね？」

「……え？ あ、亜紀？ 作戦ってなによ……っ？」

「いいからいいからっ」

「あっ！ ちょ、ちよつと亜紀！？」

ニヤニヤしている小坂に背中を押され、伊吹がこの場から強制退場させられた。

しか伊吹は作戦ってなにと言いつつも、内容自体は知っているようだ。

何故ならアイツ、頬が赤く染まっていたからだ。

アイツはツツパリな癖に赤面症だしな。それにしても作戦って一体なんだ？

あと、未だに伊吹と一言も交わしていない俺って……。

「伊吹さんに亜紀さん、どうされたのでしょうか？」

「ふーん……まっ、俺達は聞かないほうがよさそうだね。特に圭介は絶対にね」

「なんで俺！？ つーかやっぱ俺の話！？」

ちくしょう……まさか作戦会議って俺を如何にぶっ倒すかとか、そんな話なんじゃ……？

まずいな。今のうちに竹刀で襲われた場合の護身術を練習しておこう。

——それから数十分後。

店の中では暮葉、小坂、伊吹などの女子共が男性客をご奉仕。

重原ら野郎共も女子共のハートをキャッチすべく、この教室の中で奮闘中であつた。

そして、今の俺はお客さんを集める為、廊下に立って呼び込みを行っているのだ。

しかし呼び込みって殆ど効果がないし、その上超気まずい空気が……。

そう、この気まずい空気の原因は——

「……なあ白藤、お前も少しは呼び込みの為に喋らないか？」

「……………」

「あ、あんのー白藤さん？」

「……………」

「白藤ちゃん？ 早苗ちゃん？」

「……………」

「もおーっ！ 一言くらいは喋ってくださいお願いしますー！」



しらふじさなえ  
白藤早苗。

2年4組の在籍する……まあ簡単に言えばクラスメイト。ただそれだけである。

白藤とは仲がいいわけではないし、というか白藤が誰かと話をして  
いる所なんて見たことねえぞ。

「……………」

「あのなあ白藤。一応呼び込みの仕事なんだからさ、何か喋らない  
と意味ないんだぞ？」

「……………」

白藤はどう見ても美少女である。背は伊吹よりは高く青山さんより  
は小さい程度。

とっても明るい青緑色の髪は長く美しい。長さは太股まで伸びたふ  
わふわロングだが、それとは別に頭の横から水色っぽい白リボンで  
束ねた髪が二房、伸びている。

しかもリボンには小さな鈴が二つずつ、可愛らしい飾りのように取  
り付けられていた。

紫色の瞳は何かグツとくるものがあり、正直その……あどけない顔  
が可愛いです。

しかもなんだその首に巻いた黒リボンは。あと襟の辺りに黄金に輝  
く鈴は。

もうそれ狙ってるよね。俺のような男のハートをキャッチする為に  
狙ってんだよね？

だが——彼女はそもそも言葉を話せるか自体怪しい程、超絶無口な  
女の子なのだ。

「……………」

「……………」

どうしよう。会話が全く続かない……。

青山さんは単に恥ずかしがりなだけだし、物静かなだけだけど……

白藤は違う。

白藤は物静かとかそれ以前に——コミュニケーション障害なのかと疑いたくなるほど、無口なのだ。

無口な上にいつも一人なせいか、誰も白藤の好きなものを把握出来ていないという……。

つまり、共通の話題がない上に無口……困った。

俺としては出来れば仲良くしたいのに。ほら、友達が増えれば人生はそれなりに楽しいだろ？

「……………」

「……………」

でも話題がない、そもそも声をかけても返事をしてくれない。

これでも成績は葵に並ぶ学校の3本指だなんて……うん、信じられねえ。

「あらあら浩介さん。あちらにいらっしゃるのは圭介さんじゃありません？」

「お、ホントだ。おーい圭介っ！」

「あん——？」

はて、聞き覚えがあるというか……なんだか懐かしい声が人ごみの

中から聞こえてきた。

誰だ。中学の時の知り合いだとは思えない。

今日は他校は授業だし、そもそも中学の時の知り合いはまだ俺の事を敵視しているハズだ。

けど——大人にそんな知り合い居たっけか？

そもそもこの声は一体どこから——

「ん？」

その時、ぐいぐいと袖を引っ張られたような気がした。

振り返ると——なんと白藤が俺の袖を引っ張っていたのだ。

「ど、どうした……？」

「……んっ」

白藤は控えめに人差し指を西側に向ける。

ちくしょう、コイツ喋らねえけど滅茶苦茶可愛いな。

でもなんでだ。なんでコイツ指差したんだろうか、西側に何かあるってのか？

というわけで俺はそっちを振り向くと——そこには。

「おー、ようやく気付いたかぁ！」

「元氣そうでなによりだわ圭介さん」

「貴方……あの時の？」

なんだこれ、どういうことなんだよ？

そこには人が三人いる。一人は中年の男でなんとなく俺に似ている

ような気がする人。

もう一人は葵に似た青髪ショート的女性。多分中年男性と同年くらいだろうが……異常に若い。

そしてもう一人は長い黒髪の少女だ。初芝の制服を着ているが……どこかで会ったような？

つか、俺の親父とお袋が何故文化祭に来ているんだ。二人とも一体仕事はどうしたんだ。

そして、なんで可愛い女の子を連れて歩いてるんだよ。

なによりこの女の子は確か前に街中で――

「ごるぁロリコン親父っ！」

「ひい！？ い、いきなりなんだ圭介！？」

俺はつい衝動的になって、自分の親父の胸倉をガシツと掴んだ。しかもそこから強引に揺さぶり、俺は親父に事情聴取を始める。

「なんでお袋と一緒に文化祭に来てんだ！ 仕事はどうしたんだよ仕事は！？」

「いやぁ～お盆は忙しいからな。代わりにこの時期に休暇を取ったんだ」

「いきなりすぎるだろ！ せめて連絡くらいは入れやがれ！」

「くわあぁっ！？ ちょ、圭介っ！ 悪かったから揺さぶらないでくれ！」

だって揺さぶりたくなるだろ。

いきなり何の連絡も無しによ、遠くに行っていた両親が戻って来た

んだぞ？

事情を小一時間くらい問い詰めたいに決まってんだろ。

「あらあら、圭介さんは両親との再会が嬉しいのね」

「違うわ！ お袋も仕事はどうしたんだよ！？」

俺は今度はお袋——ふじしまあおば藤島青葉の事情を聴取しようとする。

「私も浩介さんと同じ理由かしら？」

「夫婦揃って息子にビックリショーしてんじゃねえ！ つかロリコン親父、その子は一体何なんだよどういう関係なんだよ！」

俺はビツと長い黒髪の少女を指差した。

だったこの子——前に街中で不良に絡まれていた佐井学園の——

「ああ、道に迷って困っていた所を案内してもらったんだ」

「そうそう。圭介さんの同級生みたいだけど、とってもいい子だったわよ」

「えっ？ え、えーっと……」

俺は再び長い黒髪の少女を見る。

うわぁー見られている。じっと見られているよ俺……きっと怪しまれているんだろう。

相手もきつと、俺の事を何処かで見た馬鹿だと思っているに違いない。

「私は西園寺雪乃よ。貴方と同じ2年……この前はありがとうございます」

「え？ や、やっぱり貴女様はあの時の？」

「ええ、おかげで面倒なことにならずに済んだわ」

「あ、あっははは。まあ気にすんなくて、いい運動にはなったからさ」

西園寺雪乃……やっぱりあの時の絡まれ少女だったか。  
でもコイツって確か佐井学園の生徒じゃ……？

「あらあら圭介さん？ 西園寺さんとは知り合いだったのかしら？」

「知り合いと言うか……まあ、知り合いでいいのか？」

とりあえず知り合いでいいだろう。一応、お互い面識はあるんだからな。

それにお袋に細かい事を説明しても無駄だしな。

お袋はとにかく恋バナが好きな若づくりオバハンだ。

下手に詳細なんかを語れば——「それはフラグじゃないかしら？」  
なんて馬鹿にするに違いない。

親父もそうだ。というか親父はロリコンだし、西園寺を狙わないか心配だぞ？

「ん？ それじゃあさつきから圭介の袖を握ってる子は誰だ？」

「ん？ ——ッ!？」

「……っ」

おかしいな、一度離れたのにどういう事なのさ！  
気付けば白藤が俺のそばにおり、何故だか俺の左の袖をぎゅっと握っていたのだ。

「あらあら。圭介さんに彼女がいたのね」

「違うわ！」

俺の彼女がこんなに無口なわけがない！

「そうかあゝ、ついに圭介にも春が……父さん嬉しいぞ！」

「違うっつつてんだろうが！」

「へえ？ 貴女ってお節焼きな割には恋人がいたのねえ」

「西園寺！ てめえも少しは人の話を聞け！」

なんだって俺の周りには会話が通じない相手が多いの！？

というか……なんか次第に俺ら、他人の注目を浴びている気がするのだが？

4組の連中まで野次馬として現れ、三馬鹿が「死ねリア充！」とか騒いでいる。

なんか、他の奴らにも俺と白藤の関係を誤解されてないか？

「あれえゝ？ 圭くんに先客がいるじゃん」

「……え？」

思わず俺は凍りついてしまった。

それでも頑張って無理やり振り返る。すると、そこには小坂と伊吹、あと暮葉の姿があった。

そして何故だか、伊吹と暮葉がお怒りの様子で俺に接近し――

「あんたは次から次へと……」

「あ、あのー伊吹さん？ 貴女は何か大きな誤解を――」

「けーすけ様？ そんなに異性の友達が欲しいのですか？」

「なんで暮葉まで怒ってんの！？ 違います、お二人はなんか誤解してますって！」

アカン、伊吹と暮葉から紫色の恐ろしいオーラが……ッ！

こうなったら仕方ない。折角親がいるんだ、大人の力で助けてもらおう。

「ちょ、助けてお父様！」

「ハハハ、そういえば圭介には伊吹ちゃんがいたな。しかも圭介と仲のよさそうな女の子がまた一人……流石の父さんにもその修羅場はどうにも出来ないな」

「お母様なんとかしてくださいお願いしますっ！」

「あらあら。こういう昼ドラ的な展開、お母さんは好きよ？」

なんで息子の危機を笑ってみてんだよ、うちの馬鹿両親は！



絶体絶命の危機なのに。下手したら殺されるかもしれないのに！

「だああもう！ 西園寺様、どうか俺を助けてくださいっ！」

「あら、浮気をした貴方が悪いんじゃないかしら？」

「浮気も何も俺は誰とも付き合ってねえっ！」

白藤は……ダメだ、俺から離れようとしな。い。

ちくしょう、いつ俺が白藤にこんなフラグを立てたんだ。

思い出せば声をかけたのは今日が初めて。白藤とこうなるイベントをこなした記憶もない。

それなのに……なんでこんなことになってしまったんだ？

とりあえず白藤に離れてもらった方がここは安全。

しかし、そんな事を言っても無口な白藤が返答するとは思えない。

「歯あ食いしばりなさい……ばか圭介っ！」

「けーすけ様……これは教育なのです。超法規的措置なのです……ですから覚悟なのです！」

「ちょ、おま……ヤメ——だああああっ！ 不幸だああああああああああああっ！」

俺は説教ウニ男のように叫び、そして何故か怒る乙女達にシバかれたのであった……。

第108話、文化祭二日目——両親と再会と無口と……？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>（投票できるキャラを追加しました！）

・後書きトークコーナー

黒木「藤島のハーレム野郎……マジで死ねばいいのに」

圭介「てめえは女の子にシバかれる状況が嬉しい状況に見えるのか？」

黒木「あたりまえだろ！ 我々の業界ではご褒美なんだよ！」

圭介「どんなドM願望だよ！？ 俺はゴメンだっ！」

重原「すると圭介はドSなのかい？」

圭介「知るかつ！」

大吾「僕の予想、圭介は多分エッチの時だけドS……」

圭介「どこのエロゲー主人公だコラァ！」

## 第109話、ジャンボと付きまとう理由

2年4組の展示でやっている喫茶店。

クラスの子が提案した可愛い装飾に包まれ、大吾が提案した可愛いコスチュームに身を包んだ女子達。女子達の要望でホスト風の恰好をしている重原達。

そんな色々なものに囲まれる形で、お茶か何かを頼んで飲んでいる俺の両親がいた。

「お、おっ、お久しぶりですっ！」

「久しぶりだねえ伊吹ちゃん。ああでもそんな堅くならないでいいんだよ」

「そうそう。私達にとって伊吹ちゃんは家族みたいなものよ？」

「始めましてっ！ 性は木下、名は暮葉と言う者なのですっ」

「おお、すると君が子供達と一緒に暮らしている暮葉ちゃんだな」

「あらあら、始めまして。私達は圭介と葵の父と母よ、これからもよろしくね」

畜生、こっちは色々とボロボロだったのに、なにアイツら人の親と楽しくふれ合ってるんだよ。

ていうか、親父もお袋もホントにアレだよ。帰ってきてるなら連絡くらい入れるよ。

俺や葵が暮らしてられるのも、全部あの二人の稼ぎのおかげだ。だから帰ってくると知っていれば、恩返しのための準備とかもできた

のになあ。

そういえば葵のヤツはこの事知ってんのかな。

まあ家族なんだし、そのうち知るとは思うけど……一応後で教えておくでしょう。

それよりも……俺が殴られた主な原因をなんとかしなければ。

「おいこら白藤。てめえ……いつまでそうしているつもりだ？」

「……………」

白藤はまだ俺の袖を掴んでいた。

それはまるで、超内気な彼女が彼氏を超頼っている感じであった。そう——まさに【超】がつくほど控えめベツタベタなのである。

「……あのさ、視線逸らさないで何か喋ろうぜ？」

「……………」

「とりあえず俺から離れない理由をだな——」

「あら、貴方達まだ離れてなかったのかしら？」

その時、西園寺がニヤニヤしながら冷やかしを入れてきやがった。なんすかそのカップルを見るような目は。

「うっせ黙れ！ こちとらコレのせいで殺意向けられてんだよ！」

もう一度周囲をよく見回すと、主に三馬鹿や他のクラスのヤツが俺を殺したい目で見ていたのだ。

先に言っておくが、白藤が俺から離れないのは俺のせいではない。

これは勝手に白藤がくっ付いているだけだ。  
まあ嬉しいと言えば嬉しい。でもねえ、周りの視線と言うものがありましてですね……。

「まあでも、以外とお似合いだわ」

「か、からかってんじゃないよ……っ」

「その代わり、あそこの2人は相当不機嫌みたいだけど」

西園寺が横目でその2人のほうを見る。

西園寺の視線の先には暮葉と伊吹がいるが、その2人はまあ怖い目で俺の事を見ていたのだ。

そして、ガンバレとサインをしやがる我が両親。

「うえ……」

「ふふふ、まあ頑張りなさい」

「ん？ 西園寺、どっか行くのか？」

「それでも仕事中的なの？ 折角恩人と出会えてもうお別れなのが心残りだけど、どうせ同じ学校だわ。また後で会えたら会いましょう」

「そっか……またな西園寺」

「ええ、またね」

西園寺は背を向け、長い髪を靡かせながら立ち去っていく。

なんだかアイツ楽しそうだな。

確か佐井学園の生徒だったような……明智のように初芝に転校してきたのかな？

しかし気になるなあ。西園寺雪乃……アイツは超能力者なのかな？  
あともう一つ。まだ大事な問題が解決していない気がするんだ。

「さて、おい白藤。いい加減離れないか？」

「……………」

「頼むお願いします！ 周囲からの視線が痛いんですよ！」

相変わらず俺に向けられる殺意。ちくしょう、みんなして俺を汚い  
ゴミを見る目で見やがって。

まあ確かに事情を知らなけりや、今の俺を見るとムカつくかもしれ  
ねえけど。

「オー！」

「あ？」

なんだ、この妙に特徴のある雄叫びは？

しかも白藤がまたぐいぐいと、俺の袖を引っ張ってきたのだ。

そして雄叫びの聞こえた方を指差す。

白藤……無口だけどこういう時は便利だな。

でも、いい加減野郎共の殺意ある視線が痛いから離れて欲しいぜ……。

「おいおいマジかよ？ ホントにやっちゃまうのか？」

「ああ。初芝レスリング部の怪物、ジャンボ鶴屋と最強の風紀委員、明智風紗がガチバトルだぜ？」

明智とジャンボ鶴屋がガチバトルだって？

そういえばジャンボ鶴屋ってどこかで聞いた覚えが……多分アイツだな。

確か3年で身長は190cmを超え、体重も120kgを超えている初芝レスリング部の主将。

鬼のように強いらしく渾名は【怪物】。その異名通りの強さなんだとか。

んで、なんでソイツと明智がガチバトルする事になったんだ。しかもこんな廊下で……？

しかも相手は怪物ジャンボ鶴屋だぞ？

「明智のヤツ……なんで鶴屋なんかと」

「オー！」

右腕を豪快に挙げ、雄叫びをあげるジャンボ鶴屋。

どういう成り行きでこんな事になったかは知らんが、アイツ明智に勝つつもりらしいぞ。

「お前……本当に私と戦うつもりなのか？」

「人生はチャレンジだ、チャンスは掴め！」

「はあ……わかった。戦えばいいんだろう？」

どうやら、勝負を挑んだのはジャンボ鶴屋のほうらしい。

明智は明智でバケモノみたいに強いし、ジャンボ鶴屋は異名が【怪

物】なだけに相当パワフルな戦い方をするヤツなんだろう。案外この勝負……わからないかもしれない。

「ナギちゃん頑張って！」

「鶴屋あゝ！ 明智なんかぶっ倒しちまえ！」

明智を応援する生駒と鶴屋を応援する黒木。

まさか……黒木じゃねえだろうな。ジャンボ鶴屋が明智と戦うように仕組んだのは？

可能性は十分あるな。自分じゃ勝てないから強い奴に頼みましたとか、アイツならやりかねないぞ。

「オオオオオ！」

鶴屋が駆けだした。足はそこまで速くはないものの、あの巨体が突き進むんだ。

襲われる側からしてみれば、重戦車がけたたましい音を上げて近づくのと同じくらい怖いだろう。

だが——明智もやはりプロだ。

鶴屋のジャンボ・ラリアットに怯む事もなく、なんとそれを回避したのだ。

そのまま明智は背後に回り込み、素早く鶴屋の腰のあたりに蹴りを打ち込んだ。

「オウ！？」

鶴屋の巨体をも突き飛ばす威力の蹴り……やっぱ明智はバケモノだ。だが、鶴屋も流石は【怪物】。蹴りの一発や二発でダウンなんてするハズがない。



「ウオオ！」

「——ッ！」

鶴屋が走る、ジャンボが明智目がけて一直線に進む。

そして——ここぞという間合いで鶴屋はいきなりジャンプをしやがった。

「鶴屋が膝を突き出した……あ、アレは！」

「やべえ！ ジャンピング・ニー・バットだ！」

「決まったらまたオーが来るぞ……ッ！」

どうやら明智の一撃で鶴屋は、明智のことを相当の実力者と判断したらしい。

いきなりジャンボ鶴屋は自身の大技を繰り出したのだ。

アレが顔面に突き刺さったら、明智はまず立っていられないだろう。だが——拳を構えた明智はまるで乙戦士の如く、残像だけを残して鶴屋の前から姿を消した。

「ば、バカナ！？ どこに消えた！？」

レスリングはスピードも大事かもしれない。

だが、それより大事なのはどんな攻撃にも耐えられる屈強な肉体。

そんな肉体にダメージを与えられるパワー。

そして、どれほど攻撃を食らっても折れぬ——メンタル的な強さだ。

鶴屋はパワーとタフネスさが自慢のご様子。

……だが、明智はそんな鶴屋さえ撃退できる程の——馬鹿力の持ち

主であった。

「——フッ！」

不意に鶴屋の背後に現れた明智。鶴屋が振り向いた時には既に遅かった。

明智は既にジャンボ鶴屋のこめかみに——鋭く華麗な一撃を放っていた。

勝負はそれで決まったのだ——

「ア……ぐ……オ……ッ」

「安心しろ。ちゃんと手は抜いたぞ」

すげえや明智……アレで本気じゃなかったのかよ。

「おおおおおっ！」

「あ、あのジャンボ鶴屋が負けた……ッ!？」

「強え……明智のヤツ反則級だろっ！」

「なんだあんな強いヤツが風紀委員やってるんだ!？」

まあなんというか……。

最近明智の実力も隠れ気味だった気がするが、やっぱり明智はバケモノ級の強さを持っていた。

なんたって、あのジャンボ鶴屋をあそこまで簡単に倒したんだ。

「すごかったなあ、白藤」

「……………っ」

どうせ無反応だろうとは思いつつも、俺は白藤に話を振ってみた。だが、その時白藤は微かに反応してくれたのだ。

なんと——静かに首を縦に振ってくれたのである。

初めての白藤のマトモな反応……これはひょっとすると、聞き出せたりできるかもしれないな。

「なあ白藤。さっきから俺にくっ付いてる理由ってさ……」

「……………」

「やっぱ教えてくれねえのか？」

「……………っ」

すると白藤はポケットの中から携帯電話を取り出し、何か必死に文字を打ち込んでいた。

そして、その画面を白藤は恥ずかしそうに俺に見せる。

オイオイ……何もエロ画像見せるんじゃないんだから。

というかこれ、紙のいらぬ筆談ってヤツか？

無口な上に会話がコレとは……白藤、アンタは冥界のネクロマンサーかよ。

でも、俺に付きまとう理由はなんとなくわかったかもしれない。

白藤の携帯の画面にはこう書かれていた——

【相手にしてくれて嬉しかったから】

なんだ……そういうことだったのか。

それなら喋ればいい——とは思ったが、白藤早苗とはこういう人物なのだ。

それに、声を全然出さないのには理由があるのかもしれないし。某冥界のネクロマンサーみたいなの……！

「俺でよかったらいつでも相手するよ」

そう言うと、白藤は再び携帯に文字を打ち込む。

再び恥ずかしそうにもじもじしつつ、白藤は携帯の画面を俺に見せてくれた。

【ありがとう】

ありがとう……か。

やっぱりお礼を言われるのって嬉しいな。

俺は微笑みながら窓の外を見る。

今日は快晴。夏の日差しが入りこんで、俺達を見守るかのように照らし続けていた。

——それから数時間後、俺は教室に戻ったが……。

「あ、あのー暮葉さん？ これは一体なんでござんしょうか？」

「伊吹さんと二人で用意したのですよ？ 大変でしたよ」

「伊吹と二人で用意したのかあ。んで、これはなんでござんしょうか？」

「もちろん鉄の処女なのですよ？」

「お前！　それ拷問道具じゃねえか！」

そもそもなんで教室に鉄の処女があるんだよ。

ていうか持ち込みOKなのかよ。一応これだって使い方によっては痛い拷問具だぞ？

大体、こんなものどこに入手してきたんだよ。

「圭介……日頃の不満、今ぶちまけるわ……っ！」

「ちょ、伊吹さん？　なにをそんなに怒ってらっしゃるのでしょうか？」

「圭くんごめん。暮葉と伊吹の気を沈めるには圭くんが犠牲になるしかないよ？」

「う、ウソだ……21世紀なのに鉄の処女で拷問されるだなんて……そんなのあんまりだああああああああっ！」

——　こうして、文化祭二日目は終了したのだ。

まあ鉄の処女と言っても所詮はオモチャ。

ただ暗くて狭くて怖いだけだったのだが……でも鉄の処女の中は色々スリル満点であった。

ちくしょう……一体俺が2人になにやったってんだよおお！



## 第110話、裏の動きと一家の日常

——その頃、地球のどこか——

薄暗い紫色のような背景。

その中央の赤く高級そうな椅子に一人、少女が座っていた。さらっと長い銀髪にサファイアのような瞳を持つ小柄な美少女。だが、彼女が他人に向ける視線は氷のように冷たいものだった。

「失礼します！」

一人の地味が軍服を着た白人男性が、何かの報告書を持って彼女の前に現れる。

「ふふふ、なにか報告でもあるのですか？」

「藤島圭介の居場所について新情報であります」

「それじゃあ、その情報が書かれたその紙。読んで欲しいな」

っと、銀髪の少女の隣にいた少女が言い放つ。

彼女はピンク色のコートを着用して、ふわっとした金髪ツインテールと銀髪の少女とは対照的だ。

彼女の名前はリリア。そこに座っている銀髪の少女のただ一人の友達。

「読みます。” 発 SS、宛 連邦総有党中央委員会書記長 クラスメイトの藤島圭介は標的の藤島圭介と認む。速やかに回収命令を下し、上記の者の身柄を拘束せよ”」

「へえ……いよいよ藤島圭介の居場所が特定できたんですね」

軍人の報告を訊くと、銀髪の少女は頬杖をつきつつ、ニヤリと微笑みを浮かべた。

その様子をリリアは不安げな表情で見ている。

一方の軍人は一歩前に出て、ハッキリと銀髪の少女に何かを進言する。

「どうします。アルファ隊の妨害が入っているとの情報も存在します、精鋭の魔術師を初芝高校という場所に送ってやりましょうか？」

「その必要はないですよ。そのSS……本名は私も知らないですが、その者に身柄の拘束をさせなさい」

「しかし、アルファ隊が……」

「クラスメイトですよ？ 馬鹿正直にぶん殴れるとは思えませんけどね」

「りよ、了解しました！」

軍人は報告書を片手に、血相を変えて逃げるようにこの部屋から出て行った。

銀髪の少女はその光景を、不安になるような微笑みを浮かべ、やはり冷たい視線を向けている。

やがて彼女は左手で自分の長い髪に触れ、そのままリリアの方を少し嬉しそうな顔で見た。

「ねえアリーナ、遂に標的を発見できてよかったね」



「ええ。これで憎き皇族を全員排除したことになりますね」

「……これで、アリーナの支えになれば……アリーナが元に戻れば……っ」

リリアが俯き、かなりの小声で自身の想いを口から漏らす。

だが、微かにそれはアリーナと言う少女に聞こえていたようだ。

アリーナは眉間を寄せ、彼女のほうを見つめる。

すると冷たい言葉しか発しない口を、また冷たい言葉を吐く為だけに開けた。

「リリア、なにか仰いましたか？」

「い、いえっ！ なにもっ！」

「ふふふ……」

不敵な笑みを浮かべる氷の女王。

彼女の名前はアリーナ・ウラジミールヴナ・レニナ。

——そう、圭介の身柄を狙い、異世界で戦力を蓄えるサヴィエト亡命政府の代表である。

——その頃、藤島家。

「お、お父さんっ、お母さん！」

「おお、久しぶりだな葵！」

「あらあら、葵さんも元気そうだなによりだわ」

俺は今、リビングで喜ぶ葵の姿を見てなんとなく心が満たされていた。

葵が喜んでいるのは当然理由がある。

今日――俺の両親が何の連絡もなしに家に帰ってきたのだ。

その事が葵は嬉しくて嬉しくて、もう仕方がないようなのである。

葵は俺とは違って親の事が大好きみたいだし、ぶっちゃけこの光景は見ていて心が温まるよ。

「けーすけ様っ、家族仲がよろしいようで拙者も安心なのです！」

「そ、そうか……」

暮葉も家族仲がいいのはいい事だと言っている。

だが、何故か俺はそれに納得ができなかった。

確かに暮葉の言っている事には同意だ。問題はそれを暮葉が言っているという所にある。

コイツ……おもちゃとは言え、俺を鉄の処女に閉じ込めやがって……ッ！

「いやあゝ、今日は父さん達文化祭の会場にいたんだよなあ」

「そうだったの！？ 葵の所にも来てほしかったよっ」

「ごめんなさいね。途中で圭介さんと遭遇しちゃって、そこでの出来ごとが面白かったから」

あんなあ……こっちはクソも面白くなかったぞ。

むしろずっと自分の生命の危機を感じていたくらいだ。

実際、そのせいで俺は鉄の処女に放り込まれ……はあ、不幸だ。

「なになに面白い事って!？」

「ん？　なんだっけ、確か圭介に彼女がいたことだっけ？」

「あああら、もう覚えていないのかしら？　でも浩介さん、それで正解ですよ？」

なっ！

あ、アイツら葵になんという事を言っちゃったんだよ。

葵はブラコン。俺が誰かと交際するなんて……絶対に認めない子だぞ。

その葵にそんな嘘情報を吹き込みやがったら――

葵は殺気が溢れるように目を光らし、凄まじい足音を上げてたったの2秒で間合いを詰めてきた。

そして、俺の目の前で止まったと思いきや――葵は人様の胸倉をガシリと握ったのである。

「お兄ちゃんどういうこと？」

「ちょ、落ちつけ葵！　あの二人の言ってる事はウソですウソ！」

「そうですよ！　けーすけ様は誰とも付き合っていないのです！」

ちなみに暮葉と伊吹にはあの後、ちゃんと事情を説明したんだ。

もう暮葉は怒っていない様子だが、伊吹はいつものことながら、相変わらず不機嫌そうだった。

伊吹……やっぱり目も合わせてくれなかったよなあ。

なんでだろう。照れているって事も考えられるが、ツッパリ伊吹だしなあ……。

やっぱ俺、伊吹に嫌われちゃったんだろうか。

「ウソつけ圭介。だってお前、女の子にずっとくっ付いていたじゃないか？」

「ごるあ親父ィ！ それは殆ど事故みたいなモンだろ！」

「ひどい……ひどいよお兄ちゃんっ！」

「ち、違う葵。これはまあ誤解というヤツでして……」

まずいぞ。葵のヤツが本気で泣きそうな目になっている。

涙を溜めた瞳とむすっとした表情。そんな状態で葵は上目遣いで俺を見つめてくる。

「お兄ちゃん！ お兄ちゃんの童貞は葵のものなんだよ！？ って  
いうかお兄ちゃんの初彼女は葵だよ！？ だから葵以外の女の子と  
付き合うのは絶対にダメっ！」

「なんでその結論に達するんだよ！？」

「兄と妹は初めから結ばれる運命。別にヨスガちゃっても問題ない  
んだよ？」

「ありまくりだろ！ 玄関での行為の末同級生に見つかるプレイな  
んかしたくねえよ！」

どうして葵はヨスガなんて知っちゃったんだろうか。

そのせいか、葵のヤツすっかり俺との既成事実を作ろうと本気だよ。  
ちくしょう……アレは二次元だからいいけど、コレは現実<sup>リアル</sup>である。  
現実<sup>リアル</sup>でヨスガったらもうね……笑える話じゃねえよ！

「相変わらず仲がいいなあゝ圭介と葵は」

「あらあら。私は兄と妹のドロドロ恋愛も好きよ」

「てめえら親だろ！ 責任持って妹の行動を止めんかいっ！」

この時、俺は確信したんだ。

ダメだこの家、変態と無責任者しかいねえ！

暮葉が一番マトモに思えてきたよ……はあ。

## 第110話、裏の動きと一家の日常（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>（投票できるキャラを追加しました！）

・後書きトークコーナー

黒木「畜生！ やっぱり藤島はギャルゲー主人公だ！」

圭介「なんで！？」

黒木「意味もなく妹に好かれやがって……畜生！」

浅間部長「ボクなんてゴキブリ扱いだよ！？ 藤島君、君というヤツはモテまくりな上に妹とまで……」

黒木「テメエ、マジで罪深いヤツだな……」

圭介「ちょ、なんでこんな話になってんだよ！」

## 第111話、文化祭三日目、そして……

文化祭三日目、今日は多くの学生達で校内が賑わっていた。

多くの学生達……という自分の学校だけと考えそうになるが、今日は文化祭の日なのである。

どちらかというと、自分の学校の生徒よりは近隣の学校の生徒のほうが目立っていた。

今日はうちの地味な喫茶店も、まあ女子陣や大吾の案によって結構繁盛していたのだ。

最も、今日は非番なので結構暇な俺なのだが。

ただ……午後のステージでちょっくら仕事があるがな。

そう、青山さんと一緒に文化祭の写真撮影をしなければならないのだ。

「ああ……このまま蒸発でもしたい」

「どうしたんだよ圭介？ お前も昨日のライブ来ればよかったのに」

「うっせ黙れ。俺は学校行事はサボりたくてもサボらねえの」

「むしろ圭介の場合、サボったら野原先生あたりにシバかれるよね」

「うえゝ……」

俺は今、大吾や重原と一緒に1年がやっている猫カフェという所に来ていた。

猫カフェだけにどっから集めてきたんだか、大量の猫が教室内にいて……結構痛いです。

痛いと言うのはもちろん、猫が俺を引っ掻いてくるのだ。

だから俺、今日は異常にテンションが低いのである。

猫さん……しつけ悪過ぎだろ。つかなんで俺だけ引っ掻かれるんでしょうか？

「ていうか圭介、どうして僕らと回るんだ？」

「あ？」

「そうだね、女子はどうしたんだい？」

「あのなあ……お前ら俺が女たらしか何かだと思ってねえか？」

「そうじゃねえの？」

「俺もそうだと思ってたよ」

「お前ら……」

そんな女たらしならもうとっくの昔に彼女がいるわ。

まったく、コイツらは毎度毎度大げさだぜ。

「——って、置いてかないでよ！ ミネットはあそこでわたあめ買いたかったんだよ！」

「あ——？　　まったく、ちったあ黙りやがれクソガキ」

「なんで貴方はいつもミネットに対する扱いがひどいの？　もうキスしないよ？」



「オマエ、それじゃオレが能力使えねエだろオが！」

なんだ、廊下のほうがかなりの大声が聞こえたぞ。  
女の子のほうは随分大声で話すモンだな。誰と話してんだろうか？  
それにしてもミネットって……どう考えても外国人の名前じゃねえか。

「どうしたんだ圭介？」

「んいや、別に」

大吾が心配してきたが、別にどこかおかしいわけじゃないし。  
たまたま聞こえた声に気をとられたただだからな。

それにしても、暮葉達も今非番なんだよな。アイツら今頃なにやってんのかなあ。

——同時刻、初芝高校の廊下に……白きあの男が不機嫌そうに歩いていた。

チッ、なんちゅー数の人間がいやがるんだ。

出来れば病室でぐーだらしていたかったんだが、ミネットのクソガキめ……何がりハビリだ。

こっちは杖つかねえとロクに歩けねえってのに、容赦なく周りの人間がぶつかってくるじゃねえか。

しかも謝罪の一言もなし。

クソツタレ……能力使ってブツ殺したかったが、ミネットに止められちまったし……ハア。

しかも、たかがりハビリだったのに……。

「ンで、なんでオマエまでこっちの世界にいるんだ。リーネ・ディートリッヒ」

「ボクは技術者なの。その機械が不調になった時、誰が修理すると思う？」

「ンで、それで木下木葉がオマエをよこしたってワケか」

「そそっ！ だからボクの事は気にしないほうが得策なの！」

チツ……こんのクソガキ2号が。

まア、胸はそこで騒いでるクソガキ1号と違ってガキじゃねえけどな。

でもまあ、クソガキってことには何の変わりもねエ。

それにしても、ちっとアレだなア……。

「オイ、オマエらここで待ってろ」

「あれ？ 貴方どっか行っちゃうの？」

「どこいくの？ ボク達もついていった方がよさそうなの？」

「オマエら、男子トイレまでついてくるつもりか？」

「えっ!？」

「あ、ご、ごめんなさいなの……っ」

恥ずかしそうに俯きやがった2人のクソガキ。

ったく、最初からそうして大人しくしてりゃいいんだよ……クソツタレが。

「チツ」

オレは軽く舌打ちした後、そのまま数十メートル先にあるトイレに向かった。

それから数分後、用を済ませたオレはトイレを出て元の場所に戻った。

だが……どこを見ても制服着てるヤツか、私服のどっかの学校の連中ばかり。

肝心のクソガキ共はどこかに消えていたのだ。

「あんのクソガキ共……どこに消えやがった？」

だからこんな人の多い場所に反対だったんだ。

リハビリするにしてもしにくいし、逸れた場合見つけンのが面倒じゃねエか。

ったく、あのクソガキ共。一体どこでなにして遊んでやがるんだ。しかもアイツらのほうが人数多いし、これじゃあオレが迷子みたいじゃねえか。

ったく……そもそも、こっちは脳味噌シェイク状態なんだ。

撃たれてからまだ一週間経ったばかり。本来ならまだ病室で寝てなきゃいけないってのによ。

まあ、今更そんな事を気にしたって仕方ねえな。

それよりあのクソガキを探しに行かねえと。とりあえずは情報収集って所か？

この辺にいるヤツの誰かに訊いてみるとすつかア……。

「限定版のフィギュアを飾った出店があるだど！？」  
これはもう僕

が行くしかない！」

「いや、なんだか面白い事になってきたねえ」

「お前ら待てよっ！ とりあえずフィギュアの詳細ってのを教えてくれ！」

その時、ダツ、と勢いよくオレの目の前を駆けて行く三人の男達。一人は眼鏡をかけたオタクっぽい野郎。もう一人はやたら筋肉質な爽やかな野郎。

そしてもう一人は見覚えがある。いや——忘れもしねえ。

中肉中背の体格。髪は黒く寝癖のようなアホ毛が一本、伸びていた。制服は着崩されてあまり真面目そうには見えねえ。

そんな外見の男——間違いねえ、アイツはあの時オレをぶん殴った

「あの——野郎オ……ッ！」

杖を持つ手に力を入れる。ギュギュと締め付けられる音が響いた。俺は右手に入れられるだけの力を入れていたのだ。

さらに思いっきり歯を食いしぼり、激しくあの野郎のことを睨み付ける。

——だが、あの野郎は全く気付いていねえ。しかもあの野郎とは別のヤツがオレに近付いてきた。

「なんだテメエ？ この永渕晃様になにガン飛ばしてくれてんだ、アア？」

「オラァ！ 喧嘩売ってんだろ、なんとか言えやもやし野郎！」

「……チッ」

なんであの野郎じゃねえんだよ……。

こんな坊主のラインアート野郎なんぞ、全く眼中にねえってのによ……ふざけんじゃねえよ。

「まったく、藤島に復讐してやろうと思ったのによ……気分悪い、こいつボコってから行こうか」

「そうっすね。このもやしにも永渕さんの恐ろしさ……たっぷり叩きこんでやりましょうや」

ハア……面倒癖エ。

永渕って野郎と角刈りのクソ野郎、コイツらは人の実力がわかつちやったりしねえのか？

まア、こんな連中にわかるような頭があるわけねエか。

それにしてもどうする。こんな連中相手に能力使っても仕方がねえ。超能力を使えば変換機コイツの魔力なんて、たったの15分でなくなっちまうんだ。

この15分はあの野郎にとっておく。こんなクソバカ相手に時間を無駄に使いたくねえ。

しかし、丸腰で戦うのは危険だ。仕方ねえ、酸素でも奪って1秒で気絶させてやるか。

「ウオオオ——が、はあっ！」

なんだア……いきなり永渕の野郎がぶっ倒れやがった。

その背後には竹刀を持った一人の少女。

輝くような銀髪に紅い瞳。小さい事には変わらないが、ミネットのクソガキよりは背は高そうだ。

「まったく……あんたは一体こんな所でなに考えてんのよ？」

「て、テメェ！」

「——ッ！」

突如少女に殴りかかる角刈り野郎。一方、竹刀を構えた少女は咄嗟に行動に移る。

だが少女は竹刀を振りまわさず、その先端を角刈り野郎の鳩尾に突き刺した。

呼吸困難にでも陥ったのか。それともよっぽどの威力だったのか。角刈りはそのまま地面へ平伏しやがった。

ったく……弱エ、これでオレに喧嘩を売るつもりだったのか。

「いってて……伊吹ちゃん、中々いい攻撃くれるじゃねえかよ……ッ」

「あんた、一体こんな所に何しに来たのよ？」

「文化祭を滅茶苦茶にして……テメェらに復讐しようとしたんだよ。そして、伊吹ちゃんを俺のものに——」

「ふん——ッ！」

「ぐ、はあっ！」

少女の不意打ちに永渕は反応できず、首筋を打たれた永渕は床に倒れ込んだ。

それでもまだ、意識だけはあるようだ。

「い、ぶ……きィ……ッ」

「ふん、そう何度もあんたなんかにはやられないわよ」

「くそ……ッ」

そのまま永渕は気を失ったらしく、全身の力が抜けたようにぐったりとしていた。

ったく、この少女と永渕。一体どういう事情なんだ？  
まあ知った所でオレにどうしろって話だがなァ。

「まったく……あの、大丈夫ですか？」

「あァ？ ……問題ねェ」

そうだ。コイツにミネツト達の事を訊こうか。

丁度いいタイミングで現れた事だしな。

コイツなら——ひょっとするとあのクソガキ共を目撃していたかもしれないねェ。

## 第111話、文化祭三日目、そして……（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

暮葉「ところで、あそこで早川が戦っていたらどうなっていたのでしょうかね？」

圭介「さあ？ 永渕が強いと言っても不良の中での話だし、瞬殺だったんじゃない？」

暮葉「伊吹さんにもやられましたけどね」

圭介「不意打ちだったし、それに伊吹は実力隠れ気味だけど実際強いからな」

暮葉「でしたら、もしけーすけ様と会っていたら！？」

圭介「お前わかってて言ってるだろ……多分激戦で文化祭が崩壊するぞ」

暮葉「とにかくけーすけ様っ、今回は早川と伊吹さんに感謝ですね！」

圭介「永渕と戦う必要はなくなったからな。けど伊吹に無視されるし……うう」



大吾「次回！ 圭介に迫るSSの正体とは？  
そして早川悠にも戦  
いが迫っていた——！」

圭介「なに熱血展開にしようとしてんの！？  
つかてめえ、美味し  
い所盗るなよ！」

## 第112話、2人に迫る危機(?)

まったくアイツらは……この人ごみの中どこに消えやがったんだ？俺こと藤島圭介は、大吾達と一緒に限定版フィギュアを求めて外に出たが……。

あまりにすごい人ごみのせいかな、大吾と重原をロストしてしまったのだ。

アイツら無駄に歩くの速いし、ちくしょう一体どこに消えたんだよ。でもなあ、この人ごみを掻き分けて探すのも面倒だ。

とりあえず何処にいるかメールで確認とってみようかな。

「……ん？」

その時、俺は何者かに袖を引っ張られたような気がした。まあ犯人は考えるまでもない。この感じは昨日もたっぷり感じた。

「なんだあ白藤か。こんなところで何してんだ？」

【来てほしい。とっても話がしたい】

白藤は左手で携帯に文字を打ち込み、画面に映ったその文字を俺に見せつけてきた。

この特殊な会話方法、なんとかならないんだろうか？

ネクロマンサーもビックリだぜ。しかも携帯だから紙はいらないし。なんて地球にやさしい無口キャラなんだろう、白藤……。

「は、話？　ここじゃダメなのか？」

【とっても大事な話。出来れば二人きりがいい】

「ふふふふ、二人きりですとおお!？」

コクリと、相変わらずの無表情で頷く白藤。

待て、白藤から二人きりで話をしたいと言われた。

言われたんだが……これってもしかして、やっぱりそういう意味な  
んでございますか？

確かに昨日から白藤は、やたら俺にベタベタくっついてはいたが…  
…。

俺、いつのまに白藤にまでフラグを立ててたんだ!？

【……ダメ?】

画面に書かれたその文字……うう、無表情でダメって言われるのも  
中々の破壊力。

まずいな。これはもう乗るしかないな。いや、神がそうしろって言  
っている気がする!

何故俺はそう思ってしまったんだろうか。俺はその理由について考  
える事にした。

って、考えるまでもないよな。告白イベントだとわかっていながら、  
それでも期待して行こうとしている俺……そうだよ答えは簡単じゃ  
ねえか。

——俺、多分白藤が好きなんだ!

理由なんてよくわからねえ。でもきつとそうなんだろう。

思えば一目惚れだったのかもしれない。だって白藤……見た目超俺  
の好みドストライクだもん。

えっ、一目惚れはナシだって? いやいやそんな事はないだろう。

一目惚れだって立派に惚れてるって事じゃないか。

ふ、ふふ……そう考えると告白が楽しみなってきた。  
俺、告白されたら白藤と付き合う。いや、それが無いならこっちら告白する！

「よ、よろし白藤！ 早速行こうじゃないカ！」

俺の言葉に白藤はコクリと頷く。よっしゃキターーーー！

このまま白藤ルート突入だ。待ってろ、ラブリーマイエンジェル早苗たん——ッ！

——それから数分後、俺達は人目のない校舎の裏側に来ていた。  
フフフ……遂にこの時が来たぜ。

白藤からの告白イベント。あるいは俺による白藤への告白イベント。  
いかん、想像しただけでニヤニヤしてきた。だが、一人でニヤニヤ  
してはただの変態だ。

ここは我慢しよう。己の感情を押し殺し……う、ぐ……中々ハード  
だ。

だが、このイベントが成功すれば俺は——晴れてリア充に！

「白藤、そのく用って一体なんなんだ？」

「……………」

白藤は無言。フフフ、これはひょっとして照れているのかな？

やっぱりここは男である俺がリードすべきか。

そうだな、折角の告白イベントなんだ。これは男のほうから言っ  
てやったほうがいいのかな。

「俺もその……丁度言いたい事があるんだよな」

「……？」

「だから、もし白藤が言いづらいんならその……俺から言ってもいいか？」

【だめ】

画面に表示されたその一言……ってオイ。

——ダメなのかよおおおおおおおおお！

ひょっとして白藤のヤツ——自分から想いを告げたいのか！？  
なんという子。無口だけど白藤スバラシすぎるっ！

「……………ッ」

今、白藤が必死に携帯に文字を打ちこんでいる。

これはまさか——告白のセリフを書き込んでいるのであろうか？

やべえ興奮してきた！と、とりあえず白藤と恋人になったらなにする  
ようか。

まずはデートっすよね。手を繋いでテキストに街中回って夜にホテルへGO——

だああああっ！アホか俺は、最後のやつは欲望に忠実すぎるだろっ！  
と、とにかく。この後のことはちゃんと考えておかないとな。

うんうん。俺は多分これから白藤の恋人に——

「……………んっ」

「お、どれどれ？」

白藤が俺に携帯の画面を見せてきた。

さてさて——白藤が必死に考えた告白のセリフとは——？

【ごめんなさい】

——はい？

ゴ☆メ☆ン☆ナ☆サ☆イ……ですと？

それってどういう——って考えなくてもわかるよね。

そうか、俺は白藤に振られちゃったのか……って待てよオイ。

そもそもなにもしていないのにごめんなさいって、ホントにどういう意味なんだ？

なんかその、恋愛とは全く関係がない気が——っと思った。

「い、ふ——っ！」

刹那、何故か俺の腹部に鉄球がめり込んでいたのだ。

ゴキゴキと嫌な響きがするほどの勢いで突っ込まれた鉄球は、そのまま俺を何メートルも後方へとぶっ飛ばしてしまった。

「しら、ふじ……っ！」

口の中の苦い味を感じつつも、歯を食いしばり白藤の事を見る。そこには——もう一個、鉄球を浮かす白藤の姿があった。

——同時刻、早川悠は……。

「オマエ、このガキを見なかったか？」

オレは携帯電話に保存されていた、ミネットの画像を少女——国宗伊吹ってヤツに見せてみた。

オレと国宗は校内にあるベンチに座っており、丁度国宗がオレの隣に座っていた。

国宗は写真を見ると、思いつきり何かを考えているような表情になるが、決して答えは言わない。

その理由は簡単だ。何故なら国宗は――

「ごめんなさい。この子見たことがないわ」

「そオカ、ならこっちのガキはどうだ？」

今度はリーネの画像を国宗に見せてやった。

だが、反応はミネットの画像の時と全く同じである。

「うーん、この子もわからないわ」

「クソツタレ……あんのクソガキ共、どこで遊んでやがるんだ？」

「あんた、その二人のお兄さんか何かなの？」

「あン――？　なんだろオナ……まア、保護者みたいなモンだ」

知らねえし、そもそも保護なんかしてるつもりはねえけど。

だが、そう言っておくのが一番無難だろう。

なんせ国宗は女だ。ここでロリコン野郎だと思われたら、間違いく面倒な事になっちまう。

……チッ、これだからクソガキの扱いは面倒だ。

「そう、あんたいい人ね……っ」

「あア、迷子捜しのどこがいい事だ？」

「いいことじゃない。私なんかと比べたらさ」

なんなんだコイツは……妙に寂しげな顔しやがって。

それにどう考えたって、コイツのほうがいいヤツじゃねえか。

オレのどこが善人なんだ。オレは何十人もの特異点をブツ殺したヤツだぜエ？

そんなヤツが今更、善人なんかになれるワケがねエだろ。

「オマエのどこが悪いヤツなんだ？」

「はあ……言っただほうがいいのかな？」

「さっきのクソ野郎を代わりにぶっ倒してくれたお礼だ。話くれエは聞いてやる」

「……私さ、幼馴染がいるのよ。ソイツとは昔から仲がよくて、ずっと昔から一緒に……」

「はン——要するにオマエ、ソイツの事が好きって事かア？」

「……っ！？　ち、違っ……くはないかもしれないけど……で、でもやっぱ違うわよ！」

ハア……コイツはどうやらミニットとは逆のタイプらしい。

そんな感情なんてこれっぽちもわからねえ、そんなオレにさえ気持ちかわかるコイツの態度。

言ってる事と態度が全然違エ。コイツは全く素直じゃねエ。

「ンで、その幼馴染に関しての悩みって何だア？」



「最近その……会話ができないのよっ。わ、私のせいなんだけどさ……ちょっとした事があって以来、ずっと話ができなくて……」

「……………」

「なんかよくわからないけど、その……目とか合わせられなくて……」

「ふん。だったら簡単な事だ、ソイツに声でもかければいいだろう？」

オレはごくあたりまえな——普通すぎる答えを国宗に言ってやった。国宗は完熟トマトのように顔を赤らめ、必死に顔を横に振りやがる。

「む、無理無理っ！ 今更遅いわよっ！ それにその……アイツも多分、もう私の事が……っ」

「オマエにそんな事がわかんのか？ ソイツは違うかもしれねエだろ」

「そ、そんなこと言われても……っ」

「第一、ソイツの事を一番理解してんのはオマエじゃねエのか？」

「……………えっ？」

「オマエはソイツの幼馴染なんだろう？ 一番理解してて当然じゃねエのかよ？」

最も、生まれてこの方そういうのがいねえオレには、イマイチよく理解が出来ねえがな。

だが恐らくそうだろう。幼馴染ってエのは昔っから一緒に、切っても切れねえ縁で。

要するに――互いに家族以外じゃ一番長い付き合いって事だ。

「それはそうだけど……っ」

「ソイツはどんなヤツだ？ そんな簡単にオマエを切り捨てるヤツかア？」

「ち、違う……と思うけど……でもっ」

「違うと思うなら――これからもそう思っとけ。ンで、今日でもソイツと話をすりゃいいだろ？」

オレが言い終えると、国宗はしばらく無言で考え込んでいた。その表情はとても真剣で。でも今にも折れてしまいそうなど、とても弱々しかった。

だが、遂に国宗は――

「……わかった。今日……話しかけてみるっ」

「そオかい……そんなじゃ、オレはそろそろクソガキ搜索を再開すつかア」

そう言っつてオレは立ち上がり、ただひたすら前を見ていた。

そう言えばここは人通りが少ない。なるほど、だからコイツも本音を言えたのかもしれない。

コイツもそうだし、木下木葉の研究所を襲ったオッサンもそうだが

……色々悩んでるなア。

人ってのはやっぱ、誰にだって悩みがあるモンってかア。

中にはそれでコイツのように——今にも折れちまいそうなヤツだっ  
ていやがる。

悩み……ソイツは人を変えちまう何かがある。

人を変える悩み……ンじゃア、オレはどうなんだろうか——

「は、早川悠……なんで貴方がここにいるのよっ！」

「……あ——？」

右を振り向くと、長い黒髪の少女とピンクのガキがそこには居やが  
った。

2人ともどこかで見たことがあるツラだ。いや、忘れるハズがねエ  
よなア。

「もきゅ!? さ、西園寺さんお知り合いなのですかっ!？」

「い、嫌ってくらい知ってるわよ……なに、貴女も知り合いなのか  
しら?」

「な、仲間の仇なのです——っ！」

「もしかして……貴女は特異点ってヤツかしら?」

「もきゅ? そ、それじゃあ西園寺さんは……ふえ、ど、どうい  
うことなのですか!？」

「事情は後で説明する。だから貴女の事情も後で聞くことにするわ」

「りよ、了解なのですっ!」

オレは二人のことを嫌ってくれエ知っている。

一人は西園寺雪乃。あの野郎……佐井学園の生徒だったハズだが、なんでここに居やがるんだ?

もう一人は名前は知らんが、オレと戦ったアルファ隊のそこそこ強いガキだ。

あのがキもこの生徒だったのか。チツ、これまた面倒な連中に遭遇しちゃった。

2人は戦意丸出しだ。要するにオレと戦うつもりらしい。

勝てねエってわかってんのに……全く、あのおチビコンビは。

「なによこれ? く、暮葉……どういふことなのよ?」

「い、伊吹さん逃げてください!」

「えっ? なんで?」

「いいから早く逃げて欲しいのです! その人は——連続殺人犯なのですっ!」

「えっ!? も、もしかしてそれって……あんたや圭介絡みの問題の事?」

「大体そんな感じなのです。それより危険なので早く逃げてくださいっ!」

国宗は後退りはして距離をとったものの、決してこの場から逃げようとはしなかった。

あの野郎、あの様子だとちょっとは何かの事情を知っているらしい。

つと言うことは、ここで事情でも把握するつもりなのか。

まあ国宗のことはともかく、目の前の2人をどうにかしねえとな。

「早川悠……どうして貴方が文化祭に来ているのかしら？」

「目的はなんなのですか！？　とにかく……早くここから立ち去って欲しいのです！」

ハッ、よっぽどオレを恨んでやがるらしいな。

まあ当然と言えば当然だ。オレのやった事を考えればそんなのは当たり前。

今更——オレのそんな汚点を綺麗サッパリ流すことは出来ねえ。

まったく、学園を辞める為とは言え……あの件のせいでオレは永遠の悪となった。

最も……その前から学園の指示で汚れ仕事をしていたがなア。

そんな汚れ仕事をさせる学園から逃げ出す為にやった事が——また汚れ仕事であった。

——まったく、なんなんですかアオレの人生ってヤツは？

「オマエらには関係のねえ事だ。悪イが構っている時間はねェ」

コイツらの相手よりも——あの遊んでやがるミネット達を探さねえと。

「何をしようとしているかはわからないけど……また汚れ仕事のようねっ」

「させないのです……これ以上、貴方の行為で誰かを不幸には絶対にさせないのですっ！」

ハア……全く、コイツらはどうやらオレと戦うつもりらしい。

勘弁しやがれよ。こっちは能力を15分しか使えねエんだ。

確かにコイツらは簡単に倒せる相手のハズだ。

だが——アイツらの思いこみのせいで起る戦いで、無駄に超能力を使いたくはねエんだ。

増してやここは学校。あまりド派手に戦えばオレ達の行為がバレちまう。

そうなると流石にまずい。超能力が公になったら——それこそオレの生存にも関わる問題だ。

……チッ、仕方ねえなア……戦いの回避は無理そうだ。だったらやることは一つ。

「お片付けだ——2人まとめて3分で終わらせてやる」

## 第112話、2人に迫る危機(?) (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「なんか、俺が本来の主人公なのに俺のほうが出番少ない……」

風紗「しかも、藤島はボコられて終わりなのに……なんだろう、早川はカッコいい終わり方だったな」

圭介「ちくしょう、俺が真主人公なのに何この扱い!?!」

暮葉「けーすけ様が勝手に一目惚れなんかするからなのです……」  
ボソッ

伊吹「自業自得よ、ばか圭介……っ」ボソッ

圭介「なんか、御尤もな事を言われた気がする……」

## 第113話、仲間だから

ぐ、くそ。なんで俺は白藤に攻撃されたんだ？

ていうかコレ、どう考えても普通の攻撃じゃない。

白藤は鉄球を投げつけてきた……らしいが、あの細腕でこんな鉄球を投げられるとは思えない。

そもそも、この鉄球は一体どこから持ってきたものなんだ？

ていうか白藤って一体何者なんだよ——！

「白藤……お前一体誰なんだ！ 普通の人間じゃねえのは今のでわかったぞ！」

すると白藤はこんなときであるにも関わらず、携帯に文字を打ち込みそれを俺に見せてきたのだ。

やれやれ、こんな時まで会話手段が携帯とは……白藤、果たして彼女は喋れるのか？

って、そんなことより携帯の画面を見ないと。そこに彼女の言いたい事が書かれているんだ。

### 【魔術師】

画面に表示されているその一言。そう、その一言が重要なのだ。

魔術師。確かに彼女の画面にはそう表示されていた。

魔術師と名乗り、なおかつ俺を襲う存在。

それはつまり——サヴィエト亡命政府の魔法使いということである。つと、言うことは白藤の正体は——

「お前……まさかサヴィエトの魔法使いなのか！？」



白藤はコクリと首を縦に振る。

マジかよ……うう、こりゃかなり胸が痛い失恋だよっ。

白藤がサヴィエトの魔法使いかよ……ああもう、どうすればいいんだ畜生！

とにかく——学校から一旦出よう。

こんな所で暴れられちゃあ下手すりゃ周りに被害が出る。

「ヘッ、悪いな！ 生憎俺もそう簡単にサヴィエトに捕まったりはしねえんだよ！」

そう言い放ち、俺は学校の外に向かって全力疾走を始める。

とにかく走れ。そして人目のない所まで行くんだ。

そうすれば——周りを気にせず白藤と話をする事ができるはずだ。

ひたすら逃げる俺。当然、白藤は俺を追ってくる……ハズである。

しかし後方を確認すると誰もいない。白藤のヤツ……追い掛けてこないのか？

そんなことを考えているうちに、俺はいつのまにか学校の外の道路を走っていたのだ。

とりあえずどうしよう。そこの工事現場にでも入ってみるか。

まだ建設中のビル。鉄骨だけの状態のビルの下に俺は入りこむ。

白藤は……来てないな。やっぱりアイツ追い掛けてこないんじゃない——

「ど、はア——ッ!？」

その時——こめかみに激しい衝撃を感じた。

痛い。オマケに頭がグラグラする。視界も脳が揺さぶられたせいかクラクラしている。

いや、一瞬だが若干ぼやけたような気もするぞ。

この感じはまさか——白藤の攻撃か！

「——ッ！」

「……………」

衝動的に振り返ると、そこには相変わらず無表情の白藤が佇んでいた。

とても、暴力を振るうとは思えない少女の姿。

しかし実際は魔法を容赦なく放つ——サヴィエトの魔法使いである。えーっと。とりあえず人目のない所まで逃げた方がいいが……この後どうすればいい？

ちつくしよう。暮葉のヤツ……こんな時にどこで何してやがるんだよ！

「なんで……なんでてめえはこんな事をするんだよ！」

「……………」

「俺を捕えて何の得がある！？ 確かに俺はアレクサンドルの子孫っぽくて、てめえらにとっては迷惑な存在なのかもしれないねえ。けど、俺はてめえらを止めるような力なんてどこにもねえんだ！ そんな無害なヤツを襲って一体てめえらの何の特になるってんだよ！」

【わからない。でも命令されて動いているだけ】

白藤が携帯に打ち込んだその一言。俺はその一言で思わずカッとなってしまう。

「ふざけんじゃねえよ……てめえはサヴィエトの言いなりかよ」

「……………」

無言の白藤を俺はじっと見つめる。

いや、さっきよりも厳しく睨みつけるように——俺は白藤の事を真っ直ぐ見ていた。

「よくわかりもしねえで、人の事を意図的に傷つけようとしてんじやねえよ！」

【ごめんなさい。でも命令には逆らえない。逆らったら私が殺される】

「さ、逆らったら殺される……？」

【サヴィエトで裏切りは許されない。たとえば、無理やり入れられた者でも】

「無理やり？　もしかしてお前……無理やり魔法使いにされたのか？」

再びうん、と頷く白藤。

そうか……そうだな。白藤が自らオカルトの道に走るとは思えねえ。

でも、無理やりだったら反抗すればいいじゃねえかよ。

「お前には力があるじゃねえか。その力があればサヴィエトとだって戦えるじゃねえか」

【無理、あなたは幹部の力をわかっていない】

「それでもだ。そんな理由があるからって、お前は俺を殺したいのか？」

【殺さない。身柄を拘束するだけ】

拘束って言われてもね、普通の人間さんは嫌な予感しかないんだよ。

第一、ドMでもないのに拘束されて喜べるわけがねえ。

それに——そんな事になったら青山さんに悪いだろ。

俺はこの後、青山さんと一緒に写真撮影という、超忙しい仕事をしなくちゃいけないんだ。

だから——サヴィエトの魔法使いに捕まるわけにはいかねえ！

「絶対に捕まらない。お前のこともその場所から救い出す」

【無理、運命には逆らえない】

「だったら逆らえるような——そんな状況を作ってやる！」

いつ命を落とすかわからない。

そんな危ない場所に白藤<sup>コイツ</sup>をいさせたくない。

白藤<sup>コイツ</sup>をその場所から救ってやりたい。

その気持ちだけが俺の脳や心を支配していた。

全く……失恋はちっと痛かったけどさ、それでも白藤は同じクラスの仲間じゃねえか。

その事実だけで十分だ。クラスメイトってだけで俺にとっては十分すぎる。

それだけでもう——助ける理由は出来ているんだから！

【私は上に殺されたくない。殺されたくないから圭介に抵抗するよ

？」

け、圭介って下の名前で……って、今はそんなことを気にしている場合ではない。

やっぱり白藤は怖がっているようだ。怖いから上の言う通りに動く。そうすれば——自分は殺されずに助かるかもしれないから。

だからこそ俺の救いの手を拒み、上の命令を果たすために抵抗をする。

「いいぜ、だったらその抵抗を——打ち破ってやる！」

そして白藤に近づき、その場所から解放してやる——！

「……ッ！」

白藤が両手を前に突き出すと、掌の前方に突然鉄球が現れた。

どういう魔法かはサッパリわからねえ。

こういう時に魔法の専門家が不在だからな。

全く暮葉のヤツ。お前がいないせいか、あの魔法が何なのかサッパリわからんぞ！

まあ……あくまで俺の推測だが、あの魔法はおそらく——

「……ッッッ！」

白藤の鉄球は作り出したもの——

っと言うよりはどっからか呼び出し、瞬時に己の手元に持ってきた。まさにそんな感じである。もしかしてあの魔法、瞬間移動テレポートの一種か？さらに白藤は何らかの力で鉄球を加速させ、まるで砲弾のようにソレを勢いよく放ったのだ。

そんなものを避けれるハズもなく——俺は鉄球を腹にマトモに喰ら

ってしまった。

ゴキゴキ、と嫌な音が響き、口の中に再び苦い味が広がってゆく。

「——はっ！」

白藤からの第二撃。今度は複数のものが向かって飛んでくる。

その全ては鉄球という訳ではなく、中には刃物や金属バットまでもが混じっていた。

オイオイ——明らかに命中したら死ぬものであるぞ。

白藤のヤツ……もしかして、俺の身体が丈夫だって知ってるのか？  
どう考えても彼女の攻撃は、それが前提でやっていると思えない。

だって普通の人に放つ攻撃にしては——あまりにも殺傷力が高すぎる！

「う！　ぐっ！　く、そ——う、ああっ！」

「……………」

辛うじて白藤の攻撃を避けていく俺。

地面に寝そべって転がったり、ゴキブリの用に這ったり……。

もう、攻撃を避ける為の手段は選ばなかった。

どれほど惨めな姿であろうと、攻撃は避けたほうがいいに決まっている。

「ぐ、くそ……ッ！　これじゃキリがねえ！」

「……………」

白藤の攻撃を散々避けまくった挙句の一言。

どうしよう、ホントにこのままだと際限のない消耗戦だぞ。

とにかくさっさと倒さないと——遅れたり行けなかったりしたら、青山さんに悪いじゃねえか！

送れない為には戦いをさっさと終わらせるしかない。でも、どうやって？

……やれやれ、いちいち考えるのが面倒になった。こうなったら手段は一つしかねえ——

「正面突破あるのみ——！」

「……っ？」

白藤は一瞬、とても驚いた表情を見せた……気がした。

正面突破という選択が予想外だったのだろう。

だが、予想の斜め上に行くことをしなければ、戦いに勝つことは絶対にできない！

「う、オオオオオオオオオオオッ！」

雄叫びを上げながら、必死に白藤へと迫る俺。

だが——そんな俺を白藤は受け入れようとするしない。

サヴィエト上層部が怖い為に命令に従い、白藤は俺に向かって再び魔法を使ってきた。

今度は30個はあるであろう鉄球だ。ってかまた鉄球かよ本日何回目だよ！

「……ツツツ！」

「オ、オオオオオオオオオッ！」

俺は鉄球を一つずつ避けていく。最も、俺の反射神経なんて多少他人よりいい程度。

そんな程度で全てを避けれるハズもなく、当然鉄球が被弾することもあった。

ゴン！という鈍い音に激しい衝撃。

当然被弾すれば被弾箇所が痛むが、そんなものは走っているうちにすぐに消えていった。

俺はとにかく突き進み、白藤へと徐々に迫っていく。

そして——最後の一球。

「——ッ！」

しっかり握った左拳を振るった。利き手ではない左手。

それは、自分でもわかるくらい威力が落ちていた。

キレもなければスピードもない。左拳では右拳と比べてやはり見劣りする速度しか出ない。

それでも——この鉄球を弾くには十分であった。

狙い通り、俺は最後の一球に拳を打ち込む。

すると、鉄球は僅かに軌道を逸らし、俺の顔面ギリギリ真横を通り過ぎていった。

左拳は鉄球の軌道を逸らし、自分の顔面を守る為に放ったものだ——！

「う、おおおおおおおっ！」

「——ッ！」

今度は全ての力を注いだ右拳を——目の前の白藤の顔面へ！

「……………ッ？」



……放つことは無く、彼女の顔面ギリギリで拳は停止している。

「……心配するな。ちゃんと寸止めしたから」

【……私の、負け】

白藤はポケットから携帯を取り出し、文字を打ち込んでそれを俺に見せてきた。

そこには確かに——降参を意味する分が書かれていた。その分を見た瞬間、俺は微かに表情を和らげ彼女を見つめる。

「降参したか？」

【うん】

「もう白藤は俺を襲ったりしないか？」

【……わからない。上が怖い】

「そうか……大丈夫だ。お前を守るやつならいっぱいいるぞ？」

「……？」

いまいちよくわからない、という顔を白藤はしている。

そうだな……とりあえず、あんまり問題にならない程度に教えておこう。

一応白藤もサヴィエト亡命政府の人間だ。詳しい事を教えるのは危険だろう。

だから、教えるにしてもかなり大雑把に教えるだけだ。

「お、俺の友達強いヤツが多いからな。うん、魔法使いなんてイチコロだろうっ！」

「……………っ」

「それにほら、俺だって白藤に勝ったろ？ 多少の魔法使いならなんとかしてみせる」

「……………ッ」

「だから大丈夫だ。白藤のことはみんなで守る」

なにも白藤一人で悩む必要なんかないんだ。

何故なら——仲間がそこにいっぱいいるからである。

【……………頼ってもいい？】

「ああ。俺から仲間にもちゃんと事情は説明する。だから最初の一步としてさ——友達になろうぜ」

【……………ありがとう】

ありがとう。

今の俺にはその一言で十分だった。

それを聞けるだけで——十分俺は幸せに思えた。

やっぱり、こういうのも悪くはないよな。まあ、流石に戦いには疲れただけさ。

それでもやっぱり幸せだ。ありがとう、本当にいい言葉である。

——そして、この日から白藤は俺達の仲間になった。

### 第113話、仲間だから（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

大吾「なんか最後無理やりシメたな」

重原「まあ毎回の事じゃないかい？」

圭介「ああ疲れた……っ」

大吾「お疲れさんっ」

重原「圭介もよく戦うキャラだよね」

圭介「うつせ黙れ！ てめえら俺を置いてフィギュア鑑賞に行きやがって……こっちは鉄球打ち込まれるは、いろいろ大変だったんだぞ!?!」

大吾「あっ！ あそこの休憩コーナーにけ○おんの原作がっ!?!」

重原「おお、それは行かないといけないね!」

圭介「おいコラッ！ お前ら勝手に逃げるな!」

## 第114話、最強の超能力者

相手は2人。一人は氷やら念力を使う超能力者。

もう一人はオレと同じ風系統の能力を使う……正確に言えば魔法使  
いってヤツだ。

西園寺の奴はあまり警戒する必要はねえだろう。

問題はあっちのピンクのチビだ。あの野郎は確か、オレの弱点を知  
っているハズだ。

なら話は早エ……最初に倒すのはあのピンクのチビのほうだ。

制限時間は15分。何らかの不測のトラブルが発生する可能性を考  
えれば、あまりコイツらとの戦闘に時間を掛けたくはない。能力使  
用は最低限で済ます必要がある。

「それでは開戦なのですっ！」

「今度は貴方を……倒す」

ピンクのチビは背中に隠していた刀を抜き、西園寺は巨大な氷柱を  
自分の左右に作り出す。

西園寺はオレと同じ5本指の一人。アイツは吹雪念力ブリザードサイコという能力を  
使い、なんでも水蒸気などの僅かな水分から氷や雪を発生させ、念  
力によってそれらを自在に操れるらしい。

オレも左手で変換機のスイッチを押した。電子音と共に何かが復活  
したような気がする。

何の問題もなく演算能力が回復した。

オレに迫ってくるのは砲弾並の氷柱。ピンクの少女の速度もそれに  
負けぬほど速かった。

足の下から強烈な風を吹かせ、足元から砂埃を立たせ、ロケットの  
ように一気に飛び上がる。

瞬時にしてオレは上空20 m、あの2人を十分に見下せる位置に到達した。

「ぎゃっははっ！」

虐殺的な笑い声を上げる。

オレはそのまま風の力を利用して2人の所まで、ロケット推進の戦闘機のように、素早く一直線に突き進んでみせた。

「……ッ！」

西園寺は能力を使い、あくまで推測だが50 cmはあるであろう氷の装甲作り出す。

それでオレの攻撃を防ぐ、あるいは防げなくとも逃げる為の時間を稼ぐつもりなのだろう。

だがなア、そんなことはとっくの昔に予想済みだ。

オレは急激に進路を右に変更、数十メートル先にあった建物を足場とし、その壁を蹴るように再び暴風によって前方に突き進んだ。あまりに強すぎる風の力は校舎の壁を粉碎し、まるで何かが激しく激突したかのような円形の穴を開けてしまった。まア、オレがやったとは思われねえだろう。

普通の人間にはこんな事をする力がねえからなア。

「あっははぎゃはあはアッ！」

「西園寺さん左ですっ！」

「っ!？」

チッ、オレの突撃ナックルも西園寺に寸前に避けられちまいやがっ

た。

流石は五本指ってかア。反射神経はそこそいいみたいじゃねえか。ったく、オレの馬鹿っちゃあ馬鹿だよなあ。

3分で片付けるって言ったのに、不得意な近接戦闘を自ら挑んじゃったんだモンなア。

「やっぱり速いわね貴方……っ！」

「相変わらずの笑い声なのですっ！」

オレはその言葉を聞くと、一旦変換機のスイッチを切った。

こういう何もしねえ時は、魔力節約の為に能力使用モードを切っておくんだ。

そうでもしねえと、15分って時間はあつと言う間に経ってしまう。オレはすぐに戦闘不能になる。そうなれば、確実にあの2人に殺されるだろう。

オレはこの場で死ぬわけにはいかねえ。死ねばあのクソガキ共を探すことだってできねえ。

何よりオレは——とりあえずクソガキ共の居場所を守らなきゃいけねェんだよ。

「チッ、オマエらも相変わらず思考回路が単純じゃねえか。ちったア人様がほんの僅かでも変わったとかって思ったりしねえのかア？」

「ええ、思わないわ……貴方の人格で変われるとは思えないわ！」

「拙者は変わろうが変わらないが関係ありません。貴方は拙者の仲間の仇なのですっ！」

「……ハア、哀れだなアオマエら。それって本気で言ってるのかア

？ 確かにオレはそのピンクの仲間をブツ殺したし、今更どオに  
かなるようなモンだとも思ってねエ。オレが豹変することもねエ」

睨みを利かせながらオレは語り続ける。

西園寺もピンクも黙っては聞かず、今にもオレを攻撃しそうな態勢  
で聞いていた。

そんな中、オレは「だがな」と言葉を切って、

「オレにはオレの道があんだよ。オマエらにそれを邪魔する権利な  
んてねエだろオがよ……あア!？」

叫んだ後、オレはもう一度スイッチを入れ、ドン!とこの足で大地  
を激しく踏みつけた。

その勢いのせいかな、まるで地震でもあったかのような振動が発生す  
る。

当然、オレの能力によるものだ。地面に放射状の亀裂が走りまわる。  
衝撃は数十メートル先の校舎にまで届き、ギシギシと音を建てた校  
舎から破片が転がり、こちら辺一帯全ての窓ガラスが無残にも砕け  
散り、無数の破片がオレの吹かした風によって、くるくると宙で回  
りながら浮いていた。

「もきゅ!？ な、なんなのですかこれは……ッ!？」

「う、あ——そんな、ここまですごい事を——!？」

彼女達は驚きを隠せていない。いや、驚きを隠せていねえのは彼女  
達だけではない。

校舎にいた全ての人間が叫び、喚き、そしてガキンちょは泣き声を  
上げていた。

だが——これで彼女達が降参するとは思えない。



だからオレは——もう一度足踏みを行う。足元で発生した僅かな風を操作し、それを風速169mのF6クラスの巨大竜巻レベルにまで成長させる。

あらゆるものを破壊し尽くすF6の竜巻。現実じゃあ観測された事がないらしいそれは、周囲のあらゆるものを吸い込みつつ、一直線に彼女達の所へと突き進む。

「も、きゅ——っ！」

「ま、まずいわ——ッ！」

流石に殺すのはまずいか……。

そう思ったオレはギリギリの所で竜巻を能力で掻き消し、代わりにオレがこの足で進みだす。

ガラスの破片やベンチの残骸、その他あらゆる物の残骸の雨が降り注ぐ。

オレは残骸に触れた。だが、傷一つ付けずに地獄を突破してみせる。通常、高速移動中に暴風の膜を張り巡らす事はできない。

だが——普通に移動しながらなら造作もない事だ。増してや彼女達も降り注ぐ残骸から身を守るので精一杯で、オレに反撃する余裕などとは全くないのだ。

だからオレは杖を付き、破片を膜で反射しつつ彼女達に近付く事ができたのだ。

「あはぎやはは！ あぎやはっ！」

気付けばオレは彼女達の目前——たったの2mという至近距離に近づいていた。

この状況で彼女達が冷静に判断し、冷静に行動する事など不可能に近い。

西園寺は咄嗟に氷の装甲を作り、ピンクのヤツは刀を構えて防御態勢に入る。

だが——西園寺の装甲など全く気にもせず、ただ握り締めた右拳を素早く放ってみせた。

風の力で加速させ、直撃の寸前に張り巡らす膜によって己の拳を守り——そして放たれる一撃。  
結果は言うまでもなく、装甲が粉碎されるだけである。

「オマエらにオレの道を塞ぐ事はできねエ！ 大人しくママの膝元にでも帰りやがれエ！」

叫び、両腕でダブルリアットを仕掛けようした。

少女達はただ本能的に身を丸め、自分自身を守ろうとする。

さアて……死なねえように手加減しておかねえとなア——

「う、オ！？」

しかし、腕が当たる寸前にオレは動きを止めてしまった。

いや、正確には止められたというのが正しいだろう。

突然俺は——何者かに襟を掴まれてしまったのだ。

「待って悠！ 木下先輩を倒さないでっ！」

「ゆーちゃんダメなの！ これ以上暴れたらボク達異端者が公になっちゃう！」

なんだこのクソガキ共。消えたと思ったら突然俺らの間に割って入ってきた。

つーかりーネの野郎、ゆーちゃんってナメてんのかア？

「もきゅ!? え……み、ミネットさん!? どうしてここにいるのですか!?!」

「なに、この人達は知り合いなのかしら?」

「おい、オマエらどこで遊んでたんだ? オマエら探してたらコイツらに絡まれたんだけど?」

「リーネさんと2人で演劇見てたんだよ!」

「そうなの。ロミオとジュリエットだったかな……面白かったの!」

「チツ……あア!?!」

オレはクソガキ2人を睨みつける。

「まったく、散々探しといてオチがこれとは……ふざけんじゃねえぞ。まあいい。これでクソガキが見つかったんだからな。」

「ミネットさん。あの、早川悠とどういう関係なのですか……?」

「木下先輩! 悠はもう学園と関係がありません。汚れ仕事なんかもやってません。例え仇だとしても悠はもうカタギなんです。だからこれ以上の破壊を防ぐためにも——悠に喧嘩を売らないでください!」

「もきゅ? が、学園とは関係がない?」

「早川悠。一体どういことなのかしら?」

西園寺が腕を組み、露骨に不機嫌そうな表情を見せながら訊いてき

た。

ったく。人に物を訪ねる時の態度知らねエのかコイツは。

「オマエ見たいに学園を辞めたに決まってるだろオが」

「そ、それじゃあどうして……貴方はどうしてその事を最初に言わなかったのかしら？」

「あ——？ 聞く耳持たなかったのはどっちだ？ 大体喧嘩を売ったのはオマエらだろオが」

「……面倒くせエ。説明する気も失せるぜこの三下が。」

「とにかく木下先輩もそこのお姉さんも、今は悠になにもしないで欲しいです」

「もきゅ、で……ですけどっ」

「そうよ。だってその人は……」

「……チツ、行くぞ」

ピンクのチビと西園寺の言葉の後、オレは2人にそう言い放つ。

そしてオレは後ろを向き、杖についてゆっくりと歩き出した。

もうリハビリは十分だろう。第一ダルい、さっさと帰ってゴロゴロでもしたいモンだ。

それに——西園寺アイツらとピンクはオレの顔を見ねエほうが、ずっと幸せだろう。

「ちょっと待ちなさい！ 早川悠、貴方の目的は……？」

オレは西園寺のその問いに、

「ハッ、目的はもう果たした……これ以上用はねエ」

それだけを言い放ち、再び足を動かし前へと歩き始める。

オレの背後には「待ってよ悠！」などと、ミネットやリーネが騒がしく追い掛けてきやがる。

うるせエなア……誰を探していたせいでコイツらと遭遇し、こんな戦闘になったと思ってんだ？

まァいいやどうでも。能力使用モードは11分と半分くらいしか持たない。

こんな状況で無駄に超能力は使いたくねえな……クソツタレ。

「もきゅ……ど、こういうことなのでしょうか？」

「わからないわね……早川悠が学園を辞めたって……っ」

背後から、ピンクのチビと西園寺、

「さ、サッパリ状況がわからない……なんなのこれ？」

そして国宗の声が聞こえた——ような気がした。

## 第114話、最強の超能力者（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

あかり「なんかカオスなことになってる！？」

千早「ほんとだね……その、校舎壊れちゃってるね」

あかり「こ、これで文化祭が中止になったらあたい達の出番は！？」

千早「わ、わからないよそんなの……っ！」

あかり「このままだとあたい達……文化祭編で出番がないんじゃない？」

浅間部長「まさにボクの妹、アツカリくん化だね！」

あかり「うるさい！ バカ兄貴くたばれよな！」

浅間部長「ぐ、はあ——！？」

## 第115話、仲直り

その後、俺は白藤と一緒に学校に戻ってきた。さてさて、今から文化祭を楽しむとしようか。

今日に限って暮葉を見かけねえし、伊吹とは相変わらず気まずくて話辛い。

野郎共は見つからんし、小坂は多分暮葉と一緒に文化祭を回ろうし、明智や生駒は今忙しいハズだ。

だったらいっそ、白藤と一緒に文化祭を回ろう。

なんたって白藤は友達だからな。友達として最初の遊びは文化祭を回る事だ――！

「……………」

「……………」

しかし、俺と白藤は学校に戻ってから……………うん、思わず絶句してしまったんだ。

確かに人は多いものの他校生徒が全くおらず、それどころか警察車両の車列が停車していた。

さらに、なんとなく校舎が壊れているような気もするぜ。

「……………な、なんすかコレ？」

「あっ！　　いたいた圭介だっ！」

「せ、先輩……………っ！」

いつも通りのあかりと、カメラを掲げた青山さんが俺の所に駆け付

けてきた。

2人とも何故か俺の顔を見るや、安堵の表情を見せてきたのだ。

「あかりに青山さん？」

「よかったあゝ！ 圭介が無事であたいは安心だぞっ！」

「先輩……その、生きていて本当によかったです……っ」

「あのさ2人とも。俺達がいないうちに何があったの？」

「じ、実はな——」

口下手な青山さんではなく、お喋り大好きで口先が立派なあかりが説明を始めた。

そこで俺と白藤は驚くべき事実を知ったのだ。

何やら激しい揺れを感じ、巨大な竜巻が初芝高校の奥のほうに発生し、もう文化祭の会場や校舎そのものが滅茶苦茶になってしまったらしいのだ。

幸い死者は出なかったものの、初芝の学生や一般人の負傷者は大勢いたらしいのだ。

そんな大事件が発生した結果——

「ぶ、文化祭が中止——ですと？」

「は、はい……その、先輩と回れなくて残念ですけど……っ」

「被害があまりに多すぎて文化祭所じゃないんだ。それくらいわかれよな！」



「う、ウソだ……俺、まだロクにエンジョイしてなかったのに……  
ああもう、なんたる不幸！」

写真部の活動だってまだしていないし、第一白藤と文化祭を回ると  
いう予定が……。

ていうか折角3日もかけて準備したのに——苦勞して設営した文化  
祭会場が！

もうなんなのコレ。女装させられるし、大いなる誤解から暮葉と伊  
吹に暴行されたし、白藤と戦う羽目になっちゃったし、そしてトド  
メに全ての苦勞が水の泡って……さ、最悪の文化祭じゃ！

「俺の苦勞返せバカヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオッ！」

「せ、先輩……し、しっかりしてください……っ！」

「落ち付けよな圭介っ！ 明日は臨時休校でその翌日から夏休みな  
んだぞ？ ほ、ほら。得したと思えば幸せに感じるだろっ！？」

【圭介、泣いちゃダメ】

「うああああああああ！ ちくしょう色々和不運すぎるぞクソッ  
タレエエエツ！」

全ての苦勞が水の泡となり、泣き叫んだ後の俺は——もう、放心状  
態であった。

その後、通常より一日早く一学期が終了。俺と暮葉と葵の三人で仲  
良く下校中であった。

俺が中心に立って右に暮葉、左に葵が並んで歩いている。

時々周囲の「リア充死ね」的な視線が痛い、残念ながら俺はリア充ではない。

右にいる暮葉は俺の友達であり、左にいる葵は単なる妹。

そう——俺には恋人という存在がないのである。

白藤に対する恋心も、あんな騒動のせいかいつの間にか消えているし……なんたる悲劇。

「はあ……」

「お兄ちゃん元気出そうよ。明日から夏休みなんだよ」

「そうですよっ。ほら、けーすけ様が大好きなお休みなのですよ！？」

「うっせ黙れ！ こちとら折角の努力が水の泡になって色々アレな状態なんです！ ああもう、女装とか誤解とか魔ほ……げふんげふん、どこぞのヤツに喧嘩売られたりとか！ なんなんですか今年の俺のトンデモ日常は！？」

「うわぁ、葵の知らない所でお兄ちゃんすごいき苦労してるね……っ」

「けーすけ様も色々大変なのですねっ」

うるせえ、そもそも誤解で俺をシバいたのはアンタじゃん。

そういえばサヴィエトの魔法使いとの戦い。暮葉に一応報告したほぅがいいのかな？

でもなあ、白藤は友達だし……もう害はないっばいから別にいいや。そんなことよりも、今の俺にはとっても気になる事があるんだ。

「ところで何で学校があんな事になったんだ？」

「それが原因不明なんだよ？」

「えっ？　　げ、原因不明？」

「うん。人災か天災かすらわからないらしいよ？」

なんだそのワケのわからん理由。

って、わからないからワケのわからん理由になってるんだ。

それにしても、どんな事になったらあんな事態に……。

まさか……暮葉が魔法使いか何かと戦ったとか……？

ハハッ、流石にそれはないか。

仮にそうだとしたら相手はどんなヤツだよ。

こんな滅茶苦茶な状況に出来るヤツだぜ、絶対普通じゃねえよ……。

「……………」

その時、三人の間について沈黙が走ってしまった。

まあロクに話をしない俺のせいだが、やっぱり3人もいて沈黙状態だと気まずいもんだ。

へこみたいことはへこみたいが、やっぱりいつまでもコレじゃダメっすよね。

仕方ない。そろそろ元気を出して話をしながら楽しく――

「う、あ——っ!？」

「え……お兄ちゃん？」

「けーすけ様っ!？」

その時、何故か俺は胸倉を掴まれ引っ張られ——気付けば暮葉達と離れていたのだ。

あまりにもいきなりすぎるこの事態。

俺はよくわからないまま、何者かによって胸倉を引っ張られ続ける。

「おっしやあ圭介ゲットだわ！　わはははーっ！」

「ちょ、てめ、苦しいッ！　ってお前は——！？」

俺を引っ張るソイツの正体がわかった時には——もう俺は近所の公園にご案内されていた。

そして——ボロ雑巾のようになった俺は、公園のベンチで首筋をいじっていた。

最初に引っ張られた時の影響か、ちょっと首筋に違和感があるんだが……。

ああ、ちつくしょう。いきなり引っ張るくらいなら一言説明しろよ。

「い、つつ……っ」

首筋を押さえ、ゴキゴキと首を動かし続けていると、

「あ、圭介っ。よかったわ…元気そうでっ」

「あのなあ……引っ張ってきたのはどこのどいつだよっ！」

俺はいきなり俺を引っ張り、公園に案内しやがった犯人——伊吹に向かってそう言い放つ。

「……やっぱり、思い切って行動するものね。これくらい大胆になるとむしろ話せるわね……っ」

「あ？ な、何言ってるんだ？」

伊吹が何か呟いているが、あまりにも小声すぎるせいで全く聞きとれない。

言っておくが俺は耳だけはいいいほうだ。小学生の頃はそりゃ地獄耳とまで言われた事がある。

伊吹のさっきの呟きは、そんな俺でさえ聞きとれない——とんでもなく小さな声であった。

「ふえ……っ！？ な、なにも言ってるんかないわよっ！」

「どうしたんだ？ 顔赤いぞ？」

「だ、だからその……なんでもない！ なんでもないから心配する必要ないわよ！」

ホントに大丈夫なんだろうか。伊吹の顔は耳まで真っ赤に染まっていた。

コイツ……もしかして熱でもあるんじゃないだろうか？

いやいやそれは考えにくい。だってあれだけ元気に走っていたじゃねえか。

熱があつたらあんなに走れないだろ。じゃあ、なんで伊吹の顔が赤いんだよ？

「はぁ……それで何の用なんだ？」

「え、えっと……それはその……つつっ」

「……あ？」

何故そこで俯いて黙っちゃうんだろうか。そんなに言いづらい事を  
言いに来たのか？

——と思った。

「ご、ごめんなさい……っ」

「え？」

刹那、俺の目の前には深々と頭を下げる伊吹の姿。

言われた「ごめんなさい」という一言……俺は謝られたのか？

え、でもなんで。伊吹って俺になにかやったっけか？

むしろ伊吹になんかやったのは俺。だから伊吹と今まで気まずい状  
態になっていて……え？

「と、とりあえず頭上げろよ。お前らしくねえぞ？」

「……圭介、あんた怒ってないの？」

「な、なんでだよ？」

「私、その……今まで圭介のこと無視してたのよ？ 圭介と視線す  
ら合わせなかったのよ？」

「……………」

ひよ、ひよっとして伊吹……そのことをずっと気にしていたっての

か？

それで伊吹から謝って——ああ、元はと言えばまた俺の軽率な言葉のせいだったのに。

ホント……俺ってば最低だよ。それでまた伊吹をここまで傷つけたんだ。

「お、怒るわけないだろ？　むしろその……俺のほうこそごめん！」

「っ！　な、なんであんたが謝んのよ……っ？」

「元々こうなったのは俺が軽率な事を言ったせいだ。ほんと、ごめん！」

「……はあ、あんたこそ顔上げなさいよ」

その言葉で俺はさっきの伊吹と同じく、顔を上げて伊吹の顔を見つめる。

「……ッ！　あ、あんまりジロジロ見んなばか圭介っ！」

「す、すまん」

伊吹は恥ずかしそうに腕を組み、右を向いて視線を逸らしてしまった。

えーっと……いきなりどうしたんだ。

視線が合うくらいいつもあった事なのに……。

「別に気にしてなんかいないわよ……わ、私が勝手にあんたの事を……その、あんたのことがっ」

「い、伊吹？」

彼女がその素直じゃない口から、何かを言いかけた、

「~~~~ッ！」

その時、伊吹の足が俺の横顔にめり込んできやがった。

右足による凄まじい廻し蹴り。華麗な一撃に俺は——吹っ飛ばされて地面に転がってしまった。

「ふお、ぐお……にやにすんれすか……っ」

「なんでもないわよっ！　とにかくその……もうあんたの事無視しないからっ！」

「え？」

「……ッ！」

そう言い残し、伊吹は逃げるように公園から出て行ってしまった。しかもちらっと見えた彼女の横顔。それはまるで、赤信号のように真っ赤に染まっていた。

ちくしようにすげえ一撃だ。結構効いたぜ今の……普通の人なら気絶モンだ。

まあ伊吹も、俺は大丈夫だってわかっててやったんだろうが……それでもなんなんだよ一体。

でももう俺の事は無視しないみたいだし……いいかの、コレで？

……こうして、波乱の文化祭は終わり——ついに学生待望、夏休みが訪れた。



## 第115話、仲直り（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDe1g4h>

・後書きトークコーナー

作者「どうも、作者です！ またまた更新が遅れてもうしわけございません！」

圭介「全く何回目だよ！ 最近ほぼ毎日だろ！」

作者「すみません。いや、その〴〵最近疲労度が半端なくてですね、小説を書いていたら気付けば机の上で寝ていたりとか、全く記憶にないのにベットの上にいたりとか……とにかくボロボロなんです」

伊吹「ちょ、あんた寝なさいよ!?!」

作者「いや、でも一日2度更新は続けたいと思いますので！ 今後ともよろしくお願いします！」

圭介「そのうちコイツ、睡眠不足で死ぬんじゃないか？」

## 第116話, Let's Go Akihara

今日は日曜日。本来明日は一日だけ学校があり、文化祭などの後片付けを行う予定……だった。

しかし、その必要はなくなってしまったのだ。

理由は簡単。原因不明の謎の何かによって校舎が破壊され、早急に修理せねば夏休み明けに間に合わないのだという。その為、早速学校の修理工事が行われる事になったので、学生たちは普段よりも一日……いや、今日は日曜日だし二日くらい多い夏休みを過ごせる事になった。

まあ、素直に喜ぶべきことだよね……うん、一日学校が潰れて夏休みが二日増えたんだし。

しかし夏休みが増えたからと言っても、俺の日常に何か変化があるわけではない。

「フローワー増えねえ……」

大吾達とは夏コミ行ったり、そのうちカラオケやら何やらに行く予定があったりするんだが……。

こういうどうでもいい日に遊びたいとはお互い思わないし。

かと言ってねえ、女子を遊びに誘っても嫌な予感しかないしさ。

っと言う訳で現在俺がやれる事は——そう、ネットサーフィンくらいしかないのだ。

「くそっ、大吾の垢はフローワー7000超えてるってのに。重原だって5000だぞ？　なんで俺は450ちよっと超えた所で止まってるんだよっ！」

……って、もちろん自分のせいでしかないんだけどね。

はあ、もつと面白い事つぶやかんと、いつまで経ってもフォローワ  
増えねえぞ。

「……はあ」

どうしよう。ツイッターとかエロゲーくらいしかやる事がねえ……。  
前年もそうだったが、今年もつまらん夏休みになるのかな。

ああ、きつとそうなるに違いない。所詮人生なんて急に変わらない  
ものなんだからな。

「よし！ 天気もいいし、気晴らしに買い物にでも出かけようか  
な！」

それは思いつきであつた。買い物……そう、買い物だ。

これほど手っ取り早い暇潰しは無い。しかも買い物に行くつたつて  
ただの買い物じゃないぞ？

今から秋葉原に行くんだ。アキバのア○メイトで色々買ってやる。  
幸い俺にはお金がある。

ここ数ヶ月、魔法使いやら超能力者やら白陵の不良と戦ったり、仲  
のよかった幼馴染と気まずい関係になったり、その他部活やら突っ  
掛かってくる人達やらで……お金を使う機会がなかったんだ。

一ヶ月5000円のお小遣い。4月から溜まりに溜まって出費はた  
ったの3000円。

17000円の収入＋貯金の53000円。ふ……フフフ、8万円。  
バイトもしていないのに8万円も溜まってるぞ！

「こ、ここれで1万くらい使ったって問題ねえよな。うん、お金を  
使うことは社会にはいい事じゃねえかよ！」

よし、じゃあ早速秋葉原にレッツGOしようじゃねえか。

というわけで階段を降り、リビングを確認するとそこには親父とお袋、そして暮葉と葵がいる。

親父とお袋は今日まで休みで、明日から再び仕事で家を出るんだとか。

大変そうだなあ……暮葉と葵は俺と同じく暇人のようだ。

だが、アイツらを連れていったら絶対面倒事に発展しちまうだろう。

「もきゅ？　けーすけ様っ、どこかお出かけされるのですか!？」

げっ、バレてしまった……まあ仕方ない、テキトーに誤魔化しておこう。

「だ、大吾とかとイベント行くだよ！　田村ゆ〇りのな!」

「お兄ちゃん声優のイベントに興味あったっけ？」

「……と、とにかく行くの！　大吾がどうしても言うからな!」

「お兄ちゃん。田村ゆ〇りのイベント、今日から一ヶ月後の話だよ?」

「……………」

しまった、忘れてたよ。葵もどっちかと言うとオタクな趣味持つてるって事をな。

しかも葵は結構声優が好きだったりで、そういうイベントは男女問わずに把握しているらしい。

ちくしょうミスった。もっと別のもので誤魔化しとけばよかった。

俺の妹がこんなにオタクなわけがない……ううっ。

「けーすけ様、結局どちらに行かれるのですか？」

「デートだったら葵が絶対に許さないよ！」

「……ふ、フフフ……とにかく大吾達と遊びに行くのは事実だ。ではさらばあああああつ！」

逃げる。

そう、それがこの場における最善の選択であろう。

俺はダッシュで玄関に向かい、孫〇空もビビるような速度で靴を履き替え、ドアを突き破るような勢いで家の外へと飛び出した。

「もきゅ！？ け、けーすけ様っ！」

「お兄ちゃんが逃げたっ！」

「あらあら、圭介さん元気が有り余ってるわねえ」

「うむ、やっぱり若いって素晴らしいなあ」

案の定ヤツらは追ってこない。よかった、やっぱり逃げるという選択は正しかった。

フフフ……ハッハハハ！……家に帰るまでに言い訳考えねえとな。

それからしばらく、JR古宇坂から何十分だろうか。

蘇我駅から京葉線に乗り換え八丁堀まで行き、そこから日比谷線に乗り換え……。

ついに念願の秋葉原に到着したのであった。長かったぜ……普通列車の旅。

相変わらず秋葉原は賑わっているなあ。

電化製品を買いに来た老若男女関係ナシな人達、俺と同じ目的で来たアレな兄ちゃん達。

とにかく、秋葉原は色々大勢の人々で溢れていた。

「つか、こんな所で知り合いに遭遇したりしねえよな？」

秋葉原で知り合いと遭遇し恥をかくフラグなのは間違いないし。

だって、ねえ？秋葉原だよ秋葉原。

俺みたいなのがここに用があるし絶対二次元モノ目当てって思われるじゃないか。

まあ実際そうなんだけども……しかし、一人秋葉原ってのも寂しいモンだよなあ。

「なあちよつとそこに兄ちゃん？」

さてと、メイトはどこだったっけなあ。

まあメイトじゃなくてもいいけどね。

この辺は色々いっぱいあるし、エロゲーだって普段はこの辺で買ってるしな。

そっちのほうの店を見たって別に変わりはない。

「オメーだよオメー！　そこの一本寝癖のアホ毛野郎っ！」

「無視してんじゃねえよ！」

「……あん？」

うぜえ声が聞こえたので、振り返ると今風ヤンキーな2人組がニヤニヤと俺を見ている。

茶髪のロンゲに白いホストスーツの男と、もう一人はオールバックにサングラスに黒いヤンキージャージの男だ……はあ、なんでこんな連中が秋葉原に？

「ねえねえその兄ちゃんさ、俺らに金貸してくれねえ？」

「そーそーっ。ちっとパチンコで使いすぎちまってさあ、だから貸してくれよお」

「まっ、借りたらもう返さねえけどさ」

「ぎゃっははははは！ お前まじパネエな鬼すぎんだろ！ つーわけだからさ、兄ちゃん金貸してくれたらアブネーからさっさと帰りな？ ってか帰れ」

アホだ、相手にするのも面倒な程のアホが目の前にいる。

恰好は今風だがやる事は古風なモンだ。

やれやれ、今時こんな連中がいるんだなあ。

ってか警察さんは何やってんですか。

露骨にカツアゲされてるんだから、さっさと助けに来てくださいっての。

でもねえ、そんな都合よく警察さんが近くにいるとは思えないし。やれやれ、こりゃ仕方ないな。

「はあ……鬱陶しいなあ」

「あ？ 今なんか言ったか？」

「別に？ とりあえずその路地で話でもしないか？」

「はあ！？　なにこいつ、喧嘩売っちゃってるわけ？」

「うわあゝマジかよ。俺らに喧嘩売るとか100年早くね？」

「マジ早えよなあ！　お前もう死んだな、病院送りで済むといい方かもなあ」

ホントにうぜえ……やっぱ相手にすんのも嫌だなコイツら。  
でもなあ、こんなのにかかされるのも嫌だし……まっ、超法規的措置だな。

あんまり暮葉達に心配はかけたくないが、多分コイツらは危険の内には入らないだろう・

俺はため息をつきつつ、2人の背中を押して秋葉原の路地裏に入った。そして――

ガシ！ボカ！

……狭き路地裏での一戦。結果は――俺の圧勝であった。

「……弱っ……」

大通りに出て俺はそう呟いた。アイツらとの戦いの素直な感想である。

なんだかその……可哀想になるくらい弱かった。

永渕みたいな強いヤツは嫌だし、魔法使いや超能力者はもっと面倒だけど……。

でも、あんまり弱い連中と喧嘩をするのはもっと面倒くさい。

「とりあえず、気を取り直してメイトにでも行くかあ」



「けーすけ様っ！」

「は？」

「やっと追いつきました……けーすけ様っ、こんな所にいたのですねっ！」

「くくく、暮葉っ！？」

振り返ると、何故か葵のお下がりの私服を着た暮葉が仁王立ちをしていた。

「けーすけ様！ 大吾さん達と遊ぶというのは……やっぱり嘘だったのですね！」

何故か笑顔の暮葉。嘘つき相手に何故笑顔なのか、そこがわからない。

いや、そろどころか何もかも全てがわからん。

「待て、サッパリわからん。なんでお前がここにいる？」

「怪しいので追い掛けてきたのです！」

「ストーカーかよ！？」

「お・に・い・ちゃ・んっ！」

「ッ！？」

声が聞こえた瞬間、背筋が凍る。

どこからどう聞いても、お兄ちゃんLoveな小序の声。

小刻みに震えつつ恐る恐る振り返ると、背後で葵が恐ろしい笑みを浮かべていたのだ。

意味わからん。まさか葵も暮葉と一緒にストーカーしてきたのか？

「葵を置いていくなんてひどいよ！ お兄ちゃんだけお出かけなんてずるいよ！ 葵だってお兄ちゃんとラブデートしたかったのに！」

「あ、葵？ あのー、周りに注目されてるんですが……？」

「けーすけ様。お一人なんて寂しいでしょうし、拙者達もけーすけ様に同行するのです！」

お、俺の計画が……メイトに行った後、エロゲーを見に行くという俺の素晴らしい計画がっ！

ああもう——不良に絡まれるはストーカーされるわ！

夏休み初日。初っ端からもう、滅茶苦茶な事になる予感しかしなかった……。

だが——こんな事はさらなる騒動の序章に過ぎなかった。

## 第116話, Let's Go Akihabara (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「ああ、嫌な予感しかしねえ……」

重原「いいじゃないかい。木下さんと葵ちゃんの3Pも夢じゃないよ?」

圭介「そういう問題じゃねえよ! 暮葉はともかく、葵の存在がもう嫌な予感しかしないんだよ!」

大吾「フッフ、圭介。ヨスガっちゃったら僕の親戚がいる鳥取に逃げるがいいさ」

圭介「妹との駆け落ちエンドなんて嫌だぞ俺っ!」

重原「っと、というのがツンデレシスコン兄貴、藤島圭介の意見でした」

圭介「ツンデレじゃねえしシスコンでもねえよ!」

## 第117話, Akihabara date

夏休み初日、俺は一人秋葉原を満喫しようとしていた。

だが、そう思っていた矢先に可愛い乱入者が現れたのだ。

木下暮葉と藤島葵。前者は俺を守る為に異世界からやってきたという魔法少女。

後者はお兄ちゃんLoveな俺の実の妹だ。

暮葉は見た目が幼く子供っぽい性格だが、戦闘力は神〇ねーちゃんとも戦えそうなほどに高い。

葵はただの人間だが、もう俺に対する愛情が異常レベルで……正直、身の危険を感じます。

もちろん身の危険に晒されているのは葵ではなく、俺である。

しかも身の危険の意味とは生命の危機の事ではなく、貞操の危機という意味だ。

「えへへっ、お兄ちゃんの二の腕さいこおくだよっ」

「っ!?! あああ、葵さんっ! ベタベタしすぎなのです! けーすけ様から離れてくださいっ!」

「暮葉の言う通りだぞ。ちよっとは離れろよ……」

「やだ! クーにゃんはどうして葵がお兄ちゃんに近づくと機嫌が悪いの? もしかしてお兄ちゃんの事がだいだいだぁーい好きなの?」

「もきゅ!?! ち、違いますっ! けーすけ様はただの友達なのですっ!」

「へえー？　じゃあ葵がお兄ちゃんをいただきますしてもいいんだねっ！」

「そ、それは絶対にダメなのです！」

「へえー？　クーにゃん、ハッキリしないと葵は問答無用でお兄ちゃんをゲットしちゃうぞ！」

なんの会話をしていることやら……でも、これでわかったことだろう。

葵はリアルに俺を狙っているのだ。それはもう、発情期に突入した肉食獣のようにな。

実際、俺は葵に夜這いされた事がある。

未遂で済んだからよかったが、もし未遂じゃなかったら……間違いなく駆け落ちEND確定だ。

そんなヨスガ的な展開望んじやいねえぜ。

俺は妹は好きだが……そんな展開は二次元だけで十分だぜ！

「あ、けーすけ様！　そういえばそろそろお昼の時間ですよ？」

「そういえば飯食ってねえな……よし、んじゃあそこの店でも入るか！」

突然、暮葉が昼食を食べようという話を振ってきた。

確かにまだ飯は食ってねえし、そろそろ腹も減ってきた頃だ。

俺は暮葉の案に乗り、早速とあるビルの4階にある飲食店へ向かう事にした。

「ちっ、葵はお兄ちゃんとホテルに行きたいのに……っ」

背後から恐ろしい言葉が聞こえた気がしたが……まあ、気にしないほうが幸せだろう。

こうして俺たち3人は秋葉原にある、とある飲食店に入店したのだが――

その店はただの店ではなかった。普通の店にはないものが沢山あったんだ。

だって――知らずに入ったその店は――

「おかえりなさいませ、ご主人様っ☆」

「……………」

俺、暮葉、葵の三人は思わず絶句してしまった。

目の前に展開する数名のブリティッシュなメイドさん達。

店にいる人の殆どが、見た目だけでオタクと分かるような人達。

そう――俺たちは間違えてメイド喫茶に入ってしまったのだ。

別にメイド喫茶が嫌ってわけじゃない。むしろ俺、メイドさんとかは大好きである。

だがな……メイド喫茶ってそこのファミレスより高いんだよ！

なんですか、おにぎり2個で400円って……詐欺か何かですかっ！

「ご主人様、こちらへどうぞっ」

「……………」

俺たちはメイドさんに誘導され、店内でも割と端のほうの席に座らされた。

そして、メニューを見て再び絶望するのだった。

すげえ。やっぱメイド喫茶って値段高え……。

「はぁ……」

「けーけーすけ様っ。拙者達だってお金は持ってるのですよ？」

「そうそう！ 割り勘なんだからお兄ちゃんは安心していいんだよ！」

「……お前ら、ホントにいいヤツだな」

いい友達といい妹を持ったものだ、俺。

これでヤンデレの素質があったりブラコンだったりしなけりゃ、二人とも完璧なだけだな。

「ご主人様、呼び方のオーダーはありますか？」

その時、一人のメイドが笑顔を浮かべて俺の席までやってきた。  
呼び方のオーダーねえ……うーん。

こういうの、どっかで見たことある気がするんだが。まあ気にしないほうが幸せだろう。

「なんですかそれ？」

「私どもにどう呼ばれたいか、いろいろ選べるんですよ」

そっかあ。それじゃあお兄ちゃんとかなんとか様は却下だな。

暮葉や葵とキャラが被るし。

そうだなあ……お兄ちゃんもなんとか様もNGなら……。

「ホントになんでもいいんですね？」

「ええ、もちろんですよ」

「それじゃあ……俺の事を“にいに”と呼んでもらおうかあ？」

「えっ？」

「そして、君の一人称は今日から“みゃー”にしてもらおうか？」

「ええっ？」

「さらに——今日から君は笑う時！ 必ず“にしししし”と笑いなさい！」

それが俺の——理想の妹像だ！

このメイドさんは、ご主人様<sup>オレ</sup>の言う事をなんでも聞くと聞いた。だったら読んでもらおうじゃないか。にいになってなあ。

なりきって貰おうじゃないか。俺の嫁——美也になあっ！  
っと、己の欲望に素直になっていた、

「お兄ちゃんっ！」

「いい加減にするのですけーすけ様っ！」

刹那、2人の少女の握られた拳が俺の顔面を狙う。

突き刺さる拳。それと同時に感じる激しい痛み。

そのあまりの痛みと、いきなりすぎる攻撃に俺は思わず、

「ぎゃあああああっ！」



鬼もビビるような断末魔を上げてしまった。

「欲望丸出しなのですよけーすけ様っ！　メイドさんが困ってるじゃないですかっ！」

「葵はお兄ちゃんの妹なんだよ？　言ってくれば葵がそのキャラを演じるのにつ！」

「とにかく！　けーすけ様は一度深く反省するべきなのですっ！」

「す、しゅびみやしえんでひいたあ……………」

それにしても、葵の拳はともかく暮葉の拳が痛え。

暮葉のヤツ。思いつきりぶん殴りやがったな。

しかもアイツ、俺の身体が頑丈だって知ってやがるから…………はあ、とにかく不幸だ。

一方、メイドさんは俺たちを見守りつつ苦笑いを浮かべていた。

その後、メイド喫茶を出た俺たちは当初の予定通り、ア○メイトへ向かう事にした。

でも、当初の予定よりは物が買えないぞ。

なんたってメイド喫茶で使っちゃったからな。ちくしょう、やっぱメイド喫茶って高えよ。

「お兄ちゃん大丈夫？　大量出血した時の顔してるよ？」

「ああ…………ホントに血に近いものを大量に吐いたからな」

お金マネーと言う名の血を大量くにな……フッフ。

「すみませんけーすけ様。拙者が普通のお店を選んでいれば……」

「気にすんな。腹は膨れたんだからさ……」

「もきゅう。ホントにごめんなさいなのです……っ」

「だから落ち込むなって。それに飯は上手かったしメイドさんも見れたんだからいいだろ？」

あ、いけね。メイドさんを見て嬉しいのは多分俺だけだな。  
でも腹が膨れたのは事実だし、それにあのメイド喫茶の飯は意外と美味しかった。

サービスと飯の上手さを考えれば、あの高額も許せるかもしれない。

「お兄ちゃんは妹萌えでメイド萌えと……」

「こらそこっ！　いらん事メモってんじゃねえ！」

「ぶーっ、いいじゃん。お兄ちゃん攻略の為に必要な情報なんだよ？」

「女の子が攻略なんて、超エロゲチックな事言っ  
てんじゃありませんっ！」

まったく俺の妹は誰に似たんだか……完璧エロゲ脳であった。

つか葵のヤツ、まさかエロゲーやってんじゃねえだろうな？

実の妹がエロゲーをプレイ……兄貴としては泣ける話だぞ。

かくいう俺もエロゲーをプレイしていて、人の事なんて言える立場

じゃないんだけどね。

「けーすけ様と葵さん……やっぱり兄妹なのですねっ」

「……く、暮葉さん？ 一応聞くけど、兄妹ってどういう所が？」

「もきゅ？ 兄妹揃ってHENTAIな所なのです！」

「失礼な！？ 俺は変態じゃない。仮に変態だとしても変態と言う名の紳士だ！」

「葵は変態じゃないもん！ 健全な子だもん！」

「……やっぱり兄妹なのですね」

ハッ、しまった………ついいつものノリで叫んじまった………ッ！  
しかも葵とほぼ同時に似たような事をな。

ちくしょう、やっぱり俺と葵は兄妹なのかああああああつ！

「おおおおおおお！」

その時、突然前方の人ごみから歓声が起こった。

秋葉原じゃコスプレした人が集団で踊ったり、コスプレレディースが現れたりしている。

だけど今回は何かが違う。音楽も全く聞こえないし、バイクのコールも全く聞こえない。

ダンスでもなければレディースでもない。じゃあ、一体これは何の騒ぎなんだ？

「さっきの子すごくね？」

「うんうん、あの巨乳ポニテの子すごいよ！ あの白金の不良に勝つちまったんだもん！」

俺たちとすれ違った野郎2人が、そんなような会話を交わしていた。白金？ 一体どこの不良校だよ……っか。

「けーすけ様、今のってもしかして？」

「うん……」

巨乳でポニーテールで、その上ヤンキーなんて目じゃないくらい強くて……。

ま、まさか……嫌な予感しかないのは何故だろう？

とりあえず確認する必要があるな。

俺は人ごみの中に謝りつつ割って入り、人ごみの最前列に出てみる。暮葉と葵も俺の後を追ってきた。それを確認した上でもう一度前方を見てみる。

「いででで！ ちょ、ぎ、ギブギブうー！」

「や、山田あゝ生きろおゝ！」

「む、無理無理死ぬって！ てかもう降参ッス勘弁してくださいええ！」

……はあ、やっぱりかよ。

「こ、こんな街中で喧嘩してるよお兄ちゃん？」

「もきゅ？ しかもあのお方は——」

黒髪ポニーテールでその上巨乳の女の子が、学ランのヤンキー2人組と喧嘩をしていた。

山田というモヒカンのヤンキーに、キャメルクラッチを仕掛ける少女。

既にヤンキー2人は顔面蒼白であった。

見ていてヤンキーが可哀想になってきた。

仕方ねえ……あのヤンキー2人を助ける為に喧嘩を止めるとするか。

## 第117話, Akihabara date (後書き)

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中!

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

葵「やった! 今回は葵の出番が多いよっ!」

暮葉「久々に拙者の出番も多かったような気がするのですっ!」

圭介「俺は相変わらず不憫な扱いを受けてる気が……」

伊吹「……」

大吾「……」

重原「……」

小坂「……」

あかり「……」

千早「……」

凧紗「……」

純奈「……」

→今回名前すら出なかった人達。

小坂「圭くんはまだ恵まれてるほうだよね?」

## 第118話、なにやってんの？

「明智……もうその辺で勘弁してやれよ」

「え？ ふ、藤島……あれ、木下に藤島の妹まで？ な、なんでここに？」

黒髪ポニーテールでその上巨乳の女の子——その正体はやっぱり明智風紗であった。

どこぞのヤンキーをフルボッコにしていたのは、彼女なのであった。しかしどういう事だ。なんで明智が秋葉原で不良とストリートファイトしてんだ？

どう考えても明智……秋葉原とは無縁な感じなのに。生駒ならわかるが、明智が秋葉原って色々な意味でありえねえだろ……。

「夏休みだから遊びに来たんだよ」

「そ、そうか。そういえばもう夏休みだったな」

「学校が壊れたせいだな。んで、お前はなんで不良と戦ってるんだよ？」

「話せば長くなるが……」

「葵は長い話は嫌いだよ！」

「お前に言ってねえよ！」

突然突っ込んできた葵に、俺はツツコミを返してみせた。  
全く……一応わりと真剣な場面っぽいし、葵も空気を読んで少しは黙ろうぜ。

そのうちKYなんて言われても知らねえぞ？

「でも、明智殿はどうしてこんな所で不良達と戦っていたのですか？」

「うう、だから色々と深い理由が――」

明智は微妙に俺らから視線を逸らし、冷や汗をかきながらそう呟く。  
そんなある時。ふと振り返ると、学ランの怖そうな集団が近づいてくるのが見えた。

紺色の学ランはどう見ても標準型ではなく、いわゆる変形学生服。  
短ランだのボンタンだの。一昔前の不良が好んで着用していたタイプの学ランだ。

そんなのを着用した不良達がゾロゾロと、俺たちに近付いてきた。

「狩野さん、菅原さん、宇部さんアイツっすよ！ 山田やったの！」

一人はゴリラのようにゴツく、イカつい顔をした長ランの男。

すげえ……あんな番長みたいなヤツ未だにいるんだ。

もう一人は坊主頭のドカン野郎。さらにもう一人はリーゼントの短ラン野郎。

その他大勢の古風なツツパリ達。

なんなんだコイツら……映画の撮影ってわけじゃなさそうだが、どこの田舎ヤンキーだよ。

「お前か。うちのモンをやってくれたのは？」



「ん？ やっぱりおかしいぞ……こいつらAMAじゃないのか？」

アキバ・ミッドナイト・アーミー

もしもし。明智さん、何を仰っているのでしょうか？

そもそも貴方、なんでこんなヤンキー共と戦ってるんでしょうか？

「なんだそれ？ 俺たちは白金高校だ。チームなんてもんはやってねえ」

「……しまった、誤解でやってしまったぞ」

話がサッパリわからんが、一つだけ分かった事がある。

明智のヤツ……どうやら誤解で白金の不良をやっつけたらしい。そもそも白金ってどこの学校だよ。まあどうでもいい話だが。

「ふざけんじゃねえぞテメェ！」

「もう許さねえ。フルボッコ確定だコラァ！」

「誤解でも俺たち白金に喧嘩を売った事には変わりねえ……全力で相手させてもらうぞ？」

なんか、すっげえ面倒な事になっちまってる気がするけど……どうすりゃいいの？

残念ながら俺の力ではどうにもできない。

相手が一人ならねじ伏せられるかもしれないが、いくらなんでもこの人数は無理である。

だとすると、ここは逃げるのが最善であろう。

しかし明智に逃げる気はナシ。相手も絶対に明智を逃す気はないだろう。

ああもう！なんで夏休み初日から面倒事に巻き込まれるんだよ！  
ちくしょう……こういう時に頼りになるのは一人だけだぜ。

「なあ暮葉。なんとかならないのか、これ？」

「拙者の風の魔法を使えばその……逃げられない事はないですよ？」

「待て。それによってどれくらいの被害が――」

「もきゅ！？　けーすけ様、全っ然信用してないのですね！？」

「いやだって！　お前の魔法が高度1万までぶっ飛ばされた事があるし！？」

「あ、あれはたまたまなのです！　ちょっとして失敗なのです！」

「まあそんな失敗はともかく、お前……こんな大勢いる中で魔法使うのか？　しかも葵だっているんだぞ？　葵は確かに家族だけどさ、俺たちの事情なんて一切知らないんだぞ？」

その葵に今の話がバレてないか、ちょっと気になったが心配する必要はなかった。

葵は少し離れた所でぽかんとしている。つまり、俺たちの話を理解出来ていないと言う事だ。

よかったあ。葵は頭はいいが、時々アホの子だからな。  
そのおかげで助かったような気がするぜ……。

「もきゅう……ですけどっ」

「はあ……仕方ねえ。明智を連れてダッシュで逃げるか」

「あ、け……けーすけ様っ!？」

そうと決めた俺はさっそく明智に近寄り、不意に彼女の左手を握る。明智は「えっ?」と一瞬驚くが、その驚いた瞬間——俺は彼女の手を引き全力疾走を始める。

「ふぁ!？　ちょ、ふ……藤島……っ!？」

「暮葉!　葵!　走れ!　一旦ここから逃げるぞ!」

「りよ、了解なのです!」

「ああ待つてよお兄ちゃんっ!」

少しだけ振り返り、暮葉と葵がちゃんとして来ている事を確認する。

よかった。2人は俺の全力疾走にちゃんとして来ている。

まあ当然と言えば当然だが……暮葉も葵も身体能力は高いし、特に暮葉はチートレベルだ。

俺が手を引いているこの明智だって、黒木を一撃で倒すほどの達人である。

とにかく——三人ともしっかりついて来ている。

「待てコラァ!」

「逃がさねえぞクソ野郎ォ!」

まあ……いらない連中まで俺の後を追っているが……。とにかくよかったぜ、このまま逃げれば俺たちの勝ちだな。

このまま——誰も殴らずに全てを解決できればいいな。

……こうして楽しい夏休み一日目は、早くも波乱の一日となってしまった。

そして俺はヤンキー共から逃げながら、ずっとある事を考えていた。

結局、明智は何の為にヤンキーと戦っていたのだろうか。

そして、アキバ・ミッドナイト・アーミーAM A って一体何なんだろう？

俺の中でその疑問は次第に深まっていった——

## 第118話、なにやってんの？（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「今回短くね？」

伊吹「確かに短いわね……」

暮葉「不良から逃げて終わりだったですね」

千早「その、なんで今回……こんなに短いんでしょうか……？」

大吾「ヒント…作者がこれを執筆していた時間は午前4時15分ごろ。学校に行く為に家から出る時間は7時30分。流石に仮眠くらいはとりたかったらしいぜ？」

あかり「……寝ろよなっ」

## 第119話、卑怯な男

散々不良から逃げ回る事20分。

俺たちは今、秋葉原のとある路地裏に入っていた。

流石にあの白金だったかな。そんな名前の学校の不良達はもう追ってこない。

ふう……なんとか振り切る事に成功したぜ。

全く我ながら素晴らしいと思うよ。誰も殴らずに騒動を解決したんだからな。

「もきゅう、もう皆さん追ってこないみたいなのですっ」

「はあ、はあ……ああ疲れたあ」

「疲れたよお兄ちゃん！」

「藤島、逃げる必要なんてなかったんじゃないか？」

「うっせ黙れ！ 明智、風紀委員が喧嘩なんて問題起こしてどうするんだよっ！」

全く止めに入っただけでもありがたく思え。

もしこのままアレが続いていたら、多分明智は警察沙汰になっていただろう。

ところが、今の俺のツツコミに対する明智の回答は——予想の遥か斜め上を行っていた。

「だから私……その風紀委員の仕事をしていたんだぞ？」

「は？」

ふ、風紀委員の仕事が不良との喧嘩って……なんですかその某学園都市ラノベみたいなの！？

風紀委員じゃなくて風紀委員じゃねえか！  
ふつぎいん ジャッジメント

「明智殿っ。風紀委員って一体どんな仕事なのですか？」

「そーですよ！ 風紀委員なのに校外活動じゃないですか！」

暮葉と葵も同じ疑問を抱いていたのか、俺が思っていた事を明智に向かって言い放つ。

ところが不思議な事に明智。全くギャグですなんていう顔をしないのだ。

最初は風紀委員の仕事⇨不良との喧嘩なんて、ギャグだろうと思ったのに……どうも違うらしい。

やがて明智はスウーっと、静かに息を吐き――

「わかった。みんなにわかりやすいように説明するぞっ」

……こうして、明智がこんな所で戦っている理由を聞いた。

アキバ・ミッドナイト・アーミー  
A M A。

それは秋葉原一帯を根城にするカラーギャングのチームである。

かつてはカラーギャングの中でも、まだそれなりの節度や誇りを持ったチームだったらしいが、最近はそのらのギャングと変わらん状態らしい。

武装は当たり前。大人数で一人の弱者を取り囲み、ボコボコにするのも当たり前。

最近じゃあ観光客がボコボコにされ、メイドさんが時々レイプされているんだとか。

ひょっとして……今日俺に絡んできたあのバカ2人組。アイツらもアキバ・ミッドナイト・アーミーのA M Aなのかな？

んで、警察がいきなり大事を起こすなんてありえない事だ。

そこで――各校の腕自慢委員が集まり【連合】を結成。

アキバ・ミッドナイト・アーミー

頼りない大人達に代わり、現在特に危険なA M Aを解体し、秋葉原に平和を取り戻そうとしているんだとか。

「つて、各校の腕自慢ってところは……他校の生徒もいんのかよ!？」

「流石に私一人じゃ相手にできないからな」

「で、でも明智先輩っ！ それってやっぱり犯罪じゃ……?」

「大丈夫だ。ちゃんと許可を取って行動しているぞ?」

「許可って……一体誰の許可で動いてんだよ?」

その時、明智の目が不気味に輝き、

「知りたいか?」

ひいひいひいひいっ！こ、怖えええええっ！

その不気味な笑顔が超怖い。

俺たち三人は明智の笑みを見て、思わず後ろへ3歩ほど後退りをしてしまった。

「……いえ、結構なのですっ」



そして暮葉が明智の問いに対し、ごく当たり前の返事を返したのだ。当然だ……なんかその。知っちゃいけない事のような気がするぞ。とにかく、ここは何も聞かずに黙っておいた方が得策だろう。

「んで、さっきの白金だっけ？ アイツらは関係ないのか？」

「うん、あれは私のミスだぞ。 アキバ・ミッドナイト・アーミー A M A にあんな露骨なツツパリはいなかったハズだ」

「そ、そうっすか……」

明智さん……随分とまあ詳しいんですね。  
きつと長い事この仕事をやってたんでしょね。

「それでは明智殿。この人達は関係者……なのですか？」

「あ？」

暮葉が刀を取る為か、密かに背中に手を持っていく。

葵も少し怯えた様子だ。やがて明智の表情も真剣なものに変わり……俺もようやく気がついた。

どうらや俺たちは——いつのまに大勢の不良に取り囲まれていたのだ。

しかもそのうち2人はどこかで見たことが……。

ああ思い出した。今朝俺がぶっ飛ばしたアホ2人組やん。

あの茶髪ロングとオールバックは間違いないな。

「よおそのくせ毛野郎！ さっきはよくもやってくれたじゃねえかよ？」

「もきゅ？　けーすけ様、このお方たちと知り合いなのですか？」

「ええ？　誰だったっけコイツら？」

「本当なのか藤島？」

「いや、マジで知らねえぞ？」

「お兄ちゃんは東京に知り合いなんていないよね？」

本当は知っているが、ここで知っているだなんて答えてみる？

俺まで不良扱いされる可能性がある。ここはひとつ……知らんぷりという必殺技を！

あと葵。残念ながら東京に知り合いはいるぞ。

そういえば、東の丘学園の連中は元気にしてるかなあ？

まあ大丈夫だろう。どーせ兎は今頃ハーレム構築しているに違いない。

ちくしょうハーレム羨ましい……だが、今はそれどころじゃねえよな。

「ふっざけんじゃねえよテメェ！　今朝会ったばっかだろオ！？」

「散々ボッコボコにしましてその態度かよ？　もう許さねえ。お前殺して女はレイプするわ！」

すると俺が今朝ぶっ飛ばした2人を含む、10人の男達は服の中から何かを取りだす。

それはナイフだのスタンガンだの特殊警棒だの……様々な武器であった。

それだけではない。木刀や金属バット、鉄パイプを持っている連中

までいやがる。

ちくしょう……10人全員が武装してやがるな。

「みんな下がっていてくれ。ここは私に任せ——」

「明智一人に任せられるかよ。火種撒いたのは俺だし、俺も責任取って手伝うよ」

「拙者も戦闘なら得意なのです……っ！」

「あ、葵は下がって観戦してようかな……？」

そうだな。葵はブラコンである事を除けば、どこをどう見ても普通の女の子だ。

戦闘は普通じゃない俺たち三人でやればいい。

ったく、夏休み初日からホント面倒な事に巻き込まれたよ……。

あゝあ、秋葉原なんか来るんじゃないかった……ちくしょう。

「よしテメェら行くぞ！ コイツらをブツ殺——ぶ、はあっ!？」

……え、なに？

突然、茶髪ロングのホスト風野郎が倒れてしまった。

それも自ら倒れたわけではなく、何者かによって無理やり倒されたという感じだ。

ふと見てみると、ホスト風の男の上には一人の男が乗っかっていた。男は学ランを着ていた。しかし学ランの色は黒なので、白金の生徒ではないようである。

若干着崩された学ランに、ツンツンとした黒髪……えーっと、上○さん？

……ではなさそうだけど。いきなり現れたコイツ……何者？

「ぐっふふふ……おまたせ」

「うあ!？ て、テメエ何者だ!？」

「みんなのヒーローひだかきようすけ日高恭介様だっ」

日高さん、その自己紹介はウケ狙いつすか？

なんというか……いつまで茶髪ロングの上に乗っかっているんだろうか？

人の上に乗りながら、ズルそうな笑みを浮かべて残り9人を見回している。

コイツ、ある意味すごいかもしれねえ……っ。

「日高？ 聞いたことあるぞ……？」

「アイツが財閥に喧嘩売ったって噂の……」

「下藤野の若虎……!？」

「テメエ……いつまでもソイツに乗っかってんじゃねえ!」

「おーっ！ 悪イ悪イ!」

全然反省してない気がするが、まあ相手はアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAだし、どうでもいいか。

それにあの日高って人。まあ変な人だけど……そこまで悪人じゃない気がする。

うん、アレは一言で言う——ただの馬鹿だな。

「な、ナメられてね俺ら？」

「おいテメエ！俺らがアキバ・ミッドナイト・アーミーAMMAだってわかって喧嘩売ってんのか！？」

「別に喧嘩は売ってねえけどさあ？女の子が絡まれてんだぜ？だくからついつい衝動的に飛び出しちゃったのよ。ほら、よくある事じゃねえか？」

つまり、俺単独だったら日高さんは助けなかったって事ね……はあ。コイツもアレですか。黒木並に女の子が好きなタイプですか。まあ確かに明智はスタイル抜群だし、暮葉はロリ可愛いし、葵は美乳の持ち主。

そして何より三人とも——かなり可愛い顔の持ち主だからな。思わず助けてなくなってしまいう気持ちはわからないでもないぜ。というか、男なら困っている人を助けるのは当然だろう。

「な、なんてふざけた野郎だ……っ」

「テメエ！」

その時、アキバ・ミッドナイト・アーミーAMMAの一人。

ゴリラのような男が前に跳躍し、日高恭介という男を狙って大振りの拳を放ちやがった。

危ない！と思った俺と暮葉は、衝動的にその場へ飛び出しそうになった。

しかし、何故か明智が腕を伸ばし、俺らが飛びだそうとするのを阻止してきたのだ。

「あ、明智！？」

「もきゅ!? な、なんでなのですか!？」

「大丈夫だ。彼、【連合】の一員だから」

「もきゅ?」

「ま、マジで?」

日高恭介……まさか、あの人が明智と同じ組織の人間だったのか? というかさ、アイツ明智の知り合いだったのかよ!

その日高恭介は現在、ゴリラの大振りパンチを次々と避けていた。それもあり余裕そうである。あ、アイツ……ふざけた人格の癖に結構な達人じゃないか?

だがその時。一瞬の油断からか、日高の腹部のゴリラの膝が突き刺さってしまった。

一瞬日高は怯む。しかし、たったの一撃でダウンするような——そんなヤワなヤツではなかった。

「痛えだろオが……ボケェ!」

刹那、日高が左手に持っていた鞆でゴリラを殴りつける。

今明らかにガコンという金属音が響いた。

も、もしかして日高……あの鞆に何か細工とかしてるのか?

鞆でアップーされたゴリラは背中から地面に落ち、そのままピクリとも動かない。

完璧に気絶していたのだ。やっぱりあの鞆オカシイ、鞆で普通気絶するかよっ!

「や、野郎オ——ぐ、ア!？」

今度はオールバックが殴りかかるが、またしても日高の鞆が炸裂した。

しかし今度は殴りつけるとか、そういう普通の攻撃ではなかった。なんと……日高の鞆からグローブのようなものが飛び出し、それは確実にオールバックの野郎の股間を捉えていた。股間を強打したオールバック野郎は涙目になり、遂に倒れてしまった。

「あの人……ひ、卑怯だけど強いよっ!？」

確かに葵の言う通りだ。日高恭介……卑怯だけどある意味強い……。

「テメエ……卑怯じゃねえか!」

「卑怯? グッフッフ……いい言葉を教えてやろうか?」

「アア?」

「卑怯はな……俺の専売特許なんだよゴルア——ッ!」

叫びながら日高は——一瞬。1秒もしないうちに不良の懷ら入り、顎に強烈な一撃を打ち込んだ。

向かってきた不良にも蹴りや右ストレートなど放ち、殆ど一撃で不良達を倒していく。

そして、最後に残ったアキバ・ミッドナイト・アーミーAMMAの構成員は——

「ひ、ひい……日高一派のトップってこのレベルかよ……ッ!？」

「いい事教えてやろうか? 俺のダチにはなあ……もっと強えヤツがいるんだからな?」

「て、テメエだけじゃ……ねえのかよッ!？」

「さて、と……お前は覚悟出来たのか？」

「ひ、いい……うああああああああっ!」

遂に最後の一人は日高恭介という一人の男にビビり、敵前逃亡をしてしまったのである。

「た、ただの人間にしては凄い腕前なのです……っ」

「あの馬鹿が負けるわけがないと思ったが……やっぱり圧勝したか」

「す、すごい……っ」

暮葉と葵は驚き、明智は当然の結果を見たような顔をしていた。

俺？俺はモチロン……あまりの凄さに絶句している。

とりあえず、一言だけ言える事があるぜ。

日高恭介……そんなに強いなら卑怯な真似する必要はないか？

……まっ、どうでもいいか。とりあえず誰も怪我をしなくてよかったよ。



## 第119話、卑怯な男（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「まうた他作品キャラご登場かよっ！」

重原「まあまあ。他作品と言っても他の作者様の小説のキャラじゃないんだから」

圭介「いや、そう言う問題じゃないっしょ！ ていうかこの秋葉原編は一体何がしたいんだ？ 大体A M A ってアレか、武装無能力者<sup>スキルア</sup>集団<sup>ウト</sup>かよっ！？」

黒木「そのうち、第三の主人公<sup>はまづら</sup>でも出るんじゃない？」

千早「とにかく、今回わたし達の出番……なさそうだね？」

あかり「うう、あたいだって活躍したいのに！」

伊吹「私、圭介の幼馴染なのに番が……っ」

## 第120話、妹がブラコンすぎる件

秋葉原・某所喫茶店。

ってか、さっき飯を食ったばっかなのにまた喫茶店か。

まあいいけどさ。今度はメイド喫茶じゃなくて普通の喫茶店だし、出費も少なくていいぜ。

俺たちは明智に案内され、ここまで来たのだが……えーっとなんだ？  
なんで日高さんまで一緒なんでせうか？

「んで、結局明智と日高さんはどういう関係なんだ？」

「だから【連合】の一員だって言ってるだろう？」

「もきゅ？　日高さんもどこかの学校の腕自慢という事なのですか？」

「腕自慢？　俺は世界一強いんだぜ？　だあーっはははは！」

「……………」

ダメだ俺、この人のノリにはついていけないかもしれない。  
そして俺は——初めて真性の馬鹿を見たような気がするよ。  
日高恭介。コイツは強いけどただの馬鹿だ。

「ま、まあこれでも日高は強い方だぞ？」

「まあ……先程の戦いを見ていればわかるのですっ」

「やべ！　今日帰ったら花〇ろ見る為に昼寝しねえと。でも深月や

深雪の相手もしなきゃいけねえし、つかルナの餌買って帰らねえと怒られるよな。畜生折角の日曜めっちゃ忙しいじゃねえかよ」

確かにお忙しそうでございます。ていうか日高さんアニメ見るんだ。花○ろは俺も見てるぜ。当然、伊藤○な恵の声を聞く為にな！

俺、実はあの声大好きなんだ。佐○さんとかエ○シイとかもう色々最高だろっ。

そういえば日高さんの髪型とかファッション。絶対某説教ウニ男意識してるよな……。

うん、シャツの色は違うが、学ランの着方や髪型がどことなく似ている気がするぜ。

もしかすると俺、日高さんとはうまい酒が飲めるかも——っていけね、俺未成年だった。

「お兄ちゃん、葵……全然目立ってないよ？」

「心配すんな。俺も今日は全然目立ってないから」

ちょっとメタな話をするが、俺……一応主人公だよね？

今回主人公らしい事を全くしてないんですが……。

なんか、おいしい所を全部日高さんに持っていかれた気がするんだ。

「ねえお兄ちゃん……」

「ん、どうしたんだ？」

そういえば葵のヤツ、今日は随分と大人しいもんだな。

いつもなら一番騒がしい存在なのに、今日に限ってはどこぞのお嬢様のように静かである。

いや……まるでおしっこを我慢する子供か？股の間に両手を挟め、

妙にモジモジしている。

葵のヤツ一体どうしちまったんだろう……ちよつと心配だぞ？

「お兄ちゃん……といれっ」

「って、ホントに我慢してたのかよ!？」

まさかの予想大当たり。葵……そこまでお子様だったとは……ッ！

「お兄ちゃん、トイレどこ？」

「そ、そこにあつたような気がするぞ？」

「うん、一緒に来て……っ」

「一人で行けよ!？」

「やだ、怖い……っ」

「お前、俺と一緒にトイレに行つて既成事実作りただけだろ!？」

「……………」

「なんでそこで黙るんだよっ！ やっぱそうですかいっ!？」

やっぱり葵は所詮葵であつた。テンションを低くして兄を心配させ、心配した兄を誘惑して一緒にトイレに行き、そこでヨスガつて既成事実を作っちゃおうとしていたのだ。

魂胆丸見えだぞちくしょう。俺がそんな手に引っ掛かると思ったのか？

長年葵からセクハラを受け続けてきたんだ。いい加減これくらい見抜けるようにはなったわい。

「くっつ、とにかく一緒に来るのっ！」

「ヘッ？ おおおおおわあああああっ！？」

「ん、藤島が叫んでるぞ？」

「けーすけ様！ どちらに行かれるのですか！？」

「助けて暮——」

「お兄ちゃんはお腹の調子が悪いから、今からトイレに行くんだよっ！」

葵のバカヤロオオオオオオオオオオオオオッ！

とうとう俺の変態妹が強硬手段に出やがった。

単純に考えて俺のほうが葵より力が強いし、抵抗しようと思えば簡単に出来るハズだ。

でも……抵抗できないんだよね。

こんな人目の多い所で女子と戦ってみろ。きっと俺が悪い方向で話が進むに違いない。

それが現代——女尊男卑の世の中の現実である。

そして、俺は無理やり妹に女子トイレに連れてこられてしまった。

「おい葵……なんでよりによって女子トイレなんだよ？」

「にししっ、お兄ちゃんが簡単に逃げられないように……ネッ？」

「ネッ？　じゃねえよ！　ホントに逃げられねえじゃねえか！」

逃げたら人生が終了するだろう。なんでって、おいおい聞かなくてもわかるだろ？

ここは女子トイレ。そして俺は紛れもなく♂である……ああ、死ぬ。こっから出たら社会的に死んじゃうぞ、俺エ……。

「葵ね、ずっとお兄ちゃんとうなるの……待ってたんだよ？」

「そうか。残念ながら俺は1秒たりともそうは思わなかったぞ」

「うそつき。葵と結婚するんだって言ってたよ？」

「それいつの話だよ……つかてめえ、なに人のズボンに手えかけてんですか？」

トイレのクソ狭い個室。この密室に俺と葵は2人きり。

葵は床にしゃがみ込み、上目遣いで俺の事をじっと見つめている。一方その華奢で柔らかそうな両手は俺のズボンのベルトを掴んでいた。

「お兄ちゃんがやってるゲーム。口取りシーンとか多かったよ？」

「てめえ、いらんことばっか研究してんじゃねえ！」

しかも口取りっておまつ、なんで古語なんでせうか！？

意味わかる人いんのかよ。いや、わかられても困るような気もするけどさ……。

一番の問題はだな……なんで葵がそんな隠語知ってんだよっ！

「お兄ちゃんの性癖だもん。妹が理解していて当然だよ？ 世の中の常識だよ？」

「それが常識なのはお前だけだろ」

「えへへーそうかも♪」

そう言いながら葵は俺のベルトに手をかけ、ゆっくりとそれを取っていく。

ベルトを取られたせいか、随分ズボンが緩くなったような気がした。そりゃそうだ。なんたってベルトが無くなっちゃったんだからな。今、ちよつとでも歩けば俺のズボンは脱げるであらう。

いや——歩かなくてもズボンは脱げる。それも自然ではなく人為的にな。

「おい葵……っ」

「なあ〜にお兄ちゃんっ？ 葵の手を握ってちゃ脱がせられないよ？」

「いやいやいやちよつと待て！ 脱がすって時点でおかしいだろ！」

「なんで？ 脱がなきゃお兄ちゃんの大好きな口取りできないよ？」

「アホかお前っ！ それ以前に俺らの関係考えやがれっ！」

「え？ お兄ちゃんはお兄ちゃんて葵のお嫁さんだよね？」

「……ダメだコイツ、早くなんとかしないと」

これがまあ義理の妹なら許すかもしれんが、なんたって葵は実の妹である。

許されるハズがない。いや、それ以前に俺にその気がない！

それなのに……なんでこれなんてエロゲ的なイベントが発生してんだよ。

ていうか俺の脳内BGM自重しろ。なんか、脳内でリ○バスのあのシーンのBGMが……。

ちなみにあのシーンが何かは、この状況から考えて言わなくてもわかるだろ？

——そして、とうとう俺はズボンを脱がされ、葵は俺のトランクスにまで手を伸ばしてきた。

「き、緊張するよ……お兄ちゃんの見ると久々だよっ」

「その前に見るな！　っーかこっから先は禁止だっ！」

あたりまえである。これ以上は流石にマズいだろ……。

ていうか葵のヤツガチなのか。ガチで本番突入するつもりなのか？

「そ、それじゃあ……行くねっ」

「行くなああああああああっ！」

俺は今、自分が出せる最大の力を出し、穿いているトランクスをがっちり握る。

絶対に脱がさせてたまるか……これ以上の関係になってたまるか！



「ち、力抜いてよっ！」

「抜いたら色々終わる気がするから嫌だっ！」

「だいじょーぶだよ！ い、痛いのは葵のほうだからっ！」

「そういう問題じゃねえよ！」

つーか地味に下ネタ言ってるじゃねえよ。

この変態め、やっぱり葵は俺以上の変態だ。

誰か助けてくれ……逃げたら逃げたでここは女子トイレだし、逃げなかったら葵に食われる。

前者も嫌だけど後者も嫌だ。ちくしょう、俺はどうすりゃいいんですか！

ていうかどうしようもない。だからお願いします誰か助けてくださいっ！

「——きゃああああっ！」

「オラァ大人しくしろっ！」

な、なんだ……外が妙に騒がしい。

まるで何者かが店に襲撃してきたみたい……ていうか、本当に襲撃されたんじゃないか？

「アキバ・ミッドナイト・アーミー  
デメエら……A M A か！？」

この声……間違いない、日高さんの声だ。

アキバ・ミッドナイト・アーミー  
日高さんは確かにA M Aと言っていた。

と、言う事はヤツら——俺らがいるこの喫茶店に！

クソツタレ、何が目的で来たんだよ……とにかく行くしかないな。  
俺は素早くズボンを穿く。もう犯罪者扱いされる覚悟はできた。  
とりあえずさっさと女子トイレから出よう——！

「お、お兄ちゃんっ!？」

「ごめん葵！　今それどころじゃねえんだ！」

「ちよ、あ……葵とお兄ちゃんの合体は!？」

うるせえ合体なんてナシだっ！

まったく、今日はなんだってこんなに騒動が起こりやがるんだ……。

でもまあ、アキバ・ミッドナイト・アーミーAMAのおかげで俺は助かった。

葵とアレな関係にならずに済んだ——助かった！

そんな事を考えながら葵を放置し、俺は飛びだすように女子トイレから脱出した。

## 第120話、妹がブラコンすぎる件（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「なんなんだよ今回。限りなくアウトに近いアウトだろ！」

小坂「いやあゝ限界に挑戦だよ。もちろん警告がきたら修正するに  
よ」

圭介「なんすかその一昔前のアニメにありがちな語尾!？」

小坂「気分気分♪ それにしても圭くんよく耐えられたね」

圭介「そりゃあ妹相手に興奮できるヤツとしたら、そいつは深夜アニメのみ過ぎか妹に変な幻想を抱いてるヤツだろ?」

小坂「へえゝ? じゃあ葵ちゃんが伊吹だったら圭くんどうなってたかな?」

伊吹「ちよっ!?! ああああ亜紀っ、なに言ってんのよっ!」

圭介「い、伊吹相手にそんなのねえよっ!」

小坂「ふうん、2人ともまんざらでもなさそう……まあどうでもいいや!」

## 第121話、妙に詳しい謎の男

「な、なんだこれ？」

俺と葵が女子トイレから出た時には、既に店内はどこぞの世紀末並に荒れ果てていた。

テーブルや椅子はひっくり返り、大勢の不良達が地面に寝そべっている。

不良達の怪我は二種類。殴られた跡か何かに吹き飛ばされて激突したような跡。

現場で立っているのは日高さんと暮葉のみ。

ああ、もうなんとなくだけど……犯人がわかったような気がします。

「あっ、けーすけ様に葵さん！」

「2人ともどこで何やってたんだ？」

「お兄ちゃんとエッ——つつっ！」

「いやあ、葵が男子トイレに入ってきてさ、もう色々と面倒なことが起きてたんだよ」

「男子トイレに入る妹って……それなんてエロゲ？」

「葵さんっ、男子トイレに入っちゃダメなのですよ？」

「ぶう……葵悪くないもん……っ」

ふう、これでトイレでのあの騒動は葵のせいになったモンだ。  
トイレであんなエロゲ的な事があったなんて、死んでも言えねえよ……。

暮葉からのお仕置きが怖いし、何より日高さんは絶対そういうネタがあるといじるタイプだ。

イジられるのはゴメンですぜ。俺はイジられるよりイジるほうが好きだからな。

やれやれ……葵が俺を女子トイレに連れ込まなけりゃあんな事には……。

っていうか今トイレの話をしている場合じゃないな。

俺たちがトイレで揉めている間、この店で一体何があったってんだよ。

なんでこんなに店内が荒れてるんだ。そして明智のヤツは一体どこに――？

「それにしても明智殿……全然帰ってきませんねっ」

「残りの連中片付けるのに手間取ってんだろ？ 結構な人数だったからなあ」

結構な人数がいやがったって……。

アキバ・ミッドナイト・アーミー  
やっぱアレか。A M Aが襲撃してきたのか？

……って、一人で悩むよりは話を聞いたほうが早いよな。

「なあ、さっきの騒ぎはなんだったんだ？」

アキバ・ミッドナイト・アーミー  
「A M Aの連中の仕業に決まってるだろ？」

「じゃ、じゃあ明智は今そいつらの残党と戦ってるって事か？」

「はい！ 明智殿はこれ以上被害を大きくしたいとのことで、この近くの路地裏まで行って残りの敵と戦うそうなのですっ！」

「そ、そうなのか……」

暮葉も日高さんも随分とまあ樂觀的だよなあ。

まあ確かに、あの明智がそこらの不良に負けるとは思えない。

黒木には毎日圧勝し、イザなれば超能力を使える彼女。

そんな彼女が、そこらの不良との喧嘩で負けるハズがないだろう。

だけどなあ……なんなんだろう、この妙な胸騒ぎは？

「……………」

みんながどうせ明智の勝利だと樂觀的になっている中、俺は一人荒れた玄関を見つめていた。

——同時刻、明智は路地裏で激戦を展開していた。

先程、喫茶店にアキバ・ミッドナイト・アーミーAM Aの連中が襲撃を掛けてきた。

なんでも私達【連合】の動きを、奴らはある程度把握しているようなんだ。

私らの行動がバレている。そこで、一気に私らを潰そうと総攻撃を仕掛けてきた。

大体今回の襲撃はそんな理由で行われたものだろう。

連中の襲撃によって店内は大混乱だ。既に店内は滅茶苦茶……しばらく営業できないだろう。

それでも私は——アレ以上の被害を店に受けてほしくなかったんだ。だから私はこんな路地裏まであえて逃げたんだ。あえて逃げてそこ

で連中を撃退する。

既に私の作戦は殆ど成功していた。連中の大半を仕留める事に成功したのだ。

「……全く、数ばかりで大したことがないぞ……………」

確かにアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAはすごい数だ。

だが、数が多いという理由で絶対的に強いとは限らない。

戦術も戦略も最悪だ。連中はやはりいいところ——路地裏の不良程度の実力でしかない。

「ようやく現れたな……貴様は明智風紗か」

不意に、私の耳に冷たく低い男の声が入りこんできた。

私は咄嗟に振り返る。するとそこには——ゴリラのような巨体な男が佇んでいた。

大柄だが肥満とは正反対の厳つい筋肉を持つ、眉毛は剃ったのか一本もない。

その上左目付近には深い傷跡があり、男が歴戦の兵士である事を物語っていた。

しかし……今までこんなヤツはいなかった。それに私の名前を知っている？

「お前は一体何者だ。アキバ・ミッドナイト・アーミーAMAなのか？」

「中々の名推理だった。俺はアキバ・ミッドナイト・アーミーAMAのアタマだ」

「ついでに名前を名乗ってもらえないか。私のことを知っているんだろう？　だとすれば知り合いかもしれないし、名前を聞けば思い出せるかもしれないぞ」

「……鷺尾<sup>わしおありすけ</sup>有資だ。先に言っておくが貴様とは初対面だ」

「だったら何故私の名前を知っている？ どのルートから私の情報を得たんだ？」

「生憎……俺もそれをよくは理解していない」

理解していないだと……どういことだ、鷺尾が指示をしているのではないのか？

しかし、鷺尾は何故か疑いようなない表情を浮かべていたのだ。

ということは……本人もよくわかっていない？

そんな事を疑問に思っていると、鷺尾は重く閉ざされたシャッターのような口を動かし、

「情報が的確に伝わっていたのは数日前までだ。ここ数日は全くの音信不通……奴らめ、俺らを利用してどうするつもりなんだ」

「利用？ お前……それはどういうことだ？」

「生憎とこつから先は機密事項だ。だが、貴様に教えられることならいくつがあるぞ」

「な、なんだ？」

「俺らの行動目的だ。秋葉原で暴れていたのも——全ては貴様らを誘き寄せる為だ」

誘き寄せる為に暴れていたとは、なるほど……私らは鷺尾の思惑に、まんまと乗ってしまったという



わけか。

「私らを誘き寄せてどうするつもりだった？」

「詳しい事は知らん。だが、藤島圭介（トシノノスケ）という何者かは知らんが……その者を如何なる手段を使ってでも拘束し、身柄を引き渡せという依頼だ。」

「依頼だと？」

「ああ、アキバ・ミッドナイト・アーミーAM Aへの依頼だ」

藤島圭介……多分言うまでもなくあの変態のことだろう。

ふ、藤島がどうして……どうして藤島の名が鷲尾の口から出てくるんだ？

「しかし面倒なことになった……まさか、この俺が貴様のような超能力者と戦わなければならないとは……」

「お、お前……私が超能力者だって何故……ッ!？」

「これも不明なルートからの情報だ……やれやれ、厄介な相手だな」

「……ふ、ふふ。その不明なルートというのが気になるな……いいだろう。無理やりでもお前にそのルートが何なのかを聞いてやろうか」

「やれるものならやるがいい、こちらだって何の対策も立てずに貴様らに喧嘩は売らん」

少し笑みを浮かべながら鷺尾がそう言い放つ。

瞬間——鷺尾が信じられない速度で移動し、気付けば私の目前にまで迫っていた。

私は驚愕のあまりに目を見開く。信じられない、ただの不良が出せる速度ではない。

轟！と、全てを破壊し尽くすような拳が風を切り、砲弾の如く飛来してくる。

私は反射的に身体を逸らし、鷺尾の一撃を間一髪が回避。

その後、鷺尾から距離を取るべく——後方へ2〜3歩ほど跳躍した。跳躍と言っても一步3m。今の跳躍で鷺尾から9m程の距離をとる事に成功したのだ。

「お前……本当にただの不良か？」

「魔術<sup>オカルト</sup>は一切信じていなかったが……なるほど、確かに効果はあるみたいだ」

足尾の奴、魔術<sup>オカルト</sup>が一体どうしたろうか。

それってアレだよな。木下が得意としているヤツのことだよな。こういう事だ……鷺尾はそっち方面の関係者ということなのか？

「何者だ……お前っ！」

「名乗ったハズだ。鷺尾有資、<sup>アキバ・ミッドナイト・アーミー</sup>AMAのアタマだ」

私が知りたいのはそんなことではない。

そんなことではないのに……この男、他には何も語ろうとしない。ますます怪しいぞ。こうなったら……力づくでも情報を聞きだしてやろう。

「ふっ、悪く思わないで欲しいぞ。今からお前を倒させてもらおう——！」

「やれるものならやるがいい。ただし……こちらだって貴様のようなバケモノが相手なら——それなりに本気を出させてもらおうとしようか」

それが、戦闘開始の合図であつた……。

謎の男である鷲尾有資、必ず倒してお前の秘密を暴いてやる。

それに——藤島の名が出ている以上負けるわけにはいかない。

あいつらが、どういう理由で藤島を狙っているかはわからない。

それでも……藤島を狙っているという事は事実らしいんだ。

だから私は——藤島を守る為にも負ける事はできない……ッ！

## 第121話、妙に詳しい謎の男（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

<http://enq-maker.com/bDelg4h>

・後書きトークコーナー

圭介「突然ですが疲労で死にそうです……」

伊吹「まったく、あんたはいつもそうよねっ」

圭介「ああもう……ダメだ。もうすぐテストなのにこの疲労はマズい……っ」

伊吹「……あれ？」

圭介「今にもぶっ倒れそうだ。どうしよう、でも小説は書かなきゃ——」

伊吹「それあんたの話じゃないでしょ！　これを書いている人の話でしょ！」

圭介「……次回、果たして鷺尾の正体は——！？」

## 第122話、不良集団

喫茶店を出た俺たちは暮葉の能力——魔力感知を頼りに明智を追いかけてみた。

辿りついた先は秋葉原のとある路地裏。

荒れたアスファルトに散乱したゴミの数々。壁には不良が描いたと思われるアートたち。

いかにもって雰囲気だな……ここがアキバ・ミッドナイト・アーミーAM Aの根城なのか？

「暮葉、ホントにここに明智がいるのか？」

「間違いないのです。明智殿の微弱な魔力と……その、変な魔力を感じるのです」

「変な魔力？」

「はい。人ではなくて物に籠められたような……」

魔力って物にまであのか……って、元々物に魔力があるわけないよな。

きつと魔法使いが後から魔力を付け足したのだろう。

しかし、それってどういう事なんだ。アキバ・ミッドナイト・アーミーAM Aってただの不良集団なんだろう？

魔力とは普通全然関係ないよな。にも拘わらず変な魔力を感じるって……。

「それってもしかして、サヴィエトの連中が絡んでいる可能性があるのか？」

「十分それも考えられるのです」

「マジでございますか……」

だとしたらまずいよな。サヴィエトの連中に俺のことがバレたら……。

まあその時はその時、とりあえず魔法使いを倒せばいいんだ。

問題はその後のことである。如何に日常的に襲ってくるであろう魔法使いから身を守るか……。

「なあ、気になるんだけどさっきからお前ら、一体何の話をしてるだよ？」

やばっ、そういえば日高さんは部外者だったな。

あんまりこの件に関わらせるわけには……いや、絶対に関わらせたくないぜ。

なんたって日高さんは一般人だ。魔法だなんて言われても信じる人じゃないだろう。

だったら……この件は絶対に言っちゃダメだ。

俺や暮葉が平穏な日常を過ごす為にも——絶対に！

「ああ、なんつーか……ゲームの話だよ！ なっ、暮葉？」

「もきゅ？ ……あ、は、はい！ ゲームの話なのですよ！」

「ゲーム！？ そ、それ神ゲーなのか！？」

「まあ難易度は高いけど、そこそこ面白いゲームかと……」

「マジか！ よし、この件が終わったら俺に教えてくれっ！」

「お、おう」

困ったな……まあいい、俺が持っているRPGをテキストに紹介しておこう。

日高さんは馬鹿である。多分それで納得してくれるハズだ。

それにしてもえらく静かだな。なんつか、まるで戦いが起こっている感じでは——っと思った、

「——ッ！」

その時であった。

頭上が激しい打撃音が聞こえ、それと同時に黒い影が上から落下してきたのだ。

影は華麗に着地して空を見上げる。その影の正体とは——

「あ、明智！」

俺がその影——明智風紗に声を掛けると彼女は振り返ってきた。

「んっ？ ふ、藤島？ 木下に日高まで？」

「けーすけ様が明智殿のこと御心配な様子で、それで拙者達は明智殿を追ってきたのです！」

「う、うるせえっ！」

「つか、まだ仕事終わってねえのか？」

「生憎、一筋縄ではいかない相手だからな」

明智が一筋縄ではいかないと言う相手……そのバケモノは一体何者だよ？

あの明智が手こずるんだ。おそろくただの人間じゃねえだろう。ちくしょう、やっぱりサヴィエト関係のヤツらか？

そう俺が推測していた時——もう一人の影が上から舞い降りる。

その影は明智とは違って大柄で、まるでゴリラのように巨大な男であつた。

ゴリラ野郎は黒髪短髪だが眉毛は全剃りで、なんとも言えぬ冷徹な雰囲気<sup>きふき</sup>が漂っていた。

「やはり手加減を知らぬヤツだな……明智<sup>ちようのうりよくしや</sup>風紗」

「ふん、お前こそ随分と常識離れした不良じゃないか……鷲尾<sup>はるかやろう</sup>有資」

どうやら、あのゴリラと明智は先程まで戦っていたらしい。

なるほど……あのゴリラは<sup>アキバ・ミッドナイト・アーミー</sup>AMMのボスカ幹部あたりか？

あれだけ強そうな見た目をしているんだ。

現に明智を追い詰めているし、相当の実力者なんだろう。

けど——明智と戦っているってことは、一応俺らの敵ってことにもなるんだよな。

「只ならぬ気配……なのですっ」

「……………ッ」

暮葉と日高さんも敵味方識別でゴリラを敵と見なし、ゴリラとの戦闘に備えて身構えた。

日高さんは右手をポケットに入れ、暮葉は背中から一期一振を取り出した。



おそらく暮葉は刀を鞘から抜かず、打撃用の武器として使うつもりなんだろう。

けど、日高さんはポケットに手を入れてどうするつもりなんだ？  
って、なんとなく予想できたぞ。多分卑怯な事でもするつもりなんだろう……卑怯者だしな。

「木下暮葉……藤高の日高、もう一人の貴様は何者だ？」

「あ？ 俺の名前は——」

「待てっ！ 名乗るな！」

「えっ？」

なんで明智は俺が名乗ろうとした瞬間——必死になってそれを止めやがったんだ？

別に名前くらい名乗ったって何の問題も——

「……そうか、明智がそこまで必死に止める存在……貴様が藤島圭介というヤツだな」

「——しまった……っ！」

いまいち状況が飲み込めないが、とりあえずなんであのゴリラは俺の名前を知ってんだ？

それに暮葉や日高さんの事まで……ホントにあのゴリラ何者なんだよ。

絶対普通じゃない。見た目もそうだが中身や行動もそうだな。見ていてわかったぜ。

「なあ明智。あの野郎はなんで俺のことを知ってんだよ？」

「詳しい事はわからない。でも、裏のルートで私達の事は知っているみたいだ」

「裏のルート？」

「うん。それでアイツの目的は——」

「藤島圭介。貴様の身柄を拘束させてもらう」

明智がゴリラの行動目的を説明しようとして——その時だ。

ゴリラが敵を確実に撃破するミサイルの如く、冷徹な鋭い表情で突撃を仕掛けてきた。

しかも信じられない事に——そのスピードは常人の域を遥かに超えていたのだ。

日高さんが「あぶねえ！」と、暮葉が「けーすけ様っ！」と、背後で砲声のように叫ぶ。

その叫び声が耳に入ったと同時に——俺はゴリラの攻撃を反射的に回避する。

左方向に走り幅跳びのように跳躍、アスファルトでぐるぐる身体を転がし立ち上がる。

「……オ——ッ！」

「うわっ!？」

体勢を立て直した時には既に、ゴリラ野郎は目前に迫っていたのだ。今度は左へ跳躍し、辛うじて今の一撃を避けてみせた。

今度は地面に転がる事なく、なんとか立ったままの姿勢を保てた。

跳躍した反動で後方に2、3歩ほど後退するが、体勢を立て直した俺は前へ突き進み、

「おっ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

いけるか？と思った俺は拳を握って、ゴリラ野郎の懐深くに勢いよく踏み込んでみる。

入った！かわせるタイミングじゃねえ——直撃を確信した俺は全力の一撃を放った。  
次の瞬間。

「……えっ？」

入った——ハズだった……けど俺の右拳には何の感触も感じない。空振り。

そう、空振りである。俺はこの拳をゴリラに打ち込む事が出来なかったのだ。

理由は単純だ。拳が触れる寸前にゴリラが何処かへ消えたのだ。

「なっ、野郎どこに——ッ!？」

「危ねえっ！」

日高さんの叫びが聞こえ、衝動的に後ろへ振り返った——刹那。ガコン！という物体を激しく殴りつけたような金属音。

「——ふん、妨害されてしまったか……」

「粉々ってオイ！ 鉄板入りの鞆だったのに!？」

鉄板入りの鞆とはまあなんと卑怯な。でも、その砕け散った鉄板入りの鞆は俺を救った。

日高さんは咄嗟に飛び込み、鞆を突き出しそれを俺を守る盾代わりに使用したのだ。

結果、鉄板入りの鞆は粉々に粉碎されたが、その代わり俺が殴られることはなかった。

「えいっ！」

暮葉の可愛らしい叫び声。しかしやっている事は非常に攻撃敵だ。

刀を鞘に入れたままの状態で振りまわす暮葉。

それでゴリラ野郎の首筋を狙うつもりだったらしい。

だが、ゴリラ野郎はガシッと刀を鷲掴みし、そこから暮葉との力比べが始まった。

「ん、きゅ——っ！ この力にその運動性能……貴方、魔法衣服マジッククローズを着ているんですね？」

「確か連中もその名を言っていたな。確かに……俺はオカルト用品を着ている。最初は半信半疑であったが……まあ、貴様らのようなバケモノと互角に戦えるあたり、中々いいブツだったようだな」

「貴方の言う連中は一体何者なのですか？」

「さあ。この俺も詳しくは知らない連中だ」

「では、貴方の目的は一体なんなのですか？」

「連中の依頼だ。秋葉原あきはらで暴れ貴様らを誘き寄せ——その藤島圭介の身柄を拘束する事だ」

「——ッ！」

拘束？

ちくしょう、あの野郎一体俺の身柄なんかを捉えて——って待てよ？俺を拘束するって依頼を出した、その連中ってまさか……。

いや、それを考えるのは後にしよう。とにかくアイツを止めねえと——！

ゴリラの右腕が一回り大きく膨らみ、刀を握る力と引っ張る力が数倍に膨れ上がったらしい。

暮葉も一期一振を軽々と振りまわし、一撃で相手を仕留めるなどかなりの腕力の持ち主だ。

だけど暮葉は小柄な女の子。そこに限界が存在しているのである。いくら暮葉が鍛えているとは言え、その細腕から出せる力には限度があるらしい。

対してゴリラ野郎はよくわからねえが、何らかの力で筋力を強化しているらしいのだ。

本来なら暮葉のほうが圧倒的に強いのだろう。

だが、強化されたゴリラ野郎は暮葉以上の腕力を誇っていた。

「木下——！　う、ああっ！」

その時、ピンチの暮葉を助けるように——明智が火の玉をゴリラの手首に向かって放った。

右手首を火傷する事、ここで右手を離して暮葉を逃す事。

当然のようにゴリラは後者を選び、右手を刀から瞬時に離して素早く左方へ跳躍した。

しかしゴリラは不運な男であった……跳躍したその先には日高さんが居た。

その事に気付いたゴリラは衝動的に振り返るが、

「な……っ!？」

「ふんッ!」

「ぐ、が——ッ!？」

瞬間、日高さんの右拳が勢い良くゴリラ野郎の顔面に突き刺さった。正にその一撃が反撃開始の合図。

大きく後ろへ仰け反ったゴリラは、己の脚力で体勢を立て直そうとする。

……けど、そんな事なんてさせるわけねえだろ!

「う、オオオオオオオオオオオッ!」

「——けーすけ様!」

全力疾走をする俺。途中から俺に並んで走り始めて暮葉。

俺達は体勢を完全には立て直していない、あのゴリラに思い切り体当たりを仕掛けた。

暮葉の体重は40kgもあるか微妙だ。

それでも俺の体重と加われば——多分100kg近くにはなるはずである。

弾丸のように体当たりでもすれば、激しい衝撃を与えるには十分だ。俺と暮葉の2人と走った勢いの重圧は、ゴリラ野郎を確かに後ろへ吹っ飛ばした。

凄まじい勢いで地面に叩きつけられたゴリラ野郎。それであの野郎の意識は途切れたようだ。

「ふう……やっちゃいましたね、けーすけ様っ!」

「ああ、ナイスな連携プレイだったな」

俺と暮葉はお互い見つめ合い、巨体に乗ったまま勝利の余韻に浸っていた。

それから数十分後。

秋葉原の大通には数両の警察車両が車列を組んでいた。

手錠を掛けられた不良達が続々と、警官達に連れられ護送車へと乗せられていく。

どうやらあの後、明智が通報したようである。

今回の一件でA M Aの構成員の大半が逮捕されたようだ。

不良達の列の中には当然——一際デカイあの男の姿もあった。

「あの、ちょっと聞きたい事があるのですが……よろしいでしょうか？」

「ん……勝てば官軍、負ければ賊軍。煮るなり焼くなり好きにすればいい」

暮葉が呼び止めた男は<sup>アキバ・ミッドナイト・アーミー</sup>A M Aのリーダー、鷲尾有資。

「つか鷲尾のヤツ潔いな……中々硬派なヤツじゃねえかよ。」

「その服はどんな人達から貰ったのですか？」

「正確には取引だ。藤島圭介を必ず捕える事と引き換えに、この特殊な衣服を俺は受け取ったのだ。それも名前も団体名の名乗らぬ連中からな……」

「もう一つ、なんでそんな取引に乗っちゃったのですか？」

「依頼は善行でも悪事でも必ず引き受け達成する。それが俺達アキバ・ミッドナイトAの信条だ」

「最後にもう一つ。貴方は魔法使いとかではないのですよね？」

「そのようなオカルトに興味はない。今回は特別だ……」

それだけ言い残し、鷺尾は警察に連行され護送車に乗せられた。その光景を見ている俺達。ふと気がつく俺の左右に明智と日高さんが佇んでいた。

「魔法とかオカルトとか一体なんなんだよ？」

「えっ？ ゲームの話じゃねえの？」

「ゲームかぁ。まあいいや、俺そろそろ帰ろうかな？ 深月と深雪も心配してるだろうし」

そんな事を呟きながら、日高さんは手を振りこの場から立ち去ってしまった。

結局……あの人何しに来たんだろうか。  
まあ鷺尾を倒すのには役立ったし、全く無意味な登場ではなかったよな。

「んで、明智はこれからどうするんだ？」

「私はこれから後始末をするぞ。一応仕事だからな……っ」



「そつかあ。お前も夏休みなのに大変だよなあ」

「うん、出来れば遊びたいのにな……っ」

明智はこの所全く遊べていない状況らしい。

勉強も忙しいのだろうし、こうした裏の仕事も忙しいんだろう。

けどなあ明智だって年頃の女の子だし、俺としても少し気を抜いて遊んで欲しいな。

「明智、夏休みのどっかで皆で遊ばないか？」

「……えっ？　けど、いいのか？」

「いいも何も俺ら友達だろ？　高2の夏だし遊べるうちに遊んどこうぜ」

「うん、ありがとな藤島っ。その、そろそろ仕事に行かないと……」

微かに見せた微笑み、やっぱり明智も笑うと可愛いぜ。

出来ればこのまま話をしていたい。でも、やるべき事が山積してるらしいしなあ。

仕方ないよな。それに遊ぶ機会ならいつでもあると思うし。

「わかった、またな明智」

「うん。藤島もいい夏休みを過ごすんだぞっ」

「おう」

こうして、明智も後始末の為に俺達の前から一旦立ち去った。

だが明智と入れ替わるように、今度は暮葉が歩み寄ってきた。

「けーすけ様、その……ちょっとお話があるのです」

「話ってアレか？ さっきの鷲尾の背後にいるヤツの事？」

「はいっ。あの、どうも今回の件はサヴィエトの関与が疑われるのですが……っ」

「それなら俺も薄々思ってたよ」

「その件に関してなのですが、どうも敵は拙者達の情報を裏ルートで得ているようなのです」

「裏ルート？」

そういえば鷲尾にしたって随分とまあ、俺らの事情に詳しくかったよな。

それがサヴィエトの連中に聞いた事だとすれば……。

もしかして、俺らの近くに――

「一応アルファ隊でも調べてみるのです！ なんだからその、けーすけ様の居場所も知られた可能性がありますし、その……拙者や明智殿の事まで知っているという事は――」

「やっぱり、俺らのすぐ近くに連中のスパイがいるって事か？」

「可能性は大きいのですっ」

スパイ。

敵対勢力の情報を得るため、合法違法を問わずに諜報活動をする連中の事である。

まさか……俺らのすぐ近くにサヴィエトのスパイが？

もしいるとしたら誰だよ。詳しい情報を得られるという事は相当近くにいますよ？

もしかすると——ソイツは俺らの友達になっているかも……ってなに考えてんだよ俺は。

だからってよ、友達を疑っていい理由にはならねえだろ。

「ちつくしよう、夏休み初日からコレですかっ！」

「で、でもけーすけ様は安心していてください！ スパイの特定などは全部アルファ隊こしらでやっておきますから！」

「た、頼っていいのか……？」

「けーすけ様？ 拙者はけーすけ様をお守りする為にここにいますよ？ だいじょーぶですっ！ 拙者はこれでもプロなのですよ？ もっと頼ったっていいんですからね！」

「——そうだな。今回は友達おまえを頼るよ」

「はい！ 任せて欲しいのですっ！」

そう言いながら、暮葉は満面の笑みを浮かべてくれた。

けど、やっぱりコイツに任せっきりにするのはよくないよな。

俺もコイツをサポートできるくらい——強い野郎にならなくちゃな。

どんな魔法使いが来ようとも負けねえような、そんな野郎に——  
それにしても、連中のスパイって一体誰なんだろうか？

……そういえば、スパイとかよりももっと重要な事を忘れているよ

うな――？

――その頃、忘れ去られた妹<sup>シスター</sup>さんは……。

「君かわういーねえっ！」

「ハアハア、やべエよ二次元並の可愛さだYO!？」

「ねえねえ写メ盗らせてくださいよっ！」

「お兄ちゃん達どこ!? キモイ男に絡まれてるよっ、助けてお兄  
ちゃああああああんっ！」

――藤島葵、御愁傷様である。

## 第122話、不良集団（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「どうも！ 作者のテストが終了したので今日から更新再開！」

伊吹「今までで一番長い休載だったわね」

圭介「まあ……それは仕方ねえとして、今日はいくつか報告があるんだ」

暮葉「もきゅ？ 報告ですか？」

圭介「まず第一に短編について。散々掲載するとか言いつつ結局一つも投稿していない短編ですが、今月中には5本全部投稿したいなと思います！」

明智「全く、一ヶ月遅れで掲載とは……計画性が全くないな」

圭介「……っ、次にちょっとした報告。なんと休載中にPVが10万を突破しました」

あかり「おお！ やったじゃないか！」

圭介「読者の皆様本当にありがとうございます！ っで、最後の報告……っというか次回予告でもあるのですが、次回は特別回【人気投票結果発表】を行いたいと思います！」

千早「その……31日まで募集していたアレですよ？」

雪乃「あら、いよいよ発表なのね」

圭介「その他諸連絡は活動報告にて追々する予定です！ 以上、報告終了！」

暮葉「えっと……こ、これからもよろしくお願いします！」

## 特別回…人気投票結果発表！（前書き）

どうも、作者です！

今回は人気投票の結果発表！

なお、今回の話は本編とは全く関係がありません！

あと、駄文かついつもより長くてすみません！

## 特別回…人気投票結果発表！

「んで、一体なんの集まりなんだよコレ？」

初芝高校体育館。

そこにテーブルとパイプ椅子が並べられ、何やらいつもの連中や敵対している連中まで勢揃い。

っていうか敵同士を一か所に集めるってどうなの？  
もう既にグラウンドで一戦あったんだよね……。

「折角の全員集合なのに、どうして貴方はいつつも喧嘩しちゃうの！？」

「——あん？ ムカつくクソ野郎がいるからに決まってるだろオが。なあ格下ア？」

「テメエこの久我劉生ナメてんじゃねえぞ、もう一戦やるか最強？」

「おオーおオいいツラになりやがったなア三下ア。愉快に素敵に殺してやるかア？」

「はっ、おもしれえな……テメエは殺し決定だな」

「ちょっと！ 2人とも喧嘩はダメなんだよ！」

今にも体育館で死闘を始めそうな早川と金髪イケメン野郎。

それを止めるツインテの女子であるが……暮葉も早川とは敵同士じゃなかったっけ？

他にも永渕達が黒木らと殴り合いそうになるし、俺もアナスタシア



あたりに喧嘩を売られ……。

もう、人も会場もボロボロです。

とりあえず、俺らをここに集めた張本人に直接理由を訊くでしょう。  
……っと、思ったのだが。

「てめえ……なんなんだよそのコスプレは？」

俺は思わず彼に突っ込んでしまった。

俺たちをここに召集した人物。その正体は暁美ほ○らのコスプレをした西園寺雪乃であった。

「あら、藤島君の大好きなほむほむよ？」

「なっ！？　なんで俺がほむほむ好きだってわかったんだよ……？」

「藤島君はほむまど派だって木下さんが言っていたわ」

「暮葉の野郎う……さてはま○マジ見やがったなっ！」

だからって西園寺にほむほむのコスプレ着せるなよ。

確かに西園寺は黒髪ロングだし、コスプレすればそこそこの雰囲気はほむほむに似るけど……。

待てよ、そういえば今日暮葉を見てねえぞ。暮葉のヤツはどこで何を？

待て、暮葉の髪の色って確か桃色で、まどかの髪の色も確か似たような色で……ま、まさか？

「けーすけ様あーっ！」

「あ？　げっ、予想通りかよっ！？」

髪は元々だから仕方ないとして、あの魔法少女のような服は間違いないねえ……あの野郎っ！

「どうですかコレ、結構高かったのですよ！」

「ああ、お似合いじゃねえの？　って、お前ら揃ってなんなんだよ！」

「あら、貴方はコスプレが嫌いかしら？」

「ひどいのです！　折角本気になって選んだのに！」

「そういう問題じゃねえ！　オイ西園寺、結局ここに全員集めたのは何の為だよ！？」

俺はそれだけでいいから知りたいんだよ。

伊吹も明智も小坂も野郎共も写真部のみんなも……。つーかここにいるヤツ全員困惑してんだよ！

さアて答えてもらおうか西園寺……こんなに大勢を体育館に収容しやがった理由を——！

「あら、人気投票の結果発表よ」

「へ？　け、結果発表？」

「そう……ネットに掲載も考えたんだけど、面倒くさいわよね？」

「待て、面倒くさいのはお前だろ？　絶対HP作るのが面倒だっただけだろ？」

「失礼ね。現代人は何でも機械に頼り過ぎよ」

「そういう問題じゃねえだろ！　つーか直接全員集めるほうが大変だろ！？」

「あら、そういうばそうかしら？」

わざとらしくニヤニヤ笑ってやがる……コイツ、さてはカオスな状況作って遊んでるな。

でもって本来の目的忘れてるだろ。結果発表なのに中々発表しねえし。

しかも、この時点で文字数1300超えてるんだぞ。ったく……いい加減に発表しろっ！

「けーすけ様、イライラしちゃダメなのですよ？　ほら、煮干し食べてカルシウムを——」

「うっせ黙れ！　いいからさっさと結果発表せんかいっ！」

「相変わらず短気ね……貴方絶対早漏でしょ？」

「こんな大勢いる中で下ネタ言ってるじゃねえ！」

「けーすけ様、そろそろってなんですか？」

「聞かなくていい！　そして知らなくていいんだ暮葉！」

「ちなみに、誤解されないうちに言っておくけど私は処女よ？」

「そんな事誰も聞いてねえよ！」

コイツら俺を弄って遊んでやがるぞ。

しかも、こうしている間に文字数はついに1500……いや、1600を超えてしまった。

あと半分で3000文字じゃねえか。いい加減に始めろよ、読者も多分飽き始めているぞ？

っと思っていたその時、パァンと言う拍手を打つ音が体育館中に響いた。

それはステージのほうから聞こえた。

体育館にいた連中はその音を合図に、一斉にステージのほうに顔を向けた。

「いい加減にしろ。中々始まらないし読者もそろそろ飽きている頃だ。早急に人気投票の結果発表をしたほうがいいと思うぞ」

おお勇ましい……明智が壇上で堂々と説教をしているぜ。

ありがとう明智。お前のおかげで少しは話が進みそうだよ。

ったく……正体された明智が活躍して、主催者の西園寺が何もしないってどうなんだよ？

でも明智の行動のおかげか、西園寺もいい加減本来の目的を思い出したようだ。

西園寺は慌ててステージに登り、明智からマイクを取って深呼吸をしていた。

……ったく、最初からそうやって仕事しろよな。

「失礼、大分本題とは関係ない話になっていたわね。それではこれより人気投票の結果を――」

「一位は最強のオレに決まってんだろオが三下ア」

「ふざけんなよ早川……テメエは殺し決定だな」

「に、人気投票ならミネットも負けないかも」

「拙者が一応メインヒロインなのですよ!? だから拙者が一位なのです!」

「なっ!? め、メインは私よ私! 別にばか圭介の為に一位になりたいってわけじゃないけど……えと、とにかく私が真正正銘のヒロインなの!」

「そんなのやるまでもない! あたいが一位なのは決定事項だろ!」  
「?」

「い、一位はわたしです……そして、先輩の恋人ポジションを――」

【私が一位、他の追随は許さない】

ダメだこりゃ……早川&金髪だけならまだしも、暮葉や伊吹達まで暴走してやがるぞ?

「いい加減に黙れ! 順位の発表ができないだろうが!」

しかしざわめいていた会場は、明智の一喝によって一瞬にして静まり返った。

流石明智、やっぱりアンタがいないと物語は進まないぜ。

メタ発言をすると明智は確か、連載当初はそこそこの人気のあるキャラだったハズ……。

案外一位は明智だったり……って、そんなのわからねえよな。

俺だって順位は知らないんだ。下手したら俺……ビリだったりして？

「それでは結果発表を始めるわ。この順位は9月1日午後5時ごろに集計したものよ。まずは10位からの発表ね」

西園寺がマイクと紙を持ってそう告げる。

おそらくあの紙は順位表、俺たちの名前が記載されているものなんだろう。

西園寺はそれを読むように言葉を続ける。

「第10位。10票で浅間あかり、青山千早、白藤早苗、明智光昭の同列ランクインよ」

「え、あたい10位なのか？」

「……そんな、えと……白藤先輩は登場が遅かったから仕方ないとして……わたしまで10位？」

【私は納得、ここから舞い上がる予定】

「ちょ、こんなの不正だっ！ あたいは主催者の西園寺先輩にクレームつけるからなっ！」

どうやら、白藤と寝ている明智光昭以外、この結果に納得できないようである。

いやいや10位だぞ。今回きつと10位以内にすらランクインできなかったキャラも多いハズ。

それで文句を言うのは贅沢な気が……。

あと明智の爺さん起きろよ……折角出番のあるチャンスだったのに。

「フフ、これは厳正な投票による結果よ？」

「……な、納得……できないですよ」

「そーだそーだ！ 白藤と千早はともかく、なんでこんな爺さんとあたいが同じ順位なんだよ！」

「それが現実よ？ 現実を見なさい……ふふふ」

西園寺の冷徹な笑いに恐怖し、青山さんは後退りをしてしまった。あかりは強情にもまだ食いつこうとするが……まあ、いつまで持つ事やら。

「う、ぐ……とにかく、あたいはこんなの認めな——う、わっ!？」

その時、突如体育館に乱入してきた黒服の集団に、あかりは両腕を掴まれてしまった。

そしてそのまま、強制退場させられるように、あかりは黒服達に連れていかれてしまったのだ。

えーっと、その……まあ色々突っ込みたい事はあるんだ。

けど、ここは素直に西園寺に突っ込んでもいいんだろうか？

いや、突っ込まなければ俺の気が済まないぜ。

「お、オイ西園寺！ 今あかりを連れ去った集団はなんだよ!？」

「青山家の執事達よ。ちょっと青山さんに無理を言ってね……彼らは暴動処理兼クレーム処理課として仕事をしてもらっているわ」

「く、クレーム処理って……」

「……すみません、先輩。その……圧力かけられちゃいまして……」

「青山さん、西園寺の圧力には勝てねえよ……」

ひどい現実だ！

西園寺の圧力ってのがどんなものかは知らんが、いや知りたくもない。

けど合法的なものとは思えねえな。うん、きっと知らないほうが幸せな方法であろう。

それよりさっさと人気投票を進めて、地獄から解放してもらったほうがいいな。

「続いて第9位。12票でこの私、西園寺雪乃がランクインよ」

「って、てめえ自身じゃねえかよ！」

「あら、藤島君何か御不満かしら？ 登場が遅かった割には十分な快挙だと思うわよ？」

「……なあ西園寺、この投票ってやらせじゃねえよな？」

「違うわ。読者の皆様による厳正な投票よ」

「……………」

もう突っ込む事すら面倒になってきた……もういいや、先に進ませよう。

このままだと永遠にこの話が続きそうだ。



「第8位は14票で小坂亜紀よ」

「とおっ！」

西園寺が小坂の名前を読んだ瞬間、小坂がロケット推進の航空機の如く壇上に登ってきた。

ぐは、おっぱいすげえ……じゃなくて、どうしたんだよ小坂のヤツ！  
そりゃ8位にランクインして嬉しいのはわかるが、いくらなんでも  
テンション高すぎだろ！

「あたしのような脇役が8位……？ 嬉しい、嬉しいよ……けど贅  
沢を言うとなんで1位じゃないのかな？ 巨乳キヤラは問答無用で  
人気が出る法則は一体どこに——きゃあっ！ ちょ、なに離してっ  
！」

壇上で西園寺からマイクを奪い、ひたすら持論を語っていた小坂。  
しかし、結果発表の進行を妨害したせいか、小坂はクレーム処理課  
の連中に連れ去られた。

小坂……哀れ。いや、全然哀れじゃねえかも。

8位なんだぜ？ 贅沢言わずにそこで納得しとけよ……。

「はいはい、じゃあ次は7位。16票で明智風紗よ」

「7位か……まあ私はギャーギャー騒がないから心配するな。この  
順位に納得するでしょう」

あれ、意外と明智の順位が低かったな。

つか、あかりや青山さんの順位も意外と低かったような。

一位上位には誰かランクインしてんだ？

ちよっと……というかかなり気になる所だぜ。

あと素直に現実を受け止め退く明智——なんか、ちょっとカッコよかったぜ！

「続いて6位。17票で……えっと金、髪リーゼントの名前。なんだったからしら？」

「オイ！ 船木健太だこの野郎っ！」

「それにしても現実不思議よね。なんでこんな脇役のダサイリーゼントがランクイン——」

「コラアテメエ！ リーゼントナメてんじゃねえぞ！？ ツツパリの定番はリーゼントだ。その他の髪型？ ハッ、気合い入ってねえんだよ！ 今時のチャラチャラした髪型よりもリーゼントのほうが数千倍は気合い入ってんだ！」

「……はあ。クレーム処理課、出番よ？」

「——つまり言うのだな、リーゼントは最高の髪で——ってうわ、なんだテメェら何しやがるブツ殺すぞ……あぎゃああ！ ちょ、痛い！ 痛いってば馬鹿野郎！ やめ、うあああ畜生覚えてろっ！」

あゝあ、本日三人目の犠牲者だよ。

つか船木さん、すっかりただのネタキャラになっちゃったな。なんというかその……折角いい順位になったのにあまりにも不憫すぎる……。

「さて、変なリーゼントが消えた所で第5位を発表するわ」

ひでえ……西園寺は船木を変なリーゼント扱いしてるよ。

船木健太。一応俺が永渕に勝つキツカケを作った、悪人だけいいヤツキャラだったのに。

「第5位、18票で早川悠よ」

ここで本作の第二の主人公的なヤツがランクイン。まさかの元々敵キャラだったヤツだよ。

体育館の奥から不自然にまで白く、白く、白い、狂ったソイツが杖をつき歩いてきた。

ここで西園寺が早川に近付き、マイクを彼の口元まで持っていく。

「一応貴方にも聞いておくわ。第5位になった感想をどうぞ」

「第5位だア？ ふざけンじゃねエよ……最強のオレがなんで第1位じゃねエンだよオ！」

おいおいちょっと待て早川！確かに最強だけど何か違う！

第1位つてもろアレだよ。あのロリコンベクトル野郎の事だよね！？

「一応言っておくけど、男性キャラでは貴方が一番人気だったのよ？」

あ、この西園寺の言葉で全てを確信した。

どうやら俺は10位以下らしい。

という事は、早川の上にランクインしている人々は全員、可愛らしい女の子って事ですね。

しかし、早川はやっぱりこの結果に納得がいかないらしく、

「ふっざけンじゃねエぞオ！ 読者の三下がアアアア！」

「ちょ、貴方がキレたら青山家の執事どころじゃ解決できないわよっ」

「あぎやはははっ！ あっはぎやはははっ！」

早川は首筋のスイッチを押した。すると、まるで復活したかのように超能力を使い始めたのだ。体育館内に暴風が吹き荒れ、テーブルとパイプ椅子が全て宙に浮かぶ。

それだけではない。ガラスと言うガラスが全て割れ、気がつけば体育館の扉も破壊されていた。

一応青山家の執事が止めに入ろうとするが、結局彼らはただの人間。体術以外に能力があるわけでもなく、結局超能力者の早川悠の前では無力同然。

パンチやキックは早川の暴風の膜で反射され、執事が撃った銃さえも彼は反射していた。

弾かれた銃弾が四方八方に弾かれ、早川を撃つハズの銃弾が俺達を襲っていやがる。

ちよっと待て。ヤツを止める!!俺達が危険じゃねえかよ！

「……仕方ねえ。オイ西園寺……気に食わねえけど俺と手え組んで早川を止めるぞ」

「久我……ふふ、仕方ないわね。ヤツを止めない事には結果発表もできないわ」

「仕方ないですね。拙者も協力するのです！」

「はわわわっ！ ちょ、ミネットが止めるよっ！」

こうして戦える者は全員、暴走した早川悠との戦いに身を投じたのだ。

——しばらくお待ちください——

結局早川は俺の右ストレートで気絶し、そのまんま保健室に運ばれたのであった。

神様、どうか早川が保健室で暴走しませんように。

「それでは気を取り直して、人気投票結果発表の続きをするわ」

ボロボロになりながらも、マイクを持って司会を行う西園寺。ようやく結果発表再開である。

早川め、散々会場を荒らしてくれたせいで疲れたぜ。

戦闘の後は会場の復元作業。そのせいでもう夕方になっちゃったじゃねえかよ。

やっぱり、ネットに結果を掲載したほうが安全だったんじゃないか？

「第4位は22票で藤島葵よ」

「えっ！？ あ、葵が4位！？ う、嬉しいな……ありがとうみんな！」

あれ、葵が4位という結果に満足しているぞ？

ちょっと待て……こんなの葵じゃねえぞ。

ここは一つ、兄が妹の本当の気持ちを確かめてやるとしよう。

「葵、本音はどうなんだ？」

俺は葵に尋ねると、葵は半眼になって、

「葵が4位？　ありえないよ！　こんなの不正に決まってるよ！　葵は1位になってお兄ちゃんと結ばれる運命なんだよ！？　それなのに4位って……これじゃお兄ちゃんと結婚できないじゃん！」

やっぱり……これでこそ我が残念な妹だよ。

っていうか、別に人気投票で葵が1位になってもさ、俺達実の兄妹なんだから結婚は無理だろ。

葵はその後も黒いオーラを放ちつつ、ぶつぶつと文句を言っているが……。

まあ、ここは放置しておいたほうがいいだろう。

下手に三国干渉的な事をやると、多分会場が再び炎上しちゃうハズだ。

やっぱり葵は放置プレイすべきだな。

「さて、いよいよ上位3名の発表……と行きたい所だけど、ここで惜しくも10位以内にランクインできなかったながら、作者が印象に残ったキャラを紹介していくわ」

西園寺が今までのように、調子よさそうにそう言い放った。

へえ、そんなマイナーなキャラ紹介する必要あんの？

ふとそう思ったが……ちょっと待て、俺10位以内にランクインしてないっぽいじゃん。

うう……実際の所、俺に誰か投票してくれたんだろうか？

「まずは1票だけど藤島圭子ってのがいるわ」

「は？ け、圭子って……おい俺じゃねえか！」

誰だよ女装した俺に投票したの！？

「僕は納得できないぞ！ あの全校の男子が憧れた圭子ちゃんがたったの1票！？」

「俺もおかしいと思うね。どうして圭子ちゃんがたった一票なんだろう？」

圭子ちゃんの順位が低い事に腹を立てる大吾と重原。

「てめえら、いい加減に圭子Ⅱ俺だと気付けよ……」

結局、俺はいつまでコイツらの中で圭子ちゃんなんだろう？  
まあそんな事は放っておこう。コイツらに変な幻想を抱かせておくのも面白いかもしれない。

とりあえず、今は圭子ちゃんⅡ女の子だと思わせておこう。

「それじゃあ次発表するわ。7票の永渕晃よ」

永渕？

ああ、あのガチ悪役に投票した人っているんだ。

まあ確かに、この作品始まって以来の外道キャラだったが……。

「俺がたったの7票！？ ざけんじゃねえぞコラア！ こうなったらテメェらに思い知らせてやる……白陵高校の恐ろしさを——つてなにしがんだっ！ 離せテメェ！ 俺は伊吹ちゃんとやてえんだよ！」

その外道も今やこの有様。

永渕は小坂や船木同様、青山家の執事に連れていかれてしまった。

永渕……アンタ強かったよな。

でもこうして見るとやっぱり……早川には及ばないんだな。

「それじゃあもう一人紹介するわ。6票で藤島圭介……そう、藤島君よ?」

げえ、俺永渕より下なのかよ……まあ仕方ねえか。

俺なんて多分ありふれた主人公キャラだし、これと言って特徴もないからな。

そんなテンプレ主人公に6票も集まったんだ。これでも奮闘したほうだろう。

「まあ……なんつか。俺なんかに投票してくれてありがとな」

「ついでに、これは感想欄に書き込まれた事よ。藤島君、貴方の上条○麻な性格は読書に飽きられてるわよ?」

「へ? ちょ、待って……それって俺がいない子みたいじゃ——」

「事実だから仕方ないわよ。悔しかったら新しい事でも始めればいいんじゃないかしら?」

「う、ウソだ……俺がいない子だなんてウソだアアアアアアアアアアアッ!」

「……次、行ってもいいかしら?」

……おっといけない。俺とした事が取り乱してしまったぜ。



どんな時でも冷静でいられる者こそ、真の変態と言う名の紳士なのだ。

とにかく冷静になろう。変態紳士を名乗る為にも、スムーズにこの企画を進める為にも。

スーハースーハ……ふう、大分落ちついたぜ。

「それでは第3位を発表するわ。29票で木下暮葉よ」

「もきゅ!? せ、拙者ですか!?!」

「ええ、間違いなく貴女が三位よ」

「え、にゅふふっ。一位じゃなかったですけど……ありがとうございます!」

やっぱり暮葉は素直でいい子であった。

これまでの奴らとは違い、自分の順位に不満を覚えて大暴れする事はなかった。

「まあ貴女はメイン的な扱いだから、そこそこ人気があるのは当然だと思うわ?」

「いや待てよ西園寺。メインヒロインが人気ねえ作品って結構あるんだぞ? それを考えたらやっぱり暮葉はかなり奮闘したと思うぜ?」

「その、ありがとうございます!」

暮葉はニコツと満面の笑みを浮かべた。

何かかズッキューンと胸にくるような感覚。

ああ、まるで天使や……危なく俺も萌え死ぬ所であった。

「それじゃあ次へ進むわ。第2位の発表よ」

いよいよ第2位か……少なくとも男キャラで一番人気は早川悠。女の子キャラである事には間違いないが、さて……一体誰であろうか？

「第2位。43票でミネット・ローランよ」

「ええええええええ！？　み、ミネットが！？　ホントにミネットが2位なの！？」

ミネット——って名前らしい、小柄な女の子が驚いた表情を見せた。顔を左右に向け、あたふたした動きを見せていた。やがて、彼女は西園寺に迫って、

「ホントなんだよね！？　ホントにミネットが2位なんだよね！？」

「間違いないわ。厳正な投票の結果よ……貴女は胸を張れる順位に見事輝いたのよ」

「しかも3位の拙者とは随分差があるのです……でも、それだけミネットさんが人気だったって事なのですよ！」

「し、信じられないよ……だってミネットは登場遅かったんだよ？　他の人達よりもずっと遅い登場だったのに……」

そう言った後、ミネットはハッと笑顔を浮かべて、

「ど、読者の皆様！　えっと……投票してくれて本当にありがとう

！ ミネット、すつごく嬉しいんだよ！」

ミネットはぺこりと一礼をした。

しかし、この素晴らしい霧囲気をぶち壊す——一人の男がステージに上がってきやがった。

ソイツは金髪長身のイケメンであり、残念ながら初芝高校の制服を着ていやがる。

彼は西園寺から強引にマイクを奪うと、

「10位の僕の妹のあかり、3位の木下君。そして2位のミネット・ローラン君……この三人に共通する事、それは三人ともロリな体型であるという事。そう——きつとこの小説の読者にはロリコンが多いと言う事だ！」

彼——妹とは大差をつけられ10位外だったあかりの兄、浅間英樹は熱くそう演説していた。

えーっと……なんつーか、アイツなに言ってやがるんだ？

「貴方は確か……この高校で最も評判の悪い残念なイケメンさんかしら？」

「つーか部長なに言ってんだよ！」

「だってそうじゃないか！ 三人ともロリだよロリ！？ 特に木下君とミネット君は大人気、これはもう読者にロリコンが多い決定的な証拠ではないか！」

「いくらてめえがロリコンだからって、その指摘は流石に読者に失礼すぎるだろ！」

「いや！ ロリコンである事は誇るべき事だよ！ そう……【魔法少女に会っちゃった場合】の読者を増やす為には、戦闘シーンなんかよりも……ロリっ娘の登場のほうが効果的！」

「そんなんで読者が増えるわけねえだろ！」

「確実に増える！ 事実、あるゆる作品でロリキャラは結構人気なのだ！ そう、ロリこそ至高の属性だ！ yesロリータNoタチ！ ロリロリロリロリロオオロイイイイイイイイタア——ぐふっ！」

あまりにも騒がしかった為、俺は浅間部長の鳩尾をぶん殴ってやった。

喧嘩慣れしていない彼は、俺のような素人の一撃でも簡単に沈める事が出来た。

彼が気絶した瞬間、会場はとても静かに……浅間部長がいかにかにウザいかよくわかったぜ。

浅間部長はその後、青山家の執事によってどこかに運ばれたようである。

まあ、当然の始末であろう……さて、そろそろ結果発表に戻るとしよう。

西園寺が気を取り直したようにマイクを持ち、再び司会としての仕事を始める。

「……それでは、数々のキャラクターを追い抜き、見事1位に輝いた人を発表するわ」

会場に緊張が走り、体育館内にいた人々が固唾かたずを呑む。

所詮はラジオだが、ドラムロールが通常よりも長く鳴る。

俺も思わず力が入り、気がつけば両手の拳をガッチリと握り締めて

いた。

一方、西園寺もマイクを握り締め、大きく息を吸って腹に力を入れて――

「第1位、66票で国宗伊吹。藤島君のツンデレ……いや、ツツパリかしら？とにかく幼馴染ポジションのキャラクターが堂々の1位ランクイン！」

瞬間、会場内わあああああ！と歓声が沸き上がる。

「わ、私が1位……？」

呆然とした声を上げた伊吹。

その姿は普段のツツパリ伊吹ちゃんのものではなく、正真正銘一人の女の子の姿であった。

「おめでどう、心から祝福するわ」

西園寺が伊吹に近づき、多分心からそう思っている事を伊吹に言った。

俺もおめでどうくらいは言おうかな。

というか、伊吹が一位なら俺もすっげえ嬉しいよ。

「おめでどう伊吹。やっぱお前はすごいな！」

「それじゃあ第1位の国宗さんには是非、感想を言ってもらおうと思うわ」

伊吹は顔を紅葉のように真っ赤に染めて、かなりおろおろしていた。しかし我に帰ったようにハツとし、俺達から視線を逸らすように俯

いてしまった。

だが、それでも彼女の瞳は大変潤っており、顔もかなり赤く染まっている事がまるわかりである。

「う、嬉しくなんかいいわよ……？　で、でも一応ありがとうって言っておく……っ」

そして、強がっているような一言。

まあ予想通りの言葉である。コイツは全く素直なヤツじゃないからな。

きつと、内心は騒いで踊りたくなるほど嬉しいに違いない。

俺の幼馴染——国宗伊吹とはそういう人なのだ。

ハハッ、なんだか見ていて可愛いな。よし、ちょっとからかってやろうかな？

「はにゃっ!？」

俺は伊吹の頭に優しく手を置き、それをゆっくりと動かし彼女の頭を撫でてやった。

伊吹は絶対赤面癖だよな。そう思うくらい彼女の顔は真っ赤になっていたのだ。

一見、ただ恥ずかしそうにしている風にしか見えない伊吹。

だけど、その表情はどこか嬉しそうでもあったので、

「嬉しいのか？」

「ば、ぱか圭介……っ！　べ、別に嬉しいとか……そんな事は全く……っ」

「答えてくれ。俺はお前の気持ちを確かめたい、伊吹の事をもっと

知りたいんだ」

「ええっ！？　け、圭介っ！？　え、えと……あのっ」

「うん、だから——結婚しよう！」

「……えっ！？」

さうでここで伊吹の拳が飛んでくるハズだ。

あの流れからのまさかのプロポーズ。こんな馬鹿な方法失敗するに決まっているだろう。

だからこそからかっているって事だ。

そもそも、伊吹に結婚しようって言っても、彼女がそれを受け入れる事だなんて——

「い、いいわよ……？　どーせ圭介なんて彼女出来ないもんね！

仕方ないから私がお嫁さんになってあげるわよっ！　で、でも……

その、その前にちゃんと恋人として付き合いなさいよね……っ！」

「……えっ？　ハッ！？」

予想外すぎる伊吹の回答……思わず呆然としていた矢先——背後から凄まじい殺意を感じる。

ふと振り向くと——そこには会場内に居た野郎共が、まるで獲物を確実に仕留める目で見ていた。

「藤島テメエ！　俺の伊吹ちゃんを落としてんじゃねえよ！」

「いくら幼馴染同士だからって、流石に今のはボクもムカついたでえっ？」

「リア充死ね！ 爆発しろ！」

やべえ……黒木に赤佐に大林がキレてる。

いや、アイツらだけじゃねえ——大吾と重原を除く殆どの男がキレてやがるぞ！？

しかし——命を狙われている俺に救いの手が、

「ほら圭介！ 殺されないうちのその……ま、まず家に行くわよ！  
りよ、料理くらい御馳走してやるんだから……っ！」

「えっ？ ちょ、伊吹さん何故に手を！？」

「は、にゃ……ああ、あたりまえでしょ！ あんたと私は恋人なんだから！」

「ちょ、待て！ なんか違う！ 予想と展開が180度くらい違うぞ！？」

どうしてこうなった！

俺に対する好感度がマイナスなハズの伊吹が、なんで俺の冗談を真剣に受け止めちまったんだ？

そしてなんで、俺だけが野郎共に命を狙われているんだ？

ああ、きつとコレはアレだ……うん、アレでしかない！

「ああもう！ 不幸だあああああああああああああああ  
あああっ！」

伊吹に引っ張られながら俺は思わず、そんな説教ウニ男的な事を叫んでしまった。



「……はあ、もう收拾つかないわ。ちなみに今後の話だけど、1位に輝いたキャラの1話完結ストーリーを描くわ。今回の場合は国宗さんのショートストーリーね。多分今月中に投稿すると思うので読者の皆様、期待してくれるととても嬉しいわ。それと、全キャラの順位は後々活動報告にて掲載するので、今回未登場だったキャラの順位もわかるから必見モノだと思うわ。それじゃあ今回はここで終わるけど……」

「う、うそ……さっきの告白が冗談って………ば、ばか圭介死ねえっ!」

「だああああっ! ふ、不幸だあああああっ!」

「……これ、今日中に帰れるのかしら?」

——皆様、ご愛読ありがとうございます! 今後とも頑張りますのでよろしく願います! ——

## 特別回…人気投票結果発表！（後書き）

魔法少女に会っちゃった場合、人気投票開催中！

・後書きトークコーナー

圭介「……不幸だ」

伊吹「自業自得よ」

暮葉「確かにけーすけ様、アレは自業自得なのですよ？」

圭介「伊吹だけならまだしも、まさか野郎共にまで殴られるとは……不幸だ」

暮葉「それにしても伊吹さんのショートストーリーですか、どんな話でしょうね？」

伊吹「えっ？　そ、その……大した話ではないと思うわよ？」

暮葉「そうなのですか？　でも拙者は楽しみなのですよ！」

伊吹「あ、ありがとう……っ」

圭介「てめえら！　俺は無視ですかスルーですか！？」

伊吹「ん？　け、圭介……あんたまだいたの？」

圭介「うわああああああああああああっ！」

## 第123話、行かないカ？

夏休みもかれこれ一週間が経過し、そろそろ7月も終わろうとしている頃。

俺は相変わらず、ぐーだら引きこもりライフを満喫していた。

別に好きで引きこもっているわけではない。暮葉に言われて俺は引きこもっているのだ。

それは夏休み初日。

大量出費しちゃったし、葵に強姦されかけ不良にも絡まれ、終いには大事に巻き込まれ……。

もう、不幸としか言いようのない一日であった。

しかも、どうやら俺達の周囲にサヴィエトのスパイがいるらしく、その調査の為に暮葉が今アルファ隊と頑張っている所だが、その件で俺は……。

「まさか暮葉に外出を規制されるとは……」

そう、外出禁止令である。

敵は常に俺達を監視している可能性がある。

だから、大胆かと単独での行動は控えるべし——と暮葉から言われてしまったのだ。

従って俺は……よっぽど重要な事でもない限り、外出ができなくなってしまうのだ。

うう……外出する事さえ制限かけられるとは。やっぱ今年の夏は口でもねえぜ。

「ああもう！　なんか無性に外出たいよっ！」

でも外には出れない現実……はあ、なんたる悲劇なんだろう。

ああ……せめて買い物くらいには行きたいぜ  
けどなあ、買い物に行くって言って秋葉原に行った結果が——外出  
禁止令発令だもんな。

俺、もしかして呪われてんのかな……？

『♪～♪～♪』

「うわっ!？」

び、ビックリしたあゝ。

携帯って不意に鳴ると本当にビックリするよな。実は結構心臓に悪いんじゃないのか？

まあそんな事はともかく、電話らしいからさっさと出ないとな。

って……なんだ浅間部長か。浅間部長から電話をかけてくるとは珍しいな。

一体何の用だろう。まあロクな用じゃねえとは思うが……。

そんなしょうもない事を考えつつ、俺はボタンを押して電話に出た。

「はいもしもし、藤島ですけど」

『いやあゝ突然悪いね藤島君！　もしかして今絶賛自家発電中だった？』

うわあ……朝っぱらからきわどい下ネタだ。

いくら変態の俺でも流石にこれはキツイ。

「部長、いたずら電話なら切りますよ？」

『ちょ、冗談だから電話は切っちゃダメ!』

「はあ……んで、一体何の用なんですか？」

『うん、今日エロ同人誌を読みながら藤島君に電話をしたのは他でもない、合宿のお知らせだよ』

浅間部長はやっぱり最低の変態野郎である。

フツー読みながらもそれを態々言うヤツがいるか？

つか、それ以前にエロ同人誌読みながら電話するなよ。

まあこんな事を気にしても仕方ない。浅間部長が残念なのはいつもの事だからな。

とにかく、エロ同人ってのはまあ……気になるけどスルーしておこう。

「合宿？」

『そうだよ合宿だよ海だよ水着だよ！』

「よし、出来れば手短に説明してください」

『夏休み、合宿、青山家別荘』

うん、結局合宿で何をしたいのかサッパリわからない。

「……とりあえず、夏休みに青山家の別荘で合宿するってのはわかりましたよ」

『それで十分じゃないか？』

「十分じゃねえよ！　なんでいきなり合宿なんですか！？　しかも青山家の別荘って一体どういう事なのですか！？」

『いやあ、他の部活は夏休みに合宿を行っているし、我が写真部も合宿くらいやったほうがいいのでは？　　っとボクは思ったわけだよ。青山君の家の別荘は青山君に無理を言って、あくまで合法的に3日間だけ借りれる事になったんだよ』

つまり他の部に負けているのが悔しいから、合宿の必要がない部活で合宿をする？

なんてひどい理由なんだ。結局活動内容は語られなかったし、これは遊ぶだけになりそうな予感。

しかも、あくまで合法的に借りたって……その合法的って言葉が怖いよ。

きつと浅間部長と青山さんは、暴力団と警察の裏取引も真っ青な事をやったに違いない。

だって相手はあの青山家だぞ？

それ程ブラックな事でもない限り、「はい別荘解放します」なんて展開になるハズがねえ。

「……そ、それで……合宿って強制参加？」

『強制はしないさ。ただ、参加しない部員の個人情報が流出してもボクは責任を——』

「待てコラッ！　個人情報流出ってなんだよ！？　なんでそうなるんだよ！？」

『いや、青山家とはそういう契約で……』

「どんな契約だよ！」

恐ろしい契約してんじゃねえよ！

これならキュウベえと契約して、魔法少女になっちゃったほうがまだマシだぜ。

絶対に参加せざるを得なくなる契約……そうか、わかったぞ。

これはきつと青山さんのせいだ。

青山さんが夏休みに俺と会う為に仕組んだ——って、こんな事考えるのはよそう。

流石に今の想像は青山さんに失礼だ。青山さんがそんなヤクザみたいな事をするハズがない。

いや、絶対にそうだと信じたい——！

『まあとにかく、自分の身を守る為にも、今回の合宿には参加したほうがいいと思うんだ』

「自分の身を守るって……部長、それただの脅しじゃないっすか？」

『心配しなくてもいいさ。ボクだって脅されている側だ……プツ』

「ウソつけ！ 最後笑ってたじゃねえか！」

バレバレなんだよ浅間部長。そもそも、その契約が本物なのかすら怪しいわ。

でもなあ……もし本物だったり怖いし、やっぱり身を守る為に参加すべきなのか？

だけど合宿って事は当然、外に出ないと行けないんだよな。

アレ、ひょっとして俺……参加できないんじゃないじゃねえか？

『まあとにかく藤島君は参加する方向で。日程は8月4日から3日間、それじゃあ木下君と葵君にもこの事を連絡しておいてくれたまえ。では！』

「えっ？ あ、ちょっと部長！？ 部長オオ！」

ブツツ、という音が響く……うう、あんのクソ部長逃げるように電話を切りやがった。

……えーっと、どうすりゃいいのこれ？

身の安全の為に参加したほうがいいんだろうが、外出禁止令発令中だしなあ。

まあ、一応暮葉と葵にこの事を伝えておくか。

あんまり期待はできねえけどさ。とにかく連絡だけでもしておこう。

——っと、言うわけでみんなで揃って夕飯を食べてる時に、俺は合宿の話を2人に振ったが、

「写真部の合宿？ って事は千早やあかりも来るんだよね！？」

「行き先は青山家の別荘だし、誘ってきたのは部長だから多分2人とも来るぞ」

「やった！ 葵は絶対行くよっ！」

葵が合宿に行きたがるのは予想していた事だ。

なんたって友達が2人も来るのだ。浅間部長の存在さえ我慢すれば、友達と遊べるいい機会だ。

問題は暮葉である。暮葉自身は行くとしても、俺だけ行けない可能性が……。

暮葉曰く今こそヤバイ時なのだ。

サウイェト連中に身柄を狙われている俺を、そう簡単に外出させてくれるハズがない。



それでも俺は——個人情報を守る為にダメ元で暮葉に訊いてみる。

「暮葉はどうだ？ みんな行くみたいだぜ？」

「もきゅ、そうですねえ……拙者も行きたいのです！」

「そ、そうか。けど俺が行っても平気なのか？」

「もきゅ？ 何を言っているんですか？」

あははは、やっぱりダメかあ～ですよねえ。

だって俺、連中<sup>サウイェト</sup>に狙われているんだもん。

もし合宿先に魔法使いが現れ、俺を巡って戦闘になったらそれは大変な事態だ。

下手すりゃ俺達が普通じゃないって、葵や写真部の部員達にバレてしまうぜ。

そうなると日常生活に支障が……やっぱ、迷惑になるかもしれない俺は行けないのか——

「拙者がいるんですから平気なのです！」

「へ？」

「だから、けーすけ様も一緒に行きましょう！」

「マジ！？ お、俺も行っているのか？」

「当たり前なのですっ！」

「そうだよ、お兄ちゃんだって写真部の部員なんだよ？」

「おお……か、神よ……っ！」

感激のあまりに目から汗が出てきてしまった。

外出禁止令が発令され、かなり退屈になるかと思われた今年の夏休み。

だが——そんな退屈な夏休みもうすぐ終わり。遂に夏休みにビッグな予定が出来たんだ！

丁度いいぜ……本当、外出できなくて身体が腐りそうだったんだ。

浅間部長がいるのと、後は変な脅しがあったのがちよつと嫌だけど……まあいい。

折角みんなが集まるんだ。それに合宿つつても何か遊びっぽい感じだ。

だから——みんなで行ってエンジョイしようじゃねえか！

——生涯。

生涯、俺はこの合宿に行く決めた事を悔やむだろう。

なぜならこの後、またとんでもない騒動が起こってしまったんだから——

## 第123話、行かないカ？（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「青山さん」

千早「は、はい……？」

圭介「俺、部長に参加しないと個人情報流出するぞって脅されたんだが……」

千早「えへへ……っ」

圭介「やっぱり貴女の仕業だったんですね！？　そうなんですね！？」

千早「ごめんなさい先輩っ、その……わたし、どうしても先輩と一緒に……」

圭介「青山さん……」

千早「先輩……その、合宿楽しみましょうね……っ」

圭介「おう、まずは青山さんを警察に引き渡してから——」

千早「……っ！　はわっ、だ、ダメです……電話から手を離してください先輩っ！」

## 第124話、合宿一日目 出発編

それから、俺はずっと室内でぐーだら生活を満喫していた。

満喫、と言うよりは監禁されていたと言うほうが正しいのだろう。

「だけど、それを自分で言うとは悲しくなるんだ。だからまあ、とりあえずは暇人ライフを満喫していた事にしておきたい。そう思いこんでいたい……。」

けど、そんな暇人ライフを送っていたらあつと言う間に数日が経過し、今日は8月4日。そう——今日から俺達は写真部の合宿に出席するのである。

「よ、よし！ 忘れ物とかねえよな？ 着替えも洗面道具も念の為にカメラも持った。あとパスポートは持ったかお前ら？」

「けーすけ様……その、合宿先は青山さんの家の別荘なのですよね？」

「え？ そうだけど？」

「お兄ちゃん部長さんから聞いてなかったの？ 千早の別荘は国内だよ」

「……エッ!？」

暮葉と葵がジト目でそう言うと、俺は素で大声を上げて驚いてしまった。

あれ、青山さんの別荘って国内だったっけ？

普通ラノベじゃああいとお嬢様の別荘って、サイパンとかパラオとか海外の南の島にあるモンじゃないっすか？ とにかくこんなの

絶対おかしいよ。折角あるかもしれないかわからなかったパスポートを、頑張って家中探してようやく見つけたのに……。

つか、俺って外国行った事あったんだな。全然記憶にないんだけど、なんで俺のパスポートがあったんだろう？

まあいいか。気にしたら多分負けだろう。

「けーすけ様、ホントに海外旅行に行くつもりだったのですね」

「服までアロハシャツに短パンだしね」

「こ、これはその！ ほら、海辺らしいし暑いじゃないの！？ なっ？」

「……けーすけ様、ウケ狙いなのですか？」

「その恰好、なんかチンピラみたいだよ？」

サングラスにハワイ直送のハイビスカス柄アロハシャツ。黒色の短パンという、超ハワイアンな服装はうちの女の子達には大変不評であった。

「つかチンピラって……アロハシャツ日常的に着ている人に謝れ！ 確かにまあ、チンピラのお兄ちゃん達もアロハシャツ、よく着ている所を時々目撃はするけどさ……。」

「ええいもううつせえ！ とにかく、俺が着替えたらずく待ち合わせ場所に行くぞ！」

「国内ですから普通の恰好にしてくださいねー！」

「間違ってもほむほむの服着ちゃダメだよ！」

着るかつ！　そもそも俺、ほむほむのコスチュームなんて持ってねえし！

結局、朝の準備からこの通り滅茶苦茶であった。はぁ……まあ、朝が滅茶苦茶になったのは殆ど俺のせいではある。だけどこれからもっと濃いメンバーと合流するんだ。

こりゃあもう先が思いやられるぜ……どうなるんだよ今回の合宿。

その後家を出て待ち合わせ場所に向かおうと――したのだが。玄関の扉を開けた瞬間だ。重そうな鞆をアスファルトに置き、気の強そうな鋭い視線を向けてくる一人の少女が、俺達三人の前に立ち塞がるように仁王立ちしていた。

「もきゅ？　あれ伊吹さんじゃないですか？」

「あつ、ほんとだっ！」

「……なにやってんだ伊吹？」

「べ、別に？　あんたについて行こうとしたわけじゃないわよ……」

……なんつー分かりやすい反応。

そう言えば昨日だったか、俺は伊吹と久しぶりに電話をしたんだ。んで、明日から合宿だって確かコイツにも言ったはずだ。

コイツ……ひょっとして羨ましかったのか？　自分もみんなについて行きたかったのか？

「はぁ……んで、結局お前も一緒に行きたいんだろ？」

「なっ……だ、ダメなの？」

「別にあの部長の人格からして、1人や2人増えたってなんとも思わねえだろえけど、でもいいのか？ お前確か剣道部だろ？ そっちのほうで用事とかねえのかよ？」

「それなら全然大丈夫よ。もう許可取ったから……って、違うわよ！ 別について行きたかったからじゃ——っ」

素直な気持ちを全力で押し殺そうとしているが、まあ分かりやすい事この上なし。

伊吹って下手な推理ゲーより分かりやすいよな。まあ伊吹らしいっちゃ伊吹らしいけど。

「はいはい。んでっ、暮葉と葵はどうだ？」

「拙者は別にいいですよっ！」

「葵も！ 人数は多いほうが楽しいよ」

「って言ってるけど、伊吹はどうするんだ？」

まあ暮葉と葵が伊吹を拒むわけがない。それはわかりきっていた事だ。

要するにこれは本人の気持ちの問題なんだ。だから俺は再度伊吹に確認をとってみる。

「……し、仕方ないわね。あんたがどうしてもって言うなら行ってみるわよ！」

「へいへい。んじゃあそろそろ行くぞ」

こうしてRPG風に言うと、伊吹が俺らのパーティーに加わったのである。青山さんの別荘が海外じゃなくて国内だったり、突然伊吹が乱入したり……なんか、朝から予想外の出来事ばかりだな。何事もなく無事に合宿が終わればいいが。いや、終わってくださいお願いします。

それから歩く事数十分、ここは青山家の近くにある公園前。

俺達写真部の面々はここで待ち合わせをしていた。

待ち合わせの時刻は大体午前8時前後。つまり今から10分後の話なのだが……うわっ、もう公園に浅間兄妹と青山さんがいるよ。まあよくある展開だが……つか、待ち合わせ時刻より前から待っているってデートかよオイ……。

「おはようございます」

俺がそう挨拶をすると、残りの三人も続くように挨拶を行った。向こうも俺らの声に気付いたようで、

「おお！　ようやく着たかあっ！」

「まったく、エロ兄貴のせいであたいら1時間も待たされた……っ」

浅間部長が元気よく挨拶をする傍ら、あかりは不満そうにぶつくさ呟いていた。風の音とかでよくは聞こえないものの、ちらっと聞こえた声によると、どうやらあかり達は1時間も前から待っていたらしい。なんというか……やっぱりデート気分かよ。しかも浅間部



長のせいって……アンタ、女子2人を立たせたまま1時間も待たせるって最低だと思うぞ。

決して俺達は悪くないハズだ。だって俺達時間通りに来たんだもん。別に悪くはないハズだ。

「……えへへっ、先輩おはようございます……っ！」

「ん？　おう、青山さんおはよう」

不満そうなあかりを見ていたその時だ。青山さんが隙だらけだった俺に話をかけてきた。

後輩にこのように挨拶をされる——むふふ、なんてスバラシイッ！  
だが、一つ警戒しなければならぬ事がある。そう、青山さんは——と警戒していたその時！

「……先輩っ！　だぁ……い好きっ♪」

むぎううううううううと。

何を間違ったんでしようか。朝っぱらから青山さんは満面の笑みを浮かべ、大胆にも俺の身体に抱きついてきた。しかも胸のあたりに顔を埋まらせ、ぐりぐりと挟るように顔を左右に動かしていた。すげえ……子供に懷かれる親並に好かれてるぞ俺。

っていうかやべえ、服越しに感じる女の子の柔らかな感触。鼻にしっかりと入ってくる、女の子のとっても甘くていい匂い……。

ぐふっ、これやベエよ萌え死ぬって、俺の股間がマスターズパークになるってッ！

もう頭の中は真っ白。顔が妙に熱くて……多分、俺の顔は真っ赤であろう。そして何よりこの堪らない感触。アカン……このままだと、確実に俺の理性が吹っ切れて股間が暴走しちまうっ！

っと思っていた——、

「ちえすとおおおっ！」

「ぐ、はびやるあゝっ!？」

刹那、ゴン!　　っという鈍い音と共に感じた鈍い痛み。

ぐにやぐにやと視界が揺らぎ、フラフラと足取りも悪くなっているのが……あれ、わからん。普通の状態だとすぐわかる事さえわからない。どうやら今の一撃で、俺は一時的に思考力を失ったらしい。んでっ、結局何があったかと言うと、

「あああああんたっ!　　朝っぱらからなにやってんのよっ!」

どうやら伊吹が竹刀を華麗に振り下ろし、俺の後頭部にそれを激しく打ち込んだようである。

いてえ……竹刀つつつても後頭部に当てたら危険だぞ?

まあ伊吹は実力者だ。多分加減はしていると思うし、俺だって普通の人間よりは遥かに丈夫だから……まあ、これくらいの衝撃ならなんともないんだけど。

「く、国宗……先輩?　　えと、先輩とのスキンシップです……っ」

「もきゅ!?　　け、けーすけ様とスキンシップ!？」

「千早っ!　　圭介と千早は恋人じゃないだろ!？」

「……で、でもスキンシップって今時は当たり前前って——」

「そっ、そんなわけないでしょ!」

「そうですよ！ そんなに簡単にしていいものじゃないですよ！」  
一見いい事を言っているように聞こえるが、暮葉だって日常的に抱きついてくるじゃん……。

「と、とにかくだ！ 神がそれを認めてもあたい達は認めないからなっ！」

「そーだよ！ お兄ちゃんは葵のものなんだよっ！？」

女子全員に説教をされている青山さん。なんかその……ちよつと可哀想に見えてきた。

そりゃ確かに、人前で頻繁に抱きつかれたら困るんだけど……アイツらなんでだ？ そこまで厳しく言うほどの事でもないと思うんだが……？

「藤島君、修羅場だね」

「はぁ……」

「つで、君は結局誰ルートに突入したいんだい？」

「誰ルートも何も、別に俺はそんなフラグ立ててませんよ……っ」

「相変わらず鈍いね君はぁ。まあいい、折角君の幼馴染も来ている事だ。今回の合宿を利用して誰かと距離を縮めたらどうだい？」

「距離ねえ……」

って言われても、恋愛感情がないのに迫られて……。

俺はまあ、そんな事より無事に合宿が終わる事。そして——合宿中にラッキースケベがある事を祈っておくよ。

……ってか部長、伊吹が来る事に関しては文句ないんだね。まあ予想はしていたけど。

……こうしてメンバーが揃い、数分後に俺達は目的地へ向けて出発したのだった。

## 第124話、合宿一日目 出発編（後書き）

後書きトークコーナー！

圭介「う、ぐ……」

小坂「どーしたの圭くん？　とうとう死に時？」

圭介「死に時……まんざらじゃねえかもな」

小坂「えっ？　じよ、冗談のつもりだったのに……大丈夫？」

圭介「ああ、すっげえ腹が痛いんだ。俺……死ぬのかな？」

小坂「……ぷっ、にやははははっ！」

圭介「笑いごとじゃねえよ！」

小坂「ごめんごめん！　けど、お腹痛い程度じゃ死にはしないよ？」

圭介「いや死ぬだろ！？　腹痛で死んだ人って多分いるだろ！？」

小坂「腹痛で死んじゃったら、あたし含めて全国の女の子はもう生きてないじゃん？」

圭介「下ネタかよっ！」

小坂「ごめんごめん♪」

圭介「……なあ小坂、生理痛ってそんなに痛いのか？」

小坂「圭くん、それを女の子に聞くんてデリカシーないと思うよ」

圭介「……サーセンでした」

## 第125話、合宿一日目 到着編

「——はっ!？」

「あっ、けーすけ様起きました?」

「う、ぐ……どこなんだよここは……?」

「もきゅ? もう目的地につきましたよ?」

うう……すっかり気絶しちゃったよ。ちくしょう……ここ数時間の記憶がねえ。すべては浅間部長の運転があまりにも荒すぎたせいだろう。

……あの後、青山家から借りたというグランドハイエースに乗せられ、青山家の別荘へ向かうべく国道だの高速だの峠道だの、とにかく色々な道を走ったのである。

もちろん、ただ道を走るだけで気絶なんかするハズがない。

そんなんで人々に気絶されたら、車なんてとっくの昔に発禁を食らっているだろう。

問題は人ではなく浅間部長の運転だ。国道や高速を走っているうちには確かに快適だったよ。

だが、峠道に入った後の事。それは突然の出来ごとであった。狂ったように速く、リアに輝くRのエンブレムが大変眩しい——R-32スカイランGTRが俺らを追い抜いていったのだ。

その瞬間からである——兄妹揃って狂い始めたのは。

「いやあゝ久々にいいドライブだったね」

「ぶっちぎりだったな兄貴っ!」

「なにがブッチギリだったんだよてめえら！ 頭文字Gみてえな事してんじゃねえよ！」

……そう、浅間部長とあかりはR32に抜かされた瞬間、闘争心を燃やして某兄貴の公道最速理論の完成形にも近いような走りをし、ブッチギリでR32に勝利したのである。

しかも、R32はガードレールに突き刺さってしまい……多分あれは板金7万円コースだろ。

「でもボクすごいじゃないか。ハイエースでドリフトしたんだよ？」

「すごいけど褒める気ねえよ！ てめえのせいで俺と青山さんは気絶するし、葵は窓に頭打って怪我しちまうし、伊吹に至っては車酔いで再起不能状態じゃねえかよ！」

浅間部長の暴走運転は散々な結果を生んだ。

暮葉は平気だったっぽいが、俺と一緒に気絶した青山さんは未だに気絶中。

伊吹も吐き気が激しいようで、現在その茂みに隠れて……まあ詳しくは言わないでおくよ。

「けど、おかげで到着予定時刻より数十分早く到着したんだ。ほら、予定よりも長く遊べるではないか！」

「そうだぞ圭介！ 折角海辺の立派な別荘に来たんだ。細かいことは気にしないで遊べよなっ！」

「……俺、間違った事は言っていないよね？ 普通は公道で暴走しちゃダメだよね？」



しかも、結局遊べる時間は同じだと思うんだ。確かに、浅間部長の暴走運転は予定よりも早く目的地に到着するという結果を生んだ。けど、肝心の遊ぶ人がボロボロじゃあ何の意味もねえ。気絶だの怪我だの車酔いだのでボロボロな俺達の遊ぶ時間は、結局変わらないどころかむしろ減ったような気がするのだ。だってもう……かれこれ30分以上は皆体調不良を訴えているのだ。

きっと、この状況はあと何十分かは続くぞ？　そして遊ぶ時間が刻一刻と減っていく……。

「け、けーすけ様……その、怒ってないで家のお掃除しましょうよ！　やることやってから遊んだほうがいいと思いますし、拙者達が働いている間に皆さん復活すると思いますよ？」

「そ、そうか……つーか暮葉はなんともねえのか？」

「もきゅ？　拙者は全然なんでもないのですよ？」

「お前、やっぱり強い子だな……っ」

「けーすけ様も気絶こそしてましたけど、今はピンピンしてるじゃないですかっ！」

「はあ、不幸だ……」

とりあえず暮葉の提案通り、伊吹達を休ませている間に仕事をしまちまうか。

「部長とあかりも手伝えよ？」

「えっ!?! あ、あたかも働くのか!?!」

「そんな、ここは青山君の別荘でボクらの別荘では――」

「その別荘に世話になるんだからつべこべ言うなよ! つーか、こんなカオスな騒動になったのは部長のせいなんですから、責任取ってちゃんと働いてください!」

「そ、そんな――ッ!? ふ、不幸だ……っ」

うつるせえ! 不幸は俺のセリフだよコンチクショー!

その後、俺達4人は面倒な別荘の掃除を行った。一方先程まで休んでいた伊吹達も、流石に昼ごろになると体調が回復してきたようである。まずは伊吹の車酔いが治り、次に青山さんが深い眠りからお姫様のように目覚め、一番最後に現れた葵も本調子に戻ってきたようである。

よかったよかった……って全然よくねえよ。

結局体調が良くなっても疲れている事には変わりねえ。俺達は彼女達に配慮し、彼女達に仕事をさせず4人で働き続けたが……まあ、当然人手不足で当初の予定よりも遅れ、結果的に遊ぶ時間も取れずにお昼ご飯の時間になってしまったのだ。

不幸だ……ちくしょう浅間部長め。ちつとも時間短縮になってねえじゃないか。

やっぱり安全第一。公道ではスピードを落とし、安全に運転をするべきだな。

「はあ……初っ端からすげえ疲れたっ」

「ごめんねお兄ちゃん」

「その、先輩……わたし達が休んでいる間にお仕事をさせて……本当に申し訳ございませんっ」

「別にいいよ。こうなったのもあの部長のせいなんだから」

俺はできるだけ優しい口調で2人を慰める。

2人は何もしていないし全く悪くない。何度も言うがこんな事になったのは、浅間部長の運転があまりにも荒かったせいである。

「あれ？　そういえばクーにゃんは？」

「暮葉ならさっきあかりや部長一緒に買い物に行ったぞ？　アイツ、部長の運転平気らしいから昼飯の買い物に付き合うつてさ」

「ふえ、そうなの？」

「木下先輩にもその……ちゃんと謝ろうと思ってたんですけど……っ」

「んー、その必要はねえんじゃないか？」

俺が何気なくそう言うと、2人はえっ？　と言う感じで俺の事を見てきた。

ぐは……っ、2人の上目遣いに思わず死ぬかと思ったぜ。

け、けど男の意地で絶対2人には言えねえ……とにかく今は話を続けねえと——！

「暮葉も2人に怒ってなんかねえよ。何度も言うけどこうなったのは部長のせいだから」

「お兄ちゃん……うん、ありがとうっ！」

「えへへ……先輩。やっぱり先輩かカッコいいです……♪」

先程まで表情が曇っていた2人に、ようやく笑顔が戻ってきたようだ。

特に青山さんのセリフ。ちくしょう、青山さんは俺を殺す気かよ……っ！

思わずドキッとした挙句、顔まで微妙に熱いじゃねえか。

「き、気にするな……っ」

あまりの気恥しさに耐える事が出来ず、俺は2人に背を向けてしまった。

背中を向けたまま黙りこむ俺。ただ、手だけは前髪をいじる為に動いていた。

一応照れ隠しのつもりである。まあ隠れているかは微妙だけど……あれ、そういえば伊吹のヤツはどこにいるんだ？ 今気付いたけどアイツ、起きて一回現れて以降見てねえぞ？

多分外には出てないと思うが……伊吹のヤツ、一体どこで何してんだろう？

——その頃、伊吹は——

「圭介……ムカつく……っ！ デレデレしてんじゃないわ……っ！」

第125話、合宿一日目 到着編（後書き）

後書きトークコーナー！

凧紗「今回短くないか？」

圭介「いや、色々時間の都合で……」

凧紗「執筆時間がなかったと言うのか？」

圭介「はあ、まあ……っーか珍しいな」

凧紗「ん、なにがだ？」

圭介「いや、今回明智の出番なさそうなのに……お前今回は出番がないとか言わないんだな？」

凧紗「まあな、今回は騒がない理由があるんだ」

圭介「理由？　なんだよそれっ」

凧紗「まあそのうち藤島にも分かる事だろう」

圭介「そ、そのうちって……まあどうでもいいや」

凧紗「藤島……お前つくづくひどいヤツだな」

## 第126話、海水浴しないか？

お昼にみんなでラーメンを食べた。何故ラーメンかというと、青山さんの別荘がある地域はラーメンが美味しい事で有名ならしい。昼食がラーメンになったのはその為である。

立派な西洋風の建物のベランダで食べ、そこから眺める大海原。澄んだ空気と程良く吹きつけてくる風。そして——7人で談笑をしながら食べるラーメンは最高に美味しく感じたのだ。やっぱり大勢で食べるのっていいよなあ。

まあ飯の話は一旦置いといて、現在俺達は下の浜に遊びに来ていた……のだが、

「夏の間ってスバラシイ！　そう思わないかい藤島君！？」

「部長、普通こういう合宿イベントで来る砂浜って、貸し切りとかじゃないんですか？」

「何を言っているんだね藤島君？　ここは観光の街——六角町だ。観光客がいて当たり前だろう」

辺りを見回すと、少年少女やその保護者。水着のギャルや彼氏と思われる男だらけ。

そう——この砂浜は結構有名な海水浴場なのだ。

「なんでこういう時だけ現実見るんですか、部長は……」

「当たり前だ。ボクはこれでも空想と現実を区別しているのだよ」

……これほど説得力のない言葉がどこにある事やら。もし浅間部長が捕まって警察に二次元との関連性を迫られたとしても、こんなに説得力がねえんじゃすぐに牢屋行きだな。なんつーか……浅間部長は普段の行いが悪すぎるせいかな、すごくいい事を言っても全然信じられねえ。

やっぱり日頃の行いって大事なんだね。

「お兄ちゃん！」

「皆さんお待ちでしたのですっ！」

その時、聞きなれた2人の元気な声が耳に入ってきた。  
俺と浅間部長は衝動的に振り向いた。そこには樂園が広がっていたのだ。  
パラダイス

「お兄ちゃんお待ちせ！　どうかな……葵の水着？」

天真爛漫な笑みを浮かべ、葵が俺に迫ってくる。

葵は真っ赤なビキニを来ていた。発展途上とは言え中々素晴らし  
いボディライン……その、特におっぱいが俺好みの大きさだ。大  
きすぎず小さすぎずの美乳。その素晴らしき乳にはきつと夢と希望  
が詰まっているのだろう。さらに程良く肉のついた細く綺麗な脚……  
うむ、足フェチには堪らん。

「おう、似合ってんじゃないか？」

「そ、そう？　ありがとうお兄ちゃんっ」

褒める時は褒めて叱る時は叱る。それが藤島圭介流【妹】の扱い方である。

一方、浅間部長は「ボクは？」という顔で葵を見ているが、葵は部長を軽くスルー。

どうやら、葵は部長の事など眼中にないようだな。

「せ、先輩……その、えと……っ」

「あたいらはどーだっ！」

次に俺に感想を求めてきたのは青山さんとあかり。

青山さんは赤と白の縞々タンクトップスカート。ぶはっ、青山さんって控えめな感じだけど……脱ぐと結構すごいモンだな。葵にも匹敵する程良いラインである。胸も文句ナシの美乳だ。

もう一人のあかりはショーパーンタイプの水着である。可愛い事は確かだが……まあ、体型といい水着のセンスといい、これは完全に小学生である。まあ似合っている事には変わらないな。

「2人とも結構似合ってると思うぞ？」

「よっしゃ！ やったな千早！」

「えへへ……先輩に褒められた……っ」

2人とも俺に褒められて嬉しそうだ。嬉しそうだからこそ、これ以上褒めるのは教育と俺の人生の為によろしくはないな。2人は俺に好意を抱いている。その事については夏休みに入る前から気付いているし、告白もきちんと断ったハズである。

だけど2人は諦めてくれなかった。未だに俺を彼氏にしようと狙っているのだ。

しかし俺は彼女達に対して好意はあっても恋愛感情はない。そんな半端な気持ちで付き合うのは失礼なことだと思っている俺は、彼



女達の愛を受け入れないようにしている……んだけどねえ？

「けーすけ様っ！ 拙者達はどうかっ？」

今度は暮葉の声がしたので、暮葉の水着姿を見てやる為に振り向いてみた。

当然そこには暮葉がいたが、もう一人。不機嫌そうに睨んでくる伊吹も一緒にいた。

暮葉はレモンイエロー色のスカートワンピース水着。これがピンク色の水着なら、俺の嫁ことアズにゃんが着ていたのと同じタイプの水着である。

暮葉は元々可愛い容姿なので似合ってはいるんだが……まあ、なんと言うかアレだな。あかりにも負けないくらいロリロリしていて、まるで小学生の妹がいる気分である。

対する伊吹は……アレ？

「暮葉、すっげえ似合ってると思うぞ？」

「もきゅ！？ ホントなのですか！？」

「こんな事で嘘言っでどうするんだよ。本当に似合ってるぞ？」

「あ、ありがとうございます！」

「……あんた、私にはなんっとも言わないのねっ」

まずは暮葉を褒めたがその途中、ツツパリ伊吹ちゃんが不満を漏らしてきた。

伊吹ねえ……確かに水着はとっても似合ってるよ。

ロリっぽくて小柄な体躯ながらも、女の子らしい体つきではある

と思うよ？

けどねえ伊吹さん、貴女のその水着は……。

「ごめん伊吹。けど似合ってると思うぞ？」

「……っ、そ……それって馬鹿にしてんのかしらっ？」

「いやいやマジだって！ やっぱ伊吹にはスク水が一番——」

っと言いかけた刹那。伊吹は身を引きつつ、右足をゆっくりと引いていった。

なにをするのかな？ なんて平和な事を思ったのは一瞬だけだ。

「に、二回死ねっ！」

どこかで聞いた事のあるセリフを放ち——伊吹は勢いよく右足を上げてきた。

上段廻し蹴り。

一瞬で感じた恐怖と上げられた足を見て、反射的に身を引こうとした俺の首筋に、強烈な上段廻し蹴りが突き刺さってきた。

「ぐ、はっ!？」

どうにか体勢を立て直す——なんてことが、ド素人の俺に出来るハズもなく、喰らった蹴りの威力に俺の身体は肌に右方向へぶっ飛んだ。

「け、けーすけ様っ!？」

「はわわ……せ、先輩……っ?」

「今の蹴り。く、首筋にクリーンヒットしてたよ!？」

「おい！　だいじょーぶか圭介っ!？」

4人の女子が俺を心配してか、砂浜に倒れる俺に駆け寄ってきてくれた。

4人とも心配そうな目で俺を見つめるが……実は意外と大した事がなかったり。確かに伊吹の上段廻し蹴りは最高に強烈だった。おそらく俺がそこらの不良か何かだったら、今の蹴りで確実に気を失っていただろう。それほど強烈な蹴りだったんだが……俺の日常を思い出してみよう。

ある時は明智の飛び廻し蹴りをこめかみに喰らい、ある時は永渕の破壊的な右ストレートを顔面にモロに喰らい、ある時は早川がぶっ飛ばした残骸に身を打たれ、またある時は白藤が放つ鉄球を凄まじい勢いで全身に喰らった。

半年でこれだけダメージを受けても、無事に生きているわたくし藤島圭介。

——そう、伊吹の加減した蹴り程度じゃあもう、ダメージにすらならないのである。

「だ、大丈夫だ。身体は超元気ですたい……つか伊吹！　いきなりなにするんれしゅかつ!？」

「うっさい！　無視すんなスク水褒めんなばか圭介っ!」

「なんで!？」　無視はしてねえし、スク水姿を褒めて何が悪いんだよっ!」

「全てが悪いわよ！　どーせ圭介は私の事……子供みたいでかわい

いとか……ごによごによ」

なんだ？ 段々声が小さくなっていったせいか、最後のほうは全く聞きとれなかったぞ？

けどとりあえず、子供みたいって所までは聞きとれた。

コイツ……もしかして自分の体型がコンプレックスなのか？

「んー、気にする必要はないんじゃないか？」

「な、なによ……どういう意味よ」

「スク水だって立派な水着だよ。むしろ、だがそれがいいって人だっているんだぜ？」

「……………」

伊吹は複雑そうな表情を浮かべ、少し俯いていた。

「つかコイツ他に水着が——って、あったらスク水なんて着てこないか。そういえば伊吹が水遊びだなんて珍しいもんな。伊吹は俺がああ事故以降——つまり、俺が水恐怖症になっから全く水遊びをしなくなってしまったのだ。多分俺に配慮しているんだと思うが……。」

とにかく、ずっと水遊びを避けていたせいで、彼女は今の身体に合う水着を持っていない。

持っていたとしてもスク水だけなのだ。でも俺はスク水好きだけどなあ……むしろ、スク水こそ一番その人の魅力を表す素晴らしい水着だと思っている。

あとは体型の事だな。伊吹は小柄で思春期で止まっちゃったような感じだ。

まあ、一応高校生はまだ思春期の後期らしいが。でも女の子だか

ら気にはするよな、やつぱりここは俺が伊吹の不安を取り除いてやろう。

見せてやるぜ……エロゲーで鍛えた体型にコンプレックスを持つ人の慰め方を——ッ！

「あと……男の俺が言うのもアレだけどさ。身長とか胸の大きさって人それぞれだろ？　むしろそれがお前の個性になったりするんじゃないのか？」

「ちょ！　べ、別に身体の事なんて気にしてないわよっ！」

「じゃあ、さっきの子供みたいでかわいいからなんとかって……あれはなんだったんだ？」

「……っ、す、スク水の事よ……っ」

そう答えた伊吹は恥ずかしそうに視線を逸らし、顔も紅葉のように赤く染まっていた。どうやら図星みたいだな……ホント、伊吹ってわかりやすい子だよな。

「ま、まあそう気にするなっ！　世の中もっと小柄な人だっているんだ。伊吹だって十分お姉さんに見えるところだぜ？」

「……それ、ウソじゃないわよね？」

「ウソなんて言うかよ、だからもう元気出してくれよ。お前が不機嫌だと俺、なんつーか……とにかく胸も痛えし嫌なんだよ」

「……はあ。し、仕方ないわね……っ！　あんたが可哀想だから許してあげる！」

「えっ？」

なんだ……俺は許されたのか？ 伊吹がいつもの伊吹に戻ったようだ。明るくて、ツンツンしていて突っぱねたいものの伊吹に――。

「け、圭介……っ」

「ん？」

「その……ありがとう……っ」

しかも伊吹は普段俺には絶対に言わない――……ありがとうの一言を言ってきた。その時伊吹が見せたなんとも言えぬ表情。それはまるで、恋でもしている女の子のように可愛かった。

そういえば重原曰く、伊吹には好きなヤツがいるらしい。

ずっと気になっていたんだよね……結局伊吹の好きなヤツって誰なんだ？ 伊吹に好かれるヤツって何か羨ましいというか、幼馴染の俺としてはムカつくというか。

とにかく、一度でいいからソイツのツラを拝んでみたいぜ。

「おい、らぶらぶで幸せは時間は終わったか圭介？」

「そうですね。けーすけ様、もうお喋りは終わったのですか？」

びくっ！ 俺の背筋に冷たい何かが走る。直感的にヤバいと感じる。俺は恐ろしい何かの片鱗を感じながら、恐る恐る顔を後ろへ向けると――指の間接を鳴らすあかりと紫色のオーラを放つ暮葉の姿があった。

「え、えーっと……お二人は何をそんなに怒ってるんでせうか？」

「とぼけちゃうのですねけーすけ様？」

「圭介、アンタはあたい達の事を馬鹿にした」

「えっ、ちょっと待て。俺がいつお前らの事を馬鹿にしたんだ？」

「伊吹さんよりも小柄な人がいるって言いましたよね？」

「それって……地味にあたい達の事を言ってるよな!？」

ええええええええええー！ ま、まさか俺こんな事で2人に怒られてるんですか!？」

そうか、忘れていたぜ。コイツらは年齢は同じだが外見はロリキヤラだ。そしてコイツらも自分の体型にコンプレックスを抱いている。

つまり、俺が伊吹を慰める為に言った言葉で傷ついてしまったのだ。

「く、暮葉さんにあかりさん？ アレを言ったのには色々深い理由わけがあります……」

「拙者を傷つけたけーすけ様にはお仕置きなのです！」

「圭介、アンタは確か水恐怖症だったよな？」

「えっ？ ちょっと待て、それ誰に聞い——」

あかりが何故俺が水恐怖症である事を知っているか、それを問お

うとしたが……その、後ろで葵が申し訳なさそうな顔をしてるんだよね。

わかったぞ……アイツだな！ 葵が俺の弱点をばらしたんだな！  
しかも、隣にいる青山さんの何とも言えぬマジ反応。青山さんも俺の弱点知ってんのかよ！ ちくしう葵め後でこっ酷く叱ってやるからな！

けど、その前に暮葉とあかりから逃げなければ――！

「木下先輩！圭介を追い詰めるぞ！」

「了解なのです！」

「うわあああああゝっ！」

お、追ってきた！ 2人がダークな笑みを浮かべながら追ってきた！

俺はそんな恐ろしい2人から逃げるべく、我を忘れて全力疾走をする——が、その時俺の足に恐怖のような感触を得る。恐る恐る下を見ると……。

海水。

そう、俺の足は海水に浸かっていた。前を見るとそこには無限に広い大海原。じわじわと身体が震えて感情も高ぶり、冷や汗も額からダラダラと流れ始めて、

[illegible]

「冗談だと思ってたけど、圭介ってホントに水恐怖症なんだな……」



「にゅふふ、けーすけ様！　そこでしばらく生き地獄を味わうがいいのです」

誰かたしゆけてくらしゃあいっ！　ホント水だけは勘弁して欲しいんです！　これだけは怖くてもう達打ちできないんですよ。いやホントマジっす、誰か助けてええええええええええええっ！

……その後、しばらく俺はギャラリに笑われ、水に恐怖し生き地獄を味わったのである。

ちくしょう……不幸だ不幸です不幸すぎます。

合宿一日目の昼にしてこの調子。もう、ホントに先が思いやられます……。

「……ところでボク、一応部長なのに完全に忘れられてないかい……ぐすっ」

## 第126話、海水浴しないか？（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「ハア……」

圭介「どうしたんだよ黒木」

黒木「お前……羨ましいよな」

圭介「なんでだよ。俺今回散々な目に遭ったんだぞ？ 伊吹に蹴られるわ暮葉とあかりに海に追いやられ、あんな人前で取り乱しちまうわ……はぁ」

黒木「いや！ 幸せだろ！」

圭介「どこがだよ!？」

黒木「俺、伊吹ちゃんに蹴られたいんだよ！」

圭介「……ドMの変態かよ、救いようねえな……」

## 第127話、違います！俺たちナンパなんかじゃないです！

さて、相変わらず海で遊んでいる俺達。女子陣は海で泳いだりビーチバレーをやったり、果てはスイカ割りに挑戦していた。一方俺と浅間部長は2人で寂しく浜辺を歩いていた。

なんでかって？ 俺が水恐怖症だからだよ……浅間部長はこれでも俺に気を使って、一緒に陸上でいてくれてんだよ。まあ一緒にいるのが浅間部長なせいかもしれないけど嬉しくねえが。しかも浅間部長はやっぱり真性の馬鹿でその上変態であり、考えている事も本当に口でもない事であった。

「しかし、中々女子だけってのがないよね」

「部長、やっぱりナンパはまずいと思うんですが……」

「いいじゃないかい！ ナンパ素晴らしいじゃないかい！」

「いやいやいや！ ただのチャラ男だろっ！」

もはや黒木や赤佐レベル。しかもナンパって多くの地域で条例で規制されてるらしいぜ？

下手すりゃナンパで犯罪者扱いかもしれないねえ……つか、最近のガードの堅い女の子ホイホイついて来るのだろうか？ やっぱりナンパって成功率は超低いんじゃないや……。

「君かわういゝねえ？」

「俺らさ今チョー暇なんだケドオ、よかったら一緒に遊ばねえ？」

「帰りはおくってやつからよお！ まっ、いつ帰れるかわからねえけどな」

「ぎゃっはははははは！」

あゝあ、見ちまったよ不快なものを……。

小麦色に焼けた金髪髭面グラサンの男と、茶髪のツンツンヘアーの男が、一人の女の子にしつこく絡んでいやがる。ナンパだ、どう見てもアレは浅間部長がやろうとしていた事だ。夏の海でナンパと言えば定番のイベントではあるが、やられる側としては迷惑以外の何者でもない。

しかもねえ……フツのイケメンにナンパされるならともかく、アイツらってどう見てもただのヤンキーさんじゃねえかよ。下心丸見えな上に危なっかしいなあ……。

「ふ、フフフ……」

「どうしたんですか部長？」

「藤島君、あの子を助けに行こう！」

「顔も見えてないのによく言いますね。つか、危ないんじゃないですか？」

「大丈夫！ イザという時は君に任せる！ 藤島君、結構喧嘩強いんでしょ？」

……サイテーだ。ここにサイテーの男がいやがる。

自分の愛する部活の大切な部員を、自分が逃げる為の時間稼ぎに使おうとしている、サイテーの下衆野郎がここにいるぞ？ つーか、

なんで喧嘩する前提なんだよ。

「……言っとくけど、停学になったら嫌なんでやりませんからね」

「うう……けど、ここでボクらが女の子を助けたらフラグが立つよ！？」

「立たねえよ！　ここは現実リアルですよ！？」

「いや、立つ！　ボクの予想では50%の確率で立つ！」

「高いんだか低いんだかわかんないけど、まず現実リアルじゃそんなフラグ立たねえから！」

「よし、そうと決まれば行くよ藤島君っ！」

「えっ？　ちょ、待てバカ部長っ！」

ああもう仕方ねえな。いいですよわかりましたよ、やればいいんでしょやれば。とりあえず女の子助けてカッコつけてやりますよ。まあ、どうせここは現実世界リアル。浅間部長の妄想のようなハッピーなフラグは立たないだろう。

けど、男は基本的に馬鹿である。そこに女の子が絡んでいたら――この足を止める事ができない。

結局俺は部長について行った。部長はどこに隠していたのやら……サングラスを取り出しキメるようにそれをかけた。ああ……やだなこの人の後ろについて行くの……。

でもこうなったら仕方ねえよな。俺も少し本気モードになるとしますか。

「よおオ久しぶりだなテメエ！」

「うぐっ！ な、なんだテメ——」

「ひ・さ・し・ぶ・り・だ・なア！」

不良の一人、金髪髭面グラサンの男に浅間部長は近寄り、激しく腕を肩に回した。

うわあ……普段と口調が違うよ。これが浅間部長の本気、素晴らしい演技力である。

馴れ馴れしい事この上ナシ。しかもなかなか迫力があるし……不良がビビってる。

こりゃあ俺も負けてられませんな。俺も海パンのポケットに手を突っ込み、目つきを鋭くメンチを切りながらも一人の不良、茶髪のツンツンヘアーの男に接近した。

「こんな所で会うなんて奇遇だなあオイ！」

俺達が女の子の前でしつこく2人の不良に絡む。当然俺らの存在は浮いている。周囲からの注目度は悪い意味で抜群である。柄の悪い人が柄の悪い人に絡むこの光景を見てか、一般人の誰かか「警察呼んだほうがいいんじゃない？」と言っている。

まずいぞ……警察呼ばれたら俺の学生生活が終了するぜ。停学はマジで勘弁、そんなものを食らったら今後の進路にも関わるだろう。一度でも警察沙汰になったら多分、どこの会社でも働かさせてくれないハズだ。

ええい！ もうこうなったら、警察かライフセーバーのマッチョな兄さんが来る前に、さっさと不良共を追っ払って女の子を助けよう。

「テメエら一体何様——ふ、ぐっ！」

「一般の方に迷惑だろ？　そこの裏に行くぞこの野郎オ！」

何か文句でも言おうとした不良の口を、浅間部長がその手で強引に塞ぎ、強気な様子でかなりストレートに啖呵を切った。浅間部長……ホントにいいのかそれで？

もしマジで殴り合いになったら、浅間部長みたいなヒョロヒョロは即ノックアウトだぞ。

かといって、こんなヤツらと殴り合うのは面倒すぎる……。

「お、おいタケヤン……もう行くべ？　コイツらオカシイぞ？」

「ふ、ぐあ——ぷはあっ、お……おう。ちくしょうテメエら次に会ったらぶち殺すからな！」

茶髪のツンツン野郎に言われ、浅間部長から解放された金髪のグラサン。

彼は負け犬の遠吠えとは思えないセリフを吐き、森の中からテイーガーが現れ、ビビッて逃げ出す連合軍兵士の如く彼らは逃げていった。

……なんだろう。初めて言葉だけで荒事が終わった気がする。

浅間部長すげえ……現役ヤンキーを退かすその啖呵。もう……いつその事写真部じゃなくて演劇部に入ればよかったのに……。

まあとにかく騒動は終わった。さあ、後は女の子に話しかけて——って……あれ？

「やあ、大丈夫だったかい？　危ない所だったねえ」

「く、クソ介……？　それにクソ介の部活の部長……？」

「…………えっ？　い、生駒！？」

これはなんという不幸。俺達が助けた女の子は生駒純奈——俺のことを嫌う明智LOVEなガチレズのニヤ厨のオタク少女であった。彼女はワンピース水着を着ていた。やっぱり生駒は健康的でスタイルがいいですなあ。

……でもなんで？　なんで生駒が六角の砂浜にいるんだ？

そして、その生駒はよからぬ事を思いついたように、嫌らしくニヤつと笑みを浮かべ、

「ナギちゃ~~~~ん！　不良に絡まれたよ助けて~~~~っ！」

はああああああ！？

い、生駒のヤツなんて事を叫んでんだ。まさか明智にSOSをするなんて……そんな、反則じゃねえかよ勝ち目が0じゃねえかよ！  
っーか、明智まで海に来てんのかよ！？

「私の友達に——手を出すなっ！」

生駒のSOSコールを訊きつけ、黒いビキニというせくしいで、その……ボリウム満点のお胸と殺傷力の高い抜群のスタイルのせいか、妙にアダルトな匂いのする明智が飛んできやがった。

別に比喻表現ではない。本当に明智は空を飛んでいた——、

「ぐ、はあ——っ！？」

「ぶ、部長っ！」

そして明智は綺麗に孤を描く右足を、浅間部長のこめかみに打ち



込んだ。

間違いねえ……アレは俺が明智と戦った時に喰らった、ローリングソバットだ。

俺でさえ脳震盪を起こした一撃。ド素人な上にひ弱な浅間部長が耐えられるわけもなく、明智の蹴りを食らった浅間部長は一撃で気絶してしまった。

——って安心してられねえ、次に狙われるのは俺じゃねえかよ！

「次は貴様だ。覚悟しろ下衆野郎——正義の鉄拳を喰らえ」

なにカッコいい事言ってるんだ！ 明智め、戦隊モノのみ過ぎじゃねえのか！？

明智の体重を乗せた右ストレートが、俺の顔面目がけてぶっ飛んでくる。

……冗談じゃない。そんな一撃死んでも食らいたくねえ。俺は反射的に右方向へ跳躍する事によって明智の右拳をギリギリ回避する。ゴロゴロと砂浜の上を転がり、細かく熱い砂や転がる石や貝殻などで身体を痛めつつも、次の攻撃に備えて立ちあがり身構えた。

予想通り——明智は空中での胴回し回転蹴りを仕掛けたきたが、前に明智と戦った時の記憶や俺の直感で予想はできていた。その為俺は明智の攻撃に反応する事が出来たのだ。

右足を捉え、俺は咄嗟に顔面を守るように左腕を上げる。こめかみを狙った一撃は、鈍い音を立てて俺の右腕に直撃する。ミシミシと言う嫌な音が響き、思わず顔を歪ませてしまう痛みを感じた。

……まあ、こめかみに直撃よりはマシだな。

「……ッ！ できる……ッ！」

「できるじゃねえ！ 俺だよ俺、藤島圭介だよ！」

「…………えっ？ あっ…………ふ、藤島！？」

ふう…………ようやく明智は俺に気付いたようだ。

やれやれ…………まさか、もう戦うことはないだろうと思っていた相手と、こんな形で再戦する羽目になるとは…………何というか不幸とか言いようがないね。

…………さて、戦いが終わった所で事情を訊くでしょう。

なんでここに生駒と2人でいるかをな…………ッ！

**第127話、違います！俺たちナンパなんかじゃないです！（後書き）**

・後書きトークコーナー！

圭介「いやあ、見事に命中したな」

浅間部長「……………」

伊吹「ダメね、まだ気絶してるわ」

暮葉「相当重傷だったのですね」

千早「…………このまま気絶してればいいのにつ」

あかり「…………そのまま死ねよな」

葵「2人とも！心の声が漏れてるよ！？」

## 第128話、何かの片鱗

「ホントにすみまなかった、藤島！」

「いや、わかればいいんだよ……」

その後、明智は生駒の頭を無理やり抑えて俺に頭を下げてきた。浅間部長は未だに絶賛気絶中であるが明智は彼にも謝りたいようで、大変申し訳なさそうな表情をしていた。

……まあ、今回は明智は悪くないしな。悪いのは明智にSOSコールをした生駒、あんな事を叫びやがったせいで俺たちは攻撃を受けたんだ。浅間部長も無様に気絶する事になったんだ。

おのれ生駒……イタズラでも度が過ぎるぞ。今回は流石の俺も少しムツとききましたよ。

「その、そっちのヤツは大丈夫なのか？」

「ああ、部長はひ弱だけど丈夫だから多分大丈夫だよ」

「ほ、ホントか？」

「妹に毎日シバかれてるっばいしな。多分大丈夫だろう？」

「そ、そうか……けどホントにすまなかった」

「だからお前は悪くないって！ そんなに気を落とすなよ」

どうして騙されたヤツがここまで落ち込んでいて、明智を騙した

真犯人は腕を後ろに組んですましているんだよ。しかも自分は全く悪くありませんと言わんばかりに、口を尖らせて俺たちから目を逸らしているし……あの野郎、全く反省していねえな。

「すみにゃん。すみにゃんがあんな事を言うからこうなったんだ、その態度はないだろう」

明智も生駒の態度にお怒りの様子。

いいぞ、もっと怒ってやれ。つーか拳骨しても俺は文句言わねえよ。

「ぶーっ、不良に絡まれていたのは事実だもん」

「それでもだ。藤島達はすみにゃんを助けてくれたんだろう？ それを不良扱いして私に攻撃させるなんて……下衆にも程があるだろ」

「うう……ごめんなさいクッ……圭ちゃん」

コイツ今クソ介って言いかけたぞ。そしてなんだよ圭ちゃんって？ そう言えば生駒は俺のことを最初はそう読んでいた気がするな。コイツ……猫かぶってやがる。普段は俺のことをクソ介呼ばわりする癖にいきなり圭ちゃんだって？ ありえねえだろ……しかも生駒がこんな素直に謝るハズがねえ。

「すみにゃん。あっちの人にも起きたらちゃんと謝るんだぞ」

「はぁ……い……っ」

今回は浅間部長も一応被害者だしな。まあ……ちゃんと謝っつけよ。

アレでも心は結構ピュアなんだ。見知らぬ女の子に蹴られたんだぜ？ 多分浅間部長は絶賛片想い中の子に「キモイ」って言われるくらい、心に深い傷を負ったハズである。

「……あ、先輩いたよ……っ？」

「あっ、ついでにバカ兄貴が死んでるっ！」

「お兄ちゃんっ！」

「けーすけ様っ！」

おっ、どうやら女子陣がここに来たらしい。というか、あの様子だと女子陣は俺たちのことを探していたみたいだな。でも……浅間部長の事を心配しているのがあかりだけって、浅間部長ってホントに嫌われ者な上に不憫な人……っ。

「ちょっとあんた。いきなり浅間先輩と一緒に消えたけど、こんな所で何やってんのよ？」

「いやあーその、伊吹さん？ 色々面倒な事が起こっちゃいましたねえ……アハハっ」

「アハハじゃないわよ！ みんな心配してたのよ？」

「え？ 心配してたって……伊吹もか？」

「……っ？ べ、別に私は心配なんか……あんたはどーせ無事だろうしっ！」

ひどいやひどいや。伊吹はホントに俺のことを心配してねえんだ……うう。

でも、ツツパリ回答が返ってくる事くらい、訊いてみる前からわかってたけどさ。でもこうしてストレートに言われるとすっげえ傷つくよね……はあ。

「なんだ、藤島は団体さんだったのか？」

「もきゅ？　——あっ！　明智殿に生駒さん！？」

明智の声に反応し、ようやく明智達の実在に気がついた暮葉は、何故ここに明智達がいるのかと言わんばかりに驚いていた。そりゃ驚くよね……最初見た時俺だって驚きましたよ。

「ありえ、木下じゃん？　それに何でクソ介の部活のメンバーが揃ってるの？」

「拙者達、写真部の合宿でこちらに来ているのです！」

「合宿？　ねえナギちゃん、普通写真部って合宿とかする部活なの？」

「うーん……常識的に考えたら、合宿するような部活ではないぞ……っ」

ですよねえ……まあ、合宿と言っても浅間部長の思いつきで、実質中身はただ海辺の行楽地<sup>リゾート</sup>で遊ぶだけだもんね。全然写真部らしい活動はしていないし、実際俺はおろか浅間部長や青山さんでさえ、本格的な写真撮影用のカメラは持ってきていない。

一応一夏の思い出を撮る為、小型のデジカメは用意してあるが…

…まあ、写真部らしい活動をしていない事には変わらない。

「……その、えっと……合宿と言っても遊びみたいなものなんです……っ」

「そうそう！　そこで倒れている兄貴の提案なんです！」

青山さんが身体を小刻みに震わせながら、勇気を振り絞って明智達に事情を説明した。

よく頑張ったな青山さん。あと……あかりのヤツ敬語喋れるじゃねえかよ。普段敬語で話す所なんて見たことがなかったせいかな、あかりの敬語は凄く新鮮に聞こえるよ。

「お兄ちゃんお兄ちゃんっ、結局ここでなにがあったの？」

「葵……気にしないほうがいいと思う。なあ明智？」

「えっ？　あ、うん！　葵は深く考えなくてもいいんだっ」

「ええ〜？　なにがあったかいごく気になるよ！」

「とにかく、気にする必要はないんだ。私と藤島達の間にはなににもなかったんだ」

明智、その言い訳はかなり苦しいと思うんだ。現行犯逮捕されたのに「俺は何も盗んじやいねえ！」と叫ぶ、下着ドロがする言い訳以上に苦しいと思う。

そんな明智の言い訳に葵どころか、暮葉や伊吹まで疑いの目で俺たちを見ている。

……はあ、仕方ねえ。いつまでもこんな話を長々と続けるわけに



もいかんし、ここは俺が助け舟を出してやるとしようか。

「言っとくけどホントに明智の言う通りだぜ？ 浅間部長はナンパしたら女の子に殴られただけなんだ」

「……けーすけ様、それホントの話なのですか？」

「ホントだって。なあ生駒？」

「あ、うん……」

よっしゃありがとう。話を合わせてくれた事だけは感謝するぜ、生駒！

まあ、実際浅間部長はナンパしようとしていたし、生駒を助けようとした動機も、女の子と仲良くなりたいたいからと言う不純なものだ……俺が言った事も強ち間違いではないハズだ。

けど、それだけで疑いが晴れるわけないし……そうだ、こうなったら別な話題を振ってこの現状を忘れさせる作戦で行こう。そうと決まれば早速、明智達にここへ来た理由を尋ねるか。

「そういえば、なんで明智はこんな所にいるんだ？」

「ああ、六角にはすみにゃんの実家があってな、夏休みを利用して遊びに来ていたんだ」

「実家？ 生駒って元々六角に住んでたのか？」

「うん！ 高校入学と同時に古宇坂に引っ越したんだけどね、そこで出会ったお友達1号がナギちゃんなの！ 私は思わずナギちゃんのクールさに、内に秘めた可愛さに……そのっ、ずきゅんって胸

を撃たれて惚れちゃったんだよ！　私はもうナギちゃんしか見られないゾッコン――」

なんてこったい……暴走した生駒が明智への愛を語り始めた。これはしばらくうるさいぞ。きっと小一時間は語り続けるだろう。

「なあ明智、どすりやいいんだこれ？」

「すみにゃんのことだ。気が済むまで語り続けたら大人しくなるだろう」

「つまり放置しとけて事か？」

「うん、それが最善の策だと思うぞ」

やっぱり放置プレイが一番かあ……まあ確か、こんなのに構っていたら時間の無駄だよな。

無駄に疲れそうだし。ここは明智の案に乗っておくでしょう。それにしても意外だなあ。生駒が他所の街出身だったとは……まあ、出身地なんて人それぞれだから別に気にする事でもないよな。

「それと藤島」

「ん、なんだ？」

「……、  
「気を付けろ」

「はあ？　お、おい！」

明智はそれだけ言うと、生駒の所へ行き無理やり彼女を取り押さ

えた。おいおい、放置しておくって言った言いだしっぺが、初っ端から放置していねえじゃないかよ。

けど、そんな事よりも……気を付けろって一体どういう事なんだ？  
なんか、すっげえ嫌な予感がするんだが……ちくしょう、いきなりなんなんだよ明智のヤツ？

## 第128話、何かの片鱗（後書き）

・後書きトークコーナー！

ミネット「どうも！ 最近全然出番がないミネットだよ！」

悠「……チッ」

ミネット「今回もミネット達の出番なさそうだけど、一体いつになったら出番回ってくるのかな！？ すっごく心配なんだよ！」

悠「おいクソガキ……うっせエぞ」

ミネット「ひどい！ 貴方は出番がないという危機的状況を何とも思わないの！？」

悠「あーはいはい、そりゃ深刻なこったア……」

ミネット「とにかく……出番がなくて不安なんだよ……っ」

悠「そのうち回ってくるんだろ。だから黙っとけクソガキ」

ミネット「ぶうっっ」

## 第129話、男だって叫びたい時は叫びますよ！

散々下の砂浜で遊びまくっていた俺たちが別荘に戻ったのは、時刻はまもなく5時になるうとしている頃であった。別荘に戻った俺たち、家事スキルが最高100だとすれば、たったの10しかない俺の代わりに、浅間部長が腕によりを掛けて夕食の準備を進めていた。

ちなみに、今日の晩御飯はカレーだ。浅間家のカレーは辛いらしいが……期待しておこう。

それでも俺は辛いカレーが大好きなのだ。

「よし、後はしばらく放置しておけば大丈夫だな」

「部長は良く煮込むほうなんですか？」

「まあね、それより藤島君……我々の目的を達成する時が来たぞ」

「あ？ なに言ってますか部長？」

部長がやたらと真剣に言う。コイツ……絶対よからぬ事を考えてやがる。あの部長が無駄に真剣な顔をするなんて、ロクでもない事を考える時だけだぜ。

「フフフ……藤島君、女子は今みなでお風呂に入っている」

「は？ ま、まさか部長……」

「そのまさかだよ！ ボク達はこれから決死の覚悟で――」

「待て！ 犯罪だろ！？」

「何を言っているんだい君は？ ボク達がこれから行うものは聖戦である。聖戦を行うことは罪ではない。そもそも君は聖戦の意味を理解しているのかね？」

「神聖かつ正義の為の戦争だろ？」

まあ、あくまで宗教的な意味での事だし、それが正しいとは到底思えねえけど。

今回の場合もそうである。どうせ浅間部長にとっての聖戦なんて、世間から見れば立派な犯罪にしか見えないだろうぜ？

「そう……正義の戦い——つまりこれからボク達にお風呂に突撃を仕掛けるのだ！」

「てめえ……やっぱただの犯罪だろ？」

「ボクらの聖戦に法もクソもあるか！ 己の信じる道を突き進む事こそ正しい事なのだ！」

「一見立派な事言ってるように見えますけど、やろうとしている事は最低ですよ！？」

「大丈夫だ！ イザと言う時は藤島君。君を盾に——」

「ふっざけんな！ 俺はやらねえからな、勝手に一人でやってろ！」

「チッ、仕方ないね……こうなったらボク一人で聖戦に赴くさ。後で後悔しても知らないよ」

後悔なんかしないさ。むしろ後悔するのは部長のほうだと思うんだよね。だってねえ……お風呂覗きなんてサイテーじゃないですか。そんなのを女の子達が許すと思いますか？ とにかく俺はこういう犯罪じみた事には手を出さないの。そりゃあまあ……女の子の裸は見たいよ？

暮葉とあかりという禁断の果実。伊吹の思春期止まりな貴重な身体。青山さんと葵のよく育ちましたね的な素晴らしい身体……ぐは、想像しただけで鼻血が出そうだ。

しかし！ だからと言って見ていいわけじゃねえ。

うん、ヤバい事には手を出さないほうがいい。ここは我慢して一人でのんびりしていよう。

それに……少し考え事だっけしたいしな。

『気を付けろ』

……なんだったんだろう。あの明智の警告は……？

未だに意味がわからない。一体俺は何に気を付ければいいんだ。俺をことを狙っているヤツが近くにいて意味なのか？ でもねえ……サヴィエトじゃあるまいし。そもそも明智はサヴィエトのことなんて知らないハズだ。だからそんな警告をしてくるハズが……いや、待てよ？

そう言えば秋葉原に行った時に暮葉と何を話したっけ？

『やっぱり、俺らのすぐ近くに連中のスパイがいるって事か？』

スパイ……それに対する暮葉の回答は、可能性は高い……だったかな？

つまり、友達のうち誰かが連中のスパイで……って、何言ってるんだよ俺は。だからって友達を疑っていい理由にはならねえだろ。少

なくともここにいるヤツらが、連中のスパイだとは思えない。

いや、思いたくもない。第一スパイなんてホントに近くにいるのかよ？

……でも、じゃあ今日の明智の言葉は一体なんだったんだ。明智はどうして俺にあんな警告をしてきたんだろうか？ 何か理由があるハズだ……でないと普通は冗談でもあんな事は言わないだろ。

「キヤーツ！」

あ？ なんだ、風呂のほうから悲鳴が……ってわかりきってる事か。

「んここ……この馬鹿！ へ、変態っ！」

「早く死ねよなバカ兄貴！ 瞬く間に——now now now！」

「天神無双木下流“天下統一”！」

今、浴室では浅間部長vs女子陣が死闘を繰り広げている。戦況は女子有利、あかりは多分浅間部長を殴りまくっており、暮葉は何やら必殺技を繰り出しているようだ。

後は伊吹かな？ アイツも何気に暴力的だし……多分黙っていないハズだ。

そして、次の瞬間——、

「ふべらっ！」

ボロ雑巾のようなぐちゃぐちゃになった浅間部長が、風呂場から吹っ飛んできた。

あゝあ……まあ、予想通りだよ。この状況で男が女に勝てるわけ



がない。

「我が一生に……い、一辺の悔い……なし……ぶはっ」

「あゝあ、死んじまったよこの部長……」

まあいいや、浅間部長はヒョロいが結構丈夫ではある。明智のあの蹴りを喰らってもとりあえずは生きていたし、多分放っておいてもそのうち復活するだろう。

……とりあえず俺は男の寝室に戻り、そこに置いてあった鞆の中からラノベを取り、女子が上がってくるまでそれを読んでいる事にした。まあ、ラノベはいい暇潰しになるよね。

何よりISだし……はあ、これはブヒれるね。

「いい湯だったなあ！ あたい広い風呂に入ったの久しぶりだっ！」

「……えへへ、楽しかったね……っ」

「千早の別荘ってお風呂大きいよね！」

それから数十分後、女子達が風呂から上がってきたようだ。

一年生三人組はかなり上機嫌の様子だ。どうやら、浅間部長乱入のことなんてあまり気にしていないようである。まあ、気にしたら負けってのもあるかもしれないが。

「圭介、風呂いいわよ？」

「おう」

伊吹が濡れた髪をタオルで吹きながら、俺に入ってもいいと言ってきた。はぁ……お風呂上りの女の子ってホントにいいですよねぇ。見ているだけで幸せな気分っすよ。

さて、浅間部長はまだ気絶しているようだし……仕方ねえ、カレーの準備はあかりに任せるとして俺は風呂に入るとしますか。もちろん一人で……。

……そういえば、暮葉はどこ行ったんだろうな？ まあいいや、部屋にでもいるんだろう。

その後、俺はいったん寝室に行って着替えを用意してかに、着ていた服をすべて洗濯機に叩きこんでやった。つか、洗濯機があるなんて……流石青山家の別荘である。

ガラスのドアを開けて中に入ると、うわぁ〜お。確かに風呂は広い、これなら数人で入っても全く問題はないだろう。下手すりゃ、宿泊で行く青年の家の風呂より広いんじゃないか？

「もきゅ！？ け、けーすけ……さま？」

「え、この声って暮葉……のわあああああああつ！？」

不意に暮葉の声がしたので、思わずキョロキョロと首を左右に動かすと……なんと、湯船にバスタオル一枚で立ち尽くす暮葉の姿があった。

ちよっと待てコラッ。なんで古典的ラブコメ展開が発生してるんでせうか？

一体いつこんなフラグを立てたんだ！？

「うおおおいっ！ なにやってんだお前！？ 伊吹達と一緒に上がったんじゃないのか！？」

「すみません！ その……拙者長風呂なのですが、みんなと一緒に

上がったらやっぱり物足りなくて……けーすけ様、ホントに申し訳ないのです！」

いやあ、まあ……確かに暮葉は長風呂だったな。

毎日我が家の風呂に暮葉を入れてるんだ。それくらい理解はしていたさ。

けどねえ、伊吹は皆上がったって言ってたし……これはいくらなんでも不意打ちすぎだろ！

「あの一、暮葉さん？ まさかとは思いますが……そ、そのタオルの下は？」

「お、お風呂ですから当然全裸ですっ！」

「ぐはっ！ う、ぐぐ……っ」

あつぶねえええっ！ 予想通りだけどやっぱり衝撃的や、思わず鼻血を噴く所だった。

やべえ……なんなんですかこのハッピーなイベント？ っていうか願い通りだよ、まさかのラッキースケベが来ちゃったよ。けど、いざラッキースケベが起るとその……アカン。理性を保つという作業が滅茶苦茶苦痛に感じる！ どないしよう、襲ったらやっぱり負けですよね？

「あとけーすけ様……そのっ」

「ハイ？」

「……し、下…………っ」

「下？」

こちらから目を逸らして、小さな声で呟いてきた暮葉。

オイオイオイ……これは何の変態プレイだよ？ このままだと、お兄さんの短距離弾道ミサイルが暴走しちまいそうですよ。

っていうか、暮葉の下ってどういう意味なんだ。下に何かあったっけ……？

そう思いながら、俺は視線を下に向けると——そこでやっと言葉の意味を理解したのだ。

当然誰もいない想定で風呂に入った為、タオルなんてものを巻いているわけがない。

つまり……俺は母親の中から生まれてきた時と同じ姿なワケで……。

真っ裸の男のアレを年頃の女の子に恥ずかしそうに、でも地味にガン見されている……。

「きゃあああああああああああああああああああああああ  
あああっ！」

もちろん叫びました。裸をオッサンに見られた女の子のように、腹の底から叫びました。

俺……男なのになんで叫んでるんだろ？ まあいいや、とりあえず叫んどけ……。

**第129話、男だって叫びたい時は叫びますよ！（後書き）**

・後書きトークコーナー！

圭介「しかし、なあ？」

凧紗「どうしたんだ、藤島？」

圭介「この後書きもかれこれ何百回もやってるけど、そろそろネタ切れ気味なんだよな……」

凧紗「それは深刻だな……っ」

圭介「なあ明智、どうすりゃいいと思う」

凧紗「大丈夫。そういう時の為にあるいい言葉を知っているんだ」

圭介「おお、ホントか!？」

凧紗「うん、きっと藤島の力になれる」

圭介「頼む！ それを聞かせてくれ！」

凧紗「諦めんなよ！ 諦めんなよ、お前!! どうしてそこでやめるんだ、そこで!! もう少し頑張ってみろよ！ ダメダメダメ！ 諦めたら！ 周りのこと考えよ、応援してる人たちのこと思ってみろって！ あともうちょっとのところなんだから！」

圭介「ただのM岡S造じゃねえかよ！」

## 第130話、初めて……なんだっ

わたくし藤島圭介は未だに彼女がいない、童貞を守る純粋な少年だ。そんな純粋で初心な俺にとって今の状況がどれほどヤバイ事か……そう、俺は今女の子と2人で入浴中なのだ。コソコソとピサの斜塔と化したアレを隠すべく、必死に前かがみになって身体を洗う。彼女の視線に注意しつつ大事な所を隠し、ゆっくりと見えないように湯船に浸かる。

それは彼女も同じ。ずっと湯船に浸かっているのが辛いのか、彼女は度々湯船から上がってその辺をうろうろしているが、その度に見ないようにと目を瞑り……なにこれ、精神的に疲れるぞ？

ホントは見たいのに見ちゃダメって……ああくそ！ でも見たら絶対に理性を保てない！

このままだとガチでR18な展開になっちゃうよ。どうしよう、流石にお風呂で本番やっちゃいましたなんて事になって、それがみんなにバレたら……俺は破滅だ！

そんな風に、考え事をしていた気を抜いていた——瞬間。

「……ひゃうっ！」

背後から可愛らしい悲鳴が聞こえた。

背中に感じる温かく、柔らかくて小さい何か……胸ではないのは確かだ。するとこれは暮葉の背中か何だろう。いや、この感触は背中に違いない。

「あのー暮葉さん？ 上がろうとは思わなかったんでせうか？」

「もきゅう……えと、けーすけ様とは前に一度入りましたので……多分大丈夫なのですっ！」

お前が大丈夫でも俺が大丈夫じゃねえよ！

マジでこのままだと理性がぶっ飛びそうだよ……耐える事がキツイ。クソッ、なんとなくだが一緒に入浴するエロゲー主人公の気持ちかわかったぜ。これは確かに辛いわ……耐える事がな。

ああ、なんか俺の邪心が「襲え！」って言ってる。

そして良心は「そっと触れ」って言ってやがる……って待て、なんでどっちもエロいルートに突入するような選択肢なんだよ？

「あの、けーすけ様っ！」

「お、おう！ な、なんだ……？」

「隣……行ってもいいでしょうか？」

「とととと、隣ィ！」

オイオイオイ！ 全裸の女の子が俺の隣に来るですと？

これはアレか、誘ってるんですか？ って違うだろ落ちつけ俺。いくらなんでも隣に女の子が来るってだけで取り乱しすぎだろ。これじゃいつか恋人が出来た時「あんた童貞？」って、女の子に超バカにされちまうじゃねえかよ。実際童貞なんだけどさ……なんかバカにされると傷つくじゃん？

とにかく落ちつけ俺。ここは紳士の対応をするんだ……ッ！

「もきゅ……ダメでしょうか？」

「い、いいですともっ！ ハイ、勿論いいですよ！」

……って、どこが紳士の対応だよ。ただ変態的な笑み浮かべて喜

んでるだけだろ。

これじゃあ俺が変態みたいじゃないか。えっ、変態だって？ 気のせいだ、俺は仮に変態だとしても変態と言う名の紳士だよ。決してただの変態じゃねえぞ？

「それじゃあその……失礼するのですっ」

「お、おう」

ばしゃばしゃとお湯を掻き分け、暮葉がゆっくりと俺の隣に座った。幸い湯煙や湯の色のおかげで大事な所は見えないものの……やっぱり、ねえ？ 暮葉は女の子ですけど？ それだけで十分俺の息子が反応しちまうんですが。どないすりゃいいんだろうか？

「けーすけ様……夕焼け、綺麗ですね」

「え？ おお、そういえばそうだな」

よく見ると、この広い浴室には大きな窓があった。別荘自体高い所にあるので、多分浅間部長でも覗く事はできないだろうが、そのおかげで大海原と夕焼けが堪能できるのだ。  
なるほど、確かにいい長めである。

「にゅふふ、なんだか初めてな気がしますっ」

「なにがだ？ 風呂なら今回で二度目だろ？」

「もきゅ！ ち、違いますよ！ けーすけ様は相変わらず変態なのですねっ！」



「じゃあなんだよっ!？」

あと変態は仕方ねえだろ。だって……男の子諸君ならわかってくれるハズだ。男、特に思春期の男子とは可哀想な生き物なんだよ。

「もう、旅行に決まってるのです」

「旅行？」

「みんなで楽しく遊んで、気楽に騒いで……そんな旅行は初めてなのですっ」

「子供の頃とかに行かなかったのか？」

「……………」

あ、いけね……そうだよな。家庭の事情ってのは人それぞれだ。振り返ってみれば俺も旅行に行った記憶なんて全然ないな。あったとしても、それは宿泊研修か修学旅行のみ。しかも中学の時の修学旅行は友達がいなかったせいかな、ホントクソも面白くなかったなあ……。

それどころか、ムカついて他校の生徒をぶっ飛ばし、さらに嫌われたような記憶が……。

ああ、やっぱ中学時代は暗黒時代だったな。それに比べりゃ今はすごく幸せかもな……。

「け、けーすけ様まで暗くならないでください! 別にシリアスな事情があったわけではないですよ?」

「そ、そうなのか?」

「ただお父様は軍人でお母様も忙しくて、お姉様も研究に没頭して  
いて……」

そう言う暮葉の表情は、笑ってはいながらもどこか寂しげであっ  
た。

ひょっとしてこいつ……家庭じゃ孤独だったのか？ 両親はいつ  
も仕事、姉は趣味とも言える研究に熱中していて、結局誰も自分に  
構ってくれなくて……。

なんだろう。すぐく失礼かもしれないけど、親近感が沸いてきた  
かもしれない。暮葉も一時期は孤独で寂しくって、長年それが続い  
て傷ついて……。

ハッ、なんだよ……俺の中学ン時と同じじゃねえか。

ただ、俺と違うのはそれが自分の家である事。そして暮葉には全  
く非がない事だ。

「暮葉……」

「もきゅ！？」 だ、だからけーすけ様、そんな落ち込まないでくだ  
さいっ！ そんなに深刻な事でもないのですから、えと……けーす  
け様？」

「……そうだな、悪かった」

なにやってんだろう俺……これじゃあ、暮葉に心配かけてるみた  
いじゃないか。

ったく、俺は男だろうが、もうちょっと元気出せてんだよ。

「……もきゅ、けーすけ様は色々心配し過ぎなのです」

「そうか？ 心配するのは普通じゃねえか？」

「けーすけ様の場合は度が過ぎてるのです」

「……ごめん」

暮葉の指摘に、俺はただ謝る事しか出来なかった。

心配性、俺ってそこまでひどいのか？ そりゃあまあ、伊吹にはよく言われるけど……やっぱり俺って異常なまでの心配性なんだろうか？

しかも、暮葉に指摘されたのはそこだけではなかった。

「……その、すぐ謝る癖も治したほうがいいのですよ？」

「えっ？」

「けーすけ様って、自分が悪くない事でも謝るじゃないですか？ そうじゃなくても自分を責め過ぎです……あと、すぐ謝る人って信用されないらしいのですよ……？」

……なんか、前にも同じ事を言われた気がする。確か伊吹だったかな。っていうか伊吹から毎度同じ内容の説教をされている気がする。

すぐ謝る癖かぁ……確かに、謝って物事から逃げる人っているし、信用されるわけないよな。

「……はあ、同じ事を伊吹にも言われたけどさ……俺ってやっぱりダメ人間なのかな？」

「そ、そんなことはありません！ いい加減にしてくださいっ！」

……あれ？ 暮葉……ひょっとして怒ってんのか？

妙に声のトーンが高いし、何よりこの真剣かつムツとした表情。やっぱり怒ってる、暮葉はさっきからマイナス思考な俺に対して怒っている。

暮葉はばしゃんと音を立て立ちあがる。更に説教を続けるように、

「どうしてけーすけ様はいつも自虐的なのですか！？ そんなに自分を責めて何の得になるのですか！？ そんなの……ただけーすけ様が辛いだけなのですよ？」

つと、最後に複雑な表情を浮かべて俯き、暮葉は俺に言ったのだ。その……言葉に胸を撃たれたのは事実だ。

だがそれ以上に……暮葉さん、その……全てが丸見えなんです？ 発展途上と言うかある時期で成長が止まってるような、そんな暮葉の身体の全てがしっかり俺の目に映っていた。

いかん。このままだとマジで俺が暴走しそうなんだが……と、とりあえず！

「く、暮葉……全部……見えてるぞ……っ？」

「……もきゅ？ ぐぐぐっ！」

ようやく自分の状態に気付いた暮葉は、恥ずかしそうに耳まで顔を真っ赤にし、慌てた様子で湯船に身体を埋めた。ふう……助かった、あと少しで暮葉を襲う所だった。

危ない危ない。ガチで犯罪者になる所だったぜ……。

しかし相変わらず鼓動は早く、かぁっと全身が熱くて……その、アレも元気で、とにかく俺の興奮は全然収まらなかった。思考力もだんだん無くなってきた……どうしよう？

「……けーすけ様のほか、へたれ、エッチ……」

「……っ！」

今の言葉で顔が極限まで熱くなるのを感じた。そして、同時に何かが吹っ切れた気もした。

限界。

そう、限界だ。もう我慢の限界、これが男の宿命である。いくら頑張った所で、やっぱり女の子に弱い可哀想な生き物なのである。俺を抑制するものはもう何もない。ただ本能のままに動く狼になった俺は、この手を伸ばして暮葉を抱き寄せた。暮葉は小柄で華奢で……乱暴に扱ったら壊れそうである。

せめて優しく……出来る限り優しくしねえと。

「もきゅ!? け、けーすけ様っ!？」

「ごめん、暮葉……っ! 嫌なら俺を蹴って逃げてくれっ!」

暮葉を心配するセリフを吐く事だけが、今の俺に唯一できる彼女を守る為の行動であった。

そして俺は何も考えず、自分の顔を暮葉のあどけない顔に近づける。このまま唇を重ねようとしたのだが……あれ、なんでだよ?

なんで暮葉は抵抗しようとしなんだ。それどころか、まるで俺が今からしようとしている事を待ってる……様に俺には見えた。

暮葉は小刻みに震え、赤くなりながらも目を瞑り、口を少しだけ突き出していた。

おいマジですか……これってその、受け入れてくれるって事……だよな?

この反応は間違いなくそうだよ。それ以外に何かあるか? とに

かく、暮葉が俺を受け入れようとしている事には変わりない。よし……ここはエロゲーで得た知識を頼りに——！

「いやあ、すっかり気絶しちゃったよ！ 藤島君まだ入ってるかい？」

その瞬間、扉が開く嫌な音と共に——この世で一番空気の読めない男が入ってきた。

「もきゅ——っ!？」

「おわあああああっ!？」

俺は慌てて暮葉を自分の背後に回し、暮葉を隠そうとした。

俺の方が身体は大きい。暮葉が湯船に埋まっててくれれば多分隠れるハズだ。

背中に暮葉の身体が……いや、暮葉の髪の毛の感触も……うう、耐えるのが辛い。

「どうしたんだい藤島君？ 顔が真っ赤だが？」

「な、なんでもない。それにしても大胆ですね部長……っ」

「何を言ってるんだい、男同士ではないか？ それとも君は自分のモノに自信がないのかい？」

「ありますよ！ 一応自分では立派だとは思ってますよ!？」

「まあとにかく、男同士で隠す必要などないじゃないか」

「そ、そうっすね……」

ああ、浅間部長すっげえ解放的だ……自己防衛本能が働いて視界にモザイクが……うげっ。

でもなんでかな。やつぱり見たくもないものを見たせいか、さっきまでの興奮が次第に鎮まってきたような気がした。いや、確実に鎮まってきた……ある意味ではGJだぜ浅間部長。

でも空気読めなさすぎだろ。もし浅間部長が現れなかったら、今頃俺は暮葉と……。

「そうだ藤島君。折角だからボクとナニの比べ合いを――」

「だが断る！ 気色悪いからさっさとあっち行け！」

暮葉の為にもあっち行ってください、マジでお願いします！

「なんだい？ まあいい、ボクは身体でも洗うよ」

「……ふう」

浅間部長がシャワーに向かった事を確認し、俺は暮葉にそつと声を掛け、

「おい……今のうちに風呂から上がれ」

「は、はいっ！ その……ありがとうございます、けーすけ様っ」

「お礼はいいから早くっ！ 浅間部長にバレたらヤバイだろ……っ！」

ヒソヒソと暮葉と会話をした。神様、どうか浅間部長に聞こえて  
ませんように。

その後、暮葉は無事に風呂から上がり、俺もしばらくして風呂か  
ら上がった。

あゝあ……なんだろう。風呂で疲れを癒そうと思ったのに、何か  
余計に疲れた気がする。

しかも暮葉とはその……若干気まずいし、はあ……。



## 第130話、初めて……なんだっ（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「今回危なくね？　そろそろ警告喰らうんじゃない？」

大吾「だ、大丈夫だ！　か〇こん原作は全年齢対象でももっとやバかった気がする。流石は最強の寸止め作品って感じだったね」

重原「うん、この作品はヨスガってないから平気さ」

圭介「てめえら安心しすぎだろ！　大体今回タイトル時点でアウトじゃねえか！」

大吾「深読みのし過ぎじゃないか？　初めては初めてだろ？」

重原「そうそう。木下さんが旅行するのが初めてって意味でしょ？　それ以外になにか意味があるのかい？」

大吾「やゝい！　圭介の変態いゝ！」

圭介「う、ぐ……久々にコイツらシバきたいと思った……っ！」

### 第131話、襲撃者

風呂から上がった後、俺たちは全員で晩御飯を食べた。浅間家のカレーは確かに俺の口にも合うほど辛くておいしかったが、甘党の伊吹には辛い一品であった。

「けけけ、圭介っ！ み、水っ！ 水ーっ！」

「ちよ、水より牛乳のほうがいいって！ 青山さん牛乳を頼むっ！」

「……え、えと……その、牛乳牛乳……っ！」

「千早！ 牛乳が一番上の所に入ってるから落ちつけよな！」

「やつふありキャレーはあみゃいのがいいわよっ！」

「お姉ちゃん、呂律回ってないよ？」

青山さんにもあかりにも、そして葵にまで心配されている伊吹。なんたるカオスな光景、伊吹は本当に辛そうであった。

伊吹、まだ辛い物苦手だったんだな。伊吹が超甘党で辛い物苦手なのは知っていたが、まさかこの歳になっても全然変わっていないとは。ある意味可愛い特徴かもしれない。あと……さっきから俺と暮葉が妙に気まずくて一言も会話してません。

そりゃあね、お風呂であんな事があれば普通は気まずいよ。目があつたら俺か暮葉のどちらかが絶対恥ずかしそうに目を逸らすし、はあ……合宿中に元の関係に戻るべか？

……いや、無理かもしれないな。だって俺は風呂で暮葉にあんなことを――。

「どうしたんだい藤島君？ 風呂の時から思っていたが様子が変わだな」

「なんでもないっすよ部長。っーか放っておいて欲しいっす」

「やっぱり何かあったんじゃないかい？」

「な、なにもありませんよっ！」

大体浅間部長のせいだろうが。折角いい雰囲気だったのに……それを、あんな変なタイミングで現れて雰囲気ぶち壊しやがって。雰囲気ブレイカーにも程があるだろ。

はあ、どうしよう。絶対あの一件で暮葉に嫌われたよ……もうダメかもしれない。

やっぱり女の子に嫌われるって、精神的にキツいっすよね……なんというか、暮葉に嫌われたと思うと胸が妙に痛むんだよ。なんだろう、部長に嫌われたって多分こうはならないだろうに。

それから数時間後、色々屋内で遊びまくって……そろそろ就寝の時間である。

みんなで寝室がある2階まで行き、当然男女で部屋が別れており、その前で男性陣と女性陣は当然のように明日の朝までの別れを告げたのである。

「それじゃあおやみーお兄ちゃん！ ついでに部長さん♪」

「ボクはついでなのかい！？」

やっぱり葵は浅間部長のことなど、ミジンコ程度にしか思っていないようだ。浅間部長のことなんてついででしかないらしい。

「せ、先輩……その、先輩にならわたし……夜這いされてもいいですよ?」

「しねえよ! さっさと寝ろ変態淑女!」

「兄貴は来るなよ! 圭介は……多分許すっ」

「多分って何だよ! 間違っても過ちは犯さねえよ!」

もう暮葉のように嫌われるのはゴメンだ。同じ過ちは二度も繰り返さん。せめて他の人達には嫌われぬよう気をつけないと……はあ、結局暮葉とはあれから一言も喋っていない。

なんかその、恥ずかしいと言うか……気まずい。

「ねえ、あんたと暮葉何かあったの?」

どうやら伊吹は俺と暮葉の妙な距離に気付いたらしく、さり気なく俺の隣に並び、俺と暮葉を心配するような言葉をかけてきた。何かあったって……そりゃあ色々ありましたけど、どう考えても俺が全面的に悪い事だろうし。増してや伊吹は永渕に無理やりやられそうになった過去があるからな。

そんな事をしたと聞けば、彼女も俺を絶対に許さねえだろう……。なんか逃げるみたいで嫌だけど、無駄な争いを避ける為にも言わない方が賢明だな。

「別に……なんでもねえよっ」

「そう？ さっきまで仲良しだった気がするけど、なんかあんた達だけ空気重いわよ？」

「き、気のせいだろ？ とにかく俺疲れたし……もう寝るな」

「えっ？ う、うん……おやすみっ」

「おう、おやすみ……」

なんなんだろうなあ……俺、ホントに最低の下衆野郎だな。結局、俺は逃げるように彼女達の前から立ち去って、自分のベッドに横たわった。そのまま右腕を額に乗つけて考え事をする。

この先俺はどうすればいいのか。暮葉に一体どのツラ下げて顔出せばいいのか……。

そんなの当然、謝ればいい話なんだけど……謝って許してくれるだろうか。だって俺がアイツにやろうとしていた事はその……まあアレだ。責任重大な事でして……だって、ねえ？

けど、このまま逃げっぱなしはやっぱダメだよな。たとえ許されないにしても、謝っておいたほうがいいに決まっている。よし、明日勇気を振り絞って謝るとしよう。

明日もどうせ遊ぶんだし……その為には——今日はもう寝よう！

……………

……………

……

それから30分、なんだ……なぜなんだろうか？

「全く眠れねえ……っ」

浅間部長のいびきはうるさいし、虫の鳴き声もかなりのボリュームである。そして何より頭の中でつつい暮葉のことを考えてしまい、そのせいか全く眠れないんだよね……どうしよう？

このまま眠れなかったら、明日辛いんじゃないだろうか？

いや、絶対辛いよね……とにかく、さっさと寝よう——と思うと眠れない。ちくしょうこうなったら奥の手を使うしかない。ちよつと気晴らしに外でも散歩するか……。

「はぁ……」

わたくし、藤島圭介は青山さんの別荘を抜けだし、夜の六角を歩いていた。しかし流石に田舎だけあって夜空は綺麗である。これは心癒されるな……なんつか、今まであった散々な出来事を全て忘れられそうな気分である……って、流石に忘れたらダメだよな。

つか、こんな散歩で眠くなるんだろうか。夜の涼しい空気に虫の鳴き声、いかにも平和な空気である田舎町の夜景を眺めてたら、むしろ目が覚めちゃうんじゃないだろうか？

……なんて事を考えた、まさにその時であった。シャーっと言う、まるで刀か何かを抜くような音が俺の耳に入ってきた。その音を聞いて思わず緊張が走った。

「!？」

刹那、ぱんつと。

不自然な音を立てて、俺が右手に持っていた缶ジュースが吹き飛んだ。反射的に缶ジュースに何か当たる寸前に手を離し、それが

幸いしたのか、手首を痛めるという事もなかった。

俺は両手に力を入れ、きよろきよろと周囲を見回しながら、

「くそ……誰だっ！」

「はっ、中々鋭い反射神経の持ち主だな……藤島圭介とやら？」

「——っ！」

振り向くと、そこには笑みを浮かべた20代後半くらいの男が立っていた。男は長身で細身ではあるが筋肉質で力は強そうだ。その上、暮葉の一期一振よりも長そうな日本刀を右手に持っていた。

服は着流し、それもデザインは新撰組のものに似ていた。

なんなんだアイツ？　つか、なんで俺の事を攻撃しやがったんだよ。

「てめえ……一体何者なんだよ！」

「お前さんは何度も俺らに襲われてるって話だよな？　だったら、事情くらいは知っててもいいと思うんだよなあ？」

「……っ！　てめえ……サヴィエトか！」

「一応そんな名前の組織だったか？　まあ、俺は所詮お雇い兵士でしかないんだがなあ？」

「お雇い兵士だと？」

「連中の思想は俺も気に食わねえ。けど、俺たち魔術師ってのはこの世界じゃ弾圧される存在だ。そんな存在に仕事をくれるってんな

ら……話は別なのよな」

「どういう事だよ……つまり、コイツは思想が合わねえのに、わけのわからねえ組織の為に働いているってことなのか？ そんなのってアリなのかよ……。」

「……てめえはあの連中の理不尽さを知ってんだろ？ それを知ってるんだったらその刀を引いてくれないか？ 俺は出来ればてめえ見たいなヤツとは戦いたくない」

「それは俺も同じ事よ。丸腰の学生さんを刀で襲うなんて……武士としては情けなさすぎる。けどなあ……こっちにも色々事情ってモンがあんのよ。お前さんを襲って身柄を引き渡さねえと、俺は今月無給で生活費もロクにないのよなあ？ 悪いけど……お前さんのほうこそ刀を振る前に降参してくれねえか？」

「それはできねえ……俺には居場所があるんだよ。そこからいなくなるワケにもいかねえし、第一てめえらみたいな怪しい連中にホイイって行く気もねえ！」

すると、男は暗闇の中輝く日本刀を振りまわし、やがていつでも俺を切り裂けるようにと、彼は刀をガッチリと構え鋭く俺を睨みつけてきた。

やべえ……怖え、ありや確実にプロの目だぞ？

素人じゃねえ……体格からしても絶対に勝ち目はない。戦闘のプロな上に魔法使って事は当然魔法を使えるって事だよな？ だったら……圧倒的に俺は不利だぞ？

「そうかい……仕方ない、お前さんは今からこの近藤政信（いんどうまこと）の敵だ」



……けど、俺にはみんながいる。居場所もちゃんとある。今は合宿中で若干暮葉とは気まずい事はあったけど、それでも仲間である事には変わりねえ。その仲間たちを裏切れることはしたくない。

何より、ここでコイツに捕まったら——それだけで暮葉を裏切る事になるじゃねえかよ。

「ナメてんじゃえねよ……てめえ！」

「いい目だな？　しゃあないなあやるってんなら……一瞬で仕事を終わらせてやるよ！」

言葉と同時に——近藤という謎の無事は飛びかかってきた。

### 第131話、襲撃者（後書き）

・後書きトークコーナー

圭介「また俺襲われたのかよ!？」

雪乃「貴方、よく襲われるわねえ?」

早苗【しかも、今度は剣使い】

雪乃「あら、丸腰の貴方にはキツイ相手じゃないかしら?」

圭介「うう……ま、まあなんとかするさ! ノリで!」

雪乃「なんとかなるのかしら?」

早苗【さあ?】

## 第132話、近藤政信

言葉と同時に——近藤という謎の無事は飛びかかってきた。

ゴッ！ という爆音を俺は聞いたが、次の瞬間、16mという鉄道車両1両分はあった距離を1秒もしないうちに詰めてきたのだ。反射的に俺は両腕を頭の上に持っていき、身を守ろうとはたものの……相手が持っているのは日本刀だ。その程度の防御で身を守れるはずがない。

……なら、やることは一つしかねえだろ。

俺は僅かに前へ突撃を始める。すると、近藤は怪訝そうな顔を浮かべた。普通、こういった状況で素人が取る行動はガードするか、無意味に逃げ回る事だけだ。それが、俺の場合はあえて捨て身の突撃をし始めたのである。その理由が近藤にはわからなかったのだらう。

「ふっ！」

だが、それでも近藤はプロの武士であった。僅かに吐息を吐くと、何事もなかったかのように日本刀を振り下ろし、確実に敵を仕留めようとした。

風を切る凄まじい音。一瞬それにビビって動きが止まりそうになったが……ここで止まれば死は確実であろう。死なぬにしても大怪我は絶対するはずだ。だから——今度こそ。俺は今度こそ自分の身を守る為に右へ思いっきり跳躍したのだ。

「……ッ！」

とりあえず斬撃をかわす事はできた。しかし着地の瞬間にバランスを崩し、今にも転びそうなほどに不安定な姿勢になってしまった。

それを見た近藤はニヤリと笑い、今度は薙ぎ払うようにその長く大きな刀を振りまわしてきた。下手にバランスを直していたら斬られる……ならっ！

「う、あ——ッ！」

「——あん？」

あえてバランスを崩し、俺はアスファルトに倒れ込んでやった。刃はギリギリ俺に当たらず背中を掠めて振り抜いた。よかった……辛うじて斬られずに済んだ。

……なんて安心していている場合じゃねえ。ハッ、と気付いて上を見ると、近藤は既に次の動作に移って俺を仕留めようとしていたのだ。魔法か何かを使ったのか知らないが、近藤は人間の跳躍力を遥かに超えるほど高い所までジャンプしていた。真上から刀を串刺しにするつもりか……？

……馬鹿野郎かアイツ。サヴィエトがお前に課した任務は俺を捕まえる事。そんな事したらいくら俺でも死んじまうじゃねえかよ。俺だって身体は丈夫でも一応は人間である。万が一アレが脳にでも刺さったら死ぬのは当然のことである。

ちくしょう……どうしてこういう時に限って身体が動かないんだよ……ッ！

動けよ……俺の身体ア——ッ！

「……ッ！」

俺は僅かに右へ身体を転がした。本当に僅かな距離だ……それで、近藤の日本刀を避けるには十分すぎる行動であった。俺はゴロゴロと転がり、1mほど転がった所で起きあがる。

近藤の刀は勢いよく、アスファルトに突き刺さっていたが、それ

が問題だ。刃がアスファルトに刺さってしまつて抜けない様子である。俺の瞳には刀を抜こうと必死に力を入れる、一人の男の情けない姿が映っていた。これはハッキリ言つて……神様が俺にくれた僅かなチャンスかもしれない。

「う、オオオオオオオオオオオオ！」

俺は叫んで、拳を握って、ひたすら前を突き進んで近藤の懷に飛び込んだ。

拳を振るう——が、その瞬間だ。近藤は刀を抜くことに成功したようだ。だけど拳をかわせるタイミングじゃねえ。今から攻撃する事も不可能だ。だから俺は——わかりきったように安心し、この拳をクソ野郎の顔面目がけて放つた——のだが、

その時。フツ、と近藤の姿が消えたのだ。

「……ッ!? くそっ、どこに——!?!」

キョロキョロと敵の姿を探すが、見当たらない——と思つたまさにその時であつた。既に近藤は20m近く離れた所におり、その近藤は何故か、俺から離れているのに刀を振り下ろしたのだ。

なにやってんだよ……っとは思つたが、その意味を理解したのはこの直後である。

振り下ろされた刀が地面に接触した——刹那、その斬撃は地面を伝つて俺の所まで一直線に伸びてきたのである。真つ二つに引き裂かれたアスファルトが抉れて、何故か銀色に輝いている。

咄嗟に俺は亀裂を避け、もう一度近藤を見つめる。一体なんだつたんだ? どう考えてもアレは物理法則を無視しまくってんだろ……普通じゃねえ。って事はアレなのか? アイツは魔法使いつて言つていたくらいだから、アレは魔法によるものなのか?

「ほお？ 素人さんにしちゃあ……結構やるなあ？」

「……っ」

近藤が挑発するように刀を頭上で廻し、笑いながら俺に語りかけてきた。

「痛い目見ないように一撃で沈めようと思ったんだけど……なんか、お前さん無駄に反射神経いいしそれ無理かもしれないなあ？ 悪いけど、痛い目見てもお兄さんを恨むんじゃねえよ？」

どうする……俺？ 相手は身体能力が高い上に魔法使いだ……勝ち目は殆どねえぞ？

いつそのこと別荘まで逃げるか？ そこには暮葉がいる、暮葉ならあの野郎とも対等に戦えるかもしれないけど……今はみんな寝ている時間だ。こんな事の為にみんなを起こしたくはない。

だったらやっぱり一人で解決するべきだろう。それに……俺の身体なら——多少攻撃を喰らったって何の問題もないハズだ。なら手段は一つしかねえだろ——ッ！

「ナメてんじゃねえぞ……くそつたれええええええっ！」

一気に前へ跳躍し、その勢いでダッシュする俺。そう——俺がとった行動とは、何も考えずに近藤に近づく事であった。近づいてどうするかまでは考えていない。だけど、この場で一番重要なのは戦いの主導権を握る事である。

バルジの戦いのドイツ軍と同じだ。いくら非力でも主導権さえ握っちゃうえば——強大な相手とも少しはマトモに戦えるハズである。それでドイツ軍は一時的な大反撃に成功したのだ。最も、いつまで

主導権を握ってられるかはわからないが……やってみる価値はあるハズだ。

拳を握って突撃。近藤は刀を構えて待ち構えるが……さっきだつて一瞬、アイツを殴るチャンスはあったんだ。もう一度そのチャンスを探すんだ。そして——今度こそ確実にアイツを殴れ！

……しかし、俺のこの作戦は失敗した。その理由は近藤のせいではなく——、

「ちょっと……なにようっさいわね……っ」

何故か、そこにパジャマ姿の伊吹が佇んでいたのだ。

そういえばここは別荘から遠くは無い……というか、別荘からまだ30mも離れていない。

なるほど。俺たちの戦いの轟音で伊吹は目覚めたのか。

だからって様子を見にくるかよ普通。伊吹は普通に何事もないように俺に近付くが、それがどれほど危険な事か、彼女はまだ理解していないようだ。どうやら彼女は寝ぼけているらしい。

髪も寝癖でボサボサであり、何よりジト目が寝起きの不機嫌さを示していた。

「……っ！ 来るな、伊吹！」

「えっ？ ——きゃっ！」

俺は衝動的に伊吹を抱きしめ、そのまま左方向へと跳躍した。何故なら近藤がまた刀をアスファルトへ振り下ろし、再び亀裂が凄まじい勢いで迫ってきたからである。

「……えっ？ ちょ、なに……圭介？」

「いいからお前は黙ってろ。そこでじっとしていてくれ」

「えっ？　ちょ……その、私まだ心の準備が……って何言わせんのよばか圭介っ！」

「いいから！　事情は後で説明するから、頼むからお前はそこで大人しくしていてくれ！」

そう叫んだ後、俺は再び近藤のことを睨みつけた。  
相変わらず近藤は余裕そうな笑みを浮かべている。クソッ、これがプロの余裕ってヤツか？

「大変だなあお前さん。女を守りながら戦う……か、お前さんのような素人さんにそんな高度な事が出来んのかい？」

「うるせえ……やるしかねえだろ！」

「ほお？　なら仕方ねえな……だったら女を守ってみろよ勇者様っ」

ちくしょう、完全に主導権を近藤に握られた。このままじゃ絶対に勝てない——っと思っていたまさにその時であった。いきなり俺の背後がオレンジ色に輝き、そして焼けるような熱を感じた。

この感じ……まさかと思って、俺は咄嗟に後ろへ振り向いた。

そこには——2 mにも及ぶ炎剣えんけんを超能力で作り出した、明智風紗の姿があった——！

「明智!?!」

「説明は後、藤島——そいつを倒すぞ！」



「えっ？ お、おう！」

どうなってんだ？　なんかまるで、アイツが俺を襲っている理由を知ってるみたいだな。

明智……どういふ事なんだよ。つて、それを知りたいきゃまず近藤に勝たねえとな。

「ちっ、いつかの超能力者<sup>クソアマ</sup>か。確かにアンタの能力はすごいが……その程度で引き下がるわけがねえのよな！」

……なんて叫んでいるけど、近藤は内心かなりビビっている。そして——その明智に対する恐怖はちゃんと外面にも出ていたのだ。近藤は叫ぶ事だけに熱中し、身構える事を忘れていたのだ。

隙だ。滅多に見せる事のない隙である。今がまさに攻撃のチャンスだ。だから俺は一気に駆けだして近藤との距離を詰めたのだ。近藤がハッ、と気付いた時には俺はもう、近藤の目の前に立っていた。後はこの拳を放つだけ——だったのだが、

「……ッ!？」

ウソだろ？　また消え——、

「ぐ、はあっ!？」

気付けば近藤は俺の真横にいた。そして近藤は開いていた左手で——俺の鳩尾を殴った。

その衝撃に一瞬、俺の呼吸は止まった。まずい——このままだと斬られる！

「藤島！　う、ああああああっ！」

その時、明智がこっちに向かってきたのだ。ただ走っているだけではない、2 mにも及ぶ超能力で作り出した大きな炎剣を右手から伸ばし、狩人のような鋭い目つきで近藤を睨みつけていた。

轟々と響く燃える轟音。それだけでも常人にとっては既に恐怖である。

「藤島圭介はさほどの脅威ではない……懸念すべきはあの女のみ……なら！」

近藤は何かを呟いている。何を言っているのかハッキリはわからない……が、俺にもハッキリわかった事があった。どうやら彼は明智を恐れている。

だからこそ、近藤は明智を優先的に攻撃しようとした。それが完璧とも思えた彼の——近藤政信の唯一のミスであった。どうやにコイツ、俺がさっきの鳩尾攻撃でしばらく動けないと思ったらしい。だけど……俺がその程度で怯みはしても、本当にしばらくの間は動けなくなると思うか？

答えは——NOに決まってる！

近藤が刀を構え、何らかの呪文を唱えている——この隙に俺は拳を握り締めた。

そのまま勢いで低くなっていた姿勢を上げ、俺の拳が近藤の顔面に力強く突き刺さった。

「が、は——！　な……バ、かな……普通ならさっきの一撃で——！？」

そう——普通ならさっきの鳩尾で伸びている。

だけどな……俺の身体はちつとばつか普通じゃないんだよ！

さて……んじゃあそろそろ、フィニッシュと行くか。俺は前へ跳躍し、途中で明智と並んでとにかく近藤の懐へと飛び込んだ。俺と明智は近藤にタックルを仕掛けたのである。

衝撃によって近藤は大きく後ろに吹っ飛び、凄まじい勢いで近藤は地面に叩きつけられた。

「う、ぐ……く、この……っ！」

それでも近藤は気絶しなかった。刀を杖代わりにして立ちあがろうとする近藤。

「——ア——ッ！」

だが、近藤は立ちあがる前に気絶した。誰かに攻撃されたようである。

近藤の意識を奪う攻撃を放ったのは、明智でなければ当然俺でもない。

そう、近藤を完全に沈めた者は——、

「まったく、なんなのよ一体……っ！」

国宗伊吹。

そう、そこで戦いを見ていた伊吹だ。彼女はしなやかに竹刀を振りまわし、近藤の後頭部に激しくそれを打ち込んだのである。

竹刀と言っても、思いつき叩かれれば骨にヒビは入るだろう。

それだけの威力があればボロボロの相手を気絶させる事くらい、造作もない事なのだ。

「……ふう、やったな藤島」

「あ、ああ……とりあえずは勝ったな」

……はあ、しかし疲れたあ……なんだか疲れて眠くなってきたし、案外近藤との戦いは安眠という意味では無駄ではなかったかもしれない。

それにしても気になるな。まさかここでサヴィエトのヤツに襲われるとは……。

それになんで明智がこの事を？ 相手も明智のことを知っているみたいだし、一体何が起っているんだろうか？ それを明智から詳しく聞く必要があるそうだな。

あとは……。

「……………」

伊吹にはなんて説明すればいいのやら……はあ。

### 第132話、近藤政信（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「ぷひゅるるるっ！　ね、寝起きの伊吹ちゃんカワユス！　ぷひゅ〜！」

圭介「ちょ、なんだコイツきめえっ！」

黒木「いいないいなァ〜！　俺も寝起きの伊吹ちゃん拝みたいお！」

圭介「い、いいから落ちつけ黒木！　悪い意味で注目浴びてるぞ！？」

黒木「ぷひゃ〜ぷるる、ぷひゅあ〜ブヒイイイ！」

圭介「もしもーし！？　おーい、現実に戻ってこーいっ！」

黒木「ハァハァ、伊吹たん……ぶ、ブヒイイイイイイイイイイイ  
！」

圭介「……最近、黒木が伊吹に対してのみご覧の有様なんだが？」

赤佐「仕方ないやろ。放っておいたほうがええで？」

圭介「そ、そうですか……っ」

### 第133話、友情ってスバラシイ!

夜の砂浜、当然こんな時間帯に砂浜にいる者など誰もおらず、実質この砂浜は俺たちの貸し切り状態であったが、だからと言って楽しい空気というわけではなかった。

周囲を警戒する明智に竹刀を持った伊吹。そして、俺たちに捉えられ縄で縛られた近藤。

どう見ても、僕ら遊んでもハイな状況とは言えない。戦いが終わって捕えた捕虜をこれからじっくり尋問するかのような、そんな空気が辺りに漂っていた。

「他には曲者はいないみたいだな」

「つで、結局明智と近藤はどういう関係なんだよ?」

俺は明智に一番気になっていた事を聞いた。すると明智はこっちを向いて、

「関係とか、そんな深いものではないぞ? 私はその男に襲われたんだ」

「おっ!?! 襲われた!?!」

明智さぁくんそれってどういう意味でしょうか? ボコボコにされたって意味か、それとも性的な意味で襲われてハアハアな感じでしょうか? うぐぐ……気になる、すっげえ気になるぞ。

「圭介……あんた、またしょうもない事考えてるでしょ?」

「か、考えてねえよ！」

「顔に出てる。やっぱ藤島は変態だな」

「う、うるせえ！ 俺は変態じゃない、変態と言う名の紳士だ！」

「結局変態じゃない……」

「変態だな……」

女の子2人にジト目で見られるプレイ……ちくしょう、ドMに目覚めていれば、冷たい視線で見られる事自体がご褒美に感じられるのに。なんて惜しい男なんだ、Mじゃないから嬉しくないぞ。

それより早く話を進めろよ。俺が変態とかそんなわかりきってる事はどうでもいい、それより明智がどうして近藤に襲われたのか。その理由を知りたいんだよ。

「それで、結局何があったのよ？」

「う、ああ藤島のせいで本題を忘れてた。ありがとうな伊吹」

「俺のせいだよ！」

「2〜3日前くらいの話だったかな？ たまたま買い物帰りだったんだ」

しかもスルーしやがったし、淡々と理由を語ってやがるし。  
なんてヤツなんだ明智風紗……お前、色々な意味で恐ろしいヤツだよ！

そこまで高度なスルースキル。東京都民ですら持ってねえと思う

ぞ？

「私は自宅に向かって歩いていったんだけど、その途中であの男に襲われてな、やむなく超能力を使って応戦したんだが……結局逃げられてな。まさかこんな所で再び遭遇するとは思わなかったぞっ」

「……っというか風紗、あんた超能力者だったの？」

「で、出来れば秘密にして欲しいぞ……っ、というか伊吹は信じるのか？」

「ま、まあ……わけのわからない事には何回も巻き込まれてるし、一応は信じてやるわよっ」

流石伊吹、俺たちの事情を知っているだけはあるな。

アッサリ超能力を信じるとは、某自称超能力者もビックリだと思うぞ。

っという事はアレですか。もしかして天使とか悪魔がいたとしても、伊吹ちゃんはアッサリ信じちゃうんでしょうか。もしそうだとしたらある意味すごいぞ？

「んで、それで何で俺に気を付けろって言ったんだよ？ やっぱり近藤のことに関係してるのか？」

「まあ……だって、近藤は藤島を誘き寄せる為に私を襲ったって……っ」

「明智にまで手え出すって……コイツ武士としての誇りあるんだろ  
うか？」



なんて事を絶賛気絶中の近藤に言ってみるが、当然近藤は気絶中なので、俺が近藤の文句を言っても近藤はうんともすんとも言わなかった。ですよねー、気絶中なんだから、むしろいきなり目覚めて襲われるほうが怖いっすよ。

そんな不意打ち的な事があつたら、ロンメルを相手に戦う英国紳士の気分になるぜ？

「それはともかく、藤島……お前一体どんな事件に巻き込まれてるんだ？」

「えっ？ ど、どんな事件って……？」

「秋葉原の時もそうだったろ？ あの不良は藤島の名前を言っていたぞ」

「あ、アイツはその……まあ初対面だけど違うようなで……？」

「藤島、言ってくれ……友達を心配させるな……っ」

「……………」

すみません。今の心配そうな表情がその……たまらなく可愛かったです。やっぱり明智って普段はカッコいい系だけど、たまに見せる仕草とかは完璧女の子だよなあ。

それも、とびっきり可愛い女の子である。明智のことは見て思わず、照れか何かは知らないが顔が熱くなってしまった。多分俺の顔は今、結構赤くなっていることだろう。だってねえ……明智が可愛かったんだから仕方ないじゃん？ 男は基本的に女の子に弱い生き物なのだ。

「わ、わかった……説明するからその……顔近えよっ」

「えっ？　くくっ！　ご、ごめん藤島……っ」

完全に負けた。明智の美貌に完全に敗北しました……まあ、仕方ないよね？

けどなんでだろう。たかがそれだけなのに、その……伊吹が不機嫌そうなんだが。

まあ、今は伊吹は後回しでいい。とりあえず事情を説明するとうるか。

その間に伊吹の機嫌が戻りますように……。

……っと、言うわけで俺は明智に全てを説明した。

俺の正体や暮葉達の行動目的。サヴィエトという敵対勢力の存在と、そのサヴィエトの目的や魔法使いという連中が多数存在するという事実。そして、俺らが戦ってきた今までの相手の事。

その全てを、何の偽りもなく明智に説明したのだ。

明智は呆氣にとられた表情を浮かべていた。まあ……それが普通の反応であろう。

「そんな事に巻き込まれているのか……藤島は……っ」

「あんた……私の知らない所でそんな危険な目に遭っていたの!？」

「まあ……一応全部事実だよ」

驚いているのは明智だけではない。伊吹もこれまでに潜り抜けた数々の危険を聞き、かなり不安そうな表情を浮かべていた。そりゃそうだ、伊吹にだって全てを教えたわけではない。伊吹に余計な心

配をかけたくなかったと言うのもあるが、伊吹の性格的に下手すりゃ介入してくれかもしれない。

伊吹を危険に晒したくは無かった。だから、事情を知ってるのに関わらず、俺はあえて伊吹には何も説明せずに日常を営んできたのだ。

「どうしてもっと早く言ってくれなかったんだ……そういう事なら私、この超能力<sup>チカラ</sup>で藤島を守ろうとしていたのに……！」

「わ、私もそうよ！ その……別にあんたの為じゃないけど……っ、周りでそんな事が起こってんのは何か嫌だし……それに、私だって一応暮葉達の事情は知ってんのよ？」

「ごめん……迷惑とかかけたくなかったから」

「迷惑なんかじゃないぞ。私達はその……友達だからなっ」

友達って言葉が照れくさかったのか、明智の顔はほんのり赤く染まっていた。

けど友達っていうまでに、少しだけ間があったような気がするが……気のせいだよな？

き、気のせいだと信じたい。奴隷とか言われたらフツ―に泣きますよ俺。

「わ、私だって圭介の……お、幼馴染よ！」

伊吹も幼馴染って言葉が照れくさかったのか、少し俯いて顔を赤らめていた。

けど、伊吹まで幼馴染って言うまでに、少しだけ間があったような気がするぞ。ひょっとしてコイツも何か違う事を言おうとしたん

じゃないか？ 例えば奴隷とか奴隷……って、なんで奴隷ばかりなんだよ！ そもそも俺は日本国民である以上、一応基本的人権は保障されてるハズだぞ。

まあ、とりあえずはお礼を言うべきなのか？ うん、言っておこう。なんか言わなきゃいけないような気がするよ。

「2人とも……サンキューな」

「そ、そんな……お礼を言われるほどの事は言っていないぞ？」

「そうよっ、心配するのは当然よっ」

ああ……なんていい子たちなんだろう。俺は不思議といい気分になっていた。

なんてことのない、ただの当たり前な心配だったのかもしれない。それでも、俺が2人に想われてるんだなと感じるには、十分すぎる言葉であった。

やっぱり友情っていいよな……持つべきものは友とかく聞くけどさ、ひよっとしてこういう事を言ってるのかもしれないな。

「みなさんっ！」

ん、こ……このソプラノボイスの明るい声。

間違いない。振り返ると――伊吹同様パジャマ姿のまま別荘を飛び出してきた暮葉がいた。

だけど、何故か俺は暮葉を直視できなかった。だって……ねえ？ 別に意識しなくてもお風呂の時のことを思い出しちまって、恥ずかしさと申し訳なさで思わず目を逸らしてしまう。

何故か、顔がかあゝっと熱くなってしまう。それは暮葉も同じらしく、俺と目が合うと暮葉も恥ずかしそうに俺から目を逸らしてし

まった。

ああもう……これじゃあ話すどころか、面と向かうことさえ難しいじゃねえかよ……。

「木下じゃないか。そういえば藤島達と一緒にだったな」

「あら暮葉？ あんたも起きたの？」

「あれだけの騒がしかったら普通起きますよ！ みんなを説得するの大変だったのですからね！」

「そうか……木下、すまなかった」

「いえいえ、いいですよっ！ それより何があったのですか？」

「実は――」

明智が事情を説明しようとした……まさにその時、

「なあ……お前さん達。悪いけどコイツを解いてくれねえか？」

「……ッ!？」

一瞬にして空気が凍る。少し野太い若い……と言えるが微妙な年頃の男の声。

目を覚ました近藤政信が、俺たちを睨みつけながら、そんな事を願ってきやがったのだ。

あの野郎……一体どういうつもりなんだ？

### 第133話、友情ってスバラシイ！（後書き）

・後書きトークコーナー

重原「ねえ、ぶっちゃけ近藤って建○さんだよね」

圭介「おいコラッ！ みんなそう思ってるかもだけど口に出すよな！」

大吾「いや、だってねえ？ まあ作者の禁○好きは相変わらずという事だろ？」

圭介「それより俺、明智と伊吹にどう想われてるのか気になるんだけど……」

重原「そんなの決まってるじゃないかい？」

大吾「そーだ！ 答えは一つしかないじゃないカ！」

圭介「ウソだ……ど、奴隷だなんてウソだアアア！」

大吾「……鈍感だな」

重原「鈍感だね……」

## 第134話、襲撃者からの警告

場の空気が凍った。理由は単純だ、さっきまで気絶していたハズの近藤が、突然目を覚まして縄を解いて欲しいと頼んできたからである。

当然明智や伊吹もはあ？　っと、眉をひそめた。俺だってそうだが、近藤がどういう目的で解放を求めているかは知らないが、それでもアイツとはさっきまで戦っていたんだ。いつ攻撃してくるかわからないようなヤツを解放するなんて、そんな馬鹿げたことが出来るわけがない。

「馬鹿かお前？　そんな危なっかしいことが出来るわけ——」

「藤島圭介。俺はなあ、金さえあればどっちの味方にでもつくのよ？」

「てめえ……それって武士としてどうなんだよ？」

「確かになあ、だが……ちっとばっか生活に困ってるのは事実だ。だから俺は頼まれた仕事をするだけなのよ。大体サヴィエトに協力したっていくら働いても給料は同じだし、相手の思想も俺としては気に入らねえのよ」

金で動くって……アンタはどこぞの傭兵かよ。金でコロコロ忠誠を誓う相手を変えるような野郎なんて、ますます信用できないだろうが。仮に金を払ってこっちの味方になったとしても、サヴィエトがより高額の報酬を提示してきたら、コイツはそっちに行くってわけだよな？

まあ、サヴィエトの思想的に考えて、そんな事はまずないとは思

うけど……。

だけどなあ……やっぱりこんなヤツは信用できない。

「なあ、その超能力者」

「ん、私か？」

近藤のヤツは今度は明智に話をかけた。まあ……なんとなく想像はつく。このメンバーの中で一番金を持っていそうな人は明智である。青山さんは今別荘で寝ているし、そもそも近藤は青山さんのことまでは知らないだろう。

「俺と契約してくれんかな？ 無理言ってんのはわかってるつもりだが、契約さえすれば俺はアンタに忠誠を誓うつもりよ。アンタの命令次第で藤島圭介を守るか攻撃するかも決まるんだ。どうだ、悪い話じゃねえとは思うんだがな」

「どういうつもりなんだ？」

「俺にはなあ息子がいるんだが、病弱でしょっちゅう入院してんのよ。その息子を救う為に俺は魔術ってヤツを覚えたんだけど……それがまずかったのか、バレた瞬間口止めの代わりに職を失ってジリ貧生活になっちまったのよ。入院費とかも払わなきゃいけないし、息子は病弱でまだ幼いが一応将来の事もあるだろう？ その為にも俺は金が欲しいのよ」

「じゃ、じゃあ、あんたはお金の為にサヴィエトに身を売ったの？」

明智と交渉するため、自らの事情を説明する近藤に伊吹がそう突っ込んだ。確かに俺も伊吹と全く同じ事を考えていた。確かに職を



失うのは大変だ。子供の夢を叶えてあげたいという、親の気持ちもわからないことはないけど……だけどなあ。

「おいおい剣道のお嬢ちゃんよ。身を売ったってのは聞き捨てならないなあ？　ただ、俺たち魔術師が飯食ってく為にはそこしか働く場所がなかったのよ。昔から魔女狩りだとかで魔術師は弾圧されいたんだがな、今日じゃあ科学も発展して完全に魔術は無かったものにされた。従って社会は魔術師に冷たいものなのよ。そんな状況で俺たちが働ける唯一の職場——サヴィエトってのにはなんつーかなあ、僅かに希望ってのを持ったのよ」

希望を持ってそこに就職したのかよ。っで、就職した結果がこれってわけか。大体事情はわかったけど一つ問題があるぞ。コイツの言ってる事はホントの事なんだろうか？　出来る事なら俺だって信じてやりたいし、それが事実なら究極に苦しい生活を送ってるんだろうが……。

あんな事があった後だ。ひょっとすると近藤はウソをついているかもしれない。

人間、ウソなんて結構簡単につけるもの。俺だってウソのおかげで、修羅場を脱出した事ならいくらでもあるんですぜ。増してや近藤はプロだ、その手のウソなんて簡単に思いつけるだろう。

そう思っていたのは俺だけではなかったらしく——、

「明智殿、耳を貸してはダメなのです。彼は言葉を武器にしているのですよ？」

「そんなことはわかってる。私もこんな話を信じるつもりはないぞっ」

「おいそこのアホ毛ちゃん？　お前さん、確かアルファ隊って異世

界の特殊部隊の一員なんだよな？」

「もきゅ？ ……なんで拙者がその一員だって知っているのですか？」

「まあいい……信用を得る為にも話してやるよ。お前さん達の所にはスパイがいるって話だ」

「す、スパイ……なのですか？」

スパイって秋葉原でも暮葉と話したよな。それで俺が外出禁止になって。まさかホントにスパイがいるってのかよ。だけど、そんなスパイが一体どこにいるんだ？

「おう、お前さん達も薄々気付いてはいただろう？ でなかったら、俺もこんな簡単にお前さん達を発見する事なんてできなかったのよ」

「……一つ聞きたいのですが、スパイは一体どこにいるのですか？」

「さあな？ ただ、わかってる事は2人いたハズなんだが……片方とは最近連絡がつかないのよ。もう片方は相変わらず情報を送ってきているらしいけどな。まあ俺もサヴィエトでは下っ端だ。そこまです詳しい事情は知らねえのよ」

片方とはおそらく、白藤のことを言っているんだろう。白藤はクラスメイトになりましたサヴィエトの魔法使いだった。それで俺と戦い、結局アイツはサヴィエトとは縁を切ったようである。

それでも、一時期はサヴィエトの魔法使いとして活躍していたんだ。だから近藤の言う2人のスパイのうち、片方は白藤のことで間違いないだろう。けど……もう一人は誰なんだ？ そのもう一人の

スパイってのも俺たちの身近にいる人物なのか？

近藤は本当に下っ端のようで、全部を知っているわけじゃなさそうだし……。

「了解なのです……あともう一つ聞きたいのですが？」

「あー、まだ質問があんのか？ まあいいけどよ」

「今回は……今回けーすけ様を襲いに来たのは貴方だけなのですか？」

「いんや、俺の他に……確かイタリア人のジジイだったかな？ この世界じゃ結構大物の魔術師が今度の作戦の陣頭指揮をやってんのよ」

「大物……ですか？」

暮葉はその言葉に反応したようだ。まあ、俺もだけど……。つか、ホントにこの世界にも魔法使っているんだな。二次元の特権だと思ってたんだけど……現実<sup>リアル</sup>恐るべし。

「詳しい事は知らねえが、今回の場合はソイツが俺の上司よ。言っとくけどヤツと戦うなら覚悟しといたほうがいいと思うのよ。ヤツ——アマデオ・ベルサーニは近代西洋儀式魔術を極めてやがるからな」

アマデオ・ベルサーニ。それが今回のボスキャラのようだ。つか近代西洋儀式魔術って俺の無駄知識が正しいならば、ホントにただの儀式の為の魔法なんだろう？

そんなんで戦えるのか？ しかも、それこそ怪しい存在だぜ。近

代西洋儀式魔術ってホントに存在するものなんだろうか？ まあ、暮葉や近藤だっているし、全くないとは言えないが……。

……なんて事を考えていたその時、明智が一步前に出て、

「なあ近藤、お前の言ってる事は全部本当の事なのか？」

「抵抗できない状態で嘘言って、何の得になると思うんだ？ 拷問されるのはゴメンなのよな、だからさっさと真実を言っちゃまうのが俺なのよ」

「……信じていいんだな？」

「あ、明智殿！ そんな簡単に信じたらダメなのです！」

「そ、そうよ！ 私にはよくわからないけど……でも、嘘ついてるかもしれないのよ！？」

「残念だけど嘘はついてねえのよな。近々、必ずアマデーオはお前さん達の前に現れるだろう。その時俺の言葉を信じなかった事を……後悔すりゃいいのよ」

近藤は口元を歪ませ、怪しい予言者のように笑っていた。

「……とりあえず、貴方の身柄は拘束するのです」

「フツ、好きにするがいいさ……だが、これだけは約束した欲しい。俺の家族に金を渡して欲しい……なんならお前さんの所の諜報機関を使って、俺の素性を探ったっていい。とにかく……俺の事はどうでもいいから家族だけは救ってほしいのよ」

近藤のその言葉に、迷いやためらいはない。まるで、ただ必死に我が子の事を想う――父親のような顔を近藤はしていたのだ。こんなヤツでも、我が子を想う気持ちは他人と変わらないらしい。

そんな近藤の表情を見て、暮葉は目を瞑り、

「……了解なのです。ご家族の事は調べ次第、生活に困らないだけの額は支給するよう、上と掛け合ってみるのです」

「悪いな……こんな悪人の頼みを聞いてもらってよ。それでも……子供は心配なのよな……っ」

言いながら近藤は夜空を見上げ、寂しげに微笑んでいる……ように俺には見えた。

やがて暮葉が連絡をつけたのか、アルファ隊の魔法使い達が駆け付け、縄で縛られた近藤をどこかに連行していった。そういえばいつも思ってるんだけど、アルファ隊に捕まった魔法使いってこの後どうなっちゃうんだろうか？　なんか気になるなあ……でも、ロクな末路は辿らないだろう。

興味はあるが聞くのも怖いし、その疑問は心の中にしまっておく  
としよう。

その後の話をしよう。もう夜も遅いのでみんな帰って寝る事になったが……。

「それじゃあ藤島、私はそろそろ戻るな」

「おう、おやすみ明智」

「うん……その、私も魔法使いと戦う。藤島の力になりたい」

「お前がそう言ってくれるとマジで心強いよ……サンキューな」

「れ、礼なんて別にいらんぞ、友達だからな……っ」

明智は少し照れながら、背を向けて自分の寢床に戻っていった……。

っていうか、明智や生駒はどこに泊ってるんだろうか？

気になるけど……まあいいや、今度会ったらそれを聞くとしようか。

「圭介、私もそろそろ寝るわね」

「おやすみ、伊吹」

「おやすみ……言っとくけど、今度何かに巻き込まれたら私にもちやんと言いなさいよ？」

「わかってるよ。もうお前には何も黙らねえから」

「そ、それならいいわっ。それじゃおやすみっ！」

伊吹も相変わらずだなあ……まっ、あの不器用さが伊吹らしいっちゃ伊吹らしいが。

それで夜の砂浜に残されたのは、俺と暮葉だけだが……なんか、気まずい。そりゃあお風呂であんな事があったんだし、気まずいのは当然なんだけど……どうしよう？

何か会話すべきだよな。っていうか、その前にお風呂での事を謝るべきだよな。考えてみれば今が謝る絶好のチャンスじゃないか。とにかく、こんな空気が何時までも続くのはダメだ。早く仲直りし

ていつも通りの関係に戻りたい。

戻れないにしても……それでも暮葉は友達だ。

友達じゃないにしても、悪い事をしたんだから謝らないとダメだ。  
だから俺は――、

「暮葉！」

「……っ！」

びくん、と小さく震えた暮葉。ゆっくりとこちらを向いた暮葉の顔は……やっぱり恥ずかしさからか耳まで真っ赤に染まっていた。えーっと……俺も恥ずかしいんだが、この後どうしよう？

って、謝ればいいだけの話だろ。ここまで上がる必要なんてないだろ。いくら恥ずかしいからって真面目な場面でコレはダメだろう。いい加減俺も落ちつけてんだよ……！

とにかく呼吸を整え、気持ちを落ち着かせてから俺は――、

「今日はその、ごめん！」

謝る方法はいくらでもあるが、その中でも究極のものが日本には存在する。

土下座。

そう、土下座だ。本来恭儉の意を示したり、深い謝罪や請願の意を表す場合に行う、日本古来の礼式の一つである。今でもたまにテレビで見かける……が、自己保身のために使う人もいるらしい。

俺も暮葉にそう思われているかもしれない。それでも俺は――暮葉に心から謝る為に土下座をしているのである。たとえ自己保身のためだと思われても、後悔なんかは絶対にしない――。

「……けーすけ様、とりあえず立ってくださいっ」

暮葉に言われて、俺はいいのかと思いつつも立ちあがった。

……あれ、なんかデジャブを感じるぞ？ 相手は暮葉じゃなかった気がするが、似たような事がつい最近あったような気がする……気のせいだろうか？

「く、暮葉……怒ってないのか？」

「もきゅ？ その……けーすけ様、何か拙者を怒らせる事したのですかっ？」

「え？ じゃ、じゃあなんで……？」

「そ、それはその……えっと……っ」

「暮葉？」

「~~~~っ！ 伊吹さんの言う通りですっ、けーすけ様はばかりすけ様ですっ」

ちよっと拗ねたように、林檎のように赤くなった暮葉は俺の事をそう呼んだ。

ば、馬鹿って……ちよ、結構傷つくんだけど？ いや、確かにね俺バカですよ？ 成績だって赤点ギリギリだし元々初芝に入れる頭もなかったよ？ バカなのは自分でも認めるけど、それをストレートに言われると妙に虚しくなるんですよ。

「いや、マジで馬鹿でめんなさい！ 前の期末に英語31点でごめんなさい！」



「そういう意味の馬鹿じゃないですよ……やっぱりけーすけ様は馬鹿です……っ」

「え？　ち、違うの？　じゃあ化学が38点だった事に対してか？」

「はぁ……」

「ええっ！？　ちょ、呆れられた！？」

それも違うってことは……じゃあ俺、言わなくてもいい事言っちゃったワケ？

俺の恥ずかしすぎるテストの点数が、暮葉にバレちゃったってわけか。

ちくしょう！　こんな点数誰にも言いたくなかったのに！

「もきゅ、仕方ないですね……」

「暮葉？」

瞳を閉じた暮葉が、そっと俺に歩み寄ってきた。その距離僅か10cm。女の子がこんな近くにいるというだけで、ドキドキするには十分であった。おまけに、こんなタイミングで俺は風呂であった事を思い出してしまった。う、ぐ……心臓がバクバク言ってる。

やべえ……ちょっとしたでも気を抜いたら、暮葉を抱きしめてしまっそうである。

けど、そんな事をしたらまたさっきみたいに——ええいくそつ、我慢しやがれ俺！

「けーすけ様……っ」

「お、おう……なん——っ!？」

それは——あまりにも突然の出来事だった。

あまりにも唐突すぎるだろ。

だって、何の前振りもナシだったんだぜ？

それなのにいきなり抱きつかれ、何故か暮葉の唇が——俺の唇と重なっていたのだ。

「——っ!？」

突然、口を塞がれた俺。別にこれがファーストキスというわけではない。前に事故で明智にキスされた事があった。けどなんだろう？ その時とはまるで違う何かを俺は感じていた。

だけど、それが何なのかはわからない。そもそも考える事もできない。突然の出来事に頭の中は真っ白になっていた。唇の柔らかい感触。それと、女の子の甘い匂い、そして突然暮葉にキスをされたという事実には支配され、俺は完全に思考力を失ってしまった。

やがて唇が離れると、俺は自然と右手で自分の唇を触っていた。……気のせいではない。まだ唇にキスの感触が残っている。そこでようやく——正気に戻ったように俺の脳が再び動き出した……ような気がした。

「おっ、おおおおおまえっ！ なななな何するんだよいきなりっ!？」

ダメだこりゃ……あまりのことに、全然呂律が回っていなかった。全然落ちつけない。それどころか、鼓動は早くなるばかりであった——。

「せ、拙者だって初めてなのです！　くくくっ！　で、でも！　これで全てチャラなのです！」

そう言うのと、暮葉は恥ずかしさから、走って逃げるように俺の前から去って行った。

ちゃ、チャラって……一体どういう意味だったんだ？　それじゃまるで、風呂でし損ねたキスを今したみたいな感じになっちゃうじゃねえか。

もしかして暮葉のヤツ、俺とキスしたかった……のか？

いやいや待ておかしいだろ。これじゃ暮葉が俺の事が好きみたいじゃねえかよ。そりゃいくらなんでもおかしいだろ。そうだ、今時は友達同士でもキスをする時代。きつとそうだ、さっきのキスに特別な意味なんてないハズだ。

……だけど、もしもの話だ。

もしも、暮葉が俺に気でもあるのだとしたら、俺は――。

「……………っ」

くそっ、考えただけでもドキドキするんだが……どうしちまったんだよ？

俺はその後もしばらく、夜の砂浜で一人月明りに照らされつつ、一人佇んでいた……。

### 第134話、襲撃者からの警告（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「話が全然進まねえ……」

伊吹「ど、どういう意味よそれ？」

圭介「いや、話数だけ増えてって話自体が進まないというか……」

伊吹「余計なシーン書かなきゃいいんじゃないの？」

圭介「ちくしょう、テンポ悪い言われたらどうしよう！」

伊吹「ちょ、泣かないでよ！　っていうかそれあんたの悩みじゃないわよね！？　絶対この小説のキャラの悩みじゃないわよね！？」

圭介「うあああああああああ！」

伊吹「……誰かこの人なんとかして……っ」

## 第135話、渡る世間に変態ばかり

翌日の朝の事である。折角明智達もいるのだからというわけで、俺たちは青山さんの別荘に明智達を呼んで室内で遊んでいたのだが、早速カオスな光景が目の前に広がっていた。

「ナギちゃん~~~~んっ！」

「うあっ！　ちょ、す……すみにゃん……！？」

実を言うと別荘に呼んだのは明智のみ。生駒が加わると面倒だと思んが思ったので、生駒には伝えていなかったハズ……なのだが、何故か生駒は明智をストーカーしていたのだ。その為生駒は明智がここにいると知っており、明智が別荘に入ってから僅か10秒後にはご覧の有様である。

生駒は明智に抱きつき、ふにと笑いながら明智にすりすりしていた。当然明智は迷惑そうにしており助けてやろっかなんて思ったが……スマン、生駒の暴走は俺たちじゃ止めれないわ。

「ナギちゃん私を放置プレイだなんてひどいよ！　あ、でもむしろ放置されてハアハアってのも捨てがたいかも！　いや、でもこの全てを包み込む胸が恋しいから放置は嫌だよ！」

それってただ明智のおっぱいが好きなだけじゃねえか。いや、確かに明智のおっぱいは大きくて素晴らしい感触だとは思いますが。

「ちょ、ちょっと離れろすみにゃん……みんなが見てるっ」

「いいんだよ関係ないんだよ！　私とナギちゃんの世界に他人なん

て関係ないんだよ！ 特にクソ介なんて一番関係ないし早く死んだほうがいいと思うんだよ！」

今すつげえ事言われた気がするんですけど！？

ちくしょう、やっぱり俺生駒だけは大っ嫌いだ！

「さあナギちゃん！ 朝だし天気もいいので早速ベッドinしよう！」

「な、なんでだ？ もう朝だろ？」

「わかってないな」ナギちゃんは。いいよ私がナギちゃんをじっくり調教して——ふ、にやぎゃっ！」

あまりにもしつこすぎる生駒に、明智も我慢の限界に達したようだ。明智は生駒の右肩を掴んだと思いきや、そのまま必殺技を仕掛けた。

一本背負投。

そう、柔道の投技である。しかも凄まじいキレであった……流石明智、あの黒木を一瞬で沈めるほどの武術の達人ではあるが、柔道の技まであそこまで完璧に使いこなすとは……。

明智、やっぱり恐ろしい女の子である。しかしそれ以上に気味が悪いのは生駒であった。

「はあ、はあ……な、ナギちゃんに投げられた……ナギちゃんに痛めつけられたっ、ふは……気持ちいいよう。も、もっとお願いしましゅ……っ」

「ドMかてめえは！」

あまりの気持ち悪さに、思わず俺はそう突っ込んでしまった。生駒は相変わらず変態的な笑みを浮かべて、ヒクヒクと身体を震わせていた。

流石の変態代表浅間部長も、この生駒には引き気味であった。

「……あ、あの……先輩はSですか？　それともMですか？」

「青山さん……一応聞くけどそれ何の為の質問なんだ？」

「圭介はドSよドS。圭介ほどいじめるのが好きな人はいないと思うわ？」

「誰がいじめっ子だよ！　伊吹にだけは言われたくねえよ！」

「じゃ、じゃあ先輩……その、わたしのことは……滅茶苦茶にいじめてもいいですよっ？」

「青山さんも少し黙ろうか。この変態淑女が！」

ダメだこりゃ。朝っぱらからカオスな事になってきている。そもその原因は生駒が明智に抱きついたり、ドMな姿を見せたのが悪いんだ。

そのせいで、余計なヤツまで話に乗ってきちゃったじゃねえかよ。

「ちなみにボクはドMだ！」

「このエロ兄貴！　あんたの性癖なんか聞いてないんだからなっ！」

「ぐはっ！　はあはあはあはあ、はあゝあっかりゝんっ！　あっかりゝんの攻撃がボクの鳩尾にiiiiiiii顔面にiiiiiiii！　も、

もっど！ もっどこの気持ち悪いブタ野郎に最近空気のおっかりんの拳をカモおっくんっ！」

「誰が空気だよこの浅間ブヒデ樹！ あと、あたいは空気じゃないんだからなっ！」

浅間部長はどうしようもないドMだな……つか、色々ネタが混ざりすぎだろ。とりあえず浅間部長が某ド変態ライトノベルと、主人公空気漫画を読んでいる事はわかったよ。

あかりも不憫だぜ。名前が被ってるだけで浅間部長にネタにされるんだからな。

だけど密かに思う事があるんだ。あの兄妹、実は仲いいんじゃないか？

あのSMプレイ……なんかその、息がピッタリな気がするんだが……。

「全く、ドMの変態が2人。発情期に突入中の後輩とドSの後輩。ブラコンの妹にエロゲオタの変態に……木下の友達の変態ばかりだな」

「あはは、言われてみるとそうかもなのです……っ」

「オイコラ明智！ 誰がエロゲオタの変態だっ！」

「そうだよ！ お兄ちゃんは妹に欲情する変態さんだけど、葵は純粹にお兄ちゃんを愛しているだけだから変態じゃないよっ！」

嘘つけ、俺は知ってるんだからな、葵が兄妹系のエロゲーを所持している事を。とにかく葵はブラコンの危ないド変態である。言っとくが、俺は兄妹系のエロゲーではなく、そのゲームに妹ルートが



あるだけで、別に特定ジャンルのエロゲーは持ってないぞ？

強いて持っているとするばそう、後輩キャラが沢山でるエロゲーなら持つてるぜ。

……すみません。どうせ俺も変態です、ホントごめんなさい。

「ぶ、ブヒヒヒヒヒヒヒヒ！ あ、あっかりくん！ あっかりくんっ！」

「アツカリくん言うなブヒデ樹！」

「はあ、はあ……な、なぎ……ちゃん……んはっ」

「……えへへ。わ、わたしも先輩にいじめられて……えへへっ」

「クーにゃんも明智先輩もわかってないんだよ？ そもそもブラコンって言うのはね——」

しかし、こうして室内を見ていると素直に思うよ……ひどい現実だ！

マトモなのは暮葉と明智と伊吹だけだよ。

いや、考えようによっちゃあ三人ともマトモじゃないぞ。明智は超能力者だし、伊吹はツンツン突っぱね〓ツツパリ伊吹ちゃんだし、暮葉はその……っ。

その時、ふと昨日の夜の事が脳裏に浮かんだ。

月明りに照らされた砂浜。そこに2人っきりの俺と暮葉。暮葉が抱きついてきたと思ったら——俺は暮葉に唇を奪われていて……。

「……っ」

「ん、どしたの圭介？ 熱でもあんの？」

「えっ？」

「なんか、顔真っ赤よ？」

昨日の事を思い出していたら、伊吹に心配されてしまった。

多分、心配されるほど赤くなっていたんだろう。だってねえ……あんな不意打ちで女の子にキスなんかされたら、誰だってドキドキはするだろ。

「な、なんでもねえ……っ」

「ホントに大丈夫なの？ 昨日あんな事があったから、どっか悪くしたんじゃないの？」

「大丈夫だって。怪我もしてねえし、風邪もひいてねえよ」

「……っ、なら……いいけど……っ」

伊吹がここまで俺を心配するなんて。昨日に引き続き珍しいな。妙に心配性な伊吹といい、不意打ちキスをしてきた暮葉といい……不思議な事が次々と起こっていく気がする。

伊吹はどうして突然俺を心配なんて？ 暮葉の昨日のキスは一体……？

俺はこのカオスな状況の中、ずっと2人の変化に思い悩んでいた。

それから数時間——俺たちはポーカーだの麻雀だの、午前中は家の中で遊んだり楽しく話をしたりして、そこそこ楽しく有意義に過

ごしていた。やがて、昼になると暮葉と一年生グループが買い物に出かけ、浅間部長と生駒は未だにポーカ―やブリッジで対決をしていた。

あの2人……一体いつになったら決着つくんだ？

博打が強いと言う浅間部長と生駒——確かに山本五十六もビツクリなほど強かった。

モナコやラスベガスに行っても、フツ―にやっていけそうな実力であった。でも、2人ともどうしようもない変態って……まさに残念なイケメンと残念な美少女だな。

俺は買い物にもついて行かず、2人の対決も観戦せず——ただ、ベランダから太平洋をずっと眺めていた。はあ……海は広いし、かもめは気楽そうでいいよなあ。

「藤島……っ」

不意に背後から声を掛けられる。

このハスキーボイスは間違いない。そこにいたのは、一つに結ばれた長い黒髪の少女。

「あ、明智……？」

「さっきから思っていたんだが、一体どうしたんだ？ 悩みごとでもあるのか？」

……ひょっとして、明智はさっきから俺の事を見ていたのか？

こんな事を言うんだから多分そうだろう。今朝からずっと暮葉と伊吹の事を考えていた俺を、明智はずっと見ていたんだ。

「いや、悩みはあるっちゃあるけど、大したことじゃねえよ」

「そうなのか？」

「おう！ 男はそんな簡単に悩まんものなんだぜ」

「……それって、自分が軽いつて言ってるようなもんじゃないか？」

「ぐはっ！ 違う違います違うんです！」

「そ、そうか……まあ別にそれはどうでもいいんだ。いくら軽くても藤島は藤島だしな」

……うわぁ、今さりげなく馬鹿にされた気がするぞ。  
俺ってそんなにチャラく見えるのか？

確かに、今着ている黒いTシャツには厨二病的な模様が入っている。それに、今日のジーパンは微妙にダメージ加工もしてあるし、これで髪が金髪でメッシュや盛り髪だったらチャラくは見えそうだけども、そう言うのって中身だろ。俺ってそんなに軽くて女癖悪いか……？

「でも、もしホントに悩みがあるなら相談するんだぞ」

「明智、いいのか？」

「当たり前だぞっ。私と藤島は友達……だからなっ」

「……そっか、そうだよな。ありがとうな明智」

「うん、気にするな。友達なんだから相談に乗るのは当たり前だぞ。それじゃあ私はそろそろ下に戻るな」

「おう」

背を向け、明智は屋内へと戻っていった。

仲間想いでクールでお姉さんっぽくて……明智はいつも通りだったなあ。

だけど暮葉と伊吹は……うーん、今日も何か違和感を覚えるな。なんでだろう？

……まあ、悩んだって仕方がないか。とりあえずは一旦中に戻ろう。

### 第135話、渡る世間に変態ばかり（後書き）

・後書きトークコーナー！

全員「／アツカリ／ン／」

あかり「ん、なんだよ？ あたいに何か用か？」

浅間部長「ダメダメ！ そこは【は〜い！】って元気よく登場しないと……」

あかり「またそれか！ いい加減にしろよなブヒデ樹！」

浅間部長「ぶ、ブヒイイイイ！ も、もっと打ってええええええつ！」

圭介「お前らしい加減にしろよ……」

葵「あっかりんは愛されてるね！」

## 第136話、砂浜のガレオン船

もしもの話をしよう。もしも、海で遊んでいたらいきなり——海が盛り上がりつつ海中から巨大な木造の船が現れたら、どういう反応をするだろうか？

普通はそんなファンタジーな事なんてありえないと思うか、何言ってるんだ？ 潜水艦だって一応は船じゃないかよ、潜航できるじゃないか？ と思うことだろう。

だが、そんな常識を覆すように——もし本当に木造帆船が浮上してきたとしたら？

普通は驚いたり腰を抜かしたりするだろう。俺たちも例外ではなかった——。

「な、なんなのよこれ!？」

「ふ、船が浮上してきやがったぞ!？」

「す、すみにゃん! は、浜ってあの船が沈むほど深かったつけ!？」

「いや、ここは浅瀬だぞ……っ、漁船でも座礁するところなのに……っ!」

「……間違いない、これは——魔法なのです!」

砂浜で遊んでいたら突然、でっかい船が浮上してきたのだ。

船は帆船。それは昔の戦争で各国が運用したガレオン船だ。側面には何十という数の大砲が並べられており、何故かイタリアの国旗が掲げられていた。意味不明である。そもそも、帆船が浮上してく

れ時点でありえないってのに、こんな浅瀬じゃ明智の言う通り——  
普通は座礁するだろ。

それなのにこの船は……一体どうなってやがるんだ？

そもそもどうしてこんな事になったのか……それは時間を遡る事  
2時間前——。

「よし、今日も海で遊ぶぞーっ！」

「わーい！ 二日連続で海だよ！」

「あ……ま、待ってよあかり、葵……っ！」

午後、やる事のなかった俺たちは結局——夕方まで海で遊ぶ事にしたのだ。

昨日に引き続き、そこら中に水着のギャルがいっぱい……ふふ、いい眺めだぜ。

やっぱり男にとっては天国すなあ。夏の海ほど見ていいものはない。まあ海に来ている女の子なんて大抵はリア充だけださ……それに、俺は浅間部長みたいにナンパはしないぞ。こう見えても俺は普通の恋愛がしたいのだ。だから、ナンパから始まる恋愛は浅間部長に任せておくよ。

「サイッテー！」

「ぐはっ！ な、殴られた……はあはあ、だけどそれがイイ……っ！」

まあ、浅間部長は言動が変態じみてる上にドMだ……ナンパで彼女GETは無理だろう。



ていうか、浅間部長がナンパに成功したら——多分世界が崩壊すると思うんだ。

「ふわあああっ！　な、ナギちゃんのおっぱいに顔を挟めるの最高おーっ！」

「いい加減にしろっ！　か、海底に沈めるぞっ！」

「か、海底に沈める……？　なにそれ、すぐく興奮するよ！？」

「き、気持ち悪いぞ……っ！　最近すみにゃんが気持ち悪いぞっ！」

コイツらは相変わらずだ……っというか気のせいかな。生駒の変態が出会った頃よりずっとひどくなっている気がするの？　うん、気のせいだ。気のせいだと信じたいぜ。

それにしても……た、確かに明智の胸はすごい。あの破壊的なボリウム、そして以前服の上からは揉んだが素晴らしい弾力。完璧だ、明智の胸は最高のおっぱいである——。

「ちえすとーっ！」

「ついでに拙者もっ！」

「ぐ、は——っ！？」

不意に衝撃が身体を襲う。

——2人の蹴りである。

暮葉と伊吹の飛び蹴りが俺の背中に突き刺さり、俺を後ろからぶっ飛ばしていた。

「こらあてめえらっ！　今の俺じゃなかったら気絶してたぞ！？」

前に倒れかけた身体を立て直しながら、俺は叫んだ。

よかったよかった、幸い大した威力ではなかった。どうやら彼女達は手を抜いていたらしい。

……って全然よくねえよ。そもそも俺はなんで蹴られたんだ？

「うっさいわね！　スキンシップよスキンシップ」

「そうですよ！　変態のけーすけ様には少しお灸をすえる必要があったのです」

「今お灸って言ったろ！？　何のお灸だよ！？」

「……ばか圭介、変態っ」

「けーすけ様……そんなに大きいのが好きなのですねっ」

「な、何言ってるんだお前ら？　とりあえず落ちつけ、なっ？」

そうは言ってみたが、結局ジト目の2人に睨まれてしまった……。やっぱりコイツら合宿に来てから様子がおかしい！　今までこんな事はなかった。確かに2人の胸は大きくはないけど、2人とも今まで特に思い悩んではいなかっただろ？

それがいきなりどうしたんだ。なんでいきなり気にするようになったんだ？

考えてもわからん……と、とりあえずここで貧乳とか思ったら殺される。あえてその話題に触れないように接して、これ以上暴行されないルートに突入しなければ――！

「落ちつけ2人ともっ！俺は別に明智を見ていたわけじゃない。  
あの海に何かあるなんて事を考えていたんだよ」

「……」

「……」

「ホントだって！ そんな腐った魚を見るような目で見ろよな！？」

「……けーすけ様、冗談にしては下手すぎるのです」

「まったく、あんたはもう少し上手い嘘つけないわけ？」

「あ、バレちゃいました……？」

「バレバレよばか圭介……っ」

「バレバレなのです……」

うぐぐ……ちくしょう、どうしてこういう時に限って口下手なんだよ。誤魔化して回避ルートに突入するどころか、余計2人に変な目で見られるようになったじゃねえか。

あゝあ。ホントに海から何かが出てくればよかったなあ。例えばお宝とか、昔沈没した海賊船とそれに乗っていた海賊たちの骸骨とか。

そんなファンタジーな事が起これば、今の作戦も上手くいっていただろうに……。

……と、考えていた——まさにその時。

「う、わ——っ!？」

突然、大地が揺れ始め、波が荒々しく波しぶきを飛び散らす。

轟々とうめき声を上げる大地。それは地震のものとも違う揺れ方であった。

だけど——それ以外になにがあるんだ？ それ以外に何も思い浮かばなかった俺たちは——。

「な、なによ！？ 地震！？」

「す、すみにゃんっ！」

「抱きつくなっ！ それより……万が一の事を考えて高台に逃げるぞっ」

明智が冷静に常識的な判断をする。流石は明智、この状況でも落ちついていられるとは……伊達に風紀委員やってないな。とにかく、もしもの事も考えて早く逃げたほうがいいな。揺れの規模から考えて多分大丈夫だとは思うが、それでも万が一という事もある。

全員と合流して——さっさと砂浜か逃げよう。

——と思っていた、まさにその時であった。

「きゃああああああああっ！」

人々の悲鳴が聞こえる。だが、それをかき消す勢いの轟音も響いた。

その原因は巨大な水柱であった。まるで悪夢でも見ているかのような光景、舞い上がった水は次第に下へ落ちて行き、やがて水柱の中から巨大な物体が見え始めた。

「……っ！」

俺……いや、周囲にいた人々すべてが、その物体を見て思わず絶句してしまった。

海底から飛び出してきたものは、一隻の帆船であった。大航海時代に大海原を渡っていたような木造で、四本のマストがついた古めかしい船。しかも、側面には数十という大砲が並べられていた。スペインの無敵艦隊<sup>アルマダ</sup>にでも所属していそうな、そんな雰囲気のカレオン船である。

ただし、掲げられている旗は——何故かイタリアの国旗であった。  
「ウソだろ？　船が……浮上してきやがった？」

「藤島！　あれはなんだ……？　お前、少しは詳しい方なんだろう？」

——そう、俺はこう見えても軍オタってほどではないが、少しだけこういう兵器とかに関する知識を持っていたりするのだ。理由は簡単、ラノベ読んでたらたまに出てくるんだよね。

「多分ガレオン船だよ。昔ヨーロッパ各国で使われた軍艦だ」

「す、すみにゃん！　は、浜ってあの船が沈むほど深かったっけ！？」

「いや、ここは浅瀬だぞ……っ、漁船でも座礁するところなのに……っ！」

「そもそも帆船に潜航能力はねえよ」

明智の回答を補足するように、俺はそう付け加えた。あの形で潜れるわけないだろ、仮に海中に潜るとしたらそれは——敵艦に撃沈

された時くらいであろう。

しかも一度潜ったら最後。帆船じゃ二度と浮上する事はできないハズだ。

それなのに……これは一体どういう事なんだよ。

「……っ！」

「ん？ どうした暮葉？」

「間違いないのです……けーすけ様、この不可解な現象は魔法によるものなのです！」

「魔法？ 魔法でこんな事が出来んのか？」

「詳しい事はまだわからないのですが、物体を具現化する魔法は確かに存在するのです」

なるほど……確かに魔法によるものだったら、あらゆる法則を無視したような現象が起こったとしても納得できるな。そもそも、魔法による現象を深く追求するのも馬鹿馬鹿しい。

だけど、なんでこんな事が起きたんだ。一体誰が何の為にこんな魔法を？

……まさかとは思うが、このふざけた光景も――。

「まさか……サヴィエト!？」

「可能性は高いのです。そもそもけーすけ様がいる場所でこんな事が起こるなんて――怪しいにもほどがあるのですよ!」

やっぱり連中の仕業なのか？ じゃあ、近藤ってヤツが言ってい

た事も本当なのか？

なんて名前だったっけ……確かアマデオ・ベルサーニ。イタリア出身の地球じゃかなり大物の魔法使い——らしいが。ホントにそいつが来やがったってのかよ。

「ねえちよっとっ」

「ん、なんだ伊吹？」

「さっきから思ってたんだけど……葵ちゃん達やあんたの部活の部長さんはどこに行ったのよ？」

「えっ？　そ、そういえばさっきから見てねえぞ？」

「ねえ、もしかしてあの船の中に……」

伊吹が心配そうにそう言うが……とりあえず落ちつけ、そして思い出そう。海に来た時葵達のはしゃぎながら海に入って行ったのは覚えている。一方の浅間部長は、確か砂浜でナンパしていたぶん殴られていたような気がするんだ。それ以降葵達と浅間部長の事はよく見てはいなかった。

だけど、葵達はずっと海で遊んでいたはずである。

じゃあやっぱり葵達は船の浮上に巻き込まれて——。

「……っ！」

「ちよっと待ちなさいよ！」

衝動的に船のほうへ駆けだそうとした俺の右手を——伊吹がぎゅっと握ってきた。

その手にはやたらと力が入っている。男の俺でも振り解くのが難しいほどに――。

「あんた、行ってどうすんのよ？」

「決まってるんだろ！ あの中に葵達がいるかもしれねえ、確認しにいくんだよ！」

こんなクソやばい状況の中、妹を全く心配しない兄貴がどこにいる？

妹だけじゃない。大切な後輩2人も行方不明状態なんだ。もし船の中にいたら――やる事はひとつしかねえだろ。大切な妹と後輩を――あの場合から助け出す……！

「だけど藤島。得体の知れない船に侵入するのは危険だぞ？」

「そうですよ！ もしサヴィエトだったら……けーすけ様の身が危険なのです！」

「クソ介。私はこれっぽちも状況がわからないけど、行くのはやめたほうがいいと思うよ？」

全員揃って俺を止めようとする。危険なのは百も承知だ。俺が連中に拘束される可能性だって十分あるだろう。だけど、仲間がもしあそこにいるとしたら――放っておけるわけがない。

だから俺は――この足を止める事なんてできない。

「それでも俺は行く。葵達を見捨てる事なんてできるかよ」

「……わかった、じゃあ私も行くぞっ」



「拙者も——けーすけ様や明智殿を護衛するのです!」

「し、仕方ないわね……昨日約束したもんね、私も一緒に行ってるわよ!」

明智は指の間接を鳴らし、暮葉と伊吹もどこから持ってきたのやら……一期一振それそれのぶきと竹刀を持ち、あの船へ共に突撃すると言ってきた。三人とも本気だ。本気の眼差しを俺にぶつけ続けている。それだけではない、三人から出ているオーラからも本気を感じられた。三人の表情に迷いや躊躇いはない。まったく……これじゃあ三人の願いを断れないじゃないか。  
それになんだかありがたいな……正直言って、あんなの一人でなるとかなると思えないし。

「わかった、三人ともサンキューな」

「よし、そうと決まれば行くわよ」

「すみにゃんはどうするんだ?」

「わ、私は行かないよ!?! 危険な事は嫌だよ!!」

「——それでは皆さん、行きましょう!」

暮葉が最後にそう言い終えると、生駒を除いた俺たちは、突如現れたあのガレオン船へ侵入すべく突撃を仕掛けた——。

### 第136話、砂浜のガレオン船（後書き）

・後書きトークコーナー！

作者「どうもです、今日は更新遅れて申し訳ございません！ 実は先日体育でやらかして捻挫しちゃいまして……嫌だって言っていたのですけど、結局病院に行ってきたので執筆時間がありませんでした！ ホント申し訳ございません」

暮葉「けーすけ様みたいに丈夫じゃないのね」

伊吹「いや、現実世界であんなに丈夫だったら気味悪いでしょ？」

風紗「っていうか、バスケで捻挫って……作者は能力ナシの早川並にもやしなのか？」

作者「ほ、ほっといってくださいえ……っ！」

圭介「誰が気色悪いんだよ！？ 悪かったな身体が丈夫で！」

## 第137話、サントイシマ・マードレ（前書き）

どうも、作者です！

あれ、おかしいな。0時に時間設定してたはずなのに……？  
更新遅れて申し訳ございませんでした！

## 第137話、サティシマ・マードレ

帆船への侵入は比較的簡単であった。暮葉が魔法で空を飛び乗船すると、船上にあったロープをこっちに降ろしてくれたので、ロープを伝って残りの俺たち三人は帆船に乗り込んだ。

すげえな……アニメや映画で見たまんまだぜ。まさか、保存用でもない木造帆船に乗る事が出来るとは思いもしなかったぜ。けどこういう事なんだ？俺たち以外に誰もいない。こんなにデカイ船に俺たちだけって……あまりにも不自然すぎるぞ？

「誰もいねえな」

「な、なんなのよこれ……映画のセットじゃないわよね？」

「流石に無理があるぞ。だけど人の気配が全くないのは不気味だな……」

武術の達人——明智でさえ人の気配を感じれない。

つまり、ここには誰もいないという事である。見張りすらいなくて……ホントにこれはサヴィエトの仕業なんだろうか。アイツらなら大戦力で一気に押してきそうな気がするのに。

「油断は禁物なのです。魔法に常識を求めてはダメなのですっ」

「それくらいわかってるけど、それにしたって誰もいないのは不自然じゃねえか？」

こんな大船なら、そこそこの人数がいなけりゃ動かせるハズがない。そもそもガレオン船は昔の軍艦である。今の海軍は態々人を使

わなくとも、自動的に装填はできる。そもそも、現代の海軍は相手が砲で十分な不審船でもない限り、砲撃戦なんて行わずにVLSからミサイルをぶっ放すだろう。

だがガレオン船は違う。

この木造帆船に、ミサイルなんてハイテクなものが搭載されているわけがない。辛うじて複数の大砲が舷側に搭載されている程度である。そもそも大航海時代の艦船に、自動装填装置なんて立派なものがあるわけないのだ。

だから、大砲を撃つためには人の力がどうしても必要である。

それなのに、どういうわけか——砲兵の姿さえ確認できなかった。

「……っ！ 気を付けろ、誰か来るぞ……っ！」

「……っ!？」

その時、明智が何者かの気配を感じたようだ。明智に続いて暮葉や伊吹も反応し、最後に俺も背筋が凍るような気配を感じた。その途端、ジャラジャラという不快な物音と、コツコツという不気味な足音が耳に入ってきた。船内からだ、あの船内への入り口から音が聞こえてくる。

扉は閉められておらず、中には灯りが無いせいか、真っ暗で中身が何も見えない。

それがむしろ不気味だ。迫ってくる者の姿さえ見えない。だが、それも音が聞こえてきた最初の数十秒のみの不安であった。相手がわからないという不安はすぐに——不気味な服装の相手に対する不安に変わっていった。

何故ならヤツが——アマデーオ・ベルサーニと思われる老人が現れたからだ。

「ようこそ……サンティシマ・マードレ号へ」

老人は2 m近い長身の男であった。重そうな聖職者の法衣を身にまとい、首からは白銀に輝く十字架を提げていた。右手には紫色の金属製の杖、左手には厚く古びた本を持っている。

そんな不気味な老人が不敵な笑みを浮かべ——渋く、鋭い声で語り掛けてきた。

「あんた、何者よ！」

甲高いアニメ声で叫んだのは——伊吹であった。

伊吹は目の前の不審者を威嚇するように叫び、そして竹刀を構えて睨みつけた。

老人は伊吹の事を見たが、その表情に変化はない——相変わらず、不敵な笑みを浮かべて右手に持つ杖を親指で、ゆっくりとさすっていた。

「そう気張るでない娘よ。本番は力を抜かないと……相当痛く苦しいモンらしいぞ」

「……っ！ あ、あんたなに言ってるのよ！」

言葉の意味を理解したのか、伊吹は顔を耳まで赤くし、甲高い声で叫んだ。あのジジイ登場していきなり下ネタを言うとは……もしかしてただのエロジジイなのか？

「ほほう？   もしかしてその様子だと処女ヴァージンなのか」

「ふ、藤島以上の変態だぞ……っ」

「明智、俺があそこまでオープンに見えんのかよ？」

「それで、結局貴方は何者なのですか？」

今度は暮葉が確認の為に、目の前にいるエロ老人にそう訊いた。恐らく、あの老人がアマデオ・ベルサーニだと思われるがまだ確証はない。最初からそうだと決めつけるのは失礼だ。だからこそ暮葉は確認を取ろうとしたのだ。最も、確認を取る必要はなかったのかもしれないが。

「人の名を聞く時はまず、自分から名乗ると教わらなかったのか？  
ならばこのアマデオ・ベルサーニがお主らの礼儀を教えようか？」

「てめえがアマデオ・ベルサーニか。ならてめえの目的は俺を捕える事なんだろう？」

「その通りだ目標。<sup>ターゲット</sup>私の目的は、藤島圭介——貴様という若造を捕えて上に身柄を引き渡す事だ」

アマデオは右腕に持つ杖を力強く握り、左手を揺さぶって古本を開いた。

魔術書グリモワールのような本は、中身こそよくは見えないが、焦げ茶色の表紙には霞んだ金色の見慣れない文字が記されていた。よくはわからないが、おそらくあれはラテン語。かつては広く使われた言葉で、今なお専門用語などではよく使われる言葉だ。  
まあ……おバカの俺にはわからないけどね。

「魔法日記120頁。記された記録を具現化——再現せよ」

アマデオが意味不明な言葉で、呪文のような事を言っている。

あくまで推測だがあれはラテン語であろう。あの本にラテン語が書かれていると言う事は、アマデオはあの本をラテン語で読んでいるということになる。ラテン語喋れるって……今じゃイタリア人でも少ないと思うぞ？

アマデオは意味不明なラテン語を言い終える。

すると、ドバァ！と水面が大きく爆発した。水を割る轟音、水柱はガレオン船のマストを超える凄まじい高さにまで昇った。高さだけではない、太さもガスタンク二つ分ほどはあるだろう。

「う、ぐ……っ！くそっ、今度はなんだ……！」

水飛沫が豪雨のように降り注ぐ。目を開けている事すら辛いほどの勢いだ。そんな水飛沫もやがては降り終え、視界が戻ったが——そこには信じられない光景が広がっていた。

一回仰げば街を吹き飛ばしそうな、それほど巨大な純白の翼を生やし、金色に輝く輪を頭上に持つスカート一枚の筋肉質の男が、神々しく輝き宙に浮いていたのだ。

「ちよ、なんなのよ……これっ！」

「どういことだ？あの巨大な翼の男は誰なんだ？」

一般人の伊吹と超能力者の明智には、もはやアレは理解不能であった。

というか、俺もサッパリわからないんだが……なんなんだアレ？一体あの男は何者なんだよ。とりあえず人間じゃない事は確かだろうが。

「しょ、召喚魔法……ですかっ？」



俺たちが驚きのあまり、言葉を失っている中——暮葉は確認するようにそう呟いた。

その呟きが聞こえたのか、アマデーオはニヤリと笑い、

「その通り。聖書正典にはミカエル、ガブリエル、ラフェエルと言った天使の名前が登場する……アレはその中でもガブリエルという存在。近代西洋儀式魔術では西の方角、青色、水の元素の象徴。まあ……あくまでガブリエルの力の一部を召喚したに過ぎないが、それでも天使の力は偉大だ。人間……いや、本気を出せば日本程度なら10分で水没するだろう」

「てめえ……そんな危険なモン召喚してんじゃねえ！」

「安心するがいい……貴様ら若造が抵抗しないのなら何もせん。仮に天使の力を使う事になっても——私のサンティシマ・マードレ号が壊れては困るんでな。本気は出させないぞ……フッフッフ」

これがアマデーオ・ベルサーニ。近代西洋儀式魔術の使い手か。確かにとんでもねえ魔法使いじゃねえかよ。下手すりゃ世界を変えちまうような——そんな実力の持ち主だな。

だけど何故だ。こんないかにもキリスト教徒な爺さんが、なんだ宗教そのものを否定するような組織の一員として戦っているんだ？

「冗談じゃない。藤島は絶対に渡さない、私はお前に降伏などしない」

「私も……悪いけど、あんたみたいなムカつくヤツ相手に——引き下がる理由なんてないわ」

「拙者も引く気なんてありません。けーすけ様を絶対に護ってみせ

るのです!」

「俺もだ。てめえなんかに捕まってたまるかよ。それと、俺達は葵や部長がこの船にいるのか調べなくちゃならねえ。それを邪魔するってんなら——てめえをぶん殴ってでも先に進んでやる!」

俺達全員の全力の叫び。アマデーオは全ての叫びを聞くと、ため息をつき金属製の大きな杖を天を仰ぐように持ち上げた。杖の先端が光っている。おそらく日光でも反射しているのだろう。

杖を持ち上げたアマデーオは、笑みを浮かべたまま、

「殺せ、ガブリエル」

つと、その天使に命令しやがった。すると、ガブリエルの目が光り——同時にアマデーオは船内へ戻って行った……。

「ま、待て——う、ぐっ!」

俺はアマデーオを追おうとしたが、瞬間——何かが目の前で爆発した。

正確に言うと爆発ではなく、何かが甲板に落下してきたのだ。まるで、砲弾のように落下してきたなにかのせいで船内の埃が舞い上がり、埃が風に流されると、大きな穴が木造の甲板に開いていた。

「藤島!」

「ちょ、圭介っ!」

「く、そ……俺は大丈夫だけど、今のは……?」

見上げると、ガブリエルの周囲には文字通り――水玉が二つほど浮いていた。

遠いので小さく見えるが、おそらく1mはあるだろう。46cm砲弾を二つ合わせた以上の大きさの水玉が、さっき俺を狙って甲板に穴を開けたのだ。

ちくしょう、こんなの喰らったらいくら俺でも死ぬぞ？

「……けーすけ様、ここは拙者に任せてお二人と共に先に行くのです」

「お、おい暮葉？」

「ちょ、あんたはどうすんのよ!？」

「伊吹の言う通りだ。てめえ一人で勝てる相手じゃねえだろ」

「勝てるなんて思ってないのです……でも、ガブリエルと真正面から戦えるのは拙者だけなのです。それより皆さんはアマデオを追って欲しいのです!」

だけどガブリエルは天使だぞ？

確かにアマデオはあれでも力の一部だって言っていたが、それでも日本をたった10分で壊滅させる程の実力の持ち主だ。暮葉一人じゃ危ないに決まってる。

だったら全員で戦ったほうがマシだ。勝てる可能性は低いが……それでも、暮葉一人に戦わせるよりは遥かにマシなはずだ。

「悔しいが木下の言う通りだぞ。私の能力じゃガブリエルとは相性が悪い……2人とも、ここは木下の腕前を信じるしかないぞ」

……だけど、そんな俺の考えを否定する一言を——明智は言った。そういえば、明智は発火能力者だったような気がする。確かに水タ  
イプのガブリエルとは相性が悪いな。

それに考えてみれば、相手は空飛んでるじゃねえかよ。俺や伊吹  
じゃ射程距離圏外で攻撃なんて絶対にできないだろうし、精々ガブ  
リエルの攻撃を避けるのが限度だろう。

そして暮葉は確か危なっかしいが——魔法で空を飛べたハズだ。

「……わかった、暮葉……死ぬなよっ」

「圭介、ちよつといいの？ 暮葉を一人であんなヤツと——」

「じゃあ俺達に攻撃手段があんのかよ？」

「そ、それはその……ないわねっ」

「お前は知ってると思うけど、アイツはあれでも風系統の魔法使い  
だ。ガブリエルと唯一戦えそうな力を持つてんだ。だから今は暮葉  
を信じるしかねえよ」

「わ、わかったわよ……！」

よし、伊吹も渋々だが受け入れてくれた。

あとは暮葉を信じて——俺達は船内に突き進むだけだ！

「木下……頼んだぞっ。藤島、伊吹、突っ込むぞ！」

「おう！」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよっ！」

こうして俺と伊吹と明智は、サンティシマ・マードレ号の内部へと突き進んだ。ガブリエルを足止めすると言う暮葉を残して――。  
頼むぜ暮葉……絶対アマデオをぶっ飛ばして帰るからよ。  
それから死ぬんじゃないぞ――絶対に……！

### 第137話、サントイシマ・マードレ（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「あたい、全然出番がないけど言わせてくれ……これ勝てるのか？」

千早「さあ……？ 相手は天使と変態老人……だよな？」

葵「だいじょーぶだよ！ お兄ちゃんは覚醒すると髪が金色になって逆立って、戦闘力だって50倍にまで膨れ上がるんだから！」

あかり「おお、強いな！」

千早「す、すごいです……先輩っ」

葵「特にスーパーお兄ちゃん3はすごいよ？ 眉毛が無くなるし髪伸びるし……魔○ブウにだって勝てるんだから！」

あかり「すごいな圭介っ！」

千早「お、男の中の男ですね……先輩……っ！」

圭介「おいコラ、勝手に俺をサ○ヤ人にしてんじゃねえ！」

## 第138話、召喚天使「ガブリエル」

拙者——木下暮葉は一期一振を構え、アマデーオによって召喚された天使——ガブリエルと30mほどの距離を空けて対峙しています。それでもガブリエルは大きく見えます。ガブリエルの本体自体は大した大きさではありませんが、ガブリエルの背中から伸びる純白の翼が巨大なのです。

拙者は幸いこの世界の宗教は信じていません。それどころか、拙者はこの世界の宗教に関しては全くの無知なのです。なので、この世界の天使を攻撃する事に、大した躊躇いはないのですが……。

やっぱり気が引きますのです。たとえ未知の宗教のものでも——天使は天使なのです。

増してやこの異常なまでの魔力。果たして、拙者で5分も持つでしょうか。ガブリエルと戦って皆さんの期待に答える事ができるのでしょうか。

「——<sup>mors</sup>死ね」

ボソリと、人外の声でガブリエルは呟いた。何語なのでしょうか……ロジーナで聞く言葉ともこの世界で聞く言葉とも違う、拙者が全く知らない言語なのです。

ただなんとなく意味はわかります。ものすごい殺意を感じるのです……きつと、あの意味不明な言葉は拙者を殺す的な意味なのでしょう。

ガブリエルはそう呟いた瞬間、純白の翼をさらに大きく開いて、自身の周囲に海水から巨大な水玉を作っていました。その数は50近いような気がします……もしかして、アレをすべて拙者にぶつけるつもりなのでしょうか？

轟音を立てて生成されていく水玉。あれでも力のほんの一部なの

でしょうね、それなのに震えるような凄まじい魔力を感じるのです。これが――天使の力なのですね。

「――それでも、拙者は生きなければならぬのです」

けーすけ様達の期待に答える為にも。皆さんを悲しませない為にも……拙者はこの戦いで生き残らなければならないのです。たとえガブリエルが相手でも――。

「拙者、姓は木下<sup>きのした</sup>、名は暮葉<sup>くれは</sup>という者なのです。アルファ隊に10人もいない特隊員の一人として、けーすけ様を守る者として――異界の天使に反抗します！」

――それが殺し合いの始まりでした。

ガブリエルは迷うことはおろか、表情一つ変えずに水玉を一発放ってきた。

それはまるで、敵の戦艦を撃沈する為に放たれた一発の砲弾。船を沈めるなというアマデオの命令を本当に聞いているのか、疑いなくなくなってしまふほどの超高速。それでも、ガブリエルにとっては十分手を抜いた結果なのでしょうね……しかし、この程度で降参するほど拙者も甘くは無いのです。

巨大な海水の水玉が目前に迫った――、

「――ッ！」

刹那、水玉は弾けるように小さな滴と化し、バラバラと甲板に飛び散りました。

ガブリエルとピタリと動きを止める。拙者はそれを睨み付け、ゆっくりと、しかし鋭い呼吸でガブリエルを威嚇しました。

一期一振。



これが必要れば拙者は今頃水圧に負け、絨毯のようになっていたでしょう。しかし一期一振を激しく振り下ろしたことにより、拙者は無理やり衝撃波を生み出しました。春頃に明智光秀と戦った時と全く同じ戦法なのです。

衝撃波で対象を切り裂き、自分の身を守る——それが拙者の護身方法なのです。

「驚かれたのですか？」

拙者は問うように、ガブリエルにそう語り掛けました。ガブリエルはそれでも——表情を全く変えずに冷徹な目で拙者を見下していました。

そんなガブリエルを見上げ、次の攻撃に備えて刀を構えながら拙者は、

「貴方は確かに天使なのです。それは拙者も認めます……しかし、天使だからと言って貴方は拙者のこと過小評価していませんか？」

ガブリエルを挑発するように、そう言い放ってやったのです。

それでもガブリエルは微動だにしない。ただ翼を微かに動かし、生成された水玉を拙者に向かって射出するだけでした。今度は二発、確実に拙者を押しつぶそうと水玉が襲ってきました。

しかし、拙者は全く動じないのです。二つの水玉の動きをしっかりと捉え——。

薙ぎ払うような一撃で一発目を。下から突くような一撃を二発目に叩きこみ、拙者は二つの巨大な水玉を消滅させてやりました。

「……」

爽やかな夏の海風が吹きつけて、とっても気持ちがいいのです。

まったく、折角水着も着ているのですから出来れば戦闘ではなく、ずっと皆さんと遊んでいたかったのです。

でも、贅沢を言っている場合ではないですよ。拙者が天使を止めなければ、誰があゝの暴走し掛けた天使を止めると言うのですか。

だから——拙者は出来るだけ涼しい顔を作って、

「確かに天使の力は偉大なのです。それに、普通の人間なら天使そのものと戦う事を拒むハズなのです……しかし、拙者にそのような躊躇いはありません！」

言い終えると、ガブリエルは更に水玉を放ってきた。今度は4発、ガブリエルは拙者だけではなくサントイシマ・マードレ号を攻撃する為に、4発の水玉をバラバラに放ってきたようなのです。

まずいのです。船内にはけーすけ様達がいるのです。皆さんを守る為には一発でもサントイシマ・マードレ号に当ててはいけません。水玉からサントイシマ・マードレ号を守らなければ！

拙者は一発目を切り裂くと、右方向に走って二発目を。さらに走って、三発目と四発目を拙者の一閃でいとも簡単に切り裂いていく。よかった……船体は無傷なのです。

それを確認した上で、拙者は続けるようにガブリエルに、

「何故だかわかりますか？ 拙者は異世界人なのです！ つまり——この世界の宗教とか神様とか天使とか、そういうものはサッパリわからないですし、信仰心も全くないのです！ 拙者の刀は神の為に振るうものではなく、拙者の信じるものや守りたいと思う人の為に振るうもの。そう、いくら異界の天使様でも拙者の仲間に出すのなら——容赦なく拙者は貴方を刀の錆にしてやるのです！」

自分の気持ちを真正面から、どこまでも素直にぶつけてやりました。

その後を訪れた静寂。拙者はその間に呼吸を整え、体勢を立て直す。そしてガブリエルが次にどのような動きをするか、それを調べるように見上げ、ガブリエルの事を見ていました。

そして——静寂の中の睨み合いの後、

拙者とガブリエルの殺し合いは——真の意味で始まりました。

ドウ！ という、ガブリエルが翼を振り仰ぐ轟音。

同時に1m近い複数の水玉が、無差別に降り注いできました。拙者はその水玉を一個一個確実に切り裂いていきましたが……まずいです、数も多いスピードも速い。このまま、全ての水玉を叩き斬る事は至難の業なのです。

やむを得ないです……おそらく、ガブリエルは船を沈めはしないでしょう。召喚者であるアマデオにそう命令されている以上、ガブリエルはその命令には逆らえません。所詮、今のガブリエルはアマデオの召喚獣であり、忠実な僕なのです。

「う、く——っ！」

それにしてもなんという数なのでしょう。全てを迎撃できない、何発かは外して船体に命中してしまいました。ですけど、やはりアマデオの命令は有効なのです。

甲板には複数の穴は開いたものの、致命傷とはなっていないようなのです。やはりガブリエルはアマデオによって力を抑制され、本来の力を出し切れていないのです。しかし、そんな状態のガブリエルにさえ拙者は防戦一方。恐るべしなのです、天使の力は……！

「——なっ!？」

その時、ガブリエルは一本の水柱を放ってきた。破壊光線のように

な水柱は、渦を巻いて音速に近い速度で、サンティシマ・マードレ号に接近してきました。まずい……もし、あれがサンティシマ・マードレ号に命中すれば、間違いなく粉々になってしまうのです。

ガブリエルは力の加減に失敗したのでしょうか。とにかく、戦艦のような鋼鉄の城ならともかく木造のガレオン船では、あの攻撃には耐えられないのです。

拙者は刀を立てて、全身に力を入れて歯を食いしばり——破壊的な水柱を身に受けました。

しかし、水柱は拙者を押しつぶし、船を撃破する事はありません——。

一期一振の刃が渦を巻く一撃を真っ二つに切り裂き、衝撃を小さく抑える事によって船への衝撃を最小限にとどめたのです。ですけど……身体への負荷が……っ！

「も、きゅ——っ!？」

耐えきれず、遂に拙者は後ろに何メートルも吹き飛ばされた。

……それでも、守れたのです……どうやら、今ので水柱は最後。拙者はこの船をあの破壊的な一撃から守りきったのです。ですけど安心はまだできません。先程の一撃を放った天使は——かなりの余力を残した状態で未だ存在しているのですから。

全身に痛みが襲いかかる中、拙者は我慢して立ち上がり——再び刀を構える。

「はぁ、はぁ……っ！」

ゆっくりと呼吸を整え、上空にいるガブリエルを睨み付けました。ガブリエルはさっきの一撃で水を使い果たしたのか、海水を吸収し、1mは確実にある巨大な水玉を何個も作っていました。水玉生成中の今は大きな隙……のハズなのですが、ここで拙者が魔法を使

って空を飛び、ガブリエルに近付いたとしても……果たして攻撃が通用するのでしょうか？

あれほどの相手に——拙者の未熟な魔法が通用するのでしょうか？

「……っ！ ま、まずいのです——っ！」

変な考え事をしている中、ガブリエルは複数の水玉を完成させてしまい、まるで敵の要塞に集中砲火を浴びせるように——大量の水玉を一斉に放ってきました。

拙者は再びそれを、斬れるものは斬ってやりました。無理なものは船体に命中し、甲板に穴を開けていきました。延々と続くガブリエルが攻撃し、拙者がそれを防ぐ戦闘……そこで拙者はようやく気がつくことができました。ガブリエルは——拙者の自滅を狙っているのです。

もしこのまま戦いが続けば、間違いなく拙者はスタミナ切れで倒れるのです。

ガブリエルの狙いはそれなのです。だから、拙者を一撃で殺さずに遊んでいるのです。

完璧にナメられてるのです……でも、それならむしろ都合がいいのです。

何故なら拙者が倒れない限り——ガブリエルはけーすけ様達を攻撃できないのですから！

「……ッ！ 遅いのですっ！」

周りの水玉よりも少々大きい、特大の水玉を拙者は叩き斬りました。

斬っただけで衝撃が全身に伝わり、拙者は吹っ飛ばされそうになりました……が、どうにか着地に成功しました。危なかったのですが、どうでしょう？

穴の数が増えてきました。次第に足場が無くなってきたのです。それなのに、ガブリエルとは際限のない消耗戦に突入しました。まずい、本当にこのままだとガブリエルの思惑通り、拙者はスタミナ切れで自滅してしまうのです。

もし仲間がいれば——とも思いました。

でも、改めて思えばけーすけ様達を先に行かせたのは正解なのです。けーすけ様達ではおそらく防御さえ出来ず、ガブリエルの攻撃で即死していたかもしれません。

別にけーすけ様達が弱いとか、そういう低次元な問題ではありません。ただ、けーすけ様達の戦い方ではガブリエルとは相性が悪いのです。攻撃が届かないし、身を守る手段さえもない。だからこそ拙者はけーすけ様達をここから遠ざけたのです。

それともう一つ。どのみち拙者にガブリエルは倒せません。ですが、一つだけガブリエルの暴走を止める方法があるのです。それは——召喚者を叩く事。アマデーオさえ倒せば、アマデーオの召喚獣であるガブリエルは消滅するハズなのです。

「う、ああ——っ！」

拙者はガブリエルの攻撃を刀で切り裂き、自分と船とけーすけ様達を守りながら思いました。

——助けてください、と。

ガブリエルは召喚者さえ叩けば消えます。

皆さん……アマデーオを倒してください——そうすれば誰も死なずに済むのです！

そう願いながら、死ぬかもしれない戦いを——拙者は続けました。

## 第138話、召喚天使「ガブリエル」(後書き)

・後書きトークコーナー！

伊吹「あ、あんた……すごい強かったのねっ」

暮葉「そ、それほどでもないですよっ！」

圭介「実は弱いんじゃない？ 説が流れるほど実力が隠れ気味だったのにな」

暮葉「けーすけ様……今すごい失礼な事言いましたよねっ？」

圭介「き、気のせいだっ！ つーか、絶対ガブリエルのほうが強そうなのになんで早川には勝てなかったんだよ？」

暮葉「もきゅー！？ そ、それは仕方ないのです！ 早川は攻撃を反射するのですよ？ 卑怯です反則なのです男じゃないのです！」

——その頃、東京の病院では——

早川「つくしよん！」

ミネット「へえー、貴方のくしゃみって可愛いね！ やっぱり貴方って女の子だよね？」

早川「くだらねえ事言ってるじゃねエぞクソガキ……まったく、誰だオレの悪口言ったクソ野郎はア？」

## 第139話、船の水兵

外からすごい轟音が聞こえる……どうやら暮葉はあの天使と戦い始めたらしい。ああもう心配すぎてしょうがねえよ。大丈夫かな暮葉のヤツ……とにかく今は暮葉を信じるしかないな。

頼むから死ぬなよ。折角の合宿で誰かが死ぬなんて、俺は絶対に嫌だからな。

それで船内に突入した俺達は、コツコツと足音を立て船内を歩いていた。それでも誰ひとりとして俺達を襲ってはこない。本当にアマデオ以外は誰もいねえのか——？

「どうすんのよ圭介。葵ちゃん達を探す？ それともあの変態をやっちゃう？」

「あのジジイを倒すに決まってるだろ。敵がいる中で下手に行動するのは危険だ」

「それについては私も藤島と同じ意見だぞ。あの老人……ただ者ではないが、三人で奇襲を仕掛ければアッサリ倒せるハズだぞっ」

奇襲——つまり不意打ちだ。確かに不意打ちを仕掛ければ、相手の実力がどれほど高かろうが俺達のほうが有利になるだろう。不意打ちでさっさとあのジジイを倒し、葵達を探して急いで葵達を船から降ろした後は——天使と戦う暮葉を助ける。

最後まで上手く行くかはわからないが、とにかくその作戦でいこう。

「よし、そうと決まればさっさとジジイを探そうぜ」

「それにしても寒いわねっ、今夏なのに……っ」



「うん、私も流石に水着だけじゃ肌寒く感じるぞ……っ」

うぐぐ……2人の言う通り、確かに船の中は結構寒いぞ。

水着しか着ていないせいもあるんだろうが。うう寒っ、やっぱさつさとジジイを探して葵達と暮葉を助けて、それから暑い砂浜に戻って遊ぼう。

それにしてもこのガレオン船も魔法の賜物か。すごいもんだな……これがこの世界でもトップレベルの魔法使いの実力かよ。天使まで召喚しやがるし。

俺達3人がかりでも倒せるんだろうか。ちょっと不安になってきた、

「——っ！」

通路の角に差し掛かった所で思考を打ち切る。俺は咄嗟に伊吹の手を引っ張って、かなり強引に俺の胸元に引き寄せた。伊吹は小さく悲鳴をあげ、その後1秒もしない間に——バスッ！何か嫌な音が響き、俺達の目の前を小さな何かが通り抜ける。瞬間、異音と共に木造の壁に風穴が開いた。

「な、なによ……っ！」

「しーっ！とにかく黙れ伊吹っ」

警告するように伊吹にそう言うと、明智が俺達の一步前に出て、壁に張り付くと彼女は恐る恐る顔だけ出した。どうやら視界に何かを捉えたらしく、明智は瞬時にこちらを向いて、

「水兵だ。銃を持った奴が何十人もいるぞっ」

「マジかよっ！」

「ちょ、銃持ってるって……どうやって戦うのよ！」

困ったなあ。まだ試した事はないけど、刃物でちゃんと切れるんだ。いくら俺の身体が丈夫つつつても銃弾には耐えられないだろう。貫通して下手すりゃ即死ってのがオチだな。

いや、もしかしたら耐えられるかもしれないけど……きつと痛いんだろうな。仮に耐えられたとしてもしばらくは動けないかもしれない。蹲っている間に集中的に攻撃されたら、それこそホントに何発目かで銃弾が身体を貫き、死んでしまうかもしれない。

しかも足音が段々近づいてきている。こうして悩んでいる間にも、サンティシマ・マードレの乗組員達は俺達を殺しにくるだろう。ちくしょう、何かいい手段はねえのかよ……って、

「——ふんっ！」

おいおいおい、明智のヤツいきなり何やってんだよ！

突然明智が飛び出し、銃を持っている水兵たちに向かって——火の玉を放った。

パイロキネシス  
発火能力。

掌の中で爆発が発生し、作り出された炎弾えんだんは、轟音と熱と火の粉を撒き散らして木造帆船の廊下を突き進んだ。水兵服を身にまとった男達に当てないように放ったのか、炎弾えんだんは男達に命中する寸前に床に着弾。眩い閃光と耳に響く轟音を撒き散らして爆発した。

直撃こそしなかったものの、爆発の衝撃波だけで何人かがひっくり返る。

それだけではない。熱風によって重度の火傷を負った者もいた。

「う、ぐ……な……なにが——が、はっ！」

明智は水兵の腹部を踏みつけて意識を奪いつつ、残りの銃を構える男達の所に自ら飛び出していった。

「明智！」

「風紗っ！」

俺と伊吹はそう叫んだが、決して明智には近づかない……いや、近づけなかった。

彼女に近づくという事は、水兵にも近づくという事。それはつまり——自分の命を自分で危険に晒すようなものであった。俺も伊吹もその事が頭に浮かび、明智に近づく事を躊躇ったのだ。

一方、超能力というチートじみた力を持つ明智は、その場から俺らに声をかけてきた。

「先に行け」

「な、なんでだよ！ お前が戦うんなら俺だって——」

「いいから藤島、伊吹を連れて先に行け！ ここは私が引き受ける、だから2人は先に言っておいてアマデオを倒してほしいぞ。それから妹や後輩をしっかり助けてこい！」

俺は反論しようと思ったが、ふと冷静になって考えてみた。

ここで俺や伊吹が飛び出して役に立てるのか？

相手は銃で武装している。超能力を使えば遠距離攻撃も可能な明智と違い、俺や伊吹は飛び道具もなければ何の能力も持たない一般人。即ち白兵戦しかできないのだ。

ちくしょう……結局役に立てねえのかよ！

「先に行かせてもらおうよ。あんたや私じゃ攻撃する前に撃たれておしまいよ」

「くそっ……！ わかったよ、必ずジジイを倒して葵達も助ける！  
てめえも死ぬなよ！」

叫んでから、俺は伊吹の手を引っ張って走りだす。そんな俺達を逃がすまいと、水兵たちが発砲してきたが、恐怖して足を止めるよりは走り続けたほうが安全だ。俺は銃撃にビビりながらも足を止めずに走り続けた。とにかく走る俺達の後方で、再び爆発音が響いてきた。

どうやら、水兵達と明智の戦いが再開されたらしい。

「もっと気合い入れてかかってこないと……お前ら全員焼死するかな！」

最後に聞こえた明智の言葉は、そんな感じの気合いを入れる為の叫び声だった。

とにかくありがたいな明智。それに外で戦っている暮葉も――。

2人の努力は絶対無駄にしねえ。絶対に目的を果たして帰ってきてやる――ッ！

――その頃、サンティシマ・マードレ号の砲室。

ボク――浅間英樹と妹、そして後輩達は気がつけば、木造帆船の中にいたんだ。

わけもわからず脱出しようとは思ったけど、命綱すら見つからず、飛び降りるにはあまりにも高過ぎたため、あかりや葵君の提案で船内探索を行う事にした。

それにしても不気味な雰囲気だね。青山君も完全に怯えていて、先程からずっとあかりにしがみついているではないか。しかし……これがまたイイね。怖がる青山君はハアハアモノだよ。

全く羨ましいね藤島君は。ここにいる可愛い子猫ちゃん3人全員に——あれだけ強い好意を寄せられているんだからね。全く……出来る事ならボクと変わって欲しいくらいだよ。

「おっ宝おっ宝♪」

「うう……あたいわくわくしてきたぞっ！」

「あ、葵とあかりはその……怖くないの……っ？」

「うん、全然怖くないよっ？」

「だって化け物とかがいんのはゲームの話だろ？ 誰かいたってあたい達は兄貴を盾にして逃げればいいんだからなっ！」

「ひどい！ ボクを盾になんてひどいよあかりっ！」

「そうだよあかり、流石にひどいと思うよ？」

おお、なんて優しいんだ葵君は。流石はブラコン、ボクだって藤島君と同じお兄ちゃんキャラなんだからね。いくら他人の兄とは言え、お兄ちゃんキャラには優しいんだね。

はあ……今まで妹は血縁が大切だと思っていたが、妹分見たいな存在っていうのも悪くはないものだね。いや、ボクの場合……自分

の妹よりもいいかもしれない——！」

「だって、部長さんは貧弱だから——盾にもならないよっ！」

ぐはっ！ ひ、ひどい……なんてひどい事を言うんだ葵君！

「……あ、葵……流石秀才だね……っ！」

「確かに、あたいの兄貴は超貧弱だな！」

「みんなしてひどいよ！ ボクはそこまで貧弱じゃないよ！」

ボクは抗議するように言い放ったが、何故だか三人はジト目でボクを見てきた。

えっ？ えっ？ ボク何かおかしい事言ったかい？ そんなにボクって貧弱で使い物にならないお荷物キャラなのかい？

「それじゃあ兄貴、何か危機が訪れたらあたい達を守れよな！」

「そうだよ！ そこで部長さんが頼れる男の人だって、証明しちゃうてくさい！」

「……うん、証拠があれば……わたしも信じますよ……っ？」

「うぐ、証拠かぁ……まあいい、本当に危機が訪れたらボクが君達を守って——」

っと、ボクが彼女達に向かって調子よく言っている時——背後から足音が聞こえた。

コツコツと、音を立ててそれは迫ってくる。ボクだけに聞こえた

幻聴——でもない、あかり達にも足音は聞こえていたようだ。びくんと反応した彼女達は、ボクと同じタイミングで身体ごと後ろに向くよう移動した。すると、闇の中から——重々しい法衣を身にまとった老人が現れたのだ。

「侵入者は目標ターゲットのみではなかったか……」

なんだいこの老人は……まるで厨二病アニメに出てくる聖職者のようだ。

重々しい法衣にギラギラと輝く十字架。紫色の怪しい金属製の杖。左手に持っているのは古びた分厚い本である。いかにも……オカルトやっていますって雰囲気だね。でもまあ、流石にここは現実世界なので変な能力は使わないだろうね。

「ふん、何者だい君は？」

「年上に対する礼儀を知らんのか、最近の若者は？」

「無論知っているさ。ただ——君のような不審者に警戒するのは当然の事だろう？」

決まった……出来ればキリッと効果音が欲しかったね。

とにかく、今のは決まったよ。表情もセリフも完璧だった。これならきつと——初対面の女の子ならボクに惚れている事だろう。

「うわぁ、兄貴がカッコつけてるぞ？」

「強がりなんだよ、部長さんは」

「……目立ちたいんですね……部長っ」

「こらそこっ！ 折角ボクカッコよかったのに空気が台無しだよっ！」

「悪いが馬鹿騒ぎなら外でやってくれんか？ このアマデオ・ヘルサーニ。若造と遊んでいる時間はこれっぽちもないのだよ」

随分とまあ威勢のいい老人だね。その上怪しいし……しかも外国人だって？

突然現れた大きな船に、突然現れた謎の老人……何が起こっているんだい。ボク達は今度はどんな騒動に巻き込まれてしまったんだい？

「そうしたいのも山々だけど……生憎、ロープすらないからボクら船から降りれないんだよね」

「そうかそうか。まあ……今更お主らを逃がしはしないがな」

「どういう意味だい？」

「私のこの姿は一般人には見せられないのだよ」

そう言うと、アマデオと名乗る老人は本を開き、杖を天に上げる。

「魔法日記169頁。記された記録を具現化——再現せよ」

ブワッとボクらの頭上に突然、縄が現れ——それはボクらを瞬時に縛り付けた。黙っているだけでも痛いほど、強く縛られた硬く太いロープ。



「う、く……っ！」

やられたね、こんな頑丈なロープを自力で解くなんてまず不可能だろう。ボクは踏ん張れるだけ踏ん張ったが、ロープはビクともしなかった。

「な、なんだ！？ このロープどっから——！？」

「う、あ……っ！ お兄ちゃんになら縛られてもよかったのに——！」

「あ……葵っ、冗談……言ってる場合じゃないよ……っ！」

女の子達も当然ロープを解けなかった。

くそっ、この爺さん一体何者なんだ。一体どうやってボクらを縛り付けた。さっき爺さんは一言意味不明な言葉を喋ったが、結局あれはなんだったんだ——！

「おいジジイ！ あたいらに一体何したんだよっ！」

「理解が追いつかんか小娘よ？ それが一般人の反応だ、心配するでない」

「一つ君に聞くよ。ボクらをこれからどうするつもりだい？」

「折角捕えたのだ。ここで殺すのは勿体ない。折角だから大部屋に案内してやろう——<sup>マジックショー</sup>最高の魔術演劇を堪能してもらおうではないか……フッフッフ」

ボクらは縄で縛られて全く抵抗できない。その状態であの老人は、勝手にボクらには何かわからない大事を引き起こそうとしていた。これからボク達はどうなるのだろうか——それを知るのはあの老人のみのようである。まずいね……非常にまずい事に巻き込まれた気がするよ。

藤島君達はどこで何をやっているのだろうか。無事なのだろうか——？ この大きな帆船から逃げる事ができたのだろうか……いや、彼の性格からして逃げはしないだろう。

必ずボク達を助けに来るハズだ。でも、助けに来るのだとしたら——。

——気を付けて欲しい。この老人は——普通じゃない。

## 第139話、船の水兵（後書き）

・後書きトークコーナー！

浅間部長「足りないね……」

圭介「何がつすか？」

浅間部長「最近シリアスな話が続いてるじゃないかい」

圭介「合宿編もクライマックスに近いですからね」

浅間部長「うん、それでだ。最近この作品には——コメディ＆日常分が足りない！」

圭介「ええ？　でも仕方ないですよ、展開的に」

浅間部長「いいや！　シリアスな話ではボクが活躍できないじゃないかい！」

圭介「今回活躍してたじゃないですか！？」

浅間部長「けどすぐやられたじゃないかい！　やっぱり日常回で女の子に囲まれてウハウハな話がボクはいいよ！」

暮葉「どのみちそういう話でも、部長さんは活躍できないと思うのです……っ」

## 第140話、魔法日記

暮葉は外で、明智は船内で敵と戦う仲、俺は伊吹と2人でこの足を進めていた。

サンティシマ・マードレ号の乗組員の数自体は少ないようで、どうやら連中は明智一人に足止めされているようである。従って、現在俺と伊吹を狙う奴は一人もいない。抵抗する者がいないから俺達は足を止める必要がなかった。

それでも不気味だな……さっきあれだけの水兵がいたのに、このあたりには一人も水兵がいないだなんて……何か罠でもあるのか？いや、そんなわけでもなさそうだ。

さつきから随分歩いているが、罠など一切なかった……。

それが作戦なのか、それともアマデオが油断しているのか、俺達にはわからない。

「圭介！ こっちこっち！」

「ん、どうした伊吹？」

伊吹に呼ばれて、俺は小走りで伊吹に近寄った。伊吹が指差す通路の先には、怪しげな木造の大きな扉が閉まっていた。うん、怪しいね……とんでもなく怪しいと思う。

「でかい扉だな……大きい部屋でもあるんだろうか？」

「そんなのわかんないわよっ、でも調べてみる価値はあると思うわっ」

「……なあ、一つだけ聞かせてくれ」

「なによこんな時に……っ！」

「今回の相手はお前にとっては初めて魔法使いだ。それも一筋縄じゃないきそうにないヤツだ。俺は出来ればお前にソイツと戦ってほしくない。それを言われても——お前は戦うか？」

俺は確認するかのように、伊吹の瞳を見つめながら言った。すると、伊吹の顔がほんの少しだけ赤くなったような気がするが、同時に伊吹はいつもの強気な表情になり、

「あたりまえでしょ。今更引き下がれないわ……それに私はあんたの幼馴染よ。あんた一人を置いて逃げるだなんて——絶対に出来ない……ッ！」

決意に満ちた表情で、伊吹は俺に向かってそう叫んだ。

それが伊吹の覚悟であった。

伊吹に逃げる気はない。足を止める気はない。竹刀を下げる気だっではない。あるのは襲いかかってくる魔法使いから——その竹刀で俺を守ろうとする気持ちだけのようなのだ。

いや、俺だけではない。伊吹は仲間たち全員を守る気だ——。

覚悟を決めた伊吹は強い。それは別に剣道の実力がすごいというわけではなく、精神的に物凄く強いという意味だ。そう、精神的に——誰よりも。

こんなに強い伊吹なら大丈夫だろう。そう思った俺は右手を伊吹の右肩に置き、

「行くぞ——アマデオをぶっ倒しに」

俺がそう言うと、伊吹はコクリと首を縦に振った。

それが、俺達にとっての真の意味での開戦であった――。

俺と伊吹は10秒以内に扉の前に辿りつき、俺は扉の取っ手を握る。大きな扉は木造と言えどもかなりの重量であり、男の俺でも苦勞してようやく開けられる程であった。

こうして開けられた大きな扉。その先で――魔法使いが不気味な笑みを浮かべていた。

「ようこそ……藤島圭介と処女ちゃんか」  
ヴァージン

「な……っ、誰が処女ちゃんよっ！」  
ヴァージン

「ふふふ、子供扱いされたくないのなら、その処女を誰かに捧げればいだろう。例えばその藤島圭介とかなっ」  
ヴァージン

おいこのエロジジイなに言ってるんだ！

つまりアレか。このジジイは俺に伊吹とやれって言ってるのか。

アホだ、いくらなんでも恋人でもない人にそれを言うとは、アホ以外の何者でもないぜ。

ほら、伊吹だってお怒りで――あれ？

「け、圭介は恋人じゃなくて幼馴染よっ……だから……そんなの捧げるわけ……っ！」

あのくもしもし伊吹さん？　なんで赤くなりながらもじもじしてるんだ。絶対それ誤解される反応だと思うんですが。ほら、あのエロジジイだって笑ってやがるじゃねえか。

「ふん、まんざらでもないのか？」

「ち、違うわよっ！　ああもう、こんのスケベ二回死ねっ！」

あ、やっぱり怒ったか。ですよねえ、こんな話をされて怒らないわけがない。だって伊吹は下ネタ耐性はあるのだが、別にそういう話が好きなわけじゃない。増してや俺と伊吹だ。ツッパリ伊吹ちゃん俺とやりたいわけがないじゃん。

俺はまあ……伊吹がいいって言うなら……ってダメだろ馬鹿か俺は！

そんな事になった瞬間——幼馴染からセ〇レにジョブチェンジ。色々と危ない関係になっちまうじゃねえかよ。それは健全なお付き合いをしたい俺としては、ちょっと気が引ける関係だぞ。

「ところで2人に問おう。私は先程侵入者を4名拘束したのだが……アレはお主らの知り合いかあ？」

アレ？　アレってなんだよ——と思いつつ、俺はアマデーオの後ろを見る。アマデーオの背後には確かに縄で縛られた男女4人がいた……ってオイ。ちょっと待て……アイツら——！

「——あ、葵！？　青山さんにあかり！？」

「ついでにあんたの部の部長までいるわよっ！」

縄で縛られた葵達は瞳を閉じ、ピクリとも動かない。

気絶……してるんだよね？　もし気絶や寝ている以外だったら——。

思わず全身に力が入る。わなわなと身体が震え、ギシギシと歯も食いしばっていた。

「てめえ……葵達になにしゃがった！」

「案ずるな。うるさいから仮死状態にただけだ。今起こしてやるか？」

アマデーオはあの紫色の杖を天に上げ、

「魔法日記P169頁。先の手順を逆に行い、記録を再現せよ！」

っと叫ぶと、目を閉じていた四人が目覚め始めた。死んでなくてよかったけど、アマデーオのヤツは一体どんな魔法を使いやがったんだ。

魔法日記ってなんだ？ 記録を再現するってどういう意味だよ。

あの紫色に輝く不気味な杖と分厚い本の正体は一体——何なんだよ？

「ん、みゅ……はっ！ お、お兄ちゃん！？」

「……先輩……っ！」

「んみゃ……どういことなんだ？ 国宗先輩まで一緒だ？」

「ん、んん……あれ、ボクらは？」

目覚めた当人達もよくわかっていないらしい。そりゃあそうだ、少なくとも葵達よりは魔法によく触れている俺でさえ——アマデーオが使う魔法は意味がわからん。

召喚も出来る。人を眠らせる事もできる……アレはどういう魔法なんだよ。

こう言う時に専門家がいれば——って思ったけど、その専門家は外で戦闘中だ。

「懐疑の念を抱いているようだな。藤島圭介、それに処女ちゃんヴァージンよ」



「だ、だから処女ちゃんはやめなさいよっ！ ホントに最低の変態ね！」  
ヴァージン

「伊吹、とりあえず抑えとけ。話が進まねえよ」

「というかエロジジイ。処女ちゃんって、今回合宿に来ている女子全員が処女ちゃんだと思うんだが……まっ、そんなツツコミしてもしょうがねえよな。」  
ヴァージン

俺がくだらない事を考えていると、アマデオは長ったらしい言葉が続ける。

「魔術とは常に己の理想を追求するものだ。私の魔術は理想を追い求める事に特化した——究極の儀式魔術なのだよ」

「究極だと？」

「私は理想を追求する為に魔術を覚えた。近代西洋儀式魔術には魔法日記というアイテムがある。これは何をするものか……素人の若造にはわかるまい」

「だったらなんだよ、何に使うんだよ！」

「なあに、これまでの訓練や儀式の内容、状況、感想などを記録するだけのつまらんモンさ。たったそれだけのモンで何が出来ると思う？ 最も、これ以上君に教えたって私に得はない……だからこれ以上は説明しないがな」

儀式を……記録？

そんなものを記録して一体どうするんだ。一体何の得になるんだ。

記録したって別にすごい魔法が使えるわけじゃないんだろ。だったら魔法日記で意味のないアイテムじゃ……まさか！

「まさか……てめえ、魔法日記に記録した事を再現してんのか！？<sup>それ</sup>」

「その通りだよ！ 中々鋭い若造だ……どうだ、上層部に引き渡す前に私の下で修業をしないか？ お主はひよっとすると魔術師の才能があるかもしれん——！」

「……便利な魔法を使えるんなら悪くねえ話かもな。だけど——お断りだ」

「私もよ。圭介を魔術師なんかにはさせない。あんたなんかの弟子には——絶対させない！」

「どうやら伊吹は気持ちは同じのようだな。俺も——あの野郎の弟子にはなりたくない。」

「そもそも、魔法使い自体になりたくない。今の俺が弱いのは分かっている。だからって魔法なんてワケの分からないモノには頼りたくない。突き進むんなら——拳で突き進んでやる。」

「拳じゃねえと出来ない事が一つあるかなら。アマデーオみたいなクソ野郎を——思いっきりぶん殴れないじゃねえか！」

「そうか、残念だ……なら私のみで理想を追求しよう。この魔法の杖<sup>ロイタスワ</sup>を介し——お主らの為に地獄を再現してやる！」

「そんなモン再現させるかよ——クソツタレがあああああああああっ！」

「逆にあんたに見せてやるわよ——挫折って名前の地獄を！」

アマデーオの理想を跡形もなくぶち殺すべく――俺と伊吹はアマデーオに飛びかかった。

## 第140話、魔法日記（後書き）

・後書きトークコーナー！

早川「作アアア者くウウウウウン！　なんでオレの出番がねエンだよ、アア！？」

作者「いや、仕方ないじゃん。この展開で早川登場って無理あるじゃん？」

早川「オレはミネットも助けたしィ、第二の主人公という座にもついた。後は本来の主人公に勝利するだけなんだよ。わかってンのか——あア！？」

ガブリエル「……」

早川「なんだオマエ？　おもしれエ……ブツ殺す！」

ガブリエル「……ッ」

早川「あア？　なんだこの破壊光線的な水柱？　こんなモン暴風の膜で反射して——な、反射しきれねェ！？　コイツ、オレの処理能力を超える威力で！？　……チッ、おもしれエクソツタレ。遊んでやるよ三下ア！」

作者「ちよつとアクセラ……げふんげふん！　早川がうるさいので、しばらくガブリエルと遊んでもらいましょう」

ミネット「次回！　アマデーオとの決戦だよ！」

## 第141話、アマデーオ・ベルサーニ

「おおっ！」

俺は叫び、アマデーオの元へと突っ走る。

考えなんてない。ただとにかく、伊吹と一緒にアマデーオに突っ込んだ。間合いを詰めてこの拳を叩きこんでやろうと思った。ただそれだけの単純な戦法。しかし、その単純さだけでも十分アマデーオを叩きのめす事で出来るハズであった。だが――、

「魔法日記P201頁。儀式の結果を見つめ直し、ここに再現せよ！」

アマデーオは魔法日記に記された、ロイタスワンド訓練やら儀式の内容や結果を読む。一見するとそれだけだがヤツは魔法の杖を介し、その記録を再現する事が出来るのだ。

あの魔法日記にどんな事が書かれているかは不明だ。一つだけ言える事は、そこに俺らの特になる事は一切書かれていないという事だ。

アマデーオの魔法はアマデーオの理想を追及するんだろ？ だったら、俺達にとってプラスとなる事が書かれているハズがない。そしてその当たり前の予想は――見事に的中したのだ。

アマデーオが魔法の杖を振りまわし、杖の先がガツンと言う音を立てて軽くぶつかった、瞬間――気付けば俺は床に倒れていた。

何があったかサッパリわからない。ただ、全身が押し潰されるように重い。黙って呼吸をする事そのものが苦痛に感じる。血液から骨の髄まで、何もかもが重くなった気分だ。

「う、あ……っ！」

「け、圭介！？ ……あ、あんた。圭介になにしたのよっ！」

「15倍の重力に耐えられるとは……流石、報告に受けていた通りの頑丈さだぞ、藤島圭介」

じゅ、じゅう……ごばい？

ふざけてんのかよ。戦闘機のパイロットだって9Gがいい所だ。なに何も鍛えていない俺に15倍の重力って……っか、魔法日記にはこんな事が書かれているのか。

アマデーオは長い人生の間に——こういう儀式を行ったってのかよ！

「ふ、ざけんじゃないわよ——このっ！」

激昂した伊吹がアマデーオに飛びかかった。右手でしっかり握った竹刀で、アマデーオの面を打とうと伊吹は彼の懷に飛び込む。

伊吹の動きは速かった。

これが剣道の試合なら——彼女は確実に一本を取っていただろう。

「魔法日記P260頁。女となるその結果をここに再現せよ！」

しかし、アマデーオは伊吹に面を打たれる前に——反応する。

叫ぶアマデーオに響く金属音。アマデーオは先程と同じく杖を突いた。アマデーオが叫んでからそのような動作を見せるという事は、何らかの儀式を再現したということだ。実際そのせいで俺は15倍の重力に押し潰され、こうして平伏しているのだ。

気絶しちまえば楽なのかもしれない……けど、俺の身体は丈夫である。たとえ15倍の重力が襲ってこようが、苦しいだけで気絶さえもできないのだ。

まさに生き地獄。ちくしょう、アマデーオに地獄を作らせてしまった……。

「ん、あ、い、ああああ……っ！」

伊吹も丁度同じような状況になっていた。アマデーオの儀式再現によって――。

目に涙を溜めて、ギリギリと歯を食いしばりながら、伊吹は蹲っていた。

俺は腕と首に力を入れ、やっとの思いで首を上げると、

「て……てめえ……今度はなにをしやがった……っ！」

「錯覚だよ。初体験の女の子とは痛いらしいな。私はその痛みを彼女に与えたのだ」

「……てめえっ」

「そう怒らんでもいいだろう。何も本当に処女を奪ったわけではない。先程も言ったが単なる錯覚だよ」

単なる錯覚だとしても、その痛みって半端じゃないんだろ。やっぱりダメだ、そんな事を魔法で再現しやがるなんて――アマデーオの野郎イカれてやがる！

本当なら今すぐにでも伊吹を助きたい。

ふと、アナスタシアってヤツと戦った時の事を思い出す。アイツはゴーレムを率いて暴れまくっていたのだが、召喚者であるアナスタシアを倒した瞬間――ゴーレムは跡形もなく消滅した。

あくまで素人の推測だけど、魔法って術者がやられれば無効化されるんじゃない？

だとしたら、伊吹を助ける方法は一つだけだ。この拳で——アマデーオのクソ野郎を殴り倒せば全ての魔法は無効化される。

伊吹が痛みから解放される。アマデーオが召喚したガブリエルも消える。結果的にそれは外にいる暮葉を救う事にもなる——。

「さてと、私は面倒くさい事は嫌いだ……さっさと藤島圭介を回収するか」

「だけど、それを達成する為には——身体に15Gがかかっている状態で、あのアマデーオと戦わなければならない。ハッキリ言ってそれは不可能だ。」

「15Gの中を普通に動けるヤツなんて、おそらくこの世にはいないだろう。ド○ゴンボールじゃねえんだから、そう簡単にはこの状況で動く事は出来ない。だけどな——俺だって何も考えていないわけじゃないんだぞ。」

「あるんだよ——15Gの中でも動けるかもしれない方法が。」

「だけど、その為には女の子の協力が必要だ。ふと周囲を見ると……この大部屋にいるのは伊吹と葵とあかりと青山さんである。伊吹はご覧の有様、これでは何もできないだろう。」

「かと言ってねえ。残りの三人は縄で縛られているし……どうすりゃいいんだよ。」

「いや待て——アマデーオのヤツ、足までは縄で縛っていないじゃないか。つまり手を使う事が出来ないだけで、ここまで歩いてくる事はできるんじゃないか？」

「ああん？　なんだその思わせぶりな表情は？　藤島圭介……何を企んでいるかは知らんが、貴様がここから逆転する事は不可能だ。素直に諦めて拘束されろ——この童貞野郎が」

「あとはアレだ、条件に合う子を三人の中から選ぶだけだ。」



その条件とは……足が速くて、俺の事が好きで、俺になら——どんな要求をされたって構わないと言える素直な子である。

青山さんは俺の事は好きみたいだし、確かに俺の要求は何でも受け入れそうだ。しかし青山さんは運動が苦手である。ここまで走ってくる間に——アマデオに捕まっちゃうぞ。

続いてあかり。あかりは足は速いし俺の事は好きみたいだ。だけど——あかりは何かとプライドが高いからなあ……あかりじゃ俺の要求を受け入れてはくれない——！

残るは……げえ、葵かよ。でも待てよ？ 葵って条件にピッタリな子じゃないか？

葵は頭も避ければ運動神経も抜群で、お兄ちゃんLOVEで、その上自分から一線を越えようとするブラコンのド変態だ。葵なら——俺の要求を喜んで受け入れてくれるかもしれない……！

一か八か……全てを俺の妹に賭けてみるか——！

「う、ぐ……っ！、あ……葵っ！」

「……っ！ お、お兄ちゃん！？」

「来てくれ……頼むっ！」

「う、うん——！」

葵は縄で身体を縛られている為、安定ながらも小走りでこっちに来てくれた。

アマデオは邪険な顔で葵を見るが、手出しをしようとはしない。自分を無視して素通りした上に、葵は魔法も何も使えない一般人だ。脅威度は限りなく低いとでも彼は思ったんだろう。助かった……葵が俺の所に来てくれた。

「来たよお兄ちゃん！　だ、大丈夫……動けないの？」

「いろいろあってな。それより葵、頼みがあるんだ……っ」

「頼み？　うん！　葵に出来る事ならなんでもするよ！」

この状況下でなんて明るい返事をするんだ。それだけでも勇気が沸いてくるよ。

後は——葵を信じるしかないな。

しかし、相手は実の妹だしな……なんかその、こんな事を言うのって変だよな。

なんつーかすっげえ恥ずかしいな……けど、言わせてもらうぜ。

「わかった……それじゃ俺と——キスしてくれ！」

「——っ!？」

……言ってしまった。

爆弾発言を——そのせいで場の空気が凍りついてしまった。

アマデオはピクピクと眉を動かし、伊吹やあかりは啞然とし、青山さんはショックを受けたような顔をしていた。いや——ホント皆さんすみません。

けど、アマデオを倒す為にも必要なですよ——ハイ！

「ふえ……え、えと……お兄ちゃん？」

すっかり紅潮してしまった葵。頼む——いつもの勢いでガバツと願います！

「葵！　明日は必ずお前と遊んでやる。だから頼む——してくれ！」

「な……なに言っただよ圭介！　ダメに決まっただろ！」

「そ……そうですね先輩……っ！　葵もその……先輩としちゃダメ……っ！」

「け、圭介……あんた、妹になんて頼みを——っ！」

大顰蹙だ。まあ当然と言えば当然だが……でも仕方ないだろう？  
アマデーオを倒す為には——アレしか方法が思い浮かばなかったんだ。

「わ、わかったよ……お兄ちゃんっ」

「……っ」

ごくっ……ついに決意した葵が、ゆっくりと瞳を閉じて顔を近づけてくる。あかりや伊吹の叫び声が入ってきたが……まあ今は気にしないでおう。後でどうにかすればいい。

とにかく俺は——葵とのキスに集中する事にした。

俺も葵に合わせて瞳を閉じ、唇を少しだけ前に突き出してやった。同時に——キスとは全く関係ない事を脳内で念じる。念じなければ何の意味もない。

そして遂に——。

「——！」

俺と葵の唇が重なった。

葵の桜色の唇は、明智や暮葉とはまた違った感触。柔らかく、甘い、桃のように香りに葵の匂いが混じったキスは——実の兄の俺で

も興奮するものであった。そして興奮と同時に——別な何かが込み上げてくるような気がした。

守りたい。

目の前の家族を守りたい。幼馴染や後輩達を守りたい。別な場所で戦っている友達も守ってあげたい——何よりこの日常を守りたい。そんな想いと、葵とのキスによる興奮や、込み上げてくる何かと重なり……。

「おおおおおおおおおっ！　気が高まる……溢れるっ！」

——遂に俺は覚醒する。

リミッターが解除され、全ての力が解放された。

その状態で俺は立ち上がる。おお、普段と大して変わらない。流石は解放モード、15Gなんてやっぱ目じゃねえな。最後の賭けに出て正解だったぜ。予想外の結果に、アマデオも眉間にしわを寄せて驚いていた。

「どういう事だ？　何故貴様は——15Gもかかっているのに動けるのだ!？」

「残念だったなあ。てめえが葵を攻撃してりゃあ、俺がゾンビのように復活する事もなかったのになあ？」

「う、ぐ……ナメやがって！　魔法日記P35頁、魔法陣を描き火柱を立てさせる魔術を——再現せよ！」

「——ッ！」

アマデオが叫ぶと、丁度俺の真下から突き刺すような火柱が3本ほど、まるでベトコンがし掛けた罠のように突然出現した。

普通、そんな罨を避けねはしないだろう。こんな罨でも人は殺せる。事実、そんな程度の罨に米兵は引っ掛かり、結構な数が犠牲になったのだ。

普通の人間ならそれで死んでしまうが——俺は平気だったりする。脚に力を入れ、勢いよく跳躍した。リミッターが解除された俺が本気を出せば——10mくらいまでなら普通に飛べたりする。素早く10mも跳躍した俺は——火柱を華麗に避けた。

「魔法日記395頁！ 絨毯爆撃、逃げ場のないその攻撃を——再現せよ！」

今度は絨毯爆撃。

絨毯爆撃とは、多数の無誘導爆弾を用いて地域一帯を爆撃することを指す。第二次世界大戦中に大型戦略爆撃機を持つ連合軍が得意とした、結構エグくて残酷な戦い方だ。

っと言っても所詮は魔法だ。別に本物の爆弾が使われるわけではない。そんなものを船内で使えば船ごと吹っ飛んでしまうからだ。実際に降ってきたのは重そうな鉄球である。鉄球と言っても脳天に当たれば普通の人間は死んでしまうだろう。だが——そもそも俺には鉄球が当たらなかった。

ボクサーのようなフットワークを使い、軽く跳躍をしながら鉄球を避けていった。

そうしているうちに——アマデーオとの距離は5mにまで近づいていた。

「魔法日記181頁！ 主の敵と認められる者を——十字架で圧殺せよ！」

首から提げていた十字架を強引にとると、十字架はアマデーオの頭上に浮き、一人の人間と同じ大きさにまで膨張する。

「これがてめえの——限界だっ！」

俺は十字架に向かって左拳を放つ。リミッター解除モードとは言え、やはり普段使っている右手と比べれば、左拳は明らかに威力が落ちていた。右拳に比べれば見劣りする速度である。

それでも——そんな程度の拳でも！

「ッ！」

俺の左拳は十字架を僅かに弾き、十字架の角がアマデーオの顎に突き刺さる。

真上に跳ね上がるアマデーオ。そんな状態で、彼は熱く叫んでいた。

「う、ぐあ！　ち——くしょう、チクシヨオオオオオオオオオオ！  
私に……魔術師の私にはサヴィエトにも居場所がないのかア！  
結局弾圧される身なのかアアアアアアッ！」

何を叫んでいるんだかわからない……が、一つだけわかる事があった。このジジイも結局魔法使いとしての居場所が欲しかっただけ。ただそれだけだ。それだけの理由でサヴィエトに協力していたんだ。たったそれだけの為に宗教の敵である組織に——協力していたんだ。

まったく、ふざけんじゃねえよこの野郎……っ！

そんな事の為に……力を変な事に使ってんじゃねえ——このクソ野郎！

「——おおおおオオオああああッ！」

俺は咆哮と共に——全力を籠めた一撃を放った。  
もちろん、副砲の左拳ではなく——主砲の右拳を。

「ぶるわあああああああああああつ！」

バゴン！ という強烈な打撃音。

ガードも出来ずに殴られたアマデオは——2、3回真上に跳ねて、ようやくその身体が止まったのは何メートルも先の地点であった。

……終わった。馬鹿みたいに強い魔法使いに——俺達は勝ったんだ……っ！

## 第141話、アマデオ・ベルサーニ（後書き）

・後書きトークコーナー！

風紗「相変わらず藤島の解放モードはチートだな」

圭介「それでもねえぞ？ 15Gだと流石に動きが鈍かったし」

風紗「アレとマトモに戦えるヤツ……いるんだろうか？」

圭介「さあ？ ラスボスあたりなら戦えるんじゃない？」

暮葉「けーすけ様……完全に調子に乗っているのですっ」



## 第142話、気付いてしまった事、

拙者——木下暮葉はまだガブリエルと戦っていました。

無数の水玉を放ってくるガブリエル、その全ての迎撃は難しいのです。拙者は今の一撃を真つ二つに切り裂いたのですが、次の一撃への反応が遅れてしまい、やむを得ず拙者はガブリエルが放った巨大水玉を避けました。先程まで拙者がいた場所に、大きな穴がぱっくりと開いていました。

まずいのです……これ以上サンティシマ・マードレ号にダメージがあると……いくらガブリエルのアレが手加減したとはいえ、いい加減この船に限界が訪れてしまうのです。

沈めてはダメなのです……っ！　まだ、この中にけーすけ様達が……っ！

……と思った——その時でした。

「……ッ！」

突然、ガブリエルの動きが止まりました。

本体も、純白の羽も、作り出された水玉も。その全てが動きを止め、まるで死人のように空中で固まっているのです。一体どうしたのでしょうか……と思った——さらに次の瞬間。

バリリン！　ガラスの割れるような音が響くと、全身にヒビの入ったガブリエルは次第に破片となって崩れ落ちていったのです。水玉も空中で形を崩し、そのまま海へと落下しました。

ガブリエルが消えた……つまり——けーすけ様達がアマデーオを倒したという事。

召喚者の意識が途絶えた為、魔法が無効化されたのだと思います。拙者は刀を甲板に落とし、力尽きるようにその場にへたり込んでしまいました。

「ありがとうございます……けーすけ様っ」

何故か。

けーすけ様だけが活躍したわけではないのに、何故か最初に——  
けーすけ様の姿が脳裏に浮かんでしまいました。何故なのでしょう  
ね……これじゃ、他の方達に失礼なのです……。

でも、どんなに頑張っても——結局最初に思い浮かぶのはけーす  
け様。

最近の拙者……ずっと変なのです。そもそも自分で自分がわかり  
ません。なんで昨日けーすけ様とキスをしてしまったのかさえ、拙  
者はわからないのです。

あの時はけーすけ様にされそうになって、結局それはなかったの  
ですが……何故か最後までしてくれなかったのが不満で結局……。

「はぁ……っ」

結局、拙者は何がしたかったのでしょうか……？  
どうしてけーすけ様とキスを……っ。

「……っ！」

かあっと顔が熱くなる。あれ、なんで……なのでしょう？

拙者……やっぱり、けーすけ様のことが好きなのでしょうか……？  
でもでも、違いますよね。恥ずかしい事を思い出したから……で  
すよね。

「……わからないのですよっ」

恋なんてした事がありません。多分……今もしていないと思うの

ですけど……。

あれ？ よくわからないのです。自分のことがわかりませんっ。そもそも拙者はけーすけ様のことをどう想っているのでしょうか。拙者は……どうしたいのでしょうか……？

「木下？」

「もきゅ！？ ふにゃ、は……なんだ、明智殿でしたかっ」

いきなり声をかけられたからビックリしたのです。気付けば背後に明智殿がいました。

し、心臓に悪いのです……人が考え事をしている時にっ。

真剣に悩んでいる時に……でも、明智殿は悪くないのです。中途半端な気持ちのまま悩み続けている拙者が——最も悪い存在なのです。

「あの天使は倒したのかっ？」

「はい……その、けーすけ様達がアマデーオを倒したみたいなので。アマデーオが死んだか気絶したかはわからないのですが……倒れたのと同時に天使は姿を消したのですっ」

「そっか。連中を片付けて、木下の力になりたいって来たんだが……どうやら一足遅かったようだな」

「何はともあれ、今回の騒動の主犯は倒されたのですっ。今日はその……色々後始末とかしなきゃいけないのですが、明日は拙者も皆さんと遊べるのです！」

「……そうだな。明日こそは皆で遊ぼう」

「はい！」

……でも、拙者は元氣よく遊べるかわからないのです。

こんなに元氣のいい事を言っても——全然気分は晴れないのです。拙者はずっとあやふやな気持ちに悩んでいるのです。いくら考えても……やっぱりわかりません。

「……ん？ 木下、どうかしたのか？」

「もきゅ？」

「いつもの元氣がないぞ？」

「そ、そうですか？ 後始末が面倒くさいな〜って思っているだけなのです！」

「ふ〜ん。いつも真面目な木下がか？」

「もきゅう……っ」

以外に鋭いのです……明智殿。

確かに拙者、何事にも面倒くさいとかって文句を付けた事はありません。それはきつといい事なんだとは思いますが、こういう場面だと全く武器にならないのです……っ。

「木下、悩みがあるなら言って欲しいぞ。私達だって——友達なんだからな」

「もきゅ、友達……うん、友達ですよね！」

「そうだぞ。まあ……木下の悩みは何となくわかるが……どうせ藤島の事だろう？」

「けーすけ様の事なんかじゃ！　ないの……ですけど……っ」

「素直に認めたほうが楽だぞ？　お前が藤島の事を見ているのはみんな知っているんだ」

「みみみみんなですかっ!？」

「おっ？　やっぱり藤島絡みかぁ……予想通りの展開だぞっ」

「もきゅう……」

拙者ってそんなに顔に出やすいのかな？

そこまでバレバレになっちゃうくらい、すぐ表情に現れちゃうのでしょうか？

そ、そんな事ないですよっ！　明智殿がたまたま鋭かっただけなのです。それで明智殿が拙者の事をみんなに言っただけ……だと思っていのですっ。

……何故なのでしょう。急に恥ずかしくなってきたのです……みんなから見ても、拙者はいつもけーすけ様の事を見ている？　でもなんで？　けーすけ様をずっと見ている理由は……？

うう、自分でもわからない。わかりたくてもわからないのです……っ。

「まあ……なんだ？　助言出来る事は少ないが……とりあえず木下、藤島をどう思っているんだ？」

「どどど、どうって!？」

「木下を見ていればわかる。きっとそんな悩みなんだろう？」

「……っ」

もきゅう……そんなところまでお見通しなのですか。なんか明智殿が怖いのですっ。

どうしてそんなトコまでわかつちゃうのでしょうか？ やっぱり拙者、考えている事が表情に出ちゃっているのでしょうか？

「それでどうなんだ？ 大丈夫だ、私は口は堅い方だぞ」

確かに明智殿はお口どころか、考えまで固いような気がするのです……明智殿になら言っても大丈夫なのでしょいか？ いや、この際打ち明けたほうが楽なのでしょうか？ それに明智殿は拙者よりはそういう事に強そうですし。いつその事……明智殿に話してみるのです。

「えと……拙者、どうしたらいいのかわからないのです」

「わからない？」

「けしすけ様の事だって好きと言えば好きなのです。でも……どういう好きなのか……っ」

「ふーん、つまり……木下は藤島の事が好きなんだな」

「っ!？」

何故かまた、顔がかあつと熱くなつてしまいました。

……あれ？　なんでまた……ドキッと胸を突かれるような感覚もありましたっ。

うう……余計意味がわからないのです。

「まあ、あくまで私の予想だけど……でも木下は迷っていたぞ」

「ま、迷っていたって……？」

「うん、即答でも出来ればそうは思わない。だけど木下は“好き”の意味がわからず迷っていた。それって、家族とは友達に向ける好きとは違う……って事じゃないのか？」

「……………」

家族や友達、もちろん好きです。それを言ったらお姉様の事は尊敬していますし、明智殿や他の皆さんだって好きなのです。そんな事はわかっています。

だけど、けーすけ様に対する好きだけ——意味がわからないのです。

「……………」

……あれ？

こ、これってその……もしかして、けーすけ様の事を……。

なんて言えればいいのでしょうか。特別に見てるって事なのでしょう  
か……っ？

“家族や友達として好き”には、他の皆さんは当てはまるのに……何故か、けーすけ様はその枠に収まりきれないのです。もっと仲良くなりたい、ずっと一緒にいたい——。

「……っ！」

理由が——わかりました。

けーすけ様に対する気持ち。拙者が悩み続けていた理由——わかつちやいました……っ。

気付いた瞬間——何故か鼓動が速くなっていく。かぁっと顔も熱くなっていく。

もきゅう、こんなの……クラスの人に言ったら笑われるのです。拙者はとても単純な事に気づけませんでした……今更それに気付いたのです……っ。

だけど……気付けたのです。それだけでも——幸せな気がします。もちろん、それ以上を望む気持ちのほうが強いのですけどね……えへへ、明智殿に相談して正解だったのです。

おかげでもやもやの正体に——気付きました！

「にゅふふ。明智殿、ありがとうございます」

「えっ？ わ、私……まだ木下の答えを聞いていないぞ？」

「さあ？ 内緒なのですっ♪」

「な、なんだ？ なんで楽しそうなんだ？」

「さっ！ そんな事よりけーすけ様達の所に行きましょう！ この船だってアマデーオの魔法で作り出されたものなのです。そう長い時間は持たないと思いますし、早く皆さんを連れて下船しましょう！」

そう言って——拙者は船の中へ向かって走りだしました。



「あ、木下！ おいてくなっ！」

にゅふふ、今の拙者はちょーっとだけ気分がいいのです。けーすけ様に会って今まで出来なかった分のお話をしたいのですっ。とにかく今拙者は——けーすけ様と一緒にいたいのですっ。

けーすけ様は護衛対象です。でも、上から何も言われていないですし、そういう仲になっちゃってもいい……ですよ？

と、とにかく負けないのです。伊吹さんや千早さんには絶対に負けないのです——！

けーすけ様……今頃なにしているのでしょうか？

とにかく——拙者はけーすけ様に会いたい。会いたくて仕方がないのです。

拙者は少しだけ軽やかに歩き、ただずっと——けーすけ様の事を考えていました。

……なのですが、船内にある大部屋に行くと——そこは、

「い、いてえっ！ ちょ、あっかりーん痛いよっ！ 伊吹も竹刀振り回すなっ！ あと青山さん視線が怖いよオーラが黒いよっ！？」

「ううう、うっさいわね！ これは立派なお仕置きよ、このシスコンっ！」

「罰だからなっ！ あたいを裏切った罰なんだからなっ！」

「先輩……ひどいです。わたしがいるのに……葵とあんな事を……ひどいです、先輩……っ！ そんな先輩にはお仕置き、今夜恥ずか

しい写真撮っちゃいますから……っ!」

え、えーっと……途中から来た拙者にはサッパリわかりません。誰か教えて欲しいのです。この状況は一体なんなのでしょうか？とーつてもカオスな事になっている気がするのです。修羅場……でしょうか？

「ふにゃあ……えへへ、私……今日からお兄ちゃんの恋人……へへっ」

「違うからな葵！ 圭介は葵のものじゃないからなっ!」

「そうだよ……せ、先輩は……わたしのものです……っ!」

「と、とにかく……アレよアレ！ 兄妹なんて認めないわよっ! そんな事になるくらいなら私が圭介と——て……ッ!? ば……ばか圭介えええええっ!」

「ぐはあっ! お、俺が悪いの!?! 今叩かれた理由がわからん!」

「あんたのせいなんだからっ! あんたが小さい頃からアレなのが悪いんだからっ!」

「そ、そうですよ……先輩、わたしというものがあらながら……浮気するのが悪いんです……っ!」

「……っ! と、とにかく反省しろよなっ!」

「だあああちくしょう! 俺は誰のものでもねえ! ああもう痛いし怖いし……不幸だああああああああああああっ!」

すごいのです……。

何が起きているのやらなのですが、すごい事になっています。後から来た明智殿も凄まじい光景を前に啞然としていました。拙者も凄すぎてその……けーすけ様と話すどころか、言葉が全く出てこないのです。一体、何をどうやったらこんな状況が生まれるのでしょうか？

謎なのです……そして、けーすけ様の部屋にあったバ○テスを思い出したのですっ。

アレも確か——ひよんな事でカオスな状況になる話、多いですよ？

なるほど。今のけーすけ様は観察処分者同然なのですねぇ。

「どうする……木下？」

「とりあえず止めましょっ！

船が消滅するのも時間の問題ですし

……っ」

……その後、拙者と明智殿は苦労の末——ようやく事態を收拾させる事に成功しました。

なんでもけーすけ様、リミッターを解除する為に葵さんとキスをしたそうなのです。

うむむ、納得なのです……聞いた瞬間拙者も拳に力が入りました。やっぱりけーすけ様はけーすけ様なのです。おバカなシスコンなのです……っ！

でも、それで戦いが終わったのですから——今回は特別に許すのですっ。

——結局、後始末に時間もかかってロクに遊べず、拙者にとって

の合宿はこの日で終わってしまいました……折角の夏休みの思い出が台無しなのです……もきう。

でも夏休みはまだまだ続くのです。一回はけーすけ様とお出かけしたいのです。

でもでも、いつ出かけましょう……結局、拙者はその後も数日迷っていました。

「あのー！　ぼ、ボク完全に忘れられてるよね！？　ボク完全に空  
気だよね！？」

## 第142話、気付いてしまった事、（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「にゃっはははは！ やった！ 兄貴よりあたいのほうが出番あるぞっ！」

浅間部長「何故だっ！ 何故あかりって名前の妹よりボクのほうが空気なんだ！」

あかり「あたいだって一応ヒロイン格だからな！ 兄貴とは違うんだよっ！」

浅間部長「それを言ったらボクだって部長だい！ 他の男とは違うのだよ！」

あかり「とにかく、今回はあたいのほうが出番多かったんだからな！」

浅間部長「うぐぐ……今に見てろ、きっといつかボクが主役になるさ！」

圭介「すっげえ醜い争い……」

暮葉「そ、そうですね……っ」

## 第143話、本物の戦争、オタクの戦争

——地球のどこか。氷の女王——アリーナ・ウラジミールヴナ・レニナは、質素な軍服の中年男性と話をしていた。彼の名前はニキータ・ヴァシレフスキー。サヴィエト亡命政府の元帥で元々はサヴィエト赤軍の軍人であった。アリーナに忠誠を誓う忠実な部下である。

アリーナは相変わらず冷徹な笑みを浮かべている。  
氷の女王に相応しい——シベリアのように冷たい堂々たる姿であった。

「へえ……つまり、アマデオ・ベルサーニまでやられたというわけですね？」

「はい」

「<sup>ターゲット</sup>所詮、神様なんてくだらないものを信じる魔術結社崩れの魔術師。藤島圭介に敗れる程度の小者だったというわけですね……ふふふ」

「同志アリーナ、次はどう動きますか？ 貴女の出方で作戦を変えなければなりません」

「そうね……もう一人のスパイとあと——そろそろ赤の軍神を送りだそうかしら？」

「も、もうアレを使うのですか？」

「ええ、明日までにスパイが<sup>ターゲット</sup>藤島圭介を捕獲できなかった場合——8月17日に“<sup>ふうけん</sup>風剣のシルフ”を送ります。この際……ついでに古

宇坂という街を占領しましょう。あの土地を私達の拠点とするのですよ……ふふふっ」

「……では、ワシは古宇坂攻略作戦の内容でも考えるとしますか」

ヴァシレフスキーは一礼し、アリーナがいる大部屋から立ち去った。

アリーナは一人、ウォッカを飲みながら冷徹な笑みを浮かべていた。

彼女の命令は一週間以内に実行される。

藤島圭介の拘束と——エリート魔術師とその部下による、古宇坂市への総攻撃が……。

——その頃、8月11日、圭介の部屋……。

はあ……なんでこうなってしまったんだろう？

それは8月11日——合宿から帰ってきて数日。暮葉からの外出規制により、相変わらず引きこもりの夏休みを満喫していたのだが……。

「♪♪♪」

現在、俺の部屋には青山さんがいる。その時点でもうおかしいとは思うが、青山さんは人の部屋の本棚にあったラノベを、ルンルン気分で読んでいたのだ。青山さんってオタだっけ？ まあそれ以前の話だとは思うけどさ。そもそもなんで青山さんが俺の部屋にいるのか。

それには色々深い事情があるのだ……そう、全てはアマデーオ

との戦いが終わった後。

伊吹、あかり、青山さんにシバかれていた俺はあの後、今回の事態を誤魔化すべく暮葉と一緒に苦勞をした結果——あかりと葵、そして浅間部長の洗脳には成功した。

洗脳と言っても、ただテキストな事を言っただけだが。まあ、なんにしても俺達の事が3人にはバレずに済んだのだ。

ところが合宿後、街中で俺は青山さんに捕まってしまい——、

『……先輩、先輩って怪しいですよね』

そう——アマデオとの戦いで完全に怪しまれてしまったのだ。正直ビビったよ、どうしようかと思ったけど……青山さんは優しかった。なんと彼女は詳しい事情を効かないって言ったのである。まあ……もちろん条件付きではあったが。

んで、その条件というのは——、

「青山さん、いつまでここにいろつもりなんだ？」

「あはは、やですね先輩……わたし達恋人じゃないですかっ？」

「ちげーよ！ いや、形はそうだけど違いますよっ！」

「……先輩、深く追求しちゃってもいいのですか？」

「すみませんっ！ 俺は正真正銘青山さんの彼氏ですよ！」

「えへへ……せんぱい大好きですっ」

そう、深く追求をしないと言う代わりに——何故か俺は青山さんの彼氏になってしまった。



つまり、俺達は付き合い始めたという事である。なんてこったい。俺、別に青山さんに対して恋愛感情を抱いちゃいないのに。まあ、これを選んだのは俺だから仕方がないが。もちろん青山さんの要求を受け入れたのにはちゃんと理由がある。

青山さんに事情を説明すると言う事は――彼女も伊吹達みたいに、俺達の世界に足を踏み入れるかもしれないと言う事だ。

魔法使いだのサヴィエトだの。あんな危険な事にか弱い青山さんを巻きこみたくはない。

青山さんと付き合うというのは、まさに苦肉の策なのである。だけれどねえ、恋愛感情もない相手と付き合うって……何をすればいいのやらって感じである。

ちなみに、俺と青山さんが付き合っている事は、暮葉や葵にはまだバレていない

当然伊吹やその他友達にもである。つか、バレたらイジられそうだし、伊吹や葵あたりにバレたらお仕置きされそうで怖いよ……。女の子と付き合うって大変だなあ。しかも恋愛感情がないっていうね……。

でもまあ、彼女が出来た事については嬉しいよ。何気に毎日楽しいからな。

「……あの、先輩……っ」

「ああ、なんだ？」

「あ、あの……明日は暇でしょうか？」

「暇っちゃあ暇だけど？」

「……そ、それじゃあ、デートいきましようっ！」

青山さんが瞳をキラキラと輝かせ、俺の袖をぎゅっと握ってから  
おねだりしてきた。

ぐは……こりゃ可愛い。青山さんって可愛い方だし。形だけでも  
青山さんが彼女な俺ってやっぱリア充なのだろうか。とにかく、  
今の仕草で一度死にそうになっちまったよ。

「えーっと、デートだって？」

「はいっ！ その……わたし達まだ一度も行ってませんよね……？」

「そうだなあ。恋人なんだからデートくらいは行ったほうがいいよ  
なあ」

「い、行きましょう……っ！ そ、それからその……わたし、先輩  
にならないつされてもいいですよ……？」

「ま、まあ……当日の俺の気分次第な」

えーっと、青山さんってこんな変態キャラだったっけ？ いや、  
最近の青山さんは葵並にアレなキャラになってきた気がする。青山  
さん……恋をして変わっちゃったのか。恋が人を変えるって話は本  
当だったんだね……お兄ちゃんちよつとシヨックですよ。

神様、どうか明日俺がその気になりませんように。どうか、青山  
さんの大切なアレを奪っちゃうような展開になりませんように。

「えへへ……先輩とデートっ♪」

「そんなに楽しみか？」

「はいっ！ だって……先輩と一緒にいれるんですからっ」

青山さんは乗り気っと。

まあ、デートくらいならしたっていいだろう。

というか、デートすらしないカップルって……そいつは多分、遠距離恋愛をしているか喧嘩中の険悪カップルくらいであろう。何よりいま青山さんを下手に怒らせると、彼女を危険に巻き込むかもしれない事を言わされる羽目になる。それだけは絶対に避けたい。

青山さんを守る為にも、それだけは絶対に——言ってはいけない。

「けど、デートつつつても何処に行けばいいんだ？」

「え、それは……そのっ」

「うーん、どこか行きたい所とかある？」

「は、はい……先輩の行きたい所に行きたいです……っ！」

「……」

う、ぐ……これは困った回答だ。

俺の行きたい所？ 明日は8月12日だし、出来る事なら夏コミに行きたいんだ。

だけどねえ。夏コミってオタクの祭典じゃん？ いや、俺もオタクだよ。胸を張ってオタクと言えるくらいアニメも見てるし、エロゲーだって大量に所持している。だけどな、夏コミデートって人間としてどうなんだろう？ 中にはそれを実行するツワモノもいるらしいが……。

だけど流石に最低だと思うんだ。でもなあ、ま○マギの同人誌欲しいし……。

いやいや、でもコミケは戦場である。果たして、戦場に可愛い可

愛いラブリーマイエンジェル千早たんを連れてっていいのか？ いやダメだろ常識的に考えて。

だけどコミケ行きてえし……ああもう！ こうなったらダメ元で誘ってみよう！

「あのさ、青山さん」

「は、はいっ」

「コミケ……って知ってるか？」

「はいっ、えーっと……同人誌即売会ですよね……？」

おお、流石は青山さん。オタクでブラコンな残念妹が友達で、部長が残念イケメン系キモオタで俺もオタクと周囲はオタだらけ、その上、最近ラノベまで読み始めただけあって知っていたか。

「そうそう、俺それに行きたいんだが……やっぱデートにそれはダメだよな！」

「いいですよ……？」

「……へ？」

「先輩……そこに行きたいんですよねっ？ その、わたしも興味ありますし……っ」

「い、いいの！？」

「……はいっ！先輩、連れてってください……っ！」

マジかよ！ コミケデートOKってどんな彼女だよ！？

青山さんってすげえ、オタク男子に優しい彼女だな。コミケに行けると聞いて、だんだん俺もテンションが上がってきましたの事よ。とにかくありがとう青山さん……っ！

よし、明日の予定は青山さんとコミケデート。そしてま○マギ同人誌の入手。

戦争だ。

彼女を楽しませつつ、俺は戦争を行わなければならない。くそっ、なんて厳しい条件下で同人誌争奪戦に参加しなきゃいけないんだ。しかし、そこで本気を出さずに男と言えるか？

戦うぞ……青山さんを楽しませる為に。ま○マギ同人誌入手の為に——！

……はあ、今思ったけど俺——ある意味最低だな……。

### 第143話、本物の戦争、オタクの戦争（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「デートでコミケはねえわ」

赤佐「サイテーやな藤島」

圭介「うっせ黙れ！ 青山さんがOK出したんだからいいだろ！」

黒木「普通ホテル直行じゃね？」

赤佐「黒やんもサイテーやな」

圭介「俺より最低じゃねえか？」

赤佐「やっぱデートはエベレスト登山やろ！？」

黒木「……コイツは一生彼女出来ねえだろうな」

圭介「……そうかもな」

## 第144話、有明大戦争

諸君、私はコミケが好きだ。諸君、私はコミケが好きだ。諸君、私はコミケが好きだ

夏コミが好きだ冬コミが好きだかつての春コミも好きだ……なんて、某少佐的な事はどうでもいいとして……今日は8月12日。つまり俺達にとっては決戦の日である――。

朝は早起き、当然朝飯なんて家出は食べない。駅のキオスクで十分だ。服装は見た目はカッコいいながら動きやすいものを選び、同人誌を入れる為に大きい鞆を持っていく。ふ、悪いが今回の俺はま○マジ同人誌の為に――本気を出しちまうぜ。

「……あれえ？　けーすけ様……出かけるのですかっ」

「ああ！　俺<sup>お</sup>ら、戦場さ行ぐだ！」

「もきゅ！？　せ、戦場！？　というかけーすけ様――！」

「悪いっ！　今日は超急ぎの用があるから！　話は帰ってきたらちやんと聞いてやるから！」

「あっ！　けーすけ様っ！　はあ……今日、けーすけ様と遊ぼうと思っただのに……」

暮葉が何かを呟いているが、全力疾走中の俺には聞きとる事が出来なかった。

とりあえずごめんよ暮葉。帰ってきたら愚痴はいくらでも聞け。あと、ついでに暮葉の為に一冊同人誌を買ってやろうかな。暮葉は確か青エク好きだったはずだ。これも全部……葵がオタな趣味を

吹き込みやがったせいだがな。あの純粹な暮葉が葵の手で何時の間に……ちくしょう！

まあ、それを言ったら俺の彼女だって、俺や葵の影響を受け——  
ついに今日、

「よお、青山さんっ」

「……っ？ あっ！ 先輩……っ！」

青山さんが俺を視界に捉えた瞬間——満面の笑みを浮かべ、嬉しそうに飛び込んできた。

俺の胸板には青山さんの顔。すりすり と押し付けるように顔を左右に振り、同時に青山さんの甘いいい香りが鼻に入ってきた。さ、最高でございま……ごちそうさまでした！ ふう……。

「ぶ、はあ——！ えへへ……先輩分補充完了。これで……一時間くらいは平気ですっ」

「一時間かよっ！ 燃費悪いなオイ」

「当然ですっ。それほどわたしにとって先輩分は重要なんですよ……っ」

「ったく、コミケはマジで戦場なんだぞ？ あと、俺らみたいなリア充が行く所でもないし、下手すりゃ襲われっかもしれないんだからな」

「大丈夫です。そういう時は……えと、フェアバーン・システムでしたっけ？ あかりに教わりました……っ！」



「……」

あかりの奴、青山さんになんてモノを教えてやがったん。フェアバーン・システムってやっぱり第二次世界大戦中に連合軍が採用した、近接戦闘用の格闘術の事だよね？ 確かに、青山さんでも出来そうな単純な技ばっかだけど……。

そもそも、青山さんが戦うのが間違いだと思うんだ。そもそも、オタクの祭典だし喧嘩上等な人なんて殆どいないだろう。

仮にいたとしても、青山さんのフェアバーン・システムは不安だ。だから俺の素人喧嘩術で相手と戦ってやろうじゃないか。まあ、何度も言うが俺らが行く場所はコミケ会場。そんな荒くれ者が行くような場所ではないだろう。ハハハ、多分大丈夫――、

……………。

「君かわうーねえ？」

「ねえねえ、そんな男放っておいてさあ、俺らと遊びに行かねえ？」

全然大丈夫じゃねえじゃん……。

それは東京都にある新木場駅での事。俺と青山さんはコミケ会場へ向かうべく、京葉線からりんかい線に乗り換えようとしていた。だが……アホだ。アホに絡まれてしまった。これは多分青山さんがあまりにも可愛いから、アホが嫉妬でもしたんだろう。はあ……相手にすんのも面倒くさい。

「せ、先輩……っ！ さささ、下がってて……くださいっ！」

うお！ 青山さんが構えてる。あかりから教わったフェアバーン・システムを、コイツらで試そうとしているのだろう。だけど……や

っぱり不安だ。青山さん弱そうなんだもん。相手の不良のあまりの可愛さに爆笑してるじゃねえかよ。仕方ない——やっぱりここは俺の素人喧嘩術で——、

「はいはいお二人とも。まあなんだ？　そこのトイレで話そうじゃないか？」

「あ？　なんだテメエ？」

「俺らテメエに用ないんだけど？　殺されたくなかったら帰ってくれね？」

「いいからいいから！　ほら、さっさと行きましょう。ねっ？」

「はあ！？　なんだコイツ生意気じゃねえ？」

「ちよ〜ムカついた！　テメエぜってえー生きて帰さねえ！」

はあ……面倒くさい。コイツらのせいで遅れたらどうすんのよ。コミケは徹夜NGだから早朝にならべなかったら、ま〇マギ同人誌入手は絶望的なんだぞ？

っと言うわけで、さっさと騒動を終わらせる為に——俺が不良と戦った。結果は別に報告するほどの事でもないだろう。街のヤンキー12人程度で苦労はしないですよ。魔法使いに襲われたりとデンジャラスな日常を過ごしているんだ。そんな事もあって——俺はいつの間にか強くなっていた。

「ぐ、はあ——！　う、そ……三発しか……喰らってないのに……？」

「ひ、ひい！　ば……バケモノだあ……っ！　あの、これで勘弁してくださいえーっ！」

不良の一人は俺に財布を渡し、床に倒れていたもう一人を引きずって逃げてしまった。

……えーっと、とりあえずこの財布どうしよう？　やっぱり、人の財布はちゃんと届けないとダメですよええ。はあ……結局この騒動のせいで、飛び込み乗車をする羽目になった。

しかも今は夏ですよ？　黙っていても汗ばむこの季節に、走ってぎゅうぎゅう詰め of 電車に飛び込んだのである。暑い上に汗だくな事この上ナシである。

はあ……朝っぱらからこれとは、今年のコミケは先が思いやられるよ。

それから数十分後、俺と青山さんは遂に——東京国際展示場へ足を踏み込んだ。

もう始発電車で来たんだけど……なんなんだこの人ごみは？　ひよっとしてコイツら徹夜組じゃねえだろうな。ルールを守った結果がこれだよ、ちくしょう徹夜組多すぎる。果たして無事にま○マギ同人誌を手に入れる事が出来るんだろうか。

「す、すごい人数……ですネっ」

「始発列車に乗ってこれかあ……やっぱ上級者はすげえな」

「その……あれですよ、暇人……なんですよね？」

「まあ、ここに来るって事は殆ど暇人なんじゃねえのか？」

俺だって正直暇人だからな。外出規制がかけられてロクに外出が出来ん……そんな日常が続いていい加減引きこもり生活にも飽きていた頃だ。そんな時にコミケに来たんだ、当然たとえ猛暑でも人が多くても俺のテンションは最高に高かった。

……だけど、ま○マジ入手できるべか？ 流石に人数多すぎだろ……。

っと思っていたその時、ピンポンパンポン。このありがちな音は間違いなくアレだ。

『おまたせいたしました——』

開戦。

そう——今、まさに戦争が始まったのである。

拍手の音で放送の音が掻き消されているが、まあ関係ない……そんな事より、2011年有明大戦争は今まさに始まった——！

「青山さん」

「は、はい……っ」

「ここはマジで危険だ。迷子になるかもしれない……だから俺から離れるなっ！」

「……っ！ は、はい……っ」

借りた猫のように静かになり、顔もすっかり紅潮していた。そんな状態の青山さんは静かに俯いてしまった。え……と……俺、何か恥ずかしいセリフ言ったっけ？

ってかそんな話はどうでもいい。それより、早く飛びこまねえとま○マジが——！

……その後も、俺は青山さんの手を引きつつ、人ごみを移動し――狙っているサークルの場所へ迅速かつ慎重に向かった。彼女連れだが……それでも辛うじて到着はしたが。

「せ、先輩……大変です、あれ……っ！」

「……っ！ さ、最後の一冊！？」

ウソだろ。今年のコミケはレベルが高え……ッ！

俺は始発組だったんだぞ。それなのにもうま○マギねえのかよ。な○は完売ならぬま○か完売が現実のものになっちゃうのか。ちくしょう、なら最後を飾るのは俺だ。たとえ死んでもこの一冊は誰にだって譲らねえぞ――！

「……ッ！？」

同時に――触れやがった？

一冊の本に2人の手が同時に触れた。これはまずい。いや、ある程度は予想していたがまさか本当にこんな事になっちゃうとは。だが、この程度で諦めるほど――俺は甘くなんかねえ！

「ここは俺も譲れないね……途中でリタイアした友達の為にもね――」

「……いいぜ、てめえがまだま○マギ同人誌を狙うってなら――まづはそのふざけた幻想をぶち殺す！」

「――あれ、圭介？」

「……えっ、お……お前まさか重原？」

意外な場所……でもないか。去年はコイツや大吾と一緒に来たしな。

俺と同時に同人誌を手に触れたのは——重原広敏その人であった。偶然の遭遇である。コイツら……今年もコミケに来ていたのか！

## 第144話、有明大戦争（後書き）

・後書きトークコーナー

伊吹「まゝた私ら出番のなさそうな話が始まったわね」

凧紗「そうだな……っ、コミケっておもしろいのか？」

伊吹「圭介は暑いし、人多いし、徹夜組がうざいとか言ってたわよ？」

凧紗「な、なにが面白いんだろう……？」

伊吹「圭介の世界は私もあんまりわかんないわよ……っ」

——その頃。

葵「でねでね！ 今年は葵二日目を狙おうと思うんですよ！」

純奈「私は3日目まで全部行くよ！ 百合百合な同人誌いっぱい買うんだ！」

※世の中、よくわからない。

## 第145話、友達と彼女、どっちを優先すべき？

「はあ！？ サークル参加!？」

8月12日の東京国際展示場。ここでは夏コミが開催され、俺は青山さんと2人でこの戦場までやってきたのだ。しかし、俺らは始発組だったにも関わらず、ま○マギ同人誌は既に最後の一冊となっていたんだ。全く、予想以上に徹夜組が多くてビビったよ。

なんとしてでも同人誌を手に入れるべく、迅速かつ慎重に行動した結果——俺達はいかに最後の一冊に手を触れる事が出来た。しかし、俺は誰かと同時にその一冊に触れたのだ。最後の一冊を賭けた戦いが始まる——と思いきや、同時に最後の一冊に手を触れたのは、我が友の重原広敏であった。

どうやら重原は大吾と一緒に来たらしく、その大吾は家現在トイレ中らしいが……。

「そうなんだよねえ。大吾ってアレでもサークルの一員らしいから。俺は大吾の手伝い&ま○マギ同人誌入手の為に頑張ってたんだよ」

「だ、大吾がサークルの一員ねえ……」

以外過ぎる事実だな。マジで言ってるのかよ、あの大吾がサークルに入ってたって？

そう言えば、アイツとは最近連絡が取れなかったな。唯一大吾と連絡がついた日なんて「僕は今聖戦の為に忙しいんでね！ ごめんね圭介、それじゃあいい夏休みを満喫してね！」と、なにやらわけのわからん事を口にしていた。アイツ……あの言葉は夏コミ参加の為だったのか。



「ん？　けど、お前はお手伝いとして誘われたんだろ？」

「まあね」

「俺もお前らの友達で、同じ趣味を持つ同志なハズなんだけど……  
なんでお前だけ？」

「ああ、それ俺と大吾の配慮」

「えっ？　ちょっと待てこら、どういう事なんだよ？」

すると、重原は突然俺と青山さんを指差してきた。

「だって圭介はリア充だからねえ。圭介争奪戦を面白くする為にも、  
圭介を誘うのは悪いかなうなんて思ったんだよ」

「はあ！？　ふっざけんな！　非リア充の俺は室内で腐ってたんだ  
ぞちくしょう！」

「あれ、そうなの？」

なにこの素で驚いているマジ反応。俺って一体重原や大吾からは、  
どんな目で見られちゃってんだろうか。まさか、ホントにリア充だ  
とでも思ってたの？

今は形だけリア充なのは確かだけどさ……あ、そういえば青山さ  
んは？

「……せ、先輩……わたし達の関係は嘘……だったんですかつ？」

しまった、これはまずい。非常にまずい事が発生したぞ。さっき

の俺の非リア充宣言のせいかな青山さんが……か、悲しんでいやがる。ていうか青山さん、リア充の意味知ってたんだ。このままだと青山さんに深い事情を追及されてしまう。なんとしてでもそれを避けなければ——！

「ちょ、待て青山さん！ これはそのアレだ……すまん、今は話を合わせてくれ！」

「……えっ？ は、はい……っ」

どうしよう。一応領いてはくれたけど、青山さんがすっげえ悲しそうだ……そこまで俺の事が好きだったなんて。もしかして、今まで邪険に扱い過ぎたかな。いやいや、だけど本気で好き合っているカップルではないし、色々な意味で過ちは犯したくない。

だからまあ、これでいいとは思うんだが……ああもうどうしよ、恋愛って難しすぎるぞ。

「ところで圭介、その子って圭介の部活の後輩さんだよな？」

「ああ、そうだよ」

「……あ、あの……先輩のお友達の重原先輩……ですよね？」

「おお、俺の名前覚えていてくれたんだね」

「はい、先輩が話してくれましたので……っ」

直接話す事ってのは少ないが、一応お互い顔は知っている。それが青山さんと重原のなんとも微妙な関係である。っで、青山さんには何度かコイツの話をした事がある。だからだろう、青山さんが重

原の名前を覚えていたのは。

重原は唯一人に話せる友達だからな。大吾はちよつと……アレだな。完全二次元派ってのを隠さないと引かれるヤツであろう。

それでもアイツ、何故か付き合いいいからか、そこそこ男女問わずに人気らしいが。

……あの完全二次元派が人気とは、最初知った時は烏龍茶吹いたぜ。

「はは、そうだったんだ。僕は重原広敏、改めてよろしくね」

「は、はい……！ 青山千早です……その……け、圭介先輩とお付き（ry）」

俺は全てを言おうとした青山さんの口を塞いだ。言わせてたまるか、重原なんか知られたら絶対にいじられるだろうが。青山さんはふがふがと手の中で暴れている。

でも……そんなの関係ねえ。とりあえず重原専用の紹介をしてやろう。

「まあ、なんだ？ 仲のいい後輩ってヤツだ」

「へえ〜？ 仲のいい後輩ねえ……実は付き合ってるんじゃないのかい？」

「……っ！ 付き合っちゃいねえぞ？」

「その割にはさっきまで、随分といちゃらぶしていたような気がするけどね」

「してねえって。それよりお前、大吾の所手伝わなくてもいいのか

「？」

「あ、そうだったね。サークルの人に無理言っただけだしてきたからね、そろそろ俺も戻った方がいいのかな？」

「ああ……あつ、そうだ重原。ホントにま○マジ貰っちゃったのか？」

俺は重原に最終確認的な事をしてみる。そう——さっきの同人誌。あの後重原と話し合った結果、なんと同人誌は俺のものになったのだ。だが重原はそれが欲しいが為にサークルの人に無理を言い、ここまでやって来たんだ。その努力を水の泡に……流石にそれはちよつと可哀想な気がするぞ。やっぱりここは友達として——譲ってやるべきなんじゃ？

……と思ったが、重原はニツコリと爽やかな笑顔を浮かべて、

「いいんだよ。大吾にさせられて圭介を夏コミに誘わなかったし、圭介が暇している事にも気付かないでね……」

「別にそれはいいんだけどよ、つーかお前は全然悪くないだろ？」

悪いのは大吾。まあ、別に怒っちゃいけないけどさ……。

でもねえ、勝手にリア充って決めつるなよ。まあ、今は形だけでもそうだし、文句を言える立場じゃないって事も自覚はしているけど……。

「いいんだって。実は俺らの所もま○マジ売ってたんだよね。俺はサークルを手伝って、そっちのほうは持っているんだ」

「マジ!？」

「それも欲しかったんだけどねえ、そのうちお互い持ってる同人誌を貸し合う……って話でどうだい？」

「ち、ちなみにお前らの所の同人誌は……？」

「ここが始発組でギリギリだったんだ。多分、向こうも完売していると思うよ」

ですよねえ……はあ、ま○マギどんだけ人気なんだよ。な○はのビックリだ、まさかここまでま○マギが人気だったとは。全くわけがわからないよ。

「じゃあ、学校始まったら貸し合おうぜ」

「そうだね。よし、男の約束だよ」

「ああ、約束だ」

ガシっ、と俺と重原は腕を組んだ。

ぐっふふふ……やっぱり持つべきものは友達だな。交渉成立である。こうして俺は当初の予定よりも充実した結果を得る事に成功。今年の有明大戦争は友軍のおかげで——大勝利だ。

「それじゃ、俺はそろそろホントに行くね」

「おう、重原もサークルのほう頑張れよ！」

こうして——俺は大切な友と別れを告げたのだ。  
ふう……終わった。さて、後はテキトーにコミケ会場を回るとし

よう。目的は達成されたんだから後はお遊びタイムだぜ。青山さんも興味があるって言っていたし、去年大吾達と来た時もドタバタだったからなあ。今年はじっくり会場を回るとしよう――。

――それから数十分後。俺達は話しあいながら外に来ていた。

理由は簡単。青山さんがトイレに行きたいからである。だが、夏コミとトイレと言うのは非常に混雑しているものだ。なので、用を足すまでに時間がかかってしまうのだが、青山さんがそこまで長時間我慢できるわけがない。そこで俺は外の仮設トイレに目を付けたんだ。

去年の大吾情報なんだが、10時を過ぎると仮設トイレは比較的空くらしい。その話を信じて実際に言ってみたのだが……正解だったな。確かに中のトイレよりは人が少ない。

「よかったな青山さん。思ってたよりも人が少ないぞ」

「……そうですねっ」

「あ、青山さん……？ まだ怒ってるんでせう？」

「……先輩、わたしのこと……ただの後輩って……っ」

「ちょ！ だからアレは違うんですよ！ 色々と事情があったんだよ！」

「素直に恋人って……言えば良かったじゃないですかっ」

「それだと後ほど俺の身に危険が……っ」

そう言うわけにもいかないのが現実。アイツらにバレたら大変だ。すぐに暮葉達にも情報が届いて俺は下手したら——葵あたりにシバかれるかもしれない。

絶対に嫌なんだよ。ちよつとした事で制裁を受けるのが！

「うう……せ、先輩。その……話は後にしてその……行ってきます  
っ」

「え？ お、おう。気を付けろよ？」

青山さんは相当近いようで、少し身体を震わせていた。よかったあ外来て、中のトイレだったら青山さんは漏らしていたかもしれないな。

だけどうしようかな。早速自己保身のためにとった行動が、青山さんのご機嫌をかなり損ねてしまったよ。青山さんがトイレから戻ってきたら、ちゃんと事情を説明しねえとな。

「あ、圭介じゃないかい」

「ん？」

不意に横から声をかけられた。

男の声だな。誰かと思って左を向くと——爽やかだが大柄な男が佇んでいた。

「やあ」

「あれ、重原じゃねえか？」

そこに立っていたのは我が友——重原広敏であった。

さっき約束をして別れた、現在サークルお手伝い中のヤツである。けど何故？ 重原はサークルの手伝いに戻ったハズなのに。

「トイレで会うだなんて、これまた奇遇だね」

「ああ、だけどお前……サークルの仕事は？」

「大吾の次は俺だよ。俺もトイレがしたくなってね。時間帶的にこのトイレが好いているだろうからこっちに來たんだ。今済ませて帰ろうとした所だよ」

「そっかあ」

「あ、そうだ。圭介……ちょっと話があるんだけどいいかな？」

「えっ、話？」

なんなんだ、こんな時に？

つかまずい展開だぞ。これって青山さんの機嫌を更に損ねるフラグでは？

「うん、ちょっと来てくれるかな？」

「いや、だけど青山さんが……」

「大丈夫。彼女には俺がメールで伝えておくから」

「えっ！？ 何時の間にメアド交換したのか！？」

「まあね、だから大丈夫だよ。すごーい大事な話だから……お願い



！  
」

あの重原が素直に頭を下げるだなんて……よっぽど大事な話らしいな。だけど青山さんの事もあるから俺はうかつに動けんし。困ったな……どうすりゃいいんだろう。

っと、俺が悩んでいたその時——重原が俺の右手を取って、

「うわっ！　ちょ、重原！」

「ごめん圭介！　ちゃんと彼女さんには事情をメールで伝えておくから！」

「俺の意志は無視ですか！？　スルーですか！？」

あ、あれ？　コイツってこんな無理やりなヤツだったっけ？  
まあいいや……それより一体なんの話なんだよ。  
一体俺は重原からどんな話をされるんだ？

**第145話、友達と彼女、どっちを優先すべき？（後書き）**

・後書きトークコーナー！

圭介「はあ……ちくしょう、指いてえ」

伊吹「どうしたのよ圭介？」

圭介「格ゲーやり過ぎたんだ。俺の体質でも治りきらねえ……」

伊吹「い、一体どんだけ長い時間プレイしてたのよ!？」

圭介「いや、軽く5〜6時間？　しかも強いヤツばかり相手にしてな」

伊吹「し、真性の馬鹿だわ……っ!」

## 第146話、……あれ？

「はぁ……」

わたし——青山千早はお手洗いから出て、先輩に抱きつこうと思っただけど……いない。

先輩、どこにいったのかな。やっぱり先輩はわたしの事……で、でも、完全に嫌っているって素振りは見せないし。中途半端ですよ……先輩っ。先輩はいじわるです。わたしの心を揺さぶるだけ揺さぶらせて、いつもいつもわたしにカッコいい姿を見せて……。わたしは先輩がずっと好きです。中学の頃から片想いしていました。そして今——やっとわたしはただの先輩後輩の関係ではなく、彼氏彼女の関係になった。だけど、先輩はわたしがお手洗いに行っている間に消えてしまった。もちろんメールも一件もありません。

「……先輩っ、どこ……ですか？」

先輩……。

大好きな先輩……。

もしかして……嫌われちゃったのかな？

……そう、ですよね……わたしは殆ど無理やり先輩の彼女になった。先輩の数少ない弱みを握れて嬉しくって……でも、冷静になって考えてみればわたし……最低だよね。

だけど、そんなわたしに今まで怒りもしなかった先輩。優しすぎですよ……だからこういう事があると余計に悲しいです。好きに……させないでくださいよっ。

わたしはこれからどうすれば……。

「う、ぐぁ……っ！」

「……え……っ？」

突然、左下から男の人のうめき声が聞こえた。とっても苦しそうな声だった。咄嗟にわたしは首を動かし下を向くと、顔を見た事がある人が――苦しそうな表情を浮かべていた。

「……え、えと……重原先輩……ですよね？」

「き、君は確か青山さん……早く、圭介を連れて逃げてくれ……っ！」

どうして？　なんで重原先輩がこんなにボロボロなの？

先輩はいないし、重原先輩はボロボロだし、しかも逃げてって……もしかして、またなにか大変な事が起こったの？　わからないよ……どういふ事なのかさっぱりわからない。

でも、とりあえずその……せ、先輩の名前を出しましたし、先輩の事を教えないとっ。

「あ、あの……その……先輩ならわたしがお手洗に行っている間に……」

「い、いなくなったのかい……？」

「はい……っ」

「ちくしょう……まさか、もうヤツにやられたのかもしれない。行かなければ……っ！」

「あ……っ！　し、重原先輩……っ！」

重原先輩は傷だらけの体を引きずって、走ってこの場から立ち去ってしまった。

ヤツってなんなのでしょいか。そもそも、重原先輩はどうしてそんなにひどい怪我をしているのでしょうか？ 先輩がやられたってどういう意味……？

もしかし、先輩はわたしを置いて帰ったのではなく、無理やり連れ去られた……？

……とにかく、重原先輩について行こう。何かわかるかもしれな  
いよ——。

——その頃、人気のない会場裏。

俺——藤島圭介は無理やり重原に引っ張られ、人気のない場所まで来てしまった。何が入っているのかまではわからないが、壁際にはダンボールが山積みされている。誰も乗っていないトラックが3台ほど並んで駐車してある。どうやら……ここは会場の裏らしいな。

「まったく、いつもに増してほんとに無理やりだな」

「ごめんね圭介。どうしても話しておかなければならない話だからね」

「わあったよ付き合うよ。けど、青山さんに悪いから手短に頼むぞ」

「大丈夫だよ。抵抗がなければすぐに済むから」

「はあ？」

抵抗って、何の話をしているんだコイツ？

言っとくが、俺は化学苦手だからな。だけど重原は化学得意だった気がするし、一体なんでこんな場所で化学の話をするんだよ。しかも、それが青山さんに聞かれたくない話なのか？

「……んで、結局お前の話ってなんなんだ？」

「おつといけない。話を忘れる所だったよ……あれ？ あの子青山さんじゃないかい？」

「えっ？」

青山さん？ ひょっとして青山さん、俺らの後を追ってきたってのか？

でもトイレをしていた割には速過ぎだし。まあ、今の状況を簡単に説明すると俺は青山さんを心配させているわけだ。突然俺がトイレから離れる姿を見て、彼女は不安に思ったのかもしれない。

俺は青山さんの姿を確認するべく、後ろを向いてみると、

「が、はぁ！」

突然、かなり強い衝撃を受けた。

ちくしょう……なんだ？ 一体何が起こった……肺の中の空気が一気に排出され、叫ぶ事も呼吸する事もできねえ。おまけに背中が滅茶苦茶痛え、主に内面が痛えよ……ひょっとして、俺は背中の中の真ん中あたりをぶん殴られたのか？

俺は苦しそうに胸部を押さえ、重原がいる後ろを振り向いた。

確かにそこには重原がいたが——いつもの重原ではない。何故か拳を構え、目も鋭く口元が奇妙に歪んでいた。まるで——重原だけ

ど重原じゃないみたいだ。

「しげ……はら……っ！」

「チッ、この大男の力を持<sup>パワー</sup>ってしても一撃では無理か。よく観察していたとは言えこの耐久力には流石の俺もビックリだよ」

よく観察……？

どういう事だ、よく観察って……まるで俺の事を見張っているみたいじゃねえか。

重原とそんなにしょっちゅう一緒にいたか、俺？

「あれだけ丈夫なら接近戦を仕掛けるのは危険か。なら——っ！」

すると、重原はポケットの中から二つの木製の棒を取り出した。それはバチ、太鼓を叩く為に使う道具である。小学生の頃、よく授業中にふざけて音楽室にある太鼓を叩いていたが、まさにその勝手に持っていたのと同じバチを、重原は両手にしっかりと握っていた。一体……何をするつもりだ。いきなり殴りつけてきて……アレで俺を叩くつもりか？

Father Son Holy spirit Amen  
「御父と御子と精霊の御名によりてアーメン」

重原が発した意味不明な言葉。少なくとも日本語でも中国語でもない。英語のような気がするが英語赤点ギリギリの俺に、そんなものが上手く聞きとれるわけがない。結局、重原が何を言っていたのかはサッパリわからなかった。

重原はバチを頭上で叩く。

その動作自体に変なものはなく、意味もわからず呆然としていた……、

「——ッ！」

瞬間、白く輝く鋭い何かが弓矢のように飛んできた。反射的に俺はそれを避けたが、謎の白い物体は俺の後ろにあったトラックに命中し、胸にも響く轟音が鳴り響いた。トラックは運転席の部分が完全に破壊されており、自走も不可能な状態になっていた。

金属片やタイヤなど、衝撃でぶっ飛んだトラックの残骸が降りかかる。それに当たるだけでも重傷は確実であろう。俺は身体を振ったり時には跳躍したりなど、あらゆる手段を使ってトラックの残骸を避けてやった。もちろん避けられないものもあったが、それについては両腕で顔面を守った。

避けれない物は大体小さな破片であったため、それで十分防げたのだ。それから残骸が飛んで来なくなった事を確認し、俺は再び重原を見つめる。

「ふん、中々面白いじゃないかい圭介。並の動体視力じゃ避けられないスピードで鉄を射出したハズだったんだけどね。どうやら……場数を踏んで想像以上に喧嘩慣れしてしまったようだね」

「て、鉄……？」

鉄をぶっ飛ばしただと？　じゃあ、さっきの白く輝いていた物体は鉄だったのか？

けどなんで鉄があったんだよ。重原は太鼓のバチしか持っていないだろ。じゃああのトラックを破壊した鉄はどっから——っと考え事をしていたその時。

……俺は気付いてしまった。

今の鉄は隠していたものではない。あのバチを叩いた後にいきなり現れたんだ。ひよっとするとあの鉄は作り出したものなのかもしれない。



れない。鉄を飛ばす時もそう。冷静に考えてみれば鉄をあんな高速で投げ飛ばせるヤツなんかいない。いくら重原が武術の達人だとしても、限度があるだろ。

だとしたら答えは簡単——アレは魔法だ。重原は魔法を使ってきたやつだ。

俺を攻撃するのに魔法を使う奴……ちくしょう、重原はアレなのかよ。

「今のは魔法か？　つーことはてめえ……まさかサヴィエトの！？」

「よく気付いたね。そうだよ。俺、スパイやってたんだけど何か文句でも？」

「スパイ……重原が……アイツらの？」

「直接君には恨みもないし、何かと君と話すのは楽しかった。ここで友達としての関係が終わるのは残念だけど……俺も上には逆らえないし、悪いけどここで狩られてくれないかな？」

言い終えると、重原は再びバチを叩き合わせた。  
まずい。

さっきの攻撃が来る。俺は攻撃を避ける為に衝動的に走りだし……と、言うより得体の知れない魔法への恐怖心から、思わずこの場から逃げ出してしまった。まったく、これなら白藤みたいに鉄球ぶっ飛ばしてくるほうがまだマシだ。重原の攻撃はホントに意味がわからねえ。

アレは一体どういう魔法なんだよ。こ、こういう時は……そうだ、魔法に関する知識で頼れそうなヤツは暮葉しかない。暮葉なら何かヒントをくれるかもしれない。

直感的にそう思った俺は走りながら携帯電話を掴んだ。いつ、あ

の鉄に背中を刺されるかという状況は無駄にプレッシャーを感じる。  
指が勝手に震えやがる……胸も張り裂けそうだ。

怖い。

単純に飛び道具が怖い。だってトラック壊れるんだぜ？ あんな  
の喰らったら俺の場合死にはしなくても重傷は確実だろう。

それでも俺は、あの魔法使いに勝つヒントを得るべく――暮葉に  
電話を掛けたのだった。

第146話、……あれ？（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「これ、もうコミケ関係ないんじゃない？」

黒木「確かに……」

大吾「大体なんでオタクネタで僕の出番がないの！？ 作者ア！  
僕の事ちゃんと覚えてんのか！？」

黒木「心配すんな。俺なんて最近全然登場してねえよ……」

赤佐「まあ、まだ後書きで出番があるだけマシやな」

大林「僕……後書きでも滅多に出番ないんだけど」

大吾「僕は学校始まるまで出番がないのかああああああつ！」

## 第147話、黒魔術

8月21日、東京国際展示場。本来なら青山さんと2人でコミケデート。今頃夏コミを2人でエンジョイしている……ハズなんだが、何故か俺は魔法使いから逃げていた。しかも、その魔法使いってのが俺の友達の重原であった。重原のヤツ……今まで俺らを騙していたのかよ。

そう思うと腹が立ってくるが、今はそれどころではない。そんなことより、暮葉に連絡して一発逆転のヒントを教えてもらわねえと。震える手でボタンを押し、どうにか電話を掛ける事には成功した。

『はいもしもし！　けーすけ様ですか！？　今どちらに——』

「暮葉！　そっちは無事か——うわっ！」

暮葉も魔法使いに襲われている可能性があるのですが、俺は無事を確認しようとするが、途中で重原の攻撃を受けて思わず転びそうになってしまった。なんとか態勢は立て直したものの、後ろを見る青いプラスチック製のごみ箱は、文字通り木端微塵になっていた。

『けーすけ様……まさか、追われているのですか！？』

「そうだよ、今逃げるコマンド選択して逃走中だよ！」

『だ、大丈夫なのですか！？　場所は！？』

「場所って、古宇坂から東京まで時間がかかるだろ！」

『で、ですけど……っ』

「俺の心配はいいから！ それより一発逆転のヒントをくださいお願いします！」

『わ、わかりました！ その、相手は誰ですか！？』

一瞬、俺は相手の情報を暮葉に伝えるのを躊躇った。

だってアイツは重原だぜ。今までずっと友達だったんだ。今は間違いない敵だけど、だからってそれを暮葉に伝えるのは——いや、言わなきゃダメだよな。

真実は伝えるモンだ。それにこのまま重原を野放しにするのは——まずい！

「相手は重原だ！」

『し、重原さんですか！？』

「アイツ成りすましのスパイだったんだよ！ んで、バチを叩いたら鉄が飛んできて……もう何が何だかさッパリわからねえよ！」

『……た、多分それはレムリアのほうじゃなくて、こっちの世界の魔法なのです』

「ああ！？ こっちの世界の！？ アマデオと同じ近代西洋なんとかってヤツか！？」

『それとは違います！ 多分、重原さんが使う魔法はブードゥー教の魔法なのです！』

「ぶ、ぶーどゥー教？ よくわかんねえけど聞いた事はあるよ。確

かにこっちの世界の宗教だ。けどお前……こっちの世界の事なんてわかるのか!？」

暮葉は確かに魔法に関する知識は豊富だ。一応魔法少女だからな。だが、こっちの世界の魔法となると話は別である。いくら異世界の魔法に詳しくても——こっちの魔法や宗教には疎いハズだ。

ちくしょう、こりゃあ期待できないかもしれない。でも、知らないとしたら……なんで暮葉は重原の使う魔法がブードゥー教のものだってわかったんだ？

『以前はサッパリだったのですが、アマデオの一件でこちらの世界の知識もカバーしたほうがいいのかなって思ったのです。本隊から資料を取り寄せたので、少しは力になれると思うのです!』

「だ、だったら教えてくれ! その魔法って一体どういうヤツなんだ——うおわっ!？」

またしても、重原が放った鉄が何かに命中した。今度は電柱、一部が粉々にされたコンクリートの電柱は、樵に伐採された樹木のように倒れてしまった。千切れた電線からはバチバチと火花がド派手に飛び散っていた。これ……下手したら停電になるんじゃないか？

『だ、大丈夫ですかけーすけ様っ!??』

「俺は大丈夫だから! ちゃんとお土産買って帰るから教えてくださいっ!」

『は、はいっ! えっと、多分重原さんの使う魔法はロアの力を借りた魔法なのです』

「ろ、ロア!？」

『えーっと……た、多分精霊の事なのです!　それでえーっと鉄の精霊は——』

暮葉、絶対資料を読みながら喋っている……言葉に出ているぞ。きっと暮葉は今頃焦りながらページをめくっているに違いない。その姿を想像すると……おお、可愛らしい。アセアセと本を慌てて開く女の子って、何か知らんが可愛くてグッとくるよね。

まあ、今はそんな事を考えている場合ではないが。

『あ、いました!　<sup>Ogoun</sup>オグンという、火、鉄、政治、戦争を司る神様がブードゥー教にはいるらしいのです!』

「じゃ、じゃあ重原がぶっ飛ばしてくる鉄って!？」

『多分、オグンの力を借りて応用したものだと思うのです。太鼓のバチは儀式のために必要な道具らしいのです』

「そ、そうか!」

とりあえず、重原がどういう魔法を使うのかはわかったが……これ、一発逆転のヒントにはなっていないんじゃないか?　まあ、でも相手の魔法の情報があるだけマシか。

『オグンは鉄以外にも、火を司っています!　炎系の魔法を使ってくる可能性もあるので注意してください!』

「お、おう!　それで俺はどうすりゃいいんだ!？」

『難しいとは思いますが、バチさえ失えば重原さんは多分、魔法を使えなくなると思うのです』

「そっからは俺の実力次第って事か？」

『はい！ でも……重原さんは確か武道家で——』

「な、なんとかなるだろう？ 俺の体質を忘れたのかよ。重原の攻撃くらい何発でも耐えてやる！」

『無茶なのですけーすけ様っ！ 五分五分の殴り合いに持ち込むには、まず重原さんの魔法を封じなきゃいけない——ッ』

聞いている暇もないので、俺は携帯電話の電源を切った。ありがとう暮葉、おかげで重原との戦い方が少しだけわかったような気がするよ。

勝てるかどうかはわからんが……やれるだけやってやる。生憎、こんな所で捕まって暮葉や青山さんを泣かせる気はねえんだ。何が何でも重原に勝って帰ってやる——！

……それにしてもブードゥー教って。サヴィエトの思想は宗教否定だろ？ それなのにアマデオといい重原といい、なんで宗教絡んでる魔法を使ってくるんだろう。もしかして、この世界の場合は魔法自体が元々宗教に絡むようなモンなのか？

ったく、俺の馬鹿な頭じゃサッパリわからねえ……ッ！

「……げっ！ 行き止まりかよ……ッ！」

目の前には海。気付けば俺達は東京国際展示場を出ていたようで、展示場のすぐ近くにある港のような所に来ていた。車が並んでいた、船が繫留されてはいるものの、人の気配は殆どないので暴れて



も問題はないだろう。だが、考えようによっちゃあ助けは来ないって事だよな……。

……ええい。魔法使いと戦うんだ。ただでさえ最近魔法使いのせいで、わけのわからん事件が起こっていて、実はオカルトって実在するのではと言われてんだ。これ以上、そんなものを世間に広めるわけにはいかない。だから——警察とかの助けなんかはいらねえ！

「残念だったね……もう逃げ場はないよ？」

「くそっ……」

どうする、何か武器になるようなものはないか？ 一応ここは港だ、それなりに使えそうなものはあると言えはあるが……正直、飛び道具には無力そうなものばかりである。

だからって拳一つで突撃すんのは危険だろう。ちくしょう、どうすりゃいいんだ？

「圭介！」

「あ？」

なんだ、重原……の声がしたけど、重原のヤツが叫ぶわけがないよな。重原は今もバチを構えて俺を攻撃しようとしているんだ。そんなヤツが俺の名前を呼び、叫ぶはずがない。

じゃあ今の声は——。

「圭介っ！ こっちだ！」

「なんだ……えっ？ う、そ……なんだこれ……っ？ どういう事だよ！？」

あまりにもしつこいので振り向くと、そこには——ボロボロの重原が佇んでいた。

重原が2人ってどういう事だ？

しかも片方はボロボロじゃねえか。なんでアイツはあんなに傷ついているんだ？

「チッ！」

……っと、その時。

片方の重原がバチを叩き合わせ、ボロボロの重原に向かって鉄を放った。

びゅん！ と、鉄が風を切りボロボロの重原を狙う。ボロボロの重原はかなりギリギリの所でその攻撃を回避した。しかし、その際にバランスを崩したのか、薄汚い地面に倒れ込んでしまった。

片方の——魔法使いの重原は不敵な笑みを浮かべ、倒れた重原に接近してゆく。

「もうお目覚めになったのかい本物？」  
オリジナル

「お、本物？」  
オリジナル

どういう意味だよ、オリジナルってさ……。

「圭介、よく聞け！ そこにいる俺は俺じゃない！ 信じてもらえないかもしれないが、そいつはいきなり俺の身体から出てきた偽物だよ！」

「な——ッ！ に、偽物！？」

「圭介、早く逃げるんだ！　俺の偽物は変な力を——が、はっ！」

本物……と思われる重原の胸に、偽物と思われる重原が強烈な踵落としを仕掛けた。本物と思われる重原は激痛のあまり蹲り、さらに肺をやられた為か咳き込んでいた。

「あーあ、こんな事になるなら、やっぱ本物を殺しておくべきだったかな」

「……てめえ、何者だ！　なんで重原の姿をしてんだよ！」

「まあいい——ラウル・ゲリエというのが本名、ハイチから遙々きたんだ……藤島圭介、君に直接恨みは無いがここで潰れてくれないかい！」

言い終えると、偽重原（確定）は再び太鼓のバチを叩き合わせる。俺は偽重原がそのような動作を見せた時点で、反射的に右へ跳躍した。微かに左頬に風を感じた。多分、クナイのような鉄は俺の顔のすぐ横を通り過ぎたのだろう。

偽重原は当然第二撃を放とうとする——が、

「ふああっ！」

「な、この——！　オリジナル離せ本物！　素性が割れた以上、君に用などもうない！」

「嫌だね……これ以上、皆に迷惑を掛けるな偽物……ッ！」

突然立ち上がった本物の重原は、偽重原にリストロックを掛けた。流石格闘家、身体だけは重原で力は強いものの、中身はただの魔法

使い。格闘技なんて習っているハズがない。本物の格闘家である重原と比べれば、実力は一目瞭然である。

「チッ、やはり……最初の段階で人格も俺に設定しておくべきだったか。いや、それだと本物の<sup>オリジナル</sup>キャラがわからなかったし……クソッ！  
いい加減離れる本物<sup>ホンモノ</sup>！」

「俺には何を言っているかはわからない。だけど、圭介を<sup>ともだち</sup>狙うのなら武道家として、そして圭介の友達として——見逃すわけにはいかない！」

本物と偽物の戦い。リストロックで手を封じ、バチを打てない状態の今……確かに本物のほうが有利ではあるのだが……けどどうなんだ？

本物は俺が知らない所で散々やられたんだろ？ 疲れてるだろうし……だったら、武道家としての強さはそんなに長い時間発揮できないんじゃない？

「——フッ！」

「が、あぁっ！」

そんな危惧をしていた刹那——偽物は本物の足首に蹴りをいれやがった。

ゴガッ！ という強烈な音。それは本物にとっても耐えがたい一撃だ。本物の重原は蹴られた左足首を押さえ、苦しそうに蹲っていた。それにしても本物の重原……あれだけの達人がさっきの一撃であそこまで痛がるハズがない。まさか——重原のヤツ足を怪我していたのか！

「重原っ！」

俺がそう叫んだ瞬間——偽重原は本物の重原の顎に蹴りを入れる。耳を塞ぎたくなる衝撃音と共に顎を蹴られた重原は、一旦宙を舞った後背中から地面へと落ちてしまった。

顎への蹴りで脳を揺さぶられ、落下による背中の強打で悶え苦しむ友達の姿。

それを見ていた俺は——自然と身体が震え、身体に力が入り、自分自身を抑える何か吹っ切れたような気がした。

「てんめえ……ッ！ ふっざけんじゃねえよ！」

「やれやれ……今日中に捕えないと俺の地位がガタ落ちだよ。こうなったら、一旦退散して別な人の身体でも複製しようかな」

「……複製だと？ どういう事だ」

「俺は単純な宗教魔術の他に——人の中に入ってその人を操ったり、あるいは中身はその人のままで、その人が得る情報のみを得る事……まっ、簡単に言えば幽霊のように取り憑かれる魔術を使えるんだよ。今回は君のスパイという都合上、君の友達に取り憑いただけさ」

幽霊みたいに……取り憑く？

まったく……魔法使ってのはドイツもコイツも、一体なに考えてやがるんだ。

やっぱり普通じゃねえ。色々といかれてやがるんじゃねえか？

「いいのかよ、そんなにベラベラ喋りやがって……」

「どのみち……バレる事だからね。仮にバレたとしても——本物か

偽物かを見破る能力は君にはない」

「そうだな……だったらなおさらてめえを逃がしはしねえ。誰かに取り憑こうだなんて——そんなふざけた事は絶対にさせねえよ！」

「そうかい……残念だね。折角、君が自由の身でいられる時間を延長してやろうと思ったのに……じゃあ、悪いけどここで倒れて素直に捕まってくれるかな？」

「——ッ！」

そう言うと、再び偽重原はバチを叩き合わせる。今度は今までみたい到一个ではなく、あらぬ方向から複数の鋭い鉄が飛来してきた。前に行くにしても左右に行くにしても、これじゃあどこに逃げたってあの鉄に当たってしまう。待て、後ろは？

そう思って首を後ろに反らすと——唯一後方だけが安全地帯だと確認できた。ただし俺のすぐ後ろには東京湾の海がある。そこにあって飛び込むヤツはいない。

俺だって飛び込みたくはない。泳げないし、そもそも水が怖いよ。じゃあ、俺は一体どこに逃げればいいんだよ。このままじゃ串刺し確定だ——。

「——ア、ア——ッ！」

突然。

突然、偽重原がバランスを崩しよろめいた。同時に、俺を狙っていた鉄の大群は、力を失ったかのようにバラバラと、重力に任せて地面に落下していった。

再び偽重原を見ると、偽重原は何かの衝撃でバチを地面に落としたようだ。木製のバチがコロコロと地面を転がっていた。一体どう

いう事だ、何が起こったってんだ？

「お、オリジナル本物……ッ！」

「へ、へへ……後、任せたよ……圭介っ」

重原にそんな事を言われた時点で——ようやく何が起こったか理解が出来た。

どうやら、重原は偽重原の背中にコンクリートブロックを投げつけたらしい。激しく背中に激突したブロックによって、偽重原はバランスを崩してしまったようだ。だから、大切そうに持っていたバチを偽重原は手放してしまったのだ。そのせいか、ヤツの魔法の無効化されたのかもしれない。

ラッキーだ。バチさえ持っていなけりゃ——こっちのモンだ！

「——オオオ！」

俺は拳を振り上げ、咆哮と共に偽重原の懐へ飛び込む。

偽重原はバチを拾おうとしていたのだ。確かに勝てるどうかかわからない、素手の殴り合いなんかを仕掛けるよりは、一撃必殺の魔法を使ったほうが楽だし確実だ。

誰だってそう思うだろう。俺だって偽重原の立場ならそう思うぞ。だが、そんな動作を見せた僅かな隙こそ——偽重原の一番大きな失敗であった。

俺の接近に気付き、立ち上がって拳を構えた時には——すでに手遅れ。

「——ッ！」

俺の拳は偽重原の顔面を捉えていた。

鈍い衝撃音が炸裂し、殴り飛ばされた偽重原はその脚力をもって、辛うじて地面に倒れずバランスを立て直した。偽重原の戦意はまだ消えてはいなかった。



## 第147話、黒魔術（後書き）

・後書きトークコーナー！

重原「次回決着っばいね」

圭介「っーか……長えよ！ 多くの読者がそう思ってると思うよ！」

重原「戦闘に3話も使う（予定）とか、早川以来だもんね」

圭介「しかも相手は重原だぜ？ もったいなさすぎるだろ！」

重原「……それ、地味に俺の事馬鹿にしているよね？」

## 第148話、攻略宣言

ラウル・ゲリエ。これが重原に化けていたという、ハイチ出身のサヴィエト所属の怪しげな魔法を使う偽重原の本名だ。ヤツの目的はただ一つ——俺の身柄を拘束する事。同時にそれはサヴィエトという組織全体の目的でもあった。

俺は偽重原を殴り飛ばし、ヤツが怯んでいる隙にバチを東京湾に捨ててやった。これで偽重原は魔法を使えないハズである。

行ける……いくら重原の身体を使っていたとしても、魔法使いは喧嘩ド素人だ。力技でねじ伏せられなければ俺でも——素手で十分勝てる相手だ。

「全く……君は人をイライラさせるのが好きみたいだねっ」

「ふざけんな。イライラしてんのはこっちなんだ。人の友達を好きになだけ利用しやがって……折角の夏休みをこんな滅茶苦茶にしやがって」

「俺だって、好きで君を襲ったわけじゃない。ただ、俺の所属する組織は君を狙っている」

「……んで、お前はこれからどうするんだよ？ バチは海に捨てた。ここの海は濁ってるっぽいし、潜っても回収できるとは思えねえ。てめえはもう魔法を使えねえんだ」

「関係ないね！ 確かに儀式用の道具を捨てられたのは痛いよ。だが、俺は重原広敏という武道家の身体を持っている……つまり、君のような素人が相手なら素手の殴り合いでもこちらが有利なのだ。そんな単純な事も理解できないのかい？」

「ハッ、お前自分で分かってねえのかよ。自分の本当の実力をよ？」

「分かってるさ……これは重原広敏の身体。鍛えられた肉体を俺は持っている……少なくとも、路地裏ストリートファイター程度には負けないと思うけどね」

自信過剰。

偽重原は自信過剰であった。重原の肉体を手にしたからって、自分が以前の自分よりも強くなったと完全に思いこんでいる。確かに重原の身体能力は高いが——中身がショボかったら意味がない。

「分かったよ……じゃあ教えてやる——てめえの実力を！」

俺は偽重原に身の程を教える為に——偽重原と全力で戦う事にした。あゝあ、偽重原と戦い初めてから一体何十分経った事だろう。今頃、青山さんは怒っているか泣いているんだろう。

自分の身が危険に晒されているとは言え、流石に悪い事をしちまったな。後で青山さんにちゃんと謝っておかないとな。

……というわけで、青山さんに会う為にまずはコイツを——！

「が、アアアアアッ！」

偽重原の顔面を捉え、右ストレートを放ったが、偽重原は後ろへ2〜3歩後退した。

右ストレートは空振りに終わる。まずい——このままじゃ偽重原に、

「が、はあっ！」

そう思っていた瞬間、鈍い痛みを腹のあたりに感じた。  
膝蹴り。

偽重原の膝が射抜くように腹へめり込み、俺の腹に激痛を与えた。体質上、この程度の衝撃なら痛いだけでどうって事はないが、痛みで一瞬怯んでしまった。その隙に偽重原は拳を振り下ろす。

「あ——がっ！」

瞬間、後頭部に強烈な衝撃。

腹を蹴られ、蹲って姿勢が低くなっていた俺。そのせいか、どうやら俺の頭は偽重原が攻撃するには丁度いい位置にあったらしい。後頭部に拳を喰らった俺はバランスを崩し、そのまんま必殺の一撃を打ち込まれたボクサーのように、固く薄汚れた地面に顎から落ちてしまった。

後頭部、そして顎を打った事により脳が揺さぶられる。普通なら病院送り——いや、死んだっておかしくは無いほどの衝撃を俺は受けた。ちくしょう、偽重原は俺の体質を知ってやがる。

俺を捕えるのが偽重原の目的だ。もし知らなかったら——こんな激しい攻撃はしないハズだ。

「うぐっ！」

偽重原は倒れる俺の髪を掴み——無理やり俺を起こしやがった。  
痛い。

髪を引っ張るって結構痛いんだぞ。しかも痛みはずっと続くし……丈夫な俺にとっても地味に耐えがたい攻撃なのである。偽重原は俺の髪を引っ張り、俺を自分の顔の位置まで持ち上げた。

覗き込むように偽重原が俺の事を見てきやがる。口元が歪んで目も少し笑っていた。

「フフフッ、もう少し楽しませろ藤島圭介。君にはもう少し付き合ってももらわないとさ……割に合わないんだよ!」

偽重原は俺の髪から右手を離し、同時に胸倉を左手で掴んだ。

そして次の瞬間——離された右手が握られぐしゃりと。鈍くグロテスクな音を響かせ俺の顔面に突き刺さっていた。く、そ——鼻っ柱を殴られた……ッ!

ドロドロと、何か鉄臭いものが鼻から流れている気がする。今ので鼻血が出たようだ。

「ぐ——ッ! て、てめえ……っ」

「まだ終わりじゃないよ!」

続いて二発のヘッドバット。

一発目は血が流れる鼻に、二発目は眉間に命中する。ミシミシと、眉間の骨を砕く寸前のような嫌な振動が伝わる。痛みに顔を歪める俺を、偽重原は——投げ捨てるかのように突き飛ばした。

突き飛ばされた俺は、たまたま背後にあった建物に背中と後頭部を打ちつける。あまりにも激しい衝撃に肺から空気が排出され、脳も揺さぶられてぐにやぐにやであった。

それでも……俺は倒れない。この程度——俺にとっては大したことはない。

「あああああああああ!」

一気に俺を沈めるつもりで偽重原は、思いっきり突っ込んできた。壁に張り付いている俺に拳を打ち込もうとしている。だが、その時には既に——俺の身体からは痛みが消えていた。

寸前の所で俺は左へ身を反らし、偽重原の拳を避けてやった。ゴ

オン！ という轟音は偽重原の拳が建物を突いた打撃音だ。

当然のように偽重原はうめき声を上げ、左手で右手を覆い痛がっていた。

その隙に——俺は偽重原の背後へ回り込んで、

「おらああああああああ！」

ワシツと偽重原の後頭部を右手で掴み、思いっきり偽重原の顔を押しだす。すると、偽重原の顔面は鈍い音を立てて建物の壁へと激突した。

そのままグリグリと右腕に力を入れ、偽重原の顔を壁に押し付ける。俺に出せる最も強い力を右腕に入れて——偽重原の頭部を圧迫し続けた。

……やがて、偽重原から力が抜ける。手を離してみたらぐったりと、重原は崩れ落ちた。

正常に呼吸はしているし、いびきをかいているわけでも痙攣しているわけでもない、本当にぐったりと倒れているだけのようだ。よかった、命に別条はなさそうだな。

「はぁ、はぁ、はぁ……っ」

ああやつべえ疲れた……相手が気絶して気が抜けると、一気に疲れが出てきた。

やっぱり喧嘩ってのは面倒くさい。とりあえず、今回は重原本人ではなく、魔法が使えなかったら喧嘩ド素人の弱者でしかないヤツでよかったよ。

「お……おまわりさん……あそこです！」

不意に青山さんの声が耳に入ってきた。まさかと思ったので、本

物の重原と同じタイミングで振り向いてみると……建物の角からちよこんと顔を出し、俺らの事を見ている青山さんがいたのだ。

青山さん、ひょっとして……俺達の事を見ていたのか？

……ん、そういえば青山さん何か言っていたな。一体なんて言っていたんだ――。

「なんだ、不良の喧嘩か？」

「まったくこの時期になったら……コラァー貴様らあああ！」

まずい……あの青い制服のお二人は――。

警察。

そう、我らの味方にして時に敵となる警察だ。まずい、警察官のご登場＝被害者である俺と重原の身も危険という事である。何故なら――現代日本は喧嘩両成敗だからだ。

このままだと俺らまで犯罪者。いや、その前に停学か最悪退学にされちまう！

「やばっ！ お、おい重原立てるか！？」

「だ、大丈夫だいよこれくらい……っ」

「よし！ 撤収しますよおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおっ！」

「ま、待て貴様らああああああああっ！」

当然警察官二人のうち、一人は俺達を追ってきたが……いちいち構ってられるか。ああもう青山さんったらなんで警察呼んだんだよ。一番まずい連中呼びやがったなちくしょう！

と、とりあえず。俺と重原はこれだけひどい目に遭ってるんだ。だから叫んでもいいよね？

「ええい、ちくしょう！ 不幸だあああああああああああ  
ああっ！」

「こ、今回は俺も不幸だね！ 折角の夏コミが台無しだよっ！」

——こうして、俺と重原は逃げまくった。

追ってくる警察官から逃げて逃げて、逃げまくったのである——。  
そんなこんなで数分後。俺達はどうにか警察を振り切り、建物の裏で呼吸を整えていた。

だが、安心してた矢先——今度は今朝新木場駅でぶっ飛ばしたヤンキー2人が、仲間を10人くらい連れて来て俺らに絡んできたのだ。当然、俺も重原もそんな大人数を相手にする体力が残っているわけがない。そもそも、これ以上暴れたら本当に警察にマークされてしまうだろう。

だから——俺達は今度はヤンキー12人から逃げたのだ。それから数十キロ、やっとの思いでヤンキー12人を振りきったが……いつの間にか知らない街に辿りついてしまったのだ。

「どこだよここ！ ああ……交通費もねえし、なんたる悲劇……っ  
！」

「け、圭介……とりあえず道でも聞こうよ」

「そうっすね……っ」

結局、俺達が家に帰れたのは6時過ぎであった。  
当然暮葉にも心配され、葵にもお説教をされてしまった……っ、



疲れた。もう嫌、秋葉原といい夏コミといい、東京に行った思い出にいいものがねえ……。

俺……市街から出たら不幸な目に遭遇する、そんな呪いでもかけられてるのかな……？

とにかく……不幸だ。

それから数時間後、夜10時頃。俺はPCでエロゲーをプレイしていた。今回プレイしているエロゲーは【いろとりどりのセ○イ】だ。7月に発売されたばかりのゲームで、まあ俺の好きなエロゲーメーカーの一つである、フェ○バリットより発売の新作だ。

ちなみに俺は今作では連ちゃん押しだが……何故だ、何故攻略キヤラじゃねえんだ！

どうして俺の好きなキャラは毎回毎回、攻略できねえんだよ。アレか、どうしても攻略したかったらFDファンディスク買えっていう、エロゲメーカーのよくある戦略か！

ちくしょう……まあいいや、東峰つ○さもお気に入りでからな。

まあ、もしFD売るんだったら、当然有り金叩いて買いますぜ。

……っと、妄想に浸っていたその時——携帯電話が振動し始めた。電話みたいだな、携帯電話を開いて確認すると、電話をかけてきたのは青山さんだった。

なんだろうこんな時間に？ とりあえず、ボタンを押して電話に出よう。

『あ、先輩……よかったあ起きてました……っ』

「大丈夫、これでも結構夜深なほうだから」

『ダメですよ、ちゃんと寝ないと……身体に悪いです』

「ごめん、これからは出来るだけ早く寝るよ」

まあ……深夜アニメの為にも寝れないってのが現実だが。そんな事を青山さんに言えるわけがないしねえ……無駄に心配をかけるわけにはいかないよな。

『そうですよ……今日はその……お疲れでしょうからっ』

「大丈夫、そんなに疲れてもないぞ」

『……あの、先輩……お怪我とかはありませんか?』

「怪我? 怪我はしてないぜ?」

『よ……よかったあ』

青山さんはホッとしているようだ。電話越しでも何となくわかるよ。まあ、実際は鼻っ柱を殴られた時に鼻血が出たが……でも、もう痛くもなんともないし、鼻血も止まっている。

それに散々殴られたような気がするが、今となっちゃあどこに痛くは無い。

ホント、自分の体質にはいつも感謝だよ。怪我だってすぐ治るしな。

この体質がなかった——魔法使いと戦っても瞬殺されてただろう。

「……」

『……』

「……」

……あれ、なんでしようかこの沈黙は？

すっごく気まずい……会話が途切れてしまった。最初の頃は会話が途切れるって、よくある事だったんだけどなあ。やっぱ、青山さんは一応俺の彼女だ。会話が途切れると不安に思うぞ。

そんな事を考えていた――、

『……あの、先輩っ』

その時、青山さんが沈黙を破った。

とっても決意に満ちた声で――俺の事を呼んでいた。

『先輩はその……わたしの事、好きじゃないですよね？』

「いきなりなに言うんだよ。好きじゃなかったら遊びに行かないだろう？」

『いえ、そういう意味じゃなくて……その、恋人としてって意味です……っ』

ああ、そういう意味での質問だったか。てっきり友達としての意味だと思ったよ。青山さんと絶交だなんて絶対に嫌だからな。好きじゃないって言葉は結構胸に響いたぞ。

だけど……どうなんだろう。俺は青山さんの事が好きなんだろうか？

好きと言えば好きだ。だけどなあ……やっぱりいくら考えて、その好きという気持ちは友達としての好きという意味……なのか？

特別ドキドキするわけでもないし、一日中青山さんの事を考えているわけでもない。

一応失恋経験3回……いや、白藤も含めたら4回だな。それだけ経験していりゃ、好きって気持ちが大体どんなものか——わかってはいるつもりだ。

『……先輩、ごめんなさい』

「えっ？ 青山さん……何もしていないのに、謝る必要なんてあるのか？」

『いえ、しましたよ……先輩に迷惑をかけました』

「め、迷惑って……」

『先輩、わたしの事……好きでもないのに無理やり振り回して、ごめんなさいっ』

「青山さん……」

好きという意味が女として好きだという事は、いくら俺でも分かる事であった。

青山さん……俺と付き合える事が嬉しかったのか、幸せそうであった。でも、青山さんは無理やり自分と付き合わせた事を悪く思っていたのか。それを反省していたのか……。

……なんでかな。ここまで謝られると逆に俺が悪いみたいだ。また俺が中途半端な気持ちでいたせいで青山さんを傷つけた。そんな気がしてたまらない。

「……確かに、条件を呑むって形での変な付き合い方だったよ。でもさ、別にそこまでそれを反省する必要はないんじゃないか？」

『……?』

「むしろ、振り回していたのは俺のほうだろ？ 散々な事に巻き込まんじまってさ……そっちのほうが悪いような気がする」

『そん、な……やめてください先輩っ、先輩がそんな……優しい事を言うからわたしは……っ』

「知ってるか？ 俺、単純だからそう言う事しか言えないんだよ」

『……っ!』

すると、再び無言の沈黙が訪れた。今のセリフはやっぱりまずかったか？

うん、自分でもキモい事言っただなって思ってたよ。まあいいや、どうせ俺は電話をしながらエロゲーをプレイしている、変態の最低キモ男だしな……。

『……えへへ、先輩には……やっぱり勝てませんっ』

「えっ?」

『なんでもありませんよっ』

なんだ？

青山さんの機嫌が戻ったような気がするが……俺の気のせいだろうか？

『……あの、先輩……一回わたし達……別れませんか?』

「え……な、なんで……？」

突然、青山さんの口から衝撃的な言葉が出てきた。

別れる？

つまりアレか……今から恋人をやめましょうという、そういう意味の別れか？

……けど、青山さん……なんでだよ。まあ、確かに俺はいい男じゃないし、今回彼女の事を無視して喧嘩している姿を見て、幻滅したのかもしれない。仕方ねえ……のかな？

青山さんの事、そういう意味では好きでも嫌いでもない。そういう風に俺は思っ**て**はいたんだけどなあ……イザ別れを切りだされると、結構胸にグサツと刺さるもんだ。

しかし、

『だ、大丈夫ですっ！ 別にその……先輩の事が嫌いになったわけじゃないです。むしろ……先輩の事は大好きですっ！』

うおっ！ なんてストレートな告白なんだ……今のは軽くドキッとしてしまった。

だけど……じゃあなんで？ 好きなら別れる必要がないだろ。俺だって……まあ付き合ってしまった以上は仕方がない。中途半端な気持ち中途半端じゃなくすべく。青山さんのことを全力で好きになろうと努力はするよ。それなのに青山さん……。

「え、な……なんで？」

『やっぱり……わたし、普通の方法で先輩の恋人になりたいです』

「普通の方法？」

『はい……今更言うのもなんですが、わたし……先輩とは脅迫じみた方法でこの関係になりましたよね……？』

まあ確かに、殆ど脅迫みたいなものだったかもしれない。

俺はおうつと小さく返事をする、青山さんは話を続ける。

『でも、こんな方法で付き合っても……やっぱり幸せにはなれないと思うんです。だからその……一回関係をリセットして——今度は真正面から先輩を落としてみせます……っ！』

熱く語る青山さん。これは……アレだな。

攻略宣言。

俺をマトモな方法で攻略しようと、青山さんは決意したのだ。その堂々たる声は電話越しでも熱意が伝わるものであった。

本気だ……青山さん、本気で言っている。きっと本人も辛いんだろう。どんな理由があっても好きな人と別れる事には変わらない。失恋と同じようなものかもしれない。

それでも——彼女は決意を改めない。

彼女は真正面から攻めて俺を恋に落とし、最高のリア充になろうとしていた。その気持ちを挫く権利など俺にあるわけがない。それに俺だってアレだよ。中途半端なまま付き合い続けるのはやはり失礼だと思うんだ。

「……わかった、そうしよう」

『……はいっ！ その……覚悟しててくださいね……先輩っ！』

「おう、言っとくけど——俺の攻略は難しいぞ？」

『だいじょーぶです……っ！ わたし……落とし神さまになってみ

ますからっ！』

落とし神って……青山さん、一体誰から漫画を借りたんだ？

つか、青山さんその漫画読んでたんだな。

……関係が終わり、そこから再び青山さんは再出発をする。そんな中、夜は更けて雲間からはお月様が顔を覗かせていた。

……あつ、暮葉にお土産買うの忘れてた。

どうしよう……まあ、何も言われてないから別にいいや。



## 第148話、攻略宣言（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「よっしゃ！ 千早が別れたぞ！」

葵「やったあああああああああっ！」

風紗「ふ、藤島……ざまあだぞっ」

伊吹「そ、そうよっ！ 脅されたくらいで付き合うからよっ！」

圭介「お前らひどくね？ 別れを言わうってひどくね？」

白藤【私も嬉しい】

圭介「てめえもかよ！」

重原「圭介、ホントに鈍感だねえ……みんなが別れを祝う理由は、ねえ？」

大吾「まっ、そんな事はさておき……次回から新編突入だぜ！」

## 第149話、夏休み明け

8月17日。8月もこの時期になると、学校が始まる所は始まるらしい。このオレ——早川悠も車内から登校中の学生の姿を見物していた。ただ、膝の上にクソみてエに重いヤツを乗せて。

「今日から学校の人もいるんだね！ ミネットももう一度学校に行ってみたいな〜って、きゃあ！」

とりあえず、クソガキがウザかったので、オレはミネットの後ろ襟を掴んで放り投げた。

「まったく、ようやく身体が軽くなったってモンだ。それにしても不便だ。能力が使えるえんじや態々腕使う必要があるしなア。まア、全く使えるえわけじゃないが、使う為にはこのクソガキの協力も残念ながら必要なのだ。まったく……世界でも頂点に立つと言われたオレは、一体どこに消えたんだ？」

「ひどいよ貴方！ いきなり突き飛ばすだなんて……軽くショックだったんだよ！」

「うっせエぞクソガキ。さつきから人の膝の上でべらべら喋りやがって……オマエ、人が能力使えるえ事をいい事に遊んでねえか？」

「そんなことないよ！ ミネットは貴方の事をず〜っと心配していたんだよ！」

「だったら、退院早々人様に乗っかってんじゃないやねエ。オマエが重くて辛いんだっつーの」

「ひどい！ ミネットはデブじゃないよ！」

「そういう事じゃねえ、オマエ……オレの身体よく見てみろっつーの。歩けねえ身障者には辛いんだっつーの」

ありゃあ確か、一ヶ月くらい前の事だったか。オレは何を思っちゃったのか、このクソガキを助ける為に奔走しちゃったのだ。その結果ガキは救われたが——オレは超能力を失っちゃった。

今はこの補聴器型、いやチョーカーか？ その魔力エネルギー変換機を使い、15分限定で無理やり能力を使えるようにはなったんだが……まっ、こんなの気休め程度にしかならねェだろ。

15分は短い。ダラダラ戦っていたらすぐ経っちゃう程度の時間だ。

こんな短い時間で何が出来るってんだ？

「あーちよつと、あんまり騒がれるとボク事故っちゃうかもなの。だから黙っててくれると嬉しいの」

……と、クソガキと戯れていると、運転席からオレ達を説教する声が聞こえた。

どうやらオレとミネットの騒ぎ声は、運転手にとっては安全運転妨害ボイスにしか聞こえていねえようである。んで、その運転手についての話なんだが……どオなってんだ一体？

運転手の姿を見してみる。

ソイツの肌は純白。黄色いリボンで結んだ茶色のツインテールは、程良く綺麗に手入れされていていやがった。若干ツラは子供っぽさが残っているが、何故か胸だけはミネットと正反対だ。

まっ、性格的にクソガキである事には変わりねェ。

「……リーネ・ディートリッヒ。なんでオマエが車を運転してるん

だ」

「ふっふー！　ボクは技術者なの。技術者が運転していたらオカシイの？」

「そういう問題じゃねえ。オマエ……異世界人だろ。無免だったらブチ殺すぞ」

「大丈夫なの。木下さんに頼んでボク、偽装免許証を作ってもらったの」

「結局無免かよクソガキ2号……捕まったら承知しねエぞ」

「大丈夫なの！　ボク、運転は得意中の得意なの。それより悠ちゃん」

「誰が悠ちゃんだ……張り倒すぞ」

「ティヒヒ、今の悠ちゃんには超能力は使えないんじゃないの？」

「生憎全く使えねエわけじゃねエんだよ。オマエらがヘンテコな機械を作ってくれたおかげで、コイツで魔力を脳波に変換すりゃあ、一時的に元の演算能力の半分は戻るんだっつーの」

「いいの？　悠ちゃん元の演算能力が高すぎるせいで15分限定なの。しかも魔力を補充する為には恥ずかしい事をしなきゃだよ？」

「……チッ」

やっぱりリーネもクソガキだ。クソガキ2号と命名しておいて正

解だぜ。一方クソガキ1号は病院で誰かから貰ったという、PNPでゲームをプレイしていた。まったく、静かに出来るんじゃないかねえかよこのクソカギ。ずっとゲームして遊んでやがれ。

はあ……クソツタレ、やっぱり改めて考えると不便だ。好きな時に能力も使えねえ、やっぱあの時怪我したのは失敗だったか。いや、そうでもしなけりやこのガキは助からなかった。結局オレは非情になりきれねえクソアマ野郎だったのか？

……チツ、くっだらねえ……こんな程度の事で悩んでんじゃないかねえぞ。

「ねえ悠ちゃん。佐井学園つと所やめちゃうの？」

不意にリーネが話を掛けてきた。しかも話題はそれか……チツ、わかりきった事を。

「まアな……汚れ仕事に携わるのは、もうゴメンだからな」

「大丈夫なの？ 学園側は悠ちゃんを手放したくないんだよね？」

「心配すんな。ロクに超能力チカラも使えなくなったオレは、学園にとっちゃあお荷物同然だろオからな……手放しても損にはならねェだろ」

「それじゃあ、今日からミネットちゃんのマンションで三人暮らしなの」

何嬉しそうに目を輝かせてんだこのクソガキ2号。つーか危ねェよガキが、ちゃんと前見て運転しろってんだよ。一瞬対向車線にはみ出て、対向車がクラクション鳴らしてたじゃねえか。

どこが運転得意なんだよ。こっちは不安にしか思えねえだろ。

「ミネットもリーネさんや悠と暮らせるの、楽しみだよっ！」

「ハア……退屈な日常が始まりそうだ」

学園から離れて普通の暮らしが出来るのは、そりゃありがたい事だ。だが、今まで血みどろの世界に生きてきたオレにとっちゃあ、ただの日常ってのはおそらくつまんモノだろう。

だが、さっさと平和な日常に慣れねえと、この社会じゃ生きてけねえ。まっ、学園のクソ共が何もしなけりゃあ、普通に過ごせてそのうち日常にも慣れるだろう。

そう思いながら、オレは車窓の外へ目を向けた……ホント、日常は退屈そうだ。

——その頃、初芝高校の廊下では。

夏休みが明けた。俺こと藤島圭介にとっての夏は終わった。

思えば夏休みにはロクな思い出がない。秋葉原に行けば妹にレイプされかけ、その上変な不良集団との戦いに巻き込まれた。合宿では暮葉とすこし気まづくなり、しかも近藤だのアマデーオだけサヴィエトの魔法使いと戦った。その後のコミケじゃあ、重原に化けた魔法使いと一戦を交え……。

結局、夏休み中はお出かけすると、必ず俺は災難な目に遭っていたのだ。しかも一瞬青山さんという彼女が出来たものの、青山さんの決意によって別れてしまい……まっ、結局俺は相変わらずの非リア充な日常を過ごしているわけだ。

そんな中、夏休み明け最初の学校。俺は廊下に出て窓から古宇坂の町並みを眺めていた。

「あ……リア充になりてえ……」

思い出せば、青山さんと付き合っている間はそこそ楽しかった。そう、相手の事は友達としてなら普通に好きだし、そんな程度の好感度を持っているだけでも——リア充生活は楽しかった。

それを思い出すと、本気で俺はリア充になりたいと思ったのだ。しかし——そんな本音を漏らしてしまった直後。

何故か左右から拳が飛んできて、俺の頬は正拳突き犠牲となっ  
てしまった。

「ぐはっ！ あたた……いきなりにゃんれすかアンタ達いっ！」

ちくしょう痛えっ、本気でぶん殴りやがった野郎共。

俺はいきなり殴りつけてきた2人の姿を見る。一人は黒髪のツンツン頭に眼鏡というシュールな外見をしている少年。もう一人は大柄で筋肉質ながら、爽やかな雰囲気放つイケメン野郎だ。

右に大吾、左に重原。くそ、いきなりコイツら何なんだよ。

「いやあー圭介ごめんごめん！ リア充がそんな事を言うとかムカついちゃうんだよな！」

「そうそう、俺も大吾と同じ意見だよ。まあ、これはモテない男子による鉄拳制裁かな？」

「だからって殴るかよ普通っ！ つーか大吾、てめえ完全二次元派じゃなかったのか！？」

「確かに僕は現実<sup>リアル</sup>なんてどうでもいい。だが、それでもリア充はムカつくんだ！」

「結局現実<sup>リアル</sup>に未練タラタラじゃねえか！ あと、重原はモテるだろ！」

「ハハッ、モテたらとくに彼女はいるよ。そもそも俺、あんまり恋愛に興味ないんだ」

「じゃあモテない男子による鉄拳制裁とか言うなよ！ ちくしょう理不尽だ。なんで恋愛なんてどうでもいい奴らに殴られたんだ俺はあああっ！」

怒りとショックで自分を抑えきれず、俺は髪を掻き耑り絶叫していた。

「はろはろゝ野郎共諸君♪ あれゝ圭くんが暴れちゃってるぞお？」

「けーすけ様っ！ ど、どうかしたのですか！？」

そんな時、2人の少女が俺達の前に姿を現す。

一人は暮葉だ。半袖の夏服に身を包んだ暮葉は、まるで高校生の制服を小学生が無理やり着ているような感じであった。つまり、暮葉は相変わらずロリロリしているという事だ。

まったく、小学生は最高だぜ……って言う事を言うロリコン諸君も、暮葉の姿を見たら余程の重傷者でもない限り、おそらく99.7%の確率で一目惚れする事であろう。

あ、先に言っとくけど俺はロリコンじゃないからな。

んで、もう一人暮葉の右に立っているのは、アンダーテールで巨乳の小坂だった。

ニヤニヤといやらしく笑う小坂。コイツ……カオスな状況を楽しんでやがる！



「ああ、僕らはリア充に正義の鉄拳を放ったんだ」

「そうそう。そしたら圭介がいじけちゃってね」

「そうだよ！　俺は理不尽に殴られたんだよ！　助けてくれ2人ともっ！」

「……けーすけ様、自業自得だと思うのです」

「うーん……圭くんだからなあ、失礼な事言ったら怒る人はいっぱいかも？」

「ぐ、はっ！」

ひ、ひどいや……俺に味方は一人もないのかよ。

ちくしょう！　夏休みは散々な目に遭ったんだぞ。暮葉と一緒に入浴したり一時期青山さんと付き合ったり、それなりにハッピーなイベントは確かにあったよ。でも、結局暮葉とは何もないし青山さんとは別れたし、その上俺が行く所で必ずサヴィエト絡みのトラブルが発生していた。

くそ……なんて不憫な夏休みを過ごしたんだ、俺。

……神様、どうか夏休み明けからは普通の日常が過ごせますように。

## 第149話、夏休み明け（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「夏休み編で一回も出番がなかったけど……」

小坂「ついにあたしらの出番キタね！」

大吾「全く、重原でさえ出番があったのに……僕らはっ」

小坂「ま、まあまあ！ 学校始まったんだからあたしらだって出番あるって」

大吾「畜生！ こうなったら、今日から僕はギャルゲー三昧だああああっ！」

小坂「やっぱり大吾は大吾だ、相変わらずキモいなあ……っ」

## 第150話、意外……でもない事実

8月17日。今日は夏休み明け初日なわけで、授業などは午前中で終了。つまり放課後はいつもと違って遊び放題と言うわけである。幸い今年は暮葉による外出規制の為、外に出る機会も例年と比べると少なかった上に、暮葉が教えてくれたおかげで夏休みの宿題は終わっていた。

だから、野原先生に呼び出されて説教……なんて事にはならなかったのである。

「このクソガキィ！」

「ぐ、はあっ！」

「黒やあああん死んじゃダメやあゝっ！」

「おーっと、黒木君吹っ飛んだー！」

三馬鹿は相変わらずだな……どうやら黒木は宿題を忘れたらしい。しかし、たかがそれくらいで生徒をぶん殴る教師って、今時野原先生くらいなんだろうなあ。

さて、じゃあ俺は暮葉と伊吹と一緒に下校するとしま——、

「はいはい！ 女子会するから暮葉っ！ あと伊吹付き合っ！」

「ちょ、亜紀！？」

「あ、亜紀さん女子会ってなんですか！？」

「ん？ 女子同士で話してお酒飲む事だけど？」

「わ、私ら未成年よっ」

「だいじょーぶだいじょーぶ。ジュース用意しといたから。と、いうわけで早速あたしん家へGO！」

「ああ、ちょっと亜紀さんっ！」

「わ、わかったわよ！ 付き合うから背中押さないでよっ！」

あららゝ2人は小坂に拉致られてしまったぞ。女子会ねえ……つまり、ガールズトークってヤツをしに行くわけか。ガールズトークつつたらやっぱ恋バナだろうか。恋バナ……そういえばあの3人って彼氏とかいるんだろうか？

まあ暮葉にはいないと思うけど。アイツとは毎日一緒にいるし、恋人がいるような行動なんて見せた事がないな。第一、アルファ隊の仕事もあるんだから付き合うのはまずいのかもな。

伊吹は……うん、モテそうだけど……アイツ、男に興味なさそうだしなあ。伊吹の場合は永渕の件で男自体が恐怖みたいな存在になっているのかもしれないし。小坂は……恋人とかいそうな雰囲気だけど実際どうなんだろう。以外とああいうタイプって経験なかったりして。

エロゲーではよくある事だ。

「はあ……野郎共もいねえか」

仕方ねえ……一人寂しく帰るとしますか。大吾も重原もいつもの事ながら、俺が暇な時に限って姿を見せないんだから。そう思いながら、教室を出て一人寂しく廊下を歩いた。校内にはまだ立ち話を

している生徒達や、これから部活という生徒達が残っている。

あとは……まあ、俺のような暇人くらいか。それにしてもどうしようか。やっぱりいつも誰かが一緒だと、イザ一人になった時に結構寂しいような気がする。けどなあ、わざわざ一年の所に行くってのもどうかとは思うし。第一、一年の3人はみんな問題児じゃねえか。

それにその……今、青山さんと会うのは若干気まずいしな。いや、青山さんはむしろ俺の再攻略に夢中になっているのかもしれないが、俺が気まずく思っているのだ。

やっぱねえ、一応形だけでも一時は恋人だったんだし……はあ。

「あら、そこにいるのは藤島君じゃない？」

久しぶりに聞く声だなあ。そう思いながら首を後ろに反らすと、現代の女子高生の平均より若干小柄な体躯を持つ、長い黒髪を持つ女の子の姿が瞳に映った。

あー、そういえばコイツもウチの生徒だったっけ。確か微妙な時期に転校してきたよな。

「あー、えーっと……西園寺だっけ？」

「随分ひどい反応ね。文化祭の時にいっぱい話したじゃない？」

「文化祭以外で話した記憶がねえぞ」

「それでも、忘れるってひどいと思うわ」

「心配すんな、ちゃんとお前の事は覚えてるって」

俺は左手で肩を揉み、首を傾げて首筋を伸ばしながらそう呟いた。

西園寺雪乃、忘れるハズがないだろう。コイツと俺は街中で出会ったんだ。それも超デングジャラスな場面でな。

少なくとも、外見を忘れる事はないだろう。名前は……うーん、忘れるかもしれん。

「でも、考えてみれば貴方とは文化祭以来じゃないかしら？」

「つか文化が夏休み前最後の日になっちまったからなあ」

「……っ、まあ……あの日は大変だったわね」

「ん、どうしたんだ？」

一瞬、西園寺の表情が曇ったような気がした。それだけではない、あれだけハッキリ物を言う西園寺の言葉が、この時だけ詰まっていたように聞こえたのだ。

「なんでもないわ。それよりあの日貴方は大丈夫だったの？」

「……ま、まあ……大変だったけど身体は平気だ」

やべ、俺まで言葉が詰まっちゃったよ。思い出してみれば、俺も文化祭三日目は散々な一日だったような気がするよ。白藤と戦う羽目になるわ校舎が壊れちゃうわ。まっ、あの時校舎がぶっ壊れてくれたおかげなのか、若干古臭かった初芝の校舎も一部だけ真新しくなったのだが。

「……貴方こそ、何か大変な事でもあったのかしら？」

「ああ？　どうしてそう思うんだよ」

「何か一瞬言葉が詰まってたわよ」

「気のせいだろ？　ところで俺、そろそろ帰ろうと思うんだけど――」

「そう、それじゃあ帰りに何処か寄らないかしら？」

西園寺が笑いながら、地味にすごいお誘いをしてきやがった。学校帰りに女の子と2人で何処かに行くって、思いつきりリア充がやる事じゃねえか。もしかして西園寺は俺の事が好き……なわけあると思う方が馬鹿だろう。そんなフラグを立てた覚えは皆無だ。

まあでも、西園寺がサヴィエトの魔法使だって事はないだろうし確か出会った時に佐井学園の制服を着ていたハズだ。襲われる心配はない……と思う。誘いに乗っても問題はなさそうだ。

「暇っちゃあ暇だし、昼は家族も用事あるみたいだからなあ。そんなに、どっかで昼飯でも食いに行くか？」

「ええ、出来れば安い所を希望するわ」

「それは心配すんな。俺だって金に余裕があるわけじゃないからな」

まあ貯金はまだまだあるんだけどな。その貯金は欲しいゲームの為に使いたいし、食費にあんまり金を掛けたくないってのが、一般庶民の学生というものである。

そうだなあ……よし、古宇坂駅前の安いファミレスにしよう。平日だし、あそこならかなりの安価でお昼ご飯が食べられると思うし。そうと決まれば早速ファミレスに行くと思いますか。

ファミリーストラン【グスト】

全国に展開する、おそらく誰でも知っているであろうファミレスで、安価でそこそこのものが食べられるので、我々学生としては非常にありがたいお店なのである。最も、駅前店は若干初芝から離れているせいか、初芝の生徒は中々見かけないのだが……一つ気になる事があるんだ。

「あら……貴女もしかして？」

「おい……なんでお前がここにいるんだ、明智いっ！」

どういうわけか、明智がレジに立っていたのだ。

当然【グスト】の制服を着用し、明智と立派に記された名札を胸に付け、冗談のじよの字もない真剣な表情を浮かべて。待て……おかしいだろ。普通のヤツならバイトなんだろうが、明智って一応明智家のお嬢様じゃねえかよ。そんな彼女がバイトをする必要ってあるだろうか？

そうだ。きっと明智は別な理由で【グスト】の店員に――、

「なについて、当然バイトに決まっているだろう？」

やっぱりバイトかよ！

あたり前すぎる明智の答えに、むしろ腰を抜かしそうになっちゃまったぜ……だけどなんで明智のようなお嬢様が、こんな超庶民的なお店でバイトをしているんだろう？

どうやら西園寺も同じような思っていたらしく、俺よりも先に口を開いて、



「貴女ってお金持ちだったわよね。どうしてバイトをしているのかしら？」

「なんでって……もうすぐあの日だからな。それに向けてちょっと……」

どうしたんだろう明智のヤツ。珍しく顔が少しだけ紅潮していた。あの日ってそんなに恥ずかしい事をする日なのか。ん、恥ずかしいあの日……もしかしてコイツ？

「明智、お前彼氏でもいんのか？」

「違う！ そんなものはいないぞ……っ」

「じゃああの日ってなんだよ？」

「……お、お前に言えるかつ」

「ええっ！？ お、俺には言えねえって……」

なに、なんなんだよ。そんな事を言われるとすっげえ気になるじゃん。第一あの日って何月何日のことなんだろう。8月か、それとも9月か。いや、9月は前期期末テストがあるし、その上体育祭と言う大イベントが控えているのだ。

明智は風紀委員だし、その時期に遊んでいる余裕なんてないだろう。じゃ、じゃあやっぱり8月中の話なんだろうか。ちくしょう気になる！ 明智に彼氏がいるのかも気になるが、8月に一体なんのイベントがあるのか……それもすっげえ気になるぞ！

「それより藤島、どうして雪乃が一緒なんだ？ そもそも西園寺は

どうしてうちの制服を……？」

「あら、貴女知らなかったのかしら？ 私は転校してきたのよ」

「て、転校？」

「そう、いい加減あの学園が嫌になってね……初芝には貴女もいるって噂もあったからね」

「そ、そうか……知らなかったぞっ」

「貴女の連絡先を知っていれば、真っ先に教えていたのだけどねえ」

なんだ、明智と西園寺がやたらと親しそうに話をしているぞ。ひよっとして、コイツら知り合いだったりするんだろうか。8月のイベントも気になるが、俺じゃあ聞けそうにないし、せめて2人の関係だけでも聞いておくとするか。

「お前ら、随分親しそうだけど知り合いなのか？」

「ああ、雪乃は私の去年のクラスメイトだったんだ」

「そうよ、まあ……アドレスは持っていなかったけど、そこそこ話はしていたわよ？」

「そういうわけかあ」

そういえば、明智も去年までは佐井学園に通っていたんだっけ？ しかも超能力者の明智と同じクラスに在籍していたって事は……やっぱ、西園寺も超能力者だったりするんだらうか？

「それより2人とも。私はバイト中なんだ、その……なんで2人でいるのかは後で聞くとして、とりあえず空いている席にでも……っ」

「お、いけね。悪かったなバイトの邪魔して」

「いや、いいんだ。2人と話せて私も楽しかったぞっ」

「それじゃあ明日学校で会いましょう？ 私も久々に風紗と話がしたいわ」

「うん、また明日な2人とも」

……こうして、西園寺と明智が知り合いだったという新情報を手し、俺と西園寺はとりあえず空いている禁煙席に座ったのであった。

## 第150話、意外……でもない事実（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「大ピンチだぞっ！」

葵「なにになに！？」

千早「こ、このままだと……一年グループの出番がっ」

あかり「あたいらの出番がないかもしれないぞ」

葵「うそっ！？ 学年が違うだけでお兄ちゃん達とはこれだけ差があるの！？」

千早「せ、せんばい……っ」

あかり「というわけで作者、あたいらも登場させないと処刑決定だからなっ！」

## 第151話、好きなヤツと修業

「へえ、そんなじゃ2人は友達だったのか」

「そうよ、あっち風紗は佐井学園でも面倒見のいい人だったわ」

「つまり今とあんまり変わってねえっつー事か」

ファミレス【グスト】に入った俺達は、偶然にもバイトをしていた明智と遭遇。その後西園寺から佐井学園時代の明智の事を聞いていた。

「どうやら、明智は昔からキャラが変わっていないようである。よかった、家が家だけに落ち込んでいたらどうしようかと思ったよ。けど、前からあの調子らしいし……よかったよかった。」

「藤島君はどうなの？ 貴女……女たらしって噂を前に聞いたわよ」

「誰から聞いたんだよ……俺は彼女なんていた事ないですよ」

まあ、実際は夏休みに青山さんが彼女だったが……それを言うとホントに女たらしでしたって思われるかもしれない。どうせ西園寺にバレる可能性なんてないだろうし、別にそれくらいの嘘なら何の問題もないだろう。しかし……誰だよ、俺が女たらしだって噂流してヤツは。

「ふーん、それじゃあ木下さんや幼馴染の子とはなんでもないのかしら？」

「べ、別にそういう関係ではねえよっ」

「あら、照れてるの？　ひょっとして2人のうちどっちかの事が好きなのかしら？」

「違うわい！」

た、多分違うとは思うんだ。うん、違うとは思う。とにかく、今の俺に好きでたまらないって言う人はいない……と思うんだ。思うんだけど……最近どうしたんだか。俺の心の中で何かが渦巻いているような気がする。それが何かは知らんが……ハッキリ決めないとダメだと思う。

一体それが何かは本当にわからん。ただ、一つだけハッキリと言える事がある。

サヴィエトの事ではない。

それだけはハッキリと言える。確かに、サヴィエトとは決着を付けないと、俺の身が今後も危険に晒され続ける。それくらいは分かっているハズなのに……。

俺は今——サヴィエトとは別の事で頭を悩ませている。

一体俺は……何の事で……？

「……藤島君、貴方好きな人でもいるのかしら？」

「いねえよ……」

「ふーん……木下さん以外ではって意味かしら？」

「ぶっ！」

俺は思わず、たまたま飲んでいた水を吹いてしまった。

ったく……意味わからん。俺はちゃんといないって答えたハズな

のに、いきなり西園寺がそんな事を言ってきたのだ。俺が暮葉を……ね、ねえよ。

そもそも、なんで暮葉なんだよ……俺はロリコンじゃねえ……と思うけど。

「あら、もしかして凶星だったかしら？」

「てめえ……今の反応のどこが凶星に見えたんだよ」

「だって、一瞬楽しそうだったわよ」

「ふっざけんな！　つーか、なんで暮葉なんだよ！」

「同じクラスでしょ？　しかも、いここで住んでる家も同じらしいじゃない」

暮葉のヤツ、住まいまで言いやがったな……後でお説教だな。それにしても俺が暮葉の事を好きだなんて冗談じゃねえぞ。確かに暮葉は可愛いし、愛でたくなるような子だぞ。

だが、アイツの事を本気で好きだと思った事はない……ハズだ。

「確かにそうだけど……」

「じゃあ、やっぱり好きなのかしら？」

「そんなわけねえだろ……」

サウイェト  
「けど……連中から俺を守ってくれるのは結構ありがたい。それに、なんだかんだ言って暮葉には世話になっている。

料理を作ってもらったり、俺の相談に乗ってくれたり……数える

とキリがない。

あと、アイツと話をするのは楽しい。自然と話が弾むんだ。最近  
は……夏休み中は暇だったからずっと話をしていたけど、時間を忘  
れて深夜まで話していた事があったなあ。

初めてだ、誰かと話をしていて深夜アニメを見逃してしまったの  
は。だけど、後悔をした記憶なんて全然ないんだよな。変だなあ……  
…葵のせいで見逃した時は怒ったのに。

……だけど、だからって好きとは限らねえだろ……っ。

「……まあ、これ以上は問わないわ」

「お、おう」

俺が……暮葉を……ってねえよ、そんなもんあるわけないだろ。

第一、俺が暮葉と釣り合うわけがないだろ。アイツは俺より強いし  
真面目だし、結局俺の方が情けないだろ。そんなヤツに好かれたっ  
て暮葉は嬉しくないだろう……。

あれ、何かがおかしい。俺、暮葉が好きって前提で話をしてない  
か？

ありえないだろ、あってたまるか。これ以上の迷惑はかけたくな  
い。アイツは俺を守る為に日本に派遣されて来たんだ。それだけで  
も俺は暮葉に迷惑を掛けている。俺の存在そのものが暮葉にとって  
は迷惑なのかもしれないのに……。

……やっぱ、強くなるしかねえな。これ以上アイツに迷惑をかけ  
てくれない。アイツが戦わなくても笑って過ごせるような、幸せな日  
常を作ってあげたい。

だったらやる事は一つ——俺が強くなるしかない！



——と、言うわけでやって西園寺と別れた後、俺は単身道場へ向かった。

### 黒崎道場。

重原の家と対立していると言う、古宇坂に二つある道場だ。重原の家とは違って黒崎は空手の使い手らしく、有名な選手を輩出した事もあるらしい。いきなり殴り込みって、無謀なチャレンジだって事くらいはわかっている……だけど、今更立ち止まる事は出来ねえ。

「頼もう！」

そう叫ぶと、門が開けられゴツいオッサンが現れた。うげえ……直感だけど、多分このオッサンが黒崎さんなんだろうな。半端じゃなく強そうだ。だが……強くなるには実戦あるのみ。

「なんだ小僧？　まさか、ド素人の癖に道場破りか？」

「ああそうだ、殴り込みだよ！　文句あるか？」

「ふん……いいだろう。一瞬で素人とプロの違いを教えてやる……」

上等じゃねえか……こっちだって素人だけど、てめえらと違ってなあ……素手で戦わない連中との戦闘経験だけは豊富なんだよ。そいつを生かせば——少しは差が埋まるハズだ。

……その後、黒崎のオッサンに道場の中へと案内された。早速道着に着替え、俺は闘志を燃やして決戦の舞台へと立った。相手は黒崎のオッサン……ではなく、眼光の鋭い坊主頭の男だ。

若いな……俺と同じ年ぐらいだろうか。

「克哉、<sup>かつや</sup>プロとアマの差を見せてやれ」

「ヘッ、見てな親父い……ド素人ぐらい軽く捻ってやんぜ」

なんで、黒崎のオッサンの息子かぁ……それでもプロらしいな。やっぱり手を抜くのは自殺行為だろう。姑息な手は通用しないだろうし、最初から全力で飛ばすしかねえ。

今のうちに、右腕の筋力を100%に引き上げておこう……メリメリと、嫌な音が響く上に次第に腕も痛くなってくるが……ここは我慢だ。これが通用しなけりゃ黒崎の息子には勝てねえ。

「始め！」

審判を務めるのは黒崎の弟子の男だ。

叫びながら、黒崎の弟子は右腕を大きく振った。すると黒崎の息子は、俺が先制攻撃を仕掛けるつもりがないと気付いた瞬間――、

「でえおりゃああああああああっ！」

雄叫びを上げ、凄まじい速さで間合いを詰めてくる。

正直、この目で捉えるのがやっとであった。強い、アイツは間違いないくプロだ。今まで戦ってきたどの不良よりも確実に強い。しかし、黒崎の息子の拳が目前に迫った……瞬間。キッ、と俺はこの目を凝らし、全神経を集中させ――ギリギリの所で黒崎息子の拳を避けてみせた。

「――ッ!？」

首を傾げただけであった。黒崎息子の拳が左頬の横を通り、微かな風を頬に感じた。

ヤツは驚いている。俺が攻撃を避けた事自体がありえなかったのだろう。とにかく今の黒崎息子は骨抜き同然――隙だらけであった。

やるとすれば今がチャンスである。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

俺は叫ぶ。飛び込むように黒崎息子の懷に潜り、その拳を限界まで固く握り締め。

狙い——黒崎息子の胸を睨みつけて、

「——ッ！」

ゴン！ という鈍い音が響いた。

これは空手だ。顔面を狙うのはNGだ。なので俺が突いたのは——胸の中心点。

黒崎息子は、場外へ投げ出された挙句、壁に背中を打ち付けてしまった。

試合の結果は——態々説明するまでもない。

「しょ……勝負アリ……ッ！」

「「えええええっ!？」」

「か、克哉あ！」

道場内の弟子達は一斉に驚きの声を上げる。黒崎のオッサンは息子を心配し、小走りで駆け付け黒崎息子の様子を見ていた。やばい……驚きたいのはこっちだよ。黒崎息子って本人もオッサンも言っていたけどプロなんだろう？ つまり……俺、プロに勝っちゃったって事か？

なんで勝っちゃったんだろう。うーん……黒崎息子は確かに強かった。強くなかったらあんなに素早い動きは無理だろう。なのに、

素人の拳一発でぶっ飛びやがった。

おかしいな。いくら一撃必殺の筋力100%とは言え、相手はプロ。一撃で倒せてしまうのってやっぱりおかしいよな。それとも俺——知らない間に強くなったのか？

なんか、普通に戦っても勝てたような気がしてきた……。

数十分後、俺は着替えて道場を出た。出ようとしたら、黒崎のオッサンに「弟子にならないか？」と言う、猛烈なラブコールを貰ったんだが……正直、面倒なので断っておいた。

それに、この程度じゃ強くなれん事もわかったし……はあ。

マジでどうすりゃいいんだろう……格闘家相手に圧勝しちゃった。これって普通の方法じゃ絶対に強くなれないってワケだよな。俺……何時の間に強くなってたんだな。

そりゃそうだ。あの重原の身体を持つ魔法使いにだって勝った。

あの時は勝手に身体は重原でも中身が素人だから、所詮は大したことの無い相手だと思っていた。けど、冷静に考えてみると喧嘩じゃ体格差や筋力って結構重要だよな。仮に中身は素人でも、身体は鍛えられた達人の身体。

冷静に考えてみれば……ただの高校生が勝てる相手ではない。

それでも、俺はあの魔法使いに勝ってしまった。重原は武道をやっているし、もっと上手い戦い方をするだろうからさらに強敵なんだろう。だけど、今の俺なら重原にも勝てるかもしれん。

「……はあ」

それでも……いくら武道家並の力を持っていたとしても。魔法使い相手じゃいつも俺はボコボコにされていた。アナスタシアや偽重原とは素手でギリギリ互角。

近藤やアマデオに至っては、一人じゃ絶対に勝てなかった。  
弱い。

俺はまだ弱い。人間としては強いかもしれないが……魔法使い相手に  
手にはただの雑魚だ。

この程度じゃまだ……暮葉に迷惑を掛けるレベルじゃねえか。だ  
けど、並の武道家じゃあちつとも練習相手にならねえし、一体俺は  
どうやって修業をすればいいんだ。

これ以上、どうやって強くなればいいんだよ……！

「あー！ すっごい珍しい場所で圭介発見っ！」

不意に、嬉しそうな声が耳に入ってきた。

俺が後ろを振り返ると、初芝高校女子夏服を着用している、ロリ  
ロリしていてとても高校生には見えない少女が、どだだだーっ！  
と高速接近している最中だった。

浅間あかり。

輝くような橙色のツインテールに、高校生には見えない小柄な体  
躯を持つ少女。ツンツンとした赤い目は愛と夢と希望に満ちており、  
まるで勇者のご登場のようであった。

「あ、あかり……？」

コイツ、こんな所で一体なにをやっているんだろうか？

## 第151話、好きなヤツと修業（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ここで予告！　なんとこの作品のエロゲーを某社で開発中です」

大吾「な、なに！？」

圭介「攻略ヒロインはメイン6人＋サブ3人の大ボリューム。み〇さんや青葉り〇ごさん、安〇深音さんなど人気声優沢山出演！」

大吾「ちょ、待てっ！　それアニメ声優じゃねえだろ！？」

圭介「エロゲーだからな。あ、ちなみにOPは榊〇ゆいさんな」

大吾「っで、絵師とシナリオライターは！？」

圭介「絵師はむりこぶ、シナリオライターは作者だぜ」

大吾「作者……ってのが不安だが、つか、OPが榊〇さんで絵師がむりこぶって、もしかして作者はゆずクラスタか？　出演声優もゆず出演経験アリだし」

圭介「しかも、初回限定版を買いと設定資料集やイラスト、さらに全キャラテレカなどもついてくるぜ！」

大吾「そ、それで！？　値段は！？」

圭介「通常版は9240円（税込）で初回限定版は……なんと！  
あれだけ付録がついていても12040円！」

大吾「うおっ！ こ、これは……初回限定版を買いすぎだなっ！」

圭介「そ、それじゃあ俺も早速これを予約しに――」

大吾「ぼ、僕も予約予約——」

暮葉 「しちゃダメです変態さん達っ！」

伊吹「ば、ばか圭介ええええええええええつ！」

圭介「ぎゃあああああああつ！」

大吾 「うぎゃあああああああつ！」

※ちなみにエロゲー化は当然企画すらありません、常識的に考えて無理です。

## 第152話、食生活

「よ、よく食うな……お前」

「ふごおふがあふごおふえごっ！」

「とりあえず、飲み込んでから喋れよ……」

それは黒崎道場へ殴り込みをかけて、アツサリ勝利してしまった後の事。俺は道場付近で偶然にもあかりとバツタリ出会ってしまった。この元気な女の子に嬉しそうな声をかけられ、引くにも引けなかった俺は仕方なく、古宇坂駅前付近にあるマツクにあかりを連れてきたのだが……。

なんだ、このカオスな状況。他のお客さんの注目の的になってるよ俺達。ガツガツと色々なものを食べているあかりは、女の子……と言うよりは、少年漫画の大食いキャラであった。

「ぷ、はあっ！ いやあーうまいうまい！ こんなうまい飯は久々だなあっ！」

「お前普段何食ってんだよ」

「ん？ 野菜炒めだろ？」

「うまそうじゃねえかよ」

「圭介が想像しているような立派なもんじゃなくって、あたいらが普段食ってるのは特売キャベツ98円だけだ。しかも少量ずつ毎日だからなっ！」



「……他には？」

「お金がある時はカレーを食べるなっ」

「ほら！ 結構マトモなもの食ってるじゃねえか」

「圭介が想像しているような立派なモンじゃないからなっ。当然具なんて入ってない！」

「かけそばならぬかけカレー！？」

「あとはパンの耳をちよつとずつか？ アレ油で揚げて砂糖をかけるとうまいんだよなあ！」

「それ飯なの！？ ちゃんと栄養取れるのかよ！？」

なんとなくわかったよ。あかりがマツクのハンバーガー程度で、こんなにうまそうにガツガツと食べる理由が……コイツ、普段ロクな飯食ってないんだな。もしかして、あかりが幼児体型なのって栄養不足のせいだったりするんだろうか。

可能性は十分ありえる。キャベツのみ野菜炒めが数日。カレーは具なし。主食のパンに至っては耳をちよつとずつ油で揚げるだけ。こんな飯でバランスのいい栄養を取れるハズがない。

そりゃあ身体だって成長しませんよ。長身イケメンの浅間部長は奇跡だな。

だけどこれから先、流石に成長は無理かもしれないが、こんな食生活が続けていたらそのうち栄養失調にでもなるんじゃないか？ 不安だ……浅間家の現実がひどすぎる。

そういえば、合宿の時もカレーとか嬉しそうに食っていたな。っ

て事は、兄妹揃って料理がうまいのって自炊しているからなのか。それも、なるべく安い飯になるように……。

「だからマックとかあたいにとっては聖地だ！　こんなうまい飯……あたい、もう死んでもいいくらいだよ！」

「そこまで行っちゃうのかよ。どんだけ普段ひどい飯食ってんだよ！」

マックが聖地に思えるほどの食生活を送っているとは……本気で心配だ。あかりだけじゃなくて浅間部長の健康も心配だ。一応兄妹っ事は、あかりと一緒にものを食べてるんだろ。だったらあかりがさつき挙げた悲惨な飯の数々を、毎日食べているって事だよな？

……初めて浅間部長が可哀想に思えてきた。それ以上にあかりが可哀想だけど。

友達がここまでひどい食生活を送っていたとは……これは、アレかな。一度でいいからマトモなご飯を恵んであげたほうがいいのかな？

「なあ、あかり……」

「んみゃ？　どーしたんだよ圭介」

「よかったら今度焼きそばでも御馳走してやろうか？」

「や、焼きそばってアレか！？　あの超豪華料理の焼きそばなんだよな！？」

「あ、ああ。多分お前の考えているもので合ってると思う」

「おお！ 焼きそばを食べられるだなんて——あたいうち死んでもいいっ！」

「待て！ 死ぬな！ 焼きそばくらいで死ぬなああああああ  
ああああっ！」

この時俺は確信した。あかりは母親が退院した後も——相当厳しい生活を送っていると。

アフリカの難民と比べれば、そりゃあ裕福な暮らしをしているかもしれないが……現代日本の水準からするとひどすぎるぞ、浅間家。一日に必要なカロリーすら足りてなさそうだ。山籠り中の重原でさえ動物を狩って生活していたらしいのに……つか、動物狩猟って密猟じゃねえのか？

まあいいや……重原の山籠りの話をする、24時間は必要だから黙ってこう。

それから数十分後、マックを出た俺達は特に用事はなかったが、なんとなくぶらりと古宇坂の街を歩いてた。かれこれ10年以上はこの街に住んでいるけど、あんまり変わらないな。

精々商店が無くなっていたり、結構大きなスーパーが出来たくらいだ。基本的な景観は俺が小学生だった頃と全く変わっていない。まっ、10年で変わる街なんて殆どないだろうが。

それにしても、流石に駅前に来ると人が多いモンだなあ。

これだけ多いと、バツタリ知り合いに会ってイベントもありそうだが、そんなイベントは出来れば起きて欲しくないものだ。だって今、俺はあかりと2人で歩いていんだもん。知り合いにカップルだと思われるのは何か嫌な感じである。

……っていうか、あかりって確か俺に告白してきたよな。

その割には今日は普通だが……もう俺のことを諦めたんだろうか。

だしたら都合がいい。あかりとはいとも通り——友達として遊べるようになるからな。

「あ、圭介っ！」

「あん？」

あかりが楽しそうに小走りで向かった先は——古宇坂で一番大きなゲーセンの前である。

「ゲーセン？」

「なあ圭介っ！　ここでちょっと遊ぼっ！」

「遊ぶって……お前お金あるのか？」

「ふっふー、あたいは資金管理大ベテラン様だ！　これくらい大丈夫なんだからなっ！」

「そうか。その大ベテラン様に一つだけ言いたい事があるぜ」

「んみゃ、なーに圭介？」

「ゲーセンで遊ぶ金を食費に使えよっ！」

「ええー？　あたいだって遊びたいんだよ……な、圭介！　一回でいいから格ゲーやろうよ格ゲー！」

格ゲーねえ……確か、このゲーセンの場合一回1000円だったよな。けど、あかりにとって1000円って結構な出費じゃないか？

やっぱりここは、あかりの健康（食生活的な意味で）の為に、ゲーセンは諦めて静かな公園お散歩コースのほうがいいんじゃないか？

だけど……なんだこの訴えの眼差しは。僅かに赤く染まった顔に、うるうるとした上目遣いは我々男子にとっては、核爆弾以上に強力な兵器である。やめろおおおおっ！ これ以上そんな風に俺を見ないでくれ。引く事が出来なくなっちまうじゃねえか！

「……だめ？」

……ぐはっ。

今の一撃で死んだ……俺はもう、我慢の限界だ。これ以上は耐えられない。全く俺もまだまだ修行不足だな。この程度のおねだりで死んでしまうとは……。

「わかった……一回だ、一回だけだからな」

あかりの食費の為に、浅間家の厳しい家計を考えた結果——100円ゲーム一回。

これがギリギリの妥協点である。

それ以上は浅間家にとってもマイナスだろうし。それに、あかりだって遊びたい年頃だから少しくらいならOKだろうと思った結果が——100円ゲーム一回である。

こうして俺とあかりはゲーセンに入ったわけで、早速——格ゲー席に座ったのである。

【AQUAPAZA】というものを御存知だろうか。う○われるものとか、ToHeart2などのゲームのキャラで、なんと格闘が出来ちゃうゲームである。当然、俺は大好きな小○愛佳ちゃんを使ってやるぜ。あかりは……ハ○オロか。上等だ、愛佳ちゃんの強さを思い知らせてやる。

いや、愛佳ちゃんの強さじゃない——ゲーセンファイターの俺の実力をな！

「うおおおおおおおおお！ ユニバアアアアアアアアアアアアアアアアアス！」

俺は叫んだ。ボタンを連打した。必殺技を正確に打ち込んだ。勝てる……この調子だとあかりはゲームド素人だ。この調子で行けば——俺の勝利は確実だ！

## 第152話、食生活（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「おお、圭介が珍しく本気を出した！」

重原「圭介はホントに格ゲー強いからねえ」

圭介「ふふふ……ゲームで俺に勝てるヤツは——いない！」

大吾「強気だな」

重原「これで負けたら恥だ、」

圭介「まあ見てろ。お前らが束になっても勝てなかった俺が——アッサリ勝利するから！」

大吾「け、圭介すげえ調子に乗ってるな……」

重原「だけど、事実だから言い返せない悲しい現実……」

## 第153話、決着

「……」

あなたは神を信じますか？ 俺は信じません。だって神様は姿が見えないし、俺らに何も与えてくれないんだもの。これを言ったら宗教家には怒られるだろう。だけど、俺個人の意見としては神様は絶対にいないはずだ。もし神様がいたとしたら——敗北と言う言葉はないんだから。

つまり、俺は何が言いたいのかというと……。負けた。

格ゲーでド素人に負けた。信じたくないんだけどね、現実だから仕方がない。まさかあれだけ動きの鈍かったあかりが、途中から16連打の高林名人もビックリな腕前になるとは……。トホホ。

「わっははははは！ 何が四丁目の撃破王だっ！ 弱いな圭介！」  
デルタフォース

「うあああああああっ！ い、言うなっ！ 弱いとか言わないでええええええっ！」

なんでだよちくしょう。それでも俺……大吾や重原には負けた事がなかったのに。

一回別な格ゲーでランキング1位のヤツと戦った時、苦戦はしたが、それでもなんとか勝てたって言うのに……。なんでド素人のあかりに負けたんだよ！

日本格ゲー界現チャンピオンの俺が……。し、素人のあかりに負けるだなんてっ！

「まあまあまあ！ あたいに負けただけまだありがたいと思えよな



！ あたいのエロ兄貴に負けるよりは100倍マシだろっ！」

そう言われてもねえ……あかりは一応女の子だし、しかも格ゲード素人だし。やっぱり多少は経験のある浅間部長に負けるほうが、シヨックは少ない気がするんだよね。でも、あかりの機嫌を損ねたらもう一銭させられそうだし……。

約束は約束だ、100円ゲーム一戦限定。今回は素直に負けを認めてやる、だから頼みますから第二ラウンドはやめてくれ。

「きゃ〜キスプリ撮っちゃった！」

「マジ僕、みずっちの事ちょく愛してっから！」

不意に耳に入っただこそこのバカップルの騒ぎ声。うるせえな……まあ、ゲーセン自体がうるさい店なんだけど、この騒音の中よく声が響くよ。つーかどこのリア充だ？

振り返ると、四角い箱の中からカップルが……って、

「お、大林ィ!？」

「……は？ げえ!？ ふ、藤島……っ」

おいおいおい、どういう事なんだよコレは。なんであのサッカー少年大林君が、あんなロリ顔の彼女を連れて歩いてるんだよ。しかもキスプリってなんだよオイ。たまにアイドルのキスプリが流出して問題になるけど、やっぱりその事言ってるんだよな。

つまり大林は隣にいる女の子と——キスプリを撮ったって事か！

「てめえ……彼女いたのかよっ！」

「う、ぐ……ふ、藤島だって人の事言えないだろ！ 誰だよその隣の子は！？」

「あ、あたいは別に圭介の彼女なんかじゃ……彼女なんか……じゃ……っ」

「あのー、あかりさん？ どうして赤くなってるんでせう？」

あかりはかあ、と頬を紅潮させていた。

そこで赤くなるなよ。余計大林に誤解されちまうじゃねえか。つか大林、その言い草だけ隣の子が彼女って認めてるんだな。ちくしょう大林はリア充だったのかよ！

……こりゃあ、黒木達に報告だな。あーあ可哀想に……きつと大林は明日、見るも無残な屍と化していることだろう。嫉妬した黒木と赤佐の手によってな。

「よし藤島、協定を結ぼう」

「あ？ きよ、協定？」

「僕達は何も見なかった。僕達に彼女がいるのはクラスのみんなには内緒だ、よろしい？」

「お、おう……」

あかりは彼女じゃないんだけどね。まあ、ゲーセンにいる時点でアレだし、変な誤解を生んで俺がシバかれない為にも、この協定に署名しておいた方が身のためだろう。

署名と言っても、署名用紙なんてものはないけどな。

「それじゃあさらばだ藤島。さっ、次行こうかあゝみずっち」

「うん！　ねえねえ勇太あゝ今の人達友達？」

「片方はそうだけでもう片方は知らない、アイツ藤島って言うんだけど多分アイツの彼女じゃない？」

「可愛い子だったねゝ！　乗り替えたらダメだよ？」

「ははっ！　僕はみずっち一筋だぜえゝ」

なんちゅーラブラブカップルだ。見ていて腹が立ってくるほどラブラブだ。一生イチャラブしてやがれこのリア充め。つーか、完全到大林にあかりが彼女だと思われたんだが、どうしよ？

肝心のあかりは黙りこんだままだし……なんだか気まずい空気だ。と、とりあえず……今の空気はあまりにも気まずすぎる。なんとか、この空気を明るくするルートへ持っていかなければ――。

「よし、もう一戦ゲームでもやるか！　100円くらい俺が出してやるよっ！」

「……なあ、圭介っ」

「な、なんだよ？」

今まで一番騒がしかったあかりが、不自然なまでに静かな今の状況……なんだろう、不気味で仕方がないや。一体あかりのヤツどうしちまったんだ？

ひょっとして、さっきの誤解を気にしてるのか？

そりゃあまあ、俺も大林に誤解されてヤバいなとは思っているが

……何もここまで気にする必要はないと思うんだ。それともあかり、まさかまだ俺の事が……いや、流石にないだろ。だって今日のあかりはいつも通りだったじゃないか。

もう吹っ切れたんじゃない……のか？

「こんな所で言うのもなんだけど……あたい、圭介が好きだっ」

「……っ！」

あかりは胸に手を当て、俺を見上げていた。すっかり顔は紅潮しており、どこか色っぽいうるっとした瞳になっていた。いかん……これは誰がどう見ても恋する年頃の少女。

コイツ、俺の事を全く諦めていねえ……。

やんちゃ少年系少女だったあかりは、すっかり女の子と化していた。しかも、少しずつ俺に近付いて来ているような気がする。ちょっとずつ、不器用に歩み寄ってきている。

正直俺は困っていた。胸はどきどき鼓動が早まり、かあっと顔も熱くなる。

だけど、それと恋心は別である。

エロいシーンに遭遇したって似たような反応はするぞ。だから別に……俺はあかりが好きってわけではない……と思う。

「あたい、前にも告白したよな？」

「あ、ああ、夏休みの前だったけか」

「まだあたい、圭介からの返事を聞いていない……」

いや、だってアンタ逃げたじゃん。とっても恥ずかしそうな顔をして。その後ろ姿が完全恋する乙女で何とも言えぬ感じだったけど。

っ—かコレ、ホントにあかりなのか？

あかりにしては……か、可愛すぎるだろオイっ。

「だから……ここで聞かせろよなっ。圭介はあたいの事どう想ってるのか……っ」

言葉はやや乱暴ながら、彼女は本気の様子だ。

冗談を飛ばす場面でない事くらい、俺でも容易に理解ができた。

彼女は——本気で俺の事が好きみたいである。だから勇気を振り絞って告白したんだろう。

問題は……俺の気持ちだ。実を言うと、俺はこの所ずっと悩んでいるんだ。それは俺自身がどう思っているかについてだ——。

わからないんだよ。最近俺の中で渦巻いている何かが……。

それがわからない以上、俺は誰にも何とも言えない。だから——。

「……少し、考えさせてくれないか？」

「か、考えるって……保留かよっ！」

「曖昧な答えなのは分かってるって。だけどよ……お前に返事をする前に、俺は決着をつけなきゃいけないんだ」

自分の気持ち——な。

「決着？ 決着って何にだよ？」

「今は言えねえけど、返事をする時にちゃんと説明はする」

俺の言葉にあかりは黙りこむ。がやがや、という喧騒の中で彼女は迷っていた。

保留されて逃げられるかもしれない。おそらく、彼女はそう思っているのだろう。

それも手の一つだけど……そんなサイテーな事、俺はやりたくない。

あかりは、そんな俺の気持ちに気づいたように顔を上げ、

「……わかった。その代わり、さっさと決着つけろよなっ」

一瞬しょんぼりしていたあかりの顔が、一気に太陽のように眩しくなった。

なんでだよ、なんでこんな明るい顔が出来るんだよ。もしかしたら、あかりの気持ちに応えてやれないかもしれないのに。

だけど……あかりの言う通りだな。さっさと決着をつけなきゃいけない。

その結果はどうあれ、何事も気持ちが一番だ。

その気持ちに決着を付けずには——何も言える事はない。

「必ずつける、だからもう少しだけ待っていてくれ」

これが今の俺に唯一言える事——あかりと交わした唯一の約束であつた。

## 第153話、決着（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「今回は読者のみなさんの性癖を診断するぜ、以下の選択肢から好きなキャラを選んでくれ！」

※かなりいい加減な診断です＋下ネタ注意。

- ・木下暮葉
- ・国宗伊吹
- ・明智風紗
- ・浅間あかり
- ・青山千早
- ・藤島葵
- ・小坂亜紀
- ・西園寺雪乃
- ・白藤早苗
- ・ミネット・ローラン

結果は←

・木下暮葉を選んだあなた。  
あなたはズバリロリコンです。尽くしてくれるタイプが好きみたいです。  
ですね。

自分の欲望を素直に満たしてくれる、そんなプレイを望んでいない

でしょうか？

・ 国宗伊吹を選んだあなた。

もしかして言う事を聞かない子猫みたいな女の子が好きでしょうか？  
ツンツンしていながら、一度デレるとにやんにやん……そのギャップが堪らなく好きなんでしょう。そんな貴方はズバリ、おへそをペロペロしたいと思っています。

・ 明智風紗を選んだあなた。

ズバリ足フェチです。誰がなんと云おうと足フェチです。確かに彼女は大きなおっぱいの持ち主ですが、何より素晴らしいのは足だと思います。

よって、画面の前のあなたはきっと足フェチでしょう。

・ 浅間あかりを選んだあなた。

ズバリあなたはロリコンですね。そんなもってツインテール萌えでしょう。

ほったをぷにぷにしたいと思っていないでしょうか？

・ 青山千早を選んだあなた

ひょっとして、貴方は純粋な心の持ち主かもしれません。  
この中で一番マトモな性癖の持ち主かもしれません。

・ 藤島葵を選んだあなた。

あなたはおそらくシスコンです。近親相姦モノがお好きなのでしょ



う。

でも、現実でやっちゃダメですよ。エロゲーで我慢しましょう。

・小坂亜紀を選んだあなた。

あなたはおっぱい星人です。おっぱいを愛し、おっぱいの為に死ぬおっぱいの為に生まれてきた。そんな感じのお方ではないでしょうか？

ちなみに、あなたは巨乳派でしょう。

・西園寺雪乃を選んだあなた。

ズバリ貴方はドMです。虐められたいと思っていませんか？叩かれたり罵られたり冷たい視線で見られると、ついハアハアしちゃいませんか？

ある意味一番害のない性癖ですが、その性癖を公の場で発動すると当然キモがられますので、時と場所を選んで発動させましょう。

・白藤早苗を選んだあなた。

あなたは力で人を支配したいと思っていませんか？  
大人しい子を支配して、いじめて……あなたはドSかもしれませんが、しかし決して悪い事ではないです。ただ、度が過ぎると犯罪ですの  
で気をつけましょう。

・ミネット・ローランを選んだあなた。

ロリコンです。まだ間に合います……警察に行きましょう。  
決して世の中の幼女を襲わないでください。

大吾「……なんだよこれ、ロクな結果がねえ」

重原「ちなみに作者も圭介も心理学なんて知らないんだよね」

黒木「じゃあアウト気味な診断作るなよ！」

## 第154話、新たな生活

古宇坂市内にあるとあるマンション。ここがクソガキの住処だと言う場所で、このオレ早川悠が今日から過ごす場所である。あのクソガキの部屋は8階、いちいちエレベーターに乗らねえとマンションから出る事も入る事も出来ねえのか。まったく、身障者にはキツイ家だ……クソツタレ。

「広くて綺麗なの！ ミネットちゃん、アルファ隊って結構お金を無駄に使ってるの？」

「わからないよ。ただ本隊がミネットに隠れ家として、ここを提供してきただけなんだよっ」

「どっちにしても……オマエ一人で住むには贅沢すぎんだろオ……」

「ひどい、これからはミネットと貴方とリーネさんの三人暮らしなんだよ！ しかも貴方は一回この家に上がった事があるよね？」

「どうでもいいっつの……それにしても、こんな所に住んでいて大丈夫なんだろオカ。」

佐井学園にしてもサヴィエトにしても。襲撃する時は結構大胆だ。襲ってくる時はビルごとぶっ飛ばそうとするに違いねエ。8階って結構高い所にあるからって、安心は出来ねえぞ。

いくらオレでも、建物ごと吹き飛ばされちまえば、守りようがねエっつの。まあコイツらはそんなリスクなんて、クソも考えていねエみたいだがな。気イ抜きすぎだクソバカ。オレを匿うってのは佐井学園にもサヴィエトにも狙われるって事だ。コイツらはソレを分かってンのか？

「さーさーっ！ 昨日お掃除したから綺麗なハズだよ。そのソファーにでも腰かけてゆっくり——って貴方！ リーネさんもいるのに一人でソファー占領しちゃダメだよ！」

オレはこの部屋に来て最初に、白くて綺麗なソファーに寝っ転がったが、そんな行動にクソガキが怒ってきやがった。

「ま、まあまあミネットちゃん。悠ちゃんもお疲れなの、少し休ませてあげよう？」

「だ、だけどっ」

「それよりボク達はお買い物に行こうなの」

リーネ……クソガキ2号は少しは人に優しいみたいだな。まったく……クソガキ1号もリーネを見習ってもう少し優しくやがれ。こっちは杖つかねえと歩けねえんだっつーの。

……ハア、ちっとだけ寝るか……早起きして眠いし、クソガキ共が出かけて静かな今のうちに睡眠を取っておこう。それにしても……このソファー寝心地がいいな。

……それから数時間後。

不意にオレは目を覚ました。別に悪い夢を見たわけではねエ。元々、オレは夢なんて見ねエ人だから悪夢なんてモンはありえねエ。オレが目覚めたのは自然的なモノだ。そんなどうでもいい事を脳内で整理しながら、オレは左手を首筋のチャーカーへと持っていた。……っといけねエ、なにオレは能力使用モードに変更しようとし

てんだ。たとえウツカリだとしても敵がない時にそれをやるのはマズイ。

不便な身体が……魔力エネルギー変換機を使っても、15分しか超能力者に戻れねエ。

こんな身体でこれから先、どうしろってんだ……15分以内に敵を駆逐できるか？

とにかく15分でどう戦うか、そういう作戦を練っておくべきだろう。オレをブラックリストに登録したサヴィエトはもちろん、佐井学園のこのまま黙っちゃいねエハズだ。どっちが先に攻撃を仕掛けてくるかは知らねエが……連中の攻撃は必ず来る。

それがオレを殺す為か、オレを理由する為かは知らねエがな……。

「さて、と……どうすっかなア……」

「いやああああああああああああっ！」

あア……クソガキの叫び声じゃねエか。佐井学園かサヴィエト、どっちかは知らねエがもう襲撃者が来やがったってのか。クソツタレ……こっちはまだ考えている途中だったのに。

まア仕方ねえ。たとえ15分限定とは言え、その間のオレは超能力者。しかもこの世界でも最強って呼ばれる存在だった。そんなオレに戻るんだ。最強のオレなら、クソ野郎の一人くらい蹴散らすのは余裕ってヤツだろう。

面白エ……ゴミ掃除だ。10秒でクソ野郎の居場所を血だまりに変えてやる。

オレは変換機のスイッチを押し、能力使用モードに入れた。電子音と同時に頭に何とも言えぬ違和感を覚え、頭の回転も良くなったような気がした。

杖は……能力使用モードなら風の力を使って歩けるし、本来はいらねえ。それでも戦闘の後すぐスイッチを切る事を考えれば、持つ

ていったほうが楽であろう。

オレは静かに歩み始め、クソガキ共の居場所を探す。

「ひゃう！」

「おおおお、落ちついて欲しいのミネットちゃん！」

風呂場か、あの白い浴室が真っ赤に染まるかもなア……まあ関係ねエ。クソ野郎を潰さねえと日常を営めねエからな。それにしてもミネットで対処が出来ねエヤツか。だとすると、相手は相当の使い手であると見た。佐井学園の超能力者かサヴィエトの魔法使い。

どっちかは知らねえが……まあ、ぶち殺しは確定だア。

オレは風呂場へ繋がる扉を開けた。さて——どこのクソ野郎だ……。

「……っ」

「……は、あわ……っ」

「あ——ん？」

なんだコレは……クソ野郎はいねエ。

いるのは素っ裸のクソガキ2人だ。ミネットはホントにクソガキだが……リーネは顔と身長さえ見なけりゃ少しは救いがあるかもしれないねエ。主に胸のあたりがな。

「きょううっ！」

「ゆゆゆゆ、悠ちゃんっ!？」

「ど、堂々とした覗きだよっ！　悠のばか、えっち、すけべっ！」

「なにピンクい事言っでやがるんだクソガキ……さっきの悲鳴はなんだ？」

「え、えと……さっきの悲鳴はミネットがナメクジに驚いただけなの——ふ、ごおっ!？」

「はわわわわっ！　り、リーネさんそんな事は言わなくてもいいんだよっ！」

ミネットは慌ててリーネの口を塞ぎ、恥ずかしそうに抗議をしていやがる。

しかも丸見えだ。恥ずかし思い出暴露と、自分の素っ裸をオレに見られるの、コイツらはどっちが恥ずかしいんだか。つーかナメクジに驚いていただけかよ。紛らわしいんだっつーの。

おかげで無駄に魔力を消費した。後でミネットに補充してもらわねェとな。

それにしても、一般人ってのはこんな日常を送ってんのか？　一人暮らしならともかく女と一緒に過ごすってのは、無駄に神経を使わねえとダメなモンなのか……面倒かもしれないねェ。

まっ……とりあえずは戻るか。

## 第154話、新たな生活（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「へっくち！」

圭介「可愛いくしゃみだな」

伊吹「う、うっさいわね！ 風邪気味なのよっ！」

圭介「夏風邪かよ（現実では秋ですが、作中ではまだ夏です）」

伊吹「わ、悪い……？ あんたはどうなのよ？」

圭介「俺は風邪なんかひかねえよ」

暮葉「拙者聞いた事があります。馬鹿は風邪をひかないらしいのです！」

葵「お兄ちゃん馬鹿だったんだ！？」

伊吹「た、確かに圭介は馬鹿ね……っ」

圭介「なにそのひどい結論！？」



## 第155話、クソガキ探し

数十分後の話。折角だからクソガキ共が上がった後、オレも気分転換の為にシャワーを浴びる事にしたのだが……それはオレがシャワーから上がった後の話だ。リビングへ行くと、リーネが黒々しい怪しげな機械をいじっている。それだけで随分奇怪な光景だが……何かが足りねエ。

いつも騒いでいる、一番うるさいヤツが居ねエ気がする。

オレがシャワーを浴びている間に何処に消えたんだ、あのクソガキは。

「おい、リーネ」

「ん、何なの？ ひょっとしてこの機械が気になるの？」

「ソイツの説明は後で聞いてやろう。その前にミネットはどこに消えた？」

「これは新型蓄積機って言う機械なの。これを小型化出来れば悠ちやんの制限時間が――」

「人の話ガン無視してンじゃねエぞコラア！」

「もお、悠ちゃん心配性なの。ミネットちゃんは多分遊びに行ったハズなの」

「……どオ言う事だ」

「ミネットちゃんには近所に友達がいるらしいの」

「……チッ」

友達かア……その前にあのクソガキ、ちゃんと理解してんのか？  
オレ達は狙われている身なんだよ。ンで、あのクソガキがオレ達を狙っているクソ野郎をシバく組織の一員だって事を。ったく……呑気なクソガキだ。こっちはいつ裏世界のクソ共に襲撃されるかビクビクしている所なんだよ。変換機コイツが無けりゃ自己保身も出来ねエしな。

……制限時間は残り13分。チッ、さっき2分無駄遣いしたからな。まア、相手がただの雑魚なら10分以内で片付けられるだろう。そうと決まればやる事は一つだア。

オレはリーネに背を向け、杖について玄関へと向かった。

「あれ、もしかして探しに行くの？」

「……」

「悠ちゃん本当に心配性なの。でも止めはしないの、噂だと風剣ふうけんのシルフが動き始めたらしいの」

「風剣のシルフ……なんだそりゃ？」

「ボクもミネットちゃんから聞いた程度なの。でも、すごく強い魔法使いらしいの」

つまり、クソガキはとんでもねエ輩が襲撃してくるヤツと分かかって、にも関わらず友達つてのと遊びに行ったってワケか。その友達を巻きこんだらどうするんだ……？

それに、あのクソガキの能力じゃあ強いヤツと戦わせるのは、あ

のクソガキの寿命を縮める結果になるかもしれねエ。やっぱりあのガキは連れ戻すべきか……？

そう思ったオレはリーネに特に何も伝えず、背を向けてマンションを後にした。

その後、オレはクソガキを探すべく、不便な身体に鞭を打って市内を歩いていった。

三丁目付近にある児童公園。ここにいるかと思ったが……流石にいないか。いくらミネットが見た目も中身もガキだからって、流石に公園で遊ぶほど幼くはなかったか。チッ、単純なクソガキだと思っ  
て甘く見ていた。中々探すのが難しいじゃねエかよ……クソツタ  
レ。

……っと、なんだ。ポケットの中から振動が身体に伝わる。携帯電話か……おそらくリーネのヤツがオレに電話でもかけてきたのだろう。

仕方ねえ……出る気はしねエが、一応相手にしてやるかア。

『よかったなの！ ボク、出てくれないと思ってたの』

「……なんの用だア？」

『よく考えたら、ボク魔力を探る事が出来たの』

「そういう事は最初に言えクソガキ2号……要するに、オレは無駄に歩いたって事かア？」

『そうでもないの。その近くに初芝高校があるハズなの』

「……オレが前にブッ壊した所か？」

『そ、そういう事になるのかな……？　その近くにミネットちゃん  
はいるハズなの』

「ふーん……っで、オレはそっちに向かえばいいんだな」

『そう言う事なの！』

そういう事かア……まっ、あのクソガキが同じ所にいるとは思え  
ねえが、それでも初芝高校に行ってみる価値はあるだろう。待てよ  
……ミネットのクソガキはアルファ隊。ンで、初芝高校には木下っ  
てアルファ隊のチビが居たよな。

もしクソガキと遊んでいるのがあのチビだったら、また戦う必要  
があんのか？

冗談じゃねエ……こっちは切羽詰まってんだ。

あんなチビ構ってる余裕なんざ一切ねエンだよ。

『……ねえ悠ちゃん。悠ちゃんは どうして……その、他人に冷たい  
の？』

「……あ？」

『いや、正確には悠ちゃん。あえて他人を拒んでいる気がするの』

「……オマエがオレに説教くれンのかア？」

『ボクは悠ちゃんが心配なの。悠ちゃんだって人間なの、それなの  
に……』

「普通の人間じゃねエよ、普通の人間にも戻れねエ……」

一言をすらすらと言い終えると、ふとオレは昔の事を思い出した。  
まだ、背丈もミネットより低かった頃の時かア。オレが学園の前身――特科会に引き取られるキツカケとなった……。

オレはその日以来、何事にも興味を無くした。あえて興味を無くした。

フン、今更……くだらねエっつーの……。

『……悠ちゃんの言葉はどこか寂しそうなの』

「寂しい？ オレの汚エ言葉のどこにそんな要素が含まれてンだ？」

『そう、言葉は汚いの。だから誰かを求めているみたいに聞こえるの』

「……どオ言う事だ？」

『弱音を吐いて構って欲しい人がいるって、よく聞く話なの。悠ちゃんの場合はそれと似たようなものなのかな』

……チッ、そんな事……一番分かってんのは自分自身なんだよ。  
だから今更なんだ。あのクソガキ2号に指摘された所で、今更どうなるんだ？

何か変わる事でもあんのかよ。ねエだろ……マイナスの方向には変わるかもだがなア。

『悠ちゃん……もう少し、笑顔になろうなの』

「……そいつは無理だ。今更笑って何になる？ そもそも、笑った

瞬間クソ共が潰しに掛かるかもしれねエ。オマエやミネットがクソ共に殺されるかもしれねエんだ」

『それでも悠ちゃんにはボクにはない……笑顔を守る力があるの』

「……フン」

何が笑顔を守る力だ……オレの能力はそんな素晴らしい力じゃねエ。ただ、可愛い容姿を持った女さえ肉塊に変え、あらゆる物体を破壊し尽くす……オレの能力はそういう力だ。

そんな血塗れの力で、笑顔を守る事なんざ出来るわけがねエ。力を使えば、笑顔じゃなくて血の涙が増えるだけだろう。第一、そんな大層な力があれば特異点狩りなんてしてねエよ。

もしも、この能力で特異点狩りをやめさせたなら……。

もしも、この能力で学園を潰す事が出来たなら……。

もしも、この能力で何かを守る事が出来るのなら……。

……考えただけでもくだらねエ……不可能なんだっつーの。そんなものは、ヒーローが出てくる夢物語でしか実現不可能なんだ。オレはただの殺人鬼だア、出来るハズがねエ……。

「くっだらねエ、手遅れだっつーの……」

『手遅れじゃないの』

「オマエらも不幸なモンだ……末期ガン患者並のどうしようもないヤツを、態々自分達の住処に抱え込んだんだからな」

『そんな事は絶対じゃないの。悠ちゃんはまだやり直しが効く段階なの』

「その言い草……オマエのオレの母さんかア？」

『失敬な！？　ボクはまだギリギリ15歳なの！』

要するに……年下に説教されたってワケか、クソツタレが。

そう思ったオレは咄嗟に電話を切り、空を眺めた。さっきまで快晴だった空は、いつの間にか雲のせいで灰色に染まっていた。嫌な天気だ……雨でも降ってきそうだな。

……さて、そろそろクソガキの事でも探しに行くか。

とりあえず、クソガキがいるって話の初芝高校へ向かって歩き始める。

そこでまた、随分と昔の事を思い出した。

場所は東京の銀座のあたりだ。まだ黒いランドセルを背負っていた頃、既に超能力に目覚めていたがその事は周囲に黙っていた。世の中は……そういうモノに冷たいと、当時のオレは子供ながら理解していたからだ。だが……親に連れられて遊んでいたあの日、オレは不良に絡まれた。

怖かった。

喧嘩なんてした事のねエオレは、いきなりド派手な奴らに絡まれた。金を出せだのぶん殴るだの殺すだのという怒号。ガキがデカイヤツらから、それを聞いて怖がらないハズがない。

オレは逃げようとしたが、捕まって殴られそうになってしまった。だから——オレは超能力を人に向かって使った。不良は死んだ……自分の能力がそこまで強いとは思わなかったのだ。

その後、周囲の大人達や警察だの自衛隊だの……全てがオレに襲い掛かり、オレの前で壊滅してしまった……それはオレの力のせいだ。こうしてオレは行き場を無くした。同時に、他人との接触は世界の滅びに繋がるとも思った。子供ながらに嫌だったんだろう……。こうしてオレは、あえて一人でいる事を望んだ。

当然、騒動の原因かつ一人のオレに居場所はなくなった。そんな

孤独なオレに——居場所を提供したのが学園の前身で、その研究を受けて超能力に磨きがかかった。

だが、その果てにあったモノは血も涙もない、殺戮の世界——。

「くっだらねエ……」

「何がくだらないのよ？」

「……あ？」

不意に耳に声が入ってきた。独り言を聞かれたか……しかしなんだ、どこかで聞き覚えのある声のような気がした。なので振り返ってみると——、

「あ、あんた……あの時の！？」

そこにいたのは——制服姿の国宗伊吹ってヤツだった。



## 第155話、クソガキ探し（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「セロリだ」

大吾「セロリだな」

重原「セロリだね」

伊吹「せ、セロリってなによ？」

圭介「過去までセロリだったな」

大吾「性格はセロリだったけどな」

重原「どこまでセロリ化するんだが」

伊吹「だ、だからセロリって何よ？」

圭介「そういえばセロリも心配性だよな」

大吾「セロリはロリコンだもん」

重原「こっちもセロリ並にロリコン＋心配性だね」

伊吹「だからセロリってなんなのよっ！？」

## 第156話、言えばいいだろ

児童公園。

オレはクソガキを探すただけに、こんな場所へ来たのだが……  
チッ、まさか国宗のヤツと遭遇するとは予想外だった。現在、オレは公園のペンキ塗りたてのベンチに座っていた。若干シンナー臭いベンチに国宗と2人で座っていたのだ。

ったく……ガキ探してんだから、あんまりオレを足止めしてんじやねエよクソアマ。

「っで、結局あんたは暮葉達とどういう関係だったわけ？ いきなり漫画もビックリな戦闘始めちゃうわけだし、何か事情でもあんのよね？」

「……フン、オマエにそれを知る権利はねエ……」

「な、なによ！ こっちは結構心配してるのよ!？」

「裏世界に手エ出すと……ロクな事にならねエぞ」

「う、裏世界って……」

「……ッ」

国宗は一応一般人だ。前にコイツの前で戦った事でさえ本当はま  
ずい事だ。チビと西園寺との戦いでオレは——とんでもないモノを  
一般人に見せつけてしまった。

幸い、それが超能力者の能力による破壊だとは思われていない。  
それだけでも少しは救いがあるのかもしれないが、これ以上国宗を

こっちの世界に引き込むわけにはいかねエ。

あんなクソツタレた世界に——ド素人の一般人を巻きこむわけにはいかねエ。

もし巻き込もうとするヤツがいるのなら……っといけねエ。本当はこんな事を考えている場合じゃねエンだった。さっさとあのクソガキを探さねえと。そういえば国宗は初芝生徒、あのクソガキがいる場所も初芝らしい。この女が何かを知っている可能性があるかもしれないねエ。

「オマエ、こんな顔のヤツを学校の近くで見なかったか？」

オレはポケットから携帯電話を取り出し、ミネットの画像を国宗に見せた。確かコイツは前にもこのガキの画像を見た事があったはずだ。そのせいか写真を見た瞬間、国宗は一瞬ぴくんと身体を震わせ口を僅かに開けた。どうやら……覚えていようだな。

「この子って、前にも探していた子よね？」

「あア……今丁度探している所だ」

「前から思ってたけど、あんたとその子ってどういう関係なの？  
兄妹にしては全然似てないけど……」

「話すのは面倒臭エ……色々事情があってコイツと暮らす事になってんだ……クソツタレ」

「つまり、あんたが面倒を見ているって感じなの？」

「まア……間違っはいねエな」

ホントに世話の焼けるクソガキだ。人がこうして探しているっていうのに、全くどこにも居やしねエじゃねエかよ。こっちは通常モードじゃ歩くのも辛いんだっつーの。

「その子ってどんな子なの？」

「あア？ クソうるせエしすぐ迷子になるし弱エし……保護すんのが面倒なヤツだ」

「……なんか、圭介にちよつと寝てるかも……っ」

「あ？」

「いや、なんでもないわっ！」

「待て……圭介って言うのはどういうヤツだ？」

圭介……どこかで聞き覚えのある名前だ。

あれは7月。この街の南部あたりにある工業地帯での出来事。オレは木下暮葉をブツ殺そうとしていたんだが、その時一般人が乱入してきやがった。その一般人は弱い、超能力も魔法も使わず銃どころか刃物さえ持っていない、丸腰のただの学生だった。

——いいぜ……だったら俺がてめえを勇気づけてやるよ。この拳でな！

——あたり前だろ。友達の為に頑張る事の何が悪いってんだよ。

——もう一度やり直してきやがれ、このクソ野郎オ！

にも拘わらず……オレはソイツに完膚無きまでにボコボコにされた。

何回攻撃しても倒れねエ、死にたくなるような絶望を与えても諦めねエ。何かを守る為に戦うヒーローのような男だった。だけど……確かソイツの名前は――。

「……あんた、圭介の知り合いなの？」

「今の段階じゃわからねエ……可能性はあるかもしれないねエ」

木下もあの男を圭介と呼んでいた。そしてコイツは木下の知り合いだ。その圭介ってヤツについて何か知っているかもしれないねエ。出来る事ならソイツに会いたい。会って……リベンジしてやる。

とにかくオレはあの一回の敗北が許せねエ……超能力者がただの学生に、ただの喧嘩で負けただなんて恥以外の何者でもねエ。

だから今度はオレのプライドの為に……もう一度あの野郎と――。

「……はあ、圭介の知り合いってホントに愉快な人が多いわね……」

「そういうオマエは、その圭介ってヤツの何なんだ？」

「わたしは別にアイツとはただの……お、幼馴染よっ」

なんで幼馴染って所がハッキリ言えてねエンだよ……しかも微妙に赤いし、オレはそういうのは経験ねエし、そもそもする気もねエからわからんが……ひょっとしてこの女。

「オマエ……ソイツの事が好きなのか？」

「は、わ、ああ……っ！ いいいきなりなに言ってんのよアンタ！ あ、あんな馬鹿でオタクで変態で八方美人でいつも一人で勝手

に消えて、その上お節介で時々カッコよくて一緒にいて楽しくて――」

「途中から長所になってンぞ……」

「きやうう!？　な、なんでアンタにまで分かるのよ……っ」

「オマエ、表情に出てンだよ」

「う、うそ!？」

「自覚ねエのかよ……」

どんな幸せ者だよこの女。つーかこんだけ表情豊かなのに、相手の野郎とはまだ付き合っちゃいねエみたいだな。これに気付かねエとか……圭介ってクソバカはどんな鈍感野郎なんだ。

「うう……なんでアイツは気付かないのよ……っ」

チッ……オレが恋愛相談なんざ、柄でもねエのに……。

この女は相当本気で悩んでるようだ。サッパリわかんねエが、とりあえず一般論でも語っとけばなんとかなるだろう。

仕方ねエ……恋愛相談なんてくだらねエモンするのは、今日だけだ。

「そりゃあ、オマエ次第じゃねエの?」

「……えっ?」

「相手がどんな野郎かは知らねエ……けど、そう言う鈍感な野郎に

は素直に言えばいいだろ」

「な、何をよ……っ」

「常識的に考えて告白ってヤツかァ……？」

「っ!？」

オレが指摘した瞬間——ぼんっ、と赤くなった国宗が借りてきた猫のように静かになった。

なんだ……告白ってそんなに恥ずかしいモンかァ？

オレにはわからん……経験ってモンがねェし。まっ、超能力を暴走させずに正確に扱うよりは簡単なモンだとは思うが。

「ストレートに言ってやれ、それが一番の近道だとは思うがなァ」

「……無理よ、さっき女子会言ってかったんだけどライバル多いし、それに私は……っ」

ライバルが多いって、どんだけモテてんだよその男。オレが能力で竜巻でも起こしてソイツをぶっ飛ばしてやろうかァ？ 聞いているだけでムカつく野郎かもしれねェ。

まァとりあえずわかったわ。コイツがソイツを攻略する方法が——。

「気にすんじゃないよ……」

「……？」

「ライバルだァ？ そんなの関係ねェ、オマエはそいつの幼馴染だ

ろ？ だったらオマエは他のヤツよりソイツの事を理解してンじゃねエのか？」

「……っ」

「それだけで立派な武器になンだろ。別に仲悪いわけじゃねエんだろ？」

「それは……多分っ」

「だったらポジティブになれ、オマエなら何かをやって成功する可能性があると思う」

オレとは違ってなア……まっ、今更羨ましがっても仕方がねエ。オレはオレ、コイツはコイツだ。オレは光の道に戻る事は多分できねエ……オレは一生今の中途半端な位置にいるしかねエんだ。それと比べりゃコイツは——光に満ちている。

「……あんた、話に聞いていたのとは全然違う、いい人かもね」

「あ？」

「なんでもない、こっちのことよっ」

「……チツ、そんじゃ……オレはそろそろクソガキ探しに戻るが？」

「そ、そうね。そういえばあんた人探し中だったのよね……ごめん」

「気にすンな……じゃあな……」



オレは国宗に背を向け、初芝高校へ向けて再び歩き始めた。後ろから、国宗が「ありがとう」って叫びかけたきたような気がするが……正直それはどうでもいい。あの女と関わるって事は多分もうねエだろうからなア。しかし恋愛ねエ……そんな事で悩むヤツを初めてみた気がする。

まア所詮、オレには関係ない次元の話だ。

それから数十分後、杖をつき苦勞した結果——ようやく初芝高校に到着した。オレがブツ壊した所は綺麗に修復されており、周りの壁と比べると、不自然なくらい真新しい所があった。もうちょっと上手く修理できなかったのかよ……。

まァいい、そんな事よりあのガキは——？

「葵お姉ちゃん！ 千早お姉ちゃんこっちこっち！」

「にやはは！ 待て待てミネットゥっ！」

「はあ、ちょ……ま、待ってよミネットちゃん……っ」

いたいた愉快に遊んでやがる……アレが友達か。大人しそうなヤツが一人に、もう一人ミネットそっくりのうるさそうなヤツが一人。ハッ、まああのクソガキにピッタリな連中だ。

楽しそうに遊んでいる所悪イかもしれねエが……これも安全の為だ。

「ミネットオ！」

叫ぶと、三人が一斉にこちらを向いた。そのうちの一人——ミネ

ツトは笑顔を浮かべ、

「あ、悠っ！」

楽しそうに駆け出し、オレの目の前まで走ってきやがった。

ったく……散々人を歩かせておいて、自分は随分楽しそうだな。

まア、別に友達と遊んでたってンなら文句は言えねエが。いや、一つだけ言う事があるな。

「もしかしてミネットの事を探しに来たの……って、なんで不機嫌そうに拳を握り締めてるのっ!？」

「オマエ……あのガキ共と何してたんだア？」

「ガキじゃないよ！ 葵お姉ちゃんも千早お姉ちゃんも貴方と歳は近いんだよっ！」

「オレの質問無視してンじゃねエ、何してたんだア？」

「んゝっと、遊んでもらってたんだよっ！」

まア当然の回答である。だけどなんだ……散々探してオチがこれだと、ちつとばっか腹が立つというか何というか……まっ、少しクソガキをビビらせておくか。

オレは一気に口を開き、睨みつけるようにクソガキを見て、

「あアッ!？」

……って全然ビビンねエし……ダメだこりゃ、このクソガキに成長の余地はねエかもな。

まア、結局クソガキは無事だった。その事実さえあれば別に問題はねエだろう。

だが……今後は油断が出来ねエな。いつ連中が襲ってくる事か……。

「あの人ミネットのお兄ちゃんか何かかなっ？　すごいイケメンだねっ！」

「さ、さあ……で、でも先輩のほうがカッコいいと思います……っ！」

「葵もお兄ちゃんが一番だもん！」

なに言っただアイツら……まアいい、そろそろクソガキを連れて帰るか。

色々と面倒臭エなア……クソツタレ。

## 第156話、言えばいいだろ（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「うあああああああああああああああ！」

暮葉「どうしたのですかけーすけ様っ!？」

圭介「お、終わる……」

暮葉「なにがですかっ？」

圭介「今期アニメが終わっちまうよおおおおおおおおおっ  
！」

暮葉「……」

葵「お兄ちゃん、もうすぐ秋アニメが始まるよ？」

圭介「おおっ！　そういえばもうそんな季節か！　秋は見るもんが  
いっぱい困るぜ！　アニメのおかげで一年退屈しないぜ！」

暮葉「……けーすけ様、病院に連れてったほうがいいのでしょうか  
？」

葵「お兄ちゃんはアレでノーマルだから平気だと思っよ」

## 第157話、武装集団（前書き）

どうもです、更新遅れて申し訳ございません！

## 第157話、武装集団

もう日も暮れ始めた頃、ようやく拙者——木下暮葉は解放されました。

先程までずっと、亜紀さんや伊吹さん、それにクラスメートの浦上さんや横井さんなどと一緒に女子会に参加していたのですが……。

「もきゅう……」

バレちゃいました……亜紀さん達にバレちゃったのです。

女子会とはその名の通り、女子だけの集まりなのです。女子同士なら男子がいると話辛い事も話せるというわけで、よくこの国の女の子がやっているらしいのですが……。

まさか、あそこまで吐かされるとは思わなかったのですっ。

ひどいのですっ、応援してくれるのは嬉しいのですが、その変わり亜紀さんや浦上さん達に散々いじられたのです……うう、あんまりなのですっ。

……でも、伊吹さんはただ一人……落ち込んでいたような気がしますっ。

なんででしょうか、やっぱり伊吹さんも拙者と同じで——。

「ちょっとよろしいですか、とリーリヤは貴女を止めます」

ふと、拙者に語り掛けるような声が聞こえました。

振り返ると——プラトークと呼ばれるロジーナの民族衣装を身にまとった、背の高い金髪の美人な人が立っていました。ジャラジャラと飾りのついた杖を右手に持ち、八端十字架のペンダントを首から提げているその人の胸の部分には、アルファ隊の紋章が描かれたバッジがついています。

この人は……間違いないのです——！

「り、リーリヤ隊長！？　なのですか……？」

リーリヤ・コステイリナ。

アルファ隊の隊長であり、同時にアルファ隊最強と呼ばれる魔法使いなのです。多分レムリア全体で見ても10本指に入る実力者だと思えます。隊長はそれ程凄い魔法使いなのです。

「はい、貴女に警告があります、とリーリヤは言ってみます」

「警告……ですか？」

「風剣のシルフが動き出した、というのは御存知だと思います、とリーリヤは推測します」

「はい、その事なら……けーすけ様を守る為に、いつでも戦闘準備はできているのです！」

「いい心がけです、とリーリヤは貴女を称賛します。しかし、別件で貴女にも協力して欲しい事があるのです、とリーリヤは頭を下げて頼みこんでみます」

「頼みごと……なのですか？」

隊長が拙者なんかに関心ごとって……一体、なにがあったのでしょうか。

リーリヤ隊長は基本自分で何でもやっちゃうタイプなのです。なので、そんな隊長が拙者に直接頼みごとをしてくるのは、珍しい上に嫌な予感しかしないのです。

もちろん拙者は隊長の事は大好きですっ。でも……そうじゃなくて、何か隊長も頭を悩ませる嫌な事が起こったとか……そんな感じの嫌な予感なのです。

「はい、とリーリヤは返答してみます」

う、ぐ……この全てを包み込む安らかな笑顔、やっぱり何か大事そうなのです……。

拙者は一体、隊長様になにを頼まれちゃうのでしょうか……っ。そう恐れていた矢先、隊長は言葉を続けて、

「実はこの街に不審な集団が侵入しました、とリーリヤは状況報告します」

っ と説明しました。

不審な集団……なんとなく思い当たる節があるのです。

「あの、それって風剣のシルフと共に古宇坂を攻略しようとする、サヴィエトの別働部隊の事ではないのでしょうか？」

「いいえ、その不審集団は魔法使いでもありません。130人程度の武装勢力です。その上サヴィエトとの関与は一切ないと思われます、とリーリヤは補足説明します」

「そ、それじゃあその集団は一体……？」

「以前、隊員を狙っていた人物と関係のある集団……という報告があります、とリーリヤは事実を告げてみます」

「もきゅ？ 拙者達を狙う……って、まさか!？」



「はい、貴女もその人物とは交戦した事があると思います、とリーリヤは推測します」

早川悠……アルファ隊の隊員を無差別に殺害し、最近では拙者の後輩と何らかの関係を持つ最凶最悪の超能力者。あの人と関係のある組織って……確かに無視できない集団なのです。

下手をすれば、また他の隊員が殺されて……結果的にけーすけ様に迷惑を――。

「わかりました！ 早急に調べてみるのです！」

「はい、ですがいきなり攻撃を仕掛けるのはやめてください。まだ、こちらに害があるかもわからない段階なので、無闇な戦いを避けるべきだと思います。調べた結果、害があると判断した場合に仲間と襲撃して欲しい……と、リーリヤは頼みこんでみます」

「了解なのですっ！」

もきゅう……帰ったらけーすけ様と遊ぼうと思っていたのに、本日は帰りが遅くなっちゃうかもしれないのです。でももし、この隙に風剣のシルフがけーすけ様を襲ったら……。

……頑張って、早く仕事を終わらせましょう。そしてけーすけ様の傍に急ぐのですっ。

待っててください、けーすけ様――っ！

――その頃、古宇坂市南部では……。

クソガキを見つけた後、このオレ——早川悠は個人的に買い物をしていた。オレが欲しかったものはおかかってヤツだ。オレはおにぎりが好きだ。腹も減ったし、晩御飯まで凌ぐにはおにぎり一個が丁度いいだろうと思ったのだ。フン……やっぱりおにぎりはうまい。しかし、リーネのヤツ……ちゃんとクソガキの面倒を見ているだろうか。一緒に家を抜けだしたりしてねエだろうな。もし抜けだしていたらオレは今日、何の為にクソガキを探したんだ？

そしてオレは、一人で食うわけでもないのに……なんでおにぎりを3個も買った？

クソツタレ……いつからオレは、無意識にクソガキ共を受け入れるようになった。

いつからオレは……。

「……っ」

……本当にこれでいいのか。オレは幾人殺した人間だと思っている。どれほどの汚エ仕事をやってきたと思っている。そんなクソ野郎が……こんな光の世界にいていいのか？

結局、オレはなんでここにいるんだ。いるべき場所ではない場所に……どうしてオレは何事もなく暮らしているんだ。どうしてアイツらはこのオレを受け入れたんだ。

いつからオレは——。

……と、ここでオレは思考を停止した。

ゴン！！ と、何かがガードレールを突き破ってきた。

全ての終わりを告げるような轟音、だが——同時に変換機に手を伸ばした。

左手の人差し指で触れているのは、魔力エネルギー変換機の制御スイッチ。これを一度押せばオレは超能力者に戻る事が出来る。

そう、暴風の膜であらゆる攻撃を防げる本来のオレに――。

「――あア？」

振り返ると、真っ黒なワンボックスカーのフロント部分が消滅していた。交通事故で正面衝突でもしたかのように、車両のフロント部分が潰れていたのである。ガラスは割れ、タイヤも前輪が無様に外れてしまい、その上衝突の衝撃で車は横転していた。

装甲車……ってワケではなさそうだ。そもそもこの車、誰かの物かすら怪しい。

ナンバープレートも不自然だ。ひょっとして偽ナンバープレートか。よく見ればドアの鍵穴も無理やりこじ開けたような跡があった。つまり――この車は盗難車か。

盗難車の中には素顔さえ分からない、特殊部隊のような服を着た男が2名。サヴィエトの魔法使いがこんな恰好をしているとは思えねエし、車なんてモンを使うとも思えねエ。サヴィエトの魔法使いではないのは確実だろう。なら、それ以外でオレを狙う組織と言え――。

「やっぱり来やがったか……何の用だ？　オレを始末しに来たか？　それともオレを連れ戻して利用でもしたくなったのかア？」

「ひい……あ、う……ああ……っ」

「愉快にビビっちまいやがって……さっきの轢き殺す気はどこに消えたア？　まっ、今のでオマエらは完全にオレを怒らせたがなア。つーワケで――ブチ、殺す」

言い終えると、オレは右手を車の中へと伸ばした。既にガラスはない、腕を車内に侵入させるのは簡単であった。車内を手を伸ばし

たオレは、ひとまず運転席の男の顔を掴んだ。

ぐしゃり、と言う嫌な音。口の部分が変形し、布が不自然に染みしてきた。おそらく今ので顎か何かが潰れたのだろう。まあこの程度では人は死なねエ……痛いだけだ。

「あははぎゃあえひゃあうへはぎやははアハははぎやはははッ！」

顎を潰した男を、今度は建物に向かって放り投げてやった。投げ飛ばされた男は建物のガラスを突き破り、その後床にでも落ちたらしい。あゝあ、あの様子だとガラスが刺さったかもな。

後で救急車でも呼んでやるかア……せめてもの情けだ。

ところで……まだ中にクソ野郎がいたな。もう一人は助手席でビビってやがる。

面白エ……ぎやは、こういうのを見ると——余計に虐めたくなる。

「あアン——ふふ、ぎゃあはははっ！　　あア楽しい！　　ウヘヘ、やべエよオオッ！」

車が不自然に振動する。

理由は、オレが無理やり車内の部品を取っ払い、外へ放り投げているからだ。そういう部品はオレが車内に入るには邪魔くさいだろ。まったく……本当に楽しいイ——。

「ひい!？」

「最高にトンじまったよ……クソ野郎オ！」

「う、うあああああああああああああああああああああ！」

男は咄嗟に拳銃を取り出し、2発ほど発砲してきやがった……が、

銃弾はオレの身体に触れる事さえなかった。そう、少なくともオレの身体にはな。放たれた二発の銃弾は、一旦はオレに風穴を開けようと向かってきた。ただ、その2発はオレに触れる前に暴風の膜に触れたのだ。

膜に触れた銃弾は、そのまま勢いよく男の肩と足に突き刺さる。ハッ、畜生こんな所でブツ殺しはしねェよ。病院送りで助かるレベルの怪我で済ませてやるっつーの。

オレはうめき声を上げ苦しがる男の首を掴み、今度は車道側に投げやった。

続いてどうなったか確認をすべく、オレはバリバリと天井を突き破り、上半身だけを外に出して周囲を見回す。さっき自分の銃弾で自滅した男の周りには――数代の車両が停車していた。

その車の周りにも、同じような服を着ている連中が、銃口をこちらに向けている。

どうやら……佐井学園も本気でオレをどうにかするつもりらしいな。

「あア――？　はア……こんな雑魚虐めても面白くねェぞ」

さてさて、どうすっかなア。一人ずつ大サービスで相手するって手もあるが、それはオレが面倒臭エし時間もかけたくはない。オレはたったの15分しか超能力者でいれないのだ。しかもオレは今日一回能力を使ってしまった為、戦闘開始時点で制限時間は13分程度であった。

あんまり時間をかけていると、すぐにオレは力を失う。力を失えば、こんな雑魚にだって風穴だらけのゴミクズにされてしまうだろう。

なら――短期決戦で行くべきだな。

「あひゃッ！」

オレは拳を車の天井に振り下ろす。その動作自体には何の意味もない、ただ雰囲気を作る為に行った無駄な動きである。しかし、拳がオレがブツ壊した車の天井に触れた、瞬間。

車はドッ！ という轟音を上げ、たちまち大爆発を起こしたのだ。オレがやったのは分子運動の抑制・活性化だ。それでガソリンに火でもついたのだろう。

爆風と熱波が周囲へ飛び散り、周りの車や銃を構える連中を巻きこむ。突然の衝撃と熱で火傷を負った者や大怪我を負った者、果ては恐怖で逃走しようとするヤツも現れる始末だ。

オレはそんなヤツらを見回し、素晴らしい笑みを浮かべて、

「あひやぎやはあひやはははっ！ 今から素晴らしい祭りでも開催してやるよオ！」

血みどろの祭りをなァ……ぎやは、この程度なら何の問題もねえ。もう少し遊んでいたって魔力が枯渇してハイ戦闘不能って事はねエだろう。とにかく……久しぶりに楽しい。楽し過ぎでホントに頭がどうにかなっちゃいそうだよオイ。あはは、すげエストレス解消になるっつの。

……と、その時。

「あーあー派手にやりやがってえ」

数十メートル先にもう一台、今度は白のワンボックスカーが停車した。ガララと開けられた車体中間部分のドアから、一人の男が降り立つ。男は何かをぶつぶつ呟いている。

……フツ、しかも白衣のあの男。

「こりゃあ始末書書かされるかもなあ……まっ、あの男さえ潰せば

問題ねえか」

——あ、は！　なにやってんだよあの野郎オ……った、一仕事増えたな。

いいぜ、お次はあのクソ野郎を始末してやろうじゃねエか。

## 第157話、武装集団（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「木イイイ原くウウウウウウウン！」

葵「いきなりどうしたのお兄ちゃん？」

伊吹「しばらく出番がなかったからいかれちゃったんじゃないの？」

圭介「違うわ！ 俺は今回の感想を言っただけだ！」

暮葉「かわいそうなのです……けーすけ様っ」

圭介「く、暮葉まで俺を変人扱いするなよっ」

風紗「うん、藤島は変人ではない。ただの変態だ」

圭介「うあああああああああああああああっ！」



## 第158話、マッドサイエンティスト

突然オレを襲ってきやがった変な連中。特殊部隊のように顔すら隠す、そんなファッションに身を包んだクソ野郎共をオレは始末していた。だが、数十メートル先に別の白い車が現れ、中から柄の悪そうな白衣の男が降りてきた。オレはソイツに見覚えがある。

あア……忌々しい思い出しかねエがな。確かにあのクソ野郎の世話になった事はある。

そう、あの野郎の名前は確か……。

オレはそれを思い出しつつ、杖について男のほうへ近づいてみる。やっぱりな、あの憎たらしい極悪面に妙に真新しい白衣。あの場違いな科学者で間違いはねエ。

「ぎゃはあはひゃアハはははッ！　三イ原くんよオ、こんな大群率いてゴクローさん。ンで、オマエの目的って何なんだよオ？　オマエ程度がオレを連れ戻そうだななんて思っちゃいねエよなア？」

みはらとらひこ

三原寅彦。

特科会時代からの知り合い、まアどうしようもない不良科学者だ。しかし、超能力の研究に携わっている上に俺の研究もしていたんだ。見た目の割には頭はいい……いや、いいってレベルで済まされはしねエだろう。おそらく、日本でもトップクラスの頭脳を持つ男だ。

……だが所詮は科学者。ひ弱なモヤシがオレをどう止めるつもりだ？

「俺としてもテメエにだけは会いたくなかったんだけどなあ……まっ、学園長直々の命令だから仕方ねえんだよ。なんでもテメエが潰していた連中に、何らかの利用価値があるかもしれないねえんだ、と。俺もソイツは大いに思うぜ。なんで潰して歩いていたんだが……」

「オレが潰した……？　ハッ、今更学園が特異点をどう扱うつもりだァ？」

「なァ早川悠。手を組もうぜ？　今ならその変換機、何かは知らねえがこっちで研究して今より性能アップしてやるよ。テメエが嫌なら待遇も前より良くしてやる。だからさあ……その変わり特異点を狩って生きた状態で俺らに渡してくれねえか？」

今から手エ組んでミネットを渡せって事か……なるほど、やっぱり学園はオレを連れ戻して利用するつもりだったか。聞くとところ悪い話には聞こえねエ……だがな。

「お断りだァ」

「あ？　なんでだ早川悠。悪い話じゃねえと思うけどな」

「オレがオマエらの味方をする理由なんぞ、とつくの昔に消えちまったんだよ。つかよオ、そんな仕事ならオマエらだけでやればいいじゃねエか。神様もビビる血の雨を降らせる演出がオマエらを待ち受けてるだろうからよオ。オマエの極悪面もそこで整形すりゃあ科学者らしいオタク顔になるかもなァ？」

第一、アイツらが関わっている時点で——コイツらはオレの敵だ。あのクソガキがコイツらの手に渡ったら、一体どんな事になるか……おそらく皮膚はべりべり剥がされ顔も破壊されるかもしれないねエ。いや、下手すりゃ命が危険かもなァ。オレはこの狂気の科学者がどんな研究をするのか、どんな実験をするのかよオク知っている。

だからこそ余計にミネットを渡せねエ……たとえ三原を肉塊に変えてもだ。

「あークソツ、なんだかなあ……相変わらずムカつく性格のガキだ。学園を飛び出しても何一つ変わっちゃいねえなテメエ」

すると、三原はガチャガチャと拳を構えている。

なんだ……あの銀色のグローブ。三原の事だ、どうせくだらねエ機械だろう。あの男がしようもない機械を開発するのが好きだからなア。

三原はくすくすと笑みを浮かべ、

「俺さ、実はテメエの事が嫌いなんだよな。ガキの癖に威張るし強くもねえのに強がるし。そんなテメエの姿がムカついて仕方ねえんだよ。今回の交渉だって嫌々だったんだよなア……」

と、一回言葉を切った三原は唇の端を歪め、目を大きく開き、

「じゃあテメエを始末してから特異点を頂くか。テメエがいなくても超能力者くらい沢山いるしな……つーわけであばよクソガキ。テメエの人生はこれで終了だ——！」

なんと三原は駆け出し、右拳を振り上げてきやがった。なんだコイツ……ひょっとしてオレをぶん殴るつもりなのか？　ぎゃは、おい科学者さん冗談はやめてくれよ。コイツ、オレの事を忘れちまったんじゃないやねエだろうなア。オレに触れた瞬間——多分ヤツの手首は折れちまうだろう。

さて、と——どう料理してやろうか？

「——ッ!？」

——あ？

い、痛エ……なんだ……何が起こった、とりあえず落ちついて考えろ。オレの顔面に何かが突き刺さったような気がした。鈍い痛み  
の後の鋭い痛み……皮膚でもやられたか。

クソツタレ、どういう事だ。オレは確かに暴風の膜を張り巡らせた。今のオレならどんな攻撃を喰らおうが、問答無用で弾き返しち  
まうハズだろ。

それなのに何故——あの野郎の拳がオレに突き刺さりやがった？

「そんな顔するなよ。一体何年俺はテメエと一緒にいたか……わか  
ってんのかぁー？」

響いたのは鈍い金属音。三原の拳が再びオレの顔面を捉えたのだ。  
またしても、暴風の膜が効果を発揮しなかった。脳を揺さぶられる  
一撃でバランスを崩し、オレは路上に倒れ込んだ。

杖が手から離れる。おにぎりの入ったコンビニの袋も地面に落ち、  
中からおにぎりがバラバラと飛び散ってしまった。

意識が揺らぎ目もぼやける中、オレは必死に見上げる。

三原はだるそうに手を腰に当て、一歩ずつ近づいてきた。

その調子で三原は右足でおにぎりを一個、踏みつぶしやがった……

……クソ野郎。

「特異点の世話はこっちでするからさあ、テメエはここで腐ってて  
くれねえか？ ハッ、いくらクズのテメエでも死んで腐って自然に  
戻れば、それなりに貢献するだろうしさ」

相変わらずムカつくクソ野郎だ……三原ア。

さっきの拳がどういう原理で、オレの暴風の膜を破ったかは知ら  
ねエ。だが、オレは軍隊が相手でも負けはしねエ超能力者だ。そし  
て三原は結局ただの引きこもりだ。いくら暴風の膜がヤツに通用し  
ないと言っても、こっちには遠距離攻撃の手段がまだいっぱいある

んだよ。

オレがこんなクソ野郎に負けるハズがねエ……このクソ野郎がオレに勝てるハズがねエ。

最終的にはオレが勝つ。クソガキをコイツに手渡すわけにもいかねエ。

あのクソガキに——これ以上の負担をかけるわけにはいかねエ。

「……ナメてんじゃ、ねエぞ……この、三下がああアアアああアあああつ！！」

轟！ 周囲の建物のガラスが割れ、樹木や看板なども空高くに吹っ飛んだ。

オレの能力は大気操作。<sup>エアオペレイション</sup>その名の通り、大気そのものを丸々操作できると言う使い勝手のいい強力な能力だ。それは当然——大気の流れであつてもだ。

オレを中心として竜巻が発生した。その風速は169メートル。このレベルの竜巻は非公式の発生報告のみしか存在せず、現実には実証されていないレベルだ。だが、オレにかかれば実証されていないレベルの嵐を起こすのも容易いことだ。

並のミサイル以上の威力を持つ竜巻は、徐々に三原に迫って行く。逃げ場はない。直接竜巻に触れなくとも、その周囲は暴風が吹き荒れ、普通の人間ならマトモに歩く事さえできないからだ。ぎゃは……いいぜ、そのまま三原を殺せ——！

「……はい残念賞」

——だが、三原が首から提げていた怪しげな笛を吹いた瞬間——  
竜巻は完全に消滅した。

「ッ!？」

信じられねエ事態が発生した。ちつくしょう……どういふ事なんだ。元々の大気の流れやその計算を間違ったか……いや、いくら弱体化したとは言え、その程度の計算ミスはありえねエ。

だとすると、やはり三原が首から提げている——あの笛のせいかな？

「まったく……一般人に迷惑だろ？ 一体誰がこの街を修理すると思ってるんだ——」

と、三原が言い放った瞬間。

こめかみに激しい衝撃を感じた。鈍い音に鈍い痛み。三原は白衣の中に自分の背丈の半分ほどの鉄パイプを隠し持っていた。オレは吹き飛ばされ、ガードレールに背中を強打する。

朦朧とする意識の中、三原が鉄パイプを捨てるシーンを目撃。

そんな事はどうでもいいが……何故だ。何故あのクソ野郎にこんな力が……？

まさか……あのクソ野郎オ……ッ！

「オマエ……どういう、能力を……ッ」

「あ？ ハッハハハハ！ あー違うってえーこれは超能力じゃねえよ。大体、なんでこの俺がそんなキモいもの覚えなきゃならねえんだ？ 別にさあ、あんなの使わなくなつてテメエ一人と戦うのは余裕なんですよおーハイ。いやあー最高に気分がいい、最強と謳われたテメエがゴミクズ同然だしな」

三原の挑発は気にするな……それより考えるんだ。超能力を使つてないとして、あの男はどうやってオレの暴風の膜を破ってきたか。あの笛が本当にオレの能力をかき消しやがったのか。

あのグローブ、機械か機械じゃねエかわからないが……オレの暴

風の膜を突き破った原因の一つかもしれない。まずはアレを破壊しよう。だが、それでも三原にはあの笛がある。引き千切るってのも手ではあるが、それだと三原自身は無事だ。

三原の事だ、それ以外にもオレを苦しめる策を講じているはずだろう。なら、笛を使われないようにヤツの身体から酸素を奪っちゃえば――。

「おオアッ！」

足の裏に風の力を働かせ、オレは地面からロケットのように飛び上がった。そのまま右腕をがむしゃらに振りまわす。カチン、と指先がグローブへ触れた。風の力を一転に集中させ、オレは左右のグローブをバラバラに砕いてやった。普通なら不可能な一撃だが――オレには簡単な仕事だ。

よし、暴風の膜を突き破る手を封じてやった。後は三原をブチ殺すのみ。

オレは左手を伸ばし、口のあたりでも掴むようにぐわっと手を大きく開く。

「はは、テメエをボコっていたのはグローブじゃねえ……はい残念っ！」

三原は言いながらくると周り、オレの腕を華麗に避ける。三原がオレに見せた顔は文字通り笑顔であった。それも狂った笑みである。

狂気に満ちた笑みを浮かべる三原は、左拳をオレの腹へ叩きこむ。何故か――暴風の膜が作用する事はなかった。

「いい加減ゴミ処理場にでも行けってんだよ、この産業廃棄物がアッ！」

今度はアップercut。

丁度くの字に曲がった身体に、下から拳が叩きこまれたのだ。突き上げられたオレの身体が面白いように飛んでいき、やがて仰向けの状態でアスファルトに落下する。

吐き気がする。視界もぐにやぐにや、口の中は血の味しかしねえ……。

三原は全くダメージを受けてねえってのに……クソツタレ。

「暴風の膜つつつてもよ。要はただの風じゃねえか……」

な、なに言ってやがんだこのクソ野郎……拳どころか、爆弾が降ってこようが一切ダメージを受けない鉄壁のガードだぞ。ただの風で扱えるような、そんな代物じゃねえってのに……。

「テメエはただ風の薄い膜を張り、それをテメエとは反対に吹かせているだけ、さらに膜として存在する為には循環が必要だろ。なら話は簡単でよお、風が膜の裏に戻る僅かな隙を突けばいいんだ」

なんだア……その無茶苦茶な理論は。

確かにオレは膜を存在させる為、風を循環させている。だからってなア……こんな科学者にその一点を突く事が出来るのかよ。

「こっちはテメエの考える事全て把握済みだあ。テメエがいくら策を講じようがそれは予想の範囲内ってワケなんだよ。さっきの不意打ちだってそうだア……テメエは無駄に頭を使うタイプだ。単純に俺を攻撃してりゃ、今頃オレは肉塊になっていたかもしれねえのに……ハア、勿体ねえなクソガキよお？」

クソツタレ……だが、今の三原は油断している。もうオレは動け



ねエとでも思っているのかもしれないねエゼ……だったら手は一つ。暴風の不意打ちをかましてやれば――、

「がアアッ！」

オレは暴風を起こそうとした。ぎゃは、さよなら三原ア……オマエの人生も今日で終わりにしてやるっつーの――と思った。

しかし、三原は咄嗟に笛を銜えてソレを吹く。

やはり笛の音で強制的に能力が無効化された。チッ、オレの読み通りかよ……。

「ああこの笛か？ コイツは特殊な音波で思考を妨害する笛だ。能力を使う為には複雑な計算が必要なのは、どんなカス能力者でも同じ事だ。つまり……ソイツが乱れちまえば何らかのバグが発生する。そういう事なんだよ……俺はテメエの思考を妨害したってわけだ」

と、言い終えた瞬間――三原の右足がオレの顔面に突き刺さってきた。まるで、噴火した火山から放たれた火山弾のように降ってくる三原の足。踏みつけられる度に、普通の神経をしているヤツなら聞きたくもないような鈍く、グロテスクな音が響いた。

揺らぐ視界に血飛沫が映る……多分、オレの血だろう。クソ……ひよっとして神経が麻痺でもしてきたのか、痛みすら感じなくなってきたがった……。

何秒経ったか、あるいは何分経ったかすらわからない。三原はようやく蹴りをやめた。

よく見ると、三原の顔にも血が確認できた。三原の血じゃねエ……絶対オレの血だ。

「いやあーテメエも体型の割にはタフなモンだ。中々死なねえな……まったく、モヤシはモヤシらしく早く死んでくれねえと、こっちの

ストレスがたまるとっの」

「く、そ……たれッ」

「まっ、死ぬ前にいい事を教えてやる。ほら、寝返ってあっちを見てみる」

三原が顔を向けたほうへ寝返り、顔だけを向けて見ると……その先に——数台の盗難車と数人の軍服姿の男達。そして——血塗れのミネットが男達に捕まっていた。

力が入っていない。意識がねエみたいだ……しかもどういう事なんだよ。身体のあるゆる所から血が滲み出ているじゃねエか。何で……あのガキが半殺し状態に……ッ？

「残念だけど、テメエが守りたかったモノはあのザマだ。つか、アレって生きてるんだろうか？ まあいい……アレが死んだところで特異点はまだ沢山いるんだ。次はアレだなア……アイツが死んでいたら木下暮葉ってヤツを狙ってみるか」

じゃあ何だ、あのガキの存在は別にどうでもいいって事か。特異点さえ捕まれば誰でも構わねエって事なのか。あのガキが死んだ所でどうとも思わねエのか。

ハッ……なんだかなア、あの学園はやっぱり狂っている。オレもそうだ、あの学園にいる間はなる気もなかったのに、いつの間にか血も涙もねエ人間になっていた。どう考えても、あの学園は存在自体が間違っているモンだ。

クソッタレ……そんな学園に殺されていた連中が、今度は学園の実験動物にされるってのか……ふざけんじゃねエぞ。

おそろく……ミネットはまだ生きている。僅かだが動いている気がする、つまりミネットはまだ呼吸をしているという事だ。だが、



る。

「どうします？」

「ああ、そうだな、テメエらの班はあのガキを捕えろ。残りは全員俺の下に残れ。ちっとこのガキが暴れまくったせいで難しくなったが、一応証拠隠滅はしておかねえとな。全く面倒な作業だ」

「了解しました。では、自分らは本命を捕まえてきます」

「オーケーオーケー、ハハ……相変わらず有能な部下だ。それに比べてこのガキは……」

言いながら、三原はオレの事を見下すように睨みつけてきた。

チツ……そのセリフはオレのセリフだ。部下は有能かもしれないが、結局オマエはただ命名して不貞腐れているだけの、腐れ親父じゃねエか。だが……オレはこの腐れ親父に負けた。

思い出ただけでも腹が立つ……だが、今のオレにはどうしようもねエ……。

「無駄に仕事ばっか増やしやがって。テメエは会社じゃすぐ解雇モンだろうな」

「黙れエ……クソツタレ、オマエもいつかは——オレのように……」

地獄に落ち……ぐっ、そ……息苦しい、喋る事すら難しい。

「最後まで言えなかった感じだが……まっ、テメエの存在価値からして、今程度の長さが言葉として丁度いい感じだな。さて、じゃあ

殺すけど——文句ナシな？」

三原が俺を殺そうと近づいてくる。足で頭を踏み潰すつもりか、三原は丸腰だ。

しかし丸腰の三原が今は凶器だ。この状態じゃ一切抵抗はできねエ……今のオレは食われるだけのただの豚野郎だ。クソ……リーネはどうした、銃でも持って来ねエのか？

いや、リーネは確かミネットと一緒にいたハズ。生死すらわからねエ。じゃあオレをボコボコにして特異点を救ったあの男は？

もう一度特異点を救わねエのか、ついでにオレを助けたりしねエ……いや、あの野郎は基本的に丸腰だし、武装して三原達の前には無力だ。それにミネットの存在を知らねエだろうし、そこにオレが関わっていると知れば——助けるのをやめるだろう。

オレはヤツにとつての敵であり、オレもヤツを目標としていた。ヤツさえ倒せば再び最強として君臨出来たハズだからだ。実際はただの科学者相手にこのザマだがなァ……。

まっ、それはどうでもいいとして……いくらあの野郎が善人でも、敵を助けるような馬鹿な真似はしねエだろう。所詮現実には現実……空想のように救いがあるわけがねエンだ。

それでも願ってやる……オレはどうなってもいい。死んでも構わねエ、一生馬鹿にして拷問されても文句は言わねエ……誰か、誰でもいい……ミネットを守ってくれ——。

「——ようやく見つけたのです不審者っ！」

その声で、三原は動きを止めた。三原は首を動かし後ろを向いた。オレも揺らぐ視界で三原の後ろを見る。人だ、人がいやがる。小柄で小動物のような体躯の日本刀を提げた少女だ。何処かで見た事がある……思い出せ、確かアイツの名前は——。

## 第158話、マッドサイエンティスト（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「……名前までそれっぽいな」

大吾「また出たよ作者の一種の病気が」

重原「ところで早川も背中からアレが……」

圭介「出るのか？」

大吾「出ないだろ」

重原「いや、出るかもね」

圭介「結局どっちだよ！ つーか黒翼って逆に俺が欲しい能力だよ！」

大吾「無理じゃね？」

重原「無理だね。圭介の戦闘スタイルは肉弾戦って決定事項だしさ」

圭介「……ひでえ」

## 第159話、非常事態

「まったく暮葉のヤツ、一体どこに行きやがったんだ？」

俺こと藤島圭介はあの後、さっさと家に帰った方がいいのだが……葵が帰ってきた後も暮葉は帰ってこなかった。ひよっとするとアルファ隊の仕事があるのかもしれないが、それでも暮葉がいないと寂しくて仕方がねえし、何より——晩御飯が葵の暗黒物質ダークマターになっちゃうじゃねえか。

味はいいとして、あんな見た目の悪いもの絶対に食いたくない。やっぱ、暮葉がつくる見た目も味も拔群の料理が食べたい。暮葉と何かお喋りでもしたい。

とにかく、そんな事を考えていた俺は必死に暮葉を探していた。だけどなあ……闇雲に探して見つかるわけがねえよな。だって暮葉だけ暮葉、もしアルファ隊の仕事だとしたら集合場所は異世界かもしれない。小坂の家にまだいるとしたら、俺は小坂の家がどこにあるかなんて知らねえぞ。携帯電話は繋がらねえし……ホントに何処にいるんだよ暮葉のヤツ。

とにかく早く連れて帰らねえと、晩御飯が暗黒物質ダークマターに——！

「……あれ？」

なんか知らねえけど、随分と風が強くなってきたな……。

さっきは雨が降っていたっぽいし、暮葉のヤツ傘持ってるかな。なんだかこの分だと嵐がきそうな感じだな。でもおかしいぞ、天気予報では一雨降ったら晴れるって……。

まあ、所詮は天気予報だ。あんなの外れる確率のほうが高いだろう。だけど勢い余って制服のまま出てきちゃったし、風が強くてちよっと肌寒い感じもするな。まあでも……鬱さで茹だるよりは動き

やすくてマシかもしれないな。

……しかし、今日は随分と人が少ないな。いや、全くいないじやねえか。

不気味だなあ。強風に人の気配ナシって……しかも季節はまだ夏、ホラー映画かよ。

「あーちよつと君、君、その君！」

その時、俺は何者かに呼び止められた。

振り返ると、そこには2人の警察官が厳しい視線を向けていた。ちよつて待て、俺は警察様に睨まれる悪い事をいつしたんだよ。まさか……コミケの時、俺は警察から逃げたけど俺は警察に顔を覚えられていて、ようやく喧嘩をしていた犯人を見つけたって感じか？やばい……停学だ。このまま警察に捕まったら停学……いや、退学かもしれないぞ。

とりあえず面倒事は起こすな。あくまで紳士的に接するんだ……。

「は、はい」

「君ダメじゃないか。今は国民保護法に基づき警報発令中だ。場所を教えて護衛もつけるから早く避難場所へ行きなさい」

「警報？ 何かあったんですか？」

「ああ君、テレビでもラジオでもいいから情報は収集しておきなさい。とにかく今、国籍不明の輩がこの街で暴れまくってるんだ。混乱に乗じて別な輩も来ているみたいだし、とにかく非常事態なんだ」

暮葉がいなくて、警察が出動するほどの非常事態……確信したぜ。どうやら古宇坂市に魔法使いが侵入して暴れているらしい。その魔



法使いがとんでもないバケモノで、だから警報を発令させて住民を逃がしたってわけか。だけど魔法使い関係ってんなら——逃げるわけにはいかねえな。

「ああ！　ちよつと君！」

「すみません、近くの家に妹がいるんです。妹を連れてから避難場所へ行きますんで！」

なーんて言うのは嘘、とりあえず葵にはメールで気を付けろと送っておこう。それじゃあ俺は魔法使いを探すとするか。暮葉だけに無理はさせねえ——俺も少しは役に立ちたい。守られるだけのお荷物じゃ嫌なんだよ。俺はほんの少しでも——暮葉の支えになりたいんだ。

だけど魔法使いってどこにいるんだよ。俺には魔力を感知できねえしなあ、とにかく何かで情報を集めて、被害に遭った地域に行つて魔法使いを探そう。

——と、思ったその時。

「お、わあっ？」

小さな何かと衝突した。それは冷たく濡れた少女であつた。水玉模様のワンピースを着用したツインテールの……えーつと、この感じは外国人か。しかもやたらと傷だらけだ。

とにかく、今は危険な状況らしいし……この子を避難所に届けたほうがいいのか？

「えーつと……君は？」

「助けて……」

少女は俺にしがみつき、弱々しい声で助けを求めてきた。

少女はまだ何かを言いたげである。俺はそれを聞こうと少女の顔を見て黙っていた。

そして、少女も俺を見上げて、

「圭介様、無理を言っているのはわかっているけど……お願い、あの人を助けてっ！」

「け、圭介様って……お前、ひょっとして……？」

その呼び方にピンと来た。普段、うちの居候にそう呼ばれているからだ。

「はい、ミネットはアルファ隊の一員だよ……っ」

「アルファ隊……暮葉の仲間かっ」

それは意外な出会いであった。

偶然出会った少女はアルファ隊の一員——暮葉の仲間であった。だけどアルファ隊の魔法使いが、こんなにボロボロになっているとは……やっぱり相手はバケモノ魔法使いのようだな。ちくしょう、やっぱり暮葉だけを戦わせるわけにはいかねえな。

——丁度その頃、古宇坂市役所4階の市長室。

古宇坂市長——正宗勘介が椅子から転げ落ちる。続くように女が激しく机を踏みつけ、女にビビる市長を見下していた。

女は西洋風の鎧を着た金髪碧目の少女で、黄金に輝く柄を持つ大剣を持っていた。

「なな、何者だ……貴女はっ」

正宗市長はビビりながらも彼女に問う。すると、彼女は大剣を指で触り、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべて、

「アンタが古宇坂市の市長ってワケエ？ きゃはは！ ホントにこの国の人間って何の力もないのねえ。アンタからは一切魔力も感じられないし、オマケに太ってて弱そうだわあ」

「そんな事は関係ない。そんな事より君はどここの誰なんだ……っ」

「赤の軍神……って言っても理解できないわよねえ？ カッコ良く言うならば私は侵略者ってトコかなア？」

「侵略者……だと？」

「そおそお、悪いケドオこの街しばらく私に貸してくれないカナ？」

「君が……突然このあたりを攻撃し始めた」

「そおーそおー私が指揮官。別働部隊もあるわよオ？」

言いながら、女は正宗市長の顎に指先を当て、顔を近づけた。レベルの高い容姿を持つ女に迫られる正宗市長。普通ならそれだけで興奮できる……のだが、この場合は全く出来なかった。

なんせ目の前の女は自分の街を破壊し、その上自分の命すら危うい状況だからだ。

正宗市長は腰を抜かしながらも、齒を食いしぼり、鋭い目つきで女を睨んでいた。

「抵抗してもムダよオ？ アンタ、ひよっとして私に勝てると思っ  
てんのオ？」

「……思わない。私自身は運動不足だし、君に勝てるとは思って  
ない……だが」

その時、外から不自然な物音が響いてきた。それに気付いた女は、  
正宗市長から離れて市長室の窓から駐車場を見下ろした。約200  
台の車を駐車できる駐車場には、かなりの数の迷彩柄の服を着た屈  
強な男達の他に、見飽きた警察の人々やその車両。

さらに、屈強な男達が乗ってきたと思われる複数の装甲車が集結  
していた。

この場面では警察よりも目立っている男達——それは陸上自衛隊  
である。

恐らく戦況を聞いた正宗市長が、県知事にでも頼んで自衛隊を出  
動させたのだろう。

治安出動してきた自衛隊は敵の情報を知っているようで、相手が  
どこかの軍隊でも多少は戦えそうな程の装備を持ってきた。

警察のほうも普通の警察ではなく、特殊急襲部隊SATと呼ばれる、ハ  
イジャックや重要施設占拠など、重大テロ事件への対処を主な任務  
とする特殊部隊であった。

それでも、彼らは歩兵戦闘を想定した装備しか持っていないよう  
だ。

そんな彼らを見下ろす女は——、

「流石に、散々治安維持の為に出てきた警察をブツ殺せば……いず  
れはこうなるわけね」

「ふ、フッフ……案ずるな。君が攻撃しなければ彼らも攻撃はしない……降参しろ」

正宗市長は笑っていた。あれだけの大戦力が集まれば、いくらこのバケモノみたいに強い女でも降参するだろうと思ったからだ。しかし、現実とはそこまで甘いものではない。

「へえ〜？ 中々面白い事してくれるわねエアンタ……ッ！」

「ぐ、おあ……ッ！」

女は正宗市長の腹を踏みつけた。汚物を吐きだした正宗市長はそのまま気絶する。

正宗市長が気絶したのを確認した女は、何を思ったのか窓から飛び降りる。建物の4階から落下すれば普通は無事なわけがない……が、どういうわけか女はふわり、とアツサリ着地した。

彼女を持ち上げ、減速させるような風が下から吹いたように……。

「貴様、市長はどうした!？」

SATの隊員の一人が、メガホンで女にそう呼びかけた。

その言葉を聞き、狂ったような笑みを浮かべた女は、

「はん、市長なら中でおねんね。死んじやいないだろうから安心しなさい」

「……ッ！」

自衛隊、SATの男達が一斉に銃口を女に向ける。

火花が散るような睨み合い。気迫は両方とも負けていない。

ただ、女は自衛隊やS A Tを威嚇するように、

「さあて……アンタ達随分本格的に武装してるけど……この風剣のシルフを楽しませてくれんのかしらァ!？」

言い放った瞬間——戦いの火蓋は切って落とされた。

## 第159話、非常事態（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「やったあああああああ！」

伊吹「な、なに喜んでんのよ？」

圭介「俺、久々に出番が来たよ……っ！」

伊吹「……」

圭介「主人公なのに久々に登場したぜ。ったく、この作品は誰かが活躍すると必ず誰かが空気になるよな。主人公なのに空気になるとは思わなかったぜ」

千早「わたし……今回ずっと空気です……っ」

葵「葵も全然活躍してないよっ！」

## 第160話、三原中隊（カンパニー）

「——ようやく見つけたのです不審者っ！」

オレはここで死ぬハズだった。三原に殺されるハズであつた……しかし、三原の動きは突然現れた少女の声によって封じられた。その結果、オレの寿命は僅かに伸びたようである。だけどこんな展開望んじやいなかったぜ。最悪だ……なんであんなチビが来やがったんだ。

確かあの女の名前は木下暮葉。実力自体は高エようだが……結局オレの敵だ。

しかも三原の狙う特異点の一人でもある。要するに……あのチビのご登場はオレにとつては障害が増えただけに過ぎない。

クソツタレ……まだ魔力は枯渇してねエな。能力自体は使えそうだ。最も、全身に刻まれた傷のせいで激しく痛む身体が言う事を聞けばの話だが……。

「おいおい……ありゃあひょつとして木下暮葉じゃねえか？」

「標的の一人ですね。捕えますか？」

「そうだなア……アレを捕えなくても何れさっきのガキが捕まるだろうが……まっ、研究材料が2人に増えるだけだ。ついでに捕まえておけ」

チッ、三原の野郎オ……余計な事をしやがるつもりか。あのチビは強いし、放っておいても自分の身イくらい自分で守りそうな気がする。だが……万が一だ。万が一、あのチビが三原達に負けて捕えられたとしよう。あのチビはオレの敵ではあるが、それでもミネツ



トの戦友だ。

要するに……あのチビが無事じゃなければ——ミネットは何らかの行動を起こす。

その行動とは何か、考えるまでもねエだろう。それともう一つ、ミネットは三原の別働部隊に追われているらしい。このままだと、確実にミネットは三原達に捕まるだろう。

つまりアレか……気に食わねエチビも含め、オレは2人を助ける必要があるのか。

チッ……あのチビまで助けるのは本当に気に食わねエ。だがいい機会だ。このままやられっ放しってンじゃ収まりがつかねエ。こちらで少しビビってもらおうか——三イ原ア！

「木下は相当手ごわい……という報告がございましたが？」

「あー心配すんな。いくらアレが手ごわいっつっても、数と武器の前じゃあ無力だろ」

とりあえず、三原達の殲滅は後回しだ……やっても勝てる見込みがない。もっと作戦を練ってから慎重に殺していくべきだろう。なら今やる事の一つ——とりあえず生き延びるか。

その為には逃げるしかねエ。ついでに木下ってチビも連れてなア……。

今後の行動方針が決まった所で、オレは目を見開き、右足に力を入れ始めた。

「あ？」

オレの僅かな動きに三原が反応した。いや、驚いていやがる。おそらくこの野郎はオレがまだ生きている事に驚いているんだろう。そりゃそうかもなア……今のオレは、放っておいても死にそうなほ

どボロボロだったからな。だが残念だったな三イ原……流石にそこまで華奢じゃねェんだよ。

「おおおおオアあぁッ！」

大地が揺れる程のボリュームで絶叫し、爪先を地面に押し付け、勢いよく飛び出す拍子にオレは風の操作を行った。荒い強風が吹き荒れ、三原の髪や白衣が不自然に靡いた。一方、能力を使って飛び出したオレは瞬間的に一台の盗難車へ飛び乗る。

車両中間部のドアは元々開いていた。なので乗車は比較的簡単であつた。問題は運転席に座っていた運転手をどう手中に収めるかだ。

——ハッ、いい事考えたぜ。

オレは右手で手刀を構え、その手刀をずぶり、と、男の身体に押し込んでやった。

「——ッ！」

生々しい感触を手に感じる。ハッ、相当奥まで刺さりやがったな……。

シート越しに背中を刺したのだが、流石と言うか……能力で加速させ、また能力で手を守りながら放った一撃は、シートなんてものをいとも簡単に貫通し、男の背中に突き刺さっていた。

気持ち悪イのも嫌だし、オレはゆっくりと右手を抜いた。

すると……シート越しからドロドロと、背中から鉄臭い液体が流れてきやがった。

「いいか、オレの言う事をよく聞け。オマエはもうすぐ死ぬ」

「……ッ」

「助かりたければ車を運転しろ。そうすりゃ命は助けてやる」

「……ツツ！」

男は僅かな時間で決断した。

そうだ……いい判断だ。男はいきなりアクセルを踏み、華麗なハンドル捌きで不安定ながらもUターンをさせながら、無事に車を発車させるという荒技をやったのけた。ぎゃは、クソムカつくほどいい腕してンじゃねエかよ。コイツが運転手なら——なんとかかなりそうだ。

しかも丁度いいコースを進んでやがる。丁度、車は木下の真横を通りそうであった。

だがその時——カンコンと、車両後部から物音が響いてきた。それはこの車に何発もの銃弾が撃ち込まれている証。それでも車は走り続けていた、丈夫な車で助かったア……。

あとは木下の回収だ。オレは邪魔くさい右側のドアをぶっ飛ばし、限界まで右手を伸ばして木下の二の腕をガシリ、と力強く握った。オレの腕力ではこんな小せエヤツですら、引き上げる事は出来ねエ。だったら、風を操作して木下を車内に放り込んでしまえばいい。

「もきゅううっ!？」

風の力で宙を舞う木下を、オレは無理やり車内へ釣り上げる。

木下はワケのわからねエ悲鳴を漏らした。

よし、木下救出成功。後は運転手に行き先を教えるだけだ。オレは木下に男の傷が見えねえように身体を位置を調節し、耳元に口を近づけて、

「いいか、古宇坂駅の近くにマンションがある。そこまでオレを運べ……後は近所の病院にでも転がりこめばオマエは助かる」

と、運転手に囁いた。  
運転手はゴクリと唾を飲み、静かに頷いた。

——その頃、三原達三原中隊<sup>カンパニ</sup>は。

「あーあーあー面倒臭エなホントに。おいアレだアレを持ってこい！」

「し、しかし運転手は——」

「関係ねえな。脱走兵にはキツイお灸を添える必要がある……それより早く持ってこい！」

「は、はい！」

たっく……優秀かと思えば手際の悪い部下だ。

俺こと三原寅彦はムカつく野郎を逃してしまった。特異点を2人も逃した上に、殺すべき対象まで逃げちまったじゃねえか。あームカつく、心底ムカつく事が起こりまくりやがったよ。  
だけどもあ……早川悠の悪運の良さもこれまでだ。

「チッ、遅えよテメェ！」

「ぐ、あ——あっ！」

あー手際が悪いムカつく。つーワケで俺はアレを持ってきた部下

を殴り飛ばし、強引にソレを奪い取った。部下に持って来させたアレとは——いわゆるパンツァーシュレックというヤツだ。

コイツはかつてドイツ国防軍が使用した、対戦車ロケット擲弾発射器で、裏ルートで現存するヤツを入手して量産したものだ。しばらく使ってなかったせいかな、埃だらけだが……まあ所詮は使い捨ての一撃必殺兵器。こんな汚れを気にしていたって何も始まらねえ。それよりさっさと撃たねえと、コイツの射程は201メートルしかねえんだ。

安全装置を解除し、後付けの照準器を除き組んだ。

俺達から逃げようとする車が照準器に映り込んだ。やれやれ……早川悠もやっぱり経験不足なガキンチョだな。車に乗った状態で全てを防げるワケがねえ、風の操作も出来ねえ。

「じゃ、天国や地獄があるか……その目で見て確かめるんだな」

そう言い、俺は引き金を絞ろうとした……その時だった。

何故か、照準器に怪しげな黒い何かが映り込んだ。

なんだ……とりあえず、一度照準器から目を離れた。すると——僅か数十メートル先に長い黒髪を持つ少女が佇んでいたのだ。

俺はその女に見覚えがある。確かこの女の名前は——。

「西園寺……雪乃」

「あら、貴方は誰なのかしら？ 私の家の近所で随分暴れているみたいだけれど？」

「……チッ」

まったく……邪魔しやがって。おかげで早川悠を取り逃がしちゃったぞ。まあ、とりあえず早川悠の代わりにあのクソアマを殺してお

くか。西園寺も学園を裏切ったヤツだからな。

と言うわけで、俺は西園寺を狙って引き金を引き、パンツァーシユレックでロケット弾をぶっ放してやった。ロケット弾は西園寺に直撃、赤い炎と黒い煙が西園寺を前方を包んだ。あらゆるものを破壊し焼き尽くす一撃。元々戦車を攻撃する為に開発されたヤツを人間に撃ち込んだ。

そんなものを喰らった人間がどうなるか——言うまでもない。

だが……煙が消えると人影が見えた。

その人影は西園寺。しなやかな黒髪が風に靡いており、どこにも傷はついていない。

無傷だと……チッ、まさか西園寺のヤツ。

「ひょっとして学園の関係者かしら？　だとしたら貴方馬鹿ね……学園の関係者なら私がどんな能力を使うか知っているハズよ」

「知ってるさ、テメエの事なら嫌ってほどにな……どうせ、テメエの事だから氷で装甲でも作って身を守ったんだろう。パンツァーシユレックに耐えられる程の装甲を瞬間的に作る……チッ、相変わらずテメエの能力は嫌なモンだ。早川悠の能力より嫌いかもしれねえな」

「そういう事よ。貴方達がどういう目的で動いているかは知らないわ。だけど……さっきの車には私の敵も乗っていたけど、一緒に私の友達も乗っていたのよね。だから——それを攻撃する貴方達を見過ごすわけにはいかないわ」

敵ってのはおそらく早川悠。俺の記憶が正しければ、西園寺雪乃は学園をやめる前に早川悠と戦ってボッコボコにされたハズだ。今でも西園寺雪乃は早川悠を敵だと思っているのだろう。

友達ってのは木下暮葉か。やれやれ……この街は面白いモンだ。

知らねえ間に知ってる奴らが独自の交友関係を築いているんだもんな。全くくだらねえ事をやってやがるぜ。じゃあ、俺はその関係をぶち壊す極悪人って所だな。

極悪人……まっ、少なくとも俺は善ではない。俺にピッタリのいい響きかもなあ。

とりあえず、笛を使えばヤツの能力を封じられるだろうが……あくまで、俺の対抗策は早川悠専用のものなのだ。あまり他の超能力者に有効だとは思えねえ。

ここは一旦、身を引いておくのが正しい判断だ。

さっさと特異点を探す必要がある、早川悠を見つけてブツ殺す必要もある。

「……殺せ。テメエら10人で西園寺雪乃を足止めしろ。その間に、俺は本隊と別荘へ移動する」

そう命ずると、カチャッと部下達は銃口を西園寺に向けた。

俺はパンツアーシュレックを投げ捨て、白いワンボックスカーに乗ろうとした……が。

完全に乗り込む前に、背後から西園寺に声をかけられた。

「貴方、逃げるのかしら？」

「どうしてもこの戦いたいのなら、鬼ごっこでテメエが鬼になって俺を見つかりゃいい」

それだけ言い残し、俺は車に乗り込んだ。

ドアを閉めると、運転手は一言も漏らさずに車を進めた。全く……この運転手は使えねえクソ共と違って優秀な部下だな。さて……コイツは少しまずいかもしれないな。

10人で西園寺を足止め出来るとは思えねえ。俺らは西園寺の敵

になった。いつから西園寺も俺ら別荘に襲撃してくる事だろう。今から対西園寺戦に備えて準備をするしかない。だがその前に学園から課された任務を遂行し、完璧に達成しねえとな。

それとついでに——早川悠の息の根を止めてやる。



第160話、三原中隊（カンパニー）（後書き）

・後書きトークコーナー！

野原「俺は三原が嫌いだ」

一方藤島「なんでだァ野オ原くん？」

野原「三原は俺とキャラが被ってんだよ！俺の出番奪ってんじやねえぞ！」

一方藤島「それを言ったらオレだって早川が嫌いだァ！キャラ被ってンじやねえぞ三下がァ！」

野原「俺のほうが三原より登場早かったんだ。わかってんのか、あァ！？」

一方藤島「オレも早川より早かったんだよ、このクソ野郎がァ！」

葵「どっちにしても、ただのパク（ry」

暮葉「葵さん、それを言ったらおしまいなのですよ」

伊吹「もうこれただの自虐ネタよね？何も面白くない自虐ネタだよね？」

## 第161話、最悪の生還方法

俺はミネット・ローランという少女と出会った。

彼女は暮葉と同じアルファ隊所属の異世界人で、水系統の魔法使いらしい。なんでも俺とは早川悠との戦いの時に会っているらしい。そういやあの時大量の水が降ってきたよな。もしかしてあの水はこの子の魔法によるものだったんだろうか。

ミネットは市内のマンションで3人暮らしだったらしいが、突然室内に怪しげな連中が押し掛けて襲われたらしい。気がつけば何処かの路上、そこにいたのは自分を襲った人達と、白衣を着た怖そうな雰囲気放つ中年の男。そして——ミネットと同じ部屋に暮らす知り合いであった。

早速俺はミネットに案内され、その現場に向かったのだが……。

「あれ？ あの人も白衣の男もいない、もうみんな行っちゃったのかな……？」

「ちょ、ちよっと待て……」

焦げ臭い匂いに無数の残骸。横転した死亡事故を起こしたように潰れた黒い車。意識を失って倒れている男達。ガラスが割れた建物の数々。そして、道路には生々しい血が付着していた。

何があったんだよ……これ、全部魔法使いの仕業か？

俺は壮絶な光景に一瞬言葉を失ったが、それでも頑張ってミネットに聞こうとした。

なんせ、彼女が俺の知る唯一の目撃者らしいからな。

「ん、なにに？」

「これって……魔法使いがやったのか？」

「多分違うよ。ミネット達を襲ってきた人達に魔力はなかった。多分相手は魔法使いじゃないと思うんだよ」

「魔法使いじゃ……ない？ それじゃあ一体誰が？」

「多分あの人。精一杯抵抗したんだと思うんだよ」

「抵抗って……何者だよお前の知り合いは？　もしかして同じアルファ隊の隊員か？」

「違うよ。あの人は魔法使いじゃなくて超能力者なんだよ」

「ちょ、超能力者って……佐井学園の人間か何かか？」

「うん、元々はね……」

元々佐井学園の人間だったって事は……まさか、ミネットが言っている、ここで倒れていた知り合いってのは明智か西園寺なんじゃ……？

思い出せ、確か明智は立派な日本屋敷に住んでいたハズだ。マンションなんかとは縁のない超お嬢様だったハズ。だけど俺は——西園寺の家は知らない。

まさか……西園寺が魔法使いではない、謎の奴らに襲われて……ッ！

「ちくしょ——ッ！？」

衝動的に走りだしそうになった俺を、いきなりミネットが俺を引

っ張ってきた。

俺とミネットは横転した車に隠れるように、静かに座りこんでいた。

……待て、なんで隠れるんだよ？

「どうしたんだよ？」

「来たよ、ミネット達を襲った人達が」

「……よし、任せろ」

相手が魔法使いじゃねえんなら楽勝だ。魔法っていう、喰らえば下手すりゃ死ぬような一撃を放って来ないんだからな。ちよつくら俺が言ってぶん殴ってやる。

そんな軽い気持ちで俺は——顔だけを出して連中の姿を確認する。

「げえっ、銃持ってるじゃねえか……っ」

数十メートル先で停車している数台のワンボックスカー。中からぞろぞろと、自衛隊でもどこの軍隊のものでもない戦闘服に身を包んだ、屈強な男達が降りてきやがった。その手には自動小銃アサルトライフルが握られている。多分、アレはソ連のAK-47ってヤツだろう。

安価かつ高威力で耐久性も高く操作や整備が簡単。よくゲリラやテロ組織が好んで使う為か人類史上最も人を殺した兵器……とも呼ばれている。

ちくしょう、素手か精々鉄パイプ程度だと思って甘く見ていた。

そういえば、寝ている奴らの近くにも銃が落ちているぞ。ああもう、もっと早くに気付いていればこんなに怖く感じる事もなかっただろうに。

どうしよう……撃たれた事はないけど、俺の身体……銃弾に耐え

られるだろうか？

しかも連中が持っているのはカラシニコフ自動小銃。おそらく、俺に向かって飛んでくる銃弾は一発ではないだろう。耐えられるかもしれないけど、耐えられる自信がねえ……。

「ど、どうするの？ ミネットは逃げる事を推奨するんだよ」

「くっそ……武器持ってるなんて卑怯じゃねえかよっ」

どうする。俺の近くに男が2人、気を失って倒れている。

その近くにはAK-47二挺がアスファルトに落ちている。さらに、男の身には拳銃やら手榴弾が装備されていた。なるほど……こっちにも少しは武器があるわけだ。なら、ミネットを逃がすくらいの時間は稼げるかもしれない。

俺は確かにただの学生だ。ド素人だし、戦争なんかとは一切関係のないヤツだ。

だけど——生憎こういうのに関する知識はある。実際に使った事はないから、上手く扱えるかどうかは別として、銃や手榴弾の扱い方程度なら知っている。

これさえあれば——抵抗出来るかもしれない。

「ミネット、危険だからそこの影に隠れていてくれ」

「えっ？ で、でも圭介様は……？」

「大丈夫、アイツらとは何とか戦えそうだ……っ」

本当は怖い。

小便を漏らしてしまいそうなほど怖い、足もガクガクと震えている。全身から嫌な汗だって噴き出ているよ。だけど……逃げるにし

たつて、アイツらに背を向けるのは危険だ。だったらここにある武器を使って、アイツらと頑張つて戦うしかねえだろ。

自信はねえけど……なんとかしてみせる——！

「ちょ、ちよつと！ ダメだよ圭介様、数と武器には勝てないんだよっ！？」

「いいから下がってろ、ここは俺に任せてくれ！」

その時、一斉に黒づくめの男達がこちらを見てきた。銃を構え、徐々に嫌な足音を立ててこちらに歩み寄ってくる。まずいな……俺らの事がバレたかもしれねえ。

こうなつた以上、余計に引き下がれねえな。とりあえず、俺は右手を伸ばしてカラシニコフ自動小銃を手に取る。これが安全装置……らしいけど、もう解除されているな。

これが引き金。弾は……まあ多分残っているだろう。幸い、気絶している男は替えの弾も持っているようだ。イザとなれば気絶男から弾を貰えばいいだろう。

よし——戦うぞ。

俺は勢いよく飛び出した。男達は姿を現した俺に反応するが——先制攻撃を仕掛けたのは俺のほうであつた。

「——、」

タタタタタ……ッ！

男達が引き金を引く前に、俺が引き金を引いて発砲した。銃弾は、生々しい音を立てて男達の体内へ侵入する。ド素人の俺の腕前では外れる弾の方が多かったが、それでも数人の黒づくめ達が血飛沫撒き散らして地面に倒れ込んでいった。

う、ぐ……なんか、すげえ罪悪感を感じる。俺……今人を殺して



……それから数十分後、戦闘は終わった。

銃を撃ち合い、時々手榴弾を投げつけ、最後は拳銃を使ってまで応戦し……辛うじて俺とミネットは生き延びる事に成功した。

それにしても……。

「一体、何の奇跡が起こったんだろうな……」

「わからないよ。でも……応急処置は完了だよ。後は病院へ送ればみんな助かると思う」

本当……奇跡だ。あれだけの事があって、なんと俺が撃ったヤツらは全員生きていた。

辛うじて生きていたんだ……中には今にも死にそうなヤツもいかが、そういったヤツらはミネットの回復魔法のおかげで一命を取り留めた。一応、救急車は呼んだ。病院で治療を受ければコイツらの命は助かるらしい。よかった……俺、まだ人殺しじゃ……ねえみたいだ。

「……っ」

「だ、大丈夫……圭介様？」

「……悪い、もう大丈夫だ」

そうは言うけど……ちくしょう、下手すりゃ今のでコイツらは死んでいた。いくら人殺しにならなかったとは言え、俺がやったのは立派な殺人未遂じゃねえか。

もう俺はダメかもしれない。誰も幸せに出来ない……人殺し予備軍のクズ野郎だ。



「……あ、あまり思いつめなくてもいいと思うんだよ？ し、仕方ないよ……相手だってミネツ達を殺す気だったんだよ？ 抵抗しなかったら……ミネツ達に殺されて——」

「お前はアルファ隊の一員で、こういうのに慣れてるからそんな事が言えるんだろ！」

「圭介様……っ」

「……ごめん。そうだよな……やらなきゃ俺達がやられてた……」

ホント……どうかしているぜ、俺。

結局俺はどうしたかったんだ。人殺しはしたくない、銃も向けたくない。だけどミネツを助けたかったのは事実。助ける為には生きる必要がある。生きる為には戦わなきゃいけない。コイツらと対等に戦う為には武器が必要だ。だけど武器を使えば人は死ぬ、ひどく傷つく。

ちつくしょう……やっぱ俺は、ヒーローとは程遠い人間だよ。

「——あの人は」

「……ん？」

「あの人は、無事なのかな……？」

あの人——多分それは西園寺の事だろう。

確証はない、そもそも西園寺が超能力者なのかすら怪しい。ただ、俺の知る限りで佐井学園に通っていた過去を持つ人物は2人、明智と西園寺だ。

明智はそもそもお嬢様で、ミネツ達とマンションで暮らしてい

た事はないハズだ。

「だけど西園寺は……？ アイツの家の事はサッパリわからない。だとすると、ミネットの言うあの人は、西園寺の事なのかもしれない。西園寺は本当に超能力者なのかもしれない。」

それに、その人がたとえ西園寺じゃなくても、俺はソイツを助きたい。

助けてミネットの笑顔を取り戻してやりたい。早くこんな騒動を終わらせて、暮葉の所に行って暮葉の事も助けてやりたい。

その思いを胸に、俺は真剣な表情を作って、

「絶対にソイツを助けてみせる」

「……え？」

「お前だってソイツに死なれたくないだろう？ だったら助けるしかねえだろ」

「う、うんっ」

「よし、行くぞ。ソイツを助ける為に今できる事をしよう」

地面に倒れるコイツらは……まあ、救急隊員に任せるとしよう。それよりも、俺達には今——やるべき事があるんだ。

## 第161話、最悪の生還方法（後書き）

・後書きトークコーナー！

生駒「クソ介がとうとう銃を撃った」

風紗「藤島の戦闘スタイルは素手なのに、ガツカリだぞっ」

生駒「まったく、これだからクソ介はっ！」

風紗「まあ、あの状況だったら作者も撃ってるかもしれないぞっ」

生駒「とにかくクソ介は殺人未遂の凶悪犯だ！ 早く逮捕されろよな！」

圭介「もうなんともいってくれ……っ」

大吾「小説内での話で散々言われる圭介カワイソス」

重原「みんな、無法地帯で殺されそうにでもならない限り銃は撃っちゃダメだよ！」

黒木「そもそもンなもん持ってねえよっ！ それより出番くれ出番！」

## 第162話、もう一人の思い

しかし、今日はやたらと風が強エな……オレの能力のせいとは思えねエ。オレが散々ボコボコにされた程度で、能力が暴走するとは思えねエ。この風は自然のものなのか……それとも三原のクソ野郎による演出なのか。ちったア気になるなア……この街で一体、何が起こってやがるんだ？

……ふとオレは隣を見る。荒れた椅子には木下が不機嫌そうに座っていた。そんな木下とオレは偶然にも——目と目が合ってしまった。

木下の表情はさらに曇った。さらに、露骨に嫌そうな態度で木下は、

「それで、なんで貴方がここにいますか？ 早川悠」

つと言ってきたのだ……まったく、それを言いてエのはこっちだつーの。

だからオレはお返しをするように、木下にこう言ってやった。

「オマエこそなんであの場に来やがった」

「拙者はアルファ隊の仕事なのです。あの人達が拙者の仲間を狙っているとわかったので」

「……チッ」

しかし……この車はどう見ても盗難車だ。警察が追ってきたっておかしくはねエのに今日は一体どうしたってんだ。警察車両を一切見かけねエな……三原の仕業、とは思えねエ。流石の三原や学園

も国家そのものを操作する事は出来ねエだろうからな。

もっと別の原因があるのかもしれないエが……チツ、考えても分からねエな。ちなみに今のオレは変換機を通常モードに戻している。理由は簡単、節約の為だ。

フルで戦うとしたら、残り4分も残ってねエだろう……チツ、三原との戦闘で随分と無駄に魔力を消費しちゃった。どこかで魔力を補充してもらわねエといけね。だが、肝心のミネットがここにいないじゃ魔力の補充が不可能だ。

クソツタレ……これから先、どう三原達と戦っていくか考える必要がある。

「早川悠、一応情報収集の為に聞いておくのです」

「何だア木下ア……」

「貴方とあの不審者集団はどういう関係なのですか？ 共謀者……なのですか？」

「オマエの目はどオなってる。アレのどこがオレの味方に見えるんだ？」

「もきゅ？ で、でもあの人たちは学園の関係者なのですよね？」

「科学者だア……オレらが使う超能力の研究をしているな」

「……どうして拙者達を潰していた貴方が、同じ学園の人達に狙われているのですか？」

「ふん……説明した所で、オマエが信じるとは思えねエ……オマエ、今すぐ帰れ」

「そ、それはダメなのです！ 決戦前にあの人達を潰さないと拙者達の身も危険なのです！」

「三原のクソ野郎はオレが潰す。オマエは決戦ってヤツでもしてきやがれエ」

「もきゅう、で、ですけど……っ」

「これはオレと三原の潰し合いだ。特異点は関係ねエ……だから三原はオレ一人で潰す」

これはもう決定事項なんだ。オレは三原を一人で潰す、特異点は巻き込まねエ。闇の世界でくたばるのはオレと三原だけで十分だ。そこにミネットだろうが木下のチビだろうが。関係ねエヤツを潰し合いには参加させねエ、巻き込ませもしねエ。

「おかしいのです……こんなの、拙者の知ってる貴方じゃないのです」

「勘違いすんじゃないねエ……オレの敵が三原なだけだ、深い意味は微塵もねエ」

「分かっているのです。拙者も貴方が嫌いなのです」

これでコイツがオレについてくる事はなくなった。思う存分一人で三原達相手に暴れられる状況を作れた。後はオレ次第だ、クソ……制限時間4分じゃ三原達をぶち殺せねエ。

早急に対策を講じる必要があるな。

……と、気がつけばもうマンションの前か。

「このあたりで止めろオ」

オレの命令で重傷を負った運転手は、静かに車を止めた……ぎゃは、丁度マンションの入り口の前じおねエか。いい位置に止めてくれたなコイツは。

サービスだア、コイツは特別に病院に行かせてやる。精々生き地獄を味わうがいい。

オレはまず車内で杖代わりを探し始める。杖は三原との戦いで失った、さっきの戦場跡に行けばまだあるかもしれねエが、今更取りに行く気はしねエ、それにまだ三原がいたら、そこでオレも運転手も木下も全滅だア。だったら何か代用品を探すかなさそうだ。

車内で代用できそうなのは……この散弾銃か。知らねエ型だ……アメリカ製でもイタリア製でもロシア製でもなさそうだ。コイツは学園で開発されたwikiにも乗ってねエようなヤツだな。

全長は1メートルを超えるくらい、鉄製銃床は伸縮可能……ハッ、丁度いい代物だ。

オレは散弾銃を持ち、木下と一緒に車から降り、その後オレだけ車内へ顔を覗かせ、

「オマエはこのまま病院へ行けエ……15分以内に行けばオマエは助かる」

「うう……か、解放して……くれんのか？」

「ああ？ ひよつとして殺して欲しかったかア？」

「ひ、い——！？」

男を軽く脅すと、荒々しく盗難車は夜の古宇坂へと消えて行った。

チツ……まあ、精々病院で痛がれエ。それであの男は多分助かる。別に殺しておいてもよかったがア木下もいるしな。今日のオレは特別紳士モードだア。

さて……それじゃありーネの無事でも確認しに行くか。

つかアイツ……三原達に襲撃されて生きてンだろオな……。

「……オマエも行け」

「早川悠、最後に問うのです……貴方は何をするつもりなのですか？」

「三原を潰すのはオレだ。オマエは気にせず決戦とやらをしてこいつつてンだ」

「……わかったのです。拙者は行かせてもらいます！」

「……チツ」

やっと鬱陶しいのが消えやがった……これで思う存分暴れられるってモンだ。それじゃあさっさと家に戻るとするか。まずはリーネの生死を確認しねエといけねエな。

生きていた場合は状況報告。死んでいたら……まアその時はその時だ。

オレはそんな事を考えながら、ロックを解除してミネツトの部屋へと向かった……。

そして、オレはマンションの8階——ミネツトの部屋に入った。室内は散々に荒らされていた。ドアには弾痕、さらに無理やり開けられた跡。台から落ちたテレビにも弾痕があり、テーブルは脚が



一本折れて傾いていた。カーテンは破られ、窓ガラスは全てが割られて床には破片が散乱していた。それだけじゃねエ、色々小物も散乱していて危険な状態だ。

そして荒された部屋の中に——リーネが倒れ込んでいた。

リーネに触れると……温かい。怪我をして出血はしているが、呼吸も安定しており命に別条はなさそうであった。どうするか……とりあえず、リーネのヤツを起こしてみるか。

「生きてンだろオリーネ。さっさと起きろオ……同居人が帰ったぞ」

「……っつ、あれ……悠ちゃん……なの？ ひどい怪我……なの、どうしたの……？」

「オレの怪我を気にする暇があったら、さっさと何があったか説明しろっつーの」

「襲われた……なの、変な……銃を持った黒い人達に……っ」

「チッ、予想通りの展開だ……三原のクソ野郎オ」

しかもリーネは元々何の関係もねエヤツだ……あのクソ共、このロリ巨乳までふざけた事に巻き込みやがって。こりゃあ本格的に——ブチ殺し確定だなア。

魔力の補充は……諦めるか。仕方ねエ、4分は三原の為に温存しておこう。

残りの雑魚共は極力バレず能力を使わず、一人一人確実に殺していくか。

そう決めたオレは散弾銃を杖代わりに立ちあがり、リーネに背を向けた、

「悠ちゃん……どこ、いくの……?」

刹那、ボロボロのリーネに呼び止められてしまった。

チツ……こっちには時間がねェんだ。さっさと三原を殺さねェと、色々と取り返しのつかねェ事になっちまう。だから今はこんなガキに構っている暇なんて――、

「ミネットちゃんが……連れ去られたの、悠ちゃん……ミネットちゃんを……っ」

「……生憎制限時間は残り4分。オレもクソガキも生きて帰れる保障はねェ」

「……だ、ったら……ボクとキス、して……」

「――あん?」

その言葉に思わず反応し、オレはリーネのほうへ振り返ってしまった。リーネは何故か嬉しそうに瞳を閉じて口元を歪ませ、その顔は僅かに紅潮していた。

このクソガキ2号……自分で何言ってるのか分かってンのかア。

「ボクにも魔力、あるから……全部は無理でも、5分程度なら補充……できそうなの……」

5分プラスしたって9分程度……4分と変わらねェ気もするが……まア、最初から4分で三原達に挑むよりはマシか。少しは楽に戦えるかもしれねェ。

だけどこのクソガキはいいのか。魔力を補充するってのはつまり――。

「オマエの覚悟は出来てンのかア？」

「覚悟なんていいの……お願い……ミネットちゃんを、助けて……なのっ」

「……チツ、クソガキ2号が」

後悔したって知らねエからな……オレは腰を降ろし、瞳を瞑って。

「――！」

頭を降ろして唇を近づけると――オレの唇とリーネの唇が触れ合った。

リーネの唇はミネットと比較すると……って、比較すンのってどうかと思うが、ミネットのそれより柔らかくて。吸い込まれるように……やっぱミネットよりは大人だな。

これで男がいねエらしい。全く信じられねエ話だが……どうせリーネの事だ。木下木葉と共にずっと研究所に籠っていたんだろう。それなら男がいなくても納得のいく話だ。つーかオレも人の事言えねエ立場だし、そもそもそう言う事にあまり興味もねエ。

オレが興味を持てば――下手すりゃ誰かを傷つける結果になる。

「……確かに、制限時間が9分に増えた」

ぶ、は――と、オレは唇をリーネの唇から話した。リーネの言う通りだ、制限時間が4分から9分に延長された。これで多少能力が使えるようになった。

それでもたったの9分。節約しねエとすぐに魔力は枯渇しちまうだろう。

「悠、ちゃん……必ず帰ってきてね……っ」

「善処しとく」

「……それ、ダメ政治家の……セリフなの」

「チッ、オマエは黙って安静にしてろ。何なら救急車を呼んでやろ  
オカ？」

「平気……なの。ボクは貧弱だけど……肉体再生の魔法を使えるの  
……っ」

「そオカ……クソ野郎には気をつけるンだな」

今のオレにはリーネをどうこう出来ねエ。下手すりゃリーネも同じ異世界人だ。また三原のクソ野郎に襲われるかもしれねエ。リーネも危険な状況下に置かれている。リーネもミネットも危険度は同じくらいかもしれねエ。ならどうやって2人を救うか……正解はあったの一つ。

早急に三原を——ブチ殺す事だ。

第162話、もう一人の思い（後書き）

後書きトークコーナー！

大吾「リア充死ね！」

重原「リア充死ね！」

黒木「リア充死ね！」

赤佐「リア充死ね！」

圭介「リア充死ね！」

全員「圭介死ね！」

圭介「な、なんでっ!?!」

※リア充だから……だと本人は自覚していないようである。

## 第163話、ほんの僅かな恩返し

ここは古宇坂市の自衛隊基地付近。

私——白藤早苗は自衛隊基地付近の畑に足を踏み入れていた。その理由は簡単、北部からとっても怪しい魔術師達が侵入してきたから。それはきつと……私もかつていた、サヴィエトという組織に所属する魔術師だと思う。あの人たちの目的はただ一つ——私の圭介<sup>ともだち</sup>を拘束すること。

圭介は私の初めての友達。一度裏切ったのに私を受け入れてくれた、強くて優しく心が広いとってもいい人。しかも圭介は私を守ってくれた……サヴィエトに怯える私を、あの悪魔のような場所から私を救いだしてくれた。

私は一度は圭介の敵だったのに……圭介に助けられて。多分、どれだけのお金をあげようがどれだけお礼を言おうが、すべての恩を返す事はできない。

それでも、ほんの僅かだとしても——圭介に恩返しをしたい。

「……っ」

携帯電話を開いて現在時刻を確認する。時刻は9時20分……もう、普通なら家に帰って晩御飯を食べ終え、お風呂にでも入っている時間だ。だけど……今日の私は帰れない。

現在、風剣のシルフの他にサヴィエトの別働部隊が日本国内に侵入。古宇坂市の北にある袖川浦市から侵入した別働部隊は機動隊と交戦。損耗50%に達した機動隊は後退したらしい。私はもうサヴィエトの人間ではないけど、でも、元々スパイをやっていた身。だから情報収集は得意中の得意。

合法的な手段から非合法的な手段まで、様々な手段で情報を収集する。それが、私が昔やっていたスパイ活動というもの。それにしてもサ

ヴィエト……もう赤の軍神を使うだなんて。

話くらいには聞いていた。まさか……警察や自衛隊を簡単に退ける実力を持つなんて……。

でも……だからこそ私は戦う必要がある。私もあの人たちと同じ魔術師。私程度の魔術師では風剣のシルフを止める事は不可能かもしれないけど、その別働部隊の殲滅程度なら――。

【ガ、グ、ギア、アアア――ッ】

不気味な笑い声が田園地帯に広がる。人外の声だ……映画に出てくるモンスターののように声にノイズが混じっている。風剣のシルフは裏ルートで入手した情報によれば、外見上はごく普通の人間の女性で風剣の名を持つだけに、大剣と風の魔術を利用した戦法をするだけど……100メートルほど先にぼんやりと、私の目に映る白い影は男だ。大剣なんてものは持っていないし、そもそも本当にただの人なのかすら怪しい存在。

それに……ここで使われている術式は風の術式じゃない。

「――、」

嫌な予感がした瞬間、私が立っていた場所から先端が尖った、鉄製の黒柱のようなものが一気に飛び出してきた。しつこく突き出てくる鉄の杭を、バックステップで回避していく。こうして攻撃を避けていきながら、私は推測を行っていた。

一旦攻撃が来なくなり、田園地帯が再び静かでのどかな風景……。

「……っ」

……には戻らなかった。

眼前には無数の先端が鋭い杭が飛び出し、処刑場のような残酷な

光景が広がっている。

鉄は錬金術によって錬成された即席の杭。その杭を遙か彼方の輝く星——恒星の光を観測し風剣のシルフとの戦闘で傷つき、動きが鈍った人々を串刺しにしてい……と。これは、錬金術に占星術という古代バビロニアで行われた大規模天体観測術式を足した魔術ね。本来攻撃用の魔術でないものを、錬金術と組み合わせる事によって、不特定多数の人間を串刺しにする残酷な魔術に変えてしまうだなんて……相手は中々のプロかな。

私の予想では、処刑場を作るだけが相手の攻撃手段ではない。おそらく、他にも鉄製の杭を星の力を利用して無差別に降らすとか。

「……ッ！」

たとえばこのように——。

今度は頭上から無数の鉄製の杭が落下してきた。瞬間的な天体観測、強度の高い鉄の錬成と観測結果による星と地上の座標指定、指定した場所への爆撃。これは、どう考えてもバックステップだけで避けられるとは思えない。仕方ない……私も魔術を使おうかな。

鉄製の杭爆撃から身を守る適当な手段として……やっぱりアレかな。私はその物がそこにあったと覚えているものを思い出し、脳内でとあるイメージを働かせた。

瞬間。

10メートルほどの高さの場所に、一台の大型トラックが現れた。宙を舞う大型トラックに次々と鉄製の杭が突き刺さっていくが、私はそんなシーンをいちいち楽しみはせず、出来る限り大型トラックから離れようとした。

やがて、20mは走った地点で背中に轟！ という轟音と衝撃が叩きつけられる。

爆風と熱波により、私の身体は何メートルも吹き飛ばされ、たまに近くにあった農機具を収容している木造の小屋に激突。バリバ



リと木造の壁を破壊し、最終的に私の身体は倉庫内にあった大きな農機具に激突してしまった。

「——う、あっ！」

あまりの衝撃に、普段は出さない声を勢いよく出してしまった。農機具に背中を強打し、その衝撃で肺の中から空気が排出される。呼吸することすらままならない状態になってしまった。

でも、このまま何もしなかったら繊細な術式の前に、私は串刺しにされてしまう。

それに、直撃しなかったよりはマシ……私は胸を左手で押さえ、ゆっくりと農機具に掴まりながら立ち上がった。手を離せば倒れてしまうそうだ。全身に鈍い痛みも走っている。圭介はきつと私がこういう事をしていると知れば、鬼のような形相になって怒るに違いない。

でも——私にはやめられない理由がある。

【キャ、シャ、アアア……ッ！】

私は瞬間移動テレポートという特殊な魔術を扱える。これは、異世界から来たという魔術師に習ったものなので、少なくともこの世界の魔術ではないと思う。

脳に記憶したものがその場所にあるとすれば、何でも自分の手元に呼び出す事が出来る便利な魔術なのだけど……欠点の一つ。同じモノが長い時間同じ場所にあるとは思えない。つまり他人の物を瞬間移動させようとすると、瞬間移動魔術自体は働いても何もこちらに転送されない。

だから、私はその欠点を補うため——ある程度の武器を一定の場所に固め、決して他人にバレないような場所に隠して来てから戦場に立っている。

この場合は……鍊金術は魔術師によるものとして、天体観測術式はどう考えても個人で扱えるものとは思えない。それなのに相手が一人と言う事は、どこかに魔術を働かせている核——すなわち中心点が存在しているハズ。

その中心点を探して破壊すれば——私にも勝ち目がある！

「——、」

私はとある場所に隠していた武器——携帯対戦車擲弾発射器を呼び出した。

以前、何処かのゲリラ組織が盗み出した安価で簡単で高威力なこの兵器。ソレを構えて安全装置を解除し、スコープ型の照準器を除きこんだ。

狙いは鉄製の杭によって作られた処刑場。全てを破壊する事は出来なくとも……相手の魔術師の視界を一時的に削ぐ事なら出来るハズ——。

「……、」

無造作に引き金を引くと、対戦車ロケット弾が発車された。一本の噴射煙を描いたロケット弾が処刑場に突き刺さる。ゴア！という大地を揺るがす轟音が炸裂した。畑の土が汚く飛び散った上に衝撃で直撃しなかった鉄製の杭も、次々とドミノ倒しのように倒れていった。

炸裂したロケット弾によって生み出されたのは、まさに灼熱の地獄世界。元々戦車を破壊する為に開発された兵器だけに、その威力は100点を付けたくなるほどに拔群だった。

さて、魔術師はきつと怯んでいる。今のうち魔術の中心核を探そう。

私は今度はトランポリンを眼前に瞬間移動させ、そこに勢いよく

飛び乗った。その上で跳躍を繰り返していくと、普段の数倍もの跳躍力を得る事に成功。

一番飛び上がった所で私は——自らを瞬間移動させた。

私の魔術は物の転送の他に、半径80メートル以内なら自分も指定座標まで瞬間移動が出来ると言う中途半端な力を持つ。移動するには遅すぎるし、小刻みに動くには範囲が広すぎる。

本当に中途半端な力……。

それでも、この状況では大いに役に立つ能力だよ。

一度ロケット弾で破壊したとは言え、まだ半分以上が残っている処刑場。さらに地上から対空砲火のように私を串刺しにしようと、無数の鉄製の杭が私を目がけて飛んでくる。

空中で僅かに身を振りながら、私は鉄製の杭を回避してゆく。そして——何十本もの杭の中に黄金に輝く不自然な杭を発見。

きっとアレが中心核、アレを破壊すれば——天体観測術式は消滅する！

「——ッ！！」

中心核を破壊するのに必要なモノ——250kg爆弾を転送させた。

私よりも重たい爆弾は私よりも早く、中心核へと落下してゆく。

そして、爆弾が鉄製の杭に触れた瞬間——ピカッ！と言う閃光を放ち、轟音と爆風が炸裂しあらゆる物を吹き飛ばし、破壊していった。

そんな破壊と絶望しかない空間で——。

——圭介、これで……恩返しできたかな？

……そんなことを思っていた私の意識は——ここで途切れてしまった。

第163話、ほんの僅かな恩返し（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「おお、やっぱり白藤はやれば出来るんじゃないか！」

白藤【……どう？】

圭介「すごいすごい、あんな無理ゲー臭するヤツに勝つなんて」

白藤【……撫でて？】

圭介「よしよし」

白藤【……好き、圭介】ワシャワシャ

暮葉「なんなのでしょう……白藤さんを無性に殺したいのです！」

伊吹「偶然ね、私もよ！」

## 第164話、破壊の嵐

黒づくめの武装集団との戦闘後、俺とミネットはとりあえず、ミネットの言うその人と同じ同居人の無事を確認すべく、古宇坂駅付近にあるマンションへと向かっていた。しかし、その途中で市役所のほうから物凄い爆音が轟いたので、一旦コースを外れて市役所のほうへと向かった。

古宇坂市の市役所はそこそ大きい。6階建ての白い近代的な建造物に、約200台もの車を収容できる駐車場。さらに2階建ての第2庁舎までもが存在する。

そんな立派な市役所だった……ハズだ。しかし俺とミネットが市役所を訪れた時には見るも無残な姿に変貌していた。

「な、これ……全部さっきの黒づくめ達が……？」

「それは多分ないかも。あの人達の装備でこの人達に勝てるとは思えないんだよ」

ミネットの言うこの人達とは、倒れている自衛隊や警察の人々であった。不自然に静かな自衛官に警察の特殊部隊か何かの人々。破壊された警察車両や自衛隊のトラック、装甲車。そして俺が最初に見た市役所の建物も全てのガラスが割られ、オマケに玄関部分は大胆に破壊されていた。

「すみません！ 大丈夫ですか！？」

俺は倒れている一人の自衛官に声を掛け、顔を覗き込んでみる。目立った外傷はなく呼吸も一応してはいる。意識だけがないようだ……にしても不自然なやられ方だな。なんでトラックや装甲車は粉

々に破壊されているのに、どの人も目立った外傷ナシで生きているんだ。

気だけを失っている。やっぱりさっきの黒づくめ達以外にも、古宇坂に侵入したヤツってのがいるんじゃないか？

それもこんな事が出来るんだ。ソイツは普通のヤツじゃなくて――魔法使い。

ちくしょう、黒づくめ達も厄介な相手だけど、魔法使いはそれ以上で厄介だ。なんたって対人戦での戦闘力は魔法使いの方が圧倒的に上だからな。

しかも今度の相手は何人か知らねえが、警察や自衛隊を壊滅させるようなバケモノ。

つまり暮葉は、この人達を倒したバケモノを倒す為に……。

「ハッアゝイ！ 凄まじい光景に言葉も出ないのかな？」

突然響いた謎の声。

甲高さからおそらくは女のもの。俺はその声が何処から聞こえたものかを知る為、キョロキョロと左右に顔を振り、万が一の事を考えて空も見上げていた。

「圭介様！ あっちだよ！」

「……ッ！」

俺はミネットに言われた方法――後ろを向いた。  
奇妙な女がいた。

服装は、胸部と腰周りを覆うブリガンダイン風の鎧に見える。それは中世の戦乱を駆けていた軽装兵のようでもあった。しなやかな金色の髪を左右におさげにし、縦ロールにしている。背丈もそれほど高くは無いのでいい所育ちのお嬢様のようなであった。

容姿はヒロインになれそうなほどに可愛い。それなのに……女の子の手には不似合いすぎる大剣が握られていた。

刃は白銀色に輝いており、通常地味なハズの柄まで黄金に輝いていた。

「……っ」

あんなのに攻撃されたら痛いじゃ済まされない。身体は真っ二つになるか、切れ味が悪いとしても肋骨や背骨が完全に逝ってしまうだろう。

だけど……まだ銃を持っていないだけマシだ。剣を持っているくらいなら……過去に経験があるから何かなるかもしれない。

「誰だよ……てめえはっ」

「赤の軍神——風剣のシルフ」

「風剣のシルフ……？ 貴女が噂のシルフなんだね」

「そおーよそちらのお子様は御存知だったかな？」

「てめえ……サヴィエトか！」

「やっと目標発見ね……っわけでさっさと捕まりな藤島圭介！」

女が大剣を構えた、全てを潰すような大剣を。

俺を捕まえるって……冗談じゃねえぞ。ふざけんな、あんなので攻撃されたら捕まる前に死にまうっの。そもそも連中が俺を捕えるのにここまでする理由って、一体なんなんだよ。

それにあのシルフってヤツ……油断は出来ねえぞ。もしこのシル



フが、自衛隊や警察を壊滅させた張本人だっけ言うんなら、攻撃を当てる前に瞬殺されてしまうかもしれないねえ。たったり一人で治安維持や日本の国防を担う人達と、真正面から戦って勝つような女……。クソッ、今そんな事考えるなよ……。怖くなるだけじゃねえか。

「大丈夫よ怖がらなくても。一撃で気絶させてやるからさあ……。オラァ！」

シルフは両手で柄を握り、力を振り絞って持っていた大剣を無造作に振った。

横殴りの一撃だったが、目標である俺とは5メートル以上も離れている上に、振った先にも何もないので大剣は当然空振り。今の動作に意味があるとは思えなかった。ただ、あれだけ重たいモノを無意味に振り回しただけで、体力を無駄に使っちゃうような無駄に動きにしか見えなかった。

しかし――、

「――が、あッ!？」

瞬間。

腹部に感じた鈍い痛み。そして胃の中込み上げてくる吐き気。何かが俺の腹部へ叩きこまれたようである。ソレは殴られたような感触に近い気がした。しかし、その一撃の威力と言うのがやたらと強烈なモノで、こうして立ち続けている事そのものが辛い。

立っているのが限界であった……。

「へえ、流石は噂の身体。今のを喰らって意識を失わないんだねえ」  
「？」

「く、そ……ッ！」

「圭介様っ！　今のは風の魔法の一種だよっ！」

俺を心配したのか、シルフが放った攻撃の正体を証ながら、ミネツトが駆け寄ってきた。

ミネツトは一応アルファ隊らしく、水系統の魔法を使えるらしいが……ダメだ、こんな小さな女の子をあんな危険なヤツと戦わせるワケにはいけない。

「来るな、ミネツト！」

叫んだ瞬間、シルフがさらに大剣を振り、ミネツト曰く風の魔法の一種という、サッカーボールと同じくらいの大きさの渦巻く何かを放ってきた。

破壊の嵐は俺……ではなく、ミネツトを目がけて放たれた。おそらく、シルフは俺を捕まえるのに邪魔であるミネツトを始末しようとしたのだろう。

俺は咄嗟にミネツトを押し倒し、今の一撃をギリギリで回避してみせる。背中に僅かに渦巻く塊から僅かに漏れている風を感じた。咄嗟にソレを見るべく左を向くと、ソレは無傷だったパトカーに命中し、パトカーの運転席のドアに大きな穴が開いてしまった。

俺はさっき、パトカーをブツ壊せるような攻撃を喰らって……耐えたのか。

一見ショボい攻撃だけど、威力は凄まじいぞアレ。

それにしても流石は俺の身体……。

あんなのに耐えちまったんだ。俺って本当に人外かもしれない。俺はミネツトを守るように立ち上がり、シルフの事を睨んだ。

「小さい子供を守りながら戦うって、アンタ中々やんのね」

「見ただろ、俺はてめえらについて行くつもりはねえ。さっさと諦めて帰ってくれ」

「私も一般人の生活をぶち壊すのは趣味じゃないし、そうしてもいいんだケドオ……」

「……ッ！」

言いながらシルフが大剣をゆっくり振り上げたので、俺は反射的に身構える。

「そういうワケにもいかなのが仕事なのよねえーっ！」

俺が身構えたのは正しい判断であった。

予想通り、シルフは狂気じみた風に笑いながら、大剣を一気に振り下ろし、それに伴って破壊の嵐が渦巻き始めた。野球ボール並の速度で迫ってくる塊。俺はソレに——左拳を叩きこんだ。

メリメリと、拳が嫌な音を立てたものの、風の塊はその衝撃で碎け散ったようだ。

「身体が丈夫だとそんな事も出来んのね？     アンタ本当に楽しいわあっ！」

ちくしょう……左拳が痛え。拳が潰れるかと思った……やっぱ避けるべきだな。しかもシルフのヤツはまだ本気を出していない。アレが本気なら——自衛隊に勝てるハズがない。おそらくシルフはまだ実力を秘めている。俺を殺さないように本気を出していない。

最大限に手を抜き、極力俺を傷つけず一撃で沈めようとしている。どうする……そもそも一人で勝てるか微妙だぞ。ミネットは戦力になるか不明、出来る事ならこの子を戦わせたくない。そうだ……

暮葉だ、暮葉を呼ぼう。俺はアイツにだって出来れば戦って欲しくないんだけど、それでも暮葉はアルファ隊に10人もいない特隊員。何より暮葉はコイツを追っているんじゃないか？

だとしたら……よし、決めた。

「ミネット、行ってくれ！」

「え、で、でも……っ」

「お前もアルファ隊なら暮葉を知っているだろ。ソイツを呼んできてくれ！」

「き、木下先輩をっ？」

「頼む！ 助けを呼んできてくれ！」

と、叫んだその時。そんな事をさせるかと言う勢いでシルフが大剣を振り、渦巻く破壊の嵐を巻き起こした。塊が俺とミネットを捉えて一直線に突き進む。

どうしよう、何かいい物は……と、探していたその時、あるモノが目に入る。

盾。

おそらく警察のものであろう。俺はたまたま視界に入った盾を咄嗟に掴み、それをぐわんっと思いつき投げつけてやった。盾と風の塊が触れ合った瞬間——両方とも粉々に砕け散った。

しかしその衝撃のせいなのか、暴風が巻き起こり俺達2人を吹き飛ばす。俺は背中を地面に強く叩きつけてしまい、数秒は痛みで立ち上がれなかった。

それでもミネットの無事を確認すべく、俺はシルフよりも先にミネットの方を向く。

ミネットは痛がりながらも立ち上がり、小さな足で暗闇に消えていった……って、アイツ携帯電話落として拾わずに行っちゃった。イザと言う時に誰かと連絡取れないんじゃない……仕方ねえから後で俺が回収して、後で会ったら返してあげよう。

「アンタ、あの子に助けを呼びに行ってもらったの？」

「どうかな？ どっちにしても今は俺とてめえの2人っきりだ」

「そうかい……じゃ、その助っ人が泣くような光景を作ってやるわよっ！」

「そんな事はさせねえ。この場でてめえをぶっ倒して——」

「ぐ、ばあっ！ ゲッホ！ ごぼっ！」

「……え？」

ごぼあ、と言う水っぽい音が響いた。恐る恐る下を見てみると、アスファルトに鮮血の水たまりがあった。水たまりにぼちゃぼちゃと、真っ赤な血の塊が水滴のように落ちている。その水滴が何処から降ってきたものかを確認する為、俺は視線をゆっくり上へ向けていく。

血の塊は——シルフの口から吐かれたものであった。

いきなり吐血しやがって一体何だ。コイツ……もしかして持病でも持ってるのか？

……だとしたら幸運だ。コイツには悪いが勝つチャンスだぜ、さっさとコイツを倒して警察に引き渡す前に病院送りにしてやるよ。

「こ、これは……ッ！ 特定の魔力を持つ者を圧迫する……」

「ハッ、今すぐ病院送りにしてやるよ！」

「く、がアアアああアああッ！」

俺は大地に足を踏みつけて前へ跳躍し、シルフをぶん殴ってやろうと思った……まさにその時の出来事である。突然シルフが大剣を大きく振りまわし、風速60メートルは超えているであろう局地的な嵐を巻き起こしたのだ。あらゆるものを破壊し尽くす、猛烈な台風並の暴風。

俺はソレに耐えられず、吹っ飛ばされてしまった。

しかし、咄嗟に標識か何かのガシッと掴まった。これで遠くへは飛ばされない……。

「原因を調べなきゃ、テメエのような小物は後回しだっ！」

シルフはそんな事を叫びながら、風の中へ消えていった。

やがて嵐は収まった……シルフの姿は既になく、残っているのは俺と、破壊された車両と気を失っている自衛官や警察の特殊部隊の人々のみであった。

風剣のシルフ……結局、アイツはなんだったんだ……？

## 第164話、破壊の嵐（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「結局アイツ、強いのか弱いのかよくわからないキャラだったわね」

千早「で、でも……まだ本気は出していないみたい……ですよ？」

風紗「微妙な所だな。まあ藤島の事だからなんとかなるんじゃないか？」

伊吹「圭介だしね」

千早「先輩……ですからねっ」

圭介「なんだよ俺だからって!？」

## 第165話、血の海

オレこと早川悠はミネットやリーネを襲いやがった三原、そして、その三原が率いていると言う三原中隊<sup>カンパニ</sup>をブツ潰す為、まずは三原中隊<sup>カンパニ</sup>のほうを潰す事にした。

ここは古宇坂市内にある私立高校の校舎。この時間の校舎には基本、用務員のオッチャンすらいらないらしい。そこに付け込んで連中は学校を、夜間限定の秘密基地として利用している。オレは体育館側の扉から校内へ侵入し、一通り校内の視察を行った。

どうやら、体育館に20人、校舎内には確認しただけで5人の連中がいた。やっぱりオレの読み通りここをアジトにしていたか。さて、どう潰しにかかろうか……？

とりあえず一人は生かしておこう。三原のクソ野郎の居場所が知りたい。元々それを知る為に少ない魔力を消費してまで、ここにいる全員を相手にしようとしていたんだからなァ。さっさと1人を除いて片付けて、三原のクソ野郎の居場所を知ったら……ぎゃは、楽しみだなァ。

さて……能力を節約しながらどう殺していくか……。

「本当なの？」

「ああ、誰かが目撃したらしい。ここに早川が侵入した」

「だ、大丈夫なのかしら……？」

「心配すんな。今のアイツの能力は時間制限付きだ。もうタイムオーバーだろ」

「お、恐れる事はない……のね？」



「ああ、見つけたら蜂の巣にしてやろう」

さっさと行動しねエはまずいかもしれないな。既に連中、オレが校舎に侵入した事に気付いているらしい。出来れば能力は使いたくない。コイツは……三原との戦いに温存したい。

まずは……体育館で待機している大人数だ。連中を殺しにかかるか。

オレはその為だけに——知らない学校の体育館へと向かった。

それから数十分後、オレは女子更衣室から体育館の様子を覗っていた。体育館への侵入ルートは三つほどあり、一つは校舎の中から入るルート。もう一つは直接体育館に入るルート。最後に体育館裏から入るルートが存在している。

オレはその中の最も警備が手薄かつ、直接体育館に入るわけではない裏ルートから侵入し、階段を上って女子更衣室へと移動した。

変態紳士どもオ……夜なら女子更衣室の侵入は割と簡単だ。最も、女子の衣服なんてモノは一切ねエがな……とにかく、ここからカーテンを開けて見下ろす体育館の絶景は最高だ。

連中がぼんやりと、懐中電灯か何かを付けているお陰で……連中の姿が丸見えだ。

「……ハッ、いい事思いついたぜエ……地獄を見せてやろオか？」

オレは女子更衣室の窓を開け、散弾銃の銃口をクソ野郎共に向けてる。照準器を除きこんで照準をクソ野郎の一人——女と思われるヤツに合わせた。

そしてオレは笑いながら——引き金を引いた。一発の銃弾は女の後頭部を貫く。暗くて詳しい状況はわからねエが、ぐちゃり、と生

々しい音が炸裂した。

それからややしばらくし、同じクソ野郎共の悲鳴が聞こえてきた。ぎゃ、は……騒いじまって面白エ。メンタル弱エ癖に戦闘員になるなよクソ野郎共オ。

さて、次の行動に移るか。オレは次の標的——今度は男に金具を投げつけた。女子のいたずらで取れたどこかの部品だろう。女子更衣室にあった金具である。

オレの腕力では強くは投げられねエ。だが……それでいい。カツン、と緊張しているヤツの肩に当てるだけで十分なんだよ。

「ぎゃああああああああああああああああああっ！」

大地が揺らぐほどの叫び声をあげた男。

次の瞬間。

複数の銃声と叫び声、そして女子更衣室にまで鉄の臭いが充満してきた。

騒動が収まった後、オレは下に降りて状況の確認を行った。

ひでエモンだ……死体はグチャグチャ。中には顔が原型をとどめていねエやつ、手足が吹き飛んでもがき苦しんでいるヤツもいた。まだ生きてるヤツもいる見てエだな……。

「う、あ……お前……早川ア……」

そんなうめき声も聞こえるが、オレはその声をスルーしてやった。どうせ、ここまでボロボロになっちまえば、病院に送ったって間に合わねエだろう。そもそもコイツらを助ける気など、オレにはこれっぽちもねエしなア。あるのは殲滅すると言う気持ちのみ……。

三原中隊……さつき病院へ逃がしたヤツはどうでもいいとして、  
その他は生かさねエ。

全員ぶち殺して地獄に送る……あのガキを助ける為なら、全てを  
捨てて戦ってやる。

……さて、あとは校舎の5人だな。その残りのクソ共を始末して  
行くとするかア。

さらに15分後、オレは校舎内を静かに歩いていた。聞こえるの  
は僅かな靴音、そして杖代わりに使っている銃が床をつく音のみ。  
それが、連中にとっては恐ろしく聞こえるのかもなア。

既にオレは15分の間に、3人のクソ野郎を殺した。

残り2人、1人は三原のクソ野郎の居場所を知る為に生かすとし  
て……どうやってその1人をオレに従わせようか。絶対オレに服従  
させる方法……そうだ、いい方法を思いついた。

……ぎゃは、丁度カツカツと靴音が聞こえ始めた。ソイツに犠牲  
になってもらおう。

オレは教室に入り、ソイツが来るのを待っていた。ここは家庭科  
室……なら、家庭科室らしい殺し方をしてやろうかア。

……来た来た、じゃあ人間料理……始めるとしますかア。

まずは動けなくする。その辺で売ってる肉だって最初は動物、今  
回もそれと同じだ。

だから、オレはソイツの姿が見えた時——引き金を引いた。

「ぎ、はっ！」

相手は女か……被弾箇所は横腹。撃たれた女は倒れ込み、持って  
いたサブマシンガンも激痛で持っていられなくなったようで、手放  
してしまったようだ。

馬鹿な女だ。戦場で武器を手放すとは……オレはその女の頭に銃口を突き付ける。

「な、何の真似よ……早川悠……っ」

「何の真似エ？ ハッ……殺し屋ごっこだア」

引き金を引いた。

発砲音と同時に生々しい嫌な音が炸裂する。ベチャベチャベチャ、と、勢いよくオレの顔に汚らわしい何かが飛んできやがった。その中の一つ、口元についたモノをペロリと舐める。

どろりと濃厚……頭の中に詰まってるモンの味だな。

「オマエの味噌うめエな……さて、次のエモノはどこだア？」

この死体なら十分脅しに使える。

……それから5分ほど経過して、カツカツという足音が聞こえ始めた。ぎゃは、どうやら最後の一人が来やがったようだ。地獄のような光景が広がっているとも知らずにオ。最後の一人もサブマシンガンを構えており、性別は……体格的に男だな。まアそんな事はどうでもいい。

その時、さっきまで順調だった男の動きがピタリと止まった。

その理由は言うまでもない……。

オレは動きの止まった男の背後へ回り、男の背中に銃口を突き付ける。

「オマエは今からオレのパシリだア……言う事聞かねエと、背中撃って家庭科室にある包丁でオマエの肉を切刻む」

「ひいっ!？」

男は悲鳴を上げ、サブマシンガンを床に落とし、携帯していた手榴弾や拳銃を捨てる。

やがて男は、荒々しい呼吸でゆっくりと手を上げる。

ぎゃは、制圧完了って所だなァ……捕虜も一人捕えたしよォ。段々、オレに有利な方向で話が進んできやがったな。さてエ……三原の居場所を聞き出すとするかァ。

## 第165話、血の海（後書き）

後書きトークコーナー！

暮葉「うわあ……」

伊吹「……」

凧紗「……」

千早「……っ」

葵「……っ」

あかり「千早、無理すんなよなっ！」

圭介「えっ！？ みんなのこの反応なにっ！？」

※ちよいぐロくてごめんなさい。

## 第166話、殺人鬼と少女の決意

オレは再び古宇坂駅前に戻ってきた。その後、オレは三原の居場所を聞き出し、用無しになった捕虜をブツ殺してやった。その後は地獄のショーの再開。カンパニー三原中隊の連中がいる場所を捜し出しては連中を殺しまくり、既に90人以上のクソ野郎共を肉塊に変えた。

血の雨が古宇坂中に降り注いだ。にも拘らず、何故オレは警察にマークされない。

これだけ街中で散々暴れまくれば、ニュースになったって不思議じゃねエ。警察が犯人探しをやり始めたって不思議じゃねエ。なのに、そう言った動きが全く見られねエ。

どういう事だ……そう言えば街がやたら静かだ。もっと人がいるかと思っただが、どういうわけか今日の古宇坂には人っ子一人居やしねエ……。

ま、その方が連中を殺しやすいがな。

「――、」

オレはとある居酒屋の扉に凭れかかっていた。雨が再び降り始め、大きな雨粒がオレの身体を叩いてきやがる。そんな中、オレは随分と懐かしい気分浸っていた。

久しぶりに人を殺した。

ぐちゃぐちゃに、めっちゃくちゃに、泣き叫ぶ人の声を聞いても何とも思わず、ただひたすら助けを求める連中を殺しまくった。そこに少しの優しさもなく、甘さもなく、あるのは殺意という残酷な感情のみであった。それ以外の感情は戦う前に捨ててきた。

つまりオレは戻ったのだ。ミネットと出会う前のオレに――。

「……チツ」

オレはもう光の道には帰れねエ……トコトン闇に走るしか道は残ってねエ。下手すりゃ闇に走る道すら残ってねエ、死という道しか残されていねエかもしれない。だが……もしオレに死の道しか残ってねエとするなら、そこに三原のクソ野郎も巻き込んでやる。

ここでオレは、首筋の魔力エネルギー変換機に手を触れた。残り4分。いや、4分も残ってねエかもしれない。ちよつと能力を使えばすぐに魔力は枯渇する。

90人を殺すのに能力を使い過ぎた。ここから先は無駄に能力は使えねエ。

出来れば三原中隊全員を殺したかったが、そういうワケにもいかねエな。三原を潰せば三原中隊は自然崩壊するかもしれない。なんせ、あのクソ野郎は恐怖と力のみで隊員どもを押さえつけているらしいのだ。その恐怖が消えれば隊員は自由。

つまり……自由を望む隊員は自然と部隊から離れるワケだ。なら次に潰すのは三原本人。いや待て……その前にやるべき事が一つ残っている。

そこに行けば、残りのクソ野郎共がいるかもしれないねエ。そこにいないヤツは、三原本人のボディガードをしているのだろう。

つまり——次に行く場所で大半を叩き潰せるかもしれないねエのだ。

「……もう何もいらねエ。血があればいい……ッ」

そう呟きながら、散弾銃を杖代わりにしてよろよろと立ちあがった。オレはもう“最強”の超能力者に戻ったのだ。今更引き返しても一般人には戻れねエ。

なら、全てを捨ててでも三原をブツ殺す。一人で騒動を解決してみせる。

あのがきだけでも……闇の中から連れ出す……ッ！



私——西園寺雪乃は古宇坂総合病院と言う大きな病院にいた。その理由は、別に誰かのお見舞いというわけではなく、ここに侵入した10人に警告をする為。さっき私はその侵入者の仲間の人からお話を聞いたのだけど、どうもこの騒動には早川悠が関わっているらしいわ。

そして、その早川悠は次々と侵入者たちを殺害しているらしい。私に彼を止める権利もなければ実力もないのだけど、出来れば死体の数を増やしたくはないわね。

と、言うわけで私は警告の為——病院内へ入ったのだけど……。

「貴様、何者だ？」

「まさか……西園寺雪乃か？」

手厚い歓迎ね……私が現れた瞬間、黒ずくめの侵入者達は銃を向けてきた。人に銃を向けるだなんて失礼じゃないかしら。まあそれはどうでもいいとして、早く警告をしましょう。

「警戒しなくていいわ。私は貴方達に敵意はない、今回は警告しに来ただけよ」

「なんだと……？」

「手短に言うわね。三原って言ったかしらあの男？ あの人の下を離れて今すぐ逃げたほうがいいわ。今なら私が貴方達を護衛するわよ？」

「……どういう意味だ？」

「あら、理解できなかったかしら？ 貴方達の命が危ないのよ。早川悠が貴方達の仲間を沢山殺したわ。次の標的は多分貴方達よ。ただの殺人鬼と化した彼に甘さも優しさもない。会えば見逃してはくれないわ。死体の原型が留まっていれば運がいい方かもしれないわよ」

「ふざけるな……それを三原さんが許すわけがないだろ」

「つまり……逃げる気はないのね？」

「当然だ。俺達はいくまで任務を遂行するのみ、敵前逃亡などするハズがない」

あら残念、折角命を助けてあげようと思ったのに。私の敵——早川悠の敵がいなくて驚く顔を見たかったのに……本当に残念だわ。だけど、あまり時間をかけてられないわね。

いくら彼が身障者だからと言っても、そろそろここに来ているハズ。あまり長居をしていると私まで肉塊にされてしまうわ。今の早川悠が手加減するとは思えないし。

「ぎゃあああああああああ！」

ほら、ね？

今の叫び声。おそらく、早川悠が黒ずくめの侵入者の一人を殺したのね。このままだと私まで本当に殺されてしまうわ。だけど、この人達に逃げる気はないみたいだから、仕方ないわよね。

「いいい、今の声……ッ」

「そう、今のが現実よ。貴方達——早川悠に会ったら最期だから氣をつけなさいね」

それだけ言い残し、私は静かに一階の受付ロビーから立ち去った。だってこのまま居続けたら本当に私まで殺されるんだもの。あの人達は……もう知らないわ。

だけど祈ってはおくわ……あの人達が早川悠に会いませんように。三原に操作されているだけの人達が早川悠に殺されませんように。ま、そんな事を思っているけど、別に私はあの人達の味方をする気はないけどね。

……さて、そろそろ私は家に帰ろうかしら。警報発令中だし夜も遅いしね。

ここは古宇坂市の南——沼山市にある小学校の体育館。私——国宗伊吹や亜紀に葵ちゃんなど殆どの知り合いがここに避難していた。なんでも、古宇坂市が何者かに攻撃されているらしい。警察どころか、ラジオによると自衛隊まで出動しているらしい。一体誰なのよ……自衛隊が出動するほどの相手って。そして私を不機嫌にさせる理由はもう一つあった。

葵ちゃんに亜紀、風紗や純奈。圭介や暮葉が所属している写真部のメンバーも、みんなこの避難所に逃げているのに……肝心の圭介や暮葉がここにはいない。

あの2人、一体どこにいのよ。どうして姿が見えないのよ……。……ばか圭介、ばか暮葉……本当に馬鹿だわ。

「お兄ちゃんにクーにゃん……どこ行っただろう？」

「先輩……無事なんでしょうか？」

「け、圭介も木下先輩も多分無事だ！……と思う」

「あかり……っ！いつもの勢い……ないよ……？」

「そうだよっ！いつも見たいにハッキリ言ってくれないと不安になるよっ！」

「だって、今夜になって圭介と連絡つかないんだからな……っ」

葵ちゃんや後輩達も圭介や暮葉を心配している。

「圭くんに暮葉もどこに消えたのかなあ？」

「クソ介もう死んだんじゃないの？」

「すみにゃん！不謹慎だぞっ」

亜紀に風紗、純奈は微妙だけど……それでもみんな2人の事を心配している。一般人にだって犠牲者がいるらしいんだもん。そんな状況下で2人の姿が見えない上に、電話を掛けても出ないしメールをしても帰ってこない。普通、心配しちゃうに決まってんでしょ。だけど変ね。一番助かりそうな2人なのに、どうしてこの場面でいないのよ。まさかまたあの2人変な事に巻き込まれてんじゃ……ありえるわねっ。

騒動が起こるのはいつもあの2人の周りだから。きっと今回も、あの2人はとんでもない事に巻き込まれてんのもかもしれない。また魔法使って奴らに狙われているのかもしれない。

そう思うと、居ても立ってもいられなくなってきた。

「――、」

私は限界を迎えた。

もうこの足は止まらない。何が何でもあの2人を探すわ。圭介と暮葉がどんな大事件に巻き込まれているかは知らないけど、このまま黙っていられるわけがないわ。私も2人を探して2人に加勢して騒動を解決してやるわよ。

……っと思っていたその時、ガシッと私の左手が誰かに握られた。

「伊吹、どこに行くんだ？」

「風紗？ 夜景を眺めるだけよ。べ、別にアイツらなんか心配じゃ――」

「心配なんだな……」

「……べ、別に」

どうすんのよ。風紗って結構手ごわい相手よ。しかも超能力者だし、あの時は炎しか使っていなかったけど、実は心を読むくらい能力は使えるんじゃないかしら？

そう思っていた……その時。

「伊吹、私も一緒に行くぞ」

「……えっ？」

「私も伊吹と同じ考えだ。このまま藤島や木下を放ってはおけない

ぞ」

「あ、あんたまで……いいの？」

「心配するな。自分の身を守る力があるのはお互い様だろっ」

そう微笑みかける風紗。

そうよね……私には剣道、風紗には超能力がある。それさえあれば、多少の相手となら戦う事だって出来るハズよ。それに、やっぱり一人よりも誰かがいると心強いわ。

何より私も風紗も——考えている事は一緒よ！

「……仕方ないわねっ、行くわよ！」

「うん、急ごうっ！」

こうして、私と風紗は避難場所である小学校の体育館を飛び出した。

飛び出して、あえて危険な古宇坂に戻ろうとしたのだ。  
ただ、大切な人達を見つける為に……。

## 第166話、殺人鬼と少女の決意（後書き）

・後書きトークコーナー！

あかり「よっしゃあ出番あったぞ！」

葵「葵も出番があったよ！」

千早「わ、わたしも……『8・17編』で二度目の出番です……っ」

純奈「なんで私今回こんなに出番ないの？」

大吾「僕も活躍したい！」

重原「俺だってもう少し目立ちたいよ」

圭介「たった一度の出番でキャラが大喜びするこの小説って一体何！？」

## 第167話、気付いてしまったもの

ちくしょう、どこに行っただよ。

風剣のシルフもミネットの居場所もわからねえ。俺——藤島圭介はその2人を探し求めて古宇坂中を走り回っていた。右手に握り締めているものはミネットが持っていた携帯電話。可愛らしい柄をしている携帯電話の持ち主は、暮葉に助けを求めに行っただけで帰ってこない。

その暮葉とも連絡がつかない。やばいぞ……今回の攻撃は大規模だ。暮葉どころか伊吹や葵達にもメールを送れない。回線が混雑しているか、あるいは切断されたか……。

どっちにしても好ましい状況ではねえな。とにかく早くミネットを探そう。暮葉とも合流して風剣のシルフを倒さねえと、古宇坂は何時まで経っても危機的状況から抜け出せない。

もし暮葉と合流できなかったとしても……俺一人でシルフをぶっ倒す。

……と、その時。ミネットの携帯電話が振動を始めた。電話……らしい。もしかして何時の間に回線が復活したのか、それとも元々切断なんてされていなかった。ただこんな状況だから回線が混雑していただけなのか。とにかく電話がかかってきた……悠って誰だよ。まあ、ミネットの知り合いなんだろう。とにかく……一応出てみるか。

「もしもし?」

『……チッ、誰だオマエ……ッ』

あれ、この声どこかで聞いた事があるような……まあいい。それよりこの人はミネットが心配で電話を掛けてきたんだろう。早く状



況の説明をしなければ。

「あんた、よくわからねえかもしれないけど話を聞いてくれ！ あの子が危険なんだ！」

『どオ言う事だ……オマエは何者だ？』

「俺はたまたまミネットと同行していた一般人だけど……すまねえ、途中であの子を一人にしちまった」

『そオか……気にすんな。オレもあの子を一人にした。だからオマエはその携帯を捨てろ』

いきなり過ぎる相手の言葉に、思わず胸に何かが刺さる感覚に陥る。あまりにも冷たく言い放たれたその一言に、自然と心が痛んでしまう。自分の無力さを突きつけられたような気がした。

だけど……それで退くような人じゃねえんだよ。俺は——！

「なんでだよ!？」

「あのガキは追われている身だ」

「もしかして……黒づくめの連中か？」

『オマエも知ってンのか？ なら早く避難所に逃げる事だ。連中は数も少なくなっただし、それにいくら連中でも騒ぎなで起こしたくねエだろう』

この言い草……もしかしてコイツのあの黒づくめ達の事を知っているのか。コイツもあの黒づくめ達と戦っていたのか？ 何処かで

聞き覚えのあるような声だし……。

電話の向こうのこの人は一体……って、今はそんな事より、

「なに言ってるんだ、俺も手伝うに決まってるだろ！」

『この問題はオレとクソ野郎共の問題だ。一般人が手エ出す場面じやねエ』

「だけど……」

『それに、ガキの居場所は何とか掴めそうなんだ。あのガキの逃走能力からしてもう三原に掴まっていると思うんだ』

三、  
三原？

もしかして、ソイツが犯人なのか？

ミネット達を襲いやがった、魔法使いではない第二勢力。その第二勢力を率いるボスの名前が三原ってヤツなのか。三原とシルフ……くそっ、どっちを先に倒せばいいんだよ。

いや、まあ……危険度で言ったら圧倒的にシルフのほうが上なんだが。

相手の人の実力はわからないが、ミネットの事はこの人に任せて……いいのか？

「……わかった。古宇坂には今、ソイツら以外にも襲撃者が沢山来ている」

『何者だァ……？』

「一人で警察や自衛隊を壊滅させるようなヤツだ。俺はその魔法使いを止めてみせる」

『……チツ、死にたがりには警告しねエ。オマエのやりたい通りにやりやがれ』

「悪い……アンタと協力が出来なくて」

『構わねエ……それよりオマエ、どっかで——いや、やっぱなんでもねエ』

なんだ、今コイツは何を言おうとしたんだ？  
まあいいや、それより早くシルフを追おう。  
早くしなければ——本当に手遅れになる。

「悪いな、死ぬなよ」

『互いになア』

相手の男が言い終えると、電話を切ってミネットの携帯をポケットに入れた。とりあえずミネットの事は電話の相手の人に任せるとしよう。あの言い草だと、相手の人は多分俺なんかよりもずっとプロっぽい人だし、ミネットを想う気持ちも本物に見えた。

下手に素人が介入するより、その手の人に任せたほうが結果は確実だ。それより俺は早くシルフを探し出してぶっ倒さねえと。警察や自衛隊じゃおそらく勝ち目はない。いや、自衛隊が一気に大戦力を送りこめば勝ち目はあるだろうが、日本政府や国民がそれを許すとは思えない。

この国は争いごとに関して——あまりにも厳し過ぎる。  
だったらやっぱ——関係者である俺がシルフを倒すしかない。

「けーすけ様っ！」

「えっ？ この声——」

このソプラノの高くて明るい声。聞き慣れた楽しげな声。聞いているだけで、自然と心が満たされるような声。間違いない、暮葉だ——暮葉がここに来たんだ。

「暮葉！」

振り返ると、やっぱり声の主は暮葉であった。暮葉は初芝高校の制服姿で片手には一期一振が固く握られていた。暮葉のヤツ……一度も家に戻らなかったから制服のままじゃん。まあそう言う俺だって一度家に帰ったクセに、

まくだ学ランのズボンにカッターシャツと言う、初芝夏の男の制服を着たままだが。

実は一回家に帰って着替えようと思っていたんだ。だけど、昨日の夜全部洗濯しちまって洗濯物が完全に乾いていなかったのだ。午後から曇って雨も降ってきたしな……とにかく、若干湿っているのが嫌だったので、俺は着替えずしばらく制服で過ごしていたのである。

まさか、こんな時間になっても制服を着ているだなんて……はあ。

「けーすけ様……どうしてまだこの街にいるのですか？」

「お前こそ今まで何してたんだよ。避難所……なわけねえよな？」

「仕事なのです！ 今、この街にサヴィエトの魔法使いが多数侵入していたのですっ」

「た、多数？ 襲撃してきた魔法使いって、まさかシルフだけじゃ

ねえのかよ!」

「シルフ……けーすけ様、もしかして風剣のシルフに会っちゃったのですか?」

「襲われたんだよ。そこでお前の仲間だって言う女の子とも逸れちゃった」

「その子なら多分大丈夫だと思うのです。それよりけーすけ様は早く逃げて——」

「逃げるなんて真似はしねえよ!」

……最低だ、俺。

折角暮葉は俺を心配して言ってくれたのに、逃げる気がなかった俺は、我を忘れて叫んだ挙句暮葉の襟首を掴み、強引に引き寄せてしまった。

ホント……最低だ。ははっ、今度こそ本当に嫌われたかも……。でも、言っている事は本当の事。俺は逃げる気なんてなかった……だから、

「お前ばかり戦う必要なんてねえんだよ。それに問題はお前やアルファ隊、そしたサヴィエトだけのモノじゃねえ。標的にされている俺だって、十分関係しているじゃねえか。だったら俺も戦う。黙って捕まるのを待つくらいなら俺は戦う。それを止めようとしてんじゃねえよ!」

「で、でも拙者は——けーすけ様に……か、かかわって欲しくなくて……っ」

えっ？　　と思つて、俺は暮葉を優しく少しだけ引き離した。  
泣いている……のか？

元々雨のせいです濡れの暮葉であつたが、不自然に瞳から何か  
が流れている……ような気がするんだけど……それは雨粒なのか、  
それとも涙なのか……？

「せつしやは……けーすけ様に……つく、死んじゃ……嫌なのです  
っ」

いや、後者だろう。暮葉の声が掠れてきたような気がする。じゃ  
あ、暮葉は……。

……最低だ。

俺って本当に最低だ。散々心配させた挙句、怒鳴りつけて女の子  
を泣かすって……。

ああもう……ホントに最低だ。暮葉は今までこんなヤツを心配し  
ていたのか。こんなヤツの為に魔法使いを沢山倒してきたのか。こ  
んなヤツの為に泣いているのか……。

なんだろう……ハハッ、熱くなりすぎてたのかな。勢い余ってブ  
レーキが効かなくなっていたんだろかな。とにかくもう少し――  
冷静になったほうがいいよな。

「ごめん、暮葉」

ぼん、と、暮葉の頭に優しく手を置いて、撫でてやった。

わしゃわしゃと、撫でる度に暮葉の髪の毛のいい感触。そして甘く、  
気を付けないと引き込まれてしまいそうな女の子の匂いが、全身に  
伝わってきた。暮葉は目に涙を溜めながら、うるうると上目遣いで  
俺を見上げてきた。う、ぐ、え……何これ、呼吸が止まりそうなく  
らいドクドキしてるんだが。

「けーすけ様……死んだり捕まったり……しない、ですよ……っ？」

「絶対死なない、捕まったりもしない。約束するから……お前にも約束して欲しい」

「……っ？」

「お前も一人で戦場に飛び込むな。俺だって……お前が死ぬんじゃないかって、すごい心配してんだからさ……」

言うのに物凄く緊張した言葉。

だけと言っちゃった……なんだこれ、体育館のステージで全校生徒に向けて、スピーチするより恥ずかしかったかもしれないねえ。おまけになんなんだよ俺……心拍数が妙に上がって、なんだか顔も熱くなってきたような気がして……クソッ、これじゃまるでアレじゃねえか。

薄々そうかもしれないと思っていただけ……まさか、ソレは本当なのか？

「ねえ……けーすけ様っ」

ぐいつ、と暮葉がしがみつき、力の入っていない手で俺の袖を握ってきた。暮葉の顔が俺の胸に埋まってきた。暮葉の身体が俺の身体に密着している。柔らかい……しかも、男からは絶対にしない極上のいい匂い。俺が……そんな匂いに反応しないわけがない。

「お、おう」

「その、これからは……っ」

「お前とは……友達だろっ。楽しい時だけじゃねえ、辛い時も一緒だ」

友達って言うのに何故か抵抗があった。友達じゃ嫌なのかよ……暮葉とは。それなのに俺は暮葉の事が嫌いじゃない。むしろ……。

……はあ、なんだよ。結局ソレかよ。  
散々悩んでいた俺が馬鹿だった。こんなに簡単な答えに気付かなかっただなんて。

気付いてしまった……やっぱりそうだったんだな。  
それだけに——この状況は何となく嬉しいかもしれない。

……しかし、そんな幸せをぶち壊すかのように、

「——ッ！」

一発小さな何かが、暮葉の太股を貫いた。



## 第167話、気付いてしまったもの（後書き）

今回は諸事情（これ投稿したのが登校寸前）により、後書きトークコーナーはお休みです。申し訳ございません！

## 第168話、それぞれの遭遇

暮葉が撃たれた。

突然の銃声と共に、暮葉の太股に銃弾が当たったらしい。倒れている暮葉の足からドロドロと赤い血が流れている。暮葉は傷口を手で触れ、出血を抑えようとしていたが、当然そんな所に触れて痛くないわけがない。暮葉は苦しそうに呻き声を発していた。

あまりにも痛々しい光景。ちつくしょう……どっから銃弾が飛んできたんだよ。

「クソッ、出てこい！ 暮葉を撃ったのは誰だよ！」

叫ぶと、建物の影から銃を構えた黒ずくめの集団が現れた。あれは……まさか、さっき俺と戦った三原って名前の人の部下か何かか。ミニットの事を狙っていた連中だ。だけど、標的はミニットのはズなのに何で俺達を攻撃……そうか、俺がいるからアイツらは攻撃してきたんだ。

俺も連中のリストに登録されているってわけだ。そのせいで暮葉が……ッ！

「おい、なにやってる。女は標的じゃないだろ？」

「しかし我々の姿は見られた……まだ生きている、殺すべきだろ」

「しかし、女のほうは……」

「三原さんがそれを許すわけがないだろ。ここは戦場だ、躊躇うな！」

男達が会話をし終えた直後——前列の5人が一斉に射撃を開始。  
アサルトライフル  
自動小銃から放たれた無数の銃弾が目にも留まらぬ凄まじいスピードで迫ってくる。

まずい、これ以上撃たれたら暮葉は本当に死ぬ。  
だったら——、

「う、があ——ッ！」

俺は死を覚悟する。暮葉を守るように仁王立ちしをした。そして、こちらに飛んできた銃弾全てをこの身で受け止めたのである。暮葉を死なせない為に——俺が盾になってのだ。

俺に当たった銃弾がバラバラと、次々とアスファルトに落下してゆく。意外な事に俺は全ての銃弾を弾いていた。痛みは半端じゃねえけど……それでも、俺は銃弾を弾いていた。まるで歩兵に銃撃されている装甲車のように——。

「はあ……はあ……はあ……」

連中は銃弾が尽きたのか、それとも無駄だと思ったのか、突然銃撃を中止した。ただ一つだけわかる事は——アイツらみんな怖がっている。

無数の銃弾を身に浴び、何発被弾したかさえ分らない。それでも、俺は倒れるどころか風穴が開いたり身体の一部が吹き飛ぶ事もなく、義経を守る弁慶のように立ち続けていた。

既に身体はボロボロ。服に穴が開いているのは勿論の事、被弾の影響が僅かに皮膚が銃弾に挟り取られたらしく、傷口から鮮血が流れ出していた。真っ白だったカッターシャツも、流れ出す血液のせいで一部が真っ赤に染まっている。だけどよかった……意外と軽傷で済んだぞ。

「ど、どうなってんだ……アイツ、ちゃんと弾当たってたよな？」

「なんでピンピンしてんだよ……バケモノかよっ！」

「7・62mm弾が当たって無事なわけ……クソッ、お前アレ持ってこい！」

「はい！」

黒ずくめの一人が、たまたま近くにいたもう一人に何か指示をした。アレが何かはわからねえけどアイツら……俺に銃が効かないからって、何か秘密兵器を出すつもりだぞ。

ソ連製の銃でやや出血する程度の軽傷。だけど……だからってさ、それ以上の武器に耐えられる保証はねえぞ。

重機関銃かグレネードか知らねえが、そんなモノを持って来られたらおしまいだ。

「け、けーすけ……様っ」

「俺は大丈夫だ。お前は喋るな、今は無駄に体力を使うな！」

「だ、大丈夫……ですっ、風の力を利用した回復術式を組み上げました」

「か、回復術式？ それって魔法か？」

「はい……回復が遅いのですが、明日になれば傷跡も目立たなく……ッ！」

「やっぱり無理して喋るな！ せめて傷の回復を待て！」

風を利用した回復魔法って意味不明だけど、とりあえずFFに出てくる“いやしの風”と同じモンだと思えばいいのか？

とにかく、今はその魔法の効果に期待するしかない。そして——どんな手段を使ってもアイツらを食いとめて、暮葉を運んで戦線を離脱しねえと——本当に大ピンチだぞ。

くそっ、だけどどうすりゃいいんだよ。今は睨み合いが続いているが、下手に動けば連中が攻撃してくる事は間違いないだろう。

「アレ持ってきました！」

「よし、これで——殺す！」

「——ッ!？」

アレというヤツを一目見て、思わず呼吸が止まってしまった。

RPGー7。

冷戦中にソ連が開発した携帯式対戦車擲弾発射器だ。対戦車兵器かよ……いくら馬鹿みたいに身体が丈夫な俺でも、流石に戦車より防御力が高い自信なんてねえぞ。このままじゃ、運が良かったとしても腹に穴が開く。運が悪けりゃ上半身がぶっ飛んでしまう。

どっちに好んでも俺は死ぬかもしれない。

「へへ、くたばれコラアアアア！」

RPGー7を受け取った黒ずくめが叫んだ瞬間——ロケット弾が放たれた。そんなものが目に見えるわけがない。増してやアレは対戦車兵器である。終わった……俺の人生は多分、ここで上半身がぶっ飛ばされるか、腹か胸に穴が開くかのどっちかで終わる、と思ったが——。

轟！ とロケット弾が爆発を起こした。

俺は死んでいない。だが、炎も煙もあるのでロケット弾は何かに命中したらしい。だけどロケット弾は確かに俺を捉えていたのに、一体何に命中したってんだろうか。さらに次の瞬間、RPG-7を持った黒ずくめの男の前に影が舞い降りて、その影は着地の寸前に華麗に一回転をする。

打撃音の直後、影が着地したと同時に――黒ずくめの一人が地面に倒れ込んだ。

その他の黒ずくめ達は咄嗟に銃口を影に向け、引き金を引こうとした……が、立ちあがった影は右腕を大きく振るい――激しく燃え盛る灼熱の弾を黒ずくめ達に放った。

着弾と同時に発生した、空間を切り裂くような爆発。

爆風と熱波で黒ずくめ達は吹っ飛び、後列の黒ずくめ達はやや後退りしていた。

俺は一瞬で前列の黒ずくめ達を駆逐した影を見る。やたらと強い影の正体は――、

「あ、明智!？」

「ここは私が引き受けた。だから藤島は木下を連れて逃げて欲しいぞ」

「だけど――」

「いいから! 暮葉は私がおぶってくからさっさと逃げるわよ!」

今度は明智とは対照的に高い声が聞こえた。咄嗟に暮葉のほうを見ると、アスファルトに横たわっていた暮葉を背負っている人の姿

がある。

負傷した暮葉を背負っていたのは間違いなく——伊吹であった。

「ば、馬鹿野郎っ！　なんでお前までこんな戦場ところにいるんだよ！」

背後で明智と黒ずくめが戦っているのか、銃声と爆音が轟く中で、俺は心配になって伊吹に向かってそう叫んでいた。超能力が使える明智ならまだしも、伊吹は基本一般人だろ。確かに剣道の腕前は素晴らしいものだけど、それだけで銃を持った黒ずくめ達と戦えるはずがない。

伊吹が来たって——殺されるだけじゃねえかよ。

しかし、そんな事を言ったにも拘わらず——伊吹の瞳は希望に満ちていて、

「あんた達を助けに来たに決まってんでしょ！　ほら行くわよばか圭介っ！」

「い、痛っ！　痛いのです伊吹さんっ！」

「ちょっと我慢しなさい！　今すぐ病院まであんたを運ぶからっ！」

言いながら伊吹はいきなり走り始めた。俺は「おい！」と叫びかけながら、その背中を走って追いかけ始めたのである。時々黒ずくめ達と戦う明智の姿を確認しながら……。

明智と黒ずくめ達の戦闘は一方的であった。明智は——余裕そうであった。

それから数分経って、俺と暮葉を背負う伊吹は古宇坂の街を走り続けていた。伊吹曰くどうやら俺達は病院へ向かっているらしい。

救急車なんて呼んでもこないであろう今、被弾した暮葉を病院に運び込もうとしているのである。

しかし、しばらく走り続けていたその時、

「い、伊吹さん……拙者は大丈夫なのですっ」

「な、何言ってるのよ、あんた撃たれたんでしょ？」

「大丈夫なのです……即席の回復術式が効いてきて少し楽になってきたのです」

暮葉のその言葉に、伊吹は眉間にしわを寄せた。  
無理もない。伊吹は暮葉が普通じゃないとは知っていても、流石に回復魔法まで使えるとは思っていなかったのだから。

「かいふくじゅつしき……？」

「ああ、コイツは風か何かの力で傷を癒せるらしいんだ」

「そ、そうなの!？」

「はい、その……明日になればほぼ完治出来るのです。ですからその、傷口を洗って出血さえ止めてくれれば明日には完全復活なのです」

その言葉が嘘は本当かは知らないが、暮葉は真剣な顔でそう答えている。おそらく暮葉が回復魔法を使えるというのは事実なんだろう。

こんな状況だ。病院に行っても病院そのものがやっていない可能性がある。だから今はその魔法の効果に期待するしかないだろう。



「なあ伊吹、その薬局で包帯でも盗んで応急処置してくれないか？」

「は、はあ？　なに言ってるのよ……どう考えても病院に行ったほうがいいが――」

「じゃあ、この状況で病院やってると思うのかよ!？」

「そ、それは……」

「信じるしかねえだろ……回復魔法の効果を。魔法使いとしての暮葉を」

それに今なら信じられるかもしれない。あれほど苦しがっていた暮葉も、今では大人しくなって大分楽そうにしている気がする。衰弱してぐったりしているわけではなく、本当に傷が治ってきたのか痛みが引いて、楽になったような顔をしていた。

暮葉の回復魔法はどうやら――本物らしい。

「わ、わかったわ……それであんたはどうすんのよ？」

「俺は風剣のシルフってヤツを止めに行く」

「そ、それこそダメなのです！　けーすけ様、下手したら死んじゃいますよ!」

俺の言葉に暮葉が反応し、俺の行動を止めようと必死に叫んでいた。風剣のシルフとは一度会っているから何となくわかってるよ、アイツが危険なヤツだって。しかも俺と会った時はまだ本気を出し

ていなかったっぽいし、だから心配してくれるのは本当にありがたい――。

でも、それだけで立ち止まる理由にはならない。

俺は戦場に行かなければならないんだ――。

「死なねえよ！ 大体、お前がそんな状態の今、誰がアイツを止めるんだよ！」

「な、仲間のアルファ隊の人が……っ」

「その味方が来る保証あんのかよ。それに俺は一度ヤツと会っている。俺はヤツを力をなんとなく知っているんだ。その上でヤツの所に行くっつつてんだよ」

そう、俺はヤツの力を知っている。

その上での決意なんだ。死ぬかもしれない覚悟は既に出来ている。問題は今、ソイツを止められるヤツが――俺しかいねえって事なんだ。

「……わかりました、けーすけ様の頑丈さに賭けてみるのです」

「ああ、アイツの事は俺に任せてくれ」

「あんた！ 何が何だかサッパリだけど死ぬんじゃないわよ！」

「絶対死なねえ！ だからてめえらも死ぬんじゃないぞ！」

今の俺にはそれしか言えない。とにかく、さっさと騒動を終わらせよう。明日から普通の高校生活に戻るかは知らねえけど、出来れば戻ってみんなと楽しくやっていきたい。

暮葉とも……もうちょっと仲良くなりたい……かな。まあ、それを実現する為にはさっさと風剣のシルフってヤツを倒さなきゃな。だけど俺には魔力感知なんてできねえし、アイツが何処で誰を襲っているかなんてサッパリわからねえ――。

「――っ?」

その時、轟々という爆音が炸裂した。

……この音、海浜公園のほうから聞こえてきたぞ。しかも、その海浜公園のほうを見ると眩い閃光で夜空が照らされていた。

……あそこかな。とりあえず行ってみよう――あそこにヤツがいるかもしれないえ!

……それから数十分後、俺はようやく爆心地に到着した。ちくしように……ずっと走っていた上に怪我もしているせいか、大分疲れてきたけど……まだまだ休めねえな。何故なら、爆心地には倒れ込んだ自衛隊の人達を踏みつける――風剣のシルフの姿があったからだ。

「あゝら? アンタあまさか殺されにきちゃったわけ?」

「てめえ……その人から足を退けろよ!」

「私を苦しめる元凶を調べていたんだけど、どうやらコイツらじゃなさそうね」

「ふざけんじゃねえよ。いいから足を退けろっつってんだよ!」

すると、シルフはようやく足を退けた――瞬間、足で自衛官を蹴

り飛ばし、夜の東京湾の奥底に沈めやがったのだ。

「てめえ！」

自衛官を助けようと、俺は衝動的に飛び出しそうになったが――。その行動はシルフによって阻止されてしまった。

シルフが俺の前に立ちふさがったのである。

コイツ……平然と人をブツ殺しやがった。それで笑ってやがる……ッ！

「はっは！ あんた、自分の身の心配をしたほうがいいんじゃないの？」

「うるせえよ……血も涙もねえヤツにだけは言われたくねえ」

「ハッ！ 折角アンタは後回しにしようと思ったのに。態々殺されに来るとは……」

言いながら、シルフは背中に背負っていた大剣を握り、それを振り回す。ガチャガチャという金属音と風を切り裂く音が響き渡り、シルフは高級そうな大剣を構えて、

「いいわあ！ じゃあアンタからぶっ殺してあげるわよ！」

「そう簡単に死んでたまるかよ……今からお前をぶっ倒す。てめえの目論みはたった今ここでぶち壊してやる！」

こうして俺と風剣のシルフは遭遇し、向き合ったのだ。

さて……みんなの為にも、暮葉のためにも――精々死なねえように頑張らねえとな！

ここは古宇坂北部、市境にある使われなくなったオフィス。

ここの8階に俺——三原寅彦は5人の部下を率いて、外を眺めていた。こんな地方都市には初めて来たモンだが、案外東京より騒がしいモンだな。なんでも俺達以外のクソ野郎共が街の中で騒いでいるらしいのだ。全くどこのクソ野郎なんだか……ま、それは好都合な話だ。

これだけ混乱していると、俺達の行動はばれ辛い。つまりだな……警察に大した睨まれる事もなく作戦を遂行出来るってワケだ。

特異点もしっかり捕獲したしなあ。

「ミネット・ローラン。コイツが最強の超能力者を生み出す鍵になるかもしれない」

呟きながら、俺は捕えた特異点が寝ている台へと近づいた。東京の研究施設に戻るってのも手の一つであつたが、その途中に襲撃されちゃあお終いだ。なら話は簡単でよお、実験セットを仲間に持ってきてもらうとして、この廃墟で実験を行えばいい。

なあに、バレたりはしねえだろう。このあたりは人口が少ないんだよ。その上今は警報発令中との事で殆どの市民は市外だ。いるのは精々治安維持の為に出動した警察や自衛隊程度。その主戦力も今や市内南部に動いているらしいしなあ。

「ハハッ！ 何から何まで思い通りだあ！ 見てなあ学園長。ここが俺が実験に成功すりゃあ早川なんざ目じゃねえ魔道能力者の完成だ。科学と魔法の融合……ハッハハハ！ いいなソレ俺も小せえ頃そういうの夢に思っていたよ！ それが現実のモンになるんだからなあ！ なあてめえら……あ？」

なんだ、俺の部下が全員窓の外を眺めて唾然としてやがる。そんなに外でおかしいモンでもあるってのかよ。まあいい、そんなに面白いモノなら俺も見てやろうじゃねえか――。

……しかし、それは全く面白くねえ――邪魔くさいだけのものであつた。

ガッシャアアアッ！ 空を飛んできた早川悠が――窓を蹴り破つてきやがつた。

あの野郎オ……どうしてここがわかつたんだ。だが、それだけだ。確かに邪魔くさいヤツが来た事には変わりねえが、所詮早川は早川だ。俺以外には倒せねえが……俺からしてみればこのクソガキも所詮はガキんちよ同然。軽く捻つてやれば無問題だ。

そんな早川は窓の近くにいたヤツの一人を蹴り飛ばし、豪快に床に着地した。

ゆっくりと起きあがり、その赤い瞳で俺を捉えると、

「三イイイ原くウウウウウウウン！！」

狂った笑みを浮かべ、持っていた散弾銃の引き金を引きやがつた。まずいな……俺は咄嗟に目の前にいたヤツの背中を叩き――ソイツに犠牲になってもらった。

被弾したヤツは血飛沫を噴き、そのままゆっくり床へ倒れていく。そんな中、俺はふざけた笑顔を見せる早川悠に対して、

「おうら、どこ目え付けてんだテメエ？ 銃弾撒き散らしてんじゃねえぞ！」

ガチャ、と俺の部下は銃口を早川に向ける。しかし早川は動じず、

風の操作でぐわんつと一気に部下に接近し、手榴弾のピンを全て抜き、そのまま腹を蹴りやがった。巻き込まれた2人を道連れに三人は大胆に爆発しやがった。ったく……使えねえ盾だ。

最後の一人はそんな早川にビビったのか、特異点を左腕に抱えて、

「ひ、ひい！」

だが、そんなクソ野郎の些細な抵抗など無意味であった。銃を構えていたソイツや早川悠にぶん殴られたのである。それも早川悠が持っていた散弾銃でな。

ソイツの生死はどうでもいいが、いいのかぁ早川悠。今の攻撃でテメエが今まで愛用してきた散弾銃がぶっ壊れちまったぞ。カッコよく特異点をお姫様抱っこしやがって……そんな余裕がテメエにあると思ったら大間違いだぜ。ったくムカつくから挑発してやろおか。

「ぎゃっはははは！ カッコいい〜ヒーロ早川ちゃんのご登場だなあ！」

早川は俺の言葉など気にもせず、特異点を台に置いた後、鬼のような怖い顔を浮かべて俺のほうを向いてきやがった。チッ、面白くねえ……折角ネタ飛ばしたんだから反応しろよ。

唯一の反応が殺意って、ただこっちがムカつくだけだっつーの。

「さアて、スクラップの時間だぜエ！ クソ野郎がアあああッ！」

さて、と……じゃあ目の前の早川悠<sup>バカ</sup>を殺す作業に入るとするかあ。

## 第168話、それぞれの遭遇（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「おい作者」

作者「はい？」

圭介「正直に言え、今回〇〇くウウウウウン！　　つてのがやりたかっただけだろ」

作者「いやぁ〜最近起きてられなくて、更新遅れ気味でごめんなさ——」

圭介「話題変えるなよっ！？　正直に答えろ！」

作者「そういえばすきやきってさ——」

圭介「作者アアアア！」

※色々ごめんなさい。



## 第169話、実験

制限時間は残り60秒。

クソッ、雑魚共を片付けるのに能力を使い過ぎた。まあいい……60秒もあれば油断しなけりゃ余裕で殺せる。問題はここが屋内だって事と、そこにミネットがいるって事だ。こんな状況じゃ大技は使えねエだろう。使ったとしても笛で発動を強制停止させられんのが関の山。

なら三原に近付いて、オレの右手でヤツの口元を掴んで、そのまま能力で酸素でも弄ってヤツを酸欠状態してやる。酸素濃度を6%未満にしてやれば人間は簡単に死ぬ。

とにかく、三原を殺せば全ては終わる。あの野郎さえ殺してしまえば……。

だからオレは三原を殺す。とにかくあの野郎を殺す事だけを考える。どうせオレはもう光の道に帰る事は出来ねエ。今更引き返す事なんて出来ねエ。

なら三原と一緒に堕ちてやるよ……地獄でも大地獄でも何処にでもなァ！

「……ッ！」

ダッ！ と、オレは一瞬で三原の懷に飛び込んだ。風の操作で加速し、風の力でオレの身体を前へ動かしたのである。ぐわっと五本の指を開き、三原の顔面を掴もうとした。指一本でも三原に触れる事で出来たならオレの勝ちだ。皮膚さえ触れれば酸素濃度を操作出来る。

地味な戦い方だが、それでも十分三原を殺せる……だが。

三原は首を振っただけで一撃を軽く避けやがった。

凄まじい勢いで突き出したオレの右手が空振りする。瞬間、三原

のクロスカウンターがオレの顔面に突き刺さりやがった。暴風の膜の僅かな弱点を突き、風が循環する僅かな一点を突く三原の左拳は容赦なくオレの鼻っ柱に激突する。

「ア……ッ！」

流石に拳一発で意識を失うことはない。三原はそこまで強くはない。所詮は地下でずっと研究をしていた引きこもりだからだ。怖いのは三原が使う不思議な術だ。オレへの対抗策は腕力は低くとも素早い三原にピッタリで、一発に重みはないながら確実にオレにダメージを与えている。

鼻への一撃でぶっ飛ばされたオレは、三原の数メートルで着地。そのまま走って五本に開いた指を突き出して、再びソレで三原の顔面を掴もうとする。

だが、その一撃も軽々と避けられた。

三原は軽く後ろへ身を退けただけだった。たったそれだけ。でも、オレの渾身の一撃は軽々と避けられてしまったのだ。

「相変わらず進歩のねえクソガキだな、テメエはよお！」

三原の叫び声と共に、ゴンと言う激しい衝撃がオレに伝わってきた。脳が揺さぶられて一瞬能力が暴走するかと思った。クソッ、腕力のねえ三原にしては力の入った一撃であった。

それでもオレは倒れなかった。辛うじて着地に成功し、そのまま立ち続けたのだ。

「おうらどうしたあ早川悠？ テメエの助けたいガキンちよはここにいんぜ？ 俺を殺してみろよ、そうすりゃあの特異点は助かるんだろ？」

「クソツタレエ……ッ！」

余裕そうなツラしやがって……そのツラ潰したくなってきやがったぜ。そう思ったオレは再び一瞬で間合いを詰めて、三原のクソ野郎を鷲掴みしようと手を振った。

それでも——オレの手は触れる事さえなかった。

オレが攻撃すれば三原は必ず避け、逆にオレは三原の攻撃を避けられない。頼りの暴風の膜は三原には全く通用しねエ。オレは何回でも左右の手を振りまくったが、一瞬たりともオレの手が三原の顔面に触れる事はなかった。三原はちょこまかと攻撃を避けまくるのだ。

クソツタレが……あと20秒で魔力が枯渇する。魔力エネルギー変換機のご加護がなければあ能力を使うどころか、この足で立つ事さえできなくなっちまう。

クソ……三原ごときで立ち止まってる場合じゃねえ。このままじゃ……ミネットを助ける事なんざできやしねエぞ……クソツタレエ！

「遅えんだよおテメエ！」

「ぐ——が、アあ……ッ！」

三原が叫んだ瞬間、高く上がった三原の足がオレの首筋に激突する。コイツ、こんな大振りな技でも暴風の膜を潜り抜ける事で出来んのかよ。今で首が折れそうになった。衝撃で吹き飛ばされたオレは凄まじ勢いで、ミネットが寝ている事務机に激突したのだ。

さつきから連続で喰らっていた攻撃。そしてトドメの一撃。

オレの身体はもうボロボロだ。黙っているだけで血が体内から込み上げてくる。今にも鮮血を吐きだしちまいそうだ。だが……まだ諦めるわけにはいかねエ。オレの目の前に、まだクッソム力つく不良中年が嫌なツラを見せてやがるんだからなァ。

オレは事務机に手を乗っけ、己の腕力を使ってふらふらと立ち上がる。

「三イ原ア……ブチ…殺すッ！」

「殺<sup>や</sup>れるモンなら殺<sup>や</sup>ってみろ。最も、テメエの実力で可能ならな」

ふざけんじゃねえよ……今更学園がなんで特異点を求めるんだ。

散々厄介だと思ってブツ殺しまくっていた特異点を。危険じゃないと判断されて放置していた特異点を。どうして今更捕まえて何かに利用しようとしてやがんだよ。これ以上特異点が地獄を見る必要があんのかよ。

もうあのガキ、そして特異点を不幸にはさせねエ。これ以上、闇の世界の為に犠牲になる事なんぞ神が許してもオレが許さねエ。オレが人の事を言えねエってのは分かってる。だけど今はそんな事を気にしている場合じゃねエ。

大切なのは気持ちってモンだろ……今のオレはあのガキを守りたい。

そう思っ<sup>て</sup>ンだよ。

だから、その為には三原は邪魔だ——悪イがオレと一緒に地獄へ来てもら<sup>う</sup>ぜエ！

「が、ア——ア——ッ！」

風の操作を行い、オレは飛び上がった。正面がダメなら上からだ。上から三原を襲えば三原は当然オレの攻撃を避ける。そこに僅かな隙が生まれるハズだ。なら、その隙を突いて一瞬でもいいから三原の皮膚に触れるんだ。それで三原を殺せる。

成功率は20%くらい……だが、賭けるしかねエよ。今更どうしろってんだ、残りの魔力残量から多分この一撃がラストチャンスだ。



クソツタレ、情けねエ……オレは超能力がなかったら戦うどころか、自分の力で歩く事さえ出来ねエのかよ。以前のオレならまだ戦えたかもしれねエ。そこに最初に蹴り飛ばした、黒ずくめの三原中隊<sup>カンバ</sup>の隊員が寝ている。ソイツの武器は無傷だ。

以前のオレならその武器を手にし、多少は走れたから三原と戦えたかもしれねエ。

だが、今の……身障者のオレには無理だ。杖がなければ歩けない。頭がぼんやりしていて小難しい事を考えるのが以前より苦手になっている。

こんな状態じゃあ……戦うどころか日常生活すら送れねえ。クソツタレ、他の奴らは超能力を使わなくなつて戦えるのに。俺をぶん殴った圭介<sup>アイツ</sup>は能力を一度も使ってねエ。

そもそもそんなモノを使えない——ただの一般人だった。

あんなヤツでもオレを倒せたつてのに……その一方でオレは……ッ。

「ほら小僧よく見てろ！ 今からテメエが守りたがっていた特異点を解剖してやる。生きたまま手始めに頭蓋骨でも切り裂いて脳でも見物するかあ。魔法使いの脳つてのがどうなってるか前々から興味あつたんだよなあ……」

ふざ……けんじゃ……ねエ……ぞ、クソ野郎オが……。

ソイツは実験動物<sup>モルモット</sup>じゃねエ……ンだよ。

近づくな。そのガキに汚エ手で触れてンじゃねエよ……このスクラップ野郎オ。

一瞬消えかけていた戦意。しかし、三原の発言で再び燃えてきたような気がした。

そして……拳に次第に力が入り——次第に理性がなくなっていくような気がした——。

## 第170話、風剣のシルフ

「あはっ！」

夜の海浜公園。大剣を持った風剣のシルフが真正面から突っ込んできた。動きは俊敏だが決して目に見えない程速いわけではない。俺は向かってくるシルフに合わせて、握った右拳を叩きこもうと一気に走り始めた。拳がシルフに命中する——と思った。

瞬間、突然目の前からシルフが消えた。

ヒュッ、と拳が空しく空振りする。右にも左にもいなければ、一瞬で背後に回り込んだわけでもないらしい。そこでふと、俺は上を見た。

シルフは空にいた。それも5メートルも一気に飛び上がったようである。彼女にそこまで凄い身体能力があるとは思えないし、おそらく風の魔法の一種なんだろう。そして、シルフは着地しようと落下してきたが、そこで——シルフの右足が俺の顔面に突き刺さった。

「あう……ッ！」

5メートルの飛び蹴りは強烈だ。鼻の骨が碎けるかと思ったほどである。衝撃で殆ど無理やり地面に押し倒された俺は、なんとか痛みを我慢して起きあがる。が……その時、既にシルフは大剣を振りまわし次の攻撃に移っていた。彼女は大きく振り回した大剣を地面にグサリと突き刺す。

瞬間、局地的な暴風が発生した。

凶器と化した風が容赦なく俺に吹きつけてくる。立ち上がった俺は、凄まじい暴風の前に再び押し倒されそうになるが、ズルズルと後ろへ押されながらも、必死に立ち続ける。

「ふっ！」

俺が強風で動けない事を確認したのか、シルフはがむしゃらに大剣を振った。

放たれた3発の風の砲弾。

パトカーさえ簡単に破壊する砲弾を喰らえば、俺の場合は死にはしないが、それでもかなりのダメージを受けるだろう。このまま暴風に耐えていてはいつまで経っても形成は不利。そう思った俺は咄嗟に右へ跳躍し、まずは一発面を回避。

しかし、そのせいで風に飛ばされた挙句——二発の砲弾が俺のすぐ近くに着弾した。

「う、あ——ッ！」

地面に倒れた俺に細かく砕かれ、鋭利な石が容赦なく襲い掛かってくる。ズシャッと飛んできた石の中の何個かが俺の皮膚を切刻んだ。切り傷からは真っ赤な血が流れ出す。

しかし同時に——シルフも口から血の塊を吐きだしていた。

「げっほ！ ごほ、げほ！ クソ、かなり出力が低下している……攻撃に威力がない！」

「……はっ、随分弱ってるみてえだな」

「何処の誰か知らないけど、嫌な術式を組み上げたモンだわ。特定の魔力を持つ者を圧迫する魔女殺し……チッ、ホントにどこの誰が組み上げたのよ！」

確かに、どこの誰がそんなものを組み上げたんだろうか。しかし、



その魔法のおかげでシルフはかなり弱っている。だから俺でもギリギリ戦えている。何処の誰かは知らないが、間接的に俺を助けてくれて本当にありがとう。その魔法を組み上げた努力は——決して無駄にしない！

「お、おオアああああっ！」

今度は俺がシルフの懷に飛び込もうとした。シルフも俺に合わせ、体格に合っていない大剣を持って間合いを詰めてきた。再び俺とシルフが接近する。俺は再び拳を握って、ソレをシルフの顔面に叩きつけようとしたが、またしてもシルフは飛び上がった拳を回避する。咄嗟に俺は上を見ると、シルフはそれほど高くは飛び上がっていないかった。すぐに俺の背後へ着地すると、大剣を大きく振り回した。決してそれで俺を斬るわけではなく、振られた大剣から突然大きな竜巻が生まれ、俺の身体を何メートルも高く突き上げる。

吹き飛ばされた俺は着地なんて出来るハズもなく、子供に投げつけられたおもちゃのように近くにあった建物の壁に激突。ズルズルと、3メートルほど下にあった地面に落ちていった。

「ホントそういうのは嫌いだわ！　いつもいつも私ばかりこんな目に遭わせて、私をこんな風に変えやがって、これだから現実なのは嫌いなものよ！」

何を言っているのは訳がわからない一方的な罵声。すると、大剣を振りまわしたシルフが風の鈍器を作り出し、大剣を振ってソレを激しく投げつけてきやがった。咄嗟にゴロゴロと、身を転がす事によってその一撃を回避した。が……ふと後ろを見ると、建物には大きな穴が開いていた。

こりゃあまずい……あんなの喰らってたら、俺でも病院送りになるかもしれない。

「く、そお……っ」

「ホントしつこいわねアンタ。いい加減うざくなってきたんですけどお？」

「うるせえ……てめえみてえな外道女に、負けるかつつてんだよ」

「ふん、私をこんな風にしたのは誰だと思ってんのよ？」

「そんなモン知るかよ。だからって無差別に攻撃してんじゃねえよ！」

「あゝら？ 私はこれでも標的は選んで攻撃してるわ。その軍服の人達も、私の前に立ちふさがったから攻撃したのよ。自分の身を守る為に戦う事の何が悪いワケエ！？」

シルフは大剣を振りまわし、それを地面へ叩きつけようとした。だが、刃が地面に突き刺さる寸前でシルフの動きが停止した。シルフは左を向いて、何かに釘付けになっていたのだ。

俺も恐る恐るシルフと同じ方向を見る。

そこには、何処かの民族衣装に身を包んだ、背の高い金髪の女の子が佇んでいた。

なんだアレ、十字架っぽいけど……なんか変な形だな。それよりアイツは何者だ？

「間に合いました、とリーリヤは状況報告します」

「リーリヤ？ はっ、アンタがアルファ隊ってヤツの隊長ってワケねえ」

シルフが言ったその言葉。隊長？ アルファ隊の隊長って事は…  
…あの人、暮葉の上司さんって事になるのか。だけど、隊長さん自  
らが戦場に来るって……一体何の用なんだろうか？

「風剣のシルフ、気分はどうですか？ とリーリヤは問います」

「気分？ そうか……アンタなのね、変な術式を組み上げた術者は  
！」

「いかにも、とリーリヤは答えます」

「チツ、イおかげでこんなガキ一人さえ、満足に押さえつけられな  
いじゃない！」

「満足な状態でも、藤島様を倒す事は不可能……とリーリヤは推測  
してみます」

どこかで似たような感じのを聞いた事があるな、リーリヤって人  
の口調。まあそれはどうでもいい話なんだけど、シルフを弱らせて  
いたのはあの人だったんだな。そうか、通りで急にシルフが弱体化  
したと思ったよ。お陰でなんとかシルフと戦えている、なんともあ  
りがたい。

「いちいち癪に障るわね……この野郎オがあアアああっ！」

風剣のシルフは大剣を振りまわし、リーリヤに向かって風の砲弾  
を放つ。

その数なんと5発。それも目で追うのがやっとの速度。速い上に  
強力、そんな5発の風の砲弾が容赦なくリーリヤに襲い掛かる。

が、リーリヤは手に持っていた飾りだらけの杖を振りまわす。カキン、という音が炸裂したと同時に風の砲弾は碎け散った。同じ事を何度も繰り返し、5発の砲弾は完全に消滅する。

「な、ば……うそ……っ？」

あまりの荒技に——シルフは口と目を大きく開けていた。

それだけではない。僅かに身が震えているような気もする。怖がっている……シルフは突然現れた謎の強者——リーリヤを恐れているやがる。

そのリーリヤは表情一つ変えず、冷たい視線でシルフの事を睨み続けている。

「一つ警告しておきます。リーリヤは正教会から聖人として認定されました。その実力は一般の魔法使いを遥かに上回る事を……忘れないで欲しいのです、とリーリヤは貴方に警告します」

聖人って……ホントにいたんだ。二次元だけの話だと思っていたけど。それにしてもあのシルフが赤ん坊扱いとは、アルファ隊の隊長……恐るべし。

しかし、圧倒的な力を見せつけられてもシルフは戦意を失わず、むしろ、

「……ナメられたモンね。腹が立つわ！」

むしろ戦意が高揚していた。

大剣を構え、今にもリーリヤに斬りかかりそうな勢いだ。

それでもリーリヤは余裕なのか、一言も喋らず表情すらも変えていない。ただ、じっとシルフの事を生ゴミを見る目で見ていたのだ。このまま行けばシルフはリーリヤに倒される。それでこの騒動は

終わるだろう、だけど本当にそれでいいんだろうか。少なくともその方法だと——俺の怒りは収まらねえ。

散々この世界の人を痛めつけたんだ。だったら、やっぱりシルフはこの世界の人間が倒すべきだと思うんだ。そして、この世界の人間で戦えるのは——この場には俺一人。

だから、俺は咄嗟にシルフの前に立ち塞がり、

「あ？ アンタ何のつもりよ？」

「何のつもりよじゃねえよ。勝手に目標変えてんじゃねえ、てめえの相手は俺だ！」

「雑魚に構ってる余裕なんてないわ！ アンタは後回しだからそこ退きなさい！」

「だったら、その雑魚を一瞬で倒してみろよ。てめえの力なら簡単なんだろう？」

「……そうよ、簡単よ！ アンタみたいな雑魚余裕なんでとケドオ！？」

「だったら、この人と戦う前に俺と戦え。こっちもいい加減ストレス溜まってんだよ！」

俺がこの世界の代表として——風剣のシルフをぶっ倒す。

大体暮葉と約束したじゃねえか。俺がシルフをぶっ倒すって。その約束を……俺は守って暮葉の所に帰りたいんだ。だからシルフだけはリーリヤに譲れない。

シルフを倒すのは——俺だ！

「命知らずのおバカさん。いいわあ、じゃアンタから殺してあげるわよっ！」

「馬鹿はお互い様だろ……今からお前をぶっ倒す。殴られる覚悟で  
もしとけよ！」

こうして——本当の戦いは始まったのである。

## 第170話、風剣のシルフ（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「実はシルフって小物なんじゃね？」

重原「ありえるね。段々ボロが出てきた気がするよ」

大吾「僕でも倒せたりして！」

重原「大吾に倒せるなら俺だって余裕だね」

圭介「てめえらいくらなんでも馬鹿にし過ぎだろ」

※シルフは単独で軍隊を壊滅させる事ができます。

## 番外話、切ない片想い（前書き）

どうも、今回は人気投票で1位に輝いた伊吹の番外話です！  
9月中に投稿すると言ったときながら10月になってしまった挙句、  
本編は絶賛戦闘中なのに空気の読めないタイミングでの投稿になっ  
て申し訳ないです。



## 番外話、切ない片想

私には男の子の幼馴染がいる。

幼稚園の時に家が隣になって、ソイツの妹と3人で一緒に遊んでくれたり、悩みなんかもしょっちゅう聞いてくれた。馬鹿で変態だけど優しくてたまにカッコよくて、何故か頼れる……。

そんな、幼稚園も小学校も——今の中学校も一緒に腐れ縁が私にはいる。

だけど、一見人気のありそうな人柄のソイツは——何故か浮いた存在になっていた。

それは私のせいでもあるんだけど。そう、私なんかの為にアイツは友達を失った。私をあんな奴らから助けようとするから、皆から怖がられ次第に孤独になっていった。アイツが私や亜紀と友達である事を除いては一人ぼっちなのも、小さい頃みたいに私を助けようとしたから……。

「はあ……」

ソイツ——藤島圭介はため息をつきながら、鞆を持って自分の席から立ち上がる。何故かその時だけクラス中が静まり返った。

圭介はクラスでは……番長をぶっ飛ばした不良扱いになっている。アイツもアイツで誤解を解く為に努力すればいいのに、アイツはいつもいつも……。

「なによあんだ、帰るの？」

私は不機嫌そうに彼——圭介に訊いた。私も最低よ……わかってんのよ、全部私が悪くてコイツが悪くない事くらい。私が人に手厳しく接するのは、自分の身を守る為だって事くらい。だけど仲のよ

かったコイツに当たる事はないのに……でも、今更昔に戻る事も出来ない。

ホント……私は最低だ。そんな最低な私に対して圭介は、

「いいだろ別に。出席日数足りてんだから……学校面白くねえんだよ」

投げやりな感じでそう答えた。真面目に過ごせば誤解は解けたかもしれない。だけど圭介はあの一件以来ずっとこんな感じで、何事にもやる気を出さず、その上だるいと言って学校を早退したら近所の不良と喧嘩をしたり……。

いつの間にか、圭介は不良のような事をやっていた……。

「……ふん、勝手にすればいいじゃない」

「そんじゃお先に行かせてもらおうよ。ノートよろしくな」

「あんたの為にとるノートなんかないわよ」

「へいへい、それじゃもうホントに行くからな」

そう言って、圭介は鞆を持って教室から堂々と出ていってしまった。まだ、二時間目と三時間目の間だと言うのに……ホント、圭介はいつからあんな風に……。

って、私も人の事言えない立場よね……変わったのは私も一緒。以前の自分に戻れなくなってしまったのは私もアイツも同じ。そして……アイツが変わってしまったのも私のせい。私が変わってしまったのは自業自得。ホント、私って最低だわ……。

「うっひゃー！ 今日もヤンキー藤島怖えっ！」

「しかも、幼馴染の国宗さん放置とかひでえよなあ」

「なんであんな奴がクラス一緒なのかしら」

「ホントホント、授業はサボるは喧嘩はするわ……最低男ね」

「つか、国宗も国宗だ。あんなのに構う必要ねえのに優しすぎるだろ……」

ホント……最低だわ。聞いててイライラするわ……最低なのは私よ。そんな事情も知らずに勝手にアイツの悪口言うんじゃないわよ。……と、私が一人イライラしていた――、

「おっす伊吹っ！」

その時、肩にぽんっと手を置かれ、元気そうな声で名前を呼ばれた。

振り返ると、私を呼んだのは親友の小坂亜紀だった――。

「あ、亜紀っ」

「あれー圭くんは？ 今朝はいたんだけどなあ」

「……アイツならさっき帰ったわよ」

「ふーん、大好きな幼馴染がなくて寂しい伊吹ちゃんであつたっ」

「……ッ！？ ばばば、ばかあっ！ ないない、寂しくなんかない！ あんなヤツ居ても居なくても全然変わらないからっ！」

いきなり何言いだすのよ亜紀、別に私は圭介なんて……その、そうよ。単なる腐れ縁だから居ないとちょっただけ寂しく感じるだけよ……って、あれ？

……ダメダメ、私は強くななきゃいけない。  
今までの弱い私は捨てなきゃいけない。だから……そんな事を言っちゃいけないっ。

「冗談冗談♪ でもそこまで必死に否定されると、本当にそうだと  
言ってるように聞こえるよ」

「ないから！ 絶対そんなことないからっ！」

「にやはは、じゃあそういう事にしておこっか♪」

「どういう意味よっ！ 亜紀のばかっ！」

「はいはい、それじゃあ学校終わったら圭くんの家に行くとしよう  
か？」

「な、ば——っ！？ なに……言ってるのよっ？」

いいい、いきなり何なのよ亜紀はっ！ いつもいつも……そんな  
にその、私の圭介のことδειじてこ面白いの？ 別に私はそんな  
んじゃないのに……そういうのはいらぬのに。

強い子になる為には——捨てなきゃいけないのに。  
今更素直になれないのに……。

「はいはいとりあえず決定ねっ。今日の圭くん特別不機嫌そうだったから、伊吹の顔でも見たら少しは元氣出るんじゃないかな？」

「で、でも……っ」

「いいじゃん。それともあたし一人で行こうかな？ ついでに圭くん襲って彼氏にし——」

「い、1分だけよっ！」

「あははは……やっぱり伊吹は圭くんが好きなのであった」

「だ、だから違うっ！」

ダメダメだわ……亜紀には絶対に勝てないわ。なんでだろう、亜紀……人のことからかうの絶対好きでしょ。人をいじるの上手すぎるよ。つい本音がぼろって出そうに……。

って何言ってるのよ。言葉にしている事が本音、それ以外には何もないから……っ。

それから午前・午後の授業を終え、放課後になり部活に励む人は励み、これから用事がある人や特にやる事のない人は次々と下校していく。私だってあの一件以降、剣道をやり始めたんだけど今日は稽古の予定がない。結局、私も亜紀と一緒に圭介の家に行くことになった。

圭介の家は私の家の隣だけど……入るのは久々かな。そういえば、圭介はともかく葵ちゃんは元気になっているかな。毎朝会ってるけどさ……葵ちゃんも幼馴染だから心配だわ。

「いってえ……くっそあの野郎オ。なんで何回殴っても倒れねえんだよ」

「噂は本当だったみてえだな……」

「畜生、次会ったら必ずブツ殺す！」

その時、怖そうな人達と私達はすれ違った。怖そうな人達は傷だらけ。何回殴っても倒れない強いヤツってまさか、アイツら圭介と……ばか圭介、また性懲りもなく喧嘩ばかりして。

そんなんだからクラスで浮くのよ。何時まで経っても誤解されたままなのよ。

「あっははは……今の人達、圭くんの話でもしてるのかな？」

「……知らない、あんな喧嘩ばかりしてるヤツのことなんかっ」

「でも、何だかんだ言って圭くんの事が心配なんですよ？」

「……別につ」

そんな会話を繰り返しながら、気付いた時には既に藤島家の前にいた。そこそこ立派な一軒家でこうしてみると、圭介の家も結構お金があるんだな〜って思う。両親共働きな上に、2人とも忙しいらしくて結構重役らしいし、圭介の部屋が半ば痛部屋化しているのも納得できるわ。

それにしても、アイツ……もう家にいるのかな？

亜紀は私が一歩前に踏み出す前に、圭介の家のインターホンを鳴らした。誰も出ない上に物音すら聞こえてこない。もしかして誰もいないのかしら？

「ありゃ、圭くんも葵ちゃんもいないみたいだなあ」

「……っ」

「伊吹、愛しの王子様が居なくて寂しい？」

「——だから違うわよっ！」

ホントに違う……違うって。

私は別に圭介なんか心配じゃ……別に心配ってわけじゃ……。どうして……なのよ。なんで普通にしていって、強いキャラを演じていないのに。どうして私以外のみんなは普通に暮らしてられんよ。

なんで私はいつもいつも……はあ。

結局圭介の家に入る事が出来なかった私達はその後、亜紀を私の家に入れてしばらく女2人でお話をしていた。意外な事に亜紀に彼氏がいた……らしい。最も3日で別れた上に、キスもそれ以上のこともしないで別れたらしい。先輩な上に必死だったせいか、告白を断れなかったらしいけど……。

亜紀、それってホントに付き合った事になるの？

「……はあ」

お風呂上り。私はパジャマに着替えて一人、ベッドの上に座り込んでいた。

私には話せる家族がない。

お母さんは小さい頃に逮捕されて、それ以降消息不明。お父さんはお仕事。そして私には圭介みたいに兄弟というヤツがない一人っ子。だから私は……家ではいつも一人。でも、家の中に一人とい

うのも意外と気楽なものよ。だって……人目を気にする必要がないんだから。

「……っ」

私はベッドの横の棚の上に、時計と一緒に置いている写真入れを手取る。中には小学生の頃の私と圭介と葵ちゃん、そして私の父さんと圭介の両親が映っている写真があった。写真は私と圭介が中心に写っていて、他の人達はその周りに立っているという感じだ。圭介……。

この頃の圭介は幸せそう。毎日が楽しくって……私も楽しかった。だけど……今の圭介はこの頃の圭介とは真逆の存在。いつも退屈そうで辛そうで……。

ごめんなさい……。

私が弱かったから。あの場で永渕達に拉致されたから。本当にごめんなさい……あんたの人生を狂わせちゃって本当に……っ。

「ごめん、圭介……っ」

やっぱり私……弱いままなのかな。必死で強くなろうと思ったのに。強くなろうと思ったから自分のキャラを変えて、もう引き返せなくなっちゃったのに……。

結局、私の根本は変わっていない。

私は弱いまま。だから……今もこうして些細な事で涙を流している。強い人なら泣かない程度の事で涙を流してしまっている。

ダメよね……私、一人の時にこんなじゃ……。

「……っ」

アイツ……ひよっとしたら、私と会わなかったほうが幸せだった



のかな？ 私さえいなければ今だってアイツは輝いていたのかな？  
でも、そう考えるとズキズキと胸が痛む。ぶわっと、また涙が溢  
れそうになる。

嫌だ……。

アイツから離れたくない。見放されたくない……アイツを幸せに  
したい。もう一度アイツの笑顔が見たい、アイツが輝いている姿が  
見たい。

それなのに私は、いつもアイツを突き放すような事を言っちゃっ  
てる。そもそも、アイツがあんな風になっちゃったのは私が弱い  
から。

ほんと……私って最低ね。自分のせいなのに自分の為に我がまま  
言って……。

本当に……ごめんなさい………っ。

……………。

「……はあ」

……なんだろう、随分懐かしい事を思い出していた気がするわ。

——あれは中3の頃だったかしら……どうしてあんな事を思い出  
していたんだろう？

今日は8月16日、明日から学校が始まる。

私はあの日と同じく——パジャマ姿でベッドに座り込んでいた。  
そんな状態で私はまた圭介の事をずっと考えていた。

高校に入ってからそんな感じなんだけど、今年の圭介は生き生き  
している。まるで昔の圭介に戻ったみたいに元気で、輝いている……  
私の瞳にはそんな風に映っている。だけど、私と圭介が元に戻る

ような事は決してなかった。

私は相変わらずだし、圭介は……なんだか、暮葉が来てからかな。確かに今まで通りに優しく時々カッコいいんだけど……なんでだろう。段々——圭介が遠くなっている気がする。

その理由ってやっぱり——。

「アイツ、暮葉の事……好きなのかしら……っ？」

最近になって何となく、アイツが暮葉の事が好きなんじゃないかって、そんなような事を思うようになってしまった。確かに今、暮葉は一番アイツに近い女だと思う。

住んでいる家是一緒だし。私が知らない間に——圭介と一緒に行動している。

私が詳しく知らない世界に——2人で足を踏み入れている。

なんか……気に入らない。まるで……圭介が奪われたみたいで。

圭介っ、あんたは私を置いてどこに行くつもりなのよ……。

口では言っていないけど、物凄く恥ずかしいけど、いつも逆の事を言ってるけど……。

……でも、もう抑えられない。

だから私は——頑張ってみる事にする。

少しでも変わろうと努力をしてみる。

間違いなくアイツの気持ちは暮葉に傾いている。

もうチャンス逃しているかもしれない……でも、それでも諦めたくはない。暮葉にアイツを奪われたくない。久々にぎゅってしてもらいたい——っ。

すぐには無理だと思う。まだ私はソレが弱い人のする事だと思っているから。ソレをする事によって自分が弱くなると思っているから。

そもそも——私はアイツに正直になれないから……っ。

でも……暮葉に負けたくない。

奪われたくない……これ以上、何も失いたくない……っ。

これから先——ずっとずっと隣で笑っていたい。

決意は固まった。その決意を胸に抱き、やがて夜は更け、新しい  
日が訪れた……。

## 番外話、切ない片想い（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「全く藤島はありえねえ」

大吾「ん、なんでだ？」

黒木「伊吹ちゃんが幼馴染だったら——俺は即効攻略するのに！」

大吾「フツ……甘いな」

黒木「な、なにがだよ？」

大吾「国宗は幼馴染として設定が甘い」

黒木「……は？ 何言ってるんだお前？」

大吾「まず、幼馴染は主人公をあだ名で呼ぶモンだろ！ それから主人公にお弁当を作るイベントが国宗にはないじゃないか！」

黒木「……コイツの頭はマジでゲーム脳だな」

大吾「そしてやっぱり——幼馴染はツンデレよりヤンデレだよねっ！」

黒木「結局コイツは何が言いたいんだ！？」

※ちなみに作者はツンデレもヤンデレも好きです。

## 第171話、キレた能力者

俺——三原寅彦は特異点が寝ている事務机の中から、錆びかけた箱を取り出す。

この中に魔法使いと超能力者を融合させた最強の存在——魔道能力者を作り出す鍵となる実験用の道具が入っている。

ついに幼い頃からの夢、最強の存在がここに生まれるんだ。そして……俺の学園内での地位も今以上に向上する。何れは……あのクサレ学園長から学園そのものを奪い取る。そして、生み出した最強の魔道能力者達を利用し、世界を俺の思い通りに変えてやる。

圧倒的な力を持ち、逆らおうとする事そのものが馬鹿馬鹿しく思える、そんな歴史上の誰もが作る事の出来なかった巨大な政府。誰もが争う事を諦めるのだから、全ては俺の思い通りかつ争いなど怒るはずもないある意味平和な世界。

この計画の遂行には、やはり早川悠では力不足だ。俺に負ける程度じゃな。しかも今の早川悠は自分の足で立つ事さえ難しい、泣き叫んでも何かを出来るわけではない。

「ハッ、その魔力変換機つてのが切れれば、動けねえ社会のゴミクズってか」

まあ、早川悠らしい無様な姿だな……まあ、コイツを今すぐ殺すのはやめだ。今から特異点に実験をするから、それでコイツがどんな反応をするのか楽しみだ。それと……もし最強の魔道能力者が生まれた時に——誰がソイツの対戦相手になるんだ？

それは当然——現時点で最強の名を持つ男。

そう……早川悠だ。久我って選択肢もあったが……アイツは役不足かもしれない。

魔道能力者VS早川悠……もし実現して、魔道能力者が早川悠を

殺せば……俺の今までの苦勞が報われるってワケだ。いやいや楽しみだ……本当にそうになったら樂園が完成する。パラダイス

「――?」

その時、一瞬だけ俺の思考が止まった。

ありえねえ……少しだけそう思ってしまった。

無理もないかもしれない。俺は早川悠がどんな状態か知っている。別に、あの野郎のすぐ傍にいたからではなく、あの野郎が入院している最中に何度もスパイを送ったからだ。それであの野郎の現状や首筋の変換機の事も大体は知っている。知っているからこそありえないと思ったのだ。

ミシリ、と。

事務机に手を掛け、鬼のような形相を浮かべる早川悠が再び立ち上がったのだ。

「なんだ、どういう事だ一体? あのコソ野郎が再び立ち上がるはずがない」

今の早川悠は、超能力を使う為に必要な演算能力を失っている。しかも、歩行機能に障害があるようで杖をつかなくては歩けない。そうか……机を杖代わりにしているのか。だが、それを杖代わりにした所で何になると言うんだ。

机は杖代わりにならない。要するに、あの野郎はあそこから動けない。ハハッ、とんだ馬鹿野郎だな早川悠は。それでなんとかなると思っでやがるとは……。

まあ、あのまま武器でも出されちゃ困るし、何よりうぜえからな……けどあの野郎を魔道能力者との対戦実験に使ってみたいし、ぶん殴って完全に気絶させてやろうか。

あーあーあーあー手間取らせやがって……そういうのホントムカ

つくわあ。

「ふざ、っけんじゃねえぞ、この身障者がぁアあああッ！」

俺は本気で早川悠をぶん殴ろうとした。今までのような精密な操作は必要ない。今の早川悠は能力を使えないんだから、当然暴風の膜を張り巡らせる事など出来るハズがない。そう、今の早川悠は体力のないもやし高校生レベル。体重を乗せて殴ればアッサリ沈むハズである。

だが……。

「——なっ!？」

拳が早川悠の顔面に直撃する寸前に、俺は早川悠に右手首を掴まれた。

ありえねえ……どうなってんだコイツの身体は。細いし力なんてなさそう……なのに手首を握るその力は予想を遥かに上回っている。何故だ、簡単に振り解く事が出来ねえ。

こうして俺が苦勞している間に、早川悠がもう片方の手で俺の髪を触ってきた。気持ちの悪い野郎だクソツタレ、頭を叩くにしてはあまりにも威力が弱過ぎる。何しやがる気だ、さわさわと来る感触があまりにも気色悪過ぎる。この野郎、こうなったら残った左拳でぶん殴って——、

「う、ごアあああああッ!？」

ブチブチ、メリメリ、と嫌な音が連続で響き、あまりの痛みに思わず絶叫する。やられた場所を押さえてみると、激しく痛みを感じると同時に——あるべきモノの感触がなかった。

再び俺は早川悠を見てみると、そのあるべきものを早川悠が持つ

ていた。

あの野郎オ……俺の髪を根こそぎ抜き取りやがった。しかも……クソツ、皮膚と肉ごと分捕りやがったなああの野郎。今度から俺はスキンヘッドにしなきゃいけねえのかよ……チツ。

「この……クソガキィ！」

ムカついた……本気でムカついたぞ。やっぱコイツはブツ殺す。魔道能力者との対戦実験の被験者は久我で別にいい。早川悠だって久我を瞬殺出来ねえだろう。なら、その魔道能力者が久我を瞬殺出来れば実験は成功だ。そうと決まればこのガキを殺す——バラバラにしてやる！

だが……そう決意した瞬間、早川悠がふらふらとして足取りで歩いてくる。見ていて危なっかしい歩き方をする早川悠は——全体重を乗せて俺に抱きつき押し倒しやがった。

辛うじて後頭部は守ったが……まずい。このまま完全にマウントを取られたら——。

「く、そガキィ！」

咄嗟に早川悠にフックを打ち込み、ごろごろと転がる事によって脱出。クソ、今ので早川悠が気絶するとは思えねえ。何か武器は……あった、早川悠が潰した俺の部下が持っていた拳銃。

ハハッ、今の早川悠に暴風の膜は作り出せない、反射は不可能だ……なら、一発でも銃弾を撃ち込んでやれば早川悠は死ぬってわけだ。ざまあみろ……そのムカつくツラに風穴を——、

「う、おあっ!? テメェ！」

ズルズルと早川悠に引き寄せられる。拳銃を手にとろうとした瞬



間、早川悠に足首を掴まれた俺はそのまま引きずられてしまった。  
結果、俺は拳銃に手が届かない位置に動かされたのだ。

とりあえず俺は、この足で早川悠の顔面を蹴る事にした。何発も何発も、鈍い打撃音と時々ミシッと響く嫌な音が炸裂する。それでも早川悠は俺から離れない。離れようとしない。自分に受けるダメージなど関係ないと言わんばかりに、何度攻撃を受けても早川悠は決して離れない。

何故だ……今まで俺は早川悠を圧倒していた。それが今はどうした、何故早川悠ではなく俺が地面を這っているんだ。そうか……早川悠が能力を使えねえって事は、俺がコイツを倒す為に態々考案した対抗策も無効ってワケか。畜生ここに来てボロが出やがった……。

俺は早川悠には強いが——それ以外には強くはない。

一般人と同レベルと化した早川悠、増してやコイツはキレてやがる。怒りとアドレナリンが爆発した早川悠に俺の理論は一切通用しない。キレた馬鹿と殴り合いをしているようなモンだ。

こうなったら……ただ攻撃するだけではダメだ。余計に早川悠を怒らせる。

なら……早川悠が怒る意味を奪っちゃえば。その為には何をすれば——。

ミネットを殺す……いやダメだ。余計にコイツを怒らせる。クソッ、何かねえのか？

「こんの短気野郎オがつ！」

ああもうイライラする。そう思って放った一撃が——奇跡的に早川悠をぶっ飛ばした。

俺も相当イライラしていた。そのイライラが強烈な一撃を早川悠に与えたのである。

足首を掴んでいた手が離れ、顔面血だらけの早川悠は埃だらけの床に落ちる。周囲に杖代わりに出来るモノは一切ない。この位置に

来れば早川悠は起きる事が出来ない。ハハ、神ってモンがもしも本当に存在するものとしたら、その神は俺の味方をしたってワケだな。

まっ、科学者の俺にしてみりゃあ……神ほどくだらねえモンはねえと思うがな。

「ハハ、ざまあみろクソガキ！ 能力が使えねえんじゃ仕方ねえかもれねえが……感情に任せた強さなんて所詮その程度なんだよ！ 悔しかったら煮干し食ってカルシウムとって少し冷静になってみろよ。所詮最近のすぐキレル若者なんざ——この程度ってワケなんだよお！ あっはぎやはひやははっ！」

言いながら、俺は床で寝ている早川悠の腹に蹴りを打ち込んでいく。何発も何発も内臓が破裂しそうな勢いで蹴り続けた。これが裏社会ってモンだ。加減も容赦も情けも救いもねえ。ただ強者が弱者を喰らい弱者はそれに従うか——死あるのみ。

今の早川悠は間違いなく弱者だ。まさに——喰われるだけの豚状態。

そして強者の俺は早川悠をブツ殺そうとしている。そう……早川悠、テメエに残された唯一の選択肢ってのは“死”のみなんだよ。

「はあ、はあ、はあ……ほおーら、そろそろあの世へ行く時間だ。

首の骨へし折ってやつから10秒間で覚悟でもしとけ、ハハハッ！」

勝った……俺は結局早川悠がキレた所で結果は変わらねえ。

初めからこの戦いは俺の勝ちだったんだ。早川悠に勝ち目なんざ0だ……ハッ、全く世間から厄介払いされた挙句、コイツを受け入れた俺達にも嫌われ、最後はこのザマか。哀れなクソガキだがテメエらしいっちゃテメエらしいな。精々あの世じゃ幸せになりやがれよ。

最も、テメエは地獄行きかもしれねえがな……さて、そろそろブツ殺すでしょう――。

「ふう、リーネに助けを求められたから来たけど、今は修羅場かな？　とにかく到着かな」

不意に声が聞こえた。俺と死にかけて早川悠は声のした方に首を向ける。

そこに。

桃色ブロンドの長い髪を持つ、白衣を着た小柄な少女が立っていた……。

## 第171話、キレた能力者（後書き）

・後書きトークコーナー！

黒木「早川の所に折角来た助っ人があんなに弱そうで、勝ち目あるのかコレ？」

赤佐「まあ科学者同士っぽいし、なんとかなるんじゃないか？」

大林「キレた早川も能力ナシの割には意外と強いしね」

圭介「完全に外野のコイツらが本編について議論している事に違和感を感じるんだが」

大吾「最近後書きトークコーナーもネタ不足で、それしかやる事がないんだよ」

重原「何かいい企画でも考えないといけないね」

圭介「そうですねえ……」

## 第172話、風剣（ウインドソード）

「う、おオアああああああっ！」

アルファ隊の隊長、リーリヤが見守る中。俺は夜の海浜公園を駆ける。全力で走ってシルフの懐へと突っ込む。一気に戦意が沸いてきたせいか、気のせいかもしれないけど……でも、さっきよりも軽々と動けるようになった気がする。

シルフを倒して騒動を終わらせる。暮葉を守ってみせる。アルファ隊の力を借りなくなったってシルフは倒せる。いや、この世界の人間がシルフを倒さなきゃいけないんだ。

その想いが——この足をさらに加速させていった。

「クソッ！」

リーリヤの魔女殺しの魔法により、かなり弱っていたシルフ。一気に間合いを詰められるとシルフは慌てた様子で大剣を振りまわし、2発の風の塊が放たれた。俺は2発の風の塊をジグザグに走る事によって回避し、一気にシルフの懐深くに潜り込む。

右腕を下から突き上げ、シルフの腹部にボディーブローを打ち込もうとした。

「ッ！」

しかし、シルフは風の魔法が何かで5メートル以上も飛び上がり、軽々とした軽々しく俺の背後に着地をすると、横から殴るように大剣が振り回される。

咄嗟に振り向き、攻撃に気付いた俺は身を屈めてこれを避ける。轟音が頭上から聞こえた。シルフの大剣が風を切る音である。だ

が、俺を叩き斬ろうとした大剣は空振りしてしまった。

今のシルフは隙だらけだ。

そんなシルフに横腹に俺は——固く突き立てた肘を打ち込んでやった。

「げ、はぁッ！」

鈍い音が炸裂すると、衝撃でシルフは後退りする。さらに、濡れた地面に足を滑らせて地面に転がってしまった。寝ているシルフに対し、俺は飛び上がった腹を踏みつけようとしたが、それより先にシルフは両手に握った大剣を振り回す。俺は慌てて後ろへ2、3歩後退りする。

その後、大剣を構えるシルフと拳を握る俺は——何十秒も睨み合った。

睨み合いの中、俺はこう思っていた。

風剣のシルフ……確かに強いけど、勝てない相手ってわけじゃねえ……。

これは——いける。

「アハハ、素人にしちゃ攻撃力が高いのね……接近戦じゃ私が不利ってわけね」

「そんな重たい物持ってるから、動きが鈍くなっちゃってんじゃないかねのか？」

「私の風剣は魔術発動に絶対必要な、魔道書のようなモンよ。風の術式を組んで多少は動かしやすくもしているし、アンタが考えているほどの強い力はいらないのよ」

「だから風剣のシルフって名前なのか……だけど、結局てめえの動

きは魔法に頼ってるだけで大したことはねえよ」

「チッ、言ってるコラァ！」

構えた大剣を一気に振り下ろし、シルフは巨大な風の塊を作り出す。それを確認すると同時に俺は拳を固く握り、勢い良く前に駆ける。シルフによって作り出された風の塊から、台風並の暴風が放たれ暴風が容赦なく俺の身体に吹きつけてくる。

それでも——俺は進み続けた。

身体が壊れる覚悟で全身の筋力をMAXまで引き上げ、ビリビリと来る激痛に耐えながら吹き荒れる風の中を突き進んだのだ。

「この世界の人間の力——てめえに思い知らせてやるっ！」

「赤の軍神を——ナメてんじゃねえぞおおオオおおおお！」

シルフはさらに大剣を振りまわし、激しい暴風を起こし始めた。全くワンパターンな攻撃だ。最初の一撃をマトモに喰らえばお終いだが、しばらく耐えて戦っていれば案外大した事がない。シルフの攻撃は単純馬鹿並にワンパターンなのだ。威力こそ高いが同じ組み合わせがずっと続けば——いい加減こっちも慣れてくるモンだ。

しかも、シルフはリーリヤの魔法によって弱体化している。本来のシルフなら、今以上に凄まじい力を放ってくるんだろうが、今の彼女は俺でも耐えられる程度の攻撃しか放ってこない。

つまり彼女は——相当弱体化している。

「いい加減気絶しろってんだよ！　こんの素人があああああああ  
あぁっ！」

キレているせいか、シルフの口調がさっき以上に汚くなっていた。

だが、叫ぶと同時にシルフは今まで以上に大剣を大きく振り回し――今まで以上に強烈な暴風を放ってきた。

それは暴風を超える颶風であつた。全てを破壊し尽くす颶風は、周囲にあるあらゆる物を破壊しながら突き進んで来る。

「ぐわっ！　く、くそ……これは――まずいつ！」

前に早川が起こした竜巻よりやべえ……シルフのヤツ、まだ……こんな事をする力が残っていたのかよ。これが赤の軍神の力かよ……ちくしょう、完全にナメていた。

やっぱりさっきまでのシルフは――決して本気ではなかったんだ。颶風が激しく身体にぶつかる、もうダメだ……………。

……と、思ったその時。

突然颶風が砕け散り、数百もの尖った空気の錐となって飛んで来る。そのうちの何個かは俺の身体に僅かれ触れ、皮膚を素早く切り裂いた。

「く、あぁッ！」

痛みで思わず悲鳴を上げ、右腕で左腕を押さえ込む。ゆっくり右手を離し、掌をこの目で確認すると真っ赤な血がべっとり付着していた。今度は左腕を直接確認すると、空気の錐によって生まれた傷跡から鮮血が流れ出ている。

ちくしょう痛え……けど、今のは何があつたんだ？

どう考えてもシルフの技とは思えない。何故直接颶風が来なかった。どうしていきなり颶風が砕け散つたんだ。それで攻撃の威力が弱まった。そんな威力の弱まる選択をシルフがするハズねえだろうに……なんでいきなり？

「藤島様、左手をご覧になってください……とリーリヤは言ってみ



ます」

「左……？　　って、あ、アレは……ッ！」

リーリヤの言葉を受けて、俺は首を左に向けるの瞳に映ったのは――隊列を組み、銃を構えている自衛官達の姿であった。あの人達……さっきまで倒れていたのに、どうして？

「あの人達は藤島様の戦いぶりに感動しています、とリーリヤは状況を報告します」

「それじゃあ……あの人達はっ」

「はい、藤島様を助けるべく、傷だらけの身体を引きずって立ちあがったのです……とリーリヤは彼らが戦う理由を説明します」

「た、隊員さん達は……っ」

俺はもう一度、シルフに銃口を向けている自衛隊の人達に目を向ける。シルフとの戦いで身体は既にボロボロ、すぐに病院へ行かなければならない者も、中にはいるかもしれない。それでも彼らは俺なんかを助ける為に立ち上がり――シルフに銃を向けているのだ。

「この……死にぞこないの腐れ兵隊め……っ！」

やがて砂埃が風に流され、シルフの姿が現れる。シルフは額に血管を浮かべ、お怒りの様子で自衛官達を睨みつけていた。シルフから数メートルは離れているのに、大剣を握る彼女の手に一段と力が入っているのがわかる。アイツは相当自衛隊に怒っているようだ。

そんなシルフに構わず、銃口を向ける自衛官達。

俺は彼らを一瞬見た後、再び血塗れになったシルフのほうを向く。

「アンタといいそこの死にぞこないの兵隊どもといい、ホント……現実世界の人間ってのはムカつくモンだわね！」

「なんだと……？」

「だから私は現実が嫌いなものよ！ 挫折と絶望しかない、こんな現実が——！」

「……どういう意味だよ？」

俺がそう問うと、シルフは血に溢れた口からペツ、と血の塊を吐き捨て、掌で唇を拭いながらその理由を喋り始める。

「裏切られたのよ。先生にも友達にも——親にもね」

「なに？」

「友達がいじめを受けていてね、私はその友達を助けたのよ。それがどう？ 学校側は私ばかりを悪者扱い、親も先生も聞く耳を持たないで友達には裏切られ……」

「お、お前……っ」

なんだよそれ……俺と同じじゃねえかよ。コイツ、俺と同じ事をやって、友達は救えたけど周囲からは突き離されたんだ。だけど、コイツはそんな現実には耐える事が出来なくて——。

「どうさ、赤の軍神の一人がこんな理由で戦ってんのよ？ 腹抱え

て笑いたくなるでしょ？ でもね、私はそこまでしてでも現実をぶち壊したい。こんな現実なら必要する価値はない。だから、私がこの力で現実を壊して作り直す。誰もが笑って過ごせる挫折のない世界を作り出すのよ！」

風剣のシルフ……お前は。

一歩間違っていたら、俺もシルフみたいになっていたのか。

なんて笑えねえ話なんだよ。コイツ……まるで俺を見ているみたいだ。だけど俺と違う所はコイツは現実に耐える事が出来なかった。耐えられなかったから非行に走った。それで、自分の嫌いな現実を魔法でブッ壊そうとした。その為にサヴィエトに入ったってのか……。

だけど、いくら俺に似ているからって——彼女のやる事に納得は出来なかった。

「ふっざけんな。だからって全てを破壊する必要はあんのかよ」

「あるわよ！ こんな世界——一度ブッ壊して作り直したほうがいいのよ！ そのほうが、私みたいに現実が嫌な人も幸せに過ごせる世の中になるのよ！」

「じゃあ、その世界をつくる為に誰かが不幸になっていいと思ってんのかよ、てめえは！」

なに？ とシルフは眉をひそめる。

僅かなシルフの反応を確認すると、俺はさらに言葉を続けた。

「お前の気持ちは俺にだってわかる。俺だって信じていた人達に裏切られたよ。お前のように誰かを救った結果、俺一人が恨まれるようになってしまったよ。今だって多分、当時のことを知ってるヤツの

一部は俺を恐れているよ。けど、お前のように全てを壊すような事はしなかった！　なんでわかるかよ？　確かに全てを壊して思い通りの世界を作れば、俺もあの時楽になれたかもしれねえし、てめえだって幸せになれたかもしれねえ。だけど、その世界をつくる為にどれだけのヤツが不幸になると思ってたんだ！　結局、何かを壊して作る世界なんて——誰かが不幸にならなきゃ作れねえんだ！」

その言葉でシルフはわなわなと身体を震わせる。

そして、溜まっていたモノを一気に爆発させるように、

「黙れえっ！　それでもアンタには味方がいるでしょ……私ほどの地獄は味わってないでしょ！」

激昂のあまり、叫びながら大剣を振りまわした。

これまでのように計算して放たれたわけでもない、単なる風の塊を、俺は身体を僅かに振るだけで軽々と避けてやった。感情的な一撃は俺を粉碎する事は出来なかった。

攻撃を避けた俺はそのままシルフを直視し、言葉を続ける。

「確かにそうかもしれねえ。だけど、それでも俺は誰かの犠牲によって生まれる楽園なんぞ望んじやいねえ。そんな楽園を作る作るくらいなら——まだ我慢していたほうがマシなんだよ！」

「うるさい！　私は……あんたじゃないのよ！　あんたみたいに全てを諦め、それで我慢しながら過ごせるようなヤツじゃないのよ！」

「諦めてなんかいねえよ！」

「ウソよ！　何かをするわけでもない、何もしない、結局アンタは諦めてんのよ！」

「違う！ 諦めてなんかいねえよ！ 諦めていたらお前の前に立ち塞がるかよ。誰か守る為に立ちあがったりすんのかよ。サヴィエトに抵抗したりすんのかよ！？」

「……っ！」

シルフは今にも涙がこぼれ出しそうな目を見開き、1歩ずつ後退りをしていく。その姿はあまりにも弱々しく、とても赤の軍神の一人とは思えない——普通の女の子であった。

段々と遠のいて行く少女に、俺は一步ずつ、力強く迫っていく。

「結局、お前は救って欲しいだけなんだ。寂しくて嫌なだけなんだ」

「う、うるさい……うるさいうるさいうるさい！ 知ったような口聞くんじゃないわよ！ 所詮アンタは私から見れば充実しているヤツなのよ！ そんなヤツに慰めの言葉を貰ったって——何にもならないわよ！」

「お前……」

「とにかく私はこんな現実が嫌いよ！ だから全てをぶち壊してやるわ。アンタの信じる腐った世界も叩き潰す！ そして——誰もが幸せになれる世界を新たに創ってやるのよっ！」

シルフは再び大剣を握り締め、それを構える。俺も拳を握り締めた。リーリヤの魔女殺しによって相当弱体化している上、今まで我慢していた弱みを外に出してしまった。彼女は弱い、おそらく一発でもぶん殴ってしまえば彼女は折れてしまうだろう。

だが、彼女が放つ一撃も強烈だ。

そう——勝負は次の一撃で決まる！

「「！！」」

俺は勢いよく前に向かって走りだした。

シルフはそんな俺を叩き潰すべく、大剣を振りまわし颯風くふうを創り出す。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおお！」

シルフが叫ぶ。

「ぐ、おオあああああああああああああああああああああ  
！」

俺も叫びながら前身し続ける。

無謀にも、俺はシルフを創り出した颯風くふうへ突き進んだ。全身の骨が砕けそうなほど激痛を全身に感じたが、それでも構わず進み続けた。

どちらが先に折れるかの勝負——先に折れたのはシルフのほうであつた。

「援護射撃だ！ あの子を援護しろ！」

「射撃用意！ 射っ！」

一斉に放たれた無数の鉄の雨が、シルフに降り注ぐ。シルフは自分の身を守る為に颯風くふうを放つのを止め、自分の周りに竜巻を発生させた。

それで銃弾を吹き飛ばすつもりなのだろう。確かに、自衛官達が放った銃弾はシルフの魔法によって全弾吹き飛ばされ、シルフに風穴が開く事はなかった。おそらく自衛官も、こうなる事をわかつていて撃つたのだろう。彼らの目的はシルフ殺害ではない——隙を作る事だ。

「今だア少年！  
行けえええええええええええ！」

自衛官の一人——隊長と思われる人物が壮絶な叫び声を上げる。確かに彼らのおかげで隙は出来た。その上、リーリヤの魔女殺しの魔法が、かなり効いているようでシルフはゴバア、と血の塊を口から吐き出していた。そしてもう貧血と疲れて、彼女に大剣を振りまわすだけの体力は——もう残されていない。

ガラン、と大剣を地面に落としたシルフは、驚いた表情で俺の事を見てきた。

「今から少しだけ教えてやる。まだまだこの世界には希望が満ちて  
いるってことを——」

言いながら、シルフの懷深くに飛び込んだ俺。

拳を限界まで固く握りしめ、シルフの顔を睨みつけて、

「だからその前に——もう一度やり直してきやがれ、このクソ野郎オ！」

と拳がシルフの頬に突き刺さった。

ぐるりと、彼女の身体が数メートルほど宙を舞い、夜の海浜公園を転がった。やがて動きの止まったシルフはピクピクと、起きあがろうとするが……そのままガクリと気を失う。

「ハア、ハア、ハア……っ」

俺は息を切らしながら、気を失ったシルフの事をずっと見ている。  
ガラガラと、その横で自衛官達が武器を地面に落としていく。リ  
ーリヤも、少しだけ微笑み俺達の事を温かく見守っている。

終わった……勝ったんだ、この世界おれたちの人間の勝ちだ……ッ！



## 第172話、 風剣（ウインドソード）（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「どうも、今回はちょっとした報告！」

伊吹「なによ、またくだらないエロゲの話でもすんの？」

圭介「違う違う。活動報告でも報告したけど「作者による馬鹿なキャラ紹介」の紹介キャラを追加したんだ。あと、キャラが増えたから味方キャラと敵キャラを分割したんだ」

伊吹「う、ウソ……」

圭介「嘘じゃねえよ、ホントの話だよ」

伊吹「け、圭介が……マトモな話をしたわ!？」

圭介「驚く所そこかよ！ 本編で大活躍したのにこっちでは相変わらず扱いひでえな！」

## 第173話、新たなる力

ウチ——木下木葉は、ボロボロになって床に倒れている早川悠と、彼を蹴飛ばしているウチの同業者っぽい男を交互に見ていた。リーネの報告は正しかったのかな。確かに、このままだと同業者に早川悠は殺されてしまいそうだ。そして、ミネットちゃんの命もおそらくこのままでは——。

「ああ？」

同業者の男がウチのほうを向いてきた。

悪そうな顔……かな。

血も涙もないような雰囲気、金髪の鋭い眼光の白衣の男は、ウチのことを見ながらもずっと早川悠の事を蹴り続けていた。顔、首筋、腹など至る所を蹴られ、早川悠は血の塊を吐く。出来れば第一に早川悠を助けてあげたいけど、生憎ウチに戦闘能力は殆どない。

白衣の中に拳銃を隠してあるが、この近距離だとあまり効果はないかな。さて、ウチはここからどんな行動をするべきかな？

「なんだテメエ？ 学者気取りのクソガキか？」

「残念、ウチは真正銘の学者かな」

「チッ、そんな事はどうでもいいが……こっちは仕事だ。最も、その仕事を見ちまったテメエに生きる死資格なんてねえんだけどな」

指の関節を鳴らしながら、ウチの同業者はゆっくり歩み寄ってきた。どうする、ウチは白衣のポケットに手をつ込み、右手で拳銃をしつかりと握っていた。本当にどうする、今すぐ拳銃を抜いて男

に発砲すべきなのかな。

とにかく、今の状況はあまり好ましくない。早急に打破したほうがいいかな。

「おいテメエ！ まさか拳銃チャカ隠してんじゃねえだろうな！？」

まずい……あの男にバレたかな？

……と、手の内を読まれてまずいと思っていたその時——救いはウチを見捨てなかった。

バン！ と事務机を叩き、強引に立ちあがった早川悠が、

「おおおうあッ！」

勢いで飛びかかり、白衣の同業者にしがみ付く。離せ離せと同業者は喚くが、早川悠は決してその手を離そうとはしなかった。彼も必死なのかな……ミネットちゃんを守る為に。見た所彼は魔力を切らしているようで、戦闘力は殆ど皆無の状態なのに……それでも必死に戦っている。

ウチも黙っていられないかな。今のうちにミネットちゃんを助けるよう。

ウチは小走りで、ミネットちゃんが寝ている事務机に近寄った。

ミネットちゃんは静かに瞳を閉ざしている。小さく呼吸をしている、相当……衰弱しているのかな？

下手に動かすのはまずいかな。まあ、でもこれも予想の範囲内。

一応ウチだって医療の研究をしている学者さん、対策は既に練っている。科学と魔法を融合させた治療プログラムはもう組んである。今のミネットちゃんは危険な状態かな。意識を完全に失い、昏睡状態。だけどそれも予想の範囲内だから、ウチの治療プログラムを使えば危機から脱する事が可能かな。

さて……今から治療の開始かな。一応この治療には彼女の力も必

要かな。

「リーネ、ミネットちゃんはやっぱり昏睡状態だったかな」

『木葉さん、こっちは既に準備完了なの』

ウチは白衣から携帯電話を取り出し、リーネに電話を掛けた。ウチが開発した治療プログラムは結構単純なもの。元々脳死の人の為に開発したものだけど、それを応用すれば、もっと軽度な昏睡状態のミネットちゃんなら——脳死の人を救うよりも簡単かな。

あとはウチが、背後で早川悠と戦う同業者に——殺されなければいい話。

「それじゃあこっちはこっちで準備を始めるかな」

『お願いなの、ミネットちゃんと悠ちゃんを助けて——』

「わかっている。その期待に答え、新たな技術で人々を助るのが学者の務めかな」

言いながら、ウチは白衣の中から補聴器を取り出し、ミネットちゃんに装着する。

もちろんただの補聴器ではない。魔術的效果によってあらゆる音声を、脳に直接送りだす信号に変換する特殊な補聴器かな。開発に大体2年くらいはかかった気がするかな。だけど、この補聴器単品では何の効果も発揮しない。そこで——ウチの治療プログラムの出番かな。

補聴器から伸びている一本の線を、ウチが持っている小型の特殊受信機に接続する。

これで準備は完了したかな。

「リーネ、こちらの準備も完了かな」

『了解なの。今から音声ファイルを再生、受信機のほうは大丈夫なの？』

「問題ないかな。ちゃんとそちらの音声を受信しているかな」

『了解なの。それじゃあ木葉さん、音声ファイルに会わせて——』

「“歌”は最も伝わりやすい手段。しかしウチ、歌うのは中等部の合唱コンクール以来かな……でも、それで人が救われるのなら——頑張るしかないかな」

治療対象は昏睡状態。

それは外部からどんな刺激を受けても、脊髓反射以外の反応がない状態。でもそれはあくまで“歌”からの刺激。なら内部から、脳に直接刺激を与えればいいのかな。ウチの治療プログラムは脳に直接適切な単語を並べた歌を聞かせるもの。

確かに、プログラムと言えるほどデジタルなものではない。むしろ、機械を殆ど使わない原始的なアナログ方式の治療法。

それでも、昏睡状態から目覚めさせるには——この方法が一番かな。

——怪しげ女が部屋に侵入し、特異点に何かをしている。

さっさと止めなければ。俺——三原寅彦は多少焦っていた。だが、あんな小娘はすぐに止められんだろうが、その前に目の前をウザい

ヤツを叩き潰す必要がある。早川悠、コイツは既に能力を使うだけの演算能力を失い、理性も失っていると言うのに——何度も立ちあがってきやがる。

「なんだこの野郎オ！」

俺は血だらけになった早川悠の顔面を殴り飛ばす。後ろにあった事務机に、殴られた時の衝撃でぶっ飛ばされた早川悠は背中を打ちつけた。さらに俺は右足を大きく振り上げ、激痛で事務机に凭れかかるようにぐったりしている早川悠の顎に、思いっきり靴の先端を打ち込んでやった。

「いい加減しつこいっつってんだよ！」

そしてトドメを刺すように、大きく振り回した右拳を早川悠の顔面に叩きこむ。

完全に動く力を失っている早川悠は、そのままぐったり地面に倒れ、さっきまでのように勢いよく立ち上がりとはしなかった。ハハ……ざまあみろ、いよいよ力尽きたか。

そう思うと面白くなってきやがったぜ……ハハ、笑いが込み上げてくる。

[illegible]

あー面白エ！ まっ、結局テメエはその程度だったんだよ。たった一人で巨大な悪と戦って勝つヒーローなんざ、この現実世界には存在しねえんだよ。結局テメエも他の人と同じ、何かを信じて戦って失敗したゴミクス野郎って事さ。

ホントにざまあみろだぜ。さて、じゃあ息の根を止めたらあの小娘を殺して――、

「……あ？」

なんだ……この聞いた事のねえ音色は。優しさを感じる……チツ、コイツはとっくの昔にゴミ箱にでも捨てたモンだな。受信機からメロディーが流れ、歌を小娘が歌っている。日本語とは違う意味不明な言葉だった。ロシア語に近い感じだが……何語なんだこれは？

そして早川悠は一体なんなんだ。歌に合わせて口を動かしてやがる……コイツ、キレて理性なんてとっくの昔に失っているのに、その感情とは全く反対の歌を……何故口ずさむ。

「み、はら……」

「……っ？」

久々にマトモな言葉を口からこぼす。

まさか冷静さを取り戻した……いや、そんなハズがねえ。だとしたら、もっとクールな表情で俺を睨んでくるハズだ。だけど、今の早川悠は怒りに身を任せる猛獣。冷静さなんてモンはカラケも残っていないねえ暴走野郎である。だけど動きが不自然だ、キレたヤツのモンとは思えねえ。

それに何故だ。何故——アイツが杖ナシで立ち上がる事が出来るんだ？

ゆつくりと、フラフラしながら立ち上がった早川悠。

「三イイイ原アアああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

俺の名前を叫び、完全に立ち上がった早川悠。

どうなっている……ありえない事が起こりまくっている。早川悠、  
テメエはなんでその足で立ち上がる事が出来たんだ？

あの女の歌のせいなのか？

クソッ、そうだとしたら女から始末しておくべきだった。

……だが、こうなっちまった以上——仕方ねえよな。

「面白エ……テメエがその気なら——殴り殺してやるわクソガキが  
あああああああッ！」

「オおおおウああああアああッ！」

俺と早川悠が駆けだしたのは、ほぼ同時であった。

だが——先手を撃ったのは俺だ。

早川よりも速く懷に潜り込んだ俺は、早川悠の顔面に右拳を叩き  
こむ。ズドン！ という激しい打撃音が炸裂する。ぐらん、と早川  
悠の身体が揺らいた。

……が、それでも早川悠の動きは止まらない。

「おおおおおおおおおおおおおおああああああああああ  
あああああああ！」

聞いてて痛くなるような叫び声を上げ、なんと——早川悠は今の  
を堪えた。

失ったハズの脚力で踏ん張り、埃だらけの床に立ち続けたのだ。  
多くの血を見てきた真っ赤な瞳で俺を厳しく捉えた早川悠は、痛み  
を気にせず、カウンターをぶっ放してきやがったのだ。

ガゴン！ という轟音が響き渡る。脳を揺さぶられる顎への一撃。  
それは説明するまでもなく、早川悠の全力の一撃であった。だが  
……所詮能力のない早川悠は極細のもやしっ子に過ぎねえ。そんな



細腕から放たれる攻撃など——知れたモンだ。

「おおおおオオオエらあアアあああああああああッ！」

死ねや小僧！　と言わんばかりに叫びながら、拳を一気に顔面へ叩きこんだ。早川悠の端整で細い顔がメリメリゴリゴリと、嫌な音を立てて歪んでいく。痛いんだろうか、早川悠は血だらけの顔を必死に押さえていた。そんな早川悠の脇腹を——俺は何度も蹴り続けた。

何度も何度も、時々何かが碎ける音が聞こえた。赤い液体が周囲に飛び散る。俺の顔面にもソレは飛んできて、生々しい感触を感じた。

俺は口の周りについたソレを、いやらしく舌で舐めた……鉄の味がしたな。

「さて……殺すか。ほくら悔しかったら暴風の膜でも張ってみろォ！」

俺は後退りをしながら、白衣の中からパイナップル型の物体を、1個取り出す。

それは、俺の部下が持っていた装備品の一つ——手榴弾だ。

対人用殺傷兵器……フフ、はは……今のテメェに避けれるかよ。能力を使って爆発から逃れる事が出来るかよ。悔しかったらやってみろ……コイツで終わりだ！

そう思いながらピンを抜いた。そして——手榴弾を早川悠へと投げつける。

コン、と額に当たった手榴弾は僅かに跳ねる……すると。

凄まじい爆発音が炸裂し、破片を撒き散らす。

手榴弾が爆発したのだ。



「……ッ！」

刹那、粉塵が不自然に周囲へ吹き飛んだ。

そして生きているハズのねえ——早川悠が佇んでいたのだ。

真っ白で細い中性的な身体。傷だらけながらも整った顔。鋭い真っ赤な瞳。赤と黒の縞々模様の服に首にあるチョーカー。間違いない……けど何故だ、どうやったヤツは生き延びた。まさか超能力が復活しただなんて事はねえだろうな。

いや、ねえな。だってアイツにあんなことが出来るわけ……ッ！

「どうなってんだよテメェ……その真っ黒な翼は一体なんなんだア  
ああ!？」

早川悠の背中から——墨よりも、そして闇よりも黒く染まった翼が伸びていた。

待て、考えるんだ俺。アイツは大气そのものを操る超能力者。そうだ、きっとアレは風の操作か何かで生み出した翼なんだ。翼が待て、ヤツに関するデータにあんなモンは存在しない。かと言ってヤツが成長したとは思えない。むしろ弱体化したハズだ。

じゃあ一体……あの翼は何なんだ。噴射に近いが……翼は翼だ。だが、どうもアレは風の操作とは違うっぽい。じゃあ何の力なんだよアレは？

「——、」

その時、不意に近づいてきた早川悠に俺は捕まった。ぐわん、と伸びてきた右腕に顔を鷲掴みされてしまったのだ。クソ、油断した……だけど酸素の操作は行わない。普通なら、俺の皮膚に一瞬でも触れた早川は酸素濃度を操作し、俺を酸欠状態にしようとするハズだ。

だけど今回それが無い。

ありえねえ……コイツの思考パターンから考えて、絶対にあねえねえ行動だ。

この野郎……一体何の力で。新ネタか……だがこれは風の操作ではない。その応用ってわけでもなさそうだ。コイツ——何を考えた新たな能力を発現させたんだ。

まさか……魔道能力者。早川悠はその片鱗を持つ最初の存在だったのか？

首にある変換機。そこに蓄積された魔力によって変換された脳波を受け、その影響でコイツは自然と魔道能力者に進化していたのか？  
早川悠——テメエの身体は非科学にも対応しているのか……？

「テメエ、その翼……気付いてんのかよ……化け物がア……ッ！」

本当に化け物だ、俺とした事が見失っていた。

態々特異点を解剖しなくたって——実験材料はここに存在していた……ッ！

「——ッ！」

あまりにすごい言葉で聞きたれなかった。声にノイズが走り、この世のものとは思えない人外の言語で早川悠は叫んでいた。そしてその直後——背中<sup>の</sup>黒い翼が爆発する。

掌が不自然に黒くなる。その瞬間——俺は何らかの力によって吹き飛ばされた。説明不能の新たな力である。

凄まじい噴射に吹き飛ばされた俺は、恐るべきスピードで窓ガラスを突き破り……。

……………。

⋮  
○

## 第173話、新たなる力（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「こうして早川は完全にゼロリと化した」

伊吹「なにめでたしめでたしって感じの雰囲気になってんのよ！」

圭介「まさか……黒い翼まで来るとはっ」

暮葉「でも、結局あれは何の力だったのですか？」

圭介「さあ？ まあA○Mじゃあないでしょ」

明智「とにかく、アイツはまた一段と化け物になったわけだな」

圭介「これで再戦なんて話があったら……俺死ぬんじゃない？」

あかり「そもそもこのパク（ry インスパイアだらけ小説は何時まで続くんだよ」

千早「わたしの出番……増やしてくださいっ」

## 第174話、赤の軍神

俺は自衛隊の衛生要員に手当てを受けていた。ちょっと切り傷があるくらいだし、この程度ならすぐに完治するんだけどなあ……まあいいか。

海浜公園での戦闘では、陸上自衛隊に戦死1名、負傷者23名。多分、戦死した人はシルフに海へ蹴飛ばされたあの人だろう。ちくしょう……結局助ける事が出来なかった。それに、今回の騒動全体で見たら死傷者の数はさらに増えるだろう。

幸い、一般市民の大半は市外に退避している。一般人の犠牲者は恐らく少ない。

それでも犠牲者はいるんだろうな……。

風剣のシルフ。友達の為に孤立し、そんな現実<sup>もたら</sup>に絶望したこの女は……これから先どんな扱いを受けるんだろうか。単独で都市機能を停止させ、警察や自衛隊を撃破。さらに、街や市民に多くの損害を齎<sup>もたら</sup>したんだ。このまま野放し<sup>もたら</sup>って事はないだろう。

最悪、死刑にされちまうのかもな。

それでも俺はシルフを助けたい。事情を知っている者とし、似た者同士として……。

「藤島様」

「……ん、リーリヤか」

「ご心配なさらずに。風剣のシルフは我々のほうで回収します、とリーリヤは今後の方針を告げます」

「……わかった、けど一つだけ頼みがある」

「はい、なんででしょうか？ と、リーリヤは問います」

「確かにアイツは沢山の人を殺した。街だってブツ壊した悪人だけど……さ、即刻死刑にするとかじゃなくて——ちゃんとした形で罪を償ってほしいんだ」

「それはつまり？」

「重罰でもいい。でも、とにかくアイツを殺さないでくれ」

その言葉にリーリヤは黙りこむ。やっぱりダメか……シルフは、どう足掻いたって近いうちに処刑されてしまう運命なのか。とにかく、ここでシルフを見殺しにするのは後味が悪い。

なんとしてでも助けたい。しっかり罪を償って——もう一度やり直して欲しい。

現実には壊されたシルフに——救いを与えてやりたい。

「……わかりました。全てこちらの一存で決定できる事ではないですが、善処はしてみます……と、リーリヤは貴方と約束してみます」

「頼むぜ、暮葉の上司さん」

絶対には言えないが、それでもシルフが生きれる可能性が生まれた。これで、シルフが深く反省してやり直してくれればいい。もしまた道を間違ったら、その時はその時。シルフを逃した責任は俺にあるんだから、その時も俺が戦えばいい。

今度は誰も巻き込まない、俺とシルフのタイマン勝負だ。

……その時、

突然、シルフの攻撃で崩れかけた建物が爆発を起こす。



黒煙と粉塵で周囲が覆われる。

「ぐっ！」

「……っ」

破片から目を守るように、俺は咄嗟に両手を上げた。リーリヤも、そして自衛隊の隊員さん達もチラッと確認すれば、同じような行動を取っている。

「待て、あの女は？」

「いないだと？」

そして、2人の自衛官はある事に気付いた。今の爆発の後、さっきまで捕らわれていたハズのシルフが居なくなっていたのだ。まさか、今の爆発はシルフのせい？

いや、それはないな。シルフは風の魔法の使い手。第一、俺はアイツを派手にぶん殴ってアイツも完全に気を失っていた。目を覚ましたとしても、動ける体力はもう残っていねえ。つまり今の爆発はシルフの魔法じゃねえ。もっと違う——第三者が現れたんだ。

やがて、空気中の粉塵は風と雨で次第に消えていく。

そして読み通り——第三者と思われるシルフを抱えた男が、残骸の中に立っていた。

「誰だッ！」

思わず俺はそう叫ぶ。

あの肌の白さは白人……かな、茶髪の筋肉質な男であった。しかも、大柄で筋肉質な割には爽やかな雰囲気で、日本人離れはしてる

が重原に近い雰囲気を放っていた。いや、重原とも微妙に違うかもしれないな。なんせあの男……俺達には絶対に出せない、渋い雰囲気も放ってやがる。

若々しく見えるが、やや年老いた中年のオッサンのようである。爽やかでイケメンな上に渋い……か。

女受けしそうだけど、そんな事を考えている場合ではないな。

「私はこの子の回収に来た者だ。そちらに回収されれば、間違いないシルフは処刑されるだろうからな。命が消えてしまう前に——こちらで回収する事にしたのだ」

「そんな事はどうでもいい。それより名前を名乗れつつってんだよ！」

「邪炎じゃえんのサラマンダー。シルフと同じく、赤の軍神の一人だ」

「てめえ……」

その名を聞いた瞬間——俺は拳を握った。

コイツがシルフの仲間だったのはわかった。そして、同じ赤の軍神である事も。その実力は未知数だけど、シルフと同等の力を持っているとしたら——かなりまずい。

俺も疲れている。ここにいる自衛官達も疲れている。リーリヤは……わからないし期待できる実力かも不明である。ちくしょう……万事休すか？

……だが、邪炎のサラマンダーと名乗る男は静かに微笑み、

「心配ご無用。今回はこれで退くつもりだ」

「……なんでだよ。てめえらの目標ターゲットならここにいるんだぞ？」

「こちらにも色々事情はあるのだ」

「そうかよ……まあ色々言いたい事はあるけど、何よりもまず——シルフを離せよ！」

「断る、この子は仲間だ。敵に身柄を引き渡す真似は出来ない」

言いながら、サラマンダーは背を向け立ち去ろうとする。

おい待てよ……シルフをどこへ持っていくつもりだ。

あの野郎は——どこに逃げるつもりなんだよ。

「おい待て！ てめえにはまだ山ほど文句が残ってんだよ！」

「……ふん、一つだけ警告しておく。私はただの魔術師ではない。そのアルファ隊の隊長と同じ——聖人だ」

「せ、聖人……？」

「教会に認定された神に近い存在だ。ちなみに、私は神を否定するサヴィエトの事は嫌いだ」

「なんでだよ……じゃあなんで、てめえはその地位にいるんだよっ！」

「その話はまた今度——貴様に用事がある時にしようではないか？」

言いながら、邪炎のサラマンダーを中心に再び爆発が発生した。爆風と熱波が俺達に容赦なく襲い掛かってくる。そして、やっと目を開けたと思いきや——そこにはもう2人の姿はなかった。

邪炎のサラマンダー。

何者だったんだ……アイツ。サヴィエトとは逆の思想を持つてゐるのに、なんであの男はサヴィエトの、しかも赤の軍神なんて所に身を置いているんだ？

次第に疑問が深まっていく。聖人……チツ、どこぞのねーちゃんかよ。

いや、アレはゴツい男だからアツ○アさんか？ だけど炎タイプっぽいし……。

とにかく、何かこの先——まずい事が置きそうだ。

雨は嫌いだ。

水は炎を消してしまうものだからな。最も、私の出力からしてみれば、この程度の雨など大したことはないのだがな。私——邪炎のサラマンダーはシルフを抱え、古宇坂市を脱出した。

最も、早急に日本国内から脱出しなければ、すぐに追手は来るだろうが。その追手と言うのが先程の聖人リーリヤか、あるいはこの国の治安維持組織かは知らぬ。後者は余裕だ、だが前者とあればこの私とて少しは手こずりそうである。

やれやれ……と、その時。ポケットの中に振動を感じる。

携帯電話……ふん、硬質こうしつのノームであるか。

「ノームか」

『いかにも、硬質のノームとはこの私の事ですよ。そちらの仕事は終わりましたか？』

相変わらず……耳に障る声を持つ男だ。

私はこの男があまり好きになれない。私がこんな世界に堕ちる前の、神聖なる教会に所属していた頃からの同僚だが、その時からノームに対する気持ちは変わっていない。

外道で騎士道精神から外れた——ただのムカつく嫌味親父だ。

「たった今、風剣のシルフを回収し、市内から脱出した所だ」

『それにしても情けないですねえ。赤の軍神たる者が別働部隊の支援もありながら、高々地方都市一個さえ落とせないとは……全く歴史に残る大敗北ですよ』

「アルファ隊と例の裏切り者が活躍したらしい。あれだけの人数がいた別働部隊は7割が壊滅した。貴様の方こそ敵の戦力を甘く見過ぎではないか？」

『それでも、別働部隊の雑魚はともかくシルフは赤の軍神の一員です。標的に敗れるようでは、その資格を持つ価値があるか疑いたくなりますねえ』

「街全体に特殊な術式が働いていた。いくらシルフとて、その術式に圧迫された状態では全力を出し切れなかったのだろう。事実、彼女の本気はこの程度ではない」

『ふうん……しかし、貴方は随分負け犬の肩を持つのですねえ……邪炎のサラマンダー』

全く……赤の軍神はどいつもこいつも、自分本位な連中ばかりだ。騎士である私からしてみれば最悪な連中だ。それにシルフの肩を持つのは当然の事。私はこの子の真実を、つまりこの子の辛き過去を聞かされた人間の一人なのだ。だから私だけでも——この子の味方

でいるつもりだ。

そんな事は……一度も口にはしていないのだがな。

口にできるわけがない。彼女の過去は——他人が語れるほど軽いものではないのだ。

「貴様の方こそ冷酷さは相変わらずだな……硬質のノーム」

『まあいいでしょう……さて、そろそろ戻ってきなさい邪炎のサラマンダー』

「面倒くさいな……なんなら私が今から引き返し、標的も回収してやってもよいが？」

『命令違反ですよ。帰還命令は聖波せいばのウンディーネの命令でもあります』

「レニナの命令であれば、即刻引き返すのだが……ヤツの命令か」

『いけませんよおサラマンダー。そのような台詞を聞けばウンディーネは怒るでしょう』

「……ふん、まあいい。失言であつたな」

『そうですよお、それではさっさと引き返してください。上も今回の失敗を受けて相当お怒りのようですからねえ。こちらも、一応お咎めが最小限になるよう努力はしていますよ』

「了解した、今から帰還する」

返答すると、私は電話を切ってポケットの中にしまい込んだ。

気がつけば、私は古宇坂市のほうを向いていた。アルファ隊に隊長の聖人、そして風剣のシルフの攻撃を喰らってもなお立ち上がり続け、その事情に胸を痛めたあの標的。その標的の少年に感銘を受け立ち上がった自衛隊という、日本の国防組織……。

その三つが重なり、この風剣のシルフを完膚無きまでに叩きのめした。

「硬質のノームよ……古宇坂、そして日本は——貴様が思っているほど甘くはない」

これは一大事である。魔術世界における歴史に残る……大事件だ。敵を甘く見るな。私は直感で感じた……敵は想像以上に手ごわい連中であると。

全く……レニナのヤツは、とんでもない輩を狙ったモンだ。

藤島圭介……あの男の力は、一体——。

自衛隊基地近くの田園地帯……だった場所。大きな爆発と火災が発生し、畑だった場所は焦げ臭い焦土と化した。さらに中心点には爆発の影響で、クレーターまで出来ていた。私——白藤早苗はこのクレーターの中で倒れていた。

鼓膜が吹っ飛ぶかと思ったよ……身体もバラバラになるかと思った。でも、直撃の寸前に瞬間移動テレポートしたお陰で、死だけは回避できたよ……。

「……っ」

痛い……手を見ると血がべっとりついている。あはは……明日、

学校に行つて圭介の顔を見る事が出来ないかもしれない。

でも……よかったのかな？

侵入者は撃退した。これで……少しは恩返しになったのかな？  
でも……っ。

「……っ！ けほっ！ ごほっ！」

咳き込み、血の塊を吐きながらのろのろと立ち上がった。それが  
限界……ダメージが大きすぎて歩くことが出来ない。もう少し……  
休んでからのほうがよかったかな。

でも、とにかく早く圭介に教えないと——赤の軍神が本格的に動き  
始めたって……っ。



## 第174話、赤の軍神（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「さて、そろそろ秋アニメの季節だな」

大吾「f a t e／z e r o最強だろ！」

重原「大吾は厨二病だからねえ」

圭介「は？ C3はいいパンツアニメだったろ！」

重原「圭介は典型的萌豚だからねえ。どうせISでブヒってたんでしょ？」

大吾「広ちゃんはどうかんだよ！」

圭介「そうだ、てめえさっきから文句しか言ってねえじゃないか」

重原「俺は全ジャンル見るよ」

圭介「なにそれすごい」

大吾「ある意味神だな」

## 第175話、新たに手を組む者達

「ふう、ミネットちゃんはこれで平気かな？」

ウチ——木下木葉はミネットちゃんの救出に成功した。今はただ気絶しているだけ、昏睡状態という危険な所からは抜け出せたみたいかな。だけど、しばらくは安静にしておくべきかな。

後は早川悠、この人を救わなきゃ。今、早川悠は事務机に寄りかかっている。どうやら完全に気を失っているようだ。その上鼻や口、頭からも血が流れている。これは……ちよつとどこじゃないくらい危険な状態かな。早く救急車を呼びたいけど……困ったかな。

ウチの携帯がさっきの通話で切れてしまった。ウチ一生の不覚かな。充電くらいはしておくべきだったかもしれない。でも、下のフロアに電話があつたはず。回線が生きていれば、そこにある電話で救急車を呼ぶ事が出来るかもしれない。

「君はよく頑張ったよ。最後に使った能力だけは不思議だったけど……それでも、君はミネットちゃんを守り抜く事が出来たんだから」

言いながら、ウチは早川悠の頭を撫でていた。

こうして見ると寝顔は可愛い。人の寝顔ほど素直なものはないかな。

こうして撫でていると、まるで弟が出来た気分になる。

「もう少しだけ待ってて欲しいかな。君も必ず救う——今から救急車を呼ぶから」

流石に今回、怪我を治す治療プログラムは持ってきていない。こればかりはこの世界のお医者様に見てもらった方が確かかな。だから

らもうちょっと待ってて欲しいかな。

その前に倒れないでね……。

ウチは早川悠やミネットちゃんに背を向け、オフィスから飛び出してた。電話がある下の階に行って救急車を呼ぶために――。

……く、そ……結局、どうなっちゃったんだ……？

世界が暗い。体中が痛エ……頭がぼんやりしてやがる。部屋は静かだ、さっきまで木下木葉の声が聞こえていた気がするが、結局三原のクソ野郎はどうなった。

このオレ――早川悠は三原のクソ野郎に勝ったのか。でも思い出せねエ……仮に勝ったんだとしたらオレはどうやって戦った。超能力も使えねエ、歩くこともままならねエオレが、どうやってあのすばしっこいクソ野郎と……しかも三原の姿がない。死体すらない気がする。

あの野郎オ……どこに消えたってんだア？

「……あ……あ……？」

今にも再び眠っちまいそうなほど、意識がぼんやりとしている中、木下木葉のものとは思えねエ新たな足音が聞こえてくる。複数……チッ、どこかの集団が来た見てエだ。

まさか、三原か……クソ、この状態じゃ戦えねエぞ。

「貴方が早川悠でしょうか。少々、お話してもよろしいですか？」

飛んできた声は妙に落ち着きのある男の声であった。三原じゃねえエ、声して聞いてねエからわからねエが、三原よりも若い感じに

聞こえるな。誰だァ……知らねエ声だ。まさか学園から送られてきた新手のクソ野郎じゃねエだろうな？

男の姿はよく見えないが、周りには顔さえも隠した兵隊が銃を構えている。要は特殊部隊に守られるようなヤツ、相当高い地位にいる野郎ってワケか。

「……何の用だ、オマエは何者だ？」

「ヴィンペル隊……と言っても貴方には意味がわからないでしょう。我が国のアルファ隊が魔法少女による特殊部隊だとすれば、ヴィンペル隊は男の魔法使いの部隊ですね。任務は近頃はアルファ隊と同じ事が多めですが、本来は魔動力施設防護です」

つまり……この世界の連中じゃねえ、ミネット達の世界の連中か。しかもアルファ隊の仲間のヴィンペル隊と来た。名前だけはミネットから聞いた事がある。人員こそアルファ隊の上をゆくが所詮は後方の施設防衛が任務。装備や隊員の質はアルファ隊に劣っているらしい。

最も、ミネットから聞いた話でしかねエがな。

けど何故——そんな特殊部隊のヤツがオレの所に来やがったんだ。

「何の用だ……オレとヴィンペル隊に接点なんてあったかァ？」

「殆どありません。貴方の事もお話程度にしか聞いておりませんよ」

「はン——まァいい、話くらいは聞いてやろオカ」

「聞いていたよりも紳士的なお方で助かります、それでは本題に移りますね。早川悠、我々と行動を共にする気はございませんか？」

行動を共にする……このオレが異世界人——特異点とか。

例外的にミネットやリーネというガキとは行動を共にし、木下木葉って異世界人の科学者には変換機の事で世話になった。

だが、それだけでアイツら以外のヤツと、行動を共にする理由にはならねエ。

「……どオ言う事だ」

「今回の騒動では佐井学園の有力部隊が動き、貴方や我々の仲間を襲撃しました」

「三原のクソ野郎か」

「ええ、その三原という男の手によって、我々の仲間にも重傷を負った者もいます。それに、彼らは貴方が一度目的を阻止した程度で思いとどまるとは思えません」

「そりゃあな、あの学園に情けも容赦もねエ。やる事は最後までやるだろうさ」

これでもオレは少し前まで学園で、散々汚エ仕事をやってきた身だ。だから、あの学園の内部の事情はコイツらよりは詳しい自信がある。

オレが暴れた程度じゃ——あの学園は絶対に止まらねエ。

「ええ、学園は貴方の敵でもあれば我々の敵でもあります。それだけではありません、サヴィエトと言う組織の行動が最近活発になってきています。アルファ隊とヴァインペル隊の二隊のみでは、両方の問題を片づける事は不可能です」

「軍はどオした。オマエらの国にもあるンだろ？」

「まだ、正式に戦争をやっているわけではありません。増してやここは我々からしてみれば異世界です。おおっぴらにこちらの正規軍を送りこむ行為は、少々常識に欠けると思うのですよ」

「そオかい……ンで、結局オマエは何が言いたいんだ？」

「貴方の力はそのまま軍事方面に利用可能です。現在、我々は過去に罪を犯したものの、戦力になる者を集めて新たな部隊“ザスローン”を創設しようと考えています」

オレは過去に罪を犯した……と言う所で反応する。

罪人……チツ、それってオレの事じゃねエかよ。

「へエ……で、丁度いい罪人がここにいたと？」

「貴方は我々の仲間を数十名ほど殺害しました。ここだけの話、一時はサヴィエトの魔法使いよりも貴方をどう倒すかの話で、当時襲われていたアルファ隊やその仲間の我々ヴィンペル隊。そして我々の上にある連邦特殊情報総局は盛り上がっていましたよ」

「そりゃあどうも、随分と有名人だった見てエだなオレはア……」

「はい、結局貴方も罪人です。しかし罪を償うことは可能です。命の危険を晒してでも平和を取り戻す事が出来れば——貴方の罪は償われると思いますよ」

そんなんで償えるなら悩みはしねエよ……とは思ったが、悪イ話じゃねエな。要するに罪人を集めて新部隊を創設し、それで学園や

サヴィエトと戦おうってわけだろ。こんな形と言ってもついでに学園を潰せるってシなら、確かに丁度いい話かもしれねエな。

まっ、同時に気に入らねえ話でもあるが。

こんなヤツらの下につくことが気に入らねえ……。

「一つだけ教えろ。その新部隊を創設したらオレらは何をすればいいんだ？」

「色々やってもらう予定ですが、大きな仕事としては佐井学園の解体。そして我々と共にサヴィエト亡命政府を崩壊に追い込み、アリーナ・ウラジミールヴナ・レニナらの身柄を拘束する事です」

「なるほど、戦いの原因を根元から潰すってかア」

「それで、どうしますか？」

どのみち、散々人を殺しまくったオレはもう——光の道に戻ることは出来ねエ。

それでもオレには守りたいモンがある。

だが、光という場所からそれを守る事、いや……居る事さえ許されねエ。オレが唯一存在出来るような場所と言え、今誘いを受けている闇の世界。闇の世界は血も涙もねエが、だからと言って何かを守ってはいけないという決まりはねエ。

なら俺の進むべき一つ——闇の世界から光の世界を守ることだ。

「好きにしろオ……」

「わかりました。それでは貴方を新入りとして迎える事にしますよ——」

これでいいんだ……。

どんな形だろうと、ミネットを守ることが出来るなら——これで別に……。

こうして、オレはもう一度闇の世界に戻ったのだ。それも、ミネット達と出会う前に暮らしていた所よりも深い闇の世界にな……。  
悲しいなア、一度光を知ってからこの世界に入るのは……まアいい。そんな甘ったれた事を考えている暇があるなら——学園をどオ潰すかを考えたほうがよさそうだ。

雨が深々と降り続け、私の能力によって生まれた炎も気がつけば鎮火していた。

私——明智風紗は黒ずくめの男達と戦っていた。藤島と木下を守る為にな。大胆に超能力を使って戦っちゃったけど、まあ多分大丈夫だろう。この黒ずくめ達はおそらく、佐井学園で暗躍していた連中に違いない。私が超能力を使っても驚かなかったし……十中八九そうなんだろう。

それにしても、どうして佐井学園の組織が動き出したんだ。それが何故、藤島や木下を狙って攻撃していたんだろうか。

私は濡れたアスファルトに倒れる黒ずくめ達を見る。

うーん……謎だな。結局この者達は何の為に動いていたんだ？

「あら風紗、丁度いい所で発見したわ」

ん、この声……不意に誰かが話を掛けてきたが、この声は間違いない——。



「雪乃……？　こ、こんな所でなににして――」

「貴女を探していたのよ。私もずっとこの街にいたのよ？」

「そ、そうなのか？　だから避難所で見かけなかったんだっ」

「そう言うこと。それでね風紗、ちょっとお話があるんだけど……  
いい？」

「うん、構わないぞ」

「ありがとう。それじゃあ早速話をするわね」

倒れている黒ずくめの人達を見ても驚かず、何時もの調子で話を続ける雪乃。確かに雪乃も元々佐井学園の生徒で、1年の頃は私のクラスメイトだった。

多少の事では驚かないのもわかるけど……それにしたって無反応すぎるぞ。どうして雪乃はこの人達を見ても驚いたりしないのだろう？

だけど次の瞬間、

「一緒に佐井学園と戦わない？」

そんな疑問を吹き飛ばすほどの――凄い事を雪乃は口にした。  
学園と戦うって……私達があの佐井学園と？

流石にぶっ飛び過ぎているぞ、あの学園と真正面から戦おうだな  
んて……っ。

「確かに、私もあの学園に対していい印象は抱いていないけど……  
でも」

「大丈夫よ。最大の敵——早川悠も今や学園の敵だわ」

「ど、どういう事なんだ。雪乃っ」

「言葉のままよ。この黒ずくめの人達は佐井学園の暗部組織の人達よ。そして、この人達は早川悠と戦っていた。どういう事か説明しなくてもわかるわよね？」

「本当……なのか？ あの手が学園の敵に回ったってっ」

「おそろくね。でも、これで学園側の戦力は大幅に低下したわ。今なら私達が手を組めば学園を叩き潰すことが出来るかもしれないわよ？」

確かに雪乃は強い。五本指（こぶし）と呼ばれる、佐井学園に在籍する生徒の中でも特に強い超能力者の中でも3番目の実力を誇る。それで彼女——西園寺雪乃の強さだぞ。

だけど、それに比べて私は単なる発火能力者（パイロキネシスト）。雪乃のように特別強い能力を持つていわけじゃない平凡な超能力者。

それに敵にはまだ——実力第2位の超能力者がいる。

さらに——第4、第5、それ以外に彼らには及ばないながら、強い能力を扱える強者どもが学園には沢山いるんだぞ。私と雪乃が手を組んだって勝ち目なんか……。

「本当に……大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。確かに正面勝負でこちらに勝ち目はないわ。でも、作戦を練って一つずつ確実に敵を倒していけばそれは可能かもしれないわよ。それに私が作ろうとしている反学園組織“フレンド”のメ

ンバーは、現時点でも私だけじゃないのよ？」

「……？」

と、その時。

街灯さえ灯っていない道路の真ん中、暗闇から一人の少女が現れる。ゆっくりと歩く少女はどういうわけか、半袖夏仕様の初芝の制服を着用している。まさか……初芝の生徒なのか？

やがて少女は雪乃と並んだ。

化粧がいらぬ程に整った顔。肩まで届く紫色のしなやかな髪。その両サイドに赤いリボンが結ばれた活発そうな雰囲気放つ少女だ。

……待て、この子もしかして――。

「あ、朱実……？」

「えっ、ウソ！ ホントに風紗じゃん！？」

雪乃の隣に並んだこの子は木山朱実<sup>きやまあけみ</sup>。確か1年の頃、つまり私がまだ佐井学園にいた時のクラスメイトだ。それと確か、雪乃の幼馴染でルームメイトだった気もするぞ。

だけど……どうして朱実が初芝の制服を？

「紹介……しなくてもわかるわよね？」

「あたりまえだろ。それより朱実、その制服……」

「転校してきたんだよん♪ だって雪乃が心配だったしね！」

「……って事は、それじゃあフレンドのもう一人のメンバーって」

「——そう、朱実よ。朱実は戦闘には不向きだけど、朱実の偏差電<sup>オフザープホリック</sup>換は敵の大まかなスペックを知れる便利な能力だわ。おまけに朱実は武器にも詳しいのよ」

「いやあ、父が軍オタだったから自然に知識がついちやったんだよねー」

朱実<sup>オフザープホリック</sup>は偏差電換という、対象物を分析し、数値で観測する事が出来能力の持ち主。

対象物を分析する能力だから、人の戦闘能力や武器の性能、それどころか気象観測もある程度まで行えるらしい。私の能力より使えるかもしれないぞ……でも、あくまで朱実の偏差電換<sup>オフザープホリック</sup>は対象物を観測するだけで、決して力が向上するわけではない。

朱実<sup>オフザープホリック</sup>は戦闘タイプじゃない。

朱実<sup>オフザープホリック</sup>は強制されるのが嫌だから、雪乃に強制されたわけじゃなさそうだけど、だからってこんな危険な世界に足を踏み入れて欲しくないぞ。相手は生半可な気持ちじゃ勝てない相手だ。

「朱実、どうしてフレンドの一員になったんだ？」

「どうしてって……うーん、雪乃を助けたかったから？」

「雪乃を……？」

「うん、学園さえ潰せばあたしらは自由の身だしね！」

自由の身……確かにそうだ。あの学園が消えてなくなれば、誰も学園のくだらない計画の犠牲になる事はない。今日だって、木下が撃たれる事もなかったんだ。

早川悠だって学園さえなければ、あそこまで外道にはならなかったハズ。この黒ずくめ達も学園がなかったら、今頃普通の人として日常を営んでいたかもしれない。

あの狂った学園さえなければ、藤島が襲われる事も……っ。

「もちろん無理にとは言わないわ。友達を危険な目に遭わせたくないのは私も一緒よ……なんなら、私は一人で戦う覚悟だって出来ているわ」

「それはダメ！ あたしもあんたの力になるの！」

雪乃も朱実もやる気満々だ。自分の身を守る為に、友達を守る為に。これ以上、学園の行動による犠牲を増やさない為に――。

それなら……私だって、藤島を学園から守りたい。

木下の仇を討ってやりたい。この黒ずくめ達に襲われた藤島達を守りたい――。

覚悟は決まったぞ。決心した、私には――守りたい人がいる。

「……わかったぞ、私も戦う」

「風紗……」

「風紗、本気！？」

「うん、このはは2人を放ってはおけない。それに私にだって……な？」

あえて詳しい事は言わなかった。

だって……なんか、その……恥ずかしかったからっ。

「……わかったわ」

「雪乃、これでメンバーは3人になったね！」

「そうね、でも3人じゃ勝ち目がないわ。だから今から——仲間探しをしましょう？」

……こうして、私と雪乃と朱実。佐井学園の現実を知る3人が集まり、フレンドという反学園組織を立ち上げたのだった。

それは学園を潰す為——大切な友達を守る為に……。

## 第175話、新たに手を組む者達（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「やっと話が進んできた」

大吾「もう本編だけで175話。番外話も全部カンウトしたら184話だよ」

重原「正直長過ぎだよねえ」

圭介「ホントすみません。でもまだ終わる気配がありません……っ」

大吾「赤の軍神にサヴィエトそのもの、佐井学園とか問題は山積してるしな」

重原「果たして何話まで続くんだろうねえ？」

圭介「知らねえけど、ようやく8・17編もお終いだな」

大吾「長かったあ……」

## 第176話、穏やかな日常

8月22日、月曜日。

先日のシルフらが暴れた一連の騒動は、8・17事件と命名され、日本の歴史に残る大事件として記録されたのである。俺こと藤島圭介もあの後色々忙しかったんだ。取り逃がしたとは言えシルフの暴走を止めた功績は警察に評価され、なんと俺は警察協力章を受賞した。

しかし、それと同時に色々事情聴取を受けたりで、結局騒動の影響で翌日は臨時休校となってその翌日、19日も事情聴取の為に学校を欠席。

土日も殆ど休めず、そして今日……ようやくいつもの生活に戻る事が出来たのだ。

「ふわぁ……けーすけ様ぁ、眠そうですねっ」

「お前も人の事言えねえくらい眠そうだな……」

「あんた達昨日ちゃんと寝たの？　というか、ここ数日ずっと連絡つかなかったわよ」

「お兄ちゃんとクーにゃんはあの事件の後、忙しかったみたいだけど何やってたの？」

「俺も暮葉も犯人に遭遇してたから、警察とかから事情聴取を受けてたんだ」

「もきゅ！？　そ、そうですよ！　だからしばらく忙しかったのですっ！」



っと、言っても5割ほどは嘘になる。

暮葉はあの日、太股を撃たれたが大事には至らなかった。その場で組んだ、回復術式というヤツが効果を発揮したらしく、翌日には被弾した後さえ残っていなかった。

しかしその後、暮葉は今回の騒動の始末書執筆に明け暮れ、同時に今回の残業もしなければいけなかった為、俺と同様ここ数日はめちゃくちゃ忙しかったと言うわけである。その為俺達2人はここ数日プライベートな時間が少なく……と言うより睡眠も殆ど取っていないのだ。

まあでも、暮葉が残業してましたーなんて、伊吹はともかく葵には言えないよね。

「ホント？ 暮葉はともかく、あんたはまうたアニメかゲームじゃないの？」

「違うわっ！ ここ数日ホントに忙しかったんだよ！」

「そうだよね、お兄ちゃんここ数日ずっとお出かけしてたもんね。きつと禁断の兄妹愛がバレて近親相姦と言う事が問題になったんだよ！」

「うわっ！ あ、あれほど葵ちゃんに手を出さなって言ったのに！ ばか圭介っ、変態！」

「けーすけ様！ 近親相姦は最低だと思うのですっ！」

「違うわ馬鹿共！ ああもう、お前ら朝っぱらからしつこい！ いい加減にしろ！」

けど、こういう日常が戻って来たんだよね……。

よかった、こうしてコイツらとくだらない話をして、一緒に笑って……やっぱり平和ってモンは伸び伸び出来ていいもんだなあ。

それから数十分後、学校に到着し、1年の葵と別れた後に教室へ向かった俺達。久々に登校してきた暮葉を女子達は温かく迎え、俺の所にも――。

「は、ぐうあわっ!？」

突然、両サイドから飛んできた拳が俺の頬を捉えた。俺を殴ったのは、三馬鹿の黒木と赤佐の得に馬鹿な2人組であった。ちくしゅう……なんていきなり殴られたんだ!

「いきにやりにやにしゅんれすひゃっ!？」

「ニュース見たぞデメエ!　なに勝手にヒーローになっちゃってんだよ!」

「でも、犯人逃がしちまったあたりが実に藤島らしい、アホなミスやったなあ」

「つーかシルフが何だか知らねえけど!　俺が戦えばよかったぜ!」

「そうやな黒やん!　そうすれば、今頃伊吹ちゃんも黒やんにメロメロやったでえ?」

「なんで藤島の前でしか大事件が起きねえんだよ!　なんで俺出番がねえんだよおお!」

そう、コイツらの言う通り――俺の顔はニュースで全国に流れて

しまったのだ。

単身犯人と戦い、事件を終息に導いた高校生として――。  
そのせいだろう。黒木と赤佐は大活躍した俺に嫉妬しているようである。だからって思いっきり顔面ぶん殴る事ねえだろうに……地味に痛え。やっぱりこの2人強いじゃねえかよ。でもシルフと戦ったらボロ負けしそうな気がする。コイツらじゃあの風に耐えられるか微妙だぞ……？

「よかったですねけーすけ様。すっかり有名人なのです！」

「僕も毎日ネット確認してるぜ。圭介のヤツ、今時の日本人にしては骨があるって高評価だったな」

「そうだねえ、リアル上〇さんとまで言われてるらしいよね」

誰が上〇さんじゃ、好きで戦ってんじゃねえんだよこっちは。だって向こうが俺や暮葉達を狙って襲ってくるんだから、自分の身を守る為にも仲間を守る為にも仕方ないじゃん。

全く……赤の軍神って何人いるんだろう。

というか、サヴィエトとアルファ隊の戦いっていつ終わるんだろうか。戦いが終わらないと皆で伸び伸び過ごせないじゃないか……って、あれ？

そういえば……。

「……っ」

「久々に学校に来てくれて喜ぶ圭くんの嫁でしたっ」

「なっ！？　　ば、そそそそんなわけないでしょ！　　大体嫁って何よ嫁って！」

「さあ、あたしは何も言っていないけど？」

「……別に、圭介が来たって嬉しくなんかいいわよ」

ツッパリ伊吹はいつも通りだけど、今日の2年4組には何かが足りない。そう、携帯電話に文字を打ち込んで他人と話をするという、大変ユニークな会話をするお方がいないのだ。

どうしたんだろう。いちいち覚えている俺も気持ち悪いかもしれないが、アイツは少なくともこのクラスになってから休んだことは無かった。いや、噂だと去年も皆勤賞。一日も休まず成績も優秀だったらしいのに……今まで皆勤賞だった人がいないと、やっぱり心配になるなあ。

とりあえず、確認だけでもしておこう。

黒木と赤佐はまだ暴走状態だし、大林は……チツ、あいつサボりかよ。時々あのチビ坊主学校サボるから困ったもんだ。

伊吹と小坂は仲良さそうに話してるし、ここは暮葉が大吾達に聞いてみよう。

「なあ、白藤は今日どうしたんだ？」

「もきゅ？　　そういえば今日は一度も見えていないのですっ」

「ああ、白藤さんなら怪我で入院らしいよ？」

「入院？　　重原……ソースあんのかよ？」

「ソースかい？　　いつも通り大吾情報だし、間違いはないと思うよ？」

「フッフ……僕の情報網をナメない事だな！」

またおまえか！

情報収集能力相変わらず高えなオイ。多分CIAもビックリだろうな。大吾は情報収集能力の高さに定評のあるヤツだ。しかもコイツ、毎回かなり正確な情報を掴んでくるのだ。コイツの情報網って一体どうなってんだ？

高○涼介だってここまで情報収集できるか微妙だぞ。

「しかし入院って……大丈夫なのかアイツ？」

「心配しなくても平気だぜ圭介。僕が昨日入手した情報によると退院は今日だ」

「てめえは何でそこまで知ってるんだよ！？」

「僕は歩く情報本部だ！ 知らない事など何もない！」

真っ先にプライバシー侵害で罪に問われそうな渾名だな。しかも情報本部って、随分とまあ微妙なチョイスだな。ここはカッコつけてCIAIって言ったほうがよかったんじゃないか？

「でもよかったのです！ 大吾さんがそのことを知っている理由はともかく、白藤さん今日で退院らしいのですよ？」

「ああ、重傷じゃないっぽいしな」

いつ入院したのかまでは知らないが、8月17日以降彼女を見ていないし、多分17日から今日までの5日間だろう。仮に17日に入院したとしてもたったの5日。どうやら、白藤は怪我と言っても

そこまでひどい怪我を負ったわけではなさそうである。

よかったよかった……だけど、やっぱり心配である事には変わらない。

学校が終わったら会いに行つてやろうかなあ。

でもアイツと親しく話せるのは俺だけだし……だからと言って、俺だけで行くのもなんだか恥ずかしい気もするな。よし、家に帰るついでだ。暮葉と葵を連れていくとしよう。

白藤は特殊な子だけど、暮葉も葵も不思議っ子だ。

多分、変人同士で仲良くなれるだろう……。

よし、放課後の予定は決まりだな。白藤のヤツ——元気にしてるだろうか？

## 第176話、穏やかな日常（後書き）

・後書きトークコーナー！

凧紗「相変わらず藤島達のクラスは賑やかだなあ」

雪乃「そうね、羨ましいわ」

圭介「お前たちのクラスはどうなんだよ？」

凧紗「まあ、賑やかと言えば賑やかだぞ？」

雪乃「私のクラスもよ？　賑やかな事は賑やかだわ」

圭介「じゃあ別にいいじゃない——」

純奈「ナギちゃあああああああああん！」

凧紗「うわっ！　こら、離れろすみにゃん！」

朱実「ゆっきっの〜ん！」

雪乃「ッ！？　ああああ朱実っ！　スカートめくりは自重して欲しいわっ！」

朱実「ごめ〜ん☆　つい学園にいた時のノリでやっちゃった♪」

圭介「お前ら、俺以上に苦労してるんだな……っ！」

## 第177話、ザスローン

8月22日早朝。

つつても……こんな所じゃ朝か夜かは分からねエ。ただ、頼りになるのは所々に設置されているデジタル式の時計のみだ。

このオレ、早川悠はヴィンペル隊が建設会社に依頼して作らせたという、灰色の分厚いコンクリートに囲まれた巨大な地下空間で訓練を行っていた。

そう、的に正確に銃弾を中てる——射撃訓練だ。

今のオレは残念なことに、超能力の使用に制限がかかっている。その為、制限時間内なら以前のように思いっきり暴れられるが、それを過ぎればただの身障者。戦うどころか、杖がなければ満足に歩くことすらできない弱者となるのだ。

そんな状態では戦えない。だが、この世界には情けも容赦もない。だから、オレは通常モードでもある程度戦えるようにならなくては、この先すぐに死んでしまおうだろう。

その為の訓練だア……。

「コイツは反動がでか過ぎてしっくりこねエ……次はコイツだ」

トカレフTT-33を目の前に台に投げ捨てると、今度は別の銃を左手に持つ。イタリアのベレッタM92っていう、今でも軍や警察で使われているヤツだ。しかも、コイツはマガジン・キャッチが左右差し替え可能らしい。右手が杖で塞がっている今のオレには優しい拳銃かなア。

「どうだい早川、俺の目から見たらまだまだ修行不足みたいだけど？」



突然声が聞こえた。

オレは特に振りかえらず、そのまま返事をする事にした。  
何故なら、ソイツが誰だかわかったからなア。

「ラウル・ゲリエ……何の用だア？」

「出来れば、素顔は故郷以外で晒したくなかったんだけどね」

ラウル・ゲリエ……元サヴィエトの魔法使って話だったな。

変装が得意な中米出身のブードゥー教信者で、素顔は確かそこそこ端整な容姿を持つ色黒な男だったハズだ。見なくてもわかる、ここに来た時に一度姿を目撃したからな。

「言つとくが、オレに化けた所で余計に命を狙われるだけだぞ」

「それくらいわかってるよ。所で武器は決まったかい？ 君も今日が初陣だよ」

「悪イが、銃はオレの肌に合わせてねェみたいだなア」

オレは一度持ったベレッタM92を台に置き、身体ごと後ろに向ける。やっぱりそこには色黒の上はTシャツ、下はジーパンというシンプルな服装の爽やか野郎が佇んでいた。

「仕方ないよ、君の能力は制限時間付きだからね」

「侮辱してンのかア？」

「そう聞こえたなら謝罪はするよ」

「チツ……まっ、オマエの言う通りだ。今は変換機コイツに頼れねエ」

「何故だい？ 確か“ザスローン”の技術部の報告によると、君のソレは30分に延長されたのだろうか？」

「知ったような口聞くんじゃねエよ……コイツは機械だ。機械を壊すのは簡単だ」

「なるほど、つまり壊れたらお終い……と言うわけかい？」

「それで終わったらオレは戦力外だ。話にならねエだろ」

やれやれ……ラウルのヤツも嫌な性格してやがる。同じ部隊にいる者として、オレの情報も少しは知っているハズだったのに……チツ、ここも周りは敵だらけだ。所詮、ラウルも他のメンバーも利害が一致しているだけだ。ちょっと裏を返せば全員危険な連中、全て敵に回る可能性もある。

最もオレも同じだがなア……。

コイツらが使えねエなら容赦なく切り落とす。もし、ミネットやリーネ達を狙うってんなら容赦なく愉快な肉塊に変えてやる。

オレはアイツらさえ——守る事が出来れば他の全てを失ってもいいんだ。

「ハハ、まあそれは置いといて……そろそろ仕事の説明をしてもいいかい？」

「何だ、オレの初仕事ってのはア？」

「街の不良退治だよ」

「あア？ チツ、サヴィエトや佐井学園を敵に回して戦う組織が、街のゴロツキを掃除するたアね……こりゃ驚きだア。で、何でオレ達からしてみれば無害そうなゴミを掃除するんだ？」

「有害だからだよ、俺達が不良を潰そうとしているのは？」

なにィ……？

チツ、オレ達は映画に出てくる嫌な教頭役かよ。それってアレだ、その不良共を救おうとする熱血教師に社会的に殺される展開じゃねエのか？

つーか、何で頭もなければ力もねエ、そんな不良共が有害なんだ？ 常識的に考えてみる。確かに一般人にとっちゃあ奴らは脅威だ。だが、全員武器や何らかの力を持つザスローンからしてみれば、殆ど無害にしか見えねエだろ。

「……どオ言う意味だ」

「古宇坂市には複数の不良集団が存在しているが、その中でも最大一派である白陵高校の不良達が最近、サヴィエトらしい組織と関わりを持っているらしいね。武器の提供を受けているらしいよ」

「はーン……で、ソイツらの狙いは何だ？」

「アレクサンドルの子孫拘束。俺も一時はソイツを狙った……まっ、負けたけどね」

「そんな強いヤツなら、放置しても大丈夫じゃねエのか？」

「確かにそうかもしれないが、人は誰でも数と武器の前には弱いんだよ」

それはオレ達超能力者にも言える事だな。オレにはあまり関係ねエが、他の超能力者は1対1での勝負なら確かに強いモンだ。だが複数が相手で、かつ武器を持っているとしたら……ソイツは間違いなくその超能力者を襲撃した連中の勝利だろう。

超能力者は無敵じゃねエンだよ。

基本的には他の人間と同じ——数と武器の前には無力なのだ。

「要するに、ソイツをオレらが支援するってワケだな」  
バックアップ

「その通りだね。個人的には気に入らないが……ま、仕事だから仕方ない。特に連中に対する忠誠心があったわけでもないし、別にどうでもいい話だよ」  
サウイエト

「ンで、ターゲット標的は誰だ？ 不良集団全員か？」

「現在白陵高校は船木健太の転校により、永渕派による一党独裁状態が続いているんだ。今回その永渕派のリーダーである、永渕晃の生首を切り落とすよ」

「永渕晃ねエ……」

「どこかで聞いた名前だな……まあいい、ソイツが今回の標的ってわけか。後で顔写真でも見せてもらおうとしようか。」

今回の任務……アレクサンドルってヤツの子孫拘束を阻止するべく、サヴィエトに雇われた不良共の頭の首を切り落とす。簡単な仕事だ……簡単すぎるぜこの程度オ。

「彼はその子孫を大変憎んでいるようだ。だから、サヴィエトと手を結んだんだろうね」

「報復の為に身を売り払ったってかア、笑えねエ話だな」

そのアレクサンドルの子孫ってヤツが何者か知らねエし、興味もねエが……ソイツはサヴィエトと言い永渕ってクソ野郎といい、よほど多くの人間に恨まれてるんだな。それってソイツにも責任があるんじゃないのか……って、オレがそんな事を考えても仕方ねエな。仕事は仕事だ。乗り気じゃねエが……相手はサヴィエト。やらないきや——ガキ共を守れねエ。

それから数十分後、最低限の装備をしたオレはすぐに現場へ急行した。

どうやら現地へは自動車で移動するらしいが……オイオイ、ちょっと待て。この黒くて荷台が金ぴかしているこの特殊な車は……、

「ラウル・ゲリエ。何で霊柩車なんだよ？」

オレは不機嫌そうに、電話でラウルに質問してみる。

まだ死んでねエのに霊柩車になんか乗りたくねエぞ、オレは。

『永渕晃の死体を運ぶからだよ。一応永渕晃は日本人だし、近藤さんの提案で死体の処理は日本式のほうがいいって事になったんだよ。俺としては祖国のやり方がよかったんだけどね』

「死体を運ぶからって霊柩車とは、しかもコイツら葬儀屋じゃねエだろ？」

オレは隣で車を運転している男を見ながら、思った事をそのまま

ラウルに告げた。

オレの隣で霊柩車を運転している男は中年だ。

だが……どう考えてもカタギには見えねエ。なんなんだよ……ピンク色のふざけたスーツにスキンヘッドで顔面に傷があつて、その上怪しげなサングラスまで付けてやがる。

こんな露骨な暴力団員、むしろ怪しまれるんじゃないか？

『その通り、今回は高田組と言う暴力団の方々に協力してもらっているよ』

「どう考えても最近話題の暴排条例に引っ掛かるんじゃないか、コレ？」

『大丈夫、俺らも十分反社会的な組織の一員さ』

そオだな……下手すりゃヤクザよりヤバいかもなアオレらは。なんせ、これからオレらは殺しの為に武器や能力を使いまくるワケだ。やれやれ……佐井学園に戻った気分だ。結局オレに来る仕事は全部汚れ仕事だ。

「チッ……」

『それじゃ、俺はそろそろ仕事があるんで切るね』

「勝手にしろオ」

『一応、武運長久を祈るよ』

「へいへい……」

こうしてラウルからの電話は切れた。

まったく、好きな事を散々言いまくりやがって。次の仕事ねエ……ま、どうせあの複製変装野郎の事だから汚エ仕事なんだろう。

そんな事を考えていたその時、組員が運転していた霊柩車はゆっくり停車する。

窓から周囲を眺めると、どうやらここは市内にある廃工場らしい。永渕達のテリトリーか。つか、不良の根城が廃工場とはありがちだな……。

「そんじゃ、後で回収に来るから白い兄ちゃん、気を付けてくださいえ」

「オマエらは戦わねエのか？ どオセ武器とか持ってンだろオ？」

「俺らが高校生をバラすのはマズいだろ？ だからアンタ、代わりに頑張ってくれな」

どっちも一般人からしてみれば、全く同じようにしか映らねエだろ。ザスローンもヤクザも非合法的活動を行う所じゃ、全く同じようなモンじゃねエか。

ただ、ヤクザにはそれなりの仁義がある。

オレらはその仁義ってヤツすらねエ——ただの無法者の殺し屋。それがヤクザとオレ達の——唯一の違いってヤツだろう。

黒く、黄金に輝く霊柩車から降りたオレは、杖をつき工場内へと足を踏み入れる。

随分とまア汚エな……閉鎖してから何年放置してたんだろうか。こんな場所を閉鎖してからいつまで経っても解体しねエから、永渕達不良がたまり場に変えちまうんだぞ。この廃工場はそこそこ広い上に死角も多い。不良がたまり場に使うには丁度いい場所だ。

「ふん……懐かしい空気だア」

こういう所は不良以外にも——馬鹿共がよく根城にする。  
佐井学園時代、オレはこういった所を根城にするクソ野郎共を——  
何十何百とブツ殺す任務を繰り返し遂行していた。それだけに、  
こういう場所は懐かしいなア……悪い意味でな。

「さて」

そろそろ行くか……と思った所で携帯電話が鳴った。  
画面には近藤政信と表示されている。

コイツもザスローンの一員——現代に生きる武士を自称する男だ。

「近藤か、何の用だア？」

『ちょっとお前さんに伝えておきたい事がってなあ』

古臭い喋り方で近藤はそう言ってくる。流石武士、言葉使いも古  
風なこったア。

「……何だ？」

『なあに簡単な事よ、今回の作戦。今、俺達の紅一点——アナスタ  
シア・アベルツェフが奇襲をし掛けた所だ』

アナスタシアという、ザスローン唯一の女隊員ってヤツの名前を  
聞いた瞬間、

突然、鼓膜が破れるような轟音が轟いた。

僅かに砂埃が不自然に宙を舞い、どこかへ飛んでいく。

チッ……あの女、また泥人形でも作ってンのか？



「あの女は拠点攻略と言うより、拠点防衛の方が向いてンじゃねエのか？」

『それは俺も思っただけだなあ、ゴーレムってのはインパクトが強いだよ。不良さんをビビらせんには俺の刀やラウルの魔術より、ずっと効果があるって事よ』

「でっ、それで混乱した連中をオレが一気に潰せばいいのか？」

『その通りよ。まっ、俺達は永瀏晃の首さえ切り落とせばいいのよなあ。出来る事ならそれ以外は生かしておいて欲しいもんよ』

「チッ」

オレはそこで電話を切った。

永瀏以外は生かしておけてねエ……そりゃあまあ、サヴィエトと関わっている事実を知ってるのは永瀏くらい。下っ端の不良がそれを知る術はない。だからってなア……まあいい、要するに永瀏以外を殺さず任務を遂行すりゃあいってワケだなア。

面白エ……久々にゴロツキ退治だ。

オレはそう思いながら笑みを浮かべ、変換機のスイッチをonにする。瞬間、懐かしい超能力者の感覚が戻ってくる。戻った、負傷する前のオレの状態に――。

「永瀏晃、コイツを殺せばいいんだな？」

オレは静かにポケットから写真を取り出す。

悪人面な上にラインアート入りの坊主頭……いかにもってヤツだな。

まあとにかく、コイツ以外は殺すな……。

「さてと、そんじゃあ……オレも仕事を始めるとしますかア」

コイツ——永渕だけを肉塊に変えるんだ。

## 第177話、ザスローン（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「うわぁ、懐かしい連中がいっぱいだ……」

暮葉「作者は今までの敵キャラを使い捨てにしたくなかったらしいのですよ」

圭介「だからって……ねえ？」

暮葉「そしてその為に犠牲になる永渕さん、ある意味可哀想なのです」

圭介「っていうか、永渕って攻撃手段が殴る蹴るしかないじゃん。どうやって早川と戦うんだ？」

暮葉「さあ、次回以降になればわかると思うのですっ！」

圭介「お前、地味に宣伝してるだろ？」

## 第178話、永刈晃

チツ……やっぱ不良は不良だ。

弱いつて言葉がお似合いだった。オレは連中をものの数分で黙らせたのだ。酸素濃度を操作して酸欠状態してしてやっただけ。それで黙ったヤツらに拳銃を打ち込み、その足に風穴を開けて動けなくしてやったのだ。たったそれだけで——殆どの不良は無力な怪我人と化したのである。

超能力は殆ど使っていない。

三原との戦いで少しは学習したんだよ……これでも。それに、この程度の相手にそんな長時間能力を使う必要なんざねェんだ。一瞬、ちよつとだけ使ってやれば——それで十分だ。

「さてさて、永刈晃はどこだア？　今まで潰してきた連中の中にいたか、それともアナスタシアのヤツがブツ殺したか……つまんねェなア」

と、一応敵が残っていないかの確認を行う為、オレは工場内を歩いていたが、

「ハッ、なんだよ。俺達に喧嘩売ってきた奴は一人じゃねえのか」

不意に、そんな声が耳に入ってきた。

どこかで聞き覚えのある声……そういえば、一度初芝高校に行った時、こんな声の野郎と揉め事を起こした気がする。その時はソイツ、国宗って女にボコられて……。

まさかとは思うが、永刈晃ってあの女にやられたクソ野郎じゃねエよな？

あ？　と振り返ると、やっぱりな——永刈晃は国宗にボコられた

男だった。

「テメエ、前に初芝で会ったよな？　ムカつくもやし野郎がよお」

「するとオマエが永渕晃か。国宗にボコられた子犬ちゃんが何吠えてンダア？」

「チッ、あん時は油断したんだよ。それに見ろ、オマエの仲間ならこの通りだぜ？」

永渕晃の右手を見ると、ぐったり力が抜けているアナスタシアが掴まれていた。

どオ言う事だ……泥人形使いのアナスタシアが不良に負けるたア、現実には小説より奇なりって言葉がピッタリの事態が発生してるぞ。

永渕の野郎オ……単なる不良が、どうやってあのゴーレムを破りやがった？

「どオやって殺した？」

「まだ死んじやいねえよ。後で俺の食い物になってもらう予定だからなあ」

「とんだマセガキみてェだなオマエ。つか、あのゴーレムはどオした？」

「最初はビビったぜえ？　けど、この女をぶん殴ったらゴーレムは消滅したぜ」

なるほど、ゴーレムを叩かずアナスタシアを叩いたか。確かに、力のねエ奴が取る行動としては最も適切だ。永渕の野郎もいい判断

をしやがる。

という事は、アナスタシアは油断したってワケか……馬鹿女が、ゴーレムがいるからって安心してゐるからこうなるんだ。いくら相手が雑魚の不良でも、警戒はしとけっつーんだよ。

「ハッ、オマエ面白エなア？　けど、オレはその面白いヤツを今から殺す」

「何言ってるんだもやし野郎。俺を殺すなんざ馬鹿げた真似が出来ると思つてのか？」

「おめでてエヤツだ……これじゃあ、殺される理由さえ理解してねエだろうな」

「デメエ……完全にナメてるな！　殺すぞコラア!？」

「オレを殺す……か。随分粋がつてンなクソ野郎オ」

「うっせえんだよもやし。オラア、やれるモンならやってみろってんだよ!」

あーハイハイうるせエうるせエ……そんなじゃ、期待通りにしてやるか。一瞬でぎゃーぎゃー喚いてゐる目の前のクソ野郎をブツ殺す。オマエはもう——ミンチ確定だ。

「チッ!」

オレは変換機のスイッチをonにした、これで超能力が使える。アナスタシアが永渕の野郎の手元にある以上、あまり派手な技を使えばあの女も巻き込む結果になる。別に、オレはアナスタシアが死

のうが関係ねエが……殺せば確実にペナルティがあるだろう。

だったらついでだ——アナスタシアも助けてやろう。

風の操作を実行。

一步、力強く足踏みすると、足の裏から吹き上げるような風が発生し、ロケットのような推進力で一気に永渕との間合いを詰める。

ぐわん、と五本の指を大きく開き、永渕の顔面を鷲掴みしようとする。

木下や圭介には能力発動中、暴風の膜を使えねエって弱点を見破られ、特に後者には隙を突かれぶん殴られたが……この野郎にそこまでの頭はねエだろう。

増してや、この速度に対処できる不良は——いねエハズだ。  
しかし、

「オラア！」

永渕は右手でアナスタシアを放り投げて来た。

慌ててオレは前身を中止し、左足をダン、と地面に突きつけ、風の操作で今度は一瞬で10メートル以上の高さまで上昇する。アナスタシアを避ける事が出来た。永渕の野郎も、流石にこの高さまでジャンプ出来る程の身体能力は持ってねエだろう。

「チッ、バケモノかよ……あの女といい、まあいい……ッ！」

ここで僅かに気になる事がある。なんだ……あの永渕の余裕そうな表情。どう考えても今の状況を理解しているとは思えない、勝者の表情である。あの野郎オ……まさか、このオレと自分自身の実力を分かってねエのか？

しかし、そう思って笑みを浮かべていた——、

「——ッ！」

刹那、永渕は悪あがきをするようにジャンプをするが、跳躍力がありえない。普通ならぴょんと跳ねる程度で終わる。それが一般人の跳躍力で、鍛えたって変わるモンじゃねエ。

ところが永渕は違った。

一度跳躍すれば10メートル以上。オレと同じ高さまで飛び上がり、オレが驚いている隙を突くように不敵な笑みを浮かべ、永渕は固く握った拳を振りかざしてくる。

「オマエ……ッ！」

オレは咄嗟に暴風の膜を張り巡らし、永渕の一撃を防いでやった。普通なら弾き返された衝撃でそのまま地面に叩きつけられるハズだが、永渕は何事もなかったかのように着地する。

どオ言う事だこれは……あの動き、そこらの不良のレベルを遥かに超えている。

「ンだア、この運動性能はア？」

「魔法衣服マジッククロースだったかな。奴らも便利な道具をくれたモンだ」

あの野郎、服の裏に特殊なモンを巻いてやがるな。その名前が魔法衣服マジッククロース、名前から推測するに魔法の力で運動性能を向上させる特殊な衣服だろう。

チッ、サヴィエトめ。くだらねエモンを永渕に供与しやがって。アナスタシアのバカは油断しているところを、卑怯なアイテムで強化された永渕に隙を突かれたワケだ。これならアスリート並に鍛えているって自慢していたこの女を、アッサリ沈められるワケだ。

そうか……そっちがその気なら、オレも手エ抜く理由がなくなつた。



オレは風の操作を行い、ゆつくりと地上に降りる。  
視線の先には永渕晃——装備品で強くなったつもりのクソ野郎の  
姿のみ。

「そオかい……そりゃ油断している女を倒せたワケだ」

「テメエも今すぐ沈めてやんよ。俺はテメエに勝たなきゃいけない  
……勝って藤島に復讐して伊吹ちゃんを手に入れなきゃいけないん  
だよ！」

永渕は腰の周囲に装着したヒップホルスターから拳銃を出し、そ  
の黒光りする殺人用の道具の銃口をオレに向けてきやがった。

オレは特に何もせず、黙って永渕を睨み続ける。

ホルスターに収容してある拳銃さえ抜かない。常識的に考えれば、  
銃を向けられても黙っている今のオレはただの馬鹿か、余程自信の  
あるヤツにしか見えないだろう。

前者か後者か、オレにとっては何の関係もねエが……。  
少なくとも、

「それに前の借りも返さねえとな！　だからさっさと死ねや、この  
もやし野郎があああ！」

永渕の銃から弾丸が放たれた。それでも——前者になる気だけは  
しなかった。

「な、あ……があ……っ」

永渕が放った一撃で勝負は決した。

勝敗は接戦の試合を見るより明白だろう。

オレは何もしなかった。ホルスターにしまっただけある拳銃を抜かず、

かと言って事前に退避したり永渕に飛びかかりもししていない。弾丸を避けると言う荒技は流石に不可能だ。永渕が放った一発の銃弾は間違いない命中した。

命中した弾丸は柔らかい肉を突き破り、鮮血が服にまで染みている。9mmの弾丸は脇腹の肉を食いちぎり、弾は貫通して真っ赤な穴が開いている。

赤い液体はボタボタと、荒れた地面に落ちて染みてゆく。

「う、そ……だろ？」

絶望を感じているような声を漏れる。

やがて口の中にまで血が広がいき、ダラリと涎のように赤い液体が口から流れ出す。

「——なんで、銃弾が跳ね返ってきたんだよ？」

その台詞を聞いてニヤリと、獲物を仕留めて喜ぶ猛獣のような笑みをオレは浮かべた。

薄く薄く薄く、血に飢えたような笑顔を浮かべて、

「オマエも敵の情報を事前に調べておくべきだったな。いや、調べなくてもさつき拳を反射されて時点で気付くべきだったなア？」

「どういうことだ……まさかお前——何らかの力で反射を？」

そんな馬鹿なという顔で、オレの真相に迫ろうとしている永渕。全く、オレの本質に迫ろうとするのが遅すぎるんだよ。流石は脳味噌が足りてねエクソ野郎って所か。

まあいい、最後に特別にご披露してやろうか——オレの超能力<sup>チカラ</sup>を。

「さアって、と」

オレはその場に杖を置き、腰に両手を当てて再び永洌を見直す。恐怖と絶望のあまり後退りをしてゆく永洌晃を、今一度厳しく睨みつけてやった。

「ただの不良と超能力者の違い——今から徹底的に教育してやるオカア？」

脅すように言ってやると、永洌は慌てて拳銃を構える。やれやれ、さっき弾丸を反射してやったってのに学習能力がねエヤツだ。きつと手が使えるからそんな行動を取るんだろう。なら永洌の右手を封じてやればいいんだ。手が潰れて使い物にならなくなったら——少しは頭を使うようになるだろう。

「遅っセエンだよオ！」

オレは足元にある小石を蹴飛ばしてやった。それだけだった。

にも拘わらず、爆発的な速さで小石は飛んでいった。それこそ、拳銃から放たれた弾丸のように目で追えない速度である。

蹴りはオマケだ、本質は風の操作である。

蹴飛ばして浮いた小石を——風の操作で加速させぶっ飛ばしたのである。

「ぐアあああああああああああああああああ！」

ぐちゃり、と嫌な音が炸裂する。

小石は永洌の手の甲を貫通した。ザクロの用に引き裂かれた右手を、押さえようと身を丸めてしまったが、その程度の攻撃で永洌が

死ぬわけがない。

死なねェから——オレは次の攻撃を仕掛ける。

「さっきまでの威勢はどうしたんだ三下ア？　もっと楽しませろよコラア！」

ダッ、とオレは陸上の選手のように駆け出す。それも常識的な速度ではなく、風の操作で加速することによって、獲物を狩ろうとするチーター並の速度でオレは駆けていた。

一瞬で間合いを詰め、血に染まった永渕の服を鷲掴みし、とりあえず近くにあった廃倉庫の壁へ思いっきり叩きつけた。

衝撃で壁がへこみ、ダメージを受けた永渕が鮮血を吐き散らす。立ち上がろうとするが、ダメージが大きすぎて立ち上がれないようである。

ハッ、これで終わりだな……。

「なア、気になるンだけだよォ……死ぬ間際ってどんな気分なんだ？」

「く、そ……藤島に勝つ前に……こんなもやしに……っ！」

「ハッ、オマエいいヤツだなア。ただの不良なら普通、必死こいて命乞いするだろうに」

「当たり前だ。俺は死なねえ……藤島に勝つまでは、伊吹ちゃんとやるまでは……」

「だが残念だア、その理由が気に入らねェ」

その言葉を聞き、永渕が残った左手で拳銃を構えた。ハハ、学習

能力がねエのかオレに殺されるのが嫌だから、せめて自殺でもしようとしてシのか。

どっちにしてもコイツは死ぬ運命だが……殺す前に一つだけ言うておこう。

「オマエの言葉でオレは——余計にオマエを殺したくなった」

「くそ、テメエ……何者だよ」

「何者？ そオだな……殺し屋だ」

言った瞬間——ドン！　と言う銃声が周囲を振るわせた。

オレの暴風の膜は銃弾に対して鉄壁だ。跳ね返った銃弾は永渕へ直撃し、文字通り弾丸が胸に刻まれ無様な姿を晒す結果となった。

胸部から血を流し、ぐったりとしている永渕。

弾丸は心臓を撃ち抜いたようだ。

ショックで即死か、仮に生きてたとしても数秒か数分以内にくたばるだろう。

「……」

終わった……文字通り血塗れな結果で仕事は終了した。

オレの初仕事はこれで完了だ……。

チッ、これからずっとこの世界での仕事か……オレも闇に堕ちたモンだ。

## 第178話、永刈晃（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「アナスタシア……アンタの扱いのひどさには泣けてくるぜ」

あかり「えっ？　なんでだ？」

圭介「あかり、お前出番くれとか言っていたけど、アナスタシアに比べたらお前は幸せだよ」

あかり「だからなんでだよ？」

圭介「出番早々気絶状態。永刈に武器として使われた挙句、しかもセリフ無し」

あかり「……」

圭介「だからあかり、余計で無駄な高望みはしないほうがいいぞ。世の中にはもっと不幸な人がいるんだから」

あかり「……うん！」

葵「納得しちゃダメだよ！？　お兄ちゃんの口説きに毒されちゃダメだよ！」

千早「出番……くださいっ」

## 第179話、死闘の一方で

——早川と永渕が死闘を繰り広げていたその頃、圭介達は……。

「when she was a university student, she would often travel a broad road. これを……藤島、日本語に訳しなさい」

えっ、ちよつと待てサッパリわからん……英語ダメダメなんだよ俺。

現在、2時間目の英語の時間。どうしようか、絶体絶命のピンチである。今、英語教師である細木先生ほづきが俺に当ててきやがったのである。くどいようだが、俺は英語というものが大の苦手科目であり、毎回赤点ギリギリ……いや、去年は赤点取ってたような気がするんだ。

それくらい英語が苦手だったのに……ねえ？

そんな俺が日本語訳なんて出来るわけないじゃん。だけど、一応頑張ってみよう。

暮葉にいい所を見せて——俺が知的である事を教えてやる！

sheは彼女、studentは学生。んで、確かworldってのが世界だったような気がする。それから予想してそれっぽい文に翻訳すれば完璧だ。

……よし、翻訳出来たぞ——きつとこの文は……ッ！

「彼女は腐ったミカンじゃねえ、世界の学生だ！」

決まった……完璧だ。ここまで完璧な翻訳は人生初めてである。アルベルト・アインシュタインが一般相対性理論を発表したのと、同じくらい凄いことを言ったような気がするよ。

しかし、何故か周囲は黙りこむ。

と言うか、細木先生は呆れたような表情を浮かべ、

「藤島、君はちゃんと中学に行ってたのか？」

「失敬な！？」 一応初芝に入られだけの学力はありましたよっ！？」

「……はあ、藤島が期末で赤点回避できるか心配だ」

ちくしょう、細木先生に軽くスルーされた。だから嫌だったんだよ、英語で当てられて答えるなんて俺にとっちゃ自殺行為だよ。一人で革命を起こすくらい無謀だったんだよ。

大体今更気付いたけど、ミカンって英語でオレンジじゃねえか。さっきの文にはどこにもオレンジって書いてなかったし……はあ。ため息をつきながら、俺はゆっくりと座った。

「あたしって、ほんとバカ」

「圭介、もしかしてさ○かちゃんのつもりかい？」

俺の独り言に、重原がツツコミを入れてきた。

どうやら俺がいない間に席替えがあったらしい。俺と重原と大吾、野郎三人は仲良く揃って窓側の席になり、俺が最も窓に近く、重原は隣で大吾は重原の前に座っている。

暮葉と席が遠くなったのは悲しいが……でも、大吾や重原が近くにいれば、それなりに面白い会話も飛び交い、なんだか時間が前より早くなったような気がする。

「うぐ、そんな簡単に元ネタが分かるとは……流石重原」



「まあね、俺はさ○かちゃん派だし」

「なっ!？　　ば、ほ……ほ○ほむが一番だろっ!？」

「心配すんなよ圭介。独りぼっちは、寂しいもんな……いいよ、一緒にいてやるよ……圭介……」

「気持ち悪いわ大吾オッ！　　っかてめえはまさかの杏子派かよっ!？」

「いや、僕はマ○さん派だ。あの太股はたまらないね!」

どっちにしても大吾は変態だった。まあ、二次元限定だけど。大吾は二次元には欲情出来るが三次元には全く興味ナシ、日頃から「三次は惨事」と言っているくらいだしな。三次元に対する失望と二次元に対する愛情は多分、俺には理解できないレベルに達しているだろう。

俺はまあ二次元は超大好きなんだけど……今は、ねえ？

そう思いながら、ふと俺は暮葉のほうを見てしまった。ちくしゅう暮葉……どうして久々に学校だったのに席遠くなっちゃったんだよ。何か知らねえけど寂しいじゃないカ!

「お前ら授業中だぞ！　オタク談義は休み時間にしなさい!」

「「「す、すいませんでした……っ」「」」

クスクスとクラスメイトの笑い声が聞こえる中、俺たち三人は細木に謝罪をする。

ところで細木よ、なんで今のがオタク談義ってわかったんだ？

まさか細木、教師の癖に結構アニメとか見る人なんじゃ……まあ

いいや、ぶっちゃけ細木がどんな趣味を持っていようがどうでもいい。そもそも細木に興味がないからな。

「ところでさ、僕最近肩こりひどいんだけど、どうすりゃいいと思う？」

「そんなの、身体を動かして解せばいいんじゃないかい？」

「それで肩こりが治るのはお前だけだろ広ちゃん！ 圭介はどう思う？」

「どうってそうだなあ。俺は揉んでもらってるけど？」

「ふふ、どうせ圭介は妹に揉んでもらってるんだよ」

「やっぱり圭介はリア充だな。まあ所詮妹と言えども現実の産物だが！」

なに言ってんだコイツら……つか、別に俺と葵は家族なんだし、危ない行為をしているわけじゃないんだから別にいいだろ。肩揉みしてくれるくらい懷かれてると考えれば、兄としては「キモイ」と罵られるよりは遥かに気分がいいと思うぞ。

まあ、うちの妹はそれ以上の事をしようとするから、困ったもんなんだけどな……。

「つか、お前ら身内とかいねえのかよ？」

「そんなものはとっくの昔に捨てた！ 僕は悲惨な現実の家族を切り離れたのだ！」

大吾は相変わらずのダメ人間っぷりである。早くなんとかしないと……いや、もう現代医学でも太刀打ちできないかもな。きっと医者も黙って首を横に振ることだろう。

「それはそれで救いようねえぞ……重原はどうなんだよ？」

「俺の家は道場だよ？ そんなに優しい親なんていないさ」

「ですよー」

予想通りのあまり、思わず棒読みになってしまった。

そうだ、重原の実家は道場だった。さぞ厳しい家庭なんだろう。家族の仲がいい家庭もあれば悪い家庭もあるが、そうやって見ると俺って家族仲いい方だったのか……。

日常が滅茶苦茶すぎて全然自覚がなかった……ごめんなさい。

「圭介の妹だってきつとそのうち圭介離れるんだ……現実なんてそんなもんさっ！」

「なに泣きながら叫んでるんだよお前……っ」

「やっぱ姉も妹も母親も二次元に限る！ 劣化する上に歳とる度に性格も悪くなる現実はクソだ！ だから僕は画面の中の家族を一生愛する事にするよ！」

「お前なあ……」

大吾は三次元への失望を吐きだすように叫んでいる。馬鹿だ、馬鹿がいる。そりゃあ兄と妹なんだからそのうち離れる運命にあるだろう。というかそれが自然だと思うんだ。例外的にうちの妹がそれを

望まないだけであって、俺はそれを結構心配しているんだよ。

だってこのままじゃ葬……絶対彼氏とか出来ないだろ。

お兄ちゃん心配だぞ。将来俺なしで一人立ちできるか不安だぜ。

「けど、やっぱり圭介の家は俺から見ても羨ましいよ」

「そうか？」

「俺の家なんて食事中はほぼ無言だよ。喋る暇があるなら精神統一しろとかだね」

「随分とまあ特殊な家庭だな。道場だからってレベルを遥かに超えている気がするぞ」

「まっ、それは両親の前だけの話だけどね。姉や弟とは結構話すよ」

「結局てめえも家族とは仲良しなんじゃねえか！」

ちくしょう騙された。みんな家庭の事で色々悩んでるんだなって思ったのに、重原のヤツ親がアレなだけでその他とは仲がいいんじゃないか！

「コラアお前ら！ 今は授業中だぞ、心温まる話は後にしなさい！」

「「「すいません……っ」」」

しかも家族の話を授業中にするモンだから、細木に説教されたじゃねえか。そもそもなんで家族の話になってるんだよ。最初は確かに肩揉みの話をしていた気がするぞ。肩揉みの話からいつの間にか家族の話になっていて……結局、誰が最初に肩揉みの話をしたかが重

要だな。

俺の記憶では確か大吾。そう——コイツのせいで俺たちは細木に怒鳴られたのである。

全くいらん話を振るモンだから……結局、その後は静かに授業を受けていたが、クラスメイトの皆さんが俺ら三人を見ながらクスクス笑っていたのは、ここだけの話である。

ああ、それより青空が眩しいなあ……。

そして平和だなあ、こんな一日が長く続けばいいんだけど……。ていうか、ロクにアニメも見れない日常は嫌だから続けてくださいお願いします！

俺はサッパリわからない授業を放置し、青空を眺めながらずっと考え事をしていた。

## 第179話、死闘の一方で（後書き）

後書きトークコーナー！

雪乃「前回と比べたら随分温度差があるわね」

凧「私達の日常と、早川の日常には随分差があるんだな」

千早「……先輩、あの……平和だなあは事件フラグですよ……っ？」

圭介「ふ、ふふ……俺はフラグクラッシャーだぜ？ そんなハズあるか！」

大吾「二級フラグ建築士の間違いじゃねえのか？」

重原「俺もそう思う」

## 第180話、初恋

4時間目、この日の体育は体育教師が健康上の理由で欠席のため、みんなでテキストにサッカーをやる事になったのだが、まあカオスなことカオスなこと。

「ぐへえ……やる気でない」

「あたしも、今日は動きたくない」

グラウンドに大吾と小坂が寝っ転がっている。どうやらコイツら、身体を動かすことそのものが面倒くさいらしく、さっきから一度も起きあがろうとしないのである。

もちろん、面倒くさがっているのはコイツらだけではなく、殆どのクラスメイトがやる気ありませんと言わんばかりに地面に座り込み、休み時間と思ってしまうほどのボリウムで、日常会話やら恋愛バナなどを繰り広げていた。

これはひどい、小学校の体育でさえもっとしっかりしていると思うぞ？

まあ、そんな文句を言う俺も……ぶっちゃけ面倒くさいから、隣のクラスにいる去年のクラスメイトと馬鹿騒ぎをしているところであるが。

ちなみに体育は2クラス合同で行われ、俺ら4組は3組と合同で体育を行う。

普段は男女で別れているが、この日はもうそんなことなどお構いなし。男子も女子もお互いの国境線を越え、仲のいい異性の友達やら恋人やらが楽しげに騒いでいた。

「皆さんやる気なさすぎなのですっ！」

「ホント、4組って自習になるといつもこんな感じだわ……っ」

「3組もだぞ、私とすみにゃん以外は毎回こんな感じだ」

「無気力な若者が増えているってまさにこの事だね、ナギちゃん！」

叫ぶ暮葉と生駒、呆氣にとられた顔をしている伊吹と明智。

へいへいいいですよーだ、どーせ俺らは無気力な若者ですたい。

でも、俺らのことをまとめてそう呼ぶのは間違っていると思うんだ。武道家の重原は極めて真剣にやっているぞ。

まあ、サッカーじゃなくて瞑想しているんだけどね。流石は武道家、ピクリとも動かないし気配も完全に殺している。そんな重原が何時まで持つか、現在俺は他のクラスの野郎共と賭けをしているところである。絶対負けられないぜ……この勝負、ボール片付けを賭けた聖戦なのだから。

ちなみに、俺は片付けの時間になるまで、重原<sup>ヤッ</sup>が動かないことに賭けている。

「……ふう、水でも飲みに行こうかな？」

「なっ!？」

ば、バカな……重原がいきなり瞑想を中止し、水を飲みに行きやがった。そりゃあ重原だって人間なんだから、喉が渴くのは当然の事である。だからって……ちくしょう、重原が片付け前に瞑想を中止したと言う事は、賭けは俺の負けという意味ではないか。

クスクスと、必死に笑いを堪える周りの野郎共。

うう……堪えるなよ。どうせ俺は敗者だ、笑えばいいじゃないカ！



「だあーっははは残念藤島あつ！俺らの勝利だぜよ！」

「うげえ……」

「広敏は超人じゃないんでえ？そりゃ水だって飲みたくなるよ！」

「くそーっ！ボールの片づけは俺の仕事かよっ！」

「まっ、そういうわけで頑張ってくれぜよ藤島」

「それじゃあうちら水を飲みに行ってくるから、あとはよろしくな」

結局アイツらも水が飲みたいだけじゃねえかよ。

あゝあ……なんで俺、賭け事弱いんだろうか。脱衣麻雀はそれなりに強いのに、こういう現実の賭け事にはめっぽう弱い俺。ゲームで強くても現実で弱かったら意味ねえよ……こんなことになるんだったら最初から賭けなきゃよかったよ。

ちなみにアイツら、語尾に「ゝぜよ」とか付けるほうが島原で、広島弁で喋る方が藤咲という名前である。まあ、超どうでもいいことなのだが。

「はゝい、そろそろ時間なので片付け初めてくださゝい」

突然、俺たちに指示してきたのは、体育教師の代わりである長瀬先生だ。多分30歳前後の長瀬先生の指示をする姿は、まるで小学校の先生ようであった。

要するに、俺たちは小学生レベルかよ……初芝は一応進学校だぜ？流石にこの扱いはひどいだろ……。

そうは思いつつも、一応相手は教師なので口答えが出来なかった俺は、やれやれとため息をつきなが体育館倉庫へと向かう。片付け

るものはボールだけとは言え、やっぱり体育館倉庫まで行ってグラウンドに帰ってくる事そのものが面倒くさい。

片付けを賭けた事をさらに後悔した瞬間であった。

「はぁ……不幸だっ」

そんな事を呟きながらも、俺は体育館倉庫の中に入る。

ボールは確かこの籠かごに入れるんだったか。そうだよな、籠かごの中には大量のサッカーボールが無雑作に入れられていた。

間違えないようにしないと。籠かごは複数並んであり、サッカーボールとバスケットボールとバレーボール、そして野球ボールとで別れている。確認せずに入れると、バスケットボールの籠かごにサッカーボールを入れるという、アホなミスを犯しかねない。

俺はそこまでドジじゃないぜ。なので、慎重に籠かごを見極め、俺は正しい籠かごにボールを投げつけてやった。バイン、と一度だけボールが籠かごの中で跳ねる。

一瞬ボールが籠かごから出てしまうのでは？ と、焦っただけが……大丈夫だったようだ。

ボールは籠かごの中でピタリ、と動きを止めた。

「おお、ナイスシュートだったわっ」

背後から、元気な声が聞こえてきた。

この声は——伊吹か。

首を後ろに向けると、サッカーボールを抱えた伊吹が佇んでいた。なんだぁ……コイツも片付け役だったのか。

「シュートって、手で投げただけだぞ？」

「そりゃサッカーなら反則だけど、バスケだったら今のでチームの

メンバー大喜びよ？」

「そっかぁ。つまり、もっ〇んやひ〇たが大喜びするんだな！」

俺が叫んだ瞬間、伊吹は次第に呆氣にとられた表情を浮かばせて、

「ねえ、あんたの脳内ってアニメ以外には何かないの？」

という、キツい一言を言ってきたのである。

伊吹ちゃん……そりゃ俺には禁句ですよ。確かに日柄一日中妄想してるけどさ、その妄想の内容がアニメ関係ばかりというわけではないんだぞ。

……まあ、それを証明する証拠もないんだけどね。

「へいへい、呆れる伊吹たん萌えー」

「う、うっさいわね！ 萌えって何よ萌えって!?!」

「怒るなよ、褒めるつもりで言ったんだぞ？」

「ほ、ほめ……別に、あんたに褒められたって何とも思わないけど……でも！ もう少しマシな褒め方があるでしょ!?!」

相変わらずアップダウンの激しい子である。ほのかに顔を紅潮させた伊吹は、俺に萌えよりもマシな褒め方を求めてきた。これは――面白くなってきた。

そういえば久しぶりだな。こうやって伊吹をいじって遊ぶのも。久々に伊吹をからかってみるとやっぱり面白いな。反応がいちいち可愛くて面白いぜ。

俺は伊吹の反応を楽しもうと、心を躍らせながら伊吹を褒める言

葉を考える。

よし——これなんてどうだろうか？

「伊吹」

「な、なによ……？」

カッ、と俺は真剣な表情を作って——。

「最近綺麗になったよな」

「っっ！？」 ん、んなわけあるかあっ！ もうちょっと上手く言いなさいよねっ」

「いや、お世辞じゃねえぞ。最近のお前、ホントに女の子な気がするよ」

「っっ」

そう言ってあげると、伊吹はほんのり頬を紅潮させ、ぼんやりとしていた。

これはやつぱり——確信したぞ。

伊吹、お前ってヤツは……本当に仕方がないな——。

「伊吹、お前——好きな人でも出来たのか？」

「っ！？ い、いない！ そんなのいないわよ！」

ああ……この慌てて否定する姿。ギャルゲーのヒロインと同じである。どうやら伊吹にも好きな人が出来たらしい。あれ、でも伊吹

の初恋は今も続いているって、誰だったかなあ。誰かが言っていたような気がするけど……その初恋の人とはどうなったんだろうか？

「まさか……もう付き合ってたのか!？」

「いないって言ってるでしょ！ 話聞きなさいよばか圭介っ!」

「そうか、そういえば初恋の人はどうなったんだ？」

「誰から聞いたのよっ!？」

「そんな反応をするってことは、いたんだな……初恋の人っ」

「ッ!？」

よっしゃいい展開になってきた。エロゲーで身につけた、女子の本音を知る為に話術は現実においても有効のようだ。まさか、伊吹がここまで思い通りの反応をしてくれるとは。

まったく、伊吹は最高だぜ——!

「よし、言おうか」

「な、なにをよ……っ?」

「初恋の人だよ」

「い、言わないわよっ!」

言わないわよ……か。

こんなセリフを吐いたのだ。俺が知らない間に伊吹も恋をしてい

た——どうやら、それは本当のことであるらしい。しかし気になるなあ、伊吹の初恋の人って誰だろう？

「大丈夫、俺はこれでも口は堅いほうだぞ？」

「うう……否定できないのが辛いわっ」

「さあ、女は度胸！ なんでも試してみるもんさ！」

「それを言うなら男は度胸でしょっ!？」

「まあまあ、恋愛相談なら任せなさい！」

「……ええ、いや……っ」

失恋4回（白藤含む）、今の所好きな人が一人いる俺。確かに、経験豊富かと言えばそれは嘘になるだろうし、しかも未だにチェリボーイである。

だけど、それでも伊吹よりは恋愛経験があると思うんだ。

うん、少しは相談に乗れるハズである。

まあ……本当の目的は伊吹の好きな人を知る事なんだけだな。

「そいつと俺が知り合いかもしれないだろ？ 大丈夫、絶対お前が幸せになるルートを選んでやるから」

「……………あ、あんた……よ……?」

「……………え？」

「——っ！ な、なんでもない！ 今のは取り消しよ取り消し！」

「…………え？　お、おい——伊吹！？」

俺が呆気にとられた声を漏らすと、耳まで顔を真っ赤にした伊吹が、恥ずかしそうに大声を上げた後にそのまま、俺を残して体育館倉庫から立ち去ってしまった。

……………あれ？

## 第181話、価電子の数

6時間目、化学。

わけのわからない計算式が、黒板にズラリと白い文字で書かれている。アレがどういう意味なのかはサッパリわからないが、そんなことはもうどうでもいい。

それより、今日の体育館倉庫でのこと……一体何が起きたのだろうか？

一応おさらいしておこう。確か、ボールを片付けていた俺と伊吹は、体育館倉庫で2人つきりというエロゲ的なシチュエーションの中で、初恋がどうのこうのという話をしていた……と思う。

それで、やっぱり伊吹には初恋の人がいたらしい。それが既に過去のものか、あるいは今も続いているものかはわからないが……。で、しつこく迫った結果——遂に伊吹は初恋の人を教えてくれたが……。

『……………あ、あんた……よ……？』

……あんた？

それはおいしい食べ物なのか？ それとも新しいギャグなのか？ だけど確かに俺は聞いたんだ。伊吹が口から漏らした“あんた”という言葉。

常識的に考えてみよう。あんたと言うのはあなたが変形したもので、江戸時代には既に使われていた言葉らしい。その意味は人が人を呼ぶ二人称代名詞であり、昔の人はもちろん、今でも関西系の子やツンデレ系の子——いや、普通の人でも使う言葉である。

つまりだな……あの場に居たのは俺と伊吹だけ。あんたって言ったのは伊吹で、おそらくそのあんたって人は俺で………ん？

それじゃあ、アイツの初恋の人って——？



「では藤島、Liの価電子数はいくつだ？」

「え、は、はは、はいっ？」

化学の西村めえ……なんてタイミングで当てやがるんだ。俺は今、超真剣に幼馴染との事で悩んでいたのに。大体、Liってなんだよ。ISというブヒれるヤツなら知ってるけど。

うーん……わからん。そもそもLiって何の略なんだ？ Liって【リ】って読むと思うからリウマチカリボルバーかな。よくわからんが……多分その辺の事を言ってるんだろう。

価電子数の意味はわかる。要は電子殻の周りをまわっている電子だろ。

Liの価電子数かあ……うーん、もういいや、好きな数字を並べちまえ！

「Li、Li……多分、にせんはっぴやくにじゅうはち？」

「何をいついてるかね藤島？ そもそもLiが何か分かっているかね？」

「え……多分、リトルバ○ターズエクスタシー？」

あれ、なんでみんな笑ってんの？

暮葉まで笑ってるし、西村先生完全に呆れてやがるし……どういうことなの？

あれ、もしかして俺……滅茶苦茶変なこと言った？

「はあ……いいか藤島、Liはリチウム。ちなみに価電子の数は1だ」

「なん……だと……ッ!？」

知らなかったでござる——!

まさか、Liがリチウムって意味だったとは……全く、これだから化学は嫌いだ。

は○ないの理科ちゃんなら好きだけどな。でも、化学は難しいから嫌いだ。俺の知ってる科学は全部アニメとかゲームとか、あとラノベ経由の知識限定だぜ。

どうだ参ったか……ふ、ごめんなさい。頭が悪くて申し訳ございません……ッ!

「では木下、Naの価電子数は？」

お、西村のヤツ暮葉に当てやがった。フッフ……だが残念、暮葉は俺の味方だ。暮葉は魔法に関する知識は豊富だが、流石に化学の話には疎いだろう。

某学園都市が舞台なラノベじゃあ、魔法を使う連中は化学に疎かったしな。きつとりアル魔法使いの暮葉も化学には疎いハズで——。

「1なのです！」

「その通りです」

ンな——馬鹿な、暮葉が正解しただと？

そういえば……暮葉のヤツ、チラツと中間テストの結果を見ただ、異世界人だからか歴史系はやっぱり半分以下だったものの、理数系の点数は高かった気がするな。

くそっ、暮葉は理系——いや、文系教科がダメなのはここが異世界だからだ。魔法とか向こうの世界の歴史には詳しいみたいだし、

もしかして——暮葉はあらゆるジャンルに詳しいのでは？  
負けた……身体能力でも勝てなければ頭の良さでも負けたよ……  
ッ！

「圭介、やっぱり悔しいかい？」

「うっせ黙れ重原っ！ 別に悔しくなんかないやい！」

「仕方ないんじゃない？ 木下の化学の点数は今まで一番だった国宗の上を行くらしいぞ」

「うげ……マジな話なのか、大吾？」

「歩くCIAの僕をナメるなよっ!？」

前は歩く情報本部って言ってなかったっけ？

大吾もアレだよなあ、コロコロと渾名が変わる男だぜ。

しかも今度はCIAかよ、まさか大吾のヤツ……金髪の鼻が高い白人の友達（CAIのスパイ）がいるんじゃないかねえのか？

うん、大吾の情報収集能力は異常だし、居ても不思議じゃねえぞ……。

なんて便利で怖い友達なんだ、長宗我部大吾……。

「あっははは、野郎共は相変わらずだねえ」

「……た、ただのバカよ。特にばか圭介が……っ」

「そうですね……確かにけーすけ様はおバカなのです！」

おいコラ女子共、聞こえていないつもりかもしれないが……聞こ

えてるぞ？

特に暮葉のはよく聞こえましたよ。だって一際声が大きいんだもん。伊吹の声も周りが静かだから俺にも聞こえたし。ちくしゅ……2人そろって俺の事を馬鹿にしやがってっ。

……けど、暮葉と伊吹。

地味に馬鹿にされたって、何故か2人を悪くは言えないな。暮葉は……まあ、楽しくて可愛くて一緒にいたいと思えて——結局、俺は暮葉の事をそういう風に思っている。

そして伊吹は——気になるなあ。

やっぱり、アイツの言う“あんた”って俺なんだろうか。

アイツの初恋の人は——俺なんだろうか？

アイツの初恋はもう終わったのか、それとも——まだ続いているんだろうか？

……俺はその後も西村の話など聞かず、ずっとその事を考えていた。

それから数十分後、6時間目の授業は終了し——いよいよ待望の放課後である。

今日は暮葉と葵でも連れて、白藤に会いに行こうと思っていたが……まず、俺は暮葉を誘おうと思ったんだが、何やら暮葉は忙しそうに誰かと電話をしていた。妙に真剣だな……まさかアルファ隊の人と電話してるのか？

「——了解なのです、お任せくださいっ！」

小首を傾げながら、満面の笑みを浮かべる暮葉——言葉を切ると、一緒に電話も切ってポケットの中に携帯電話をしまう。通話を終えた事を確認し、俺は暮葉に近づいてゆく。

「暮葉、もしかして今のってアルファ隊か？」

「もきゅ？ はい……その、また魔法使いが侵入してきたそうなのですっ」

「またかよ、最近多いなあ」

「もきゅう……きつと連中がけーすけ様の居場所を掴んだからなのです」

やっぱりそれが原因か。今でこそ違うが当時は白藤がそうだったし、重原に取り憑いていたあの魔法使いもそうだけど、身近な所にスパイが居たのはやっぱり痛かったなあ。

そのせいで俺の居場所が連中にばれてしまい、近頃——特に風剣のシルフが襲撃してきた前後あたりから、古宇坂に侵入してくる魔法使いの数が一気に増えた気がする。

魔法使いが増えると、それを倒すためにアルファ隊が出動する。つまり、魔法使いが攻めてくると暮葉も忙しくなるわけだ。

「そっかぁ……なあ、俺も一緒に行ったほうがいいか？」

「今回は大丈夫そうなのです。新設された部隊も作戦行動を開始したらしいですし、それに侵入してきた魔法使いは一人だけなのです」

「けど、シルフみたいに強い魔法使いだったら——」

「平気なのです、今回侵入してきたのはただの魔法使い——赤の軍神は現在国内にはいないらしいのです！」

だったら、大丈夫そうだな。

それに毎回俺が戦いに行つて、暮葉を心配させているみたいだし……元々暮葉は俺を守る為に派遣されてきたんだ。少しは暮葉を頼つてあげなきゃ、暮葉本人にも失礼だろう。

「わかった、晩御飯までには帰ってくるんだぞ」

「はい！ けーすけ様も、最近この辺の不良の一部がサヴィエトと関わりを持って、けーすけ様を狙っているらしいので気を付けてくださいね！」

「すらっと恐ろしい事言うなお前……不良って……っ」

それじゃわしおありすけ驚尾有資の時と同じじゃないか。

不良がサヴィエトと関係を持つねえ……なんでだろう。もちろん、お金目当てってのもあるのかもしれないけど、一番の理由は——やつぱり騙しやすいのだろうか？

まあ、そんな事はどうでもいい。それより——俺は暮葉のほうが心配だな。

「それでは、ぱぱっと片付けて捕まえてくるのですっ」

「おう、無理するなよ！」

俺の叫び声に見送られるように、暮葉は全速力で廊下を走ってゆく。廊下は走っちゃダメって風紀委員が説教しそうだけど、あの暮葉に追いつける風紀委員はいないだろうなあ。

追いつけそうなヤツは一人いるけど……。

そういえば明智ってバイト始めたような気がするけど、結局なんでなんだろう？

明智が言うあの日って一体……？

まあ、考えた所で俺にはわからねえよ……だけど、あの時の表情からして、多分男関係の何かだとは思うんだ。明智に彼氏……うん、どうなんだろう？

居そうと言えば居そうなんだけど、逆にいなさそうないメージもあるし。結局、明智に彼氏がいるのかわからない。そもそもあの日と言うのが男関係なのかさえ怪しい。

……まっ、やっぱ考えてもわからん事だ。

それより今日は暮葉はいないし、伊吹も部活のようで、しかも若干気まずい……。

小坂や野郎共は既に帰宅、明智は多分バイト。生駒は絶対に嫌だ。よし、葵を呼びに行くついだ。折角だから青山さんやあかりに会いに行こうかな？

それに決着もついたんだ——そろそろあかりに返事をしねえとな。

## 第181話、価電子の数（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「どうも、今回はこのコーナーがなくて申し訳ございません！」

伊吹「こんな駄コーナー、読んでくれてる人がいるかも怪しいけどね」

圭介「コラ伊吹！　そういうことは言わないの！」

伊吹「なんでよ？　事実かもしれないわよ？」

圭介「そうかもしれないけど、楽しみにしている人だっているかもしれないんだぞ？」

伊吹「そんなのいないわよっ」

圭介「いるって、多分いるよ」

伊吹「そんなのいるわけないわよっ」

圭介「いや、いる！　1人はいるハズだ！」

風紗「藤島……すごい低次元な争いだぞっ」



## 第182話、スケベしようや

「お兄ちゃん……スケベしようや」

「……………」

ここは初芝高校。当然だ、これから学校に帰ろうと思っていたのだから。

問題は——何故俺が音楽室に閉じ込められているのだろうか。そして、何故——湯子俺は妹にマウントポジションを取られ、しかも性的な意味で言葉攻めされているのだろうか。そして何故——葵は兄貴相手に発情しているのだろうか？

「……どうしてこうなったっ!？」

葵に主導権を握られた俺は、最後の抵抗として大きな声で叫びみた。が、考えてみれば音楽室って防音壁なんだよね。俺の悲痛の叫び声は葵と、壁に飾られた有名な音楽家の皆さん（写真）の人達にしか聞こえてないんだよね。

どうしよう、俺はこれからどうなってしまうのだろうか……？

——事の始まりはつい数十分前。俺は葵を迎えに行くために、1年の教室が並ぶ場所をうろついていたのだが、その途中で俺は青山さんとあかりとバツタリ出会う。

「……っ! せ、せんぱい……っ!」

「おっす圭介っ！」

「よっ、お前らは相変わらず元気そうだな」

軽く挨拶を交わした俺たち。それでも8月17日以来の久々の再会。あの事件以降色々忙しかった俺は、学校も欠席していて……と言うより家にすら居なかったのだ。

メールはともかく、電話をしている時間もなかった。その為、この2人と話するのはあの日以来今日が初めてなのだ。でもよかったあ。心配していたんだけど……2人はとっても元気そうだ。

「先輩も……ご無事で良かったです……っ」

「心配したんだからな！ 全く……電話の一本はよこせよなっ」

「ああ……ごめん、ここ数日色々忙しかったんだよ」

「あはは……大体事情は葵から聞いてますよ……？」

「ニュースでもやってたしな！ 圭介はもう完全にヒーローだな！」

「ヒーローって、マスコミも随分大げさに扱うモンだなあ」

俺はただ、守りたいものがあつたから風剣のシルフと戦っただけだ。別に世界を救ったり世界から戦争を消してみせたりと、これと言つて誇れるような事は何もしていないのに。

まあいいか……ヒーロー扱いされるのも、決して悪い感じじゃないからな。ぶっちゃけ誰がヒーローでも構わないんだけど、今だけはそう呼ばれておこう。

……実はお店行ったら値引きしてくれて、結構助かってるんだよな。

「いえいえ、先輩はヒーローですよ……わたしの王子様ですっ」

「千早、その発言は痛すぎるだろっ！」

「あ、あかりだってその……流石はあたいの旦那様っ！ って言ってたじゃん……っ？」

「んみゃ！？ そ、そんな事言った覚えなんてないんだからなっ！」

青山さんのあかりの真似が地味に上手かった。声こそ全然違ったけど、やんちゃな感じとか結構あかりにそっくりだったぜ。

つかあかり、お前は俺の事を旦那様だと思っていたのか。旦那様……クソ、どういうわけがくぎゅボイスで脳内再生される。これもきつと、釘〇病のせいなんだろう。

あかりの声はくぎゅとは全然違うのになあ……俺も末期患者なんだな。

……ん？ そういえば——あかりの次に元気なヤツの姿が見えないな。

「あれ、葵はどこ行ったんだ？」

「えと……葵、ですか……？」

「おう。ちょっと帰りに知り合いの所に寄ってこうと思ってな、葵も一緒に連れていこうかなって思ってたんだけど……どこ行ったんだアイツ？」

「葵なら確か、模試がなんだかって言ってたよな？」

「うん……多分職員室だと思います……っ」

模試ですかあ……流石は俺の妹、頭の出来は兄貴の1000倍はいいですな。俺なんて就職か進学かすら決まってるのに、模試を受けるって事は葵は進学するんだな。進学かあ……確かに葵はまだ1年生ながら、学校でも三本指に入る学力を持つ天才少女だ。

その上運動神経も抜群……兄貴の俺とは出来の違う優秀な子なのだ。

ぶっちゃけ俺もテスト勉強をするとき、友達よりも葵を頼っている。だって葵は高3レベルの問題をスラスラ解けるヤツなんだもん。多分、葵から見たら高2の問題なんて、算数における九九より簡単なんだろうぜ。

ちくしょう羨ましい……なんでだ？俺って血のつながった葵の兄だよな。じゃあなんで葵は頭が良くて、俺は観察処分者並のおバカなんだろうか？

……まあ、考えたって仕方がねえし……とりあえず葵は職員室にいるんだよな。

「職員室かあ……わかった、ありがとうな！」

「いえいえ、あの……先輩」

「ん？」

「明日は——」

「明日は部活来いよなっ！」

部活かあ……そういえば合宿以来、写真部の活動で揃った事はないよな。結局8月17日以降も部活の集まりなんてモンもなかったし、写真部か……久々だな。

浅間部長は相変わらず変態やってるんだろうか？

「おう、ちゃんと暮葉も連れてくるからな。それじゃまた明日なっ」

「明日！ 絶対来いよなっ！」

「……………あかりに……セリフ奪われた……っ」

青山さん、大丈夫だよ。少なくとも一時期はあかりより目立っていたよ。それにあかりって名前が名前だけにそのうち——空気になっちゃうかもしれないぜ？

……げふんげふん、アツカリくんは不憫な子。

さて、葵の居場所も聞いた事だし——さっさと職員室に行くと思いますか。

「……………」

職員室。

俺にとっては、最も縁のない学校の一室であろう。なんせ、俺というおバカな男には教師と言う存在が恐怖にしか思えないからな。職員室には教師が沢山いるんだぜ？ 宿題やらテストやら説教やらと負の雨を散々降らしまくる、あの恐ろしき教師が大量に——。

ああ、考えてだけで嫌な汗が噴き出てきやがったぜ。

教師……なんて恐ろしい存在なんだ。

つか、一応職員室の中はドアの窓から確認できるんだけど、葵の

ヤツいないな……もう模試に関する用を終えて、あかり達の所に戻っちまったんだろうか？

「それなら俺も、あかり達の所に行ったほうがいいのか？」

よくわかんねえけど……職員室にいないんだし、アイツのことだ。友達を放置して一人で帰宅するってことはないだろう。多分、用事が終わったら友達の下に戻るはずである。

よし、じゃあ早速あかり達の所に戻って――、

「う、あ――！」

突然、俺は右手を誰かに握られ。強く引っ張られ、無理やり走らされた。

それは、あまりにも突然かつ一瞬の出来事である。何者かの不意打ちに、俺は何故こんな事が起こっているのか、誰の仕業なのかさえ分からぬまま――引っ張られ続けていた。

ちくしょう誰だ。せめて犯人ぐらいは特定しないと……って、オイ。

「にやははは！ お兄ちゃんゲットだぜ！」

「俺はポ○モンじゃねえ！　つか葵、なんのつもりなんですか！？」

「お兄ちゃん、今から葵と一緒に音楽室に行こう？」

「なんでだよ！？」

「葵は音楽室に用があるんだよ？」

「だからって、俺が付き合わなきゃいけない理由がわからねえ！」

なんで俺は妹に強制連行されているんだろうか。

どうして行き先が音楽室なんだろうか。

この時はまだ——あんな展開になるだなんて思いもしなかったんだ。きっと、音楽室に笛やら教科書を忘れたから、一緒に取りにいかうって健全な話だと思っていたんだ。

だけど——現実はどう、甘いモンじゃなかったんだよ……。

「お兄ちゃん……スケベしようや」

「……………」

「……どうしてこうなったっ!？」

こうして、現在に至るというわけだ……。

葵が俺を音楽室へ連れ込んだのは、俺と学校であゝんなことをする為だったのだ。確かに音楽室は一階だが、楽器と言う死角も多い。その上ここは防音壁なので、その窓さえ開けなければ音が外に漏れる事はないのである。

なるほど……人を監禁するのにもってこいな場所ってわけだ。

だけどなあ……おかしいだろ。なんでエッチなイベントが発生してんだよ、俺は葵に対してそんなフラグを立てた覚えは皆無だぞ。

そもそも立てる気すら起きなかったのに……何故？

「えへへ……秋葉原で出来なかった分、今しちゃうね？」

「待て葵早まるな。俺とお前は兄妹だぞ？」

「愛に兄も妹も関係ないと思うよ！」

いや、それでも現実の近親相姦はダメだと思うんだ。近親相姦なんてエロゲーだけで十分足りてるんだよ、ヨスガでやってればいいんだよ。

現実の普通の兄貴はそんな事、望まないんだぜ？

しかも愛ってねえ……俺は別に葵の事は愛してないぞ。家族としてって意味なら、もしかすると当てはまるかもしれないけどさ……。

「葵、今ならまだ間に合う。とりあえず服を脱ぐのをやめい！」

「大丈夫だよ？ お兄ちゃん裸ワイシャツ好きだもんね。ちゃんとブラを取ったらまた着るよ？」

いやいや、そういう問題じゃねえから……。

葵はマウントを取りながら、どういうわけか制服の上を脱いでいたのだ。ブラウスを脱いだ事により露わになった葵の肌。運動神経が特異なだけに引き締まっているが、筋肉質と言うよりは柔らかそうな感じである。きつと触れたらぷにぷにと、うぐ……妄想やめい俺。

相手は妹だぞ。だから——ハイパー兵器が反応したらおかしいはずなんだ。

「っ……お兄ちゃん、ぴくぴくしてる……」

「だからやめんかい！ 俺の理性が少しでもあるうちにやめてくださいお願いします！」



やっぱり俺は男なんです……ええ、つまり言うのだな。いくら相手が妹でも限界を超えたら野獣と化するわけなんだよ。だから——理性があるうちにやめてくれ。

近親相姦というタブーを超えないうちに——勘弁してくれえっ！……と、心の中で叫んでいた——。

「——ッ!？」

その時、突如響いた砕ける音に——俺と葵は思わず窓側へ首を向ける。

窓からはどういいうわけか——武器を持った数人の男達が侵入してきやがった……。

## 第182話、スケベしようや（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「また懲りずにエロシーンかよ!？」

伊吹「ばか圭介……最っ低」

風紗「近親相姦とは……いくら藤島が変態でも許せるレベルじゃないぞ……っ」

圭介「おいコラ、どう考えても被害者は俺だろ!」

黒木「知ってるか。男が強姦されても、女は男が女にした時ほどの重罪にはならないらしいぞ?」

赤佐「ひどい世の中や!」

### 第183話、藤島はどっちだ？

俺が葵に襲われかけていたその時、謎の武装集団が音楽室の窓を突き破り、銀行強盗のように堂々と校内に侵入してきやがった。男達はどこからどう見てもヤンキーと言う風貌で、全員木刀や金属バットなどの武器を持っている。さらに、数人で俺と葵を囲みやがった。

武装している上に包囲され……迂闊に動くのは危険だな。いくらヤンキーとは言っても数が揃えばそれなりに強敵だ。しかも武器持ってるからな……俺はともかく、木刀や金属バットの一撃に葵が耐えられるとは思えない。葵の為にも——慎重に対応しなければ。

1、2、3、4、5、6……クソ、武器持ってるヤツが6人もいるぞ。

だけどなんだ？ この6人……優位に立っているのに落ちつきがねえな。全員これから初舞台ですという俳優並にそわそわしている。どうということなんだ……？

「お、おい……どっちが藤島だと思う？」

「知らねえよ！ クソ、俺らは名字しか知らねえ……藤島が男か女かわからねえよ！」

ちょっと待て、コイツら俺らの名字を知っているのか？

まさか……暮葉が言っていた——サヴィエトと関わっている不良なのか？

ハッ、残念だったな……コイツら、どっちが狙っている藤島か知らねえらしい。

サヴィエトも馬鹿だぜ。ちゃんと標的ターゲットを教えないからこうなるんだ。

「てめえら何者だよ、何しに来たんだよ！」

「ど、どうするよ……？　てか、この2人が藤島って名字かすら怪しいぞ」

「けど、手ぶらで帰ったら浜島の命が危ないだろ？」

「クソッ！　こうなったら男を潰して女を狩るぞ！」

コイツらがどういう経緯で襲撃してきたかは知らねえが、その叫び声で確信した。

今、狙われているのは葵だ。ヤツらは葵を標的と勘違いしているようだ。確かに葵は俺の血のつながった妹だから、アレクサンドルの子孫という意味では正しいけど……でも、連中が狙っているのは葵じゃなくて俺だ。だからこの場合は勘違い——勘違いで葵は狙われている。

「うあああああああああああああああああああつ！」

その時、4人の不良が一斉に飛びかかってきた。

ちくしょう、いきなり4人かよ。同時に相手するのはかなり面倒だ。かといって音楽室にある楽器を武器にするわけにもいかない。

助けを呼びたい所だけど……。

防音された音楽室で叫んだところで、誰も助けに来ないだろう。だったら仕方ない、葵を傷つけるわけにはいかない——俺一人で頑張るしかねえみたいだな。

「ち、くしょおおおおおおおおお！」

半ばヤケクソになりながら、俺は武器を持つ4人の暴漢の懷へ飛び込む。どうせ俺の体質的に殴られたって大したダメージにはならない。それを知っての上の突撃は——まさに恐れを知らぬ屈強な戦士のような……気がした。

「おらああッ！」

不良の一人がバットを振り下ろし、ガコン！　と言う衝撃が俺の肩を襲う。激しい勢いで金属の塊を叩き込まれ、激痛のせいで俺はガクン、と動きを止めてしまう。

けど——俺は倒れない。

慣れてるんだよ……殴られることにはな。一瞬脱力した俺の身体に、身体の奥底から湧いてくるような明確な力が籠る。

そして——、

「が、ア……ッ！」

勢いよく身体を起こし、右腕を大きく振り上げる。俺は凄まじい勢いで握った拳を不良の下顎へと叩き込んだのだ。ゴンッ！　と、骨と骨が衝突しあう音が炸裂すると、振るった拳の餌食となった不良は文字通り——殴り飛ばされたのであった。

「て、テメェ！」

「こらああアアああアッ！」

一人を殴り飛ばせば、仲間の不良がキレて殴りかかってくる。不良との戦いつてのは必ずこういう展開になるから嫌なモンだ。とにかく、コイツらは一人で戦おうとしないのだ。タイマンを張る骨のある不良など——21世紀の世の中には殆ど存在しないだろう。

群れれば強い。そう信じている不良は——必ず集団で行動する。  
過去の経験上、不良との戦いの大半は1対多であった。全く……  
魔法使いや超能力者はさらに厄介な存在だけども、ヤンキーさん達  
も面倒くさい相手だ！

「きゃっ!?! お、お兄ちゃんっ!」

「——ッ!?! 葵!」

しまった——4人ばかり相手にしていたせいで、残りの2人を  
忘れていた。不良に両腕を掴まれた葵は、そのまま2人組に連れ去  
られてしまった。ヤツらは自分で割った窓から、飛び出すように校  
舎から逃げていったのである。

「おっしや! ターゲット 標的確保!」

「ぐっ! クソ……初芝はお坊ちゃん校じゃねえのかよ!?!」

「なんで初芝のお坊ちゃんが、こんな喧嘩慣れしてやがるんだよク  
ソが!」

確かに俺は初芝のお坊ちゃんかもしれない。でも……だからって、  
初芝の生徒が全員優秀なわけではないだろ。俺は初芝の生徒でも出  
来の悪い——ストリートファイター路地裏喧嘩高校生なんだよ。

だからって、コイツらみたいにグレてるわけじゃないが……まあ  
悪い子だよな。

とにかく、普通の人間と一緒にしてもらっちゃ困るんだよ。ただ  
荒事に慣れているだけじゃなくて——特異体質の持ち主でもあるん  
だからな。

「馬鹿野郎！ そんなのに構ってんじゃねえ——ずらかるぞテメエら！」

「ま、待ってくれ！」

一人の呼びかけによって、不良達は喧嘩をやめて一斉に逃走を開始する。葵を連れ去ったあの2人組のように、俺と戦っていた4人が勢いよく、窓から校舎の外へと飛び出していく。

「——ッ！ 待て、てめえら！」

アイツらを逃がすわけにはいかない——俺も後を追おうと窓から飛び出すが、

「うるせえ、テメエは寝てやがれッ！」

「——ア、が……ッ!？」

刹那、不良の一人が着ている服の裏側から、スプレー缶のようなものを取り出す。

スプレー缶からシューっと、白い何かが噴射された。それを顔に浴びた瞬間、目と鼻や口の中にまで焼けるような激しい痛みを感じ、石にでも躓き転んでしまった。

転んだ時にも痛みは感じたか、今は顔中の痛みのほうが深刻である。さらに涙や鼻水が富まなくなってきた、しかもゲホゴホと咳も激しくなってきた。

ちくしょう……アイツら——催涙スプレー使いやがったな。

「あ、おい……っ」

やべえ……直接殴られたダメージは大したことはないが、催涙スプレーは効いた。

本当なら今すぐにでもヤツらを追って、葵を助け出したいのに……俺は、催涙スプレーのせいで動くことができず、ただ、潰された目で前を見ようと必死になっていた。

「……ん？ あら、藤島君？」

視界が潰され、苦しんでいるその時——不意に誰かに声を掛けられた。

この声、女の子……だよな。それもどこかで聞き覚えのある声と口調だ。優しそうだけど意地悪そうでもあるこの感じ……もしかして。

「あ、く……さ、さいおん……じ？」

「そうよ、それよりどうしたの？ 随分苦しそうだけど大丈夫？」

まさか、このタイミングで第三者に見つかってしまおうとは……ちくしょう、これで西園寺に余計な心配をかける結果になっちまったじゃねえか。

だけど、この状況で誤魔化せるとは思えないし……だから、せめて今の症状とここで何があったかくらいは説明したかった。しかし、思いの外催涙スプレーの威力は強力で、結局俺はその後も数十分ほど身悶えしていた……。

西園寺が俺を発見してから数十分後、ようやく催涙スプレーの効果も薄れ、若干ヒリヒリするような気はするものの、視界も回復し



満足に動けるようにはなった。それで、予想通り俺が倒れている現場を目撃した西園寺は、あの場所で何があったのか、事情を聞きだそうとしてくる。

どのみち、誤魔化せるような話ではないだろう。それに、ここで西園寺を巻きこみたくないとか言って誤魔化したとしても、今回のこの騒動……一人で解決できるかは微妙だ。

不良との戦闘はともかく——肝心の葵を拉致った不良達の居場所がわからないのだ。

西園寺が知っているとは思えないが、それでも話しておくべきだろうと思い、俺はここであつた出来事を西園寺に説明した。ただし、葵に強姦されかけた事は言わなかったけどな。

「ねえ藤島君、その人達に特徴とかなかったかしら？」

「特徴かあ」

そう言われて、俺は葵を連れ去った連中の特徴を思い出す。特徴って言われても、普通に私服姿のただのヤンキーにしか見えなかったけど……。

それこそ白陵にいる連中とは違う、今時の不良の姿である。だから、どいつもこいつも派手で特徴なんてモンは……あ。

「そういえば、アイツらみんなクソ暑いってのに、ライダージャケット着ていたな」

黒い革製のライダージャケット。よくあるデザインだったけど……不思議なことにアイツらの上半身は全員、同じ柄のライダージャケットなのであつた。

「……やっぱり、そいつらはK・M・Pだわ」

「け、K・M・P？」

なんだそれ……白陵じゃねえのか。

西園寺の口から放たれたソイツらの名は、聞いた事のないチームであった。

## 第184話、K・M・P

初仕事の後……いや、性格にはまだ初仕事の途中だ。オレ——早川悠は、その初仕事の後始末をアナスタシアと2人で行っていた。死体の処理、血液の採取、証拠の隠滅……チツ、人員が少なえからって、何もオレ達がこんな仕事をする事はねえだろうに。やれやれ、ザスローンってのは人使いの荒い組織だ。能力を使わねえで仕事ってのも結構しんどい……クソツタレ。

「おーいもやしの兄ちゃん。無理しねーでアタシに任せときなさいよお」

「チツ、早々に永渕にのされたヤツが偉そうにしてンじゃねえよ」

「っ！ あ、アレは油断しただけよ！ あんのクソ野郎オ……まさか魔法衣服マジックローズ着てるとは思わなかった」

「ふん……死ぬまで言ってる」

さて、んじゃあ帰るとするか。確かオレや死体を回収する車が、ラウルラウルのクソ野郎によるともうそろそろ来るらしいが……付き合ってられねえ。

それに、あの野郎も言っていたハズだ。この変換機は魔力を注入しねえと、全く使い物にならねえただのガラクタである。アルファ隊でもヴィンペル隊でもない、そういった正式な特殊部隊とは全くの別物である、この闇の組織にいる以上——知人との接触は好ましくない。

上からも説明を受けているし、そんな事はわかっているが……。オレの場合、魔力補充という意味でなら、クソガキとの接触も可

能である。

頻繁には会いに行けねエだろうが……まっ、会えるだけまだマシってモンだ。

「あら？ アンタどっか行くわけえ？」

「収集車にはオマエ一人で伸び伸び乗ってろオ、オレは勝手に帰る」

「もやしの兄ちゃん、アンタ用事でもあんのかあ？」

「魔力補充だ。能力使った分の魔力を補充してくる」

「そっかあ。まっ、何にしてもアンタはザスローンで一番の実力者なんだから、さっさと変換機ソイッを満タンにして帰ってきなよ」

「クソ野郎に殺さなきゃなア……」

言いながらアナスタシアに背を向け、廃工場を後にする。さアて、こんなふざけた臭いのする場所から出て、さっさとクソガキの所にも行くとするか。

8月17日……あの日以来、オレはミネット達に会っていねエ。

その日から今まで、能力を使う機会がなかったからである。今では魔力補充以外の目的でのクソガキ達との接触は、上からの命令で認められないことになっている。

それにこの仕事を続けていく以上、いずれは死ぬかもしれないなア……案外今回会いに行くのが最後だったりするかもな。

さて、行くか……確かアイツのマンションはこっちだったハズだ。

それから数時間、既に時刻は4時近く。マンションに行ってみれば……誰もいねエ。

クソツタレ、あのクソガキ共は一体どこに消えたんだ。

まさか……いや、襲撃された痕跡はねエ。そもそも、そんな事があったんだったら真っ先に上から連絡が来るハズだ。すると、あのクソガキ共……外出中ってことか。チツ、人が折角生存報告しに来てやったってのに、どこに消えやがったんだ……？

「……………」

携帯電話をポケットから取り出す。

ミネット・ローラン。

あのクソガキの名前だ。ここにいない上に居場所もわからねエ……なら、あのガキに直接電話をするのが一番いい方法だろう。

そんなわけで、アドレス帳に登録されているミネットの通話ボタンを押す。

電話に耳を当てると、コール音も無しにいきなり繋がった。

ミネットのヤツ……電話に出るのがこんなに早かったか？

『早川悠、何か用件ですか？』

違う……コイツはミネットじゃねエ、そもそもこれは男の声だ。

口調も敬語なんてモンを知らなエミネットが使うようなモンじゃねエ。

かといって、リーネのものとも、同じザスローンにいる誰のものとも違う。

オレは——コイツのことを知っている。

クソツタレ、割り込まれたか……。

「悪趣味な野郎だ。ふざけやがって、どういうつもりだ？」

『貴方はそちらの世界ではもちろん、こちらの世界でも非公式な部隊の一員なのです。その存在は一般人にも軍にも、そしてアルファ隊やヴェインペル隊にも存在を知られてはいけない影の存在なのです。にも拘らず——貴方はアルファ隊の隊員に電話をしようとしたね?』

「だから割り込んだってワケか……嫌なヤツだ」

相手のヤツの声、間違いない——オレを闇の世界に勧誘した顔も知らねエアイツだ。

『何か御不満でもありますか?』

「チッ、一つだけ言わせろ。オレがこれから電話をしようとした相手は、変換機に必要な魔力の唯一の供給源なんだ。ソイツの居場所を確認すンのもNGか?」

『残念ですが、その用事の場合でも接触は最低限にしていたきたいものです』

「そオカよ……じゃあいいや、もうオマエと話す事は何もねエ」

『そうですか、残念です。残業をちょっと頼みたかったのですけどね』

「残業だとオ?」

『ラウル・ゲリエ、及び近藤政信が早朝襲撃した——K・M・Pに関する件です』

「あ？」

アイツらもオレらが仕事の中に、別な仕事をしていたってのか。ンで、そのふざけた名前のチームっぽい何かは一体何なんだろうか。どう考えてもサヴィエトのものとは思えねエし、学園のものもねエ。あまりにもネーミングセンスがなさすぎるだろ……まアいい。

「K・M・Pって何だ？ まさか、永渕と似たようなモンじゃねエだろうな？」

『ご察しの通りです。K・M・Pとは“古宇坂・ミッドナイト・パワー”の略。古宇坂市を中心に活動するヤンキー達のチームです』

不良共のチームねえ……やっぱり永渕と似たようなクソ野郎か。しかも、永渕は一応学生だったらしいけど、チームのメンバーはわからねエな。

若いってだけで、実際は無職だったりするからなア……。

『彼らは先程初芝高校を襲撃、藤島葵様の身柄を拘束しました』

「襲撃だと？ ンで、その藤島葵ってのは誰だ？」

『我々の護衛対象の妹さんですよ。彼女は確かにあの一族の人間ですが、血は兄ほど濃くはないですし、ただの一般人なので、連中のリストには登録されていないハズなのですけどね』

つまり、名前も知らねエアレクサンドルの子孫の妹ってわけか。その妹の名字が藤島ってことは子孫の名字も藤島か？

藤島ねエ……聞いた事ねエな、結局ソイツは何者なんだ？

まアどつちにしても、コイツはアレだな……。

「ふん、襲撃されたのはオマエらがだらしねエからじゃねエのか？」

『一応その兄妹は、アルファ隊の特隊員が住み込みで護衛しているハズですが、彼女は現在別件でその兄妹を守るべく、サヴィエトの魔法使いと交戦中です』

「ソイツらを守ろうとした結果、ソイツらと離れて襲撃されたってか……笑えねエ話だ」

『アルファ隊もヴィンペル隊も、その他の特殊部隊も全力を挙げているのですがね。どうも最近はサヴィエトの活動が活発です。対佐井学園戦に備える必要もあります。我々の国はまだサヴィエト政権時代の痛手を引きずったままです。予算も人員も足りません、一切の余裕はないのですよ』

「……で、オレにどうしろってんだ？」

『藤島葵様の救出をお願いしたいのですが』

「救出ねエ……もうバラされてンじゃねエのか？」

K・M・Pがどれほどの腕前かは知らねえが、藤島葵ってのは一般人らしい。一般人が力のあるヤツに抵抗するのは難しいだろう。一般人の女の力じゃあ……もう殺されてるかもなア。

しかし、電話の男の回答は——意外なモンであった。

『ご心配なく、彼らの目的はあくまで拘束し、サヴィエトに身柄を引き渡すことです。それに我々が派遣した諜報員によりますと、現



在藤島葵様は隙を見て逃走を図っているとのことですよ』

「なら、諜報員に救出させればいいだろ」

『残念ながら、派遣した諜報員が持っているのは拳銃一丁です。数で勝るK・M・Pには数人殺したとしても、おそらく勝てないでしょうね。藤島葵様も近所にあった誠和大学に逃げ込みましたが、残念ながら現在大学は夏休み期間中。最低限の人員以外はおりません。おそらく、彼女の逃走能力では持ってあと数十分ってところでしよう』

誠和大学。

確か、古宇坂市で唯一の大学だったな。しかも小規模な大学で、法学部とその中に3コースがあるのみだったような気がする。まあ藤島葵ってのが大学に逃げ込んだのは正解だな。いくら小規模とは言え大学は広いし、隠れる場所も沢山あるはずだ。

だけど大学もなァ……確かに大学の夏休みってのは始まるのが遅い分、終わるのも秋に入ってからだったような気がする。

それに電話の男の言う通り——ソイツの逃走能力には限度があるだろう。

『お仕事頼めますかね。報酬は現金とミネット・ローラン様に関する情報提供ですよ』

「クソガキの居場所が知りたけりゃあ、仕事を片付けろってかァ？」

『言葉を換えればそうですね』

「チッ、嫌な上司様だァ……とりあず一つだけ約束しろ」

『なんででしょうか？』

「あのガキの居場所だ。仕事を片付けたら必ず教えろ。でないとおマエを肉塊に変える」

『恐ろしい脅しですね。約束はしますよ、ただ——貴方に私は殺せないでしょう』

「あ？」

『ふふふ……それでは、手際よく頼みますよ——早川悠』

ここで電話は切れた。

なんだあのクソ野郎……オレにオマエは殺せねエだと。

ふん、馬鹿な男だ。人間ってのは弱い存在だ。オレが酸素濃度を操作すれば、アッサリあの世に逝っちまうくらいに弱い生き物なんだ。あのクソ野郎だって同じ人間……なら、このオレが酸素濃度を操作すりゃああの世に送れるってわけだア。

だからオレを怒らすなよオ……無駄な血イ見る事になるぞ。

「……………」

能力使用モードは残り25分、魔力残量は十分だ。これなら、永瀬達のような不良連中を潰すのに苦労はしねエだろう。

だが、極力能力は使わねエ……単なるヤンキーのような雑魚相手に、能力を使いまくるようではまだまだオレも半人前だ。

能力を使うとすれば移動と戦闘の補助、防御の為に暴風の膜を張り巡らすのみ。

それ以外では使わねエ——。

これから先、能力が使えない時で戦闘を行う可能性もゼロではな

い。なら、今のうちに能力を極力使わない戦い方を学んでおく必要がある。

武器は……拳銃一丁と50発の弾丸。

相手は銃を持っていないだろうし、おそらくこれだけあれば十分だ……と、

「——ッ！」

その時、誰かがオレの目の前を通り過ぎる。

近くにある階段を飛び降りるように下り、誰かと通話をしながら走る少年。ソイツは黒くて寝癖のような髪がピンと立っている頭。少しかだけ細い気もするが、やや筋肉質な気もする体格。

握られた拳。あの顔、あの雰囲気、カッターシャツに学ランのボトム。あの少年は成和大学のほうに向かっていているようである。

何をしに行くか……そうか、藤島葵は——。

「あ、の——野郎オ！」

アイツはオレの前に立ち塞がり——特異点を救ったヒーロー。

なるほど、藤島葵は——アイツの妹だったのか。

ということはアイツの名字は藤島。名前は確か木下のおチビちゃん曰く、圭介って名前だったような気がする。

藤島圭介——やっと見つけた、フルネームも判明した。

「……ッ！」

無意識に変換機のスイッチに手を伸ばしたいたオレ。

そこでようやく気付く。馬鹿かオレは……藤島圭介へのリベンジ、25分も魔力が残っていればそれは可能なことかもしれない。けど、今はそんなことをしている場合ではない。藤島葵ってヤツを救

わない限り——オレはミネットの居場所を掴むことが出来ない。  
無理に首を振り、藤島圭介のことを忘れ、意識を切り替えようとする。

「藤島葵、コイツを救えばいいんだな？」

なら救ってやるよ、たとえソイツが藤島圭介の妹だとしても、ソイツはただの一般人でありオレらの事情には関係ねエ。  
そこに一般人が入るべきではないんだ。

「フッ、救ってやるよ……最も救いから遠い方法でなア」

何もかも……血みどろに救ってやればいいんだよ。  
それがこのオレ——早川悠のやり方ってモンだ。

俺は今、葵と電話をしながら誠和大学という所へ向かっていた。  
西園寺の話によると、K・M・Pってのはこのあたりで活動するチームらしい。

だけど気になる事が一つだけあるんだ。そのチーム、今まで敵対するチームとの抗争はやってても一般人を襲う真似はしなかったらしい。でも、なんでだろうか。それなりの節度を誇りを持っていたチームがどうして——サヴィエトなんかと手を組んだんだよ。  
それで、西園寺からヤツらのアジトを聞いて、そこに向かっていったのだが……。

「葵！ まだ大学にいるか！？」

『う、うん！　今ね、大学の大講義室に隠れてるよ』

「そうか。いいか、物音立てないでそこに隠れてろ。今助けに行くからな！」

『う、うん！』

俺は途中で進路を変更、誠和大学へ向かうことにした。理由は簡単、どうやら葵は隙を見て逃走を図ったようで、とりあえず清和大学に逃げ込んだらしい。

でも、8月のこの時期と言えば――大学は夏休みの最中である。部活をやっている人も、おそらくは大会やら何やらで学校にはいない。大学に籠って研究を続ける教授も当てにはならない。葵によると、警備員の姿も普段よりは少なかったらしい。

そして葵の話によると――ヤツらは既に大学に侵入しているそうだ。

『お兄ちゃん、クーにゃんやお姉ちゃんは？』

「暮葉は用事、伊吹も部活だ」

『で、でもお兄ちゃん一人じゃ危険だよ！？』

「大丈夫、お前のことは必ず助けるから！」

『お、お兄ちゃ――』

そこで俺は電話を切った。

確かに暮葉は仕事だし、伊吹は部活中。特に今回の件は暮葉はまあいいとして、伊吹だけは絶対に巻き込みたくない。アイツにと

って不良とは——トラウマのような存在だからだ。

でも、決して俺一人と言うわけではない。今回は——西園寺もいるんだからな。

アイツが突破口を開いてくれるらしい、その隙に俺は大学に侵入する。大学に侵入すれば後は俺と不良達の戦いだ。

思い出してみれば、K・M・Pの連中とは何度か路地裏でやり合った事がある。

チームの名前は知らなくても、なんとなく服装に見覚えがあったからだ。

だが——それは俺が永渕を倒したという噂が広まったからである。だから、今回のように自分からK・M・Pに挑むのは初めてである。

「ちくしょう、葵——無事でいてくれ！」

そう叫びながら、俺は誠和大学正門を突破する。警備員はいない、いや、正しくはいるけど使い物にならない状態であった。何故か大学にいる警備員は。意識を失った状態で倒れている。

これが不良の仕業か、それとも西園寺が突破口を開いたからなのかは知らない。

けど、今はそんな事を気にしている場合でもない。だから俺は突き進む。ガラスが全部砕かれた正面入り口から——誠和大学内部へと侵入した。

## 第184話、K・M・P（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「あんたってやっぱシスコンよね」

暮葉「あ、それは確かに言えてるのです！」

圭介「なんでだよ!？」

亜紀「妹を助ける為に血相変えて大学に行く姿が完全にシスコンだった!」

圭介「いやいや、家族なんだから普通助けるだろ？」

あかり「あたいは別に思わないぞっ！ うん、エロ兄貴相手ならな!」

圭介「ひでえ妹だっ！」

千早「……先輩、あかりはツンデレなんですよ……っ」

あかり「ち、違うっ！ あんな兄貴いなくたって寂しくないんだからな！」

葵「葵はお兄ちゃんがいないと寂しくて死んじゃうよ！」

圭介「葵、てめえは少し兄離れしろ……」

## 第185話、流血大学

「まだ見つかんねえのかよ……おい！ 藤島ってヤツはまだ見つからねえのか!？」

拳を壁に叩き付け、俺——はましましや浜島雅人は苛立っていた。

クソッ、いきなり意味不明な連中に脅され、藤島ってヤツを襲おうと思ったら、いきなり変なヤツにチームリーダーを殺されて、それでも俺らは意味不明な連中な連中に脅され、結局俺がチームリーダーになって藤島を襲って……。

しかも、その計画さえ失敗に終わろうとしていた。なんと、藤島ってヤツは隙を見てこの大学に逃げ込んでしまったのだ。

大学に襲撃してからも失敗が続いた。警備員が動き始め、襲撃者である俺たちを押さえこもうと活動を始めたのだ。しかも藤島ってヤツは見つからねえまま。

大体、なんで藤島って名字と、男と女が写った写真しかねえんだよ。これだけじゃこの2人のどっちが藤島かわからねえだろ。

「クソッ！ なんなんだよサヴィエトって……一体俺らに何の恨みがある。なんで俺らの信条と逆の事をさせようとするんだ。なんでその後俺らのリーダーが殺されたんだよ！」

もうわけがわからねえ……わかんねえよ。

でも、一つだけ言える事がある。

俺は無理やりK・M・Pのリーダーに仕立て上げられた。と、いうことは……俺も先代リーダーのように殺されるかもしれねえ。

嫌だ……殺されたくねえ。アイツがどこの誰に殺されたか知らねえけどよ、俺はまだ死にたくないかねえんだよ。だから、生きれるためだったり——意地でも藤島ってヤツを捕える。



それで生き残れるんなら——俺はどんなことでも……ハハ、や  
てやるよ！

「え……いい、いやっ！」

お、女の叫び声……ハハッ、ついにやったか。やっと藤島を見つ  
けたか。藤島が見つかったってことは俺は——生き残れるかもしれ  
ない。

喜びに溢れ、テンションを上げた俺は、ポケットから無線機を取  
り出した。

今から無線機コイツで仲間に連絡だ。

「浜島だ！ 標的発見。ターゲット俺たちでソイツを捕まえるから、お前たち  
は警備員追っ払って車の用意を——」

『ぐわっ！ て、テメェなにしやが——ッ』

え……な、なんだよ……これ。やる気のない返事が返ってくると  
思ったのに、どうしてヤツらの叫び声が聞こえた。なんで銃声が響  
いてやがるんだよ。

ありえねえ……警察、なわけがねえ。警察はすぐには発砲しない。  
あんなヘタレ、逃げようと思えばいくらでも逃げれるんだ。じゃあ  
誰だよ……向こうで銃を撃ったヤツは？

『はアイクソ野郎共』

なんだ……この声。

警察……じゃねえよな、言葉使いは俺たち並に汚い。それだけじ  
やない、狂気と殺意と血に飢えた雰囲気を放つ恐ろしい声。コイツ  
——ただ者じゃねえぞ……ッ！

『なア、あの世ってどオなってると思う？ オレにはわからねエな  
ア……だからさア、オマエらK・M・Pが確認してきたくれねエか  
？ つーワケで、天国か地獄かどっちか知らねエけど、あの世への  
片道チケットをプレゼントしやるから、感謝して死にやがれっつー  
の！ あぎゃはははっ！』

く、狂ってる……コイツ、頭が完全にイカれてやがる。

マトモなヤツの発想じゃない。無線に出た謎の男は完全に頭がイ  
ッている。常識なんて通用しないくらいに狂ってやがる。やばい……  
コイツは本気でヤバいぞ。早く、早く藤島って女を捕まえて大学  
から逃げ出さねえと——俺たち皆殺しにされちまう。

う、ああ……は、早く、早く仕事を終わらせねえと……ッ！

俺——藤島圭介は大学の廊下を静かに歩いていた。例えるなら、  
市街地でテロリストと戦う米陸軍のような感じで、俺は壁に背中を  
張りつけ、武器を構えていた。

現在、俺が手にしている武器は、丁度いいサイズにカットされた  
鉄パイプ。不意打ちで殴り倒した不良が持っていたのを、俺が鹵獲  
したものである。俺は鉄パイプを鹵獲した後、隠れては敵が近付け  
ば鉄パイプを振りまわすという動作を繰り返し、今までに4人ほど  
の不良を倒してきた。

いくら不良とはいえ、正面から戦うのは面倒である。だからこそ、  
卑怯かもしれないが隠れながら戦う戦法をとったのである。こっち  
のほうが、確実に倒せるからな……。

「……っ！」

その時、廊下の奥のほうから物騒な物音が響く。

銃声。

凄まじい音が激しく炸裂し、今頃誰かが血を流している事だろう。しかしなんだ、どうして銃声が聞こえるんだろうか。まさか……K・M・Pってのは銃まで持っているのか？

まずいな……もしそうだとしたら、鉄パイプじゃ太刀打ちできない。でも、俺の身体なら1発や2発程度なら問題ないハズだ。

俺なら——多少は喰らっても平気だ。

「さて、大講義室は……ここかつ」

大講義室に通じる大きな扉。そのノブに、俺は手を伸ばした。

ゆつくりと、ノブを回して扉を開けると、カチリという金属音が響く。おそらく扉の金具が動いたんだろう。開ける際に物音が響くのは仕方のない事だ。

でも、幸いなことに相手には聞こえていないようである。僅かに扉を開け、扉と壁の間から大講義室の中を確認できる。俺は隙間を覗き込み、薄暗い大講義室の中を確認する。

武器を持った不良達が5人。その不良に囲まれるように、葵が座り込んでいた。

全員、武器を持っている。

木刀や金属バット、鉄パイプにただの棒切れなど、種類は沢山だが……どれもこれも俺が持っているのと同じ、近接戦闘用の単純な武器ばかりだな。これなら俺でも戦えそうだけど……さっきの銃声のこともあるしな、もしかしたらアイツらも——銃を持っているかもしれない。

幸い、大講義室は机で死角が多い。

なら、ヤツらにとっての死角から——奇襲を仕掛けて短時間で沈めてやる。

そう決めた俺は——静かに大講義室に入ったのだが、

「お、お兄ちゃん！」

「あ？」

ひえええ、あ……アホか俺の妹は！

どうしてそこで叫ぶんだよ、折角奇襲を仕掛けられそうだったのに。おかげで不良の皆さんがゾロゾロと、不自然に開いた扉を見ながら近づいてきたじゃねえか。

俺は咄嗟に机の下に隠れたけど……こりゃあ、見つかるのは時間の問題だ。

相手はまだ俺を目撃していない、俺に気付いていない。

つまり——まだ不意打ちのチャンスはある。

「——ッ！」

そのチャンスを——俺は逃さなかった。

咄嗟に机から飛び出して、鉄パイプでボサボサとした茶髪の男を殴り飛ばした。こめかみに鉄パイプが直撃し、ゴア！ という鈍い音が炸裂する。男は一撃で気絶したようだ。

1人撃破。

すぐ目の前にもう一人——剃り込みの男が立っていたが、

「おおアあッ！」

先手必勝。

鉄パイプで鳩尾を突き、怯んだ隙に鉄パイプを左腕だけで持つ。

そして、自由になった右拳を限界まで握り締め、思いつき振り上げてやった。

ゴッ！ という打撃音が顎に炸裂すると共に、剃り込みの男は大きくぶっ飛んだ。

2人撃破、今の所順調である……が、

「う、動くな！ 動くと女を……さ、刺すぞコラァ！」

「……ッ！ て、てめえ……っ！」

俺が残りの3人に近付くと、そのうちの一人が葵にギラギラと輝く何かを突き付ける。

それは、良く研がれたナイフだ。

首筋に刃先を当てられ、葵の首筋から僅かに鮮血が流れ出す。寸止めではなく、少しだけ刃を葵に刺しているのだ……クソ、あの野郎。

「ど、どうだ迂闊に動けないだろ？ い、今から俺の言うこと聞いて——あ、がアッ!？」

その時、葵を押さえつけ、首筋にナイフを突き付けていた男が倒れる。

突然響いた銃声と共に——。

一度瞬きし、もう一度男の姿を確認してみる。頭がない……ぐちゃり、鮮血の中にまとまったピンクのような、クリーム色のぬちゃぬちゃした物体が、壊れかけの容器からはみ出ている。

「……ッ！ う、あ……ッ」

それを見て、胃の中から何かが込み上げてくる。葵は吐きこそはしなかったが、ひたすら悲鳴を上げている。大講義室中に葵の叫び声が響いていた。

そして、殺された仲間の不良達は――

「う、ああ……あああああああああああああああああああああ  
あああああああ！」

「だ、誰だよこらあああああああつ！」

叫びながら、弾丸が飛んできたと思われる暗闇へ——ナイフや携帯電話を投げつける。

どうやら 彼らは拳銃を持っていないようだ。飛び道具を一切持っていないので、彼らは持っているものを投げつける以外に、遠距離にいる敵を攻撃する手段はない。そんな彼らにも——容赦なく鉄の暴風が降り注ぐ。滅茶苦茶に動きまわる男達は、奇跡的に弾丸を回避しているが……。

それでも、遂に一人が胸を撃たれ、口から血の塊を吐いて倒れてしまった。

「あ、葵！ 今だ、今のうちに逃げるんだ！」

「お、おにい……ちゃんっ」

「気持ちにはわかるけど……でも、逃げないと殺される——！」

誰が銃撃を始めたかは知らねえけど、コイツはかなり無差別な銃撃だ。狙いも滅茶苦茶で弾丸が机に被弾し、嫌な音が炸裂している。いつ流れ弾が当たったっておかしくない。伏せていてもそのうち撃たれるかもしれない。だったら――姿勢を低くして逃げるしかない。

「行くぞ、葵！」

「あ、お……お兄ちゃんっ！」

俺は葵の華奢で美しい腕を掴み、大会議室から脱出する為に走ります。ただ、誰かが撃っている拳銃の餌食ならない事を祈りながら――。

「ぎゃあっはひゃはあはっ！ 最ッ高に楽しいねエクソ野郎ォ！ 愉快にケツ振って逃げてンじゃねエぞコラァ……ハッ、オマエも今すぐ銃殺にしてやるっ！のォ！ あっぎやははは！」

その時、どこかで聞き覚えのある、狂ったような笑い声が耳に入った。

どうやらこの声の主が拳銃をぶっ放し、不良達を殺してきたらしい。そして、葵を連れて逃げようとする俺も――不良の一人だと思っっているようだ。

「ふざけんじゃねえよてめえ！ 何者か知らねえけど、人殺しなんてふざけた真似しやがって！ 今すぐ警察呼んでやるから大人しくしてやがれ、このクソ野郎が！」

……とはいいつつも、拳銃持ってる相手と戦えるわけがない。

なので、俺はさっさと葵を連れて逃げる事にした。第一、あんな危なっかしいヤツ、相手にしたくもないし関わりたくもない。それにこれ以上、あの空間を葵には見せたくない。下手すりゃ葵の精神が崩壊してしまうかもしれない。そうなる前に――地獄から脱出しなれば！

「オラァ！ テメエ仕返しだコラァ――あ、ぎゃああっ！」

「不意打ちなンて100年早エンだよ雑魚！ 精々床でも這ってる

ってンだよオ！」

今のうちに、アイツらが戦っているうちに——ここから逃げないと。



## 第185話、流血大学（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「はい来たよ浜面○上っぽいのが」

大吾「つーか、色々とエグいな今回……」

重原「絶対テレビだと深夜枠だねコレ」

圭介「さて、普通の俺とセロリモドキとヘタレヤンキーが揃ったわけだが……」

大吾「圭介が普通？」

重原「圭介は相○歩と上○当麻を足して2で割ったようなキャラだよね」

大吾「ほぼ不死身かつ変態で、その上熱血漢で説教男だからな」

圭介「俺……他の2人と比べたら普通だよね？」

※作者的には怖がりな浜島が一番普通だと思います。

## 第186話、浜島雅人

俺と葵は廊下を歩き、時々倒れる不良達の姿を見ながら、どうにか脱出に成功。現在誠和大学の広い敷地内をさ迷い、どうやら図書館の近くに來たらしい。

えーっと……正門はどこだったかな。追手は多分すぐに来るだろう。捕まってしまう前に大学から逃げ出さないと、今度は俺も葵と一緒に捕まってしまうぞ。

いや、その前に——あの殺人鬼に殺されるかもしれない。

「お、お兄ちゃん……っ」

言いながら、葵が俺の二の腕にしがみ付いてくる。

甘えると言うよりは、抱きつくことによって恐怖を和らげている……と言う感じだ。

「大丈夫だ、俺たちは助からから——必ずここから逃げれるから」

「う、うん……でも、さっきの……っ」

「大丈夫、俺が……俺がいるから、だからお前は大丈夫だ」

俺は開いている右手で、葵の頭を撫でてやった。

本当はどうすればいいのかわからない。あの悲惨な状況を見て、おそらく精神的にも参っているだろう葵に、なんて言葉をかけてやればいいのか——俺にはわからない。

今はただ葵を元気づけようと、葵を慰めようとするしかできない。

今の弱い俺には——それしか妹にしてやれない。

「お兄ちゃん……やっぱり、お兄ちゃんってすごいよね」

「それはないだろ。俺は……何もできないただの馬鹿男だぞ？」

「それでもだよ、すごいよ……お兄ちゃんは。だって……すごい冷静だったもん」

冷静、か……葵にはそう見えたのかもしれないけど、それは途中までだ。本当は小便漏らしそうなくらい怖かった……本気で死ぬかと思った。不良を壊れた身体を見た時、嫌な汗が噴き出て葵と一緒に叫びたくなった。本当に強いヤツなら——そこで動揺しないハズである。

結局……俺は変わっていない。

まだ弱いまま、これじゃあみんなを——暮葉を守ることができない。

「冷静……か、それはねえよ。俺も葵と同じだ」

だから——俺は正直に葵の言葉を否定する。

「そ、そんなことないよ！ お兄ちゃんカッコよかったよ？ 一人で葵の助けに来てくれる姿が正義のヒーローだったよ」

「正義のヒーローが、暴力なんて振るうと思うのか？ 誰かを殺せると思うのか？」

「こ、殺すって……お兄ちゃん、あの不良の人を殺したのはお兄ちゃんじゃないんだよ？」

「アイツは、俺がさっさと倒していれば死ぬことはなかった。お前を人質に取られる前に倒してしまえば命を失わなかった。けどアイツは殺されたよ……俺が弱かったから、俺に倒される前に——殺人鬼に殺されちゃったよ」

「お兄ちゃん……」

結局、俺が殺したのと変わりはない。

倒れていれば——あの殺人鬼が拳銃を撃つこともない。そう、あの不良達が殺されたりもしなかったかもしれないんだ。だけど……結果はその反対、アイツらは殺された。いや、俺が殺してしまったのかもしれない。俺が弱かったからアイツらは……。

「お兄ちゃんは悪くないよ……だからお兄ちゃん、自分だけは責めちゃダメだよ……っ」

「……悪い」

ハハ、結局……俺って何も変わってねえや。

暮葉や伊吹に言われた事を——葬にまで言われちゃったよ。なにも変わってねえ……相変わらず、俺は弱いままだった。

「……お兄ちゃん、これからどうする？」

「そうだな……これから——」

本当なら警察に通報すべきなんだろうが……今回のこの騒動、K・M・Pが俺や葵を狙っているということは、背後にサヴィエトがいるかもしれない。一応今回のことは、携帯電話で電話でもして暮葉に伝えておこう。今回の後始末は——アルファ隊にやらせたほうが

いい。

そうだよな……やるべき事は山積している。  
くよくよしている場合じゃない。強くなる為には——前を向いて  
進まなきゃな。

「——とりあえず、安全地帯まで行こう。話はそれからだ」

「あ、安全地帯？」

「大学の近くは住宅街だろ？ その辺に明智の家があるハズだ。明智はもちろん、その爺さんとも知り合いだし、明智家のみんななら俺たちを庇ってくれるだろう」

「う、うん。じゃあ、明智先輩の家に逃げようっ」

よし、行くぞ、と俺は葵の手を引き、大学正門を探して歩き始める。

だが。

「止まれ」

俺たちの進路を遮るように、一人の男が立ち塞がっている。アレ……アイツ、どこかで覚えのある男だな。茶髪のボサボサ頭に、作業ズボンにスカジャンの男だ。おそらく、こめかみを殴られた後にすぐ目を覚ましたのだろう。鉄パイプで殴ったのに……案外、タフなヤツなのかもしれない。

「テメエ……何者だよ。突然現れて俺らを襲いやがって………そうい

えば、テメエは後ろの女と一緒に写っていた男じゃねえか。テメエ……その女とどういう関係なんだよ？」

「俺と葵？ 俺と葵は——ただの兄妹けいまいだよ」

「兄妹……？ ハハッ、なんだよそれ……ってことはアレか、つまり俺たちは初めから標的ターゲットを誤っていた。本来捕まえるべき存在は——テメエだったんだ」

「捕まえる存在……だと？」

「俺もわからねえけどさ……頼まれたんだよ。全く、それで先代リーダーは殺されるし、今回仲間を沢山殺されたし……クソ、笑えねえよ」

「その言い草——てめえがK・M・Pのアタマか？」

「ああそうだよ……この浜島雅人こそ、今のK・M・Pのリーダーだ。全く場違いだよな……俺がリーダーって。でも仕方ねえんだ、もうアイツはいない。そして俺がリーダーである以上——俺も殺されるかもしれねえ」

なんだコイツ……ホントにK・M・Pのリーダーなんだろうか？ 妙に弱々しい。なんというか……物凄く何かを恐れている気がする。おそらく、浜島って男が恐れているのは死だろう。誰かに殺されるかもしれないらしいし、それが怖いんだろう。

「殺されるだど？」

「何だよその確認は。わかってんだろ……あの殺人鬼、テメエの差

し金なんだろ？　ハハッ、最悪な兄貴だよなあ……妹を助けるのに殺し屋雇うって……」

「ふざけんなよ。俺はあんなヤツを雇った覚えは無い、雇う金もない、雇う気もねえ。俺はただ兄として葵<sup>コイツ</sup>を助けに来ただけだ」

「つまりアレか……テメエはあの殺人鬼と関係ねえと。ソイツの兄つつーことはテメエの名字も藤島で、俺たちの標的<sup>ターゲット</sup>というわけと……」

言うと、浜島と名乗った男がはは、と小さく笑う。

ゴソゴソと、笑いながら右手を後ろに回し、伸縮式の警棒を取り出す。おそらく、ズボンのベルトにでも挟んでいたのだろう。浜島は取りだした警棒を大きく振り回し、

「テメエさえ捕まえれば——俺は生き残れるってわけだ！」

叫ぶと、浜島が一気にこちらへ駆けてくる。

「お、お兄ちゃ——ッ」

「下がってろ！」

俺は葵を突き飛ばし、不良達を倒すために持っていた鉄パイプを構える。しかし、葵に構っていたせいでワテンポ遅れた俺の耳に、風を切る嫌な音が響く。

既に浜島は警棒を振りまわし、俺にそれを叩きこもうとしていた。

「ッ！」

咄嗟に顔を守るように鉄パイプを構える。瞬間、金属と金属が衝突しあい、鈍い音を立てて振動が骨にまで伝わってくる。衝撃で鉄パイプを持つ手首を痛み、思わず顔を歪ませる。しかも情けないことに今ので鉄パイプを地面に落としてしまい、ガランゴロンと金属の棒が地面を転がった。

今更取っても遅いと判断した俺は、拾わず浜島の胸倉を掴もうとした……が、

「正しい判断だ」

ぐわん、と突き出した俺の右手に、浜島の警棒が振り下ろされた。ミシミシと言う嫌な振動が手首に伝わってくる。今の一撃で崩れ落ち、顔を歪ませていた俺。

そこに——何かが飛んでくるのが見えた。

「どっ、あ！」

膝。

突き立てられた膝が俺の腹部を刺激し、腹部に破裂するような痛みを覚えた。

さらにゴア！　と言う衝撃が首筋に襲い掛かる。おそらく、浜島の固く握られた拳が俺の首筋に振り下ろされ、碎けるような一撃を喰らってしまったのだろう。

次の攻撃が来る——と思ったが、中々攻撃が来ない。

どうやら浜島は、今ので俺を無力化できたと思っているようだ。

「サッパリわけわかんねえけど……とりあえずアレだな。コイツさえ捕まえちまえば、俺らに拉致を指示してきた連中も納得する。それで匿ってもらえる、殺人鬼に殺されないかもしれねえ……はは、はははは、はははははは！」



勝利を確信したようなその言葉……だけど、馬鹿だよなコイツ。どうやら、本当にサヴィエトから何も教えてもらっていないらしい。俺が——アレクサンドルってヤツの血を引いているって事も、俺が特異体質であるということも。

それからな、今の言葉——ちよつとムカついたぞ。

「もう一度——言ってみろてめえ！」

腹の底から思いっきり叫んだ俺は、低い姿勢から一気に立ち上がるように、自分の頭を浜島の顎に思いっきり叩きつけてやった。

ヘッドアッパー。

揺さぶるような一撃に、浜島は耐えられず後退りをしてしまう……が、手が届かなくなる前に左腕を伸ばして、俺は浜島の胸倉を掴んだ。

ぐわん、と一気に浜島を引き寄せ——鼻っ柱に握った右の拳を叩き込んだ。

一旦宙に浮いた浜島の身体が、一気に地面へ叩きつけられる。浜島は血だらけ、鼻から大量の血を流している。今の一撃で鼻の骨でも折れたのだろうか？

「あッ、があああアあッ！」

そんな痛みでもがいている浜島に、俺は言葉を吐き捨てる。

「ふざけんな、誰だって普通は死にたくねえだろうさ。だけど、いくら自分が生き残る為だからって、そんな事をしていいと思っただのかよ!？」

「仕方ねえだろ！俺たちみたいなゴロツキに救いなんてねえんだ

よ！ あそこで白旗上げてたって殺人鬼に殺されていた、いや——  
その前に依頼主に殺されていたかもしれねえ。だからって俺たちみたいな悪人が警察に助けを求められるかよ！ 大人に助けを求められるかよ！ どうせ悪ガキの自業自得って切り離されるだろうぜ？  
だからなあ……俺たちには任務を遂行すること以外に——生き残れる選択肢は残されていねえんだよ！」

「生き残れる選択肢？ そんなもん——あるに決まってるだろ！」

熱くなって叫ぶと、浜島が眉をひめろる。

その姿を確認した後、俺は浜島に叫び続けた。

「すべての人がためえらを見離すと思ったら大間違いだ。確かにてめえらは悪者かもしれねえけど、それでも殺人の被害者だったんなら、全員が見捨ててる事はねえだろ。たとえ世論から激しい批判を受けても、周りのヤツらはためえらを庇うハズだ」

「黙れ！ そういうことを言えるのは……テメエが何も知らねえからだろ！ ありえねえ、たとえ俺たちが被害に遭っても、所詮は路地裏の落ちこぼれなんだよ！ この世じゃ俺たちに生きる資格なんてねえようなモンなんだ。だから——俺たちは自分で自分の身を守る以外に、生きる手段がねえんだよ！ 何も知らねえ癖に俺たちを馬鹿にしてんじゃねえよおおおおおおおッ！」

警棒を構え直し、浜島が叫びながらこちらへ突っ込んできた。

結局、この男は弱い。

リーダーやっているのが奇跡なくらい——弱い男だった。

もう怖くない。化けの皮が剥がれたコイツは、この程度の人間だ。

「てめえらに生きる資格がねえってのは間違っている」

呟きながら、俺は固く拳を握り締める。葵が後ろで戦いを止めようと叫んでも、浜島が警棒を振りまわしてきても、気にせず俺は集中し——己の拳を限界まで握り締めた。

「教えてやるよ……だから、もう一度やり直してきやがれ——このクソ野郎が！」

同時に、二つの鈍い音が響き渡った。

俺の顔面には警棒、浜島の顔面には俺の拳が突き刺さっている。互いに大きなダメージを受けてグラグラと、血を流しながらバランスを崩す。

しかし、倒れたのは一人だ。

俺は——決して倒れる事は無かった。

それから数分後、俺と葵の前に西園寺と暮葉が現れた。暮葉は仕事帰りに、俺らが襲撃されていると言う通報を聞き、大急ぎで駆け付けてきたらしい。一方、西園寺は仲間と共に、誠和大学にいる警備員と戦い、ついでに不良も何人が倒していたようである。

しかも、浜島の身柄は私たちが拘束するらしい。

警備員と不良を倒し、浜島を拘束して……西園寺、お前とお前の仲間は何者なんだ？

「……よしっ、けーすけ様！ これで大丈夫だと思いますっ」

「いいよ暮葉、俺の体質知ってるだろ？ こんな怪我すぐ治るから」

「だーめです。ちゃんと手当てしないと黴菌が入っちゃうのですよ？」

俺は浜島に警棒でぶん殴られ、額から大量に血を流していた。だからか、暮葉は俺を見るや慌てて歩み寄ってきて、いきなり消毒して包帯を頭に巻いてくれたのである。

消毒と包帯、何故持っていたかが気になるが……まあいいや。

ぶっちゃけ——暮葉に手当てされるの、すごい嬉しいんだよな……。

「むう……っ」

「あらあら、仲いいわねあの2人っ」

「不満だよ！ 葵だってちょっと怪我したのに、お兄ちゃん全然手当てしてくれないよっ」

「大丈夫よ、私がちゃんと絆創膏貼ったもの。大した怪我じゃなくてよかったわね」

「うう……葵お兄ちゃんに手当てされたかったよ！」

なに言ってんだあのブラコン・マイ・シスター……まっ、いいか。アイツの首の怪我也軽い切り傷だったみたいだし、本人も若干気になる程度の痛みしかないらしいからな。よかった、散々なこともいっぱいあったけど、何より葵が助かってよかったよ……。

「もきゅう……けーすけ様っ」

「っ、お……おうっ」

暮葉が枕でも抱くかのように、俺の頭に両手を回し、優しく抱き

しめてきた。

あどけない顔が俺の顔と並び、柔らかな頬が触れ合う。それだけでも、一般男子高校生としては興奮モノなのに、増してやこの……汗の混じった甘酸っぱい香り。なにより、俺の背中に覆いかぶさるように抱きついていいるんだから、背中にはマシユマロのような柔らかい感触を感じる。

うう……やばい、胸って小さくても——柔らかいものなんだな……ッ！

「今回は本当に申し訳ないのです……」

「い、いいよそんなの……お前に責任なんてないって」

「にゃふふ……けーすけ様、やっぱり優しくて、広いお方なのです……っ」

「……ふっ」

心配性なんだか単純なんだか、でも……やっぱり可愛いよな。

西園寺と葵が見ているけど、別にもうどうでもいいや。

出来る事なら——しばらくこのままでもいいな……。

「ふん」

オレ——早川悠は狭い道を歩いていた。既に夕暮れ、チツ……時間を使い過ぎた、それにしてもあの時のあの怒鳴り声は一体……。

——ふざけんじゃねえよてめえ！ 何者か知らねえけど、人殺しなんてふざけた真似しやがって！ 今すぐ警察呼んでやるから大人しくしてやがれ、このクソ野郎が！

最初はK・M・Pのクソ野郎だと思ったが、どうも違うっぽいな。あの言い草、どうやらアイツは第三者のようだ。まさかあの野郎……藤島葵を連れ去ったあの野郎。

オレの目的——藤島圭介だったんじゃないのか？

そうだな……それ以外には考えられねエ。不良共を倒すのに時間を食ったが、それでも藤島葵ってヤツは生きていた。おそらく、藤島圭介が妹を救ったんだろう。

まっ、どオでもいいか……そう思い、オレは路地裏から出ようとした——その時。

そこでオレは声をかけられた。

「いやいや、俺たちの不手際で残業やってたらしいけど……」

「その顔だと、どうやら成功したらしいな。流石、最強の超能力者って所だよなあ」

「アンタって案外すごいわ。もやしだからってナメたもんじゃねえわね」

目の前に現れたのはラウルと近藤、その後ろにアナスタシアの姿もあった。

なんだコレ、まさかザスローン全員集合かア？

どオやら、残業を終えたオレを出迎えに来たようだ。

「このオレに何か用か？」

「大したようじゃねえのよ。ただ、お前さんと酒でも飲もうと思っ  
てなあ」

「チッ、オレは本来高校生だぞ……？」

「なあゝに気にしない方がいいわ。初仕事が終わったんでしょ？  
その打ち上げをやんのよ」

「今まで散々こき使ってきてサヴィエトへの反抗が、今回初めて出  
来たからね。俺も近藤もアナスタシアも、内心喜んでるんだよね」

「そオかい……オマエらは仲良しこよしってワケかア」

オレは狎れ合うつもりはねエンだけどな……ただ、オレは守られ  
ばいい。こんなクソツタレた世界からでも、あのクソガキを守る  
ンなら——それだけで十分だ。

まっ、これがコイツらのやり方だってンなら——少しは合わせて  
おくか。

同業者同士仲が悪いンじゃ、今後の作戦にも影響するだろオから  
な……。

チッ、オレの柄に合わねエ……。

「まっ、結束力ってのは結構重要なモンなのよな。俺達が少ない人  
数で戦力になる為には——ソイツ最も大事ってことなのよな」

「そういうわけ、だからアタシらは繋がり（つなぎ）を重視する」

「だから手を結ぼう、早川悠。君だって守りたいものがあるんだろ  
う？」

「……ふん」

それがオレの答えであつた。

サヴィエトと佐井学園、この二つは必ずブツ潰す。その為には手段を選ばない、たとえコイツらの重視する繋がりを無視し、コイツらをブツ殺してでも——オレはその二つを潰し、全てを捨ててもあのクソガキの命を守る。これ以上——あのクソガキに血ってヤツを見せるわけにはいかねエ。

だから終わらせる。

何もかも、あのガキが関わらなくても、オレが全てを解決する……。

「ふん……上等じゃねエか」



## 第186話、浜島雅人（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「……」

浅間部長「うわー藤島君のテンション低、とヒデキ10032号は突っ込みます」

浅間部長「何故でしょうね、とヒデキ10039号は疑問を抱きます」

浅間部長「おそらく登録件数減少が原因では？ とヒデキ13577号は推測します」

浅間部長「なるほど、確かに精神的に辛いですね、とヒデキ19090号は同情します」

浅間部長「でも自業自得じゃないの？ ってヒデキはヒデキは言うてみたり！」

千早「……で、先輩……なんで元気がないんでしょうか……？」

圭介「兄貴達ブラザーズが大量繁殖したせいだよ……おえっ」

あかり「あたかも気持ち悪いぞ……っ」

## 第187話、期末考査2日前

8月27日土曜日、早朝。

この日は俺の生誕17周年記念の前日であり、そして期末考査。つまり、我ら学生にとっては脅威でしかないテスト2日前なのである。ここで俺の学生生活を振り返ってみると、食べて遊んで寝てサヴィエトの魔法使いと戦っての繰り返し……その為、実質殆どテスト勉強をしていないのだ。

いつも通り葵に先生頼めばいいかもしれないが、そんな気分じゃないしな。最近の葵は特に変態なもんだから、密室に2人きりになったらいつ襲われる事やら。

何より、妹に勉強を教えてもらっている姿を——暮葉には見られたくない。

というわけで、俺は現在朝っぱらから部屋で猛勉強中なのである。だが。

「だあああ！　ちくしょうわからねえっ！」

なんだよ英文の意味わからねえよ、こんなのどうやって翻訳するんだよ。あと数学だってサッパリ意味不明だし、化学もホントに悲惨だ。国語も漢字は読めるが書けないし、その他の教科もどこか抜けていたりでイマイチわからないのである。

クソッ、まずい……なんとかしないと、このままじゃ期末は赤字だ。

「だいじょーぶですっ！　拙者はけーすけ様がおバカでも全然構いませんっ！」

「そうかそうか、暮葉、お前ってホントいいヤツ——って、オイ

!？」

ちょっと待て、どうして隣に暮葉がいるんだろうか。しかも、俺の左肩に凭もたれかかって満足そうな表情を浮かべている。

いやいや、そりゃあね。嬉しい事は嬉しいけど……問題はそこではない。

「もきゅ？　どうかされましたか？」

「どうしたもこうしたもあるか！　お前、なんで俺の隣にいるんだよっ!？」

「だって！　ここのところけーすけ様、ずっと拙者達と別行動だったじゃないですかっ」

「そ、それは……」

まあ、いろいろあるんだよ。例えば伊吹と気まずいとか、だってねえ？　結局あの体育館倉庫での外事は何だったんだろうか。あの時はあまりにも突然言われたせいか、伊吹に何も言葉を返してあげることが出来なかったけど、もしかしなくてもあれ……告白、だよな……？

いや、でも、初恋の相手が俺ってだけだろ。そうだ、そういうことだよな。幼稚園から小学校にかけては俺の事が好きだったのかもしれない。なんとなく、そんな感じもしていたし。

だけど、初恋が何時までも続くとは限らない。そりゃあ……確かに、ギャルゲーの幼馴染キャラは小さいころからずっと、主人公の事を想ってヤンデレ化する事もあるが、俺達が今生きているこの世界は現実という残酷なものだ。

いくら伊吹が幼馴染だからって、ずっと幼馴染の事が好きとは限

らない。

「けど……何故だろうか。ここの所ずっと伊吹に見られている気がする……。」

「にゅふふ、けーすけ様のためにも、深いことは問いませんから心配しないで欲しいのですっ」

「お、おう。そうしてくれると助かるけど……」

「はいっ」

ニコツと、眩しくて瞬きしてしまうような笑みを浮かべ、暮葉は更に体を寄せてくる。

俺の肩に体重を傾け、暮葉は目を細める。ああ……暮葉のヤツ、幸せそうだ。そう思っている俺も幸せだと思っているけど、なにこれ……物凄くドキドキする。

8月も末とは言え、気温は昼間になると30度を超える。朝でも暑いくらいで、俺も暮葉も半袖の服を着ていた。華奢で柔らかな腕と俺の腕が直に触れて、彼女の体温が伝わってくる。

髪の毛の甘い匂いが鼻をくすぐる。

まるで恋人みたいなことになっているが……俺達、まだそこまで行っていないだよ。

「けどダメだ。このままでは俺も——自分を抑えられなくなるかもしれない。」

「にゅふふ、幸せです……」

ああ、幸せだな……って、だから俺達まだそういう関係じゃないでしょ。これ以上は流石に自重しておかないと、俺が色々な意味で暴走特急になっちまうだろ。

つか、その前に勉強しないと——期末が恐ろしい結果になっちゃうかもしれない。

「暮葉、雰囲気ぶち壊すように悪いんだけどさ」

「もきゅ？　なんででしょうか？」

「俺、今勉強してたからさ……」

「……っ」

あれだけ幸せそうだった暮葉の表情も、今では完全に曇ってしまった。悲しそうに、少しでも押ししまえば泣きかねない程に。

馬鹿だ俺……そうだよな、こんな事を言ったら普通——こうなるよな。

「もきゅ……そうですね、ごめんなさい……っ」

暮葉は俺の肩から頭を離すと、どこか寂しげな感じで謝ってくる。その瞬間、俺はとんでもない罪悪感に苛まれる。

暮葉は悪くねえのに……っ。

「いや、俺の方こそごめん」

「そ、そんなことないですよ！　拙者こそ、テストが近いのに何やってるんでしょうね……」

そうは言われても、やっぱり俺は彼女を放ってはおけなかった。弱々しく、震える唇で呟いたさっきの言葉。暮葉……やっぱり、俺の勘違いじゃない……のか？

日頃からスキンシップを行ってきたり、合宿の夜にキスされたり……それから、風呂場で初めてをやってしまいそうになった時、俺のことを拒まなかったり……。

全部勘違いだっと思ってたんだけど、違う……のか？

暮葉は俺のことが――。

……ああもう、アホくさ。

なにが勉強だよ。そりゃあ勉強は大事だけど……もういい、一夜漬けて頑張るよ。なんだか暮葉のことを放っておけなくなってきた。だから今日は、今日くらいは――。

「暮葉」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれたからか、暮葉はきよとした顔をしている。いきなり呼んだから驚かせちゃったのかな。ちょっとだけ悪い事をしてしまったかもしれない。

「今から遊びにでも行くか？」

「……え？　で、でも……勉強は大丈夫なのですかっ？」

「俺は大丈夫だよ。日常で本気を出さず、本番で本気を出す男だからな」

「で、ですけど……っ」

「無理にとは言わねえぞ？　お前だって勉強のこともあるからな」

「――ッ！　だ、大丈夫ですっ！　行きますようけーすけ様、

遊びに行きましょうよ！」

相変わらず単純というか、子供というか……まっ、そこが暮葉の可愛い所。とにかく元気を取り戻してくれてよかったよ。後はどこに行くかだよな。

残念ながら咄嗟に思いついた事だし、ノープランなんだよな。普通、こういうのって男のほうがリードするモンだろうから、何処に行くかくらいは考えないと。

うーん……安価で学生が楽しめて、そんないい場所がこの辺にあったかな？

いや待て、俺の趣味と暮葉の趣味が一致しないこともある。  
その事を考えたらやっぱ、本人の行きたい所にするべきだよな。

「よし、暮葉。どっか行きたい場所とかあるか？」

「もきゅ？ 行きたい場所……うーん、けーすけ様の行きたい場所  
でいいですよっ？」

「えっ？ いいのか、行きたい場所とかないのか？」

「はいっ、特にないのです！ だから拙者はけーすけ様の行きたい  
場所で構いませんよっ！」

ここまで元気よく言われると、流石に無理に行きたい場所を聞けないな。

どうしよう。女の子の友達と2人で行って、楽しい所ってどこな  
んだろうか。

つかコレ、単純に言えばデート……だよな？

デートって何処に行けばいいんだよ。暮葉は……映画とか興味なさそうだし、服を買ってあげたら喜ぶんだろうが、生憎今月はエロ

ゲーの買い過ぎで財政難なんだ。高校生の癖にエロゲーの買い過ぎで財政難ってのも、ある意味おバカでサイテーだと自覚はしてるんだけど……。

つついっつい買っちゃうんだよなあ。

あ……そうだ！

「暮葉、千葉にでも行かないか？」

「もきゅ？　千葉ですか？」

「おう、割と近場だけど大都市だし、遊ぶ所も結構あると思う」

「大都市……都会、もしかして東京みたいな感じでしょっかつ？」

「東京ほどじゃねえけど、それでも古宇坂よりはずっと街だぜ？」

「お、面白そうなのです！　行ってみたいのです！」

暮葉はロジーナでも田舎のほうの出身らしく、古宇坂ですら街だと思えるらしい。

初めて東京に行った時なんて、目を輝かせていたからなあ……まっ、千葉も東京ほど大きい街ってわけではないが、それでも人口も100万近くの人が住んでいる大きな街だ。

きっと、暮葉にとっても新鮮な場所であろう。

それに——千葉にもア○メイトやと○のあなもあるしな！

「拙者！　準備してきますねーっ！」

「おう、俺も今から着替えるな」



さて、しっかりリードしないとな。

これでも県民。そしてア○メイトに行くために、よく千葉には行く俺。一応あの辺の地理は頭に入っているからな。道に迷わない為にも、暮葉を楽しませる為にも——男を見せてやる。

## 第187話、期末考査2日前（後書き）

・後書きトークコーナー！

伊吹「ところでさ、作者って道民よね？」

作者「まあ、はい」

伊吹「じゃあなんで地元舞台にしないのよ？」

作者「だって、地元は処女作と次回作で舞台にしちまったし、本州のほうが色々あって便利なんですよ」

伊吹「それ、同じ道民に聞かれたら怒られないの？」

作者「うーん……ただ、一つだけ言える事があります」

伊吹「えっ、なによ？」

作者「北海道アニメ少な過ぎだろ！ A○ーXとニコニコから目エ離せないじゃないですか畜生！」

純奈「作者は道央なだけまだマシだよ。道東はもっと（ry」

圭介「なんで生駒が知ってんだよ。お前まさか！？」

純奈「そんなわけないんだべ！？」

圭介「生駒、もしかして道東出身？」

※飯はうまい、けどアニメ難民です……  
でも地元は大事にしようね！  
（涙）

## 第188話、それぞれの日常

私、国宗伊吹はテスト前活動禁止令が発令しているので部活もなく、今日は間近に迫るテストで悲惨な成績を残さないよう、テストに備えて勉強をしているように思っていた。

でも、部活がなくても、ついいつも時間に起きちゃうのよね。時刻はまだ7時、折角部活がないんだからもう少し寝ていたいわ。せめて8時くらいまで、今日はゆっくりしていたい。でも一度目が覚めてしまうと中々眠れない、私はそういうタイプの人間だった。

仕方ない、朝ごはんでも食べようかしら？

「あっ……」

しまった、パンもご飯もないわ……。

そういえばご飯は昨日切らしちゃったわね。新しく炊くのも面倒くさいし、やっぱりコンビニでパンかお弁当でも買っちゃおうかしら？

その方が楽ね。じゃ、着替えたらコンビニに行こう。

というわけで、私はパジャマから私服に着替え、靴を履いて外に出る。服は最近亜紀と一緒に態々千葉の洋服店で買った、何かの文字入りの白いTシャツとショールパン。

亜紀は、「圭くんはロリ好きっぽいから、ロリっぽいファッションが一番だぁ！」なんて言っていたし、私もばか圭介は間違いなくロリコンだと思うけど……。

でもアイツ、わかんないのよ……アイツの好みが。

「はぁ……」

しかもここ数日、アイツとマトモに話どころか、顔すら合わせていないし……。

やっぱりあんな事言っただのは失敗だったのかな？

で、でも……私にしては頑張ったのよ。あと一歩だったのよ……でもその先、さらに先へ進む勇気がない。仮に言おうとしても、何か反対のと言っちゃうのよね。

意味わかんない……なんでなのよっ。

そんな事を思いつつ、ため息をつきながら私は外に出る……………あれ？

「けーすけ様っ！ 早く来ないと置いてっちゃいますよっ？」

「ちょ、歩くの速えよお前っ！ つーか走るなっ！」

「にやはっ！ こっちですよー！」

「たく……ああいう所は子供だよなあ」

私は衝撃の瞬間を見てしまった。

「なっ、が……ッ!？」

えっ、ちょ、なによアレ……なんでアイツら2人で元気そうにはしゃいでんのよ。

しかもあんの2人とも。なにちゃっかりお洒落しちゃってんのよ。圭介はダメージ加工を施したジーパンに、文字入りの黒いTシャツ、さらに十字架のアクセサリーって……思いつきり街中にいるチャラ男ファッションじゃないのっ！

暮葉もなにニース履いてんのよ。しかも小柄だからか妙に合ってるし。

大体アイツら——なんであんなに仲良しなのよ!?

「う、がああムカつくう！ リア充は死ねえっ！」

自棄になって、私は自分の頭を掻き毟っていた。

ああ……しかもリア充って、普通の人はこんなこと言わないわよね。どうしよう、また意味不明な圭介語が伝染しちゃったわ。ああもう、これも全部あのリア充ばか圭介のせいよっ！

そもそも、なんでアイツら2人つきりでお出かけしてんのよ。アイツも暮葉も、葵ちゃんって可愛い妹はどうちゃったのよ？

葵ちゃん放置でお出かけて……何かあるわね。そう思った私は——ぎゅ、と右拳を固く握って、

「……見てなさい圭介、地獄の果てまで追ってやるわよ！」

青空に向かって叫び、そう天に誓ったのだった……。

あたい——浅間あかりには、ずっと待っているものがある。

それはこの世で最も温かく、胸が破裂しそうな言葉だ。

8月17日のあの別れから——あたいはずっとその言葉を待っている。

待っているんだけど……。

「圭介のヤツ、いつ返事してくんだよ……っ」

あたいは今日のバイトにいく前に、リビングで携帯電話をいじりながら、ずくっと圭介のことを考えている。イライラしたり、ドキ

ドキしたりと、あたいの心は忙しいな。

圭介からの返事……答えなんてわからない。もしかしたら、圭介はあたいの望まない言葉を放ってくれかもしれないけど……それでも——あたいは前向きでいたい。

だから、あたいは温かく、ドキドキするほうだけを考えていた。もしも、圭介の恋人になれたら——、

「あっかり〜んっ！」

その時、背筋が凍るほど聞きたくない声が聞こえ、振り返ると——、

「にゃあああああっ!?!」

「う、ちゅうううううっ！」

あたいは咄嗟に左へ跳躍し、変態突撃兵の攻撃を避ける。うう、き……キモい、いきなり唇を尖らせて突撃してくる兄貴が——どこの世界にいるんだよっ！

「な、ば——エロ兄貴っ！　なにするんだよ、やめろよなっ！」

「いやあゝ、携帯をいじってる妹の仕草に萌えて——ムラムラしちゃったんだよね☆」

「サイテーだぞ！　このハートキャッチエロキュアっ！」

「まあまあそうおっしやらず、ボクに妹分を補充させてくれないかい?」

キラッ、とあたいのエロ兄貴はウィンクをしてきやがった。兄貴はイケメンだ、それだけはあたいも認めている。なにも知らない人が見れば、今ので恋に落ちちゃうかもしれない。

でも、あたいは妹だから知ってるんだ。

このエロ兄貴の――真の姿を。

「嫌だっ！　あたいは兄貴の食い物じゃないんだからなっ！」

「まあまあそうおっしやらず。ましろ色の桜乃は妹キャラながら、兄を夜這いしたんだぞ？」

「そんなのゲームだけだろっ！　あたいはそんな事しないんだからなっ！」

「とにかく、兄をご奉仕しない妹なんて妹じゃないね！　きり○ん氏は例外だね！」

「なにいつてるかわかんねーからなっ！　早くゴキブリじぶんのへやホイホイに戻れよな！」

あたいはお腹と喉が破裂しそうな勢いで叫んだ。だけど、あたいのエロ兄貴がこの程度で退く常識人なら苦労はしないよ。どうやら、あたいのトゲのある言葉は兄貴の脳内で、ドM的な快楽に勝手に変換されてしまうらしい。兄貴はハアハアと、目を細め、顔を赤らめ変態のような笑みを浮かべる。

「えへ、えへ、えへへ……キモチイイでしゅもつとボクを罵ってあつかりんっ！」

「い、嫌だああアあッ！」



本当に気持ち悪くなってきたあたいは、泣きそうになりながらリ  
ビングを飛び出す。

もう——今日はバイト終わるまで家に帰らないっ！

はあ……兄貴と圭介。同じ男のハズなのに……どうしてここまで  
違うんだろう？

葵が羨ましい。あたい——圭介の妹になりたかった。

「ミネット・ローラン、ただいま参りました」

ミネットは8月17日、何者かに捕えられ——気がつけば病院の  
ベッドの上にいた。

よくわからないけど……一緒にあの人もいなくなっていた。

今までリーネさんと一緒に、ミネットはあの人の事を探していた  
んだけど……今日はアルファ隊の上層部から召集され、早朝の今は  
アルファ隊日本支部へ赴いているんだよ。

長野と言う場所にある、なんて事のない地下道。その最深部の一  
室に——アルファ隊の隊長を務める聖人の姿があった。民族衣装を  
身に纏ったその人は椅子に座り、微笑んでいる。

「よく来てくれました、とリーリヤは貴女を歓迎します」

「あの、今日はどんな御用でしょうか？」

ミネットだって一応敬語は話せる人だもん。今回の相手は目上の  
人、あの人やリーネさんと話をする時とは違い、リーリヤ隊長には  
敬語で喋る。

一応、アルファ隊にだって上下関係はあるんだよ。

「“赤の軍神”が本格的に動き始めました……と、リーリヤは状況報告をします」

「赤の軍神……あの、風剣のシルフはどうなったのでしょうか……？」

「彼女は重傷を負っています。しばらくは動けないでしょう、とりーリヤは推測します」

「残りは3人……ですよね？」

「邪炎のサラマンダー、硬質のノーム、聖波のウンディーネ。その中でも現在、硬質のノームの動きが活発なようです、とりーリヤは状況を報告します」

硬質のノーム。

ミネットも詳しい事はわからないけど、土属性の天才魔法使いらしいんだよ。

そもそも、赤の軍神は精霊せいれいの力を持つ者の中でも、選ばれた天性の才能を持つ魔法使いのみがなる事の出来る——才能の役職。

精霊の力を持つ者でさえ、普通の魔法使いの実力を超えている。

硬質のノームも他の土属性の魔法使いと比べれば、圧倒的に強力な存在だよ。土に対して相性が良かったって、おそらく勝つことは難しいであろう相手。ミネットの水の魔法でさえ——硬質のノームには通用しないかもしれない。

「硬質のノーム……なにをするつもりなんですか？」

「現在彼はポルトガルのセトゥーバルで、大規模術式を組み上げています、とリーリヤは現実を伝えます」

「大規模……術式？」

「都市攻略の為の大規模魔法を発動させる為の術式。まあ、ノームの属性を考えればどんな術式を組んでいるか、すぐにわかると思います……と、リーリヤは言います」

「硬質のノーム……土、大地……大地………ッ！？　じ、地震！？」

「そう、彼は地震で東京圏を攻撃。首都圏を叩く事で日本に壊滅的なダメージを与え、一気に日本という一国家を叩いてサヴィエトは領土を獲得するつもりです、とリーリヤはノームの行動目的を推測します」

地震である人やリーネさん。木下先輩に圭介様、そしてミネットの住む日本を……。

ひどいけど、それ以前に硬質のノーム………すごすぎるよ。魔法で地震を起こすだなんて夢物語のレベルだよ。ただでさえ日本は大変な時期なのに………そこで首都を叩かれたら大変だよ。

「と、止めないとっ！」

「はい、もちろん術式が組み終わる前に対処するつもりです、とリーリヤは今後の方針を伝えます」

「でも、どうすればいいのでしょうか……？」

「簡単です。術式完成前にノームを倒す必要があります。その為には木下さんの力も借りる必要があります。そこで貴女に頼みがあります、とリーリヤは本題を語ろうとします」

「は、はい。なんでしょうか？」

「近頃、藤島様の同級生達が結成したフレンドという組織と接触し、今回の事を教えて欲しいのです。戦力不足の中、彼女達は藤島様の味方として——素晴らしい戦力になると思います。そして彼女達を説得後、木下暮葉と合流し、調布飛行場に向かってください。ロジーナ製の超音速魔動旅客機を用意しておきますので、とリーリヤは計画を説明します」

はわわ、ミニット重大任務課されたよ？

で、でも……これが出来なかったらあの人を守れない。いつまで経っても、一人前の隊員になることは出来ない。何年経っても弱いミニットのまま。

頑張らなきゃ……頑張って作戦を成功させなきゃ。

「わかりました！ ミネット、頑張りますっ！」

大変な仕事だけど——頑張らなきゃ。

## 第188話、それぞれの日常（後書き）

・後書きトークコーナー！

浅間部長「いやあ、あつかりくんは可愛いネ！」

あかり「うえ、気持ち悪いエロ兄貴！」

浅間部長「あつかりくんハアハア！」

あかり「うわっ！ 近寄るな、ハレンチだ！」

浅間部長「まあそうおっしゃらず、先程の続きを――」

あかり「嫌だ！ 呪うぞ！」

圭介「あかり……お前C3見たのか？」

## 第189話、早朝の街遊び

千葉市。

人口約96万の都市で、県庁所在地であり政令指定都市もある。幕張新都心や大規模な住宅団地がある都会だが、一部地域には自然も多く残されているらしい。

……と言うのがwikiの情報。

いやあ、便利だよな。態々学校の地理の時間で習わなくても、図書館で分厚い本を探してページを捲らなくても、現代社会にはネットと言うモノがあるからな。全く便利だ、調べ物も趣味もゲームもお宝画像収集も全部ネットで出来るからな。

俺、この時代に生まれてよかったぜ。

「けーすけ様、何か感動する事でもあったのですか？」

「えっ？ まあな、俺は今——珍しく現実感動しているんだ」

「けーすけ様が現実につ！？ 大丈夫ですか！？ 病院行きますかっ！？」

「精神的に逝っちゃった人扱いすんなよ！ 現実感動するのってわりとマトモだろうが！」

「もきゅ！？ そういえばそうなのです……っ」

暮葉、お前もこの世界に来てから洗脳されちまったんだな。可哀想に、もし任務が終わって国に帰ったら苦労するんだろうなあ。

ロジーナって場所には行ったことはないけど、多分俺らの常識は通用しないだろう。

……そういえば、暮葉って任務が終わったら——本当に帰っちゃうんだろうか？

「——様、けーすけ様っ！」

「えっ？」

想像したくもなかった事を考えてしまった。そのせいなんだろう  
か、嫌な事を考えていた数秒間は誰の声も耳に入ってこなかった。

「どうしたのですか？ 完璧上の空でしたよ？」

「悪い、っで、なんだって？」

「けーすけ様、お腹が空きましたっ」

「そういえば朝飯食ってないもんなあ」

葵にバレないためにも、俺達は家で朝ごはんを食べていないのである。超がつくほどどうでもいい情報なんだけど、葵の鼻って犬並なんだよな……。

だから、料理を作るのは危険なのだ。しかし、葵対策の為の朝飯抜きだったが、確かに暮葉の言う通り腹減ったなあ……。

暮葉でさえ腹ペコなのに、高校生男子に朝食抜きはもっとキツいよ。

「よし、じゃあ色々回る前に飯でも食うか」

「はい！」

現在時刻は8時25分。まだレストランは開いていないだろうし、そもそも朝ごはんだからレストランってほどでもないよな……どっか手頃な店開いてないかな？

「そういえば駅ビルにマックあったよな……そこでいいか？」

「はい、拙者はけーすけ様の食べたいもので構いませんよ」

暮葉、なんていい子なんだ……マックは経済的にも優しいからありがたいよ。確か今月は150円で極光鶏肉オーロラチキンとか言う、厨二なメニューがあったハズだ。

それとポテト、あとシェイクがあればいいかな。結構なポリウムだろう。

と、言うわけで俺と暮葉はマクドメルド駅ビル店へ移動する。

朝から込んでるなあ……流石マック。まあ朝飯としても手頃なんだろう。サラリーマンから今日は暇な学生カップルまで、色々な人が店内でハンバーガーなどを食べていた。

俺達も食べたいものを注文し、それを受け取り席に座る。安っぽい朝飯だが、たまには外で朝飯を食べるってのも悪くはないかもしれない。

「おお、安い割にはうまいなこのチキン」

「もきゅ……ポテトは薄味なんですっ」

「まあ、マックだとそんなモンだろ？」

別にまずいってわけじゃないし、むしろうまいほうだろう。それに、安価ですぐに食べられるんだから文句を付けたってしょうがな



い。

こんな朝早くに営業しているだけでも、ありがたいと思っておこう。

「それにしても珍しいのです。けーすけ様が遊びに誘うだんて……」

「そうか？ 普段の生活見てたらわかるだろ、俺は遊び好きなんだよ」

「……そう言うと、けーすけ様が軽い人に見えるのです」

「言っとくけど、冗談で付き合ったりはしねえぞ」

「もきゅ、わかってますよっ。けーすけ様はその辺だけしっかりしてますもんね」

「あのなあ、それ以外はダメダメ見たいな言い方するなよ」

「もきゅ……だってけーすけ様……ゲームでは浮気ばかりじゃないですかっ」

「あれは攻略したから次のヒロインを攻略しているだけ！ エロ……じゃなかった、ギャルゲーってのはそういうモンなんです！ あと、二次元に複数嫁がいるのは俺だけじゃないんですよっ！」

なんてダメ人間なんだ俺ら。朝っぱらから何の話してんだよ……オタク丸出しの一般人が引くような話しかしてねえぞ。いや、現に近くの席に座っているギャルに引かれてるし。絶対あのぎすぎすした感じは「うわー、オタクキモイ」って思ってる顔だ。

ちくしょう、変な偏見持ちやがって。

まあいい……いちいち気にしてたら生きてけないしな。

「けーすけ様っ！」

「ああ？」

人が語っている途中、暮葉が止めるように俺のことを呼んできた。そして――、

「シェイク、おかわり飲みたいのですっ！」

天真爛漫な表情を浮かべる暮葉が、おねだりをしてきたのだ。

ちよつと待て、シェイクおかわりって……しかも、Sサイズなら100円で済むが暮葉は絶対それじゃ満足しない。Mサイズを買ってあげないと頬を膨らますだろう。Mサイズのシェイクはこの店だと230円もするんだぞ。500mlの四ツ矢サイダーより高いじゃねえかよ。

考えただけで頭痛くなってきた……。

「不幸だ……っ」

俺は右手を額に当て、かの有名な考える人のポーズを取り、小さく呟いた。

まあ、結局Mサイズシェイク買ったよ。暮葉の可愛さに免じて大サービスだ。

その後、俺達は駅の近くにある洋服店に行き、服でも見ようかなーと思ったが……考えてみればまだ9時代であり、まだ開いていない店もあるようだ。

10時開店の店って多いからなあ……それまでなにしていようか、

と議論した所、とりあえず中央公園に行くことにした。

デート……なのかなこれ。まあとにかく、デートで公園は定番であらう。

この公園の中央には人工池があり、それがそれっぽい雰囲気を持っている。まるでカッパルにデートでもしなさいこの野郎、と言っているかのようである。

まあ、どこにでもある公園なのだが、

「こんな街中にも緑ってあるのですねっ」

暮葉はどうやらご満悦のようである。どうやら、彼女は都会の中心に――緑が広がっていることに驚いているようだ。

でも、日本人の俺からしてみれば、そんなに珍しいことでもない。

「そりゃあるだろ。東京にだっていっぱいあると思うぞ」

「もきゅ!? と、東京にもあるのですかっ!？」

「ああ、多分この公園より大きいんじゃないかな」

「ほ、あ……………わ……」

すっかり感嘆し、暮葉は目を丸くしていた。

まあ……わからないけど、多分嘘は言っていないハズだ。多分だけど、ここよりも日比谷公園のほうが広いだろうし、何より東京には皇居があるからな。

俺にとっては慣れた街であっても、暮葉にとっては珍しいことだらけであった。

「いないわね……っ」

私——国宗伊吹は仲良しな圭介と暮葉と追跡し、千葉まで来てしまったんだけど……千葉駅の混雑でアイツらを見失ってしまったわ。アイツら、どこに行きやがったのかしら？

覚悟しなさいよ圭介……私から逃げられないわよ。誓ったんだからね、アンタのことを地獄の果てまで追い回すって。とにかく、アンタと暮葉の関係——調べさせてもらうわ！

とりあえずまだ10時前……圭介達が行きそうなお店はまだ開いてないわね。多分そう遠くには行っていないと思うけど、もしかして中央公園かしら？

ありえるわね……あそこ綺麗な人工池があるから、デートにはもってこいかも。

そもそも、なんであの2人がデートしてんのよ……っ。

ばか、圭介のばか……。

「……あれ？」

今、私の数十メートル前の交差点に、見覚えのある人達の姿があった。

間違いない、わよね……？ あの前が高くて忌々しいくらい胸が大きくて、ちょっとクールでカッコいい系のあの人……風紗だよね？ もう一人の明るい髪色のロングヘアの子、あの人は確かうちのクラスの……。

それからもう一人のあの……コスプレしている人は知らないけど、風紗達……どうして血相変えて走っていたのかしら？

「あっちは確か中央公園……？」

気になる……圭介と暮葉の関係も気になるけど、風紗達のことも気になるわ。それに元々中央公園に行くつもりだった。風紗達の後を追ってみようかしら……ッ。

## 第189話、早朝の街遊び（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「国宗のアレ、完全にストーカーだよな」

伊吹「す、ストーカーじゃないわよっ！ 私はまだ、その……っ」

重原「大好きな圭介を盗られたくない、圭介の貞操を守りたかったのかい？」

伊吹「ち、ちがうわよっ！ た、ただアイツが暮葉に変な事をしな  
いか心配だっただけよ。それ以外に意味なんて……な、ないんだか  
らっ！」

大吾「ツンデレ乙」

重原「ツンデレ乙だね」

## 第190話、中央公園にて

早朝、暮葉と2人で古宇坂を抜けだし、千葉まで遊びに来ていた俺達。しかし、あまりにも時間が早過ぎた為、俺達が行く店の大半はまだ閉まっていたのだ。しかし、中央公園で暮葉と色々な話で盛り上がっていた俺は、ふと腕時計を見て時刻を確認する。

しかし時刻は10時丁度、多くのお店が閉業を始める時間になった。

「お、そろそろ10時だな」

「けーすけ様っ！　そろそろ色々お店が開く頃なのですっ」

「そうだな、どこか行きたい所とかないか？」

「もきゅう……あっ！　拙者、ア○メイトに行ってみたいのですっ  
！」

ア○メイトとは、これまた意外な場所だな。確かに異世界人の目から見たら、あれだけアニメや漫画関係のグッズが揃っている店は超がつくほど珍しく映るのだろう。

「だけどなあ……俺はそこで嬉しい、というか一番楽しめそうなんだけどさ。」

「ア○メイト？　服とかじゃなくていいのか？」

「はいっ、お洋服は亜紀さん達と何度も見に行ってますので」

「ああ、なるほど……」

最近暮葉の私服が増えたような……と、時々自分の洗濯物を洗濯機に放り込む時、なんとなくそう感じていたんだけど……そういうわけだったんだな。

ちよつと安心したよ。暮葉も普通にこの国の生活に馴染んで、ちゃんと友達も作って遊びに行っているんだなって。よかったよかった、毎日は楽しいほうがいいよね。

「でもア○メイトか、ああいうお店に行く機会はないのですよっ」

「そりゃあ伊吹も小坂も、アニメとかには興味ないしなあ」

むしろ、あれが普通の女子高生の姿なんだろうけどさ。

まあ、暮葉は残念ながら俺と葵に囲まれて生活しているんだ。気付けば、暮葉も相当そういうものが好きになっていた。完全に俺と葵の趣味が伝染してしまったんだろう。

それだけに、欲しいものはあるのだが、一人で行くのは恥ずかしい。かと言って伊吹や小坂はそういうものに興味がないから、誘って連れていくこともできない。

コイツもコイツなりに——悩みを持ってたんだな。

「だから、えと……けーすけ様、お願いします！ 拙者をア○メイトに連れてってください！」

顔が赤い、暮葉も相当恥ずかしいんだろう……だ、だけど暮葉……。

声でかすぎるだろ……お犬様のお散歩をしていたオッサンや主婦が、暮葉の大声かつ恥ずかしい言葉に反応して、俺らに注目してんじゃないか。

でもなあ……暮葉を説教したって始まらないし、ここは紳士的に



対応しよう。

「わかったよ。じゃ、とりあえずア○メイトに行くとしようか」

「もきゅ！　ありがとうございます、けーすけ様っ！」

「お……あわッ!？」

暮葉はにぱあ、と、太陽のような笑みを浮かべ、俺の胸に飛び込んでくる。気持ち良さそうにすりすりと、俺の胸板に顔を埋めて、首を横に振っていた。

幸せそうで何よりだ。そう思ってるんだけど——アカン、これは俺も気持ちいい。優しく抱きついてきた暮葉だが、それがもうね……説明しなくてもわかるでしょ。

女の子。

そう、女の子の感触だ。苺のように甘く、マシユマロのように柔らかく、欲望的な意味で男の闘争本能を駆り立てる——そんな女の子のある意味危ない感触だ。

もう勘弁してくれ！

俺はね、ラノベに出てくる主人公のような耐性なんてない、一般男子だよ。要するに我慢の限界が訪れるのもヤツらより早いわけだな、このまま暮葉に甘えられると……うん、まずい。

思えばチャンスかもしれないが、朝っぱらからってのもどうかと思う。

やっぱ——告白とか、そういうのをするなら夕方でしょ。

「暮葉、そろそろ行かないか？」

「……っ？　ッ！　もきゅ、そうですねっ」

俺の言葉で何かに気付いて恥ずかしくなったのか、暮葉が俺からパツと離れる。

そして、俺達がア○メイトに向かって歩き始めた、まさに一歩前で、

ピクン、と暮葉が顔を上げて、

「この気配、この魔力……っ」

突然、暮葉が叫んだ。

「けーすけ様っ！ 伏せてくださいっ！」

「おわっ!？」

俺は突然押し倒され、暮葉にマウントを取られてしまった。えっ、なんで……なんかものすごくエロい展開になっている気がするぞ。俺の真上に乗っかる暮葉。これって……つまり、この体位は騎乗位であって、このまま暮葉が——ってなに考えてんだ俺は！

違うだろ。暮葉の表情を見ろ、なんか真剣だぞ。暮葉がここまで真剣で、かつ俺を突き飛ばすように押し倒したってことは……。

その時、

カチン、と不自然な金属音が響いた。

その瞬間——、

「き、ゆ——ッ！」

「う、あ——ッ！」

シュパン、と金属が切り裂かれる音と、直後に爆発音のようなものが炸裂。爆風のような凄まじい風と砂埃が俺達を襲う。

やがて爆風が収まり、自然の風で砂埃が流されていくと、俺と暮葉は爆音が轟いた所を見る為に上を向いた。どうやら、今のは何かが公園内の街灯を切り裂いた音のようだ。スパン、と夜になれば灯がともる街灯が、真っ二つに切断されていたのだ。

一般の人達も見ている中でのこの騒動。

この時——俺は確信した。

「まさか……魔法使いか？」

「そのようですっ。折角いい気分でしたのに……奴らもしつこいのですねっ」

全くだ。俺も暮葉も今——最高に機嫌が悪いぞ。

何故なら——折角のデートっぽい何かを妨害されたからだ。

「暮葉、奴らの場所がわかるか？」

「えっと……あっ！　けーすけ様後ろっ！」

「……あ？」

暮葉に言われて振り向いた時には——既に遅かった。

接続棍棒<sup>フレイル</sup>と言う、柄の先に鎖などで打撃部を接合した武器を持つ、夏なのに灰色のコートを着ている変な男が突っ込んでくる。

男は接続棍棒<sup>フレイル</sup>を振りまわし、穀物と呼ばれる打撃部分が飛んでくる。ピュウっと言う嫌らしい風を切る音を立てながら。

「が、あ……ッ！」

こめかみに穀物を打ち込まれ、ぐらん、と視界が揺らいだ。フラ

フラだ、頭もクラクラとしていた視界もぐにやぐにやである。そのせいか、バランスを崩した俺は倒れ込んでしまった。

う、ぐ……強烈だったみたいだ。気を抜けば気絶してしまいそう  
だ。

「……くっ！ 曲者、けーすけ様は渡さないのです……っ！」

視界が回復してきた。ざっと周囲を確認、一般人の数が多いな……一本、俺を襲ったコートの男のほかにも、槍や剣を持った貧乏くさい雰囲気の男達が現れ、3人が暮葉を囲んでいた。

武器を持っているのが3人……まずいな。人も多いし、こんな街中だ。いつ警察が来るかわかってもんじゃないから、暮葉も一期一振を振り回せないでいるようだ。

クッソ……早くなんとかしねえと——と、思った、

「あ、ぐあッ！」

その時、誰かが飛びかかり——剣を持っている男が地面に落ちた。倒れた男の手からランゴロンと剣が放れる。どうやら、今の一撃で気絶したようだ。

さらに——もう一人の槍を持つ男も、

「——ッ！」

鉄球が男の後頭部を襲う。

ゴン！ という鈍い衝撃が響いて男は倒れた。今ので後頭部を強打した男は、気を失ってしまったようである。あらま……白目剥いてるぞ。

しかも、男の持っていた槍が俺の近くに落ちてきた。

さて、あとは一人だな……連接棍棒フレイルを持つコートの男。コイツさ

えぶっ飛ばしてしまえばこの騒動は終わる。

この調子だと、突然乱入してきた人達が暮葉が片付けてしまいそうだけど……でも、俺はアイツに<sup>フレイル</sup>接続棍棒で殴られたんだ。このままじゃ——気分が悪いよな。

「こんの——大馬鹿野郎ッ！」

俺は近くに落ちていた槍を投げつけ、注意を槍に向けさせた。男は俺が投げつけた槍を避けるので精一杯だった様子だ。辛うじて槍を避け、ヒヤヒヤと冷や汗を流しているようである。

つまり——男は隙だらけ。

飛ぶように起きあがった俺は、その隙を突くように——瞬間的に男の懷に潜り込み、

「お、るあアあっ！」

男の顔面に固く握った右の拳を撃ち込んだ。低い姿勢から殴打したことにより、下から突き上げるような衝撃が走ったようだ。男の身体が浮き上がり、頭も大分揺さぶられたようである。

男の手から——<sup>フレイル</sup>接続棍棒が放れた。

「あ、ぎっ！」

うめき声を上げ、口から血を流しながら俺を睨む男に、俺はさらに拳を叩きこむ。

「さっきのお返しだ、このクソ野郎っ！」

叫びながら突っ込み、

ゴン！ という鈍い打撃音が炸裂する。

全体重を乗せた一撃は容赦なく、男の鼻の真ん中に食い込み、今度こそそのまま地面に叩きつけてやった。さっきの甘い一撃とは違うんだよ……。

背中から落ちた男は、ぴくぴくしているだけで動かない。

俺はホッとした……が、まだ脅威は去っていない。

「けーすけ様っ！」

「暮葉！ 狙撃のほうは！？」

俺は暮葉に問うか、暮葉の口を開けない。

代わりに——後ろから数人の声が聞こえてきた。

「大丈夫、そっちはミネットがやっておいたよ！」

「多分、もう敵はいないハズだぞ」

【心配しないで。4人全員、みんなの力で倒したよ】

「……えっ？」

振り返ると、ここにはいないハズの人達が——勢揃いしていたのだ。

「あ、明智……白藤っ？」

「それにミネットさんまで……もきゅ、ど……どうなってるのでしょうかつ？」

確かに暮葉の言う通り、どうなってるんだろうこれ？

なんで、明智達が人の危機を救うヒーローのように——颯爽と登場したんだろうか。

しかも明智に白藤にミネットの組み合わせと来た。  
なに、このありえない3人組は……？

「さて、藤島——今から調布に行くぞ」

「えっ？　ちょ、待て明智！　どういふことなんだよ！？」

なんでいきなり羽田なんだよ。調布ってやっぱりアレだよ、東京の調布だよな？

でも調布って……何しに行くんだよ。調布に何かすごい場所とかあったかな。

「あ、明智殿！　どういふことなんですか！？」

「詳しい事は調布までの移動時間中に説明するんだよ！」

【だから2人とも一緒に来て、お願い】

「な、なんでえっ！？」

やっぱりわからん！

何故だ、そもそも明智と白藤とミネットが一緒にいること自体信じられんが、それ以上にどうして俺達は調布に行かなきゃいけないんだよ。

魔法使いにも襲撃されるし……わけわからん。

えーっと、楽しい街遊びは一体どうなっちまうんだ……？

## 第190話、中央公園にて（後書き）

・後書きトークコーナー！

圭介「ラーメンはやっぱ味噌だよな！」

黒木「ふん！ 味噌とかニワカだろ、やっぱとんこつだぜ！」

赤佐「みんなわかってないなあ、同じ豚骨でも豚骨醤油が最強や」

大林「なんだよ、塩ラーメンが結局一番だろ？」

大吾「馬鹿野郎！ 結局醤油が一番人気なんだよ！」

圭介「いや、味噌ラーメン最強だから！」

黒木「豚骨だ！」

赤佐「だから豚骨醤油って何度もゆーてるやろっ！」

大林「塩ラーメンナメるなよっ！」

大吾「醤油が一番！ 異論は認めねえよ！」

伊吹「男って……ホントに馬鹿ねっ」

暮葉「拙者はそばのほうが好きなのですっ」

※ちなみに作者は味噌ラーメン派。



## 第191話、調布飛行場

明智達に無理やり連れられ、俺達は現在鉄道で調布に向かっていった。果たして、調布市には何があるのやら……つか、明智達の目的って一体なんなんだ。

あと、どうして明智と白藤とミネットと一緒に行動してんだよ？一度沸いた疑問は、膨らんでいくばかりであった。

「はあ？　これから調布の飛行場に行く！？」

「うん、単純に言うたそういう事……だよな、ミネット？」

明智に話を聞く限り、俺達はこれから調布にある飛行場へ行くらしい。調布飛行場って詳しくは知らないけど、確かすごい小さな空港があるだけだった気がするぞ。

なんでよりによって調布なんか……？

「そうだよ。これから硬質のノームをみんなで退治しに行くんだよ」

「退治って、鬼退治みたいなノリかよ……んで、その硬質のノームって何なんだよ？」

まあ、ミネットも一応アルファ隊の隊員らしいし、多分魔法使いだとは思っけど……。

けどなんか引つ掛かるんだよな。いや、硬質のノームって奴は知らないが、似たような名前を何回も聞いた事があるような……うん。

「赤の軍神の一人なのです」

「赤の軍神？ ホントか暮葉？」

「はい、確か土の精霊の力を持っている天才魔法使いです」

「硬質のノームは今、遠くで大規模震災術式を組んでいるんだよ」

「聞いたことがありますのですっ。確か大規模な儀式場を必要とする代わりに、一国家を崩壊に追い込みかねない大地震を起こす大魔法なのですっ」

精霊の力だの大規模震災術式だの儀式場だの……もう、一般人の俺には理解不能だ。

だけど、これだけはわかった。その術式が完成したら——古宇坂いや、日本という一国家が消滅するかもしれない……らしい。

あれ、でもおかしいな。サヴィエトの目的は俺を捕える事なのに……。

「ちょっと待て、なんで俺を捕まえる為に国ごと潰すつもりなんだよ、連中は？」

「圭介様拘束の先にある目標を果たす為かも。要は世界征服、レムリア——特にロジーナに対する総攻撃を仕掛ける為には、沢山の兵隊が必要なんだよ。だから、サヴィエトは日本を占領して領土を獲得し、日本の国民を含む全てを利用するつもりって、ミネットの部隊の隊長が言ってたんだよ」

ミネットの部隊の隊長って……要はアルファ隊の隊長——リーリヤさんじゃねえかよ。

まあそれはともかく、知らない間に随分大事になってるんだな…

…この戦い。

いつの間にか、俺の周囲や古宇坂だけでなく——世界を巻きこむ事態に発展している。

コイツはちよつと深刻だぞ……下手すりゃ第三次世界大戦かもしれないぞ。

サヴィエトが日本を占領し——さらに力をつけたら……な。

「じゃあ、ミネットはソイツを阻止する為に行動してるんだな」

「うん！ 久々の大きいお仕事なんだよ！」

「そ、それじゃあ明智殿と白藤さんは？ お二人はどうしてミネットさんと一緒に行動しているのですか？」

ミネットが無い胸をえっへん、と張っている。

その横で、暮葉は俺も気になることを明智と白藤に質問した。

「私達はこの子に協力を仰がれたただけだぞ」

【しかも、私達と風紗は仲間】

「えっ？ つまりどういう事なんだよ？」

第一、明智と白藤には全く接点がないだろ。そりゃあ2人とも、普通の人間には使えない特殊な能力を持っているが、だからって2人が接触する機会なんてあったか？

まあ、世の中なにあるかはわからないモンだ。事実は小説よりも奇なり、きつと2人が接触するようなイベントが、俺の知らない間に発生していたんだろう。それで、たまたまウマが合ったから友達になったのかもしれない。よかったな白藤……俺以外にも友達が

出来て。

……と、思っていたけど、そんな安易なものでもないらしい。

「だから、私達はフレン<sup>っ、っ、</sup>ドと言う組織の仲間なんだ」

「ふ、ふれんど……ですかっ？」

「しかも友達じゃなくて組織かよ！」

「今の所メンバーは私も含めて5人。1人を除けばみんな何らかの特殊能力を持っているぞ」

これなんて某学園都市の暗部組織？

これで男1人、女4人だったらただのアイテムじゃないかよ。いや、実際フレンドの男女比なんてどれくらいだか知らないし、そもそもフレンドの存在自体——今日初めて知ったよ。

「で、それってどういう組織なんだよ？」

「元々は打倒佐井学園の為に雪乃が作った組織だぞ」

「ゆ、雪乃って、まさかあの西園寺か!？」

「もきゅ!？ 雪乃さんが創設者なのですか!？」

「そうだぞ。だから今回は専門外の仕事なんだけど……そこで、ある程度事情を知っている私と白藤が派遣されたんだ。雪乃含む残りの3人は今も対佐井学園戦に向けて準備中だぞ」

そうか、ようやくわかったよ。西園寺が言っていた私<sup>っ、っ、</sup>たち。その

正体はフレンドっていう組織の仲間——つまり明智達だったんだ。それにしても、対佐井学園……か。考えてみれば俺と暮葉も佐井学園とは無関係じゃないんだよな。

佐井学園が行っていた特異点潰し。その特異点潰しの阻止に協力した俺。

確かにあれ以降、超能力者の襲撃はなくなったが……それでも、佐井学園は暮葉達を狙って何かを企んでいるかもしれない。

下手をすれば俺も——連中のリストに登録されているかもしれない。

「……あ、あの、拙者も協力しましょうか？」

「ん、大丈夫だ。確かに戦力不足感はあるけど……木下は木下の役目があるだろう？」

「そうだよ木下先輩っ。ミネット達はアルファ隊なんだよ」

「にやはは、そうでしたね……っ」

協力したくても出来ない暮葉であった。でも、協力したほうがいいよな……友達が自分から危険な戦場へ身を投じようとしている。かと言って、何もしなけりゃしないで危険だ。佐井学園は何かを企んで次の作戦を始めてしまうかもしれない。

だから、その前に学園ごと倒してしまおうってわけだな。

でも、それをたったの5人で……危険すぎるだろ。

「だったら俺がお前らに協力よ——」

「大丈夫、それより藤島は色んな人達に狙われているんだ。大人しくしていて欲しいぞ」

【私も、これ以上圭介に負担をかけたくない】

「お前ら……」

なんでだよ……5人でやるよりは、多分マシだと思うのに……。でも、考えてみれば相手は佐井学園。超能力者だけが敵とも言えない。8月17日に古宇坂を襲ったあの黒ずくめ達のような、特殊部隊が佐井学園にはあるかもしれない。もしも銃を使う相手がいたら——俺は力にならない。クソッ、結局役立たずかよ……俺。

『まもなく調布、調布、折口左側——』

どうやら、俺達が乗っている列車は調布に到着したようだ。ここから調布飛行場へ向かうのか。調布飛行場……結局何しに行くんだろう。

まさか——硬質のノームは調布で術式を組んでいるのか？

それから数十分後、俺達5人は調布飛行場の土を踏んだ。

調布飛行場。

元々旧日本軍が飛行場として使用していた所を、戦後アメリカが占領し、その後返還されて現在では小さな島へ行く便が来るのみの、小さな都営コミューター空港である。

「小さいとは聞いていたけど、実際に来てみると結構立派だな……」

腐っても空港。調布飛行場は滑走路こそ短いが、それでも立派な空港である。建物も滑走路もよく整備されており、比較的小さな航

空機が複数並んでいる。

伊豆大島行きの旅客機が、離陸する姿も見られた。

「あの、明智殿。もしかして……飛行場ってことは飛行機に乗るのですかっ？」

「そうだぞ。今回は国外に出るんだ」

「もきゅ！？ こ、国外ですか！？」

おいおいお、国外って……ありえだろ。

ここが羽田や成田なら、まだ国外ってのも納得できるかもしれないけどさ。

「明智、調布って国内線しかねえんじゃないのか？」

「そうだけど、今回はミネットが特別に手配してくれたんだぞ」

「うん、あれだよっ！」

ミネットが元気よく指差した方向に、一機の不自然な航空機が駐機している。垂直尾翼には不自然に塗装を塗り潰したような日の丸が描かれており、形状もまるでコンコルドである。見た目は小さなコンコルドという感じだけど……なんなんだコレ。

小型のジェット機なんだろうけど、あんな機種この世に存在してたか？

「もきゅ！？ あ、あれは——超音速魔動旅客機じゃないですかっ！？」

「ん、知ってんのか暮葉？」

「はい、ロジーナ製の航空機なのです。確か時速7000キロは出るとかで……」

「な、7000!？」

時速7000キロも出るだなんて、どう考えてもスペックおかしいだろ。そんなに出したら中の人大変じゃねえか。それ以前に機体を持つのかよ。第一、ジェット機じゃないのかよ。

異世界恐るべし……SR-71を超える火葬戦記級の航空機、あったんですね……。

「改めて聞くと凄まじい速度だぞ……っ」

【これが科学と魔法が融合した結果、速い速い】

白藤、それは褒めてるのか？ それともかなり馬鹿にしているのか？

まあとにかく、馬鹿みたいな航空機だとはわかったよ。

問題は——これで何処に行くかだよな？

「なあミネット、国外ってどこの国に行くんだ？」

「ポルトガルだよ。この世界の国のことは多分、圭介様のほうが詳しいと思うんだよ？」

「わ、what's？」

「だから、ポルトガルだよ？ 首都はリスボン、サッカーで有名な



国かも」

「うげっ！　よりによってイベリア半島の端の国かよ！？　遠すぎ  
だろ！　2日後にテストあるのに何泊何日の旅行だよ！？　つーか  
パスポート持ってねえよ俺！」

「大丈夫だよ！　超音速魔動旅客機なら多分1時間半くらいで到着  
するから、短時間で硬質のノームを倒せばテストには間に合うかも。  
あとパスポートはいらないんだよ。海外旅行じゃないし、第一ミネ  
ット達の行動が公になったら国際非難間違いなしかも」

「なるほど、そういうわけかあ」

って、関心してる場合じゃねえよ。

1時間半の地獄のフライトで行けるポルトガル、しかもパスポー  
トも無し。万が一硬質のノームを倒せなかったら、死ぬかテストを  
受けられないかの二択のみ。

あれ、俺達——とんでもない事件に巻き込まれていないか？  
そりゃあね、タダでポルトガルに行けるのは嬉しいかもしれない。  
だけど……魔法使いと戦う為にテスト前に行くポルトガルなんか嫌  
じゃ。

せめてテストが終わってから行きたいよ、ポルトガル旅行は……  
ッ！

「と、いうわけでミネットはここらへんで失礼するんだよっ」

「えっ！？　お、お前は行かないのかよっ！？

「木下先輩がいない分、ミネットは日本で頑張るんだよっ！」

「なんだそれ！？ 事情を知らない俺らに押し付けてお前は安全席で御見物かよ！？ ちくしょう、なんていい御身分なんだ！ なんて俺らだけで渡航せにゃならんのだっ！？」

「まあまあ、仕方ないのですよけーすけ様っ。早く硬質のノームを倒して、ポルトガル旅行を楽しみましょうよ」

「く、暮葉お前っ、ア○メイトはいいのかよ！？」

「拙者、ア○メイトよりも海外旅行のほうが貴重だと思うのですっ！」

「どうしてそこら辺だけ考え方が一般人なんだ、暮葉は。」

「い、嫌だ……俺行きたくないっ！ テスト前なのに外国になんか行きたくない！」

「せ、せめて——ポルトガル旅行はテスト終了後にしてくれええええええええええッ！」

「こうして俺は、行きたくもないのに——何故か日本を出る事になっちゃった……。」

アイツらを追跡し始めてから何時間経過したのかしら。今、私は何故か——調布にある飛行場に駐機中の飛行機の影から、アイツらの様子を窺っていた。

事の始まりは中央公園で凧紗達を発見したあたり。私は凧紗達を

追跡し、中央公園で圭介達も見つけたんだけど……何故か、圭介達  
は変な人達と戦っていたわ。それで、その後風紗達と合流した圭介  
達を追っていたら——何故かここにたどり着いた。

どういうわけ？ みんな飛行場でなにをするつもりなのかしら？

まさか、飛行機に乗ったりしないわよね……？

「もしもし？ ああ………えっ、そろそろフライト？ 了解した  
……おう………おう、わかった。今行くからな、それじゃまた後  
で」

不意に誰かの声が耳に入る。

声の主はたまたま近くにいた、客室乗務員の男性。誰かと電話し  
ているようね、会話の内容からして多分同業者との電話だと思うわ。

あっ！ あの人、携帯電話をポケットにしまった瞬間——圭介達  
のほうへ向かったわ。

しかも、改めて圭介達を見ると、なによ——みんな搭乗中じ  
ゃない。

やっぱり圭介達は飛行機でどこかに行くのかしら。それで、圭介  
達が乗る飛行機の客室乗務員があの人なのかしら。気になるわ  
ね………ていうか、この後どうしよう？

「……っ」

背中、しかも服の裏側に私は竹刀を隠し持っているわ。毎日携帯  
しているけど、どうやらコイツを使う時が来たようね。本当はいけ  
ない事だってわかってんだけど………でも、仕方ないわ。

決めたもの。圭介——アンタのことを地獄の果てまで追いかける  
って。

だったら私も飛行機に乗るしかないわ。その飛行機に乗る為には  
——私が男の人の代わりに客室乗務員になればいいのよ。

その為には——悪いけど犠牲になってもらうわよ。

「——ッ！」

私は服の中から竹刀を取り、しっかりと柄<sup>つか</sup>を握る。狙いを定めて、私は駐機中の飛行機の影から飛び出し、男を追うように前へ跳躍する。両手で固く握った竹刀を振り上げ、さらに走って男の人に接近してゆく。そして——隙だらけの後頭部を打突した。

「ぐ、ああ……て、めえ……ッ」

後頭部への一撃で気を失い、力を失った男は地面にゆっくり倒れる。真正面から地面に落ちた男はそのまま動かなくなった。やったわ……計画通りよ。

私、相当悪い事してるわね……でも、圭介達が気になるのよ。アイツら——今度はどんなトラブルに巻き込まれてるのかしら？ それを知る為、そして万が一の場合は圭介達に力を貸す為、何より……圭介と暮葉の関係を調べるために——私はあの飛行機に乗るわ。

ちよつとこの人の服を借りて、客室乗務員としてね。

## 第191話、調布飛行場（後書き）

・後書きトークコーナー！

大吾「なにこの国宗、ちょっと怖いっ」

重原「そうだね。圭介の為にストーカーしてるもんね」

伊吹「なっ！？ す、ストーカーじゃないわよ！」

大吾「では被告人、どう弁解しますか？」

伊吹「あ、アレはアレよっ！ えっと……そう、浮気チェックよ！」

重原「国宗さん、圭介と付き合ってたっけ？」

伊吹「っ！？ ち、違う！ 付き合っていないし好きじゃないわよっ！」

大吾「はいはい、んで、結論——恋する乙女ほど怖い存在はない」

重原「そうだね、ストーカーは立派な犯罪だしね」

伊吹「だから——ストーカーじゃないわよっ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0702u/>

---

魔法少女に会っちゃった場合

2011年10月12日14時15分発行